
遊戯王 5 D's ~ magic illusion ~

グッチー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王5D's ～magic illusion～

【Nコード】

N9757L

【作者名】

グッチー

【あらすじ】

遊戯王5D'sの再編小説です。オリ主ですので、嫌いな人は見ないことをオススメします。オリカも多数使うことになります。主人公の名前はリョウ。使うデッキはマジシャンデッキです。シンクロは序盤は使いませんが、後半から使うかもです。オリカで。原作から外れていくこともあるかもしれませんが、全く違う方向にいくかもしれません。読んでもらえたら幸いです。

第一期「ダークシグナー編」、第二期「アカデミア生活編」、第三期「フロントム編」が終了しました。現在第四期「チーム編」執筆

中
で
す。

第一話・出会い（前書き）

はじめまして。

小説は初めてなのでおかしいところもあるかもしれませんがよろしくお願いします。

第一話・出会い

ネオドミノシティのトップスの通り。夜、オレは今日のことを思い出しながら歩いている。

「今日のデュエルも楽しかったな。オレが今日も勝てたのも二人のおかげだよ」

「どういたしまして。リヨウはもうデュエルに慣れてるから当然だよ。ね、お師匠様」

「そうだな。リヨウも大分強くなったからな」

オレが遊戯王デュエルモンスターズを始めたのは幼い子供の頃。初めて見たカードは“ブラックマジシャン”と“ブラックマジシャンガール”だった。オレは二枚のカードに惹かれていた。

「貴方は私たちを感じ取ることができるようですね」

「え!？」

これには驚いた。多分人生で一番驚いたと思う。カードのキャラクターがいきなり現れて、話しかけてきたからね。

「私はブラックマジシャン。名をマハードと申します」

「私はブラックマジシャンガール。名前はマナです」

「
」

オレは混乱していた。いきなりだから仕方ないよね？

「貴方はデュエルをするのですか？」

「していないね。興味が無いと言えば嘘になるけど」

「じゃあしてみませんか？私たちと一緒にね」

「オレみたいな初心者でいいの？」

「はい。貴方には何か力を感じます」

「それに私たちが見える人ってなかなかいないんですよ」

「じゃあやってみようかな。ところで一番最初に聞くべき
だったと思うけど、君たちは一体？」

「私たちはカードの精霊です」

オレたちはトップスの通りを歩いて帰っている。

ガッシャーーン！！

「今何かすごい音がしたな」

「何だろうね？」

「どっする？」

「行ってみようか」

オレたちは音のした方へと向かった。

これから始まる戦いを知らずに。

第一話・出会い（後書き）

読んでくれた方、ありがとうございました。

これからがんばります。このまま続きを読んでくれたら嬉しいです。何かおかしところやアドバイスがありましたらよろしくお願いします。

第二話：カードの精霊（前書き）

精霊についての龍可との話。誤解は無いと思いますが、龍可とのカップリングはこの先ありません。カップリングはオリキャラの予定です。

第二話：カードの精霊

オレたちは音のした方へと向かった。一体何だろう？

「リヨウ、あそこに誰か倒れてるよ」

オレは倒れている人に近づき、声をかけた。

「しっかりしろ！大丈夫か？」

返事はない。気絶してるな。

「リヨウ、誰か来た」

マハードの声に振り返ると、そこには少年と少女がいた。

「龍可、この人たちは？」

「」

龍可と呼ばれた少女は答ええない。こちらを黙って見つめてくるだけだ。

「君たちは？」

双方とも黙ったままだったからオレから尋ねた。

「オレは龍亞。こっちは龍可。龍可がいきなり飛び出しちゃったから、オレもついて来たんだよ。」

「そっか。とりあえずこの人をどうにかしないとね。このDホイールもこの人のだろうし。何より気絶してるしね」

「じゃあオレたちの家に運ぼう。すぐ近くなんだ。」

「いいの？親が驚くんじゃないか？」

「大丈夫だよ。オレたち二人で暮らしてるし」

「そう。じゃあこの人とDホイールを運ぼう。手伝ってくれる？」

「うん！いいよな、龍可？」

「しょうがないわね。悪い人じゃなさそうだし」

オレは龍可と龍可って子に手伝ってもらいながら、二人の家にこの人とDホイールを運んだ。

「ふう」

けっこう重いんだよな、Dホイール。三人で運んだとはいえ、二人は子供だし。

「手伝ってくれてありがとう。助かったよ」

「へへっ、どういたしまして」

「あなたは家に帰らなくていいの？帰ってたんじゃ」

「平気だよ。家に両親いないし、一人暮らしだから」

「両親はどうしたの？」

「仕事でいない。だからオレ一人暮らしなんだよ。二人の両親は？」

「私たちの両親も仕事よ」

「このフロアはオレたちだけだし、勉強も通信でできるから、ここから出ることはあんまりないんだよ」

「そう。お互い大変だね」

二人はオレより幼く見えるし、余計に。

「ねえねえ、名前なんていうの？」

「ああ、そういえば、自己紹介してなかったね。オレはリョウ。一応この辺りに住んでるよ。歳は16だね」

「オレは龍亞。龍可とは双子で兄なんだ。歳は11」

「私は龍可。よろしく」

龍可って子、けっこう警戒してるな。初対面だから仕方ないかもしれないけど。

それにしても二人ともまだ11歳。この二人だけで暮らすのは大変

だろうな。

気絶してた人は眠ったまま。怪我は目立ったものはないし、このまま眠っていれば、明日には目を覚ますだろ。

「ねえねえ、リヨウは一人暮らしなんでしょ？だったら今日はもう夜も遅いし、泊まっていかない？」

すごいな、この子。龍可とは対照的だ。まったく警戒してないよ。

「ちょっと、龍亞！」

「いいじゃん、別に」

「良くないわよ。この人も、それにあの人がって」

「カードの妖精は大丈夫だって言ってんだろ？だったら大丈夫だって！」

カードの妖精？マハードやマナみたいな精霊のことを言ってるのかな？

「ね、リヨウ。泊まっていかない？」

「いいの？」

「もちろん！」

オレは龍可に聞いたつもりだったんだけど。

「しょうがないなあ」

渋々了承ってところだね。それは別に構わないけど。

(マハード、マナ。さっきの妖精の話だけ)

(おそらく、私たちと同じカードの精霊だろう)

(龍可って子、リヨウと同じで精霊が見えるのかもしれないね。断言はできないけど、多分そうじゃないかな)

後で確かめてみるか。

「ねえねえ、リヨウってデュエリスト？」

「そうだよ。二人もデュエルするのかな？」

「うん！オレたちもやるんだ。リヨウ、オレとデュエルやんない？毎日龍可ばかり相手じゃつまらないんだよ」

「失礼しちゃう。龍亞だって弱いじゃん」

「これから強くなんの！ね、デュエルやるつよ！」

「いいよ」

「やったー。ありがとう、リヨウ。それじゃあ早速」

「待った。今日はもう遅い。明日にしよう」

「えー、今からでいいじゃん」

「今日はもうやらないよ。明日必ずするから」

「約束だよ！絶対だからね？」

「わかったよ」

そうしてオレたちは寝る準備をした。オレはまだ寝る気はなかったけどね。あの子と話もしたいし。

オレはしばらくして、二人が貸してくれた部屋を出た。リビングに出ようとすると人影が見えた。

「自分でもう遅いって言いながら、自分はまだ寝てないのね」

龍可だったんだ。ちょうどいいかな。

「まだ眠れなくてね。　　ね、ちょっと話があるんだけどいいかな？」

「話って何　？」

場所は変わってここは庭。話はしてくれるみたいだけど、ずいぶん警戒されてるな。

「そんなに警戒しないでくれない？オレは別に何もしないよ。カードの妖精も大丈夫だって言ってくれたんだろ？」

「話って妖精のこと？別にいいのよ。信じてくれなくても。普

通信じられないことだろうし」

「信じてるよ。なんて言うより証明してみせた方が早いかな。二人とも、出て来てくれ」

オレは二人を呼んだ。言葉で話すより実際に見てもらった方が早いだろうからね。

「ふあゝあ。リョウ、こんな遅くにどうしたの？」

マナは眠そうだな。

「マナ、リョウに失礼だろう。我慢しろ」

「はい」

「気にしなくていいよ。龍可、この二人のこと見えてる？」

「えっと、ブラックマジシャンとブラックマジシヤンガール」

良かった。見えてるね。

「そ。言いたいこと、大体わかったんじゃないかな？あ、龍可の精霊も出てきたみたいだよ。クリボン、で合ってるかな？」

ヒョコツと出てきた。話を聞いてたのかな。

龍可の精霊はクリボンか。かわいい精霊だな。

「うん、クリボンよ。あなたもカードの精霊が見えるのね！？私は妖精って言うてるけど」

どことなく嬉しそうに見えるな。

「うん、見えてるよ。マハード、マナ、龍可に挨拶といこうか」

「ああ。私はブラックマジシャンのマハードです。主同様、よろしくお願いします」

「私はブラックマジシャンガールのマナです。よろしく」

「うん、よろしくね」

「クリクリ」

クリボンがオレの方に近寄って来た。オレはクリボンの頭を優しくなでてあげた。

「でも、カードの精霊のこと知ってるなら、どうして言ってくれなかったの？」

「龍可ならわかるんじゃないか？他の人は基本的に見えないから」

そう。基本的に人は見る事ができない。例え人に話したとしても馬鹿にされる。馬鹿にされなくても信じてもらえない。だから龍可が警戒するし、精霊のことも聞かれなくなかった。オレも同じだからよく分かる。

「でも嬉しいな。初めて精霊が見える人に会えたから。今まで誰もいなかったし」

「そうだね。リヨウと会ってからけっこう長いけど、私たちが見える人はこの子が初めてだね」

マナが答えてくれた。龍可と会えて良かった。

(そんなことを思っているのか?)

(聞かなかったことにしておいてくれ、マハード)

こんなことをあいつに聞かれたらヤバイ。

「そうなんだ。私も初めてなの。私も嬉しいな」

笑ってくれた。会ってから笑ってくれたのは初めてかな。

その後、たわいのない話をしてからオレたちは寝るために部屋に戻った。

第二話・カードの精霊（後書き）

まだデュエル無しです。すみません。遊戯王ですので後々、必ず入れます。

第三話：不動遊星（前書き）

タイトル通り遊星が目覚めます。

第三話：不動遊星

翌朝。起きてからオレと龍亞、龍可で話してる。けど、

「このほっぺの何だろ？」

「マーカードだよ。知らないの？セキュリティに捕まった人はみんな付けられるんだってさ」

この人マーカードが付いてるよ。何で気付かなかったんだらう？

「じゃあこの人悪い人？」

「カードの妖精は大丈夫って言うてんだろ？だったら大丈夫だよ」

「たしかに悪い感じはしないね」

「うん。大丈夫だと思うんだけど」

少し不安そうな龍可。無理もないね。マーカードはセキュリティに捕まったら付けられる、つまり悪いことをしたってことにつながるだろうからね。マーカード付きの人がみんな悪い人って訳じゃないんだけどな。

「ん」

あ、この人起きたかな？

「誰だ!？」

起きたそばからこれか。無理もないけど。

「覚えてない？昨日下で倒してたんだよ」

反応無し。この人、表情が読めないな。

「オレが一番最初に見つけたんですよ。二人の家にあなたを匿って
もらったんです」

「オレは龍亞。こっちは双子の妹の龍可」

「オレはリヨウです」

「ねえ、名前なんていうの？」

「遊星だ」

「こっちは？」

「オレらん家。この辺はトップスって言って、シティで一番高い所」

「トップスだったのか」

「ねえ、遊星ってデュエリストなんでしょ？」

「ああ」

「オレとデュエルやんない？いつつも龍可とばかりだからつまんなくてさ」

オレに言った時と同じこと言ってる。同じように龍可が隣でむくれているし。

「遊星はデュエル強いの？」

答え無し。基本的に無口だな、遊星さんは。

ん、遊星さんが何か見つけたみたいだな。何かをじっと見つめてる。龍可も気付いたみたい。

「あれはキングのグッズだよ。オレのお宝。遊星はキング好き？」

「興味は無いな」

本当に無口だな。必要最低限のことしか答えてないし。

「もったいないなあ。せつかくライディングデュエルやるのに」

「どうしてそれを？」

「だってあれ、Dホイールなんでしょ？やっぱさ、ライディングデュエルするならキングに憧れるじゃん。オレもライディングデュエルやりたいんだよね」

答え無し。相変わらずの無口。自分のDホイールの元に歩いていくだけだし。

「龍亞の話、聞いてないみたい」

「それにライディングデュエルはキングじゃなくてもできるしね。オレもやるし」

「マジで!？」

これは本当の話。ライディングデュエルの方がおもしろい。

「じゃありヨウはキング好き？」

「遊星さんと一緒。オレも興味は無いね」

キングは孤高過ぎてる気がする。悪い言い方をすれば孤独に見える。だからオレはあまり好きにはなれない。

「じゃあコレ見てよ」

龍亞が何かを取って遊星さんに見せに行く。何だろ？

「デュエル・オブ・フォーチュン・カップ？」

「そう！海馬コーポレーションがランダムに選んだ人でトーナメントをするんだって。その中に龍可が選ばれたんだよ」

「へえ。龍可も選ばれたんだ」

「も!？もしかしてリヨウも選ばれたの!？」

「うん。先日送られてきたんだよ」

本当の話。家のポストに入った。優勝者はキングとデュエル。正直それには興味無いけど、いろんな人と楽しくデュエルしたいのは本音かな。

「でも龍可は出ないって言うんだよ。だからオレが龍可の真似して出ようと思うんだ」

「龍亞に私の真似無理だから」

また二人の喧嘩が始まったよ。もう見慣れたものだけど。

「だいたい龍亞はお気楽過ぎるのよ。あの人のことだって」

「龍可は遊星のこと信用できないの？オレ、遊星の力になりたい！」

「龍亞、声大きい」

たしかに。これじゃ遊星さんに丸聞こえだよ。

side 遊星

龍亞といったか。優しい奴だな。だが、

「匿ってくれたことには感謝している。だが、オレには関わらない方がいい」

オレは追われている。ここにすることがバレれば、迷惑をかける。

「ちょっと待ってよ！出てくの？」

「迷惑はかけられない」

「迷惑なんかじゃないよ！そうだ！デュエルやるつよ。デュエリス
トなら挑まれた勝負は受けなきゃ！」

よくはしゃぐ。 似てるな、ラリーに。

「してやってくれませんか、デュエル。龍亞も遊星さんをここまで
運ぶの手伝ってくれた訳ですし」

リヨウ、だったか。あいつが言うことも、もっともだ。

「わかった。やるう」

「やったー！ありがとう、遊星。じゃあその次にリヨウ、やるうね。
約束したわけだし」

「はは、わかったよ」

苦笑してるな。あいつもデュエリストか。

s i d e o u t

オレたちは庭に出た。家の中じゃ狭いからね。

「始めようか。お前のターンからでいい」

「おう！オレのデッキ、ちょっとすごいぜ！」

龍亞と遊星さんのデュエルか。楽しみだな。

「デュエル！！」

「ダイナマイト・ナツクル！」

「うわぁー！！」

龍亞 LP 0

遊星さんの勝ちか。強いね。オレもデュエルしたいな。

「ほら、負けたからって泣かないの」

「うつつ、泣いてない」

半泣き状態だよ。どうしよう。

「デュエルを楽しむ気持ちは伝わってきた。だが、“D”を揃えた時点で満足してなかったか？」

たしかに。自分のデュエルで浮かれていたね。

「オレの反撃を読まず、自分のデュエルに満足するようでは、キングへの道は遠いな」

子供の扱いが上手だね。慣れてるんだろつか？でも、やっぱり優しい人だったな。

「遊星、またオレとデュエルしてくれる？」

「そのうちな。世話になった」

遊星さんが背を向ける。やっぱり行くか。

「だめだよ！」

「このマーカーを見る。オレといたら、お前たちに迷惑がかかる」

「迷惑なんかじゃないよ。オレ、遊星の力になりたいんだよ！」

「また始まった。龍亞の力になりたい病。でも、今日ぐらいゆっくりしてっただ方がいいんじゃない？」

龍可も少し打ち解けた様だね。じゃあオレも少し勧めようかな。

「二人もこう言ってることだし、今日ぐらい休んだ方がいいんじゃないですか？遊星さんも大分疲れてるように見えますよ？」

遊星さんが考える素振りをする。どうかな？

「すまない。世話になる」

「やったー！」

良かったね、龍亞。

「じゃあ、リヨウ。約束通り、デュエルやろう！今度は負けないよ！」

そっくるんだね。仕方ないか。

第三話：不動遊星（後書き）

今回もデュエルなくてすいません。次話は必ず龍亞とのデュエルが入ります。初めてなのでおかしな点もあると思いますが、よろしく願います。

第四話・デュエル！そして（前書き）

やっと初デュエルです！

いたらない点も多いかと思いますが、よろしくです。

第四話・デュエル！そして

「じゃありヨウ、デュエルやろう！」

遊星さんとデュエルしたばかりなのに相変わらず元気いいね、龍亞は。

「二回連続はきつくない？」

「大丈夫！このくらいへっちゃらさ」

しよがないか。約束したのも事実だし。

「わかったよ。デュエルしようか」

「よし、遊星、ちゃんと見ててよね」

「ああ、頑張れよ」

オレはデュエルディスクを付けて準備をする。

（マハード、マナ、今日もよろしくね）

（ああ！）

（任せて！）

「それじゃ始めるよー！」

「デュエル!!」

「オレの先行、ドロー! シャッキーン!」

あらら、先行とられちゃった。にしても楽しそうだな。遊星さんも時もそうだったけど。

「いっくよー。 “D・モバホン” を攻撃表示で召喚! チャキン!」

ATK / 100

「 “モバホン” は攻撃表示の時、ダイアルの1から6で止まった数字の分だけデッキからカードをめくり、その中のレベル4以下の “D” を特殊召喚できるんだ。ダイアルは、オーン!」

“モバホン” のダイアルが止まる。4だ。

「4枚の中には、よし、 “D・マグネンU” を守備表示で召喚! チャッキーン!」

DEF / 800

さっきと同じ展開。 “モバホン” を守るためなら最良かな。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド。さ、次はリョウの番だよ」

「ああ。オレのターン、ドロー」

どうするかな、さっきの通りなら伏せカードは “ディフォーム” だけだ。

「手札より“マジシャンズ・ヴァルキリア”を召喚！」

ATK / 1600

「バトル」

「ちよ〜と待った。永続罠“D・バインド”発動。自分場上に“D”がいる限り、リョウのレベル4以上のモンスターは攻撃できないんだ」

「やっかいな罠だな。」

「ターンエンドかい？」

「うん」

「オレのターン、ドロー！シャコーン！」

「相変わらず元気だな。」

「“モバホン”のモンスター効果発動！ダイヤル〜・オーン！」

「ダイヤルは 1か。」

「あつちや〜、“D”じゃなかったよ。まあいいや。手札から“D・クロックン”を守備表示で召喚だよ」

DEF / 1100

「“クロツクン”は守備表示の時、Dカウンターを1つ置くことができるんだ」

Dカウンター 1

「さらに“クロツクン”をリリースすることで、Dカウンター1つにつき1000ポイントのダメージを与えるよ。気をつけた方がいいよ〜」

「どうでもいいけど、ターンエンド？」

龍可からのツッコミ。龍可は厳しいな。

「ごめん、ごめん。ターンエンドだよ」

「オレのターンだね」

あの罫を破壊しないとね。

「“魔導戦士 ブレイカー”を召喚」

ATK / 1600

「このカードが召喚に成功した時、魔力カウンターを1つ置く。そして、このカードに乗っている魔力カウンターを1つ取り除くことで、场上的魔法・罫カードを1枚破壊する」

「ええ！？」

「オレは魔力カウンターを取り除き、“D・バインド”を破壊！」

これで攻撃できるね。

「マジシャンズ・ヴァルキリア”で“マグネンU”を、“魔導戦士 ブレイカー”で“クロツクン”を攻撃！」

「ああ！」

「これでターン終了だよ」

さあ、どう反撃してくる？

「まだまだこれからだ。オレのターン!“モバホン”の効果、ダイヤル・オーン！」

またか。ダイヤルは6に止まる。

「よっしゃ！オレは“D・チャツカン”を守備表示で召喚！」

DEF / 600

今度は“チャツカン”か。

「“チャツカン”は守備表示の時、1ターンに1度、相手プレイヤーに300ポイントのダメージを与える。チャツカンファイヤー！」

「くっ！」

リヨウ LP 3700

「まだまだ、手札から永續魔法“ガジェットボックス”発動！このカードは1ターンに1度、“ガジェットトークン”1体を特殊召喚できるんだ。特殊召喚！“ガジェットトークン”！」

ATK/0

「さらに“ガジェットトークン”をリリースして、“ガジェットトレーラー”をアドバンス召喚！」

ATK/1300

上級モンスターかな？

「“ガジェットトレーラー”は手札の“D”を墓地に送ることで、攻撃力が800ポイントアップする！オレは手札の“D・ラジカッセン”を墓地へ送る！」

ATK/2100

「よっしゃあ！バトルだ！“ガジェットトレーラー”で“マジシャンズ・ヴァルキリア”を攻撃だ！ガジッティングキャノン！」

リヨウ LP 3200

「よっしゃあ！決まったぜ！これでターンエンド！」

状況はそれなりにマズイかな。でも、オレは自分のカードを信じるだけ！

「オレのターン、ドロー！」

引いたカードを見る。よし、来てくれた。

「魔導戦士 ブレイカー」をリリース、「ブラックマジシャンガール」をアドバンス召喚！」

ATK / 2000

「お待たせ、リョウ」

オレは軽く頷いた。

「へへん、「ガジェットトレーラー」の方が攻撃力は上だよ」

オレは軽く笑う。たしかにマナよりは攻撃力は上だけど。

「手札から魔法カード“賢者の宝石”！場上に“ブラックマジシャンガール”が存在する時、手札またはデッキから“ブラックマジシャン”を特殊召喚できる！現れる！“ブラックマジシャン”！」

ATK / 2500

「げげっ、攻撃力2500!?!」

「さらに魔法カード“拡散する波動”を発動！ライフを1000払い、場上のレベル7以上の魔法使い族モンスター1体は、相手モンスター全てに攻撃できる！オレは“ブラックマジシャン”を選択！」

リョウ LP 2200

「さらに装備魔法“団結の力”を“ブラックマジシャン”に装備！
これにより、攻撃力が1600ポイントアップ！」

「“ブラックマジシャン”で龍亞のモンスター3体に攻撃！ブラックマジック！」

「うわぁぁー！」

龍亞 LP 0

オレの勝ちだね。

side 龍亞

うつつ、また負けちゃったよ。
どうして二人ともこんなに強いのだ。

「リョウと遊星はどうしてそんなに強いのか？」

「カードとの絆を信じて、闘っているだけだ」

「オレも同じかな。自分の仲間を信じてるだけだよ」
カードを信じるか か。二人ともカツコイイなあ。

side out

side 龍可

仲間を信じる か。だからあの時、マハードとマナを召喚できた

のかな。

「リヨウ、精霊のことそんなに信用してるの？」

こっそり近づいて、龍亞たちに聞こえないように聞いてみた。

「信用してるよ。今まで二人と一緒に闘ってきたからね」

「そうですね。私たちはお互いのことを信用していると思います」

「うん。リヨウと一緒にいるのはホントに楽しいから」

マハードとマナも答えてくれた。どうすればそんな風になれるんだろう。

「私にもできるかな？」

「できるよ。簡単だよ」

「どうすればいいの？」

「龍可が精霊のことを信用してあげればいいんだよ。精霊たちは必ず応えてくれるよ」

私から精霊たちを信じる　か。

s i d e o u t

それから時は過ぎて夜。龍亞と龍可はもう寝ているみたいだね。オレは今日まで泊めてもらうことになった。龍亞は駄々をこねたけど、何日も家を空ける訳にはいかないからね。

オレはリビングに入ろうとしたけど、遊星さんが何かしてるみたいで隠れて見ていた。

「入って来ていいんだぞ」

声をかけられた。気付いてたのか。

「何してるんですか？」

「デュエルディスクの改良だ。重そうだったからな」

たしかにデュエル中、龍亞が重そうにしてたね。でも遊星さん、そんなことできるんだ。

「遊星さんは」

途中で遊星さんに遮られた。

「遊星でいい。敬語も使わなくていい。その方が話しやすい」

オレと同じだ。マハードとマナにも同じこと言って、敬語止めさせた覚えがある。

「じゃあ、遠慮なく。これからどうするつもり？」

「オレはこれからここを出る」

やっぱりか。

「二人には？」

「迷惑はかけられない」

やっぱりそう思ってるんだ。二人はまだ子供だし、オレも立場が同じならそう思う。

「二人に礼を言っておいてくれないか？」

「わかった。いいよ」

「すまない。ところで、リョウ、だったな。お前はカードとの絆を信じてるのか？」

「信じてるよ。遊星もそう言ってたね？」

「ああ、大切な絆だ」

そう言って少し笑った。やっぱりいい人だったな。

「そろそろオレは行く。また会おう、リョウ」

「うん。気をつけてね、遊星。またいずれ」

そうして遊星は出ていった。

翌朝、オレは二人に遊星の礼、自分の礼を告げて、二人の家を出た。

第四話・デュエル！そして（後書き）

どうだったでしょうか。これからデュエルは毎回とはいかないかも
しれませんが、ちよくちよくやります。

次回はオリカ&オリキャラ登場の予定です。

第五話：アリス（前書き）

今回は初のライディングデュエルです。オリカとオリキャラも予告通り登場です。

デュエルでおかしな点がありましたら教えてください。

第五話：アリス

龍亞と龍可の家を出て、まっすぐ家に帰って来た。誰もいないから相変わらず静かだけど。

フォーチュン・カップまで今日をいれて後二日。ライディングデュエルも相手によってはするらしいから、デッキの調整をしないとね。

「それじゃあデッキの調整をしようか、マハード、マナ」

「スタンディングの方はいいのか？」

「うん。一昨日で試しのデュエルも済んだし、昨日龍亞とデュエルしたしね」

「そっか、ライディングデュエルの試しデュエルはどうするの？」

「明日、ダイモンエリアのデュエル場に行くよ」

オレは一日かけてデッキの調整をした。

次の日、朝。Dホイールも問題なし。

「さてと、行こうか」

「リョウ、あの子に連絡を入れなくていいのか？」

「放っておくと怒られるよ？」

「一応連絡くらいいれておくか」

デュエル場。時間はだいたい昼前くらいだけど人はそれなりにいる。というよりいつもより今日は多いような。

「そこの兄ちゃん、デュエルしに来たのか？」

「そつだよ、できるかな？」

「今日はこの辺でランクアップのキング気取りがいるぜ。やるか？」

知らない人なのに情報ありがとう。オレの返事はもちろん、

「やるよ」

「そうこねえとな。ライディングデュエルでいいんだろ？」

オレは軽く頷いた。
少し待っていると、

「お前が挑戦者か。このオレ様は誰の挑戦でも受ける！」
本当にキング気取りだね。

「よろしく」

「それじゃあ、さっさと始めるか！」

オレたちはDホイールに乗り、定位置につく。キング気取りが前だ
けど。

ギヤラリーもたくさんいる。フォーチュン・カップのリハーサルみ
たい。

「始めるぞ、いいか？」

「いつでも」

「「ライディングデュエル、アクセラレーション!!!」」

オレたちはほぼ同時にスタートした。この感覚が好きなんだよね。

「先行はチャレンジャーであるお前からだ」

さつきからだけど、いつからチャレンジャーになったんだろう？

「オレのターン、ドロ」

side 遊星

オレはデュエル場に来ていた。矢薙のじいさんと氷室、遊びに来て
いた龍亞と龍可と一緒にだ。

「誰かデュエルを始めた様だな」

氷室の声に振り向く。

ふっ、おもしろいデュエルになりそうだな。

side out

「ホーリー・エルフ」を守備表示で召喚！」

DEF / 2000

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

さあ、どうくる？

「オレのターン」

SP 1

「ゴブリン突撃部隊」を召喚！」

ATK / 2300

いきなり攻撃力2300か。

「バトル、ホーリー・エルフ」を攻撃」

“ホーリー・エルフ”が破壊される。

「攻撃を終えた“ゴブリン突撃部隊”は守備表示になる」

DEF / 0

「カードを1枚伏せ、ターン終了だ」

「オレのターン」

SP 2

「魔導戦士 ブレイカー」を召喚！」

ATK / 1600

「このカードの召喚に成功した時、自身に魔力カウンター1つ乗せ、300ポイント攻撃力がアップ」

ATK / 1900

「バトル」

「の前に永續罫だ、“最終突撃命令”！このカードが存在する限り、モンスターは全て攻撃表示になるのだ」

ゴブリンの攻撃力は2300。仕方ない。

「バトルは行わずに、“魔導戦士 ブレイカー”の効果発動。このカードに乗っている魔力カウンターを取り除き、“最終突撃命令”を破壊する！」

ATK / 1600

「カードを1枚伏せてターンエンド」

今は耐えるしかない。

「どうしたどうした！」

SP 3

「ジャイアント・オーク”を召喚！」

ATK / 2200

くるか？

「ジャイアント・オーク”で“魔導戦士 ブレイカー”を攻撃だ
！」

「くっ！」

リョウ LP 3400

「“ゴブリン突撃部隊”でダイレクトアタック！」

「畏発動！“ガード・ブロック”！戦闘ダメージを0にし、その後
カードを1枚ドローする」

「フン、免れたか。“ゴブリン突撃部隊”と“ジャイアント・オー
ク”は守備表示になる。カードを1枚伏せ、ターン終了だ」

「オレのターン」

SP 4

よし、これで攻める！

「SP エンジェルバトン”発動！SPカウンターが2つ以上ある時、カードを2枚ドロし、手札を1枚墓地に送る」

これでいける！

「手札より“特攻のマジシャン”を特殊召喚！」

ATK/100

「このカードは相手場上にのみモンスターが存在する時、特殊召喚できる！このカードが召喚に成功した時、場上の魔法・罫カードを1枚破壊できる！」

「なにっ!?!」

これで警戒する必要はないね。

「いくよ、“特攻のマジシャン”をリリースして、“ブラックマジシャンガール”をアドバンス召喚！」

ATK/2000

「私の出番だね」

「頼りにしてるよ」

「ふん、その程度でどうするつもりだ!？」

それはどうかな？

「畏発動!“賢者の秘石”!場上に“ブラックマジシャンガール”がいる時、手札またはデッキから“ブラックマジシャン”を召喚できる!」

「なんだと!？」

「デッキから“ブラックマジシャン”を特殊召喚!」

「待たせたな」

「こっから巻き返すよ、二人とも」

「ああ!」

「うん!」

「バトル、二体で守備モンスターを攻撃!」

「ぐおっ!」

これできれいになったね。

「カードを2枚伏せ、ターンを終了するよ」

油断はできない。どうくる??

「くっ、オレのターン」

SP 5

「“ゴブリンエリート部隊”を召喚！」

ATK / 2200

「“ゴブリンエリート部隊”で“ブラックマジシャンガール”を攻撃！」

「この瞬間、畏発動！“立ちはだかる強敵”！相手モンスターはオレが選択したモンスターに攻撃しなければならぬ！」

「なに！？」

「オレは“ブラックマジシャン”を選択する、迎撃だ！マハード！」

「任せろ、ハアッ！」

「ぐっ！？」

キング気取り LP 3700

「くそっ、カードを1枚伏せる。(くぐっ、攻撃してみる、“ミラフォーース”で返り討ちだ！)ターンエンドだ」

「オレのターン」

SP 6

あの伏せカードが気になる。けど、甘いよ。

「畏カード、“黒・魔・導・破”発動！場上に“ブラックマジシャン”が存在する時、発動できる。相手場上の魔法・畏カードを全て破壊する！」

「なっ、なんだと!?!」

伏せカードは“ミラーフォース”。危なかったな。

「いくよ、“ブラックマジシャン”と“ブラックマジシャンガール”でダイレクトアタック！」

「ばかなあー!?!」

キング気取り LP 0

デュエルが終わり、ギャラリーが野次を飛ばしてる。ほとんどがキング気取り向けだけだね。

デッキの調整は上々。明日からのフォーチュン・カップが楽しみだね。

「リョウ」

声をかけられた。

ふっ、やはりやるな、リョウ。

「リョウ」

「ん、遊星!？」

驚いているな。

「ああ、デュエル見せてもらった。良いデュエルだったな」

「ありがとう、遊星。それより無事だったんだね。よかったよ」

心配をかけていたか。すまない。

「リョウ!」

「龍亞?龍可も?」

「うん。みんなでリョウのデュエル見てたんだよ」

「偶然だったんだけどね」

二人もリョウにまた会えて嬉しそうだな。

「遊星、こいつは知り合いなのか?」

氷室と矢薙のじいさんは会うのは初めてか。

「ああ。リヨウ、こっちは氷室。そして矢薙だ」

「リヨウです。よろしく」

「オレは氷室だ。よろしくな」

「わしは矢薙だ。あんちゃん、ナイスデュエルだったぞ」

「どうも」

問題なさそうだな。

「リヨウ」

ん、誰か走ってくるな。リヨウの知り合いか？

side out

「リヨウ」

声を頼りに振り返る。そこにはスラリとした身体にTシャツの上からかるい羽織り。腰の辺りまである長くて綺麗な金の髪。間違いないね。

「アリス」

軽く声をかける。走り寄ってきた。息が弾んでる。急いで来たのかな？

「大丈夫？アリス」

「うん。平気だよ、リヨウ。デュエルは終わっちゃったの？」

「うん。ついさっき」

「もー、もう少し早く連絡くれたら良かったのに」

「えっと、ごめんね？アリス」

だから急いでたんだ。悪いことしちゃったかな。

「リヨウ、その子は？」

遊星たちを放置してたね。

「この子はオレの友達」

「アリス・ルシエです。はじめまして」

「ああ、オレは不動遊星だ」

一人一人挨拶する。

「この人たちとはどうやって知り合ったの？」

「ここ三日間で知り合ったんだよ。心配しないで、みんないい人だから」

「うん、リヨウがそう言うならそうだね」

警戒を解いてくれた。遊星たちはマーカーが付いてるからね。

「でもなんでこんなに遅かったの？オレは家を出る前に連絡いれたのに」

「リヨウはお昼ご飯ないだろうから、私がお弁当作ってきたんだよ」

「毎回ありがとうね、アリス」

アリスはたまにこうして弁当を持ってきてくれる。本当に嬉しい。

「あ、でもごめんなさい。この人数の分は」

「心配しなくていい。オレたちは自分の分がある」

「そろそろ飯時だな。戻るか、遊星」

「ああ。リヨウ、アリス、一緒に来ないか？」

嬉しい申し出だけど、

「どうする？アリス」

「私はかまわないよ」

じゃあ答えは決まりだね。

「行くよ、遊星」

少し歩いて古びたビルの中。

「遊星、ここは？」

「ここは雑賀という奴のアジトだ。所用で出ているがな」
遊星は知り合い多いね。

「遊星の家は？」

「オレはサテライト出身だ」

え？サテライト？

「どっやってここに？」

「いろいろあってな」

驚いたよ。隣でアリスもびっくりしてる。

「サテライト出身だからって関係ないよ。遊星は遊星だって！」

龍亞の言う通りなんだけどね。気にすることはない。

「そっだね。遊星は遊星だよ、龍亞」

「違うない。飯にするか？」

そう言つて氷室さんは準備を始める。アリスも弁当を広げ始めたね。

「アリス、大丈夫？」

「うん。びっくりしちゃったけど、良い人みたいだし」

良かった。アリスも気にしてないみたい。

みんなで昼食。遊星たちは見た感じ簡単な売り物の弁当かな。

「美味しそうだねえ、わしももらつていいかい？」

たしかにアリスの弁当は美味しい。見た目も文句ないし。

「良かったら、どうぞ」

「おお、ありがとうな、アリスちゃん」

「じゃあオレも〜」

結局みんなで食べることになったね。

みんなで弁当を食べ終わつて、

「リョウ、どうだったかな？」

アリスは毎回聞くけどオレの答えは決まってるよ。

「美味しかったよ、アリス」

そう言うと嬉しそうに笑顔になる。いつ見てもかわいいな。

「二人とも仲良いね！。もしかして付き合ってたりするの？」

言われた瞬間、オレとアリスの顔が赤くなった。自分でもわかったよ。

「その反応は凶星なのかな？」

龍亞に龍可、余計なこと言わないでくれ！

「えっと、まだ秘密にしていることなんだ。だからこのことは、その、黙っててくれないかな？」

アリスが恥ずかしそうに答える。なんとかごまかさないと！

「そうだ！遊星たちはどうしてデュエル場にいたの？」

「ごまかしたな。まあいい。オレたちは暇だったんだ。リヨウは？」

「デッキ調整だよ。明日のためのね」

「あ、そうだ。聞いてよ、リヨウ、アリス姉ちゃん！」

「姉ちゃん!？」

アリスがまた恥ずかしそうに聞いている。

「だめかな？」

「ううん、だめじゃないよ。あ、できればお姉ちゃんがいいな。龍可も」

嬉しそうだね、アリスは。

「私も!？」

龍可は驚いてるよ。

「わかった、アリスお姉ちゃん。ほら、龍可も。別にいいだろ？」

「わかったわよ。えっと、アリスお姉ちゃん、でいいのかな？」

「うん。ありがとう。龍亞、龍可」

満面の笑顔で返してる。よっぽど嬉しいのかな。

「それで?何かあったの、龍亞」

「ああ、そうだ。聞いてよ、明日のフォーチュン・カップ、遊星も出るんだよ」

「ホントに?」

「ああ」

これは楽しみだね。でも何でだろ?何かあったのかな。

「オレも出るんだよ!龍可の変装してだけど」

「え？普通に出来ばいいんじゃない？」

アリスは知らなかったね。

「それはできないよ。招待状もらったのは龍可なんだ」

「そうなんだ」

龍可は相変わらず呆れてるね。

「じゃありヨウも出るのかい？」

「はい、オレも招待状もらったので」

「ほう、ますます楽しみだな、明日のフォーチュン・カップは」

この様子だと明日は矢薙さんと氷室さんも来るみたいだね。

「私も応援に行くよ。がんばってね、遊星さん、龍亞、リヨウ」

アリスも来てくれるし、明日はがんばらないとね。

第五話：アリス（後書き）

オリカとオリキヤラ登場です。メインヒロインです。モデルはリリカルな○はのフェ○トです。わかったでしょうか？

オリカはこれから増えると思いますがいずれまとめて紹介するかもです。

第六話・開幕（前書き）

今回はデュエル無しです。

詰め込み気味な上に短いです。

第六話：開幕

いよいよフォーチュン・カップが開幕する。オレたちは開会式に向かうために準備してるんだけど、

「どう？龍可にそっくりでしょ？」

たしかに似てるよ、否定はできないよ。だけど口紅に化粧はないよ。可笑しくて腹がよじれる。

「じゃあそろそろ行きましようか？」

「ぶっ、ぶ、普通にしゃべってくれない？龍亞」

「それに化粧は辞めておいた方がいい」

すごいな、遊星は。あくまで冷静だよ。

「じゃありヨウ。行ってらっしゃい」

「うん。行ってくるよ、アリス」

オレたちはスタジアムの地下にいる。多分ここから上に上がっていきんだろっね。MCがさつきから何かしゃべってるし、そろそろ始まるのかな。

お、上に上がり始めたね。

「おおーっ、来るよ来るよ！」

龍亞は相変わらずはしゃいでるよ。これじゃ女の子に見えないけど大丈夫かな？

“レッド・デーモンス・ドラゴン”がいる。キングもいるし、豪勢だなあ。

ん、今キングがこっちを見たような。遊星も少し様子がおかしく見える。

「遊星、どうかした？」

「いや、何でもない」

遊星はけっこう訳ありみたいだし、もしかしたらキングと何かあるのかな？

そんなことを思っていると、オレたち出場選手のビジョンが映し出され、紹介されていく。

「おい、マーカー付きがいるぞ」

会場がざわつき始めたね。遊星はマーカーが付いてるからそのことかな？

「遊星」

「心配するな」

龍亞が心配して声をかけるけど、遊星は他人事のようにしてる。でも会場の罵声はうるさいなあ。

あ、MCからマイクを奪い取った人がいる。

「お集まりの諸君！」

話し始めたよ。すごいな、あの人。

「私の名はボマー。ここに立つデュエリストとして諸君等に言いたい。この男は我々と同じ条件で選ばれた、紛れも無いデュエリストだ！」

たしかに。良いこと言ってるよ。

「カードを持てば、マーカーが有ろうが無かろうが皆同じだ。この場に立っている者に何ら恥じることはない。むしろ彼に対する諸君等の言葉は、暴力に他ならない！」

そう言って定位置に戻っていく。あの人、ホントに良い人だね。後で話してみようかな。

場内から拍手が巻き起こる。たしかにあの人はそれだけのことを言っただね。

「心強い言葉をありがとう、ボマー君」

誰かがまた話し始めた。治安維持局長官のレクス・ゴドウィンか。簡単な挨拶を長官がする。でも最後の真の平等にはやけにひっかかるなあ。そう思っているならサテライトをどうにかするべきだと思うけどなあ。

「さあ、一回戦の組み合わせはこうだー！」

オレの一回戦の相手は誰かな？

「うわっ、オレ第一試合だ！やった！」

龍亞は張り切ってるね。

オレの相手はプロフェッサー・フランクって人か。何のプロフェッサーなんだろ？楽しいデュエルになればいいんだけどね。

それから一回戦のためにみんなで控室に移動した。

「遊星、リョウ、二人とのデュエル、覚えてる。オレもカードを信じて闘うよ」

「カードを信じれば、必ず応えてくれる」

「がんばってね、龍亞」

「うん。行ってくる」

龍亞は駆け出していった。さて、ボマーさんとは、まだいるね。声をかけてみようかな。

「ボマーさん」

「ん？君は？何か用か？」

「リヨウっていいいます。さっきの演説はありがとございました」

「君に礼を言われる義理は無いと思うのだが？」

「友達があんなこと言われてて、良い気分はしませんよ。だからお礼を、と思ひましてね」

「そうか。まあ礼を言われるほどのことではない。気にするな」

「そうですか」

「ああ。そろそろ私のデュエルのようだな。彼女も君の友達のようにだが」

「はい。オレは二人には楽しくデュエルして欲しいと思ってますよ」

「ふっ、では楽しいデュエルをしてきましょう」

そう言っつてボマーさんも向かう。

さて、どうなるかな。

「勝者決定、二回戦進出はボマー！！」

龍亞は負けちゃったか。ボマーさん強かったな。

あ、戻つて来たみたいだね。アリスと龍可も一緒だね。

「もう、負けたからっていつまでもウジウジしないの」

「そっだね。元気出して、龍亞」

「でも」

「次のデュエルに勝てばいい。負けた経験は無駄にはならない」

「この経験を生かして、もっと強くなればいいんだよ」

オレたちはそれぞれで龍亞を励ましてる。龍亞がウジウジしてるのは似合わないよ。

「遊星とリヨウも負けちゃだめだよ。客席で応援してるからね」

少し元気になったみたいだね。良かった。

ん、誰か歩いてくる。あの人は十六夜アキ、だったかな。

十六夜さんはオレたちを一人ずつ見つめて、歩き去っていった。

「なんだよ、あいつ」

「さあな。オレはDホイルの整備に行く」

次は遊星のデュエルか。

「うん。私たち客席で応援してるから。がんばってね、遊星」

「ああ」

遊星はDホイルの元に向かう。龍亞と龍可も客席に戻っていく。アリスと二人きりだね。気を使ってくれたのかな？

「今日は来てくれてありがとね、アリス」

「どういたしまして。リョウのデュエル、楽しみにしてる」

「うん。がんばるよ」

アリスは笑ってくれてる。がんばらないと。

会場が盛り上がってきたね。そろそろ遊星のデュエルが始まるのかな。

「そろそろ始まるみたいだね。戻らなくちゃいけないな」

「うん、また後だね。リョウ」

もう少し一緒にいたかったけどオレたちは別れた。

控室に戻るともうデュエルは始まっていた。あれ？遊星の対戦相手が変わってる？

「もうデュエルは始まっているぞ」

ボマーさんか。

「さっきのデュエルお疲れ様です。ボマーさん」

「ありがとう」

「ところで、遊星の相手が変わっているように見えるんですが」

「ああ、突如乱入してきた炎城ムクロという男だ。ゴドウィン長官の許可が下りて、デュエル続行となったのだ」

なるほど。でも突如乱入はやり過ぎな気がするなあ。

「君もライディングデュエルをするのか？」

「しますよ。オレの一回戦はスタンディングでやるらしいですけど」

「そうか。君のデュエルも楽しみにしておこう」

「がんばります」

そうこうデュエルを見ながらボマーさんと話していると、

「遊星、見事なコンボで逆転勝利〜!!」

決着がついたみたいだね。

遊星はなかなか苦戦してたけど、やっぱり強いね。炎城ムクロさんのスピードを駆使したデュエルも強かったと思うけど、遊星の方が一枚上手だったかな。

「ふっ、次は不動遊星とか」

そういえばそうだね。遊星とボマーさんのデュエルは興味あるなあ。

あ、遊星が戻って来たね。

「遊星、ナイスデュエル！」

「ああ」

次は第三戦。いよいよオレの番か。

「リョウ、気をつけろよ」

「 どういう意味？」

「 言っ てなかつ たが、この大会はおそらく何か仕組まれている」

「 どういうこと？」

「 オレにも詳しくはわからない。だが、何か仕組まれていることは確かだ」

遊星の突然の出場もそのことが関係していると考えて、間違いないんだろうな。

「デュエル前にこんなことを言っ てすまない。心の片隅にでも置いておいてくれ。今はデュエルに集中した方がいい」

遊星の言う通りかな。うすうす感じてたことだし、今気にしてもしょうがない。デュエルに集中しないとね。

「 わかつ た。遊星、行っ てくるよ」

オレは会場に向かつて歩き出した。

準備を終えて、MCのコールを待っている。

「リヨウ、大丈夫だ。私たちがついてる」

「そうだよ。私たちが一緒に闘うよ」

そうだね。オレにはいつも二人がついてる。

「ありがとう、マハード、マナ。今日も頼むよ」

いよいよオレのフォーチュン・カップが始まる。

第六話：開幕（後書き）

いよいよフォーチュン・カップ開幕です。あまり長くする気はありませんが。

フォーチュン・カップが終われば少しオリジナルを入れる予定です。

感想なんかも書いてくれると嬉しいです。

第七話・VSフランク（前書き）

リョウのデュエルです。

ちょっとシリアスっぽくなってしまったのでしょうか？

これからこんな感じが続きそうです。

第七話：VSフランク

「さあ、第三戦がいよいよ始まるぜ！今回はスタンディングだ。まずはデュエリストの紹介だ。一人目は若い16歳、その実力はいかほどのものか？！？デュエリストの名はリヨウ君！！」

意外とこんな紹介されると恥ずかしいな。

コールを受けて、オレは会場へと向かう。改めて見るとすごいね。

アリスはどこにいるのかな？確かMCから見て右側にいるって言うてたけど。

キョロキョロと周りを見てみると、いた！

アリスの金の髪はわかりやすいね。アリスも気づいたみたいで手を振ってくる。オレも軽く手を振り返す。

「迎え撃つデュエリストは、デュエルカウンセラーの異名を持つ、プロフェッサー・フランクだ〜！」

デュエルカウンセラーって何？

オレがそんなことを考えてるうちにフランクさんが出て来た。

「はじめまして。リヨウ君」

丁寧に辞儀までしてくれたよ。

「どうも。はじめまして、フランクさん」

オレもお辞儀をして返さないかね。

「さあ、このデュエルで貴方の深層意識に隠された本当の貴方を見つけてしょう」

何か変な感じの人だなあ。

(リョウ、気をつけて！何だか嫌な感じがする)

マナもか。遊星の言ったこともあるし、気をつけないとね。

「さあ、第三戦、いよいよ始まるぜー！」

始まるね。

「デュエル！！」

先行はもらつよ。

「オレのターン、ドロー」

まずは様子を見た方がいいかな。

「手札から“見習い魔術師”を守備表示で召喚」

DEF/800

「ターン終了です」

「私のターン、ドロー。私は“シンメトリー・ロールシャッター”を召喚します」

ATK/1200

召喚されたモンスターが不気味に動いて形を変えてるよ。何だろ？

「このいかようにも見えるモンスターをどのように見えるかによって、貴方が抱える不安等を解き明かすための手がかりを得る心理テストです」

心理テスト？デュエルカウンセラーの名は伊達じゃないってことかな？

「さあ、リヨウ君。このモンスターはどのように見えますか？」

何のつもりなんだろ？

「さあ、答えて。何です？」

あれは。

「魔法使い　かな？」

「スパイラルマインド」

“見習い魔術師”が破壊されたね。攻撃したのかな？

「このテストは貴方が意識の底で恐れているものを表すためのものだったのです。」

貴方は魔法使いといったものを恐れている。違いますか？」

「そんなことはないですよ」

オレは否定した。当然だ。オレがマハードやマナを恐れるはずはないよ。

「大丈夫ですよ。このデュエルで貴方が抱えている問題を解き明かし、解放してあげましょう。」

そのためにも貴方の深層意識に潜むもう一つの世界、デュエルモンスタースの精霊世界へ旅立って行くのです」

精霊世界 ？

たしかにマハードとマナはその世界に住んでいるって言うってたことがあるよ。でもそんなに簡単に行けるものなのかな？

「知ってますよ。貴方は精霊の声を聞くことができます。なら精霊の世界があったって、不思議じゃないでしょう？」

「その前になぜあなたはオレが精霊の声を聞けることを知っているんですか？」

このことはアリスと龍可ぐらいしか知らないはずだけどな。

「少し調べさせてもらいましたね」

一体どうやって？

アリスはもちろん、龍可だって誰にもしゃべっていないはず。

オレはモニターでデュエルを見ているが、会話の内容がよくわからない。デュエルモンスターの精霊世界？何のことだ？

「彼に一つ忠告しておくべきだったな」

あいつは確かボマー。

どういうことだ？

「ボマー、どういう意味だ？」

「遊星、彼は私にデュエルを楽しむように言ってきた。だが全てのデュエルが楽しい訳ではない。お前ならわかるだろう？」

たしかにな。

時には何かを犠牲にすることも失うこともある。リョウはまだそのことを知らないのかもしれない。

「それに私は精霊などということとはわからん」

「そうか」

リョウ。

気をつける。

side out

「デュエルを続けましょう」

早くこのデュエルを終わらせよう。

「見習い魔術師」が戦闘で破壊された時、デッキからレベル2以下の魔法使い族モンスターを特殊召喚できる。「見習い魔術師」を召喚」

DEF / 800

「では私も。「シンメトリー・ロールシャッター」が戦闘でモンスターを破壊した時、相手のデッキの一番上のカードを表側にすることをできる」

オレのデッキの一番上。マナだね。

(リョウ、大丈夫?)

(平気だよ)

「おやおや、出来損ないの黒魔術師でしたか」

「マナはオレの大切な仲間です。馬鹿にしないでください!」

「“ブラックマジシャンガール”に名前があるということは、その子の声が聞こえてるんじゃないですか?」

それが狙いか。

(リョウ、大丈夫だよ。落ち着いて)

そうだね。今はデュエル中。相手にのまれちゃだめだね。

「カードを2枚伏せて、ターンエンドです。貴方のターンですよ」

「オレのターン」

(マナ、頼むよ)

(大丈夫だよ。任せて)

「見習い魔術師」をリリースして、「ブラックマジシャンガール」をアドバンス召喚」

ATK/2000

「畏カード発動。“威嚇する咆哮”。このターン、貴方は攻撃できません」

何だ？

頭がぼんやりしてきた。
オレはどうしたんだろう？

「リョウ！目を覚まして！リョウ！」

マナの声が聞こえる。
でも頭が。

side アリス

さっきからリョウの様子がおかしい。いつものリョウじゃないよ。

「リヨウの奴、一体どうしたんだ？」

氷室さんの言う通りだよ。もしかして、さっきから話してた精霊のことに関係があるの？

私には聞こえないけど、リヨウはカードの精霊の声が聞こえるって言うってた。リヨウは嘘なんてつかないし、本当のことだと思っただけど今は明らかに様子がおかしいよ。

「私のターン」

フランクさんがデュエルを進める。だけどこのままじゃ。

「畏発動、“闇の呪縛”。相手モンスターの装備カードとなり、攻撃力を700ポイントダウン」

ATK / 1300

「さらに装備カード、“流星の弓 シール”を“ブラックマジシャンガール”に装備。攻撃力が1000ダウン」

ATK / 300

攻撃力がたった300に。これじゃ太刀打ちできない。

「マ ナ」

リヨウ！

良かった。意識はあるみたい。

「まだ精霊世界に行った訳ではないようですね。では少し苦しんでもらいましょうか。精霊と一緒に」

そんな。

「装備魔法“ミスト・ボディ”を“ブラックマジシャンガール”に装備。装備モンスターは戦闘では破壊されません」

このままじゃ、リヨウと“ブラックマジシャンガール”がやられちゃうよ。

「さらに“ジエネティック・ワーウルフ”を召喚し、“黒いペンダント”を装備」

ATK / 2500

「さあ、苦しんでもらいましょう。二体で“ブラックマジシャンガール”を攻撃」

リヨウ LP 900

「ふふ、そのまま精霊世界へと旅立ってください」

リヨウが精霊世界に行く？

このまま戻って来ないんじゃない？

不安だよ、リヨウ。

リヨウが帰って来ないなんて嫌だよ。

「リヨウー!!」

そう考えると、私は反射的に叫んでいた。
お願い！

戻って来て　　！！

side out

「二体で“ブラックマジシャンガール”を攻撃」

「きゃあああー！！！」

マナが苦しんでる。助けなくちゃ。でも意識が。

「リョウー！！！」

「っ！！！」

ハッとした。

意識がはつきりしてきた。今の声は　アリス？

オレはアリスの方を向く。そこにはものすごく不安な表情でオレを見つめているアリスがいるね。　。
オレは今まで何を？

「よかった。意識が戻ったんだね！」

オレの場には全身を鎖に巻かれ、弓の枷がのしかかっているマナがいる。デュエル中に意識がぼんやりしてきたんだったね。　。
ライフは残り900だね。状況はかなりマズイ。それでもオレの意識は戻った。

ありがとう。アリス、マナ。

デュエルはまだ終わってない。
このドロローに全てがかかっているな。

(みんな、意識飛んでごめん。頼むよ、オレの思いに、応えてくれ！)

「オレの ターン!!!」

「っ! (馬鹿な!意識が戻ったのか!?)」

オレの引いたカード、マハード!

(無事か!?リヨウ、マナ!)

(オレはもう大丈夫だよ)

(私も平気です)

マハードが来てくれたのは心強い。けど今のオレの手札にマハードを召喚する方法は、いや、ある!

マハードを召喚して、デュエルを終わらせる方法が!

「手札から“ホーリー・エルフ”を召喚。さらに魔法カード“ディメンション・マジック”発動!自分場上のモンスター一体をリリースして、手札から魔法使い族モンスターを特殊召喚する。“ホーリー・エルフ”をリリースして、“ブラックマジシャン”を特殊召喚!」

ATK / 2500

「マナよ、無事か？」

「はい。なんとか」

二人とも、頼むよ。

「“デイメンション・マジック”の効果！モンスターを特殊召喚した後、場上のモンスター一体を破壊する！“ジエネティック・ワーウルフ”を破壊！」

「この瞬間、破壊された“黒いペンダント”の効果を発動します。相手プレイヤーに500ポイントのダメージ」

「くっ！」

リヨウ LP 400

「さあ、残りライフ400ですよ。もう一度貴方を精霊世界へ導いてあげましょう」

「あなたに次のターンはありません！このターンで決めます！手札から“黒・魔・導”を発動！“ブラックマジシャン”がいる時、相手場上の魔法・罫カードを全て破壊する！」

「なにっ!？」

「これでマナは全ての束縛から解放される！」

ATK / 2000

「だが私のライフは残る」

「まだ終わってません。装備装備“団結の力”を“ブラックマジシヤンガール”に装備！自分場上のモンスター一体につき、攻撃力が800ポイントアップする！」

ATK / 3600

「あなたが馬鹿にした師弟の力を受けてみる！」

“ブラックマジシヤン”で“シンメトリー・ロールシャッター”を攻撃！」

フランク LP 2700

「これで終わりだ！」

“ブラックマジシヤンガール”でダイレクトアタック！」

フランク LP 0

「勝者決定！リヨウの見事な大逆転勝利だ！」

勝った。

フランクさんは何かを呟きながら退場していく。

「マナ、大丈夫？」

「うん、平気だよ。それよりリヨウ、右腕押さえてるけど、ど

「うかした？」

「大丈夫。ちょっと疼くだけだよ。マハード、マナのこと頼むよ」

「わかった。無理はするなよ」

二人が戻っていくのを見届けてから、オレは退場する。
それにしても、右腕が疼くね。

side 遊星

控室の扉が開く。入って来たのは リョウカ。

「楽しいデュエルではなかった様だな」

「そう ですね」

「君はまだ若い。故に楽しくデュエルをしたいという君の思いはわかる。

だが、覚えておいた方がいい。デュエルは時に、辛く厳しいものになるということを」

ボマーの言う通りだ。

どんな時でも楽しくデュエルできる訳じゃない。

「はい。わかっているつもりです。

以前にもそんなデュエルを経験しましたから」

リョウカにも何かしらの過去があるのか？

だが、オレが今気になっているのはそのことじゃない。

「右腕を押さえているみたいだが、どうかしたのか？」

「少し疼くんだ。大丈夫だよ、もう大分納まったからね」

「少し見せてくれないか？」

赤き龍の痣は無い。オレと同じか？それとも疼いているだけか？

「少し外の風に当たってくるよ」

リヨウは部屋を出て行った。

s i d e o u t

オレは部屋を出た。

正直言つて、頭の中がぐちゃぐちゃだよ。 。
フランクさんがなぜオレと精霊のことを知っていたのか。精霊世界
って何なのか。そしてオレの右腕。わからないことが多過ぎるよ
。

「リヨウ！」

誰だろ？この声はアリスかな？

オレは振り向こうとした。

「つと！」

いきなりアリスに抱き着かれた。そういえば不安そうな顔してたね。

「アリス、どうしたの？」

「リヨウがどこかに行っちゃう気がして。もう戻って来ないんじゃないかと思って。」

だからあんなに不安そうな顔に。

「ごめんね。心配かけて。」

そのまま優しく抱きしめてあげた。

オレたちはしばらくこの状態だった。考えてたことが一気に吹き飛んじやったよ。

「さあ、第四戦、デュエルスタート！」

MCの掛け声と一緒にオレたちは離れた。

「大丈夫？安心できたかな？」

「うん。もう平気だよ。」

笑顔だった。良かった。もう心配ないみたいだね。

「近くにモニターがあったはずだから、一緒に見ようか？」

「そうだね」

本当はアリスは観客席で見なきゃいけないんだろうけど、今は離れたくない。

第四戦は十六夜さんと来宮虎堂つて人だね。このデュエルの勝者がオレとデュエルすることになるんだね。

「勝者決定！十六夜アキ！早く救護班を！」

何だったんだろう、今のデュエル。プレイヤーへのダメージがそっくりそのまま本当のダメージとなって、プレイヤーを襲っていたね。

「リョウ、今のデュエルは？」

アリスも同じ反応だね。
そして多分、考えてることも同じだろうね。

「十六夜アキつて人、まさか私と」

「それ以上は言っちゃだめだよ。アリスはちゃんと克服したんだから」

サイコデュエリスト。生まれ持って特殊な力を持つデュエリストの総称。

だけど、十六夜さんの力は桁が違う気がしたな。

デュエル中の話を聞く限りじゃ、十六夜さんは自分の力で人を傷付けているね。そしてその力を恐れられて、友達もいないし、親にも。

「次のデュエルも辛いデュエルになりそうだね」

「やっぱりあの人とデュエルするの？」

アリスはしてほしくなさそうだね。

「うん。放つてはおけないよ」

「そうだね」

「危険かもしれないってことはわかってるよ。でもオレは」

「大丈夫。わかってるよ」

真っ直ぐオレの目を見てきたね。

「無茶はしないでね。あの子を助けてあげて」

オレはアリスの髪をなでてあげた。少しでも安心できるようにね。

「うん。約束するよ、アリス」

わからないこともたくさんある。

オレとフランクさんとのデュエルのこと。十六夜さんのデュエルの

こと。

アルカディアムーブメントって何だろ？

十六夜さんのデュエル中にさらに疼きを増した右腕。十六夜さんの腕が赤く輝くのとほぼ同時だったような気がするな。

わからないことは多い。

！
ただ十六夜さんのため、アリスのために、次のデュエルは必ず

第七話：VSフランク（後書き）

どうだったでしょうか？

シリアスっぽいのが自分でもよくわかりません。

何かアドバイスがあればよろしくお願いします。

感想も書いてくれると嬉しいです。

第八話：精霊世界（前書き）

フォーチュン・カップ1日目最後の敗者復活戦です。

龍可のデュエルは頭の中である程度連想してくれると嬉しいですが、
分かりにくくなってしまいましたので。

それでは第八話です。

第八話：精霊世界

一回戦が終了し、今日の日程は全て終了のはずだね。これから帰れるのかな？

「緊急事態の発生だ〜！先ほどゴドウィン主催からサプライズな連絡だ〜！」

MCが騒いでるよ。

「何かな？」

アリスも知らないみたいだね。何だろ？

「これより敗者復活戦が行われることが決定した〜！」

敗者復活戦。

この大会は何か仕組まれてるんだよね。また何かあるんじゃないよ。

「どうしたの？ぼ〜っとしてるけど」

「うっん。なんでもないよ」

「組み合わせが決まってるみたいだよ？龍可が出るみたい」

敗者復活戦は一組だけ行われるみたいだね。今度は本物の龍可か。

「私、龍可に声かけてくるね。ここにあんまり長くいすぎるともよくないだろうし」

「うん。来てくれてありがと。アリス」

「それじゃあ、また後で」

オレも控室に戻らないとね。

オレは控室へと入る。

「リョウ、大丈夫か？」

遊星、心配してくれたんだね。

「平気だよ、遊星。これから敗者復活戦みたいだね」

「偽物君も良いデュエルを見せてくれたが、本物の彼女はどうかかな？」

ボマーさん、やっぱり気付いてたんだね。あれだけ男の子っぽくしてれば当然だけどね。

対戦相手は プロフェッサー・フランク！？

まさか、龍可も精霊を感じることができてることを知ってるんじゃない。

side 龍可

私は客席を出て会場に向かってる。けどやっぱり嫌だなあ。デュエルをするとすごく疲れちゃうのに。

「龍可」

「アリスお姉ちゃん」

「がんばってね。応援してるよ」

「うん。がんばる」

そうね。みんなのためにもがんばらないと。

デュエル場について私は対戦相手を待ってる。

私の対戦相手のフランクって人。リョウとのデュエルじゃあんまり良い印象じゃないなあ。どうしよう。

(クリリン)

あなたもなのね。

“クリボン”。

side out

龍可とフランクさんのデュエルが始まったね。何もなければいいんだけど。

「リョウ、少し聞いていいか？」

「何？遊星」

「デュエルモンスターの精霊世界とは一体何だ？」

そのことが。

ボマーさんはここからいなくなってるね。遊星にならいいかな。

「オレとフランクさんとのデュエルで聞いた通りだよ。オレは精霊の声を聞くことができるんだ」

「

やっぱり困惑してるのかな？

「信じられないかな？」

「いや、お前はそんな冗談は言わないだろう」

「ありがと。ちなみにオレの精霊は“ブラックマジシャン”と“ブラックマジシャンガール”。名前はマハードとマナだよ」

「そうか。

モニターを見ている限りでは龍可もそうなのか？」

フランクさんはオレに言っていたことを同じように龍可に言ってるね。

マズイかな。龍可もオレと同じ状態になってるよ。

「お前と同じ状態だと思うんだが、あれは一体？」

「多分龍可も精霊世界に連れて行かれようとしてるんだと思う。そのままじゃマズイかもしれないね」

「リョウ」

「マハード、どうかした？」

マハードが突然出てきた。何かあったのかな？

「マハード？精霊のことか？オレには見えないが」

「うん。遊星、ちょっと待ってて。」

どうしたの？マハード」

「龍可の精神が精霊世界に来てしまった」

マズイね。。。。どうすれば。。。。

「さらに悪いことにフランクという人間の精神も精霊世界に行きかけている。赤き龍の痣によって」

「フランクさんも！？それに赤き龍の痣って？」

「赤き龍の痣だと!？」

遊星は何か知ってるみたいだね。

「遊星は何か知ってるの？」

「赤き龍の痣、矢薙のじいさんが言うには古来の伝説によるものらしい。赤き龍の痣がある者はシグナーと呼ばれている」

「なんで古来の伝説が？」

「それはオレにもわからない。」

リョウ、赤き龍の痣がどうしたんだ？」

「龍可の精神が精霊世界に行ってしまったらしい。そして多分、龍可の龍の痣がフランクさんを精霊世界に連れていこうとしているみたいだね」

「なにっ!？」

モニターを見ている限りじゃ龍可の右腕が赤く輝いてる。あれが龍の痣なんだろうね。だとすると十六夜さんにも。

「二人を連れ戻す方法はないのか？」

「マハード、どうかな？」

「無い訳ではない。だが、あまり勧めることはできない」

「それは？」

「リョウが精霊世界に赴き、二人を連れ戻すことだ」

オレが 精霊世界に ?

「行けるのか？」

「リヨウは先ほど確かに行きかけた。その感覚を思い出せば、精神だけは行くことができるだろう」

あの不思議な感覚　ね。

「精霊世界には私とマナがいる。しかし、確実に安全とは言い切れない」

そうか　。

けど、このまま放っておく訳にはいかないね。

「遊星は龍可の様子を見に行ってくれない？オレは精霊世界に行つて二人を連れ戻してくるよ」

「　できるのか？」

「多分ね。マハードとマナもいてくれるし、大丈夫だと思う」

「　わかった。頼む」

遊星は複雑な表情で出て行った。心配してくれてるんだね　。

「良いのか　？」

「うん。頼むよ、マハード」

「　わかった。精神を研ぎ澄まし、感覚を思い出してくれ」

オレは言われるままに感覚を思い出す。少しずつぼんやりしてきたね。

「これから私の力で精神のみ精霊世界へ連れて行く。目を閉じて、力を抜いてくれ」

目を閉じ、力を抜く。

「では、行くぞ」

そこでオレの意識は完全に途絶えた。

ゆっくりと目を開く。ここは 森の中かな？静かで、穏やかな所だね。

「無事にたどり着いた様だな」

振り返ると、マハードとマナがいた。来てくれたんだね。

「リヨウ、デュエルモンスターの世界へようこそ！よく来てくれたね」

「精神だけだね」

「でも実体はあるんだよ？現実じゃ触ることさえできなかったけど、ここなら触れることができるんだよ」

マハードとマナが近づいてくる。そうなんだ。ここなら触れること

も。
ん、マナに何か？

「マナ、それもしかして？」

「え？あつ！」

マナは隠そうとした。やっぱり。

オレはマナに無理やり隠すのを辞めさせる。うつすらとだけど、残ってるね。

「鎖の 後、だよな？」

「うん」

フランクさんとのデュエルでの、“闇の呪縛”の傷痕。残ってたんだね。

「リヨウ、心配しないで。すぐに治るから」

「傷痕は残らない。デュエルの傷は時間が経てば治る。気にする必要はない」

それでも オレは。

「今回のマナの傷は明らかにオレの責任だよ。それに今までだって、何も知らずにみんなに無茶を」

「リヨウ、私たちモンスターがどうしてプレイヤーに従うか、

わかる？」

「
」

「それはね、私たちがプレイヤーを信じて疑わないからだよ。自分を使ってくれるプレイヤーに感謝を込めて、私たちは闘ってる」

「強いモンスターもいれば、弱いモンスターもいる。だが、強ければ最強という訳ではない。弱いモンスターでも組み合わせ次第で強くなり、強いモンスターを倒すことができる」

たしかに、そう だね。

「モンスターによつては、破壊され、傷付き、墓地に送られることで真価を発揮するモンスターもいる。自らが傷付くこともいとわず、プレイヤーの壁になるモンスターも存在する」

「でも、プレイヤーが私たちを信じてくれないと、私たちも本当の力を出すことはできないんだよ」

そんなこと考えたこともなかった。

オレはいつも仲間を、自分で紡いできた絆を信じて闘ってきた。その裏で、仲間が傷付いていることも知らずに。

オレは俯いている。顔を上げて二人を見ることなんて、オレにはできないよ。

「顔を上げて」

思わず顔を上げてしまった。

マナがオレを優しく抱きしめてくれたから。

「リヨウはいつだって私たちのことを信じてくれた。いつだって私たちと同じ思いで闘ってくれたんだよ」

「私たちが信じて疑わないプレイヤー、リヨウと共に闘う。それが私たちにとって一番の幸福なんだ」

マナ、マハード。

「リヨウと出会えて、私たちはとても幸せなんだよ。

だから私たちは傷付くことを恐れない。いくら傷付いても構わない。

私たちはリヨウのことが」

頬に柔らかい感触がしたね。

「大好きだからね！」

マナは恥ずかしそうに笑ってる。ホントにオレは良いパートナーたちを持っただね。

「ありがとう。マハード、マナ、みんな。これからもオレと一緒に闘ってほしい」

「初めからそのつもりだ」

「これからもよろしくね、リヨウ」

オレはこれからも、仲間との絆を信じて闘う！
これからも、ずっと。

「っ！！」

リョウ、マナ、これを見る！」

森が枯れていく。

精霊世界に何か異変が起きたのかな？

感傷に浸ってただけだね。仕方ないかな。

「龍可が心配だね。マハード、マナ、行こうか」

「ああ」

「こっちだよ」

オレは走り出した。

「場所はわかる？」

「うん。だいたい位置は掴んでるよ」

頼りになるね。さすがだよ。

少し走ったかな。

マナの話だとこの辺に龍可がいた！

あれは？

ドラゴンの形がついている岩山？

「龍可！大丈夫？」

「えっ！？リヨウ、どうしてここに！？」

「助けに来ただよ。マハードとマナのおかげでね」

「そうなんだ。ありがとう」

とりあえずは無事みたいだね。

『龍可、龍可。私はここだ』

何？あの岩山から？

「知ってる。私はあの龍を。“エンシエント・フェアリー・ドラゴン”！」

龍可が知ってる？オレは聞いたこともないけど。

『龍可、また会えたね』

霧が立ち始めたね。一体何だろ？

「マハード、マナ。これは？」

「わからない。悪意は感じないが」

「“エンシエント・フェアリー・ドラゴン”が何かするのかもしれない

ないね」

二人はあのドラゴンのことを知ってるみたいだね。

霧の中に人が。あれは龍可？今と比べてずいぶん小さいね。ということとは、あれは過去の映像！？龍可が何か約束してるみたいだけ。

「思い出したわ。あの時私は確かに約束した。この世界を守ると。でも私は龍可の声を理由にして、ここから逃げた」

無理もないかもしれないね。あの時の龍可はまだ6歳くらい。そんな歳で見知らぬ世界を守るのは荷が重過ぎるよ。

「私、一人であなたたちを守ることが恐かったの。それで私、忘れようとしてこの世界を心に閉じ込めて」

「グオオオー！！」

“超魔神イド”！

あいつをなんとかしないと！

「マハード！」

「だめ！ここでの争いは許されない」

“古の森”か。攻撃すれば破壊されてしまうね。それに“超魔神イド”を破壊してもまた復活する。

いや、“超魔神イド”が消える？

違う！あれは！

「ククク、これがデュエルモンスターの精霊世界」

フランクさん！来てしまったね。

「この私を取り込むとは、やはりお前はシグナー！」

龍可のことだね。確かに龍可にも痣がある。

「隣の奴がなぜいるかは知らないが。私の導きに応じなかつたくせに」

「あなたに従う気なんてありませんよ」

「ふん。まあいい。」

龍可さん、お前の力を欲する者がいる。さあ、おじさんと行くつもりがないか」

欲する者？一体？

“超魔神イド”が現れ、フランクさんの周りが黒く染まり、木々が朽ち果てていく。

「これは一体？」

「奴の悪なる気が汚染しているんだ。このままでは精霊世界が」

くそ、どうにかできないのか？

「龍亞！龍亞！お願い！私を連れて帰って！」

『龍可』

「龍亞！」

地面に龍亞が映った。現実世界に繋がったのかな？

『だめだよ。みんなと約束したんだろ？』

「龍亞」

約束したのは事実だろうけど、それはあんまりじゃないかなあ。

『オレ強くなるから。』

龍可はオレが守るから。

だから龍可はその世界を守ってあげて。』

龍亞なりの考えだね。

それならオレにも考えがあるよ。

「龍可は一人じゃないよ。龍可にはいつも精霊たちがいる。“クリボン”だって、そんな呪いをかけられても傍にいてくれるんだよ」

「“クリボン”」

「クリッ」

「それにオレも協力するよ。マハードやマナ、みんなが住むこの世

界を守るためにね」

「リヨウ」

オレは龍可に笑いかける。“クリボン”に“サンライト・ユニコーン”、マハードとマナだっている。あとは龍可の気持ち次第だよ。

「私は、この世界を守る！“クリボン”やみんなを護る！」

オレも協力するよ。一緒にこの世界を護ろう、龍可。

龍可がフランクさんに向き直り、デュエルが続行される。

「オレに何かできることは？」

「デュエル中である以上、もう見守るくらいのことしかできないと思うよ」

「マナ」

オレには結局、見守ることしか。

「大丈夫。見守ってて。私は絶対負けないから」

状況はかなり厳しい。でもオレは龍可を信じる！

龍可はがんばってる。だけど、

「本当はね、お前の力なんてどうでもいいんだよ。私はただお前を倒すことができればそれでいい」

やっぱり歪んでるよ。。

あの人の悪意が精霊世界を壊していく。。

「お前たちの、精霊世界の、その苦悶する表情が見られればそれでいいんだよ！」

「止める！そんなことをして何になる！？苦しみが増えるだけだ！」

「それでいい！それが楽しいんだ！」

どうすれば。。

「この世界に手出しはさせない！」

「こんな世界など汚し尽くしてくれろ！」

あのドラゴンの岩山が砕けたね。。

いや、違うー！

あのドラゴンが岩山のまま出てきたんだ！

「“エンシエント・フェアリー・ドラゴン”が怒ってる。。自分が傷付くのも感じないくらい、あの人に怒りを」

やっぱり、もう方法はこれしかないね。。

「龍可、このデュエルを終わらせよう。それ以外の方法は思いつかないよ」

「そうしてほしい。一刻も早く！」

「このデュエルを終わらせて！」

「わかったわ。リョウ、マハード、マナ。

このカードでこのデュエルを終わらせる！」

リバーカード“オベロンの悪戯”！ライフを回復する効果を無効にし、お互いのプレイヤーはその数値分のダメージを受ける！」

よし！

これでこのデュエルは終わるね。お互いのライフが0になる。

ライフが0になった時、物凄い竜巻が起きた。みんな吹き飛ばされてしまう。

『私を封印した悪なる者を倒しておくれ。龍可』

悪なる者？フランクさんじゃなくてまだ誰かが？

『リョウ、貴方は闇に吞まれてはいけない。悪なる闇を正しき闇の力に変えておくれ』

それは一体どういう意味！？

そこでオレの意識はまた途切れた。

第八話：精霊世界（後書き）

精霊世界でマハードとマナが語っていることは、単に自分がそう思っているだけです。

気に障った方がいましたらすいません。

アニメでは大半のモンスターが破壊される時、悲鳴？みたいな声をあげるからそう思いました。

確信なんて全くありませんけど。

それでは何か間違いがありましたら教えてください。

感想も待っています。

第九話：決戦前（前書き）

今回は題名通りなのでデュエルは無しです。

少しラブラブになってると思う人もいるかもしれませんが、これからもこんな感じになるかもです。

では、どうぞよろしくお願いします。

第九話：決戦前

オレは控室で目を覚ました。

龍可とフランクさんは 無事みたいだね。龍可は遊星と一緒にいるし、問題無さそうだね。

それにしても、あのドラゴンがオレに言った最後の言葉は一体 ？

「マハード、マナ。最後の言葉の意味、解るかな？」

「私たちには解らない。随分謎めいていたな」

「あんまり気にすることないんじゃない？」

「わかったよ。二人がそう言うなら、考えないようにする」

謎が多過ぎるからね。今は目の前のことに集中しないと。

「白熱した大会第一日目はこれで終了だ！」

終わりだね。みんなと合流しないと。

side アリス

リョウや遊星さん、龍可が戻ってきて、みんな一緒にいる。

「龍可、なんで自分から引き分けちゃったんだよ!？」

龍亞がさっきのデュエルで龍可に文句言ってるね。止めた方がいいのかな？

「いいでしょ。どうせあのままじゃ、勝てなかったんだから」

どうしよう。喧嘩は良くないよね？

「放っておいていいと思うよ、アリス。いつものことだしね」

「そうなの？」

「うん」

リョウがそう言うならいいのかな。

あれ？

龍可が少し元氣無さそうに見えるけど。

「龍可、どうかしたの？元氣無いみたいだよ？」

「ううん、大丈夫」

「それならいいんだけど」

「心配しないで、アリスお姉ちゃん」

本当に大丈夫かな。

「龍可、今日のことはあんまり気にしない方がいいよ」

「うん、そうね」

今日のこと？何かあったのかな？龍可はさっきから右腕を押さえているし。

「二人共、今日はオレが送っていい」

「それがいい。疲れているだろうしな」

氷室さんの言う通りだね。遊星さんなら安心かな。

「それじゃ、今日は解散だね。みんな、また明日」

「リョウ、お前もゆっくり休めよ」

「遊星もね」

これで解散。みんなと会うのはまた明日だね。

「それじゃ、帰ろうか。アリス」

みんなと別れてリョウと二人。少し話したいこともあるし、リョウはこれから一人だろうから、

「今日、これからリョウの家に行ってもいいかな？私にご飯作ってあげる」

「ホント？ありがとう」

今夜は何がいいかな？

リヨウが食べてくれるから美味しいものを作ってあげないとね。

side out

家に帰ってきて、アリスが夕食を作ってくれてる。

オレは一人でソファアに座って今日のことを考えてる。いくら考えても謎が深まるばかりで良いことは無いんだけどね。

あ、そういえば一つ聞きたいことがあるね。

「マハード、マナ。ちょっといいかな？」

「なに？」

出てきてくれたね。

「マナ、傷の方は大丈夫？」

「うん。時間も経ったし、治ったよ」

「そっか。よかった」

今日聞いたカードたちのこと。

オレはこれからもみんなを傷付けることになるだろうね。
でもオレは逃げない！

みんなと共に闘うと決めたから　！

「リョウ、何かあるのか？」

「うん。今日、精霊世界に行ったけど、いつでも行けるの？」

「行けると思うよ。今なら精神だけじゃなくて、リョウ自身がね」

「どうして？」

「精神が慣れたからだ。精神が慣れば、身体も自然と慣れてくる」

「今はあんまりオススメできないけどね」

今、精霊世界は大分荒れてるみたいだったね。早くなんとかしてあげたいけど。

「いずれ時がくる。その時、リョウと龍可の力を借りることになるだろう。その時は頼む」

「わかってるよ」

時がくれば　か。

「リョウ、ご飯できたよ」

アリスが呼んでるね。行かないと。

「この話はまたゆっくりしようか」

「うん。何かあったら呼んでね?」

マハードとマナは戻っていった。

side アリス

「うちそうさまでした」

「うん。お粗末様でした。

どうだったかな?」

相変わらず美味しそうに食べてくれた。嫌な顔一つせずに。

「美味しかったよ。また上手になったんじゃないかな?」

「本当?ありがとう」

やっぱり美味しいって言うてくれる人に食べてもらえるのは嬉しい。母さんに毎日習ってるおかげかな。

「家には連絡した?」

「うん。あんまり遅くならないうちに帰ってきなさいって」

「そっか」

どことなく元気が無いように見える。やっぱり疲れてるのかな ?

「どうかしたの?」

「ちょっと考え事を　ね」

「もしかして　明日のこと？」

「そうだね」

サイコデュエリストの十六夜アキさんのことだね　。

「やっぱりあの人は、私と同じなのかな　？」

「そう　かもしれないね。　10年前のアリスト　」

そう、私の10年前　。

~~~~~

10年前、私が6歳の時。

父さんが不慮の事故で亡くなったあの日。私の家族は悲しみに包まれた。

当時、家内で一番幼かった私は大好きだった父さんの死を受け入れることなんてできなかった。

時が経つにつれて、家族は父さんの死を受け入れ、悲しみから立ち直りつつあった。でも私の時は止まったままだった。

そんな時だった　。

私の力が目覚めたのは。サイコデュエリストの力が。もちろんその頃は自分の力がサイコの力だなんて知らなかったけど。

私は目覚めたサイコの力で人を傷付け始めた。今の十六夜さんのように。

毎日毎日外に出て人を傷付ける。そんな日々だった。毎日毎日。

人に恐れられ、家族にもだんだん避けられるようになった。

一人ぼっちだったけど、誰も私の気持ちをわかってくれない。

そんな思いが募って、人を傷付けることを止めなかった。止めることができなかった。

そんな荒んだ私を止めてくれたのは、

「止めてよ。どうしてこんなことするの？」

リヨウだった。

私のことを真っ直ぐ見てくれた。真っ直ぐ向き合ってくれた。

嬉しかった。

でも私はそんな気持ちとは裏腹に、無言でデュエルディスクを構えていた。

デュエル中、私は何度もリヨウを傷付けた。

それでもリヨウは私に語りかけた。

「何が君をそんなふうにするのか、僕には解らない。

だけど、どんな理由があつたとしても人を傷付けちゃだめだよ。

辛いこと、苦しいことたくさんあると思う。でもそれと同じくらい楽しいこと、嬉しいことだってあるよ。



今は苦しくても、その苦しみに負けちゃだめなんだよ」

何を言っても聞かない私に何度も何度も語りかけてくれた。

自分でも気付いていたのかもしれない。

私が間違っていることに。

そして

「“ブラックマジシャン”でダイレクトアタック！」

私は負けた。

その場に崩れ落ちた。

「大丈夫？」

「どうして　？そんなに私に　」

「辛そうだったから　。苦しそうだったから　。  
僕にできるなら助けてあげたかった」

こんなに向き合ってくれてるのに　。  
素直になれなくて　。

「あなたには関係無い　。  
放っておいて　」

こんなことしか言えない。

それなのに　、

「僕たちは今日初めて出会ったんだっただね。それじゃあ、僕と友達になるろう？」

それなら無関係じゃなくなる」

嬉しかった。

気が付いたら私は一人で泣いていた。

「何があつたのか、僕には解らない。

だけど、今はたくさん泣いてもいいんじゃないかな？

君の気が済むまで　ね」

そう言われた瞬間、私はリヨウの胸に飛び込んだ。

「うっ、うっ、うわぁぁん！」

私はしばらく泣いていた。

その間、彼は何も言わずに私を受け入れてくれた。

~~~~~

「それから、家族と和解して、友達もたくさんできて　。
今はデュエルアカデミアに通いながら毎日楽しく過ごして　」

「そうだね。オレもアカデミアに通うことができて、アリスと無事に高等部に、それから夏休みに入って、遊星たちにも会えた」

うん　。

本当に、今の私があるのは、

「私が今、こうしていられるのはリヨウのおかげだよ。あの時、リヨウに会えなかったら、今ごろどうしているかわからない」

本当にそう思う。

だから、

「ありがとう。リヨウ」

少し照れ臭そうに頭をかくリヨウ。

ふふ、リヨウにはこんな一面もあるんだね。

「オレはただ、誰かが悲しんだり、苦しんだりしてるのを見たくないだけだよ。どんな理由があっても、放っておくことはしたくないから」

「リヨウは優しいね」

でも、その優しさが私の悩みの種なんだけど。

「だからリヨウは女の子に好かれるんだよね？」

私は悪戯っぽく笑う。

「えーっと」

「言い訳は無しだよ？今まで私に何回ヤキモチ妬かせたかわからな
いくらいだからね」

「ごめん」

リヨウは優しいから誰に対しても好印象を持たれる。

それは悪いことじゃなくてむしろ良いことなんだけど、どんな些細
なことでも困ってる人がいたら助けちゃう。

それも良いことなんだけど、当然女の子も例外じゃない訳で
それで女の子に好意を持たれて。。

「それで女の子に話しかけられて、笑顔で対応するもんね？」

「だって、話しかけてくれるのに嫌な顔はできないよ」

「そうだね。だからリヨウはモテモテなんだろうなあ」

性格が良ければ、顔も綺麗だし、スタイル良いし、カッコイイし
。。

「アカデミアで何回告白されたんだっけ？」

「うっ！」

「告白されてどう返事したらいいかわからなくて、悩んだのは誰
だっけ？」

「うっ！」

どんどん困った顔になっていくね。ちょっといじめ過ぎちゃったか

な？

「で、でもちゃんと全部断ったんだよ？

オレにとつては、その、アリスが一番好きだから／＼」

リヨウ、顔が真っ赤だよ。

多分私もだけど／＼。

side out

オレは今顔が熱い。

でも今の一言でアリスの顔を真っ赤にしたからおあいこかな。

「それにアリスだつてモテるよね？」

「リヨウほどじゃないよ。確かに告白されたことはあるけど、その場で断つたし、数えるくらいしかないよ」

なんでも、好きな人がいます、って言って断つたらしいから告白されるのが少なくなつたらしい。

オレもそう言つて断つてみたけど、ますます問い詰められて。

「どうしたものかな」

「私と付き合つてるって言えばいいのに」

「目立つよ？ 恥ずかしくない？」

「それは、まあ」

アカデミアで付き合っていることが発覚すれば、目立つんだよね。それが隠してる理由なんだけど。

「でも私は嫌だなあ」

「何が？」

「もく、リヨウが告白されること！私またヤキモチ妬いちやうよ？」

少し頬を膨らませて言ってくる。

怒ってるんだろうけど全然怖くないよ？むしろ可愛いけど。前にこう言って怒られたから言わないけどね。

あれ？

そういえば何の話してたんだっけ？

すっかり話が逸れてる気がするけど。

「付き合っていることをどうするかは学校が始まってから考えるよ。話を戻そう。十六夜さんのことだったね」

「うん。そうだね」

少しまた表情が暗くなった。

アリスは笑顔が一番なんだけどな。

「何度も言ってるけど、無茶はしないでね」

「うん。わかってる」

「恐く ない？」

心配してくれてるんだね 。

「恐くないって言えば嘘になるよ。でも大丈夫。オレは一人じゃないから。カードたちがいつもいてくれるし、マハードやマナがいる。それに遊星たちがいる。そして、アリスが見守ってくれてる」

だから、オレは 、

「だから闘える。みんなが、アリスがいてくれる限り、オレは大丈夫だよ」

「うん！」

笑顔になったね。よかった。

「話し込んでたらもうこんな時間だよ？大丈夫？」

時計は9時を回ってる。アリスはそろそろ帰らないと。

「ホントだね。私、そろそろ帰るね」

「送っていいのかな？」

「平気。リヨウは明日に備えてゆっくり休んでて」

だから家に来てくれたのかな？

「ありがと。じゃあ、気をつけてね？」

「うん。おやすみ、リョウ」

「おやすみ、アリス」

アリスは家に帰っていった。

さてと、オレも今日は明日に備えて早く寝ようかな。

翌日。

みんなで集まってスタジアムに向かっている。

「リョウ、今日はあの魔女とでしょ？大丈夫？」

「龍亞、十六夜さんのことをあんまり魔女って呼んじゃだめだよ」

「どうして？」

「本人が嫌がってるだろうからね。そういう言葉は彼女にとって暴言になる」

「だが、得体の知れない力で人を傷付けているのも事実だ」

氷室さんの言う通りではある。

でもそれは知らないだけで、そういった力を持つ人、サイコデューエリストは存在してる。

やっぱりアリスが悲しそうな顔してるね。

「どうしたの？アリスお姉ちゃん」

「ううん、何でもないよ。心配しないで、龍可」

アリスはもう立ち直ってる。大丈夫とは思っけどね。

「みんな、着いたぞ」

「おお、本当だな。あんちゃんとりヨウ君とはここで別れかろう」
みんなは客席に向かわなきゃいけないからね。

でもその前に、

「アリス、行ってくるよ」

「うん。気をつけて」

オレはさらに近づいて耳打ちした。

「約束するよ。あの人を救うって」

「うん。約束」

アリスはみんなと一緒に客席に向かう。オレに微笑んで。
今の約束は自分自身への誓いでもある。悲しい思いをする人をこれ以上増やさないために。

遊星と一緒にDホイールを停めて、控室に向かう。

「いよいよ大会二日目！準決勝第一試合は、黒薔薇の魔女、十六夜アキVS黒魔術師使い、リヨウ！」

MCだね。十六夜さんのことを魔女って言うてるだけでも気に入らないのに、黒魔術師使い？確かにマハードやマナは黒魔術師だけど使ってる訳じゃない。一緒に闘ってるんだ。

「分かってないなあ。カードたちは一緒に闘う仲間なのに」

「気にするな」

流石、遊星はよく分かってるみたいだね。遊星とカードたちの強い絆を感じるからね。

コツ、コツ。

人、誰かが、十六夜さん。

「こんにちは、十六夜さん。今日はよろしく。楽しいデュエルをしようね」

答えはない。表情一つ動かさない。やっぱり彼女は今、デュエルを楽しむなんてできないんだろうね。

十六夜さんが遊星を見て右腕を押さえる。オレより遊星に意識がある。それも憎しみのような。

「なぜ、忌むべき印だ？痣はお前にとって何なんだ？」

十六夜さんにも赤き龍の痣がある。
でもこの会話だと、二人はどこかで会ったことがあるのかな？初対
面とは思えないけど。

「私はこの痣を持つ者を憎む。 嫌悪する」

遊星に言ってるだけじゃないね。 自分にも言ってるように聞こ
える。

でもどうして遊星に？

そういえば、矢薙さんから聞いたとはいえ、遊星は赤き龍の痣に詳
しい。もしかしたら遊星もシグナー？

「ヒッヒッヒッヒ」

誰か来たね。

不審な笑い声だなあ。

「これはこれは、十六夜様。
準決勝の前にゴドウィン長官が一言芳いの言葉をと申しておりまし
て。御一緒して頂けますでしょうか？」

治安維持局の人かな？

「それは困りますね」

また誰か来た。それも複数。十六夜さんの周りにいるから彼女の関
係者かな？

「貴方は？」

「アキの保護者、とでも言うっておきましょつか」

十六夜さんの保護者？

今、保護してくれてる人ってことだろうね。なんだか嫌な感じがするけど。

十六夜さんを取り囲んで去っていく。

ん？

遊星が治安維持局の人に詰め寄っていくね。

「貴様、ラリーたちをどこに？」

遊星が怒ってる？珍しいな。

「御自分の立場をお考えに。さもないと」

嫌な感じ。何かあるのか？

「リヨウ様、貴方はどうです？ゴドウィン長官から劣いの言葉を」

「リヨウ、行く必要はない」

遊星がそう言うなら、そうした方が良さそうだね。

「自分は準備がありますので」

「そうですか。ではデュエルを楽しみにしています。ヒッヒッヒ」

歩き去っていく。
一体何なんだろう？

「リヨウ、治安維持局を信用するな」

「何かあった？」

「ああ」

多分、よっぽどなことなんだろうね。

「オレのことはいい。十六夜とのデュエルだが」

「辛いデュエルになるだろうね」

「大丈夫か？」

「大丈夫。オレにはみんながついてる」

「そうだな。気をつけろよ」

「うん。じゃあオレは控室に戻るよ。もう少し時間があるみたいだから」

「ああ。（十六夜はシグナー。何も無ければいいが）」

控室に戻ると、オレは自分のデッキを取り出した。

十六夜さんが自分の負の感情を向けているのは、赤き龍の痣。

でも本当にそういう感情だけだろうか。まだ別の何か秘められているように感じる。

十六夜さんは苦しんでる。彼女のカードたちも同じように。

助けてあげたい！

その為にも、彼女の閉ざされた心、それをこじ開けて、本当の十六夜さんに会わなきゃならない。

オレの全てを賭けて十六夜さんと向かい合う。

そうじゃないと、彼女は心を開いてくれない気がする。

みんなにはまた無茶をさせることになるかもしれない。今回は特に。

「大丈夫だよ。みんなリヨウと同じ気持ちだから」

「マナ」

いつの間にかマハードとマナが出てきてたみたいだね。

「緊張しているようだな」

「それなりにね。それにみんなにはまた迷惑をかけることになる」

その罪悪感も無い訳じゃない。これはオレの我が儘だから。

「気にすることはない。リヨウが助けたいと願うのと同様に、私たちも助けたいと願う」

「カードとプレイヤーは一心同体。リヨウの願いは私たちの願いだよ。だから私たちも必死になって闘うよ」

「ありがとう、二人共」

マハードとマナにはかなり無茶をさせることになる。それでも二人はオレと一緒に闘ってくれる。

救ってみせる！

オレの力と、みんなの力で！

「行こうか、みんな」

side アリス

「さあ、待ちに待った準決勝第一試合、一回戦では見事な逆転勝利を見せてくれた黒魔術師使い、リヨウ！対するは、同じく一回戦の衝撃、今だ生々しい、黒薔薇の魔女、十六夜アキ！」

リヨウと十六夜さんが出てきたね。

「ゲームはスタンディングだ！」

黙って見つめ合ってる二人。

「リヨウ君凄いね。いつも通りな感じだ」

「ああ。気負ってる様子はないな」

「リヨウなら勝てるよ」

いつも通り？ 気負ってない？
全然違う。今のリヨウは相当緊張してるよ。そう見えないように」
まかしてるだけだよ。

「リヨウ、大丈夫かな」

龍可は解ってるみたいだね。

「リヨウなら大丈夫だよ」

そう信じてる。

だからがんばって、リヨウ。

あの人を救ってあげて！

side out

「さあ、注目の一戦の始まりだ！」

始まる。

必ず、救ってみせる！

「デュエル！！」

第九話：決戦前（後書き）

どうだったでしょうか？

リヨウはかなりモテモテの予定です。アリスもかなりモテる予定です。が。

アカデミアは勝手に夏休み設定です。しばらくはアカデミアネタは無い予定です。

次話は丸々デュエルだと思います。

では、更新がんばります。

感想も書いてくれると嬉しいです。

第十話：思いを込めて（前書き）

1話全部デュエルです。

ちなみに十六夜さんは仮面を付けません。

今回もオリカはありません。

次のデュエルくらいでたくさん出す予定です。

第十話：思いを込めて

「私のターン、ドロー」

十六夜さんのターンから。どうくる？

「アイヴィ・ウォール”を守備表示で召喚」

DEF / 1200

「カードを1枚伏せ、ターン終了」

「オレのターン」

十六夜さんは様子見か。なら、

「手札を1枚墓地へ送り、“THE トリック”を特殊召喚」

ATK / 2000

「THE トリック”で“アイヴィ・ウォール”を攻撃！」

「“アイヴィ・ウォール”が攻撃対象になった時、相手場に“アイヴィトークン”を特殊召喚する」

DEF / 0

オレの場にトークンか。
でも“アイヴィ・ウォール”は破壊できた。

「ターンエンド」

「私のターン、永続罠“カード・アイヴィ”を発動。墓地から“アイヴィ”と名の付くモンスター1体を、守備表示で特殊召喚する。
“アイヴィ・ウォール”を特殊召喚」

DEF/1200

「ターンを終了」

「序盤2ターンはお互いに探り合いか？だがそれも、嵐の前の静けさか？」

だろうね。本当に嵐がくるかもしれない。

「オレのターン、“THE トリック”で“アイヴィ・ウォール”を攻撃」

「“アイヴィ・ウォール”の効果により、相手場に“アイヴィトークン”を特殊召喚」

これで2体目。

「“アイヴィ・ウォール”が破壊されたことにより“カード・アイヴィ”も破壊されるが、このカードが墓地へ送られた時、相手場に“アイヴィトークン”2体が特殊召喚される」

これで4体。

オレの場が埋め尽くされた。

このトークンが破壊された時、300ポイントのダメージを受けるとする。

「私のターン！」

やっぱり！来る！

「手札から“偽りの種”発動！手札からレベル2以下の植物族モンスターを特殊召喚する。現れよ“ダーク・ヴァージャール”！」

ATK/0

「“ダーク・ヴァージャール”をリリース！“ローズ・テンタクルス”をアドバンス召喚！」

ATK/2200

攻撃力2200か、来る！

「“ローズ・テンタクルス”で“THE トリック”を攻撃！ソーンウィップ！」

蔓に巻き付かれ“トリッキー”が破壊される。

「くっ、”トリッキー”！」

リヨウ LP 3800

破壊された余波がオレや観客を襲う。200のダメージだからそれ

程の衝撃じゃないね。

「まだまだ！“ローズ・テンタクルス”はバトルフェイズ開始時に、相手場に存在する植物族モンスター分、攻撃回数を増やすことができる！」

マズイ！

更なる衝撃が後4回も！？

「待つて！十六夜さん、自分の力を抑えて！」

「私に攻撃を止めると？」

「このままじゃ傷付く人がいる！」

「自分は助かりたいと？傷付きたくないと？」

「そうじゃない！観客に被害がでる！」

「自分の為に周りを楯にするつもりか？」

「違う！オレの為じゃない！」

「嘘をつくな！」

聞いてもらえないか。

「“ローズ・テンタクルス”が植物族モンスターを破壊した時、300ポイントのダメージを与える！」

「っ!?!」

本当に更なる衝撃が!?!

「全員伏せろー!?!」

オレは叫んだ。

1度の攻撃の度に600ポイントのダメージを受ける。
この攻撃で十六夜さんの心を見極める!

「ソーンウィップ、ワン!」

『うわああー!』

観客が悲鳴をあげてる。

ごめん、少しの間耐えてくれ!

「うっ!?!」

オレに蔓が巻き付いた!?!

「ソーンウィップ、ツー!」

「くっ!」

次は脚に巻き付いた。一体何を?

「ソーンウィップ、スリー!」

今度はもう片方の脚か。

やっぱり辛そうで。
苦しそうで。

オレたちに与えるこの痛みは十六夜さんの叫び。
でもそれだけじゃないね。まだ何かの感情を感じる。

「これが、最後の攻撃。ラストソーンウィップ！」

最後はオレの全身に巻き付き、オレを持ち上げていく。

「くっ、うぁっ！」

痛い！

だけど逃げる訳にはいかない！
彼女と向き合わなくちゃ

「っ！？」

笑ってる！

「うわぁっ！！」

地面に叩きつけられた。

身体に激痛が走る。これが十六夜さんの力。
多分、威力だけならアリスとそれ程変わらない。
だけど、十六夜さんの方が負の感情が遥かに強い。その感情が彼女
の力を強くしてるんだ。

「はっ、はっ、」

オレはなんとか立ち上がって、十六夜さんを見た。

笑ってる。

やっと判った。

「判ったよ。

あなたの負の感情の他にあるもう一つの感情。

十六夜さん、あなたはその力を楽しんでる。その力で破壊することを楽しんでるんだ。」

side アリス

リヨウが立ち上がってきた。良かった。無事、

「っ!？」

頭から血を流してる！

「オイ、あいつ、血を流してるぞ!」

リヨウもかなり辛そう。

だけどリヨウの目は全く変わってない。

それなら私も信じなくちゃいけない!私が逃げちゃいけない!

「判ったよ。

あなたの負の感情の他にあるもう一つの感情。
十六夜さん、あなたはその力を楽しんでる。その力で破壊することを楽しんでるんだ。」

「私が、破壊を楽しんでる？」

確かに私にも笑ってるように見えた。

けどそのことを十六夜さんは気付いてない。自覚が無いまま人を傷付けることを楽しんでる。

私の時よりも酷い状態だね。

きつと思いが募り過ぎて、辛くて、苦しくて、どうしようもなくて。

そんな現実から逃げる為に無自覚で人を傷付けることを楽しむようになったんだ。

早く助けてあげなくちゃ。

「リヨウ、がんばって！」

side out

「リヨウ、がんばって！」

今、アリスが何か。

アリスの方を見ると、アリスは真っ直ぐオレを見ていた。
信じてくれてるんだね。

顔の辺りに何か生暖かい感じがした。

血。

頭から流れてるんだね。

「リヨウの頭から血が流れている！これはもうサレンダーした方が
良いんじゃないか？」

MCか。

オレの答えは決まってる。

「デュエル続行！」

リヨウ LP 1400

「な、な、な、何と！？大丈夫か？」

逃げる訳にはいかない！

「オレのターン！」

来た！

このカードなら、

「魔法カード“黒魔術のカーテン”！ライフを半分支払い、“ブラ
ックマジシャン”をデッキから特殊召喚する！」

リヨウ LP 700

オレと共に闘ってくれ！

「来い！マハード！」

ATK / 2500

「かなり傷付いている。大丈夫か？」

「問題無いよ」

正直に言えば、頭がクラクラする。でもそんなことは関係無い！

「マハード、頼むよ」

「任せておけ」

「装備魔法“魔術の呪文書”をマハードに装備」

ATK / 3200

「マハード！“ローズ・テンタクルス”を攻撃！
ブラック・マジック！」

十六夜アキ LP 3000

少しはマハードの思いが届いたか？

「私のターン」

届いてないのか？

「チューナーモンスター“夜薔薇の騎士”を召喚」

ATK/1000

チューナー。

「このカードが召喚に成功した時、レベル4以下の植物族モンスターを特殊召喚できる。“ロードポイズン”を特殊召喚」

ATK/1500

合計レベル7、来る！あのドラゴンが！

「レベル4“ロードポイズン”に、レベル3“夜薔薇の騎士”をチューニング！」

“夜薔薇の騎士”が光の輪となり“ロードポイズン”が星となっていく。

「冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の花よ、開け！シンクロ召喚！現れよ、“ブラック・ローズ・ドラゴン”！！」

ATK/2400

「ゴオオオー！」

“ブラック・ローズ・ドラゴン”が現れ、突風が巻き起こる。

「うっ！」

痣が疼き出した！あのドラゴンに反応してる！？

「このカードがシンクロ召喚に成功した時、場上に存在する全てのカードを破壊することができる。ブラック・ローズ・ガイル！」

花びらが散り、更なる突風が巻き起こる。

マズイ、このままじゃ。

そう思った時、オレの腕に変化が起きた。

疼きが収まる代わりに痣が浮かび上がり、輝き出した。赤くじゃなく、青く。

「目覚めたか、リヨウの力が」

オレの力？マハードは何か知ってる？

「リヨウ、ここは私に任せろ」

マハードはそう言うと、杖を振り、何かの呪文を唱え始めた。

次の瞬間、辺り一帯が眩い光に包まれた。

目を開けた時には場上のカードは無かった。マハードも。

観客に被害は出てないみたいだね。

マハードがみんなを守ってくれた？

「何をした？」

「オレにもよく解らない」

「まさか、お前もサイコデュエリスト？」

「違うと思う。マハードが自分の身を犠牲にしてみんなを守ってくれた。オレはそう思うよ」

でも今までこんなことは無かった。

それにオレの力って一体？この青く輝いてる痣が関係してるのかな？

「デュエルの続きをしよう。

“魔術の呪文書”が墓地へ送られた時、1000ポイントライフを回復するよ」

リヨウ LP 1700

「カードを2枚伏せて、ターンを終了」

十六夜さんが少し動揺してる。

今なら話ができるかもしれないね。

「いいぞー！魔女を倒せー！」

「魔女を吊るし上げるー！」

観客。

「そつよ。私は魔女」

十六夜さん。

オレは一時的に場を離れてMCに歩み寄り、マイクを取った。

「皆さん、少し黙ってほしい」

「」

静かになったね。
自分でもこんなことをしてることに驚いてるよ。

「確かに十六夜さんは不思議な力を持つてる。その力で人を傷付けたのも事実。」

「だけど、そんな不思議な力を持っている人が少なからず存在するのも事実なんだ。」

「十六夜さんは歴とした一人の人間。そのことを忘れないでほしい。それなのに彼女に魔女や化け物って言うのはただの暴言だよ」

それだけ言っつてMCにマイクを返し、場に戻った。

「ごめんね、待たせて」

「お前、どうしてそこまで」

「別に。オレは悲しんだり苦しんだりしてる人を放っておけないだけだよ」

今なら話ができそうだね。

「十六夜さん、聞いてほしいことがあるんだ」

「？」

「その力で人を傷付けることを止めてほしい。正確には、その力をコントロールする方法を身につけてほしい」

「なぜそんなことを。やはりお前も」

「オレにサイコの力は無いよ。ただ、十六夜さんと同じ力を持つ人を知ってる」

「っ!？」

「その人は同じように人を傷付けてた。同じように苦しんでた。でも変わることができた。十六夜さんも同じように変わることができる筈だよ」

「私には」

「その人は自分の力をコントロールできてる。

十六夜さん、あなたにもできる筈だ。今の苦しみ、それに伴う喜びから解放されるんだ。

そうすれば、これから楽しいことだってたくさんある筈だよ」

「私には無理だ」

「 どうして? 」

「 忌むべき印 」

赤き龍の痣か 。

「これは人を超えてしまった怪物に刻印された印 。

抑え切れない破壊への思いに、私は生きていてはいけなさとさえ思った。

そんな時、デイヴァインの言葉で救われた」

デイヴァイン?あの人かな?

「ただ生きているだけでいい。もう考えない」

「だめだよ、考えて!自分自身で!」

「どうでもいい。デイヴァインが考えてくれる」

「逃げちゃだめだ」

「どうしようもない。私にはどうすることもできない」

「できるよ!その喜びを否定するあなたがいるから。もう一度やり直すことができる筈だよ。

あなた自身が救われていいんだよ」

「うるさい!私はデイヴァインに言われた通り、お前に勝つ!お前のターンだ!」

届かせてみせる。この思い。このデュエルで。
アリスの時と同じように！

「オレのターン」

今の十六夜さんの場にモンスターはいない。

「マジシャンズ・ヴァルキリア”を召喚」

ATK / 1600

「プレイヤーにダイレクトアタック！」

「罨カード“ウィキッド・リポーン”。800ポイントのライフを
コストに、墓地のシンクロモンスターを攻撃表示する。“ブラック・
ローズ・ドラゴン”を特殊召喚！」

ATK / 2400

十六夜アキ LP 2200

「バトルを中断するよ。」

カードを2枚伏せてターンエンド」

「私のターン、バトル！」

来るか？

「マジシャンズ・ヴァルキリア”を攻撃！ブラック・ローズ・フ
レア！」

「罨カード“ガード・ブロック”！戦闘ダメージを0にして、カードを1枚ドロウする」

ごめん、“マジシャンズ・ヴァルキリア”。

「ボタニティ・ガール”を守備表示で召喚」

DEF / 1100

「ターンを終了」

「オレのターン」

頼むよ。

「“特攻のマジシャン”を特殊召喚」

ATK / 100

「このカードは相手場上にのみモンスターが存在する時、特殊召喚できる。このカードが特殊召喚に成功した時、場上の魔法・罨カードを1枚破壊できる。対象に選ぶのは“ウィキッド・リボーン”！」

「くっ！」

「これにより、“ブラック・ローズ・ドラゴン”も破壊される！」

これでいける！

「特攻のマジシャン”をリリースして“ブラックマジシャンガール”をアドバンス召喚！」

ATK/2000

「リョウ、頭の怪我」

「大丈夫」

今は十六夜さんだ！

「頼むよ、マナ」

「うん！」

「“ブラックマジシャンガール”は墓地に存在する“ブラックマジシャン”1体につき、攻撃力が300ポイントアップする！」

ATK/2300

「マナ、“ボタニティ・ガール”を攻撃！」

「畏れ動“棘の壁”！植物族モンスターが攻撃対象になった時、相手場上の攻撃表示モンスターを全て破壊する！」

棘がマナに向かって伸びていく。
そうはさせない！

「消えた！？」

「罨カード“亜空間物質転送装置”！このターンのエンドフェイズまでマナをゲームから除外したんだよ」

「くっ！」

「オレはカードを2枚伏せる。そしてこのターンのエンドフェイズ、マナは場に戻る」

「リョウ、助かったよ」

「うん。ターン終了」

「私のターン」

十六夜さんの場にはモンスターが1体だけ。このまま押し切る！

「くっ、ターン終了」

「オレのターン、バトル！“ボタニティ・ガール”を攻撃！」

それだけじゃないよ。

「この瞬間、罨発動！“メテオ・レイン”！この効果で、貫通ダメージを与える！」

マナ、頼む！ブラック・バーニング！」

「くっ！」

十六夜アキ LP 1000

「ポタニティ・ガール」が墓地に送られた時、守備力1000以下の植物族モンスターを手札に加える。「フェニキシアン・シード」を手札に加える」

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

「私のターン、手札から“偽りの種”発動！“フェニキシアン・シード”を特殊召喚」

ATK/800

「フェニキシアン・シード”の効果、このカードを墓地に送るときで“フェニキシアン・クラスター・アマリリス”を特殊召喚！」

ATK/2200

あのカードはマズイね。

マナの方が攻撃力は上だけど、あのカードの効果は。

「まだだ！“ローンファイア・ブロッサム”を召喚！」

ATK/500

「このカードは植物族モンスターをリリースすることで、デッキから植物族モンスターを特殊召喚できる。

“ローンファイア・ブロッサム”をリリース！“椿姫ティタニアル”を特殊召喚！」

ATK/2800

攻撃力2800。
マズイかな。

「椿姫テイタニアル”で“ブラックマジシャンガール”を攻撃！」
また凄い衝撃が巻き起こる。
でもマナは破壊させない！

「畏発動！“和睦の使者”！このターン、戦闘ダメージは0になり、オレのモンスターは破壊されない！」

使者たちが壁となり、マナを守ってくれた。巻き起こった衝撃も止めてくれた。

「なら、“フェニキシアン・クラスター・アマリリス”で“ブラックマジシャンガール”を攻撃！」

やっぱりそつくるか。

「マナ、迎撃」

十六夜アキ LP 900

「フェニキシアン・クラスター・アマリリス”が破壊された時、相手プレイヤーに800ポイントのダメージを与える！」

「うあっ！」

リヨウ LP 900

でもそれ程の衝撃じゃない。観客に被害は出てないみたいだね。

「ふふっ」

やっぱり、無自覚のうちに楽しんでる。

「このターンのエンドフェイズ、墓地に存在する植物族モンスター1体をゲームから除外することで、“フェニキアン・クラスター・アマリリス”は墓地から守備表示で復活する」

DEF / 0

「ターン終了」

お互いにライフは900。オレの場の方が状況が悪い。

オレの手札は1枚。このドローであのカードを引くことができれば。

(みんな、応えてくれ。
十六夜さんを救う為に。
これ以上苦しませない為に！)

「オレのターン、ドロー！」

引いたカードは、みんな、ありがとう。

「手札から“高等儀式術”を発動！」

「儀式魔法!？」

「手札の儀式モンスターとレベルの合計が同じになるようにデッキ

から通常モンスターを墓地に送ることで、儀式モンスターを特殊召喚する！

デッキから“ホーリー・エルフ”と“魔法剣士ネオ”を墓地へ送り、“マジシャン・オブ・ブラックカオス”を特殊召喚！”

ATK / 2800

これで終わりにする。。
悲しみも苦しきも全部。。

「マジシャン・オブ・ブラックカオス”！“椿姫ティタニアル”を攻撃！”

「攻撃力は互格、相打ちにするつもりか？」

違うよ。。

「墓地より“スキル・サクセサー”発動！墓地のこのカードを除外して、“マジシャン・オブ・ブラックカオス”の攻撃力を800ポイントアップする！”

ATK / 3600

「そんな、いつの間に？」

「オレが“THEトリッキー”の効果で墓地に送ったカード、それがこのカードだよ。

“椿姫ティタニアル”を破壊！”

十六夜アキ LP 100

「くっ、まだ私のライフは残る！」

「このターンで終わりだよ。」

マナ、「フェニキシアン・クラスター・アマリリス”を攻撃！」

「なにっ!?!」

「ブラック・バーニング！」

「くっ、だが“フェニキシアン・クラスター・アマリリス”が破壊されたことにより、800ポイントのダメージ！」

「くっっ！」

リョウ LP 100

「リョウ！」

心配して声をかけてくれるマナと、心配そうに見つめてくれるブラックカオス。

「このくらいなら大丈夫だよ」

心配はあんまりかけたくない。

「くっ！」

十六夜さんの痣が輝き出した。オレの痣はさっきからずっと輝いてる。

「楽しくないんでしょ？」

「うるさい！」

「苦しいんじゃない？」

「くっ、何故この痣が疼く!？」

「どうして楽しくない!？」

「どうして苦しい!？」

「あなた自身が変わる時が来たんだよ」

「っ!？」

オレにできる最後の言葉。

オレの思い、アリスの思い、カードたちの思い、全部言葉に込めて。

「あなたを苦しめてきた、破壊への喜び。

その痛みも苦しみも全部、理解してあげることができないかもしれない。でもその痛みや苦しみを分け合うことはできる筈だよ。

あなたと分け合ってくれる人はきつという。もしいなくても、オレが、いやオレたちが分け合うから」

「」

「考えを預けちゃだめだ。自分で考えて!」

「魔女の私が何を考える　?　ダイヴァインが私を導いて、愛して

くればそれで」

「違う！あなたは魔女じゃない！十六夜アキという一人の人間だ！人間だから、自分自身を愛することだってできる筈だよ」

「そんなことができれば。できないから！苦しんでるんじゃないか！」

オレたちの思いは彼女に、いや、

「次の私のターン、お前を必ず倒す！次のターンで終わりだ！お前もやはり、忌むべき敵」

「だったら、どうして泣いてるんだ？」

「っ！？」

涙が流れてる。オレたちの思い、少しは伝わったんだね。

「オレのバトルフェイズはまだ終わってないよ。畏カード“正統なる血統”。墓地の通常モンスター1体を特殊召喚する。」

オレの場に戻れ、マハード！」

ATK/2500

「これで終わりだな」

「うん。」

マハード、頼むよ」

「わかった」

「ダイレクトアタック！ブラック・マジック！」

十六夜アキ LP O

「なぜ」

やっぱり泣いてる。

「十六夜さん！」

その時だった。

「ざまあみろー、魔女ー！」

「魔女の巢に帰れー！」

観客。

お前たちは！

「よくやったね、アキ。

さあ、一緒に戻ろう」

ディヴァインって人？

来てたのか。

「勝者決定〜！リヨウ〜！」

十六夜さん

。

第十話：思いを込めて（後書き）

十六夜さんとのデュエルはどうだったでしょうか。

あんなに長く書いたのは初めてなので所々間違っているかもしれない
せん。

その時は是非、ご指摘して頂けたら嬉しいです。

第十一話：シグナー（前書き）

今回はほぼ説明です。

謎めいたこともかなり出てきます。

それではどうぞ。

第十一話：シグナー

十六夜さんがディヴァインって人に背中を押されながら去っていく。

痣の輝きが収まり始めた。

痣は残ったままだね。

この痣の模様は　杖？

これがシグナーの痣？だとしたらオレもシグナー？

そこまで考えた時、視界が不意にぼやけた。

そういえば、頭から血が流れてるんだったね。

「リョウ、大丈夫か！？」

マハード　、残念ながら大丈夫じゃなさそうだよ。

誰か来る　？

警備の人が　？

side　アリス

リョウが担架で運ばれていった。多分、医務室だよな？早く行ってあげないと。

「医務室に行こうよ！」

「そうだな。リョウが心配だ」

みんなも心配してくれてる。
私たちは急いで医務室に向かった。

「みんな！」

医務室の前まで来ると、次のデュエルがあるのに遊星さんが来てくれた。

私たちが医務室に入ると、頭に包帯を巻かれているリョウウがいた。

「リョウウ！」

私は思わず声をかけた。

「みんな。ごめんね、心配かけて」

「本当だよ！」

「大丈夫なの？」

「大丈夫だよ、龍亞、龍可。頭を強く打って血が出てたけど、それ程の傷じゃないらしいから。ですよね？」

「はい。傷自体は大したことはありません。他にも傷付いてはいませんが、大事はありませんよ」

医務室の先生が答えてくれた。

良かった。

大したことはないんだね。

「はい。終わりましたよ。包帯は取らないで下さいね」

「わかりました。ありがとうございます」

「では、私はこれで」

医務室の先生が出て行った。

でも私はまだ心配だよ。

「リヨウ、本当に大丈夫？無理してない？」

「平気だよ、アリス。大したことないから」

そう言うから安心していいんだよね？

「こんな時に済まないが、リヨウ。お前にも痣が無かったか？」

確かにリヨウの痣が輝いてた。それも他の人と違って青く。

「もしかしてリヨウ君もシグナーなのかい！？」

「解りません。」

それより遊星、そろそろ始まるんじゃない？

さつきからMCの声が聞こえてるからね。そろそろ始まるのかな？

「この話は後にしない？遊星の応援をした方がいいよ。オレはまだここにいないかならないけど」

リヨウは怪我人だからね。
それなら、

「リヨウ、私も残るよ」

当然だよな？

「わかった。オレはデュエルに行く。話はその後にしてよ」

「オレたちは客席に戻ろう。リヨウ、無理はするなよ」

「はい。遊星、がんばってね」

「ああ」

みんなが医務室から出て行った。

「無茶した　？」

「うん　。少ししたかもしれない　」

「無茶しなくちゃいけなかったんだね　？」

「そうだね　。」

それでも思いを伝えるのが精一杯だった。まだ完全に救えた訳じゃないと思う　「

「そう　」

それだけ十六夜さんの心の闇は深かったってことだね。

「アリス。デュエルが始まったみたいだよ」

モニターが映し出されてる。ボマーさんのDホイール、大きいね。あんなに大きいDホイールがあるんだ。

「ボマーさんのDホイールでかいなあ。あんなの初めて見るよ」

リヨウも知らなかったみたいだね。

遊星さん、がんばって！

side out

このデュエルがどうなるか気になるけど、一つ確かめておかなくちゃならないことがある。

「マハード、マナ。ちょっといい？」

アリスがいるけど、アリスはカードの精霊のこと知ってるから問題無いよね？

「私のことは気にしなくていいよ」

感づいたのかな？

ごめんね、アリス。

「ああ。傷は大丈夫か？」

「大丈夫だよ。みんなは？」

「私も大丈夫だ」

「私はリヨウが守ってくれたから大丈夫だよ。傷付いてた子もいるけど、直ぐに治るから心配しないでって」

みんなは大丈夫みたいだね。

じゃあ、本題に移ろうかな。

「マハード、オレの痣が青く輝いた時にこう言ったね。オレの力が目覚めた、と。どういう意味？」

「その痣はシグナーの証だ。但し赤き龍の痣ではない。つまり、通常のシグナーではないということだ」

訳解ないんだけど。

「えーっと、古代の伝記に記されてる一般的なシグナーが赤き龍の痣のある人のこと。」

リヨウは古代には詳しく記されてない例外的な青き痣を持つシグナー。

で合ってますよね、お師匠様？」

「ああ。他にも赤き痣ではないシグナーが存在する。そう遠くない日に現れるだろう。敵としてな」

「敵!?!?どういう」

「これ以上は敵に関しては話さない方がいい。ますます混乱するだけだ」

「必ず現れると思うよ。」

そう

「マナー！」

「ひゃー！ごめんなさい、お師匠様」

気になるな。

「ただ、今のマハードの声を聞く限りじゃ止めておいた方がいいかもね。」

「シグナーって一体何なのかな？二人とも」

「このことを聞かないと始まらない気がする。」

「5000年に渡る闘いに関するのがシグナーだ。この世界を賭けての闘い」

「この世界を賭けて？」

「赤き龍のシグナーと今言ってた敵との闘いだよ。5000年毎にシグナーと敵が対立して争ってた。この世界を賭けてね」

「5000年前の対立ではシグナーが勝ち、敵を封印した、とされている。」

「私たちも実際に見た訳ではないからな」

「そついう運命を背負ってるのがシグナーだよ。5体のドラゴンが共に闘ってるよ」

ドラゴンか。

そついえばシグナーはみんなドラゴンと闘ってる。

「じゃあその闘いは」

「そつ、今が5000年の周期だ。もうすぐ闘いが始まる」

「負けたらどうなる？」

「今でいう地獄って光景になると思うよ」

「オレにできることは？」

「私たちにも解らない。青き痣を持つシグナーの伝記はほとんど無い。

だが、時が来ればその痣が導いてくれる筈だ」

「解った。」

ありがとう」

オレの痣が導いてくれるか。

「話は終わったかな？大分深刻な話だったみたいだけど」

「アリス。」

ううん、何でもないよ」

アリスは無関係の筈だよな？
巻き込みたくはない。

ん？

アリスが近付いてオレの頬を、

ぎゅ〜！

「ひあつ！」

「嘘だよな？何でもない訳ないよね？」

「アリス、痛い！頬っぺた引っ張らないで！」

「じゃあ話す？話すなら放してあげる」

「え〜つと」

この後話せば良かったと後悔したよ。

「むう、えいつ！」

「へ？あはははは！アリス、それは！あはははは！」

「こちよこちよこちよこちよ。」

「あはははは！だめだって！あはははは！」

3分後。

「ちょっとやり過ぎたかな？」

「はあ、はあ、ちょっとじゃないよ。オレがそれに弱いって知ってるのに」

「じゃあ話してくれるよね？」

「」

「そう、それなら」

「ごめん！話すから許して！」

「もう、解ってるんだよ？深刻な話だったってことくらい。」

私が傍にいるのに自分からマハードたちに声をかけるんだから。リヨウの表情からだって解るよ」

全部お見通しか。
仕方ないね。

オレは大体のことをアリスに話した。シグナーの鬨いを除いて。

「それじゃあ、リヨウもある意味シグナーなんだね」

「そついうことになるね」

「隠さずに話してくれればいいのに。隠し事は無しだよ？」

「はは、解ったよ」

コンコン。

「「？」」

ノック？一体誰が？

「どうぞ」

side アリス

「失礼」

誰だろう？リヨウの知り合いかな？

「あなたがディヴァインさんですか？」

「そうだ」

ディヴァイン？確か十六夜さんが言ってたような……。

「君の怪我は大丈夫かい？」

「大丈夫ですよ」

「それは良かった。」

ところでリヨウ君、君に聞きたいことがあるんだが」

聞きたいこと？

クイ、クイ

リヨウが私の服を引っ張ってる？

(どうしたの?)

(平静を装って。絶対に動揺しちゃだめだよ)

(?うん)

「何ですか?」

「君はサイコデュエルの力を知っているね?」

「知っています」

「君にその力は?」

「ありません」

「君はアキとのデュエル中、アキの力を完全に打ち破った。あの力は何かな?」

「オレにもよく解りません」

「ふむ、では質問を変えよう。」

君はデュエル中、アキに同じ力を持っている人を知っていると言ったね。その人は誰かな?」

それが原因なんだね。リヨウに言われて無かったら動揺しちゃった

かもしれない。

「聞いてどうするんですか？」

「君はアルカディアムーブメントを知っているか？」

「いえ、知らないです」

「アルカディアムーブメントはサイコデュエルの研究をしていてね。是非、その人にも協力してほしいんだ」

サイコデュエルの研究？そんなの初めて聞いたような……。

「すいませんが、オレからその人の名前をお教えすることはできません」

「何故？」

「オレはその人の許可無しにその人の過去を話しました。人の過去は勝手に話して良いものではありません。それなのにオレは話しました。名前まで出すことはできません」

「成る程。君の言う通りだ」

リョウはこの人のことをかなり警戒してるね。一見気の良さそうな人に見えるけど。

「ところで、アキが君と少し話をしたがつている。話をしてやってくれないか？」

「構いませんよ」

「そうか。」

「アキ、入って来なさい」

十六夜さんがゆっくりと扉から姿を現した。

やっぱり気の毒ではあるようだね。自分が傷付けちゃったから。

「」

「アキと話をしてきてくれ」

「解りました」

リヨウと十六夜さんが出て行った。

「さて、君はリヨウ君の友達かな？」

「はい。アリス・ルシエです」

「君はサイコの手を持っていてる人を知っているか？」

「いえ、知りません」

「そうか、失礼したね」

デイヴァインさんも出て行った。何だっただんだろっ？
後でリヨウに聞いてみようかな。

side out

「話って何かな？十六夜さん」

「怪我は？」

「大したことはないよ」

「そうか」

心配して様子を見に来たのかな？

「お前には恐らく、秘められた力があるわ」

あの時のことか。

「お前と、お前が知っているというサイコデュエリストと一緒にアルカディアムーブメントに来ない？」

「どうして？」

「あそこは社会や親に見捨てられた者が集う場所」

「オレたちは誰かに見捨てられた覚えはないよ」

「いずれ人々はお前の力を恐れるようになる。放っておけば、お前も私と同じ道を歩むかもしれないわ。私はそう、させたくないだけ」

「その心配は無いよ」

「何故？」

「オレたちは今を一生懸命生きてるから。」

他人と触れ合い、支え合いながら、自分と向かい合って生きてる。

例え力を恐れられたとしても、その力を受け入れてくれる人がいる。

一人じゃないから強く生きていけるんだよ」

「」

「十六夜さん、逃げちゃだめだよ。自分と向き合って。」

そうすれば今よりもっと強く生きてる筈だよ」

「」

オレの思いが届いてる。もう少しで、

「話は済んだか？」

デイヴァインさん。

もう来たか。

「はい」

「そうか。では、リョウ君。またいずれ」

「はい。」

十六夜さん、もう少し自分自身で考えてほしい。オレも力になるから」

「
」

答えてくれないか。

二人が歩いて行く。

オレもアリスの所に戻らないとね。

医務室に戻ると、

「あ、リヨウ。どうだった？」

「もう少し　かな」

「そう。。」

あ、ありがとね、リヨウ。護ってくれて」

「何が？」

「リヨウに言われてなかったら、どうなってたか解らないよ」

デイヴァインさんのことだね。

「でもリヨウ。あの人はそれ程悪い人なの？」

「断言はできないけどね。何か嫌な感じがするから」

「そうなんだ。リヨウは昔からそうというのは鋭いからね」

マハードとマナが教えてくれるんだけどね。二人は物凄くこういうことには敏感だからね。

「遂に決着〜！」

遊星のデュエルが終わったみたいだね。

「準決勝を見事勝ち抜いたのは、不動遊星〜！！」

遊星が勝ったみたいだね。

「遊星、見事だった。私の完敗だ」

「!?!」

ボマーさんのマイク越しの声？

「私は負けた。だが、私の使命はまだ終わってはいない！」

使命　？

「私はこの大会に優勝し、その式典でゴドウィンが行った事実を公にするつもりだった。

だが、それも今や叶わぬ夢！

ならば、この場で復讐を果たすまで！」

復讐　？

「これを見る！無に帰した我が村を！」

「なに　あれ　？」

アリスが驚くのも無理は無いね。
モニターに映し出されたのは完全な焼け野原。
とても村には。

「これが私の村だ！私の故郷だ！」

「っ!?!」

あれが　ボマーさんの故郷。

「ゴドウィンは赤き龍を復活させようと、私の村を実験材料にした！
そして私の村は、村人全員が行方不明となった！」

それじゃあボマーさんは一人で。

「遊星、ジャック、そしてリョウ！奴を信じるな！」

ゴドウィンに赤き龍を渡してはならない！」

そう言い終わると、ボマーさんはDホイールに乗り、加速した。
スピードを上げていく。

そしてコースの傾斜を利用して、飛んだ。真っ直ぐゴドウィン長官
に向かっていく。

その時、遊星が同じようにコースの傾斜を利用して飛び、ボマーさ
んに衝突した。

遊星がボマーさんを止めたんだね。

「ああああー!!」

ボマーさんの叫びが木霊した。

第十一話：シグナー（後書き）

今回は短かったですね。

説明ばかりでしたし。

次回は久しぶりのライディングデュエルです。

間違いのご指摘等がありましたら、遠慮なくして下さい。

第十二話：ファイナル（前書き）

いよいよ決勝戦です。

ジャックへの挑戦券を賭けた遊星とのデュエルです。

第十二話：ファイナル

ポマーさんがセキュリティに連行されていった後、遊星が戻ってきた。

「遊星」

「ポマーのことはあまり気にしない方がいい。奴なら大丈夫だ」

「そうだね」

考えても仕方ないか。
ポマーさんならきつと無事に出てくるだろうからね。

「二人とも、これから決勝だね。どっちもがんばって」

「うん」

「ああ」

デュエルは多分、ライディングデュエルだね。遊星との初めてのデュエル。楽しみだなあ。

「アリス。済まないが、リョウと話したい」

話？痣のことかな？

「うん。じゃあ私は客席に戻るね」

「済まない」

察してくれたのかな？

「リヨウ、無茶しちゃだめだよ？」

「わかってるよ」

アリスが客席に戻っていった。

「頭の怪我は大丈夫か？」

「問題ないよ。痛みも無いしね」

「そうか。十六夜とのデュエル、大変だったな」

「まあ ね」

「お前の思いは、きっと彼女に伝わっている筈だ」

オレもそう思う。もう少し背中を押してあげれば、きっと。

「一ついいか？」

「何？」

「十六夜とのデュエル中の話で出てきた人物。
サイコの手で人を傷付けていたという人物、それはアリスのことか
？」

「 どうして? 」

「 朝、ここに来る途中で十六夜の話になった時、アリスの表情は少しずつだが曇っていった。他にも気になる反応があったからな 」

鋭いなあ、遊星は 。
遊星なら話しても大丈夫かな 。

「 そうだよ。よく解ったね 」

「 リヨウ、お前が助けたのか? 」

「 十六夜さんと同じだったからね。同じように語りかけて、思いを伝えて助けたよ 」

「 そうか。これでお前とアリスがやけにサイコデュエリストに詳しいことにも合点がいった 」

ホントに鋭いね。そこまで気にしてたんだ。

「 だからアリスに席を外してもらったんだね 」

「 それもある 」

「 とりあえず、このことは秘密にしておいてほしい。
アリスはもうこのことを受け入れてるけど、気分の良いことじゃないだろうから 」

「 解っている 」

良かった。

遊星はさっきからDホイールの調整をしてる。ボマーさんと正面から衝突したからだろうね。

「Dホイール、大丈夫？」

「問題ない。大丈夫だ」

遊星は機械とか詳しくそうだからね。

「リョウ、痣のことを聞いていいか？」

「いいよ」

「リョウの痣は普通の痣と違うようだが？」

「この痣は青いからね。」

マハードとマナの話だと、古代の伝説にはそういう青い痣を持った例外的なシグナーがいたらしいよ」

「そうか。」

他に二人は何と言っていたんだ？」

「信じられないかもしれないけど、5000年に一度、シグナーはある敵と世界を賭けて争ってるらしい」

「ある敵？」

「二人は敵のことを詳しく教えてくれなかったよ。」

ただ、もうすぐ現れるらしい」

「何故今になってそんな争いが？」

「5000年の周期、それが今らしいよ。
だからシグナーが現れた」

「その話は信用できるのか？」

「マハードとマナはこんな嘘はつかないと思う」

「そうだな」

「二人はいずれ痣が導いてくれるって言ってたよ」

「そうか」

遊星が自分の右腕を見る。

やっぱり遊星にも痣が？

「何はともあれ、これからデュエルなんだ。
楽しいデュエルをしよう！遊星！」

「ああ！」

オレたちは堅く握手をした。

side 遊星

この痣は確実にオレたちを繋いでいる。オレ、ジャック、龍可、十六夜、そしてリヨウ。

これからリヨウとのデュエルだが、あのカード無しで勝てるのか？

リヨウのカードとの絆。オレと同等か、それ以上の絆だろう。

やはり、全力で行くしかない。あのカードを使わなくてはいけない気がする。オレたちの絆を示す為にも。

そして、この闘いの果てに、ジャック、お前がいる。

side out

「いよいよ決勝戦だ〜！偉大なるキングに拝謁し、下剋上のチャンスを得るのはどっちだ〜!？」

始まるね。

オレは自分のDホイール、通称ソニックに乗って準備を進める。

「楽しそうだな」

「マハード。うん、楽しいよ。デュエルは楽しむものでしょ？」

「遊星さんはきつと強いよ？」

「そうだね。だけど、マナ？そんな弱腰じゃ簡単にやられるよ？」

「解ってるよ。私たちはリヨウと一緒に絶対には負けないよ」

「その通りだな」

オレにはみんながついてる。
負けないよ、遊星！

「一人目のチャレンジャー！
黒魔術師使い、リョウウ！」

「さあ、行くよ！二人とも」

オレは勢いよくソニックに乗って飛び出した。
この風はやっぱり気持ち良いね。

「さあ、リョウウは今大会初めてのライディングデュエル！青いDホイールに乗って登場だー！」

Dホイールの紹介されるのって初めてだなあ。気にしたことなかったよ。

「そして、サテライトの流れ星、不動遊星！」

遊星もDホイールに乗って飛び出してきた。遊星のDホイールは問題なさそうだね。

オレたちはスタート位置に着いた。

「さあ、始めようか」

「負けないよ、遊星」

「スピードワールド、セット！オン！」

ソニックがデュエルモードになり、スピードワールドが展開される。

「魔法がかかった場では、魔法カードの使用は禁止だ。だが、Dホ
イラーにとって、スピードこそ魔法！」

ライディングデュエルはこのスピードワールドの発生により、始ま
るのだ！」

ブザー音が鳴る。

「ライディングデュエル、アクセラレーション！」

カウントが始まる。

5、4、3、2、1、

「スタート！」

二人同時に飛び出した。

「デュエル！！！」

「オレのターン、ドロー！」

さあ来い、遊星！

「“シールド・ウィング”を守備表示で召喚」

DEF/900

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

「オレのターン」

SP 1

「魔導騎士 デイフェンダー」を召喚」

ATK / 1600

「このカードが召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを1つ置く。」

バトル、「シールド・ウイング」を攻撃！」

よし、破壊 できてない!?

「シールド・ウイング」は1ターンに2度まで、戦闘では破壊されない」

そういう効果か 。
仕方ないね。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「オレのターン」

SP 2

「ジャンク・シンクロン」を召喚」

ATK / 1300

「レベル2の“シールド・ウィング”に、レベル3の“ジャンク・シンクロン”をチューニング！」

早速来るね。遊星もやる気満々だ。

「集いし星が、新たな力を呼び起こす。光差す道となれ！
シンクロ召喚！いでよ、“ジャンク・ウォリアー”！」

ATK / 2300

「魔導騎士 ディフェンダー”を攻撃！
スクラップ・フィスト！」

「くっ！」

リョウ LP 3300

耐えてくれ、“魔導騎士 ディフェンダー”！

「魔導騎士 ディフェンダー”は場上の魔力カウンターを1つ取り除くことで、魔法使い族モンスターの破壊を無効にできる！」

「ターンエンドだ」

「オレのターン」

SP 3

「魔導騎士 ディフェンダー」をリリース、「カオス・マジシャン」をアドバンス召喚！」

ATK/2400

これで「ジャンク・ウォリアー」の攻撃力を上回ったね。

「カオス・マジシャン」で「ジャンク・ウォリアー」を攻撃！」

「くっ、「ジャンク・ウォリアー」！」

不動遊星 LP 3900

「オレはこれでターンエンド」

遊星の場にモンスターはいない。少しだけ、オレが有利かな。

「オレのターン」

SP 4

「手札のモンスター1体を墓地に送り、「クイック・シンクロン」を特殊召喚」

ATK/700

「さらに「チューニング・サポーター」を召喚」

ATK/1000

一気に2体のモンスターを。

「レベル1の“チューニング・サポーター”に、レベル5の“クイツク・シンクロン”をチューニング！」

またシンクロ召喚か。

「集いし絆が、更なる力を紡ぎ出す。光差す道となれ！シンクロ召喚！轟け、“ターボ・ウォリアー”！」

ATK/2500

“カオス・マジシャン”より攻撃力が上がる。

「チューニング・サポーター”がシンクロ素材となった時、カードを1枚ドローする。

“ターボ・ウォリアー”で“カオス・マジシャン”を攻撃！」

リヨウ LP 3200

「ターンエンドだ」

「流石だよ、遊星。あの状況を1ターンでひっくり返されるとは思ってたかったよ」

「ふ。カードを信じれば、必ず応えてくれる。お前の絆を見せてみる、リヨウ」

「言われなくても。オレのターン」

SP 5

でも今は耐え時かな。

「見習い魔術師”を守備表示で召喚」

DEF / 800

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

「オレのターン」

SP 6

「ターボ・ウォリアー”、“見習い魔術師”を攻撃！」

ここからだね。

頼むよ、“見習い魔術師”。

「このカードが戦闘で破壊された時、デッキからレベル2以下の魔法使い族モンスターを特殊召喚できる。“執念深き老魔術師”を特殊召喚」

DEF / 600

「ターンエンドだ」

「オレのターン」

よし、いける！

「“執念深き老魔術師”は召喚された次のターン、相手モンスター1体を破壊する効果を持つてるよ」

「だが“ターボ・ウォリアー”はレベル6以下のモンスターの効果を受けない」

いや、受けてもらおうよ。

「畏カード“幻想の呪縛”！相手モンスター1体の攻撃力を500ポイント下げ、モンスター効果を無効にする」

「なにっ!?!」

「よって“執念深き老魔術師”の効果は有効！」

「“ターボ・ウォリアー”！」

“ターボ・ウォリアー”が呪い殺される。

これで遊星の場にモンスターはいない！

「一気にいくよ、遊星！」

“執念深き老魔術師”をリリースして、“ブラックマジシャンガール”をアドバンス召喚！」

ATK/2000

「ブラックマジシャンガール”。マナだったか。」

「もう一人紹介するよ。」

「畏発動!“賢者の秘石”！マナが場上に存在する時、デッキからブラックマジシャン”を特殊召喚する！
来い、マハード！」

ATK/2500

「マハード。これがリョウの絆か。」

「そうだよ。マハード、マナ、頼むよ。」

「ああ」

「うん」

「バトル！マハードとマナでダイレクトアタック！」

これが通ればオレの勝ちだけど。

「永続罠“強制終了”！自分場のカードを1枚墓地に送り、バトルフェイズを終了させる。“強制終了”をリリース！」

やっぱり防がれたか。流石に抜け目が無いね。

「カードを1枚伏せて、ターン終了」

強いな。
カードとの連携で“ターボ・ウォリアー”を破壊し、エースモンスターの“ブラックマジシャン”と“ブラックマジシヤンガール”を召喚した。

今のターン、“強制終了”が無ければ、オレは負けていた。
だが、デュエルはこれからだ！

「オレのターン」

SP 8

良い応えだ、カードたちよ！

「手札より“SP エンジェルバトン”発動！SPカウンターが2つ以上ある時、デッキから2枚ドロし、その後手札を1枚墓地へ送る」

よし、頼むぞ、カードたちよ。

「チューナーモンスター“デブリ・ドラゴン”を召喚！」

ATK / 1000

「“デブリ・ドラゴン”は召喚に成功した時、自分の墓地から、攻撃力500以下のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚できる。

“シールド・ウイング”を特殊召喚！」

ATK / 0

「さらに“ボルト・ヘッジホッグ”は自分場上にチューナーが存在する場合、墓地から特殊召喚することができる！」

ATK/800

「モンスターが3体。

レベル8のシンクロ召喚だね」

そう、このカードはオレにとって。

「リヨウ。オレがこれから召喚するモンスターはオレのデッキのエリアだ。

お前の絆の象徴がマハードとマナなら、オレの絆の象徴はこのカードだ」

「遊星はこの大会でレベル8のシンクロ召喚をしたことは無いよね。つまり、今大会では初めて使うカードかな？」

「ああ。お前が相手だからこそ、オレはこのカードを使わなくてはいけない気がした」

「光栄だなあ。

やろう、遊星！オレたちの最高のデュエルを！お互いに全力だ！」

「初めからそのつもりだ！」

オレに力を、貸してくれ！

「レベル2“シールド・ウィング”と、レベル2“ボルト・ヘッジホッグ”に、レベル4“デブリ・ドラゴン”をチューニング！」

“デブリ・ドラゴン”が光の輪となり、“シールド・ウィング”と
“ボルト・ヘッジホッグ”が星となっていく。

「集いし願いが、新たに輝く星となる。光差す道となれ！」

そして全てが重なり合う。

「シンクロ召喚！」

重なった星が散り、無数の星となる。

散った星が、やがて1体のモンスターを造りあげていく。

「飛翔せよ！ “スターダスト・ドラゴン”！」

ATK/2500

これがオレの絆の象徴！

“スターダスト・ドラゴン”！

side out

オレの前に降り立った白銀のドラゴン。

「綺麗だ」

つい言葉に出てしまった。それくらいオレは見とれてる。

「リヨウ、見とれている暇はない」

マハードの言う通りだけど、羽ばたく度に星が散る姿は幻想的だなあ。

「ほら、リヨウ。しっかりして」

マハードとマナが困ってるみたいだからそろそろ切り換えよう。

これが遊星のエース、“スターダスト・ドラゴン”！

「うっ！」

何！？

痣が青く輝き出した！？

「くっ！」

遊星！？

遊星の右腕に痣が浮かび、赤く輝いてる。

「やっぱり遊星もシグナーだったんだ」

「ああ。今まで痣は無かったがな」

ということとは“スターダスト・ドラゴン”はシグナーの龍か。

「リヨウの痣も青く輝いているな」

「そっだね。」

でも遊星、考えるのは後にしよう。今はこのデュエルを楽しもう！

「臨むところだ！」

痣はいずれオレたちを導いてくれる。今考えても答えは出ない。今はこのデュエルを楽しむだけ！

「ふっ、本当に楽しそうだな」

「こんなリヨウは久しぶりだね」

「まあね。血が騒ぐっていうのかな。ウズウズする」

「デュエリストの本能だな。リヨウのデュエリストとしての本能が私たちにも伝わってくる」

「そうなんだ」

「うん。リヨウの楽しいって気持ちや勝ちたいって気持ちが強く伝わってくるよ」

遊星は強い。だからこそ勝ちたいのかもしれない。

お互いに自分のカードを、自分で紡ぎあげた絆を信じて闘ってる。多分お互いが心のどこかで認め合ってる。

力の優劣とかじゃなくて、勝ち負けをハッキリさせたい訳じゃない。

ただ純粹に勝ちたい！

こんな気持ちになったのは初めてだなあ。

これがライバルってやつかな？

何にしても、絶対に負けたくない！
それでも楽しくて仕方ない！

「遊星！ここからが本当の勝負だ！」

第十二話：ファイナル（後書き）

間違いなく長くなったので途中で終わりにしました。

次で遊星とのデュエルに決着です。

それから、そろそろオリカとオリキャラの紹介を閑話として入れています。と思います。

それでは、グッチーでした。

第1回：Bの世界（前書き）

番外編です。

ラジオ風にやってみたつもりですが、勿論初めてなので全然上手く
いってません。

どうか温かい目で見てください。

第1回：Bの世界

はい、いよいよ始まりました。第1回：Bの世界！

それでは早速メインパーソナリティを呼びましょう！

リ「ねえ、どこから突っ込めばいいかわからないくらい突っ込み所が満載なんだけど」

ア「あはは、そうだね」

お二人ともつれないですね。何か問題でも？

リ「無い訳無いでしょ！？まずこの題名は何！？」

何って水〇奈々さんのラジオの、

リ「もういいよ。オレが悪かったよ」

何？スマ〇ヤンの方がよかったですか？

リ「そういう問題じゃ、いやもういいよ。疲れるから」

ア「それじゃあ、どうしてラジオなの？」

理由は簡単ですよ。貴女のモデルがフェ〇トで、フ〇イトのCVが水樹〇々さんだからです。

リ「これじゃ、伏せ字の意味無いよ」

ア「そうなんだ。じゃあ私たちがメインパーソナリティっていうのは？」

オリカなんかが増えて、まとめなくちゃいけないからラジオ風に二人に紹介して貰おうと思っちゃってね。

ア「解ったよ。がんばろうね、リョウ」

リ「アリスが何でこんなにやる気なのか全く解らないよ」

私もたまに参加しますね。

ア「それでは第1回：Bの世界！」

リ・ア「スタートです」

リ「改めまして、こんにちは！メインパーソナリティのリョウです」

ア「同じくメインパーソナリティのアリス・ルシエです」

やる気になってるじゃないですか。

リ「やるとなった以上はやるよ」

成る程。頼もしいですね。

では、進めてください。

リ「わかったよ。このラジオでは、本編の裏話やオリキャラ、オリ

カ「紹介をするよ」

ア「それから、毎回ゲストをお招きするからね。それじゃあ、早速ゲストを呼んでみようかな」

リ「記念すべき第1回のゲストはオレの大事な精霊たち、マハードとマナだよ。では、どうぞ」

マハ「失礼させて頂く。マハードだ」

マナ「どうもこんにちは。マナです」

リ「よく来たね。二人とも」

ア「あれ？私は見えないんじゃないかな？見えるけど、ここなら何でもありですから。」

ア「そんな理由なんだ」

マハ「アリス殿、お初にお目にかかります」

ア「うん。よろしくね、マハード」

マナ「私もはじめましてだね。アリスちゃん？かな」

ア「ふふっ、そうだね」

リ「挨拶は済んだみたいだね。アリス、二人のことはこれからよろしくね」

ア「うん！」

さて、挨拶が済んだところで早速次に行ってください。

リ「はいはい。それでは最初のコーナー！」

リ・ア『グッチーの部屋』

リ「このコーナーではオリキャラやオリカの紹介をするよ」

ア「このラジオのメインコーナーになるかもしれないね」

そうですね。紹介がメインで企画した訳ですし。

リ「まずはオリキャラからかな」

マナ「最初は？」

ア「リヨウからだよ。それではどうぞ」

名前：リヨウ

年齢：16歳

身長：168cm

体重：60kg

好きな物：アリス、アリスの料理、優しい人

嫌いな物：甘い物（アリスの作った物でも駄目）、暴力全般

魔法使い族中心のデッキを使用。幼い頃からマハードとマナがいた

からそれ以外のデッキはほぼ使わない。
Dホイルの名前はソニック。個人的にはライディングデュエルの方が好き。

基本的に真面目な性格。

困っている人がいれば、何があろうと力になるうとする。

リ「こんなところかな」

それでは説明をお願いします。

マナ「好きな物にアリスちゃんが入ってるね」

リ・ア「／／」

マハ「料理もだな」

どうしました？ 教えてください。（ニヤニヤ）

リ「ニヤついて言うなよ。」

良いだろ別に。好きなんだから ／／

ア「リヨウ／／」

はいはい、二人の世界に入るのには後にして下さいね。ラジオ中ですよ。

リ・ア「はい／／」

マナ「リヨウは甘い物が嫌いなんだね」

リ「うん。あれだけはどんな物でも駄目で」

ア「リヨウはこれ以外は好き嫌い無く食べるんだけどね」

マハ「リヨウにも苦手な物はあるということだな」

次はデツキですね。

マナ「リヨウはいつでも私たちと一緒にだよ」

リ「そうだね」

ア「いつからなの？私を助けてくれた時にはもついたよね？」

リ「5歳くらいの時かな？」

マハ「正確には5歳と6ヶ月だ」

ア「細かいんだね」

マナ「あの頃は小さくて可愛かったね」

Dホイールの方についてみましょう。

ア「Dホイールの名前がソニックっていうのは」

リ「作者に聞いてみようか」

勿論セガで有名な。

リ「だろうね。聞いたオレが悪かったよ」

マナ「どういうこと？」

マハ「気にしてやるな」

ア「リヨウのDホイールは青一色だからね。そのイメージだと思うよ」

その通りですよ。

ちなみにDホイールの形は遊星のDホイールを青にしたもののイメージです。

マハ「リヨウはライディングデュエルの方が好きなんだな」

リ「うん。あの風が気持ち良いからね」

ア「次は性格かな。リヨウは確かに真面目だね。アカデミアでも優秀だし」

リ「ありがとう」

マナ「それに困ってる人は誰でも助けるのもリヨウらしいね」

リ「困ってる人や苦しんでる人は放っておけないからね」

まるでどこかの流浪人ですね。

マハ「それは言って良いのか？」

リ「大体書いてるのはあなただよ」

それ程でもないですよ？

リ「全く褒めてないよ！」

ア「きりがないね」

マナ「次にいこうよ」

リ「それもそうだね。」

次はアリスの紹介だよ」

名前：アリス・ルシエ

年齢：16歳

身長：165cm

体重：？

好きな物：リョウ、カレー、友達

嫌いな物：過去の自分、しつこい人

綺麗な長い金髪が特徴。

真面目で優しい性格。誰にでも優しい。時々過保護な一面もある。
年下には甘い。

ア「私のは割りと少ないね」

まだデュエルしてないですから。

リ「デッキについても詳しく紹介できない訳だね」

ア「私も早くデュエルしたいなあ」

マナ「だって。グッチーさん、がんばってね」

頑張ります。

マハ「体重が？になっていますね」

ア「女の子だから」

リ「触れてはいけない所だよ、マハード」

マハ「そのようだ」

マナ「アリスちゃんの好きな物にもリヨウが入ってるね」

ア「そこはもう気にしないでノ」

リ「そうしてほしいよ、マナ」

また二人の世界に入られても困ります。

マナ「は〜い」

マハ「カレーというのはどんな理由でしょうか？」

ア「単純にカレーが大好きだよ。特に野菜カレーは大好き！」

マハ「これは」

察しが良いですね。

勿論〇樹奈々関連です。

マハ「やはりか」

リ「あんまり気にしない方がいいよ、マハード。疲れるだけだから」

マハ「そうだな」

リ「嫌いな物は、過去の自分か」

ア「うん」

マナ「人生には汚点も必要だと思うよ」

マハ「気にしないというのはできないでしょうが、気にし過ぎるのもいけませんよ」

リ「アリス、一人で背負い込む必要は無いよ。オレたちがついてるから」

ア「ありがとう」

これ以上暗くなる前に次にいきましょう。

マナ「特徴は長い金髪だね。綺麗な髪の毛だね」

ア「ありがとう。髪の毛の手入れには気をつけてるから」

さすがモデルがフェイトなだけありますね。

リ「性格が真面目で優しいのは、言うまでもないかな」

マハ「時々過保護で年下に甘いとありますが？」

ア「そんなことないよ？」

リ「そうかな？少なくとも龍亞と龍可には甘いと思うよ」

マナ「優しさがそうさせるんだよ、きっと」

さすがフェイトです。

リ「次はマハードの紹介だよ」

名前：マハード

好きな物：リョウ、仲間たち

嫌いな物：カードを傷付ける人

“ブラックマジシャン”の精霊。マナの師匠。

几帳面で細かいことにも目が行き届く。どんなことでも博識。

ア「やっぱりリョウが好きなんだね」

マハ「私たちの大切なパートナーですから」

リ「仲間たちってあるけどこれは？」

マハ「共に闘う仲間だからな」

マナ「お師匠様はみんなのなかでもリーダー的存在なんだよ」

リ「なんか解る気がする。

嫌いな物は、カードを傷付ける人が」

ア「それは酷いよ」

マハ「私たちのことを考えてほしい、ということですね」

カードを大切に扱う、大事なことですよ。

リ「マハードは確かに細かいことまで行き届くね。そのことで何度も助けてもらったし」

ア「そうなんだ」

マナ「お師匠様は博識ですね」

マハ「物事を知るといふことは大切なことだ」

マナ「は〜い」

ア「次はマナだよ」

名前：マナ

好きな物：リヨウ、おしゃべり

嫌いな物：うるさい人、束縛

“ブラックマジシャンガール”の精霊。マハードの弟子。

明るく仲間思いで優しい性格。若干集中力が足りなくなる時がある。

リヨウはここにいる全員に好かれていますね。

リ「そうみたいだね」

マナ「リヨウだから良いと思うよ」

ア「おしゃべりが好きなんだ」

マハ「暇さえあれば、誰かと話しているな」

マナ「おしゃべりは楽しいですよ」

リ「オレと話す時も楽しそうに話してるね」

ア「よく話してるの？」

マナ「うん！」

ア「ふうん」

リ「あれ？何か嫌な予感がしたんだけど？」

ア「気のせいだよ」

マハ「嫌いな物はうるさい人か。マナ、お前自身ではないのか？」

マナ「お師匠様、酷いですよ」

マナは“ブラックマジシャンガール”の精霊。言わずと知れた遊戯王界のアイドル的存在ですね。

ア「マナは可愛いからね」

マナ「ありがと」

リ「マハードとマナは遊戯王界で有名だからね」

ア「明るく優しい性格か。なんだかそんな気がするよ」

マハ「集中力が足りなくなる時があるのは事実だ。魔術が乱れる時がある」

マナ「お師匠様が厳しいんですよ」

マハ「お前の力が足りないだけだ」

リ「マナは修行がんばってね」

マナ「はい」

マハ「それで良い」

それでは次はオリカの紹介に行ってみましょう。

“特攻のマジシャン”

レベル 1

ATK / 100

DEF / 100

種族 / 魔法使い族

属性 / 闇

効果モンスター

このカードは相手場にのみモンスターが存在する場合、手札から特殊召喚することができる。

このカードが攻撃表示で特殊召喚に成功した時、場上に存在する魔法・罨カードを1枚破壊する。

ア「リヨウが状況を変える為によく使うカードだね」

リ「“特攻のマジシャン”から、マナ、そしてマハードに繋げるパターンは多いね」

マハ「更に魔法・罨カードを破壊できるからな」

その代わりに、アドバンス召喚以外には繋ぎにくいですね。シンクロ召喚にはレベル1ですから繋ぎにくいですしいい。

マナ「このくらいかな。次のカードだよ」

“賢者の秘石”

通常罨カード

自分場上に“ブラックマジシャンガール”が存在する時、手札又はデッキから“ブラックマジシャン”を特殊召喚する。

リ「“賢者の宝石”と同じ効果だよね？」

ライディングデュエル用のカードです。ライディングデュエルは魔法カードが使えませんから。

マハ「私たちは魔法が中心だからな」

無理にでも罨の補助カードを加えないと、デッキが回りません。

マナ「そうだね」

ア「次のカードだよ」

“超・魔・導・破”

通常罨カード

自分場上に“ブラックマジシャン”が存在する時、相手場上の魔法・罨カードを全て破壊する。

リ「“超・魔・導”みたいだね」

みたいじゃないですよ。“超・魔・導”を畏カードにただけです。

マハ「さっきからだが、それは良いのか？」

さあ？

マハ「」

リ「辞めた方がいいよ、マハード。どうせ無駄だろうし」

ア「グッチーさんはそんな人みたいだしね」

その通りです。

マナ「やれやれだね」

リ「とりあえずオリカの紹介はここで終わりかな」

ア「次のコーナーだよ」

リ・ア『賢者の部屋』

リ「このコーナーは本編の裏話をするコーナーかな」

マナ「どうして賢者の部屋なの？」

賢者は賢いから秘密がいろいろと多そうじゃないですか。

マハ「成る程。たまには考えているんだな」

初めてまともに褒められました。

リ「最初の質問にいきたいけど、初回だから質問無いよ？」

なので何か質問があればどうぞ。

ア「じゃあ私から。マハードはどうして私だけ敬語なの？」

マハ「私たちの主であるリヨウの御友人、ましてアリス殿は恋人です。無礼はできません」

ア「でもマナは敬語じゃないよね？」

それに主のリヨウに敬語使っていないよ？」

マナ「私、敬語苦手」

それはよく解ります。

マハ「やれやれ。敬語くらいきちんと使え。失礼だろう」

リ「オレは単純に敬語で話されるのが嫌だったただけだよ。最初はマナでさえ敬語使ってたんだよ？」

マナ「だからリヨウが敬語じゃなくていいって言うてくれた時は嬉しかったな」

リ「マハードは馴れるまで時間がかかったね」

マハ「主に敬語ではないというのはどうもな。もう馴れたが」

ア「それなら私にも敬語じゃなくて普通に話してほしいな。だめかな？」

マナ「ほら。みんな敬語が嫌なんですよ、お師匠様」

マハ「そういう問題ではない。しかしよろしいのですか？」

ア「うん。私もリヨウと同じように話して」

リ「アリスがそう言ってるんだからいいんじゃないか？」

マハ「解りました。いや、解ったか。アリス殿」

ア「私のことはアリスで構わないよ」

マハ「やはり馴れないな。アリス」

ア「ふふふ、それで良いんだと思うよ」

さて、そろそろ時間ですよ。

リ「そうみたいだね。今日のところはここまでかな」

ア「今回は初回だからコーナーはあんまりできなかつたけど、これから増えるかもね。」

お便り等を送ってくれと嬉しいな」

いつ頃放送できるかは全く解りませんが。

マナ「そこはがんばろうよ、グッチーさん」

頑張ります。ですが、あくまでこのラジオは閑話なので頻繁に放送できる訳ではありません。

マハ「あくまで本編が主だということだな」

では告知の方をよろしくお願いします。

リ「それじゃあ、ゲストの二人に頼もうかな」

マナ「は〜い。これからリスナーの皆さんにはお便りを応募するよ」

マハ「普通のお便りは勿論、コーナーに対するお便りも是非送ってくれ」

マナ「グッチーの部屋では本編のオリジナルの紹介だから、オリジナルの感想を送ってね」

マハ「賢者の部屋では本編に対する質問を送ってくれ」

マナ「他にもこんなコーナーをしてほしいなんてお便りもあれば送ってね」

マハ「こんなところだ」

マナ「上手くできたかな？」

リ「ありがとう。二人とも」

ア「それではリスナーの皆さんのお便りを待ってるね」

リ「それでは今日はここまでだね。

お送りはリヨウと」

ア「アリス・ルシエと」

マハ「マハードと」

マナ「マナでした」

リ「次回の放送も」

ア「楽しみにね」

『バイバイ』

マハ「私はバイバイ等とは言わんのだがな」

第1回：Bの世界（後書き）

次回はいつになるか全く解らないのは事実なので御了承ください。

他のコーナーについてはお便り次第で考えたいと思います。

どんなことでも送って頂けると嬉しいです。

それでは、グッチーでした。

第十三話：激闘決着（前書き）

長くなりましたが、遊星とのデュエル終に決着です。

オリカもまた出しています。

デュエルでの間違いがあれば、ご指摘お願いします。

第十三話：激闘決着

「遊星！ここからが本当の勝負だ！」

「いくぞ！“スターダスト・ドラゴン”！マナを」

「永続罠カード“ガリトラップ ピクシーの輪”！自分場に攻撃表示モンスターが2体以上存在する時、攻撃力の一番低いモンスターを攻撃できない！」

マナはそう簡単にやらせないよ、遊星！」

「オレはカードを2枚伏せ、ターンエンド」

「オレのターン」

S P 9

「オレもS Pスペルを使うよ。」

“S P エンジェルバトン”を発動！カードを2枚ドロし、1枚を墓地へ送る。

手札から“見習い魔女”を召喚！」

A T K / 5 5 0

「このカードが場上に存在する限り、闇属性モンスターの攻撃力は500ポイントアップする！」

「マハードの攻撃力が“スターダスト”を上回ったか」

オレが“スターダスト・ドラゴン”を倒すか、遊星がマハードとマナを倒すか。これが勝敗の鍵となることは間違いないね。

「マハード!“スターダスト・ドラゴン”を攻撃！
ブラック・マジック！」

「畏発動!“くず鉄のかかし”！相手モンスター1体の攻撃を無効にし、その後再びセットされる」

防がれたか。

遊星も同じように考えてるみたいだね。

「カードを1枚伏せて、ターン終了」

「オレのターンだ」

SP 10

悪いけど、何もさせないよ！

「畏カード“ブラックナイフ”発動！マハードが場に存在する時、相手モンスター1体を破壊する！」

「“スターダスト”の効果発動！カードを破壊する効果を“スターダスト・ドラゴン”をリリースすることで無効にし、破壊する！
ヴィクテム・サンクチュアリ！」

ナイフが掻き消され、“スターダスト・ドラゴン”が星となって消えていく。

本当に綺麗だなあ。

でも“スターダスト・ドラゴン”をリリースしたら、結局倒したところと同じ意味になるんじゃない？

「シールド・ウォリアー」を守備表示で召喚」

DEF / 1600

「そしてこのターンのエンドフェイズ、自らの効果でリリースされた“スターダスト・ドラゴン”は復活する！」

凄い効果だね。

自らを犠牲にしても、何かを護るモンスターか。

オレはまだ遊星のことをよく知らないけど、きっと遊星もこのモンスターと同じなんだろうね。

「流石、絆の象徴のモンスターだね。遊星がそれ程信頼するのもよく解るよ」

「ああ。大切な絆だ」

本当に凄い。

でも、オレとみんなの絆は負けない。

「オレのターン」

SP 11

「マナ、“シールド・ウォリアー”を攻撃！
ブラック・バーニング！」

“シールド・ウォリアー”は破壊したけど、“くず鉄のかかし”があるからこれ以上の攻撃はできないね。

「カードを3枚伏せて、ターンエンド」

「オレのターン」

SP 1 2

SPカウンターが互いに最大の12になった。そろそろ攻めてくるかな。

「オレはカードを2枚伏せ、ターンエンド」

攻めてこないか。

お互いのリバーズカードが3枚と4枚。ここからかな。

「オレのターン」

オレから攻めさせてもらおうよ！

「リバーズカード“砂塵の大竜巻”！“くず鉄のかかし”を破壊する！」

「くっ！」

“スターダスト・ドラゴン”の効果は使わないね。使えば、遊星の

場ががら空きになるしね。

「バトル！マハード、“スターダスト・ドラゴン”を攻撃！
ブラック・マジック！」

「ぐっ！」

不動遊星 LP 3400

よし、通った！これで ！？

「破壊できてない！？」

「墓地の“シールド・ウォリアー”をゲームから除外することで、
戦闘での破壊を無効にする」

なるほどね。

また上手く防がれたか。

「さらに畏発動！」

「っ！？」

このタイミングで畏！？

「クロス・ライ・カウンター”！相手ターン中にバトルダメージ
を受けた時、そのダメージの2倍を攻撃力に加え、ダメージを与え
たモンスターと再びバトルさせる！」

ATK / 3500

「なにつ!?!」

「スターダスト・ドラゴン」! 響け! シューティング・ソニック
!」

「ぐっつ!」

「マハード!」

リヨウ LP 2700

マハードは破壊させない!

「墓地より“魔術の守護者”の効果発動! このカードをゲームから除外して、魔法使い族モンスターの破壊を無効にする」

「“エンジェルバトン”の時か」

「そうだよ。これでマハードは無事だ。ターンエンド」

「オレのターン。」

手札より“SP シルバー・コントレイル”! SPカウンターが5以上ある時、風属性モンスター1体の攻撃力を1000ポイントアップする!」

ATK/3500

マズイ!

また“スターダスト・ドラゴン”の攻撃力がマハードを上回った!

「マハードに攻撃だ！
響け！シューティング・ソニック！」

「くっ！済まない、リヨウ！」

リヨウ LP 2200

とうとうマハードが破壊されたか。
でもオレの場にはまだマナがいる！

「“デッド・ガードナー”を守備表示で召喚し、ターン終了だ」

DEF / 1900

「オレのターン。」

マハードが墓地にいることにより、マナの攻撃力は300ポイントアップしている」

ATK / 2800

「マナ、“スターダスト・ドラゴン”を攻撃！」

「まだまだ！罨カード“シューティング・スター”を発動！“スターダスト・ドラゴン”が場に存在する時、カードを1枚破壊する！オレが対象に選ぶのは、マナ！」

「させない！罨カード“亜空間物質転送装置”！マナをエンドフェイズまで除外する！」

マナが消えていく。

これでマナは護れたけど、これ以上の攻撃はできないね。

「手札から“SP トリックドロー”を発動！SPカウンターを3つ取り除き、ライフを500ポイント払うことで、手札を1枚墓地に送り、カードを2枚ドローできる」

リヨウ LP 1700

SP 9

「この効果はライフを倍払うことで、遊星も使うことができるよ。どうする？」

「オレは効果を使う」

不動遊星 LP 2400

SP 9

「カードを2枚伏せる。

エンドフェイズ、マナは場に戻るよ」

「オレのターン」

SP 10

「“マックス・ウォリアー”を召喚」

ATK / 1800

よし、掛かった！

「この瞬間、畏発動！“黒魔族復活の棺”！」

「なにっ!?!」

「相手モンスターが召喚に成功した時、そのモンスターと自分場のモンスター1体を墓地に送り、墓地の魔法使い族モンスターを復活させる！」

“マックス・ウォリアー”と“見習い魔女”が棺に飲み込まれる。

そしてゆっくりと棺が開く。

「復活せよ！マハード！」

棺の中でマハードが目を覚まし、オレの場に戻ってきた。

マハードとマナが再び“スターダスト・ドラゴン”と向かい合う。

その時、突如異変が起きた。

モンスターが向かい合ってる間に赤い落雷が突然落ちてきた。

「マハード！マナ！」

「大丈夫だ」

「心配ないよ」

良かった、二人は無事か。

でも一体何が起きたんだ！？

「これは ？」

落ちてきた赤い落雷が形を変えていく。

「あれは 赤き龍 ？」

その時、遊星がDホイールを寄せてきた。

「リヨウ！これ以上は危険だ！デュエルを続ければ、何が起きるか解らない！」

「 遊星は何か知ってるんだね？ 」

「オレにも詳しくは解らない。だが、あの赤き龍を以前見たことがある」

見たことがある！？

「マハードとマナなら何か知っているかもしれない。聞いてみてくれ」

遊星の言う通りだね。二人なら何か知ってるかもしれない。

「悪いが私たちには、あの龍が伝説のシグナーの赤き龍ということくらいしか解らない」

「遊星。二人は知らないそうだよ。」

解るのはあれがシグナーの赤き龍だつてことくらいらしい」

「シグナーの赤き龍」

突然赤き龍が咆哮をあげる。同時に突風が巻き起こる。

「何だ　これは？」

痣が疼く。

今までにないくらい強く　！

再び赤き龍が咆哮をあげる。今度は辺りが光に包まれた。

目を開くと、オレたちは暗い空間の中に走る一本の光の道を駆けていた。

「これは？」

状況が全く解らない。周囲を見回しても何も解らない。

「マハード、マナ。これは？」

「恐らく赤き龍が連れてきた全く別の空間」

「私たちにも何が何だか全く解らなくて」

マハードとマナも解らないか。

もう一度周囲を見回してみた。

今度は何かあるね。赤い何かか4つ飛んでる。あれは？

「遊星、あれ見てみて」

オレは赤い何かを指差した。

「あれは　、ジャック！龍可！」

「それに十六夜さんと　アリス!？」

今初めて知ったけど、キングにも赤き龍の痣がある。
でもアリスには無い筈。

オレも含めてみんなの痣は輝いてるけど、アリスには無い。だって
らアリスは何故ここに　？

「遊星、これは一体どういうことだ？何が起きている？」

「解らない。解るのは赤き龍がオレたちをここに連れてきたという
ことだけだ」

キングの問いに遊星が答える。
確かに今解ることはそれだけだね　。

「アリス、その中はどうなってるか解る？」

「ごめん。ただ二人について行くだけで何も　」

とりあえず危害は無さそうだね。

話してる間に建物が見えてきた。

祭壇かな？

「何なの、あれ？」

祭壇の中には、拝んでる人たちがいた。

「あれは　ゴドウィンが語った星の民」

星の民？キングは何か知ってる？

ん？あの人たちの腕　、

「オレたちと　同じ痣」

確かに同じ痣で赤く輝いてる。

青く輝いてる人はいないみたいだね　。

「シグナー　。オレたちは遙かな時を超え、その因縁で結ばれて
いるとでもいうのか　？」

それは解らない。

ただ5000年毎にシグナーの争いが起きてるのも事実　。

祭壇を抜けると、次は二つの都市が見えてきた。

「あれは、ネオドミノシティとサテライト」

そうみたいだね。

でもサテライトで異変が起きてる。

「蜘蛛の地上絵　。
サテライトに蜘蛛の地上絵が　」

地上絵といえはナスカの地上絵だけだ　。
その地上絵を中心にサテライトが　。

「サテライトが減んでいく　。何だこれは？」

「まさか　、これが未来　？」

「なら、サテライトは滅びる運命にあるというのか！？そんな馬鹿な！」

サテライト出身の遊星はオレたちより思うところがあるんだろうね。
常に冷静な遊星が声を荒くしてる　。

「遊星、デュエルを続行しろ！」

「何！？」

「解らんのか！？貴様等のデュエルがオレたちをここへ運んだ。

ならば、ここから出るには貴様等のデュエルを完結させるしかない

「！」

「「「

オレたちは顔を見合わせる。

確かにキングの言う通りなのかもしれない。

「マハード、マナ　」

「残念ながら奴の言う通りだ。デュエルを終わらせることが、ここから出る一番の方法だろう」

「ただ、デュエルで何が起きるかは」

解らない　か。

「リヨウ、二人は何と言っている？」

「キングの言う通りみたいだよ。デュエルで何が起きるかまでは解らないけど」

どうすればいい　？

「リヨウ、デュエルの決着を着けなくていいのか？」

遊星の言う通り、デュエルの決着を着けたい。
ただこのままデュエルを続けてもし何か起きたら　。

「リヨウ、オレたちは仲間だ。何が起きてもそれだけは変わらない」

「っ！！」

遊星の言う通りだ。

どのみちここから出なくちゃいけないし、オレたちは何が起きても変わらない。
何が起きても　。

「解ったよ。デュエルを続けよう、遊星！」

何が起きてても恨みっこ無しだ！」

「ふっ、いいだろう」

「デュエル続行」

「オレのターンはまだ終わっていない。カードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

「オレのターン」

SP 11

勝負だ、遊星！

「墓地より“スキル・サクセサー”発動！マハードの攻撃力を800ポイントアップ！」

ATK / 3300

「マハード、“スターダスト・ドラゴン”を攻撃！
ブラック・マジック！」

マハードが攻撃を仕掛けると、“デッド・ガードナー”が横から割って入ってきた。

「“デッド・ガードナー”は攻撃対象を自分に変更させる効果を持つモンスターだ！」

マハードが“デッド・ガードナー”を破壊した。

「“デッド・ガードナー”が破壊された時、相手モンスター1体の攻撃力を1000ポイントダウンさせる」

ATK / 2300

マハードの攻撃力が“スターダスト・ドラゴン”を下回ったね。

「さらに罠カード“反撃の狼煙”！このカードは相手モンスターの攻撃によって自分のモンスターが破壊された時、自分場上のモンスター1体の攻撃力を500ポイントアップし、攻撃したモンスターと強制的にバトルさせる！」

ATK / 3000

「くっ！」

「バトル！響け！シューティング・ソニック！」

「うあああっ！」

リヨウ LP 1000

何？今の衝撃は　！？

「リヨウ！」

アリスの心配そうな声が聞こえる。

「どうした！？」

「本物の衝撃が身体中に走ったよ」

「これがシグナー同士の本当の闘いなのか？」

「大丈夫か！？リョウ！」

「大丈夫だよ。オレも、マハードもね！」

「なにっ！？」

マハードはまだ終わってない！

「畏カード“魔術の呪い”！魔法使い族モンスターが戦闘で破壊させる時、その破壊を無効にして、バトルを行った相手モンスターを破壊する！」

「“スターダスト”の効果発動！“スターダスト”をリリースして、破壊効果を無効にする！」

当然そうするよね。

これで遊星の場にモンスターはいない。オレにはマナの攻撃が残ってる。

だけど、

「来い！リョウ！お互い全力、恨みは無しだ！」

その通りだね。

迷ってたら遊星に失礼だ。

「マナ！」

「いいんだね？」

「頼む！」

「うん。解った」

「マナでダイレクトアタック！
ブラック・バーニング！」

「ぐあああっ！」

不動遊星 LP 400

SP 9

「遊星！」

「くっ、大丈夫だ」

良かった。

でもまだデュエルは終わってない。

「オレはカードを1枚伏せるよ」

「このターンのエンドフェイズ、“スターダスト・ドラゴン”は自身の効果で場に戻る！」

「暴発動！“メテオ・ストリーム”！場のモンスターがリリースされ、再び特殊召喚された時、1000ポイントのダメージを与える！」

仕掛けてきたね！

「リヨウ！」

心配しないで、アリス。オレはまだ負けてない！

「カウンター罠“地獄の扉越し銃”！自分が受ける効果ダメージを無効にして、相手にその数値分のダメージを与える！」

これで終わりだ！

「罠発動！“白銀のバリア シルバーフォース”！相手の罠によるダメージを無効にし、相手場の表側表示の魔法・罠カードを全て破壊する！」

「くっ！」

流星、遊星。

ここまで読んでたんだ。

「オレの、ターン！」

リヨウ S P 12

不動遊星 S P 10

勝負を掛けにくる筈。何を引いた！？

「“S P スピードエネルギー”！S P カウンターが2つ以上ある時、S P カウンター1つにつき、200ポイント攻撃力がアップする！」

遊星のSPカウンターは10。

ATK/4500

「攻撃力4500」

「これで終わりだ！これがオレたちの絆だ！

“スターダスト・ドラゴン”！

響け！シューティング・ソニック！」

“スターダスト・ドラゴン”から放たれた攻撃がマハードに向かう。

「ぐあああつ！」

ごめん、マハード。

でもまだデュエルは続いている！まだ終わっていない！

「なにっ！？ライフが減ってないだど！？」

「畏カード“ガード・ブロック”を発動したよ。戦闘ダメージを0にして、カードを1枚ドロウする」

これで何とか次に繋いだ。そしてこのカードならまだ勝機はある！

「オレのターン！」

不動遊星 SP 11

「何故ドローしない？」

「オレはこのターンのドローフェイズをスキップしたよ。このSP
スペルの発動の為にね！」

このカードで勝敗が決まる。

「SP ソウル・サークル」！SPカウンターが12個で、マナ
が場に存在する時発動することができる！」

このカードは発動がかなり難しい。だけど、

「マナ、頼む！」

「眠れる同胞よ、力を貸して」

みんな 力を貸してくれ！

「このカードは墓地に存在する仲間の数だけ、カードをドローでき
る！」

墓地に眠るモンスターは6体！よってカードを6枚ドロー！」

オレが引いたカードは きたね。

「SP 魔術の杯」！SPカウンターが5個以上ある時、墓地の
魔法使い族モンスター1体をゲームから除外して、そのモンスター
の攻撃力分、マナの攻撃力をアップさせる！
マハードは死して尚、オレと共にある！マハードをゲームから除外
！」

「マナよ、後は任せる」

「はい。お師匠様の力、譲り受けます！」

ATK / 4500

「攻撃力4500か」

「これが本当の終幕だ！」

マナ!“スターダスト・ドラゴン”に攻撃！
ブラック・バーニング・マジック！”

不動遊星 LP 0

第十三話：激闘決着（後書き）

対遊星はこれで終わりです。

勝たせるのはどうかと思いましたが、結局勝たせてしまいました。

後二話程でフォーチュン・カップが終わります。

これからもよろしく願います。

第十四話：遊星とジャック（前書き）

今回はデュエル無しです。それに短いです。

説明が不十分になっているところは省かせて戴きました。“スターダスト・ドラゴン”のこととかラリーののこととか。

それではどうぞ。

第十四話：遊星とジャック

オレはソニックを急停止させた。

「はあ、はあ、はあ」

遊星は　！？

「くっ、はあ、はあ、はあ」

良かった、無事だね。

デュエルの終了と一緒に現実世界に戻ってきたみたいだね。

ソリッドビジョンのマナと“スターダスト・ドラゴン”が残ってる。

「リョウ、大丈夫？」

「うん、大丈夫」

「遊星さんも大丈夫みたいだね。最後の攻撃ね、少し力を抜いておいたからそれ程の衝撃じゃなかった筈だよ」

気を使ってくれたんだ。

「ありがとう、マナ。」

みんなにゆっくり休むように言っておいて」

「解った。リョウもだよ？」

「うん。マナもね」

ソリッドビジョンが消えていく。

あれがシグナーの力。

「リヨウ」

「遊星！大丈夫！？」

「ああ。大丈夫だ。」

オレの負けだな」

いろいろあったけど、遊星に勝ったんだね。

場内が騒然としてきた。何が起こったか解らないだろうから無理もないね。

「つ、終に決着く！勝者、リヨウく！」

場内がまた一段と騒ぎ出してきた。

「リヨウ、これ以上騒ぎが大きくなる前に戻ろう」

「解ったよ」

そうした方がいだろうね。

オレたちは場内から出て、客席にいるみんなの所に合流した。

「みんな、早くこの会場から出るんだ」

「しかし、リヨウ君のキングとのデュエルがあるんじゃない」

「この会場にはシグナーが5人いる。これ以上シグナー同士が闘うのは危険だ。」

「今までのデュエルを見てても解るだろ？」

「でも」

「アリスは不満そうだね。」

「ゴドウィンとはオレが話を着ける。」

「みんなは早くここから離れる」

「そう言っつて遊星は去って行く。」

「あんちゃんがああ言っつてるんだ。わしらは退散するとしよつ。ちと、残念だがのう」

「みんなが立ち上がる。」

「リヨウ」

「オレのことなら心配しないで、アリス」

「でも、今のデュエルだつてかなり危険なデュエルで」

「大丈夫だよ。心配ない」

「私、どうしてあそこにいたのかな？」

それが一番の疑問だね。
アリスに痣は無いのに。

「とにかく、ここから離れた方がいいよ」

「うん」

説得成功かな。

「じゃあオレは遊星の後を追うよ。
みんな、気を付けてね」

オレは遊星の後を追った。

ゴドウィン長官のいる部屋までの通路で警備の人が倒れてた。
遊星がやったんだろうなあ。
遊星って実は物凄く強い!?

部屋に着くと、既に遊星はいた。もう話してるみたいだね。

「ゴドウィン、お前はオレの友を拉致し、大会出場を強要してきた」

え？

今何て言った？

「教えてもらおうか。そこまでする本当の理由は何だ？」

「ちょっと待って！」

オレは割って入った。

「リョウ！？どうしてここに！？」

今はそんなことは問題じゃない。

「今の話は本当ですか？ゴドウィン長官！」

「

「答えてください！」

「 本当のことです」

そんなことが許されるのか？治安維持局長官がこんなこととしていいのか？

いや、許されない筈だ！

「落ち着くんだ、リョウ」

「 遊星。でも！」

「オレもゴドウィンを許すことはできない。だが、ここで争っても何も解決しない」

「 解ったよ」

遊星の言うことは正しい。

オレはイマイチ納得できなかったけど、当事者の遊星がそう言うならオレは我慢しなくちゃいけないね。

「話を戻すぞ。本当の目的は何だ？」

「オレが代わりに答えてやる」

キング？

この話し方、そして遊星とのデュエル中のあの会話から考えて、やっぱり二人は知り合いなんだね。

「本当の理由は、これだ！」

キングが自分の赤き龍の痣を見せる。

「この男の目的は、この痣を持つ者をシティに集めること。

その為に、オレもキングと煽られ、利用されてきた」

「デュエルキングとして君臨するのは、ジャック、貴方の望みではなかったですか？」

「本当に求められるキングならな」

なんだか深そうな話だね。

ジャックさんはキングとして長い間君臨してるけど、自分で満足するようなキングじゃなかったんだ。

「二年前、オレはお前の誘いによってシティに来た。だが、本当の目的はオレではなく、遊星、お前だ」

「
」
今の話から考えても、やっぱりキングはトップス出身じゃなくてサテライト出身。
遊星の身近にいたんだ。

「この男はオレを引つ張り出せば、お前もサテライトから追ってくる。そう考えた」

「それは妙ですね。彼に用があるなら、直接誘えば良いだけのこと」
「遊星は決してお前たちの誘いにのる相手ではない！
だからお前たちはオレを利用し、サテライトから抜け出すきっかけを与えた」

遊星とキングがここにいるのは全部ゴドウィン長官の引き金。
それもシグナーをシティに集める為に。
ゴドウィン長官は赤き龍を利用しようとしてるんだらうか？

「だが今となつてはそんなことはどうでもいい。
人質を解放しろ！道化の報酬として、それくらいは払っても良からう」

「最も、不動遊星は既に負けてしまいましたかね。青い痣を持つ彼に」

オレのことだね。

「そんなことは関係無いでしょう。人質を捕って、大会出場を強要すること自体、してはいけないことです。」

早く人質を解放してください！」

「ですが、そのおかげで彼と友人になることができたのではないですか？」

確かに遊星やみんなに会えたのはそのおかげかもしれない。でも、そのことを認めて長官を許す訳にはいかない。

「そんなことを言っただけで自分を正当化するつもりですか？自分の罪を素直に認めて、人質を解放してください！」

「良いでしょう。ただし条件があります」

条件がある？

「これから行われるキングとのデュエルに、貴方に出て貰います」

なんだ、そんなことなんだ。

「駄目だ！これ以上のシグナー同士のデュエルは危険だ！」

遊星の言う通りだね。

「では、人質を解放しなくても宜しいのですね？」

「貴様　！」

「そもそも彼は本当にシグナーなのですか？」

青い痣を持つシグナー等聞いたことがありませんか？」

「キング、あなたも見ていた筈です。赤き龍に導かれた世界で、オレと遊星のデュエルを。」

あのデュエルは危険です。またあの世界に導かれるかもしれません。それでもデュエルしますか？」

この際、ゴドウィン長官は無視した方がいいね。こんな人は信用できない。」

「ふん、怖じけづいたか！」

その時はこのオレが赤き龍を己の力にしてみせるまで！」

そんなことできないだろうに。

とにかく、キングはやる気満々だったことだね。それなら、

「解りました。このデュエル、受けます」

「リヨウ!？」

「これで遊星の友達が解放されるなら、その方がいいよ」

「だが」

「気にしないでいいよ。遊星の友達の身が大事だよ」

「」

まあ遊星が納得してくれなくても、押し通すけどね。

「良いでしょう。人質を解放しましょう」

これでいいね。

とりあえずは安心できる。

「では、もう一つ質問に答えて下さい」

「何ですか？」

「貴方は何者ですか？その青い痣は何ですか？」

そのことか？

答えるべきなんだろうか？

(別に答えても良いと思うよ)

(知ったところで何かができるといふ訳ではない)

二人がそう言うのなら、良いのかな。

「オレは赤き龍の痣を持つ遊星やキングのような古代の伝記に記されているシグナーではありません。

ですが、伝記に記されていないなくても青き痣を持つシグナーは存在していたらしいですよ」

「何処でそのことを知ったのですか？」

「オレの大切な絆に教えてもらった、と言っておきます」

これ以上のことを話には必要ないね。

「では、オレたちはこれで失礼します。
行こう、遊星」

オレと遊星は二人揃って出て行った。

side 遊星

オレとリヨウは控室に戻り、ジャックとのデュエルに備えている。

「済まない。オレたちの為に危険を伴うかもしれないデュエルをさせることになってしまった」

「気にしなくていいよ。」

それに遊星が勝ってたら、遊星だってデュエル受けてたでしょ？」

その通りではあるな。

「だが、お前に迷惑をかけることになってしまった」

「気にしなくていいって。」

遊星はオレのことを仲間だって言ってくれた。だからオレは仲間の力になりたい。
それだけだよ」

オレは良い仲間を持ったな。

「ところで遊星、一つ頼みがあるんだけど」

「何だ？」

「遊星はDホイール詳しいよね？少し調整してくれないかな？」

「どこが悪いのか？」

「ちよつとね」

リョウのDホイールを見せてもらった。

リョウのDホイールを間近で見るのは初めてだな。

「このくらいの不具合なら問題無い。すぐに直る」

「ホント？ありがとつ、遊星」

「ああ」

次のデュエルに影響があるのは不味いだろう。
そんなことにはオレがさせはしないが。

しかし、リョウのDホイールはよく整備されているな。

「リョウ、このDホイールはどこで？」

「ああ、ソニックは両親からのプレゼント。15歳の誕生日プレゼントとして、買ってもらったんだよ」

「そうか。整備はいつも自分でしているのか？」

「月に一度、メンテナンスには出してるけど、それ以外は自分でや

ってるよ」

「大事にしているんだな。このDホイールを見れば解る。ソニックというのか？」

「うん。遊星も自分のDホイールを大事に扱ってるでしょ？」

「ああ。オレのDホイールはサテライトの仲間と一緒に造った大切なDホイールだからな」

「自分たちで造ったんだ。凄いな」

みんなと一緒に造ったDホイールだからな。みんなの思いが募っている。

そしてオレはシティに来て、新しい仲間を得た。

オレはこれからその仲間の一人、リョウに頼まなければならないことがある。

「リョウ、図々しいが一つ頼みがある」

「何？遠慮しなくていいよ」

「ジャックに勝ってくれ」

「どういう意味？」

「ジャックに勝ち、あいつを救ってほしい」

「遊星とキングはサテライトにいた時、何かあったの？」

「いや。だが、今のジャックはキングであるが故に、何もかも棄ててしまっているんだ。」

本当に大切なものが何なのかさえ、忘れてしまっている」

「それを取り戻してほしいってことなんだね」

「ああ」

図々しい頼みだ。自分でデュエルをするなど言っておきながら。

「遊星はそのことも自分でするつもりだったんだね？」

「ああ」

「遊星はそこまで考えてたんだ。それなのにあのデュエルにオレは」

「あのデュエルは正真正銘お前の勝ちだ。あのデュエルに悔いは無い。」

だからこそ、お前に頼んでいる」

「解った。オレは必ずキング、ジャック・アトラスに勝つよ」

ありがとう、リョウ。

「ジャックは強い。気を付けるよ」

「うん」

ソニックの方は、よし、これで大丈夫だろう。

「リヨウ、直った」

「ありがとう、遊星。」

うん、バッチリだね」

「そうか。オレはみんながいないか、客席に行って確認してくる。
頼む、ジャックに勝ってくれ」

「大丈夫。約束するよ、必ず勝つ」

「ああ」

オレは控室を後にして、客席へ行った。
みんなは無事に。

「あ、遊星！」

龍亞。

「何故ここにいる？早くここから離れろと言った筈だ」

「セキュリティの奴らに脅されたんだ。それで仕方なく」

くっ、ゴドウィンの奴か。

『ワーワー』

会場が盛り上がってきた。

リヨウが出て来たのか。

恐らくセキュリティが固めているだろう。
手遅れか。

「あの、遊星さん。リヨウは大丈夫かな？」

アリスか。

アリスも謎が多い。何故赤き龍の世界に導かれたのかも解らない。
痣は無い筈だが。
解っているのは、彼女が十六夜と似ている力を持っていることくらいか。

「リヨウなら大丈夫だ」

このデュエル、何も起きなければ良いが。

リヨウ、ジャックに勝ってくれ。

side out

オレはソニックに乗り、キングの後ろでスタートの合図を待ってる。

「ふん。貴様が何者かは知らんが、まさか遊星に勝つとはな。

貴様のような奴に、遊星も堕ちたものだ」

「遊星を馬鹿にするのは辞めてください。

遊星は立派なデュエリスト、勝手に馬鹿にして良いものじゃない」

「はっ！奴は相変わらずのようだな」

やっぱりかなり知り合いみたいだね。

遊星はあんまり気にしてないみたいだったけど。

「貴様がシグナーなのか、その痣は一体何なのか、このデュエルで確かめてやろう！」

オレは負けない。

遊星に必ず勝つと約束したから。

「フィールド魔法、スピードワールド、セット！オン！」

ソニックがデュエルモードになる。

遊星のおかげで、ソニックに問題は無いね。

「いざ、フォーチュン・カップ、ファイナルマッチ！

ライディングデュエル！アクセラ・レイション！」

二人同時に走り出した。

「デュエル！」

第十四話：遊星とジャック（後書き）

説明が下手ですいません。

上手く説明できていないことも多々あると思います。

訂正箇所があれば、是非教えて下さい。

第十五話：絆の力（前書き）

早めの更新です。

今回はVSジャックです。

このデュエルでリョウウが初めて魔法使い族以外のモンスターを使います。

あのカードですよ。

それではございぞ。

第十五話：絆の力

「デュエル！」

「先攻はチャレンジャーである貴様からだ！」

「オレのターン、ドロー」

その絶対的な自信をオレが打ち砕いてみせる！

「手札から“見習い魔術師”を守備表示で召喚」

DEF / 800

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「オレのターン」

SP 1

「“ビッグ・ピース・ゴーレム”を召喚！」

ATK / 2100

レベル5のモンスター。

「このカードは相手場上にのみモンスターが存在する場合、リリースなしで召喚できる。」

蹴散らせ！“見習い魔術師”を攻撃！」

「くつ！ “見習い魔術師” が破壊されたことにより、デッキから
見習い魔術師”を特殊召喚するよ」

DEF / 800

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ。
どうした！遊星を倒したその力、見せてみる！
その上をいく、キングの力を見せてやる！」

「いいよ。そこまで言うなら見せてやる！
オレたちの絆の力を！」

みんながついてる。
負けられないんだ。

「オレのターン」

SP 2

「 “見習い魔術師” をリリースして、 “サイバネティック・マジシ
ヤン” を召喚！」

ATK / 2400

「 “ビッグ・ピース・ゴーレム” を攻撃！」

ジャック LP 3700

「ふん、少しはやる気になったようだな」

失礼な人だなあ。

オレはあなたに勝つつもりだよ！

「オレのターン！」

SP 3

「手札より“ダーク・リペアラ―”を召喚！」

ATK / 1000

チューナーモンスターか。

「さらに畏発動！“ゼロアップ”！墓地のモンスターの攻撃力を0にして、特殊召喚する」

ATK / 0

“ビッグ・ピース・ゴーレム”の攻撃力は0、モンスターのレベルの合計は7。

“レッド・デーモンズ・ドラゴン”はレベル8の筈だけど。

「“ゼロアップ”で蘇ったモンスターは、レベルを1上げる」

「っ！？」

これで合計のレベルは8！

「凡人共よ、心に刻め！キング・オブ・キングのデュエルを！」

レベル6の“ビッグ・ピース・ゴーレム”に、レベル2の“ダーク・リペアラー”をチューニング!”

いきなりくるね。

キングのシグナーの龍、エースモンスターが!

「王者の鼓動、今ここに列を為す。天地鳴動の力を見るがいい! シンクロ召喚! 我が魂、“レッド・デーモンズ・ドラゴン”!”

ATK/3000

「レッド・デーモンズ・ドラゴン”」

間近で見るのは初めてだね。凄いプレッシャーを感じる。
本物はこんなに迫力があるんだ。

「オレは墓地に送られた“ダーク・リペアラー”の効果で、デッキの1番上のカードを確認する。その後、このカードをデッキの1番上か下かどちらかに置く。
オレは1番下を選択する」
くるか？

「思い知るがいい、キングの前では何もかもが無力であることを!
これがキングの力だ! アブソリュート・パワー・フォース!”

「くっ!”

リヨウ LP 3400

“サイバネティック・マジシャン”。

「見たか！デュエルの後に貴様に残されるのは、敗北という二文字だけだ！

カードを2枚伏せて、ターンエンド」

確かに強い。

だけど、“レッド・デーモンズ・ドラゴン”を倒して、オレが敗北の二文字を突き付けてみせる！

「オレのターン」

SP 4

「手札より“龍の破壊者”を召喚！」

ATK / 0

「攻撃力0で何をするつもりだ！？」

慌てないでよ。

「このカードをリリースすることで、手札から特定のモンスターを召喚できる！」

オレのデッキ唯一の戦士族モンスター、頼むよ！

「“龍の破壊者”をリリース！“バスター・ブレイダー”を特殊召喚！」

ATK / 2600

「バスター・ブレイダー」は龍破壊の剣士！相手の場又は墓地に存在するドラゴン族モンスター1体につき、攻撃力が500ポイントアップする！」

ATK/3100

これで“レッド・デーモンズ・ドラゴン”の攻撃力を上回った！

「バトル！“バスター・ブレイダー”で“レッド・デーモンズ・ドラゴン”を攻撃！」

「貴様のやること等お見通しだ！

畏発動“チューナーズ・マインド”！シンクロモンスターが攻撃対象になった時、そのシンクロモンスターを素材となったモンスターに戻す！そして、攻撃宣言をしたモンスターは素材となったチューナーモンスターとバトルする」

“ダーク・リペアラ”は破壊したけど、できれば“ビッグ・ピース・ゴーレム”の方が良かったなあ。

「“ダーク・リペアラ”の効果で、デッキの1番上のカードを確認する。オレはこのカードをデッキの1番上に置く」

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「オレのターン」

SP 5

「スモール・ピース・ゴーレム」を召喚！」

ATK / 1000

「場に“ビッグ・ピース・ゴーレム”が存在する場合にこのカードが召喚に成功した時、デッキから“ミッド・ピース・ゴーレム”を特殊召喚する！」

ATK / 1600

「さらに永續罫“血の代償”！ライフを500ポイント払うことで、手札からモンスターを召喚する」

ジャック LP 3200

「フレア・リゾネーター」を召喚！」

ATK / 3000

「レベル5の“ビッグ・ピース・ゴーレム”に、レベル3の“フレア・リゾネーター”をチューニング！」

またくるか？

キングのエースが。

「王者の鼓動、今ここに列を為す。天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が魂、“レッド・デーモンズ・ドラゴン”！」

ATK / 3000

また出てきたか。
気のせいかな？さっきまでと少し違うような。

「見よ！この雄々しき姿！これこそキングの道を歩む最強の僕！
“フレア・リゾネーター”をシンクロ素材としたシンクロモンスターは、攻撃力が300ポイントアップする！」

「っ!?!」

ATK / 3300

“バスター・ブレイダー”の攻撃力を上回った。

「喰らえ！アブソリュート・パワー・フォース！」

リョウ LP 3200

くっ、“バスター・ブレイダー”が。

「まだ終わっていない！」

“ミッド・ピース・ゴーレム”でダイレクトアタック！」

「罨カード“ガード・ブロック”！戦闘ダメージを0にして、カードを1枚ドローする」

「ならば、“スモール・ピース・ゴーレム”でダイレクトアタック
「！」

「くうっ!」

リョウ LP 2100
SP 4

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

状況は最悪だね。
キングの場には“レッド・デーモンズ・ドラゴン”を合わせて3体、オレの場にモンスターはいない。
なんとかするにはあの二人に頼むしかないね。

「オレのターン」

リョウ SP 5
ジャック SP 6

「SP エンジェルバトン”発動！SPカウンターが2つ以上ある時、デッキからカードを2枚ドロウして、1枚を墓地に送る。手札から“特攻のマジシャン”を特殊召喚」

ATK/100

「このカードは相手場のみモンスターが存在する時、特殊召喚できる。さらに特殊召喚に成功した場合の効果で“血の代償”を破壊！そして“特攻のマジシャン”をリリースして、マナをアドバンス召喚！」

ATK/2000

「さらに罫“賢者の秘石”！マナが場に存在することにより、マハードを特殊召喚！」

ATK / 2500

「勝たなきゃいけないんだよね？このデュエル」

「うん。勝たなきゃならない」

「絆を信じて共に闘う。そうすれば勝てる筈だ」

「解ってる。頼むよ、二人とも」

遊星と約束したんだ。

必ず勝ってみせる。

「ふん。ようやく出てきたか」

「バトル！マハード、“ミッド・ピース・ゴーレム”を攻撃！
ブラック・マジック！」

ジャック LP 2300

「mana、“スモール・ピース・ゴーレム”を攻撃！
ブラック・バーニング！」

ジャック LP 1400

「ふん。やるようになったものだ。オレのターン」

リョウ SP 6

ジャック SP 7

「レッド・デーモンズ・ドラゴン”で“ブラックマジシャン”を攻撃！」

アブソリュート・パワー・フォース！」

「ぐうっ！」

リョウ LP 1300

「耐えてくれ、マハード！」

墓地の“魔術の守護者”をゲームから除外して、マハードの破壊を無効にする！」

「お見通しだ！罫カード“デモン・キャノン”！バトルで相手モンスターを破壊できなかった時、500ポイントのダメージを与える！」

「くっ！」

リョウ LP 800

オレのライフが1000を切ったね。

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

オレは自分のターンを始めようとした。その時、

ピシャアアッ！

再び赤い落雷が落ちてきた。

「来たか」

「赤き龍」

また赤き龍の姿に変わっていく。

赤き龍が咆哮をあげる。

「やっと来たか、赤き龍よ！」

オレたちのデュエルを、とくと拝んでいくが良い！」

「キング！本当にデュエルを続けるつもり？」

「臆したか！目先の恐怖に怯える者に、デュエリストの資格は無い！」

「目先の恐怖じゃない！」

あの衝撃は本当に危険だ！」

「知らん！オレはこの天地が砕け散ろうと、デュエルを続ける！」

赤き龍が咆哮をあげ、突風を巻き起こした。

「くうっ！またなのか？」

赤き龍が再び咆哮をあげ、辺り一帯を光に包む。
オレたちをあの世界に連れていく為に。

目を開けると、やっぱり同じ世界にいた。

暗い空間の中に一本の光の道、今度はキングと一緒に。

「ふん、やはり来たか」

オレは周囲を見渡した。

やっぱり遊星、龍可、十六夜さん、そして アリスがいる。

同じように祭壇が見えてくる。

遊星たちと同じ痣を持った人たちもいる。

祭壇を抜ければ、ネオドミノシティとサテライトが見えてくる。

そしてサテライトが滅んでいく光景。

「くそっ！この光景は一体何なんだ！？これが本当に未来だとでも言うのか！？」

遊星にしてみれば、サテライトが滅びる光景を何度も見たくはないだろうね。

しかもこの光景は現実味があり過ぎてる。

「リョウ、だったな。さっさとデュエルを続行するぞ」

「」

「解っている筈だ。デュエルの決着が着けば、オレたちも他の連中も元の世界に戻れることをな」

確かにその通りだね。

キングはやる気みたいだし、オレも覚悟してなかった訳じゃない。

「オレは誰にも負けん！キングの誇りに賭けて！」

キングの誇り か。

キングにとってはそれほど大事なものなんだろうけど、そのことが原因で見失ってるものがたくさんあるように思えるね。遊星の言う通りってことか。

オレにできることは遊星との約束を果たすこと。だからこのデュエル、オレが勝ってみせる！

「オレのターン」

リョウ S P 7

ジャック S P 8

今のオレに“レッド・デーモンス・ドラゴン”を倒すことはできない。

でも、ライフを削る方法はある！

「S P 運命の呪縛”を発動！S Pカウンターが2つ以上ある時、自分場のモンスター1体は攻撃しない代わりに、相手プレイヤーにそのモンスターの攻撃力の半分のダメージを与える！マハードの攻撃力の半分のダメージを受けてもらう！」

「ぬあああっ！」

ジャック L P 150

S P 7

「これがシグナー同士の本当の闘い。

やはり奴もシグナーか」

大丈夫かな？

かなりの衝撃だった筈だけども。

「キング、大丈夫？」

「オレの心配をするくらいなら、自分の心配をするんだな！」

本当に大丈夫かな？

やせ我慢じゃなければ良いけど。

「オレのターン」

SP 8

「バトル！これで終わりにしてやる！」

「まだ終わらない！」

畏発動！“ブラックナイフ”！マハードが場に存在することにより、相手モンスター1体を破壊する！」

これで“レッド・デーモンズ・ドラゴン”を！？

“レッド・デーモンズ・ドラゴン”が消えていく。

「そんな方法で倒されるものか！畏カード“亜空間物質転送装置”」

“レッド・デーモンズ・ドラゴン”をエンドフェイズまで除外したんだね。

でもこれで攻撃力は元に戻る。

「オレはカードを2枚伏せる。
戻れ！“レッド・デーモンズ”！」

ATK / 3000

“レッド・デーモンズ・ドラゴン”が再び現れたけど、攻撃力は元に戻ってるね。

「オレのターン」

SP 9

みんなとの絆を信じるしかない！
頼むよ、みんな！

「オレはカードを2枚伏せる。これでターンを終了」

オレの場にある3枚の伏せカードが勝敗のカギ。

「オレのターン！」

SP 10

「“レッド・デーモンズ・ドラゴン”！“ブラックマジシャンガール”を攻撃！

砕け散るがいい！アブソリュート・パワー・フォース！」

確かにこの攻撃が通ればオレは負ける。

でもそう簡単にはいかない！

「畏発動！“立ちほだかる強敵”！マナへの攻撃対象を、マハードに変更する！」

「ふん！そのままいけ！
喰らうがいい！」

“レッド・デーモンズ・ドラゴン”の攻撃がマハードに直撃する。
だけど、

「なにっ！？破壊できんだと！？」

マハードは攻撃を見事に受け止めてる。

「畏カード“魔術師集結”！自分場上の魔法使い族モンスターは、
場に存在する魔法使い族モンスター1体につき、攻撃力が300ポ
イントアップする！」

ATK / 3100

ATK / 2600

「なんだとっ！？」

「オレたちの絆は、力だけで碎かれることはない！」

「チツチツチツ」

「マハードの迎撃！ブラック・マジック！」

「ぬああっ」

ジャック LP 50

「馬鹿な、このオレの最強の僕が敗れる等」

「最強なんてものは存在しないんだよ。どんなカードでも、組み合わせと絆の力でいくらでも強くなるんだ」

だからオレはどんな強敵にだって立ち向かえる。
みんながいるから闘える。

「くっ、キングは負けん！」

“SP ジ・エンド・オブ・ストーム”！SPカウンターが10以上ある時、場の全モンスターを破壊し、そのモンスター1体につき300ポイントのダメージを与える！」

「なにっ!?!」

突風が吹き荒れる。

マズイ、防ぐ手段がない！

「ぐあああっ!」

「きゃあああっ!」

「マハード! マナ!」

くっ、これでオレの場にモンスターはいない。

「さらにダメージを受ける！」

「うあああっ！」

リョウ LP 200

またあの衝撃が。

「これでとどめだ！畏発動“岩投げアタック”！デッキから岩石族モンスターを墓地へ送り、500ポイントのダメージを与える！」

「まだだ！カウンター罠“黒板消しの罠”！効果ダメージを無効にする！」

なんとか防いだね。

「ふん。ならば、更なる絶望を見せてやろう！」

永続罠“リビングデッドの呼び声”！墓地からモンスターを復活させ、装備カードとなる！」

墓地から。

ということとは！

「オレが復活させるのは、“レッド・デーモンズ・ドラゴン”！」

ATK/3000

当然といえば当然だね。

「ここまで手こずらせたことは褒めてやろう。」

だが、最後に勝つのはこのオレだ！」

オレの場にカードは無く、手札は0。

「リョウ、がんばって！」

「アリス」

アリスが祈るようにオレを見てる。

そうだね。まだ終わりじゃない！

可能性が0じゃない限り、諦める訳にはいかない！

（みんな、オレたちの想いに、応えてくれ！）

「オレのターン！これがラストドロ！」

SP 11

オレの引いた最後のカードは、

「SP マジカル・フュージョン」！SPカウンターが8以上ある時、墓地から決められたモンスターをゲームから除外して、魔法使い族融合モンスターを召喚する！」

みんなが応えてくれた最後の絆のカード、この絆の力で勝つ！

「マハードと“バスター・ブレイダー”をゲームから除外！

マハード！“バスター・ブレイダー”！二人の力を今一つに！

融合召喚！“超魔導剣士 ブラック・パラディン”！」

ATK / 2900

「融合召喚」

「これがリヨウの絆の力」

「それがどうした！その攻撃力で、我が“レッド・デーモンズ”を倒せる訳がない！」

「よく見てみてよ。“ブラック・パラディン”の攻撃力を！」

ATK / 3400

「な、なんだと！？そんな馬鹿な！？」

「“ブラック・パラディン”はお互いの場と墓地に存在するドラゴン族モンスター1体につき、攻撃力を500ポイントアップさせる！」

これで終幕。

これがオレたちの絆の力！

「オレたちの絆は、決して碎かれることはない！

“ブラック・パラディン”！切り裂け！超魔導破！」

「ぬああああっ！」

ジャック LP 0

「ぬああっ!」

キングがクラッシュした。

オレはソニックを急いで停める。

「はあ、はあ、はあ」

現実世界に戻ってきたんだ。

場のソリッドビジョンが消えていく。

ありがとう、“ブラック・パレディン”。

キングがクラッシュしてたんだ。キングが心配だね。

「キング!大丈夫!？」

「馬鹿な。」

キングであるこのオレが、貴様に敗れる等

「確かにあなたは強いよ。

だけど、キングであろうとするあなたのプライドがあなた自身を縛ってるんだ」

「くっ」

キングが気を失って倒れる。

早く手当てしないと!

「ウイ、ウイナー!リヨウ!

キング、ジャック・アトラスの無敗神話は打ち破られ、ここに新た

なキングの誕生を見る！

新たなるキング、その名はリヨウ！

ニューキング、リヨウの誕生だ〜！」

オレはキングになるつもりはないんだけどなあ

。

第十五話：絆の力（後書き）

“バスター・ブレイダー”はシグナー相手にはひどいかなと途中で思ってしまった自分がいました。多用はしないと思います。

リョウ以外のオリカも初めて使いました。

これからもオリカが増えるかもです。

これから原作に少し離れます。

上手く書けるかわかりませんが、よろしく願います。

それでは、グッチーでした。

第2回：Bの世界（前書き）

オリカを多く使いましたので、その紹介の為に早めに投稿しました。

それから、第1回の紹介で“特攻のマジシャン”の種族と属性を追加しました。

第2回：Bの世界

リ「皆さん、こんにちは。

メインパーソナリティのリョウです」

ア「皆さん、こんにちは。

同じくメインパーソナリティのアリス・ルシエです」

第2回ですね。やはりすぐに放送という訳にはいきませんでした。

リ「本編の方は進んでる方なの？」

ポチポチです。

ア「私はまだデュエルしてないよ」

すいません。デッキ自体はもうできているのですが。

ア「もう」

リ「まあまあ、落ち着いて、アリス。もうすぐだよ、きっと」

ア「本当？」

その予定です。頑張ります。

リ「それじゃあ、そろそろゲストを呼ぼうか。

今回のゲストは、遊戯王5D'sの主人公、不動遊星です。どうぞ」

遊「」

何か喋ってくださいよ。

遊「 不動遊星だ」

リ「今日はやけに暗くない？遊星」

遊「リヨウとアリスはよくこんなことをやっているな」

ア「そうかな？私はそれなりに楽しいよ」

リ「オレはその気持ちがよく解るよ、遊星」

遊「そうか」

リ「まあ、やるとなった以上はやるうよ」

遊「解った。ところで、何故オレがゲストなんだ？」

僕が単純に君が好きだからですよ。

遊「 やはり帰っていいか？」

ア「だ、ダメだよ」

リ「堪えて堪えて。気にしてたらキリがないよ」

遊「 そうか」

ア「じゃ、じゃあ始めようか」

リ「第2回、Bの世界」

リ・ア『スタートです』

遊「始まるぞ」

リ「改めて、皆さんこんにちは。メインパーソナリティのリョウです」

ア「こんにちは。同じくメインパーソナリティのアリスです」

遊「不動遊星だ」

やっぱり気がのりませんか。

遊「当然だ」

ア「我慢してね？」

遊「解っている」

リ「それでは早速最初のコーナーにいてみましょうか」

リ・ア『ゲツチーの部屋』

リ「このコーナーでは本編のオリカやオリキャラを紹介するよ」

ア「今回は本編でオリキャラは出ていないからオリ力だけだね」

遊「早速1枚目だ」

“ブラックナイフ”
通常罠カード

自分場上に“ブラックマジシャン”が存在する時、相手場上に存在するモンスター1体を破壊する。

リ「このカードは“千本ナイフ”の換わりだね？」

その通りです。

遊「リョウとマハードの絆を繋ぐカードの1枚だな」

リ「まあね」

ア「遊星さんと“スターダスト・ドラゴン”の絆を繋ぐカードもたくさんあるよね？」

遊「ああ。“スターダスト”専用のカードがあるな。リョウとのデュエルでは使えなかったが」

アニメ専用のカードですね。強力なカードです。

リ「またデュエルした時は楽しみにしてるよ」

遊「ああ。次は負けない」

ア「二人のデュエルは見応えあつたからね」

読者の皆様にそう思えたかは分かりませんが、そう思ってた下さって
くれていたら幸いです。

ア「じゃあ次にいくよ」

“魔術の守護者”

レベル1

ATK/0

DEF/0

種族/魔法使い族

属性/光

効果モンスター

墓地に存在するこのカードをゲームから除外することで、魔法使い
族モンスター1体の戦闘、カード効果での破壊を無効にする。

ア「このカードは何か参考があるの？」

勿論あります。“シールド・ウォリアー”です。

遊「似てはいるな」

リ「戦闘以外の破壊も無効にできるんだね」

“シールド・ウォリアー”は戦闘限定ですからね。

その代わりに“魔術の守護者”の効果は魔法使い族だけに有効です。

ア「そうなんだ。それじゃ次のカードだよ」

“SP トリックドロー”

SP スペル

SPカウンターを3個取り除くことで発動できる。手札を1枚墓地へ送り、ライフを500ポイント払うことで、デッキからカードを2枚ドローする。この効果はライフを1000ポイント払うことで、相手プレイヤーも使用することができる。

遊「ドロー補助効果か」

リ「手札に困ってる時しか使えないけどね。リスクがそれなりに高いから」

ア「そうだね。下手をすれば相手に有利に働くことだって考えられるね」

使い所の難しいカードです。

遊「次だ」

“魔術の呪い”
通常畏カード

自分場の魔法使い族モンスター1体が戦闘によって破壊される時、そのモンスターの破壊を無効にする。その後そのモンスターが戦闘を行った相手モンスターを破壊する。

ア「このカードの参考はあるの？」

特に無いです。こんな効果のカードがあれば、便利かも、程度の気持ちで考えたカードです。

遊「相変わらずだな」

リ「気にしない方がいいよ。次だよ」

“SP ソウル・サークル”
SPスペル

SPカウンターが12個あり、“ブラックマジシャンガール”が自分場上に存在する場合のみ発動することができる。

自分のドローフェイズをスキップすることで、自分の墓地に存在するモンスター1体につき、デッキからカードを1枚ドローできる。

リ「発動できれば、かなりの効果だね」

ア「その代わり、発動できる可能性は低いね。はっきり言ってデュエル中に発動できることは少ないよね？」

リ「確かにね」

遊「オレとのデュエルでは見事に発動したかな。このカードが勝敗の決め手となった」

リ「そうだね。このカードの参考は？」

知っている人は知っているとします。武藤遊戯時代のアニメの効果を参考にしました。

遊「何のことだ？」

リ「遊星は知っちゃいけないことだよ。遊星がこれ以上突っ込まないように次にいくよ」

ア「そうだね」

“ S P 魔術の杯”
S P スペル

S P カウンターが5個以上ある時発動できる。墓地に存在する魔法使い族モンスター1体をゲームから除外して、自分場上の魔法使い族モンスター1体の攻撃力を発動ターンのエンドフェイズまで除外したモンスターの攻撃力分アップする。

遊「オレにとどめを刺したカードだな」

リ「絆を繋いだカードだったからね」

ア「このカードは？」

参考は“イージー・チューニング”です。ただし、この効果はエンドフェイズまでになってます。

リ「魔法使い族だけなら条件が簡単過ぎるからね」

遊「リヨウのことだ。除外した後も、何か別の方法で有効に使うんだろ？」

リ「まあね」

ア「マハードを除外するなら、“闇次元の解放”なんかがよく使うパターンだよな？」

リ「そうだよ。次にいこうか」

“ゼロアップ”
通常罠カード

自分の墓地に存在するモンスター1体のレベルを1上げ、攻撃力を0にして、攻撃表示で特殊召喚する。

遊「ジャックのカードだな」

ア「本編のオリカでリヨウ以外のオリカは初めてだね」

リヨウばかりという訳にはいきませんから。

リ「オレはけっこう使ってるね」

少しは自重して下さい。

リ「あなたが使わせてるんだけどね」

ア「次にいくよ」

“龍の破壊者”

レベル1

ATK/0

DEF/0

種族/魔法使い族

属性/地

効果モンスター

自分場上に存在するこのカードをリリースすることで、手札から“バスター・ブレイダー”1体を特殊召喚する。

リ「“バスター・ブレイダー”を召喚するにはもってこいの効果だね」

参考は“フェニキアン・シード”です。

遊「“バスター・ブレイダー”が召喚されたら厳しいな」

ア「シグナーのみんなには辛い効果だよね」

リ「でも戦士族だから、あんまり多用はしないけどね。必要な時は迷いなく使うけど」

リヨウはあくまで魔法使い族中心です。“バスター・ブレイダー”は“ブラック・パラディン”の布石となる役割が大きいです。

リ「そういうことだよ。次」

“魔術師集結”
通常罫カード

自分場上に存在する魔法使い族モンスターの攻撃力は、エンドフェイズまで自分場上の魔法使い族モンスター1体につき、300ポイントアップする。

遊「絆を繋ぐには良いカードだな」

ア「ジャックさんの“レッド・デーモンズ・ドラゴン”を倒したカードだからね」

リ「このカードに参考は？」

ありますよ。“百獣大行進”です。

遊「確かに似ているな」

リ「そっくりじゃない？」

魔法使い族に変えただけですから。

遊「それで良いのか？」

リ「気にしたら負けだよ、遊星」

ア「次だよ」

“マジカル・フュージョン”
SPスペル

SPカウンターが8個以上ある時、自分の場上又は墓地から、融合モンスターによって決められたモンスターをゲームから除外し、魔法使い族融合モンスター1体を融合召喚扱いでエクストラデッキから特殊召喚する。

遊「言うまでもなく参考は“ミラクル・フュージョン”だな」

リ・ア『うんうん』

このカードの名前はこれにしようって決めてたんですよ。
本当はこれに“リリカル”って付けようと思ったのに。

遊「馬鹿だな」

リ・ア『馬鹿だね』

酷いです。

ア「今回の紹介はここまでだよ」

リ「次のコーナーは」

リ・ア「賢者の部屋」

リ「このコーナーは本編の裏話なんかをするよ」

ア「でも何もお便りきてないよね？」

きてません。

遊「どうするんだ？」

何かテキストに話して下さい。

リ「またか」

ア「それなら、私から良いかな？」

遊「良いんじゃないか」

ア「じゃあ遊星さんに。

リヨウとデュエルした時に、“クイック・シンクロン”と“チューニング・サポーター”のシンクロ召喚で、どうして“ターボ・ウォリアー”を召喚したの？」

遊「確かにあの時、“チューニング・サポーター”をレベル2とし

てレベル7の“ニトロ・ウォリアー”を召喚することもできた」

リ「言われてみればそうだね」

遊「だが、敢えて“ターボ・ウォリアー”を召喚したのは、リヨウの魔法使い族モンスターの効果に対応する為だ」

ア「“ターボ・ウォリアー”はレベル6以下のモンスター効果を受けないからだね」

リ「魔法使い族モンスターは攻撃力はそれほど高くないけど、効果が強力だしね」

遊「ああ。だが、リヨウのカードとの絆で攻略されたがな」

ア「なるほど。そういう考えがあったんだね」

遊「ああ」

リ「じゃあ次はオレから。」

本編はモンスターのリバーズ効果が無いのは何で？」

モンスターを伏せることを本編でするつもりはありません。よってリバーズ効果もありません。」

ア「アニメと同じにしてあるの？」

そういうことです。」

遊「リバーズ効果はどうしているんだ？」

伏せる過程を無くして、別の条件を付けています。

例えば、“執念深き老魔術師”は召喚された次の自分のターンにか効果が発動しない等です。

リ「他にも“見習い魔術師”の効果が伏せた状態の特殊召喚じゃなくて、表側表示の特殊召喚になつてることとかだね」

これからリバーズ効果を使う時はこのように少しアレンジして使いたいと思います。

遊「次はオレからだ。

アリスはデュエルするのか？」

ア「するよ。本編ではまだしてないけど」

ごめんなさい。

遊「そうか。どんなデュエルをするのか楽しみにしている」

ア「うん。がんばる」

早めにアリスのデュエルを書きたいと思います。

リ「これで終わりかな？」

いえ、最後に私から。

リ「この小説の作者から質問は無いでしょ？」

ありますよ。

ア「何かな？」

リヨウとアリスはキスしたことがありますか？

リ・ア『／／！？』

遊「なるほどな」

リ「そこは納得するところじゃないよ、遊星／／！」

ア「そっだよ／／！」

で、あるんですか？

ア「え〜っと　／／」

リ「無いよ／／！」

本当ですか？

ア「本当だよ／／！」

それは残念ですね。

でもリヨウはキスされたことはありませんよね？

リ「無いでしょ？」

精霊世界でマナにキスを　。

ア「へえ。そうなんだ」

リ「ま、待って！落ち着いて、アリス！」

ア「落ち着いてるよ？」

遊「そんな低重音の声で言っても説得力が全くないな」

ア「少し静かにしてようか？」

遊「す、済まない」

リ「遊星！？」

遊「済まない。オレには止められそうにない」

マナがリヨウの頬に確かにキスを。

リ「火に油を注ぐな！」

ア「リヨウ。少し頭冷やそうか」

リ「その台詞はアリスが言う台詞じゃないよ！？」

ア「どうでもいいよ。少しお話ししようよ」

リ「待って！どこに連れていくつもり！？」

ア「人目につかない所だよ」

リ「待つて！ホントに待つて！」

ア「ヤ・ダ」

リ「ギャアアアア！」

いや、最後の可愛い笑顔でしたね。

遊「リヨウ。生きて戻ってこいよ」

面白かったですね。

遊「あれがアリスの裏人格。恐ろしいな」

メインパーソナリティの二人がいなくなってしまったので、今回はここまでですね。

それでは最後に番宣をお願いします。

遊「リヨウは無事なのか？」

多分大丈夫ですよ。

遊「そうか。番宣をすればいいんだな？」

このラジオでは、お便りを待つている。どんなことでも送ってきてくれ。

グッチーの部屋ではオリジナルについての感想を、賢者の部屋では本編で聞きたいことを送ってくれ」

こんなコーナーをして欲しい等のお便りも待つてます。

どんなことでも遠慮なくどうぞ。

遊「今回の放送はここまでだ。次回もよろしくな」

二人が戻ってきてませんが終わりましたよ。

遊「ここまでの放送はリヨウ、アリス、そして不動遊星だった。またな」

ア「頭は冷えたかな？」

リ「はい」

ア「もうこんなことは無いよね？告白されたり、他の女の子と話したりより質が悪いんだよ？」

リ「オレが悪かったよ。」

(オレは何もしてないのに)

ア「何かな？」

リ「な、何でもないよ」

ア「そ、それじゃあ私とキスしてくれる／＼？」

リ「え／＼？」

「じゃあ、さようなら。」

後は御想像にお任せします。

第2回：Bの世界（後書き）

お便りは感想でもメッセージでも構いません。

どんな内容でも良いので、是非送ってみて下さい。

それでは、グッチーでした。

第十六話：明かされる真実（前書き）

フォーチュン・カップが終わり、原作からかなり外れます。

舞台は精霊世界。

これからもよろしく願います。

第十六話：明かされる真実

『リヨウ！リヨウ！リヨウ！』

キングが医務室の先生に運ばれていく。
いや、もうキングじゃないんだね。

「リヨウ！」

遊星が走ってくる。

「どうしたの？そんなに慌てて」

「このまま逃げるぞ。ソニックに乗るんだ」

「逃げるって？」

訳が解らないんだけど。

「あれを見る」

遊星の指差した方向を見ると、報道陣がいつぱいた。

『インタビュウさせて〜！』

「うわあ」

「行くぞ」

遊星は既に自分のDホイールに乗ってる。

「う、うん！」

オレも急いでソニックに乗り、追ってくる報道陣を振り切った。さすがにDホイールには追いつけないよね。

でもマズイね。オレの今日の疲れが。

side 遊星

オレは先行してリヨウの前を走っている。

「リヨウ、ジャックに勝ってくれたことには礼を言う。ありがとう」

「うん」

「みんなは先に雑賀のアジトに向かっている。オレたちもそこへ行き、しばらく身を隠そう」

「」

返事がない？

そつえば、さっきからスピードが上がらない。どうかしたのか？

「リヨウ」

「
」

声をかけてみるが、返事がこない。

「どっし　っ!？」

顔を覗いてみれば、かなり辛そうな顔をしている。

「ごめん、遊星　。」

ちよつと疲れてて　「

無理もない。

今日一日でシグナーとの三連戦。かなり苦しいだろう。

雑賀のアジトが見えてきた。

「リョウ、もう少しで雑賀のアジトだ!」

もう少し耐えてくれ!

side out

side アリス

キキイッ!

「ねえ、今の音ってDホイールの音じゃない?」

「ああ、間違いない。二人が来たんだろう」

私たちは出迎えに出た。

私はリヨウの姿に眼を疑った。
リヨウが遊星さんの肩を借りて、一人で歩けないような状態になっ
てる。

「リヨウ！」

どうして!?

デュエルに勝って、無事に現実世界に帰って来てるのを見たのに
。

「リヨウはシグナーとの連戦で疲弊しているんだ」

リヨウの意識は既がない。

「リヨウは大丈夫なの!？」

「解らない」

そんな。

私はまだリヨウに何もできてないのに。

「大丈夫よ、アリスお姉ちゃん」

『龍可!?!』

「どうして解るの?」

「“クリボン”がそう言ってるの。今はただ眠ってるだけで、しばらくすれば目を覚ますって」

「良かったあ」

私はその場へへたり込んだ。
ちよつと泣いちゃいそう。

「でも、数日くらいは目を覚まさないかもって」

そんな。

「とにかく目を覚ますんだな？」

それならアジトの中で眠らせてやるっ」

遊星さんの言う通りだね。
早く横にさせてあげないと。

リョウ。

side out

「うん」

意識がはっきりしないままオレは目覚めた。

オレは確か雑賀って人のアジトに行った筈だけど。

「じじは」

意識がはつきりしてくるにつれて解る。 。
ここは明らかにアジトじゃない。
木の柱に木の壁、それに木のベッドで寝てみたい。この家は木だけで造られた家みたいだね。
そしてこの部屋には大量の本がある。オレには到底読めないような本ばかりだね。

キィ。

「？」

誰かがこの部屋に。 。

「リョウ！」

「うわっ！」

抱き着いてきた。

えっと、この人は マナ！？

「良かった。目が覚めたんだね」

「マナ、どうしてここに？」

「？ ここは私とお師匠様の家だよ？」

可愛らしく小首をかしげて言ってくれた。

でもその様子を可愛いと思えるほど心にゆとりがある筈もない訳で。

「ええ〜!?!」

これはどういう あ、解ったかも。

「これは夢?」

「まだ寝ぼけてる? 私は今、リヨウに触れてるのに」
確かに抱き着かれてるね。
あれ? 触れてる?

「どうして触れるんだろ ?」

「ここが精霊世界だからだよ?」

……チーン。

「ええ〜!?!」

二度目の絶叫。
もう訳解んないよ。

「何でオレが精霊世界に」

「え〜っとね、お師匠様が無理矢理精神だけ連れてきたんだよ」

「マハードが? どうして?」

「大事なご用があるって言ってたよ」

「マハードは今どこに？」

「お出かけしてるよ」

「じゃあ待つてるしかないね」

「ううん。私たちも出かけるんだよ」

話が見えてこないなあ。

「マナ、もう少し詳しく説明してくれる？」

「あ、ごめん。お師匠様は今、先にお出かけしてるけど、私たちも今からそこに行くんだよ。」

お師匠様は打ち合わせしてて、私が道案内」

「そうなんだ」

なんにしてもここが精霊世界ってことは間違いないみたいだね。マナが触れてることはもちろん、周囲にある物はオレが見たことない物ばかり。

「マハードは何の用があったの？」

「私も詳しくは聞いてないけど、行ってみれば解るよ」

それもそうか。

急ぐ必要もなさそうだしね。

にしても、

「マナ、そろそろ離れてくれない？」

「あ、ごめんね」

マナが離れてくれた。

あの状態はいろいろとマズイからね。

そういえば、マナが帽子を被ってないね。

家の中だから当然といえば当然だけど、帽子を被ってないマナは初めて見る。

というかこうして改めて見ると、そんじょそこらの人とは比べものにならないほど美少女だなあ。

いやいや、決して恋愛対象とかじゃないよ!?

もちろんオレの大事な仲間だし、可愛いし、好きだけど、オレにはアリスがいるからね。

って、誰に弁明してるんだろ、オレ。

「どうしたの？」

また可愛らしく小首をかしげて言ってくれた。
今度は少し余裕があるからね。

「何でもないよ」

「じゃあそろそろ出かけよう。目的の場所に」

「うん。案内よろしくね、マナ」

「うん」

二人で家を出た。
ちなみにマナは帽子を被ってる。

「マナは外に出る時、いつも帽子を被ってるの？」

「被ってるよ。黒魔術師のたしなみだからね」

なるほどね。

マハードもいつも被ってるしね。

「しばらく歩かなきゃいけないけど、平気かな？」

「大丈夫だよ」

二人で並んで歩いていく。

その途中で“見習い魔術師”と“見習い魔女”に逢った。

二人とも嬉しそうにオレに近寄ってきてくれた。

マナにどうしてか聞いてみたら

「自分たちを使ってくれてるリョウウがここにいるんだから、この反応は当然だよ？」

とのこと。

でも、オレがここにいることを不思議がってたね。

「ねえ、マナ。人間って、オレ以外にも来たことあるの？」

「あるよ。何年前だったかは忘れちゃったけど」

やっぱりあるんだね。

二人でまた歩いていっていると、今度は“もけもけ”や“ダンシング・エルフ”に逢った。

「ここにいるのは魔法使い族だけじゃないんだね」

「そうだよ。いろんな種族の精霊がここには住んでるから」

まあ“もけもけ”はぼくつとして何考えてるか解らないし、“ダンシング・エルフ”はオレの前で踊ってただけなんだけどね。

でも“ハーピー・ガール”に逢った時に

「マナちゃんの彼氏？」

って発言には驚いたよ。

マナは笑ってるだけだし、違うって否定しても聞いてくれないし。

はあ。

「あつ！見えてきたよ」

「そうなんだ。大分歩いたからね」

最後の声は上手く聞き取れなかったと思う。

オレがビククリして声が掠れたからね。

マナが指差した方向に道は無く、崖になってる。

そこにはずいぶん神秘的なオーラを纏った山が。

「あの山が目的地だよ」

うん。ある程度、予想はついてたよ。
どうやって行くのかなあ。

「さ、あそこまで飛んで行くよ」

「待って、マナ。オレは人間、飛べる訳ないよ？」

「あはは。解ってるよ。」

だから私の友達に頼んでおいたんだよ」

友達？

「おーい、“カース・オブ・ドラゴン”！」

ああ、友達なんだね。

マナの呼び声で“カース・オブ・ドラゴン”が近づいてきた。

「さ、乗って」

「良いかな？」

コクリ、と頷いてくれた。どうやら良いみたいだね。

オレとマナは二人で乗って、山まで飛んで行ってもらった。
大分距離があったし、二人で乗ってたから“カース・オブ・ドラゴン”はかなり辛そうにしてる。

「ごめんね。ここまで乗せてくれてありがとう」

またコクリ、と頷いて飛び立って行った。

少しぎこちなく飛んでるように見えるけど大丈夫かな？

中はずいぶん綺麗な所だった。

所々が色鮮やかに輝いてて、水晶がたくさんあるみたいだった。

「ここに住んでる精霊って誰？」

「リヨウも知ってる精霊だよ。

あっ！着いたよ」

マナの言う通り、少し広い空間に出た。

「リヨウ、よく来てくれた。身体の方は平気か？」

「うん。問題ないよ、マハード」

そう、マハードがいた。

マハードがオレを呼んだ理由は何だろ？

「無断で連れてきてしまっただけじゃない。許してくれ」

「いいよ。気にしてないしね」

「お師匠様、言い付けは守りましたよ」

「そのようだな。道中は楽しかったか？」

「はい」

本当に楽しそうだったね。

ずっと喋ってたし。

「こんな所まで来てもらって済まないな。

私が二人に頼み、お前をここまで連れてきてもらったんだ」

突然知らない声が聞こえた。

多分上から、と思って見上げてみると、星屑が降ってきた。羽ばたく度に星屑が散る綺麗なドラゴン。

「スターダスト・ドラゴン」

確かにオレは知ってる。

遊星のエースモンスター。

“スターダスト・ドラゴン”がオレの前に舞い降りた。本当に綺麗なドラゴンだなあ。

「驚いているようだな」

「そりゃあ驚くよ。全く予想してなかった」

「人間世界では主が世話になっているな。礼を言う」

「いや、オレの方こそ。遊星とのデュエル、楽しかったよ」

「次は負けない、と言っておこう」

「なんだから遊星と話してるみたい。きつと似てるんだらうなあ。」

「それで、何でオレを呼んだの？」

「お前に話さなければならぬことがあるからだ」

オレに？一体何を？

「お前のその青き痣についてだ」

「この痣のこと、知ってるんだね？」

オレは右腕の袖を上げ、痣を見せる。

「そうだ。その青き痣がシグナーの痣を意味することを知っているな？」

「マハードとマナに教えてもらったよ」

「それは半分正解で、半分間違いだ」

「？」

どういうこと？

「リョウ、聞けば解る」

マハードの言う通りだね。

とりあえず聞いてみるしかないか。

「シグナーとは言わば、救世主のような存在だ。悪しき者から世界を守る存在。」

人間世界では私の主、不動遊星、ジャック・アトラス、十六夜アキ、

龍可だ」

「もう一人は？シグナーは五人いる筈だよな？」

「五人目は既に目覚めている筈だ。だが私もそいつについて詳しいことは解らない」

「その五人が赤き龍の痣を持つシグナー」

「その通りだ」

「じゃあ、この青き痣は？」

「率直に言おう。」

この精霊世界の救世主、言わば精霊世界のシグナーだ」

精霊世界のシグナー。

「通称【スピリットシグナー】。リョウ、お前はその一人目だ」

スピリットシグナー。

オレがその一人目。

精霊世界の為のシグナーか。

でもオレには一つ疑問がある。

「龍可は？龍可なら精霊の声を聞いて、精霊世界の危機を救うって

」

「精霊世界は五つに区分されている。

龍可が頼まれたことはその区分された一つの世界を救うことだ。

“エンシエント・フェアリー・ドラゴン”の世界をな」

“エンシエント・フェアリー・ドラゴン”の世界　？

「五つに区分された世界は私たち赤き龍の痣を持つシグナーの龍が管理している」

「そうは言っても区分や管理はそれほど厳しいものじゃないよ。自由に行き来できるし、徹底された管理でもないよ」

マナが説明してくれた。

どんな世界でも住みやすいように工夫がしてあるんだね。

「だが“エンシエント・フェアリー・ドラゴン”は封印され、もう一体のドラゴンは今は眠りにについている」

「じゃあオレはそのドラゴンたちをなんとかすればいいんだね？」

「違う。そのことについては、これから人間世界で起こるシグナーとダークシグナーとの闘いに勝つことができれば、ほぼ解決する」

オレの知らないことが次から次に出てくるね　。

「以前私とマナが言っていた敵のことだ」

確かにもうすぐ敵が現れるって言ってたね。

「じゃあダークシグナーってというのが、5000年に一度起きる世界を賭けた闘いの敵ってこと？」

「その通りだ。奴らは既に姿を現し、主と接触した」

「遊星が!?!」

「心配するな。主は無事だ」

それもそうだね。

遊星が簡単に負ける筈はない。

「だがダークシグナーはあくまで主たちシグナーの敵。スピリットシグナーの敵は別にいる」

その敵がオレが闘わなくちゃいけない敵。

「その敵の名は、通称【ファントム】」

ファントム。

「ファントムの目的は精霊世界を滅ぼすこと、とされている」

されている?

「明確な目的は解っていない。

私たちではファントムを倒すことはできない。

故に選ばれた人間、スピリットシグナーの力が必要なんだ。

この精霊世界を救う為に」

話が大体解ってきた。

ファントムを倒して精霊世界を救う、それがオレがこの世界に呼ばれた理由。

「急な話だ。混乱しているだろう。危険も伴う。

だが、私たちにはお前の力が必要なんだ。

力を 貸してくれるか？」

「確かに急な話だね。いきなり連れて来られて、こんな話だし」

「済まない」

マハードとマナも不安そうにオレを見つめてる。

「謝らなくていいよ。」

オレには正直、スピリットシグナーとか救世主とかそういうことはよく解らない」

そういうのに憧れてる訳じゃないし、なりたい訳でもない。

「でもこれだけは解るよ。」

オレの仲間が住んでるこの世界が滅ぼされようとしてる。

それを止める為にオレの力が必要なんだろ？

だったらオレは喜んでみんなの力になる！一緒に闘ってくれるみんなを護る為に闘う！」

「リヨウ」

「それにオレ一人で闘う訳じゃないよ。マハードやマナ、みんながついてるんでしょ？」

「 ああ、そうだな」

「うん！」

オレ一人だったら闘えるか分からない。
でもみんながいるなら闘える！

「よく言ってくれた。それでこそ主が認めた男だ。
これを受け取れ」

何かを渡された。

これは？

「マハードとマナに私の力を少し分け与えた。
お前たちの新たな力だ」

オレたちの新しい力。
“スターダスト・ドラゴン”がくれた力。

「リヨウ、私たちががんばるよ！」

「よろしく頼む」

「うん。一緒にがんばろう。
マハード、マナ」

みんなが住んでるこの世界を護る為に。

「大変です！緊急事態です！」

『！？』

「どうした！？何が起こった、“シャオロン”！」

入って来たのは“スターダスト・シャオロン”だね。

“スターダスト・ドラゴン”に仕えてるって感じかな。

「ファントムです！ファントムが攻めてきました！」

『っ！？』

「まさか、まだ早い筈だ！」

マハードが慌ててる。

それだけの事態ってことか。

「リヨウがいることが何処からか漏れたのかもしれないな。スピリットシグナーは奴らにとって脅威となる。そのことを危惧して攻めてきたのだろう」

オレの存在　ね。

「どうするの？」

「無論、迎え撃つ！準備は良いか？」

「当然！いくよ、マハード、マナ！」

「ああ！」

「うん！」

オレの精霊世界での闘いが始まる。

第十六話：明かされる真実（後書き）

どうだったでしょうか？

書いていて、これは遊戯王か？と思いました。

ですが、当然ながらデュエルが中心ですので。

それでは、グッチーでした。

第十七話：新たな力（前書き）

少し長くなりました。

題名通り、新たな力が覚醒します。

リヨウの新しい切り札として、オリ力を作りました。

名前にセンスが無いと感じる方もいるかもしれませんが、どうかよろしく願います。

それから前話の説明の続きもありますので、よろしくです。

第十七話：新たな力

オレは“スターダスト・ドラゴン”の背中に乗せてもらい、精霊世界を飛んでいる。

“スターダスト・ドラゴン”の背中から精霊世界を一望できた。精霊たちはデュエルしてるように見える。

相手は　　ガイコツ!?

「あのガイコツのようなものが見えるか？

あれが私たちの敵、ファントムの兵卒と言えば解るだろう」

要するに、下っ端ってことか。

あのガイコツ、端から見れば“ワイト”に見えるけど、“ワイト”と違って何も着てないね。そこが違いかな。

「デュエルしてるみんなは大丈夫なの？」

「心配ない。今闘っているのは強い精霊ばかりだ。簡単に負けることはない」

「オレも降りて闘った方が　　」

「いや、お前にはこのガイコツたちを引き連れてきた奴と闘ってもらう。

私たちでも危うい相手だが、そいつを倒せばガイコツたちは自我を保てなくなり、滅びる」

「つまり、そいつがガイコツたちを操ってるってこと？」

「そう考えてくれ」

それなら早くそいつを倒さないとね。

マハードとマナはカードに戻ってデュエルの準備をしてるし、あとはそいつのいる場所に行くだけ。

「見つけた！奴だ！」

“スターダスト・ドラゴン”が地上に降り立つ。

そこには“アンデット・ウォーリアー”より武装しているガイコツがいた。

「やはり人間がいたか。

貴様はスピリットシグナーか？」

「そうだよ。今闘ってる退かせて、もう二度と攻めてこないって約束してくれるなら、オレは手を出さないよ」

「ククツ。生意気な小僧だ。

我がそんな言葉に従うとも思っているのか？」

交渉はやっぱり無駄か。

できれば争うことは避けたいんだけど。

「そのような交渉は無駄だ。

奴を倒すしかない」

「クツクツクツ。

そのドラゴンの言う通りだ。

さあ、我とデュエルしろ。

闇のデュエルをな
」

闇のデュエル。

“スターダスト・ドラゴン”が言ってたね、ダメージが現実の痛みになるデュエル。
それもサイコデュエルよりダメージが大きいつて。

「どうした？」

「恐いのか？」

「恐くないって言ったらもちろん嘘になる。でも、精霊たちだって闘ってる。オレだけ逃げ出すことはできない！」

オレはデュエルディスクを構えた。

「それでいい。」

「見せてみる、スピリットシグナーの力を」

「「デュエル！」」

「オレからいかせてもらおうよ。ドロー。」

“魔導騎士 ディフェンダー”を召喚」

ATK/1600

「このカードの効果で魔力カウンターを一つ置く。カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「我がターン。」

手札より“おろかな埋葬”を発動し、“ゾンビキャリア”を墓地に送り、効果を発動。手札を1枚デッキの一番上に戻すことで墓地から特殊召喚する。」

DEF / 200

いきなりモンスターを特殊召喚してきた。

「さらに“闇の暗殺者”を召喚。」

ATK / 1200

「レベル4の“闇の暗殺者”に、レベル2の“ゾンビキャリア”をチューニング。」

最初のターンからシンクロ召喚を。

「シンクロ召喚、出でよ。“蘇りし魔王ハ・デス”！」

ATK / 2450

「バトルだ。闇の洗礼を受けよ。」

“魔導騎士 ディフェンダー”に攻撃。」

黒い影が迫ってくる。だけど、

「“魔導騎士 ディフェンダー”の効果！場上の魔力カウンターを一つ取り除くことで破壊を無効にする！」

「だが戦闘ダメージは発生する。」

黒い影の余波がオレを包み込んだ。

「うわあああつ！」

リヨウ LP 3150

本当に凄い衝撃が。 。
今までサイコデュエルのダメージは何度も受けたことあるけど、この痛みは格が違う。 。

「クツクツクツ。 。これが闇のデュエルだ
カードを1枚伏せてターン終了。 。
さあ、貴様のターンだ」

闇のデュエル。 。
確かに危険なデュエルだね。 。命懸けのデュエル。 。
でも逃げる訳にはいかない。
みんなを信じて、一緒に闘うだけ！

「オレのターン！
“魔導騎士 ディフェンダー”をリリース、“サイバネティック・マジシャン”を召喚！」

ATK/2450

「サイバネティック・マジシャン”の効果発動！
手札を1枚墓地に送ることで、“蘇りし魔王八・デス”の攻撃力を2000にする」

ATK / 2000

「ほう」

「サイバネティック・マジシャン”で攻撃！」

ガイコツ騎士 LP 3600

「クク、やるな」

この攻撃で気付いたけど、闇のデュエルではオレの攻撃も本当のダメージになってる。。
“サイバネティック・マジシャン”の攻撃の余波がオレにも伝わってきた。

「我がターンだ。」

見るがいい、闇へと染まるこの空を」

何が起こってる？
さっきまで普通に晴れてたのに。。

「所々で行われている闇のデュエルが更なる闇を作り出しているのだ。」

こうして世界は闇へと染まり、滅びていくのだ」

「そんなことはさせない！」

みんなが住んでるこの世界を護るんだ！」

「クククククッ。。やってみるがいい。。」

我は手札から“ゾンビ・マスター”を召喚」

ATK / 1800

「効果発動。手札のモンスターカード1枚を墓地へ送り、墓地のレベル4以下のアンデット族モンスターを1体特殊召喚する。
“闇の暗殺者”を特殊召喚」

ATK / 1200

「さらに墓地に送った“馬頭鬼”の効果発動。このカードをゲームから除外し、墓地のアンデット族モンスター1体を特殊召喚する。
。出でよ、 “蘇りし魔王ハ・デス”」

ATK / 2450

一気に3体のモンスターを!?

「 “蘇りし魔王ハ・デス”で “サイバネティック・マジシャン”を攻撃」

「畏カード“和睦の使者”!このターン、モンスターは破壊されず、バトルダメージも0にする!」

「カウンター畏“魔宮の賄賂”。相手の魔法・畏の発動を無効にし、相手はカードを1枚ドローする」

「しまっ!」

これじゃ防げない!

「バトル続行」

「ぐうっ！」

リヨウ LP 3100

「2体でダイレクトアタック」

「うあああああっ！」

リヨウ LP 100

オレはモンスターの攻撃で吹き飛ばされた。

「が あ」

口の中で血の味がしてる。

「ゴホッ！」

吐血した。

意識が飛びそうだ。

「この程度か。」

人間、今すぐ人間世界へ逃げ帰るがいい。命だけは助けてやる
う」

逃げる？

確かに今逃げれば辛い思いをしなくてすむ。

「ただこれでもいいのか？
みんなを見捨ててオレだけ逃げるなんてしていいのか？
駄目に決まってる！」

「マハードやマナ、みんながオレを信じてくれるのに、オレだけ逃げるなんてことは絶対にできない！」

「立たなくちゃ。
立って闘うんだ。」

「みんなとの絆を信じて闘うんだ！」

「はあ、はあ」

「ほう。立ったか。
ならばすぐに楽にしてやるわ。」

「オレはデッキに手を置く、みんなをただ信じて。」

「オレの、ターン！」

「みんなの力　オレに貸してくれ！」

「相手場のみモンスターが存在することにより“特攻のマジシャン”を特殊召喚！」

ATK/100

「“特攻のマジシャン”をリリース！“ブラックマジシャンガール”をアドバンス召喚！」

ATK / 2000

「リョウ。こんなにボロボロに」

「オレはまだ大丈夫。まだやれる！」

本当は辛いし、恐い。脚はふらふらしてるし、恐怖で手が震える。

だけどそれは今闘ってる精霊たちだって同じ筈。

どんなに傷ついても、一緒に闘ってくれる絆がある。だから闘えるんだ！

「魔法カード“賢者の宝石”！この効果で、デッキから“ブラックマジシャン”を特殊召喚！」

ATK / 2500

「リョウ」

「何も言わなくていいよ、マハード」

全部解ってるから。

「なかなかやるな。」

だが、風前の灯のそのライフがいつまでもつかない。

「このターンで終わらせるよ。オレたちの新しい力で！」

魔法発動！“ワン・フォー・ワン”！手札のモンスターカード1枚を墓地へ送り、デッキからレベル1のモンスターを特殊召喚する！
来い！“マジシャンズ・シンクロン”！」

ATK / 0

「チューナーだと？」

「マハード！」

「任せろ！私たちの新たな力だ！」

「レベル7の“ブラックマジシャン”に、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング！」

マハードが眩い光を放ち始めた。

「黒き魔術が集いし時、新たな光の力が目覚める。光差す希望と為れ！」

マハードが星となり、“マジシャンズ・シンクロン”が光の輪となる。

そして合わさり、空へと消えていった。

「シンクロ召喚！」

オレたちの新しい力、その一つ！

「舞い降りよ！」スターフェザー “SF ブラックマジシャン”！」

空から光が降り注いでくる。

「闇が消えていくだと！？」

光の中心から1体の魔術師が現れた。マハード。
いつもの紫を基調とした魔術服じゃなくて、紫が純白へと変わった
魔術服。白い杖。

そして何より、マハードの背中に、輝く白銀の翼が生えてる。

これがマハードの、新しい力。

ATK/2900

「だが闇はまだ残っている。闇は消えない」

「まだ終わりじゃない！」

新しい力を手にしたのはマハードだけじゃない！」

まだオレたちには新しい力がある！」

「マジシャンズ・シンクロン」が魔法使い族モンスターとシンクロ召喚に成功した場合、デュエル中一度だけ場に戻る！」

ATK/0

「私たちの新たな力で闇を掻き消す！マナよ！」

「はい！任せてください、お師匠様！」

「マナ！」

「うん！」

「レベル6の“ブラックマジシャンガール”に、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング！」

今度はマナが眩い光を放ち始めた。

「黒き魔術が交わりし時、新たな絆の幕が開く。光差す希望と為れ！」

マナが星となり、“マジシャンズ・シンクロン”が光の輪となり、合わさる。

「シンクロ召喚！」

オレたちの新しい力、そのもう一つ。

「舞え！^{スターフェザー}“SF ブラックマジシャンガール”！」

地上から四方へと光が注がれる。

「馬鹿な。また闇が」

光の中心から1体の魔術師が宙を舞った。マナ。

いつもの青を基調とした魔術服じゃなくて、青が純白に変わった魔術服。白い杖。

そして同じように背中に輝く白銀の翼が生えてる。

これがマナの新しい力。

ATK / 2400

「いくぞ、マナ！」

「はい、お師匠様！」

二人が杖を振るう。

眩しい閃光が散り、闇を掻き消していった。

闇が完全に消えた。

「闇が消える等」

これで闇は消えた。

新たな力を得た二人がいる。

「いくよ、二人とも！」

「ああ！」

「うん！」

「バトルだ！」

「ふん。 。 例え攻撃しようとする私のライフは残る」

それはどうかな？

「SF ブラックマジシャン」は自分場上にこのカード以外の“SF”と名の付くモンスターが存在する時、相手モンスター全てに攻撃できる！」

「なに！？」

「マハードの攻撃！」

マハードが宙に飛び、杖が光を放ち始める。

「スター・イリュージョン・マジック！」

「ウオオオ」

マハードの放った攻撃は光輝きながら相手場を埋め尽くした。相手場上のモンスターは全て破壊してゐる。

ガイコツ騎士 LP 350

「これで終幕だ！マナの攻撃！」

マナが宙を舞う。杖に光が集う。

「スター・イリュージョン・バーニング！」

「グオオオ」

ガイコツ騎士 LP 0

マナの攻撃で放たれた光が収まっていく。

「ククク。これは始まりだ。我々は必ず精霊世界を滅ぼす」

そう言い残して消えていった。

いや、消滅したって言った方が正しいかな。

この闘いは始まり。。。
これから先に起こる闘いの前座。。。

「勝ったようだな」

“スターダスト・ドラゴン”が空から降りてきた。
そういえば、どこにいたんだろ？

「お前に話さなければならぬことがまだある。一度山に戻ろう」

そう言っただけで背中に乗せてくれた。

“スターダスト・ドラゴン”の言った通り、他のガイコツたちは消えていて、闘いは終わってる。

「リョウ、怪我は大丈夫？」

マハードとマナが出てきた。

「そういえば、大して痛みを感じないようだな」

「精霊世界では人間世界より自然治癒力が高まるんだ。

リョウの怪我ももう少し時間が経てば治るだろう」

精霊世界って凄いんだなあ。

山に戻り、話していた場所に帰ってきた。

「まずはリョウ、お前に感謝する。私たち精霊の為に闘ってくれて

「

オレは途中で止めた。感謝されるのはまだ早い。

「それから先は言わなくていいよ。ファントム全部倒して、改めて聞くから」

「ふっ、ではその時に言わせてもらおう。
話の続きだ。ファントムには兵の階級がある」

組織みたいな感じだったから階級があっても不思議じゃないかな。

「まず、お前が見た中で最も多くいたガイコツが下級兵だ」

まあ、見た目通りな感じだね。

「次にお前が闘った相手が中級兵だ」

あの強さで中級兵か。

「そして上級兵だが、上級兵については私も詳しくは知らない。
だが、闘いが激しさを増してくれば、必ず姿を現すだろう」

上級兵は強いだろうね。

「はっきり言って、今のままでは上級兵には勝てない。
故にもっと力をつけなければならぬ」

「どつちやって?」

「まずはスピリットシグナーを集めるんだ」

「スピリットシグナーはオレだけじゃないんだね？」

「ああ。スピリットシグナーは五人いる」

「シグナーと同じ」

「その通りだ。シグナーとスピリットシグナーには深い関係がある」

深い関係？

「私がお前たちに力を与えたように、シグナーの龍はスピリットシグナーに力を与えることができる」

マハードとマナの新しい力のことだね。

「その力を与える龍はスピリットシグナー一人に対し1体。私がお前だったようにな。

そしてその力を与える龍を持つシグナーとスピリットシグナーには深い絆がある。主とお前のようにな」

オレと遊星の絆 か。

ライバルで、仲間で、大切な友達だからかな。

「もう一つ言っておく。

スピリットシグナーには精霊を感じる力があることは解っていると思うが、それだけではない」

「どつという意味？」

「スピリットシグナーは人間世界と精霊世界を結ぶ力がある」

「？」

よく意味が解らない。

どういうこと？

「つまりいつでも精霊世界に来れるということだ。精霊の力を借りずにな」

最初に来た時と今回はマハードに連れて来てもらったんだっただね。今度からはオレ自身の力で行けるってことだね。

「それだけではない。

人間世界に精霊を招くことができる。実体を持ってな」

「そんなこともできるの！？」

しかも実体がある状態で！？

「人間世界と精霊世界を結ぶことができるんだ。そのくらいはできる」

凄いなだね、スピリットシグナーって。

ちよっと待ってよ、ということは。

「マハード。このこと知ってたね？」

「気付かれたか。隠していて済まない」

やっぱりか。

十六夜さんの力を止めたのはマハードの力。いつの間にか実体化してみんなを護ってくれたんだ。

「サイコデュエリストみたいにな力ってことか」

「違うよ」

「マ、マナ!？」

マナがオレに突然抱き着いてきた!？

「えへへ、リヨウにこれからいつでも触れられる、もっと身近な存在になれると思うと嬉しくて」

それはオレも嬉しいんだけど、この密着状態はマズイよ。いろいろ当たってる。

「サイコデュエリストは確かに私たち精霊と関わりがある。だが、デュエルディスクを通してでなければ力は起きないうえに、精霊の力を半分も引き出すことはできない。十六夜アキでさえ、精々60%だ」

あれで60%なんだ。

「リヨウは私たちの力を100%引き出すことができる。デュエルディスクもいらない。カードさえあればいつでも呼び出せる。必要な時はいつでも呼んでくれ」

「私もだよ」

「ありがとう。マハード、マナ」

なんだかさらにオレたちの絆が深まったみたいで嬉しい。

「話すべきことは大体話した。

聞きたいことはあるか？」

「大丈夫。教えてくれてありがとう、“スターダスト・ドラゴン”」

「“スターダスト”でいい。主もそう呼ぶ」

「解ったよ、“スターダスト”」

「主をよろしくな」

「うん。何か解らないことがあれば聞きに来るよ」

「今度からは精神だけでなく、身体も連れて来た方がいい」

そつえば今回も精神だけで来たんだっただね。

「何か不都合があるの？」

「私たちには特に無いが、人間世界のお前は眠ったままだが良いのか？」

そつえば、向こうじゃオレは眠ったままだ。
。
アリスが心配してる！

「オレが眠ってからのどのくらい経ってる？」

「リヨウはこの世界に来てからもずっと眠ってたんだよ？」

「私がりヨウを連れて来てから、もう三日が経っている」

「三日も！？急いで戻らないとアリスが心配してる！」

オレは早速人間世界に戻ろうとした。

「ちょっと待ってくれ」

「何？“スターダスト”？」

「アリスとはお前の恋人だったな？」

「そうだけど？」

「あの子もスピリットシグナーかもしれない」

「！？」

アリスの腕に痣は無い筈だし、精霊を感じることもできない筈だ
ど。

「何か理由があるの？」

「赤き龍が導いた世界にいた筈だ。

五人目のシグナーではないことは間違いない。

だとすれば可能性があるのは」

スピリットシグナーってことだね。
アリスをこんな危険な闘いに巻き込みたくはないけど。

「あくまで可能性だ」

「解ったよ、確認してみる。
じゃあオレはこれで」

「ああ」

でもどうすれば帰れるんだろ？

「イメージするんだ。精霊世界にいる時は人間世界を、人間世界にいる時は精霊世界を」

イメージ。

オレは目を閉じて意識を集中させた。
すると、オレは眩い光に包まれた。

「う。ここは？」

またベッドで寝てる状態だった。
だけどこの部屋は見覚えがある。一度来たことがある、雑賀さんのアジト。
戻って来たんだ。

「リヨウ」

「アリス？」

部屋を見渡してみると、誰かが寝ていた跡の様子が微かにだけ解った。

オレが寝てた間、ずっとアリスが傍にいてくれたんだろうね。

「リヨウ！」

アリスが耐え切れなくなったようにオレに飛び付いてきた。

「良かった。

本当に良かった。

うっ、うっ」

「ごめんね。

心配かけて」

また、泣かせちゃったか。

アリスはオレに抱き着いたまま、しばらく泣き止まなかった。

第十七話：新たな力（後書き）

新しい力はどうか？少し強くし過ぎたかもしれない。

モンスター効果はあれだけではありませんが、デュエルをするにつれて明らかになると思います。

精霊世界の話はひとまず休憩して、スピリットシグナーを五人集める為にリヨウが人間世界を捜し回る、もしくはシグナーとダークシグナーの闘いを先に書くかもしれません。

どちらになるかわかりませんが、これからもよろしくお願いします。

新しいカードについて感想をいただけると嬉しいです。
是非、参考にしたいと思います。

第十八話：約束（前書き）

若干シリアスです。

デュエルはありません。

それにしてもデート描写って難しいですね。
上手く書けた気が全くしません。

宜しければ、何かアドバイスお願いします。

第十八話：約束

精霊世界から戻って来て、早三日。

セキュリティにアジトの場所が割れてるらしいから、アジトを離れることになった。

オレとアリスは自分の家に、龍亞と龍可は氷室さんと矢薙さんを連れて家に戻った。

遊星はオレが眠ってた間にサテライトに帰ったらしい。無茶してないといいんだけど。

オレは家に戻って来て、まっ先に情報の整理をした。精霊世界で聞いたことをまとめる必要があつたからね。

スピリットシグナーは五人、オレ以外の四人は力が目覚めていないらしい。オレが一人一人捜さないといけないけど、それなりに時間がかかるだろうね。

でもファントムも準備が万全ではないらしく、すぐに攻めてくることはないらしい。

その間にスピリットシグナーを集めて、力をつけなくちゃならない。

アリスについては、腕に痣は無いし、精霊を感じる力も無いことを確認させてもらった。

アリスを巻き込みたくなかったから良かったけど、これで手掛かりが全く無い状態。どうしたものかな。

マハードとマナはたまにこっちの世界に来るようになってた。でも実体化するから普通の人にも見ることができるようらしく、オレの家でこっちの世界に来るだけなんだけどね。

「リヨウ」

今日も来たみたいだね。

「そんなに考え込んでどうかしたか？」

「スピリットシグナーの手掛かりが何か無いかと思ってね」

「スピリットシグナーは精霊を感じることが出来る筈だが、これと言って手掛かりは無い。精霊を感じる力さえ目覚めていない可能性もある」

「じゃあアリスはまだ可能性がある訳か。 。
なんか複雑だなあ。 。
それにアリス以外は本当に手掛かり無いし。 。」

「地道に捜すしかないか」

「慌てる必要はないよ。ファントムもしばらくは動かないだろうし」
「そうだね」

「何にしても、今日は楽しんでくるといい。久しぶりなんだろう？」

「うん。まあね」

そう、今日はちょっと特別な日、アリスと久しぶりのデートの日。

「私たちは精霊世界に戻っている。何かあれば呼んでくれ」

「うん。ありがとう」

「楽しんできてね」

二人も精霊世界に戻っていった。
オレも出かけないとね。

side アリス

「じゃあ行ってきます。母さん」

「うん。気をつけてね」

母さんにそう言って私は家を出た。

リヨウは目が覚めてからいつもと変わらないように過ごしてるけど、何か隠してるようにも見える。

私にはできれば隠し事なんてしないで、何もかも打ち明けて欲しいけど、それは私のワガママなのかな？

何にしても今日はリヨウとデート。

リヨウに楽しんでもらって、私も楽しんで、素敵な一日にしたいな。

私は待ち合わせ場所に向かった。

待ち合わせ場所に着くと、既にリヨウはいた。

「リヨウ」

「あ、アリス」

「待ったかな？」

「ううん。オレもさつき着いたばかりだから」

相変わらずリヨウは来るのが早いなあ。

私もいつも五分前には来るのにリヨウは必ずいる。待ち合わせで私が待ったことは一度もないから凄いなと思う。

「じゃあ、行こっか」

「うん」

黙って手を差し出してくれる。リヨウは女の子の扱いが本当に上手、どこで知ったのかなあ。

それでも私が差し出された手を取ると、いつも少しだけ恥ずかしそうにするとところが可愛い。私も恥ずかしいけどノノ。

リヨウと手を繋いで歩き出す。

しばらくは二人でお喋りをしながら目的の場所に向かっていった。

その途中でリヨウはたまに視線を泳がせることがある。まるで何かを捜してるみたいだ。

「どうかした？」

「え？ ううん。何でもないよ」

「少し気になってるんだけど、何か隠し事してない？」

「してないよ？」

嘘だなあ。

私の目を見て言ってくれない。
何を隠してるんだろう。

「あ、着いたみたいだよ」

「ホントだ。ここに二人で来るのは久しぶりだね」

私たちが来たのはシティー大きなテーマパーク。何度か二人で来た
ことがあったけど、来るのは本当に久しぶり。

「早速入ろうか」

「うん」

リヨウの隠し事が何なのか知りたいけど、今は我慢なのかな。

side out

オレとアリスはテーマパークに入った。

さっきオレが隠していることについて聞かれた時は焦ったよ。ア
リスは鋭いなあ。

「何から乗ろうか？」

「そうだね。あれなんかどうかな？」

アリスが指差したのはジェットコースター。
ずいぶんいきなりな気がするけど、

「いいよ。行こう」

オレたちはジェットコースターに向かう。

少し順番待ちしてからジェットコースターに乗った。

「うわぁ　、高いね」

アリスの顔が少し強張ってるように見えるけど大丈夫かな？

「アリス、怖くない？」

「へ、平気だよ」

本当に大丈夫かなあ。

でももう遅いか。既に乗っちゃってるし。

ジェットコースターは頂上までゆっくり上り、一気に落下した。

「きゃー！」

アリスが隣で悲鳴をあげてる。

ジェットコースターが止まるまでアリスはずっとこんな調子だった。

「大丈夫？」

「う、うん。ちょっと怖かったけど」

あれでちょっとなんだ。まあいいけど。何か言い返してくるだろうし。

「次に行こうか」

「うん」

こんな調子でありとあらゆるアトラクションに乗って廻った。アリスは凄く楽しそうに笑ってくれてるし、オレも楽しい。こんな楽しい日は久しぶりかな。

「そろそろお昼だよ？リヨウは何か食べたいものある？」

確かにそろそろお腹も空いてきたね。

「じゃああの店に入ろう」

オレが指名したのはテーマパークならどこにでもありそうなレストラン。こういう店ならいろんな食べ物があるだろうからね。

オレたちは店に入り、昼食をとった。

「昼からはどうする？もうほとんどのアトラクションに廻ったよね？」

「そうだね。それなら帰りにどこかでお買い物したいな」

「分かった。ならそうしようか」

「でもその前にあれに乗ろう」

アリスが指差したのは観覧車。最後に乗るにはちょうどいいね。

「いいね。行こう」

二人で観覧車に乗った。

「テーマパーク、楽しかった？」

「うん。リヨウと一緒に来たのは久しぶりだったし、アトラクションも楽しかったから」

「そっか」

『
』

少しの間、沈黙が訪れた。

オレとアリスにしては珍しいんだけど。

「あのね、リヨウ」

先に口を開いたのはアリス。

「やっぱりリヨウは何か隠してるよね？何か大切な事を」

隠しきれないか。
仕方ないね。

「うん。隠してる」

「私には 言えないこと?」

少し悲しそうな顔で聞いてくる。

でもオレはできればアリスを巻き込みたくない。

「うん。ごめん」

「そう なんだ」

やっぱり悲しそう。

「また 無茶するの?」

「 すると思う」

精霊世界を護る為には、多少の危険は冒さなきゃならない筈。
命の危険だって、もちろんあるだろう。

「ごめんね、アリス。」

何もかも終わったら、包み隠さずに全部話すから

「うん」

悲しそうな顔。

でもそれ以外に別の感情があるように見える。オレにはその感情が何か解らないけど。

「アリス、約束しよう」

オレはアリスを優しく抱きしめた。

「今隠してることをアリスに話すことはできない。それにオレはこれからも無茶をたくさんするかもしれない」

「うん」

「それでもオレは必ず帰って来る。どんなに無茶なことをしたとしても、必ずアリスのところに帰って来るから。約束する」

「」

アリスはオレをじっと見つめてくる。

何も言わずに、ただ、じっと。

「だからアリスも約束してほしい。オレを待っていてくれるって。泣かないでオレのことを待っていてくれるって」

「」

「オレはもう、アリスが悲しんでる顔も泣いてる顔も見たくない」

オレは既にアリスを二回泣かせた。

オレのことを心配して、それで泣いてた。オレのせいで。

もうあんな涙は流させない！

アリスにはいつだって笑顔でいてほしい。

だから、

「もう泣かないって、約束してくれないかな？」

アリスがゴシゴシと眼を擦る。そして、

「うん、解った。約束する」

笑顔で言ってくれた。

オレはまたアリスを抱きしめる。

「オレももうアリスを悲しませない。アリスをもう二度と泣かせない」

「うん」

アリスもオレに手を回してきた。

「だから、約束」

「うん、約束」

二人で見つめ合う。そして、

「ん」

「ん」

観覧車の中で静寂が流れる。

その時間は、一瞬のようで、永遠のようで。

お互いが離れた時には二人で顔を朱に染めて、それでも二人で笑い合っていた。

side アリス

私たちは観覧車から降りた。

私の顔、赤くなつてないかな？

思い出すと恥ずかしい。だけど嬉しい。リョウと初めてのキス。

「なんだか騒がしいね」

リョウの声にハツとした。

いけないいけない、ボーツとしてた。

でも言われてみれば少し騒がしいような。

そのことを気にしながらも、私たちは観覧車から離れようとした。

「あーっ！見つけたわ！」

こっちに駆け寄って来る。

女の人だけど、まさか！

「アリス、そんなジト目で見ないでくれる？オレはあの人のこと知らないよ？」

「あ、そうなんだ」

ジト目で見るのを辞めてあげた。
だったらあの人はどうしてこっちに来るんだろう？私も知らない人
だけだ。

「貴方、リヨウ君よね？」

リヨウのことを知ってる？

「はい、そうですけど。オレに何か？」

「少し取材させてくれないかしら？」

「はあ」

リヨウがアポを向けられてる。どうしてだろう？

「元キング、ジャック・アトラスを倒し、ニューキングとなった感
想を聞かせて下さい」

『！』

この取材って、もしかして、

「あの、これってオレがキングになったから、みたいな取材ですか
？」

「ええ、そうよ」

リヨウはフォーチュン・カップで優勝して、キングに勝ったから

。 。
じゃあこの騒ぎはリヨウを取材する為に

「逃げよう!」

「う、うん!」

私はリヨウに手を引かれて走り出した。

「ちょっと待って!まだ質問に答えてないわ!」

「答える義理はありません!それにオレはキングになったつもりはありませんから!」

リヨウはそう言い残した。

私たちはテーマパークを出て、記者の人たちから身を隠した。

「はあ、はあ、周囲にたくさんいるよね、多分」

「はあ、はあ、う、うん」

「ごめんね、こんなことになっちゃって」

少し申し訳なさそうな顔になるリヨウ。

「大丈夫だよ。それにリヨウのせいじゃないから、気にしないで」

「うん。ありがとう」

それにしてもリヨウは大変だなあ。
有名人になったんだ。

「はあ。オレはキングなんて興味ないのに」

軽く溜め息をついて、呆れ気味に一言呟いた。

「キングにはやっぱりなりたくないんだね」

「うん。あんな取材はごめんだね。」

それにオレは自由に楽しくデュエルしたいから」

「そうだね」

それがリヨウらしいかな。

「でもどうしよう。このままじゃ、動きがとれないし」

きつと記者の人たちが必死にリヨウを捜してるだろうし、動けば見
つかる。

「おや、君たちは」

『?』

この人は。

s i d e o u t

「おや、君たちは」

この人　　ディヴァインさん。

「また逢えるとは光栄だね、リヨウ君、アリスさん。
こんな所で何をしているんだい？」

「少し事情がありました」

「オレが記者に追われてるんです」

「記者？　　ああ、君はフォーチュン・カップで優勝し、ジャック・アトラスを倒したんだっただね」

「オレはキングに勝ちましたが、キングになるつもりはないんです」

「それで隠れているという訳か」

「つい話しちゃったけど大丈夫かな？」

「成る程、解った。記者は一度付き纏うと煩いからね。
私と一緒に来ないかい？ここにいてもいずれ見つかると思うが」

「どこに行くんですか？」

「アルカディアムーブメントだ。幸い、この道を抜けた所に本社ビルがある。あそこなら見つかる心配はない」

どうするかな。

オレ一人ならともかく、今はアリスもいるし　　。

「行こう、リヨウ。ディヴァインさんの言う通り、ここにいってもすぐに見つかるよ」

アリスがそう言うなら　良いのかな？

「解りました。お願いします」

こうしてオレたちはアルカディアムーブメントに向かうことになった。

この人は本当に信用できるのだろうか　？

「ここがアルカディアムーブメントだ。

さあ、どうぞ」

本当に道を一つ抜けた所にビルがあった。

記者に見つかることもなかったし、結果的にはよかったのかな。

しばらくここで身を隠していれば、記者も諦めて帰ってくれるだろうね。

「さて、君たちの部屋を用意した。しばらくその部屋にいると良い」

「ありがとうございます」

オレとアリスはアルカディアムーブメントの人に案内されて部屋の中に入った。

ここまでしてくれるってことは、やっぱり良い人？

オレが警戒し過ぎてるんだろうか。

「よかったね、リヨウ。ここなら安心だよ」

「そうだね」

オレたちはしばらく話をしながら適当に時間を潰していた。でも、

「あれ　？　なんだか眠たく　」

「アリス？」

すう、すう、と軽く寝息をたてて眠ってしまった。

一体どうし　っ!？

オレも急に眠気が　。

「う　っ!」

オレはハツとして目を覚ました。確か突然眠気が襲ってきて　。

「目が覚めたのね」

「十六夜さん!？」

部屋の中には十六夜さんが一人。どうなってる？

アリスがいない!？アリスはどこに　　っ!

「黙って見てなさい」

下には壁に隔てられてデュエル場。そのデュエル場には足を鎖で繋

がれたアリスがいる。

「アリス！」

声を張って強く言ってみただけどこっちに気付いてない。

「無駄よ。ここからむこうに声は届かないわ」

「っ!？」

一体どういうことなんだ　!？

side アリス

私は目を覚ますと、動きを封じられてデュエル場にいた。

「目が覚めたようだな」

「!？」

私が顔を上げると、デイヴアインさんがいた。

「これはどういふことですか!？」

「ちょっとしたテストだよ。君が本当にサイコデュエリストなのか確かめる為のね」

「っ!？」

どうしてそのことを　！？
前に逢った時には隠してたのに　。

「やれやれ、私たちも苦勞してね。

君とリヨウ君のことを少し調べさせてもらったんだ。非常に解り難かったが、君に目星が付いた。そこでテストしようという訳さ」

それなら私のサイコの力はまだはつきりと分かってないんだ　。
なんとか隠し通さなきゃ　。

「さあ、デュエルを始めよう。

私のテストは少々荒っぽいからね。本気でかかってきなさい」

「　リヨウはどこですか？」

私のことよりリヨウが心配。

リヨウだって目を付けられてる。

「安心しろ。あそこにいる」

指差された方向に目を向けると、リヨウは壁越しただけど確かにいた。よかった　。何かされた訳じゃないみたい。

「私が勝ったら、私とリヨウを帰してください！」

「良いだろう。さ、始めよう」

「「デュエル！」」

第十八話：約束（後書き）

次回もかなりのシリアスになる予定です。

そしてアリスの初デュエルです。

出来るだけ早くアップしたいと思います。

それでは、グッチーでした。

第十九話：覚醒（前書き）

長くなってしまいました。が次話です。

今回もシリアス。シリアスは書くのが難しいですね。全然進まない。

ですが今回は初のアリスのデュエルです。

ミスがあれば御指摘お願いします。

では、どうぞ。

第十九話：覚醒

side アリス

「デュエル！」

「私のターン。“クレボンス”を召喚」

ATK / 1200

「カードを1枚伏せて、ターンエンド。さ、君の番だ」

「私のターン、ドロー」

私はもうサイコの力をコントロールできてる。

デュエルするのは久しぶりだけど、なんとか勝ってリョウと二人でここから出ないと。

「私は“ハウンド・ドラゴン”を召喚」

ATK / 1700

「バトル。“クレボンス”を攻撃」

「“クレボンス”の効果発動。800のライフを払い、モンスターの攻撃を無効にする」

ダイヴァイン LP 3200

防がれちゃったか。

「ターンエンド」

「私のターンだ。“サイコ・ワールド”を召喚」

ATK / 1900

攻撃力1900。

私の場には攻撃力1700の“ハウンド・ドラゴン”だけだし、ちよつと良くないかな。

「さて、少々本気でいこう。」

“サイコ・ワールド”で攻撃」

「きゃっ!」

アリス LP 3800

普通のデュエルにはない衝撃が私を襲ってきた。今のはもしかして。

「どうだい、サイコパワーの力は?」

やっぱりそうなんだ。今のはサイコデュエルの。

「さらに“クレボンス”でダイレクトアタック!」

「きゃああぁっ!」

私は衝撃に耐え切れず、後方に吹き飛ばされた。

「サイコデュエルは普通のデュエルとは次元が違う。

だが、君も同じ力を持っているのなら知っているだろう？

私たちは仲間だ。仲間同士、あまり傷付け合いたくはない。早く私に力を示してくれ」

仲間 ？

確かに私にはサイコの力がある。でも私はこうして人を傷付けたくない。

自分でサイコの力を受けてみて初めて解った。

この力は 危険。

私はこの力で過去に人を傷付けてたんだ。

傷付けられた人たちがどんな思いをしてるかも知らずに。

side out

「アリス！」

アリスが“クレボンス”の攻撃で倒れた。

サイコデュエルは闇のデュエル程じゃないにしても、危険なことに変わりはない。

「十六夜さん、このデュエルを止めて！

こんなデュエルに何の意味がある！？」

「これはテストよ。彼女にサイコの力が有るかもしれない、デイヴアインがそう言ってたわ」

「っ!？」

どうしてそれを　!？

あの時は上手く隠した筈なのに　。

「窮地になればこそ、力が目覚める可能性もある」

どうすればいい　!？

十六夜さんに止める意志は無いし、ここからじゃ手を出すこともできない。

このままじゃアリスが　。

「貴方たち二人はここに住めばいい。

貴方には不思議な力があるわ。それに彼女にサイコの力があるなら、ここにいた方がいい」

「前にも言った筈だよ。ここに住む気はない」

「　そう」

かと言っても、これは明らかに拉致。

このままじゃどうにもできない。早くここから出る必要があるね。なんとかして、デュエルを中断させないと。

どうすれば　!

ある!一つだけ方法が!この方法ならデュエルに割り込むことができる!

(マハード、マナ)

この二人の力を借りれば！

(どうしたの？デートの最中じゃ　　っつ、リリビリー！?)

(リョウ、これはどういう状況なんだ?)

(簡単に説明すると、オレとアリスがアルカディアムーブメントに
拉致された)

(なにっ!?)

(それで今アリスがディヴァインさんとデュエルしてる。サイコの
力を確かめる為に)

(アリスちゃんはサイコデュエリストだから　　)

(そう、狙われたんだろうね)

(リョウは大丈夫か？リョウも狙われていると思うが　　)

(オレなら大丈夫)

オレも十六夜さんとのデュエルでスピリットシグナーの力を使っ
たから狙われてるだろうね。でも今はオレよりアリスが狙われてる。

(リョウ、私とお師匠様を呼んだ理由は何?)

(二人が実体化してこの壁を壊して欲しい)

(デュエルに介入するということか?)

(うん。あのデュエルを止める)

(だが良いのか? 私たちが実体化すれば、ますます狙われるようにならないか?)

確かにね。

実体化すれば姿を隠すことはできない。そんな力があると知られば余計に狙われる。本末転倒か。

(もう少し様子を見てはどうだ?)

(アリスちゃんは強いから大丈夫だよ)

(解った。もう少し様子を見るよ。
でもオレが危険だと判断した時は迷わず実体化して欲しい)

(解った)

アリス がんばって。

side アリス

私は過去にサイコ力で人を傷付けた。

そんな時に私と真っ直ぐ向き合ってくれたリョウ。

リヨウのおかげで私は変わることができた。

リヨウをこんなことで危険に曝したくない。

私の恩人で、大切に、大好きな人だから。

それに私は約束してる。何年も前だからリヨウは忘れてるかもしれないけど、サイコの力で人を傷付けないって約束したから。

過去の出来事を変えることはできない。だからといって落ち込んでいられない。このデュエルに勝たなくちゃいけないから！

「私のターン！手札から“黒竜の雛”を召喚」

ATK / 800

「“黒竜の雛”の効果発動！このカードを墓地に送ることで、手札から“真紅眼の黒竜”を特殊召喚できる！

“黒竜の雛”を墓地へ！」

お願い、私に力を貸して！

「“真紅眼の黒竜”を特殊召喚！」

ATK / 2400

リヨウのフェイバリットがマハードとマナなら、私のフェイバリットはこの子。

私に力を貸してね、“真紅眼”。

「“真紅眼の黒竜”で“サイコ・ワールド”を攻撃！黒炎弾！」

ディヴァイン LP 2700

「ほう、少しはやるようだな」

よし、力はコントロールできてるみたいだね。

「私はカードを1枚伏せてターンを終了」

「私のターン。永続魔法“サイキックブレイク”発動。このカードはサイキック族モンスターが召喚に成功した時、ライフを500ポイント払うことでそのモンスターのレベルを1つ上げ、攻撃力が300ポイントアップする」

レベルを上げる？シンクロ召喚かな？

「“ジエネティック・ウーマン”を召喚」

ATK/1700

「“サイキックブレイク”の効果発動」

ATK/2000

ディヴァイン LP 2200

「さらにリバースカードオープン、“シンクロ・ヒーロー”。このカードを“クレボンス”に装備させることで、レベルを1上げる」

これで合計のレベルは 8。

「そして私は、レベル5となった“ジェネティック・ウーマン”にレベル3となった“クレボンス”をチューニング。逆巻け、我が復讐の黒煙！シンクロ召喚！来い！“メンタルスフィア・デーモン”！」

暗黒の暗闇から禍禍しいデーモンが現れた。

ATK/2700

私の“真紅眼”より攻撃力は上。

「行け！“真紅眼の黒竜”を攻撃！」

“真紅眼”に黒煙が放たれる。

私はまた襲ってくる衝撃を恐れて目を瞑った。でもいつまでも衝撃は襲って来ない。

恐る恐る目を開けてみると、“真紅眼”が必死に攻撃に耐えてるように見えた。まさか、この子が私を護ってくれてる？

“真紅眼”は攻撃に耐え切れず、破壊された。それでも私に衝撃は襲って来なかった。

アリス LP 2300

「残念だよ。どうやら君は私が求めていた人材とは違うようだ」
誤魔化せたのかな？

「こうなったら、彼に無理矢理にでも教えて貰うしかなさそうだな」

「っ!？」

リヨウに何を ?

「リヨウに何をするつもりですか!？」

「なに、荒っぽいが少々痛み付けてでもね」

そんなこと、絶対にさせない!

「まだデュエルは終わってません!」

「ああ、そうだ。デュエルの続きだな。

“メンタルスファイア・デーモン”がモンスターを破壊した時、破壊したモンスターの攻撃力分、ライフを回復する」

ダイヴァイン LP 4600

「私はこれでターン終了。

さあ、リヨウがどうなってもいいのか? 護りたいのなら本気で向かって来い!」

リヨウ!

私はリヨウの力になりたい!

「私のターン!」

よし、来てくれた!

「畏カード“正統なる血統”! 墓地の“真紅眼の黒竜”を特殊召喚

「！」

ATK / 2400

「私は“真紅眼の黒竜”をリリースして、“真紅眼の闇竜”を特殊召喚！」

ATK / 2400

「“真紅眼の闇竜”は自分の墓地のドラゴン族モンスター1体につき、攻撃力が300ポイントアップ！」

ATK / 3300

「なにっ!? “メンタルスフィア・デーモン”の攻撃力を越えるだど!?」

「“真紅眼の闇竜”で“メンタルスフィア・デーモン”を攻撃！」

「ぐぐっうー！」

デイヴアイン LP 4000

やった!これで、

「くっくっく」

? 何を笑って ?

「感じた、確かに感じたぞ!お前のサイコパワーを！」

え？

私はコントロールを。

「力をコントロールできるといふのは本当のようだな。

だが、既にお前はコントロールできなくなっていたんだ。私の言動によつてな！」

「っ!？」

それじゃあ私は、心を乱してコントロールの失敗を。

「やはりサイコパワーは護るべき者を認識した時に強くなる！
私はその力を引き出してやろう！」

嫌。

私はもうこんな力使いたくない。

「私のターン!“サイコ・コマンダー”を召喚！」

ATK/1400

「“サイキックブレイク”の効果発動」

ATK/1700

ディヴァイン LP 3500

「さらに手札から“最古式念導”を発動する。自分場上にサイキック族モンスターが存在する場合、1000ポイントのダメージを受けることで“真紅眼の闇竜”を破壊！」

「しまっ
「！」

また“真紅眼”が。

「バトルだ、“サイコ・コマンダー”でダイレクトアタック！」

“サイコ・コマンダー”の攻撃が私に向かってくる。

その時、部屋中に轟音が轟いた。

“サイコ・コマンダー”の攻撃は私には当たらなかった。代わりに、誰かが私を庇うように抱きしめていた。

side out

これ以上我慢できなかった。

何もできずに、ただ見てるだけ。サイコデュエルでアリスが傷付いていく。もう我慢することはできなかった。

“真紅眼の闇竜”が破壊されてアリスの場がから空きになった時、オレに迷いはなかった。

(マハード、マナ！頼む！)

(解った)

精霊世界と人間世界を繋ぎ、マハードとマナが実体化してオレの隣に姿を現す。

「これは一体　！？」

十六夜さんが何か言ってるけど、今のオレに気にする余裕は無い。

「ハアツ！」

マハードがデュエル場と隔てている壁を破壊する。

オレは破壊できたか確認せず、デュエル場に飛び降りた。

“サイコ・コマンダー”の攻撃がアリスに当たる前に割って入り、アリスを庇うように抱きしめた。

オレはアリスを庇ったつもりだったが、
“サイコ・コマンダー”の攻撃は当たらなかった。
後ろを向いてみると、マナが“サイコ・コマンダー”の攻撃を防いでくれていた。

「二人とも大丈夫？」

「ありがとう、マナ。助かったよ」

マナが“サイコ・コマンダー”の攻撃を防ぎ切る頃、マハードが降りてきた。

「マナを付けておいて正解だったな。また無茶をする」

流石マハード。よく気が回るね。

「リヨウ」

「大丈夫？アリス」

オレは優しく笑いかけた。

怪我はしてないみたいだね。

「これはどういうことだ！？何をした！？」

オレは後ろにいるディヴァインさんに向き直った。

「あんたに答える必要は無い」

「君には不思議な力があると思っていたが、私の予想を遥に越えているようだな。」

素晴らしい！たった1日でアルカディアムーブメントに三人もの同志が増えた！」

「三人か。一人は誰か知らないけど、オレたちはここに居座る気は一切無い！」

「君の力はたった今証明された。アリスさんのサイコパワーも確認した。」

君たちには是非アルカディアムーブメントに加わって貰おう！」

アリスの力を確認した？まさか！

「ごめんなさい、リヨウ」

力を 使ったんだ。

「ハハハハ！アリスさんはサイコパワーをコントロールできるよ
うだ。

だが、それは冷静でいられればの話だ。君のことを少し話せば冷静
さを失い、コントロールできなくなったという訳だ」

オレのことを ？

「私 、約束破っちゃった 。もうサイコの力で人を傷付けな
いって約束したのに 」

でもそれはオレの所為で 。
アリスを責めることはできない。だったらオレは 。

「いいよ、そんな約束」

「え ？」

「アリスが人を傷付けるようなことはしないなんてこと、オレは知
ってるから。

今は今日した約束を守って欲しい」

今にも泣き出しそうだから 。

「うん 」

オレは返事を聞いてまたアリスに笑いかけた。

「さあ、デュエルはまだ続いている。早く退いてくれないか？」

オレはまたディヴァインさんに向き直り、睨みつけた。

「ふざけるな！こんなデュエル、これ以上認めない！

そんなにデュエルがしたいならオレが相手をしてやる！」

「君の力は後でゆっくり確認させて貰うさ。その力がどんなものなのか気になるからな。何故“ブラックマジシャン”と“ブラックマジシャンガール”がソリッドビジョンでないのかをな」

マハードとマナは実体化したまま。あんたに二人を調べるなんてさせない！

「だが今はアリスさんとデュエル中だ。早く退き給え」

「退くつもりはない！このデュエルはこれ以上認めない！」

「退いて、リヨウ。私のライフはまだ残ってるよ」

「！？ 駄目だアリス！これ以上のデュエルは」

「大丈夫だよ。私が必ず勝つから」

確かにアリスのライフはまだ600残ってる。でも。

「きつと今のリヨウは私と同じだよ。普段の私と」

どういっ？

「リヨウはいつもがんばってた。日頃から人のことを優先して、人のことばかり気にしてて。フォーチュン・カップの時だって、十六夜さんやシグナーのデュエルで傷付いていくのに、私はただ見てるしかできなくて」

「アリス」

「いつもそうだったんだよ。私にできるのはご飯を作っただけ。とくらい」

でもご飯だっただけ。私にできるのはご飯を作っただけ。リヨウは一人暮らしだからご飯くらい作れること知ってる。

結局私はリヨウに何もしてあげられない。私は人生そのものを変えて貰ったのに。

いつも何もできなくて、ただ見てるだけ。いつももどかしくて、何もできない自分が悔しくて」

観覧車で垣間見せた感情はこれだったんだ。

オレは何も気付いてあげられなかった。

「でも今日、このデュエルに勝てばリヨウの力になれるから。リヨウを危険な目に合わせなくて済むから」

「もういい、もういいよ！もう十分だから」

オレはアリスが傷付くところなんて見たくない！」

「私もだよ。私だって、リヨウが傷付くところは見たくない。

それなのに私はいつも見てきたから。私にできるなら、もうリヨウを傷付けさせたくない！」

アリス。

「退いてはどつだ？リヨウ」

「マハード！？」

「彼女はいつもリヨウを見守ってくれていた。今はリヨウが見守る番ではないのか？」

マハードの言ってることは解る。でも、

「熱くなり過ぎて周りが見えていない。リヨウの悪い癖だ」

「」

「彼女を想う気持ちは解る。

だが彼女の想いはどうなる？今リヨウがデュエルを替わっても、彼女はまたリヨウの力になれなかった、そう思うだけだ」

「　　そう、だね」

オレはアリスのことを想ってるつもりで、アリスの気持ちを汲んであげてない　　。

「私は大丈夫だよ。だから　　見守ってて　　」

「うん　　、解った　　」

オレが今すべきことは、黙ってアリスを見守ること。

アリスが今までオレにしてくれてたように、オレもアリスを　　。

「そうだ、それでいい！君のライフは残り600、君のターンだ！」
アリスのターンからデュエルが再開され　　っ!?!?
オレの痣が突然青く輝き始めた!?!まるで何かに呼応してるみたい
に　　っ!?!?

「私の　ターン！」

s i d e　アリス

リョウが退いてくれた。

でも改めて思う。

リョウが隣で見守ってくれてる、そう思うと勇気が湧いてくる。

このデュエル、勝ちたい。少しでもリョウの力になりたい。

だからお願い、私に　力を貸して　　!

(良からう)

今　声が　　。

(吾等が力、主アリスの下に)

どこからか声が聞こえる　　。
どうしてだろう　　。

聞いたことのない声なのに、何故か信用できる。
それなら私は、この声を　　。

「私の ターン！」

ありがとう。

「アリス、その痣」

私の右腕がリヨウと同じように痣が浮かび、青く輝いてる。
この痣は 眼。

「素晴らしい！本当に素晴らしい！まさか君もリヨウ君と同じだったとはな！」

「申し訳ありませんがデイヴァインさん。このデュエル、私の勝ちです」

このカードがあれば。

「手札から“仮面竜”を召喚」

ATK/1400

「そんなモンスターで何をするつもりだ!？」

「“仮面竜”をゲームから除外することで、手札から“レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン”を特殊召喚！」

ATK/2800

「な、なんだと!？」

「このカードは自分場のドラゴン族モンスター1体をゲームから除外することで特殊召喚できる。そして1ターンに1度、手札か墓地のドラゴン族モンスターを特殊召喚できる！」

何度もごめんね。でも、私はあなたを頼りにしてるから。

「来て!“真紅眼の黒竜”！」

ATK/2400

私の場に三度真紅の眼をした黒竜が現れる。

「ようやく、吾の声が聞こえたようだな」

「えっ!?!」

今“真紅眼”が 喋った!?!

「ふっ、そこの汝は既に理解出来ているようだな」

「“真紅眼”、精霊だったんだね」

「御名答。その通りだ」

精霊?それじゃあ、

「私の 精霊?」

「正しく。吾が主アリスよ。この日を心待ちにしていた」

この子が私の精霊。
でもどうして私が精霊の声を聞けるんだろう？

「募る話もあるが、今はデュエルが先決だ、主よ。まずはこのデュエルに終止符を打つ！」

「うん！」

「馬鹿な。こんなことが」

「バトル!“レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン”で“サイコ・コマンダー”を攻撃！」

「ぐあああ！」

ダイヴァイン LP 1400

「馬鹿な、この私が負けるなど」

この攻撃で終わりだね。

「お願い、していい？」

「当然のことを申すな、主よ」

ふふ、いい子だね。

「“真紅眼の黒竜”でダイレクトアタック！黒炎弾！」

「..」

ディヴァイン LP 0

side out

第十九話：覚醒（後書き）

アリスのデュエルはどうだったでしょうか？

アリスのデッキはドラゴンデッキ。もちろん“真紅眼”が中心です。フェットだけに魔法使い族にしようかとも思いましたが、それではリョウと被るのでドラゴン族に。ルシエですから。

次は少しシリアスからズレますが、すぐにシリアスに戻る予定です。一応原作添うつもりですのでもうすぐダークシグナー編に入るかと。

それではこれからも宜しくお願いします。
グッチーでした。

第二十話：お泊り（前書き）

シリアスを一時抜けます。

シリアスでないのは書き易いですね。

今回の題名は少し不味い感じがしますが、それ程ヤバい内容は
ありません。新キャラの登場もあります。

では、どつぞ。

第二十話：お泊り

アリスの勝ちでデュエルが終わった。ソリッドビジョンが消えていく。

「リヨウ、この青い痣って」

「うん。後で説明するよ」

アリスがスピリットシグナーとして覚醒した。結局“スターダスト”の予想が正しかった訳か。

「くくく」

「？」

今の声は。

「お前たちをこのまま逃がしてたまるか。素晴らしい逸材をみすみす逃がすものか！」

バンツッ！

デュエル場の扉が開き、次々とアルカディアムーブメントの人たちが入って来て、オレたちを取り囲んだ。

「約束が違います！私とリヨウを帰してください！」

「悪いが君たちは大事な逸材だ。このまま帰す訳にはいかない。

だが言うことを聞いてくれそうにないな。少し痛い目に合っ
て貰おうか。やれ！」

全員が一斉に“ファイヤー・ボール”を放ってきた。
四方八方から 避けられない！

「私たちの存在を忘れて貰っては困るな」

『！』

「マハード、マナー！」

二人が杖を振るい、オレたちの周りにバリアのようなものが張られた。次々と迫ってくる“ファイヤー・ボール”を弾き返していく。

「あれは一体何だ！？ディスクも通さずにどういことだ！？」

悪いけどマハードとマナーは実体化してるんでね。あんたの知らない
力で。

でもマハードとマナーがいてくれるとはいえ、この囲みを突破する
のは難しい。どうしようか。

『吾を出せ』

『！』

オレとアリスだけ反応した。

この声は。

「アリス、カードを貸して」

「うん」

オレは1枚のカードを手についた。精霊世界と人間世界を繋いで。

「頼む！ “真紅眼の黒竜”！」

「グオオオオオッ！」

オレが実体化したのはアリスの精霊“真紅眼”。

「馬鹿な！ 今度は“真紅眼の黒竜”だと！？」

デイヴァインとアルカディアムーブメントの人たちが動揺してる。
今の内に、

「早く吾に乗れ」

オレたちは言われるがまま“真紅眼”の背中に乗った。

「脱出するぞ」

“真紅眼”が羽ばたき、飛ぶ。

これなら包囲なんて意味を成さないね。

“真紅眼”がビルの壁を打ち破り、空へと飛び出した。

「凄い」

アリスが感嘆の声を漏らしてる。無理も無いね。こんなことは普通有り得ない。

でもちよつと待てよ、この状況はマズインじゃ。

「今“真紅眼”は実体化してる筈」

つまり実体化したまま飛んでるから普通の人にも見える訳で。端から見れば“真紅眼”が何故か飛んでるって思われるんじゃ。

「その心配は無いよ」

マナが落ち着き払って言う。どういうこと？

「お師匠様の高等魔術で人の目には見えないようになってるから注意して見てみれば結界のようなものが張られてる。マハードは座禅を組んで呪文を唱えてる。多分かなりの高等魔術なんだろうね。」

「吾は何処に向かえば良い？」

「アリスの家に頼むよ」

「承知した」

時刻は既に8時を回ってる。夏とはいえそろそろ暗くなってきてるし、早くアリスを家に帰しないと家族が心配する。

「ねえ、リヨウ。質問、いいかな？」

「何？アリス」

「この子たちって一体」

アリスは何も知らないんだっ たね。

「えつとね、とりあえずマハードにマナ、“真紅眼”は精霊世界から人間世界に実体化してるんだよ」

「実体化？」

「うん。精霊は触れることはもちろん、普通の人には見ることをさえないことは知ってるよね？」

「うん。リヨウが前に言ってたから」

「それで、実体化はこうして触れることもできるし、普通の人が見ることもできる」

「今はお師匠様のお陰で見えないようになってるけどね。それにアリスちゃんは今も精霊を実体化しなくても精霊を感じることができよ」

マナが説明を付け加えてくれた。

確かにもう感じる事ができるだろうね。スピリットシグナーの力が目覚めたから。

「どうして私は精霊を感じることができるようになったの？」

「その話はもう少し状況が落ち着いてから話すよ」

「そうだな。そちらの方が良かるっ」

“真紅眼”も賛成してくれた。

スピリットシグナーの話をするなら、アリスがもつと落ち着いてからの方がいいだろうからね。

side アリス

なんだか私の知らないことがたくさん出てきた。
リヨウの隠し事ってこのことなのかな？話してくれるって言うてくれたからよかったな。

「ねえ、“真紅眼”」

「どうした、主アリスよ」

「あなたに名前はないの？マハードやマナみたいに」

リヨウに聞いてたから今実体化してる“ブラックマジシャン”と“ブラックマジシャンガール”がマハードとマナってことはすぐに分かった。だとしたらこの子にも名前があると思うんだけど。

「吾に名は無い」

「どうして？」

「精霊には名を持つ者と持たない者が居る。吾は持たない者だ」

そうなんだ。どうしよう。

「アリスはきつと呼びにくいんじゃないかな？ “真紅眼” って呼ぶのは」

流石リヨウ。よく解ってくれてる。

「そうなのかな？」

「うん、ちょっとだけ。それに名前と呼んであげたかったから」

「そうか。ならば吾が名を主アリスに決めて頂きたい」

「ええ!？」

「主アリスが吾が名を決めるならば、文句は無い」

「そうだね。そう言ってるんだし、アリスが決めてあげていいんじゃないかな」

い、いきなりだなあ。どうしよう。うん。

「シン、なんてどうかな？」

「シン、か。良かろう。」

之より吾が名はシンだ」

「うん。よろしくね、シン」

私の大事なパートナーだから。
よろしくね、シン。

s i d e o u t

「マハード、大丈夫？」

アリスの家に到着した。

着くまでずっと高等魔術を唱えていたマハードはかなり疲れててよ
うに見える。

「少し休めば大丈夫だ」

「ありがとう、マハード。」

マナ、マハードを頼むよ」

「はい」

「吾も戻るとしよう」

「シンもありがとね」

「気にするな」

マハードとマナ、シンは精霊世界へと戻っていった。

オレとアリスは家に入る。

「あら、お帰りなさい。アリス」

「ただいま、母さん」

出迎えてくれたのはアリスの母親、マリア・ルシエさん。
アリスと同じ綺麗な金髪、端正な顔立ち。エプロンをしてるから食事の準備をしてアリスを待ってたんだろうね。

「すみません。遅くなってしまつて」

「いいのよ。リヨウ君も上がつて。お腹すいてるでしょうっ？ご飯、食べていくといいわ」

「ありがとうございます」

オレは遠慮なく上がらせてもらった。

アリスの家に上がらせてもらうのは久しぶりかな。
そろそろあの子が出て来ると思うけど。

「ワンッ！」

「エリー！」

出て来たのはルシエ家の飼い犬、エリー。
小さくて赤い犬？

違うよ。エリーはちょっと黄色っぽい毛で、とてつもなく大きい。
立てば人とそれ程差がないくらい大きい。

「ワンワンッ！」

「ふふ、いい子にしてたみたいだね」

アリスとエリーがじゃれ合ってる。
家に帰って来た時の恒例行事らしいけどね。

「アリス、おかえ」

あ、ヤバ。

「何故貴様がここにいるううううううっ!?!」

オレに対してそう叫んだのはアリスの兄、クラウド・ルシエさん。
この人はアリスやマリアさんと違って黒髪。普通にすれば格好良
い人だと思うけどシスコン。

「君を招いた覚えはないっ!」

「もう、ダメだよクラウド。リョウにそんなこと言っちゃ」

「いや、僕はアリスに彼氏なんて断固認めない!」

これもオレがこの家に来た時の恒例行事。初めてじゃないんだから
早く諦めてくれればいいのに、と思ってる。
それでこの後どうなるかというと、

「もう、しょうがないなあ。エリー」

「ワンッ!」

「クラウドが聞き分けないから少しお仕置きしてくれる?」

「ワンッ!」

まるで人が答えたかのような返事。
エリーがクラウスさんに飛び付く。

「こら、辞めるエリー！僕は悪くないんだ！うわあっ！」

あの大きさにのしかかれたら堪らないよね。毎回思うけど。

「それじゃ、ご飯にしましょうか」

「うん」

何事も無かったように食卓に足を運ぶあたり、もう慣れたんだろうなあ。

「リヨウ君も遠慮なく食べてね」

「ありがとうございます」

『いただきます』

『ご馳走様でした』

美味しかった。毎回文句の付けようがない。

「リヨウ君はこの後どうするの？すぐに帰るかしら？」

返事をしようとしたその時、点いていたテレビを見て返事ができな

くなつた。

アルカディアムーブメント崩壊

ニユースで報道されている内容だった。それに周辺の地域住民が消えているらしい。これは一体？

『ダークシグナーの仕業だね』

出て来たのはマナ。

「マナ、ダークシグナーって」

『うん。シグナーの宿敵のことだよ』

やっぱりか。

シグナーの闘いはもう始まつてるから。

「十六夜さん、大丈夫かな」

『まだ闘いは本格化してないから多分大丈夫だと思うけど』

「地域住民の人たちが消えてるっていうのは？」

『私にも詳しくは』

解らないか。

『とにかく、夜に出歩くのはできるだけ避けた方がいいよ。シグナーとダークシグナーの闘いが行われるのは夜の筈だから』

夜 か。それなら、

「マリアさん、オレはすぐに帰ります。

それからマリアさんたちはできるだけ夜の外出は控えてください」

「そのニュースに関係してるのかしら？」

なんでこの親子はこんなに鋭いんだ。

マリアさんに説明することはできないし。

「解ったわ。リヨウ君がそう言うのなら、止めておいた方がいいわね」

流石マリアさん、話の解る人だね。

「でも今は夜だよ。夜に出歩くのがダメなら、リヨウが今から外出するのもダメだよ」

「アリスの言う通りね。リヨウ君が今から外出するのもダメなんじゃないかしら？」

「それはそうですが」

「折角だから家に泊まっていくのはどうかしら？」

はい？

「そんなことは絶対に認めんぞおおおおおっ！」

「エリー」

「ワンツ！」

「うわあっ！」

今の一部分は置いておいて、

「それは流石にマズインじゃ」

「そんなことはないわ。ね、アリス」

「うん」

満面の笑み。そんなに嬉しいんだ。

「ですが」

オレは反論しようとした。流石にこれは良くないと思ったから。でも途中で打ち切られた。なぜなら、

「リヨウは 嫌なの？」

満面の笑みから一転、涙目。そして上目遣い。

「うっ」

この攻撃をかわせる奴は男じゃありません。
結局オレは打ち負かされ、泊めてもらうことになった。

「さ、どうぞ。入って」

アリスの部屋。

部屋に入るのは初めてじゃないけど、相変わらずいい匂いがする。

「ここで寝てね。他に部屋が無いから」

他の部屋はマリアさんとクラウドさんの部屋だけ。

「オレはリビングでもいいよ?」

「ここで 寝る?」

なんでアリスはこんなに積極的なんだろ。今日キスしたから?」

「床にお布団敷くから」

そりゃそうだよね!。一緒に寝る訳ないよね!。

「な、なんなら二人でベッドでもノ」

顔を真っ赤にして言わないで。オレまで照れるから。

「えっと、それは流石にマズすぎるから布団で」

オレは一応良識を持ってるつもりです。年頃の女の子の家に泊めてもらいますけど。

時は流れて今はアリスがお風呂に入ってる。

オレはマリアさんが話があるらしくリビングに。

「今日は泊めてもらってすみません」

「いいのよ。気にしないで」

「ありがとうございます。」

それで話というのは何でしょうか？」

「貴方にきちんとお礼を言いたくてね」

お礼？

「貴方のお陰でアリスはあんなにも変わったわ。貴方が変えてくれたのでしょっ？」

「オレは大したことは」

「謙遜は止して頂戴。貴方のお陰だって、あの子は口々に言っわ」

オレは照れ臭くて頬をポリポリとかく。

「だからお礼を言わせて貰っわ。ありがとうございます」

「いえ」

こんなお礼を言われた後だけオレはマリアさんに無理なお願いをしなくちゃならない。

「どうかしたかしら？」

「一つ、いいですか？」

「何かしら？」

「言いくいのですが、アリスがこれから危険なことをする」とになるかもしれません」

「それはどういふことかしら？」

「詳しく説明することはできません。数日帰って来ない、ということもあるかもしれません」

「その様子だと本当に事情を話してはくれないみたいね」

「すみません。」

ただアリスのことはオレが責任を持ってこちらにお返しします。約束します」

「貴方はまだ子供よ。親として、自分の子を貴方に預けることはできないわ」

やっぱり無理か。アリスはスピリットシグナーとして闘うかもしれない。そのことをマリアさんに伝えておく必要があったんだけど。

「と、普通の親なら言つてしょうね」

「え？」

「貴方になら、十分アリスを任せられるわ。私はそう思う」

「あ、ありがとうございます」

「ただし、アリスとリョウ君、二人無事に戻って来ること。これが条件よ」

「はい！約束します」

よかった。これで大丈夫そうだね。

その後は他愛のない身の上話。アリスのことやオレ自身のこと。

この話で初めて知ったけど、エリーはアリスの誕生日プレゼントらしい。アリスは前々から飼ってみたいって言ってたのは知ってるけど。

エリーは人懐っこい。特にアリスには甘えてるように見える。アリスがそれを拒む筈はないから仲が良い。オレにも懐いてくれるし、エリーは賢い犬だね。

「それにしてもアリスは素敵な彼氏を見つけたものね。羨ましいわ」

「な、何言ってるんですか！？」

「そんなに動揺することないわ。格好良く整った顔にルックス。大抵の女の子は貴方のことを格好良いと思うわ。加えてその優

しくてもの想いな性格。アリスが苦労するのもよく解るわ」

「そ、それを言うならアリスも可愛くて美人ですし、性格も良くて」

「あらあら」

駄目だ。この人に勝てる気がしない。遊ばれてる。

「二人で何のお話してるの？」

アリスがお風呂から上がってきた。

「ふふ、何でもないわ」

「？」

「ほら、二人とも早く部屋に行きなさい。早く寝るのよ」

「うん」

マリアさんにはできるだけ逆らわないようにしよう。

再びアリスの部屋。床に布団を敷いて、寝る準備をした。

「リョウ、この痣のこと、教えてくれる？」

「明日オレの家に行こう。そこで何もかも話すよ」

「今からでも」

「ここだとマリアさんとクラウドさんに聞かれるかもしれないから。それに今日はもう遅いよ」

「解ったよ。その代わりに全部話してよ？」

「うん。約束する」

「じゃあ寝ようか。おやすみ、リョウ」

「おやすみ、アリス」

こうしてオレとアリスは眠りについた。

第二十話：お泊り（後書き）

なんかマハードの魔術が何でも有りになってきてます。その内魔法陣なんかも出しちゃうかもです。

アリスの家族が初登場。家族構成はフェットと違ってエイミ〇さんがいません。ア〇フもいません。代わりにエリーがいますが。

それでは、感想や意見等ありましたら是非お願いします。

グッチーでした。

第二十一話・理由（前書き）

今回もデュエル無しです。

実体化していない時の精霊の台詞は『』にしています。
それでは、どうぞ。

第二十一話：理由

時刻は午前9時。

オレとアリスは既にオレの家に向かっていた。話すべきことはたくさんあるし、時間には余裕を持った方がいいということであらう。アリスの家を出た。

アリスの家からオレの家まで歩いて約10分。同じトップス出身だからけっこう近所なんだよね。

そんなこんなでオレの家に到着。

あれ？誰がいる？

あの人は、

「遊星！」

遊星が家の前に立っていた。サテライトから戻って来てたんだ。

「帰って来たか。朝早くから済まない」

「いや、オレの方こそ家にいなくて悪かったね。どうしたの？」

「少し話があつてな」

「　　ダークシグナーのこと？」

「　　何故それを　　？」

まさか、襲われたのか!？」

「大丈夫だよ。ちょっと事情があつて知ってるんだ」

「そうか」

「とにかく中に入って。話はそれからゆっくりできるよ」

「ああ」

「アリスも入つて」

「うん。お邪魔します」

アリスと遊星を招き入れた。

家には相変わらず誰もいないからゆっくり話もできるしね。

オレはアリスと遊星に簡単なお茶を出した。

「簡単なものだけどよかつたら飲んで」

「ありがとう」

「それで、遊星の話っていうのはダークシグナーのことだよな？」

「ああ。だが」

アリスに一瞬目をやった。遊星もアリスのことを巻き込みたくないと思つてるんだね。でもオレはもうアリスと一緒に闘つことを覚悟してる。

「アリスも関係者だよ。ね、アリス」

「どういうことだ？」

「この痣のこと？リヨウ」

アリスが自分の青き痣を見せる。

「やはりアリスにも痣があったか」

予想してた反応だね。流石遊星、「スターダスト」と同じ予想だ。

「遊星の話はやっぱり後から聞くよ。まずはオレの話を聞いてもらおうかな」

「解った」

遊星にも話しておいた方がいいだろうね。お互いのシグナーの意味を理解しておいた方がいいと思う。

オレは精霊世界で聞いたことを一つ一つ話した。オレが眠っている間に精霊世界に導かれていたこと。そこで聞いたシグナーとスピリットシグナーのこと。そしてファントムとの闘い、闇のデュエル。

話し終わった時には三人の間に沈黙が流れた。誰も話そうとはしない。一気に話したから理解が追いつかないのかもね。

「いきなり全部話すのはマズかったかな？」

「その話は本当なのか？」

なるほどね。信じることができないか。無理も無いね。だったら、

「スピリットシグナーの力を見たら少しは信じてくれるかな？ マ
ハード、マナ、実体化してくれる？」

「いいよ」

二人が実体化して姿を現す。

「なっ　！？」

遊星のこんなに驚いた顔は初めて見るね。実体化のことも話したの
に。

「これが実体化だよ、遊星。アリスは昨日見たことあるから解ると
思っけど」

「うん。私にもできるの？」

「恐らくまだ無理だ。精霊世界の感覚に慣れる必要がある」

「だから近い内に精霊世界に来てね」

マハードとマナが順に説明してくれた。アリスには確かに精霊世界
に行ってもらっ必要があるね。

「精霊世界にはどうやって行くの？」

「最初はオレが連れて行くよ。次からは身体が慣れてくれるらしいから」

「そうなんだ」

その辺についてはオレもよく解らないんだけどね。

「マハードとマナで間違いないか？」

「はい。お初にお目にかかります、不動遊星殿」

「お初にお目にかかります」

マナの敬語に違和感あるなあ。それだけ嫌なんだろうね。

「 どうやら全て本当のことらしいな」

「納得して頂けたでしょうか？」

「ああ。お前たちのお陰でな」

遊星が納得してくれたみたいだね。それならもう一つ驚いてもらおうかな。

「ちなみにこのことを教えてくれた精霊は近くにいますよ」

「近くに？誰かが持つてるカードなの？」

「遊星が持つてるよ」

「オレが？」

「うん。そのカードは、遊星のエース“スターダスト・ドラゴン”」

「“スターダスト”だと!？」

おおーっ、また驚いてくれたみたいだね。これは流石に予想外だったかな。

「精霊だったのか」

遊星には精霊を感じる力が無いから分からないだろうけどね。多分今でも陰から見守ってくれてる筈だよ。

「リヨウ、スピリットシグナーは何人分かってるの？」

「まだオレとアリスの二人だけだよ。後三人は力が目覚めてないから」

「だから捜さないといけないんだね」

後の三人はどこにいるのかも分からず、手掛かりも一切無い。アリスが覚醒して二人に増えたけど捜すのに時間がかかることに変わりはない。

「さてと、そろそろ遊星の話聞いてよう」

「そうだね。遊星さん、サテライトで何かあったの？」

「ああ。だが、今の話を聞く限りではダークシグナーの相手は

オレたちだ。お前たちスピリットシグナーには関係」

「無い、なんて言うのか？遊星」

「」

「オレたちは仲間だろ、遊星。仲間のことなら心配するし、力になりたいと思う」

「私も同じだよ」

「仲間」

「何か悩んでるね？」

遊星の顔はどこか苦しげに考えるようだった。悩んでることくらいなら誰が見ても感づくよ。

「オレはサテライトで」

ポツリポツリと話し始めた。

かつての仲間との以外過ぎる再会。その仲間はダークシグナーとして死の淵から甦ったらしい。

「マハード、マナ。そんなことが有り得るの？」

「無い　と思うけど」

「有り得ない現象だが断言はできない。私の知では解らない」

「 そうか 」

遊星がまた語り出した。今度の話は衝撃だった。

「 地縛神 」

召喚されたダークシグナーの切り札、地縛神 。
その召喚条件は 、

「 人々の魂 」

「 そうだ 。 オレはサテライトの人々の魂が地縛神に吸い込まれる光景を確かに見た 」

マハードとマナをちらりと見た。二人も気付いてくれたけど、静かに首を振った。二人とも知らないみたいだね 。

「 その現象 、 昨日のニュースで地域住民の人たちが消えたのと同じなんじゃ 」

「 やはりシティでも地縛神が現れていたか 」

昨日の謎の現象はマナの言った通りダークシグナーの仕業。

「 マハードとマナに聞きたい。消えた人々はどうなる? 」

「 私たちにも解りません。ダークシグナーに関しては謎が多過ぎるのです 」

「 ですが、私たち以外なら解るかもしれません。シグナーについて

詳しいあの方なら或いは「

？」

オレたち三人に疑問符が浮かんだ。誰だろ？

「スターダスト・ドラゴン」

なるほど、確かに知ってるかもしれないね。

オレは遊星にカードを借り、目を閉じた。

(話は聞いていた。確かに私は知っている)

“スターダスト”の声が聞こえる。精霊世界に繋がったんだ。

(久しぶりだね。教えてくれないかな？)

(教える。だが、お前とアリスが精霊世界に來い。話はそれからだ)

(今じゃ駄目か？)

(それなら今から來るといい)

教えてくれそうにないね。遅かれ早かれ出向かないといけないから、別にいいか。

(解ったよ)

オレは目を開き、精霊世界との繋がりを閉じた。

「どうだ？」

「オレとアリスが精霊世界に來いってさ。話はそれからだって。どうする？」

「私は構わないよ」

「リヨウ、アリス。頼んでいいか？」

「うん。早速行く」

ピンポーン！

家のインターホンが鳴った。誰か來たのか？

「ちょっと待ってて。誰か來たみたい」

オレはインターホンに向かい、來訪者に応答した。

「どちら様でしょうか？」

「私は議員をやらせて貰っている」

「議員さんが何かご用でしょうか？」

「あ、いえ。リヨウ君はいらっしゃるでしょうか？」

オレ？議員さんがオレに用がある？

「リヨウは自分ですが」

「丁度良かった！君に話があるんです」

「議員さんがオレに　　ですか？」

「　　私は十六夜アキの父親の十六夜英雄です」

十六夜さんの父親　　？

家に入れるべき　　かな。

玄関に向かい、扉を開けた。

「君がリヨウ君ですか？」

「はい。どうぞ中にお入りください」

十六夜さんの父親を家に招き入れ、リビングに座ってもらった。

アリスと遊星は静かに席を移動してオレの両隣に座った。

マハードとマナは精霊世界に戻ってるみたいだね。流石、気が利くね。

「改めて、私は議員をやらせて貰って　　いや、十六夜アキの父親の十六夜英雄です」

隣の二人が少し驚いた顔をしてる。

「十六夜さんの父親が、オレに何の用があるのでしょうか？」

「君にアキを救って欲しい！」

は？いきなり過ぎて何のことだか。

「今アキは昏睡状態で意識が、意識が無く」

。 ダークシングナーに襲われてたんだ。

「私たちでは駄目なんだ！親なのに、あの子に何もしてあげられない！」

「少し落ち着いてください。何も解りません」

「私、お茶いれてくるね」

「うん。お願い」

アリスが十六夜さんのお茶を用意し終わるまで待つて、話が再開された。

十六夜さんが話してくれた内容は娘の過去。

議員生活の忙しさで、娘に時間を割いてあげられなかった。そのことが災いして孤独を感じるようになったんだろうね。自分より仕事を優先してると思って。

その気持ちは解る気がする。オレ自身、幼い頃から両親は仕事で家にいなかった。いくらマハードとマナがいたとはいえ、孤独を感じるがあった。でもアリスに出逢ってその気持ちは少し安らいだのかもしれない。十六夜さんにはそんな友達がいなかったんだろうね。

そんな時に時間がようやく取れて、二人でデュエルをしたらしい。その時に突然入った仕事。その事実を認めたくない十六夜さんがデュエルを続行して、サイコの力が目覚めた。その力に恐れて口から出てしまった一言、化け物。

「取り返しのつかない一言でした」

side アリス

「取り返しのつかない一言でした」

そうだね。実の親にその一言を言われたら、心を閉ざすのも無理はない。

私だって、もし母さんにそんなことを言われたら。それから、十六夜さんはデュエルアカデミアに預けられた。アカデミアでもサイコの力をコントロールできないから孤独になるばかりで。

私とリヨウもいた筈だけど面識が一切無かった。私たちが気付いてあげられてたら。

孤独に耐えられなくなった十六夜さんは、アカデミアを抜け出して家に戻って来たらしい。家にいたのは楽しそうに笑ってる両親の姿。一体どんなに辛かっただろう。きっと、自分は捨てられたと思って。

「娘の、アキの心は固く閉ざされていて、私の声は届かない!」

「オレにその心を開いて欲しい、と」

「お願いします！私は、あのジャック・アトラスから聞いた。フオ
ーチュン・カップでアキを助けようとした君なら、必ずアキを救い
出してくれると！」

確かにリヨウなら、もしかしたら。でも、リヨウはどうするのかな。昨日あんなことがあった矢先
で。

side out

さて、こんなお願いをされてるけど、どうするかな。まあ選択肢な
んでオレには無いんだけどね。

困ってる人が目の前にいるのなら、オレは全力で助けてあげたい。
その人の力になりたい。

でもその前に、一つだけ確認したいことがある。

「仮にオレが娘さんの心を開いたとします。その後、どうするおつ
もりですか？」

「それはどういう？」

「娘さんが心を開いたとして、その後親であるあなたが娘をどうす
るかということです」

これだけは聞いておかないといけないことだった。

例えばオレが十六夜さんの心の扉を開くことができたとしても、オレ
がデイヴァインの代わりになるような存在だと意味が無い。十六夜

さんが帰るべき場所に帰る為には、両親との和解が必要不可欠。十六夜さんがオレだけじゃなく全てに心を開く為にも、両親の力は必要だと思う。

「私は　あの力が恐ろしい　。いくら取り繕っても、そのことから逃げることは出来ない」

「オレだって、怖いですよ」

「」

「誰だって怖いですよ。怖くない人なんてきつといません」

「それなら君はどうして」

「放っておけないから。ただ、それだけです。」

怖い、怖くないは関係ありません。大事なのはその人のことをどれだけ想うことができるか、だと思います」

放っておけない。

困ってる人を助ける理由なんてオレにはそれで十分。

「　私は、想いを閉ざしてしまっただ。その先にある、当たり前
前の気持ちにも気付かずに」

「どうしますか？」

「　私は、私たちはアキを愛している。それだけです」

「はい」

十分ですよ。その思いがあれば。

「オレでよければ、力になりますよ」

「ありがとうございます！早速出発しよう。面に車を停めてあります」

「行こうか、二人とも」

「やっぱりリヨウらしい答えだったね」

「十六夜を頼む」

みんなで車に乗り込み、出発した。

「みんな！」

オレたちは病院に着いて十六夜さんの居場所に向かうと、龍亞、龍可、ジャックさんがいた。

「どうぞ、こちらです」

病室に入れてもらい、十六夜さんに近寄った。

意識はまだ戻ってないみたいだね。どうすれば。

「何だ！？」

全員の痣が突然輝き出した。

オレたちの痣が呼応してる。

「うん」

十六夜さんが目を覚ました。
痣の力が働いたんだろうか。

「リョウ。助けに来てくれたの？」

「うん。大丈夫かな？」

「ええ。っ!？」

十六夜さんの反応がおかしい。こんなに驚くことがあったかな？

「何故貴方がここに!? もう私にお前は必要無い! 私にはディヴァインが」

十六夜さんの反応の対象は両親の二人。これだけの反応ということは、それだけ両親に心を閉ざしてるってことか。

「ああ ディヴァインは、もういない。ディヴァインは言ったのよ、もう考えなくていいって」

「十六夜さん、落ち着いて」

「ディヴァインはパパが取り上げたものを与えてくれた。帰って来られる居場所を与えてくれた。その居場所が無くなった今、貴方は私を笑いに来たのね!？」

「十六夜さん、落ち着いて！何のことが解らない」

「どうせ、どうせアルカディアムーブメントが貴方たちにあんなことをしたから、その仕返しに私を笑いに来たんでしょう！？
だったらもう一度、見せてあげるわよ！化け物の力を！」

混乱してる。。
ダイヴァインさんもいなくなって、どうしていいかも分からない状態だね。。

突風が吹き荒れる。サイコの力が。。

「十六夜さん、あなたのお父さんも苦しんでるんだ」

「煩い！ 貴方も敵よ、私から居場所を奪う 敵！」

デュエルディスクを構えてる。十六夜さんの心に声を届かせるには、
やっぱりデュエルしかないのか。。

「そうよ！やはり私たちは闘う運命なのよ！」

「違う！このデュエルは仲間であることを確かめる為のデュエル！」

「待つて、リョウ」

「アリス？」

アリスもデュエルディスクを構えてる。何を？

「私も一緒にしてもいいかな？」

あの娘の気持ち、私にも解るから。私もあの娘を助けてあげたい」

「いいわ、二人纏めて叩き潰してあげる！」

「危険だよ？」

「大丈夫だよ」

笑顔 か。

アリスには多分、オレより十六夜さんの気持ちが解るんだろうね。オレとしても、アリスと一緒に闘ってくれるのは心強い。

「一緒に十六夜さんを」

「うん。助けてあげよう」

マハードやマナにもまた無理をさせることになるかもしれない。後で謝らないといけないかな。

「始めるわ！」

「「「デュエル！」」」

第二十一話：理由（後書き）

今回は十六夜アキとのデュエルです。リヨウ&アリスVS十六夜アキの変則デュエルになります。ルールはまた次に説明しますが普通のデュエルとほぼ変わりません。

一応第一期をダークシングナーまでという予定です。もう少しで第一期が終わります。

第二期でもよろしく願います。

グッチーでした。

第二十二話：心の扉（前書き）

やっとデュエルです。

今回は変則デュエルですので軽く説明を。

場はリヨウとアリスで共有。ターンはリヨウ アキ アリス アキ

リヨウ といった感じですよ。

少しおかしくなってしまった気がしますが、間違いがあれば御指摘
お願いします。

それでは、どつぞ。

第二十二話：心の扉

「『デュエル！』」

「オレのターン。手札から“見習い魔術師”を守備表示で召喚」

DEF / 800

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン、ドロー！“イービル・ソーン”を召喚！」

ATK / 100

「効果発動！このカードをリリースして、300ポイントのダメージを与える！」

「うっ！」

リョウ&アリス LP 3700

確実にライフを削ってきたか。

「リョウ、大丈夫？」

「うん、問題ないよ」

「さらにデッキから2体の“イービル・ソーン”を攻撃表示で特殊召喚する。」

手札から魔法“クローズドプラントゲート”発動！自分場上に植物族の同名モンスターが存在する場合、相手は次のターン、攻撃宣言できない。
ターンを終了」

「私のターン」

アリスのターンだけど、攻撃はできない。このまま2体のモンスターを残してしまう。

「私は“ミンゲイドラゴン”を守備表示で召喚」

DEF/200

「カードを1枚伏せて、ターン終了」

結局、2体のモンスターは残ったまま。

「私のターン！チューナーモンスター“夜薔薇の騎士”を召喚！」

ATK/1000

「効果により、手札から“ダーク・ヴァージャー”を特殊召喚！」

モンスターの合計レベルは7。

本当に叩き潰すつもりだね。

「レベル1の“イービル・ソーン”2体と、レベル2の“ダーク・ヴァージャー”にレベル3の“夜薔薇の騎士”をチューニング！」

「アリス、来るよ！気をつけて！」

「うん！」

「冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の花よ、開け！
シンクロ召喚！“ブラック・ローズ・ドラゴン”！」

“ブラック・ローズ・ドラゴン”の召喚により、一段と強い突風が吹き荒れる。

「効果発動。墓地の植物族モンスター1体をゲームから除外して、相手場上の守備表示モンスター1体を攻撃表示にし、攻撃力を0にする」

“見習い魔術師”が蔓に搦め捕られ、動きを封じられた。

「装備魔法“憎悪の棘”を装備する。これにより“ブラック・ローズ・ドラゴン”の攻撃力は600ポイントアップする」

ATK / 3000

「行け、“ブラック・ローズ・ドラゴン”！奴を引き裂け！
ヘイト・ローズ・ウィップ！」

「畏発動！“強制終了”！オレは“見習い魔術師”をリリースして、バトルフェイズを終了させる！」

なんとかこのターンは凌いだけど、“ブラック・ローズ・ドラゴン”の攻撃力は3000。簡単には倒せない。

「手札から魔法カード“サイクロン”を発動し、“強制終了”を破壊！」

次のターン、攻撃を防ぐことができなくなったか。

「これでターン終了」

「オレのターン！」

十六夜さんのサイコの力は遊星たちにも届いてる。みんなを守る為には、やっぱり力を借りるしかない！

「魔法“古のルール”を発動！レベル5以上の通常モンスターを特殊召喚できる！来い、マハード！」

ATK/2500

「話は大体聞いていた。あの娘を今度こそ救うんだな？」

「うん。その為に、力を貸して欲しい」

「勿論だ！」

マハードがいてくれるならこれ程心強いことは無い。

「オレはカードを1枚伏せて、ターンを終了する」

「茶番よ。結局貴方は口先だけ、誰も助けることなんてできないわ！」

「そんなことない！」

アリスが反論した？

あんなに普段大人しいアリスが。

「リヨウはいつだって一生懸命で、自分のことは二の次にして人のことを思ってくれる優しい人だよ！誰に対しても平等に正面から真っ直ぐ向き合ってくれる人だよ！」

「煩い！アイツも、お前も、私を助けてはくれない。」

唯一私を認めてくれたのはデイヴァインだけ。もう私には帰るべき場所はない！」

「違う！あなたには帰るべき場所があるんだ、ずっと前から！」

両親のところに、自分の帰るべき場所がちゃんとある。

「無いわ。デイヴァイン亡き今、世界に私の帰るべき場所は無い！」

「そんなに向き合つのが恐いの？」

「！？」

「私も恐かった。家族みんな、私から離れていったから」

アリス。

やっぱり、十六夜さんの気持ちは解るんだ。アリスも同じ経験をしてるから。

「でも、家族だから、勇気を出して向き合えば必ず解ってくれる。」

どんなに離れてしまっても、家族であることに変わりはないんだから。

十六夜さんの家族だって、きっと理解してくれる筈だよ。だから

「

「煩い！煩い、煩い、煩い！」

アリスの想い、確かに届いてる。でも十六夜さんに、それを認める勇気が無いんだ。

「私のターン！お前も叩き潰してやる！」

“ブラック・ローズ・ドラゴン”の効果発動！墓地の植物族モンスターをゲームから除外して、“ミンゲイドラゴン”を攻撃表示にして、攻撃力を0にする！」

そうはさせないよ。

「永続畏発動、“ガリトラップ ピクシーの輪”！攻撃表示のモンスターが2体以上存在する時、攻撃力の一番低いモンスターを攻撃できない！」

「ならばお前を攻撃してやる！」

行け、ヘイト・ローズ・ウィップ！」

「ぐっ！」

リヨウ&アリス LP 3200

蔓がマハードを攻撃して、余波がオレに向かって伸びてくる。

「うぁっ！」

蔓に強く打たれた。

その蔓がさらに遊星たちに向かって伸びていく。

「マハード！」

マハードの杖が輝く。すると遊星たちをバリアのようなものが護ってくれた。

「済まない、リヨウ、マハード。助かった」

遊星たちも護らなくちゃならない。オレたちがいくら傷付けられたとしても。

「“憎悪の棘”の効果で破壊することはできないが、攻撃されたモンスターの攻撃力と守備力は600ポイントダウンする」

ATK / 1900

マハードの身体に傷痕が残ってる。

「マハード、大丈夫？」

「心配はいらない。何度攻撃されようと、何度でも私は耐える」

マハードは必死に闘ってくれてる。

オレも十六夜さんを。

side アリス

私の声は十六夜さんに届いてるのかな。
ただ何度でも語りかけるしか方法は無い。リョウが私にしてくれ
たように。

「私のターン」

リョウは既にマハードを召喚した。だったら私も自分の信じるカ
ードで想いを伝えなくちゃならない。

「“ミンゲイドラゴン”はドラゴン族モンスターのアドバンス召喚
の場合、2体分のリリースとすることが出来る」

私と一緒に闘って！

「来て、シン！」

ATK / 2400

「“真紅眼の黒竜”、コイツがアリスの精霊なのか？」

遊星さんが言ってるけど、その通りだよ。この子が私の精霊。

「吾も話はおおよそ伺っている。吾も力になるう」

「ありがとう、シン」

シンが一緒なら心強いよ。

「私はターンエンド」

「私のターン！」

今度こそ叩き潰してあげる！

“真紅眼の黒竜”を攻撃！ヘイト・ローズ・ウィップ！」

「グッ！」

リヨウ&アリス LP 2600

蔓が私にも伸びてくる。

「きゃあっ！」

「アリス！」

「う、大丈夫」

蔓に強く打たれるのは痛い。だけど、あの娘の心はもっと痛い筈だよな。

「シン、大丈夫？」

「心配するな」

シンの身体にも傷痕が残ってる。

ATK / 1800

「私はカードを1枚伏せて、ターン終了。」

簡単に倒してなんかやらない。もっといたぶってあげる」

「オレのターン。カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン。“ブラックマジシャン”に攻撃！ヘイト・ローズ・ウィップ！」

「ぐう」

リヨウ&アリス LP 1500

ATK/1300

リヨウとマハードが傷付いていく。それでも二人とも前を向く。真っ直ぐ向き合おうとしている。

「ターンを終了」

「私のターン」

駄目。今の手札に対抗する手立てが無い。

「カードを1枚伏せて、ターン終了」

「とうとう手が無くなったようね。そうよ、それが本来の姿。貴方たちが人を助けることなんて、人を救うことなんて、できないのよ！」

「そうかもしれないね」

「!?!」

リヨウ！？何を？

「救ったつもりで救えてないのかもしれない。

それでもオレは、目の前で苦しんでる人を見過ごすことなんてできない。見て見ぬ振りをするのができないだけだよ」

「」

「一人でも多くの人に幸せになつて欲しい。ただ、そう願って行動してるだけだ」

本当にリヨウらしい答え。だから私も。

「結局、貴方はそう言うだけ。

デイヴァインはどんなに辛くても帰って来られる居場所を与えてくれたんだ！」

「だから私たちは本来あなたが帰るべき場所に帰そうとしてるんだよ」

「嫌い！私のターン！」

もう一度、奴を引き裂け！ヘイト・ローズ・ウィップ！」

シンに攻撃が向かってくる。

「止める、アキ！これ以上人を傷付けることは止めるんだ！」

十六夜さんのお父さんが割り込んで来た！？

このままじゃ直撃する！

「畏発動！“攻撃の無力化”！攻撃を無効にして、バトルフェイズを終了する」

これで防いだけど、

「済まなかった、アキ。私がいけなかったんだ」

「止めて、今更何を言ったって」

「そうだ。誤魔化しは無しだ、正直に言う。私はお前の力が、お前が恐かった」

「解っていたわ。だから貴方は私を捨てた、私が化け物だから！」

「そう、私はあの時考えることを止めてしまったんだ。その先に、当たり前前の気持ちがあることにも気付かずに。

だがようやく気付いた。いや、気付かされた。私は、私たちは、お前を愛している」

「そんなこと、信じるんでも!？」

「信じてくれ等とは言わない。いや、私たちが信じるべきだったんだ。お前を愛していたのだから」

「嫌い！」

「十六夜さん、逃げちゃ駄目だ！しっかりお父さんと向き合っただ！」

「お父さんならあなたをきつと受け止めてくれる筈だよ！だから」

「煩い！お前たちのターンだ！」

まだ向き合ってくれない。でもきつともう少しの筈。だからもう少し。

side out

「オレのターン！」

来ない！あのカードさえ来てくれれば。

「オレはカードを1枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン！行け、今度こそ、パパを叩き潰して！」

攻撃が十六夜さんとシンに向かっている。

「畏カード“ガード・ブロック”！戦闘ダメージを0にして、カードを1枚ドロウする」

また来てくれないか。

「だがこの攻撃により“真紅眼の黒竜”の攻撃力はさらに600ダウンする」

ATK/1200

「手札から“ファイヤー・ボール”発動！500ポイントのダメージを与える！」

マズイ！防げない！

リヨウ&アリス LP 1000

「下がってください！」

「ぐああっ！」

十六夜さんに直撃した。そのままじゃ十六夜さんが。

「ターン終了」

「私のターン」

アリスが苦虫を噛むような顔をしてる。アリスにも手が無いんだ。

アリスがこつちを見つめてきた。オレは黙って頷いた。

あのカードが来れば、いける筈だから。

「私はこのままターンを終了」

「私のターン！今度こそ、今度こそ叩き潰して！」

行け、“ブラック・ローズ・ドラゴン”！」

蔓がマハードに向かって伸びてくる。

「罨カード“和睦の使者”！このターンの戦闘ダメージを0にする！」

アリス！助かった！

「“ブラックマジシャン”の攻撃力は600ダウンする」

ATK/700

「罨発動！“セメタリー・ボム”！相手の墓地のカード1枚につき、100ポイントのダメージを与える！」

オレたちの墓地のカードは 7枚！

「700ポイントのダメージを与える！」

リヨウ&アリス LP 300

「ぐあああつ！」

突風がさらに吹き荒れてる。それに効果は終わってるのに十六夜さんの力が止まってない。

その十六夜さんは苦しそうに目を見開いてる。力が暴走してるんだ。

「アキ、戻って来てくれ。私たちの下に」

十六夜さんが歩を進めていく。

「駄目です！それ以上は本当に危険です！」

「良いんです。私はもう、アキから目を逸らさない。アキの囁きを聞き逃さない」

「来るな、来るな！」

「「アキ！」」

オレとアリス、二人同時に彼女の名前を呼んだ。

「そこにちゃんといるんだ。あなたを受け入れてくれる人が、あなたの帰りを待つてる人がいるんだ！」

「その人のいる場所こそが、アキの帰るべき場所なんだよ！」

「嫌、嫌」

「だったらアキが纏うその殻を、間違った憎悪を粉々に砕いてみせる！」

オレのターン！」

来た！ありがとう、みんな！

「魔法カード“黒・魔・導”発動！“ブラックマジシャン”が場に存在することにより、相手場上の魔法・罠カードを全て破壊する！」

「“憎悪の棘”が」

「“憎悪の棘”が破壊されたことにより、場上のモンスターの攻撃

力と守備力は元に戻る！」

ATK / 2500

ATK / 2400

ATK / 2400

「そしてこのカードが、アキの心を照らし出す掛橋となる！
チューナーモンスター“マジシャンズ・シンクロン”を召喚！」

ATK / 0

「チューナー」

「レベル7のマハードに、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング！」

頼む、みんなの力でアキの心を！

「黒き魔術が集いし時、新たな光の力が目覚める。光差す希望と為れ！」

シンクロ召喚！舞い降りよ！“SF ブラックマジシャン”！」

ATK / 2900

空中から白銀の翼を持った純白のマハードが降りて来た。

「リョウのシンクロ召喚」

「綺麗」

「マジシャンズ・シンクロン”が魔法使い族モンスターとのシンクロ召喚に成功した時、デュエル中一度だけ場に戻る」

ATK/0

「バトル！マハードで攻撃！」

「くっ！」

「この瞬間暴発動！“マジシャンズ・サークル”！お互いのプレイヤーのデッキから攻撃力2000以下の魔法使い族モンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する！
オレはマナを特殊召喚！」

ATK/2000

「私は“バイオレット・ウィッチ”を特殊召喚」

ATK/1100

「バトル続行！スター・イリュージョン・マジック！」

マハードが放った光が“ブラック・ローズ・ドラゴン”を包み込んだ。

「くっ！」

十六夜アキ LP 3500

「手札にある“ガード・ヘッジ”の効果発動！このカードを手札か

ら墓地に送ること、場上のモンスターの破壊を無効にする！この効果の対象となったモンスターの攻撃力は半分になる」

ATK/1200

「マナ、“バイオレット・ウィッチ”を攻撃！ブラック・バーニング！」

「くっっ！」

十六夜アキ LP 2600

今度はアリスの番だね。

「シン、“ブラック・ローズ・ドラゴン”を攻撃！黒炎弾！」

「くっっ！」

十六夜アキ LP 1400

これで十六夜さんの場にカードは無くなった。なのに十六夜さんの力はまだ収まっていない。

「ぬおおっ！」

マズイ！もう十六夜さんが持たない！

「嫌、止めて、パパを傷付けたくない！」

アキは力をコントロールできてない。どうすれば。

「リョウ、私をアキのところに入れていって！」

アリスに何か考えがあるのか？

「私があきと一緒に力を抑える！」

覚悟有り、みただね。

「解ったよ。マハード、マナ、聞いた通りだ、アリスの道を作って欲しい！」

「マナにはまだこれから役割がある。私がやる」

マハードが杖を構えた。

「勝負は一瞬だ。私が一直線に道を作る」

「承知した。吾が主アリスを無事に辿り着かせる」

頼む、マハード、シン。

side アリス

私はシンに捕まってマハードの準備を待ってる。

私が行ったところで力を制御できるかは分からない。それでも、じつとしていられない！

「よし、いくぞー！」

「お願い、マハード！」

マハードが光輝き、一筋の閃光が一直線に走った。

「行け！」

シンが閃光が走った道に突っ込んだ。

「よし、到着だ！」

私は急いでアキに駆け寄った。

「アキ、落ち着いて。集中して」

アキの腕を掴んで語りかけた。

「貴方、どうして」

「お父さんを傷付けたくないんだよね？」

「でも私は力を」

「大丈夫。アキならできるよ。心を静めて」

「パパ」

そう、願って。
願いは叶うから。

突然部屋中に鳴り響いていた音が止んだ。

「初めて、初めて力を制御できた」

「うん。アキにもできたんだよ」

「アキ」

十六夜さんが倒れた。もう限界だったんだ。そこまで必死になつてアキを。

「パパ！」

「アキ」

アキが何か決心したみたいにリョウに向き合った。

「リョウ、終わらせて、この闘いを」

うん、そうだね。

私たちの場に伏せられた最後のカード。リョウならきつと、あのカードで。

side out

オレはゆっくり頷いた。

「畏カード“緊急同調”。バトルフェイズ中にシンクロ召喚を行うことができる。」

マナ、頼んだよ」

「うん。最後の役目だね」

「レベル6のマナに、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”を
チューニング！

黒き魔術が交わりし時、新たな絆の幕が開く。光差す希望と為れ！
シンクロ召喚！舞え！”SF ブラックマジシャンガール”！」

白銀の翼を持った純白のマナが宙を舞う。

オレはもう一度アキと視線を合わせ、頷き合った。

「今こそ魔女の呪縛を打ち破る時だよ、アキ。このデュエルでアキ
は変われる筈だから。」

マナでダイレクトアタック！スター・イリュージョン・バーニング
！」

十六夜アキ LP 0

「うん」

「アキ」

「パパ」

「済まなかったな。私が例えお前を恐れていたとしても、こうして抱きしめていれば良かったんだ。お前を愛していたんだから」

「私だって、愛してた。好きだった。」

「ただ、良いの？私はこんなにもパパを傷付けてしまった」

「アキ、お父さんは受け入れるって言うてくれる。アキが望めば、そこが居場所になる」

黙って見守っていたオレはそう語りかけた。

「私の居場所は　ここ」

「よかったね、アキ」

アリスの言う通りだね。本当によかった。

「やっぱりあの印は仲間の絆なんだよ。えへへ、オレには無いけど」

「龍亞だって、オレたちの大事な仲間だよ」

「みんな、この痣に引き寄せられる。そして、仲間になっていく。忌むべき印じゃない」

「遊星」

みんな想いは同じ。必ず繋がるんだ。

「でも、私にはかつて信じた仲間がいる。その想いは、まだ私の心にある」

「それでいいと思うよ。みんなそれぞれ、違う想いを持つてる」

「それでも私たちは仲間だよ。そのことに変わりはないから」

「オレにもかつて、そんな仲間がいた。奴の想いとオレの想いがすれ違い、心を削っていく。

今は見えない。その想いがどんな決着を突き付けるのかは。

だが、かつて友と呼んだ同士なら、その覚悟を背負い、オレは進んでいく」

遊星も何かに吹っ切れたみたいだね。

とにかくこれでアキの閉ざされた心を開くことはできた。

これからダークシグナーとの闘いが待ち受けてるけど、仲間との絆があればきつとどんな困難も乗り越えていける筈だよな。

第二十二話：心の扉（後書き）

変則デュエルはどうだったでしょうか？どうか温かい目で見てください。

次回から本格的にダークシグナーとの闘いになると思います。あまり詳しく書かずに省略するつもりではありますが。

前回お知らせした通り、第一期がそろそろ終了の予定です。

これからも頑張ります。
グッチーでした。

第二十三話・サテライトへ（前書き）

題名通りサテライトに行くまでの話です。

それでは、どつどつ。

第二十三話：サテライトへ

side アリス

私はセキュリティの狭霧深影さんがアルカディアムーブメントについて調べた資料をアキと一緒に見ている。

酷い映像だった。映し出されているのは人体実験の映像。

『うわあああつ！』

「これは先日半壊したアルカディアムーブメントから発見された資料です。アルカディアムーブメントに拉致されたと思われる子供たちの 人体実験のデータです」

「っー！」

アキが辛そうな顔をしてる。責任を感じてるんだろうね。

「デイヴァインは能力の高い者を選びすぐり、紛争地域に兵士として貸し出す計画を立てていたようです。その中にはアキさん、貴方も」

「っー！」

アキの驚いた顔。
目の前に突き付けられた真実を認めたくないんだよね。

「っー！」

アキが背を向けて走り出した。

「アキ、待って！」

私もアキの跡を追って走り出した。

部屋から抜け出したアキを落ち着かせる為に、私はロビーにあった椅子に座らせた。

「それでも良かった」

「アキ」

「デイヴァインは私を受け入れてくれた。私にとって、掛け替えのない存在だった」

「それでいいと思うよ」

「アリス」

「アキがどんな過去を持っていたとしてもアキを否定することなんてできないから。」

「私たちにあってアキは必要な人だよ。私たちの仲間だから」

「ありがとう、アリス」

どんな過去を持っていたとしても、か。

この言葉も、私がリヨウに言われた言葉なただけだね。

side out

オレたちシグナーはゴドウィン庭に招かれた。

ゴドウィン長官からシグナーについての話をしてもらった。オレにとってはほとんどマハードやマナ、“スターダスト”に聞いた話と一致していたから新しい事実はそれ程無かった。

ただ気になることが二つ。

一つは五人目のシグナーのこと。ゴドウィン長官は危機になれば必ず現れるって言ってたけど、“スターダスト”はそんなこと一言も言ってなかった。

二つ目は消えた人々のこととダークシグナーのこと。消えた人々は解らないけど、ダークシグナーになってしまった人たちが既に死んでいて、再び甦ったなんてことは信じられない。

“スターダスト”なら何か知ってるかもしれないし、消えた人々についても聞かなきゃならない。早いとこ精霊世界に行かないといけないね。

オレたちはゴドウィン庭から貸し出されたホテルに戻った。

オレはこれからのことの為に遊星と話をしてる。

「アリスが戻って来次第、精霊世界に行くよ。遊星たちは先にサテライトに向かって欲しい」

アリスは一度家に戻ってる。マリアさんと話してるんだろう。オレから話をしておいたから大丈夫だと思っただけだね。

「ああ。情報の方は頼む」

「スターダスト」に何か伝言ある？」

「いつも共に闘ってくれてありがとう、と伝えてくれ」

「解ったよ」

自分のエースモンスターには伝えたい一言かな。
後は遊星本人の問題か。

「鬼柳さんのことは大丈夫？」

遊星とジャックさんの友人でダークシグナーとなってしまうた人。
この人のことで遊星はずいぶん悩んでる。

「解らない。だがオレは、鬼柳に恨まれても仕方がない」

「過去に何があったのかは聞かないよ。
でも例えどんなに離れてても、心は繋がってる。オレたちは仲間だから」

「ありがとう」

遊星は強い。だからきつと正面から向き合える筈。がんばって、遊星。

「リョウ！お待ちせ」

「アリス。マリアさんどうだった？」

「素直に認めてくれたよ。拍子抜けなくらい」

事前に話したからね。その時に認めてくれたから、後はアリスを送り出すだけだったんだろっね。

「じゃあ遊星、行ってくるよ」

「ああ。気をつけてな」

オレは意識を集中させて、精霊世界と人間世界を繋いだ。

「アリス。落ち着いて、意識を集中させて。後は精霊が導いてくれる」

「うん」

オレたち二人を眩い光が包み込んだ。

side アリス

私はゆっくりと目を開いた。

私が見た景色は大きな山が見える谷口だった。

「ここは？」

「精霊世界だよ。無事に着いたみたいだね」

隣を見てみるとリョウが立っていた。

ここが 精霊世界 。

穏やかで、とっても落ち着く所だなあ。

「ようこそ、アリス。精霊世界によく来てくれた」

マハードとマナが姿を現した。

「二人とも迎えに来てくれたんだ」

「そうだよ。私たちが案内役だからね」

「でもマナ、どうやって行くの？前みたいに“カース・オブ・ドラゴン”に頼むのはさすがに無理があるよ」

「心配はいらない。吾が連れていく」

突然私たちを黒い影が覆った。私たちの頭上には日の光を遮ってる黒いドラゴンがいた。

「シン！」

「主アリスよ。吾が故郷、精霊世界へようこそ」

「うん。シンも来てくれたんだね」

「吾は主アリスとリョウを連れていかななくてはならないのでな」

「なるほど、シンなら問題なしか」

「どこに行くの？」

「あの山だよ」

谷の向こうにそびえ立つ神秘的な山。リヨウはその山を指差してる。

「あそこに行くの？」

「うん。“スターダスト”もきつという筈だよ」

私たちはシンの背中に乗せてもらい山に向かった。

山の中の広間に着くとシンは私たちを降ろしてくれた。

「着いたの？」

「うん。ここに来る筈だよ」

「いや、もう来たようだ」

星屑が上から降ってきた。

その光景は幻想的で思わず見とれてしまった。

「綺麗」

「アリス、よく来てくれた。私は“スターダスト・ドラゴン”だ」

「久しぶりだね、“スターダスト”」

「リヨウもよく来てくれた」

軽い挨拶を交わしてる。リョウはもう慣れてるんだ。

「今日は私だけではない。もう一体のドラゴンが来ている」

『？』

ここに来ている全員に疑問符が浮かんだ。何のことだろう。

「私よ」

今度は赤い花びらが散っている。花びらを散らしながらドラゴンが降りてきた。

「ブラック・ローズ・ドラゴン」

「はじめまして、かしらね。リョウ、アリス」

「そうだね。はじめまして」

「はじめまして」

「二人には私の主がお世話になったわ。本当にありがとう」

「うん。気にしないでいいよ」

「うん。私たちが放っておけなかっただけだから」

「そう。それでも私は貴方たち二人に感謝しているわ」

主を思う気持ちはどんな精霊でも一緒なんだね。

「挨拶はこれくらいにして本題に入るぞ」

“スターダスト・ドラゴン”が打ち切って話を進めた。

「今日ここに来て貰ったのは、私にダークシグナーについて聞く為だな？」

「うん。まずは消えた人々がどうなるのか教えて欲しい」

「解った。地縛神に吸収された人々は死んではない。文字通り吸収されただけだ」

「どづいう意味？」

「地縛神の中で眠っている、と思えば良い。捕われているだけだ」

「よかった」

私たち全員が安堵の息を漏らした。

「じゃあどうすれば助け出せるの？」

私はそう質問した。例え生きていても助けないと意味が無いよね。

「地縛神を倒せば良い。つまり、ダークシグナーに勝てば捕われている人々は解放される」

「正直な話、遊星たちは勝てるのか？」

「解らない。だが、シグナーの絆が集まれば必ず勝てる」

「ゴドウィン長官が言ってたけど、五人目のシグナーは遊星たちの危機に現れるのか？」

「その話はおそらく違う。五人目は目覚めているが本当にシグナーか疑わしいと思っている」

「どついう意味なの？」

「シグナーがそれぞれ自分の龍を所持していることは知っている筈だ。だが“エンシエント・フェアリー・ドラゴン”は封印されている。もう一体は眠っている」

「そのシグナーはドラゴンを所持してないんだね」

リョウが答えた。私は五体目のドラゴンが眠ってるのは初めて聞いたけど、今の話は解ったよ。

「つまりその人はシグナーじゃないってことだね？」

「あくまで推測の話よ。断言はできないわ」

「でもゴドウィン長官が言ったことは嘘の可能性が高い訳だね？」

「そうだな」

やっぱりゴドウィン長官は信用できないのかな。

「次の質問、ダークシグナーについて教えてくれ」

「ゴドウィンが言ったことは若干間違っている。ダークシグナーは既に死んでいると言っていたが、正確には死んではいない。仮死状態だ」

「じゃあ救う見込みはあるの？」

「主の為に、私は鬼柳には是非生きて貰いたい。だが救う見込みはあるが、救えるかは分からない。闘うシグナーがダークシグナーの心をこじ開けることが出来れば、全て終わった後に仮死状態から目覚める筈だ」

「十分だよ。遊星は必ず鬼柳さんに正面から向き合う。必ず救ってくれる筈だよ」

「ああ。必ず」

地縛神に吸収された人々とダークシグナーの人たちを無事に助けられたらいいんだけど。

「！」

“スターダスト・ドラゴン”の様子が変わった？何かあったのかな。

「どうかした？ “スターダスト”」

「主が私を呼んでいる」

「ダークシグナーとの闘いがもう始まったのか！？」

「そのようだ。既にサテライトに到着し、ダークシグナーと鉢合わせたのだろっ。」

私は主の下に向かう」

「遊星を頼むよ、“スターダスト”」

「お願いね」

「解っている。ではな」

“スターダスト・ドラゴン”の身体が透けていく。次第に消えてしまった。

「オレたちもすぐにサテライトに行こう！」

「うん、そうだね」

「待ちなさい」

『?』

私たちは“ブラック・ローズ・ドラゴン”に呼び止められた。

「どうしたの?」

「今から急いで戻ってもデュエルには間に合わないわ。それに私はアリスに聞かなきゃならないことがあるの」

私に? なんだろ?

「アリス、精霊世界がファントムから滅亡の危機に晒されている」とは知っているわね？」

「うん。私たちスピリットシグナーが闘う相手だよな？」

「そうよ。そこまで解っているなら話は早いわ。」

アリス、貴方はこの精霊世界の為に闘ってくれるかしら？」

私が 精霊世界の為に闘う 。

「無理にとは言わないわ。ファントムとのデュエルは闇のデュエル、下手をすれば命に関わるから」

闇のデュエルはサイコデュエルよりもずっと危険だってリョウが言ってたね 。

でも私はリョウに話を聞いてから決心してるよ。

「私は闘うよ。この精霊世界の為に。」

シンの故郷でこんなに綺麗な世界を壊されたくないから。それに危険なことをリョウ一人に押し付けられないよ。私にできるなら、私も闘う」

「よく言ってくれたわ。ありがとう、アリス」

「吾も共に闘う。主アリスの傍でな」

「うん。頼りにしてるよ、シン」

「アリスと一緒に闘ってくれるならオレも心強いよ」

「一人で無茶しちゃダメだよ？」

「解ってるよ」

ちよつと怖いけど、リヨウと一緒にならきつと大丈夫だよな。

「アリス、貴方にこれを渡しておくわ」

「これって」

「私が貴方に与える新しい力よ」

スピリットシグナーはシグナーの龍から力を授けられるってリヨウが言ってたね。私は“ブラック・ローズ・ドラゴン”からだったんだ。

「その力が貴方の助けになることを祈っているわ」

「うん。ありがとう」

この新しい力で、これから闘っていくんだね。

side out

「オレたちは人間世界に戻って、サテライトに行くよ」

遊星たちはもう闘ってる。オレもできる限りのことはしたい。

「私の力で直接サテライトにいる主の下に送るわ。その方が都合が
良いわ」

「ありがとう、“ブラック・ローズ・ドラゴン”」

「ええ。これからも、主を宜しくお願いするわ」

「うん。約束するよ」

「じゃあオレたちは行くよ。いろいろとありがとう」

「気をつけて」

オレたちは眩い光に包まれた。

「どうやら帰ったようだな」

「戻ったのね、“スターダスト・ドラゴン”」

「ああ。アリスはどうだった？」

「大丈夫よ。精霊世界の為に闘うと言ってくれたわ。私の力も授け
た」

「そうか。ようやく二人か」

「そうね。まだ先は長いわ」

「焦る時ではない。まだ時間はある。あの二人が見つつけ出すのを待
つしかない」

「そうね」

『リョウ、アリス』

声が聞こえる。それも聞き覚えのある声。

『龍可がダークシグナーと闘う為に私を解放するべく精霊世界へと
赴くでしょう。』

どうか貴方方スピリットシグナーの力を龍可に貸して欲しいのです

『

この声は。

オレたちは目を開くと、自分たちの見覚えの無い場所に立っていた。

「ここは サテライトかな？」

『多分そうだよ。“ブラック・ローズ・ドラゴン”が二人を送って
くれたんだね』

辺りは暗い。もう夜になってたんだ。

「リョウ、さっきの声、聞こえた？」

「聞こえたよ。多分あの声は、龍可の龍、“エンシエント・フェアリー・ドラゴン”」

『恐らくそうであろう。吾等も聞こえていた』

『“エンシエント・フェアリー・ドラゴン”は封印されている。その封印を解いて欲しいのだろう』

「 どうやら、すぐに精霊世界に行くことになりそうだね」

「龍可の為だよ。仕方がないよ」

「そうだね」

それに龍可とは前に約束してる。オレも力になるってね。

「それにしても、遊星たちはどこにいるんだろ？」

『あそこに家があるよ。あの家にいるんじゃないかな？』

確かに家が一軒建ってる。

「行ってみようよ」

他に手掛かりも無いし、行くしかないか。

オレたちは一軒の家に歩を進めた。遊星がいてくれたらいいんだけど。

コンコン。

「夜分遅くにすみません。どなたかいらっしやいますか？」

オレは玄関にノックをしながら尋ねた。

「
」

返事が返ってこない。誰もいないのかな？

「すみませ〜ん！不動遊星さんはいませんか？」

思い切って遊星の名前を出してみた。誰もいなかったら仕方ないんだけど。

「 誰だ？」

返事が返ってきた。でもかなり警戒されてる。 。 玄関も開けてくれない。

「不動遊星って人を捜しているのですが、ご存知無いですか？」

「 お前は誰だ？」

「 リョウといます」

「!
」

バンッ！

玄関がいきなり開かれた。玄関を開けたのは

「リヨウ！それにアリス！来てくれたのか！」

「遊星！」

遊星だった。無事みたいだね。

「あの、遊星さん。どうしてあんなに警戒してたの？」

「ああ、少し事情があるんだ。中に入ってくれ。みんなもいる」

オレとアリスは家の中に入れてもらった。

多分事情っていうのはダーククシグナーのこと。それに遊星の顔はどこか辛そうだった。また悲しいことでもあったんだろうか。

何にしても、オレはオレにできることをして遊星たちをサポートしてあげたい。

まずは龍可と一緒に“エンシェント・フェアリー・ドラゴン”の解放かな。

第二十三話・サテライトへ（後書き）

次話は龍可と一緒に精霊世界で“エンシエント・フェアリー・ドラゴン”救出を目指して頑張ります。

早めに次話を更新したいと思います。第二期まで一直線に頑張りたいです。

それでは、グッチーでした。

第二十四話：マイナスの力（前書き）

今回、デュエルはありませんが精霊世界で“レグルス”に逢うくだりから“猿魔王ゼーマン”の館まで一気にいきます。

では本編に、どうぞ。

第二十四話：マイナスの力

オレとアリスは家の中に入れてもらい、遊星たちに先刻のダークシグナーとの闘いについて話を聞いている。

「また、人が地縛神に吸収されたんだね」

「ああ。その中には、オレの仲間やマーサも」

遊星の友人と、幼い頃に育ててくれた恩人のような人が吸収されてしまったらしい。それで遊星はあんな悲しそうな顔をして

「貴様等がどうやってここに来たかは知らんが、貴様等にこの闘いは関係無い。さっさと安全な場所にも避難するんだな」

「ジャック、リヨウとアリスはオレたちの仲間だ。それに少し違うが、シグナーであることに変わりはない」

「ふん！ならばこいつらの痣は一体何なんだ？」

「そのことについてはこの闘いが終わってから説明するよ、ジャックさん」

今はダークシグナーに集中した方がいい。スピリットシグナーの話を知ったら混乱するかもしれないしね。

「リヨウ、アリス。聞いてきてくれたか？」

「うん。聞いてきたよ」

「どこかに行つてたの？アリスお姉ちゃん」

「ちよつとね」

「遊星がまず聞きたいのは地縛神に吸収された人々のことかな？」

「何のことなんだよ？なんでリヨウがそんなこと知ってるのさ？」

「後で全部話してあげるから我慢してね？アキも何か聞きたそうだけど、今は我慢してね？」

「アリスお姉ちゃんがそう言うなら」

「解つたわ。私も我慢する」

後で全部話さないかね。みんな大切な仲間だから。

「リヨウ、教えてくれ」

「そんなに慌てなくても話すよ、遊星。

まずは地縛神に吸収された人々だけど、ただ吸収されてるだけらしいよ。地縛神さえ倒すことができれば、吸収された人たちは解放される」

「本当か！？マーサやラリーたちは無事なのか！？」

「その筈だよ」

「じゃあ地縛神を倒せばみんな戻って来るんだ！よっしゃあ！」

「待て！何故そんな話が信用出来る？確証はあるのか？」

「確証は無いけど、確かな話の筈だよ」

「その話をどう信用しろというのだ！？」

「信用してもらえなくてもいいよ。オレは聞いた話をそのまま伝えるだけだからね」

「ジャック、リヨウは信用出来る。リヨウを信じよう。それに、アリスも同じことを聞いてきている筈だ」

「私も同じ内容を聞いてきたよ」

「ふん！良いだろう。でたらめで無いことを祈ってやる」

ジャックさんは相変わらずだね。ジャックさんらしいけど。

「何にしても、これで希望は繋がった訳だぜ」

「貴方たちシグナーに全てがかかっています」

「待ってくれ。まだ話の続きがある筈だ」

「遊星の言う通りだよ。みんなにはもう一つ話すことがある」

「何かしら？」

「ダークシグナーのことだよ」

「ダークシグナーだと！？ダークシグナーとは一体どんな存在なんだ！？まさか貴様等も亡者が甦った等と言うつもりではないだろうな！？」

「ダークシグナーは亡者じゃないよ。人間がいわば、仮死状態で動いてるらしいよ」

「仮死状態。鬼柳たちを救うことが出来るのか？」

「できるって言うてたよ」

「ただし、条件付きらしいけどね」

「条件だと！？なんだそれは！？」

「ダークシグナーの堅く閉ざされた心を、闘うシグナーがこじ開けることができれば、全て終わった後に仮死状態から元に戻るらしいよ」

「心を、こじ開ける」

ダークシグナーは何らかの怨みや憎しみをシグナーに対して持つてる。その感情を乗り越えれば救える筈。

「その話に確証はあるのか？」

「この話も聞いたことを伝えてるだけだよ。オレたちに確証は無いね」

「だがリヨウとアリスの言うことを信じる。みんなを救うにはそれしかない」

「そうね。遊星の言う通りだわ」

「とにかくオレたちのやることは解った。みんなそれぞれ自分の行き先に、明日明朝一番に出発する！」

遊星の言で話は打ち切られた。

オレとアリスは一応この家で子供たちと一緒にいることになった。そうするつもりはないけどね。

みんなが寝静まった後、オレと遊星は起きていた。

「ありがとう、リヨウ。お前のお陰で希望が持てた」

「礼なら“スターダスト”に言ってあげて。オレは特に何もしてないよ」

「オレは必ずみんなを助けてみせる！そしてサテライトとシティを繋いでみせる！」

「オレも力になるよ」

「だがお前は今Dホイールも無い。無理はせずに子供たちを頼む」

「子供たちのことなら雑賀さんがいてくれるよ。Dホイールのことなら問題無いし、一つ頼まれてることがあるから」

「そうか。 。 済まないな」

「謝らなくていいよ。 明日はがんばろう、 遊星」

「ああ」

翌日、 明朝。

「みんな！ ダークシグナーは簡単に倒せる相手じゃない。 オレたちは苦戦を強いられることになるだろう。」

「だがそんな時こそ思い出すんだ。 オレたち仲間一人一人のことを、 オレたちは離れていても強い絆で繋がっている！ 必ず勝つて、 もう一度逢おう！」

「互いの健闘を祈る！」

それぞれの制御装置に出発していった。

「リョウ、 私たちは本当にここにいるつもりじゃないよね？」

「もちろん。 マハードとマナが戻って来たらみんなを追っよ」

「やはりそうか。 ガキ共はオレに任せて、 さっさと行ってきな」

「ありがとうございます。 雑賀さん」

龍可がいつ精霊世界に行くか解らないけど、 龍可と一緒に精霊世界に行かないとね。

『リヨウ、戻って来たよ』

「ありがとう、マハード、マナ」

「そっか。二人にDホイールを持ってきてもらったんだね」

オレが二人に頼んだのはDホイールのこと。移動手段が無いのは辛いからね。

「マハード、無理言っただけ悪かったね」

『Dホイールのサイズなら隠すのにそれ程魔力は使わない。問題無い』

マハードには以前オレたちを人が見えなくする高等魔術をDホイールにかけて持ってきてもらった。

『！』

今の感覚は。

「アリス、気付いた？」

「うん。精霊世界と人間世界が繋がったよね」

間違いなく龍可が行ったんだろう。

「オレたちも行こう！」

「うんー！」

オレとアリスは精霊世界へと向かった。

「ここって、私が来たところと違うよね？」

「ここは“エンシエント・フェアリー・ドラゴン”の世界だよ」

「そっか。精霊世界は五つに区分されてるんだったね」

でもこの世界はどこか暗い。多分“エンシエント・フェアリー・ドラゴン”が封印されてるからだろうね。

「二人とも、向こうにある街に龍可がいるよ」

「ありがとう、マナ」

オレたちはマハードとマナに案内に従って歩を進めた。

「今のこの世界は少し変わっている。物事の現象が全て逆に動いている」

マハードとマナにこの世界の現状を説明してもらった。

“猿魔王ゼーマン”が“エンシエント・フェアリー・ドラゴン”を封印して自分の力にしようとしているらしい。“猿魔王ゼーマン”が使う力はマイナスの力、その力で物事が逆に動いてしまう。実際、散っている葉が樹に付く現象を見た。

「それじゃあ“猿魔王ゼーマン”を倒さないといけないんだね」

「そうだよ」

説明を聞き終わる頃に街に着いた。

「なんだか騒がしいよね？」

アリスの言う通り、なんだか騒がしい。落ち着きがないような。

「“ゼーマン”の手下がこの街に来ているのかもしれない」

「龍可が危ない！急ごう！」

オレたちは急いで街に入った。

街では“ゼーマン”の手下に精霊たちが襲われていた。

「マハード、マナ！精霊のみんなを！」

「解っている！」

「任せて！」

二人が手下を薙ぎ倒していく。師弟だけあってコンビネーションもバッチリに倒してる。

「私たちも力になるよ。シン、お願い！」

「承知した」

オレたちの前にシンが現れ、シンの放つ炎が手下を倒していく。

「トルンカ！こっち、早く！」

「る、龍可ちゃん、待っとくれ」

今の声は。

そう思って声のした方を向いてみると龍可と精霊が手下に追われていた。

「マハード、マナ！龍可を頼む！」

「解った！」

マハードの放つ魔術が手下を退けた。

今の攻撃を機に、諦めたようで颯爽と姿を消した。

「リヨウ！アリスお姉ちゃんも！どうしてここに！？」

「龍可が精霊世界に行ったことは解ったからね」

「私たちも後を追って来たの」

「リヨウはともかく、どうしてアリスお姉ちゃんが？」

「私も精霊の声を聞けるようになったんだよ」

「そうなの！？」

「ちょっと事情があつてね。また後でゆっくり話すよ」

今は“エンシエント・フェアリー・ドラゴン”の解放が先決だろうしね。

「主アリス、吾は戻る。必要になればまた呼んで貰いたい」

「一緒にいてもいいんだよ？」

「吾は身体が大きすぎる。吾がいては居場所を敵に教えているようなものだ」

なるほど、だからさっきまで出て来なかったんだね。

「解つた。また何かあつたらよろしくね」

「承知した」

シンがカードに戻っていく。精霊世界にいてもカードに戻れるからね。

「リョウ、アリスお姉ちゃん。私と一緒に“エンシエント・フェアリー・ドラゴン”を助けて欲しいの！」

「もちろんだよ」

「オレもだよ。元々約束してたしね」

「ありがとう！」

龍可が良い笑顔でお礼を言ってる。お礼を言われなくても手伝うつもりだったけどね。

「なあなあ、お前さんたちも龍可ちゃんと同じ世界から来たのか？」

「そっだよ。自己紹介がまだだったね。私はアリス、さっきの子が私の精霊のシンだよ」

「凄いもんじゃの〜、“真紅眼の黒竜”が精霊とは」

「オレはリヨウ、精霊はそこにいるマハードとマナだよ」

「マハードだ」

「マナです」

「なにい！？お前さんの精霊がこちらにいらっしやる“ブラックマジシャン”殿と“ブラックマジシャンガール”殿なのか！？そいつは凄いのう」

やっぱりマハードとマナは有名なんだね。

「それにしても君は何歳かな？ずいぶん変わった喋り方だけど」

「俺の名前はトルンカじゃ。俺はこう見えて爺さんじゃよ。こんな姿をしているのはマイナスエネルギーの所為なんじゃ」

マイナスの力は身体にまで影響するのか。

「こんなのにんびりしてる暇は無いわ。トルンカ、早く“レグルス”の所に案内して！」

『“レグルス”？』

「“エンシエント・フェアリー・ドラゴン”が“レグルス”の力を借りろって言ってたの。

さ、トルンカ、早く」

「本当に行くのか？“レグルス”殿は今様子がおかしいんじゃない」

「話せばきつと解ってくれるわ」

「そうだね。マハードとマナも付いてるし、大丈夫だよ」

「いざとなればシンも呼べるよ」

「む、そこまで言うなら」

「決まりね！早く案内して、トルンカ」

オレたちはトルンカの案内で街の外れにある森に来た。

「ここにおられる筈じゃ」

「解ったわ。“レグルス”〜！」

「オレたちは敵じゃないんだ。少し力を貸して欲しいんだよ〜」

「出て来て〜」

ガサガサ。

茂みから何かが出て来た。

装甲をしたライオンのような精霊。

「レグルス”殿」

この精霊が“レグルス”か。

「なんだ貴様等は!?!」

「私たちは敵じゃないの、話を聞いて」

「やはり貴様等も私を捕らえに来たのか!?!私は何れ一人になろうと闘う!」

「落ち着け、“レグルス”」

「“ブラックマジシャン”と“ブラックマジシヤンガール”だと!貴様等まで敵になったのか!?!」

「違うよ。私たちは敵じゃない」

「黙れ!私は屈さんぞ!」

会話がおかしい。全然通じてない。

「あの子の脚を見て!」

アリスの声に従って脚に目を向けると、脚に杖が引っ掛かっている。

「カースドニードルじゃ　　。」

あれの所為で“レグルス”殿がおかしくなってしまうたんじゃ！

「マイナスの力を掛け合わせれば強力なプラスの力になると聞く」

「カースドニードルをぶつければ、元に戻る筈だよ」

ちょうど龍可が街で奪ってきた杖を持つてる。これを使えば。

「オレがやるよ。マハード、マナ、援護よろしく」

龍可から杖を借り、“レグルス”の前に立った。

「何のつもりだ？

なんだ！？身体が動かん！？」

マハードとマナのお陰だね。

オレは“レグルス”の杖に、精一杯力を込めて杖をぶつけた。

ぶつけた衝動で怪しい光が飛び交う中、脚から杖が取れた。

「レグルス”　、大丈夫　？」

恐る恐る龍可が聞く。正気に戻ってたらいいんだけど　　。

「貴方は　！」

「な、何？」

「その痣はシグナーの、もしや貴方は龍可！？」

「レグルス」！正気に戻ったのね！」

「それにこちらの方々は？」

「この痣を見せたら解るかな？」

オレとアリスは揃って痣を見せた。

「なんと！？貴方はスピリットシグナー！」

「そうだよ。よろしく」

「スピリットシグナー？それって何なの？」

「その話はまた後でゆっくり話すから待っててね」

「今は“エンシエント・フェアリー・ドラゴン”が先だよ」

「その通りです。“エンシエント・フェアリー”様は“猿魔王ゼーマン”の館に囚われている。早速向かきましょう。私の背に乗って下さい」

「龍可が乗って。私たちはシンに乗せてもらうから。お願い、シン」

「承知した」

オレたちはそれぞれ背中に乗せてもらった。

「では、参りましょうー！」

オレたちは“ゼーマン”の館に向かう。

「でもどうやって入るんだ？普通入れないだろ？」

「私に考えがあります」

「“猿魔王ゼーマン”様、この通り“レグルス”を捕らえて参りました」

“レグルス”の作戦は魔術師であるマハードとマナが“レグルス”を捕らえたとして館に潜入すること。

オレたちはマハードたちが入った後に警戒が弱まった門番を倒して中に入った。今は隠れて様子を窺ってる。

「でかしたぞ。早速マイナス化しましょう」

「お待ち下さい。“レグルス”をマイナス化しても何の意味もありません」

これからはマハードの切れる頭脳で“エンシエント・フェアリー・ドラゴン”の封印を解かせるまで後一步といつところまでいった。このままいけば、

「何をしておるんじゃ、バーカ。そのまま封印を解いてしまえ」

『トルンカ!?!』

トルンカの脚に杖が絡まってる。トルンカがマイナス化したんだ。

「なんだと!?!封印を解くのを辞めろ!」

その瞬間、マハードが“ゼーマン”に向かって飛び出した。

「なんだ、貴様!?!」

「封印を解かせて貰う!」

マハードと“ゼーマン”がお互いの魔力をぶつけ合う。

二人の魔力はほぼ互角、だけど。

「ぐうっ」

マハードが押され始めた。

この世界のマイナスエネルギーの所為で若干力が弱まってるんだ。どうしたら。

『僕を使って』

今の声、オレのカードから。

『僕を出して。僕がマハードに力を与える』

なるほど、確かにこの精霊を使えば。

「マハード、一旦引くんだ！」

「しかし、私が“ゼーマン”を倒さなければ、誰も倒すこと等」

「違うよ、マハード。マハードだけの力で倒すんじゃない。オレたちの力で倒すんだ！」

「！」

マハードが魔力の放出を辞め、オレの所まで引いた。

「ふん。諦めたか」

「違うね。闘うのはマハードだけじゃない！」

力を貸してくれ！

「来い！“マジシャンズ・シンクロン”！」

黄色の薄い装甲を纏った小さな魔術師が姿を現した。

「僕の声、聞いてくれたんだね」

「うん。力を貸して」

「もちろんだよ」

「共にいくぞ！」

マハードと“マジシャンズ・シンクロン”が光輝き、やがて一つになった。

「シンクロ召喚！舞い降りよ！“SF ブラックマジシャン”！」

「ば、馬鹿な！」

「これで終幕だ！いけ、マハード！」

「はああっ！」

眩い光が“猿魔王ゼーマン”を包み込んだ。

「又オオオツ！だがこれで終わりではない！集められたマイナスエネルギーはディマク様の下に送られるのだ！」

光が消えていく。

“猿魔王ゼーマン”も共に消えていった。

「みんな、無事？」

「うん、平気だよ。シンとマナと“レグルス”が護っててくれたから」

「“猿魔王ゼーマン”を倒したのね！？“エンシエント・フェアリー”はどこ！？」

そういえば姿が見えない。“ゼーマン”を倒したのに。

「どうやらまだ封印は解かれていない様です。他の精霊たちも」

周りにある石版は精霊たちだったんだ。

「僕の姿は元に戻っておるんじゃないがお」

「本当にお爺さんだったんだ」

アリスの言う通り物凄く老けたお爺さんがいる。とてもさっきまでのトルンカには見えない。

グラグラグラッ！

『！』

突然地鳴りがした。何が起こった！？

「あれ見て！」

空には魂の塊のようなものが疼いている。

「あれは 地縛神が召喚されるんだわ！早く戻らないと！」

ゾクッ！

今 急に寒気が。

この感覚は まさか！？

「龍可！急いで人間世界に帰るんだ！地縛神を倒して、“エンシエント・フェアリー・ドラゴン”を！」

「うん！」

「リョウ、私たちも」

「いや、オレたちにはどうやらやることがあるみたいだよ」

ガシャ　　ガシャ

「な、何　？あれ」

「やっぱりいたか　、ファントム！」

姿を現したのは二体のガイコツ騎士、中級兵か　。

「行け！龍可！」

「で、でも」

「ここはオレたちに任せていい！早く行くんだ！」

「僕の魔力で龍可ちゃんを人間世界に送り返す！良いな？」

「頼んだ！」

トルンカによって龍可が人間世界に送り返された。ファントムの相手はオレたちスピリットシグナーだからね。

「このガイコツが　ファントムの一員なんだね？」

「うん。気をつけて、アリス」

「“猿魔王ゼーマン”を監視していたのだが」

「スピリットシグナーが現れるとはな、それに一人増えている

」

「闇のデュエルだ。お互い2対2、タッグデュエルだな

」

タッグデュエル。

「アリス、大丈夫？」

「うん。私も闘つよ」

『デュエル！』

第二十四話：マイナスの力（後書き）

今回はファントムとのタッグデュエルです。アリスが初めて闇のデュエルを体験します。

第一期最後のデュエルになる予定です。

第一期は残りわずかなので早め早めの更新で頑張ります。

それでは、グッチーでした。

第二十五話：意志（前書き）

今回はタッグデュエルです。

フィールドと墓地は二人共有、魔法・罫の効果は全体に及びます。

ゲームのタッグフォースと同じだと思って頂ければ良いと思います。

それでは、どうぞ。

第二十五話：意志

side 遊星

精霊世界から戻って来た龍可が“エンシエント・フェアリー・ドラゴン”を取り戻し、ダークシグナーのデイマクを倒した。そして封印を解かれた“エンシエント・フェアリー・ドラゴン”がオレたちの前に現れた。

『ありがとう、龍可。貴方のお陰で、私は解放された』

「私だけの力じゃないよ。みんながいてくれたから、貴方の封印を解くことができたんだわ」

『みんな、ありがとう』

「“エンシエント・フェアリー・ドラゴン”！オレたちと一緒に闘ってくれるのか？」

『勿論です。この命尽きるまで、私も共に闘います！』

これでオレたちの龍は揃った。

「リヨウとアリスお姉ちゃんはどっしてるの？あのガイコツと闘ってるの？」

ガイコツ！？

まさか、リヨウが言っていたファントムか！？

『リヨウとアリスは私たち精霊を護るべく闘ってくれています。あの二人ならきつと大丈夫です』

そう信じるしかない。二人とも、無事に帰って来いよ。

side out

side アリス

『デュエル!』

「我がターン。 “素早いムササビ” を守備表示で召喚」

DEF / 100

「ターンエンド」

「私のターン、 “ランサー・ドラゴニユート” を召喚!」

ATK / 1500

「このモンスターは貫通ダメージを与える効果がある!

“素早いムササビ” を攻撃!」

「又ッ!」

ガイコツ騎士×2 LP 2600

「 “素早いムササビ” が戦闘で破壊された時、500ポイント

のダメージを与える」

「きゃあっ！」

リョウ&アリス LP 3500

たった500のダメージでこの衝撃。
本当にサイデュエルとは比べものにならない。

「アリス！大丈夫！？」

「う、うん。大丈夫だよ」

「更に“素早いムササビ”をデッキから2体特殊召喚する」

「私はカードを1枚伏せて、ターンを終了」

「怖い。怖い。
デュエルがこんなに怖いなんて。」

「我がターン、“王虎ワンフー”を召喚」

ATK/1700

「“ランサー・ドラゴニユート”を攻撃」

「畏れカード“攻撃の無力化”！攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させるよ」

「ならばそのモンスターは消しておこう。“地砕き”を発動

。相手モンスター1体を破壊する」

私のモンスターが。

「クツクツク、何をそれ程怯えている？」

「私は怯えてなんて」

「クツク、ターンエンドだ」

「オレのターン、“魔導戦士 ブレイカー”を召喚」

ATK/1600

「このカードの召喚により、魔力カウンターを1つこのカードに置く。これにより攻撃力が300ポイントアップする」

ATK/1900

「“王虎ワンフー”を攻撃！」

ガイコツ騎士×2 LP 2400

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「我がターン、“ナチュラル・ナーブ”を召喚」

チューナーモンスター。

場上のモンスターの合計レベルは5。

「レベル2の“素早いムササビ”2体に、レベル1の“ナチュラル・ナーブ”をチューニング。
現れよ、 “ナチュラル・ビースト” ！」

ATK/2200

「 “ナチュラル・ビースト”よ、 “魔導戦士 ブレイカー”を攻撃せよ ！」

「うあっ！」

リヨウ&アリス LP 3200

リヨウがああ、の衝撃を。
だけどリヨウは少し痛そうな顔をしただけで平然としている。恐くないのかな？

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ ！」

「私のターン」

来てくれた。

「手札から“黒竜の雛”を召喚」

ATK/800

私と一緒に闘って！

「 “黒竜の雛”をリリースして、シンを特殊召喚！」

ATK / 2400

「この瞬間暴発動、 “激流葬” 。モンスターが召喚された時、場上のモンスターを全て破壊する」

「グオオッ！」

「シン！」

そんな、こんなに早くシンが破壊されるなんて。

「我が場の獣族モンスターがカード効果で破壊されたこの瞬間、1000のライフを払い、 “森の番人グリーン・バブーン” を特殊召喚！」

ガイコツ騎士×2 LP 1400

ATK / 2600

どうしよう。私の手札じゃ対抗できない。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「クックック、我がターン。“疫病狼”を召喚」

ATK / 1000

「“疫病狼”は1度だけ攻撃力を倍にすることが出来る」

ATK / 2000

私たちのライフを越えてる。このままだと。

「グリーン・バブーン」でダイレクトアタック」

「畏発動！ “ガード・ブロック”！ 戦闘ダメージを0にして、カードを1枚ドロウする」

リヨウのお陰でなんとか助かったけど、もう1体の攻撃が残ってる。

「“疫病狼”でダイレクトアタック」

私に向かって来た。
怖い！

「うあああっ！」

リヨウ&アリス LP 1200

私の叫び声じゃない。この声はリヨウの。

恐怖で閉じていた目を開けるとリヨウが私を庇って攻撃を受けていた。

「リ、リヨウ。どうして？」

「アリスが恐がってるのは解ってたから。
アリスは女の子だし、こんな危険なデュエル恐くて当たり前だから、

オレが身体張らなくちゃね」

リヨウの顔が少し歪んでる。きつと痛いんだ。それでも私に笑いかけてくれる。自分が痛くて辛いのに。

「我はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ。エンドフェイスに“疫病狼”は破壊される」

「っ、オレのターン」

「リヨウ！無茶しないで！」

「駄目だよ。オレたちがファントムに負ける訳にはいかない。今は無理してでもこのデュエルに勝たなくちゃ」

リヨウはそこまですて精霊世界を。

「魔法カード“古のルール”を発動！この効果でマハードを特殊召喚！」

ATK/2500

「大丈夫か！？リヨウ」

「大丈夫、この世界にいればすぐ治る筈だしね」

「なら良いが」

マハードも心配してる。もちろん私も。

「さらに罫カード“賢者の導き”！自分場にマハードが存在する時、デッキからマナを特殊召喚できる！マナを特殊召喚！」

ATK/2000

「お師匠様が私を呼ぶなんて珍しいですね」

「今はそれどころではない」

「オレは更に手札から“ワン・フォー・ワン”を発動！手札の“ホーリー・エルフ”を墓地に送り、デッキから“マジシャンズ・シンクロン”を特殊召喚！」

ATK/0

「僕の力を二人に与えるよ。二人とも頑張って！」

「レベル7のマハードに、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング！」

黒き魔術が集いし時、新たな光の力が目覚める。光差す希望と為れ！シンクロ召喚！舞い降りよ！“SF ブラックマジシャン”」

ATK/2900

「魔法使い族モンスターとのシンクロ召喚に成功した“マジシャンズ・シンクロン”はデュエル中1度だけ場に戻る！」

ATK/0

「レベル6のマナに、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”を

チューニング！

黒き魔術が交わりし時、新たな絆の幕が開く。光差す希望と為れ！
シンクロ召喚！舞え！“SF ブラックマジシャンガール”！」

ATK/2400

「な、なんだと　！」

「バトル！マハードで“グリーン・バブーン”を攻撃！」

「甘いな　。畏発動　“聖なるバリア ミラーフォース
！相手の攻撃表示モンスターを全て破壊する　」

そんな　。マハードとマナまで　。

「甘いのはどっちかな？」

マハードの効果発動！カードを破壊する効果が発動した時、マハー
ド以外のモンスター1体をリリースしてその効果を無効にする！
オレはマナをリリースして破壊効果を無効！」

「我が“ミラーフォース”を無効にするだと　！？　」

「バトル続行！スター・イリュージョン・マジック！」

「又ウ　」

ガイコツ騎士×2　LP　1100

「オレはこれでターンエンド」

「我がターン。」「アサルト・ガンドッグ」を守備表示で召喚
」

DEF / 800

「更に“光の護封剣”を発動。相手は3ターン攻撃出来ない。
」
カードを1枚伏せ、ターンエンド」

次は私のターン。
でも私はやっぱり怖い。

「私のターン」

「このターンのスタンバイフェイズ、マハードの効果によってリリースされたマナを特殊召喚することができる」

ATK / 2400

「アリスちゃん、大丈夫？」

「う、うん。平気」

「じゃあアリスちゃんに私の能力を教えてあげるね。私の能力は
」

確かにマナの能力を使えば、あのカードを使うことができる。ただ
ど私には。

「アリス、やっぱり怖いよね？」

「そ、そんなことないよ」

「オレは怖いよ」

「え？」

「こんな危険なデュエル、できればしたくない。

だけどオレが闘ってこの世界を救うことができるなら、いくら恐くても闘う。

“スターダスト”に言ったことだし、何よりマハードやマナ、みんなが住んでるこの世界を護りたい。みんなが幸福に暮らしてるこの世界を、ね」

「リヨウ」

「そうだ。」

「リヨウだつて恐くない筈ない。それでもリヨウが闘うのは、強い意志があるから。」

「私もリヨウの力になりたい、シンたちの故郷を護りたいって決意をしてたんだ。」

「誰だつて怖い。私は弱いから、この決意が揺らぐ時があるかもしれない。」

「それでもいいんだ。リヨウが隣にいてくれれば、きっと思い出せるから。」

「手札から“死者蘇生”を発動。墓地からシンを特殊召喚」

ATK/2400

「決意は固まったか？」

「うん。もう大丈夫だよ。」

「マナの効果を使わせて、リヨウ」

「解った」

笑顔で答えてくれた。

「マナの効果発動！自分の墓地に存在するカードを1枚選択してゲームから除外する。そしてそのカード効果を使うことができる！」

「私は“ワン・フォー・ワン”をゲームから除外して、効果発動！手札の“ミンゲイドラゴン”を墓地に送って、デッキから“ブルームドラゴン”を特殊召喚！」

ATK/300

少し赤い小さなドラゴンが私の場に現れた。首の周りに可愛く花が付いている。

「シン、“ブルームドラゴン”。こんな私だけど、力を貸してくれる？」

黙って頷いてくれた。私も頷き返した。

「レベル7のシンに、レベル1の“ブルームドラゴン”をチューニング！」

黒い炎が世界の全てを照らし出す。その眼に宿りし意志よ、今こそ

開け！

シンクロ召喚！咲き誇れ！“真紅眼の華竜”レッドアイズ・プロクササムドラゴン！

ATK/2800

私の場に、翼を赤い花びらで纏った黒竜が姿を現した。その眼が真紅なのは変わらない。

これがシンの新しい力。

「どうやら成功みたいだね。これがシンの新しい力なんだ。さ、アリス。このデュエルを終わらせよう」

「うん！シンがシンクロ召喚に成功した時、自分場上のカード1枚と相手場上のカード1枚を破壊する！私の場の伏せカードと、“光の護封剣”を破壊！」

「又ウ」

「シンで“アサルト・ガンドッグ”を攻撃！」

「畏カード “炸裂装甲” 。攻撃モンスターを破壊する」

無駄だよ。

「何故破壊出来ない ！？」

「“ブルームドラゴン”をシンクロ素材にしたシンクロモンスターは、1度だけ破壊を無効にできるんだよ」

「なっ」

「バトル続行！黒華炎弾！」

花びらを舞い散らせながらシンの放つ炎弾が直撃する。

「又ウツ　！しかし　、「アサルト・ガンドッグ」が破壊された時　、デッキから“アサルト・ガンドッグ”を特殊召喚出来る
」

「その必要は無いよ。シンの効果！バトルで破壊した相手モンスター
の攻撃力分のダメージを、相手プレイヤーに与える！」

『なっ　、又アアアッ！』

ガイコツ騎士×2　LP　0

やった　のかな。

side　out

ガイコツ騎士が消えていく。同時にこの世界に立ち込めていた暗さが掻き消され、明るくなっていく。

「この暗さはファントムの仕業だったんだね　」

「そうみたいだね。リヨウとアリスちゃんのお陰で世界が明るさを
取り戻してるよ」

「ふう　」

アリスがその場に座り込んだ。

「アリス!？」

「大丈夫だよ。ちょっと気が抜けちゃって」

「リラックスするといい。もう大丈夫だ」

「うん。ありがとう、シン」

初めての闇のデュエルは辛いよね。かなり刺激が強いから。

『きゃっ!』

あれ?今の聞き覚えの無い声は?

「この声、もしかして」

アリスがカードを1枚取り出し、実体化した。その精霊は。

「きゃっ!」

「きゃっ!」

現れたのはアリスがさっき召喚した“ブルームドラゴン”。アリスに抱き着いて甘えてるところを見ると、アリスに懐いたみたいだね。

「くすぐりたいよ。そんなに嘗めないで」

「きゃう〜」

「ブルームドラゴン」も主アリスを認めたようだ」

「この子に名前はあるの？」

「無い、と思うが」

「それなら名前を付けてあげる。君の名前は“リップ”だよ」

「きゃう〜」

「喜んでいるようだな」

「ふふ、よろしくね、リップ」

「きゃう〜！」

アリスの精霊が増えた訳か。仲間が増えることには大歓迎だけどね。

「お疲れ様でした。リヨウ、アリス」

オレたちの前に、見覚えのある妖精のようなドラゴンが姿を現した。

「もしかして“エンシエント・フェアリー・ドラゴン”かな？」

「はい。貴方方のお陰で私は解放されました。ありがとう」

「気にしないで。龍可はどうなったの？」

「龍可はダークシグナーを倒し、完全に私を解放してくれました。他のシグナーたちも次々と勝利を収めているようです」

遊星たちは大丈夫そうだね。

「これからはこの世界を任せていいんだよね？」

「勿論です。この世界は私に割り当てられた世界なのですから」

「よろしく頼むよ」

これでこの世界も大丈夫だろうね。とりあえず一安心かな。

「少し休んでから人間世界に戻ろうか、アリス」

「うん。ごめんね、リョウ」

アリスが座り込んで動けそうにないからね。遊星たちが大丈夫そうなら急いで戻る必要もないだろうし。

気になるのはファントムが“猿魔王ゼーマン”を監視してたってこと。ファントムは至る所に潜んでいるのかな？

何にしても、これでアリスは大丈夫だろうし、仲間も増えた。ファントムの脅威はまだまだ消えないけど、少しずつ前に進めばいいんだ。焦らず、じっくりと進んで行こう。そうするしか方法は無いよね。

第二十五話：意志（後書き）

どうでしたでしょうか？

今回のデュエルが第一期最後のデュエルです。第一期が終わるまでにマハードとマナの特殊効果、アリスの新しい力とシンの特殊効果をなんとか紹介したかったんです。いずれきちんと紹介の場を設けるつもりです。

次話が第一期最終話になる予定です。どうかよろしくお願いします。それでは、グッチーでした。

第一期最終話：これから（前書き）

とうとう第一期終了です。

ここまで読んで頂いた皆様、本当にありがとうございます。

これからもよろしく願います。

それでは、本編どうぞ。

第一期最終話：これから

「仲間の絆が今ここに集結する！“セイヴァー・スター・ドラゴン”で攻撃！シューティング・ブラスター・ソニック！」

精霊世界から戻って来たオレとアリスは遊星たちと合流して最後の決戦に挑んだ。

最後の敵はゴドウィン長官だった。結局オレたちはゴドウィン長官に踊らされてたんだ。

赤き龍の力とダークシングナーの邪神の力を持ったゴドウィンに遊星、ジャックさん、クロウさんは苦戦を強いられた。

それでも最後は仲間の絆がオレたちを勝利へと導いてくれた。

そして遊星の最後の攻撃で闘いは終止符を打った。

第一期最終話　これから

ゴドウィンとの最終決戦が終わってから三日後、オレたちは少し落ち着いたということもあって、みんなにオレとアリスの青き痣について話した。

みんなは当然のことながら、信じることはできないといった様子だった。龍可を除いてだけ。

特に納得してくれなかったのはジャックさんとクロウさん。二人と

も有り得ないことだと言つて納得しなかった。マハードとマナを実体化してみせたり、遊星の説得もあつてなんとか納得してくれた。

因みに、五人目のシグナーはクロウさんに引き継がれ、遊星がドラゴンヘッドの痣を受け継いでる。

地縛神に吸収された人たちは今は無事に解放され、何事も無かつたように暮らしてる。

ダークシグナーだった人たちも無事に戻つて来て、同じく何事も無かつたように暮らしてる。

この人たちは何が起こつていたのか全て覚えていないらしい。

遊星たちは正式にシティに住むことになった。マーサさんの知り合いに長屋の空いてる所を借りたらしい。そこで遊星とジャックさん、クロウさんが住んでる。

アキは家族の下で楽しく暮らしてる。お父さんの話では、笑うことが多くなつたとのこと。

龍可と龍亞は普段の生活に戻つた。ただ龍可が積極的に外に出るようになったらしい。通信教育も辞めて、元々通つたデュエルアカデミア小等部に通い始めるとのこと。オレは高等部だけど、たまに逢うこともあるかもね。

いろいろなことがダークシグナーとの闘いが始まる以前の状態に戻ろうとしている。全部元通りとはいかないけど、良いこともたくさんあつたし、出会いもたくさんあつた。

オレたちの紡いだ絆は簡単に途絶えることは無いと思う。

そんな最中、オレとアリスは

「宿題大変だね」

「うん、そうだね」

夏休みの宿題に取り組んでいた。いろいろなことが夏休みの序盤からあり過ぎて、宿題が終わってない。

因みにアキは休学中だったらしく、宿題無し。龍可と龍亞も通信教育だったから宿題無し。

オレとアリスだけが夏休みの宿題に精を出すことになってしまった。自分で言うのも抵抗があるけど、アカデミアではオレとアリスは優秀な方だった。自分で言うのも抵抗があるけど、アカデミアではオレとアリスは優秀な方だった。今だけは馬鹿じゃなくてよかったって思ってる。

夏休みは残り三日。最終日はみんなで海に行くことになってる。オレとアリスはなんとかがんばって、宿題を終わらせることに成功した。

そして最終日。

「海だー！ヒヤッホー！」

「待つてよ、龍亞。そんなに急がなくてもいいのに」

「ふふ、元気だね」

「そうね。楽しそうだわ」

みんな思い思いに海を満喫してる。

楽しそうな笑い声が聞こえたり、海で遊んでる様子が見れたりとおもしろい。

「貴様、それはオレの焼きそばだぞ！」

「早え者勝ちだぜ！ジャック！」

たまにこんな声が聞こえるけど、それには耳を塞いでっと。

オレたちはもちろん水着。海だからね。

それはアリスたちも例外じゃない訳で。

アリスの綺麗な水着姿に見惚れてたのは内緒の話。遊星に

「見惚れているのか？」

と冷静に突っ込まれたのも内緒ね。

時々マナが顔を出しては海いいな〜って言うてる。

そつえば精霊たちだけど、マハードとマナは相変わらずオレと一緒に暮らしてる。一人暮らしのオレには嬉しいんだけどね。

アリスの精霊、シンとリップも元気に過ごしてる。シンは表に出て来るとはほとんどないらしいけど、いつも影で見守ってくれてるらしい。リップは頻繁に出て来てアリスに甘えるらしい。アリスはリップとエリーに懐かれて家では大変みたいだね。

「実体化したらダメかな？」

「普通の人がいるから悪いけど我慢してくれる？」

「我が儘を言うな。リヨウを困らせるだけだ」

『はい』

ちよつと残念そうだね。

「今度精霊世界に行った時に一緒に海に行こう。それでいい？」

『ホントに！？やった〜！』

『やれやれ』

楽しい時間が過ぎていく。一つだけ気になることを残して。

「遊星、楽しんでる？」

「リヨウか」

そう、遊星だった。

遊星はダークシグナーとの闘いが終わってからどこか暗い。何かに悩んでるような感じだった。

「お前には話しておくべきかもしれないな。聞いてくれるか？」

「うん。何でも聞くよ」

「オレがモーメント研究者、不動博士の息子だと言うことは知ってるな？」

全て終わった後に聞いた話だった。遊星は元々トップスの生まれだったらしい。だけど不動博士の研究が発端で起こったゼロリバー

によつて遊星はサテライト送りとなつたらしい。

「オレの父さんが発端となり、ルドガーが起こしたゼロリバー。あれさえ無ければ、ジャックやクロウたちにも暖かい両親がいて、幸福な日々を送れた筈なんだ！」

遊星が悩んでるのはこのことだつたんだ。
自分の身内が起こしてしまったようなものだから、責任を感じて

「オレはどうしたらいい!? あいつらに、どうやって償えばいいんだ!?!」

遊星が背負つてるものはオレが考えてるものよりも遥かに重いみたいだね。

「 済まない。お前に言つても仕方のないことなのに 」

「そんなことないよ。オレにその答えは解らないけど、遊星はそこまで気負つ必要無いと思う。ジャックさんもクロウさんも遊星を怨んではいない筈だよ」

「リヨウ」

「何を償えばいいのか、何を償うべきかは誰にも解らない。ただどきつと遊星なりの答えが見つかると思う。その答えに真つ直ぐ向き合えばいいんじゃないかな。それにね」

「遊星、リヨウ、こつち来て一緒に遊ぼうよ」

「遊星〜！」

「リヨウ〜！」

「みんな」

「オレたちは一人じゃないんだよ。辛い時も苦しい時もあるかもしれない。だけど一人じゃないから乗り越えられる。その先にはきつと楽しいことがたくさんあるよ。」
「行こう、遊星！みんな呼んでるよ」

「ああ〜！」

辛いことも苦しいこともこれからたくさんある。
だけどそれに負けなくらいにこうして楽しいことがあるんだ。

どんな過去があろうと胸を張って生きていけばいい。それが人の人生だと思っから、ってね。

楽しい時間は本当にあっという間に過ぎていく。

「夕焼け 綺麗だね」

「そうだね」

今は夕陽が海を照らして綺麗な時間。オレはアリスと二人で浜辺からその夕陽を眺めている。

「今日は楽しかったね。またみんなと一緒に来られるといいなあ」

「来年また来られるよ、きつと」

「うん。そしたらまた二人でこの夕焼け見ようね？」

「うん。約束」

本当は隣に座ってるアリスの方が綺麗ななんて気障なことは言わないけどそう思う。

今更だけどアリスの水着は青のビキニ。アリスのすらりとしたスタイルを存分に生かしてる。加えて豊かな胸が絶妙に露出されてる。はつきり言っ、オレは直視できない。したら目が離せなくなる。

「明日から新学期だね。みんなに逢うのは久しぶりだなあ」

「みんな元気にしてたらいいんだけどね」

「そうだね。でも！」

ズイツ、とオレの前に顔を向けてきた。

「浮気しちゃダメだよ？」

「だ、大丈夫だよ」

そんなに前に出ないで。
ホントに目が離せなくなるよ。

「ホントに？」

アリスが更に近づいてきた。

「うっ」

「ん？」

「う、嘘はつかないよ」

「ふふ、そうだね」

離れて元の位置に座り直した。
助かったような、残念なような。

「でもホントに楽しみだね、新学期」

「うん。楽しみだね」

「これからもよろしくね、リョウ」

「こちらこそ、アリス」

オレたちはきつと上手くやっていける。辛いことも苦しいこともあ
るかもしれないけど、二人だから乗り越えられる。

楽しいことも嬉しいこともたくさんある筈だし、その時は二人で笑い合えば最高だよな。

「話は済んだか？」

いつの間にか遊星が後ろに立っていた。

「リョウ〜！アリスお姉ちゃん！そろそろ帰るよ〜！」

「もう、龍亞！折角良い雰囲気だったのに」

「へ？ 何のこと？」

「何でもないわよ〜！」

「何をそんなに怒ってたんだよ、龍可〜」

どうやらみんなに見られてたみたいだね。そういえばそんなに恥ずかしくないな。 馴れたのかな？

アリスに余計な心配かけない為にも、付き合ってることを公にした方がいい。馴れたのならアカデミアでばらしてみようかな。

「帰ろうか、アリス」

「うん〜！」

オレたちは海を後にして帰路についた。

こうしているんなことがあった夏休みが終わりを迎えた。

ダークシグナーの脅威を退け、シティは少しずつ回復の兆しを見せ始める。

サテライトもシティと無事に繋がる準備がされている。

遊星たちは一つの目標を達成して、これから新たな目標を捜してる。

ダークシグナーとの闘いは終わった。でもオレとアリス、スピリットシグナーの闘いは終わってない。

まだ見ぬ仲間との出会い、オレたちはその出会いを優先しなくちゃならない。スピリットシグナーを五人集めて、精霊世界をファントムから護るんだ。

オレたちの闘いはまだまだこれから。仲間との絆を信じて、カードたちとの絆を信じて、ただ闘うだけ。

あの人と交わした約束を護る為に。

いつか再会した時に胸を張れるように。

一人でも多くの人に幸福になって欲しいから。

オレはあの約束を胸にこれからも闘っていく。

第一期最終話：これから（後書き）

ここまで読んで頂いた皆様、本当にありがとうございます。

あとがきでもう一度言わせて頂きました。大事なことだと思ったので。

第二期の前に一つオリカ等の紹介をいれます。その後、第二期スタートです。

これからもよろしく願います。

それでは、グッチーでした。

第3回：Bの世界（前書き）

久しぶりのBの世界です。

かなり空いてしまった分のオリカやオリキャラの紹介をします。

では、どうぞ。

第3回：Bの世界

ア「このラジオも久しぶりだね」

リ「このまま無くなればよかったのに」

今の聞きたくない発言は置いて、長らく放送しなくてすみませ
ん。

ア「本編が忙しかったからね」

はい。いろいろとありまして。

リ「まあオリカやらオリキャラもまた出たし、仕方ないか」

そついうことです。早速始めて下さい。

『第3回、Bの世界！始まりま〜す！』

リ「メインパーソナリティのリョウウです」

ア「同じくメインパーソナリティのアリス・ルシエです」

リ「本編ではとうとう第一期が終わったね」

ア「そうだね」

これから第二期です。頑張ります。

リ「早速今回のゲストを呼ぼうか」

ア「今回のゲストは私の大事な精霊、シンとリップがゲストに来てくれているよ。どうぞ〜」

リッ「きゃう〜」

シ「失礼する」

ア「あつ、ほら、そんなに言めちゃダメだよ」

リッ「きゃうきゃう」

シ「最近宿題ばかりで退屈だったそうだ」

ア「そうなんだ。ごめんね、リップ」

リッ「きゃう〜」

今回は紹介することが多いのでこのくらいにさせて頂きます。進めて下さい。

リ「はいはい。最初のコーナー」

リ「グッチーの部屋　　って、オレだけ？」

ア「くすぐりたいよ」

リッ「きゃう〜」

シ「悪いが未だにじゃれている」

リ「まあいいや。最初にゲストとして来てもらってるからオリキヤラの紹介をするよ」

名前：シン

好きな物：主、静かな場所

嫌いな物：騒がしい場所、群れるもの

“真紅眼の黒竜”の精霊。

極めて律義で真面目な性格。普段は実体化せず影からアリスを守る存在。

名前：リップ

好きな物：アリス、アリス、アリス

嫌いな物：野菜、野菜、野菜

“ブルームドラゴン”の精霊。首の周りに花のついた小さな赤いドラゴン。

アリスが大好きで出来ればいつも甘えていたいと思っている。自分が認めた人にしか甘えない。

リ「一気に二体の紹介だよ」

ア「そうだね」

リッ「きゃう！」

リ「（相変わらずリッは抱き着いたままなんだ）まずはシン、静かな場所が好きなんだ？」

シ「ああ。だがまあ静かな場所が落ち着くだけで。吾は騒がしいのが嫌いでな」

ア「リッは野菜が嫌いなんだね？」

シ「嫌いというより肉しか食べていない」

リ「さすがドラゴン」

ア「でも野菜も食べないとダメだよ？」

リッ「きゃう」

シ「頑張るそうだ」

次にいってみましょう。

名前…マリア・ルシエ

年齢…？

身長…167cm

体重…？

好きな物…緑茶、甘い物

嫌いな物…辛い物

アリスの母親。夫が亡くなってから一人で子供二人育てた優しい女性。
基本的に家事全般は何でも出来る。職業はデュエルアカデミアの小等部の担任。

名前：クラウス・ルシエ

年齢：18歳

身長：173cm

体重：61kg

好きな物：焼きそば、アリス

嫌いな物：緑茶

アリスの兄。シスコン。

デュエルアカデミア高等部3年生。普通にしていればそこそこモテるらしい。

名前：エリー

ルシエ家の犬。かなりの大型犬。黄色っぽい毛のゴールデンレトリバー。

リ「ルシエ家を纏めて紹介だね」

ア「私の家族だよ」

本編ではあまり登場回数はこれからも多くならないと思います。

ア「クラウドスはアカデミアで出て来るの？」

相当な確率で出ないと思います。

リ「可哀相に。次だよ」

名前：ガイコツ兵

ファントムの下級兵。何の装備もしていないただのガイコツ。

名前：ガイコツ騎士

ファントムの中級兵。分厚い装甲を施されたガイコツ。

リ「今度はファントムか」

ア「まだ他にも上級兵がいるんだよね」

リ「きゃう」

シ「まだ誰も見たことがない上級兵だ。今考えても仕方がなからう」

リ「それもそうだね」

ガイコツたちは漫画版5D・Sのガイコツ騎士をイメージして貰えば良いと思います。

リ「オリキャラはこのくらいかな」

ア「次はオリカだよ」

“マジシャンズ・シンクロン”

レベル 1

ATK / 0

DEF / 0

種族 / 魔法使い族

属性 / 光

チューナーモンスター

このカードは魔法使い族モンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。魔法使い族モンスターをシンクロ素材としてシンクロ召喚に成功した場合、攻撃表示で特殊召喚される。この効果はデュエル中一度しか使用できない。

“SF ブラックマジシャン”

レベル 8

ATK / 2900

DEF / 2400

種族 / 魔法使い族

属性 / 光

シンクロモンスター

魔法使い族チューナー+“ブラックマジシャン”

このカードが場に存在する限り、カード名を“ブラックマジシャン”

”として扱う。

自分のバトルフェイズ開始時に自分場上に“SF”と名のついたモンスターが存在する場合、相手モンスター全てに1回ずつ攻撃できる。

「場上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罫・効果モンスターの効果が発動した時、自分場に存在するこのカード以外のモンスター1体をリリースすることで発動を無効にし破壊する。この効果を使用した次の自分のスタンバイフェイズ時、この効果でリリースされたモンスター1体を特殊召喚することができる。

“SF ブラックマジシャンガール”

レベル 7

ATK / 2400

DEF / 2000

種族 / 魔法使い族

属性 / 光

シンクロモンスター

魔法使い族チューナー+ “ブラックマジシャンガール”

このカードが場に存在する限り、カード名を“ブラックマジシャンガール”として扱う。

自分の墓地に存在するカードを1枚ゲームから除外する。除外したカード効果を使用する条件を満たしていれば、その効果を使用することができる。この効果は相手ターンにも使用することができる。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

リ「まずはオレが “スターダスト” から授けられた力の紹介だね」

どのカードも効果がハンパないですね。

ア「やっぱりマハードの能力は“スターダスト”がモチーフにしてあるの？」

そうですね。“スターダスト・ドラゴン”といえばやはり破壊無効効果ですから。

シ「だがマハードの効果は仲間がいなければ発動出来ないな」

リ「それなら大丈夫だよ。マハードとマナはオレとカードたちとの絆を繋ぐ存在、この絆が途切れることはないよ」

ア「確かにマナの効果も絆を繋ぐ効果だね。墓地のカードとの絆さえ繋ぐから」

リ「オレの大事な絆だよ」

さて、次にいきましょう。

“ブルームドラゴン”

レベル 1

ATK / 300

DEF / 300

種族 / ドラゴン族

属性 / 炎

チューナーモンスター

このカードがドラゴン族モンスターのシンクロ素材として墓地に送

られた場合、このカードを素材としたシンクロモンスターは1度だけ破壊を無効にできる。

“真紅眼の華竜”

ATK/2800

DEF/2400

種族/ドラゴン族

属性/闇

シンクロモンスター

ドラゴン族チューナー+“真紅眼の黒竜”

このカードが場に存在する限り、カード名を“真紅眼の黒竜”として扱う。

このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分場上のカード1枚と相手場上のカード1枚を破壊する。

このカードが戦闘で相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える。

ア「次は私が授けられた力だね」

これまたかなりの効果ですね。

ア「リップは仲間を護ってくれるんだよね？」

リップ「きゃうー！」

リ「シンの効果は“ブラック・ローズ・ドラゴン”の退化版かな？」

そうですね。“ブラック・ローズ・ドラゴン”の無差別破壊ではなく、カードを選択して破壊します。自分のカードも破壊しますが、ア「それにシンにはライフにダメージを与える効果もあるからね」「ドラゴン族にはライフにダメージを与えるカードが沢山ありますからね。」

シ「吾が“黒炎弾”が然りだ」

そういうことです。

リ「次で今回は最後だよ」

“賢者の導き”
通常罫カード

自分場上に“ブラックマジシャン”が存在する時、自分のデッキまたは墓地から“ブラックマジシヤンガール”1体を特殊召喚する。

リ「マハードがマナを呼ぶカードだね」

従来はマナがマハードを呼ぶのが普通ですが、たまには逆も良いだろっというこどで。

ア「これでオリカも終わりかな」

シ「そのよっだ」

第二期が始まればまた増えると思いますよ。オリカもオリキャラも。

リ「次のコーナーにいかがか」

リ&ア『賢者の部屋』

リ「このコーナーは本編の裏話をするよ」

早速ですが、一通お便りです。

ア「えっ!？」

リ「このラジオってオレたちが勝手にしてるだけじゃないんだ」

シ「何なのだ、このラジオは」

言わない約束ですよ?それにお便りも身内からです。

ア「私が読むね。えっと、お便りはネオドミノシティにお住まいの、
不動 遊星さんから」

リ「 熱でもあつたのかな、遊星」

ア「と、とりあえず続きを読んでみるね。

『前回はゲストとして招いてくれてありがとう。出来ればもう呼ぶ
な』

リ「よっぽど嫌だったんだろうね」

善処します。

ア「『ところで、本編でもこのラジオでもリヨウの人物像の紹介がされてくないか？

という訳で、質問！

1 - 顔はどんな？

2 - 髪はどんな？

3 - 服装はどんな？これはアリスお姉ちゃんも。

このくらいは紹介しなきゃダメでしょ？

BY 龍亞

だそうです。

リヨウとアリスは大変だろうが頑張れよ。じゃあな」

えっと、お便りありがとう、遊星さん」

リ「龍亞に送らされたって感じだったけどね」

シ「リヨウの紹介はされてないのか？」

リ「性格とかはされたけど、人物像はされてないかもね」

。

シ「だそうです、何か弁明はあるか？」

ありません。

リ&シ「駄目作者」
たな

ア「あはは。二人ともその辺でね？」

リッ「きゃう〜」

シ「黙って紹介しろ、だそうだ」

解りました。

顔 優顔のイケメンです。目は少しだけ垂れていますが、怒ったり感情を表に出す時は釣り上がります。るろうに剣心の緋村剣心をイメージして貰えば良いと思います。十字傷はありません。

髪 肩にかかるくらいの長めの黒髪。普段はゴムで一つに纏めています。剣心の髪を切る前と後の中間くらいの黒髪がイメージです。因みに、アリスは髪を結ばずに下ろしています。

服装 リョウは白のシャツに白いジャケット。基本は白を着ます。アリスは黒いシャツに黒のカッターを羽織ってます。そして少し短めのスカートです。

こんなところですかね。

リ「オレたちはこんな格好をしてるらしいよ」

ア「是非参考にしとね」

因みに、リョウはまだライディングスーツを着ずにライディングデューエルをしています。

リ「賢者の部屋のコーナーは以上かな」

シ「今回は終わりか？」

まだです。第二期の予告をしたいと思います。

ア「第一期はアニメのダークシグナー編までだったけど、第二期はどうなるの？」

リツ「きゃう〜？」

イリヤステルには進まずにアニメでは飛ばされたダークシグナーとの闘いが終わった後の半年間を書こうと思います。

シ「内容は？」

ずばりリヨウとアリスのアカデミア生活です。

ア「アカデミアが新学期を迎えるからね」

5D'sのメンバーが若干薄くなってしまつかもしれません。

リ「遊星たちはアカデミアにいないからね」

その代わり、オリキャラが多数登場する可能性が高いです。それからもう一つのテーマとして、スピリットシグナーを二人には捜して貰わないといけませんね。

シ「確かにね」

ア「精霊たちの為にもがんばるね」

リッ「きゃう〜」

シ「ありがとう、だそうだ」

リ「アカデミア生活を過ごしつつ、スピリットシグナー捜しをする訳か」

その通りです。

では、二人にはこれから軽い予告をして貰います。どうぞ！

リ「いろんなことがあった夏休みが終わり、新学期が始まる」

ア「待っていたのは友人との再会。でもそれだけじゃなかった」

リ「アカデミアやシティで起こるトラブルに巻き込まれる！？」

ア「そして精霊世界を護る為の闘いを続ける私たちに新たな仲間が現れる？」

リ「などなど原作を離れてオリジナル要素が増えるかもしれない第二期」

ア「精一杯がんばります」

リ「それでは、第二期に向かって」

『ライディングデュエル！アクセラレーション！』

「ご苦労様でした。」

リ「楽しみにしててね」

ア「ところで、第一期最後の意味深な終わりは第二期に関係してくるの?」

リ「それは秘密だよ」

秘密ですね。

シ「気になるところだな」

今後はつきりすると思います。

リ「それでは、今回の放送はここまで」

ア「これからも本編共々よろしくね」

リッ「きゃうー!」

ア「シンとリップ、今回はありがとう」

シ「気にするな」

リッ「きゃう」

リ「第二期もよろしくね」

『バイバイ』

第3回：Bの世界（後書き）

次話から第二期に移る予定です。

出来る限り早め早めの更新で頑張りたいと思います。

それでは、第二期でもどうかよろしくお願いします。

グッチーでした。

第二期第一話：新学期（前書き）

第二期スタートです。

アカデミアでの生活を一度書いてみたいと思っていました。
上手く書けているかわかりませんが、何かアドバイスがあれば是非
お願いします。

それでは、どうぞ。

第二期第一話：新学期

チュンチュン。

「朝だよ」

「ん。あ、おはよう、マナ」

小鳥の囁りが聞こえる中、実体化してるマナに起こされた。いつもは目覚まし時計と実体化していないマナの声に起こされてたけど、今日からはマナが直接起こしてくれるんだろうね。

「今日からアカデミアだよね？」

「うん。新学期だよ」

夏休みが終わり、今日からデュエルアカデミアの新学期が始まる。

朝食を食べて簡単に行く準備をする。今日は始業式だから持って行くものはほとんどないけど。

「じゃ、行こうか」

「うん」

マナに声をかけてから外に出た。マナはその時に実体化を辞めている。

アカデミアに向かって歩みを進める。流石にアカデミアに行く時に

Dホイールに乗るのは気が引けるんだよね。Dホイールは珍しくて誰も乗ってないから。

デュエルアカデミアに近づくにつれてオレと同じ制服を着た人が増えてきた。アカデミアの制服は男子が青で女子が赤。もちろんオレも制服を着て登校してる。

「おい、リヨウじゃねえか！」

「啓斗！久しぶりだね」

「おお！」

オレに話しかけてきたのは友人の石井啓斗^{いしけいと}。

少しざんばらで短い赤髪、顔は少し厳つく見えるけどオレにとって親友のような存在。

「元気にしてやがったみてえだな」

「啓斗もね」

「アリスとは相変わらずか？」

「楽しくやってるよ」

アカデミアでオレとアリスの関係を知ってるのは啓斗とアリスの親友だけ。今じゃアキに龍亞、龍可と増えたけどね。

「にしても、オレたちなんか注目集めてない？」

アカデミアの生徒が増えてくるにつれて思ってたことだった。何だ
る？

「そりやお前の所為だろ！夏休みにフォーチュン・カップで優勝し
たじゃねえか」

「あつ」

すっかり忘れてた。
そう思っていると、校門を抜けようとしたところで、

『リヨウくん！』

『ちょっと待って〜！』

「うわわっ！なにになに！？何なの！？」

一斉に女子生徒に囲まれそうになった。なんで！？

「お前モテるからな。悪いが俺はごめんだぜ」

「啓斗！ちょっと待っ」

『リヨウくん！』

「うわあっ！」

見事に囲まれた。
啓斗は囲みを既に突破してる。

新学期早々一体何なの!?

side アリス

私は朝起きて、制服を着てアカデミアに登校してる。

アカデミアは久しぶりだなあ。みんな元気にしてたかな?

「アリスちゃん!」

私の後ろから走って来て、私の名前を呼んでくれた親友、

「おはよう、由里」

「おはよう、アリスちゃん」

この娘が私の親友、武内由里。たけうち ゆり
茶色の髪の毛を可愛く左側にサイドアップに結んで、笑顔がとってもよく似合う可愛い娘。

「夏休みどうだった?」

「いろいろあったけど、楽しかったよ」

「リョウ君とは?」

「いままでより、距離が縮まったと思うよ」

「ほんと!?!よかったね」

由里には悩み事を相談することもよくあって、いつも真剣に聞いてくれる。私から話すことも由里から聞いてくれることもあって、私たちの間にほとんど秘密がないくらい。精霊たちのことだけは秘密にしてないとダメかな？

「ふえ？みんなどうしたのかな？」

「ほんとだね」

校門が見える辺りからたくさんの人だけが見えた。女の子ばかりで。

「あ、啓斗君だ。お〜い！」

「ん、おお、由里とアリスじゃねえか。久しぶりだな」

「うん、久しぶり。啓斗君！」

「久しぶりだね、啓斗」

由里が話しかけたのはリヨウの親友の啓斗。私たちとも仲がよくて、一緒に話をすることもたくさんある。

「この人だけは何かな？」

「フォーチュン・カップ優勝者が人気なんだよ」

『あ〜』

今の一言で私と由里は状況が理解できた。リヨウは相変わらず大変だね。

「ふええ。リヨウ君、さらに大変なことになってるんだ」

「そういつこつた。同情するぜ、全く。」

おっと、アリス。こんなんで妬くんじゃねえぞ？」

「大丈夫だよ」

啓斗も私とリヨウの関係を知ってる。

さつき由里に言ったけど、私とリヨウは少し距離が縮まった。いや、違うかな。私がリヨウに近づいたから、こんなことじゃ妬かないよ。

「ほんとに距離が縮まったみたいだね。アリスちゃん、余裕だもん」

「へえ、良いことじゃねえか」

でも、この人だけりはいつ終わるんだろう？

side out

いつになったら解放されるんだろ？このままじゃ、アカデミアに入れないよ。

「はいはい。何をしていますか？来たのなら早く教室に行きませんか！」

『え〜！』

「口答えしないのであります！」

『はい』

トボトボと少しずつ囲みが解かれていく。

誰だろ？先生みたいだったけど。

囲みが完全に解かれ、一人取り残された状態になった。

「この騒ぎの原因は君でありましたか」

「ハイトマン教頭先生」

オレの前にはアカデミアの教頭先生、ルドルフ・ハイトマンが立っていた。

「君のような優秀な生徒に人だけりが出来るのも無理はありませんね」

この先生はエリート思考があるからなあ。

「特に、フォーチュン・カップで優勝した君は素晴らしいのであります！我がデュエルアカデミア、ネオドミノ校の誇りなのであります！」

「はあ」

「更に！あの伝説と謳われた元キング、ジャック・アトラスを倒し、キングの座を勝ち取るとは、本当に素晴らしいのであります！」

「えっと、ハイトマン教頭先生。オレはキングになるつもりはありませんよ?」

「そうでしょう!キングになって　　ってなんですと!?!何を言っているのですか!?!」

「ですから、自分はキングになるつもりはないと　　」

「な、何故でありますか!?!君ほどの優秀な生徒なら　　」

「その辺にしてあげてはどうじゃ?教頭先生」

「校長先生」

校長先生がハイトマン教頭先生の後ろから姿を見せた。

「リヨウ君はキングにならないと言っておる。生徒の意見を尊重するべきではないかな?」

「ぐっ　　。解りました。」

リヨウ君、是非もう少し考えてみるのでありますよ」

オレにそう言い残して教頭先生は戻っていった。

「やれやれ。」

さて、リヨウ君。君には少し話があるんじゃないが」

「何でしょう?」

「教室に荷物を置いてから校長室に来てくれ。話はそれからじゃ」

「解りました。すぐに行きます」

「うむ、よろしくな」

校長先生も戻っていく。

はあ、ようやく落ち着いた。

「朝から大変だったね、リョウ」

「アリス」

声をかけられて振り返ると、アリスと由里と啓斗がいた。

「教頭にまで絡まれやがって、マジで災難だったな」

「じゃはは」

「ほんとだよ」

啓斗の台詞から解る通り、エリート思考のハイトマン教頭先生を啓斗は嫌ってる。オレも好きじゃないけどね。

そんなことよりも、今の状況でマズイのは。

「で、さっきの人ばかりは何だったんだよ!？」

「い、いや、優勝おめでとう、とかいろいろと」

啓斗の問に答えながら、ちらりとアリスを見た。普段と変わらない

顔だった。いつもならここで怒られるのに。

「どうしたの？」

「うっん。なんでも」

夏休みにいろいろあったから大丈夫なのかな？それなら嬉しいんだけど。

「俺たちも教室に行こうぜ」

啓斗の一言でオレたちは教室に向かった。

教室に入ると、

「リョウ、アリス。おはよう」

「アキ！」

アキが座っていた。アキも今日からまた登校だからね。

「この娘はアリスちゃんとリョウ君のお友達？」

「うん。紹介するね。私とリョウの友達の」

「十六夜アキです」

「十六夜さんだね。私は武内由里。よろしくね」

「俺は石井啓斗だ。よろしくな」

二人ならアキの友達になってくれる筈だよな。

「じゃあオレは校長先生に呼ばれてるから行ってくるね」

「そうなんだ。行ってらっしゃい、リョウ」

「うん」

アキのことはアリスに任せておけば大丈夫だろうしね。校長先生をいつまでも待たせる訳にはいかないし。

オレは校長室に向かい、部屋に入った。

「まずはフォーチュン・カップ優勝おめでとう。リョウ君」

「ありがとうございます。」

それで校長先生、オレに話とは？」

「ちよつとした頼みがあるんじゃない」

「何でしょう？」

「これから始業式があるのは解つと思うんじゃないが、そこで君にデュエルして欲しいんじゃない」

「デュエル ですか」

「フォーチュン・カップで優勝した君の実力を是非見せて欲しいと校内で評判になっておつての。小等部・中等部・高等部が一緒にな

るのは始業式くらいしかないんじゃないよ。引き受けてくれんか?」

「別に構いませんが」

「済まんの。対戦者は立候補を募りたいと思うんじゃないが、問題はあ
るかの?」

「ありません」

立候補なら多分あいつになるしね。けっこう楽しみかも。

「では、健闘を祈っておるよ」

「失礼します」

オレは立ち上がり、退出しようとした。

「ああ、ちょっと待ってくれ」

「何ですか?」

「君にキングになる意志は無い、そう思っているんじゃない?」

「そう思ってください。」

失礼します」

オレは退出した。

アカデミアとしては校内からキングが生まれることは名誉なんだから
うけど、オレには関係無いね。

教室に戻ってみると、アリスたちは仲良く談笑していた。

「あ、リヨウ。校長先生の話ってなんだったの？」

「始業式になれば解るよ」

「勿体振るじゃねえか？」

「まあね。お楽しみは取っておくものでしょ？」

「面白いことなの？楽しみだなあ」

「アキとは仲良くなったみたいだね」

「ええ。楽しいわ」

「それはよかった」

アキが楽しそうに笑ってる。なによりだよ。

「それでね、リヨウ君」

「なに？」

「今日は始業式だけだから、放課後みんなで私の家に来ないかなって話になってるの。リヨウ君もどうかな？」

「うん。オレも行くよ」

「決まりだね」

「うん！」

そんな放課後の話をしていると、始業式の時間になった。

全員ホールに集合して新学期最初の式を始める。

校長先生の長い話が終わり、始業式が終わろうとする。でも今日はこれじゃ終わらないんだよね。

「それでは、これで始業式を終わるのでありますが、一つお知らせがあるのであります。皆さんも知っているとは思いますが、夏休みに行われたフォーチュン・カップで優勝を果たした生徒がいます」

ハイトマン教頭先生が話し始めた。

「それでは、その者に登場して貰うのであります。

リヨウ！登壇するのであります」

「はい」

返事をして静かに立ち上がった。オレはホールのステージに上がり、既にいた校長先生の隣に立った。

「このリヨウ君が見事、フォーチュン・カップで優勝したんじゃ。

一言頂こうかの」

そんな話聞いてないんですけど。

「え、今ご紹介に預かりました、リヨウです。新学期、みなさんと楽しく学べたらいいなと思ってます。よろしく願います」

あゝ、緊張した。上手く言えたかな？

「ありがとう、リョウ君。」

それではここで、皆さんに提案じゃ。ここにいるリョウ君の実力を
見たいとは思わぬか？」

『見た〜い!』

なんでみんなそんな一斉に言っかな〜？

「そうじゃろっつ？そこでじゃ、リョウ君とデュエルしたい者はおる
か？」

「俺がやる!」

やっぱりね。

side 啓斗

「俺がやる!」

リョウとこんな形でデュエル出来るとは思ってたぜ。このチ
ヤンス、逃す手はねえ!

「君は 石井啓斗君じゃな。良かろっつ、登壇するのじゃ」

「オッシャー!」

勢いよくリヨウの隣まで走った。

「やっぱり啓斗が来たね」

「まったく！お楽しみってこれかよ」

「楽しいでしょ？」

「最高だ！言うことねえ！」

「それでは10分後、デュエルを開始じゃ。二人とも用意を」

「応よ！」

「はい」

俺たちはそれぞれステージ裏に行き、自分のデッキを調整した。これ程おもしれえのは久しぶりだ。俺が絶対勝つぜ！

10分後、俺たちはデュエル場に移動した。先生や生徒は既に移動して俺たちを待っていた。

俺とリヨウはお互いに距離をとり、デュエルディスクを構えた。

「啓斗とこうしてデュエルするのは久しぶりだね」

「全くだ！フォーチュン・カップ優勝者の実力、見せて貰おうじゃねえか」

「はは。そんなに持ち上げないでよ。あれはたまたまなんだから」

「謙遜すんなよ。お前らしくはあるがな」

相変わらずだ。たまたま優勝出来てたまるかよ。

「リヨウく、がんばれ〜！」

「がんばって〜、リヨウく」

なんだ？小等部の奴らみてえだが。

「はは。あの二人か」

「知り合いかよ？」

「まあね。機会があれば紹介するよ」

「なんでもいいや。さっさと始めようぜ！」

「そうだね」

『それではこれより、リヨウVS石井啓斗のデュエルを始めるのであります』

糞教頭がアナウンスを流しやがった。やっと始まるな。

「さてと、リヨウー！」

「うん、啓斗」

『楽しいデュエルをしよう（ぜ）！』

俺たちのデュエルはこれを言わねえと始まらねえからな。

『デュエルー』

第二期第一話：新学期（後書き）

新キャラが二人登場です。

石井啓斗のイメージはBLEACHの黒崎一護です。

武内由里のイメージは高町なのはですね。由里は予想がついたかもしれません。

次話は啓斗とのデュエルです。第一期の反省としてデュエルが遊戯王なのに少ないと思ったので、第二期は多めにしてみようと思います。

それでは、グッチーでした。

第二話：決闘（前書き）

啓斗とのデュエルです。

二人ともデュエル好きなので、楽しくやっています。

それから、一つ注意を。

“奇跡の軌跡”の効果はアニメとOCGの効果を混ぜています。ご了承ください。

それでは、どうぞ。

第二話：決闘

『デュエル！』

「俺の先攻、ドロー！」

“ジャンク・アーマー” を守備表示で召喚「

DEF/1200

「ターンエンドだ。来な、リョウ！」

「ジャンク・アーマー”。まさか彼のデッキは「

「うん。啓斗のデッキはジャンクデッキ。遊星さんと一緒だよ」

「遊星さん？」

「うん。夏休みに出会った人だよ。今度紹介するね」

「ほんと？楽しみにしてるね」

「オレのターン」

さて、啓斗は一応守備モンスターを出しただけ。様子見ってところかな。

「手札から“魔導騎士 ディフェンダー”を召喚」

ATK / 1600

「このカードが召喚に成功した時、魔力カウンターを一つ置く。バトル、“ジャンク・アーマー”を攻撃」

「迷いなく破壊してきやがったな」

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターンだ。手札より“ジャンク・ブレイダー”を召喚！」

ATK / 1800

「“ジャンク・ブレイダー”は墓地に“ジャンク”カードがある時、攻撃力が400アップするぜ！」

ATK / 2200

「いくぜ!“ジャンク・ブレイダー”で“魔導騎士 ディフェンダー”を攻撃だ！」

「くっ」

リョウ LP 3400

「“魔導騎士 ディフェンダー”の効果で、場上に存在する魔力カウンターを一つ取り除き、破壊を無効にするよ」

「知ってるぜ。カードを1枚伏せてターンエンドだ」

「オレのターン。“魔導騎士 デイフェンダー”をリリースして“カオス・マジシャン”をアドバンス召喚」

ATK/2400

「“ジャンク・ブリーダー”に攻撃するよ。

そして攻撃宣言したこの時、畏発動“マジシャンズ・サークル”！魔法使い族モンスターが攻撃する時、お互いのデッキから攻撃力2000以下の魔法使い族モンスターを特殊召喚する！」

「俺のデッキに魔法使い族モンスターがいる訳ねえだろ」

だろうね。ジャンクデッキなら戦士族と機械族だろうしね。

「オレはデッキから“ブラックマジシヤンガール”を特殊召喚する！」

ATK/2000

『キター！』

「ウツセエー！」

アカデミアの生徒が騒ぎ立ててる。もちろんみんな男子。だからマナをアカデミアであんまり召喚したくないんだよね。

『あはは。みんな変わらないね』

「無視してていいからね」

マナが手を振った時なんか特には酷かった。騒ぎが収まらなかつたからね。

『でもリヨウも楽しそうだね』

「まあね。楽しいよ」

『私も楽しませてね』

「もちろん。いくよ、マナ。

バトル続行！」

「ちっ！」

石井啓斗 LP 3800

「“ブラックマジシャンガール”でダイレクトアタック！」

「畏カード“ガード・ブロック”！戦闘ダメージを0にしてカードを1枚ドローするぜ！」

『あ〜』

「だからウツセエ！」

『あーら、防がれちゃったね』

「仕方ないね。オレはターンを終了するよ」

オレの場にはマナを含めてモンスターが2体。啓斗の場には何も無い。どう巻き返してくるかな？

「流石じゃねえか。だが俺もこんなもんじゃねえぞ。

ドロー!“戦士の生還”を発動し、墓地から“ジャンク・ブレード”を手札に戻す。そしてそのまま召喚するぜ!”

ATK / 1800

「カード効果で攻撃力が400アップ!更に“錆びた剣 ラストエッジ”を装備するぜ!”

ATK / 3000

“ジャンク・ブレード”を強化してきたか。

「カオス・マジシャン”を攻撃するぜ!”

「うっ!”

リョウ LP 2800

やるね、やっぱり。

「カードを1枚伏せてターンエンドだ。

さあ、反撃してこいよ!”

「当然!オレのターン、ドローカードは“サイクロン”!“錆びた

剣 ラストエッジ”を破壊！”

「だが、“錆びた剣 ラストエッジ”が破壊された時、800のダメージを与えるぜ！」

リヨウ LP 2000

「でも攻撃力はダウンする」

ATK / 2200

「オレは“ブラックマジシャンガール”に“魔術の呪文書”を装備する」

ATK / 2700

「バトル！“ジャンク・ブレード”を攻撃！ブラック・バーニング！」

『いけ〜！』

「っ〜！」

石井啓斗 LP 3300

「ただだぜ！畏発動！“戦士の誇り”！破壊された“ジャンク・ブレード”を特殊召喚するぜ」

ATK / 2200

「オレはカードを1枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターン！」

ドローカードを見て目付きが変わった。くるね、このターン。

「いくぜ！俺はチューナーモンスター“クイック・スパナイト”を召喚！」

ATK/1000

チューナーか。いよいよシンクロ召喚がくるね。

「レベル4の“ジャンク・ブレjder”に、レベル3の“クイック・スパナイト”をチューニング！」

モンスターが光り輝いてる。

何が出る！？

「受け継がれし魂が、光となって駆け昇る！
光来せよ！“ライトニング・ウォリアー”！」

ATK/2400

攻撃力2400、強化されたマナには届かない。

「“クイック・スパナイト”がシンクロ素材となった時、相手モンスター1体の攻撃力を500下げる！」

『きゃー!』

ATK/2200

“クイツク・スパナイト”の頭が飛び出して、マナの杖を奪い取った。

「さあいくぜ! “ライトニング・ウォリアー”で“ブラックマジシヤンガール”を攻撃だ! ライトニング・パニッシャー!」

『きゃあっ!』

「くっ、マナ!」

リヨウ LP 1800

『ああっ! この鬼畜ー!』

「いい加減黙れ! マジでキレルぞ! デュエルだろうが!」

「まあまあ。落ち着いて、啓斗」

どうせ何言っても無駄なんだし。

「まだ終わらねえ! “ライトニング・ウォリアー”が相手モンスターを破壊した時、オレの手札1枚につき400のダメージを与えるぜ!

オレの手札は2枚! 800のダメージを受けて貰うぜ!」

「うああっ!」

リヨウ LP 1000

「くっ、装備されていた“魔術の呪文書”が破壊された時、1000のライフを回復する」

リヨウ LP 2000

「更に畏発動！“奇跡の残照”！このターン破壊された“ブラックマジシャンガール”を特殊召喚する！」

ATK/2000

『いたたた』

「mana、大丈夫？無理させてるかな？」

『平気だよ。このくらいなんでもないから』

精霊たちもダメージを負う。精霊世界にいればすぐに治るけど、あんまり無理はさせたくない。

「俺はカードを2枚伏せて、ターンエンドだ」

『リヨウ、私たちの反撃だよ！』

どうやらmanaは大丈夫そうだね。

「オレのターン！」

よし、このカードを待ってたんだ。

「魔法カード“賢者の宝石”！自分場上に“ブラックマジシャンガール”が存在する時、デッキから“ブラックマジシャン”を特殊召喚する！

現れる！“ブラックマジシャン”！」

ATK/2500

『久々に楽しそうだな』

「まあね。ホントに楽しいよ」

『私も力になる』

これでマハードとマナが場に揃った。

「啓斗！ここからが本番だ！」

「来な！本気で来い！」

「バトルだ！“ブラックマジシャン”で“ライトニング・ウォリアー”を攻撃！ブラック・マジック！」

「くっ！“ライトニング・ウォリアー”！」

石井啓斗 LP 3200

「更に“ブラックマジシャンガール”でダイレクトアタック！ブラック・バーニング！」

『今度こそ、いけ〜！』

「ぐああっ〜！」

石井啓斗 LP 1200

『やった〜！』

「畏発動だ、“受け継がれる魂”！俺のシンクロモンスターが破壊されたバトルフェイズ終了時、同じレベルの通常モンスターをデッキから特殊召喚出来るぜ！

“ライトニング・ウオリアー”のレベルは7！よってレベル7のモンスターを特殊召喚するぜ！来い！“暗黒騎士ガイア”！」

ATK/2300

流石、次に繋げてきたか。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

カードを伏せて顔を上げた時、偶然啓斗と目が合った。

「ぶっ〜！」

「はは」

『アハハハハハハ！』

二人で笑い出した。

「楽しくて仕方ねえ！お前やっぱ強えな！」

「オレもだよ！楽しくて仕方ないよ！」

「あの二人、ずいぶん楽しそうね」

「親友同士だし、ライバルだからね」

「そうだね。二人とも、本当に楽しそう。（あんなリョウ、久しぶりだなあ）」

「さあ、啓斗のターンだよ」

お互いに手札は0。どうなるかな。

「解ってんだろ？今の状況はオレが不利だが、このドローで世界が変わるかもしれねえ！」

「解ってるよ。さあ、来い！」

「いくぜ、ドロー！」

何を引いたかな？

「このカードで世界を変えてやるぜ！装備魔法“暗黒の黒鎗”を“

「ガイア”に装備!“ガイア”の攻撃力を1000アップさせ、貫通能力を得るぜ！」

ATK / 3300

「攻撃力3300。本当に世界を変えてきたね」

「当たり前だ！いくぜ!“ガイア”で“ブラックマジシャン”を攻撃！スパイラルセイバー！」

『ぐうつ！リヨウ、済まない！』

「くあっ！」

リヨウ LP 1200

「どうだ！」

「まだ終わってないよ。永続畏“正統なる血統”!“ブラックマジシャン”を呼び戻す！」

ATK / 2500

「そう来ねえとな！さあ、お前のターンだぜ！」

「今度はオレが世界を変える番だね、ドロー！」

オレが引いたカードは、

「オレとカードとの絆、見せてやるよ。装備魔法“団結の力”をマ

ハードに装備！オレの場に存在するモンスター1体につき、800
ポイント攻撃力がアップする！」

ATK / 4100

「（あいつ、“ブラックマジシャン”のことをまたマハードって言
いやがった。珍しいことじゃねえが、何かあんのか？）」

「マハード！“暗黒騎士ガイア”を攻撃！ブラック・マジック！」

「畏発動！“ジャンク・シールド”！」

「なにっ！？」

「“ジャンク・シールド”は“ガイア”を破壊から護る！
耐えな！“ガイア”！」

『グオオッ！』

「そして俺が受ける戦闘ダメージを、お前に与えるぜ！」

「くああっ！」

リヨウ LP 400

「これでこのターンは凌いだ！次のターン、俺が“ブラックマジシ
ヤンガール”を攻撃すれば、俺の勝ちだ！」

「それはどうかな？」

「なにっ!?!」

「まだオレの場には伏せカードが1枚残ってるよ」

「何かあんのか?」

「もちろん!いくよ、これが最後のカードだ!

「罨カード“奇跡の軌跡”!相手はカードを1枚ドロし、マハードの攻撃力を1000ポイントアップさせ、2回攻撃が可能になる!」

ATK / 5100

「マジか!?!」

「マハード!もう一度攻撃だ!ブラック・マジック!」

『グオオオオッ!』

「ぐああっ!」

「ただし、マハードの攻撃で戦闘ダメージは発生しない」

石井啓斗 LP 1200

「さあ、これで終幕だ!

「マナ!ダイレクトアタック!ブラック・バーニング!」

「ぐああああっ!」

石井啓斗 LP 0

「くそっ！負けちまったぜ！」

「はは。啓斗、楽しかったよ」

「応よ！楽しいデュエルだったぜ！次は負けねえからな！」

「オレだって。勝ちを譲るつもりはないよ」

「はっ！」

「パァン！」

お互いにハイタッチをした。それだけ楽しいデュエルだったからね。

「いや、リヨウ君、啓斗君、素晴らしいデュエルをありがとう」

「パチパチ。」

デュエル場から拍手が巻き起こった。

「では、これにて始業式特別デュエルを終了するのであります。全生徒の皆さん、速やかに解散するのであります」

教頭先生のアナウンスが流れ、終了が宣言された。

「うむ。リヨウ君、啓斗君、本当に素晴らしいデュエルじゃったぞ」

「ありがとうございます、校長先生」

「サンキューな」

「これからも素晴らしいデュエルを期待しておるよ」

校長先生から期待の言葉をもらい、オレたちは教室に帰った。

「リョウ、啓斗！お疲れ様」

「ありがとう、アリス」

アリスたちが笑顔で出迎えてくれた。

「リョウ君と啓斗君のデュエル、とっても楽しかったよ！」

「ええ」

「まあな。俺たちも楽しかったしな」

「そうだね。あんなに楽しかったのは遊星以来かな」

『遊星って誰だよ（なの）？』

「私たちが夏休みに知り合った人だよ。今度紹介するね」

「夏休みでずいぶん知り合いが増えたみたいじゃねえか」

「いろいろあつたからね」

楽しいことも辛いこともたくさんあったけど、全部乗り越えたら仲間がたくさんできたんだよね。

それから、担任の先生が教室に入って来て、HRが行われる。

(リョウ、HR中に済まない)

(どうかした？マハード)

(啓斗殿とのデュエルに召喚された“暗黒騎士ガイア”だが、不思議な感じがしなかったか？)

(？)

(お師匠様、それって何のことですか？)

(いや、解らないならいい。私もはっきりと解る訳ではないからな)

(何か解ったら教えて)

(解った)

二人の感覚が消えた。精霊世界に戻ったんだろうね。

“暗黒騎士ガイア”のことはマハードに任せておけば大丈夫だろう。

でも本当に楽しいデュエルだった。また啓斗とデュエルしたいな。

それに、できれば遊星とももう一度デュエルしたいなあ。

第二話：決闘（後書き）

啓斗のデッキは漫画版の遊星のデッキです。それに少し自分のアイデアを組み合わせています。

次話是由里の家に行きます。由里が高町なのはとっているので由里の家は想像出来る方が多いと思います。

それでは、グッチーでした。

第三話・喫茶店（前書き）

今回もデュエルがあります。

題名から分かる通り、喫茶店での生活風景ですね。

それでは、どうぞ。

第三話：喫茶店

HRが終わり、放課となった。

オレたちは約束通り由里の家に向かっていた。由里の家の前に着くと、

「ここって」

「そっだよ。私の家は喫茶店なの」

アキは由里の家のこと知らなかったね。オレたちはよく来るから馴染みがあるんだけど。

カランカラン。

「お母さん、ただいま」

「お帰り、由里。みんなもいらっしやい」

『お邪魔します』

「あら、知らない娘がいるわね？」

「紹介するね。この娘は十六夜アキちゃん」

「十六夜アキです」

「よろしくね。今日はゆっくりして行ってね」

「ありがとうございます」

由里のお母さんは人が良いからすぐに受け入れてくれるんだよね。

それから紅茶やケーキが出されて、みんなで頂きながら楽しく談笑。アキはすっかり啓斗と由里の友達になっただけで、それぞれ遠慮なく話している。

「リョウ君と啓斗君のデュエル凄かったね」

「ええ。良いデュエルだったわ」

「ところでよ、遊星ってのがどうか言ってたよな？そいつ、強えのか？」

「遊星は強いよ」

「へえ、オレもやってみてえもんだな」

「でもきつと強いのは遊星さんだけじゃないよね？」

「アリスの言う通りだね。みんなそれぞれ強いよ」

「もちろん、アキもね」

「私？」

そりゃあ強いよ。夏休みに出会った人はみんな強いね、今考えてみれば。

「マジか？今度オレとデュエルしようぜ！」

「ええ」

「いいな、私もデュエルしたい」

「すればいいじゃねえか」

「そうだね。ここは由里の家なんだし、由里がデュエルしたい人を指名していいんじゃないかな？」

「ホントに!？」

みんな異論無し。当然だけどね。

「じゃあね」

さて、誰を選ぶかな？

「リヨウ君で！リヨウ君、デュエルしよう！」

「オレと？」

「うん！やっぱりフォーチュン・カップ優勝者の実力を知りたいんだ」

まあいいか。

「じゃあやるっか」

オレと由里はデュエルの準備の為にデッキを確認している。

「マハード、マナ。今日二回目だけど大丈夫？」

『問題ない』

『平気だよ』

二人とも一度破壊されたから心配なんだけど、そう言うなら大丈夫かな。

「リヨウ君、準備オツケー？」

「いいよ」

『デュエルー！』

「どっちから？」

「好きな方でどうぞ。レディーファーストだよ」

「あは、ありがとう。」

私のターン、ドロー！ “デュナミス・ヴァルキリア”を召喚するよ

ATK/1800

「カードを1枚伏せて、ターンエンド。リヨウ君のターンだよ」

「由里は天使族デッキなのね？」

「そうだけ」

「由里も強いよ」

「オレのターンだね、ドロー。“マジシャンズ・ヴァルキリア”を
守備表示で召喚」

DEF / 1800

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

オレの手札に“デュナミス・ヴァルキリア”を倒せるカードはない。
まずは守りを固めてっと。

「私のターンだね。“ホーリーフレーム”を守備表示で召喚」

DEF / 0

「これでターン終了だよ」

由里も手がないみたいだね。

「オレのターン」

よし。このカードならいけるね。

「オレは“魔導戦士 ブレイカー”を召喚」

ATK / 1600

「このカードが召喚に成功した時、魔力カウンターを一つ置き、攻撃力が300アップする」

ATK / 1900

「あらら。“デュナミス・ヴァルキリア”の攻撃力を超えてきたね」

「“マジシャンズ・ヴァルキリア”を攻撃表示に変更」

ATK / 1600

「バトル、“魔導戦士 ブレイカー”で“デュナミス・ヴァルキリア”を攻撃」

「きゃ！」

武内由里 LP 3900

「“マジシャンズ・ヴァルキリア”で“ホーリーフレーム”を攻撃」

これで由里のモンスターは全て破壊した。オレの方が有利だけど。

「ふふ」

なーんか企んでる笑みだなあ。

「かかったね、リヨウ君」

どういう意味だろ？

「手札から“テュアラティン”を特殊召喚するよ！」

ATK/2800

これが狙いか。

「このカードは私のモンスターが一度のバトルフェイズで2体以上のモンスターが全て破壊された時、特殊召喚できるんだよ。そしてこの方法で特殊召喚に成功した時、属性を一つ選択して、その属性のモンスターを全て破壊するよ！

私が選択するのは、闇属性！」

“魔導戦士 ブレイカー”が破壊されるか。

「その後、選択した属性のモンスターは召喚することができなくなるんだよ」

ってことは。

「つまり、“ブラックマジシャン”を召喚できないってことだよ！」

「由里、凄いわね」

「ああ。リヨウの“ブラックマジシャン”を封じるとはやるじゃねえか」

「完全に由里のペースだね」

さて、どうしよう。闇属性が主力だからけっこうこの状況は辛いな。

「オレはカードを1枚伏せて、ターン終了」

「私のターン。“コーリング・ノヴァ”を召喚」

ATK / 1400

「バトルだよ！“テュアラティン”で“マジシャンズ・ヴァルキリア”を攻撃！」

「畏発動！“幻想の呪縛”！“テュアラティン”の攻撃力を500下げる」

ATK / 2300

「でもバトルは続行されるよ」

「くっ！」

リヨウ LP 3300

「コーリング・ノヴァ”でダイレクトアタック!

「うあっ!」

リヨウ LP 1900

このままだとマズイね。

「私はカードを1枚伏せて、ターン終了だよ。

流石のリヨウ君も切り札を封じられたら厳しいかな?」

「どうかな?オレのターン」

よし。きたね、マハード。

『ずいぶん押されているな』

「巻き返すよ。大丈夫?」

『問題ない』

「由里」

「なにかな?」

「オレはこのターン、“ブラックマジシャン”を召喚するよ」

「ええ〜!? “テュアラティン”がいるんだよ!?!」

「“テュアラティン”の効果が発動すればの話だよな?」

「ふええ？ あー！」

「そ。“幻想の呪縛”の効果で“テュアラティン”の効果は無効果されてるよ」

これでマハードを召喚できる。

「魔法カード“古のルール”発動！通常モンスターを特殊召喚する。現れる！“ブラックマジシャン”！」

ATK/2500

「ふええ。封じたと思ってたんだけど」

「バトル、“テュアラティン”を攻撃！ブラック・マジック！」

武内由里 LP 3700

よしよし。これで召喚の制限は無くなったね。

「ターンエンド」

「私のターン。“ジェルエンデュオ”を守備表示で召喚するよ」

DEF/0

バトルで破壊されないモンスターか。

「更に手札から“二重召喚”発動。このターン、私はもう一度通常

召喚を行うことができるよ。

そして“ジェルエンデュオ”は光属性天使族モンスターの2体分のリリースとすることができるよ」

狙いは上級モンスターの召喚だね。

「ジェルエンデュオ”を2体分のリリースとして、“THE S
plendid VENUS”をアドバンス召喚！」

ATK/2800

「このカードが存在する時、天使族以外のモンスターの攻撃力は500ポイントダウンするよ！」

マハードの攻撃力が下がる。

ATK/2000

「いくよ！“THE splendid VENUS”で攻撃！」

「畏カード“和睦の使者”を発動！このターン、モンスターは破壊されず、戦闘ダメージも0になる」

「防がれちゃったか。私は“コーリング・ノヴァ”を守備表示に変更してターン終了だよ」

DEF/800

「オレのターン」

あの天使はオレにとって悪くしか働かない。まずは退場して貰おうかな。

「墓地の“マジシャンズ・ヴァルキリア”と“魔導戦士 ブレイカ”をゲームから除外して、“カオス・ソーサラー”を特殊召喚！」

ATK / 2300

「このカードは墓地の光属性と闇属性のモンスターを1体ずつゲームから除外することで特殊召喚できる」

「でも攻撃力が下がるよ」

ATK / 1800

残念だったね。“カオス・ソーサラー”はこのターン、どうせ攻撃しないよ。

「“カオス・ソーサラー”の効果発動！このターンの攻撃を放棄する代わりに、場上に存在するモンスター1体をゲームから除外できる！」

“THE splendid VENUS”をゲームから除外！」

「ふええ！」

「これで攻撃力は元に戻る」

ATK / 2300

ATK / 2500

「バトル、“ブラックマジシャン”で“コーリング・ノヴァ”を攻撃！」

「でも、いざって時のために“コーリング・ノヴァ”は守備表示にしてあるよ」

甘いね。

「罨カード“メテオ・レイン”！このターン、オレのモンスターは貫通能力を得る！」

「ふええ！」

「さあ、バトルだよ！ブラック・マジック！」

「きゃあっ！」

武内由里 LP 2000

「まだだよ！“コーリング・ノヴァ”が破壊された時、デッキから攻撃力1500以下の天使族モンスターを特殊召喚できるよ。」

“ホーリーフレイム”を特殊召喚するよ」

ATK/1500

オレの方が優勢にはなっただけど由里の場には伏せカードが2枚。手札はオレが1枚あるだけ。このカードを使うべきかな。

「手札から魔法カード“壺の中の魔術書”！お互いに3枚カードをドローする」

由里の手札も増えるけど仕方ないね。

「オレはカードを3枚伏せて、ターンエンド」

さあ、どうくるかな？

「エヘヘ。やっぱりリヨウ君は強いね」

「由里だって強いよ」

「リヨウ君にそう言ってもらえると嬉しいな」

「さあ、由里のターンだよ。楽しいデュエルを続けよう！」

「うん！いくよ、リヨウ君！」

「リヨウは由里とも仲が良さそうね」

「というより、リヨウと仲の悪い女の子なんているのかな？」

「いねえだろ」

「それでいいのかしら？」

「それがアリスの苦勞する原因なんだよ」

「大変なのね」

「あはは」

「私のターン！」

アリスがカードを見て笑った。キーカードを引いたかな？

「“ホーリーフレイム”は光属性の通常モンスターのリリース素材となる時、2体分のリリースとすることができるよ。

“ホーリーフレイム”を2体分のリリースとして、“翼を織りなす者”をアドバンス召喚だよ！」

ATK / 2750

攻撃力はマハードより上。

「このデュエル、私がもらったよ！」

「？」

例えばバトルしてもオレのライフは残るけど。

「畏カード!“ダイバインブラスター”発動！私の場に“翼を織りなす者”が存在する時、このモンスターの攻撃力分のダメージを与えるよ！」

2750のダメージ！これをまともに受ければ負ける！だけど、

「早計だったね、由里。
カウンター罠“地獄の扉越し銃”！効果ダメージを無効にして、相手にその分のダメージを与える！
これでオレの勝ちだよ！」

「まだ終わらないよ！
カウンター罠発動！“エクセリオンチャージ”！魔法・罠・モンスター効果が発動した時、場の“翼を織りなす者”の攻撃力分のライフを回復するよ！」

武内由里 LP 4750

「“地獄の扉越し銃”の効果を受けてもらっつよ」

「きゃあっ！」

武内由里 LP 2000

上手くいったと思ったんだけどそんなに思い通りにはいかないね。

「だ、だけど、私のバトルはまだ残ってるよ！」

“翼を織りなす者”で“カオス・ソーサラー”を攻撃だよ！」

「くあっ！」

リヨウ LP 1450

あれだけの効果を使っても“翼を織りなす者”でバトルできたんだね。

「私はカードを2枚伏せて、ターン終了だよ。」

“カオス・ソーサラー”がいなくなったからもう除外はできないよ”
確かにね。あとはマハードを頼るしかないね。」

「オレのターンだね、ドロー！」

このカードは。
ホントにマハードの力に頼ることになったね。」

「魔法発動!“黒・魔・導”!“ブラックマジシャン”が存在する時、相手場上の魔法・罠カードを全て破壊する！」

「うっ。ち、チェインして罠カード“ソーラレイ”!私の場の光属性1体につき、600ポイントのダメージを与えるよ！」

「うっ！」

リョウ LP 850

でもこれで伏せカードは無くなった。勝負をかけるよ！」

「バトル!“ブラックマジシャン”!“翼を織りなす者”を攻撃！」

「攻撃力は“翼を織りなす者”の方が上だよ？」

今は ね。」

「罠“スキル・サクセサー”を発動!“ブラックマジシャン”の攻撃力を400アップする！」

ATK / 2900

「そんな」

「さあ、いくよ！ブラック・マジック！」

「きゃあっ！」

武内由里 LP 1850

「ま、まだ私のライフは残ってるもん！次のターンで」

「今日この台詞は二回目かな。」

由里、オレの場にはもう1枚伏せカードがあるよ」

「ふえ？」

「畏発動！“未来王の予言”！このターン、戦闘でモンスターを破壊した魔法使い族モンスターはもう一度攻撃することができる！」

「ええ〜！？」

「“ブラックマジシャン”でもう一度攻撃！ブラック・マジック！」

「きゃあああー！」

武内由里 LP 0

「負けちゃった」

「楽しかったよ、由里」

マナを召喚できなくて、さっきマナがぶつぶつ言っていたのは聞こえない振りをしたけどね。今度は召喚してあげないとね。

「由里、さっきの伏せカード、もう1枚は何だったの？」

「えっとね、“スターライト・ブレイク”だよ」

「由里の切り札だったんだね」

「そうなんだよ。次のターンまでもってればね」

「ま、デュエルにもしはねえがな」

厳しいかもしれないけど啓斗の言う通りなんだよね。デュエルにもしはない。

「あ、そうだ。リヨウの端末にメールが入ってたみたいだよ」

「そうなの？ありがと、アリス」

誰からだろ？

そう思って自分の端末を開いてみると、

『今からガレージに来てくれ。不動遊星』

遊星からこんなメールは初めてなんだけど、何かあったのかな？

「誰からだったの？」

「遊星から。ガレージに来て欲しいって」

「ちょうど良いじゃねえか。ついでに紹介してくれよ」

確かにちょうど良いタイミングだね。この際だからみんな纏めて紹介した方がいいかな。

「じゃあ今からみんなで行こうか？」

みんなが賛成して頷いた。みんな来るみたいだね。

一方、

『あのモンスターも同じ感覚がした。やはり気になるな』

『お師匠様、どうかしましたか？』

『いや、何でもない』

『変なお師匠様』

第三話：喫茶店（後書き）

由里のオリカはな〇は関連ばかりです。この先どうなるかは分かりませんが。

次話は久しぶりにライディングデュエル関連です。

ライディングデュエルを全然していませんので、早いうちに一度やりたいと思います。

それでは、グッチーでした。

第四話：RDの変化（前書き）

ライディングデュエルの話です。アニメでもダークシングナー編から大分様変わりしたので、もちろん自分の小説でも。

今回は説明ばかりです。

それでは、どうぞ。

第四話：RDの変化

「遊星、いる？」

オレたちはみんな遊星とジャックさん、クロウさんが住んでいる
ガレージに来た。

「リョウ、よく来たな」

「なんだなんだ？ いっぱいいるじゃねえか」

「ごめんね、クロウさん。みんな、私たちの友達なんだよ」

「ふん。今日は千客万来だな」

千客万来？ オレたちだけじゃないのかな？

「リョウ！ アリスお姉ちゃん！」

「アキさんも。みんな来たのね」

「龍亞、龍可。二人も来てたんだね」

全員集合なんだね。偶然なんだろうけど凄いね。

「あ、リョウとデュエルした人だよな？」

「そついうお前らはリョウを応援してやがった奴らか？」

「そうだよ。オレは龍亞。こっちは双子の妹の龍可」

「俺は石井啓斗だ。よろしくな」

龍可は何も言わずにオレとアリスに近づいて来た。

「あの人はリヨウとアリスお姉ちゃんの友達なの？」

若干警戒してるのかな？

啓斗は端から見れば顔が怖く見えるかもね。

「啓斗君は私たちの友達だよ」

オレたちじゃなくて由里が答えた。

「えっと、あなたは？」

「ごめんね、私は武内由里。よろしくね、龍可ちゃん」

「うん。よろしく」

「啓斗君はちょっとだけ怖く見えるけど、とっても優しい人なんだよ」

「おいコラ、由里。フォローになってねえぞ」

「ふえ？そうかな？」

「あはははは」

龍可は楽しそうに笑ってるから大丈夫だね。

「遊星、何か用があったの？」

そろそろ本題に移らないとね。ここに来た理由をね。

「もう少し待て。オレたちを集めた奴がまだ来ておらんのだ」

集めた奴？誰かが意図的にオレたちを集めたってこと？

「お前の友達の良い人みたいだな」

「啓斗も由里もオレの大事な友達だよ」

「あんたが不動遊星か？」

「ああ。君は啓斗、だったな。オレは不動遊星。そこにいる二人はジャックとクロウだ」

「ふん」

「よろしくな」

「ジャックって、あのジャック・アトラスか？凄え奴がいるもんだな」

ジャックさんはキングだったから有名なんだね。

「ふええ。リョウ君とアリスちゃんは凄い人と知り合いなんだね」

「夏休みに知り合ったんだ。私たちの大切な仲間だよ」

「そうね」

「アキちゃんもなんだね」

みんなが自己紹介や軽い挨拶をしてると、ガレージの扉が開いた。

「よお、全員来てるか？」

「お邪魔するわ」

入って来たのはセキュリティの狭霧さんと牛尾さん。

「なんだあ？この多さは？オレは四人しか呼んでねえぞ？」

「済まない。増えてしまったんだ」

「良いんですかね？」

「知らない子が二人いるわね」

「私たちの友達なんです」

「アリスさんの友達なら問題ないわね」

「それで、オレたちに用とは一体何だ？」

「はい、アトラス様」

狭霧さんは相変わらずジャックさんのことをアトラス様って呼んでるんだね。

「治安維持局がライディングデュエルのルールを変えろという話を聞いたことがありますか？」

「それなら知ってるぜ。確か“スピードワールド2”だったか？」

その話ならオレも聞いたことがある。

「ああ。そこで治安維持局はハイウェイで自由にライディングデュエルを出来るようにするらしい。ライディングデュエルを積極的に取り入れようって訳だ」

「ですが、何も規制しないという訳にはいきません」

「何かあるのか？」

「Dホイールでライディングデュエルをする為のライセンスを取る必要があります」

「ライセンス？また面倒なことじゃがったな」

「そう言うな、クロウ。だからオレたちが来たんじゃないかねえか」

確かにね。それだけのことならわざわざ教えに来てくなくても、ニュースとかで自然と分かる。

「では何故オレたちをわざわざ集めたのだ？」

「私たちが貴方たち四人の分の推薦状を出しておいたのです」

「推薦状？」

「推薦状を出しておけば通常の半分以下の条件でライセンスを取ることが出来ます」

「お前らには世話になったからな。オレたちからのお返しだ」

確かにそれはありがたいね。

「ふん。そのくらい当然だ」

「ただ、リヨウ君にはデュエルアカデミアからの推薦状も必要になります」

「どうしてですか？」

「お前はアカデミアに在学中だ。オレたちだけの独断じゃあ通らないんだよ」

オレだけが必要な訳か。推薦状っていえば、多分校長先生からもらうものだろうし、もらえるのかな？

「安心して。私が明日、デュエルアカデミアに赴くわ。その時に私から推薦してあげる」

「ありがとうございます」

これで大丈夫なのかな。

「牛尾。ライセンスの条件は何なんだ？」

「普通なら一ヶ月の講習と実技だ。だがオレたちの推薦があれば、実技を一週間すればいい。なに、コースを一日一時間走ればいいだけだ。お前らなら造作もねえだろ」

確かに。オレたちならそのくらい造作もないね。

「ねえねえ。ライセンスってオレでも取れるの？」

「龍亞はまだ早えよ。ライセンスは15歳からだ」

「ええ〜!？」

龍亞はまだ10歳だからね。

「俺なら取れんのか？」

「今はまだ無理よ。ライセンスは先に元々Dホイラーだった者から取らせる筈よ」

「チツ、つまんねえな」

啓斗はライディングデュエルに興味あるんだね。

「それ程時がかかる訳じゃねえ。精々一ヶ月であらかたその期間は終わるだろっよ」

「その期間に何も出来ない訳でもないわ。治安維持局はライディングデュエルの奨励を始める筈よ。当然、デュエルアカデミアにも勧めがかるわ」

なるほど。だから明日、狹霧さんはアカデミアに行くのか。

「その間にルールとかを勉強するってことかな？」

「そうよ」

由里も興味あるんだ。アリスとアキは興味あるのかな？

「この話は以上よ。何か質問は？」

みんな無さそうだった。

丁寧に説明してくれたからね。

「もう一つ知らせがあるぜ。

これは近々公表される筈だが、このネオドミノシティでWRGPが開催されることが決まったんだ」

『WRGP?』

「ワールド・ライディングデュエル・グランプリ、通称WRGPのことです。その記念すべき第一回大会がこのネオドミノシティで開催されることになったのです」

「三人一組のチーム戦だ。

どうする？出場するか？」

「面白そうじゃねえか！」

確かに面白そうだね。三人一組だからチームワークとかも要求されるし、通常とは勝手も違うだろうね。

「開催は約一年半後だ。それまでライセンスを取るなり、ライディングテクを磨くなりやることはある筈だ」

「私たちの話は以上です。何かありますか？」

「いや。ありがとう、わざわざ済まない」

「ふん。借りを返したただけだ」

牛尾さんは素直じゃないね。まあいいけど。

これで話は終わり、お開きとなった。時間もちょうどいい頃合いだったからね。

次の日の昼休み、推薦についての話をする為に校長室に行った。

狭霧さんは既に来ていて校長先生と話をしていたらしい。

校長室には教頭先生もいた。

「リョウ君、君がここに来た理由は解っておる。俺からの推薦状が欲しいのじゃろう？」

「はい」

「狭霧さんから話は全て聞いておる。儂は君になら推薦状をいくらか出して良いと思っておるよ」

「ありがとうございます。校長先生」

話が解る校長先生でよかった。

「素晴らしいのであります！君は本当に我が校の誇りなのであります！

この勢いで是非、キングに！」

「遠慮しておきます。以前も言いましたが、オレはキングになるつもりはありません」

「（やっぱりそうなのね）」

「何故なのでありますか！？君ほどの者が！？」

「オレはこのアカデミアの生徒です。キングになろうとは思いません。

それにオレは自由にデュエルをしたいんです。束縛されたくはありません」

「しかしですね」

「そこまでじゃ、教頭先生。狭霧さんがおられるのじゃ」

確かに。みつともないところを見せることになりますよ。

「では、私からの話とお願いは以上です」

「うむ。ありがとうございます、狭霧さん」

「それでは、私はこれで失礼します」

狭霧さんが校長室から退出した。

後で狭霧さんにお礼を言わないとね。

「さて、リヨウ君。君にお願いがあるのじゃ」

「何でしょうか？」

「ライディングデュエルを本校に積極的に取り入れるように要請があつたのじゃ。しかし、本校にライディングデュエルが出来る者は体育科の平井先生だけなんじゃ。

そこで、リヨウ君がライセンスを取り次第、ライディングデュエルの実技講習を手伝って欲しいのじゃ」

なるほどね。そんなことならいいかな。

「オレでよろしければいくらでも手伝いますよ」

校長先生には推薦状を出してもらつた訳だし、その校長先生直々の頼みなら聞いてあげないとね。

「ありがとう、リヨウ君」

「いえ」

「リヨウ君。君はどうしてもキングになるつもりはないのでありま

すか？」

教頭先生はまたその話か。

「申し訳ありませんが、ありません」

「校長先生からもなんとか言ってお下さい」

「僕からは何も言わんよ。これはリヨウ君の自由じゃ」

本当に話が解る校長先生でよかった。

「リヨウ君、話は終わりじゃ。」

講習については後日連絡するから先ずはライセンスの取得に集中して欲しい。頑張るのじゃぞ」

「はい」

オレは返事をして退出した。

退出した廊下の先に狭霧さんが立っている。

「話は終わったのね。待ってたわ」

オレを待ってた？何か用でもあるのかな？

「どうかしたんですか？」

「貴方はキングになるつもりはないのね？」

「はい」

狭霧さんはジャックさんが好きみたいだし、オレの自分勝手な行動に怒ってるのかな？

「それが良いと思うわ」

あれ？予想外の反応だけど。

「キングになっても治安維持局にまた躍らされるかもしれないわ。アトラス様のようにしたくないの」

なるほどね。優しい人だ。

「大丈夫ですよ。キングになるつもりなんてありませんから」

「そう。なら安心だわ」

「いえ。狭霧さん、推薦の件はありがとうございました」

「気にしないでいいわ。ライセンス、取れると良いわね」

「がんばります。せっかく推薦してもらったんですから」

「そうね。なら、頑張って」

そう言っつて狭霧さんは帰っていった。

ライディングデュエルの試験期間は明後日からの一週間。最終日には検定デュエルが行われるらしい。

早くライセンスを取って、自由に楽しくライディングデュエルがで

きればいいんだけどね。

その頃、

「やはり精霊だったか」

「まあな。だが、主は気付いちやいねえし、お前が気にする必要はねえ。主がスピリットシグナーって確認はどこにもねえからな」

「解っている。確認に来ただけだ」

「そうかい。しかし、お前の主は強えな」

「当然だ。私たち精霊と主の絆は負けない」

「大した自信　いや、違えな。信頼　か」

もう一方で、

「お師匠様の言った通り、精霊だったんだね」

「はい。私は主に仕える精霊です。主はお気付きになられませんが」

「きっと大丈夫だよ。あの娘ならいつか気付いてくれると思っよ」

「そうですね。その日を心待ちにしておきましょう」

「きつと楽しいよ」

「はい。貴女を見てみると、その感情がよく解ります」

「えっへん」

陰で行動している者は多々いる。自分の知らないところで物事が勝手に動いていることは珍しくない。

「彼をキングにするにはどうしたらいいでありますでしょうか？」

「彼に勝ち続けて貰い、勝利を重ねることとその感覚を覚えさせるというのがどうでしょうか？」

「ふうむ。出来るでありますか？」

「やってみる価値はあると思います」

「解りました。やってみましょう」

暗躍とはどこかで行われる。野心を持った人に限って、必ず。

第四話：RDの変化（後書き）

説明の内容は合っているでしょうか？
間違いがあれば是非教えて下さい。

これでやっと一日が終わって次の日に入りました。
こんなに展開が遅いのは最初だけです。

それでは、グッチーでした。

第五話・Love Duel(前書き)

いきなりこんな題名ですいません。

とりあえずこれからはラブコメっぽくなります。何話が続けての予定です。

宜しければ優しい目で読んで下さい。

それでは、どうぞ。

第五話：Love Duel

どうしてこうなったんだろう？

今の状況下でそう思わずにはいられなかった。

オレはアカデミアのデュエル場で一人の女の子と対峙している。女の子の名前は芳光弥生さん。彼女の隣には兄の誠一さんが立って旗を振っている。

弥生ガンバレ

こうなったのは昨日のことが原因と思う。

昨日、明日からライディングデュエルのライセンスを取る試験が始まるとアリスたちに報告した矢先に、先輩に呼び出された。

「リョウ君、明日デュエルをしてくれないか？」

先輩からのデュエルの申し出だったから受けない訳にはいかない。

「構いませんよ」

「ありがとうございます。明日の昼、デュエル場でしょう」

「解りました」

このやり取りで終わった。だけど、この状況は何？

デュエル場にいる大勢の生徒たち。これはいい。デュエルを見られることが嫌な訳じゃないから。

オレの相手が先輩ではなく妹さんなこと。これもまだいい。デュエルをして欲しいと言われただけで先輩がするとは一言も言っていないから。

オレの一番の疑問、それは、

Love Duel

デュエル場中にそう書かれた模造紙が貼ってある。
何が何だかさっぱり解らない。

「ふふふ、驚いているようだね、リョウ君」

「いきなりのこの状況で驚かない人はいないと思います」

「えっと、急でごめんなさい」

「とりあえず、説明してくれると嬉しいんだけど」

芳光弥生さんとは初対面じゃない。確か隣のクラスの娘で、同級生だった筈。でもそういう認識しかないから、決して親しい仲じゃないと思うんだけど。

「君の疑問はデュエルをすれば解るよ。」

さあ、始めよう！君と弥生のラブデュエルを！」

「よろしくお願いします、リョウ君」

とりあえず、デュエルするしかないのかな。

『デュエル!』

「この状況を説明出来る奴いるか？」

「にははは。いないと思う」

「リヨウ自身もよく解っていないようね」

「ラブデュエルって何なのかな？」

誰もがアリスと同じ疑問を抱いているだろう。二人の兄弟を除いて。

「リヨウ君からどうぞ」

「うんうん。困惑しているリヨウ君に先攻を譲る。弥生はなんて優しいんだ」

オレのターンから始めていいのか。

「オレのターン。“マジシャンズ・ヴァルキリア”を召喚」

ATK/1600

「これでターンを終了するよ」

「私のターン、ドロー。」

えっと、リヨウ君。女の子はまず何がしたいと思うっ？」

「？」

何かの謎かけ？

「女の子はね、男の子のことをよく知りたいうって思うの」

「そう、女の子は複雑なんだよ」

だから何が言いたいんだろ？

「私は“クリッター”を召喚するわ」

ATK / 1000

「男の子のことを知る為に出来ることはたくさんあるわ。お兄ちゃんが言うにはこれがその一つなの。

魔法カード“強制転移”。自分のモンスターと相手モンスターのコントロールを入れ替えるわ」

“マジシャンズ・ヴァルキリア”のコントロールが奪われ、“クリッター”がオレの場に来た。

「まずは手の内の交換だ。相手のことを知りたいのなら情報の交換をしなければならいんだよ」

“マジシャンズ・ヴァルキリア”の効果と“クリッター”の効果は有名だから知ってると思うけど。

「バトルよ。“マジシャンズ・ヴァルキリア”で“クリッター”を攻撃！」

「！」

リヨウ LP 3400

“マジシャンズ・ヴァルキリア”が物凄く哀しい顔で攻撃してきた。

「破壊された“クリッター”の効果。攻撃力1500以下のモンスターはデッキから手札に加えるわ。」

デッキから“マンジユ・ゴッド”を加えるわ。」

私はこれでターンエンド！」

「どうだい？リヨウ君。モンスターを交換した気持ちは？」

「オレのターン」

あんな顔　もう見たくないな　。

「さっきの答えですが、嫌ですね。オレはカードとの絆を大切にしたいですから」

「えっと」

「オレとカードたちとの絆は切れないよ。」

手札から魔法“所有者の刻印”発動！全てのモンスターは元のプレイヤーのコントロールに戻る！」

“マジシャンズ・ヴァルキリア”が少し複雑な顔で戻ってきた。

『申し訳ございません、ご主人様。ご主人様に手を挙げてしまつとは』

「気にすることないよ。“マジシャンズ・ヴァルキリア”の所為じゃない」

『ですが』

「大丈夫だよ。オレたちの断ち切れない絆を見せてやろう」

『はい!』

表情が軟らかくなった。これで大丈夫だね。

「バトル!“マジシャンズ・ヴァルキリア”でダイレクトアタック」!

「きゃっ!」

芳光弥生 LP 2400

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「(お兄ちゃん!失敗したわよ!?)リヨウ君、怒ったんじゃ」

「(大丈夫。彼は優しい。そう簡単には怒らない筈だよ)」

「(うん。お兄ちゃんを信じるわ)」

「（頑張るんだ）」

「私のターン、カードを3枚伏せて、ターン終了」

モンスターを召喚しない？何かあるのかな？

「オレのターン」

「プレゼントよ。是非受け取って。罨“おジャマトリオ”！相手場上に“おジャマトークン”を準備表示で3体特殊召喚するわ」

DEF/1000

要らないプレゼントだなあ。 “おジャマトークン”は破壊された時300ポイントのダメージを受けるからね。

「女の子のプレゼントはどんな物だろうと、受け取るのが男の役目だよ」

拒否権は最初から無いけどね。

でも相手場にモンスターはいないのなら、

「マジシャンズ・ヴァルキリア”でダイレクトアタック！」

「攻撃の前に罨発動！“つり天井”！場上にモンスターが4体以上存在する時、全てのモンスターを破壊するわ。ごめんね」

「うっ！」

リヨウ LP 2500

これが狙いか。
モンスターを召喚しなくてよかった。

「ホーリー・エルフ”を守備表示で召喚して、ターンエンド」

DEF / 2000

「私のターン。リヨウ君、私はいろんなことを共有したいわ。
魔法カード“壺の中の呪文書”。お互いのプレイヤーはカードを3枚ドロウするわ」

これでオレの手札は6枚、彼女の手札も6枚か。

「お互いに同じ行動をする。なんて素晴らしいんだ」

どこがどう素晴らしいのかよく解らないんだけど。

「私は“ワタポン”を特殊召喚するわ」

ATK / 2000

「このカードは魔法カードの効果でデッキから手札に加わった時、特殊召喚できるわ。」

“ワタポン”をリリースして、“炎帝テストロス”を召喚！」

ATK / 2400

「このカードが召喚に成功した時、相手の手札をランダムに1枚捨

てるわ」

「させないよ。カウンター罠“天罰”！手札を1枚墓地に送り、モンスター効果の発動を無効にして破壊する！」

結局1枚墓地に送ることになるけど、自分で選んで墓地に送った方がずっといいからね。余計なダメージもないし。

「ダメじゃないか。女の子の申し出を断ったりしたら」

今はデュエル中ですから。

「私はこれでターンエンド」

「オレのターン。“ホーリー・エルフ”をリリースして、“ブラックマジシャンガール”をアドバンス召喚！」

ATK/2000

「“ブラックマジシャンガール”でダイレクトアタック！ブラック・バーニング！」

「きゃあっ！」

芳光弥生 LP 400

「ダメージを受けた今、罠カード“運命の分かれ道 ドラマチック・クロスロード”を発動するわ。手札をランダムに1枚捨てるか、私に手札を見せて私がカードを1枚選んで手札に加えるわ。リョウ君にはどちらかを選んでもらうわ」

なんだその選択。

「このデュエル、リヨウ君に勝つことが目的じゃないわ。リヨウ君に私をよく見て欲しいの。リヨウ君の心を私に向けて欲しい。リヨウ君にその気があるのなら私に手札を見せて欲しいわ」

やっと解った。この娘はオレにそういう感情があるんだ。ただ、オレにも譲れないことがある。

「ごめんね。オレは手札をランダムに捨てる方を選択するよ」

「あ」

「何故だい!？」

「オレにはカードたちとの絆を裏切ることなんてできません」

『リヨウ』

「それ程そのカードたちが好きなのかい!？」

。そういえば今のデュエル、女性型のモンスターしか召喚してないな。

「君はそのカードたちがそんなに好きなのかい!？」

「好きですよ」

『ありがとう、リヨウ』

みんな大事なオレの仲間だから。今更見捨てるなんて絶対にできない。

「済まない、弥生。この作戦は失敗だ！」

「まだだわ！こうなったら、デュエルに勝ってリョウ君の心を私に向けさせてみせるんだから！」

「弥生」

そんなにオレのことを想ってくれてるんだ。

「私のターン！来たわ！フィールド魔法“祝福の教会 リチューア
ル・チャージ”を発動するわ！」

場全体が結婚式みたいな教会に様変わりしていく。

「おお！これが弥生の本気の想いなんだよ！」

そうなんだろうね。

「このカードの効果で手札の魔法カードを墓地に送ることで、儀式魔法カードを手札に加えるわ。

“機械天使の儀式”を手札に加えるわ。

そして“マンジユ・ゴッド”を召喚」

ATK/1400

「このカードが召喚に成功した時、儀式モンスターを手札に加える

ことができるわ。

“サイバー・エンジェル 弁天”を手札に加えるわ。
儀式魔法“機械天使の儀式”を発動！」

くるね。

さっき言ってた通り、本気で勝ちにくるのかな。

「場の“マンジュ・ゴッド”と手札の“白魔導士ピケル”をリリースして、“サイバー・エンジェル 弁天”を儀式召喚！」

ATK / 1800

攻撃力ならマナの方が上。だけどまだ手札は残ってる。多分何かあるね。

「さらに手札から“エネミーコントローラー”を発動するわ。“ブラックマジシャンガール”を守備表示に変更するわ」

DEF / 1700

マナが守備の体制をとらされた。これで“サイバー・エンジェル”の攻撃力が上回ったか。

「いくわ!“ブラックマジシャンガール”を攻撃！」

『きゃあっ！』

くっ、マナが。

「“弁天”の効果発動！戦闘で破壊したモンスターの守備力分のダ

メージを与えるわ！」

リヨウ LP 800

まだ終わらないよ。

「畏発動！“奇跡の残照”！このターン、破壊されたモンスターを特殊召喚する！
マナを特殊召喚する！」

DEF / 1700

『リヨウ、大丈夫？』

「破壊されたけど、マナこそ大丈夫？」

『平気だよ』

「オレもだよ」

これがオレたちの絆なんだ。絶対に失いたくない。

「君はその“ブラックマジシャンガール”がそんなに好きなのかい？」

「好きですよ。オレの家族のような存在ですから」

『えへへ、照れ臭いよ』

少しだけ顔を赤くしてる。可愛いもんだね。

「彼女のことを愛しているとでも言うのかい!？」

「そこまで言うつもりはありません。ですが、大切な存在であることに変わりはありません」

「君は何故そこまで？」

「カードたちとの絆を信じるか信じないかじゃないですか？」

本当にそう思う。だからこそ、オレたちはお互いに信じ合ってるんだ。

「まだデュエルは終わってないわ！リョウ君のターンよ」

「オレのターン」

このカードは。

『必要なら僕を使って』

“マジシャンズ・シンクロン”。
使っていいんだろうか？このカードは何も考えずに使っていいカードじゃない。
。。
だけど、今オレが引いたってことはそれがカードたちの想いってこと。

だったらオレは その想いに応えなくちゃならない。

「オレとカードたちの想い、全部見せてあげる。いくよ、マナ」

『うん!』

「手札からチューナーモンスター“マジシャンズ・シンクロン”を召喚!」

ATK/0

「リョウ君がチューナーモンスター!?!」

オレはシンクロ召喚を今まで使ってなかったからね。

「レベル6のmanaに、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング!

黒き魔術が交わりし時、新たな絆の幕が開く。光差す希望と為れ!シンクロ召喚!舞え!“SF ブラックマジシャンガール”!」

ATK/2400

「なっ!?!白い“ブラックマジシャンガール”!?!」

「これがオレたちの想いの力だよ」

「リョウ君のあのカード、初めて見る」

「あんなカード持ってやがったのか!?!俺たちとのデュエルじゃ使わなかったじゃねえか!」

「あのカードは多用していいカードじゃないよ」

「アリスちゃん、それってどういう意味？」

「あのカードは特別なんだよ。考え無しに使っていいカードじゃないから」

「じゃあ何で今使ってたんだ？」

「多分、あの娘の想いに真っ直ぐ向き合う為に。あの娘の想いを受け止める為に」

「複雑ね。(アリス、貴女にとってはね)」

「マジシャンズ・シンクロン」が魔法使い族モンスターとのシンクロ召喚に成功した時、デュエル中一度だけ場に戻る」

ATK/0

「終わりにしよう。」

マナ、“サイバー・エンジェル 弁天”を攻撃！」

「そう。これで終わりだわ。」

手札から“オネスト”の効果発動!“弁天”は戦闘を行う相手モンスターに攻撃力分、攻撃力をアップするわ！」

「マナの効果発動。墓地の“天罰”をゲームから除外して効果を使う。手札を1枚墓地に送り、“オネスト”の効果は無効にするよ」

「そ、そんな」

「バトル続行」

『これが私たちの想い、そして絆の力だよ!』

「スター・イリユージョン・バーニング!」

「きゃあああああつ!」

芳光弥生 LP 0

「負けたわ」

複雑なデュエルだったな。
もっと楽しくデュエルができればいいんだけど、上手くないのが現実かな。

「デュエルには負けてしまったが、恋はまだ終わっていない!彼は確かにカードのことが好きだが、それは愛には至らないんだ!」

「そうね。お兄ちゃんの言う通りだわ」

ゆっくりと立ち上がって静かにオレの前に来た。決意を秘めた目を
して。

「こんな形になってしまったけれど、私は誰にでも優しくして、

カツコイリヨウ君が好きです。
私と お付き合いしてくれませんか？」

やっぱりそうなんだね。
気付いてはいた。ただデュエル中だったし、どう反応していいか解らなかったからそつとしておいた。

今になって直接告白するのはどうかと思わなくもないけど、この娘の想いは多分本気なんだろうね。

きつと不器用で、こんな形になったんだと思う。想いを言葉にするのは、難しいことだから。

この場にいる生徒全員がオレの返事に注目してるのを感じる。
今オレが断れば、この娘は傷付くよね。

だけど、曖昧な返事をすればまた悲しんでる顔を見ることになるかもしれない。
オレは約束したんだ、もう悲しませない、泣かせないって。
だから、オレの答えは。

「ごめんね。あなたの想いには応えられない」
会場に沈黙が広がった。

「どうして?」

今にも泣きそうな声が会場に響く。

「あなたの気持ちは素直に嬉しい。だけどオレには既に、大切な人がいるから。」

その人の気持ちを裏切れることは絶対にできない。オレにとってその人は、大切に、大好きな人だから。」

オレの声が静かに会場に響き渡る。

「そう　なんだ」

弥生さんがオレに背を向けて会場から走り去る。多分、耐え切れなくなっただろうね。

誠一さんも少し遅れて会場を走り去った。

申し訳ないけど、今は誠一さんに任せるしかない。

オレは一人、会場の真ん中に取り残された。

第五話：Love Duel（後書き）

どうだったでしょうか？

とりあえずGXのアニメを参考にしました。兄の誠一は天上院吹雪
っぽくなってしまいました。

これから先、あの兄妹が出て来ることはないと思います。

それでは、グッチーでした。

第六話・それぞれの想い（前書き）

一日二話目の投稿です。

変わらずラブコメですが若干話が重たいです。

それにいつもより短いです。

よろしければ読んで下さい。

第六話：それぞれの想い

side アリス

Love Duelから二日経った。

あの日からアカデミアは大盛り上がりになってる。

『リヨウの好きな人は誰だ！？』って感じで。

リヨウはアカデミアで元から人気者だったし、さらにフォーチュン・カップ優勝もあって、人気が大きくなった。

私としてはちよつと複雑なんだよね。

リヨウはこんな騒ぎになっても私のことは黙ってる。リヨウは恥ずかしいって言ってたのは知ってる。だけど、秘密にしていることで女の子から言い寄られてる姿はあんまり見たくないな。

『アリス』

『どうしたの？シン』

シンが出て来るのは珍しいんだけど。

『いつもの様子ではないのが少し気になった。大丈夫か？』

「うん」

『吾が言う必要等ないとは思うが、リヨウは主アリスを想い、あのような断り方をしたのではないのか？』

私もそう思ってる。リヨウがあんな断り方をするなんて今までなかったから。

『それとも、何か別に思うことがあるのか？』

「うん」

リヨウが断ったのは私の為だと思う。思いたい。

だけどリヨウは頑なに私のことを言わない。少し不安になってくる

。リヨウは私のことが好きなんだよね？

『吾に色恋沙汰はよく解らない。吾より、相談に乗ってくれる友がいる筈だ』

シンが静かに私の前から姿を消した。

「アリスちゃん」

「由里」

シンと入れ違いに由里が来た。シンはこのことを解って姿を消したんだろうね。シンに余計な心配かけちゃったかな。

「アリスちゃん。大丈夫？」

「うん」

「全然大丈夫に見えないよ。私はリヨウ君なら心配いららないと思うけど」

「うん」

「アリスちゃんらしくないよ。私でよければ、お話聞かせて？」

「ありがとう、由里」

私は由里に思ってることを全部話した。私が不安になってる理由を。

「リヨウ君に限ってそんなことはないと思うけど」

私もそう信じたい。でも、心が納得してくれない。

「リヨウ君と話とかしてる？」

「ううん」

そういえば全然話してないな。
リヨウは放課後すぐにライディングデュエルのライセンスを取る為の試験走行に行っちゃうし、休み時間は問い詰められることが多いから。

「やっぱりね。まずはリヨウ君と話をしてみるのがいいんじゃないかな？」

「そうだね」

「私も一緒に行こうか？」

「うっん。一人で大丈夫だよ」

「そう？それなら頑張ってるね。リョウ君ならきつと大丈夫だよ」

「ありがとう、由里」

由里の言う通り、リョウと話をしてみよう。

リョウは今日も放課後、試験走行に行くだろうからその時に

side out

あれから大変な日々が続いてる。

休み時間には好きな人は誰かと問い詰められて休む時間はないし、放課後はライセンスの為に試験走行に行ってるし。やっぱり、本当のことを言うべきなんだろうけど、なんとなく言うのに抵抗がある。相変わらず恥ずかしいのかな？

「なに陰気臭え顔してんだ。シャンとしろ！」

「啓斗」

「まったく！言っちゃまえばいいじゃねえか。そんなに隠し通すことでもねえだろ？」

「もう少し考えてみるよ」

「ハア。解ったよ。お前の気持ちをハッキリさせる。そうすりゃ良い答えが見つかるだろ」

「ありがとね、啓斗」

啓斗の言う通りかもしれない。オレの気持ちをハッキリさせないからね。

オレは啓斗と別れてから放課後すぐに家に帰った。ソニックに乗って遊星たちが住んでるガレージに向かった。

「遊星、来たよ」

「ああ。行こう」

遊星は自分のDホイールに乗って二人で試験走行コースに向かう。

「ジャックさんとクロウさんは相変わらず？」

「ああ。二人とも働いている」

なんでも、この三人でWRGPに出場することを決めたらしい。WRGPで優勝する為に新しいエンジンを作る、その為にジャックさんとクロウさんは資金集め、遊星はエンジン開発に勤しんでいる。

だからオレを待たずに早めに一日の試験走行を終わらせて働いている。オレは放課後しか来れないからね。

遊星はオレのことを思ってくれたのか、オレを待っていてくれる。遊星とオレは一緒に試験走行に行くのがここ数日の日課になっている。

コースに着いて、セキュリティの試験監督さんに指示を受けて走行を始める。

「リヨウ。ソニックの調子は良さそうだな」

「悪くないよ」

「お前の調子は悪そうだな」

「そうかな？」

「ああ。この数日、スピードがあまり上がっていない。何かあったんだろ？」

そんなに遅くはないと思うけど、遊星と走ってればそう感じるかもね。

にしても、遊星には何も話してないのに。相変わらず鋭いなあ。

「そう見える？」

「数日見ていたが、そう見えるな」

「ちょっとアカデミアでいろいろあってね」

遊星に全部話してみた。相談相手は多い方がいいだろうし、遊星には話しても大丈夫だろうしね。

「なるほどな」

「まあね。ちょっと悩んでて」

「オレは女性と付き合ったことは一度もないからお前の悩みはよく

解らない。だが、アリスがどう思っているか知っているのか？」

「アリスは言ってもいいって前に言ってたけど」

「最近はどうだ？」

「最近はあるまり話してないな」

「だろうな。もっと話すべきじゃないのか？」

「そうだね」

遊星の言う通りか。

まずはアリスと話すべきなんだよね。

「早い内に いや、今日中に出来そうだな」

「？」

遊星が笑ったのを見て何かあったのかと思ったけど。

「入口の方をしてみる」

遊星に言われた通り、入口の方向に顔を向けてみると、アリスが立っていた。

「アリスも同じ考えのようだな」

「そうみたいだね」

そうこう話している内に走行時間が終わる。

「ゆっくり話してこい。オレは先に帰る。頑張れよ、リョウ」

「ありがとう、遊星」

遊星と別れてからアリスが待つてる所に向かった。

「アリス、来てくれたんだね」

「うん。遊星さんは？」

「先に帰るって。気を使ってくれたみたい」

「そうなんだ」

「帰ろ、アリス」

「うん」

会話が少しぎこちない気がする。。
オレはもちろん、アリスも意識してるんだね。。

「えっと、リョウ」

「なに？」

「やっぱり、言うのは恥ずかしいかな？」

「自分でもよく解らない。なんとなく抵抗があるんだよね」

「そうなんだ。その抵抗は私に関係してる？」

「?どういう意味？」

「あ、ううん。関係してないならいいよ。気にしないで」

今の質問の意図はなんだろう？

side アリス

リヨウは私には関係ないって言うてくれた。リヨウがどうして抵抗を感じてる理由は解らないけど、きっと大丈夫だよな。

「アリス？」

「ん?なに？」

「アリスは何に悩んでるの？」

「いや、もう大丈夫だよ」

「ならいいんだけど」

「じゃあ、一つだけいいかな？」

「もちろん」

「リヨウは誰が好き？」

やっぱり確認したかった。
リヨウを信じたい、そう思っただけでもやっぱり確認したい。ただの私の我が儘なのは解ってるんだけど。

「誰って、そんなの決まってるよ。どうしたの？」

「誰？」

「アリス、オレが一番大切にしてくれて、大好きなのはアリスだよ」

「ありがとう」

信じよう。私はリヨウが好きだから、大好きな人を信じよう。

「やっぱり、アリスと話すと落ち着くね」

「うん。私も」

「最近話してなかったからね。主にオレの所為ではあるんだけど」

「大丈夫だよ。今日こうして話したから」

「そうだね」

リヨウと話してるとなんだか安らぐ。私はやっぱりリヨウが好きなんだね。

「アリス、ちゃんと決心付けて言おうと思う。いいかな？」

「うん。私、待ってるから」

ちゃんと待とう。リヨウを信じて待ってたいから。

「そろそろ家に着くね。アリス、また明日ね」

「また明日ね、リヨウ」

side out

翌日、アカデミアで相変わらずの生活だった。オレは問い詰められて余裕がない。その時に言おうかと思っただけど、結局踏ん切りはつかなかった。

そして実技授業の時間になる。この時間が授業中だけが一番落ち着く。 筈だった。

「今日の実技はある二人の生徒のデュエルを見て貰うのであります」
教頭先生の発言に少しがっかりする。せっかくデュエルできると思っただけどね。

「リヨウとアリス・ルシエにデュエルをして貰うのであります」
はい？

「（リヨウとアリスか。今はちょうどいいだろうな。教頭の奴、たまにはいいことするじゃねえか）」

「（ふええ　。　どうなるの？）」「

「二人は準備するのであります。ただ、今回のデュエルは少し条件付きなのであります」

条件？なんだそれ？

「リヨウが負けた場合、噂になっている好きな人をこの場で告白して貰うのであります」

「ちょっと待つてください！意味が解りません！」

「リヨウ君、君には何かしらのハンディキャップを付けなければ面白くないのであります」

いやいや、訳解んないんだけど　。

「（これでリヨウは勝つのであります。リヨウには勝ち続けて貰う必要があるのであります）」

しょうがないか　。

アリスが相手だけど、こんな形で告白するのは嫌だから勝つしかないね。

オレとアリスだけその場から離れてデッキの調整をしてる。

『やれやれ。妙なデュエルになったものだ』

『アリスちゃんとこんなデュエルになるなんて予想もしてなかったもんね』

「ホントだよ。勝ちにいくけどね」

こんな形で告白したくないし、どんなデュエルでも手は抜きたくない。それがカードたちへの想いだと思うし、絆を護りたい。

「さ、行こうか、二人とも」

side アリス

『主アリス、どうするのだ？』

『きゃう〜』

「どうしようかな」

こんな形でリョウとデュエルするなんて思ってなかったから。

『いつそのこと、主アリスの本気を受けて貰うのはどうだ？』

「どうという意味？」

『本気でデュエルすればいい。自然と想いが現れる』

それがいいかもしれない。せっかくリョウとデュエルするんだし、芳光さんを少し見習ってみようかな。

「力を貸してね、二人とも」

『きゃう!』

『承知した』

本気でいく以上、リップにも力を貸してもらおう。私の持てる力を全部出し切るんだ。

side out

オレとアリスはデュエル場で静かに対峙している。

「こんな形でアリスとデュエルするとは思ってなかったよ」

「私もだよ。でも、リョウとデュエルするのは久しぶりだね」

「そうだね。楽しいデュエルをしよう」

「うん。本気でいくよ」

アリス、かなり本気だ。

楽しいデュエルになるだろうけど、負けたら告白しなきゃならないんだよね。本人が目の前にいるけど。

「さあ、デュエル開始なのであります」

「始めようか?」

「うん」

『デュエル!』

第六話・それぞれの想い（後書き）

どうでしたでしょうか？

こんなことあるんじゃないかなと思います。自分は経験ないですけど。

次話はアリスとデュエルです。

お互いかなりのマジデュエルの予定です。

それでは、グッチーでした。

第七話：想いと決意と（前書き）

V S アリスです。

かなり長くなりました。

この話でラブコメは一旦終了です。

それでは、どじょう。

第七話：想いと決意と

『デュエル！』

「アリスからどうぞ」

「ふふ、リヨウは相変わらずだね。

ドロ。速攻魔法“手札断殺”を発動。お互いのプレイヤーは手札を2枚墓地に送り、カードを2枚ドロするよ」

いきなり手札交換か。いや、墓地に送ることが目的だったかな。

「手札から“サファイアドラゴン”を召喚」

ATK / 1900

「カードを1枚伏せて、速攻魔法“超再生能力”を発動するよ。このターンに私が墓地に送ったドラゴンの数だけカードをドロするよ。」

私が墓地に送った数は“手札断殺”で送った2枚だから、カードを2枚ドロ。」

これでターン終了だよ」

飛ばしてるね、アリスは。

「オレのターン。“魔導騎士 ディフェンダー”を守備表示で召喚」

DEF / 2000

「このカードの召喚により、魔力カウンターを一つ置く。カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「（リヨウは様子見かな？）

私のターン。“ハウンド・ドラゴン”を召喚」

ATK / 1700

「更に永続魔法“一族の結束”を発動。自分の墓地のモンスターの種族が1種類の場合、その種類のモンスターの攻撃力は800ポイントアップするよ！」

ATK / 2700

ATK / 2500

「バトル！“サファイアドラゴン”で攻撃！」

「速攻魔法“サイクロン”を発動して、“一族の結束”を破壊するよ」

「っー！」

これでアリスのモンスターの攻撃力は元に戻るね。

ATK / 1900

ATK / 1700

「アリスには超過ダメージを受けてもらっつよ」

アリス LP 3900

「（むう、流石リヨウ。簡単にはいかないね）
ターン終了だよ」

「オレのターン。“魔導戦士 ブレイカー”を召喚」

ATK / 1600

「カード効果で魔力カウンターを一つ置き、攻撃力が300ポイントアップ」

ATK / 1900

「魔導戦士 ブレイカー”で“ハウンド・ドラゴン”を攻撃」

アリス LP 3700

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン。“サファイアドラゴン”をリリースして、“デス・ヴォルストガルフ”を召喚するよ！」

ATK / 2200

「魔導戦士 ブレイカー”を攻撃！」

リヨウ LP 3700

「魔導騎士 ディフェンダー”の効果で、“魔導騎士 ディフェンダー”の魔力カウンターを取り除き、“魔導戦士 ブレイカー”

の破壊を無効にするよ」

「これでターンエンド」

あの上級モンスターをどうにかしたいな。

「オレのターン。装備魔法“魔導師の力”を“魔導戦士 ブレイカー”に装備。オレの場にある魔法・罠カード1枚につき、攻撃力が500ポイントアップする」

ATK / 2900

「魔導騎士 ディフェンダー”を攻撃表示に変更」

ATK / 1600

「バトル!“魔導戦士 ブレイカー”で“デス・ヴォルストガルフ”を攻撃！」

「お返しだよ。罠“砂塵の大竜巻”で“魔術師の力”を破壊するよ」

あ、しまった。

「リヨウにも超過ダメージだよ」

リヨウ LP 3400

「魔導騎士 ディフェンダー”の効果で“魔導戦士 ブレイカー”の魔力カウンターを取り除き、破壊を無効」

ATK / 1600

「ターンエンド」

「私のターン。“デス・ヴォルストガルフ”で“魔導騎士 デイフ エンダー”を攻撃！」

「くっ」

リヨウ LP 2800

「更に“デス・ヴォルストガルフ”がモンスターを破壊した時、500ポイントのダメージを与えるよ」

リヨウ LP 2300

「カードを1枚伏せて、ターン終了だよ」

アリスは強いなあ。
オレもそろそろ反撃しなくちゃね。

「オレのターン。手札から“龍の破壊者”を召喚」

ATK / 0

「“龍の破壊者”の効果で、このカードをリリースして手札から“バスター・ブレイダー”を特殊召喚！」

ATK / 2600

「うっ
」

アリスが露骨に嫌そうな顔をする。“バスター・ブレイダー”はアリスにとって天敵だからね。

「バスター・ブレイダー”の攻撃力は相手の場と墓地のドラゴン1体につき500ポイントアップするよ」

アリスの墓地にはドラゴンが4体、場には1体だね。

ATK / 5100

「やっぱり“バスター・ブレイダー”は私、苦手だなあ
」

「待った無しだよ、アリス。

“バスター・ブレイダー”で“デス・ヴォルストガルフ”を攻撃！」

「畏カード“攻撃の無力化”！攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させるよ」

防がれたか。簡単に勝たせてはくれないね。

「オレは“魔導戦士 ブレイカー”を守備表示にしてターンエンド」

DEF / 1000

“バスター・ブレイダー”をどう攻略してくるかな。

「私のターン。“ボマー・ドラゴン”を召喚するよ」

「ボマー・ドラゴン”で“バスター・ブレイダー”を攻撃！」

「!？」

そんなことしたら、超過ダメージでアリスのライフは。

「ボマー・ドラゴン”が攻撃する時、戦闘ダメージは0になるよ”

でも結局“バスター・ブレイダー”に破壊されるだけの筈。

「ボマー・ドラゴン”が戦闘で破壊された時、破壊したモンスターを破壊するよ!”

「!？」

これが狙いか。

“バスター・ブレイダー”が破壊される。

「これで厄介なモンスターは倒したよ。

“デス・ヴォルストガルフ”で攻撃！」

この罠はもう少し残しておくつもりだったけど仕方ないね。

「畏発動!“魔術の呪い”!魔法使い族モンスターが戦闘で破壊される時、その破壊を無効にして相手モンスターを破壊する!”

「きゃっ!」

これでアリスの場にモンスターはいなくなったね。

「私はカードを1枚伏せて、ターン終了」

「オレのターン」

畳み掛けるなら今がチャンスだね！

「魔法剣士ネオ”を召喚！」

ATK / 1700

「魔導戦士 ブレイカー”を攻撃表示に変更」

ATK / 1600

「バトル！2体のモンスターでダイレクトアタック！」

「きゃあああっ！」

アリス LP 400

このターンで大幅にライフを削ることができた。イケるね。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「くうっ。私のターン。」

魔法カード“天よりの宝札”！お互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにドローするよ」

お互い手札6枚。
これじゃ何が起こるか解らないね。

「魔法カード“竜の嗅覚”を発動！相手場上にモンスターが2体以上存在する時、ドラゴンを特殊召喚する！
手札から“レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン”を特殊召喚
！」

ATK/2800

「本当に流れが変わったなあ」

「勝負はこれからだよ。」

“レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン”は1ターンに一度、手札か墓地のドラゴンを1体特殊召喚できるよ。
墓地から“デス・ヴォルストガルフ”を特殊召喚！」

ATK/2200

「バトルだよ！」

「この瞬間速攻魔法発動！“デイメンション・マジック”！場の“魔導戦士 ブレイカー”をリリースして、手札から“ブリザード・プリンセス”を特殊召喚！」

ATK/2800

「更に“デイメンション・マジック”の効果で“レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン”を破壊！」

「きゃっ！」

これでドラゴンを呼ぶ術は無くなったね。

「“デス・ヴォルストガルフ”は魔法カードが発動した時、攻撃力が200ポイントアップするよ」

ATK/2400

「それにまだ攻撃は残ってる。

“デス・ヴォルストガルフ”で“魔法剣士ネオ”を攻撃！」

「くっ！」

リヨウ LP 1600

「更に500ポイントのダメージ！」

リヨウ LP 1100

「カードを1枚伏せて、ターン終了」

「オレのターン」

“ブリザード・プリンセス”の攻撃が通ればオレの勝ちだけど。

「ここは勝負だね。“ブリザード・プリンセス”で攻撃！」

「畏カード“ガード・ブロック”！この戦闘のダメージを0にして、カードを1枚ドローするよ」

やっぱり防いできたか。

「ホーリー・エルフ”を守備表示で召喚して、ターンエンド」

DEF / 2000

「私のターン」

アリスが少しだけ笑った。多分あのカードを引いたね。
オレのライフは残り1100。アリスの実力を考えれば、十分とは言えない。

「スタンバイフェイズに墓地の“ミンゲイドラゴン”の効果発動。自分場にモンスターが存在しない場合、攻撃表示で特殊召喚できるよ」

ATK / 400

「“ミンゲイドラゴン”を2体分のリリースとして、シンをアドバンス召喚！」

ATK / 2400

『グオオオオッ！』

シンはやる気満々か。

「シンで“ホーリー・エルフ”を攻撃！黒炎弾！」

「つと」

でもまだ“ブリザード・プリンセス”がいるし、攻撃力はシンより上。

「この瞬間、畏発動！“竜の重圧”！私のドラゴンが戦闘でモンスターを破壊した時発動できるよ。相手モンスターの装備カードとなつて、攻撃力を0にする！」

ATK / 0

弱ったね。
。 。
攻撃力は高かったんだけど。

「カードを3枚伏せて、ターン終了」

「オレのターン」

アリスがシンを召喚した以上、オレも召喚しないとね。

「ブリザード・プリンセス”をリリースして、マナをアドバンス召喚！」

ATK / 2000

「装備カードとなっていた“竜の重圧”が破壊されたターン、リョウは攻撃できないよ」

流石ってところだね。

「魔法カード“賢者の宝石”！マナが場に存在することにより、マハードをデッキから特殊召喚！」

ATK/2500

マハードとマナ、シンが対峙する。

『まさか私たちが再びこうして向かい合うとはな』

『あの時は主アリスを救って貰い、感謝している。だが今は状況が全く違う。今回は吾等が勝つ』

『私たちだって負けないよ』

「ここから勝負だね」

「そうだね。オレはカードを4枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン。本当に本気でいくね。リップ、来て！」

ATK/300

『きゃうー！』

あのカードを使うんだ。文字通り、本当に本気でくるね。

「レベル7のシンに、レベル1のリップをチューニング！

黒い炎が世界の全てを照らし出す。その眼に宿りし意志よ、今こそ

開け！

シンクロ召喚！咲き誇れ！“真紅眼の華竜”！

ATK/2800

『グオオオオオッ！』

改めて向かい合うと、凄い威圧感だね。

「シンがシンクロ召喚に成功した時、リヨウの場上のマハードと、私の場の伏せカードを破壊するよ！」

「マハードは破壊させない。

墓地の“魔術の守護者”をゲームから除外して、マハードの破壊を無効にするよ」

「む。私が破壊した伏せカードは“7”。このカードが場上から墓地に送られた時、700ポイントライフを回復するよ」

アリス LP 1100

シンの効果の対策、ちゃんとしてたんだね。

「いくよ！シンでマナを攻撃！黒華炎弾！」

『きゃあああっ！』

「くうっ、マナ！」

リヨウ LP 300

「シンがバトルで相手モンスターを破壊した時、そのモンスターの攻撃力分のダメージを与える！
これで私の勝ちだよ！」

「まだ終わりじゃないよ。」

カウンター罠“地獄の扉越し銃”！効果ダメージを無効にして、その分のダメージを与える！」

「カウンター罠“ダメージ・ポリライザー”！効果ダメージを無効にして、お互いにカードを1枚ドロウするよ」

流石、これをきちんと防いでくるね。

「バトルフェイズ終了時に、罠発動！“奇跡の残照”！マナがオレの場に戻る！」

ATK/2000

「私はカードを2枚伏せて、ターン終了」

アリスはシンの力を最大限に使ってきた。それだけこのデュエルに本気なんだね。

オレも本気で　勝ちにいくよ！

「オレのターン！チューナーモンスター“マジシャンズ・シンクロン”を召喚！」

ATK/0

『今度は私たちの力を見せる番だよ!』

『アリスは本気のような。こちらにも本気でゆくぞ!』

マハードとマナは気合い十分みたいだね。

「いくよ、アリス。」

レベル7のマハードに、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング!

黒き魔術が集いし時、新たな光の力が目覚める。光差す希望と為れ! シンクロ召喚! 舞い降りよ!“SF ブラックマジシャン”!“

ATK/2900

「マジシャンズ・シンクロン”は自身の効果で場に戻る。

レベル6のマナに、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング!

黒き魔術が交わりし時、新たな絆の幕が開く。光差す希望と為れ! シンクロ召喚! 舞え!“SF ブラックマジシヤンガール”!“

ATK/2400

「あいつら あんな切り札隠し持ってやがったのか」

「凄い」

「あの二人、本気なのね。まるで何かをぶつけ合うみたいだ。」

（アリス、特に貴方にはそう感じるわ）

静寂がデュエル場を包み込んだ。

壮観なのか、緊張感からなのかは解らない。

「（ここからは力のぶつかり合い）」

「（勝負を分けるのは一瞬の駆け引きと）」

『（パートナーとの信頼！）』

「バトル！マハードでシンを攻撃！スター・イリユージョン・マジック！」

マハードとシンの攻撃が拮抗する。だけど、攻撃力はマハードの方が上！

「畏発動！“真眼”！墓地の“レッドアイズ”と名の付くモンスター1体をゲームから除外して、そのモンスターのレベル×200ポイント攻撃力をアップする！」

墓地の“レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン”をゲームから除外して、シンの攻撃力をアップ！」

ATK/4800

「畏発動！“魔術師集結”！場の魔法使い族モンスターは魔法使い族1体につき、攻撃力が300ポイントアップする！」

ATK / 3500
ATK / 3000

「シンの方が攻撃力は上だよ！」

「まだまだよ！墓地より“スキル・サクセサー”発動！このカードをゲームから除外して、マハードの攻撃力を800ポイントアップ！」

ATK / 4300

「攻撃力が足りないね。これで終わりだよ！」

「焦っちゃダメだよ。」

マナの効果発動！“魔術師集結”をゲームから除外して、もう一度効果発動！」

ATK / 4900

ATK / 3600

「っ!?!」

「いけ！マハード！」

『ハアアアア！』

「きゃあああっ！」

アリス LP 1000

「まだ終わらないよ！
リップがシンクロ素材となっていることで、シンは一度だけ破壊を
無効にできる！」

知ってる。だからオレはこのカードを伏せておいたんだ！

「畏発動！“奇跡の軌跡”！アリスはカードを1枚ドロし、マハ
ードの攻撃力を1000上げて再び攻撃できる！」

ATK / 5900

「オレの時と同じ手だ！」

「アリスちゃん！」

「マハード！もう一度攻撃だ！スター・イリユージョン・マジック
！」

この攻撃でシンを破壊できれば！

「永続罫“アストラルバリア”！シンへの攻撃を私が受ける！」

「なっ！？」

マハードの攻撃がシンを擦り抜けてアリスに直撃する。だけど

「“奇跡の軌跡”でもう一度攻撃した場合、戦闘ダメージは0だね？」

「そうだよ。よくかわしたね」

けど、オレにはまだマナの攻撃が残ってる。このまま攻撃すればオレの勝ち。 。
だけど、アリスにはもう1枚伏せカードがある。アリスは無茶する方じゃないし、あの永続罫をそのままにしておくとは思えない。それに、アリスの表情にはまだ余裕がある。 。
どうするべきかな。 。

「ふう」

アリスが溜め息をついた。 どういうこと？

「リヨウは鋭いなあ。 。

攻撃 しないよね、きつと」

「その伏せカード、やっぱり」

「うん。伏せカードは“サイクロン”だよ。“サイクロン”を発動して“アストラルバリア”を破壊」

やっぱりか。 。

「これで振り出し かな」

「そうだね。オレはカードを1枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン」

どうくるかな？

side アリス

どうするかな。

お互い手札は私が“奇跡の軌跡”でドロしたカードと今私がドロしたカードだけ。今の私の手札に起死回生の手はない。

「魔法カード“天の落とし物”！お互いにカードを3枚ドロして、その後に手札を2枚墓地に送る」

マナの効果を考えてみても、墓地で使えそうなカードは今リヨウが墓地に送るカードが解らないにしても、“魔術の呪い”と“奇跡の残照”辺り。この状況ならシンがマナを攻撃すれば、どちらを使っても戦闘ダメージで私が勝つ。

でもリヨウが伏せたカードがモンスターを破壊するカードなら私は負ける。今私が引いたカードは“黒炎弾”と“真紅眼の飛竜”と。

“黒炎弾”は使えるけど、マナの効果で“地獄の扉越し銃”を発動される。モンスターを召喚してもマハードの効果で壁モンスターにはならない。やっぱり。

「お互いにカードを2枚墓地に送るよ」

リヨウもカードを2枚墓地に送った。リヨウは何を墓地に？

『主アリス』

「シン？」

『考えても答えが必ず出る訳ではない。どうするかは自分自身で決めよ。吾はその判断についていく』

そうだね。リョウの伏せカードや墓地に送ったカードは考えて解らない。もしかしたらブラフの可能性もある。
ここはシンを信じて、

「シンでmanaを攻撃！黒華炎弾！」

「臆せず攻撃してきたね。

畏発動、“和睦の使者”！このターン、モンスターは破壊されず、戦闘ダメージも0になる」

モンスター破壊カードじゃなかったけど、防がれたね。
このカードに賭けるよ。

「カードを1枚伏せて、ターン終了だよ」

side out

アリスの伏せカード。

『ビビるっ』

「どっつして欲しい？」

『リヨウが私たちに聞いてくるなんて久しぶりだね』

『私たちはリヨウの判断に従う。それだけだ』

『つまり、いつも通りだよ』

良いパートナーを持ったなあ。
二人に応える為に、臆する訳にはいかないね。

「バトル！マハード！シンを攻撃！スター・イリユージョン・マジック！」

「シン！迎え撃って！黒華炎弾！」

マハードが放つ閃光と、シンが吐き出す炎弾が一層激しく拮抗する。

『ハアアアアッ！』

『オオオオオッ！』

それでも、攻撃力はマハードが上！

「畏カード！“プライドの咆哮”！攻撃力の差分のライフを支払い、マハードより攻撃力が300ポイント上回る！リヨウ、これで終わりだよ！」

「そうだね。マナの効果発動！」

「っ！？」

「墓地からカードを除外して効果を使用する。オレが除外するのは、
“白銀の閃光 シルバーマジック”！
このカードは場上に“SF”と名の付くモンスターが存在する場合、
相手の畏の発動を無効にする！」

これで“プライドの咆哮”は発動しない。マハードがシンに押し勝
つ！

『グオオオオオオッ！』

アリス LP 900

これでアリスの場はがら空き。

「マナの攻撃。スター・イリュージョン・バーニング！」

アリス LP 0

「負けちゃった」

「惜しかったね」

“プライドの咆哮”が決まっていればアリスが勝ってた。正直、紙
一重だったと思う。

でもどうしてアリスはあんなに想いを込めたデュエルをしたんだろ
？それを受け止めるのが精一杯で考える暇なんてなかったけど。

「あーあ、リヨウ君が負けてれば、好きな人が誰か聞けてたのにな」

「そうね」

間違ってもお前らじゃねえから安心しな。

「凄いデュエルだったね」

「そうね。アリスの想いが伝わってきたわ」

「なあ。アリスが込めた想いつて何だと思っ？」

「えーと、やっぱり、リヨウ君への想いじゃないかな？」

「私もそう思う」

由里とアキもか。もちろん俺もだけだよ。

アリスがここまで想いを込めるんだ。何かあるんじゃないのか？

「やっぱりアリスちゃん、不安なのかな？だからあんなに想いを込めたんじゃない」

不安 か。あの二人がいつまでもギクシャクしてたら俺らも堪んねえな。

よし、ここは一つ。

「オイ、リヨウ！結局お前の好きな奴は誰なんだよ!？」

とりあえず叫んでみたぜ。

side out

side アリス

「結局お前の好きな奴は誰なんだよ!？」

聞いた瞬間、胸がズキンと痛んだ。

やっぱり私、不安だったんだ。昨日、リョウと話したのに。
リョウを待つって決めたのに。不安をシンは見抜いてたんだね。だからきつと、あんなアドバイスを。

どうしよう。

今の私は、きつと酷い顔をしてる。リョウが目の前にいるのに。

side out

「お前の好きな奴は誰なんだよ!？」

この声は 啓斗、だよな。

何を企んでるんだか つ!？

視線を下げてみると、アリスが物凄く辛そうな顔をしてる。どうし

て？

『主アリスの想い、理解してやれる筈だ』

シン。それってどういう！

なんとなく解ったかもしれない。昨日、アリスが聞いてきた不審な質問。

「オレが誰が好きか？」

アリスは不安だったんだろうね。校内で誰に聞かれても答えないオレに対して。だからあんな質問をしたし、こんな辛そうな顔をするんだろうね。

オレはアリスを悲しませない、もう泣かせないって約束したのにダメだな、オレも。

いや、落ち込んでる場合じゃない。今はアリスの笑顔を取り戻すのが先だ。

「ごめんね、アリス。また悲しい思いさせて」

オレはそつとアリスを抱きしめた。

「リ、リヨウ!?!」

「オレがこんなに溜め込むから、アリスが不安になったんだよね？」

「ち、違うよ！私が勝手に」

「うん。非はオレにあるよ。アリスを悲しませたのはオレだ」

オレの決心が付くのなんて待ってられない。アリスの笑顔を取り戻したい。だから、

「オレはアリスが好き。誰よりも大切に、誰よりも護りたい人。大好きだよ、アリス」

デュエル場が静まり返った。今は誰も口を開かずに見守っている。

「うん。私も リヨウのことが 大好きだよ」

アリスは静かにオレの胸に顔を埋めた。より抱きしめられるように。

オレたちが離れるまで、デュエル場の生徒は静かに見守ってくれていた。

第七話：想いと決意と（後書き）

いかがでしたでしょうか？

一応リヨウのアリスとの関係をばらしておきたいと思ってました。

それでは、グッチーでした。

第八話：検定デュエル（前書き）

今回は久しぶりのライディングデュエルです。かなり短いんですけど。

それでは、どうぞ。

第八話：検定デュエル

オレとアリスのデュエルから二人の関係が発覚して一時はアカデミアが騒いだものの、ようやく落ち着いてきた。

アリスは安心したのか、いつもの笑顔が見られるようになった。よかったよかった。

オレは放課後に相変わらずライディングデュエルのライセンスを取る為に遊星とコースに行っている。今日も放課後、遊星と合流してコースに来ていた。

「明日はいよいよ検定デュエルだな」

「そうだね。しっかり勝って、ライセンスを取ろうね」

「ああ」

そう、一週間の日程に何の問題も無く走行を続けてきたから、予定通り明日に検定デュエルが行われる。もちろん、ジャックさんとクロウさんも。

牛尾さんの話では、検定デュエルはそう難しくはないらしい。セキユリテイが用意するデッキはあまり厳しくはないらしく、テストをするセキユリテイの人もその辺りは考えてくれるらしい。

今日の走行も無事に終わり、明日の検定デュエルを残すだけとなった。

「リョウ。アリスと由里じゃないか？」

「ホントだ。どうしたんだろ？」

入口を見てみると、遊星の言う通りアリスと由里がいた。

「二人とも、どうかしたの？」

「ちょっとリヨウ君に話があって来たの」

「リヨウにお願いがあるんだ」

オレに？

という訳で、みんなと一緒に帰ることに。

「それで、オレに頼みて？」

「私たちが所属してる部活は知ってるよね？」

「アカデミアに部活があるんだな」

「もちろんあるよ。オレは入ってないけどね」

理由はソニックに乗ってライディングデュエルをしに行ってたからね。

「それで、アリスと由里は何の部活に所属しているんだ？」

『軽音部！』

「軽音部か」

「私とアリスちゃんはボーカルなんだよ」

アリスと由里は歌が物凄く上手いからね。
でもこれでオレへの頼みが解ったなあ。

「それでね、来月に学園祭があるんだけど、その時に私たち軽音部でライブをすることになってるんだ」

「バンドメンバーでドラムとベースはいるんだけど、ギターがいないの。リヨウ君はギターができるんだよね？」

ちらつとアリスを見ると、笑みをこぼしていた。

「リヨウ、ギターなんて弾けたのか？」

「そんなに上手い訳じゃないよ、遊星」

確かにオレはギターを弾ける。

アリスと知り合ってからいろいろとお互いのことを知ったけど、その時に歌うのが好きということを知った。アリスがオレに頼んできたのは何かを演奏して欲しいとのこと。親に聞いてみると、ギターをプレゼントしてくれた。それから練習して弾けるようになってから楽しく過ごしたのは良い思い出だね。

「リヨウには何度も一緒に軽音部に入ろうって誘ったけど断られちゃって」

「リヨウ君、ダメだよ。アリスちゃんのお願いはちゃんと聞いてあ

げないと」

「その頃はソニックに夢中でね。それに元々部活に入るつもりはなかったんだよ」

「うん。だから私も無理強いはしなかったんだけど、助っ人としてなら大丈夫かなと思って。ダメかな？」

どうしようかな。

学園祭は特に予定がある訳じゃないし、別にいいかな。アリスと由里の頼みだしね。

「いいよ。オレも手伝うよ」

『やったー！』

二人仲良く笑顔でハイタッチ。

「ただし、明日は行けないよ。検定デュエルだからね」

「解ってるよ。私たちも明日は応援に行くから。ね、由里」

「うん。リョウ君も遊星さんもがんばってね」

「ああ」

「遊星もよければ、来月の学園祭、見に来てよ」

「そつだな」

「私たちのライブも見に来てね」

「ああ」

オレは明日からギターの実習しなきゃなあ。

翌日、アカデミアでの授業が終わり、放課後になる。

オレは急いでソニックを取りに家に戻って、すぐにいつものコースに向かった。

「遅い！何をしていた!？」

「無茶言つなよ、ジャック。リョウはアカデミアにいたんだからよ」

今日は検定デュエルだから、ジャックさんとクロウさんも時間を合わせてくれた。

「おう、お前ら。流石じゃねえか」

「牛尾」

「ふん！あの程度の走行、オレたちなら造作もない」

「検定デュエルの相手はお前なのか？」

「いや、お前ら四人の相手なんて出来る訳がねえからな。こっちで四人用意したぜ」

セキュリティの制服を着た人たちが確かに四人スタンバイしてるね。

「先ずは誰からだ？」

「最初は鉄砲玉のクロウ様だ！」

クロウさんがスタンバイを始める。オレたちは客席で観戦することになった。

「リョウ！」

客席にはアリス、由里、啓斗、アキ、龍亞、龍可がいた。

「みんな、来てくれたんだ」

「負けんなよ、リョウ」

みんなに激励の言葉をもらっていると、クロウさんの検定デュエルが始まった。

「BF アームズ・ウィング”で攻撃！ブラック・トルネード！”
「うわぁっ！」

試験官 L P 0

結果だけ言うなら圧勝。クロウさんの“BF”、強いなあ。
そういえば、クロウさんとはデュエルしたことないなあ。

「次はオレがいく」

「がんばって、ジャックさん」

「油断するなよ、ジャック」

次はジャックさんが準備に向かう。入れ違いにクロウさんが戻って来た。

「へへ、一番乗りだぜ」

「ほらよ、ライセンスだ」

「ありがとよ、牛尾」

牛尾さんがライセンスを手渡してるのを見ると、牛尾さんって権力あるんだね。

「“エクспロード・ウィンド・ドラゴン”で攻撃！轟かせること王者の如し、キング・ストーム！」

「うわぁっ！」

試験官 L P O

結果だけ言うと、ジャックさんも圧勝。全く危なげないね。

「次はオレがいく。構わないか？」

「いいよ。がんばって、遊星」

「あんなのに負けたら承知しねえぞ」

「フツ」

遊星が出ていく。そして入れ違いにジャックさんが戻って来た。

「ふん。あんなものに負けるオレたちではない！」

「まあそう言うな。あくまで検定デュエルなんだからよ」

「ふん。ライセンスだけは有り難く受け取ってやる」

次は遊星のデュエルか。

「ニトロ・ウォリアー”で攻撃！ダイナマイト・ナックル！」

「うわあっ！」

試験官 L P O

またしても圧勝。検定デュエルで躓くような三人じゃないか。

「さてと、最後はオレの番だね」

「がんばってね、リョウ」

「ありがと、アリス。いつてくるよ」

準備に向かうと、遊星がいた。

「油断するなよ、リョウ」

「解ってるよ。みんなライセンス取ったんだし、オレだけ取れないじゃ恥ずかしいしね」

「フツ」

遊星は少しだけ笑ってから客席に戻っていった。

さて、久しぶりのライディングデュエルだね。

『楽しみ？』

「楽しみだよ。“スピードワールド”も変わったしね」

『遊星殿の言う通り、油断しないことだ』

「解ってる。じゃあ、いこうか！」

ソニックに乗って走り出した。

コースのスタートラインで止まる。

「お前がオレっちの相手か」

オレっち？特徴的な人だなあ。

「よろしくお願いします」

「手加減はしねえぞ。（牛尾先輩の推薦とはいえ、オレっちたちセキユリテイがこれ以上負けたら洒落になんねえ）」

『「スピードワールド2”セット！」』

ソニックがデュエルモードになり、“スピードワールド”が広がっていく。

「最初のコーナーを取った方が先攻だ」

このルールは公式化するらしいね。

“スピードワールド2”の効果は“スピードワールド”と少し変わってる。

SPカウンターを4つ取り除くことで、手札の“SP”1枚につき800ポイントのダメージを与える。

SPカウンターを7つ取り除くことで、デッキからカードを1枚ドローできる。

SPカウンターを10つ取り除くことで、場上のカードを1枚破壊できる。

新しく変わったルールとなっている。

『ライディングデュエル、アクセラレーション！』

二人同時にスタートした、と思った瞬間、

「そらっ！」

「っ！」

いきなりDホイールをぶつけてきた。ラフプレイか。

「酷い！あれは反則じゃないの!？」

「ライディングデュエルではよくあることだ」

「あゝ！第一コーナー取られちゃったよ!？」

「リヨウ、大丈夫かな」

「心配するな、アリス。リヨウはこんなところで負けるような奴じゃない」

あいたた。
最初のラフプレイは予想外だったね。お陰で最初のコーナー取られ
たし。まあいいか。

『デュエル!』

「オレっちのターン。手札の“手錠龍”、“トラパート”、“華麗なる潜入工作員”を捨て、“モニタージュ・ドラゴン”を特殊召喚
だ！」

ATK/?

「このカードの攻撃力は墓地に捨てたモンスターのレベルの合計×300になるぜ！」

墓地に捨てたモンスターのレベルの合計は10だ！」

ATK/3000

「オレっちはカードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

「おいおい！あれはチェイサー用のデッキじゃねえか！悪ノリにも程があるぜ！」

「ふええ！」

「リヨウは大丈夫かよ!？」

「心配ない」

「黙って見ておけ。リヨウがああ程度に負ける筈がなかつ」

「がんばって、リヨウ」

「オレのターン」

SP 1

「オレは“ホーリー・エルフ”を守備表示で召喚」

DEF / 2000

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「オレっちのターン」

SP 2

「搦じ伏せてやるぜ！“モンタージュ・ドラゴン”で“ホーリー・エルフ”を攻撃！」

「くっ」

「オレっちのターンは終わりだ」

「オレのターン」

SP 3

いきなりの攻撃力3000のモンスターは驚いたけど、別に関係ないね。

「自分場上にモンスターが存在せず、相手場上にのみモンスターが存在するこの時、手札から“特攻のマジシャン”を特殊召喚」

ATK / 0

「このカードが攻撃表示で特殊召喚に成功した時、場上の魔法・罫カード1枚を破壊するよ」

「チイツ！」

「さらに“特攻のマジシャン”をリリースして、“ブラックマジシヤンガール”を召喚！」

ATK/2000

『マナちゃん、参上！』

突っ込むことはせずに、

「罫カード“賢者の秘石”を発動！“ブラックマジシヤンガール”が場に存在する時、デッキから“ブラックマジシヤン”を召喚できる。」

来い！“ブラックマジシヤン”！」

ATK/2500

『さつさと決めてしまおう』

「当然！“ブラックナイフ”発動！場に“ブラックマジシヤン”がいる時、相手モンスター1体を破壊する！」

「なにい〜！？オレっちの“モンタージュ・ドラゴン”がああ！」

これで場はがら空き。

「“ブラックマジシャン”と“ブラックマジシヤンガール”でダイレクトアタック！」

「うわあああっ！」

試験官 L P O

オレとデュエルした試験官は牛尾さんに怒られてる。なんでも、試験用のデッキを使わずにチェイサー用のデッキを使ってたらしい。

「ま、オレはチェイサー用のデッキの方がやり馴れてるけどな」

「それはお前だけだ」

「クロウさん、自慢にならないよ、それ」

「よかったね、リョウ。ライセンス取れて」

「ありがとう、アリス」

「つたく、あんなデュエルじゃ四人の実力が解りやしねえ」

「それだけ強いってことだよ、啓斗君」

みんなが思い思いに話してる中、牛尾さんが戻って来た。

「悪かったな、リョウ。ちゃんとしたデュエルじゃなくてよ」

「構いませんよ」

「ったく。お前らが犯罪犯したら捕まえるのが大変だぜ」

あんな風に簡単にチエイサー用のデッキが負けたんじゃあね。

「心配すんな、牛尾。犯罪なんざ犯さねえよ」

「お前が言っても説得力が全くねえぜ、クロウ」

「まったくだ」

『ははははは』

「笑ってんじゃねえ！」

言ってることは的を得てると思うけどね。

「ほらよ、リヨウ。ライセンスだ」

「ありがとうございます、牛尾さん」

ライセンスを受け取った。これで自由にハイウェイでデュエルできるね。

「ところでよ、お前はWRGPに出るのか？」

「それはオレも聞きたいな」

遊星も興味あるみたいだね。

「どうするかはまだ決めてません。三人一組ですし、メンバーがい
ませんからね。それに」

ここからは遊星だけに聞こえるように、

「オレはスピリットシグナーを捜さないといけないし、ファントム
のことが気になるからね」

最近はおとなしいみただけど、いつまた行動を起こすか解らない
からね。

「そうか。無理はするなよ。手伝えることがあれば何でも言っ
てくれ」

「ありがとう」

「何話してんだ？」

「いや、こっちの話だ」

「ま、まだ先の話だ。ゆっくり考えてみるんだな」

「そうします」

「遊星、リョウ、さっさと帰ろうぜ」

クロウさんが呼んでる。オレと遊星は牛尾さんに別れを告げてみん
なの下に向かった。

それから、それぞれ別れて帰路に着いた。

「アリス、由里、とりあえず明日ギター持って行くから」

「うん。よろしくね、リョウ」

「よろしくね」

オレは家に着いて早速ギターを取り出した。

「リョウがギター弾くのは久しぶりだね」

「そうだね。聞いてくれる？マナ」

「もちろん」

ギターを弾く準備をする。

因みに、マナは家に着いてからすぐに実体化してるよ。

オレはゆっくりギターを弾いてみた。それ程鈍ってはいないみたいだね。

マナは目を閉じて静かに聞いてくれている。

とりあえず一曲弾き終わって、

「大丈夫なんじゃないかな。素敵な音色だよ」

「ありがとう。今日は練習してようかな」

「それなら私はずっと聞いているね」

ライブだから激しく弾かなきゃならないからなあ。アリスで馴れるけど。

オレはブランクを取り戻す為にずっとギターを弾いていた。

第八話：検定デュエル（後書き）

勝手に学園祭の予定です。

バンドについてはあまり突っ込まないでくれると嬉しいです。
全く詳しくないのに書いてしまったので、おかしいところがあると思います。

次話からしばらくデュエルがないと思います。ご了承ください。

それでは、グッチーでした。

第九話・学園祭に向けて（前書き）

タイトル通りです。

学園祭に続く話です。しばらく学園祭の話が続くと思われま

す。短いですが、よろしくお願いします。

それでは、どじろ。

第九話：学園祭に向けて

検定デュエルの翌日。

アカデミアでライディングデュエルの授業が始まった。もちろん実技ではないけどね。実技は来月から、学園祭が終わってからということになっている。

校長先生からそういう話を聞いた。オレはライセンスを取ったから実技の授業に協力することを約束してるしね。

ただ授業の講習を聞くのは退屈だった。以前から自分で勉強してたしね。

アカデミアでの一日の授業が終わり、放課後。

「リョウ、軽音部に行こう」

「準備できてるかな？」

「できてるよ。案内よろしくね」

約束通り、軽音部に行く。今日から大変かなあ。

軽音部の部室に、

「みんな、助っ人連れてきたよ」

「どうも」

「わざわざごめんなさい。助っ人に来てくれて嬉しいわ。
私は三年の古賀麻衣こがまい。ドラム担当よ」

大人っぽい人だなあ。

「古賀先輩は軽音部の部長だよ」

「部長といっても大したことはしてないわ。この部活は上下関係なんてないから、リラックスしてくれていいわ」

「解りました」

「あたしは2年の江藤佳奈えとうかな。担当はベースなの。よろしくね」

古賀先輩と打って変わった感覚の人だなあ。

「よろしくお願いします」

「とりあえず、リョウ君は助っ人としてギター担当でいいのよね？」

「はい」

ギター以外弾ける気がしません。

「整理すると、私がドラム、佳奈さんがベース、リョウ君がギター、アリスさんと由里さんがボーカル。間違いないわね？」

「はい」

オレたちは全員で返事。相手は部長ですからね。

「ところでね、リョウ君ってアリスちゃんの彼氏なんだよね？」

何を言い出すんですか？

「そうだったわね。その話、私も是非聞きたいわ」

あなたも何を言ってるんですか？

「そ、そうです／＼」

「いや、今その話じゃないですよね？」

「気にしないでいいわ。どこまでいったの？」

「私もその話聞きたい！」

「由里も何言ってるの!？」

「えっと、それは秘密ということだ」

「ダメだよ、アリスさん。私たちに隠してたんだし」

無理言わないでくださいよ。

「仕方ないわね。教えてくれる代わりに、一曲演奏してもらおうかしら」

元々それが狙いでしょ!？

「そうだね。リョウ君が演奏、アリスさんが歌ったことで」

「私も聞いてみたい」

ふう、と息を吐き出してギターの準備をする。

「アリス、曲は？」

「私の好きな曲で」

あの曲ね。昨日練習しておいてよかった。

アリスとタイミングを計って、

「はるるか 天空響いてる、祈りは奇跡に」

一曲全部演奏

「そう、きつとここから、始まる」

パチパチパチパチ

途中からアリスはフリまでしてたからノリノリだったね。

「二人の息はバッチリね」

「流石、恋人同士だね」

「凄かったよ。アリスちゃん、リョウ君」

ギターだけだから雰囲気はあんまり出てなかったけどね。

「久しぶりだったけど、よく合わせられたね」

「アリスとは何度もこうして一緒にやってたからね」

これは事実。アリスが頼む度に演奏してたからね。

それからは古賀先輩と江藤先輩と合わせながら演奏の練習。アリスと由里はフリの練習。

二人の先輩はオレなんかより全然上手で、オレに合わせてくれる。

でも二、三日過ぎてからある問題が起きた。

「ねえ、衣装つてあるの？」

由里の何気ない一言。みんな一斉に固まった。

「そつえば何も考えてなかったわね」

「どうしよう」

オレは助っ人だし、その手の話はよく解らないから適当に練習を続ける。

四人で何か必死に話してるのを尻目に、オレは練習を続ける。足を引っ張る訳にはいかないからね。

「リョウ、何か良いアイデアないかな？」

「アリス、オレは助っ人だからよく解らないよ？」

「だからこそ、良いアイデアが思い付かなくなって」

「うん」

あ、一つ思い付いた。でもこれはあんまりしたくないなあ。

「リョウウ?」

「一つ思い付いたよ」

『ホント!?!?』

全員食いついてきた。

「そんなに衣装って重要ですか?」

『何言ってるの!?!?衣装は大事でしょう!?!?』

全員の雄叫びについ後ずさる。怖いよ。

「えっと、とりあえずオレの母さんに頼んでみるのはどうかな」と

「リョウウ君のお母さん?」

「オレの母さんはデザイナーだから。頼めば作ってくれるかなって

「とりあえず、連絡してみてくださいるかしら?」

部長に頼まれたので、一応母さんに連絡を。

ピッピッピッと。

通信端末のモニターに母さんが映る。

「母さん、急にごめんね。今大丈夫かな？」

「もちろん大丈夫よ。何？リヨウちゃん」

「リヨウちゃん！？」

今はそこに突っ込まないでください。

「前に連絡したと思うけど、助っ人でライブに出るって言ったよね？」

「アカデミアの学園祭だったわね」

「そうだよ。そこでね、母さんに頼みがあるんだ」

「なあに？」

「母さんのデザイナーとしての腕を見込んで、ライブの衣装を作ってくれると嬉しいんだけど」

「うーん、そうねえ」

「来月だけど、忙しいかな？」

「五人分 よね？」

「うん」

『うん。まあ、来月なら大丈夫だと思うわ』

「ホント？ありがとうございます、母さん」

『それじゃありヨウちゃん以外の娘の身長とかその他諸々の資料を送っておいてね』

「うん。解った」

「すみません。無理なお願いをしてしまいました」

『気にしないでいいのよ。そこにいるのはアリスちゃんかしら？』

「はい。お久しぶりです」

『そうね。リヨウちゃんと上手くいつてるかしら？』

「はい！」

『それはよかったわ。リヨウちゃんのこと、お願いね』

「はい！」

今思えばオレたちの関係って両親公認なんだなあ。

『リヨウちゃん』

「どづしたの？母さん」

『私が見に行きたいのだけれど、行けそうにないの』

「そっか」

『うん。そこでね、母さんが衣装をバッチリ仕上げから、ライブの映像を私に送って欲しいの。父さんと二人で見たいの。皆さんもいいかしら?』

『はい!』

「解ったよ。ライブの映像を送ればいいんだね?」

『うん。お願いね』

「解った。じゃあ母さん、よろしくね」

『衣装は出来上がり次第送るわ。それじゃありヨウちゃん、頑張つてね』

通信が切れた。母さんに頼んで正解だったね。

「リヨウ君のお母さんって優しいんだね」

「うん。それじゃあ、母さんに早く送りたいから、皆さんの身長なんかの情報を」

その日のうちにみんなから聞いて、母さんに送っておいた。母さん、仕事が忙しくなければいいんだけど。。。

それから、あっという間に時間が過ぎていった。

約一ヶ月が経ち、学園祭まで後一週間となった。

「それじゃあ、もう一回いくわよ」

『はい！』

ライブまでもう少し。みんな真剣にリハーサルを繰り返していた。そんな時、

「お届け物です」

「はい」

お届け物？もしかして　。

「このお届け物って　」

多分そうだろうね。

「とにかく、開けてみましょう」

部長がお届け物を開ける。中身は　、

「衣装だわ！」

く用ってわざわざ書いてある。ありがとね、母さん。

「ちょっと待って！この多さは何なの！？」

く用って書いてある中には三着の衣装が入っていた。もちろん、一つ一つ別々の衣装が。

「わあ！この衣装、可愛い〜！」

由里の衣装はピンクと青が入り混じったノースリーブにロングスカート、そのスカートに短パンがある。他にもドレス風の衣装と可愛いらしい衣装が。

「凄いね。ここまでなんて」

由里とは対称的に驚きで一杯のアリスの衣装は花が沢山付いている紅いドレス。このドレス、狙った訳じゃないよね？母さんは何も知らないよね？

他にもワンピースみたいな衣装なんかが。

「リヨウ君。貴方宛ての手紙が入っていたわ」

部長から手紙を受け取って読んでみると、

『リヨウちゃんへ』

この一ヶ月は忙しいかなって思ってたけど、意外と時間があつたわ。そこでね、リヨウちゃんのDホール以来のお願いだからちよつと張り切っちゃった。ライブだし、観客を湧かせる為には衣装が幾つもあった方がいいと思つて、三着分作つてみたわ。私の作つた衣装でみんな頑張つてね。ライブの映像はちゃんと送つてね。待つてるわ。

母さんより』

ホントにありがとね、母さん。

「さあ、気合いも入ったところで、もう一度いくわよ！」

『はい！』

母さんの衣装のお陰で気合い十分。それからのオレたちの練習はかなり捗った。

その日の練習が終わって、オレは遊星に会いに行った。

「遊星、ちょっと頼みがあるんだけど」

「どうかしたのか？」

「いや、遊星は学園祭に来る？」

「ああ。行くつもりだが」

「オレたちのライブがあるのは知ってると思うけど、見に来る？」

「ああ。どうしたんだ？そんなことを聞いて」

「オレの母さんにライブの映像を送って欲しいって言われてるんだ。オレが撮ればいいんだけど、ライブがあるから」

「オレに撮って欲しい、ということが」

「うん。頼めるかな？」

遊星は機械にめっぼう強いから、頼むなら遊星がいいと思うんだけど。

「解った。そのくらいなら大丈夫だ」

「ありがとう、遊星。特等席を用意しておくから。もちろん、全員分ね」

「ああ」

これでライブの映像も大丈夫だね。

翌日、何故か校長先生と教頭先生に呼ばれた。

「あの、どうかしたんですか？」

「リョウ君、実は君に頼みたいことが出来てしまったんじゃ」

「何でしょうか？」

「このデュエルアカデミアの学園祭に急遽来ることになった方がおられるのであります」

「その方がデュエルしたいと仰ったのじゃ。そこで君にその方とデュエルして欲しいのじゃ」

「解りました。いつでしょうか？」

学園祭は三日ある。三日のうち、初日がライブだから、その日以外なら大丈夫なんだけどね。

「三日目の最終日であります」

「予定は大丈夫かの？」

「大丈夫です」

最終日なら問題ないね。

それにしても、学園祭はいろいろ予定が入ったなあ。
最初はのんびりしてようと思ってたのになあ。

まあいいか。これもいい思い出だね。

『忙しそうだね』

「まあね。がんばるよ」

学園祭まで後一週間。ライブの用意があるし、終わるまでは忙しいだろうね。

終わってもライディングデュエルの実技が始まるから結局忙しくなるのか。

充実した学園生活になってるなあ。それがいいことなのかな。

でも、スピリットシグナーをアリスと二人でさりげなく捜してきた

けど、手掛かり一つない。
大丈夫なんだろうか。

何にしても、やることはいっぱいあるなあ。

第九話：学園祭に向けて（後書き）

リヨウの母親の仕事を紹介しました。デザイナーですね。父親については機会があればまたいずれ。

学園祭ではアカデミアなのでデュエルをする予定です。有名人が来る予定ですよ。

それでは、グッチーでした。

第4回：Bの世界（前書き）

久しぶりのBの世界です。

第二期に入り、オリカやオリキャラが増えたので紹介します。

それでは、どうぞ。

第4回：Bの世界

リ「第4回だね」

ア「本編では学園祭で忙しいんだけどね」

オリカにオリキャラが第二期に入って増えたから仕方ないです。

リ「グッチーさんが増やしたんだけどね」

何でもいいので早く進めて下さい。

リ「何か妙にやる気が無くなったんだけど」

ア「まあまあ。じゃあ始めようか」

『第4回、Bの世界！始まりま〜す！』

リ「改めて、こんにちは。メインパーソナリティのリョウウです」

ア「みなさんこんにちは。同じくメインパーソナリティのアリス・ルシエです」

リ「今日もゲストが来てくれるみたいだね」

ア「そうだね。早速紹介しますね」

リ「今回のゲストはオレの良き親友、石井啓斗です。どうぞ〜」

啓「邪魔するぜ」

ア「啓斗、いらっしやい」

啓「応。まあな」

リ「今日はよろしくね」

啓「あいよ」

それでは、最初のコーナーについてみましょう。

『グッチーの部屋』

リ「早速紹介するよ」

ア「まずはオリキャラ。この場にいる啓斗から」

名前：石井啓斗

身長：172cm

体重：67kg

好きな物：デュエル、サッカー

嫌いな物：ハイトマン教頭、エリート思考

漫画版遊戯王の遊星が使うジャンクデッキに少しオリジナルを加えたデッキを使用。フェイバリットの“暗黒騎士ガイア”を強化しながら闘う。

基本的にデュエル以外はサッカーを除いて面倒臭がり。仲間思いの性格。

外見はBLEACHの黒崎一護の赤髪版。服装はジーンズにシャツの楽な格好。

リ「こんなところかな」

啓「いいんじゃないか」

ア「啓斗はサッカー部に所属してるんだよ」

リ「期待の新人ってね。ポジションはFW」

啓「別に期待されてねえだろ。普通だ、普通」

ア「レギュラー争いしてるのになあ。

嫌いな物は教頭先生なんだね」

啓「あいつはオレを馬鹿扱いしやがるからな。低レベルモンスターを使い過ぎだのなんだのと」

『あ』

リ「勉強はできるんだけどね」

啓「こんなナリで勉強できねえと先公がうるせーんだよ」

ア「啓斗は優しいって解ってくれてる筈だよ」

啓「そうだといいけどな。
そろそろ次にいこうぜ」

名前：武内由里

身長：161cm

体重：？

好きな物：ケーキ、甘い物全般

嫌いな物：苦い物全般

天使族中心のデッキ。エースモンスターは“翼を織りなす者”。

優しく好印象を持たれそうな性格。ただ、怒ると手が付けられなくなる程怖い。いや、恐ろしい。

外見は高町なのはそのまま。服装は白いシャツに紺のジャケット、ロングスカート。

ア「今度は由里だね。私の親友だよ」

啓「あいつ、甘い物に目がないんだっとな。そのことでよくリョウと対立してたっけか？」

ア「リョウは甘い物が嫌いだからね」

リ「まあね。今はもう対立しないけどね」

それでも甘い物は食べてません。前に由里の家に行った時も紅茶しか飲んでいませんでした。

ア「それから由里は怒ったら」

「
」

全員黙りましたね。

啓「悪いことは言わねえ。これ以上は触れるな」

リ「よし！早く次にいこう！」

ア「次はオリカだよ！」

凄い慌てっぷりですね。

紹介はあくまで主要キャラのみにしたいと思います。

“受け継がれる魂”
通常罾カード

自分場上の戦士族シンクロモンスターが戦闘で破壊され、墓地に送られたターンのバトルフェイズ終了時に発動することができる。破壊されたシンクロモンスターと同じレベルの戦士族通常モンスターをデッキから特殊召喚する。

“暗黒の黒鎗”

装備魔法カード

このカードは“暗黒騎士ガイア”に装備可能。装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップする。装備モンスターが守備モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

リ「啓斗のカードだね」

ア「“ガイア”に關係するカードだな」

ア「展開の効率は上がるよね。啓斗は基本的にシンクロが中心だし」

啓「まあな」

次にいってみましょう。

792

“デイベインブラスター”
通常畏カード

自分場上に“翼を織りなす者”が存在する場合のみ発動することができる。“翼を織りなす者”の元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

“エクセリオンチャージ”
カウンター畏カード

相手が魔法・畏・モンスター効果を発動した時、自分場上の“翼を

織りなす者”の元々の攻撃力分の数値だけ自分のライフを回復する。また、“翼を織りなす者”が効果の対象の場合、その効果を無効にする。

ア「次は由里のカードだね」

啓「翼を織りなす者”に関係しまくりだな」

リ「本当はもう1枚あるんだけどね」

まだ効果を発動していないのでまた次回に。

“竜の重圧”

通常畏カード

自分場上のドラゴン族モンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した時発動することができる。相手モンスター1体の装備カードとなる。装備モンスターの攻撃力は0となり、表示形式を変更できない。装備モンスターが場を離れた時このカードを破壊する。このカードが破壊されたターン、相手は攻撃宣言できない。

“真眼”

通常畏カード

自分の墓地に存在する“レッドアイズ”と名のつくモンスター1体をゲームから除外することで、このターンのエンドフェイズまで場上に存在するモンスター1体の攻撃力は、発動時に除外したモンス

ターのレベル×200ポイントアップする。

リ「アリスのカードだね」

ア「私のオリカは初めてだよ」

啓「グッチーのアリスに対する扱って案外酷いんじゃないのか？
登場は早かったのにデュエルすんのは遅かったし、オリカも初めて
だろ？」

『
』

いや、機会が無かったんですよ。

ア「言い訳は無しだよ？」

怖いです。睨まないで下さい。
好きなんですよ？自分が一番好きなキャラがフェイトなんですから。

ア「もういいよ。次にいこう」

あれ？無視？

リ「次が今回最後だね」

無視！？

啓「煩いってよ」

“ 白銀の閃光 シルバー・マジック ”
カウンター罠カード

自分場上に“ S F ”と名のつくモンスターが存在する場合のみ発動
することができる。罠の効果の発動を無効にし、破壊する。

リ「これで今回は終了だね」

他にもアニメオリジナルのカードや漫画のカードがあります。ご了承ください。

ア「さて、次のコーナーにいこうか」

『 賢者の部屋! 』

早速ですがお便りがあります。

『 えッ!?! 』

そんなに驚きますか？

啓「このラジオって勝手にやってるって評判じゃねえのか？」

リ「前は遊星がお便りくれたけど、あれは身内でしょ？」

ア「そうだよ。今回も身内じゃないの？」

今回のお便りは正真正銘この小説外からのお便りです。

リ「ホントに?」

ホントです。

『
』

ア「と、とりあえず、読んでみようか?」

三通あるので、一人ずつどうぞ。

リ「三通もあるの!?!」

啓「おいおい、大丈夫か?天変地異でも起きんじゃねえのか?」

起きません。とにかく、読んで下さい。

リ「じゃ、じゃあオレから読むね。

ラジオネーム 性格がちょこつと擦じ曲がっているアーチャーさんからのお便り。

『以前、精霊界は5つに分断されていると言っていたが21近くの種族はどのように分かれて暮らしているか聞こう。

もつとも、これは私の疑問ではなく作者の疑問を代弁しているに過ぎないが』

え、お便りありがとうございます」

ア「ホントにあったんだね」

もういいですから。早く答えましょう。

啓「なあ。質問がよく解らねえんだけど？」

とりあえず啓斗はじっと聞いてて下さい。

啓「まあ、いいけどよ」

リ「とりあえず答えるね。

マハードに聞いた話だと、“スターダスト・ドラゴン”の世界に基本的にはドラゴン族、鳥獣族、魔法使い族がいるよ。

“エンシエント・フェアリー・ドラゴン”の世界に基本的には天使族、龍可が使うモンスターがいるかな」

ア「“ブラック・ローズ・ドラゴン”の世界に基本的には炎族、昆虫族、植物族、サイキック族がいるらしいよ。

“レッド・デーモンス・ドラゴン”の世界に基本的にはアンデット族、悪魔族、機械族がいるよ」

リ「最後にまだ眠ってるドラゴンの世界。基本的には岩石族、恐竜族、獣族、獣戦士族、戦士族、爬虫類族がいるらしいね。

海はどこの世界にもあるよ。海竜族、魚族、水族、雷族はどの世界にも散り散りにいるよ」

これで全種族ですかね。幻神獣族はどこにいるかも解っていません。神だから当然ですけどね。

ア「でもこれはあくまで基本的に、だよ。世界には様々なモンスターがいるからね」

リ「例えば、“スターダスト”の世界に天使族の“もけもけ”がいたりするって具合にね。それに、世界を移動することは難しくはな

いらしいよ。管理は緩いつて話だから」

ア「だから、中には世界を旅するモンスターなんかもいるつて話だよ」

リ「長くなつちやつたけど、以上かな」

次のお便りにいつてみましょう。

ア「次は私が読むね。

ラジオネーム 珍しいライダーさんからのお便り。

『この時代にはブラックマジシャン、ガール、真紅眼の黒竜が出現つてないのにどうやってめぐり会つたか教えて欲しい。それと

Dホイルの乗り心地を知りたい』

お便りありがとう」

啓「そっぴや珍しいよな。お前ら以外の“ブラックマジシャン”やらを見たことねえぜ」

リ「うん。確か偶然ばつたり出逢つたつてというのが一番合うんだよね。

父さんが持つてたコレクションを眺めようとして初めて見たカードがマハードとmanaだったよ。そしたら精霊として出逢つたんだよ」

ア「私の場合も父さんが関係してるかな。

父さんが亡くなつて、私に遺してくれたカードだよ。シンは父さんから私への贈り物だったんだね」

啓「いろいろあんだな。でよ、何でお前らの親父が持つてたんだよ？」

『さあ?』

リ「父さんは世界中飛び回ってるから、その時に見つけたんじゃないかな?簡単に譲ってくれたんだけどね」

ア「私の父さんは どうだろうね。よく解らないな。

父さんの職業は母さんと同じアカデミアの教師だしね。何かの拍子で手に入れて私に遺してくれたのかもしれないね」

啓「ふん。だそうだけ」

では、もう一つの質問に答えて下さい。

ア「Dホイールの乗り心地だね。リヨウにしか解らないよね」

啓「って訳だ。答えてやれよ」

リ「最高です!」

『叫んだ!?!』

リ「これ以外言うこと無し!ソニックの乗り心地は最高!」

ア「ええっと、だそうだよ」

最後のお便りにいってみましょう。

啓「最後はオレが読むぜ。

ラジオネーム 元気いっぱいなキャスターさんからのお便りだ。あ

りがとよ。

『黒髪侍くんが金髪死神ちゃんに告っちゃいましたけど、今後どう愛を育んじやいますか？』

もちろん！私とご主人様との愛には到底敵いつこ無いでしょうけどね キヤー、言っちゃいましたー』

答えてやれよ」

『／／』

啓「ま、そうなっちまうだろうな。最後のキャスターさんのご主人様との愛に敵うかどうかは知らねえけどよ」

お二人とも、早く答えて下さい。

リ「え〜っと、どう愛を育んでいくかは解らないかな。

でも、オレはもう絶対にアリスを悲しませない。アリスを泣かせない。これだけは誓うよ」

ア「リヨウノ／／」

リ「それから、何が起こっても必ず護ってみせるよ。ファントムだろうと何だろうとね」

ア「ありがとう」

啓「だそうだけ。答えになったか？」

お便りは以上です。

これからもお便りを楽しみにしています。お待ちしています。

ア「今回はこれで終わりかな」

リ「次回はいつになるか解らないけどね」

啓「それじゃあオレはこれでさいならだ。また呼ばれることってあるのか？」

あるかもしれないですね。ないかもしれないですけど。

ア「本編もよろしくね」

リ「それでは」

『バイバイ！』

第4回：Bの世界（後書き）

これからもオリカとオリキヤラは増える予定です。その度に紹介したいと思います。

お便りはいつでもお待ちしております。

今回のお便りは池上様からでした。ありがとうございました。

それでは、グッチーでした。

第十話・休日（前書き）

こんにちは。

閑話のような内容です。
温かい目で読んで下さい。

それでは、どじょう。

第十話：休日

学園祭の前日は全員休みになっている。

明日はその学園祭前の休日って日の夜、唐突にマナが言い始めた。

「外に出たいなあ〜」

「？もう家の中で実体化してるよ？」

「そうじゃなくて、家の外に出たいなあって」

「駄目だと以前リヨウに言われた筈だ。リヨウに迷惑をかけるな」

そういえば以前、一般の人にも見えるからダメだって言ったんだっけ。

「そこをなんとか！　ダメ？」

必死に頼み込んできたと思ったら、可愛らしくウインクしてきた。いや、可愛いけどね。

「う〜ん」

良い方法があるかなあ。

あ、こんなのどうだろ？

「マナ、提案があるんだけど」

「なになに？」

「じじいのはどじかな」

翌日、ルシ工家に朝からお邪魔させてもらっている。

『やれやれ。マナを甘やかし過ぎてはいないか?』

「そうかな?」

『そうでなくても、今回は甘やかし過ぎている』

「落ち着いて、マハード。」

今回のことはオレの日頃の恩返しなんだよ。よければマハードだつて」

『いや、私は柄ではない。』

それに日頃の恩返しをするべきなのは私たち精霊の方だ。リヨウではないと思うが』

「オレは一人じゃ闘えない。みんなが、マハードやマナがいてくれるから闘えるんだよ」

『しかし』

「もしオレがマナを甘やかし過ぎてると思ったたらマハードが止めてくれればいいよ。でも今回は目をつぶってね」

『 解った。リヨウがそう言うなら私は何も言わない』

「ありがとう、マハード」

マハードが精霊世界に戻っていく。マハードらしい気の使い方だったな。

「リョウ、お待たせ」

入れ違いにマナがオレの前に姿を現す。普段の服装ではない格好で。

「いきなりだったからあんまりマナに似合う服を用意できなかったけど、これで大丈夫かな？」

「うん。ありがとうね、アリス」

「リョウ。私、似合ってるかな？」

「とっても似合ってるよ、マナ」

マナの服装はいつもの魔術服じゃない。

フリルの付いたシャツにピンクのカッターを羽織って、スカートを穿いている。いつもと全然違って可愛い。帽子も被らずに、髪を結んでポニーテールにしている。

「いきなりこんなこと頼んでごめんね、アリス」

「ううん。学園祭で手伝ってもらっからね」

「じゃあこれでおあいこだね」

「うん。今日は楽しんできてね」

「ありがと。じゃあ、行こっか、マナ」

「うん」

オレがアリスに頼んだのはマナの変装。服装と髪型を変えてもらった。

服はアリスのをもらい、髪もアリスに結んでもらった。

昨日、オレがマナの変装を考えついでからすぐにアリスに頼んでみた。最初はアリスは渋ってたけど、なんとか説得して了承を得た。なんでも、マナは女の子だから抵抗があったらしい。説得のもと、条件付きで了承してくれた。

マナが普段の魔術服を着ていなければ、正体は解らないというオレの考えは当たった。

ルシエ家から出た時は不安だったけど、人が見ても正体を解った様子はなかったからね。

「どこに行くの？」

「とりあえず、あそこに行かないとね」

「私はあんまりよく解らないから、リョウウがエスコートしてね」

マナは本当に楽しんでるみたいだね。

「解ってるよ」

オレはマナに手を差し出す。するとマナは腕に抱き着いてきた。

「マ、マナ？」

「ダメ？」

そんな上目遣いしないでよ。

「ふう。解ったよ」

「えへへ」

そのまま歩き出す。オレたちの目的地は。

「ここって」

「アリスのお気に入りなんだよ。ここの服屋」

オレとマナは服屋の前に来ていた。アリスのお気に入りの店だから、気に入ってくれるといいんだけどね。

「どうして服屋に来たの？」

「マナはアリスにもらったその一着しか持ってないでしょ。この先一着じゃ困るかもしれないしね」

「でも私、お金持ってない」

「いいよ。オレの奢り」

「ダメだよ！そこまでリヨウに迷惑は」

「気にしない気にしない。これはオレからの日頃の恩返しだからね」

「本当にいいの？」

「いいの。さあ、入ろう」

「うん！」

物凄く良い笑顔で店に入ってしまった。

仕送りで送られてくるお金はいくら使っても無くならないし、余ってるからね。それこそ学生が持つてるような額じゃないよ？

マナは洋服を物珍しそうに見て回ってる。いつも同じ魔術服しか着てないから新鮮なんだろうね。

「あ、この服どうかな？」

楽しんでくれてるみたいだね。

マナはいろんな服を試着してみていた。ジーンズだったりワンピースだったり。ジーンズは普段から考えても解るかもだけど、ギャップがあり過ぎて似合ってた。スカートに似合う服を中心に選んでるみたいだね。

「こんなものどう？」

と、言って今はオレがマナが試着してみた服を見る。

最初は白っぽいピンクのワンピース。かなり似合ってたよ、うん。

二番目は露出高めめの青い服にスカート。いつもの魔術服に似てたか

ら青を赤にチェンジ。

三番目はまたしても露出高めの服、肩から背中辺りが大幅に露出されてた。

いまさらだけど、マナは露出するのが好き？ 普段の魔術服も露出高いいし。スタイルは抜群だけどね。

あんなこんなでいろいろと服を試着して特に気に入ったものを購入。最初のワンピースは似合ってたから別を買ってあげた。合計五着。

「こんなに買ってよかったの？」

「大丈夫。お金は十分あるからね」

服を持ったまま動くのは辛いから配達に届けてもらった。具体的にはクロウさんに。お金を二割増しで払ったら渋々了承してくれたよ。

「次はどこに行くの？」

「デパートに行こうか。そこでご飯食べて、いろいろ見て回るっ」

「うん」

シティで一番大きなデパートに来た。その頃には時間が昼時だったから先に昼食を採る為にデパートの中にあるレストランに入った。

「マナ。何食べる？」

「えーっと」

マナが人間世界の食べ物を食べるのは初めてじゃない。毎日とはい

かないけど家で実体化して食べることが多い。もちろんマハードも。因みにオレはというと、精霊世界の食べ物を食べたことがある。マナが材料を持って来て食べた。もちろんマナの手作り。かなり美味しかったよ。

「じゃあパスタにするね」

「オレもパスタにするかな」

店員さんに注文して二人でパスタを食べる。

食べ終わるとレストランを出て、デパートを見て回る。マナは相変わらず珍しそうにいろんな店を見ながら、二人で歩き回る。

「どう？楽しい？」

「うん！いろんなものが私には新鮮で楽しい！」

本当に楽しんでるね。よっぽど外に出てみたかったんだね。

「わあ！綺麗〜」

マナが何かに目を付けたね。

「アクセサリーか」

マナが魅入ったのはアクセサリー。

「中に入ってみる？」

「うん！」

という訳で中に入る。

マナは飾ってあるアクセサリーを見て感想を漏らしてる。微笑ましく見ていると、マナの動きがピタッと止まった。

「これ 素敵だなあ」

「ん？」

マナの隣からアクセサリーを覗いてみると、銀色のハート型ネックレスだった。

「マナ。これ、欲しい？」

「へ？ううん。大丈夫」

ふう、と息を吐き出してマナの頭を軽く撫でてあげた。

「正直に言った方がいいよ。こんな機会、滅多にないんだから」

「う。欲しい けど」

「けど？」

「私、お金持っていないし、リョウにあんまり我が儘言うのも」

ふう、とまた息を吐き出して店員さんと呼んだ。

「すみません。これください」

「リヨウ!？」

マナを無視して会計を済ませる。

「包装しますか？」

「いえ、結構です」

簡単なやり取りをしてアクセサリーを持ったままマナと店を出た。

「どうして？」

「うん？」

「リヨウに迷惑がかかるのに。お金だって、持ってないのに」

「マナってオレのこと、そんなに想ってくれてるんだ」

「む！私はリヨウの精霊だよ！お師匠様の方が私より頼りになるかもしれないけど、私だってリヨウの精霊なんだよ！」

「ごめんごめん。解ってるよ」

「？」

「マナはオレの大事な精霊。でも、オレにとってはもう家族みたいな存在なんだ。」

普段からいつも一緒にいるから解りにくいかもしれないけど、マハードとマナには本当に感謝してる。二人がいなかったら、例えアリ

スがいても、家の中では一人だったから」

家の中で一人は本当に辛いと思う。誰もいない空間で毎日過ごす
と考えると怖くなる。

「だから今日は、マナに感謝を込めて、こうして我が儘を聞いてあ
げただよ」

本当はマハードも一緒がよかったんだけど、断られたし、最後に私
の分もマナにって言われたしね。

「
ありがとう」

「いいよ。はい、これ」

マナの首に買ったネックレスをかけてあげた。ハートがマナの胸の
辺りにかかる。

「ホントにいいの?」

「いいの。欲しかったんでしょ?」

「
ありがとう」

マナがオレに勢い余って抱き着いてきた。

「マ、マナ。まだデパートの中だから!」

「えへへごめんね」

マナが離れてくれた。

「でも、そのネックレス、似合ってるね」

「ありがとう 大事にするね」

そうしてくれると嬉しいけどね。

「さてと、そろそろ帰らないとね。今日は楽しかった？」

「楽しかったよ できれば、またこうして遊びたいな」

「そのうちね」

「約束だよ？」

「解ってるよ。今度はどこに行きたいか考えといてね」

「うん」

オレたちは帰路に着いて家に帰った。

「今日は私にご飯作るね」

マナはいつもの魔術服に着替えずに、アリスにもらった服のまま。気に入ったのかな。

「やれやれ。すっかり御機嫌のようだな」

「はは。いいんじゃない？」

「しかし、本当に良かったのか？マナが迷惑をかけたようだが」

「気にすることないよ。オレの日頃の恩返しなんだからね」

「解った。もう何も言わない」

マハードは本当に律義だね。そこがマハードらしいんだけど。

「できたよ〜」

マナが食事を運んできた。毎回思うけど、人間世界の食事と精霊世界の食事って変わらないなあ。

マナが作ってくれたのは魚料理。精霊世界の高級な魚らしい。マハード曰く、人間世界の鮪のようなものらしい。事実マナが作った料理は赤身が若干見える。テレビで見るとような高級な食事みたいに毎回見える。

マナは精霊世界でも指折りの料理人らしい。マハードがマナに料理の修業もさせたらしい。マハード曰く、何事も出来ないより出来る方がいい、とのこと。それは高望みし過ぎだと思っけどね。

アリスが作ってくれる料理はもちろん美味しい。マナの料理ももちろん美味しい。庶民的に美味しいのと、高級的に美味しいみたいな感じかな。

こうして考えてみるとオレは幸福者だなあ。

「冷めないうちに食べてね。今日は高級魚の炙り焼きだよ」

既に一般家庭の食事に出るような食事ではないね。

「今日のお返しだよ。味わって食べてね」

今日はオレからの恩返しのもりだったんだけどなあ。

「気にすることはない。この程度は私たちにとって些細なことだ」

二人は高名な魔術師だから、このくらいの高級魚は大したことないのかな。そう解釈しとこう。

マナの作ってくれた料理を美味しく頂いた。まだ数えるくらいしかマナの料理を食べたことなかったけど、今日のは一番美味しかったな。

「美味しかった？」

「うん。ありがとね、マナ」

「ううん。お礼を言うのは私の方だから。この料理はちょっとしたお返しだよ」

あれでちょっとと言われても困るんだけどね。

「リョウ。今日は楽しかったよ。ありがと」

「どういたしまして。約束通りまた行こうね」

なんだかんだでオレも楽しかったしね。

「うん」

こうしてオレの学園祭前の休日は終わった。それなりに充実した休日だったし、満足かな。

さて、明日はいよいよ学園祭だね。一日目はライブだから、気合いを入れていかないとね。

「ねえねえ、明日の学園祭、私も見に行っていないかな？」

「何を言い出すかと思えば。マナ、またリヨウに迷惑をかけるつもりか？」

「でも人間世界の服を着て、髪型を変えれば問題ありませんよ？」

「リヨウの心労になると言っている。わざわざ実体化せずとも見れるだろう」

「実体化した方がリアルなんですよ」

「マナ、お前の意見ではなく、リヨウに迷惑がかかると言っている」

「うっ」

マナがマハードに言い負けたね。しょうがないなあ。

「マナ、どうしても実体化して見に来たい？」

「うんー！」

「リヨウ、流石に甘やかし過ぎだ。正体が発覚する可能性がある。」

リョウが傍にいるならまだしも、明日からは忙しい筈だ」

マハードの言う通りなんだけどね。正体がばれる可能性があるからできれば控えてもらいたいんだけどね。

「明日、事情が一番解ってる遊星と龍可に頼んでみるよ。二人が了承してくれたら、二人からあんまり離れないって条件で認めてもいいよ」

「リョウ！」

「マハード、そんなに甘やかしてるかな？」

「ああ」

「でもマナには頼み事があるんだよね」

『？』

「ライブの後の片付けで明日は学園に泊まることになるからね。マナにはその時の夜食を用意して欲しいんだ」

アカデミアには学園祭の間だけ泊まることを許されてる。準備とかの理由でね。

「任せといて！」

「ふう。何を言っても無駄なようだな」

「大丈夫だよ、マハード。遊星と龍可に頼んでおけばね」

二人なら二つ返事が返ってくるだろうけどね。

「解った。マナ、正体が発覚するようなことがあれば、修業を倍にする」

「ええーっ!？」

「ははは。それでいいよ」

夜は更けていく。マハードとマナと楽しく談笑しながら。

明日は学園祭だね。

第十話：休日（後書き）

この話は感想で頂いたアドバイスを参考に書きました。
アドバイスありがとうございました。

次話から学園祭です。

それでは、グッチーでした。

第十一話・学園祭一日目（前書き）

学園祭一日目です。

一日目はライブ。曲紹介なんかもしてあります。

それでは、どうぞ。

第十一話：学園祭一日目

学園祭一日目。

アカデミアには生徒と一般の人たちでいっぱいになっている。残念ながら遊星たちを見つけることができなかつたからマナの実体化は
一先ず保留。

とりあえず、軽音部のライブの準備があるからライブの会場に。会場は式なんかが行われるホール。校長先生に頼んでみたら、快く了承してくれた。

「よお、リョウ」

「啓斗？なんでここに？」

「由里に手伝えって言われたんだよ」

「私は啓斗君が暇だつて言うから頼んだんだよ？」

啓斗は因みにサッカー部。学園祭ですることは全くないって言うってたね。

「折角だつたから引き受けたって訳だね」

「まあな」

またまた因みに、啓斗と由里の関係はあくまで友達。二人がお互い
のことをどう思ってるかは知らないんだけど、くつついていいと思

ってるのはオレだけかな。

準備といってもすることは大してない。ホールだから椅子を準備する必要はないし、ステージのセッティングは部長のドラムくらい。それは部長が自分でしてるしね。

そうこうしてるうちにオレの通信端末に連絡が入った。相手は、

「遊星、どうしたの？」

遊星だった。遊星の顔が映し出される。

『ライブを撮る為のセットをしたいんだが、今大丈夫か？』

「そうだね。今は遊星一人？」

『いや、みんないる』

通信越しに見てみると確かにみんないる。もちろん龍可もいる。ちようどいいからマナのことを頼もうかな。

部長に許可をもらって、みんなを招くことに。事情を話すとライブ映像を撮ることは解ってたからすぐに許可をくれた。母さんには世話になったからね。

「遊星、こんなことをわざわざしてもらってごめんね」

「気にするな。大したことじゃない」

「そこでね、実はもう一つ頼みがあるんだ」

「どうした？」

「龍可。龍可もちよつといいかな？」

「なあに？」

「実はね、マナが実体化したと言っててるんだ。でもオレがずっと一緒にいけないから、二人に頼みたいんだけど、いいかな？」

「オレは構わないが」

「私も大丈夫よ」

「二人とも、ありがとう。」

「マナ、約束はちゃんと守ってね？」

「はい」

「マナが嬉しそうに実体化する。」

「マナの今日の服装は赤いシャツに白い上着、スカート。髪は昨日と同じポニーテールにしている。」

「よろしくね」

「もちろんみんなには見えないところにいるよ？」

「ライブ開演は午後二時。現在開演十分前。」

「観客は続々と入って来ていてもうすぐ満席。」

「ふええ。　。　いつぱいいるねえ」

「ホントだ。　凄いな」

アリスと由里は緊張してるのかな。オレもだけど。

「リラックスリラックス。大丈夫だよ」

「そうよ。みんな、リラックスしなさい」

流石先輩。　落ち着いてるね。

「さあ、バンドメンバーは準備の時間よ。ボーカルの二人は合図するから」

『はい』

ステージに出て準備に取り掛かる。本当にいつぱいいるなあ。

遊星たちは目の前にいる。特等席を用意したからね。

そしていよいよ開演時間に。

「皆さん、今日はお越しいただきありがとうございます。楽しんで下さいね」

部長の言葉が開演開始の合図。　始まるね。

三人で演奏を始める。一曲目開始とともにアリスと由里がステージに飛び出してくる。

「膝を抱えて 部屋の片隅 いつも不安で震えてた」

ライブは二時から学園祭一日目終了時間の六時まで。その間にMCを除けば休憩は三回。休憩といっても衣装を着替える時間に使われるんだけどね。

一回目の休憩までほぼノンストップで続ける。因みに誰が主役とかはないからMCは一人二回ずつ。オレもらしいけど、オレは一回目の休憩の後と二回目の休憩の後だからただだけどね。

アリスと由里は最初こそ緊張気味だったものの今は楽しそうに歌ってるし、先輩たちも楽しそうに演奏してる。もちろんオレも。

あっという間に一回目の休憩時間に入る。

これまでの演奏は

- 1 . i n n o c e n t s t a r t e r
 - 2 . 虹色バルーン
 - 3 . 蒼き光の果て
 - 4 . 恋せよ女の子
 - 5 . D o n ' t b e l o n g
 - 6 . おしえて A t o G
- たまにMCが入るよ。

みんな急いで着替えようとしてる。流石にオレだけは別室で着替えてるけどね。男はオレだけだし。

素早く着替えて次の演奏を始める。みんなも準備を整えて次の演奏に。

そして二、三曲後、オレのMCの番になった。

「え、今日は来ていただき、ありがとうございます」

「(リヨウ、固いよ。もっとリラックスして話さないと)」

「(リヨウ君、がんばって)」

アリスと由里が言いかけてくるけど、何を話せと？オレは一応ただの助っ人なんだけど。もういいや、こうなったらやけだ。

「盛り上がってるー!?!」

『(リヨウ(君)が壊れた!?)』

オオオオオー!

盛り上がってるね。

「今日は助っ人だけどオレも楽しいよ〜!」

『リヨウ君も歌って〜!』

はい？

「いや、それは流石に」

『歌って〜!』

ヤバい！聞く耳持たずの状態になってる！

「そうね。折角助っ人になってもらってるんだもの。リヨウ君にも歌ってもらおうかしら」

「そうだよね。折角だし」

「部長と江藤先輩も何を言ってるんですか!？」

「リヨウ君も私たちとこれから歌うよ!」

「由里!?!」

「えっと、一緒に歌お?」

アリスまで。もうオレに退路はないんだね。

「遊星、これから少し撮らないでくれると助かるんだけど」

「フツ、頑張れよ、リヨウ」

「」

オレに味方は誰一人いない。イジメだ。

「曲はSECRET AMBITIONと星空のSPICA!」二曲
続けてどうぞ!」

オレは二曲も歌うんだね。いつの間にかマイク手渡されたし。

「胸に宿る熱き彗星は 始まりの鼓動へ」

~~~~~

「祈りのように 旅は続く 導いていつの日も」  
「 星空のSpica」  
ちいさな宝石よ

終わった 。 なんだあのイジメは 。

それからはあつという間に二回目の休憩時間に。

これまでの曲は

7・深愛

8・My wish My love

9・SECRET AMBITION

10・星空のSpica

11・ETERNAL BLAZE

12・Spiritual Garden

13・Blue Moon

14・プレゼント

時々MCもね。

みんな急いで着替えて準備をする。

「さあ、みんな！ラストスパートよ！」

『はい！』

最後は激しいからなあ。特にアリスと由里はキツイかもね。そしてオレはもう一度MCが 。

とにかく最後の休憩時間を終えて、再びステージに  
激しく進んでいく中、オレにもう一度MCが。

「さっきの歌、どうだった？」

『よかった！』

「ありがとう！後もう少し、楽しんでいこうね！」

『オ！』

歌わせられないようにさっさと切り上げました。流石にもうやだ。

それからまた激しく進んで最後の部長のMCに。

「ずっとしていたのですが、楽しい時間も終わりです。次が最後の  
曲です」

次で終わりか。けっこう楽しかったかな。

「make a little wish 転んだり 迷ったり  
するけれど」

~~~~~

「あなたが いてくれるから 私は笑顔でいます 元気です」

ワァァァ!

「せいの」

『ありがとうございます!』

最後は全員で挨拶。それからステージ裏に退散した。

「楽しかった〜」

「そうだね」

「みんな、お疲れ様」

『はい』

ライブは無事終了。曲は

15・PHANTOM MINDS

16・童話迷宮

17・Orchestral Fantasia

18・チエルシーガル

19・Crystal Letter

20・Little Wish - lyrical step -

でした。

ライブが終わり、午後六時。みんなで少しだけ食事を探って片付けをする。

片付けは約二時間かかって終了した。

「ふええ。お腹すいた〜」

「もう八時だもんね」

「ところでよ、俺が片付ける必要あったか？」

この台詞はもちろん啓斗。片付けまで由里に手伝わされて今日はアカデミアに泊まることになった。泊まるのは男子が体育館、女子がデュエル場だから寝るところはいくらでもあるけどね。

「とりあえず、部室に戻ってご飯にしましょう。リョウ君と啓斗君も来るといいわ」

お言葉に甘えて行くことに。

部室に戻ってご飯を　　と思つて弁当箱を開けると　　。

「私　さつきほとんど食べちゃった　　」

「あたしも　　」

というよりほぼ全員。啓斗にいたつてはこんな予定なんて全然なかった訳だから、食べ物なんて持ってない。

「困ったわね　　。売店はもう開いてないでしょうし　　」

オレはこのくらい予想済み。こっそり通信端末を取り出して遊星に連絡を入れた。

「遊星、今どこにいる？」

『マナが作ってくれた料理を食堂で食べ終わったところだ。片付けは終わったのか？』

「ついさっきね」

『そうか。マナはお前たちの分も作っていた。今から運ぶ』

「わざわざごめんね。ありがとう。部室にいるから」

『解った』

少し待っていると、部室のドアがノックされた。

『?』

全員これからどうするか必死に話してたからね。オレと遊星の会話なんて耳に入ってたみただし。

「持って来たよ」

「ありがとね、マナ」

マナを中心に遊星と龍可が料理を持って来てくれた。

「遊星と龍可もありがとう」

「ううん。リヨウ、ライブ、楽しかったよ」

「オレたちはもう帰る。映像は少し編集してから渡す」

「ありがとう、遊星、龍可。気をつけて帰ってね」

「私は実体化を解くね」

「うん。マナが何か迷惑かけなかったかな？」

「大丈夫よ。明日も一緒に行動しようね？」

「うん！」

龍可がこう言ってくれてるから大丈夫かな。

遊星と龍可とマナ（実体化を解く為に）が戻っていくのを見送って後ろを振り返ってみると、全員呆然としていた。

「リヨウ君 どういうことなの？」

「こうなることが予想できていたので、食事を頼んでおいたんです」

『ありがとう！』

みんな、涙を流しそうな勢いで喜んでる。そんなにお腹すいてたんだ。

みんなで食事を採りながら、少しだけ談笑。準備しておいてよかったね。

side 啓斗

遊星たちが持って来た料理を食べて、一先ずその場で解散になった。つたく、俺は何をしてたんだか。別にいいけどよ。

俺は一人で夜のアカデミアを歩いている。周りには生徒が造った出店が並んでいる。校舎にはまだちらほらと明かりが見えるから、明日の準備でもしてんだろうな。

今日は手伝わされたお陰でろくに見て回ってねえな。明日から見て回るとするか。

「しかし、何もすることがねえな」

リヨウはアリスと一緒にいんだろつし、由里はどこ行ったか解んねえし。

「まあいいや。こつなりゃさっさと寝るか」

そう思い、体育館に向かうつもりだったんだが。

「何だこりゃ？」

俺の前に突如浮かんだ白い渦。こんなもん無かったと思うんだが。

「っ!?!?」

突然渦が光り出した。何だっただ？

side out

side 由里

みんなと別れてからクラスの友達に話しかけられて話していると、いつの間にか一人になってた。

「アリスちゃんは多分リョウ君と一緒にだよな。啓斗君はどこに行っただら？」

夜はあんまり得意じゃないんだけどなあ。特に今はアカデミアの中だし。せめて啓斗君がいてくれたなあ。

「にゃ？こんなのがあったっけ？」

私の目の前には白い渦が渦巻いてる。

「お化けとかじゃないよね？」

答えてくれる人なんていないけど。

「きゃ！な、何!？」

渦が突然光を放って。

side out

オレは今、アリスと二人でアカデミアの校舎外を歩いている。

「今日のライブ、手伝ってくれてありがとう」

「いいよ。オレも楽しかったしね」

「それならいいんだけど」

「今日は全然他のところを見てないから、明日一緒に見て回ろうか？」

「うん！」

マナは龍可と一緒に行動するだろうから心配ないし、オレには明日しか暇がないからね。三日目はデュエルがあるし。

『！』

今何か変な感覚が。

「今 変な感覚が」

アリスも同じ。でも今までとどこか違う感覚だった。

『リヨウ！』

「マハード！」

マハードが出て来たってことはやっぱり。

『精霊世界への扉が開いた！しかも二つ同時だ！』

「二つ同時？それってどういうこと？」

『多分、近くにいた人が精霊世界に紛れ込んだんだと思う』

誰かが精霊世界に 。 龍可じゃないだろうし 。

『恐らく、精霊を感じることが出来る者、若しくは出来かけている者が偶然精霊と意思疎通しかけたのだろう』

「二カ所ってことは二人いるんだよね？」

『ああ。なんにしろ、ファントムが現れるかもしれない。急ぎ、助けに行かなければ危ないかもしれない』

「別々の場所に行かなきゃならないんだよね？」

「アリス、大丈夫？」

「うん。リヨウも無茶したらダメだよ？」

「解ってる。それじゃあ、行こう！」

オレとアリスは別々に精霊世界への扉を開けた。

side 啓斗

何だっただ ？

いきなり渦が光ったと思ったんだが。

「ここはどこだ？」

見渡す限り草原が広がってやがる。明らかにアカデミアじゃねえな。

「やっと目が覚めたみたいじゃねえか」

「あ？」

誰だ　って、

「“ガイア”じゃねえか!？」

俺の前に“ガイア”がいやがる。いつも通り馬に乗った状態で。

「主に俺たち精霊を感じる力があるとは思わなかったぜ。しかも何の前触れも無しに精霊世界に来るとはな」

「精霊!?! 精霊世界!?! 何の話なんだよ!?!」

「そこから説明しなくちゃならねえのか。

いや、説明は後だな」

「何でだよ？」

「敵が主を嗅ぎ付けて来たからだ」

敵? 何のこと　何か草原を走って来やがるな。あれは　馬か?

「早く俺に乗れ！ボーツとしての暇はねえ！」

「お、応」

とりあえず“ガイア”に乗せて貰ったが、ありや何だ？

馬　　って骨しかねえ！しかも乗ってる奴も骨じゃねえか！

「チツ、追い付かれるな」

「何なんだよ！？あの気持ち悪い骨は！？」

「説明してる暇はねえんだよ！」

“ガイア”はかなり飛ばしてるが、骨の方が早え。マジで追い付かれるな。

キイイイン！

「おい！この音は何なんだよ！？」

「知るか！　　って言うところだったが、救世主みてえだな」

救世主　　って、ありやDホイール！しかも見覚えが　　ってあいつ、何でいるんだよ！？

side out

side 由里

「 という訳なのです」

「ふえ」

私は自分の現状を聞いている。

なんでも、精霊世界に偶然来てしまったみたい。初めは信じられなかったけど、他に説明がつかなかったんだもん。

私に説明してくれているのは私の切り札“翼を織りなす者”。名前はカレン。

私が目を覚ました時に私の目の前にいた。今は花がたくさん綺麗に咲いている湖にいる。

「カレン、どうして私は精霊を感じることができるようになったの？」

「御主人様には元々精霊を感じる力がありました。力が覚醒していなかっただけなのです。この精霊世界に来たことでその力が刺激されたのでしょ」

「そうなんだ。ところでね、御主人様なんて呼ばれるのはちょっと

」

「お気に召しませんか？」

「うん」

「では、武内様と」

「いや、それもちょっと」

「では、由里様と」

「と、とりあえず様は止めて欲しいなあ」

「そうですね、それでは」

「どうしたの？」

「この話は後ですね」

「どうしたんだろう？何か　っ!？」

「あれ　何　？」

「あれは　ガイコツ！」

「こっちに来てる　。　怖い　。」

「私が囿になります。その間に逃げて下さい」

「だ、ダメだよ！カレンを置いていくなんて」

「貴女様を護る為にはこれしかありません。早く逃げて下さい！」

「どうしよう　。」

「今すぐにも逃げたいけど　。　でも　。」

「由里に手を出すことは許さないよ」

えっ 。 あれって 。

side out

side アリス

「由里に手を出すことは許さないよ」

私は“翼を織りなす者”とガイコツ騎士の間に降り立った。シンに連れて来てもらってね。

「主アリス、油断するな」

「うん。大丈夫だよ、シン」

由里が精霊世界に来てたんだ。

「アリスちゃん！どうしてここに！？」

「由里を迎えに来たんだよ」

「ふえ？それってどういう？」

「話は後でね」

今はガイコツ騎士を倒さないと。

「貴様 、スピリットシグナーだな」

「そつだよ」

「ならば、解っている筈だ」

多くは語らずにただデュエルディスクを構えてる。リヨウが傍にいないけど、心はちゃんと繋がってる。由里を護る為にも、

『デュエル!』

負けられない!

side out

オレが精霊世界に着くと、広い草原にいた。ここにはまだ来たことないから、まだ会ってないドラゴンが管理してる世界かな。

『リヨウ、急がなくては!』

あれ?精霊のまま?

『リヨウはソニックに乗って』

ソニックはここにはな　　ってある!なんで!?

『草原だと知ってから私たちが持って来た』

流石、用意周到だね。助かるよ。

ソニックに乗ってひたすら走った。そして、

『あれだ！既にファントムに追われている！』

草原を馬が走ってる。“暗黒騎士ガイア”と 馬のガイコツ！？
そんなのもいるんだ。
ちよつと待つて。 “暗黒騎士ガイア”の背にいるのは っ！

オレはスピードを上げて、間に割り込んだ。

「啓斗！」

「リヨウ！こんなとこで何してやがる！？」

こつちの台詞なんだけど。
とりあえず怪我はしてないみたいだね。

「啓斗、話は後回しにしよう。オレがこのガイコツ騎士を倒す！」

「スピリットシグナーか。来るがいい。ライディングデュエルだ。」

ガイコツ騎士から青白い炎が広がり、コースができた。ダークシグナーと同じか。
それにしても、馬でライディングデュエルするんだ。

「始めるぞ。」

啓斗がいる。負けられないな。

『ライディングデュエル！アクセラレーション！』

第十一話：学園祭一日目（後書き）

曲は全て自分の趣味です。

はつきり言って夢のコラボですね。何度か一緒に歌ったことはありませんが、これほど多くの曲は歌っていない筈です。自分の願望でした。

次話はダブルデュエルです。

久しぶりのファントム戦です。

それでは、グッチーでした。

第十二話：青き痣（前書き）

一週間ぶりです。

遅くなりました。今後もこのくらいになるかもです。

今回はダブルデュエルです。

では、ごっご。

第十二話：青き痣

『ライディングデュエル！アクセラレーション！』

「第一コーナーを取った方が 先攻」

このルールは変わらないんだね。馬に負ける訳にはいかないな。

「先攻はもうっ！」

スピードを上げる。これでいける！

上手く第一コーナーを取れた。オレの先攻！

『デュエル！』

side アリス

『デュエル！』

「私の先攻、ドロー。 “暗黒界の騎士ズール”を召喚

」

ATK/1800

「ターンエンドだ」

「私のターン。手札から“サファイアドラゴン”を召喚！」

ATK / 1900

「“サファイアドラゴン”で攻撃！」

ガイコツ騎士 LP 3900

「カードを1枚伏せて、ターン終了」

「我がターン。魔法カード“暗黒界の雷”を発動。伏せカードを破壊し、手札を1枚捨てる」

む。伏せカードは“攻撃の無力化”だったんだけど。

「我が捨てたのは“暗黒界の尖兵 ベージ”。このカードが墓地に捨てられた時、特殊召喚する」

ATK / 1600

「モンスターをリリース、
“タルワール・デーモン”を召喚
」

ATK / 2400

「“サファイアドラゴン”を攻撃」

「きゃー！」

アリス LP 3500

うっ。
やっぱり衝撃が痛くて怖い。でも、大丈夫！リヨウもきつとど
こかで闘ってる筈だよな。

「ターンエンド。
見よ。闇のデュエルにより、闇が広がる」

辺りが暗くなっていく。
折角綺麗な湖だったのに。

「ふええ。これって」

「下がって下さい」

由里のことは“翼を織りなす者”に任せておけば大丈夫みたいだね。
私はデュエルに集中しないと。

「私のターン。魔法カード“思い出のブランコ”を発動。墓地の通
常モンスターを特殊召喚する。

“サファイアドラゴン”を特殊召喚」

ATK/1900

「サファイアドラゴン”をリリースして、“ホワイト・ホーンズ・
ドラゴン”を召喚！」

ATK/2200

「このカードが召喚した時、相手の墓地の魔法カードをゲームから
除外して、そのカード1枚につき攻撃力が300ポイントアップす

る！

墓地の“暗黒界の雷”を除外するよ」

ATK/2500

「ホワイト・ホーンズ・ドラゴン”で攻撃！」

ガイコツ騎士 LP 3800

「カードを1枚伏せて、ターン終了」

「我がターン。 “暗黒界の番兵 レンジ” を守備表示で召喚
」

DEF/2100

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

「私のターン。“竜の尖兵”を召喚」

ATK/1700

「バトル！ “ホワイト・ホーンズ・ドラゴン”で攻撃！」

ここだね！

「永続罫オープン！ “竜の逆鱗”！私の場のドラゴンは貫通能力を得るよ！」

「又ウ」

ガイコツ騎士 LP 3400

「さらに“竜の尖兵”でダイレクトアタック！」

「又アアア！」

ガイコツ騎士 LP 1700

「やるな、女」

私が今のところ有利だね。いけるかな。

「カードを1枚伏せて、ターン終了だよ」

「我がターン。そろそろ闇のデュエルの本当の衝撃を味わって貰おう。」

魔法“手札抹殺”を発動。お互いのプレイヤーは手札を全て捨て、捨てた枚数カードをドロウする。」

ガイコツ騎士の手札は2枚だった。何を墓地に送ったかだね。

「捨てたカードは“暗黒界に続く結界通路”と“暗黒界の導師セルリ”」

「っ！」

あのカードはよくない。

「暗黒界の導師 セルリ”の効果。このカードが手札から捨てられた時、相手場上に特殊召喚される。」

DEF / 300

「暗黒界の導師 セルリ”が特殊召喚されたことにより、我は手札から1枚カードを捨てる。
我は“暗黒界の魔神 レイン”を捨て、効果発動！このカードが相手のカード効果で手札から捨てられた時、特殊召喚する！」

ATK / 2500

「この効果で特殊召喚された時、相手モンスターを全て破壊する！」

「くうっ！“竜の尖兵”の効果発動！相手のカード効果で墓地に送られた時、墓地から通常モンスターを特殊召喚できる！

“サファイアドラゴン”を守備表示で特殊召喚するよ！」

DEF / 1600

「罨カード“暗黒よりの軍勢”。墓地の“暗黒界”モンスターを2体手札に戻す。

“暗黒界の騎士 ズール”と“暗黒界の導師 セルリ”を手札に加わる。

“暗黒界の騎士 ズール”を召喚。」

ATK / 1800

「 暗黒界の騎士 ズール”で“サファイアドラゴン”を攻撃」

これで私の場にモンスターはいない。

「受けて貰おう。

“暗黒界の魔神 レイン”で ダイレクトアタック！」

「きゃああああっ!」

アリス LP 1000

「うっ くっ」

「アリスちゃん!」

ちよっとよくないかな。このままじゃ。

「っ!」

腕の青き痣が疼き出した。こんな時にどうしたんだろう。
私の状況をリヨウに知らせてくれるのかな。

うっん。リヨウに頼ってちゃダメだね。今は私が由里を護らなくちゃいけないんだ。

side out

「オレのターン、ドロ。手札より“見習い魔術師”を守備表示で召喚」

DEF / 800

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「我がターン」

SP 1

「“切り込み隊長”を召喚」

ATK / 1200

「このカードが召喚に成功した時、手札からレベル4以下のモンスターを、特殊召喚できる。
“ツイン・ブレイカー”を特殊召喚」

ATK / 1600

「“ツイン・ブレイカー”で“見習い魔術師”を攻撃」

「くうつ、“見習い魔術師”！」

「貫通ダメージを与える」

「くあっ！」

リョウ LP 3200

「“見習い魔術師”が戦闘で破壊された時、デッキからレベル2以

下の魔法使い族モンスターを特殊召喚できる！

“見習い魔術師”を特殊召喚！”

DEF / 800

「ツイン・ブレイカー」が守備モンスターを攻撃した場合、再度攻撃できる」

「なっ！？」

「ゆけ」

「くうっ！」

リヨウ LP 2400

「でも、“見習い魔術師”が破壊されたことにより、もう一度“見習い魔術師”を特殊召喚！”

DEF / 800

「切り込み隊長”で攻撃」

「くっ」

これで“見習い魔術師”が全てやられた。ごめんね。

「“見習い魔術師”が破壊されたことにより、“執念深き老魔術師”を特殊召喚！”

DEF / 600

「1枚カードを伏せ、ターンエンド」

結構ダメージを受けたのは計算外だったね。
ライディングデュエルの闇のデュエルは危険だなあ。ダメージを受ける度に手元がぶれるからクラッシュしそうになる。

そんな弱音は言ってもらえないか。遊星たちだってこのデュエルを乗り越えてきたんだし、今は啓斗を護る為にも、負けられない。

「オレのターン！」

SP 2

「“執念深き老魔術師”が召喚された次のターン、相手モンスターを1体破壊できる！」

“ツイン・ブレイカー”を破壊する！」

「又」

「オレは“執念深き老魔術師”をリリースして、“カオス・マジシヤン”を召喚！」

ATK / 2400

「バトル!“切り込み隊長”を攻撃！」

「畏発動。スピリットバリア。我が場にモンスターが存在する限り、戦闘ダメージは0になる」

ダメージは与えられないか。

「でも“切り込み隊長”は破壊できる」

これで一応モンスターはいなくなった。次のターンに召喚してくるだろうけどな。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「我がターン」

SP 3

「“SP ジェット・ブスター”を発動。お互いのSPカウンターを2つ増やし、お互いにカードを1枚ドローする」

SP 5

「我は“戦士ラース”を召喚」

ATK / 1600

「このカードが召喚に成功した時、自分のデッキからレベル4以下の戦士族モンスター1体をデッキの一番上に置く。我は“ならず者傭兵部隊”を選択」

あのカードの効果は厄介だね。

「更に“SP 探偵推理”を発動。SPカウンターが4以上あ

る時、デッキの一番上のカードが我が宣言したカードだった場合、特殊召喚することができる」

「っ！」

この宣言を外す訳がない。

「我がデッキの一番上のカードは“ならず者傭兵部隊”！
よって、デッキから特殊召喚」

ATK/1000

展開が早い。

「まだまだ。“SPサモン・スピイダー”を発動。SPカ
ウンターが4以上ある時、手札のレベル4以下のモンスターを
特殊召喚出来る。」

“ブレイブナイト”を召喚」

ATK/1600

「このカードは手札が1枚以下の時、攻撃力が400アツ
プする。」

我が手札は0だ」

ATK/2000

「“ならず者傭兵部隊”の効果発動。このカードをリリースし
、
“カオス・マジシャン”を破壊する」

「くあつ、 “カオス・マジシャン”！」

これでオレの場にモンスターはいない。

「死ね！」

“ブレイブナイト”でダイレクトアタック！」

「畏発動！ “ガード・ブロック”！ 戦闘ダメージを0にして、カードを1枚ドローする！」

これでなんとか助かった。

「チツ　！ならば　、 “戦士ラーズ”でダイレクトアタック！」

「うあああああつ！」

リョウ　LP　800

闇のデュエルの衝撃をまともに受けて、ソニックがスピント。

「くつ　くそ」

「リョウ！ しっかりしやがれ！」

啓斗　。

そうだ。オレは負けれない。負ける訳にはいかないんだ。

「ほう　。持ち直したか」

「デュエルはまだ終わってない！」

っ！

痣が疼く。どうかしたんだろうか。

いや、この感覚は前にも感じたことがある。確かアリスが。

「っ！」

side 由里

「アリスちゃん！」

アリスちゃんがダメージを受けて、膝をついた。あんなリアクション、普段は取らないのに。

「このデュエルは普通のデュエルではないのです」

「それってどういふこと？」

「このデュエルは闇のデュエルです。ダメージが本物の衝撃となってしまうデュエルです」

「っ！?どうしてアリスちゃんがそんな危険なデュエルを!？」

「貴女様を護る為です」

私を 護る為?

「貴女様の御友人、アリス様はスピリットシグナーなのです。貴女様の為、そして私たち精霊の為に闘っているのです」

アリスちゃんが　スピリットシグナー　？

私には訳が解らないことだけど、アリスちゃんが必死に闘ってることは解る　。私にできることはないのかな　。

「！」

アリスちゃんの腕が青く輝き出した。あれは一体　っ!？

腕が痛い！疼いてる！ズキズキする！

「御主人様！？腕を押さえなさって　まさか!？」

「うう」

そつと手を離す　。

「これって」

「スピリットシグナーの青き痣　。まさか御主人様もスピリットシグナーでしたとは」

私の右腕に青い痣が浮かんで輝いてる。この痣の様子は　羽根かな。

「由里　、あなたも私たちと同じ、スピリットシグナーだったんだね」

「アリスちゃん、大丈夫？」

「平気だよ。ちょっと待っててね。このデュエル、私が勝つから」
アリスちゃんがふらふらと立ち上がる。

「アリスちゃん！がんばって！」

s i d e o u t

s i d e アリス

「アリスちゃん！がんばって！」

うん。がんばるよ、由里。

「あの人間もスピリットシグナーか。倒さねばな」

「そうはさせない！私があなを倒す！」

「クツクツク。この状況で何をほざく」

確かに、ガイコツ騎士の場には攻撃力2500と1800のモンスター。対する私の場にはモンスターはいない。

だけど、私は諦めない！

このドローに、全てが懸かっている。

「私の ターン！」

ドローカードは 、 ありがとうね。

「このデュエル、私の勝ちだよ」

「なに ？」

「畏発動！ “リミット・リバー”！墓地の攻撃力1000以下のモンスターを特殊召喚できる。

墓地の“黒竜の雛”を特殊召喚！」

ATK/800

「“黒竜の雛”を墓地に送って、シンを特殊召喚！」

ATK/2400

「いけるか？主アリス」

「うん。力を貸して！」

「“真紅眼の黒竜”が喋った！？」

「驚くことはないだろう。自分の精霊も喋るのだからな」

「ふえ？じゃ、じゃあ、アリスちゃんの精霊は 」

「そつだよ。私の精霊は“真紅眼の黒竜”、名前はシンっていうんだ」

「ふええ」

「もう1体紹介するね。」

手札からリップを通常召喚！」

ATK/300

「きゃうー！」

「カワイイ〜」

「ふふ、この子は“ブルームドラゴン”、名前はリップ」

「ふえ〜」

「お喋りはここまでだ」

「そうだね。いくよ、シン、リップ！」

「ああ！」

「きゃうー！」

この力で、このデュエルを終わらせる！

「レベル7のシンに、レベル1のリップをチューニング！

黒い炎が世界の全てを照らし出す。その眼に宿りし意志よ、今こそ
開け！

シンク口召喚！咲き誇れ！“真紅眼の華竜”！」

ATK / 2800

「グオオオオオオッ！」

「凄い」

「シンの効果！シンクロ召喚に成功した時、お互いの場のカードを1枚破壊する！私の場の“竜の激鱗”とあなたの場の“暗黒界の魔神 レイン”を破壊！」

「又ウ」

「これで終わりだよ！」

シンで“暗黒界の騎士 スール”を攻撃！黒華炎弾！」

「又アアア」

ガイコツ騎士 LP 700

「クツクツク。我がライフはまだ残って」

「残らないよ、シンの効果！破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

「馬鹿なあああああ」

ガイコツ騎士 LP 0

「ふう」

なんとか勝ったね。
リヨウは大丈夫かな。

「アリスちゃん！」

「由里。怪我とかない？」

「それはこっちの台詞だよ。大丈夫？」

「私は平気」

由里は大丈夫みたいだね。

それにしても、リヨウとあれだけ捜しても見つからなかったのに、こんなに身近にいたなんて。灯台下暗しとはよく言ったものだね。

「シン。リヨウと合流できないかな？」

「ふえ？リヨウ君もいるの？」

「うん。リヨウもスピリットシグナーだから。」

シン、どうかな？」

「いる世界が違う。世界を渡ることは簡単だが、それからリヨウを捜すとなると時間がかかる」

そうなんだ。どうしよう。

「儂が送ってしんぜよう」

『えっ!?!?』

side out

side 啓斗

「しつかりしやがれ!」

あいつ負けそうじゃねえか。しかも様子がおかしい。

「あれは闇のデュエルなんだよ」

闇のデュエル?

「闇のデュエルってのは普通のダメージが本物の衝撃となって襲ってくる。だからあいつは今、スピんしちまったんだ」

「あいつはそんなデュエルをしてんのか!?!」

「ああ。あいつはスピリットシグナーだからな」

「スピリットシグナーってのは何なんだよ?」

「その説明を主にしても仕方ねえだろ」

「んなことあるか!俺に何かできることがあるかもしれないねえだろが
!」

「いや、残念ながらねえ　　って、主！その腕！」

「あ？」

なんだ？さつきから腕が疼くと思ってはいたが、青く輝いてやがる。そっぴや、リヨウの腕も同じように輝いてやがったな。

「まさか主もスピリットシグナーだったとはな　　」

「どっぴう意味だよ？」

「その青き痣はスピリットシグナーの証なんだよ」

この鎗みてえな青い痣がスピリットシグナーの証なのか　　。
ってことは俺もスピリットシグナーって奴なのか。よく解らねえが
な。

とにかく、

「リヨウ！負けんじゃねえ！」

side out

「リヨウ！負けんじゃねえ！」

驚いたな　　。

まさか啓斗がスピリットシグナーだったなんて　　。

今はそれどころじゃないか。啓斗の言う通り、負ける訳にはいかな
い。

「チツ。奴もスピリットシグナーか」

「あんたの相手はまだオレだよ」

「ふん。次のターン、
“SP”を引けば貴様のライフは0
となる」

確かに、オレのライフは残り800。ライディングデュエルのボー
ダーラインを既に切ってる。このターンでなんとかしないと。

「オレのターン！」

SP 6

よし。良い答えだよ、みんな。

「“SP エンジェル・バトン”発動！SPカウンターが2つ以上
ある時、デッキからカードを2枚ドロし、その後手札を1枚墓
地に送る。永続罠“正統なる血統”を発動！墓地の通常モンスター
を特殊召喚する！墓地に送ったマハードを特殊召喚！」

ATK / 2500

「啓斗殿がスピリットシグナーだったとは思わなかったな」

「マハード、その話は後だ」

今はガイコツ騎士を倒す。

「畏発動!“賢者の導き”!マハードが存在する時、デッキからマナを特殊召喚する!”」

ATK/2000

チャラ。

「そのネックレス、いつでもしてるんだね」

「うん。これを付けてると、リョウとの絆を深く感じる気がするから」

嬉しい限りだね、ホントに。

「更に“マジシャンズ・シンクロン”を通常召喚!”」

ATK/0

「いくよ!レベル7のマハードに、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング!

黒き魔術が集いし時、新たな光の力が目覚める。光差す希望と為れ!シンクロ召喚!舞い降りよ!“SF ブラックマジシャン”!”」

ATK/0

「魔法使い族モンスターとのシンクロ召喚に成功した“マジシャンズ・シンクロン”は、デュエル中一度だけ場に戻る」

ATK/0

「レベル6のmanaに、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング。

黒き魔術が交わりし時、新たな絆の幕が開く。光差す希望と為れ！シンクロ召喚！舞え！”SF ブラックマジシヤンガール”！」

ATK / 2400

「手札から“SP 魔術の杯”を発動！SPカウンターが5以上ある時、墓地の“カオス・マジシヤン”をゲームから除外して、manaの攻撃力を“カオス・マジシヤン”の攻撃力分アップさせる！」

ATK / 4800

「さあ、これで終わりだ！」

「馬鹿め。 “スピリットバリア”があることを忘れたか」

それはどうかな？

「マハードは、バトルフェイズ開始時に他の“SF”と名の付くモンスターが存在する場合、敵モンスター全てに攻撃できる！」

「なんだと！？」

「マハードの攻撃！スター・イリュージョン・マジック！」

「又ウウウ」

これでモンスターはいなくなった。ダメージは通る！

「終幕だ！マナの攻撃！スター・イリユージョン・バーニング！」

「又アアアアアア！」

ガイコツ騎士 L P O

「おっし！」

「啓斗、その腕」

「ああ、こいつは何なんだ？」

「マハード、説明は任せるよ」

「なるほどな」

「信じてもらえた？」

「普通なら信じられねえが、現状を考えるとな」

信じざるをえない よね。

「マハード、マナ。アリスの様子は解る？」

「いや、解ら」

「ないって言うつもりだったけど、今なら解るよ」

「？」

「ほら。あそこ」

マナが指差した方向を見てみると、

「アリス！それに　由里！？」

「アリスと由里までいんのかよ！？」

「リヨウ〜！」

「よかった。無事だったんだね」

「うん。結構際どかったけど、なんとか」

「そっか、無事でよかったよ。もう一人は由里だったんだね」

「うん。そっちは啓斗みただけど　、まさか、啓斗もスピリットシグナー？」

「も、ってことは由里もスピリットシグナーだったんだ　」

「うん。啓斗もみただね」

「うん」

散々捜したのに、まさかこの二人とはね　。

ふらっ

「っと。アリス、大丈夫？ふらついてるよ？」

「ちょっと 眠たくて」

あゝ、確かに。オレもだなあ。

「マハード、マナ。後のこと、頼んでいい？」

「眠るといい。後のことはなんとかする」

「ありがとう」

「主アリスもだ」

「うん」

オレたち二人はそのまま意識を手放した。

第十二話：青き痣（後書き）

スピリットシグナーの三人目と四人目の覚醒です。

ようやくです。五人目はいつになるか分かりませんがね。

次話は事後処理と学園祭二日目の予定です。

更新が遅くなるかもしれませんがよろしくお願いします。

それでは、グッチーでした。

第十三話・学園祭二日目（前書き）

学園祭二日目です。

今回は少しラブコメが入ります。リョウとアリスの他にもちょっとだけありますよ。

では、ごっご。

第十三話：学園祭二日目

「うん」

「ここは？」

「見覚えが少しある。木々に囲まれてて、本がたくさんあって。」

「マハードとマナの　家」

「あの草原で寝たんだけ。」

「ス〜ス〜」

「ん？　へ？」

「つい間抜けな声を出してしまった。」

「アリス？」

「隣にはアリスがいる。一緒に寝ちゃって、その後も一緒！？」

「目が覚めたようだな」

「マハード」

「いつの間にかマハードがいた。」

「これって」

「アリスのことか？ここに連れて来た時に別々に寝かそうとしたが離れてくれなかったんだ」

「そ、そっか」

気にしないでおう。うん、そうしよう。やましいことは何もしてないんだし。

アリスは気にせず、スヤスヤと眠ってる。寝顔、可愛いな。初めて見たんだっけ？内緒にしとこう。

「今何時？」

「人間世界では十時過ぎだ。今日は何もないと言っていたから起きさなかった」

確かに、学園祭真っ最中でオレがすることは今日はない。点呼を取ることもないからこの時間でも問題は無い。

「まあいいか。みんなも何も無い筈だし、起きるまで寝かせておいてあげよう」

「ああ」

オレは起き上がって部屋を出た。啓斗と由里も違う部屋で寝ているらしい。

「そうだ。リヨウ宛に客が来ている」

「オレに？」

「逢えば解る」

マハードに連れられてリビングに入ると、お爺さんの魔術師がいた。

「トルンカ!？」

「おお、リヨウ。目が覚めたか」

「大丈夫? 痛むところとかない?」

「大丈夫だよ、マナ」

よく見てみると、トルンカだけじゃなく、“暗黒騎士ガイア”と“翼を織りなす者”がいる。

「えっと、とりあえずトルンカはどうしてここに?」

「僕は“エンシエント・フェアリー”様の世界で闘っておったアリスちゃんを見つけてのう。僕がアリスちゃんともう一人の娘をリヨウのいた世界に連れて来たんじゃない」

もう一人は由里のことだろうね。

「オレのいた世界はこの“スターダスト”の世界じゃないんだよね?」

「違えよ」

「リヨウのいた世界はまだ眠ってるドラゴンの世界だよ」

まだ眠ってるドラゴン。

「そうなんだ。そのドラゴンはいつになったら目覚める？」

今の話と全く関係無い話ではあるんだけど。

「もうすぐだ。多分な」

“ガイア”の話ではもうすぐか。

「それで、その世界から全員をここに連れて来た。私とマナ、トルンカの力だな」

「そうか。ありがとう、トルンカ。助かったよ」

「なあに。リヨウには一度助けて貰ったし。それにリヨウ、おぬしに聞きたいことがあつて来たんじゃない」

「なに？」

「僕を使ってみんか？このカードじゃ」

カードを1枚渡された。これって。

「僕が宿るカードじゃ。初めは龍可ちゃんと思ったんじゃないが、少々扱いづらいと判断してのう」

確かに、龍可には少し合わないかもしれない。でもオレなら、

「解った。ありがたくその力を借りるよ」

「ほほ。久しぶりに血が騒ぐかのう。楽しみじゃ」

「よろしくね、トルンカ」

トルンカがオレに逢いに来てくれたのはこの為か。新しい仲間ができたんだね。

「さてと、話が済んだところで次の話だ。

先ずは礼を言わせて貰う。主を助けてくれてありがとな」

「気にすることないよ。“ガイア”、名前は？」

「俺の名はカカシだ。主共々、宜しくな」

「こちらこそ」

そう言つて“ガイア”、カカシと握手をした。

「えっと、“翼を織りなす者”の名前は？」

「申し遅れました。私は武内由里様の精霊、カレンと申します」

「よろしくね」

丁寧な精霊だなあ。マハードも最初は丁寧だったけど、ここまでじゃなかった。

紹介が済んでからは三人が起きてくるまでしばらく談笑。
啓斗と由里は寝る前に一度部屋を確認したらしい。アリスはシンがついてくれてる。起きてからの心配はほとんどなかった。

しばらくしてから三人が起きてきて、今はこれからのことを話して
る。

「スピリットシグナーってのが何なのかは解ったけどよ、これから
どうすりゃいいんだよ？」

「何もしなくていいんじゃないか？」

「どづいう意味だよ？カカシ」

「まだ主と由里殿は新しい力を貰ってねえだろ？」

「どづしたらいいんだづけ？」

「由里と石井様の新しい力を頂くべきシグナーのドラゴンが解って
いません。先ずはそのドラゴンを判明させる必要があります」

因みに、カレンは由里のことを様を付けずに名前で呼ぶことにした
らしい。

「先ずはそれが先だね。オレたちの経験上、新しい力が無いとファ
ントムを倒すのは厳しいね」

「そつだね。最後はやっぱり必要になるよ」

「解った。で、どうすりゃいいんだ？」

「何もしなくていいって言ったろ」

「捜そうとして捜せるものじゃないよ。私とアキも自然と関係に発展してたし」

「確かにね。後はジャックさん、クロウさん、龍可の誰かが、だね」

「毎日を普段と変わらずに過ごせばいい。痣が導いてくれる筈だ」

マハードの言う通りだね。

「解ったよ。じゃあ次だ。ファントムのごとはどうすんだよ？」

「ファントムはまだ大きな動きを見せない筈だ」

「どうして解るの？」

由里の質問はオレも気になる。マハードはいつもそう言ってきたけど、どうして解るんだろう？

「シグナーのドラゴン、つまり世界の管理者が動き出さないことが何よりの証拠だ」

「お師匠様はシグナーのドラゴンと仲が良んだよ」
なるほど、だから解るんだ。

「だが、いつ動き出しても不思議ではない。早く闘う準備を整えな

ければ」

「私たちがすべきことは由里と啓斗の新しい力を手に入れることと、五人目のスピリットシグナーを見つけることだね」

「アリスの言う通りだと思うけど、他に何かある？」

もう発言はなかった。

「さてと、早く戻ろうか。学園祭真っ最中だしね」

これからの方針が決まり、オレたちは人間世界に戻った。

人間世界に戻って来てから、すぐに学園祭に戻った。

とは言え、今日はすることがある訳じゃないから、マナを龍可に頼んで、今はアリスと約束通り二人で学園祭を見て回ってる。

「マナを龍可に預けてよかったの？」

「龍可はいいって言うてくれたし、マナもそれでいいって言うてたから大丈夫だよ」

多分気を使ってくれたんだろうけどね。

「でも意外だったね。まさか啓斗と由里がスピリットシグナーだったなんてね」

「うん。灯台下暗しだったんだよ、きっと」

近い所ほど見えなくなるんだよね。良い教訓になったよ。

くう〜

「へ？」

アリスを見てみると、顔を真っ赤にして俯いてる。

「さてと、虫の音が聞こえたところで何か食べようか」

「もー！」

恥ずかしそうに頬を膨らませながら詰め寄ってきた。

「ごめんごめん。でもお腹すいてるでしょ？」

「うん」

朝起きてから何も食べてないからね。

「何食べる？出店とかたくさん出てるよ」

見えるだけでタコ焼き、クレープ、焼きそば等等など。お祭りならではあるね。

「じゃあ、タコ焼きにしようかな」

「解った。買ってくるからちょっと待ってて」

「え？いいよ。私も払う」

「気にしなくていいよ。オレの奢り」

「　　ありがとう」

という訳でタコ焼きを二人分買って、とりあえず人目のつかない屋
上に行くことに。

「リヨウ、その　　、さっきのは聞かなかったことに　　」

よっぽど恥ずかしかったんだろうね。女の子だから当然か。

「はいはい。忘れるよ」

「むう　　。適当だよ、返事が」

「可愛かったよ？」

「もー！」

「あはは。大丈夫だよ、ちゃんと忘れるから」

「むう、もういいよ」

ちよつとからかい過ぎたかな。拗ねちゃった？

「あ、そうだ」

「ん？」

「リヨウ、あ〜ん」

タコ焼きを一つ持って突き出してくる。

「アリス、それはちょっと」

「私が恥ずかしい思いしたからリヨウもだよ」

「アリスのは自業自得じゃ」

「むっ！」

これ以上ごねたら機嫌悪くなるだろうなあ。

「あ、あ〜ん」

「うん。あ〜ん」

一つ食べさせて頂きました。お返しに、

「はい、アリス。あ〜ん」

「へ？わ、私も！？」

「当然だよ。あ〜ん」

「あ、あ〜ん」

一つ食べさせてあげました。

『仲の良いことだ』

『吾等としては喜ばしいことだ』

『きゃっ』

『どづいづことだっ』

『主アリスが笑顔でいるということだ』

『成る程。それは私も同じだな』

静かに見守る精霊たちがいましたとき。

その頃、

「おい、由里。何やってんだ？」

「クレープ美味しそうだよ？啓斗君も食べない？」

「まったく、奢れってことかよ。しょうがねえな」

「ありがと〜」

「お前は悠長だな。とんでもねえことに巻き込まれちゃったのによ」

「確かにそうだけど、アリスちゃんやリョウ君も一緒だよ？」

「まあな。でもよ、恐くねえのか？あの闇のデュエル」

「 恐いよ」

「だろうな。俺も恐くねえって言ったら嘘になる」

「でも、あの二人が一緒だから大丈夫かなって」

「そうだな。考えても仕方ねえし、腹括るか！」

「うん！」

『由里と啓斗様は仲がよろしいのですね』

『本人たちに自覚はねえみたいだな』

『自覚無しであれ程形になるでしょうか？』

『仕方ねえだろ。二人とも天然なんだよ』

『先が思いやられそうですね』

『ま、色恋沙汰に興味はねえ。俺は傍観させて貰うがな』

『私は応援していますよ、由里』

「マナは料理上手なのね。昨日の料理、とっても美味しかった」

「ホント？そう言ってもらえると嬉しいな」

「そうだな。あんなに美味しい物を食べたのは久しぶりだった」

「えへへ」

「ところでマナ、そのネックレス可愛いね」

「うん。この前、リヨウが買ってくれたんだよ」

「精霊にも貴女のような子もいるのね」

「どつだろつ？私はリヨウに甘え過ぎてると思うよ。お師匠様にはよく叱られるし」

「だがリヨウは許しているんだろつ？だったらいいんじゃないのか？」

「うん。私もそう思うわ」

「そうだといいんだけどね」

学園祭を楽しく見て回るマナと遊星と龍可。

因みに、一緒にいた筈のジャック、クロウ、龍亞は出店に飛び付くなり、騒ぎに巻き込まれるなりで逸れたらしい。

アキはというと、珍しく休みが取れた両親と一緒に行動している。

オレとアリスはタコ焼きを食べ終えて、再び学園祭を見て回ってる。

「明日は何かあるんだよね？」

「うん。校長先生に頼まれたデュエルがあるよ。なんでも、相手は有名人らしいよ」

「誰だろ？」

「さあ？オレも校長先生に聞いてみたんだけど、全生徒に秘密だからって教えてくれなかったんだよね」

「有名人」

まあ、有名人なんてネオドミノシティにはいくらでもいるから考えたって解らないんだけどね。

「ところでね、アリスは学園祭が終わってから始まるライディングデュエルの実技講習に出るの？」

ライディングデュエルの実技講習はDホールの数が限られてるから希望参加になってる。Dホールを持つてる人はオレだけだろうし、アカデミアのDホールも数多くある訳じゃないからね。

「参加してみようかなって思ってるよ」

「そっか」

「由里と啓斗も参加する気だったよ。アキは親が反対するから辞めておくって言うってたけど」

「どうしようかな。アキの両親が反対する気持ちは解るんだよね。実際、ライディングデュエルは楽しいけど、危険を伴うから。」

「マリアさんは？」

「母さんはいいつて言うてくれたよ」

「そうなんだ。だったらオレは何も言わない」

「心配してくれてる？」

「まあね。でも、アリスが決めたことだからね。オレは全力でサポートするだけだよ」

「平井先生と一緒にリヨウも教えるんだよね？」

「そうだよ。その時だけは、アリスの先生かな」

「ふふ、よろしく願います。リヨウ先生」

最後にはこんな冗談を交わしながら、学園祭二日目が終わりを迎えた。

第十三話・学園祭二日目（後書き）

次話で学園祭は終わりです。

この後は多少デュエルが続くと思います。学園祭の次のイベントを考えていますので。

次話の有名人は女性の人です。

それでは、グッチーでした。

第十四話：学園祭三日目（前書き）

学園祭最終日です。

今回はデュエルがあります。
有名人とのデュエルですね。

それでは、どつど。

第十四話：学園祭三日目

学園祭三日目の昼。校長先生に呼ばれた。

「どうかしましたか？」

「いや、君の準備は出来ておるかの？」

「大丈夫ですよ」

「もうすぐいらっしやる筈じゃ」

誰が来るんだろ？

「いらっしやっただのであります」

教頭先生が知らせに来た。

「うむ。では、リヨウ君。ここで待っていてくれるかの？」

了承の返事をしてから、校長先生と教頭先生が去っていった。

このデュエルがあることは学園祭で発表されている。つまり、みんなその有名人を見に来るだろうね。

しばらく待っていると、多くの記者団とともに一人の女性が現れた。この人はオレも知ってる。

「あら。貴方が私の相手　かしら？」

「はい。今日はよろしく申し上げます。ミステイ・ローラさん」

来てくれた、いや、来て下さったのは世界トップモデルの女性、ミステイ・ローラさん。

凄い人が来てくれたもんだね。校長先生と教頭先生があんなに丁寧になるのも納得できるよ。

「ふふ、そんなに畏まらなくていいのよ。楽しんで」

「はい」

そう言われてもなあ。

「さて、リヨウ君。デュエルまでもう少し時間がある。それまでミステイさんに学園内を案内して貰えるかの？」

「はい」

「一応拒否権なんてないから返事したけど、この記者団も連れていくんですか？」

「記者の皆様は、デュエルが終わるまで取材は無しにして貰えるかしら？この子に楽にして欲しいの」

ミステイさん、良い人だなあ。

渋々と記者の人たちが散っていく。

「これでいいかしら？」

「すみません。気を使って頂いて」

「ふふ、いいのよ。リョウ君、でよかったかしら？」

「はい」

「一つお願いがあるの」

「何でしょう？」

「十六夜アキ、を知ってるかしら？」

アキ？

あ、そういえばこの人はダークシグナーだった筈。その時にアキを怨んでいたけど、和解したって聞いたんだっけ。だからアキに逢いに来たんだらうか？

「知ってますよ。案内しましょうか？」

「お願いするわ」

アキのところには今日はみんないるよね。多分驚くだらうなあ。

どこにいるかは大体解ってたから、すぐにアキのところ案内できた。

その間にみんなからの視線が凄かった。ミステイさんは全く動じてなかったから馴れてるんだらうなあ。

「アキ。久しぶりね」

「ミスティ！？どうしてここに!？」

『ミスティ!?!』

えっと、とりあえずアキと一緒にいたアリスと由里と啓斗は驚くよね。アキも驚いてるけど。

「驚いたようね。今日のデュエルは私がするの」

「そう。よく来たわね」

「ふふ。友達がたくさんいるのね。上手く生活出来ているみたいで良かったわ」

心配してたんだ。アキの過去は知ってるだろうからね。

「ありがとう」

「アキのこと、これからもよろしくね」

『はい』

「リヨウ、そろそろ時間よ。デュエル会場に行きましょうか?」

「そうですね。案内します。

みんなも後でね」

実際にはもう少し時間があるけど、時間には気をつけてるんだろうね。流石トップモデル。

「貴方もアキの友達なのかしら？」

「はい。そうですよ」

「あの娘のこと、よろしくね」

「はい」

優しい人だなあ。どこか話し難そうに見えるけど、気さくな人だったんだ。

デュエル会場に着くと、もう人がたくさんいた。満員じゃないにしても既に結構入ってる。本当に流石トップモデル。

ミステイさんの取材が始まって、オレが少し空いた。

『リョウ』

「マナ？どうしたの？」

今日はデュエルがあるということで実体化はしていない。

『龍可があそこにいるんだけど、リョウに頼みがあるんだって』

マナが指差す方に確かに龍可がいる。他には龍亞と遊星、ジャックさんとクロウさんがいる。物凄い真ん前、ベストポジションにいる。

「龍可、オレに頼みって何？」

空いてるからとりあえず近付いて聞いてみた。

「ミステイさんのサインを買ってきて欲しいの！」

『』

傍にいた知り合い全員が押し黙った。オレ同様どう反応していいか解らなかつたんだろうね。

「龍可はミステイが好きなんだよ」

龍可だけは少し無事だったみたいだね。

「とりあえず、頼んでみたらいいの？」

「うん！一生のお願い！」

こんなところで一生のお願いを使っているの、って聞きたくなるよね、こつこつお願いされた時。

「解った。頼んでみるよ」

龍可には学園祭でマナのことで世話になったからね。

「リョウ。取材いいかしら？」

「カーリーさん。久しぶりですね」

オレに取材をしに来たのはカーリー・渚さん。

この人もダークシグナーだったらしいけど、ジャックさんに救ってもらったらしい。それから、ジャックさんに好意を持ってるみたい

でオレも逢ったことがある。

「何でオレに取材なんですか？」

「あのミスティさんとこれからデュエルするのに、その対戦者の取材をしないなんてありえないんだから！」

「なに抜け駆けしてんのよ、カーリー！こんな奴のことは無視していいから、あたしの質問に答えてね？」

「なんですってー!?!？」

とりあえずオレも今日は取材されることになりそう　　って、あれ？ミスティさんが手招きしてる？

隙をみて抜け出し、ミスティさんに近寄った。

「それでは、私たちはデュエルの準備があるので」

成る程。オレのことを気にしてくれたんだ。本当に良い人だね。

控室までは記者の人も追って来なかった。

「ごめんなさいね。あんな取材をされそうになって」

「いえ。大丈夫ですよ」

「ふふ、優しいのね」

「あのですね、ミスティさんにお願ひがあるんですけど」

「なにかしら?」

「実は、オレの幼い友達がミスティさんのファンらしいんです。それで、サインをもらってきて欲しいと頼まれたのですが」

「それは嬉しいわね。いいわ」

「ありがとうございます」

よかった。断られると思ってたんだけど。

「その代わりに、貴方を占わせて貰うわ」

占う?」

「私は顔相占いを嗜んでいるの。いいかしら?」

「構いませんよ」

「ふふ、交渉成立ね」

でも顔相占いってどう占うんだろう?」

「そろそろ時間よ。行きましようか」

ミスティさんに促されて、デュエル会場に行った。

『さあ、デュエルアカデミアネオドミノ校学園祭、スペシャルイベントの始まりであります!』

世界で活躍するトップモデル、ミスティ・ローラさんをお招きして、スペシャルマッチを開始するのであります！」

教頭先生、盛り上がってるなあ。

『ミスティ・ローラさんに礼を持ってお相手するのは、我がネオドミノ校が誇る偉大な生徒！かのフォーチュン・カップで優勝したりヨウなのであります！』

できればフォーチュン・カップ優勝のネタはもう出さないで欲しいんだけど。

「ふふ、楽しいデュエルにしましょうね」

「はい。よろしくお願いします」

『デュエルー！』

「ミスティさんからどうぞ」

「あら、優しいのね。でも大人として、先手は譲るわ」

「では、お言葉に甘えて。」

オレのターン、ドロー。“仮面魔道士”を守備表示で召喚します」

DEF/1400

「これでターンエンドです」

先ずは様子見。ミスティさんはどんなカードを使ってくるかな？

「私のターンね、ドロー。私は“ギゴバイト”を守備表示で召喚」

DEF / 300

「ターンエンド。次は貴方の番よ」

守備力300のモンスターを召喚しただけ。誘ってるのかな。

「オレのターン。“マジシャンズ・ヴァルキリア”を召喚」

ATK / 1600

「“仮面魔道士”を攻撃表示に変更」

ATK / 900

「“マジシャンズ・ヴァルキリア”で“ギゴバイト”を攻撃」

「あらあら」

「“仮面魔道士”でダイレクトアタック」

「うっ！」

ミステイ LP 3100

あれ？何も起きない？

「えっと、“仮面魔道士”がダメージを与えた時、カードを1枚ド

「ローします」

「ふふ、遠慮しないで。もっと攻めてきていいのよ」
「ミステイさんも様子見だったのかな？」

「ターン終了です」

「私のターン。ふふ、お気に入りなの。“ガガギゴ”を召喚」

ATK / 1850

どうやらミステイさんは爬虫類デッキみたいだね。

「バトル。“マジシャンズ・ヴァルキリア”を攻撃」

「くっ」

リョウ LP 3750

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「オレのターン。魔法カード“低魔力通過”を発動します。このターン、場に存在する攻撃力1000以下の魔法使い族モンスターはダイレクトアタックができます」

「まあ」

「“仮面魔道士”でダイレクトアタック」

「うっ」

ミステイ LP 2200

「ふふ、優しい攻撃ね」

「カードを1枚ドロします」

残念ながらオレの手札に“ガガギゴ”を倒せるモンスターはいない。

「魔法剣士ネオ”を守備表示で召喚」

「ふふ、ごめんなさいね。」

永続罫“御前試合”を発動するわ。お互いのプレイヤーは場上の属性が1種類しか存在出来なくなるの」

ということは、

「魔法剣士ネオ”は墓地にいくことになるわ」

マズイね。

攻撃力の低い“仮面魔道士”だけになる。

「カードを2枚伏せて、ターンエンドです」

「私のターン。“グラナドラ”を召喚」

ATK/1900

「このカードが召喚に成功した時、1000ポイントライフを回復

するわ」

ミステイ LP 3200

「いくわね。“ガガギゴ”で“仮面魔道士”を攻撃」

「っ！」

リヨウ LP 2800

「“グラナドラ”でダイレクトアタック」

「くうっ」

リヨウ LP 900

「ふふ、ターンエンドよ」

強いんだね。スペシャルマッチだからって、油断してたら負けるかも。

「オレのターン。手札から“サイクロン”を発動して、“御前試合”を破壊します」

「あら」

「更に手札を1枚墓地に送って“THE トリック”を召喚」

ATK/2000

「「グラナドラ」を攻撃！」

ミステイ LP 3100

「ミステイさんには“グラナドラ”の相互効果として2000ポイントのダメージを受けてもらいます」

「ああん！」

ミステイ LP 1100

ずいぶん色っぽい声だった。じゃなくて！デュエルに集中しないと。

「ターンエンドです」

「私のターン。いくわね、フィールド魔法“伝説の都 アトランテイス”発動！」

場全体が海の都に変わっていく。

「これで手札と場上の水属性モンスターのレベルが1つ少なくなり、攻撃力と守備力が200ポイントアップするわ」

ATK/2050

“トリッキー”を上回った。

「手札からレベル4となった“ギガ・ガガギゴ”を召喚するわ」

ATK / 2450

「フィールド魔法の効果で攻撃力がアップするわ」

ATK / 2650

「ふふ、“ギガ・ガガギゴ”で攻撃」

「うっ！」

リヨウ LP 250

「おしまい、かしら？」

“ガガギゴ”でダイレクトアタック」

「罠カード“ガード・ブロック”の効果で戦闘ダメージを0にして
カードを1枚ドロウします」

危なかった。

「あら、残念。ターンエンドよ」

「オレのターン。罠カード“蘇りし魂”発動。墓地の通常モンスター
1を守備表示で特殊召喚します。」

“魔法剣士ネオ”を特殊召喚」

DEF / 1000

「“魔法剣士ネオ”をリリースして、“ブリザード・プリンセス”
をアドバンス召喚！」

ATK / 2800

「フィールド魔法の効果でレベル7になっていますが、このカードは魔法使い族モンスター1体のリリースでアドバンス召喚できます。フィールド魔法の効果で攻撃力がアップ」

ATK / 3000

「バトル!“ギガ・ガガギゴ”を攻撃！」

「ああっ！」

ミステイ LP 750

「うっん、やるわね」

「カードを1枚伏せて、ターン終了です」

「私のターン。手札を1枚墓地に送り、魔法カード“コストダウン”を発動するわ。手札のモンスターのレベルを2つ下げるわ。」

「“ガガギゴ”をリリースして、レベル5となった“ゴギガ・ガガギゴ”をアドバンス召喚！」

ATK / 2950

「フィールド魔法で攻撃力アップ」

ATK / 3150

「バトル!“ゴギガ・ガガギゴ”で攻撃！」

「くあつ！」

リヨウ LP 100

「うん。ターンエンド」

「オレのターン」

攻撃力3150のモンスターか。
あのカードの力を借りようかな。

「永続罨“正統なる血統”を発動。もう一度“魔法剣士ネオ”を特殊召喚」

ATK/1700

「更に“マジカルフィシアリスト”を召喚」

ATK/800

「あら。その二体のモンスターで何をする気かしら？」

もちろん、チューナーとそれ以外のモンスターがいるんですから。

「いきます。レベル4の“魔法剣士ネオ”に、レベル2の“マジカルフィシアリスト”をチューニング！」

白き魔術が重なりし時、百戦錬磨の魔術師が現れる。光差す希望と為れ！

シンクロ召喚！冴え渡れ！“高尚なる魔術師トエル・カウロ”！

ATK / 2300

「トルンカ!?」

今の声は龍可かな。

オレの場に現れたのは正しくトルンカそのもの。オレの新しい仲間として初めての召喚。

『ほほ。初登場じゃのう』

「決めるよ、トルンカ」

『任せなされ』

「“高尚なる魔術師トエル・カウロ”がシンクロ召喚に成功した時、墓地の魔法カードを1枚手札に加えることができます。

オレは“サイクロン”を手札に加え、発動。フィールド魔法“伝説の都 アトランティス”を破壊します」

「まあっ!」

「これで“ゴギガ・ガガギゴ”の攻撃力がダウンします」

ATK / 2950

「それでも攻撃力はこちらが上だと思っただけねど」

効果を使わなければ、ですな。

「高尚なる魔術師トエル・カウロ”の効果発動！このターンのエンドフェイズまで相手モンスター1体の攻撃力を半分にします！」

「あらっ！」

ATK / 1475

「これで終幕です！“高尚なる魔術師トエル・カウロ”で“ゴギガ・ガガギゴ”を攻撃！シルバー・グランズ！」

「きゃああっ！」

ミスティ LP 0

『勝者決定！勝者、リョウなのであります！』

「ふう、負けたわ。強いよね」

「いえ」

『ミスティさん！感想を一言！』

記者の人たちが押し寄せてきた。先に控室に戻るかな。

「流石なのであります」

「教頭先生」

なんでわざわざオレのところか？

「どうでありますか？最近は何も負け無しなのでありませんか？」

確かに。最近負けてないなあ。

「勝利とは良い物でありますからね。どうでありますか？この勝利の勢いで是非キングに！」

何を言い出すかと思つてたら。

「遠慮しておきます。何度も言いますが、キングになるつもりはありません」

「何故でありますか！？あれ程勝利を納めておきながら！」

「オレより強い人なんていくらでもいますよ」

遊星にジャックさん、クロウさんには勝てる自信なんて無いし、アリスや啓斗、由里にアキとは良いライバルみたいなものだしね。

「ぬぐう」

「リョウ。そろそろ控室に戻りませんか？」

「あ、はい。そうですね」

妙に唸っている教頭先生を尻目に控室に戻った。

「ふふ、楽しいデュエルだったわ」

「オレもです」

「サイン、だったわね。えっと、これでいいかしら？」

どこからかサイン紙を取り出し、サインしてくれた。

「ありがとうございます。きっと喜んでくれると思いますよ」

「そう。私も貴方のこと、デュエルをしながら占わせて貰ったわ」

デュエル中にそんなことしてたんだ。器用な人だなあ。

「ふふ、その綺麗なお顔、もっとよく見せて」

そういえば、顔相占いだっつけ。トップモデルで活躍する人からまじまじと見られると緊張するなあ。

「貴方、誰かに恋をしているのかしら？」

「へ？」

「ふふ、ちょっと違うかしら。恋人がいるのね」

「え、えっと、まあ」

そんなことまで解るのか。

「ふふ、照れなくてもいいのよ。可愛い娘みたいね。大事にしてあげないとダメよ」

「はい」

「それから、何か重い物を背負っているわね。闘いが見えるわ」
「凄いな。完璧に当たってる。」

「だけど、人には言えないことみたいね。
大丈夫よ、仲間と一緒になら必ず乗り越えられる。そう見えるわ」

「ありがとうございます」

「それから、言うべきか迷っているのだけれど」

「何でしょう?」

「聞きたいかしら?」

「なんだろう? ミステイさんの顔はずいぶん嫌そうだけれど。」

「言ってください」

「ミステイさんの占いは多分確率はかなり高い。信用できると思う。」

「解ったわ。」

「今言った人には言えない闘いの中で、貴方には信じ難いことが起こると出たわ。闘い乗り越えられると言ったけれど、この出来事を貴方が乗り越えられればの話よ」

「信じ難い出来事か。」

「貴方には辛い真実になると思うわ」

「そう　ですか」

「貴方次第よ。大丈夫、大切なものを見失わなければ、きっと乗り越えられるわ」

「肝に命じておきます」

素敵な笑顔で応えてくれた。

オレが乗り越えなきゃいけないことがあるんだね　。

「そうそう」

何かを思い出したように笑う。悪戯っぽく。

「貴方の恋人を是非見てみたいわね。紹介してくれないかしら？」

「オレの恋人　ですか」

「一回見たんだけどね。」

「解りました。連れて来ますね」

「あら。いいのかしら？」

「占ってくれたお礼です」

貴重なこと聞けたしね。

デュエル会場に一人で戻り、予想通りアリスたちは残っていた。

龍可にサインを渡し、アリスを連れて控室に戻った。

サインを渡した時の跳び上がって喜ぶ龍可を見た時はみんな啞然としてたね。

「あら。貴女はアキの友達の娘よね？」

「はい。アリス・ルシエです」

「そう。ふふ、可愛い娘ね。リヨウ、大事にしなくちゃダメよ」

「はい」

さつきも言われたけどね。

side アリス

リヨウに連れられて控室に来たけど、ミスティさんは私に何の用があったのかな？

「実はね、貴女に言っておきたいことがあるの」

ミスティさんが私だけにそつと語りかけてきた。

「リヨウは近いうち、大きな壁にぶつかるわ。自分の信念が砕かれるような、大きな壁に」

「リヨウが　ですか？」

「ええ。貴女にすっかり支えて欲しいの。リヨウのこと、よろしくね」

「はい。私にとって、リヨウは掛け替えのない人ですから」

「そっ」

私に微笑んで、ミスティさんは離れた。

「リヨウ、今日のデュエルはとっても楽しかったわ。またデュエルしましょうね」

「はい。オレからも是非よろしくお願いします」

簡単な挨拶を済ませて、ミスティさんはアカデミアから帰っていった。

ミスティさんが言った、リヨウに立ち塞がる大きな壁って何なんだろう。

side out

ミスティさんが帰ったことで、アカデミアの学園祭は終わりを迎える。

「学園祭は何もない予定だったのに、いろいろあったね」

ライブに、精霊界でファントムと闘って、ミスティさんとデュエル

して。

『でも、楽しかったよね？』

「そうだね。マナは楽しかった？」

『うん！楽しかったよ！』

マナは素敵な笑顔で笑ってる。傍にいてくれた遊星と龍可には感謝しないよね。

この学園祭が終われば、ライディングデュエルの講習か。本当に充実した生活を過ごしてるね、オレって。楽しいけどね。

こうして、三日間の学園祭は終わった。

第十四話：学園祭三日目（後書き）

学園祭終了です。

有名人はミスティでした。予想できた人もいたと思います。

余談ですが、TAG FORCE5にミスティさん登場してませぬ。ちよつとシヨックでした。あんまりプレイしてないんですが。

次話からライディングデュエルに関する内容が増えると思います。

それでは、グッチーでした。

第十五話：黒き龍（前書き）

どうもこんにちは。

この話で原作から少しズレます。元々ズレているかもしれませんが、
今回もデュエルがあります。

では、さようなら。

第十五話：黒き籠

学園祭が終わり、アカデミアは普通の日常に戻った。

ただ、高等部だけは少し違っていた。ある一定の人数だけがソワソワしている。

今日からライディングデュエルの実技講習が始まる。実技講習は希望者のみで、希望者は約40人。一日に行われる実技講習の時間は三時間。アカデミアが用意したDホイールは五台。あんまり乗れる時間は多くないね。

そして、今から初日の実技講習が始まる。

「まず、私はこの実技講習を担当することになった、体育科の平井だ」

実技講習の先生、平井先生が挨拶をする。

「それから、このアカデミアで私の他に唯一Dホイールのライセンスを持っているリョウに私の補佐をして貰うことになっている」

「よろしくお願いします」

紹介されたので、オレも挨拶する。この中には先輩もいるから、敬語は欠かさない。

「それじゃあ早速実践してみるか」

約40人でDホイールが五台しかないから、ハグループに分かれてアカデミアのサーキットコース（校長先生が作ったらしい）を走る。最初はクラッシュの嵐。じゃないよ。アカデミアが用意したDホイールははつきり言って性能が悪い。スピードがほとんど出ない。初心者向けなんだけどね。

「リョウ〜」

「どうしたの？アリス」

アリス、啓斗、由里もこの実技講習を受けている。そういえば女の子も十人くらいいるかな。

「三人は同じグループなんだね」

「っていうか一年が全員同じグループみたいだけどな」

「そうなんだ。それで、どうかした？」

「コツを教えて欲しいな〜って思ったの」

コツか。

「怖がらないことかな。身体をDホイールに預ける感覚で走るんだ」
「よ」

『フムフム』

いつの間にか一年全員が聞いてるね。

「アカデミアのDホイールだとあんまりスピードは出ないけど、カ
ーブとかじゃそういうテクニクが必要になるからね」

『なるほど』

「そんじゃあ、先生に手本を見せて貰おうじゃねえか」

流石啓斗。言うと思ったよ。

「みんな一回は乗ってみた？」

全員が頷く。まだ乗ってない人はいないみたいだね。

「平井先生はアカデミアのDホイールでこのコースを一周一分半で
走れば上出来だって言ってた。今からオレのDホイール、ソニッ
クで一周走ってみるよ。スピードが全然違うから、そこも見ててね」

コースは普通の楕円形。

オレはソニックに乗って一周のラップを測ってみた。

一分二秒。

「みんな、どうだった？」

『早っ！』

まあ、このくらいはね。

「みんなもカーブやストレートの走り方を覚えたら早くなるよ」

そう言って走行再開。まだまだ上達はしないだろうけどね。

一日目の実技講習が終わり、今日のアカデミアでの日程を終えた。

「しかし、お前早過ぎんだろ」

「あのくらいなら遊星たちだって軽く走れるよ」

今は放課後。オレはアリス、啓斗、由里とあるところに向かっていく。

「平井先生が言ってたけど、明日から自分のDホイールを持つてる人は持ってきていいんだよね」

多分誰も持ってないだろうけどね。

「あと、ライディングスーツもだね」

今日はみんなジャージだったからね。

「アリスと由里はライディングスーツ持ってるんだよね？」

「そつだよ」

「リヨウや遊星さんみたいに普段の服でDホイールに乗るのはちょっとね」

確かにね。女の子が普段着でDホイールに乗るのはちょっとね。

因みに、今日のオレの服装は先生に許可を貰って普段Dホイールに乗っている服装だったよ。

「問題はDホイールなんだけどな」

高価だし、あんまり出回ってる訳じゃないからね。

だからある所に向かっているんだけどね。

目的地に到着すると、

「今日はみんな揃ってどうしたんだ？」

遊星が出迎えてくれた。

オレたちの目的地は遊星たちの住むガレージだったんだよね。

「遊星に頼みがあつて来たんだよ」

「どうかしたのか？」

「しかも四人でぞろぞろ来てかよ」

手厳しいな、クロウさんは。

今はクロウさんと遊星しかいない。ジャックさんはどこかに行ってるみたいだね。

「オレに頼みとは？」

「率直に言つとね、遊星にDホイールを造って欲しいんだ。しかも三台」

「Dホイールを？」

「しかも三台もだと!？」

「えっと、私たちの分なんだけど」

「アリスたちの分か」

「厚かましいけど、お願いします！」

「頼む!この通りだ！」

三人が頭を下げてる。

「駄目だ駄目だ」

クロウさんにバツサリ切られた。

「なんでだよ!？」

「リヨウ、お前なら解るだろ。Dホイールを造るには部品がある。部品を買つには金がある。」

「ましてや、オレたちは新エンジンの開発で忙しいんだ。そのエンジンを造るにしても部品はある。当然金がある。だからオレたちは寝る間を惜しんで働いてるんだよ。」

「それなのに、お前たちに回す暇も金もある訳ねえんだよ」

「待てよ。遊星は働いてねえだろ？」

「遊星は新エンジンを開発してんだよ。それに、遊星だって修理屋

を請け負って稼いでんだよ」

「何も考えてない訳じゃないよ、クロウさん。部品のお金はオレたちが払う。遊星に組んで欲しいんだ」

これは来る前にみんなを確認したこと。そこまで頼り切る訳にはいかないからね。

「それでも駄目だ。時間がかかるだろ」

確かにね。遊星も困った顔してるし。

「仕方ねえ。オレとデュエルしようぜ。それでケリ着けようじゃねえか」

啓斗、強引過ぎるよ。。

「面白ねえ。このクロウ様とやるうってのか」

乗っちゃったよ。。

「へっ！交渉成立だ。いくぜ！」

『デュエル！』

「勝手に始めちゃったけど、いいのかな？」

「啓斗君、無茶苦茶だよ」

「俺の先攻だ、ドロー！」

“ネジマキの見習い戦士”を守備表示で召喚」

DEF / 800

「カードを2枚伏せ、ターンエンド」

「オレのターンだ。“BF 暁のシロッコ”を召喚！」

ATK / 2000

「レベル5のモンスターじゃねえか!?!」

「このカードは相手場にのみモンスターが存在する場合、リリース無しで召喚出来る！」

バトル!“暁のシロッコ”で攻撃！」

「チッ！」

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

「俺のターンだ。手札より“ジャンク・ブレイダー”を召喚！」

ATK / 1800

「ジャンク・ブレード”。オレと同じジャンクデッキか
」

「そうだよ。それよりよかったの？勝手に話が進んでるけど」

「あの状態で今更止められると思うか？少なくともクロウは無理だ。
啓斗はどうだ？」

『無理』

三人綺麗にハモりました。

side 啓斗

一気にいくぜ！

「畏発動！“エンジェル・リフト”！墓地のレベル2以下のモンス
ターを特殊召喚するぜ。

“ネジマキの見習い戦士”を特殊召喚！」

ATK/500

「レベル4の“ジャンク・ブレード”に、レベル2の“ネジマキ
の見習い戦士”をチューニング！

シンクロ召喚！レベル6“マイティ・ウォリアー”！」

ATK/2200

「出し惜しみは無しだ！

バトル!“暁のシロツコ”を攻撃!”

「くっ」

クロウ LP 3800

「マイティ・ウォリアー”の効果!戦闘でモンスターを破壊した時、破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを与える!”

「ぐああっ!」

クロウ LP 2800

「やるじゃねえか」

「当然だろ!」

「へっ!だったら、このクロウ様も本気でやってやるぜ!」

くるか?

「オレのターン!魔法カード“闇の誘惑”!デッキからカードを2枚ドローし、手札の闇属性モンスター1体をゲームから除外する。

“BF 黒槍のブラスト”を手札から除外するぜ。

さらに“闇の誘惑”で手札に加わった“BF そよ風のブリーズ”を特殊召喚!”

ATK/1100

「畏発動!“闇次元の解放”!ゲームから除外された闇属性モンス

ターを特殊召喚出来る。

“BF 黒槍のプラスト”を特殊召喚だ！」

ATK/1700

シンクロ召喚か？

「レベル4の“黒槍のプラスト”に、レベル3の“そよ風のブリーズ”をチューニング！

黒き旋風よ、天空へ駆け上がる翼と為れ！

シンクロ召喚！“BF アーマード・ウィング”！」

ATK/2500

「バトルだ！“アーマード・ウィング”で攻撃！ブラック・ハリケーン！」

攻撃力は“マイティ・ウォリアー”の方が低いが、

「ダメージステップに速攻魔法“突進”発動！“マイティ・ウォリアー”の攻撃力を700ポイントアップするぜ！」

ATK/2900

「これで破壊されるのはお前のモンスターだ！」

“マイティ・ウォリアー”が拳を打ち返す。だが、

「破壊出来てねえ！？」

「残念だったな。“アーマード・ウィング”はバトルでは破壊されず、戦闘ダメージも0になる」

クロウ LP 2800

「さらに、攻撃したモンスターに楔カウンターを打ち込むぜ！」

チツ。そんな効果かよ。

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「俺のターン。カードを2枚伏せて、ターンエンドだ」

何も出来ねえ。厄介なモンスターだな。

「オレのターン。“BF 蒼炎のシユラ”を召喚」

ATK/1800

「さらに、“アーマード・ウィング”の効果発動!“マイティ・ウオリアー”の楔カウンターを取り除き、攻撃力と守備力を0にする」

「んだとお!？」

ATK/0

「バトル!“アーマード・ウィング”で攻撃！」

「畏発動!“シンクロン・リフレクト”!オレのシンクロモンスター

ーが攻撃対象になった時、攻撃を無効にして、相手モンスター1体を破壊する！

オレは“アーマード・ウィング”を破壊！」

「くっ！」

これで厄介なモンスターは倒した。だが、クロウの攻撃はまだ残っている。

「まだいくぜ！“蒼炎のシユラ”で攻撃！」

「ぐああっ！」

啓斗 LP 2200

「まだまだこれからだ！“蒼炎のシユラ”が戦闘で相手モンスターを破壊した時、デッキから攻撃力1500以下の“BF”を1体特殊召喚出来る！」

オレは“BF 月影のカルート”を特殊召喚！」

ATK/1400

マジかよ。

「“月影のカルート”でダイレクトアタックだ！」

「べっべっべっべっ！」

啓斗 LP 800

「そろそろ終わりか？」

「まだデュエルは終わっちゃいねえ！」

闘カード“シヨック・ドロ”！このターンに受けたダメージの1000ポイントにつき、カードを1枚ドロ出来る。オレが受けたダメージは3200、よってカードを3枚ドロだ！」

これでオレの手札は五枚。巻き返してやる！

「面白ええ。オレはターンエンドだ」

「オレのターン！魔法カード“英雄の帰還”を発動！墓地のレベル4以下の戦士族モンスターを特殊召喚する！
墓地から“ジャンク・ブレイダー”を特殊召喚！」

ATK / 1800

「さらに“共闘するランドスターの剣士”を召喚！」

ATK / 500

「いくぜ！レベル4の“ジャンク・ブレイダー”に、レベル3の“共闘するランドスターの剣士”をチューニング！
受け継がれし魂が、光となって駆け昇る！

シンクロ召喚！光来せよ！“ライトニング・ウォリアー”！」

ATK / 2400

「新たなシンクロモンスターか」

「バトルだ！“蒼炎のシユラ”を攻撃！ライトニング・パニツシャ
ー！」

「ぐわっ！」

クロウ LP 2200

「まだまだ！“ライトニング・ウォリアー”がモンスターを破壊した
時、俺の手札1枚につき400ポイントのダメージを与える！
俺の手札は4枚！1600のダメージだ！」

「ぐああっ！」

クロウ LP 600

「この野郎！」

「へっ！どうだ？」

「強えじゃねえか」

「当然だろうが！」

「だがまだ勝負は着いてねえ。こっからだ！」

「解ってるぜ！俺はカードを3枚伏せ、ターンエンドだ」

「オレのターン！」

どってくるか、だな。

「手札より“BF 疾風のゲイル”を特殊召喚！」

ATK / 1300

「このカードは、自分場上に他の“BF”がいる時、特殊召喚出来る。

“疾風のゲイル”の効果発動！1ターンに一度、相手モンスター1体の攻撃力と守備力を半分にする！」

「畏発動！“くず鉄の畏”！相手モンスター1体の効果の発動を無効にする。そして、墓地に送らずそのままセットだ」

モンスター効果は防いだ。次のターンで破壊すればいい。

「オレは“BF 鉄鎖のフェーン”を通常召喚」

ATK / 500

「いくぜ！レベル2の“鉄鎖のフェーン”とレベル3の“月影の力ルート”に、レベル3の“疾風のゲイル”をチューニング！

黒き疾風よ！秘めたる想いを、その翼に現出せよ！

シンクロ召喚！舞い上がれ！“ブラックフェザー・ドラゴン”！」

ATK / 2800

場に黒い身体の羽を羽ばたかせるドラゴンが現れる。

「な、なんだ、このモンスターは？」

「あのドラゴンは まさか!？」

「クロウのエース、そして、シグナーの龍だ」

「それじゃあ、眠りから覚めたの!？」

『そのようだな』

「マハード。どういうこと?」

『解らない。解るのは今確かに召喚されたということだけだ』

「遊星、クロウさんはあのドラゴンをいつ?」

「つい先日、荷物を整理している時に見つけたそうさ。友人から貰ったカードだと言っていた」

「その通りだぜ!」

クロウさんが話に入ってきた。

「今までどこにあったのかさっぱり解らねえが、こいつがオレのシグナーの龍だってことは間違いねえ」

「そっぴやお前、シグナーだったな」

「あ?お前は何も解らねえ筈だろ?」

「解るんだよ。俺はスピリットシグナーだからな」

「なにい!?!」

「本当なのか!?!」

「ホントだよ。ついでに私も」

「由里もなのか!?!」

「いつの間に」

「こっちもつい先日。たまたまね」

「あと一人はまだ解ってないけど」

「そんな話は後だ!シグナーの龍の力、早く見せてみな!」

「上等だ!“ブラックフェザー・ドラゴン”で“ライトニング・ウ
オリアー”を攻撃!ノーブル・ストリーム!」

「ぐっつ!」

啓斗 LP 400

「畏発動!“受け継がれる魂”!破壊されたシンクロモンスターと
同じレベルの通常モンスターを特殊召喚する!

今度は俺の精霊を紹介してやるぜ!来い!カカシ!」

ATK / 2300

「お前の精霊は“暗黒騎士ガイア”か」

「その通りだ！」

『やっと俺の出番か。待ちくたびれたぜ』

言ってくれるぜ。召喚したのによ。別にいいけどな。

「オレのターンは終わりじゃねえぜ。魔法カード“不意打ち”発動！バトルフェイズ以外で、もう一度攻撃することが出来る！」

“ブラックフェザー・ドラゴン”でもう一度攻撃！ノーブル・ストリーム！」

「チッ！畏発動！“ジャンク・シールド”！この戦闘でカカシは破壊されず、発生する戦闘ダメージを相手に与える！」

「効かねえぜ！“ブラックフェザー・ドラゴン”の効果発動！効果ダメージを受ける場合、ダメージを無効にして“ブラックフェザー・ドラゴン”に黒羽カウンターに打ち込む。黒羽カウンター一つにつき、攻撃力が700下がるけどな」

ATK / 2100

「これでターンエンドだ」

「オレのターン！終わりにしてやるぜ！装備魔法“暗黒の黒鎗”をカカシに装備！攻撃力が1000アップ！」

ATK / 3300

「終わりだ！スパイラルセイバー！」

「畏発動！“フェイク・フェザー”！手札の“BF”を墓地に送り、相手の墓地の罫を使用することが出来る。オレが使うのは“ジャンク・シールド”！」

「なっ！？」

「“ブラックフェザー・ドラゴン”の破壊を無効にして、戦闘ダメージを相手に与える！」

「ぐああああっ！」

啓斗 LP 0

side out

「クソッ！負けちまった！」

かなり無理に仕掛けたデュエルだったけどね。

「それで、Dホイールの件はどうするんだ？」

「オレが勝ったんだ。当然無しだろ」

「そこをなんとか！頼む！」

「どつすつかねえ」

クロウさんが渋ってる。デュエルでお互いのことを認め合ったんだね。

「条件がある」

『条件?』

遊星の条件発言。

「リョウ、お前のDホイールを数日調べさせてくれないか?」

「ソニックを?」

「ああ。前に見た時に気になったんだが、オレたちには見たことが無い仕組みがあった。何かのヒントになるかもしれない」

「日中は実技講習があるから無理だけど、それ以外でよければ」

「ありがとう」

「じゃあ、朝に取りに来るから」

「ああ」

「じゃあ、私たちのDホイールを組み立ててくれるの?」

「ああ。必要な部品の詳細だ。これだけあれば、一台造れる」

『ありがとう！』

交渉成立だね。一時はどうなるかと思ったよ。やれやれ。

第十五話：黒き龍（後書き）

ようやくシグナーの龍が揃いました。

精霊世界の設定上、揃えない訳にはいきませんでした。

次話はまだ間の話の予定です。

それでは、グッチーでした。

第十六話：カード（前書き）

遅くなってしまってますいません。何かと忙しかったもので。

言い訳してすいません。

それでは、どうぞ。

第十六話：カード

「何なのでありますか！？リヨウが勝ち続けたところで意味が無かったのであります！」

「失敗してしまいましたか」

「やはり、このネオドミノ校をアカデミアのエリート校にするのが一番なのであります！」

「承知しました。早速実行します」

アカデミアで実技講習が始まって二週間が過ぎた。みんな大分上手くなって、ラップタイムも伸びてきた。特にアリスと啓斗、由里は遊星に造ってもらった自分自身のDホイールがあるから、かなりテクニクが上達してる。

今は昼休み。みんなで昼食を採っている。

「三人とも調子良いみたいだね」

「うん。遊星さんが造ってくれたDホイールは凄いな」

「そうだね。スピードが全然違うもんね」

「最初は酷かったけどな」

スピードが上がり過ぎて曲がれずにクラッシュする光景を何度も見たからね。目を覆いたくなる光景ばかりだったよ。

「遊星さんの開発は進んでるの？」

「ソニックから何かしらのヒントを見つけたみたいだよ。今は設計で忙しいみたいだね」

よくは解らないけど、遊星は喜んでたから大丈夫だろうね。

「ところでね、今度行われる学園対抗戦ってどうなるんだろうね？」

由里の言う通り、ライディングデュエル奨励を記念して学園対抗戦が開催される。イースト校、ウエスト校、サウス校、ノース校、ネオドミノ校の計五校の対抗戦。

もちろんライディングデュエルで行われる。ルールは来年開催されるWRGPとほぼ同じ。違うのは代表選手が三人ではなく四人ということ。

オレたちネオドミノ校の代表は実技講習を受けている生徒から選抜されるらしい。

「リヨウ君は絶対選ばれるとして、あとの三人は誰になるのかな？」

当然オレにも出場権はあるよ。実技講習を受けてる訳じゃないけど、実力は十分ってことらしい。

「ま、あとは上級生が選ばれんじゃねえのか？」

「そっかな？啓斗は上級生にも負けてないよ？」

「どうだかな」

「オレから言わせてもらえば、三人全員可能性あると思うよ?」

「誉め過ぎじゃない?」

「そんなことはないよ」

実際、自分自身のDホイールを持っているのはかなり有利。いつでも乗れるからね。

自分のDホイールを持つてるのは三人を入れても十人未満。しかも三人はひいき目無しで十分上手い。

「まあ、あとは来週から一週間ある実技デュエルの成績次第だね」

「確かにな」

その実技デュエルが終わってから代表発表をするらしい。

『リヨウ〜』

マナ?

「どうかした?」

『うん。お客さんだよ』

『失礼する』

「レグルス。久しぶりだね」

白い装甲が施されたトラ型の精霊が現れた。

「この子、精霊だよね？」

『私が見えるのか？』

「うん。私は由里、よろしくね」

『「ちらちら」』

「それで、どこぞの精霊がわざわざ来たんだろ？なんか用でもあんのか？」

『貴殿も見えているようだな』

「まあな。オレは啓斗だ」

『そうか。確かに啓斗の言う通り、私は龍可の使いで来た。急ぎ、小等部に来て欲しい、とのことだ』

小等部に？何かあったのかな？

「とにかく行ってみよう」

「そうだね」

「リヨウ！アリスお姉ちゃん！」

「龍亞。何かあったの？」

「ごめんね。わざわざ来てもらって」

「気にしないで。何かあったんだよね？」

「そうなんだよ！」

「私たちと同じクラスの娘がいるんだけどね、その娘が」

龍可が後ろを向く。そこには泣いている女の子と慰めてる先生、周りに同じクラスと思われる子たちがいる。

「何で泣いてんだよ？」

「先生に酷いこと言われて」

ふむ。

「とにかく、話を聞いてみようよ」

アリスが泣いている女の子に近寄っていく。アリスに任せておけば大丈夫かな。

「母さん、ちょっといいかな？」

先生はマリアさんだったんだね。ってことは言ったのは違う先生か。

「こんにちは」

アリスが女の子に優しく声をかける。

「どうしたの？」

「えっぐ、えっぐ」

「私は龍可と龍亞の友達なんだ。よかったら、どうして泣いてるのか教えてくれないかな？」

「えっぐ」

「うん？」

「あ、あのね」

流石アリス。早々と心を開いちゃったよ。

「私がね、マリア先生の授業通りにデュエルしてたの。そしたらね、荒井先生が入ってきたの」

多分その先生が関係してるんだろうね。

「荒井先生って？」

「小等部で一番偉い先生なの」

「だけどオレ、あの先生嫌い！」

龍可と龍亞の印象は悪い。

「それでどうしたの？」

アリスが話を促す。

「うん。私のカードを見た途端にね、『こんなカードはクズだ！何で使っている！？お前にデュエルをする資格など無い！』って
「

へえ。

「酷い！なにそれ！」

「マジネタか？」

「こんなんで嘘なんかつかないよ！」

「それでオレたちを呼んだって訳か」

「うん。荒井先生はこういうことが多くて」

「解ったよ」

「由里？」

何か考えがあるのかな？

「ちょっとごめんね。そのカードを見せてくれないかな？」

「うん」

この女の子のデッキは、
“おジャマ・イエロー” “おジャマ・グリーン” “おジャマ・ブラ
ック”。

「なるほど。“おジャマ”か」

「“おジャマ”が好きなんだね？」

「うん。でも先生が」

「何て言われようと関係無いよ。自分が好きなカードを使うのが一番良いんでもん」

「そうだね。由里の言う通りだよ」

あの娘のことはアリスと由里に任せておけば大丈夫かな。

「ごめんなさいね。本来なら私たち教師の責任なのに」

「気にしないでください、マリア先生。先生は悪くないですから」

「でも」

「龍亞と龍可はマリア先生のこと、どう思う？」

「マリア先生は良い先生だよ！」

「先生は悪くないですよ」

「ありがとう。龍亞さん、龍可さん」

さてと、マリアさんはこれで大丈夫かな。

「リョウ、この娘がどうしても自信が持てないみたいなの」

アリスと由里でもこればかりはダメか。

「デュエルしてあの先生をやっつければいいんだよ！」

「龍亞の言う通りだな。それが一番確実に手っ取り早え」

確かにね。それなら、

「このデッキ、少し貸してくれないかな？」

今度はオレが話しかけた。

「どうするの？」

「昼休みはまだ時間があるよ。今からみんなでデッキを調整してみよう。そのデッキで荒井先生を倒そう」

「でも、私」

「自信が無いのなら、オレにそのデッキを預けてくれないかな？オレがこのデッキで荒井先生を倒す」

「ホントに？」

「うん。約束する。だからもう泣かないで、ね？」

「うん」

さてと、それじゃあ、

「みんな！始めるよ！」

side 由里

この場にいた子たちがみんなでデッキを調整してる。もちろん私も参加してるよ。

「ごめんなさい、由里さん。時間取っちゃって」

「いいんだよ、龍可。同じデュエリストとして、許せないからね」

「そうだね。子供を泣かせるなんて酷いよ」

アリスちゃんは相変わらず子供には甘いなあ。

「アリスお姉ちゃんもありがとう」

「どういたしまして」

あれ？そういえば、

「龍可はどうしてアリスちゃんのことをお姉ちゃんって呼んでるの

「？」

「えっと、アリスお姉ちゃんがそう呼んで欲しいって
流石アリスちゃん。」

「そうなんだね。ところでね、“レグルス”って龍可の精霊だよ
？」

「そうだよ。由里さんも見えるのよね？」

「見えるよ。私の精霊は“翼を織りなす者”のカレンだよ」

『紹介に預かりました、カレンと申します』

「うん。よろしくね」

『龍可様には以前よりお会いしたく思っていました。“エンシエン
ト・フェアリー”様をお救い頂き、感謝しております』

「ううん。貴女たちの世界を救えてよかったわ」

龍可は凄いんだね。

「でも、私一人の力じゃない。みんながいたからできたの」

『そうですね』

「私たちも一人じゃないよ。今度は私たちが精霊世界を救う番だからね」

「うん。私たちにできることがあれば何でも言ってるね」

「ありがとう、龍可」

良い娘だなあ。

『できたー！』

デッキができたみたいだね。

side out

放課後、オレは荒井先生に逢いに行った。

「私に何か用ですか？貴方のような高等部の、それも成績優秀な生徒として有名なリョウ君がわざわざ小等部に」

「いえ。小等部に素晴らしい先生がいらっしやるという話を聞きまして。是非オレにもご指導して頂きたいと思ひまして、小等部に来たんです。

荒井先生、オレと実技授業をしてくれませんか？」

「ムフフ、解りました。そこまで言うのなら、実技授業をしてあげましょう」

単純な人で助かるよ。

デュエル場に移動すると、アリスたちに龍可と龍亞のクラスの子た

ちが全員いた。もちろんあの娘も。

「そんなに特別授業が見たいのですねえ」

「そのようですね。さ、始めましょう」

お互いに距離をとった。

『今回は私たちの出番はなさそうだな』

「二人には近いうちに暴れてもらおうよ」

さてと、それでは、

『デュエル！』

「オレの先攻でいかせてもらいます。ドロー！ “おジャマ・ブルー” を守備表示で召喚」

DEF / 1000

「 “おジャマ” ！？どうして君がそんなクズカードを！？ 」

「クズカードなんてこの世には存在しませんよ」

「さては、そこにいる生徒の仕業ですね！」

「 「

「大丈夫だよ。怖がらないで」

「リヨウ君がきつと勝ってくれるよ」

「何のつもりですか？」

「別に、何でもありませんよ」

「そんなふざけたことをしておいてですか？」

「ふざけてなどいません。オレはこの世にクズカードなんて無いってことを証明しようとしてるだけです」

「いいでしょう！ただし、私が勝ったらその考えを改めて貰います
「！」

「解りました」

「それから、ふざけたことをした罰として、君が以前から断っているキングになって頂きます！」

「なんだよ、それ！」

「リヨウはキングになるのを嫌ってるのに」

「解りました。それでいいですよ」

「ムフフ、確かに言いましたからね」

そんなにオレをキングにしたいのか？

「オレはカードを2枚伏せて、ターンを終了します」

「私のターン！手札の“サンダー・ドラゴン”を捨て、デッキから“サンダー・ドラゴン”を2体手札に加えます。

“融合”を発動！手札の“サンダー・ドラゴン”2体を融合し、“双頭の雷龍”を融合召喚です！」

ATK/2800

「いいですか？こういう攻撃力の高いモンスターこそ、役に立つのです」

「授業はいいですよ。勝たなければ意味なんて無いですから」

「いいでしょう。“双頭の雷龍”で攻撃です！」

「“おジャマ・ブルー”が破壊された時、デッキから“おジャマ”を2体手札に加えることができます。

オレは“おジャマ・ブルー”と“おジャマ・レッド”を手札に加えます」

「そんなカードで何をするのか。ターン終了です」

「オレのターン！畏発動！“サンダー・ブレイク”！手札を1枚墓地に送り、“双頭の雷龍”を破壊します！」

「ぬっ」

「さらに墓地に送った“おジャマジック”の効果で、デッキからおジャマ・グリーン”、“イエロー”、“ブラック”を手札に加えます」

これで手札は十分。

「手札からフィールド魔法“おジャマ・カントリー”を発動します。場に“おジャマ”が存在する限り、モンスターの攻撃力と守備力を入れ替えます。

畏発動！“おジャマトリオ”！相手場に“おジャマトークン”を3体特殊召喚です」

DEF / 1000

「手札より“融合”発動！手札の“おジャマ”2体を融合して、“おジャマ・ナイト”を融合召喚！」

ATK / 0

「フィールド魔法の効果で、攻撃力と守備力が入れ代わります」

ATK / 2500

「さらに、このカードが存在する限り、相手のモンスターゾーンを

「二カ所使用不能にします！」

「なっ！？私のモンスターゾーンが全て埋まってしまったのでしょうか！？」

「どうですか？こういう闘い方もあるんですよ」

「ぬううっ！！」

「さらに“おジャマ・レッド”を召喚！」

ATK/1000

「このカードが召喚に成功した時、手札の“おジャマ”を可能な限り特殊召喚できます！」

手札3枚全ての“おジャマ・グリーン”、“イエロー”、“ブラック”を特殊召喚！」

ATK/1000

「いきます！“グリーン”、“イエロー”、“ブラック”で3体のトークンを攻撃！」

3体のトークンは攻撃力と守備力が入れ代わり、守備力0。楽に倒せる。

「トークンが破壊された時、300ポイントのダメージを受けてもらいます」

荒井 LP 3100

「“レッド”でダイレクトアタック！」

「ぬっ！」

荒井 LP 2100

「どうですか？自分がクズと呼んだカードにやられるんですよ？」

「ぬううっ！」

「この世にクズカードなんて無いんです。どんなカードでも組み合わせ次第でどこまでだっけて強くなるんです。

大事なのはそのカードを使うプレイヤーです。プレイヤーがどんなカードでも信じる心を持っていれば、カードたちも必ず応えてくれます」

少しは伝わったかな？

「これで終わりです！“ナイト”でダイレクトアタック！」

「うわあああっ！」

荒井 LP 0

「解って頂けましたか？」

「私が 間違っていました」

「間違いは正すことができます。これから、あの子たちをお願いします」

オレはそつとその場を離れた。

「リョウ〜!」

「勝ったよ、みんな」

みんな一斉に駆け寄ってきた。

「ありがとう、リョウ」

みんな思い思いのことを伝えてくれる。そして、あの娘が、

「あの、ありがとう」

「うん。どういたしまして。」

はい、君のデッキだよ

「うん」

「このカードたちのこと、信じてあげられるよね?」

「うん!」

笑顔で答えてくれた。よかったよかった。

後日、荒井先生は女の子に謝ったらしい。

そつえば、あの娘の名前聞いてないなあ。

第十六話：カード（後書き）

デュエル内容が激しく心配です。“おジャマトリオ”の意味が全くないですし。

次話から学園対抗戦の内容です。対抗戦は全部で五校なので、長くなりそうです。

それでは、グッチーでした。

第十七話：代表決定戦（前書き）

学園対抗戦の代表決定戦です。アニメの5D・SのWRGPと同じチーム戦でのデュエルになります。

この話から学園対抗戦が続きます。デュエルばかりになる予定です。
では、ごきげん。

第十七話：代表決定戦

あれから一週間。

今日はアカデミアの生徒全員がホールに集められた。小等部から高等部まで。

そう。今日は学園対抗戦の代表発表の日。みんなの前で校長先生が直々に発表するらしい。

オレはもちろん代表メンバーなんて知らないよ？オレだってアカデミアの生徒だからね。

小等部と中等部は代表にはなれないけど、応援には全員参加らしい。

一週間の実技デュエルが代表メンバーを決める参考資料になってるのはまず間違いないけど、どうなるかな。

校長先生がステージに立ち、いよいよ発表が始まる。

「それでは、来週の学園対抗戦の代表メンバーを発表するのじゃ！」

誰かな？

「まず一人目！高等部一年、武内由里！」

「は、はい！」

由里が慌ててステージに上がる。

「二人目！高等部一年、石井啓斗！」

「応よ！」

流石啓斗。全く動じないね。

「三人目！高等部一年、アリス・ルシエ！」

「は、はい！」

アリスも若干慌ててステージに上がる。

「最後に四人目！この者をチームリーダーに任命する！リョウ！」

「はい」

結局オレたち四人か。チームとしてはやりやすいけどね。

「以上この四名で」

「待って下さい！」

ホールの生徒が騒ぎ出した。一人の発言によって。

「全員一年じゃないですか！納得出来ません！」

「儂ら教師は実技講習や実技デュエルで最も良いと思われるメンバーを選出したつもりじゃが？」

「しかし！」

確かにアリスたちは実技デュエルでは負け無しの好成績。実技講習も問題無かったと思う。それでも一年だけなのは納得できないんだろうね。

「デュエルを申し込みます！こちらのチーム四人とそちらのチーム四人で対抗戦と同じルールでデュエルして、勝ったチームが代表になる！それで納得します！」

なるほどね。

「だそうじゃが、どうするかの？」

校長先生が困り気味の顔で尋ねてきた。

「いいんじゃないのか」

「その方が文句は無いですし」

「構いませんよ」

啓斗、由里、アリスの順に言う。

「だそうですよ」

「君たちがそう言うのならそうしようかの。ではこれより、代表決定戦を行う！」

全員コースに移動。オレたちはデュエルの準備。

「みんなのライディングスーツも板についてきたね」

オレと啓斗は違うけどね。

「そうかな？」

アリスは黒のライディングスーツを着てる。髪はツインテールに結んでる。

「じゃはは」

由里は白のライディングスーツを着てる。由里も髪をツインテールに結んでる。

「もう大分経つからな」

啓斗はオレと同じような黒のジャケットを着てる。

「順番はどうするの？」

先にルールを確認しようか。

チームは四人一組。ライディングデュエルのルールは変わらない。両チームの選手が一人ずつデュエルして、ライフが尽きたら次に交代する。ライフが尽きた時、デュエルはエンドフェイズになり、次の選手からターンが始まる。四人全員のライフが尽きたら敗北となる。

「俺が最初にいくぜ」

啓斗が一番か。

「アリスちゃん、次は私がいっていいかな？」

「うん。じゃあ私は由里の次だね」

由里が二番手、アリスが三番手。あれ？

「オレは？」

「リヨウは最後に決まってるんだろ」

「にははは。頼りにしてるんだよ、チームリーダー」

「そうだね。最後はリヨウがいいよ」

拒否権無しか。

「解ったよ。じゃ、いこうか」

全ての準備が整い、デュエル開始までもう少し。
ていうかコース、小さいのによく全生徒入ったね。

『では、これより代表決定戦を始めるのであります！』

教頭先生のアナウンスでデュエルが始まる。

『ライディングデュエル！アクセラレーション！』

side 啓斗

『ライディングデュエル！アクセラレイション！』

オレは隣の奴より一瞬早くスタートできた。

このまま第一コーナーをもらおう！

「よっしゃ！俺の先攻だ！」

「くっ！なかなかやるね」

ん？こいつ、どっかで。

「なあ、あんた誰だ？」

「僕は芳光誠一、ご存知ないかい？」

誰？

「解ってないようだね」

「悪いな」

「愛しの妹の敵打ちに来たのさ！」

あ。

「思い出した！あの馬鹿げたデュエルだろ！？」

「馬鹿げたデュエルとは失礼な！立派なLove Duelだったじゃないか！」

「で？リヨウに逆恨みでもしてんのか？」

「リヨウ君、彼の思い通りにはさせないよ！」

あいつは何も企んでねえと思うがな。

「無理な話だな。あんたは俺に負けるんだからよ！」

「なにを！？」

「始めるぜ！」

『デュエル！』

「向こうの一番手は芳光先輩だったんだね」

「啓斗君に任せておけば大丈夫だよ」

「確かにね」

「いくぜ！オレのターン、ドロー！“レベル・スティーラー”を準備表示で召喚！」

DEF / 0

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「僕のターン」

SP 1

「僕は“霞の谷の見張り番”を召喚！」

“霞の谷” 風使いか！

「バトル!“レベル・ステイラー”を攻撃」

「チツ」

「カードを1枚伏せて、ターン終了」

「俺のターン」

SP 2

「永続罫“超古代生物の墓場”を発動！このカードがある限り、場の特殊召喚したレベル6以上のモンスターは攻撃出来ず、効果を発動出来ない」

俺にとっては厄介なカードだな。だが、

「手札より“ジャンク・フワード”を特殊召喚！」

ATK / 900

「このカードは相手場のみモンスターが存在する場合、特殊召喚
することが出来る！」

さらに“ネジマキの見習い戦士”召喚！」

ATK / 500

「レベル3の“ジャンク・フォワード”に、レベル2の“ネジマキ
の見習い戦士”をチューニング！

シンクロ召喚！傷だらけの戦士！“スカー・ウォリアー”！」

ATK / 2100

「“スカー・ウォリアー”はレベル5、永続罫の効果は受けねえ！
さらに墓地の“レベル・ステイラー”の効果発動！“スカー・ウ
オリアー”のレベルを1減らすことで特殊召喚するぜ！」

ATK / 600

「バトル！“スカー・ウォリアー”で“霞の谷の見張り番”を攻撃
！」

「くっ」

芳光誠一 LP 3400

「“レベル・ステイラー”でダイレクトアタック！」

「くあっ」

芳光誠一 LP 2800

「ターンエンドだ」

押してるな、イけるぜ！

「僕のターン」

SP 3

「墓地の“霞の谷の見張り番”をゲームから除外し、“シルフィード”を特殊召喚」

ATK/1700

「僕は“シルフィード”をリリースして、“風帝ライザー”を召喚！」

ATK/2400

「このカードが召喚に成功した時、場のカードを1枚デッキの一番上に戻す！」

“スカー・ウォリアー”をデッキに戻す！」

「畏発動！“シフトチェンジ”！効果の指定を別のモンスターに変更する！“レベル・ステイラー”に変更！」

“レベル・ステイラー”が俺のデッキの一番上に戻る。

「ならば戦闘で破壊するまで！ “風帝ライザー” で攻撃！」

「チッ」

啓斗 LP 3700

「残念だったな！ “スカー・ウォリアー” は不退転の戦士！1ターンに一度まで戦闘では破壊されねえ！」

「くっ、僕はカードを1枚伏せて、ターン終了」

「俺のターン」

SP 4

「手札より“SP ジャンク・ハリケーン”を発動！SPカウンターが4以上ある時、手札を1枚墓地に送り、場の魔法・罫カードを全て破壊する！」

「なにっ!?!」

これで厄介な永續罫は消えたぜ！

「“クイック・スパナイト”を召喚！」

ATK/1000

畳み掛けてやる！

「レベル4の“スカー・ウォリアー”に、レベル3の“クイック・スパナイト”をチューニング!

受け継がれし魂が、光となって駆け昇る!

シンクロ召喚! 光来せよ!“ライトニング・ウォリアー”!

ATK / 2400

「シンクロ素材となった“クイック・スパナイト”の効果発動!“風帝ライザー”の攻撃力を500下げる!”

ATK / 1900

「くそっ!”

「ライトニング・ウォリアー”で攻撃! ライトニング・パニッシュヤー!”

「くっっ!”

芳光誠一 LP 2300

「さらに“ライトニング・ウォリアー”が戦闘でモンスターを破壊した時、手札1枚につき400のダメージを与える!

俺の手札は1枚だ!”

芳光誠一 LP 1900

「カードを1枚伏せる。そして“ライトニング・ウォリアー”のレベルを1下げ、墓地の“レベル・ステイラー”を召喚して、ターンエンドだ!”

DEF / 0

「啓斗が押ししてるね」

「うん！イケるよ！」

「（ただ、これで啓斗の手札は無くなった。まだまだ油断できる状況じゃない）」

「僕のターン」

SP 5

「僕は“霞の谷の雷鳥”を召喚」

ATK / 1100

「さらに“霞の谷の雷鳥”を手札に戻し、“ミスト・コンドル”を特殊召喚」

DEF / 400

「手札に戻った“霞の谷の雷鳥”の効果発動！場から手札に戻ったこのカードを特殊召喚出来る」

DEF / 700

「僕はこれでターンエンド」

守りを固めてきたか。

「俺のターン」

SP 6

「バトル!“ミスト・コンドル”に攻撃だ！ライトニング・パニッシャー！」

「くっ」

「モンスターを破壊したことで手札1枚分の400のダメージだ」

「くっっ！」

芳光誠一 LP 1500

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

「僕のターン」

SP 7

「僕は“霞の谷の戦士”を召喚！」

ATK / 1700

チューナー。シンクロ狙いか？

「僕のエースモンスターだ。

レベル3の“霞の谷の雷鳥”に、レベル4の“霞の谷の戦士”をチユーンング！

シンクロ召喚！“霞の谷の雷神鬼”！」

ATK/2700

「バトル！“雷神鬼”で“ライトニング・ウォリアー”を攻撃！」

「ぐあつ！“ライトニング・ウォリアー”！」

啓斗 LP 3500

「まだまだ！罨カード“時の機械 タイムマシン”発動！バトルで破壊されたモンスターを特殊召喚する！

戻って来い！“ライトニング・ウォリアー”！」

ATK/2400

「しぶといね。僕はカードを1枚伏せ、ターンエンド」

「俺のターン」

SP 8

「君はしぶとい。が、ここで“ライトニング・ウォリアー”には退場して貰おう。」

罨カード“強制脱出装置”を発動!“ライトニング・ウォリアー”を手札に戻す!”

「使うタイミングを間違えたな!罨発動“シンクロ・アウト”!場のシンクロモンスターを手札に戻し、素材となったモンスターを特殊召喚する!

“ライトニング・ウォリアー”をエクストラデッキに戻し、墓地から“スカー・ウォリアー”と“クイック・スパナイト”を特殊召喚!”

ATK/2100

ATK/1000

「くっ!本当にしぶといね!”

悪かったな。だが、この勝負は貰ったぜ!

「手札より“ミドル・シールド・ガードナー”を召喚!”

ATK/100

「レベル4の“ミドル・シールド・ガードナー”に、レベル3の“クイック・スパナイト”をチューニング!

もう一度来い!“ライトニング・ウォリアー”!”

ATK/2400

「シンクロ素材となった“クイック・スパナイト”の効果で“霞の谷の雷神鬼”の攻撃力を500下げる!”

ATK / 2100

「くっ、くそっ」

「いくぜ！“ライトニング・ウォリアー”で攻撃！ライトニング・パニッシャー！」

「くあっ！」

芳光誠一 LP 1200

「とどめだ！“スカー・ウォリアー”でダイレクトアタック！」

「ぐわああっ！」

芳光誠一 LP 0

「くっ、敵は打ってあげられなかったか」

「出直してきな」

ライフが尽きたことでピットに戻っていく。次は誰だ？

コースを走っていると、俺の前にDホイールが出てきた。あいつが次の相手か。

「私の名は伊藤拓也。三年だ。よろしく」

「ああ。早速始めようぜ」

『デュエル!』

「私のターン」

SP 9

「私は“アサルト・ガンドッグ”を守備表示で召喚」

DEF / 800

「カードを2枚伏せ、ターンを終了する」

「伊藤拓也さん。多分聞いたことあるよ。確かセキュリティに勤める人の息子だって」

「ふえ？何か関係あるの？」

「セキュリティの息子ならカードもセキュリティのデッキと似てるかもしれない。アリスが危惧してるのはそういうことだよ」

「俺のターン」

SP 10

「“スピードワールド2”の効果発動！SPカウンターを7つ取り除き、カードを1枚ドロウする」

啓斗 SP 3

「バトル！ “ライトニング・ウォリアー” で攻撃！」

「畏発動。 “セキュリティ・ボール”。 攻撃モンスターを守備表示にする」

DEF / 1200

「チツ！ならば “スカー・ウォリアー” で攻撃だ！」

「 “アサルト・ガンドッグ” が破壊された時、デッキから “アサルト・ガンドッグ” を特殊召喚する」

DEF / 800

面倒だな。

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「私のターン」

啓斗 SP 4

伊藤拓也 SP 11

「 “スピードワールド2” の効果発動。 SPカウンターを10個取り除き、 “スカー・ウォリアー” を破壊する」

伊藤拓也 SP 1

「スカー・ウォリアー」!

くっ、 “スカー・ウォリアー” の効果は攻撃対象を他のモンスターに出来ない効果もある。 “ライトニング・ウォリアー” を護るつもりだったんだがな。

「私は“チェイス・スカッド”を召喚」

ATK / 1400

「アサルト・ガンドッグ”を攻撃表示に」

ATK / 1200

「バトル、 “チェイス・スカッド” で “ライトニング・ウォリアー” を、 “アサルト・ガンドッグ” で “レベル・ステイラー” を攻撃」

「くっっ!」

これで俺は伏せカード1枚と手札1枚だけか。

「啓斗は少し飛ばし過ぎたかな」

「ふえ?どっいつこと?」

「デュエルで手札は重要だよな。 啓斗は一番手の芳光先輩の時から

手札が無かった。啓斗自身今の状況は辛いだろうね」

「ふええ。難しいね」

「二人連続で相手にするのは難しいってことかな」

「アリスの言う通りだね。啓斗がここからどれだけ粘って由里に繋げるか、だね」

「俺のターン」

啓斗 SP 5

伊藤拓也 SP 2

これで手札は2枚 か。

「手札より“ジャンク・ブレード”を召喚！」

ATK / 1800

「墓地に“ジャンク・フォワード”が存在することで、攻撃力が400アップする！」

ATK / 2200

「バトル!“チェイス・スカッド”を攻撃！」

「うっ」

伊藤拓也 LP 3100

「ターンエンドだ」

「私のターン」

啓斗 SP 6

伊藤拓也 SP 3

「手札よりチューナーモンスター“トラパー”を召喚」

ATK/600

シンクロ召喚か！

「レベル4の“アサルト・ガンドッグ”に、レベル2の“トラパー”をチューニング。

シンクロ召喚。いでよ。“ゴヨウ・ガーディアン”」

ATK/2800

「さらに畏発動。“強化蘇生”。墓地のレベル4以下のモンスターのレベルを1上げて特殊召喚する。

“チェイス・スカッド”を特殊召喚」

ATK/1400

「バトル。“ゴヨウ・ガーディアン”で“ジャンク・ブリーダー”を攻撃」

「ぐあつ！」

啓斗 LP 2900

「モンスターを破壊したこの瞬間、“ゴヨウ・ガーディアン”の効果発動。破壊したモンスターを私の場に守備表示で特殊召喚出来る」

DEF / 1000

チツ、“ジャンク・ブレード”。

「さらに“チェイス・スカッド”でダイレクトアタック」

使うしかなさそうだな。

「畏発動！“調和の結晶”！俺の墓地のシンクロモンスターとそれ以外のモンスターを1体ずつゲームから除外し、墓地のシンクロモンスターを特殊召喚する！

“スカー・ウォリアー”と“ネジマキの見習い戦士”をゲームから除外するぜ。

雷電の如く駆け抜ける！“ライトニング・ウォリアー”！」

ATK / 2400

「攻撃をキャンセルする」

「まだ終わらねえ！“調和の結晶”で復活したモンスターの攻撃力の半分のダメージを与える！」

「くあっ」

伊藤拓也 LP 1900

だがこれで俺の切り札は使ったと言える。ライフを削ったとはいえまだ“ゴヨウ・ガーディアン”がいるしな。

「私はカードを1枚伏せ、ターン終了」

「俺のターン」

啓斗 SP 7

伊藤拓也 SP 4

「バトル！ “ライトニング・ウォリアー” で “チェイス・スカッド” を攻撃！ ライトニング・パニッシャー！」

「くっ」

伊藤拓也 LP 1000

「 “ライトニング・ウォリアー” の効果！ 俺の手札で800ポイントのダメージだ！」

「くっっ」

伊藤拓也 LP 200

「私は畏を発動する。 “オプションハンター” 。 モンスターが破壊された時、そのモンスターの元々の攻撃力分のライフを回復する」

伊藤拓也 LP 1600

後一步だったんだがな。

「俺はカードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

これで俺の手札は再び無くなった。どこまでやれるか、だな。

「私のターン」

啓斗 SP 8

伊藤拓也 SP 5

「ジャンク・ブレイダー」を攻撃表示に変更する」

ATK/1800

「ゴヨウ・ガーディアン」で「ライティング・ウォリアー」を攻撃」

「ぐっ！」

啓斗 LP 2500

「ゴヨウ・ガーディアン」の効果発動」

「させるか！罠カード“くず鉄の罠”！相手モンスターの効果無しに、再びセットされる」

「なるほど。ならば“ジャンク・ブレード”でダイレクトアタック」

「ぐぐっっっ！」

啓斗 LP 700

チツ、まさか“ジャンク・ブレード”に攻撃されるなんざ考えたこともなかったぜ。だが！

「バトルフェイズ終了時に畏発動！“受け継がれる魂”！破壊されたシンクロモンスターと同じレベルの通常モンスターをデッキから特殊召喚する！

疾風の如く駆け抜ける！“暗黒騎士ガイア”！」

ATK/2300

だが俺のライフはライディングデュエルのセーフティラインを越えちまった。奴の手札は4枚ある。その中に“SP”があれば俺は負ける。

「良かったな。私の手札に“SP”は無い」

望みは繋がった訳か。

『首の皮一枚で助かったじゃねえか』

「まあな」

カカシとせめて“ゴヨウ・ガーディアン”だけは消してみせる！

「私はカードを3枚伏せて、ターンを終了する」

「俺のターン！」

啓斗 SP 9

伊藤拓也 SP 6

来たか、最後に意地見せてやるぜ！

「スピードワールド2”の効果発動！SPカウンターを4つ取り除き、手札の“SP”1枚につき、相手プレイヤーに800ポイントのダメージを与える！」

啓斗 SP 5

「畏カード“ダメージ・ポラリライザー”。効果ダメージを無効にして、お互いのプレイヤーはカードを1枚ドロウする」

チツ、このターンの勝ちは無くなっちまったか。
だが、“ダメージ・ポラリライザー”は助かったぜ！

「“SP 漲る宝札”！SPカウンターが5以上ある時、お互いの手札1枚につき、モンスター1体の攻撃力を500アップする！」

「私の手札は2枚」

「俺の手札は1枚！合計3枚！“ガイア”の攻撃力は1500アップ！」

「いけ!“ガイア”!“ゴヨウ・ガーディアン”に攻撃だ!スパイラルセイバー!”」

「くうっつ。でも罨カード“ガード・ブロック”発動。戦闘ダメー
ジを0にしてカードを1枚ドローする」

上手く防ぎやがったか。

「だが、“ゴヨウ・ガーディアン”は破壊したぜ!”」

「ならば“ガイア”にも倒れて貰う。罨カード“道連れ”。私のモ
ンスターが墓地に送られた時、場のモンスター1体を破壊する。

“暗黒騎士ガイア”を選択」

チツ、俺に防ぐ手はねえ。

『ここまでみてえだな』

「ああ」

お互いにな。

『だが先鋒の役目は十分果たした筈だ。後は由里殿に出来る限りの
ことをしてやるんだな』

「解ってんよ」

カカシが場から姿を消した。

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「私のターン」

啓斗 SP 6

伊藤拓也 SP 7

「私は“サーチ・ストライカー”を召喚」

ATK / 1600

「バトル。“サーチ・ストライカー”でダイレクトアタック」

「ぐあああつー！」

啓斗 LP 0

side out

啓斗のライフが0になったことで、啓斗がピットに戻って来た。

「悪いな。俺はここまでだ」

「うっん。啓斗君凄いや」

「“ゴヨウ・ガーディアン”も倒したしね」

「ま、後は任せるぜ」

「由里。啓斗が残してくれた2枚のカード、有効に使ってあげて前のプレイヤーが使ってたカードは次のプレイヤーに引き継がれるからね。」

「うん！いつてくるね！」

「がんばって！由里！」

さて、ライフ的にはオレたちが有利だけど油断するには早い。これからだね。

第十七話：代表決定戦（後書き）

一つだけチーム戦でのルールを付け加えます。

前のホイーラーから引き継がれるのは場上に残っていたカードのみです。墓地のカードは引き継がれません。

アリスと由里のライディングスーツはそれぞれのバリアジャケットを想像して頂ければ良いと思います。もちろんモデルのキャラのですね。

次話で代表決定戦は終わる予定です。その後は対抗戦に入るつもりです。

それでは、グッチーでした。

第十八話：代表決定（前書き）

はい。まさにしく題名通りの内容です。

では、どうぞ。

第十八話：代表決定

由里が二番手としてスタートした。

「どうだった？啓斗」

「何がだよ？」

「チーム戦の感想、かな」

「難けえな。はっきり言って二人目を相手にするのはキチィ」

「でも啓斗はライフを半分以上減らして、しかも相手のエースモンスターまで倒したんだよ。上出来じゃないかな？」

「さあな。だが、まだデュエルは終わってねえぜ」

確かにね。がんばれ、由里。

side 由里

私はスタートして、伊藤先輩の前に出た。

「次は君か」

「よろしくお願いします」

『デュエル！』

「私のターン、ドロー」

由里 SP 7

伊藤拓也 SP 8

「手札から“勝利の導き手フレイヤ”を召喚するよ」

ATK / 100

「このカードが場にいる限り、私の天使の攻撃力と守備力は400ポイントアップするよ」

ATK / 500

「さらに“SP サンクチュアリ・フィールド”発動！SPカウンターが5個以上ある時、私の場にレベル1の天使がいる場合、レベル5か6の天使を特殊召喚できる。

私の場にはレベル1の“フレイヤ”がいるよ。よって手札から“力天使ヴァーチ”を特殊召喚！」

ATK / 2200

「“フレイヤ”の効果で攻撃力アップ」

ATK / 2600

「バトル！“ヴァーチ”で“ジャンク・ブリーダー”を攻撃！」

「くっ」

伊藤拓也 LP 800

後800。だけど私の手札に“SP”は無いんだよね。

「私はカードを1枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン」

由里 SP 8

伊藤拓也 SP 9

「私は“ジツテ・ナイト”を守備表示で召喚」

DEF/900

「“サーチ・ストライカー”を守備表示に」

DEF/1200

「カードを2枚伏せて、ターンを終了」

「私のターン」

由里 SP 9

伊藤拓也 SP 10

「“コーリング・ノヴァ”を召喚」

ATK/1800

(フレイヤの効果+)

「バトル!“コーリング・ノヴァ”で攻撃!」

「畏カード“進入禁止!No Entry!!”を発動。全てのモンスターは守備表示になる」

DEF / 2200

DEF / 1200

DEF / 500

防がれたね。

「私は“ヴァーチ”を攻撃表示にして、ターンエンド」

ATK / 2600

「私のターン」

由里 SP 10

伊藤拓也 SP 11

「私は“スピードワールド2”の効果を発動する。SPカウンターを4つ取り除き、手札の“SP”1枚につき800のダメージを与える。

私の手札には1枚ある。よって800のダメージ」

伊藤拓也 SP 7

「やっ…」

由里 LP 3200

「さらに“SP スピードストーム”を発動。SPカウンターが3つ以上ある時、1000ポイントのダメージを与える」

「きゃあ！」

由里 LP 2200

一気に削られちゃったよ。

「私は“ジュツテ・ナイト”の効果を発動し、“カ天使ヴァーチ”を守備表示にする」

「畏カード“くず鉄の畏”！モンスターの効果を無効にするよ」

「カウンター畏“ギャクタン”発動。畏の発動を無効にし、デッキに戻す」

啓斗君が残してくれたカードは防がれちゃったか。一度使ってたからね。

「“ジュツテ・ナイト”の効果は有効」

DEF/2200

「私はレベル4の“サーチ・ストライカー”に、レベル2の“ジュツテ・ナイト”をチューニング。

シンク口召喚。“大地の騎士ガイアナイト”」

ATK / 2600

「ガイアナイト”で“ヴァーチ”を攻撃」

うーん、上級モンスターだったんだけどな。

「私のターンは終わりだ」

「私のターン」

由里 SP 11

伊藤拓也 SP 8

“SP”を引いたら終わりなんだけど、ドローカードは違うカードだね。でも、このターンで終わりにするよ！

「啓斗君が残した罫カード“スピードリターン”を発動！SPカウンターを3つ取り除き、墓地の“SP”を発動することができる！墓地の“SP サンクチュアリ・フィールド”を発動！レベル1の“フレイヤ”がいることで、手札から“天空騎士パーシアス”を特殊召喚！」

ATK / 2300

由里 SP 8

「さらに“サニー・ピクシー”を召喚」

ATK / 700

「いくよ！レベル4の“コーリング・ノヴァ”に、レベル1の“サニ・ピクシー”をチューニング！

天空より来たる聖なる杖。全てを打ち抜く光を放て！

シンクロ召喚！天よりの力！“セイクリッド・ワンド”！」

ATK / 1900

私の場に天から白い杖が降りてきた。

「“サニ・ピクシー”の効果。このカードが光属性シンクロモンスターになった時、1000ポイントのライフを回復するよ」

由里 LP 3200

「シンクロ召喚した割には攻撃力1500か？“フレイヤ”で強化されてはいるが、大したことはない」

「違うよ。“セイクリッド・ワンド”は単体で闘うカードじゃない。このカードは天使に力を与えるカードだよ！

“セイクリッド・ワンド”の効果！天使の装備カードとなって、攻撃力を1500ポイントアップさせる！

私は“天空騎士パーシアス”に装備！」

ATK / 3800

「な に」

「“天空騎士パーシアス”で“大地の騎士ガイアナイト”を攻撃！バスター・シュート！」

“セイクリッド・ワンド”から極光が打ち出され、“ガイアナイト”を包み込んだ。

伊藤拓也 LP 0

「いつ見ても爽快だよね、あれ」

「喰らった方は堪らねえだろうがな」

「あのパターンは由里の十八番だからね」

「これで二人目、後二人だね」

啓斗君が残してくれたお陰で楽に勝てたね。後二人、次のアリスちゃんのために私ができるだけ有利にしないと。

私の前に次のプレイヤーが現れた。

「次は俺様、足立洋介が相手をしてやるぜ」

打って変わった人が来たね。伊藤先輩はクールだったけど、この人はなんだか偉そうだなあ。

「因みに俺様は三年、お前より年上だからな」

「えっと、よろしく願います」

「だいたい、こんなデュエルしなくても俺様たち三年の方が偉いんだよ。なのにあのリオウとかいう奴が」

「リオウ君は悪くないよ！リオウ君は経験豊富で強いんだから選ばれておかしくないよ！」

「ふん！俺様が化けの皮を剥いでやるぜ」

「させないよ！私が倒すんだから！」

『デュエル！』

「俺様のターン、ドロー」

SP 9

「“D HERO ディフェンドガイ”を守備表示で召喚だぜ」

DEF / 2700

「カードを2枚伏せて、ターン終了だぜ」

「私のターン」

SP 10

「永続罫“グリッド”発動だぜ！カード効果でドローを行ったプレイヤーはターン終了時にその枚数×500ポイントのダメージを受

けるぜ。

そして“ディフェンドガイ”の効果、相手ターンのスタンバイフェイズに相手はカードを1枚ドロウするぜ！」

あのモンスターがいる限り、私は毎ターンダメージを受けることになる。

「だったらあのモンスターを倒すまでだよ！」

バトル!“天空騎士パーシアス”で攻撃！バスター・シュート！」

「ぐっ！」

足立洋介 LP 2900

「何故俺様のライフが？」

「“天空騎士パーシアス”は貫通ダメージを与えるよ！さらに、このカードが戦闘ダメージを与えたことで、カードを1枚ドロウするよ」

「生意気な」

「私はカードを1枚伏せて、ターンエンド」

「エンドフェイズ、“グリッド”の効果で1000ポイントのダメージだぜ！」

由里 LP 2200

「俺様のターン」

SP 12

「スピードワールド2”の効果発動だぜ！SPカウンターを10個取り除き、場のカード1枚を破壊するぜ！

“天空騎士パーシアス”を破壊するぜ！」

足立洋介 SP 1

「セイクリッド・ワンド”の効果発動！装備モンスターが破壊される時、このカードを破壊するよ」

ATK/2300

「俺様は“電動刃虫”を召喚だ」

ATK/2400

レベル4で攻撃力2400。

「バトル！“天空騎士パーシアス”を攻撃だぜ！」

「くっっ！」

由里 LP 2100

「“電動刃虫”がバトルした時、相手プレイヤーはカードを1枚ドローするぜ！」

くっ。。

「俺様はカードを1枚伏せる。そしてエンドフェイズ、“グリード”の効果が発動するぜ！」

「畏カード“砂塵の大竜巻”を発動するよ。“グリード”を破壊する」

「甘いぜ！カウンター畏“魔宮の賄賂”！相手の魔法・畏の発動を無効にし、相手はカードを1枚ドロウするぜ！」

「そんな」

これで私がドロウしたカードは2枚。

「“グリード”のダメージを受けて貰うぜ！」

「きゃあー！」

由里 LP 1100

「くっつ、私のターン！」

由里 SP 12

足立洋介 SP 2

ドロウカードは カレン！

『由里、いつもの落ち着きがありません。いかがなさいましたか？』

「あの人は私の友達を馬鹿にしたの！偉そうにするのは構わないけ

ど、それだけは 「

『許せない、という訳ですね』

「うん。だから 「

『勝ちたいという思いも解ります。ですが、冷静さを失い、負けてしまえば、それこそ思う壺です。逆に友達であるチームメイトに迷惑をかけますよ?』

カレンの言う通りだなあ。冷静にならなくちゃいけない。

「ありがとう、カレン。私に、力を貸して 「

『はい』

いくよ!

「手札から “SP サモン スピイダー” を発動! SPカウンターが4つ以上ある時、手札からレベル4以下のモンスターを特殊召喚できる!

“ホーリーフレーム”を特殊召喚! 「

ATK/1900

「 “スピードワールド2” の効果発動! スピードカウンターを10個取り除くことで、“グリード”を破壊するよ! 「

由里 SP 2

「チツ！」

「ホーリーフレーム”は光属性通常モンスターのリリース素材となる時、2体分のリリース素材となるよ！」

“ホーリーフレーム”を2体分のリリースとして、“翼を織りなす者”をアドバンス召喚！」

ATK/3150

『さあ、いきましょう』

「バトル！“翼を織りなす者”で“電動刃虫”を攻撃！ホーリースター！」

「くあっ！」

足立洋介 LP 2150

「やっってくれるぜ！」

よし、次のターンで決めるよ！

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「俺様のターン」

SP 3

「“悪魔の調理師”を守備表示で召喚」

DEF / 1000

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン！」

SP 4

「次元合成師”を召喚」

ATK / 1700

「バトル！ “次元合成師”で攻撃！」

これで相手のモンスターはいない！

「“翼を織りなす者”でダイレクトアタック！」

「ハーツハツハ！最後に勝つのはこの俺様だ！

畏発動！ “ディメンション・ウォール”！この戦闘ダメージは相手プレイヤーが受ける！」

じゃあ私のライフは 。 だったら！

「畏発動！ “ディバインプラスター”！ “翼を織りなす者”の攻撃力分のダメージを与える！」

「な、なにー！？」

これで相打ち。これで良かったかな？

由里 LP 0

足立洋介 LP 0

side out

「お疲れ様、由里」

由里がピットに戻って来た。

「うん。相打ちになっちゃった」

「気にしないで、由里。後は任せて」

アリスは既にスタンバイしてる。

「向こうは後一人か。二人とも、頼むぜ」

「私のカード、機会があれば使ってね」

「うん。ありがとう。よろしくね、カレン」

『こちらこそ、よろしくお願いいたします』

「アリス」

「なに？リョウ」

「オレまで回す必要はないからね」

「ふふ、がんばる」

アリスがスタートした。

side 由里

私がピットからスタートするのとはほぼ同時に、最後の人が出て来て、私と並んだ。

「やはり強いな。お前たちは」

「ありがとうございます」

この人は多分、異議を出した本人だね。

「オレはまだ諦めてはいない。二人倒せばいいだけだ」

確かに。でも私はリヨウまで回すつもりはない。

「始めるか。オレは久保田秀二。よろしく」

「アリス・ルシエです。いきます！」

『デュエル！』

「オレのターン！」

SP 5

「手札から“バイス・ドラゴン”を特殊召喚！」

ATK/1000

「このカードは相手場のみモンスターが存在する時、特殊召喚できる。ただし、攻撃力、守備力は半分になる。続いて、“ダーク・リゾネーター”を召喚！」

ATK/1300

このパターンはジャックさんお得意の
レベル8モンスターのシンクロ召喚！

「いくぞ！レベル5の“バイス・ドラゴン”に、レベル3の“ダーク・リゾネーター”をチューニング！

シンクロ召喚！深き闇より現れよ！“ダークエンド・ドラゴン”！」

ATK/2600

いきなりレベル8のシンクロ召喚。でも私の場には由里が残してくれたカレンがいる。攻撃力はカレンの方が高い。だけど、

「“ダークエンド・ドラゴン”の効果発動！」

やっぱり、特殊効果があるよね。

「攻・守ともに500ポイント下げること、相手モンスター1体を墓地に送る！」

“翼を織りなす者”を墓地に送らせて貰う！」

ATK / 2100

『申し訳ありません。お役に立てませんでした』

「ううん。カレンがいなかったら、もっと厳しかったよ。ゆっくり休んでね」

『後はお願いいたします』

カレンが消えていった。

「バトル！ “ダークエンド・ドラゴン” で “次元合成師” を攻撃だ！」

「きゃ！」

アリス LP 3600

「オレはカードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「私のターン」

SP 6

由里のお陰でダメージは最低限だし、次の展開に役立つカードも残してくれてた。

「私は由里が残してくれた畏カード “エンジェル・チェンジ” を発動！場の天使1体をリリースして、手札からレベル4以下のモンス

ターを特殊召喚できる。

“勝利の導き手フレイヤ”をリリースして、“デルタフライ”を特殊召喚！」

ATK / 1500

「さらに“ランサー・ドラゴニユート”を召喚」

ATK / 1500

「レベル4の“ランサー・ドラゴニユート”に、レベル3の“デルタフライ”をチューニング！」

煌めきたる稲妻よ、轟く雷鳴と共に姿を現せ！

シンクロ召喚！疾風迅雷！“ライトニング・ドラグーン”！」

ATK / 2500

「シンクロ召喚。流石だな」

「バトル！“ライトニング・ドラグーン”で“ダークエンド・ドラゴン”を攻撃！サンダー・ストリーム！」

「畏発動！“シンクロ・バック”！自分場のシンクロモンスターをエクストラデッキに戻す！」

「えッ！？」

そんなことしたら、攻撃が直接通るよ？

「くっ！」

久保田秀二 LP 1500

場に歪みが生じた。

「これって？」

「オレは手札からこのモンスターを召喚する！“冥府の使者ゴーズ”！」

「っ！？」

しまった！あのモンスターだったなんて。

「“冥府の使者ゴーズ”は自分場上にカードが何もない時にダメージを受けた時、特殊召喚することができる！
そしてダイレクトアタックでダメージを受けた場合、“冥府の使者カイエントークン”を特殊召喚する！このトークンの攻撃力と守備力は、受けたダメージと同じ数値になる！」

ATK/2500

一気に形勢逆転だね。

「私はカードを1枚伏せて、ターンエンド」

「オレのターン！」

SP 7

「このターンのスタンバイフェイズ、“シンクロ・バック”の効果で戻った“ダークエンド・ドラゴン”は場に戻る！」

くるね。

「“ダークエンド・ドラゴン”の効果発動！攻守を500下げ、“ライトニング・ドラグーン”を墓地に送る！」

「躲して！“ライトニング・ドラグーン”！」

“ライトニング・ドラグーン”が襲ってきた闇を躲した。

「なんだと!？」

「“ライトニング・ドラグーン”は1ターンに一度、対象となった効果を無効にできるよ！」

「ならばバトルだ!“冥府の使者ゴーズ”で攻撃だ！」

「私は由里が残したもう1枚のカード、“閃光のバリア シャイニング・フォース”発動！相手場に3体以上攻撃表示のモンスターがいる時に攻撃してきた時、相手場の攻撃表示モンスターを全て破壊する！」

「なっ!？」

これで相手モンスターは全て消えるね。ありがとう、由里。

「チッ！オレは“シャインエンジェル”を守備表示で召喚」

DEF / 800

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「私のターン」

SP 8

“スピードワールド2”の効果を使えば勝てるけど、

「スピードワールド2”の効果発動！SPカウンターを4つ取り除き、手札の“SP”1枚につき、800ポイントのダメージを与える！」

アリス SP 4

「罠カード“エネルギー吸収板”発動！カード効果でダメージを受ける時、ダメージを無効にし、無効にした数値分のライフを回復する！」

久保田秀二 LP 2300

やっぱり、そう上手くはいかないね。

「バトル！“シャインエンジェル”を攻撃！サンダー・ストリーム！」

「“シャインエンジェル”が戦闘で破壊された時、デッキから攻撃力1500以下の光属性モンスターを攻撃表示で特殊召喚できる。オレは“シャインエンジェル”を特殊召喚」

ATK / 1400

「私はカードを2枚伏せて、ターンエンド」

「オレのターンだ」

アリス SP 5

久保田秀二 SP 9

「オレは“スピードワールド2”の効果で、SPカウンターを7個取り除き、カードを1枚ドローする」

久保田秀二 SP 2

「オレは“復讐の女戦士ローズ”を召喚する」

ATK / 1600

またくるね。シンクロ召喚だね。

「レベル4の“シャインエンジェル”に、レベル4の“復讐の女戦士ローズ”をチューニング！

シンクロ召喚！輝きを放て！“ライトエンド・ドラゴン”！」

ATK / 2600

「いくぞ！“ライトエンド・ドラゴン”で“ライトニング・ドラゴン”を攻撃！」

「罨カード“攻撃の無力化”！攻撃を無効にして、バトルフェイズを終了させる！」

これで“ライティング・ドラグーン”は護れた。

「やるな。オレはカードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「私のターン」

アリス SP 6

久保田秀二 SP 3

「私は“ライティング・ドラグーン”のもう一つの効果を発動するよ。“ライティング・ドラグーン”は攻撃力を1000にすることでダイレクトアタックができる！」

「くっ！」

「バトル！“ライティング・ドラグーン”でダイレクトアタック！」

「くあっ！」

久保田秀二 LP 1300

「私はカードを1枚伏せて、ターン終了」

「オレのターン！」

アリス SP 7

久保田秀二 SP 4

「手札より“SP エンジェルバトン”発動！SPカウンターが2つ以上ある時、デッキからカードを2枚ドロし、手札を1枚捨てる。

永続罠“リミット・リバーズ”発動！墓地から攻撃力1000以下のモンスターを特殊召喚する！

“デッド・ガードナー”を特殊召喚！」

ATK/0

「さらに“霞の谷の戦士”を通常召喚！」

ATK/1700

まさか ！

「いくぞ！レベル4の“デッド・ガードナー”に、レベル4の“霞の谷の戦士”をチューニング！

シンクロ召喚！再び深き闇より現れよ！“ダークエンド・ドラゴン”！」

ATK/2600

やっぱり、2体目 ！

「“ダークエンド・ドラゴン”の効果発動！攻守を500下げ、“ライトニング・ドラゴン”を墓地に送る！」

ATK/2100

「“ライトニング・ドラグーン”の効果により無効！」

どうして無駄に攻撃力を下げようなことを？

「バトルだ！“ライトエンド・ドラゴン”で“ライトニング・ドラグーン”を攻撃する！」

「くっ」

「そして“ライトエンド・ドラゴン”の効果発動！バトルする時、攻守を500下げることによってバトルするモンスターの攻守を1500下げる！」

ATK / 2100

ATK / 1000

「っー」

しまった！これが狙いだっただんだ！

「いけ！“ライトエンド・ドラゴン”！」

「きゃあっー！」

アリス LP 2500

「さらに“ダークエンド・ドラゴン”でダイレクトアタック！」

「その前に畏発動！“竜の巣窟”！私のドラゴンが破壊された時、同じレベルのドラゴンを手札から特殊召喚できる！」

手札から“真紅眼の黒竜”を特殊召喚！」

ATK/2400

“ライトニング・ドラグーン”は倒されちゃったけど、シンを召喚できたね。

「攻撃は出来ないな。カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「私のターン！」

アリス SP 8

久保田秀二 SP 5

「“スピードワールド2”の効果で、SPカウンターを4つ取り除き、手札の“SP”1枚につき800ポイントのダメージを与える！」

アリス SP 4

「カウンター罠“黒板消しの罠”！効果ダメージを無効にして、相手の手札を1枚捨てる！」

やっぱり、上手く防がれるね。だったら！

「いくよ、シン！」

『承知した』

「バトル！“真紅眼の黒竜”で“ダークエンド・ドラゴン”を攻撃

「！」

「くっ！」

久保田秀二 LP 1000

「まだだよ！畏発動！“ドラゴニック・リバーズ”！私のドラゴン1体をリリースして、墓地の同じレベルのドラゴンを復活させる！“真紅眼の黒竜”をリリースして、“ライトニング・ドラグーン”復活！」

ATK / 2500

「バトル！“ライトニング・ドラグーン”で“ライトエンド・ドラゴン”を攻撃！」

“ライトニング・ドラグーン”なら“ライトエンド・ドラゴン”の効果を受けない！

「くあっ！」

久保田秀二 LP 600

「さらに畏発動！“正統なる血統”！墓地の通常モンスターを特殊召喚する！

“真紅眼の黒竜”復活！」

ATK / 2400

「もう一度お願いね、シン」

『任せておけ』

「真紅眼の黒竜”でダイレクトアタック！黒炎弾！」

「
」

久保田秀二 LP 0

s i d e o u t

アリスがラストホイーラーの久保田先輩を倒して、ピットに戻って来た。

「お疲れ様、アリス。やったね」

「うん！」

『これにて決着なのであります！我がネオドミノ校の代表はこの四人なのであります！』

教頭先生の決定宣言。これでオレたちが代表だね。

「強いな。負けたよ」

「久保田先輩」

久保田先輩がオレたちのピットに来てくれた。

「異議を立てて済まなかった。代表はお前たちだ」

「はい」

「お前たちが優勝することを祈っている」

「がんばります」

それだけ言うと、久保田先輩は去っていった。入れ代わりに校長先生が近付いてきた。

「これにて代表は君たちじゃ。活躍を期待しておるよ」

『はい！』

これで全員解散となった。
対抗戦が楽しみだね。

第十八話：代表決定（後書き）

次話から学園対抗戦が始まります。

学園対抗戦の内容が長くなり過ぎて、かなり続きます。

新キャラも登場します。

それでは、グッチーでした。

第十九話：波乱の幕開け（前書き）

学園対抗戦開幕です。

かなり内容が長くなる予定です。

この話は大分詰め込んだので、長いです。少しですが新キャラも登場します。

それでは、どうぞ。

第十九話：波乱の幕開け

オレたち四人が代表になってから早一週間。学園対抗戦の前日になった。

「参加校のメンバー表だね」

「ああ。けどよ、メンバー表なんか見たところで無駄じゃねえか？」

「誰か知り合いとかいるのかな？」

全員が首を振る。確かに啓斗の言う通り、メンバー表を見たところで何か解る訳じゃないね。

「とりあえずオレたちの順番は変わり無しでいくんだよね？」

全員異議無し。

啓斗、由里、アリス、オレの順番だね。

「試合ってどうやって行われんだ？」

「ふえ？啓斗君、話聞いてなかったの？」

「仕方ねえだろ。教頭の話なんか聞いてねえんだよ」

「五校のリーグ戦だよ。総当たりで、勝ちが一番多い学園が優勝だね」

「初戦はサウス校。気合い入れていこう！」

「うん！」

「がんばるよ」

「なあ、優勝したら何かあんのか？」

啓斗の発言にアリスと由里は溜息をついた。気持ちは解るけどね。

「啓斗君、本当に話聞いてないんだね」

「啓斗、一応聞くけど開催場所解ってる？」

「ん？そついや聞いてなかったな」

「も〜！啓斗君！いくら教頭先生が嫌いだからって聞いてなさすぎだよ！」

「悪いな」

「開催場所はシティのスタジアムだよ。なんでも、一般の人も入れるようにするらしいし、治安維持局も尽力してくれるらしいよ」

「そりゃスゲーな」

「優勝したら治安維持局から特別なプレゼントがあるとか言ってたよ」

何かまでは解らないけどね。

「なんにしても、いよいよ明日からだよ。みんな、がんばろうっ！」

『うん！(応！)』

翌日。

ドン！ドン！ドン！

花火なんかが上がってる。こうしているとフォーチュン・カップを思い出すなあ。

オレたちはスタジアムの控室で全選手が待機してる。開会式があるからね。

「あの一！」

ん？オレかな？

「オレですか？」

「はい！リョウウさんですよね？」

「そうですよ。あなたは？」

「私はノース校一年の美庄舞です」

「オレはネオドミノ校一年のリョウウ。お互い一年なんだから、敬語は辞めない？」

「あ、うん。そうね」

長い紫のような髪の女の子。大人しそうに見える人だけど、どうしてオレに声かけてきたんだろ？

「リヨウさんは有名で、フォーチュン・カップのデュエルを見てたから話かけてみたの。迷惑だった？」

「そんなことないよ」

「えっと、デュエルすることになったらよろしくね」

「こちらこそ、よろしくね」

握手して去っていった。美庄舞さんか。

「リヨウ、今の人は？」

「アリス、ノース校の人みたいだよ。ちょっとした挨拶だったんじゃないかな」

「そうなんだ」

「何かあった？」

「うん。もうすぐ開会式が始まるよ」

「解ったよ」

アリスに促されて、四人でスタジアムに入場した。

『エブリワン！リッスン！学園対抗戦、いよいよ始まるぜー！』

MCの人が。あの人の声も久しぶりに聞くね。

『さあ、まずは開会式だ！諸君は整列してくれ！』

指示通りオレたちは整列する。

それから、簡単な式が行われ、代表としてネオドミノ校の校長先生からの激励の言葉、そして治安維持局副長官イーガーさんからの激励の言葉をもらった。それから、

『優勝校の五人には、Dホイラーとしての証のライセンスを無条件で差し上げましょう。良いデュエルを見せて下さい』

とのこと。みんなは盛り上がってるけど、オレはもう持ってるんだよね。

『最初の試合は、ネオドミノ校VSサウス校だ！両校は準備してくれ！』

最初か。

オレたちは四人集められ、校長先生と教頭先生から激励を受けている。

「いいですか！我がネオドミノ校はアカデミアの模範なのであります！絶対に負けてはなりませんよ！」

「四人とも、頑張るのじゃ」

『はい』

オレたちは控室に戻って、準備を始めた。

「校長はともかく、教頭はどうにかなんねえのか？」

「にははは。教頭先生は相変わらずだね」

「気にしない方がいいよ。私たちのデュエルをすればいいんだから」

三人はリラックスして話してるから大丈夫そうだね。

『リヨウは緊張しているのか？』

「ん〜、少ししてるかもしれないね」

『いつも通りで大丈夫だよ。私たちがついてるよ』

「ありがとう、二人とも。それじゃ、いこうか」

オレたちは揃って入場した。

「君たちがネオドミノ校代表だな？」

「あなたは？」

「俺はサウス校代表の手島戦士だ。お前はリヨウだな？」

「よろしく」

軽く握手をした。

「良いデュエルになるといいな」

「負けないよ」

手島さんは去っていく。挨拶のつもりだったのかな。

「どうでしたか？」

「孔、お前の言う通りだ。奴はかなり強い」

「そうですね。予想通りですね」

「お前の戦略に期待している」

「解っていますよ」

『さあ！いよいよ始まりだ！』

ネオドミノ校ファーストホイーラーは石井啓斗！対するサウス校ファーストホイーラーはナオトだ！

優勝候補ネオドミノ校はどんなデュエルを見せるのかー！』

オレたちって優勝候補なんだ。

「啓斗、頼んだよ」

「任しとけ！いくぜ！」

啓斗がスタートラインの定位置に着く。始まるね。

side 啓斗

「よろしくな」

「よろしく」

ナオトっていったか。どんなデュエルをする奴か、だな。

『ライディングデュエル！アクセラレーション！』

オレとナオトは同時に、いや、こいつの方が若干早え！

「先攻は貰う！」

チツ、第一コーナーを 取られた！

『オオーツと、第一コーナーを取ったのはナオトだー！』

しょうがねえ、先攻を取られたただけだ。

「いくぜ！」

「勝負！」

『デュエル!』

「啓斗君、先攻を取られたけど、大丈夫かな？」

「大丈夫だよ、きっと」

「（ナオトって人の走り方、明らかに先攻を取る為にスタートを無理して飛ばした。あれじゃ、途中で加速が鈍る可能性があるのに）」

「作戦通り、ナオトは先攻を取ったわ」

「そうですね。これで上手くことが進みますよ」

「後は俺たちが策を実行するだけだ」

「僕のターン、ドロー!」

さあ、どんなカードでくる？

「手札から“切り込み隊長”を召喚!」

ATK/1200

戦士か！

「切り込み隊長”が召喚に成功した時、手札からレベル4以下のモンスターを特殊召喚できる！

“戦士ラース”を召喚する！」

ATK / 1600

「“戦士ラース”が召喚された時、デッキのレベル4以下のモンスター1体をデッキの一番上に置く。
僕は“六武衆ザンジ”を選択」

“六武衆”か。

「カードを2枚伏せ、ターン終了」

「俺のターン！」

SP 1

「俺は“ジャンク・ブレイダー”を召喚！」

ATK / 1800

「バトルだ！“切り込み隊長”を攻撃！」

「くっ」

ナオト LP 3400

「俺はカードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

「エンドフェイズ、永続罫“神速の具足”を発動！ドローしたカードが“六武衆”だった場合、特殊召喚できる！」

チツ、それが狙いかよ。

「僕のターン！」

S P 2

「僕のドローカードは“六武衆ザンジ”！よって“ザンジ”を特殊召喚！」

A T K / 1 8 0 0

クソ、展開が早え。

「僕は手札から“六武衆の師範”を特殊召喚！」

A T K / 2 1 0 0

「このカードは場に“六武衆”が存在する時、特殊召喚できる！さらに“大將軍 紫炎”を特殊召喚！」

A T K / 2 5 0 0

「マジかよー！」

「このカードは場に“六武衆”が2体以上存在する時、特殊召喚できる！」

やべえ。最悪だ。

「バトル!“紫炎”で“ジャンク・ブレイダー”を攻撃！」

「ぐっ！」

啓斗 LP 3300

「クソ、畏発動!“戦士の誇り”！破壊された“ジャンク・ブレイダー”を特殊召喚する！」

ATK / 1800

「だったら“師範”で攻撃！」

「くっ！」

啓斗 LP 3000

「だが、“戦士の誇り”で甦ったモンスターは戦闘では破壊されねえ！」

「僕はこの永続罫を発動している。“疾風！凶殺陣”!“六武衆”が戦闘を行った場合、“六武衆”は攻撃力が300アップする！」

ATK / 2400

ATK / 2100

クソ、また来やがるな。

「“ザンジ”で攻撃！」

「クソッ！」

啓斗 LP 2700

「だが、破壊されねえ！」

「“ザンジ”の効果！このカードがバトルしたモンスターは、ダメージステップ終了後、破壊する！」

「なっ！？“ジャンク・ブレード”！」

「これで場は空いた！“戦士ラズ”でダイレクトアタック！」

「させつか！ダイレクトアタックされる時、手札から“ジャンク・デیفエンダー”を特殊召喚できる！」

DEF / 1800

「くっ、攻撃は中止だ。ターンエンド」

「俺のターン！」

なんとか防ぎきったな。こっから反撃だ！

「俺は“クイック・スパナイト”を召喚！」

ATK / 1000

「レベル3の“ジャンク・ディフェンダー”に、レベル3の“クイツク・スパナイト”をチューニング!

シンクロ召喚!“マイティ・ウォリアー”!”

ATK / 2200

「シンクロ素材となった“クイツク・スパナイト”の効果発動!“大將軍 紫炎”の攻撃力を500下げる!”

ATK / 2000

「バトルだ!“マイティ・ウォリアー”で“六武衆の師範”を攻撃!”

「くっつ!”

ナオト LP 3300

「“六武衆の師範”の効果発動!破壊される代わりに他の“六武衆”を破壊することができる!”

“ザンジ”を破壊する!”

チツ、“マイティ・ウォリアー”の効果が発動しねえ。

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ!”

「僕のターン!”

SP 4

「SP スピードエナジー”発動！SPカウンターが2つ以上ある時、SPカウンターの数×200攻撃力がアップする！」

ATK / 2900

ATK / 2800

ATK / 2400

クソツタレが！

「“師範”で“マイティ・ウォリアー”を攻撃！」

「ヤラセねえ！畏発動！“シンクロ・ゲイザー”！“マイティ・ウォリアー”をリリースして、相手場のモンスターを全て守備表示にする！」

「くっ！」

DEF / 800

DEF / 2400

DEF / 1200

「さらに！守備表示にしたモンスターの数×200ポイントのダメージを与える！」

「くっっ！」

ナオト LP 2700

「くっ、ターンエンド」

「俺のターン！」

SP 5

厳しい状況になっちゃったが、まだ逆転の手はあるぜ！

「ジャンク・フワード”を特殊召喚！」

ATK / 900

「さらに“ネジマキの見習い戦士”を召喚！」

ATK / 500

「レベル3の“ジャンク・フワード”に、レベル2の“ネジマキの見習い戦士”をチューニング！
シンクロ召喚！“スカー・ウォリアー”！」

ATK / 2100

「六武衆の師範”を攻撃だ！」

「くっ」

これで耐えられる筈だ。

「俺はターンエンド」

「僕のターン！」

SP 6

「墓地の“六武衆”2体をゲームから除外して、“紫炎の老中 エニシ”を特殊召喚！」

ATK / 2200

攻撃力2200、だが、“スカー・ウォリアー”は1ターンに一度まで戦闘で破壊されねえ。

「“エニシ”の効果発動！攻撃を放棄する代わりに、モンスター1体を破壊する！“スカー・ウォリアー”を破壊する！」

「なっ!?!」

「これで君の場にモンスターはいない。

“紫炎”と“戦士ラーズ”を攻撃表示に変更」

ATK / 2000

ATK / 1600

「バトル!“紫炎”と“戦士ラーズ”でダイレクトアタック！」

「ぐあああっ！」

啓斗 LP 0

クソッ！やられたまま終われねえ！次に繋ぐ！

「ルールによってエンドフェイズに入る」

「このエンドフェイズに最後の罨を発動する！“ジャンク・コレクシヨン”！」

このカードしか場に存在しない場合、そのターンのエンドフェイズにデッキから2体の“ジャンク”を召喚できる！

“ジャンク・アーマー”と“ジャンク・コレクター”を特殊召喚！」

ATK/600

ATK/1000

俺はここまでだな。

side out

side 由里

啓斗君がピットに戻って来た。

「啓斗君！」

「悪いな。ろくにダメージも与えてねえ」

「うっん。後は任せて！」

「頼むぜ」

「うん！」

啓斗君の為にも、私が挽回するんだ！

「お疲れ様、啓斗」

「悪い」

「啓斗の所為なんて思ってないよ。後は私たちに任せて」

「（でも、ナオトって人の手札はない。あそこまでして先攻を取り、啓斗を速攻で倒した。何か作戦でもあるんじゃない）」

「思っていたより粘りましたね」

「二人目は厳しいだろうね」

「それも計算の内です。後は彼がどこまでライフを削れるか、ですね」

「次は君か」

「私は武内由里、啓斗君の敵は取らせてもらおうよ」

『デュエル!』

「私のターン!」

SP 7

「“ジャンク”モンスター2体をリリース!“翼を織りなす者”をアドバンス召喚!”

ATK / 2750

「カレン!いくよ!」

『承知しました』

「バトル!“紫炎の老中 エニシ”を攻撃!ホーリー・スター!」

「くっ!」

ナオト LP 2150

「私はカードを2枚伏せて、ターンエンド」

「僕のターン!」

SP 8

「僕のドローカードは“六武衆の露払い”!“神速の具足”の効果で特殊召喚!」

ATK / 1600

「僕は“スピードワールド2”の効果でSPカウンターを7つ取り除き、カードを1枚ドロロー！」

ナオト SP 1

「六武衆 ヤリザ”を召喚！」

ATK / 1000

「六武衆の露払い”の効果発動！“ヤリザ”をリリースして、“翼を織りなす者”を破壊する！」

「カウンター罠“エクセリオンチャージ”！モンスター効果の発動により、“翼を織りなす者”の攻撃力分のライフを回復！」

由里 LP 6750

「そして“翼を織り成す者”に対する効果を無効にするよ！」

「なっ!?!」

ライフを回復した上にカレンを護れた。しかも相手モンスターは攻撃表示！

「くっ、“紫炎”と“戦士ラーズ”を守備表示にして、ターンエンド」

DEF / 2400

DEF / 1000

「私のターン！」

ナオト SP 2

由里 SP 9

「私は“コーリング・ノヴァ”を召喚！」

ATK / 1400

「バトル!“翼を織りなす者”で“六武衆の露払い”を、“コーリング・ノヴァ”で“戦士ラース”を攻撃！」

「くっ」

ナオト LP 1000

よし、いけるね！

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「僕のターンだ」

ナオト SP 3

由里 SP 11

「“紫炎”を攻撃表示にする」

ATK / 2000

「『コーリング・ノヴァ』を攻撃」

「うっ」

由里 LP 6150

「『コーリング・ノヴァ』の効果で、デッキから『コーリング・ノヴァ』を特殊召喚するよ」

ATK/1400

「カードを1枚伏せる。これでターン終了」

「私のターン！」

ナオト SP 4

由里 SP 12

SPカウンターはこの先の為に取っておこうかな。

「バトル！『翼を織りなす者』で『大將軍 紫炎』を攻撃！」

「『畏発動！『魔法の筒』！攻撃を無効にして、そのモンスターの攻撃力分のダメージを与える！』」

「きゃあっ！」

由里 LP 3400

っ！あんなカードを伏せてたなんて。

「“コーリング・ノヴァ”を守備表示に変更して、ターンエンド」

DEF / 800

「僕のターン！」

ナオト SP 5

「“コーリング・ノヴァ”を攻撃！」

「くっっ！“コーリング・ノヴァ”が破壊されたことで、“コーリング・ノヴァ”を特殊召喚！」

ATK / 1400

「カードを1枚伏せて、ターン終了」

「私のターン！」

ナオト SP 6

「私は“サニー・ピクシー”を召喚！」

ATK / 300

「召喚に応じて畏発動！“ショック・ウェーブ”！相手よりライフが低い場合、自分場上のモンスター1体を破壊して、そのモンスターの攻撃力分のダメージをお互いのプレイヤーは受ける！」

「なっ！？きゃああっ！」

ナオト LP 0

由里 LP 1400

『なんとナオト自爆ー！武内由里に大きなダメージを与え、エンドフェイズへー！』

それだけじゃないね。私は攻撃力の低い“サニー・ピクシー”が攻撃表示のままだよ。

「良くやりましたね、ナオトさん」

「いえ、孔さんの作戦通りですよ。僕はできることは全てしたつもりです。後はお願いします」

「任せました。私が見事、策を成就させて参りましょう」

『さあ、サウス校セカンドホイラーは孔だー！』

私の前に次の人が現れた。

「大分ライフを削られてしまったようですね」

確かにね。だったらアリスちゃんに良い形で回さないだね。

『デュエル!』

「由里、大丈夫かな」

「あの“ショック・ウェーブ”は予想外だったしな」

「強いね、サウス校は」

「私のターンです」

孔 SP 7

「私は“スピードワールド2”の効果を発動します。SPカウンターを4つ取り除き、手札の“SP”1枚につき800ポイントのダメージを与えます」

孔 SP 3

彼の手札の“SP”は1枚。

「きゃあっ!」

由里 LP 600

これで私のライフはライディングデュエルのセーフティラインを

越えちゃったね。

「私は“切り込み隊長”を召喚します」

ATK / 1200

「“切り込み隊長”の効果で“コマンド・ナイト”を特殊召喚します」

ATK / 1200

「私の場に“コマンド・ナイト”が存在する限り、戦士族モンスターの攻撃力は400アップします」

ATK / 1600

ATK / 1600

「バトルです！“切り込み隊長”で“サニー・ピクシー”を攻撃します！」

「畏カード“ガード・ブロック”！戦闘ダメージを0にして、カードを1枚ドローするよ」

「粘りましたか。では、“コマンド・ナイト”で“コーリング・ノヴァ”を攻撃します」

「くっっ」

由里 LP 400

「“コーリング・ノヴァ”の効果で“シャインエンジェル”を特殊召喚」

ATK/1400

「ふむ。私はカードを2枚伏せ、ターン終了です」

「私のターン！」

孔 SP 4

作戦変更だね。SPカウンターは残しておくつもりだったけど、
“コマンド・ナイト”は破壊しておきたいからね。

「私は“スピードワールド2”の効果で、SPカウンターを10個
取り除き、“コマンド・ナイト”を破壊！」

由里 SP 2

これで“切り込み隊長”の攻撃力は下がるね。

ATK/1200

「バトル!“翼を織りなす者”で“切り込み隊長”を攻撃！」

「私は畏カード“次元幽閉”を発動します。攻撃してきた“翼を織りなす者”をゲームから除外します」

しまった。この状況でカレンが。

「まだバトルは残ってるよ！」

“シャインエンジェル”で“切り込み隊長”を攻撃！」

「畏カード“邪神の大災害”を発動します。場上の魔法・畏カードを全て破壊します」

くつつ、私のカードまで。

「でもバトルは続くよ！」

「くつつ」

孔 LP 3800

私にできることはもうほとんどないね。

「私はカードを2枚伏せて、ターンエンド」

「私のターンですね」

孔 SP 5

由里 SP 3

「私は“D・D・アサイラント”を召喚します」

ATK/1700

「カードを1枚伏せます。

そして“スピードワールド2”の効果で、SPカウンターを4つ取り除き、私の手札にある“SP”1枚分のダメージ、800のダメ

「ダメージを与えます」

孔 S P 1

私に防ぐ手段はない。 。 だけど！

「永続罫“奇跡の光臨”を発動！ゲームから除外されている天使を特殊召喚するよ」

A T K / 2 7 5 0

私の場にまたカレンが光臨する。 後はお願いね。

由里 L P 0

s i d e o u t

s i d e アリス

「由里！」

「アリスちゃん、後はお願い。カレンは好きにしてくれて構わないから」

「うん。カレンと“シャインエンジェル”、それに伏せカード、ありがとね」

サウス校にはまだまだ余裕がある。 私ができるだけ有利にしてリョ

ウに繋がらないとね。

私はピットからスタートして、孔さんの前に出た。

『さあ、ネオドミノ校は厳しくなってしまったかー!? サードホイラー、アリス・ルシエの登場だー!』

「さあ、始めましょうか」

『デュエル!』

「私のターン!」

孔 SP 2

アリス SP 4

「私は“シャインエンジェル”をリリースして、“マテリアルドラゴン”を召喚!」

ATK / 2400

でも“アサイラント”を破壊したモンスターは除外されてしまっ

『私が攻撃します』

「いいの?」

『はい。私が攻撃する方が有利に運ぶでしょう。貴女様は天使を使う訳ではありません。ドラゴンを残しておくべきでしょう』

確かに、私はカレンの全力を引き出すことは難しい。

「いくよ、バトル!“翼を織りなす者”で“アサイラント”を攻撃
」!

「くっ」

孔 LP 2750

「ですが“アサイラント”を破壊したモンスターは除外されます」
カレンがまた除外される。ありがとね、カレン。

「“マテリアルドラゴン”でダイレクトアタック!」

「永続罫“闇の呪縛”を発動します。相手モンスター1体の攻撃力
を700下げ、攻撃出来ず、表示変更も出来ません」

ATK / 1700

ダメージは与えられない。

「私はカードを2枚伏せて、ターンエンド」

「私のターンです」

孔 SP 3

アリス SP 5

「私は“SP エンジェルバトン”を発動します。SPカウンターが2つ以上ある時、デッキから2枚ドロ、1枚を墓地に送ります。手札から“コアキメイル・ベルグザーク”を召喚します」

ATK/2000

「バトルです。“マテリアルドラゴン”を攻撃です」

「きゃ」

アリス LP 3700

「このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、もう一度攻撃出来ます。もう一度攻撃です」

「きゃあああっ！」

アリス LP 1700

「くっつ！罠カード“ダメージ・コンデンサー”！手札を1枚墓地に送って、受けたダメージ以下の攻撃力のモンスターをデッキから特殊召喚できる！」

“デルタフライ”を特殊召喚！」

ATK/1500

「私はエンドフェイズに“ベルグザーク”の効果で手札の“不意打ち又佐”をオープンします。ターンエンドです」

「私のターン」

孔 SP 4
アリス SP 6

ライフは削られたけど、相手の場には“ベルグザーク”だけ。攻めるなら今だね。

「私は“SP スピードエナジー”発動！SPカウンターが2つ以上ある時、SPカウンターの数×200ポイント攻撃力がアップ！」

ATK / 2700

「バトル！“コアキメイル・ベルグザーク”を攻撃！」

「くっ」

孔 LP 2050

「墓地の“シールド・ウォリアー”をゲームから除外して、破壊を無効にします」

耐えてきたね。

「私はカードを1枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン」

孔 SP 5
アリス SP 7

「私は“ベルグザーク”で攻撃です」

「畏カード“攻撃の無力化”を発動！バトルフェイズを終了させるよ」

このターンは防いだね。

「私はカードを1枚伏せ、手札の“不意打ち又佐”をオープンして、ターンエンドです」

「私のターン！」

孔 SP 6

アリス SP 8

よし、いける。

「私は“ハウンド・ドラゴン”を召喚！」

ATK / 1700

「“デルタフライ”の効果発動！このカード以外のレベルを1上げる。」

「ハウンド・ドラゴン”のレベルを4にする」

これで条件は整ったね。

「レベル4となった“ハウンド・ドラゴン”に、レベル3の“デルタフライ”をチューニング！」

煌めきたる稲妻よ、轟く雷鳴と共に姿を現せ！

シンクロ召喚！疾風迅雷！“ライトニング・ドラグーン”！」

ATK/2500

「残念でしたね」

「えッ？」

「罨カード“ディスコード・カウンター”を発動します。相手がシンクロ召喚に成功した時、そのモンスターをエクストラデッキに戻し、素材となつたモンスター1組を特殊召喚します」

ATK/1700

ATK/1500

私の“ライトニング・ドラグーン”が消え、“ハウンド・ドラゴン”と“デルタフライ”が場に現れた。

「さらに相手は次のターン終了時まで、モンスターの召喚、特殊召喚を行うことは出来ません」

「っ!？」

厳しくなっちゃった。

「私は ターンエンド」

「私のターンです」

孔 SP 7

アリス SP 9

「SP スピードエネルギー」を発動します」

ATK/3400

「ベルグザーク”で”ハウンド・ドラゴン”を攻撃です」

「罨カード”ハーフ・カウンター”！”ハウンド・ドラゴン”は”コアキメイル・ベルグザーク”の元々の攻撃力の半分を攻撃力に加える！」

ATK/2700

「ですが、戦闘は続行です」

「くっつ！」

アリス LP 1000

「“ベルグザーク”の効果により、もう一度攻撃です。“デルタフライ”を攻撃」

「由里が残してくれた罨カード”チューナーズ・バリア”！このターン、“デルタフライ”は破壊されない」

「戦闘ダメージは受けて貰います」

るくに何もできなかった。

アリス LP 0

side out

アリスがピットに戻って来た。

「ごめんなさい。何もできずに」

「そんなこと言わない。後は任せてよ」

「うん」

アリスが残してくれたのはチューナーの“デルタフライ”と霰1枚か。

三人抜きしなきゃオレたちに勝ちはない。

がんばって三人抜きしないと。負けるのは嫌だしね。

第十九話：波乱の幕開け（後書き）

はい。初戦から厳しくなるのはアニメと同じです。次話は全てリョウのデュエルになると思います。

新キャラは少し昔になりますがお気に入りキャラがモデルです。名前から分かると思いますが。近いうちに相棒も登場する予定です。

さて、学園対抗戦でとりあえず第二期終了予定です。+ があるとは思いますが。

それでは、グッチーでした。

第二十話：意地（前書き）

全てリヨウのデュエルです。

そして久しぶりに原作のあいつが登場です。

さて、サウス校戦、決着です。

では、どしどし。

第二十話：意地

『さあ、ネオドミノ校、厳しくなってしまったー！とうとうラストホイーラー、リヨウの登場だー！』

「クソツ！初戦から最悪じゃねえか！」

「うん。ほとんど何もできずにリヨウ君に回しちゃったね」

「リヨウ」

『しかししかし！リヨウはフォーチュン・カップ優勝者！ネオドミノ校、最後の切り札だー！』

オレはコースに出た。

「来ましたね」

「あなたがこのデュエルの作戦を立てた人だね？」

「その通りです」

「一人目が先攻を無理矢理取り、啓斗を速攻で倒す。その所為でオレたちが動揺する。そしてあなたが後を引っ張り、できるだけ持たせる」

「貴方が強いことは知っています。全ては貴方を倒す為です。貴方が動揺していないことが些か残念ではありますが」

光栄だねえ、全く。今オレが動揺すれば、勝つのは間違いなく不可能。冷静にならなくちゃね。

さあ、始めようか！

『デュエル！』

「オレのターン」

孔 SP 8

リョウ SP 10

“デイスコード・カウンター”の効果はアリスを対象としたもの。オレには当て嵌まらない。

「SP エンジェルバトン”発動。SPカウンターが2つ以上ある時、デッキから2枚ドロし、1枚を墓地に送る」

アリスが“デルタフライ”を残してくれたのは大きいね。

「オレは“見習い魔術師”を召喚」

ATK/400

「“デルタフライ”の効果で“見習い魔術師”のレベルを上げる」

飛ばしていくよ！

「レベル3となった“見習い魔術師”に、レベル3の“デルタフラ
イ”をチューニング！
白き魔術が重なりし時、百戦錬磨の魔術師が現れる。光差す希望と
為れ！」

シンクロ召喚！冴え渡れ！“高尚なる魔術師トエル・カウロ”！」

ATK/2300

「頼むよ、トルンカ」

『ほほ、頑張ろうかの』

「このカードがシンクロ召喚に成功した時、墓地の魔法カードを1
枚手札に加える。」

“SP エンジェルバトン”を手札に加える」

この人はこのターンで倒す。

「さらに“トエル・カウロ”の効果発動！“コアキメイル・ベルグ
ザーク”の攻撃力をエンドフェイズまで半分にする」

ATK/1000

「バトル！“トエル・カウロ”で攻撃！シルバー・グランス！」

「くっ」

孔 LP 750

「カードを1枚伏せる」

「どうやら私はここで終わりのようですね」

「その通りですよ。“スピードワールド2”の効果発動！SPカウンターを4つ取り除き、手札の“SP”1枚につき800ポイントのダメージを与える！」

オレの手札には“SP エンジェルバトン”がある。

リヨウ SP 6

孔 LP 0

先ずは一人目。後合計ライフ8000か。

「私はここで終わりです。後は任せます」

「任せなさい！」

「孔とナオトは策を成就させた。俺たち二人を残した状態で奴を引っ張り出したのだからな」

「いつてくるわ！」

「香、無理に一人で決めようとするなよ」

「解ってるわよ」

さて、次の人がオレの前に出てきたね。女の人か。

『さあ、サウス校サイドホイーラーは香！どんなデュエルを見せてくれるのかー！？』

香っていうのか。

「よろしくね」

「いくわよ！」

『デュエル！』

「私のターン！」

香 SP 9

リヨウ SP 7

「私は“荒野の女戦士”を守備表示で召喚」

DEF / 1200

「カードを2枚伏せて、ターン終了」

「オレのターン」

香 SP 10

リヨウ SP 8

「魔導騎士 ディフェンダー」を召喚！」

ATK / 1600

「このカードが召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを1つ置く。

バトル！ “魔導騎士 ディフェンダー” で攻撃！」

「“荒野の女戦士” が破壊された時、デッキから攻撃力1500以下の地属性戦士族モンスターを攻撃表示で特殊召喚できるわ。

“荒野の女戦士” を特殊召喚」

ATK / 1100

「トエル・カウロ” で攻撃！シルバー・グランズ！」

「きゃあっ！」

香 LP 2800

「“荒野の女戦士” が破壊されたことで、デッキから“荒野の女戦士” を特殊召喚」

ATK / 1100

「オレはターンエンド」

「私のターン」

香 S P 1 1

リヨウ S P 9

「私は“スピードワールド2”の効果発動！S Pカウンターを10
取り除いて、“高尚なる魔術師トエル・カウロ”を破壊するわ！」

香 S P 1

「オレは“魔導騎士 デイフェンダー”の効果発動！このカードの
魔力カウンターを取り除き、破壊を無効にする」

「 流石だわ」

「どうも」

「私は“荒野の女戦士”をリリース！“アマゾネス女王”をアドバ
ンス召喚！」

A T K / 2 4 0 0

「バトル！“高尚なる魔術師トエル・カウロ”を攻撃！」

「くっ」

リヨウ L P 3 9 0 0

「墓地の“魔術の守護者”をゲームから除外して、破壊を無効にす
る」

「またなの！？」

そんなに簡単にやらせはしないよ。

『助かったわい』

「大丈夫そうだね。まだまだ頼むよ」

「ターン終了よ」

「オレのターン」

香 SP 2

リヨウ SP 10

「トエル・カウロ”の効果発動！ “アマゾネス女王”の攻撃力をエンドフェイズまで半分にする」

ATK / 1200

「バトル！ “トエル・カウロ”で攻撃！シルバー・グランズ！」

「畏カード “ガード・ブロック”！戦闘ダメージを0にして、カードを1枚ドロウするわ」

しかも破壊できてない？

「 “アマゾネス女王”が場に存在する限り、 “アマゾネス”が戦闘で破壊されることはないわ」

「なるほど。でも戦闘ダメージは受けてもらおうよ。」

“魔導騎士 デイフェンダー”で攻撃!

「うっ!」

香 LP 2400

「オレは“スピードワールド2”の効果で、10個のSPカウンターを取り除き、“アマゾネス女王”を破壊する!」

リヨウ SP 0

「カウンター罠“デストラクション・ジャマー”!手札を1枚墓地に送り、破壊効果を無理にするわ!」

防がれたか。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「エンドフェイズ、攻撃力は元に戻るわ」

ATK/2400

「私のターン」

香 SP 3

リヨウ SP 1

「私は“アマゾネスの聖戦士”を召喚!」

ATK/1700

「このカードの攻撃力は“アマゾネス”1体につき、100上がるわ」

ATK / 1900

「バトル！ “アマゾネス女王”で“高尚なる魔術師トエル・カウロ”を攻撃！」

「甘いよ。罨カード“魔術師集結”！場に存在する魔法使い族モンスター1体につき、攻撃力が300ポイントアップする！」

ATK / 2900

ATK / 2200

「くっつ！」

香 LP 1900

「カードを2枚伏せて、ターンエンドよ」

「オレのターン」

香 SP 4

リョウ SP 2

バトルで破壊できないなら、一番低いモンスターを攻撃してダメージを与えるまで！

「攻撃はダメ！罨カード“威嚇する咆哮”！このターン、攻撃する

「ことはできないわ！」

流石　　かな。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン！」

香　SP　5

リヨウ　SP　3

「私は“復讐の女戦士ローズ”を召喚！」

ATK / 1600

チューナー！シンクロ召喚か！

「いくわよ！レベル4の“アマゾネスの聖戦士”に、レベル4の“復讐の女戦士ローズ”をチューニング！シンクロ召喚！“ギガンテック・ファイター”！」

ATK / 2800

「このカードは墓地の戦士1体につき、攻撃力が1000アップするわ！」

墓地の戦士は5体、厳しいな。

ATK / 3300

「いくわよ！ “ギガンテック・ファイター” で “高尚なる魔術師トエル・カウロ” を攻撃！」

啓斗の真似をしようかな。アリスが残してくれた罨カード！

「アリスの罨を発動！ “シンクロ・バリアー”！ “トエル・カウロ” をリリースして、次のターンのエンドフェイズまでダメージを受けなくなる」

『これでお役御免じゃな』

ありがとう、トルンカ。

「せめてモンスターを破壊しておくわ。

“アマゾネス女王” で “魔導騎士 ディフェンダー” を攻撃！」

これでオレの場には伏せカード1枚だけか。

「私はターンエンドよ」

「オレのターン！」

香 SP 6

リヨウ SP 4

「 “SP エンジェルバトン” を再び発動！カードを2枚ドロ、1枚を墓地に送る。

さらに “氷結界の風水師” を召喚！」

ATK / 800

「墓地の“マジカルヘッジホッグ”の効果発動！オレの場にチューナーモンスターが召喚された時、墓地から特殊召喚できる！」

ATK/1000

「SP 枯渇する魔力”を発動！SPカウンターが4以上ある時このターンのエンドフェイズまで場のモンスター効果は全て無効になる！」

「なっ!?!」

ATK/2800

「オレは罠カード“エンジェル・リフト”！墓地のレベル2以下のモンスターを特殊召喚する。

“見習い魔術師”を特殊召喚！」

ATK/400

「いくよ！レベル2の“見習い魔術師”とレベル3の“マジカルヘッジホッグ”に、レベル3の“氷結界の風水師”をチューニング！白と黒の魔術が、ここに新たな力を呼び起こす。光差す希望と為れ！シンクロ召喚！統括せよ！“魔法神官 ホワイトブラック”！」

ATK/2800

「いけ！“ホワイトブラック”で“アマゾネス女王”を攻撃！」

「ぎゃあっ!?!」

香 LP 1500

“アマゾネス女王”の効果は無効化されてる。よって破壊できる！
そして！

「モンスターを破壊した時、“ホワイトブラック”の効果が発動される！このカードが戦闘でモンスターを破壊した時、相手場上の別のモンスター1体を破壊できる！

“ギガンテック・ファイター”を破壊する！」

「うつつ！」

これでモンスターは全て破壊した。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「くっ、私のターン」

香 SP 7

リョウ SP 5

「私は“スピードワールド2”の効果でSPカウンターを7つ取り除いて、カードを1枚ドロ！」

香 SP 0

「私は“アマゾネスの剣士”を召喚！」

ATK / 1500

「さらに永續罨“アマゾネスの意地”！墓地の“アマゾネス”を特殊召喚する！」

“アマゾネス女王”を特殊召喚！」

ATK / 2400

「“アマゾネスの意地”で甦ったモンスターはバトルしなければならぬわ！」

“アマゾネス女王”で攻撃！」

「迎撃だ！」

「うっ」

香 LP 1100

「まだ！“アマゾネスの剣士”で攻撃！」

「!?!」

“ホワイトブラック”が迎撃する。

「くああっ!?!」

リョウ LP 2600

「なんでオレのライフが」

「“アマゾネスの剣士”が戦闘を行うことで私が受けるダメージは

全て貴方が受けるわ！」

なるほどね。さらに“アマゾネス女王”の効果で破壊されないしね。

「私はカードを2枚伏せて、ターンエンド」

「オレのターン！」

香 SP 1

リョウ SP 6

「オレは“魔導戦士 ブレイカー”を召喚！」

ATK / 1600

「このカードが召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを1つ置く。

さらにこのカードの魔力カウンターを取り除き、魔法・罫カードを1枚破壊する！」

“アマゾネスの意地”を破壊！」

「きゃあっ！」

これで“アマゾネス女王”を破壊できる！

「罫発動！“道連れ”！“アマゾネス女王”が破壊されたことで、“魔法神官 ホワイトブラック”を破壊！」

「くっ、“ホワイトブラック”の効果発動！このカードが場から離れた時、場上のカード1枚を破壊する！」

“アマゾネスの剣士”を破壊！」

「うっ」

これで場にモンスターがいなくなった。

「バトル！ 魔導戦士 ブレイカー”でダイレクトアタック！」

「きゃあああっ！」

香 LP 0

やっと二人目、後一人か。

「リヨウ君、凄い」

「これで後一人を残し、ライフは2600残っている。十分勝機はあるぜ」

「リヨウ」

「奴はやはり強いな」

「後は任せたわよ」

「解っている。俺が奴を倒し、このデュエルは終わりだ」

『さあ、これは波乱の予感だー！ネオドミノ校ラストホイーラー、リヨウは見事にサウス校セカンド、サードホイーラーを倒し、ラストホイーラーを引つ張り出したぞー！』

サウス校ラストホイーラー、手島戦士の登場だー！』

オレに最初に話しかけてきた人だね。

「やはり強いな」

「どうも」

「だが！それもここまでだ！俺が倒す！」

「簡単には負けないよ」

『デュエル！』

「俺のターン！」

手島戦士 S P 2

リヨウ S P 7

「俺は“切り込み隊長”を召喚する！」

ATK / 1200

「このカードが召喚に成功したことにより、“X セイバー パウ

シル”を特殊召喚！」

ATK / 1000

やっぱり戦士か。シンクロ主体だね。

「レベル3の“切り込み隊長”に、レベル2の“パウシル”をチューニング！」

シンクロ召喚！“X セイバー ウェイン”！」

ATK / 2100

「このカードがシンクロ召喚に成功した時、レベル4以下の戦士を特殊召喚できる！」

“X セイバー パウシル”をもう1体召喚する！」

ATK / 1000

「レベル5の“ウェイン”に、レベル2の“パウシル”をチューニング！」

シンクロ召喚！“X セイバー ウルベルム”！」

ATK / 2200

シンクロにシンクロを重ねてきたね。

「永続罫“リミット・リバース”を発動する！」

厄介なカードを残してたんだね。

「墓地の攻撃力1000以下のモンスターを特殊召喚する。
再度“パウシル”を特殊召喚！」

ATK/1000

「まさか！シンクロにシンクロを重ねて、さらにシンクロを重ねるつもりか！？」

「その通りだ！レベル7の“ウルベルム”に、レベル2の“パウシル”をチューニング！」

シンクロ召喚！“XX セイバー ガトムズ”！」

ATK/3100

攻撃力3100！マズイね。

「バトル！“ガトムズ”で攻撃だ！」

「くっっ！」

リョウ LP 1100

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

厳しい。

オレの場にモンスターはいない。相手の場には攻撃力3100のモンスター。

やっぱり三人抜きするのは難しいんだろうか。

「諦めたのか？」

「ッ!？」

ハツとして顔を上げた。今の声は。

いた!観客席に座ってオレを見てる。

負けられないな。彼が見てるのなら、友人として、ライバルとして、みつともない姿は見せられない!

「オレのターン!」

手島戦士 S P 3

リヨウ S P 8

来てくれたね。

「相手場のみモンスターが存在する時、“特攻のマジシャン”を特殊召喚できる!」

ATK/100

「このカードが攻撃表示で特殊召喚に成功した時、場の魔法・罨力カード1枚を破壊する!

あなたの場の伏せカードを破壊!」

「チェーンして罨発動!“ガトムズの緊急指令”!墓地の“Xセイバー”を2体特殊召喚できる!

“ウルベルム”と“ウェイン”を特殊召喚!」

ATK / 2200

ATK / 2100

シンクロモンスターが3体、揃い踏みだね。

「この圧倒的な状況でどうするつもりだ？」

「オレは諦めない！まだ希望は失えてない！」

“特攻のマジシャン”をリリースして、“ブラックマジシャンガール”をアドバンス召喚！」

ATK / 2000

『なんとー！フォーチュン・カップで幾度となくリョウと共に闘っていたエースモンスターの1体が、この土壇場で遂に登場だー！』

「耐えるよ、マナ。耐えれば勝機はくる！」

『うん！任せて！』

次のターンが勝負だ！

「オレはカードを1枚伏せて、ターンエンド」

このターン、オレができるのはここまで。後は最後に残ったこの手札のカードにかかっている。

「俺のターン！」

手島戦士 SP 4

リョウ SP 9

「このターンで終わりだ！

“ガトムズ”で攻撃！」

「罨カード“和睦の使者”発動！このターン、戦闘ダメージは0になり、オレのモンスターは破壊されない！」

「なんとか耐えたようだな。だがこれで終わりではない！

“スピードワールド2”の効果で、SPカウンターを4つ取り除き、手札の“SP”1枚につき800ポイントのダメージを与える！
俺の手札にある“SP”は1枚！よって800のダメージ！」

手島戦士 SP 0

「くあっ！」

リョウ LP 300

「残りわずか300のライフだな。それでいつまで持つか。ターンエンドだ！」

「エンドフェイズに罨発動！“ファイナルブースト”！オレのライフが1000以下の時、SPカウンターを4つ増やすことができる！」

リョウ SP 12

これでオレの準備は整った。このカードにかける！

「オレのターン！」

手島戦士 S P 1

「オレはドローフェイズをスキップして、“S P ソウル・サークル”発動！S Pカウンターが12個あり、場に“ブラックマジシャンガール”が存在する時に発動できる！

墓地に存在するモンスターの数だけ、オレはカードをドローすることが出来る！」

「なんだと！？」

「オレの墓地に存在する仲間は8体！カードを8枚ドロー！」

みんな 力を貸してくれ ！

8枚のカード、手札の数だけ可能性が広がるとはよく言ったものだね。

みんな、ありがとう。

「手札から“S P スピードフュージョン”を発動！S Pカウンターが6以上ある時、融合を可能にする！

オレは手札の“ブラックマジシャン”と“バスター・ブレイダー”を融合！

現れる！“超魔導剣士 ブラック・パラディン”！」

A T K / 2 9 0 0

「だが“ガトムズ”の方が攻撃力は上だ！」

「それは違う！ “ブラック・パラディン” はお互いの場、又は墓地のドラゴン1体につき攻撃力が500上がる！
オレの墓地にはアリスが最初に残してくれた “デルタフライ”
がいる！」

よって攻撃力は500上がる！」

ATK / 3400

「チイツ！」

まだ終わらない！

「さらに “SP マジカル・フュージョン” 発動！ SPカウンターが8個以上ある時、場又は墓地のモンスターをゲームから除外して、決められた魔法使い族融合モンスターを特殊召喚する！

場の “ブラックマジシャンガール”、墓地の “魔導戦士 ブレイカー” と “魔導騎士 デイフェンダー” を除外！

融合召喚！ “超魔導剣士 ブラック・パラディン・ガール”！」

ATK / 2500

「 “ブラック・パラディン・ガール” の攻撃力は、オレの墓地に眠る魔法使い1体につき300ポイントアップ！」

オレの墓地にある魔法使いは合計6体！

ATK / 4300

「馬鹿な！？ わずか1ターンで “ガトムズ” を越えるモンスターを2体召喚するだど！？」

これがオレとカードたちの絆の力かな。
このターンで終わりにする！

「本当の魔法の力はここからだ！

“SP ファイナル・マジック”！SPカウンターが10以上ある時、場のレベル7以上の魔法使いは、このターンのバトルで2回攻撃できる！」

「な、なにつ！？」

「バトル！ “ブラック・パラディン”！一度目の攻撃！超魔導破！」

“ブラック・パラディン”の攻撃が“X セイバー ウェイン”に炸裂する。

「ぐぐぐぐ！」

手島戦士 LP 2700

「二度目の攻撃！ “X セイバー ウルベルム”を攻撃！超魔導破！」

「ぐああっ！」

手島戦士 LP 1500

「 “ブラック・パラディン・ガール”！一度目の攻撃！ “XX セイバー ガトムズ”を攻撃！超魔導破弾！」

「ぐわああっ！」

手島戦士 LP 300

「そしてこれが最後の攻撃！ “ブラック・パラディン・ガール” でダイレクトアタック！超魔導破弾！」

「ぐわああああっ！」

手島戦士 LP 0

第二十話：意地（後書き）

オリカ多くてすいません。詳しくはBの世界にて。

更新が遅れがちになってすいません。週に一度は必ず更新したいと思います。後、休日にはできるだけ。

次話はオリキャラの心情なんかがある予定です。デュエルもある予定です。

それでは、グッチーでした。

第5回：Bの世界（前書き）

第5回です。

オリカ使いまくってますし。

では、どうぞ。

第5回：Bの世界

リ「第5回か」

ア「そうだね」

リ「何か本編に関わりそうな質問がたくさんきてたね」

ア「グッチーさんの説明が足りないんだよ」

すいません。

リ「仕方ないね。今更始まったことでもないんだし」

ア「うん。私たちのオリカも出だし、紹介しないといけないからね」

リ「早速始めようか」

『第5回：Bの世界！スタートです！』

リ「改めてこんにちは。リョウです」

ア「こんにちは。アリス・ルシエです」

リ「唐突に思ったんだけど、この挨拶ってこんにちはでいいの？」

ア「読者の皆さん次第だからね」

私はこんにちはならいつでも通じると思います。多少無理がありませんけど。

リ「こんなこと考えても仕方ないか。

それでは、今回のゲストを！」

ア「今回のゲストは私の親友、武内由里です。どうぞ〜」

由「にやはは。お邪魔します〜」

ア「よく来たね。由里」

由「うん。啓斗君は前回だったんだよね？」

リ「そうだね」

ア「今回は由里だよ。よろしくね」

由「うん。よろしく」

リ「それでは、早速最初のコーナーにいこうか」

『グッチーの部屋』

リ「はい。いってみようか」

ア「先ずはオリキャラの紹介だよ」

名前：カレン

好きな物：平和、静かな一時

嫌いな物：争い、戦争

“翼をおり成す者”の精霊。

律義で丁寧な性格。いつも丁寧な口調で誰とでも接する。

争いは基本的に好まないが、由里の為になら争いを拒まない。

ア「由里の精霊だね」

由「うん。カレンはいつも優しいよ。私の大事な精霊」

リ「みんな自分の精霊を大事にしてるんだね」

ア「カレンは普段はどうしてるの？」

由「あんまり姿は見せないかな。家でも実体化することはほとんどないかな」

リ「家族がいるからね。みんなは無理もないかな」

ア「次の紹介だよ」

名前：カカシ

好きな物：持ち馬、草原

嫌いな物：駄馬

“暗黒騎士ガイア”の精霊。

啓斗の精霊。本編の精霊の中では最も口調が悪いが、仁義に厚い。争いを好む訳ではないが拒む柄でもない。

リ「啓斗の精霊、カカシの紹介だね」

ア「そういえば由里は啓斗のことどう思ってるの？」

由「ふえ？友達だよ？」

リ「普通の友達？」

由「そうだよ？」

ア「これは先が思いやられそうだね」

リ「啓斗も自覚ないし」

由「????？」

ゲストが困惑してるので次にいって下さい。

リ「はいはい。次はオリカの紹介だよ」

“SP ジェット・ブスター”
SPスペル

お互いのSPカウンターを2つ増やし、お互いにデッキからカードを1枚ドロウする。

“ S P 探偵推理”
S P スペル

S Pカウンターが4個以上ある時、自分のデッキの一番上のカードを宣言する。そのカードが宣言したカードだった場合、自分場上に特殊召喚する。宣言したカードでない場合、そのカードを墓地に送る。

リ「ファントムが使ったカードだね」

ア「ファントムってライディングデュエルもできたんだね」

ガイ「コツですがね。」

由「ガイコツって怖いよね。ビックリしたもん」

リ「初めて見た時は怖いよね」

そりゃそうですよ。

ア「次だよ」

“ 低魔力通過”
通常魔法カード

自分場上に存在する攻撃力1000以下の魔法使い族モンスター1

体を選択する。選択したモンスターはこのターンのバトルフェイズ、ダイレクトアタックができる。

“ 高尚なる魔術師トエル・カウロ ”

レベル 6

ATK / 2300

DEF / 1500

種族 / 魔法使い族

属性 / 闇

シンクロモンスター

チューナー + 魔法使い族モンスター

このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地から魔法カードを1枚選択し、手札に加える。

モンスター1体を選択し、選択したモンスターの攻撃力をエンドフェイズまで半分にする。

リ「オレがミステイさんとのデュエルで使ったカードだね」

ア「あの時はビックリしたよ。ミステイさんが来るなんて思いもしなかったから」

由「にやはは。そうだね。

トルンカのごとは、二人とも知ってたんだよね？」

ア「ちよつとした知り合いだったんだよ」

リ「あの頃のトルンカからは想像できない力を持ってるとはね」

ア「あはは。確かに」

由「次のカードだよ」

“くず鉄の罫”
通常罫カード

相手モンスターの効果発動時に発動することができる。相手モンスター1体の効果の発動を無効にする。
発動後このカードは墓地に送らず、そのままセットする。

リ「啓斗のカードだね」

ア「“くず鉄”のカードっていろいろあるよね」

リ「ジャンクデッキにはよく入ってるね。遊星も使ってるし」

由「そうなんだ。遊星さんのデュエルはあんまり見たことないからなあ」

リ「遊星とは一度デュエルすることをオススメするよ」

ア「私も遊星さんとはデュエルしてみたいな。さ、次のカードだよ」

“SP サンクチュアリ・フィールド”
SPスペル

SPカウンターが5個以上ある時発動することができる。自分場上にレベル1の天使族モンスターが存在する場合、手札のレベル5、もしくはレベル6の天使族モンスター1体を特殊召喚する。

“スピードリターン”

通常罠カード

SPカウンターを3個取り除くことで発動することができる。自分の墓地に存在する“SP”をゲームから除外して、その効果を発動する。

“セイクリッド・ワンド”

レベル5

ATK/1500

DEF/1200

種族/天使族

属性/光

シンクロモンスター

天使族チューナー+チューナー以外の天使族モンスター1体以上1ターンに一度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとしてモンスターに装備、または装備を解除して攻撃表示で特殊召喚することができる。この効果で装備カード扱いになっている場合のみ、装備モンスターの攻撃力は1500ポイントアップする。装備モンスターが破壊される場合、代わりにこのカードを破壊する。

“ エンジェル・チエンジ ”
通常罨カード

自分場上に存在する天使族モンスター1体をリリースして発動する。
自分の手札のレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する。

“ ライトニング・ドラグーン ”
レベル7

ATK / 2500

DEF / 1700

種族 / ドラゴン族

属性 / 光

シンクロモンスター

自分のメインフェイズ時にこのカードの攻撃力を1000ポイントにし、このターンこのカードは相手プレイヤーに直接攻撃できる。
また、1ターンに一度、このカードを対象とする相手プレイヤーのカード効果を無効にする。

“ ドラゴニック・リバーズ ”
通常罨カード

自分場上に存在するドラゴン族モンスター1体をリリースして発動する。リリースしたモンスターのレベルと同じレベルのドラゴン族モンスター1体を墓地から特殊召喚する。

リ、今回は多かったね

」

ア「学園対抗戦の代表決定戦で使ったカードだね」

由「私のカードと啓斗君のカード、アリスちゃんのカードだね」

リ「オレは出番なかったからね」

因みに、“セイクリッド・ワンド”のイメージは誰かさんのデバイス、“ライトニング・ドラグーン”は雷を纏ったドラゴンです。

ア「次のカードだよ」

リ「学園対抗戦、1戦目のサウス校戦のカードだよ」

“ジャンク・コレクション”

通常罾カード

自分の場上がこのカードのみの場合、自分のデッキから“ジャンク”と名のつくモンスターを2体を特殊召喚する。

“マジカル・ヘッジホッグ”

レベル3

ATK/1000

DEF/1000

種族/魔法使い族

属性/光

効果モンスター

自分場上にチューナーが召喚に成功した時、墓地から特殊召喚できる。この効果で特殊召喚したこのカードは場上から離れた場合、ゲームから除外される。

“ S P 枯渇する魔力 ”

S P スペル

S P カウンターが4個以上ある時発動できる。自分と相手場上に存在するモンスターが2体以上の場合のみ発動することができる。発動ターンのエンドフェイズまでお互いの場上に現在存在するモンスターの効果を無効にする。

“ 魔法神官 ホワイトブラック ”

レベル8

A T K / 2 8 0 0

D E F / 2 8 0 0

種族 / 魔法使い族

属性 / 光

シンクロモンスター

チューナー+チューナー以外の光属性モンスターと闇属性モンスター1体以上

このカードの属性は“闇”としても扱う。このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した時、相手場上に存在するモンスター1体を破壊する。このカードが場上から離れた時、場上のカード1枚を破壊する。

“ファイナルブースト”
通常罨カード

自分のライフポイントが1000以下の時、自分のSPカウンターを4つ増やす。

“超魔導剣士 ブラック・パラディン・ガール”
レベル8

ATK / 2500

DEF / 2100

種族 / 魔法使い族
属性 / 闇

融合モンスター

“ブラックマジシャンガール” + “魔導戦士 ブレイカー” + “魔導騎士 デイフェンダー”

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードが場上に存在する限り、手札を1枚墓地に送ることで、罨カードの発動を無効にし破壊する。このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在する魔法使い族モンスター1体につき300ポイントアップする。

“SP ファイナル・マジック”
SPスペル

SPカウンターが10個以上ある時発動できる。自分場上に存在するレベル7以上の魔法使い族モンスターはこのターンのバトルフェイズ中に2回攻撃できる。

リ「啓斗の“ジャンク・コレクション”を除けば、全部オレのカードだね」

ア「リヨウ、少し自重した方が」

由「私もそう思うよ」

リ「オレに言わないでよ、二人とも。言うならせめてグッチーさんに言つて」

気にしないで下さい。

ア「いや、自分が気にしようよ」

由「アリスちゃんの言う通りだよ」

リ「気にするだけ無駄だろうけどね。因みにイメージは？」

“マジカル・ヘッジホッグ”は杖を持つてるボルト無しの“ボルト・ヘッジホッグ”。

由「既に“ボルト・ヘッジホッグ”じゃないね」

“魔法神官 ホワイトブラック”は白黒半色ずつの“黒の魔法神官”ですね。

ア「そんな感じだね」

“超魔導剣士 ブラック・パラディン・ガール”は言うまでもなく

“ブラック・パラディン”のガール版ですね。

リ「確かにね。さて、次にいくよ」

『賢者の部屋！』

リ「さて、何の質問があるのかな？」

ア「とりあえず、一つは確実に言っておかないといけないことがあるよね」

はい。お願いします。

由「啓斗君が使うカードに“ライトニング・ウォリアー”と“ジャンク・ブレード”があるんだけど、OCG効果と違ってるよね」

ア「グッチーさんは漫画版5D'sを参考に効果を使用してるんだよ」

リ「それも初期の効果だね。“ジャンク・ブレード”に至っては若干オリカっぽくなってるし」

申し訳ありません。

由「かといって、今から変えるのは大変だから、第二期まではこの効果を使用します」

ア「第三期からOCG効果を使う筈だから」

リ「ご了承ください」

お願いいたします。

由「実はこれが一番多かったんだよね」

リ「ま、仕方ないことだけどね」

ア「他には本編のミスの指摘が」

すいません。

由「なんだか謝ってばかりだね」

リ「そんな人だからね」

指摘の度に行えるだけ早く修正して再投稿しています。

ア「このくらいかな」

リ「そうだね」

由「ねえねえ、第二期って今の本編の学園対抗戦で終わりなんだよね?」

その予定です。+ もある予定ですけどね。

ア「+ って何するの?」

まだ秘密です。ちょっとしたことすし。

由「ちょっとしたことなんだね」

リ「期待は大してしてないよ」

そんなことを言っているんですか？

リ「なんで？」

貴方が楽しむことがあるからですよ。

リ「へえ。じゃあ楽しみにしてようかな」

ア「よかったね、リヨウ」

もう一つお知らせです。時期に合わせてになると思いますが、番外編を投稿しようかと思っています。

由「例えば？」

バレンタインとかですかね。

リ「却下！」

『早っ！』

コンマ何秒の世界でしたね。

リ「なんでバレンタインな訳！？他にもいろいろあるでしょ！？」

クリスマスとかありますけど、その頃は皆さんいろいろと大変な予

定ですし。

リ「どうでもいいよ！とにかく！バレンタインは却下！」

ア「まあまあ。落ち着いて、リヨウ」

由「そうだよ。リヨウ君」

リ「二人ともオレが嫌ってるもの知ってるよね!？」

ア「う、うん。知ってるけど」

由「別にいいじゃない」

リ「なんで好き好んで嫌いなものを食べなくちゃいけないんだよ」

まあ、頑張れ。

由「だいたい、私には甘いものが嫌いな理由が解らないよ」

リ「悪かったね！」

ア「ほら。落ち着いてよ、二人とも」

由「アリスちゃん」

ア「二人がその言い争いしたら一生平行線だよ。もう聞き飽きたんだから」

由「うっ、ごめんね」

リ「ごめん」

ア「それで？結局どうするの？」

す「だと思いますよ。番外編バレンタイン。

由「わ〜」

リ「」

ア「えっと、我慢だよ？リヨウ」

リ「解ったよ」

由「そうそう。我慢我慢」

リ「楽しそうだね、由里」

さて、今回はこれで終わりですかね。

リ「次回は学園対抗戦が終わってからかな」

ア「そうだね」

由「私はこれで終わりだね」

ア「今回はありがとう、由里」

由「うん。また呼んでね」

いつになるかは解りませんがね。

リ「それでは、今回はここまで。お送りは、リョウと」

ア「アリス・ルシエと」

由「武内由里でした」

『バイバイ』

第5回：Bの世界（後書き）

番外編についてはまたいつか投稿したいと思います。

本編については以前言った通りにいけば、次の投稿は休日になる予定です。

それでは、グツチーでした。

第二十一話：不安（前書き）

今回で相方登場です。

名前が若干変わっていますが。

短いですがデュエルもあります。

それでは、どつど。

第二十一話：不安

『決着ー！なんとー、ネオドミノ校ラストホイーラー、リヨウによる奇跡の三人抜きだー！』

勝利を収めたのは、ネオドミノ校！』

オレと手島さんはともにDホイールを止めた。

「負けた。完敗だ」

「いや。危なかったよ」

手島さんは少し笑ってから戻っていった。

オレはまだ戻る気にはなれない。一言言っておきたいからね。

「やったな、リヨウ」

「ありがとう、遊星。見に来てたんだね」

オレに声をかけてきた張本人。

「遊星の一言で目が覚めたよ。ありがとう」

「気にするな。最近はずっと調子が良いみたいだな」

「まあね」

「負け無しのようだな」

「そついえばそつかもね」

「負けるなよ、リヨウ。オレがお前にリベンジするまでなるほどね。遊星も負けず嫌いなんだ。」

「いいよ。オレは、オレたちは遊星とまたデュエルするまで負けない。もちろん、遊星に負けるつもりはないけどね」

「フツ、今度はオレたちが勝つさ」

コツン、と拳をぶつけ合う。

そしてお互いに笑い合っつてオレはその場を去った。

「リヨウ、お疲れ様！」

「リヨウ君、凄いよ！」

アリスと由里がそれぞれ迎えてくれた。

「ありがと。さ、控室に戻るうか」

「いや、悪いが先に戻っててくれ」

「啓斗？」

若干顔が険しいけど。

「俺のことは放つといってくれて構わねえからよ」

「どうかした？」

「放つといってくれ！」

『ちょっと！リヨウにそんな言い方は』

マナが何か言いかけたのを止めた。その隙に啓斗はどこかに歩いていく。

「リヨウ、先に戻ってて」

「私もかな」

「解ったよ。先に戻ってるからね」

アリスと由里も控室とは別方向に歩いていく。

『悔しいのだろうな』

マハードがマナの隣に姿を現した。

「そうだろうね。マナ、あんまり気にしちゃダメだよ？」

『だって！リヨウは悪くないのに、あんな言い方して』

「気持ちは嬉しいけど、啓斗だって本心で言ってる訳じゃないだろうしね」

『自分の不甲斐無さに苛立ちを抑え切れなかったのだろう。察して

やれ』

『 はあ〜い』

マナは少しふて腐れちゃったかな。そんなに気にすることないのに。

「さ、オレだけでも控室に戻って、次のデュエルを見よう。他の学園のデュエルだからね」

控室に入ると、残ってる学園の代表以外にはいなかった。まだサウス校は戻ってないみたいだね。

「あ、リヨウさん」

美庄さんか。ということは、今はイースト校とウエスト校のデュエルなんだね。

「凄かったわ！」

「ありがと。ギリギリだったけどね」

オレに笑顔を向けてくれる。優しい人だね。

「舞〜！」

ん？美庄さんの友達かな？

「誰と話して って、リヨウ!？」

「ちよっと!咲!」

「あつ！ごめん！」

笑顔で話しかけてきたと思ったら、驚いたり謝ったり、忙しい娘だな。

「ごめんなさい。私の友達が」

「ああ、気にしないでいいよ」

「良い人じゃん！」

「もう、そういう問題じゃないでしょ！」

「いいじゃん。許してくれたんだから」

美庄さんは少し呆れてる。対照的な二人だね。

「とりあえず、名前は？」

「立花咲！舞と同じノース校一年だよ」

「オレはネオドミノ校一年のリョウ。よろしくね」

「うん！」

元気一杯だね。

「凄いデュエルだったね、リョウさん」

「リヨウでいいよ。その方が呼びやすいでしょ？」

そう感じたしね。

「マジで？じゃあ私のことは咲でいいよ」

「解ったよ、咲。美庄さんもオレのことはリヨウで構わないよ？」

「え？でも」

「舞は考え過ぎだよ。いいじゃん、そう言ってるんだから」

「じゃ、じゃあ、私のことは舞で」

「ん。舞だね」

この対抗戦で新しく友達ができた。二人とも女の子だけど、問題ないよね？

side 舞

私はフォーチュン・カップを見に行った時に初めてリヨウさん、じやなくてリヨウを見た。

どんな状況でも諦めない姿勢と、揺るがない意志の強さに憧れを抱いた。

私は咲と一緒にノース校の一年生として通ってた、今も通ってるけど、フォーチュン・カップを見てから、少なからずリヨウは私の目標だった。

治安維持局がライディングデュエルを奨励したことで、咲と一緒に挑戦してみると、最初は苦労したけど、上手になってノース校の代表になれた。学園の対抗戦だから、ひよっとしたらリヨウも代表として出場するかなって思ってたけど、本当にネオドミノ校の代表として出場してた。

控室で一人で立ってたから、ちょっとだけ勇気を出して声をかけてみた。

リヨウは私の突然の声かけに優しく対応してくれた。

そして、最初のデュエル。ネオドミノ校対サウス校のデュエル。ネオドミノ校は、いきなりピンチに追い込まれてラストホイーラーのリヨウに回る。サウス校は三人残ってて、ライフの合計は約1000ポイント。そんな圧倒的不利な状況から全てひっくり返して三人抜き。凄いの一言に尽きるよね。

今、デュエルを終えて控室に戻ってきたリヨウに私はまた声をかけた。

咲も一緒に話してたし、開会式前よりは会話もできた。ちょっと不本意だったけど、咲のお陰でお互いに名前を呼び合えるくらいになった。

彼は私たちと一通り話した後、ウエスト校とイースト校のデュエルを真剣に見てる。今度デュエルする相手の分析してるのかな。

「ねえ、舞。どうしてリヨウに話しかけてみたの？」

「えッ？どうしてって」

そういえば、どうしてだろう。なんで勇気を出してまで。

「なにに？何か理由があるんじゃないの？」

「よく解らない。気がついたら声をかけてたの」

「ふうん。舞は一つのこと集中し過ぎて、周りが見えなくなるからね」

「それは言わないで、咲」

私の悪い癖の所為なのかな。

『遂に決着ー！勝利を収めたのはウエスト校だー！』

あ、終わったのね。今日はこれで終わりの筈だから、私たちのデュエルは明日かな。初戦はサウス校だった筈だけど。

「終わりだな。さつさと帰ろうぜ」

「旅館にだけどナ。立花、クイーン、戻ろう」

またその呼び方。

「はい。ジエームスさん、クロコダイルさん」

「はい」

「舞、咲、それじゃあ」

リヨウは軽く手を振ってくれてる。私たちも手を振り返して別れた。

side out

一日目の日程が終了した。

ネオドミノ校以外の学園は開催地のスタジアムから遠い。帰るのも一苦労ということで、スタジアムの近くにある巨大旅館を貸し切ってるらしい。ただし五校全て同じ旅館に泊まる。ネオドミノ校の生徒は楽に帰れるけど、公平さに欠けるといふことらしい。

一同は旅館に行き、それぞれに休みをとる。

とは言え、各学園の応援に来ている生徒はほとんど何もしてないから、一部の人はある意味旅行みたいに来てたからね。多分遊ぶ為にだろうね。

オレは旅館の食事を食べた後、ぼんやり部屋に戻った。

啓斗はいない。旅館に来てから一度も見えてない。アリスと由里も。あの三人ならそれほど気にする必要はないと思うけどね。

かと言って旅館の部屋は個室じゃなくて大部屋。

マハードやマナと話そうにも一人じゃない以上話しにくいし、不審に思われる。何より、部屋にいたところで何もすることはないから退屈なんだよね。

そう思っ外に出た。

近くにはつい最近に完成し、シティとサテライトを繋いだ象徴として造られたモニュメントがある。

もうすぐシティとサテライトが完全に繋がる。ネオダイダロスブリ

ツジが完成するんだね。遊星たちが喜んでたのを覚えてる。まだよく見てないから、この機会によく見ておこうかな。

『誰か先にいるみたいだよ』

マナの言う通り、誰かいるように見える。見たことある人

『ノース校の美庄舞、だったな』

マハードの言う通り、舞がいる。何かしてるように見えるけど。

「舞、何してるの？」

「

返事は返ってこない。

そっと覗いてみると、絵を描いている。モニュメントを描いてるんだね。

ほとんど描き終えてて、今は仕上げるところかな。

「舞」

もう一度話しかけてみたけど、反応はない。よっぽど集中してるんだね。

絵を描く舞を見ながら、少し待つことにした。数分後、描き終えたのか、舞が一息ついた。

「終わった？」

「きゃあっ!」

舞がビックリして声を上げる。本当に気付いてなかったんだね。

「リョ、リョウ。いつの間に」

「少し前から。話しかけたけど集中してたみたいだから」

「ご、ごめんなさい!私、また」

「いいよ。それより、絵、描くの上手だね」

「あ、ありがとう」

何て言うか、芸術的って言うのかな。素人のオレが見てもこの絵は上手いと思う。

side 舞

ビックリした。

リョウが見てたなんて。
この癖、直さなくちゃ。

「リョウはどうしてここに?」

「暇だったからね。何もすることなかったし。このモニュメントをよく見てみよつと思ってね」

「そつ」

「ところで、舞はクイーンって呼ばれてなかった？」

「えッ、えっと」

「ごめん。あんまり聞かれないことみたいだね」

「あ、うん」

私が気にしてること、なんだよね。

「控室でそう呼ばれた時、少し嫌そうな顔したように見えたから少し気になってね。オレでよければ話くらい聞くよ？」

「でも」

「舞の気持ち少しは解るからね。キングだの何だのと言われてるから」

リヨウも言われてるんだ。元キングのジャック・アトラスに勝ってるし。

「初めて出会ったばかりで話しにくいかもしれないけど、困ってる人は放っておけないんだ。よかったら話してくれる？」

この人は私と同じ想いを感じてるのなら、理解してくれるのかな？

「実は」

ポツリポツリと話し始めて、話を聞いてもらった。

「つまり、舞はノース校のトップになって、クイーンって呼ばれ始めたんだね。

呼ばれるのはもちろん嫌だけど、それ以上にこの対抗戦でプレッシャーを感じてるんだね」

「うん」

最後まで真剣に聞いてくれた。

私はプレッシャーに負けそうでした。少し楽になりたくて、絵を描いてたから。

「うーん、なんとなく解るかな、その気持ち。周りの期待だけ大きくなるから」

「リヨウはプレッシャー感じたりしないの？」

「するよ。今日だって緊張してたからね」

「そんなふうには見えなかったけど」

「オレはチームリーダーだからね。他のメンバーは同じ一年だし、オレがみんなを不安にさせる訳にはいかないから」

そこまで考えてるんだ。凄いな。

「舞はどつしてデュエルしてるの?」

「えッ?」

どつしてそんなことを?

「ん?」

「えっと、それは、デュエルが楽しくて」

リヨウはニツコリと笑った。

「だよね。オレもだよ」

「それがどつしたの?」

「オレが言いたいのは、その気持ちを忘れないで欲しいってことだよ」

「」

「プレッシャーを感じるのは避けられないと思う。でも、デュエルは本来楽しむものだから、楽しんでデュエルすればいい。」

楽しんでデュエルして、負けた時は受け入れればいい。周りがどんな反応を示すかは解らないけど、悔いの残らないデュエルができたのなら、周りも結果を受け入れてくれるよ」

「そう、なのかな」

「きつとね。どんなに強いデュエリストでも無敗はありえないよ」

「 うん。そうね」

「胸を張って、楽しんでデュエルしよう。ね、舞」

「うん！」

この人は凄い。同い年なのに、私よりもいろんなことを経験してるんだらうな。

「ノース校は明日デュエルだね。見てるから、がんばってね」

「うん！がんばるわ」

励ましてくれたリヨウの為にも楽しんでデュエルしてるところを見せたいな。

「そろそろ戻ろうか？明日に備えないとね」

「うん！」

私はリヨウに促されて、旅館に戻っていった。

ありがとう。

side out

翌日、スタジアムで今日最初のデュエルが始まった。

今日の最初のデュエルはノース校対サウス校。序盤はオレたちの時と同じようにサウス校が押してたけど、ノース校サードホィーラーの咲が巻き返して、ラストホィーラーの舞が止めを刺した。

次のデュエルはオレたちネオドミノ校対ウエスト校だから、コースに向かう途中で舞と咲に逢う。

「二人とも、お疲れ様。良いデュエルだったよ」

「ありがとう！」

「次はネオドミノ校のデュエルよね。がんばって」

軽く言葉を交わしてからすれ違った。

「今の二人は？」

「友達だよ」

「そうなんだね」

アリスとの会話だけど、口数が少ない。啓斗と由里もほとんど喋らないし。

オレが不安を抱きながら、みんなで準備を進めてデュエル開始を待つ。

「さあ、本日第二デュエル！第一戦をリョウの見事な三人抜きで勝利したネオドミノ校と、イースト校を降して勝利を収めたウエスト校だー！両校一勝同士のデュエル！どちらが軍配を上げるのかー！

『?』

啓斗とウエスト校のファーストホイーラーはスタートラインに。
このデュエル、少し不安だな。

『ライディングデュエル！アクセラレーション！』

啓斗は上手くスタートを きれなかった。スタートの流れのまま
第一コーナーを取られる。
やっぱり、不安だな。

side 啓斗

また先攻を取られちゃったか。 。まあ、別に問題はねえ。

『デュエル！』

「オレは高梁、よろしく」

「ああ、よろしくな」

「オレのターン！手札から“巨大ネズミ”を召喚！」

ATK/1400

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターン！」

速攻で決めてやる！あんなみっともねえデュエルで迷惑かける訳にはいかねえんだ！

「俺は“トライデント・ウォリアー”を召喚！」

ATK/1800

「このカードが召喚に成功した時、手札からレベル3モンスターを召喚できる！」

俺は“クイツク・スパナイト”を特殊召喚！」

ATK/1000

「いくぜ！レベル4の“トライデント・ウォリアー”に、レベル3の“クイツク・スパナイト”をチューニング！
受け継がれし魂が、光となって駆け昇る！

シンクロ召喚！光来せよ！“ライティング・ウォリアー”！」

ATK/2400

「シンクロ素材となった“クイツク・スパナイト”の効果で、“巨大ネズミ”の攻撃力を500下げる！」

ATK/900

「いけ！“ライティング・ウォリアー”！ライティング・パニッシュヤー！」

「ぐっぐっ！」

高梁 LP 2500

「ライトニング・ウォリアー」の効果発動！モンスターを破壊した時、俺の手札1枚につき400のダメージを与える！
俺の手札は4枚！1600のダメージだ！」

「ぐああっ！」

高梁 LP 900

おっし！

「巨大ネズミ」が破壊された時、デッキから攻撃力1500以下の地属性モンスターを特殊召喚できる！

“スクラップ・サーチャー”を特殊召喚！」

ATK/100

“スクラップ”か。

「俺はカードを2枚伏せ、ターンエンドだ！」

「オレのターン！」

SP 2

「SP エンジェルバトン」を発動！SPカウンターが2つ以上ある時、デッキからカードを2枚ドロし、1枚を墓地に送る。

手札から“スクラップ・キマイラ”を召喚！」

ATK / 1700

「このカードが召喚に成功した時、墓地の“スクラップ”チューナーモンスターを特殊召喚できる！」

墓地から“スクラップ・ゴブリン”を特殊召喚！」

今墓地に送ったカードか。

「こちらもいかせて貰う！レベル4の“キマイラ”とレベル1の“サーチャー”に、レベル3の“ゴブリン”をチューニング！シンクロ召喚！“スクラップ・ドラゴン”！」

ATK / 2800

「スクラップ・ドラゴン”の効果発動！1ターンに一度、自分と相手場のカード1枚を破壊する！オレは自分の伏せカードと“ライティング・ウォリアー”を破壊する！」

「させるか！手札の“ジャンク・ブロッカー”の効果発動！このカードを墓地に送り、カード効果による破壊を無効にする！」

これで“ライティング・ウォリアー”は無事だ。

「ならばバトルだ！“スクラップ・ドラゴン”で攻撃！」

「チッ！」

啓斗 LP 3600

「だが、俺は罠を発動する！ “受け継がれる魂”！俺のシンクロモンスターが破壊されたバトルフェイズ終了時、破壊されたモンスターと同じレベルの通常モンスターをデッキから特殊召喚できる！
来い！ “暗黒騎士ガイア”！」

ATK / 2300

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターン！」

SP 3

「いくぜ！カカシ！」

『久々の出番だ。任しときな』

「バトルだ！ “ガイア” で “スクラップ・ドラゴン” を攻撃！」

「なにっ！？ 攻撃力が劣るモンスターで攻撃するだっ！？」

もちろんただで攻撃する訳じゃねえ！

「俺は罠カード “死翔の鎗” を発動！このターン、“ガイア” とバトルするモンスターは、ダメージ計算を行わずに破壊する！」

「ぐっ！」

「穿て！」

カカシが投げた鎗が“スクラップ・ドラゴン”に突き刺さり、砕け散る。

「さらに、この効果でモンスターを破壊した場合、1000ポイントのダメージを与える！」

「ぐうっっ！」

高梁 LP 0

一人目だぜ！

「破壊された“スクラップ・ドラゴン”の効果発動！墓地の“スクラップ”モンスター1体を特殊召喚できる！」

“スクラップ・キマイラ”を特殊召喚！」

ATK/1700

チツ、面倒なものを残していきやがる。

「流石啓斗君、あっという間に一人倒したよ」

「うん。流石だね」

「」

このデュエル、オレはやっぱり不安だな。

第二十一話：不安（後書き）

注意を一つ。

今回、リヨウは負けてないと言っていましたが、他の作者様とのコラボで一度負けています。

本編での話なのであまり気にしないで下さい。宜しければ、コラボも見てみて下さい。

次話は全てデュエルだと思いません。

それでは、グッチーでした。

第二十二話：チーム戦（前書き）

今回、リョウのらしくない一面？が見られます。

では、本編どうぞ。

第二十二話：チーム戦

side 啓斗

「おおーっとー！ネオドミノ校ファーストホイラー、石井啓斗強し！早くもウエスト校ファーストホイラーを倒してしまったぞー！」

セカンドホイラーが来たな。

「オレは浜田！よろしく！」

「デュエル！」

「オレのターン！」

SP 4

「オレは“SP ハイスピード・クラッシュ”を発動！SPカウンターが2つ以上ある時、オレは伏せカードを破壊し、場のカード1枚を破壊するよ！」

“暗黒騎士ガイア”を破壊！」

「なっ！？」

「チッ」

クソッ！カカシがやられちゃった。

「スクラップ・キマイラ」をリリースして“充電池メン”をアドバンス召喚だよ！」

ATK / 1800

「このカードが召喚に成功した時、デッキから“電池メン”を特殊召喚できる！」

“電池メン 単三型”を特殊召喚！」

ATK / 0

「このカードの攻撃力は場の“単三型”1体につき1000ポイントアップするよ！」

ATK / 1000

「さらに“充電池メン”の攻撃力は雷族モンスター1体につき300ポイントアップする！」

ATK / 2400

「いくよ！2体のモンスターでダイレクトアタックだよ！」

「ぐああっ！」

啓斗 LP 200

「まだ俺のライフは残ってるぜ」

「“スピードワールド2”の効果発動！SPカウンターを4つ取り

除き、手札の“SP”1枚につき800ポイントのダメージだよ！」

浜田 SP 0

まだあるのかよ。俺はもう終わり、か。

啓斗 LP 0

side out

啓斗がピットに戻ってきた。

「由里、頼むぜ」

「うん！いつてくるよー！」

セカンドホイーラーの由里がスタートする。

由里は。

side 由里

私はコースに出た。昨日みたいにはいかないよ！

「次は君だね」

「よろしくね」

『デュエル！』

「私のターン！」

浜田 SP 1

由里 SP 5

「私は“ハネクリボー”を守備表示で召喚するよ」

DEF / 200

「SP サンクチュアリ・フィールド”を発動！SPカウンターが5個以上ある時、レベル1の天使がいる場合、手札のレベル5か6のモンスターを特殊召喚できるよ。

“光神テテユス”を特殊召喚！」

ATK / 2400

「バトル！“テテユス”で“電池メン 単三型”を攻撃！」

「甘いよ！オレは手札から“オネスト”の効果を発動！バトルする相手モンスターの攻撃力をアップするよ！」

ATK / 3400

しまった。 “テテユス”が迎撃される。

「きゃあっ！」

由里 LP 3000

「っ！私はカードを2枚伏せてターンエンド」

「オレのターン！」

浜田 SP 2

由里 SP 6

「オレは“電池メン 単三型”をもう1体召喚！攻撃力アップ！」

ATK/2000

「いくよ！“単三型”で攻撃だよ！」

「罨カード“閃光のバリア シャイニング・フォース”！攻撃表示モンスターが3体以上いて、攻撃してきた時、攻撃表示モンスターを破壊するよ！」

「うわあっ！」

よし、形勢逆転だね。

「むむ、オレはカードを2枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン！」

浜田 SP 3

由里 SP 7

「私は“ハネクリボー”をリリースして、“天空騎士パーシアス”を召喚！」

ATK / 1900

「さらに“天空騎士パーシアス”をリリースして、“天空勇士ネオパーシアス”を特殊召喚！」

ATK / 2300

「バトル!“ネオパーシアス”でダイレクトアタック！」

「うわああっ！」

浜田 LP 1700

「“ネオパーシアス”が戦闘ダメージを与えた時、私はカードを1枚ドロウするよ。」

私はこれでターンエンド」

「オレのターン！」

浜田 SP 4

由里 SP 8

「オレは“電池メン 単一型”を守備表示で召喚だよ！」

DEF / 1900

「罨カード“雷の裁き”発動！雷族モンスターが召喚された時、相手場のカード1枚を破壊するよ！」

“天空勇士ネオパーシアス”を破壊するよ！」

「させない！カウンター罠“盗賊の七つ道具”！1000のライフを払って罠カードの発動を無効にするよ！」

由里 LP 2000

「うつつ。カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン」

浜田 SP 5

由里 SP 9

私が押してる。攻めるよ！

「いくよ！“ネオパーシアス”で攻撃！」

「うつつ！」

浜田 LP 1300

「“ネオパーシアス”は貫通能力を持つてる。私はカードを1枚ドロウするよ。」

カードを1枚伏せて、ターン終了」

「オレのターンだよ！」

浜田 SP 6

由里 SP 10

「オレは罠カード“リミット・リバーズ”発動！墓地から“電池メ
ン 単三型”を特殊召喚だよ」

ATK/1000

「“単三型”をリリースして、“超電磁稼動ボルテック・ドラゴン”を召喚！」

ATK/2400

「このカードが“単三型”をリリースして召喚された時、攻撃力を
1000ポイントアップするよ！」

ATK/3400

「バトルだよ！“天空勇士ネオパーシアス”を攻撃だよ！」

「クスッ」

「おや？」

「お返しだよ。私は手札の“オネスト”の効果発動！“ネオパーシ
アス”の攻撃力アップ！」

ATK/5700

「なっ、なんだってー！？うわあぁっー！」

浜田 LP 0

「私はカードを1枚ドロ―」

よし。私も倒したよ。私が引つ張らなくちゃ。

「おっし！やったぜ！」

「うん。流石由里だよ」

「」

不安が拭い切れない。どうなるかな。

『さあ、ウエスト校サードホーラーの登場だー！』

次の人が来たね。

「次は俺様、竹田なんじゃい」

『デュエル！』

「俺様のターンじゃい」

竹田 SP 7

由里 SP 11

「“フレムベル・ドラグノフ”を守備表示で召喚じゃい」

DEF / 200

「カードを1枚伏せ、ターン終了じゃい」

「私のターン」

竹田 SP 8

由里 SP 12

「私は“コーリング・ノヴァ”を召喚」

ATK / 1400

「畏発動じゃ！“落とし穴”！攻撃力1000以上のモンスターが召喚された時、そのモンスターを破壊するんじゃ！」

あれは浜田さんが残した畏カード。厄介なカードを残してたんだね。

「だったら、バトル！“ネオパーシアス”で攻撃！」

「畏カード“ガード・ブラック”発動じゃい！戦闘ダメージを0にして、カードを1枚ドローじゃ」

でもモンスターは破壊できる。

「さらに破壊された“フレムベル・ドラグノフ”の効果発動じゃい！このカードが戦闘で破壊された時、500ポイントのダメージを与えるんじゃ！」

「っ！」

由里 LP 1500

「私はこれでターンエンド」

「オレのターンじゃない！」

竹田 SP 9

「オレは“SP ハーフ・シーズ”を発動じゃい！SPカウンターが3つ以上ある時、相手モンスター1体の攻撃力を半分にして、その数値分のライフを回復じゃい！」

“天空勇士ネオパシアス”の攻撃力を半分にするんじゃい！」

ATK / 1150

竹田 LP 5150

「さらに“ハイドロゲドン”を召喚じゃい！」

ATK / 1600

「バトルじゃい！“ハイドロゲドン”で攻撃じゃい！」

「畏発動！“ソーラーレイ”！私の場の光属性モンスター1体につき、600ポイントのダメージを与えるよ！」

「ぬっ！」

竹田 LP 4550

「だがバトルは続行じゃい！」

「きゃあっ！」

由里 LP 1050

「“ハイドロゲドン”の効果発動じゃい！戦闘でモンスターを破壊した時、デッキから“ハイドロゲドン”を特殊召喚できるんじゃい！」

ATK/1600

っ！じゃあ私は。

「“ハイドロゲドン”でダイレクトアタックじゃい！」

「きゃあああっ！」

由里 LP 0

side out

由里のライフが尽き、ピットに戻ってきた。

「アリスちゃん！」

「うん。後は任せて」

次はアリスがスタートする。

オレが抱いた不安は多分的中した。その不安の正体はオレが考えてる通りの内容の筈。

side アリス

次は私の番だね。昨日はリヨウに迷惑をかけたから、今日はリヨウまで回さないつもりでいかないよ。

「次はお前さんじゃい」

「負けない」

『デュエル！』

「私のターン」

竹田 SP 10

「私は“スピードワールド2”の効果発動！SPカウンターを7個取り除いて、カードを1枚ドロロー！」

アリス SP 5

これで私の手札は7枚。まずは2体の“ハイドロゲドン”だね。

「私は“サファイアドラゴン”を召喚」

ATK / 1900

「SP 双生の竜”を発動！SPカウンターが3つ以上ある時、私の場のレベル4以下のドラゴンと同じレベルのドラゴンを手札から特殊召喚できる。」

“サファイアドラゴン”のレベルは4、よってレベル4の“真紅眼の飛竜”を特殊召喚！」

ATK / 1800

「バトル！2体のドラゴンで“ハイドロゲドン”を攻撃！」

「ぬぬっ！」

竹田 LP 4050

「私はカードを1枚伏せて、ターンエンド」

「オレのターンじゃい！」

竹田 SP 11

アリス SP 6

「オレは墓地の“ハイドロゲドン”2体と“フレムベル・ドラグノフ”をゲームから除外して、“氷炎の双竜”を特殊召喚じゃい！」

ATK / 2300

「このカードは墓地の水属性2体と炎属性1体のモンスターをゲ-

ムから除外することで特殊召喚できるんじゃない！」

上級モンスターへの布石だったんだ。

「さらに効果発動じゃない！手札を1枚捨てることでモンスターを1体破壊できるんじゃない！」

“サファイアドラゴン”を破壊じゃない！」

「っ！」

「さらに“大くしゃみのカバザウルス”を召喚じゃない！」

ATK/1700

「バトルじゃない！“氷炎の双竜”で“真紅眼の飛竜”を攻撃じゃない！」

「っっ！」

アリス LP 3500

「さらにダイレクトアタックじゃない！」

「畏カード“正統なる血統”発動！墓地の“サファイアドラゴン”を特殊召喚！」

ATK/1900

「ぬっ、攻撃は辞めじゃない。

“スピードワールド2”の効果発動じゃない！SPカウンターを10

個取り除き、“サファイアドラゴン”を破壊じゃい！」

竹田 SP 1

「っ！」

「カードを1枚伏せ、ターン終了じゃい」

「私のターン」

竹田 SP 2

アリス SP 7

「私は“黒竜の雛”を召喚！」

ATK / 800

「このカードを墓地に送ることで、手札から“真紅眼の黒竜”を特殊召喚！」

ATK / 2400

よし、シンを召喚できた！

『主アリス』

「どっしたの？」

『少しらしくない。吾にはそう見える。どっかゆとりがない』

「そんなことないと思うけど」

『いや、吾の気の迷いだろう。吾が力になる』

「いくよ！バトル！“氷炎の双竜”を攻撃！黒炎弾！」

「ぬっっ！」

竹田 LP 3950

「私はカードを2枚伏せて、ターンエンド」

「オレのターンじゃい」

竹田 SP 3

アリス SP 8

「オレは“バトルフットボラー”を守備表示で召喚じゃい」

DEF / 2100

「“大きくしゃみのカバザウルス”を守備表示にするんじゃい」

DEF / 1500

「カードを1枚伏せ、ターン終了じゃい」

「私のターン」

竹田 SP 4

アリス SP 9

「私は“ランス・リンドブルム”を召喚！」

ATK / 1800

「このカードは貫通能力を持つてる。

バトル!“ランス・リンドブルム”で“大きくしゃみのカバザウルス”を攻撃！」

「ぬっ！」

竹田 LP 3650

「さらに“真紅眼の黒竜”で“バトルフットボーラー”を攻撃！
そしてこの瞬間、畏発動!“ストライク・ショット”！モンスターの攻撃宣言時、そのモンスターの攻撃力を700ポイントアップして、貫通ダメージを与える！」

ATK / 3100

「うぬっ！」

竹田 LP 2650

「これでターンエンド」

「オレのターンじゃない」

竹田 SP 5

アリス SP 10

「墓地の“氷炎の双竜”と“大きくしゃみのカバザウルス”と“バトルフットボラー”をゲームから除外して、もう1体の“氷炎の双竜”を特殊召喚じゃい！」

ATK / 2300

また、なんだね。

「このカードの効果で、手札を1枚捨て、“真紅眼の黒竜”を破壊するんじゃない！」

『ゲツ ！』

「っ！」

シンがやられちゃった。

「バトルじゃい！“ランス・リンドブルム”を攻撃じゃい！」

「きゃ！」

アリス LP 3000

「罨カード“不死の竜”！墓地か除外されたドラゴン1体を特殊召喚できる！」

“真紅眼の黒竜”を特殊召喚！」

ATK / 2400

「大丈夫？」

『問題無い』

大丈夫そうだね。

「ぬっ！ ターンエンドじゃい」

「私のターン」

竹田 SP 6

アリス SP 11

「スピードワールド2”の効果で、SPカウンターを10個取り除いて、“氷炎の双竜”を破壊！」

アリス SP 1

これで相手場にモンスターはいない！

「バトル！ “真紅眼の黒竜”でダイレクトアタック！黒炎弾！」

「うぬうっ！」

竹田 LP 250

「私はカードを1枚伏せて、ターンエンド」

「オレのターンじゃいー！」

竹田 SP 7

アリス SP 2

悪いけど、もう何もさせないよ。

「罨カード“真紅眼の息吹”を発動！“レッドアイズ”と名の付くモンスターが場に存在する時、相手場上の伏せカード1枚を破壊して、500ポイントのダメージを与える！」

「うぬうっ！ぬわああっ！」

竹田 LP 0

まだ1枚伏せカードが残ってるのが少し気になるけど、これで私も一人倒したよ。

1170

「オツシャ！後一人だ！」

「うん！いけるよ！」

「」

『さあ、デュエルは大詰めを迎え始めているぞー！
ウエスト校ラストホイーラーの登場だー！』

最後の人が私の前に出てきた。

「俺は清水。良いデュエルをしよう！」

『デュエル！』

「俺のターン！」

清水 SP 8

アリス SP 3

「スピードワルド2”の効果、SPカウンターを4個取り除き、手札の“SP”1枚につき800のダメージを与える！俺の手札の“SP”は1枚！800のダメージ！」

清水 SP 4

「きゃっ！」

アリス LP 2200

「“SP エンジェルバトン”発動！SPカウンターが2つ以上ある時、デッキからカードを2枚ドロし、1枚を捨てる。

“クリッター”を召喚！」

ATK/1000

「永続罠“血の代償”発動！ライフを500払い、通常召喚をもつ一度行う！」

“クリッター”をリリース、“雷帝ザボルグ”をアドバンス召喚！」

清水 LP 3500
ATK/2400

「クリッター」が墓地に送られたことにより、攻撃力1500以下のモンスターを手札に加える。俺は「マシユマロン」を手札に加える。さらに「雷帝ザボルグ」がアドバンス召喚に成功した時、場上のモンスター1体を破壊する！
“真紅眼の黒竜”を破壊！」

『ググッ』

「っ！」

私の場にカードがなくなった。

「バトル！ “雷帝ザボルグ”でダイレクトアタック！」

「きゃあああっ！」

アリス LP 0

side out

アリスがピットに戻ってきた。

オレは既に準備を終えてソニックに乗っている。

「リョウ、ごめん。本当はリョウまで回したくなかったんだけど

」

「 どうして? 」

「 だって、昨日は 」

「 不甲斐ないデュエルをしたから? 」

コクリと頷く。皆まで言わなくても解る。ピットで聞いてる啓斗と由里も同じこと。

「 昨日、デュエルの後に反省して今日のデュエルがこれ? 」

『 『

「 気付いてる? 今日のデュエル、次の人に何も残さずにライフが尽きてるんだよ? 」

「 あ 」

「 それは 」

「 たまたまだったかもしれない。何も残せなかっただけかもしれない。 」

「 だけど、このデュエルは個人戦じゃない、チーム戦なんだ。一人倒す、それが精一杯で次に回せてなかった 」

「 けどよ! 一人一倒できれば 」

「 ウエスト校はちゃんと次に回してたよ。だから次の人が有利にデュエルできて、残ってたライフを削り取ってきたんだ 」

「チッ
」

「対するオレたちは次の人が不利な状況でデュエルを始めることになる」

現にこれからのオレの場にカードは無い。

「でも倒したんだよ？」

「今回はね。だけど、もし倒されたら？また昨日みたいな状況になってもおかしくないよ」

「う
」

昨日みたいな状況をオレが何度もひっくり返せる訳じゃない。

「あっ、その
」

アリスは少ししどろもどろになってるね。

「なんて、少し真面目に言ってみたりしてね」

オレは真面目な顔を緩めた。

「えっ
」

『ネオドミノ校ラストホイーラー、リヨウが出て来ないぞー！？何かトラブルかー！？』

そろそろ行かないとね。

「後でまた話そう。応援よろしくね」

オレはそう言い残してコースに出た。

「何かあったのか？」

「大丈夫。問題無いよ」

『リヨウが出て来たー！どうやら問題は無いようだ。
さあ、ラストホイーラーの一騎打ちだー！』

『デュエル！』

負ける訳にはいかないね。

さあ、いくよー！

第二十二話：チーム戦（後書き）

リヨウが怒った？という感じですね。

普段から物静かな人が怒ると言い知れぬ迫力があるんですよね。怖いです。

次話まで延びてしまいましたが、次話でこのデュエルは終わりです。

では、グッチーでした。

第二十三話：家族と恋人（前書き）

デュエルは前半だけです。

後半はいろいろすいません。

反省しています。しかし後悔はしていません。どうか暖かく見て下さい。

後書きには少しアンケートがあります。

では、どうぞ。

第二十三話：家族と恋人

『デュエル！』

「オレのターン！」

清水 SP 5

リョウ SP 4

ドローカードは、マナ。

『リョウ。その、あんまり気にするのは』

「大丈夫だよ。それほど気にしてる訳じゃないしね」

『ホントに？』

「ホントだよ。心配ないから」

実際、本当にそれほど気にしてないしね。それより、今はデュエルに勝たないと。

「“特攻のマジシャン”は、相手場上にのみモンスターが存在する場合、特殊召喚することができる！」

ATK / 100

「このカードが特殊召喚に成功した時、場の魔法・罫カード1枚を破壊する！“血の代償”を破壊！」

さあ、いくよ、マナ！

「特攻のマジシャン”をリリースして、“ブラックマジシャンガール”をアドバンス召喚！」

ATK / 2000

『いくよ！』

「さらに“SP スピードエナジー”発動！SPカウンターが2つ以上ある時、SPカウンター1つにつき、攻撃力が200ポイントアップする！」

オレのSPカウンターは5、マナの攻撃力は1000ポイントアップ！

ATK / 3000

「バトル！“ブラックマジシヤンガール”で攻撃！ブラック・バーニング！」

「うぐっ！」

清水 LP 2900

「オレはカードを1枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターン！」

清水 SP 6
リヨウ SP 5

「スタンバイフェイズに、俺の場に魔法・罫カードが存在しない場合、墓地の“黄泉ガエル”を特殊召喚できる！」

ATK/100

“エンジェルバトン”で墓地に送ったのはそのカードだったんだ。

「“黄泉ガエル”をリリース、“邪帝ガイウス”をアドバンス召喚
！」

ATK/2400

「このカードが召喚に成功した時、場上のカード1枚をゲームから除外する！」

“ブラックマジシャンガール”をゲームから除外！」

「しまっ
！」

『うっ、うあっ
』

マナが闇の中に吸い込まれる。

「除外したカードが闇属性モンスターの場合、10000のダメージを与える！」

「くあっ！」

リヨウ LP 3000

「さらに“邪帝ガイウス”でダイレクトアタック！」

「うあああつ！」

リヨウ LP 600

マズイ。セーフティラインを越えた。

「“スピードワールド2”の効果！SPカウンターを4つ取り除き、俺の手札1枚分の“SP”、800のダメージを与える！」

清水 SP 2

“SP”があるのか！

「俺の勝ちだ！」

「まだまだ！永続罠“魔力吸収波”を発動！手札の魔法使い族モンスター1体を墓地に送り、効果ダメージを無効にする！」

これで防いだ。

「くっ！」

「さらに、効果ダメージを無効にした時、カードを1枚ドロウする」

「流石だ。俺はターンエンド」

「オレのターン」

清水 SP 3

リヨウ SP 6

今のオレの手札に、逆転の一手は無い。耐え時だね。

「魔導騎士 ディフェンダー」を守備表示で召喚」

DEF / 2000

「このカードが召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを1つ置く。」

カードを2枚伏せ、ターンエンド」

「俺のターン！」

清水 SP 4

リヨウ SP 7

「スタンバイフェイズ、“黄泉ガエル”を特殊召喚」

ATK / 1000

あのカードをなんとかしないと上級モンスターが次々出てくるね。

「君は重大なミスを犯した。今の君の手札は0、俺のSPカウンターは4。この意味が解らない君ではないだろう?」

「試してみる?」

「いいだろう！ “スピードワールド2” の効果！SPカウンターを4つ取り除き、800のダメージを与える！」

清水 SP 0

「 “魔力吸収波” の効果発動！このカードを墓地に送り、効果ダメージを無効にする！」

このくらいは考えてあるよ。

「なるほどな」

「 “魔力吸収波” の効果で、カードを1枚ドロウする」

「ならば俺は “黄泉ガエル” をリリースし、 “ゴーレム” を召喚！」

ATK/2500

「このカードが存在する限り、光属性モンスターの効果は無効となる。さらにこのカードが戦闘で光属性モンスターを破壊した時、もう一度攻撃できる！」

とことん嫌な状況だね。

「バトル！ “ゴーレム” で攻撃だ！」

「墓地の “魔術の守護者” の効果発動！このカードをゲームから除外して、魔法使い族モンスターの破壊を無効にする！」

「くっ、ならば“邪帝ガイウス”で攻撃！」

「っ！」

でもこのターンは防ぎ切った。

「ターンエンドだ」

「オレのターン！」

清水 SP 1

リヨウ SP 8

「スピードワールド2”の効果発動！SPカウンターを7個取り除き、カードを1枚ドロ！」

リヨウ SP 1

来た！このカードを待つてんだ！

「オレは“カードエクスクルーダー”を守備表示で召喚！」

DEF / 400

「このカードは、1ターンに一度、相手の墓地にあるカード1枚をゲームから除外できる！」

オレが除外するのは“黄泉ガエル”！」

「なにっ!?!？」

これで毎ターンのリリース素材はなくなった！

「永続畏“閻次元の解放”を発動！ゲームから除外された閻属性モンスター1体を特殊召喚できる！

戻って来い！“ブラックマジシャンガール”！」

DEF / 1700

「マナ、大丈夫？」

『うん。平気だよ』

この状況、マナにはもう少しがんばってもらわないといけない。

「畏発動！“賢者の秘石”！オレの場上に“ブラックマジシャンガール”が存在する時、デッキから“ブラックマジシャン”を特殊召喚する！

現れる！“ブラックマジシャン”！」

ATK / 2500

「待ってたよ、マハード」

『ああ。いくぞ！』

「バトル！“ブラックマジシャン”で“邪帝ガイウス”を攻撃！ブラックマジック！」

「くっ！」

清水 LP 2800

「オレはカードを2枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターン！」

SP 2

「俺は“マシユマロン”を守備表示で召喚」

DEF / 500

戦闘で破壊できないモンスターか。

「バトル!“ゴーレム”で“ブラックマジシャンガール”を攻撃！」

“ゴーレム”の触手がマナに攻撃する。

『きゃあああっ！』

ごめん、マナ。

「次の俺のターンで、SPカウンターは4となる。そう何度も上手く防げるか？ターンエンドだ！」

くそっ。

『落ち着け、リヨウ』

マハード。

「オレは慌ててなんて」

『私かマナ、どちらかが二度も場から他意的に離されたのは、遊星殿とのデュエル以来だか?』

「そう、だっけ?」

確かにそんな気がする。

遊星とのデュエルでマハードを二回破壊されたんだっただね。

マハードが言いたいことのは、もっと集中しろ、ってことだろうね。

「集中　できてないかな?」

『先程のことで、三人がどういう反応をするか気になっている、というところだろう』

マハードがそう言うのなら、間違いないのかもしれない。今はデュエルに集中しなくちゃいけないのに。

『あの三人なら大丈夫だ。リョウが信頼する仲間だろう?』

「うん。そうだね、マハード」

『ならば、雑念を振り払え。神経を研ぎ澄ませ』

雑念を振り払い、神経を研ぎ澄ませ。

オレは目を閉じ、手をデッキの上に置く。

『そう。それでこそ、私たちのマスターだ』

「オレの ターン！」

SP 3

このカードは 、これがみんなの答なんだね。

「永続罨発動！ “幻想結界”！オレのターンで数えて3ターン、今お互いの場に存在するモンスター効果を全て無効にする！ただし、新たに召喚されたモンスターには適応されない。さらに、この結界の影響を受けた相手モンスターの攻撃力はオレの場に存在する魔法使い族モンスター1体につき100ポイントダウンする！」

ATK / 2300

ATK / 100

「くっ！」

「バトル！ “ブラックマジシャン”で“ゴーレム”を攻撃！ブラック・マジック！」

「うぐっ！」

清水 LP 2600

「オレはカードを1枚伏せて、ターンエンド」

このカードに賭ける。

「俺のターン！」

「永続罨発動！“スピードオフ”！3ターンの間、お互いのSPカ
ウンターは増えなくなる！」

「チツ！」

これで“スピードワールド2”の効果は発動できない！

「俺は“マシユマロン”をリリース、“巨大戦艦 ビッグ・コア”
を召喚！」

ATK/2300

「掛かったね。読み通りだよ」

「なにっ！？」

「罨発動！“黒魔族復活の棺”！相手モンスターが召喚に成功した
時、そのモンスター1体とオレの場のモンスター1体を墓地に送り、
自分の墓地の魔術師を特殊召喚できる！」

「な、何故俺の手を？」

「簡単だよ。清水さんは“黄泉ガエル”の効果を利用する為に罨力
ードがほとんど入ってない。

“幻想結界”の効果で“マシユマロン”の効果は無効となっている
今、オレの攻撃を防ぐ為に新たなモンスターを召喚するしかない。

ここまでくれば、話は簡単だよ」

もう一度、オレに力を貸して。

「召喚に成功した“巨大戦艦 ビッグ・コア”と“カードエクスクルーダー”を墓地に送り、墓地から“ブラックマジシャンガール”を特殊召喚！」

ATK/2000

「 マナ」

『気にしないで。ね？』

ごめんね。。

「オレのターン！」

“スピードオフ”の効果でSPカウンターが増えることはない。

「いけ!“ブラックマジシャン”でダイレクトアタック!ブラック・マジック！」

「うぐうっ！」

清水 LP 100

「これで終幕だ!“ブラックマジシャンガール”でダイレクトアタック!ブラック・バーニング！」

「うぐああああっ！」

清水 LP 0

勝った！

オレは昨日と同じ場所でモニUMENTと一緒に夜の海を眺めている。
今日は舞はない。

デュエルの後、今日の日程が終わって旅館に戻った。みんなと話を
した訳じゃないけど、お互いに話難くてそのままになってる。

でも、その前に、

「マナ、大丈夫？」

『平気平気！』

元気に振る舞ってるように見えるよ。

『リヨウこそ大丈夫？』

「平気。みんなを信じてるからね」

多分、気にすることはないと思う。

「ごめんね、マナ」

『何が？』

「折角忠告してくれたのに、あんまり聞いてなかったようなものだし。デュエルにあんまり集中できてなかったから、除外されて戦闘破壊までされた」

『気にすることないよ。誰にだって失敗はあるんだし、私だってリヨウは大丈夫って思ったんだし』

それでも、集中できてなかったオレが悪い。マハードに言われるまで気付かなかったんだし。

「マナ。おいで」

『？』

誰も見てないよね。そのことを確認して、マナを実体化させた。

「？いいの？私は魔術服のままだよ？」

「ばれたらマズイだろうね。ま、大丈夫だよ。」

「怪我、してるよね？」

「うっん。もう治ってっ！」

オレはマナの手を軽く掴んだ。それでこの痛みがりよう。

「まだ治ってないね。ごめんね、本当に」

「気にすることないってば。私は」

「無理しないで、マナ」

オレの所為なんだから。

ギユツ。

「リョウ？」

オレはマナを優しく抱きしめていた。

「ごめんね」

何度謝っても、この傷が消える訳じゃない。

「私は、精霊だよ。こんな傷くらい」

「オレの家族だよ」

「えっ!?!」

「だから、オレの家族なんだよ。マハードとマナは、誰よりもオレの近くにいてくれる。オレを見守ってくれてる。前に、家族みたいって言ったよね?」

「うん」

「もう家族みたいじゃない、そう感じるんだよ。前よりずっと、近くにいますからね」

マハードとマナが実体化するようになって、それから、マナと一緒に
に出かけたあの日から、オレたちの距離はさらに縮まった。
家ではほとんどいつも実体化してる。日頃から、いつでも一緒にい
る。

「いつも一緒にいる、そのお陰で、オレはいつも楽しくて、居心地
が良くて、それが当たり前になったんだよ。」
もうオレには、二人が家族にしか思えないんだよ」

「」
「」
顔を上げてマナを見る。頬に一筋の雫が流れてる。

「マナ」?

オレは軽くマナの頬に流れる雫を拭う。

「 どうして? どうしてリョウはそんなに」

「」

「私たちは精霊なんだよ?」
人間ですらないのに、どうしてそんなに私たちのことを想って
くれるの?」

人間ですらない、か。

「そんなこと、オレには関係ないよ。人間だろうと、人間でなかる
うと。」

精霊にも感情がある。マナみたいに、そうやって泣いたり、笑ったりするんだよ。

怒ったり、泣いたり、悲しんだりする。楽しんだり、笑ったりする。その姿に、人間と大差があるとは思えない。

精霊も人間と同じように生きてるんだよ。オレがマハードやマナ、精霊たちを大切に想うのに、特別な理由なんていらないよ」

「 ありがとう」

オレの胸に飛び込んできた。オレはマナを受けとめる。マナはきつと、泣いてる。

『 ありがとう、リョウ』

「マハード」

『 リョウをマスターに仰いで、これほど誇りに思ったことはない』

「 これからは家族だ、いいかな? 」

『 断る理由等、ある筈もない』

オレはマハードに笑顔を向けた。いろんな意味を込めて。

「 最近寒くなってきたね」

「 もう冬なのかな? 」

マナが復活してから少し談笑してる。

「寒くない？」

「うん、ちょっと寒いかな」

まあ、そんな格好じゃ寒いだろうね。

「いつもの魔術服じゃ寒いよね」

「精霊世界にいる時は平気なんだよね」

なるほどね。

「実体化しなければ大丈夫なんだね」

「うん」

「はは。心配なくていいよ。」

家族が実体化してないままなんて嫌だからね」

「うん！でもどうしよう」

「今度の休日に、冬物の服を買いにいこうか？」

「えっ、いいの？」

「いいよ。前に約束したよね？また一緒に出掛けるってね」

「えへへ ありがとう」

むにゅ。

マナが抱き着いてきた。

「ほら。よしよし」

マナの扱いも大分馴れたな。

「あつ！そろそろ戻るね。明日もがんばろう！」

ずいぶん急だね。

「ああ、なるほどね」

マナは戻っていく。代わりに、

「隣、いいかな？」

「いいよ。座って」

ポンポンと隣を叩く。

「アリス」

s i d e アリス

座って いいのかな 。

「 いいの？」

「 もちろん」

いいんだよね？

私は遠慮がちに、ちょこんと座った。

「 その 、怒ってる？」

「 ぶじして？」

「 今日のデュエルで 」

「 別に怒ってないよ？」

「 嘘だよ」

だって、リョウがあんなこと言うの、初めてだったから 。

「 じゃあ、オレが怒るようなことをした、って思ってるのかな？」

「 だって、今日のデュエルは私たちが悪いから 」

「 で？オレが怒ってると？」

「 うん」

「 そっか。ごめんね、あんな言い方して」

「リヨウが謝ることないよ！悪いのは、私たちなんだから」

「オレは誰が悪いなんて言ってないよ」

「えっ？」

「オレが怒ってないってことは本当だよ」

「どうして？」

「みんなが昨日反省して、もう迷惑かけたくないって想いが強かったのはよく解ったよ。その想いが空回りして、チーム戦ってことが薄れてたんだよね。」

「だったらその想いを正してあげればいい。誰だって間違いを犯すんだから」

優しいなあ。

「怒ってないの？」

「心配性だなあ、アリスは」

「えっ！？」

私はリヨウに引き寄せられた。

「何考えてたの？」

「それは」

「オレに嫌われた　そんなこと考えてたんでしょ？」

「　そんなこと　」

「ん？」

「　思ったた」

どうして解るんだろう　？

「顔見たら解るよ。今にも泣きそつで、辛そつだよ」

「っ!？」

私は顔に出やすいのかな　。

「そんなに不安だった？」

「　」

最近はずっとリョウに主導権を取られてるなあ　。

「大丈夫。心配いらないよ」

「うん　」

「大丈夫大丈夫」

私の頭を軽く撫でてくれる。優しく、優しく、あやすように　。

「オレがアリスを嫌いになることなんてないから」

「」

「オレはアリスの傍にいるよ。呼べばいつだって、誰よりも早く傍に行くから」

「うん」

「ダメだよ、泣いちゃ。約束したからね」

そんなこと言っても。
ジワジワきてて。

「アリス」

「えっ？　んん！」

「ん」

「　　っ！」

私は慌てて少し離れた。

「リヨ、リヨウ　今」

「キス　、だね」

少し恥ずかしそうにしているとはいえ、私ほどじゃない。だって、いきなり、口を塞いでくるなんて。

「嫌だった？」

「そんなこと、ないけど」

「じゃあ、安心した？」

「えっ？」

「好きでもないのに、キスなんてしないよ。でも、好きなら、ね」
私を安心させようとして。

「アリスは心配性だし、ヤキモチ妬くし」

事実だから何も言い返せない。

「そんなアリスも可愛くて、愛おしくて」

「」

「心配させたくないんだよ、ね」

「うん」

「そんなこと思わないように、安心できるように、傍にいてあげたいんだよ」

「ありがとう」

私はリヨウに見えないようにして、リヨウの胸に身体を預けた。

「ほら、泣いちゃダメだよ」

「泣いてないよ」

本当は泣いてるけど、この涙は悲しみの涙じゃなくて嬉し涙だから。

「（まあ、いつか）」

私は少しの間だけ、そうしていた。そして、離れた。

「もう大丈夫？」

「うん。大丈夫」

もう少しあのままでもよかったけど、リヨウは泣いて欲しくないみたいだし。

だから今度はリヨウの肩に寄り掛かった。

「ねえ、リヨウ」

リヨウをじっと見つめた。

私の考えが解ったように、少しだけ笑みを浮かべた。

二人の距離が近くなる。お互いの吐息が聞こえるくらい。

「大好きだよ、リヨウ」

また、唇を交わした。
。

第二十三話：家族と恋人（後書き）

いかがでしたでしょうか？

暖かく見て頂けたならよかったです。

アンケートはマナについてです。というより募集です。

本編にあったマナの冬物の服装についてアイデアがあれば、是非教えて頂きたいと思います。どうかよろしく願います。

それでは、グッチーでした。

第二十四話・繋がり（前書き）

序盤に前回までの流れを軽く纏めてます。

その後から、デュエルに続きます。

では、どうぞ。

第二十四話・繋がり

『ごめん！』

「こちらこそごめんなさい。いきなりこんな始まり方ですいません。

オレは啓斗と由里に昨日のデュエルのこと盛大に謝られてる。アリスは隣で苦笑いを浮かべてる。

今の時間的には、今日の第一戦目があってるくらいかな。

「オレは別に怒ってないから。ただちょっと焦ってチーム戦の意識が薄れてただけでしょ？」

「そりゃあ」

「まあ」

「だったら、今日のデュエルでオレたちなりのチーム戦をしよう。オレたちなら、できるよね？」

「ああ！」

「うん！」

よしよし。これで大丈夫だね。

「ところで、二人はどうして昨日の内に来なかったの？」

二人なら、アリス同様その日の内に来ると思ってただけだ。

「お前らが良い雰囲気出してやがったからだ」

「!?!」

まさか 見られてた ?

「安心しろよ。全部見るなんて悪趣味は持ち合わせてねえよ」

「二人が話してる所を見ただけだよ」

ほっ。

アリスも安堵の息を吐いてる。流石にキスを見られてたら恥ずかしい。

「決まったー!」

どうやら終わったみたいだね。次はオレたちの番か。

「行くうぜ。早めに行っても問題はねえだろ」

啓斗の意見に従い、スタジアムのコースに向かって歩き出した。

「今日は何ことするの?」

「今日はイースト校だよ」

「イースト校って言えば、なんでも最弱の学園なんだろう?」

「啓斗、そんなこと言っちゃダメだよ」

「悪い。ちょっと噂に聞いてな」

「今のところの戦績はどうなってるの？」

「3敗。イースト校は今日の最後のデュエルだね」

「一応オレは今あったたデュエルを除けば、全部のデュエルを見てきたから解るんだよね。イースト校は今までのデュエルは全部負ける。」

「だからと言って油断していいことじゃないよ？」

「んなこといちいち言うな。どんなデュエルだろうが全力でやるだけだ！」

「そうだね。啓斗君の言う通りだよ」

そう。当然だけど、デュエルは何が起こるか解らない。油断大敵、なんてことはみんな解ってるね。

「あっ！リヨウ！」

「舞、咲」

ノース校だね。結果はどうだったかな？

「勝ったよ！今日も絶好調なりー！」

勝ち、か。

「ノース校は今のところ全勝だね」

「ええ。明日はリョウたち、ネオドミノ校とのデュエルね」

「そうだね。まあ、その前に今日のデュエルをがんばってくるよ」

「うん。がんばって」

これに勝てば、ノース校と同じ全勝。明日のことを考えると、今日は勝たなくちゃいけないね。

「ずいぶん、仲いいんだね」

あ あれ？

隣を見るのが物凄く怖いんだけど。

「よし、俺たちは先に行くか」

「そうだね」

「ちよっ！？啓斗！由里！」

「今のアリスに何言ったって無駄じゃねえか」

「それに、アリスちゃんを怒らせたリョウ君が悪いよ」

オレの所為！？

「じゃあな。早く来いよ」

さっさと歩いていく。オレが悪いの？

「あれ？あれれ？これってどういうこと？」

「さ、さあ？」

舞と咲が何か言ってるけど、今のオレに構う余裕はない。

「いや、あのね、アリス。二人は知り合った友達で」

「」

ジト目で睨んでくる。
完全にご機嫌ななめだよ。

「ほ、ほら。早くデュエルに行かないと。
舞と咲はまた後で」

アリスの手を引いて歩き出す。
が、

「お別れまで言うんだ」

「いや、一応友達だから」

「ふうん」

ぶいっと、顔を背けられてしまう。どうしよう。

「何だったんだろうね？」

「さあ？」

コースに着いたのはいいんだけど、

「

アリスは相変わらずご機嫌ななめ。

「おい、なんとかしろよ！」

「そう言われても」

「チーム戦だって言ってた傍からこれじゃ話にならねえだろうが！」

た、確かに。

「にははは。。。でも、この状態のアリスちゃんの機嫌を直すのは至難の技だよ？」

そうなんだよね。。
だから困ってるんだけど。。

しょうがないか。

「ね、アリス」

「何？」

「（ボソボソ）」

「／／ うん。解った」

よし、オツケー。

「それで、あの娘たちは？」

「舞と咲は知り合った友達だつてば」

「ホントに？」

「うん。本当だよ」

「解った」

「応納得してくれたみたいだね。」

「フウ」

オレは一息ついてピットの椅子に座った。

『お疲れ様。でもあれはリョウが悪いよ？』

「うーん、やっぱり怒るの？あのくらいで」

オレに話し掛けてきたのはマナ。女の子のマナなら解るかな？

『怒ると思うよ。女の子は繊細だからね』

「そついうもの？」

『そついうものだよ』

ふむ。気をつけないと。

「マナ、傷は大丈夫？」

『うん！もうバッチリ！』

うん。どうやら本当に大丈夫みたいだね。

『さあ、未だ負け無しのネオドミノ校！対するは、未だ勝ち星無し
のイースト校！

果たしてどちらが軍配を上げるのかー！？

ライディングデュエル！アクセラレーション！』

始まったね。啓斗はどうか？

side 啓斗

俺、ファーストホイラーの癖して対抗戦は一度も先攻取ってねえ
んだよな。

そつ何度も負けてられねえな！

イースト校の奴より早く第一コーナーに入り、取ったぜ！

『第一コーナーを取ったのはネオドミノ校だー！さあ、デュエル開始だー！』

確かこいつの名前は、羽賀、だったか。

『デュエルー！』

「俺のターンだ！」

イースト校は昆虫使いだったな。あんま関係ねえけどよ。

「俺は“ジャンク・アーマー”を守備表示で召喚！」

DEF / 1200

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「僕のターン！」

SP 1

「僕は“ドラゴンフライ”を召喚！」

ATK / 1400

「バトル！“ドラゴンフライ”で攻撃！」

「チッ」

まあ、当然って言えば当然だけだよ。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターン！」

S P 2

「“S P エンジェルバトン”発動！S Pカウンターが2つ以上ある時、カードを2枚ドロし、手札を1枚墓地に送る。俺は手札から“共闘するランドスターの剣士”を召喚！」

A T K / 5 0 0

「墓地の“ボルト・ヘッジホッグ”の効果発動！俺の場にチューナーが存在する場合、墓地から特殊召喚することができる！」

A T K / 8 0 0

「レベル2の“ボルト・ヘッジホッグ”に、レベル3の“共闘するランドスターの剣士”をチューニング！

シンクロ召喚！来い！“スカー・ウォリアー”！」

A T K / 2 1 0 0

「バトルだ！“スカー・ウォリアー”で攻撃だ！」

「うっっっ」

羽賀 LP 3300

「破壊された“ドラゴンフライ”の効果発動！このカードが戦闘で破壊された時、デッキから攻撃力1500以下の風属性モンスターを攻撃表示で特殊召喚できる。

“ドラゴンフライ”を特殊召喚！」

ATK/1400

リクルーターか。

「俺はターンエンドだ」

「僕のターン」

SP 3

「僕は“共鳴虫”を守備表示で召喚」

DEF/1300

「“ドラゴンフライ”を守備表示にして、ターンエンド」

DEF/900

守りを固めてきたか？

「俺のターン！」

SP 4

「 ジョネクス・ニュートロン” を召喚！」

ATK / 1800

「俺は“SP ジャンク・アタック・モード”発動！SPカウンターが3つ以上ある時、俺はモンスター1体を選択する。選択したモンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した時、そのモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

“スカー・ウォリアー”を選択！」

これならリクルーターだろうが関係ねえ！

「いけ！“スカー・ウォリアー”で“ドラゴンフライ”を攻撃だ！」

「くっ」

「モンスターを破壊したことにより、“ジャンク・アタック・モード”の効果を受けて貰うぜ！」

「うああっ！」

羽賀 LP 1900

「“ドラゴンフライ”の効果で、“ドラゴンフライ”を特殊召喚」

ATK / 1400

「知らねえよ！“ジョネクス・ニュートロン”で攻撃だ！」

「うっっ！」

羽賀 LP 1500

「ドラゴンフライ”が破壊されたことで、”フライングマンティス”を特殊召喚」

ATK / 1500

やっとリクルーターが終わったか。

「エンドフェイズ、”ジヨネクス・ニュートロン”の効果発動！このカードが召喚に成功したターンのエンドフェイズ、デッキから機械族チューナーモンスターを1体を手札に加える。」

俺は“クイツク・スパナイト”を手札に加える」

「僕のターン！」

SP 5

「僕は“共鳴虫”と“フライングマンティス”をリリースして、“鉄鋼装甲虫”をアドバンス召喚！」

ATK / 2800

「さらに、墓地の“ドラゴンフライ”2体をゲームから除外して、“デビルドージャー”を特殊召喚！」

ATK / 2800

「このカードは墓地の昆虫族モンスター2体をゲームから除外した時、特殊召喚できる！」

攻撃力2800のモンスターが2体か、どこが最弱なんだよ。

「バトル！ “デビルドージャー” で “スカー・ウォリアー” を攻撃！」

「くっ！」

啓斗 LP 3300

「 “デビルドージャー” が戦闘ダメージを与えた時、相手のデッキの上からカードを1枚墓地に送る！」

面倒な効果だ。だが、

「 “スカー・ウォリアー” は1ターンに一度、戦闘で破壊されねえ！」

「ならば二回攻撃するまでだ！ “鉄鋼装甲虫” で “スカー・ウォリアー” を攻撃！」

「ぐっっ！」

啓斗 LP 2600

チツ、 “スカー・ウォリアー” が破壊されちゃったか。

「僕はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

「俺のターン！」

SP 6

「俺は“クイック・スパナイト”を召喚！」

ATK / 1000

「いくぜ！レベル4の“ジヨネクス・ニュートロン”に、レベル3の“クイック・スパナイト”をチューニング！

受け継がれし魂が、光となって駆け昇る！

シンクロ召喚！光来せよ！“ライトニング・ウォリアー”！」

ATK / 2400

「シンクロ素材となった“クイック・スパナイト”の効果発動！相手モンスター1体の攻撃力を500下げる！

“デビルドージャー”の攻撃力を下げる！」

ATK / 2300

「バトル！“ライトニング・ウォリアー”で“デビルドージャー”を攻撃！ライトニング・パニッシャー！」

「うつつっ！」

羽賀 LP 1400

「まだまだ！“ライトニング・ウォリアー”が戦闘で相手モンスターを破壊した時、俺の手札1枚につき400のダメージを与える！」

俺の手札は4枚！これで終わりだ！」

「うわあああっ！」

羽賀 L P O

よし。“鉄鋼装甲虫”が残ってるが、一人倒した上に俺にはまだ余裕がある。いけるぜ！

「うん。良い調子だよ、啓斗」

「啓斗にはまだ余裕があるし、手札も十分だね」

「後は私たちもしっかりがんばらないとだよ」

『さあ、イースト校セカンドホイラー！敗れた弟に代わり、兄の登場だー！』

次の奴はさっきの奴の兄なのかよ。

「弟の敵は僕が打つ！」

「簡単に負けはしねえよ！」

『デュエル！』

「僕のターン！」

SP 7

「甲虫装甲騎士”を召喚！」

ATK / 1900

「さらに自分場の魔法・罫カード2枚を墓地に送り、“オオアリックイキアリ”を特殊召喚だ！」

ATK / 2000

チツ。マズイな。

「バトルだ！“鉄鋼装甲虫”で“ライトニング・ウォリアー”を攻撃！」

「ぐっ！」

啓斗 LP 2200

「さあ、フィニッシュだ！」

2体のモンスターでダイレクトアタック！」

「簡単に負けはしねえって言ったろうが！」

罫発動！“シンクロ・スピリッツ”！墓地のシンクロモンスター1体をゲームから除外し、除外したシンクロモンスターの素材となったモンスターを墓地から特殊召喚できる！

“ライトニング・ウォリアー”をゲームから除外し、“ジヨネクス・

「ニュートロン」と「クイツク・スパナイト」を特殊召喚！」

DEF / 1200

DEF / 700

「ならば2体でモンスターを攻撃！」

「チツ！」

これで俺の場にカードは無くなったか。

「僕はこれでターンエンド」

「俺のターン！」

SP 8

「いくぜ！」SPシンクロ・リターン”発動！SPカウンターが5個以上ある時、ゲームから除外されたシンクロモンスターを特殊召喚する！」

迅雷の如く駆け抜ける！「ライティング・ウォリアー！」

ATK / 2400

「いけ！」ライティング・ウォリアー”！「オオアリクイクイアリ”を攻撃だ！ライティング・パニッシャー！」

「ぐぐっ！」

羽賀 LP 3600

「“ライトニング・ウォリアー”の効果！俺の手札は4枚！1600のダメージを受けて貰うぜ！」

「ぐわあっ！」

羽賀 LP 2000

問題はここからだ。“ライトニング・ウォリアー”より攻撃力が高いの“鉄鋼装甲虫”がいるしな。

「俺はカードを3枚伏せ、ターンエンドだ」

「僕のターン！」

SP 9

「いきなり2000のダメージは予想外だったけど、大したことはないね。

“甲虫装甲騎士”をリリースして、“セイバー・ビートル”をアドバンス召喚！」

ATK/2400

「これで終わりだ！“鉄鋼装甲虫”で“ライトニング・ウォリアー”を攻撃！」

「ぐぐっ！」

啓斗 LP 1800

「フィニッシュ！ “セイバー・ビートル” でダイレクトアタック！」

ここは素直に引いてやるよ。次の由里に回す為にな。

啓斗 L P O

「只じゃ終わらねえよ！」

罨カード“ダメージ・コンデンサー”発動！戦闘ダメージを受けた時、手札を1枚墓地に送り、受けたダメージ以下の攻撃力のモンスターをデッキから特殊召喚する！

“ジャンク・ブリーダー”を特殊召喚！」

ATK/1800

俺が由里の為にできることはこれだけだな。

side out

「お疲れ様、啓斗」

「これで文句ねえよな？ できるだけのことはしたつもりだぜ」

「はは。由里の為にね。」

由里、次は頼むよ」

「うん！ いつてくるよー」

由里はどんなデュエルを見せてくれるのかな？

「由里ならきつと大丈夫だよね？」

「きつとね」

side 由里

啓斗君は場にモンスターを1体残してくれてる。展開が楽だね。

「始めよう！」

「いいだろう！」

『デュエル！』

「私のターン！」

SP 10

「手札から“メンタル・カウンセラー リリー”を召喚！」

ATK / 400

「さらに“SP ライトニング・アップ”を発動！SPカウンターが3以上ある時、私の場のモンスター1体を光属性にして、レベルを1上げるよ。」

“ジャンク・ブレード”のレベルを5にして光属性に！」

これで準備は整ったね。さて、厄介なモンスターを破壊しておかな

いとね。

「スピードワールド2”の効果発動！SPカウンターを10取り除いて、“鉄鋼装甲虫”を破壊！」

SP 0

「うぐっ！」

さあ、いくよ！

「レベル5となった“ジャンク・ブレイダー”に、レベル3の“メタル・カウンター リリー”をチューニング！シンクロ召喚！来て！“神聖騎士パーシアス”！」

ATK / 2600

「“神聖騎士パーシアス”の効果発動！1ターンに一度、相手モンスター1体の表示形式を変更できる！“セイバー・ビートル”を守備表示に変更するよ！」

DEF / 600

「さらに、“神聖騎士パーシアス”は貫通能力を持つてる！」

「なっ！？それじゃあ、僕のライフは」

「そう。終わりだよ！」

“神聖騎士パーシアス”で“セイバー・ビートル”を攻撃！」

「うわあああっ!」

羽賀 LP 0

よし!これも啓斗君のお陰だね。リョウ君の言う通りなんだね。

「オツシャ!流石だ!」

「うん!由里の調子は良いみたいだね」

「由里のライフは4000のまま。いけるかな」

『さあ!イースト校、サードホーラーの登場だ!イースト校は、
逆転できるのか!?!』

「僕は原歩。よろしくね」

「うん。よろしく」

『デュエル!』

「僕のターン!」

由里 SP 1

原歩 SP 1

「僕は“スピードワールド2”の効果を使う！SPカウンターを10個取り除き、“神聖騎士パーシアス”を破壊する！」

原歩 SP 1

「罠カード“亜空間物質転送装置”発動！私の場のモンスター1体をこのターンのエンドフェイズまで除外する！」

啓斗君の残してくれたカードの1枚。助かったよ。

「僕は“ドラゴンフライ”を召喚」

ATK/1400

「僕は“ドラゴンフライ”でダイレクトアタック！」

「きゃあっ！」

由里 LP 2600

「カードを3枚伏せて、ターン終了」

「エンドフェイズに、“神聖騎士パーシアス”は場に戻るよ」

ATK/2600

「私のターン！」

SP 2

「“神聖騎士パーシアス”の効果発動!“ドラゴンフライ”を守備表示に変更！」

DEF / 900

「バトル!“神聖騎士パーシアス”で“ドラゴンフライ”を攻撃！」

「罨カード“ガード・ブロック”を発動!戦闘ダメージを0にして、カードを1枚ドローする」

ダメージは与えられないね。

「“ドラゴンフライ”の効果で、デッキから“アルティメット・インセクト LV3”を特殊召喚！」

LVモンスター!次のターン、進化するんだろうね。

「私は“コーリング・ノヴァ”を守備表示で召喚」

DEF / 800

「カードを1枚伏せて、ターン終了」

「僕のターン！」

SP 3

「スタンバイフェイズ、このカードを墓地に送り、“アルティメット・インセクト LV5”を特殊召喚する！」

ATK / 2300

「この効果で特殊召喚した場合、全ての相手モンスターの攻撃力は500ポイントダウンする！」

ATK / 2100

しまった！攻撃力が下がるなんて。

「バトル！“アルティメット・インセクト”で“神聖騎士パーシアス”を攻撃！」

「うっつ！」

由里 LP 2400

「畏カード“時の機械 タイム・マシン”発動！戦闘で破壊されたモンスターを特殊召喚するよ！“神聖騎士パーシアス”を特殊召喚！」

ATK / 2100

啓斗君が残してくれたカードは全部使っちゃったね。私が後はどれだけがんばれるか、だね。

「ターン終了だ」

「私のターン」

SP 4

「私は“神聖騎士パーシアス”の効果発動!“アルティメット・インセクト”を守備表示に変更するよ!」

DEF / 900

「“コーリング・ノヴァ”を攻撃表示に変更!」

ATK / 700

「バトル!“神聖騎士パーシアス”で“アルティメット・インセクト”を攻撃!」

「うぐうっ!」

原歩 LP 2800

「これで私のモンスターの攻撃力は元に戻るよ」

ATK / 2600

ATK / 1400

「さらに“コーリング・ノヴァ”でダイレクトアタック!」

「畏カード“奇跡の残照”を発動!このターン、戦闘で破壊されたモンスターを特殊召喚する!“アルティメット・インセクト LV5”を特殊召喚!」

ATK / 2300

「攻撃は止めるよ。私はカードを2枚伏せて、ターンエンド」

「僕のターン」

SP 5

「スタンバイフェイズ、“アルティメット・インセクト”はさらに進化する!“アルティメット・インセクト LV7”を特殊召喚する！」

ATK / 2600

「この効果で特殊召喚された場合、全ての相手モンスターの攻撃力は700ダウンする！」

ATK / 1900

ATK / 700

「ちゃんと倒しておくべきだったね」

「その通り。さらに“アルティメット・インセクト LV3”を召喚！」

ATK / 1400

「バトル!“アルティメット・インセクト LV7”で“神聖騎士 パーシアス”を攻撃！」

「きゃあっ！」

由里 LP 1700

「さらに“アルティメット・インセクト Lv3”で“コーリング・ノヴァ”を攻撃！」

「きゃっ！」

由里 LP 1000

「“コーリング・ノヴァ”の効果で、デッキから“コーリング・ノヴァ”を特殊召喚！」

DEF / 800

「僕はこれでターンエンド。君の番だよ」

“アルティメット・インセクト”が2体になることだけは避けたい。私だけならともかく、アリスちゃんとリョウ君が厳しくなる。

「私の ターン」

SP 6

「私は墓地の“神聖騎士パーシアス”と“コーリング・ノヴァ”をゲームから除外して、“神聖なる魂”を特殊召喚！」

ATK / 1300

「そんな攻撃力で何をするつもりかな？」

「だったらその攻撃力を上げるまでだよ！
“ハネワタ”を召喚！」

ATK / 0

「いくよ！レベル4の“コーリング・ノヴァ”に、レベル1の“ハネワタ”をチューニング！

天空より来たる聖なる杖。全てを撃ち抜く力を放て！
シンクロ召喚！天よりの力！“セイクリッド・ワンド”！」

ATK / 800

「“セイクリッド・ワンド”の効果発動！私の場の天使の装備カードとなつて、攻撃力を1500ポイントアップさせる！“神聖なる魂”に装備！」

ATK / 2800

「なっ!?!」

「バトル!“神聖なる魂”で“アルティメット・インセクト L V 3”を攻撃！」

「うわあっ!」

原歩 LP 1400

よし。もう1体残ってるけど、攻撃力はこっちが上だし、ライフも削った。

「僕のターン！」

SP 7

「墓地の“ドラゴンフライ”と“アルティメット・インセクト L V3”をゲームから除外して、“デビルドーザー”を特殊召喚！」

ATK / 2800

「でも、“神聖なる魂”が場に存在する限り、バトルフェイズ中の相手モンスターの攻撃力は300ダウンするよ。私の“神聖なる魂”には届かない」

「カードを1枚伏せる。そして罨発動！“鎖付き爆弾”！このカードは装備カードとなり、攻撃力を500ポイントアップする！“デビルドーザー”に装備！」

ATK / 3300

ちゃんと対策してたんだ。

「バトル！」

「“神聖なる魂”の効果が発動するよ」

ATK / 2300

ATK / 3000

「“デビルドーザー”で“神聖なる魂”を攻撃！」

「うっ！」

由里 LP 800

「セクリッド・ワンド」の効果、装備モンスターが破壊される時、代わりにこのカードが破壊される」

ATK/1300

「終わりだよ！ “アルティメット・インセクト” で “神聖なる魂” を攻撃！」

「きゃあああっ！」

由里 LP 0

『決まったー！ネオドミノ校セカンドホイラー、武内由里はここで終わりだー！』

只じゃ終わらない！

「エンドフェイズ、私は “奇跡の光臨” を発動するよ！ゲームから除外された天使1体を特殊召喚する！ “神聖騎士パーシアス” を特殊召喚！」

ATK/1900

私にできるのはここまでかな。

side out

「お疲れ様、由里」

「うん。後はお願い。アリスちゃん、リョウウ君」

「うん！任せて！」

「大丈夫。必ず勝つよ」

「その意気だ。しっかり頼むぜ」

「うん！じゃあ、いつてくるよ！」

次はアリスか。啓斗と由里は次に踏まえて繋いでくれた。アリスもきつと大丈夫な筈だね。

第二十四話：繋がり（後書き）

イースト校とのデュエルです。

やはり最後はオリキャラの二人がいるノース校に。

では、グッチーでした。

第二十五話・ラストデュエルへ（前書き）

イースト校とのデュエルが前半、後半はノース校とのデュエルに向けてです。

では、ごうげ。

第二十五話：ラストデュエルへ

side アリス

『さあ、ネオドミノ校サードホイラー、アリス・ルシエの登場だ！』

今の私の中には由里が残してくれた“神聖騎士パーシアス”と伏せカードが2枚。相手の場には強化された“デビルドージャー”と攻撃力を下げる“アルティメット・インセクト LV7”がいる。

「手加減はしないよ」

「もちろんだよ」

『デュエル！』

「私のターン！」

SP 8

「“神聖騎士パーシアス”の効果で“アルティメット・インセクト LV7”を守備表示に変更するよ！」

DEF / 1200

「バトル！ “神聖騎士パーシアス”で“アルティメット・インセクト LV7”を攻撃！」

「くっっ！」

原歩 LP 700

よし。これで彼のライフはライディングデュエルのセーフティラインを切った。それに私のモンスターの攻撃力は元に戻るね。

ATK / 2600

「私は“ドル・ドラ”を守備表示で召喚」

DEF / 1200

「“スピードワールド2”の効果発動！SPカウンターを4つ取り除いて、手札の“SP”1枚につき800ポイントのダメージを与える！私の手札の“SP”は1枚！」

アリス SP 4

「カウンター罠“地獄の扉越し銃”！ダメージを与える効果は無効にして、その効果ダメージを相手に与える！」

「きゃっ！」

アリス LP 3200

もう一度“スピードワールド2”の効果を使えば勝てるけど、SPカウンターは0になる。後一人残ってるし、ここは効果を使わない方がいいかな。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「使わなかったな」

「まだ先は長いからね」

「それに“デビルドージャー”が残るしね。もう少し場の状況を有利にしたいんだろうね」

「だな。次の奴に回れば手札も十分にある状況になるからな」

「なんにしても、この選択が吉と出るか凶と出るか、だね」

「僕のターン！」

アリス SP 5

原歩 SP 9

「後悔することになるよ。君のターンで“スピードワールド2”の効果を使わなかったことをね！」

「どう思うかはこのターン次第だね。」

「バトル!“デビルドージャー”で“神聖騎士パーシアス”を攻撃！」

「畏発動!“立ちはだかる強敵”!“デビルドージャー”の攻撃対象

は“ドル・ドラ”になるよ！」

「構わないよ！」

「っ！」

“ドル・ドラ”は破壊されたけど、問題は無いね。

「僕はカードを1枚伏せて、ターンエンド」

「エンドフェイズ、破壊された“ドル・ドラ”はデュエル中一度だけ攻撃力と守備力を1000にして特殊召喚される」

ATK / 1000

「私のターン！」

アリス SP 6

原歩 SP 10

「“神聖騎士パーシアス”の効果で“デビルドージャー”を守備表示にするよ！」

DEF / 2600

「さらに“デルタフライ”召喚！」

ATK / 1500

「このカードは、私のモンスターのレベルを1つ上げることができ

る。“ドル・ドラ”のレベルを4に!」

さあ、いくよ!

「レベル4となった“ドル・ドラ”に、レベル3の“デルタフライ”をチユーニング!

煌めきたる稲妻よ、轟く雷鳴と共に姿を現せ!

シンクロ召喚!疾風迅雷!“ライトニング・ドラグーン”!」

ATK/2500

「バトル!」

「いや、君のモンスターの攻撃力と“デビルドージャー”の守備力は同じだよ」

「“ライトニング・ドラグーン”で“デビルドージャー”を攻撃!」

「守備力はこちらの方が上だ!」

「畏カード“ストライク・ショット”!攻撃宣言したモンスターの攻撃力を700アップして、貫通能力を得るよ!」

「なっ!?うぐっ!」

原歩 LP 100

「“神聖騎士パーシアス”でダイレクトアタック!」

「うわあああっ!」

原歩 LP 0

「くっつ、罠カード“白兵戦”発動！僕がダメージを受けた時、相手に700ポイントのダメージを与える！」

「きゃっ！」

アリス LP 2500

『決まったー！イースト校はとうとうラストホーラーの登場だー！』

次の人で最後だね。私のライフは残り2500、リヨウも残ってる。私たちが有利だね。

「強いなあ、ホントに」

次の人が来た。この人は、

「オレはセクト。よろしく」

『デュエル！』

「オレのターン！」

アリス SP 7

セクト SP 11

「オレは“スピードワールド2”の効果発動！SPカウンターを1

0個取り除き、“神聖騎士パーシアス”を破壊するぜ！」

セクト SP 1

「っ！」

由里が残してくれたカードは後1枚か。

「オレは“アーマード・ビー”を召喚！」

ATK / 1600

「このカードは相手モンスター1体の攻撃力を半分にするぜ！」

「“ライトニング・ドラグーン”の効果！このカードが効果対象となった時、その効果を無効にできる！」

「なっ！？」

これで“ライトニング・ドラグーン”の攻撃力は変わらない。

「くそ、オレはカードを2枚伏せて、ターン終了だ」

「私のターン！」

アリス SP 8

セクト SP 2

「私は“ライトニング・ドラグーン”で“アーマード・ビー”を攻撃！」

「くっつ！」

セクト LP 3100

「罨カード“奇跡の残照”！オレは“アーマード・ビー”を復活させるぜ！」

ATK / 1600

「私はカードを1枚伏せて、ターンエンド」

「オレのターン！」

アリス SP 9

セクト SP 3

「アーマード・フライ”を召喚！」

ATK / 2000

「アーマード・ビー”の効果で“ライトニング・ドラグーン”の攻撃力を半分にするぜ！」

「ライトニング・ドラグーン”の効果で無効にするよ！」

でも、問題は、

「そうするに決まってるぜ！だからこそ罨カード“ミニチュアライズ”発動！相手モンスター1体の攻撃力を1000ダウンさせるぜ

「！」

ATK / 1500

これが狙いだっただ。

「バトル！ “アーマード・フライ” で “ライトニング・ドラグーン” を攻撃！」

「っ！」

アリス LP 2000

「さらに “アーマード・ビー” でダイレクトアタック！」

「きゃあっ！」

アリス LP 400

これで私のライフはセーフティラインを切っちゃった。
でもまだセクトのSPカウンターは4じゃない。私の次のターンまで回る。

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

「私のターン！」

アリス SP 10

セクト SP 4

「私は“仮面竜”を守備表示で召喚！」

DEF / 1100

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

多分私はここまで。できるだけのはしてリョウに回してあげない。

「オレのターン！」

アリス SP 11

セクト SP 5

「どうやらそのカードはリクルーターだからバトルでダメージを与えられそうにないな。

オレはカードを2枚伏せ、“スピードワールド2”の効果で、SPカウンターを4つ取り除き、手札の“SP”1枚につき800のダメージを与えるぜ！」

セクト SP 1

でも、私もリョウにできるだけのことをするよ！

「罠カード“ドラゴンの呼び声”！場のドラゴンと同名カードを1体特殊召喚するよ！デッキから“仮面竜”を特殊召喚！」

ATK / 1400

これで私の役割は終わりかな。

アリス LP 0

side out

「リョウ、後はお願い」

「うん。みんなが繋いでくれたこのデュエル、オレが決めてくるよ」

「負けんなよ！」

「私のカードも残ってるから、よければ使ってね」

由里のカードが1枚とアリスのカードが2枚伏せられてる。このカードが役に立つ筈だよ。

「いつてくるよ」

「がんばって！」

ありがとね、アリス。

オレはアリスに笑いかけてからコースに出た。

「来たな！今日こそオレたちの勝利は大アリだぜ！」

「そうはいかないよ。このデュエル、勝つのはオレたちだ！」

『デュエル！』

「オレのターン！」

リヨウ SP 12

セクト SP 2

「オレは“スピードワールド2”の効果で、SPカウンターを7つ取り除き、カードを1枚ドローする！」

リヨウ SP 5

「オレは“仮面竜”をリリースして、“ブラックマジシャンガール”をアドバンス召喚！」

ATK/2000

「罨カード“激流葬”！モンスターが召喚された時、場のモンスターを全て破壊するぜ！」

『えーッ！？』

はは。せつかく召喚されたのにいきなり破壊されるのはちょっとね。

「カウンター罨“誤作動”発動！500ライフを払い、罨の発動を無効にしてそのカードを元に戻す！」

リヨウ LP 3500

『ほっ。ビックリした〜』

「由里に感謝しないとね」

このカードは由里が残してくれた罠。助かったよ。

「さあ、バトル!“ブラックマジシャンガール”で“アーマード・ビー”を攻撃！ブラック・バーニング！」

「ぐわっ！」

セクト LP 2700

「これで昆虫族モンスターは“アーマード・フライ”だけ！よって“アーマード・フライ”の攻撃力は1000になる！」

ATK/1000

「“仮面竜”で“アーマード・フライ”を攻撃！」

「くわっ！」

セクト LP 2300

「オレはカードを2枚伏せ、ターンエンド」

「オレのターン！」

リヨウ SP 6

セクト SP 3

「オレは“代打バッター”を召喚！」

ATK / 1000

「さらに畏カード“激流葬”発動！場のモンスターを全て破壊するぜ！」

「畏発動！“マジシャンズ・バリア”！このターン、オレの魔法使い族モンスター1体は破壊されない！」

“仮面竜”と“代打バッター”が破壊されて、マナだけが場に残った。けど、“代打バッター”にはこの後の効果がある。

「“代打バッター”が墓地に送られた時、手札の昆虫族モンスター1体を特殊召喚できる！」

来い！オレの最強インセクト！“ポセイドン・オオカブト”！」

ATK / 2500

「“ポセイドン・オオカブト”は攻撃表示モンスターに攻撃する場合、3回攻撃できる！」

マズイね。マナは破壊されないとはいえ、3回攻撃を受けることになる。

「いけ！“ポセイドン・オオカブト”！」

『きゃあっ！』

「っ！」

リヨウ LP 3000

「まだまだあ！」

『うあっ！』

「くっ！」

リヨウ LP 2500

「これでラストだ！」

『きゃあああっ！』

「うあっ！」

リヨウ LP 2000

この攻撃は流石に予想外だったよ。

「マナ、大丈夫？」

『うん。ちょっと痛かったけど、バリアが守ってくれたからなんとか』

マナは大丈夫そうだね。

「へへ、破壊されないことがアダになったね」

「でもオレの“ブラックマジシャンガール”は無事だよ。次のターン、どうなるかな」

「オレの最強インセクトを倒せるもんか！」

「やってみないと解らないよ。」

オレのターン！」

リョウ SP 7

セクト SP 4

「畏発動！“賢者の秘石”！場に“ブラックマジシャンガール”がいる時、デッキから“ブラックマジシャン”を特殊召喚する！
来い！“ブラックマジシャン”！」

ATK/2500

「決めるよ。マハード、マナ」

『ああ』

『うん』

「バトル！」

「バトル？まさか、相打ち狙い！？」

オレはそんなことはしないよ。オレにはアリスが残してくれた2枚のカードがある！

「畏カード“ライジング・エナジー”発動！手札を1枚墓地に送り、“ブラックマジシャン”の攻撃力を1500アップする！」

ATK / 4000

「いけ！“ブラックマジシャン”！“ポセイドン・オオカブト”を攻撃！ブラック・マジック！」

「はははっ！お見通しさ！罠カード“あまのじゃくの呪い”を発動！攻撃力・守備力のアップダウン効果は逆になる！“ポセイドン・オオカブト”を倒す為に攻撃力を上げてくることなんて予想済みだ！」

「君が何か考えてることくらいはオレだって予想してたよ。カウンター罠“トラップ・ジャマー”！バトルフェイズ中の罠カードの発動を無効にして破壊する！」

アリスが残してくれた2枚のカードがオレを助けてくれた。

「“ブラックマジシャン”の攻撃力は4000のまま！バトル続行！」

「うわあああっ！」

セクト LP 800

「これで終わりだ！“ブラックマジシヤンガール”でダイレクトアタック！」

「うわああああっ！」

セクト LP 0

「やったね、リヨウ！」

「うん。みんなが繋いでくれたお陰だよ」

オレたち4人で勝ち取った勝利だよ。

「おっし！明日もこの調子でいこうぜ！」

「にやはは。そうだね」

「明日の最終戦、ノース校とのデュエルも必ず勝とう！」

『オー！』

オレたち4人の絆は深まった。不安要素は何もない。明日のデュエル、オレたちは万全の体制だ。

一日の日程が終了して、オレはいつものように海を眺めてる。ここにいると何だか落ち着くし、マハードやマナとゆっくり話せるしね。

明日が学園対抗戦最終日。デュエルはネオドミノ校とノース校とのだけ。

お互いに全勝。事実上の決勝戦ってことになる。

因みに、他の学園の戦績は、サウス校が2勝。ウエスト校が1勝。イースト校が全敗。

明日のデュエルではラストホイーラーの舞とデュエルをすることになるだろうね。舞とは楽しいデュエルになるだろうから、楽しみだな。

『リヨウ、少しいいか？』

「どうしたの？マハード」

『明日のデュエルは美庄殿とデュエルをすることになるだろうが、そのことで少しな』

「何？」

『美庄殿が使うカードは既に知っている筈だが、そのエースが少し気になって調べてみた』

舞のエース、あの七色の鳥か。

『彼女のデッキは鳥獣族とドラゴン族だが、元々異なった種族が共闘することは難しい。しかし、この二つの種族が共闘する理由はそのエースにある』

「よく解らないな。どういうこと？」

『つまり、そのエースが二つの種族を纏め、統括した。相反する種族を纏めるだけの力量があるということだ』

「なるほど。マハードがそんなに警戒してるのなら、かなり強いんだろっね」

『実際は何一つ詳細が解らない以上、闘ってみるしかないのだがな』
「それなら問題ないよ。オレたちはただ絆を信じて闘っただけだからね」

『そうだな。どうやら杞憂だったようだ』

「そんなことないよ。心構えができたからね」

『そうか。明日は』

『がんばろっね』

「マナ。話に入ってこないからどうしたのかと思ったよ」

『ちよっとね』

『やれやれ。なんにしろ、私たちは私たちのデュエルをするだけだ』

「だね。明日もよろしくね。マハード、マナ」

『さあ、泣いても笑っても、学園対抗戦ラストデュエルを迎えたー！
奇しくもラストデュエルは共に全勝のネオドミノ校対ノース校！事
実上の決勝戦を我々は見ることになったぞー！』

オレたちネオドミノ校とノース校は既にピットに入り、準備を進めてる。ほぼ終わってるんだけどね。

「おい、リョウ」

「啓斗？」

「このデュエル、鍵を握るのはノース校のソードホイラーの立花咲とラストホイラーの美庄舞を倒せるかにあることくらい解ってるんだろ？」

「あの二人が引っ張ってきてるからね」

「リョウが私たちを引っ張ってくれたようにね」

「流石、私たちのリーダーだってことだよ」

アリスと由里か。

「その二人は文句なしに強え。特に美庄はクイーンって呼ばれるだけはある」

「それで？わざわざそう言うんだから、啓斗には何か考えがあるの？」

「俺と由里ができるだけ持たせることは当然だが、それほど長く持つ訳じゃねえ」

「残りの二人も、決して弱い訳じゃないからね」

確かに。むしろ強い部類に入る筈だよ。二人がいるから目立たないだけだからね。

「できれば、リヨウとその美庄のほぼ同じ条件で一騎打ちに持っていくことが理想だな」

「強いのは舞だけじゃないよ。まだ咲がいる」

「私がなんとかするよ」

「アリス、いける？」

「うん。負けない」

アリスの意気込みを買うべきか。

「それで、オレが舞を倒せばオレたちの勝ちってことか」

上等だよ。舞とのデュエルは楽しみにしてたんだし。

「だが、散々リーダーに迷惑をかけた俺たちから提案がある」

「迷惑なんて別に思っていないけど、何？」

「このカードだ」

啓斗が1枚のカードを見せてくれた。このカードは、

「このカードを使えば、展開が楽になる筈だ」

「確かにそうだけど、三人に少なからず負担がかかるよ」

「このくらいなら、手間にはならねえ。心配いらねえよ」

アリスと由里も頷いてる。オレたちの絆なら、あのカードはかなり使える。

「解ったよ。みんなの好意、ありがたく受け取るよ」

「ああ。俺たちがお前まで見事に繋いでやるよ」

「うん。このデュエル、全員一丸となって、必ず勝とう！」

四人で手を合わせる。誓いを込めて、団結を強める為に。

「いくぞ！」

『オー！』

第二十五話：ラストデュエルへ（後書き）

舞のデッキは予想がつくのではないでしょうか？エースモンスターはオリカの予定ですが。

次話からはノース校とのデュエルです。

それでは、グッチーでした。

第二十六話・それぞれのデュエル（前書き）

他作者様がクリスマス企画をしていたので、自分もやろうかと思いましたが、恐ろしく時間がありませんでした。

週一投稿でいっぱいいっぱいですが、何とぞよろしくお願いします。

では、ごっご。

第二十六話：それぞれのデュエル

『さあ、いよいよラストデュエルスタートだ！』

啓斗はスタートラインに並び、スタートの合図を待ってる。

『ライディングデュエル！アクセラレーション！』

始まった。頼んだよ、啓斗。

side 啓斗

スタートはほぼ同時。だが、先攻を取れば多少のアドバンテージが取れる筈だ。ここは譲れねえ！

『流石優勝を決める勝負だ。最初から両者とも譲らない！第一コーナーは二人同時に入ったぞー！』

こっからだ。第一コーナーを取ってみせる！
スピードを上げ、僅かな差で第一コーナーを 取った！

『さあ、激しい争いを制したのはネオドミノ校の啓斗だ。いよいよデュエルだ』

「悪いが先攻は貰ったぜ」

「自信はあつただけどナ」

「一応挨拶しとくぜ。俺は石井啓斗だ」

「ミィはジエームス・ラブ。よろしくナ」

『デュエル!』

「俺のターン!」

さあ、いかせて貰うぜ。

「俺は“ジエネクス・ニュートロン”を召喚!」

ATK / 1800

「そしてエンドフェイズ、“ジエネクス・ニュートロン”の効果発動!このカードが召喚に成功したターンのエンドフェイズ、デッキから機械族チューナーモンスター1体を手札に加える。
俺は“クイツク・スパナイト”を手札に加えるぜ」

これで先攻のアドバンテージを使った。奴はどう出る?

「ミィのターン」

SP 1

「ミィは“ドリラゴ”を召喚」

ATK / 1600

「このカードより攻撃力の高いモンスターが相手場にいない場合、

このカードはダイレクトアタックができる」

チツ、そういうモンスターかよ。

「ドリラゴ”でダイレクトアタック！」

「ぐっっ！」

啓斗 LP 2400

「カードを3枚セット、ターンエンド」

「俺のターン！」

SP 2

やられたらやり返す！」

「俺は“クイック・スパナイト”を召喚！」

ATK/1000

「遠慮はしねえ！全力でいかせて貰うぜ！」

「来い！ユーの実力を見せてみる！」

「俺はレベル4の“ジェネクス・ニュートロン”に、レベル3の

クイック・スパナイト”をチューニング！

受け継がれし魂が、光となって駆け昇る！

シンク口召喚！光来せよ！“ライトニング・ウォリアー”！」

ATK / 2400

「シンクロ素材となった“クイック・スパナイト”の効果で、“ドリラゴ”の攻撃力を500下げる！」

ATK / 1100

「バトル！ “ライトニング・ウォリアー”で“ドリラゴ”を攻撃！
ライトニング・パニッシャー！」

「グウツ！」

ジェームス LP 2700

「畏カード“ダメージ・コンデンサー”発動！手札を1枚墓地に送り、受けたダメージ以下のモンスター1体をデッキから特殊召喚する！」

ミーは“コマンダー”を特殊召喚する」

ATK / 750

「こつちにも効果があるぜ！」

“ライトニング・ウォリアー”がモンスターを破壊した時、俺の手札1枚につき400のダメージを与える！」

俺の手札は6枚！2400のダメージを受ける！」

これが通れば、かなりダメージを与えられる！」

「畏発動！ “ダメージ・トランスレーション”！ミーが受ける効果

ダメージは半分になる！」

チツ、良いカード伏せてやがったな。

「だがダメージはあるぜ」

「グウツ！」

ジエームス LP 1500

「俺はカードを3枚伏せ、ターンエンドだ」

「エンドフェイズ、“ダメージ・トランスレーション”の効果が発動する。受けた効果ダメージの回数だけ、“ゴースト・トークン”を特殊召喚する」

DEF/O

マズいな。リリース素材が2体いる。ってことは奴のエースが召喚される可能性がある。

「くるか？」

「あのモンスターが出てきたら啓斗君でも厳しいかも」

「うん。プラネット・シリーズの1枚」

「ミリーのターン！」

SP 3

「罨カード“同姓同名同盟”を発動！ミリーのレベル2以下の通常モンスター1体の同名カードをデッキから可能な限り特殊召喚する！デッキから“コマンダー”を2体、守備表示で特殊召喚する！」

DEF / 700

くるのか？

くるなら来い！正面から叩き潰してやる！

「ミリーは“ゴースト・トークン”と“コマンダー”1体をリリース、
“デモニック・モーター・”をアドバンス召喚！」

ATK / 2800

プラネットじゃねえ。。
だが、それでも“ライトニング・ウォリアー”より攻撃力は上か。

「バトル！“デモニック・モーター・”で“ライトニング・ウォリアー”を攻撃！」

「ぐわっ！」

啓斗 LP 2000

くそ、状況が一変しやがった。
奴の場には守備表示の“コマンダー”が2体と攻撃力2800の“デモニック・モーター”がいる。
考えたところで、なんとかするしかねえけどな。

「エンドフェイズ、“デモニック・モーター”の効果により、
“モータートークン”を特殊召喚する！」

ATK/0

4体目か。キチイな。

だが、負ける訳にはいかねえんだ！

「俺のターン！」

SP 4

「“SP 進軍”発動！SPカウンターが3つ以上ある時、手札のレベル4以下の戦士族モンスター1体を特殊召喚する！
“ジャンク・ブリーダー”を特殊召喚！」

ATK/1800

「さらに“共闘するランドスターの剣士”を召喚！」

ATK/500

「そして畏発動！“レイジ・リシンクロ”！墓地のシンクロモンスターの素材となるチューナーとチューナー以外のモンスターを墓地

に送り、墓地のシンクロモンスターを攻撃力を500上げて特殊召喚する！

場の“ジャンク・ブレード”と“共闘するランドスターの剣士”を墓地に送る！

迅雷の如く駆け抜ける！“ライトニング・ウォリアー”！

ATK/2900

「なんだと!？」

これで奴のモンスターの攻撃力を上回ったぜ！

「バトル！“ライトニング・ウォリアー”で“デモニック・モーター”を攻撃！ライトニング・パニッシャー！」

「クッ！」

ジェームス LP 1400

「さらにモンスターを破壊したことで、手札1枚分の400のダメージを受けて貰うぜ！」

「墓地から“ダメージ・イーター”の効果を発動する。このカードをゲームから除外し、効果ダメージを回復効果に変更する！」

ジェームス LP 1800

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド」

だがリリース素材は十分残ってやがる。奴のエースがいつ召喚され

ても不思議じゃねえ。

「ミーのターン！」

S P 5

「ククク」

「何笑ってやがる？」

「終わりにしてやるつもりだと思ってナ」

とうとう来やがるな。

「来いよ！全力でやるんだろが！」

「ククク、いいだろう。」

ミーは“モータートークン”と“コマンダー”1体をリリースし、
モンスターを召喚する！

現れる！“The big SATURN”！

ATK/2800

「遂に出てきたね。ノース校の象徴、プラネットの1枚」

「啓斗君 大丈夫かな」

「きつと大丈夫だよ。“ライトニング・ウォリアー”の攻撃力は“

SATURN”より高い」

「それに、啓斗には心強い相棒がついてる」

「きやがったな。ぶっ倒してやる！」

「やってみな」

「何強がってやがる。攻撃力は“ライトニング・ウォリアー”の方が上だぜ」

「ユーに“SATURN”の真の攻撃を見せてやろう。

“SATURN”の効果発動！手札1枚を墓地に送り、1000ラ
イフを支払うことで、“SATURN”はモードチェンジする！」

ジェームス LP 800

“SATURN”が姿を変えていく。銃口が増えてるみただが
。

ATK / 3800

やっぱり攻撃力を上げる効果か。

「攻撃力3800!？」

「これがプラネットの力か」

「そういえば、由里もプラネット持ってるよね？」

「持ってるけど、私はそんなに使わないから」

「なんにしても、この状況はちょっとマズイかもね」

「いいの？ライフがセーフティライン越えちゃったじゃん」

「構わないわ。今はお互いに手札が無いもの。次のターンに引くとは限らないわ」

「なるほど。流石だね、舞！」

チツ。攻撃力が3800になるとはな。こいつはちよいとマズイか。

「いくぞ！“SATURN”で“ライトニング・ウォリアー”を攻撃！」

数々の銃口が一斉掃射してくる。大した迫力だな。

「ぐああっ！」

啓斗 LP 1100

“ライトニング・ウォリアー”が消し飛ばされた。
だが、その魂は引き継がれるんだぜ！

「畏発動！“受け継がれる魂”！このターン、破壊されたシンクロ
モンスターと同じレベルの通常モンスター1体をデッキから特殊召
喚する！

来い！“暗黒騎士ガイア”！」

ATK/2300

「頼むぞ、カカシ！」

『やけに気合い入ってるじゃねえか』

「負ける訳にはいかねんだよ！」

『いいだろう。力を貸すぜ！』

次のターン、勝負を決める！

「ミリーのターンは終わりだ。

さて、そのモンスターで何をするのか。それとも、次のドローに賭
けるのかい？」

「それはこのターンで示してやる！俺のターン！」

SP 6

引いたカードは、これか。使った方がいいかもな。

「SP エンジェル・バトン”発動！SPカウンターが2つ以上ある時、カードを2枚ドロシー、1枚を墓地に送る」

フー。オレにできることはもうねえな。いくか！

「バトルだ！“ガイア”！“The big SATURN”を攻撃しろ！」

「!?!」

「シット!?!」

「何かあるのかな?」

「多分」

「何のつもりだ?」

『ハッ！打ち倒してやるぜ！啓斗!』

「応！罠カード“死翔の鎗”！このカードを発動したターン、“ガイア”と戦闘するモンスターをダメージ計算を行わずに破壊する！」

「な、なんだと!?!」

こいつで終いだ！

「やれ！カカシ！」

『任せときな！』

「穿て！死翔の鎗！」

『オオオオツ！』

“The big SATURN”にカカシが投げた鎗が突き刺さる。

ドゴオオオオ！

「グオオツ！」

場全体から凄まじい爆発が起こる。

「この効果でモンスターを破壊した時、1000のダメージを与える！」

「ガアアアツ！」

デイビット LP 0

「っしやあー！」

拳を握り締め、ガッツポーズを決めた。

「よし！流石啓斗！」

「やったね！」

「うん！」

「グウ。やるな。」

だが、お前も道連れだ！“SATURN”の効果！相手のカード効果によって破壊された時、お互いのプレイヤーは“SATURN”の攻撃力分のダメージを受ける！」

「なっ！？」

マジで道連れにするつもりかよ！そうはさせるか！

「墓地から“ジャンク・ブロッカー”の効果発動！オレが1000以上の効果ダメージを受ける時、このカードを除外して効果ダメージを無効にする！」

フー。危ねえ、危ねえ。たまたま“SP エンジェル・バトン”してラッキーだったな。

『さあ、ラストデュエル、まずはネオドミノ校が先制したー！ノース校セカンドホイラー、クロコダイルは巻き返せるかー！？』

次の奴は、確か爬虫類使いだったな。

「やるな、お前」

「いや、お前らだって大した強さじゃねえか」

「ククク、そうか」

こつからどんだけ粘れるか。俺の場には力カシと伏せカードが1枚、手札が1枚だけだ。

「始めるぜ！」

『デュエル！』

「俺のターン！」

SP 7

「俺は“コマンダー”をリリースし、“レプティレス・メデューサ”をアドバンス召喚！」

ATK/2200

力カシの方が攻撃力は上だ。次の俺のターンに回れば。

「ククク、お前はここで終わりだ」

「　　どういう意味だ？」

「ククク、“レプティレス・メデューサ”の効果発動！手札1枚を墓地に送り、相手モンスター1体の攻撃力を0にする！」

ATK / 0

『身体が 動かねえ 』

カカシの攻撃力が0になると !

「フィニッシュだ!“レプティレス・メデューサ”で“暗黒騎士ガ
イア”を攻撃！」

くそ。。ここまでかよ。。
だが、俺にはまだやるべきことがある！

「永続罫“魂のリレー”を発動する！手札の“ネジマキの見習い戦
士”を墓地に送る！」

これで終わりだな。。

「何かは知らんが、バトルは続行される！」

『チツ 』

「くつ 』

啓斗 L P 0

後は頼んだぜ、由里、アリス、リョウ。

side out

啓斗がピットに戻ってきた。

「お疲れ様、啓斗」

「ああ。後はよろしくな」

「うん！啓斗君が繋いだこのデュエル、私がちゃんと繋いでくるよ」
「！」

「応。がんばれよ、由里」

「うん！いつてくるよ！」

由里がスタートした。

「由里の場には“魂のリレー”があるだけだけど、大丈夫かな？」

「悪いな。何か残す前にやられちゃった」

「ううん。啓斗は悪くないよ」

「由里がこのデュエルを繋ぐのも、チームの為にできることだよ。」

啓斗はちゃんと由里に繋いだ。オレたちのリレーを残してね」

「後は私たちに任せて」

「そうだな」

実際、アリスの言う通り、この状況から始める由里は少し辛いかも

しれない。頼むよ、由里。

side 由里

『さあ、ラストデュエルはほぼ互角の展開だ。流れを掴むのは果たしてどちらか？！？』

ネオドミノ校セカンドホイラー、武内由里の登場だー！』

状況は辛い。だけど、私がここで負けたら、アリスちゃんとリヨウ君がもっと辛くなる。なんとかするしかない。

「始めるぜ」

「うん。よろしくね」

『デュエルー！』

「私のターン！」

SP 8

「私は“コーリング・ノヴァ”を守備表示で召喚」

DEF / 800

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターン！」

S P 9

守備表示の“コーリング・ノヴァ”の攻撃力を0にしても意味はない。まずは耐えて、反撃の準備をしないと。

「俺は“レプティレス・メデューサ”をリリース！」

「えッ!？」

どうして上級モンスターを？

「“スパウン・アリゲーター”をアドバンス召喚！」

ATK/2200

攻撃力は変わらない。だとすると、何かあるね。

「さらに“SP 太古の進撃”発動！SPカウンターが3以上ある時、爬虫類モンスターは貫通効果を得る！」

「うっ
」

「いけ!“スパウン・アリゲーター”で攻撃！」

「きゃああっ！」

由里 LP 2600

くっ、でも反撃の準備はできる！

「『コーリング・ノヴァ』が破壊された時、デッキから攻撃力1500以下の光属性天使を特殊召喚できる。私は『ホーリー・フレイム』を特殊召喚！」

ATK/1500

次のターン、カレンを召喚する！

「カードを2枚伏せ、エンドフェイズ、『スパウン・アリゲーター』の効果！爬虫類モンスターをリリースして召喚された場合、墓地のリリースしたモンスターを特殊召喚する。

『レプティレス・メデューサ』を特殊召喚し、ターンエンド！」

ATK/2200

攻撃力2200のモンスターが2体。ただどこからがんばらないと。

「私のターン！」

SP 10

「『スピードワールド2』の効果発動！SPカウンターを10個取り除くことで『スパウン・アリゲーター』を破壊するよ！」

由里 SP 0

「カウンター罠『デストラクション・ジャマー』！手札を1枚墓地に送り、破壊効果を無効にする！」

そう簡単にはいかないよね。それなら、

「ホーリーフレーム”をリリース素材にする時、光属性通常モンスターの場合、2体分のリリース素材となるよ！
“ホーリーフレーム”を2体分のリリースとして、“翼を織りなす者”をアドバンス召喚！」

ATK/2750

『由里、貴女の想いに、私も応えましょう』

「うん！一緒にがんばろう！」

カレンが力を貸してくれるなら、きっと勝てる！

「畏発動！“デイバインプラスター”！私の場に“翼を織りなす者”がいる時、その攻撃力分のダメージを与える！」

「グオオッ！」

クロコダイル LP 1250

「バトル！“レプティレス・メデューサ”を攻撃！ホーリー・スター！」

『ハアッ！』

「グッ！」

クロコダイル LP 700

よし。このターンでかなりのダメージを与えた。私が有利の筈。

「やったぜ！完全に形勢逆転だ！」

「相手のライフは残り700。後一息だよ！」

「ただ、まだプラネットが残ってる。油断は禁物だよ」

「流石にマズイかな。そろそろ準備するね」

「うん。クロコダイルさんならもう少し粘れるだろうけど」

「ヒュー。やるもんだ」

「ありがとう」

「ま、このまま負けるつもりはないがな
そうだろうね。」

「私はさらにカードを2枚伏せて、ターン終了だよ」

彼の手札は0、場に“スパウン・アリゲーター”と伏せカードが1

枚。どうなるかな？

「俺のターン！」

由里 SP 1

クロコダイル SP 11

「ククク、俺は“スピードワールド2”の効果を使い、10個SPカウンターを取り除き、“翼を織りなす者”を破壊する！」

クロコダイル SP 1

「カウンター罠“エクセリオンチャージ”！私は“翼を織りなす者”の攻撃力分のライフを回復！さらに“翼を織りなす者”への対象の効果は無効にするよ！」

由里 LP 5350

カレンを護つてライフも回復できた。気になるのは、ドローした時笑ったことだけだ。

「畏カード発動。“リビングデッドの呼び声”！墓地の“フレムベル・グルニカ”を特殊召喚する！」

多分、効果で墓地に送ったカードだよ。爬虫類以外にもいたんだ。

「ククク。俺は2体のモンスターをリリース！」

「っ！」

しまった。くる！？

「現れる！冷たき暴君！“The Tyrant Neptune”！」

ATK / 0

「このカードの攻撃力と守備力はリリースしたモンスターの攻撃力と守備力を奪い取る！」

ATK / 3900

「攻撃力 3900」

「プラネット、2体目」

「攻撃力3900なんて」

「こいつはヤバいかもな」

「“Neptune”！」

「形勢逆転だわ！」

「ククク。さらに“Neptune”がリリースしたモンスター1体の効果を奪う！よって“フレムベル・グルニカ”の効果を奪う！」

「くっっ」

「バトルだ！“翼を織りなす者”を攻撃しろ！」

鎌を振りかざして、カレンを襲う。

『くっっ』

「きゃああっ！」

由里 LP 4200

「さらに、“フレムベル・グルニカ”の効果を得ている！モンスターを破壊した時、そのモンスターのレベル×2000のダメージを与える！」

カレンのレベルは7だから、

「14000のダメージだ！」

「くっっっっ！」

由里 LP 2800

これが “Neptune” の力。

「由里」

「キツイか？」

「まだまだよ。由里の目はまだ死んでない。まだ諦めてないんだよ」

「まだまだよ。私にはまだ逆転の手が残されてる。」

「俺はこれでターンエンドだ」

「私の ターン！」

SP 2

「永続罾“正統なる血統”！墓地の通常モンスター1体を特殊召喚する！」

“翼を織りなす者”を墓地から特殊召喚するよ！」

ATK/2750

「ククク。そんなモンスターでいまさらどうするつもりだ？」

私には切り札が伏せられているんだよ。勝負！

「畏発動！“スターライト・ブレイク”！」

カレンが輝き出した。

「な、何あれ？」

「なんだか凄そうね」

「きた！由里の切り札！」

「コイツで決まりだ！」

「ラストバトルだ！」

「クソ、何をするといいんだ！？」

「“スターライト・ブレイク”は、発動を終えた“デイバインブラスター”と“エクセリオンチャージ”をゲームから除外して発動できる。私の場の“翼を織りなす者”の攻撃力を二倍にする！」

ATK / 5500

カレンが輝きを増していく。いくよ！

「カレン！お願い！」

『承知しました。私もこの状態になるのは久しぶりですので、頗る

感覚です』

これで終わりだよ。

「バ、バカな」

「バトル!“翼を織りなす者”で“The Tyrant Nep tune”を攻撃!スターライト・ホーリー・スター!」

「グワアアアツ!」

クロコダイル LP 0

やった!私の勝ちだよ!

「っしやあ!」

「やった!由里が勝ったよ!」

「ここまでだね。問題はここからだよ」

「それじゃ、いつてくるね」

「うん。がんばって、咲!」

勝負は、これからだ！

第二十六話・それぞれのデュエル（後書き）

ノース校のエースモンスターはプラネットシリーズです。

次話で咲登場ですが、咲のエースモンスターはプラネットではありません。似てはいますが。

それでは、グッチーでした。

第二十七話・華竜VS月（前書き）

少しでも早めの投稿です。年始は忙しいので。

遂に咲の登場です。

では、どうぞ。

第二十七話：華竜VS月

『さあ、ラストデュエルはネオドミノ校が一歩リードの展開！
しかし、まだまだデュエルの行方は解らない！

ここまで数々のピンチを打破してきたノース校の一人、サードホイ
ーラー、立花咲が遂に出てきたぞー！』

咲か。由里の場には自身の精霊のカレンがいる。対する咲の場にカ
ードは残ってない。この状況からどうやって切り返してくるかな。

side 由里

来たね。ノース校の要注意人物と言える一人、立花咲さん。

「凄いな、クロコダイルさんの“Neptune”を倒すなんて
なんだかずいぶん親しげに話してきたなあ。」

「私、立花咲！咲でいいよ！」

「えっと、武内由里です。私も由里で構わないよ」

「ありがとう！じゃあ、早速だけど、始めよっか！」

『デュエル！』

「私のターン！」

SP 3

私の場にはカレンと“魂のリレー”、手札は2枚。どうやってくるかな？

「私は“ナチュル・クリフ”を召喚」

ATK / 1500

今まで通り、地属性の“ナチュル”だね。

「さらに“SP ハイスピード・クラッシュ”発動！SPカウンタ―が2つ以上ある時、私の場のカード1枚と場のカード1枚を破壊するよ！

私の場の“ナチュル・クリフ”と“翼を織りなす者”を破壊！」

いきなり！？

『うつつ！』

カレンが破壊されて、私の場はがら空き。しかも“ナチュル・クリフ”には次に繋がる効果がある。

「“ナチュル・クリフ”が破壊された時、デッキからレベル4以下の“ナチュル”を特殊召喚できる。

私は“ナチュル・ホーストニードル”を特殊召喚！」

ATK / 1800

「バトル！“ナチュル・ホーストニードル”でダイレクトアタック

「！」

「きゃああっ！」

由里 LP 1000

形勢が一気に変わっちゃった。本当に強い。

「私はカードを2枚伏せて、ターン終了だよ」

「私のターン」

SP 4

「私は“ムドラ”を召喚！」

ATK / 1500

「私は由里のモンスターの召喚が成功したことで手札の“ナチュラル・コスモビート”を特殊召喚！」

ATK / 1000

私のターンにモンスターを召喚した！？

「このカードは相手モンスターが通常召喚に成功した時、特殊召喚できるんだよ」

「そうなんだ。だけど、私の“ムドラ”にも特殊効果があるよ。墓地の天使1体につき、攻撃力が200ポイントアップするんだよ！」

墓地の天使は3体だから、合計600ポイントアップだね。

ATK/2100

このカードで粘れるだけ粘らないと。

「バトル！ “ムドラ” で “ナチュラル・コスモビート” を攻撃！」

「そう簡単にはいかないよ！」

罨カード “緊急同調” ！バトルフェイズ中にシンクロ召喚できるんだよ！」

私のターンにシンクロ召喚を！？

「私はレベル4の “ナチュラル・ホーストニードル” に、レベル2の “ナチュラル・コスモビート” をチューニング！シンクロ召喚！ “ナチュラル・パルキオン” ！」

厄介なカードが出てきた。あのカードがいるカード限り、罨カードを発動するのが難しくなる。

「バトルを中断するよ。」

私はカードを1枚伏せて、ターンエンド」

あのカードをどうにかしたいけど、私には手がない。

「私のターン！」

SP 5

「私は“ナチュル・ロック”を召喚！」

ATK / 1200

「さらに罫カード“エンジェル・リフト”発動！墓地のレベル2以下のモンスターを特殊召喚する！“ナチュル・コスモビート”を特殊召喚！」

ATK / 1000

まさか、またシンクロ召喚して。レベルは5だから。

「レベル3の“ナチュル・ロック”に、レベル2の“ナチュル・コスモビート”をチューニング！」

シンクロ召喚！“ナチュル・ビースト”！」

ATK / 2200

あのカードには魔法を封じる効果がある。魔法も罫も封じられた。

「バトル！“ナチュル・パルキオン”で“ムドラ”を攻撃！」

「きゃあっ！」

由里 LP 600

「“ナチュル・ビースト”でダイレクトアタック！」

私に防ぐ手段はない。

「きゃああっ！」

由里 L P O

魔法も罫も発動できないまま、アリスちゃんに回しちゃった。ただ、私にはまだしなくちゃいけないことがあるよ！

「私はエンドフェイズに“魂のリレー”の効果で手札の“次元合成師”を墓地に送るよ！」

私は、ここで終わりだね。

side out

「お疲れ。由里」

「うん。でも、この状況は」

「気にしないで。なんとかするよ」

「アリスちゃん」

アリスは気合い入ってるみたいだね。

「アリス、がんばって。二人でこのデュエルを終わらせよう」

「うん！がんばってくるよ！」

side アリス

『さあ、両校共にサードホイラーに突入だ！ネオドミノ校サードホイラー、アリス・ルシエの登場だー！』

「次はあなただね！私は立花咲！よろしくね」

「うん、よろしく」

「ねえねえ、昨日ちょっと気になったんだけど、リヨウとどんな関係なの？」

「この観衆の中で言うのは嫌だな。」

「えっと、その話は後でね」

「ふうん。じゃあ楽しみにしてよっと」

リヨウの友達だって話だし、構わないよね。

「それじゃあ、始めるよ」

『デュエル！』

「私のターン！」

SP 6

先ずはあの2体のモンスターをどうにかしないと、私は魔法と罫を使えない。

「私は“仮面竜”を守備表示で召喚」

DEF / 1100

「カードを1枚伏せて、ターン終了だよ」

攻撃を凌いで、反撃しないと。

「私のターン！」

SP 7

「私は“ナチュル・パンプキン”を召喚！」

ATK / 1400

「このカードが相手モンスターが存在する時に召喚に成功した場合、手札から“ナチュル”モンスター1体を特殊召喚できるんだよ。“ナチュル・アンドショー”を守備表示で特殊召喚！」

DEF / 200

これでモンスターは4体。早くこの状況をなんとかしないと。

「バトル!“ナチュル・ビースト”で攻撃！」

「っー！」

でも、このターンは凌いでみせる！

「“仮面竜”が破壊された時、デッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスターを特殊召喚できる！

デッキから“仮面竜”を守備表示で特殊召喚！」

DEF / 1100

「こつちも効果発動だよ！“ナチュラル・アンドショー”が存在する場合、相手がモンスターを特殊召喚した時、デッキからレベル3以下の“ナチュラル”モンスターを特殊召喚できる！

“ナチュラル・ローズウィップ”を守備表示で特殊召喚！」

DEF / 1700

これで、5体目。

「さらにバトルだよ！“ナチュラル・パンプキン”で攻撃！」

「“仮面竜”が破壊されたことで、デッキから“仮面竜”を特殊召喚」

DEF / 1400

「さらに“ナチュラル・パルキオン”で攻撃！」

「っ！“仮面竜”が破壊されたことで、デッキから“ドル・ドラ”を特殊召喚」

DEF / 1200

「私はカードを1枚伏せて、ターンエンドだよ」

なんとか耐えた。ここから反撃だよ！

「私のターン！」

SP 8

「私は“デルタフライ”を召喚！」

ATK / 1500

「このカードはこのモンスター以外のモンスター1体のレベルを1
上げることができるよ！“ドル・ドラ”のレベルを4に！」

「シンクロ召喚だね」

「いくよ！レベル4となった“ドル・ドラ”に、レベル3の“デル
タフライ”をチューニング！」

煌めきたる稲妻よ、轟く雷鳴と共に姿を現せ！

シンクロ召喚！疾風迅雷！“ライトニング・ドラグーン”！」

ATK / 2500

「バトル！“ライトニング・ドラグーン”で“ナチュラル・ビースト
”を攻撃！サンダー・ストリーム！」

「ぎゃっ！」

咲 LP 3700

これで私は魔法を使うことができるね。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン！」

SP 9

「スピードワールド2”の効果で、SPカウンターを7個取り除いてカードを1枚ドロウするよ」

咲 SP 2

手札がドロウカード1枚だけだったから、この判断は仕方ないかな。

「えっと、アリス、でいい？」

「うん。いいよ、咲」

名前と呼ばれたから名前で呼ぶよ。

「そのシンクロモンスターは確かに強いけど、私は越えるよ」

嘘じゃないね。このターンで私の“ライトニング・ドラゲーン”を越えてくる。

「いくよ！レベル6の“ナチュラル・パルキオン”に、レベル3の“

ナチュル・ローズウィップ”をチューニング！
シンクロ召喚！“ナチュル・ガオドレイク”！」

ATK / 3000

攻撃力 3000。

「バトル！“ナチュル・ガオドレイク”で“ライトニング・ドラグーン”を攻撃！」

「きゃあっ！」

アリス LP 3500

「さあ、これでは」

「まだまだよ！畏カード“竜の巣窟”！私のドラゴンが破壊された時、同じレベルのドラゴンを手札から召喚するよ！」

このデュエル、勝ってリョウに繋ぎたい。だから、私に力を貸して！

「私は手札から“真紅眼の黒竜”を特殊召喚！」

ATK / 2400

「このモンスターが、私のエースモンスターだよ、咲」

「凄いね！でも、私だって負けないよ！

相手モンスターの特殊召喚により“ナチュル・アンドショー”の効果でデッキから“ナチュル・トライアンフ”を特殊召喚！」

DEF / 1500

シンがいるから、咲はこれ以上攻撃できない。次のターン、“ナチュラル・ガオドレイク”をなんとかしないと。

「アリス、あなたがエースを召喚したなら、私もエースを召喚するよ！」

“ナチュラル・アンドショー”をリリースして、“The Protean Moon”をアドバンス召喚！」

ATK / 2000

これが 咲のエース。だけど、

「兎、だよね？」

「あはは。そうだよ。でも、このカードは変幻自在だよ！」

“Moon”の効果！このカードを魔法・罠ゾーンにセットするよ！」

“The Protean Moon”が姿を変えていく。この姿は、

「月？」

「そうだよ。綺麗だよね」

名前通りといえば、その通りなんだけど。

「確かに、満月みたいで綺麗だね」

『主アリス、見とれている場合ではない』

「あっ、そうだね」

シンの言う通りだよ。

『何か効果がある筈だ。油断するな』

「うん。解ってる」

咲のエースモンスターの効果は何かな？

「私は“ナチュル・パンプキン”を守備表示にして、ターン終了だよ」

DEF/800

「私のターン！」

アリス SP 10

咲 SP 3

「“スピードワールド2”の効果発動！SPカウンターを10個取り除いて、“ナチュル・ガオドレイク”を破壊する！」

アリス SP 0

「カウンター罠“エクストリオの牙”！相手の効果の発動を無効に

するよ！そして私は手札1枚を墓地に送る」

防がれた。だけど、

「永続罨“竜の逆鱗”発動！私のドラゴンは貫通能力を得るよ！
バトル！“真紅眼の黒竜”で“ナチュル・パンプキン”を攻撃！黒
炎弾！」

「私は“Moon”の効果を発動するよ！このカードが魔法・罨ゾ
ーンにセットされている時、バトルフェイズ中に私のモンスター1
体の攻撃力と守備力は500ポイントアップするよ！」

DEF / 1300

そういう効果なんだ。厄介だね。だけど、

「攻撃力はまだ私が上だよ！」

「うあっ！」

咲 LP 2600

攻撃が通って、ダメージも与えた。でも、次のターン、凌がないと
いけない。

「私はカードを2枚伏せて、ターン終了」

「私のターン！」

アリス SP 1

咲 SP 4

「私は“ナチュラル・フライトフライ”を召喚！」

ATK / 800

「このカードが存在する限り、私の場の“ナチュラル”1体につき、相手モンスターの攻撃力は300ポイントダウンするよ！」

ATK / 1500

シンの攻撃力が。

「まだまだよ。私のエースは更なる力を持つよ！」

更なる 力？

「セットされている“Moon”は、場に特殊召喚できる！」

ATK / 2000

「前のターンに召喚してもよかつたけど、“スピードワールド2”の効果に狙われるのが嫌だったんだ」

何のことだろうか？

「私のエースの本当の姿、今から見せてあげる！」

レベル6の“The Protean Moon”に、レベル2の“ナチュラル・トライアンフ”をチューニング！」

シンクロ召喚！？

「輝け！天に昇りし奇跡の星よ、未来を明るく照らせ！

シンクロ召喚！天空に満ちる月！“The Brilliant Protean Moon”！」

ATK/2000

来た。

兎なのは変わらないけど、さっきのような何の変哲もない姿から衣服を着た闘う姿になってる。

「Moon”が場に存在する限り、私のモンスターの攻撃力は500ポイントアップする！」

ATK/2500

ATK/3500

ATK/1300

「さらに、“Moon”の変幻自在は変わらないよ！“Moon”は場に存在するモンスター1体と同名カードとなって、そのモンスターの効果を得るよ！

私の場の“ナチュラル・フライトフライ”の効果を得るよ！」

“The Brilliant Protean Moon”が姿を変えていく。“ナチュラル・フライトフライ”と同じ姿になった。

「ナチュラル・フライトフライ”の効果は“ナチュラル”1体につき攻撃力を300ポイントダウンさせる」

「そうだよ！私の“ナチュル”は3体、“ナチュル・フライトフライ”は2体だから、えっと、合計1800ポイントダウンだね」

ATK / 600

シンの攻撃力がたった600に。

「これで終わりだよ！“ナチュル・ガオドレイク”で“真紅眼の黒竜”を攻撃！」

「きゃあっ！」

アリス LP 600

シンが。だけど、まだ終われない！

「畏カード“リバイバル・チケツト”！私のモンスターが戦闘で破壊されている場合、そのモンスターの数だけ私の場のカードを破壊して、破壊されたモンスターを場に戻す！」

私は“竜の逆鱗”を破壊して、“真紅眼の黒竜”を場に戻す！」

ATK / 600

「シン、もう少しがんばって！」

『解っている』

「さらに、私が受けた戦闘ダメージ分のライフを回復するよ！」

アリス LP 3500

「まだ攻撃は終わらないよ！」

“The Bright Protean Moon”で“真紅眼の黒竜”を攻撃！」

「うあああっ！」

アリス LP 1600

「さらに“ナチュル・フライトフライ”でダイレクトアタック！」

「うくっ！」

アリス LP 300

なんとか耐えた。

まだ私のライフは残ってるよ。

「決めるつもりだったんだけどね」

「私はそう簡単には負けないよ」

「でも、次のターンで決めるよ！カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

「リヨウ、そろそろ準備した方がいいんじゃないか？」

「まだいいよ」

「リョウ君の気持ちは解るけど、流石のアリスちゃんもこの状況は
」

「確かに厳しい状況だけど、アリスは一度言ったことは必ず守るよ。
オレはアリスのライフが尽きる瞬間まで信じる」

「 ったく、解ったよ！」

「にはは。アリスちゃん、がんばって！」

このままだと、私は持たない。どうすれば。

『信じるんだよ』

今って、前にリョウが言った言葉。

~~~~~

「リョウ」

「ん？どうしたの？アリス」

「リョウはどうしてそんなにデュエルを最後の最後まで諦めないで  
いられるの？」

「いきなりだね。どうして？」

「これからのデュエルで、きっとそんな状況がくると思っ  
闇のデュエルだってするだろうし、これからのことを考えると、そ  
んな状況が必ずくる。」

「信じるんだよ」

「えッ？」

「信じるんだよ。自分が何枚もあるカードの中から選んだカードだ  
から、自分が信じて組んだデッキを最後まで信じるんだよ」

「信じる」

「うん。オレはどんな状況でも自分が組んだ絆を信じてる。それに  
オレたちには、心強い精霊がいつもついてるんだよ」

「それがリョウの強さの秘訣なのかな」

「はは。そんなんじゃないと思うけどね。アリスにだって、頼もし  
い精霊がついてるんだから。後はカードたちとの絆を信じれば、カ  
ードたちは必ず応えてくれる筈だよ」

~~~~~

そうだね。

こんな状況だからこそ、私はカードたちを信じなくちゃいけないん
だ。

「私のターン」

私の手札に起死回生の手はない。このドローに、全てが繋がってる。

お願い　私の想いに　応えて！

「ドロー！」

アリス　S P　2

咲　S P　5

私のドローカードは　。

うん。そうだね。この子の力を借りるのが、私の精一杯。

「永続罫“正統なる血統”！墓地の通常モンスターを特殊召喚するよ！

私は“真紅眼の黒竜”を特殊召喚！」

ATK/600

「シン、大丈夫？」

『心配するな。問題ない』

うん。私の大切な精霊だからね。

「咲。貴女がエースモンスターの力を見せてくれたのなら、私もエースモンスター、“真紅眼の黒竜”のシンの進化を見せてあげるよ」

「ってことは“真紅眼の黒竜”にもまだ隠された力があるの!？」

そう。やっぱり、これしか手がないから。

「いくよ！私はカードを1枚伏せて、手札から“ブルームドラゴン”を召喚！」

ATK / 300

『きゃうー！』

「うん。一緒にがんばろう、リップ！」

「わあ。可愛いね！」

「いくよ、咲。これが私たちの力！」

レベル7のシンに、レベル1のリップをチューニング！

黒い炎が世界の全てを照らし出す。その眼に宿りし意志よ、今こそ開け！

シンクロ召喚！咲き誇れ！“真紅眼の華竜”！」

ATK / 2800

「やりやがった」

「アリスちゃんの真の切り札だね」

「これが、アリスが自分の絆を信じた結果だよ」

『な、な、なんと！学園対抗戦の白熱したデュエルの中、ラストデュエルで初めて立花咲が自身のエースモンスター“Bright Protean Moon”を召喚したが、負けじとアリス・ルシエがエースモンスター“真紅眼の華竜”を召喚した！』

スタジアムは盛り上がった。

「 凄い」

「これが私たちの力だよ！」

「だけど、攻撃力が下がるのはどのモンスターでも同じだよ！」

「そうはいかない！私は“真紅眼の華竜”の効果を発動！このカードが召喚に成功した時、自分場のカード1枚と相手場のカード1枚を破壊する！」

私の場の伏せカードと、“ナチュラル・フライトフライ”を破壊するよ！」

「きゃっ！」

「The Bright Protean Moon”の効果の対象としていたモンスターが破壊されたことで、その姿は元に戻るよ！」

兔の姿に戻っていく。

これで攻撃力は下がらない！

「でも、私の場には“ナチュラル・ガオドレイク”がいるよ！」

「私は破壊された伏せカード、“ドラゴンの呼び声”の効果を発動するよ！このカードが場で破壊された時、お互いのデッキからレベル4以下のドラゴン族モンスター1体を特殊召喚できる！」
私は“ボマー・ドラゴン”を特殊召喚！」

ATK/1000

「私のデッキにドラゴン族モンスターは入ってないよ」

“ナチュル”は植物族と昆虫族が主体だからね。

「バトル！いくよ、シン！」

『承知した、主アリス』

「まずは“ボマー・ドラゴン”で“ナチュル・ガオドレイク”を攻撃！」

「そんなことしたら戦闘ダメージで」

「“ボマー・ドラゴン”が攻撃する時、お互いのプレイヤーが受けるダメージは0になる！」

そしてこのモンスターを破壊した相手モンスターを破壊する！」

「ええっ!?!」

これで“ナチュル・ガオドレイク”は破壊した。後は、このデュエルに決着をつけるよ！

「さらに、シンで“The Bright Protean Mon”を攻撃！黒華炎弾！」

「きゃあっ！」

咲 LP 2300

シンの放った息吹が咲のエースモンスターを焼き尽くした。

「これで終わりだよ！シンが相手モンスターを破壊した時、そのモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

「うっ、きゃああっ！」

咲 LP 0

勝った。

やったよ、リョウ。

「うん。流石だよ、アリス」

「ったく。マジで勝っちまうとはな」

「にやはは。後一人だよ」

「さて、舞の登場か」

「お疲れ様、咲」

「いける？舞」

「解らない。リヨウも次に控えてる訳だし」

「それでね、私が残したカードなんだけど」

「このカードは」

「うん。やっぱり、あのカードが気になるの」

「そうね。どんな効果が解らないけど、私も気になるわ」

「なんにしても、後は舞のタイミング次第だから。がんばって、舞」

「うん！いつてくる！」

『さあ、ネオドミノ校が一步リードの展開だ！ノース校はとうとうラストホイーラー、美庄舞の登場だ！』

リヨウのもう一人の友達で、ノース校のクイーンと呼ばれる人だね。この人の実力はまだ学園対抗戦でさえ殆ど見せてないんだよね。エースモンスターを召喚してても、その効果を発動してないし。

『しかししかし！まだ勝負は解らない！』

ラストホーラー、美庄舞はノース校においてクイーンと呼ばれる程の切り札！その実力は正に本物だ！」

凄い紹介だね。

「もう。あの、私はそんなに誇示される程強くないのに」

少し困った表情の美庄さん。

「嫌そうだね」

「あつ、ごめんなさい」

「どうして謝るの？気にしてないよ」

この人もきつと、リョウと同じように嫌がってるのだろうし。

「あの、アリスさん、よね？」

「私のことはアリスでいいよ。よろしく」

「こちらこそ。私のこともよければ舞って呼んで？」

「うん。解った」

これで私も友達、かな。

「じゃあ、始めましょう」

「うん」

『デュエル！』

さて、どれ程強いのかな？

第二十七話：華竜VS月（後書き）

咲のエースモンスターとして登場したカードは以前頂いたアイデアを参考にしました。ありがとうございます。

次話に舞の登場。ノース校とのデュエルは終了の予定です。

では、今年最後の投稿です。来年もよろしく願います。

グッチーでした。

第二十八話・マジシャンVS彗星(前書き)

ノース校戦最終話です。二話にもなってしまいました。

では、ごきげん。

第二十八話：マジシャンVS彗星

side アリス

『デュエル!』

「私のターン」

アリス SP 3

舞 SP 6

私のライフは残り300。ここで手札に“SP”があれば、私のライフは尽きる。

「私は“SP エンジェルバトン”発動。SPカウンターが2つ以上ある時、デッキからカードを2枚ドロワーして、手札を1枚墓地に送るわ。」

手札から“ドラグニティ トリプル”を召喚」

ATK/500

「このカードが召喚に成功した時、デッキからレベル3以下のドラゴン族モンスター1体を墓地に送ることができる。私は“ドラグニティ ブランディストック”を墓地に送る」

墓地を肥やしていく。その戦法は今まで通りだね。

「カードを2枚伏せて、ターン終了よ」

“スピードワールド2”の効果を使わなかった。リヨウのことも見据えて、使いたくなかったんだろうね。

「私のターン！」

アリス SP 4

舞 SP 7

私の場にはシンがいる。舞の場には攻撃力500のモンスターが1体。伏せカードがあるけど、ここは攻めるよ！

「私は“ランス・リンドブルム”を召喚！」

ATK/1800

「バトル！」

「畏カード発動！“ゴッドバードアタック”！私の場の鳥獣族モンスター1体をリリースして、場のカードを2枚破壊する！

私は“真紅眼の華竜”と“ランス・リンドブルム”を破壊！」

っ！そう簡単には攻めさせてくれない。だけど、

「“ブルームドラゴン”をシンクロ素材にしたシンクロモンスターは、一度だけ破壊を無効にできる！」

“ランス・リンドブルム”は破壊されたけど、シンはまだ残ってる。

「さらに私は畏カード“連鎖旋風”発動！カード効果によってカードが破壊された時、場の魔法・畏カードを2枚破壊する！」

アリスの場に伏せられたカードと“魂のリレー”を破壊するわ！」

あのカードは咲が伏せていたカード！

啓斗と由里が繋いだカードを破壊される訳にはいかない！例えシンを犠牲にしたとしても！

「畏カード発動！“裁き”！カードを破壊する効果が発動した時、私の場に存在するモンスター1体に破壊対象を移し替える！“魂のリレー”への指定を “真紅眼の華竜”に変更！」

このカードは由里が残してくれていたカード。

「ごめんね、シン」

『気に病む必要はない。気にするな』

ありがとう。

「まさか、止められるなんて」

「まだ、“裁き”の効果は残ってるよ。この効果でモンスターが破壊された時、そのモンスターのレベル×100ポイントのダメージを、お互いのプレイヤーは受ける」

「じゃあ、アリスのライフは」

そう。私はここで、終わりだよ。

アリス LP 0

舞 LP 3200

「ルールによって、ターンはエンドフェイズに入るよ。エンドフェイズに、“魂のリレー”の効果を発動して、手札の“黒竜の雛”を墓地に送るよ」

私にできることは、これで終わりだよ、リョウ。

side out

アリスがピットに戻ってきた。

「お疲れ様、アリス」

「うん。後は」

「解ってるよ。アリスの想いはもちろん、シンの想いも背負っよ」

「リョウ」

「大丈夫。みんなが、啓斗が、由里が、アリスが繋いだこのデュエル、勝利の幕を下ろすのはオレたちネオドミノ校だよ」

「へっ！しっかり決めてこいよ！」

「がんばって！リョウ君！」

「お願い、リョウ」

「みんなの想い、オレが引き受けたよ。じゃあ、いつてくるー！」

オレはみんなに見送られて、ピットを出た。

『さあ、ラストデュエルもいよいよ大詰めだー！ネオドミノ校、ラストホイーラー、リヨウー！』

オレは舞の前に出た。

『ネオドミノ校、エースのリヨウVSノース校、エースの美庄舞の対決となった！どちらもかなりの実力を持っているだろう！さあ、どちらに軍配が上がるのか！？』

スタジアムは盛り上がってる。けど、

「舞、楽しいデュエルをしようね」

「うん。そうね」

「どっちが勝っても恨みつこ無し。正々堂々、勝ちにいかせてもらっよー！」

「私も、正々堂々、勝ちにいくわ！」

舞の気合いも十分。表情も軟らかいから、楽しいデュエルになる筈だよな。

『デュエル！』

「オレのターン！」

リヨウ SP 5
舞 SP 8

ドローカードは よし！

「舞。三人の繋いだリレーが、今オレの下に届いた。その絆を、見せてあげるよ！」

「その“魂のリレー”ね」

そう、みんながオレに繋いでくれたリレーだよ。

「オレは“魂のリレー”の効果を発動！このカードに蓄積されたレベル4以下のモンスターたちのレベルの合計、攻撃力の合計以下のモンスター1体を特殊召喚できる！」

蓄積されたモンスターは、啓斗の“ネジマキの見習い戦士”！由里の“次元合成師”！アリスの“黒竜の雛”！

レベルの合計は7！攻撃力の合計は2600！
よってオレは手札の高等魔術師を召喚する！」

みんなが繋いだリレーが、オレが最も信頼するモンスター1体を召喚させてくれた。

「現れる！“ブラックマジシャン”！」

ATK/2500

『な、な、なんと！ネオドミノ校が繋いだ“魂のリレー”は、リ

ヨウのエース、“ブラックマジシャン”の召喚への布石だったー！」

「オッシャー！このデュエル、完璧に貰ったぜ！」

「上手く繋がってよかったね！」

「うん！そうだね！」

「いきなり、“ブラックマジシャン”召喚」

舞も驚いてるね。当然といえば当然か。

「いくよ、マハード。みんなの想いをオレたちが受け継いだんだ」

『ああ、解っている。私も全力でいく！』

マハードも気合い十分。一緒にいこう！

「バトル！“ブラックマジシャン”でダイレクトアタック！ブラック・マジック！」

この攻撃が通れば、大ダメージを与えられる。

「畏カード“ガード・ブロック”発動！戦闘ダメージを0にして、カードを1枚ドローするわ」

防がれた。ダメージは無しだね。

「流石だね。でもよかったよ。ダメージが無くて」

「どうして?」

「こんな形で勝負が着くのは不本意だからね」

アリスの思いがけない罠のおかげで舞の場にモンスターがいないままオレのターンからデュエルが始まったからね。チームを優先して攻撃したけどね。

「舞は攻撃を防いだ。オレたちのデュエルはまだまだ、これからでしょ?」

「ええ。そうね」

さあ、舞はどう反撃してくるかな?

「オレはカードを3枚伏せて、ターンエンド。舞のターンだよ」

「私のターン!」

リヨウ SP 6

舞 SP 9

舞には手札が5枚ある。怖いのは最初のターンの“SP エンジェ ルバトン”で何を墓地に送ったか、だね。

「私は“ドラグニティ ピルム”を召喚!」

ATK/1400

「このカードが召喚に成功した時、手札の鳥獣族モンスターを特殊召喚して、このカードを装備する。」

“ドラグニティ アングス”を特殊召喚して、“ドラグニティ ピルム”を装備！」

ATK / 2100

攻撃力はマハードには届かない。これで終わりか？

「さらに、墓地の“ドラグニティアームズ レヴァテイン”の効果発動！」

やっぱり、何か仕掛けてくる！

「私の場に存在する“ドラグニティ”を装備したモンスター1体をゲームから除外して、特殊召喚できる！」

私は“ドラグニティ ピルム”が装備された“ドラグニティ アングス”をゲームから除外して、墓地の“ドラグニティアームズ レヴァテイン”を特殊召喚！」

ATK / 2600

「このカードが召喚に成功した時、墓地のドラゴン族モンスター1体を装備することができる。」

私は墓地の“ドラグニティ ブランディストック”を装備！このカードを装備しているモンスターは2回攻撃できるわ！」

攻撃力2600のモンスターの2回攻撃か。

「やるね、舞」

「リヨウには悪いけど、“ブラックマジシャン”は倒させてもらおうよ」

「できるかな？」

「してみせるわ！バトル！“ドラグニティアームズ レヴァティン”で“ブラックマジシャン”を攻撃！」

「罨カード“マジシャンズ・バリア”発動！このターン、“ブラックマジシャン”は破壊されない！」

「流石ね。でも戦闘ダメージは受けてもらっわ」

「っー！」

リヨウ LP 3900

「さらに“ドラグニティアームズ レヴァティン”でもう一度攻撃」

リヨウ LP 3800

2回の攻撃を受けたものの、マハードは無事。ただ攻撃力2600のモンスターが2回攻撃してくるのは脅威だね。

「やっぱり防いだよね」

「そう簡単に破壊はさせないよ」

「うん。そうでないとね。」

私はカードを2枚伏せて、ターン終了よ」

「オレのターン」

リョウ SP 7

舞 SP 10

「マハード、大丈夫？」

『問題ない。かすり傷程度だ』

マハードの心配はいらなみたいだね。

「オレは“SP エンジェルバトン”を発動するよ」

「この瞬間、罨カード“スピードコピー”を発動！相手が“SP”を発動した時、私も条件を満たしていれば、その効果を使うことができるわ」

「SPカウンターが2つ以上ある時、デッキからカードを2枚ドロし、1枚を墓地に送る」

「私もカードを2枚ドロして、1枚墓地に送るわ」

舞が“SP エンジェルバトン”を使う条件は十分に満たしてた。舞の墓地を肥やすのはあんまりよろしくないんだけどね。

ただ、“スピードコピー”には発動後、2ターンはSPスペルと“スピードワールド2”の効果を使えないデメリットがある。どう影

響するか。

「オレは“魔導騎士 ディフェンダー”を守備表示で召喚！」

DEF / 2000

「このカードが召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを1つ置く。

バトル!“ブラックマジシャン”!“ドラグニティアームズ レヴァティン”を攻撃！」

「えッ!?!」

攻撃力はマハードより上。ただし、それは現時点の話！

「畏カード“ストライク・ショット”発動！攻撃したモンスターの攻撃力を700ポイントアップする！」

「っ！」

「ブラック・マジック！」

「きゃっ！」

舞 LP 2600

「やっぱり凄いわ。“ドラグニティアームズ レヴァティン”をあんなにあっさり倒すなんて」

「カードたちとの絆を、ただ信じて闘ってるだけだよ。舞が自分の

絆を見せてくれるのを楽しみにしてるよ」

「私の 絆」

舞の絆はきつとあると思う。舞だけの、堅い絆がね。

「オレはカードを2枚伏せて、ターンエンド」

さあ、舞の絆をオレに見せてくれることを、期待してるよ。

「私の ターン！」

リヨウ SP 8

舞 SP 11

舞が想いを込めて引いたカードは何かな？

「私は、このターンで一番信頼してるモンスターを召喚するわ。それが絆なのか、私にはよく解らないけど、今の私にできる精一杯の力を出すわ」

それでいいんだよ。カードを信じれば、必ずカードたちは応えてくれる。

「舞とカードたちの力、楽しみにしてる」

「私は“ドラグニティ ドウクス”を召喚！」

ATK / 1500

「このカードが召喚に成功した時、墓地のレベル3以下のドラゴン族“ドラグニティ”1体を装備できる。

墓地の“ドラグニティ ファランクス”を装備！

装備された“ドラグニティ ファランクス”の効果発動！装備されているこのカードを特殊召喚することができる！」

ATK/500

「さらに罫カード“強化蘇生”！墓地のレベル4以下のモンスターのレベルを1つ上げて、効果を無効化した状態で特殊召喚できる！私は“ドラグニティ トリプル”を特殊召喚！」

ATK/500

これでレベルの合計は8。あのカードのお出まじかな。

「来い！舞！舞の絆をオレに示してみせろ！」

「うん！私は、レベル2となった“ドラグニティ トリプル”とレベル4の“ドラグニティ ドウクス”に、レベル2の“ドラグニティ ファランクス”をチューニング！」

息吹け！天より降り注ぐ優雅な星よ、勇気を運べ！

シンクロ召喚！大地に薫る風！“The Rainbow Comet”！」

ATK/2700

3体のモンスターが輝き、一つとなってオレの前に姿を現した。

『おお』

スタジアムが静かになる。それも納得できる。場に現れたのは七色の鳥。スタジアムにいる全員の眼を奪うには十分過ぎる程幻想的な姿だ。

学園対抗戦で初めて召喚された訳じゃない。でも、今召喚されたこの七色の鳥は輝きを増しているように見える。舞の絆が繋がった証拠かもしれない。

「これが、舞の絆の象徴、“The Rainbow Comet”！」

「私も、こんなに鮮やかな“Comet”は初めて見るわ」

「舞が信じたからこそ、きっと力を増したんだよ」

舞はジッと自分のモンスターを見つめる。気持ちはよく解るよ。

『リヨウ、感心している暇は恐らくない』

「解ってるよ、マハード」

ヒシヒシと力を感じる。多分、かなり強い。油断してたらあつという間にやられる。

「リヨウ、ありがとう。」

「なんだか、初めて本当の“Comet”に逢えた気がするの」

「よかったね。じゃあ、そろそろ第二幕の始まりといこうか！」

「うん！」

さあ、来い！

「私は、“The Rainbow Comet”の効果発動！」

初めてこのモンスターの効果が発揮される筈。さて、どんな効果かな。

「1ターンに一度、私の墓地に存在するモンスター1体を“Comet”の装備カードとして装備できる！」

墓地の“ドラグニティ ブランディストック”を装備！」

厄介な効果だね。装備されて力を発揮するモンスターなら尚更だよ。今装備された“ドラグニティ ブランディストック”の効果は2回攻撃、ちよつとマズイかな。

「バトル！“Comet”で“ブラックマジシャン”を攻撃！エターナル・ストーム！」

凄まじい風圧がオレに襲い掛かる。

「そうはさせない！畏カード発動！」

「無駄よ！“Comet”の効果！このカードが場に存在する限り、バトルフェイズ中に発動した魔法・畏カードを手札に戻すことができるわ！」

「っ！」

しまった！そんな効果まであるのか。
攻撃は 続行！

『グウッ！』

「うあっ！」

リヨウ LP 3600

「オレは“魔導騎士 デイフェンダー”の効果発動！場の魔力カウンターを取り除き、魔法使い族モンスターの破壊を無効にする！」

マハードは無事。だけど、

「私はもう一度攻撃ができる！“Comet”でもう一度“ブラックマジシャン”を攻撃！エターナル・ストーム！」

『グウッ！』

「くっっっ！」

リヨウ LP 3400

マハードが吹きすさぶ風に破壊された。

「マジかよ」

「そんな マハードが」

「リョウ」

「リョウのエースモンスター、“ブラックマジシャン”は破壊したわ！」

強いな。これが“The Rainbow Comet”の力。

「カードを2枚伏せて、ターン終了よ！」

「エンドフェイズ、畏発動！“奇跡の残照”！このターン、破壊されたモンスターを特殊召喚できる！」

オレの場に、再び現れる！“ブラックマジシャン”！」

ATK/2500

『私の力はまだまだこれからだ！』

その通り！オレたちの力はまだまだこれからだ！

「舞！勝負はまだ、これからだ！」

「臨むところよ！」

さあ、これからだ。

「オレのターン！」

リョウ SP 9
舞 SP 12

「オレは“魔導騎士 デイフェンダー”をリリース!“ブラックマジシャンガール”を、アドバンス召喚!”

ATK/2000

「マナ、頼んだよ」

『うん!』

「オレの絆はここに揃った。オレは罫カード“ブラックナイフ”を発動!“ブラックマジシャン”が場に存在する場合、相手モンスター1体を破壊する!”

ナイフがマハードの周りに浮かび上がる。

「破壊の対象は、“The Rainbow Comet”!

ナイフが“The Rainbow Comet”を襲う。

「まだよ!“Comet”の効果!“Comet”が破壊される時、装備されているカード1枚を破壊して、破壊を無効にできる!”

凌がれた。

“Comet”の効果はまだあったのか。手強い。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン！」

リヨウ SP 10

「私は“Comet”の効果で、墓地の“ドラグニティ ブランデ
イストック”を装備！」

マズイ。

またくるね。

「リヨウには悪いけど、このデュエル、勝たせてもらうわ！バト
」

「バトルフェイズ前に畏発動！“和睦の使者”！このターン、オレ
のモンスターは破壊されず、戦闘ダメージも発生しない！」

「攻撃しても意味はないわね。私はこれでターンエンド」

「ふう」

このターンは凄いだ。でも、次のターンも凌げるとは限らない。
オレの手札は0、場にはマハードとマナのみ。
だけど、負けるつもりはさらさらない。このターンが 勝敗を別
ける！

「オレの ターン！」

リヨウ SP 11

来た。

「舞」

「なに？」

「正直、ビックリしたよ。舞のカードたちとの絆、強いね」

「ありがとう。貴方にそう言われると、素直に嬉しい」

「舞の絆はを見せてもらったよ。今度はオレたちの絆を見せる番だよ」
オレの絆を、オレたちの絆を、今ここに！

「オレはチューナーモンスター“マジシャンズ・シンクロン”を召喚！」

ATK/0

「舞、見せてあげるよ。オレたちの絆を！」

「うん。楽しみ」

「いくよ。マハード、マナ！」

『ああ！私たちの絆を見せる時だ！』

『うんー！うっ、リョウウー！』

「レベル7のマハードに、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン

”をチューニング！

黒き魔術が集いし時、新たな光の力が目覚める。光差す希望と為れ！
シンクロ召喚！舞い降りよ！”SF ブラックマジシャン”！”

ATK/2900

スタジアムが騒ぎ出した。だけど、そんなのは無視だ。

「魔法使い族シンクロモンスターのシンクロ素材になった“マジシヤンズ・シンクロン”は、デュエル中に一度だけ場に戻る！”

ATK/0

「レベル6のマナに、レベル1の“マジシヤンズ・シンクロン”を
チューニング！

黒き魔術が交わりし時、新たな絆の幕が開く。光差す希望と為れ！
シンクロ召喚！舞え！”SF ブラックマジシヤンガール”！”

ATK/2400

オレたちの絆が、今ここに、場に召喚された。勝負は、これからだ！

side 舞

場に2体の純白の魔術師が姿を現した。

この光景を、一言で表すなら、絶景。

これ程までの景色を、私は見たことがない。凄い。

「これがオレたちの絆、マハードとマナの、進化した姿だ！」

リヨウは空を指差し、高らかに言い放つ。これが、リヨウの絆。
私はここで一つ、気になることがあった。

「リヨウって、髪の毛長いのね」

髪がDホイールのスピードで、靡いてる。

「どうしたの？いきなり」

「なんだか急に気になって」

本当は違う。

このままだと、間違いなく呑まれる、そう感じた。

だから、話を逸らさずにはいられなかった。

「うーん、髪を結んでるくらいだからね。男にしては長いんじゃないかな」

「そう」

戸惑いながらも、きちんと答えてくれた。
これで少しは落ち着いた。

「さあ、いくよ！勝負はこれからだ！」

負けないよ！

side out

流石だよ、舞。

マハードとマナを見てなお、呑まれなかった。
だからこそ、勝負はこれからだ！

「バトル！マハード！“The Rainbow Comet”に
攻撃！スター・イリュージョン・マジック！」

「きゃっ！」

舞 LP 2400

「装備カードを破壊して、“Comet”の破壊を無効！」

そうするのは当然。だけど、これで護る為の楯は無くなった！

「マナの効果発動！墓地のカード1枚をゲームから除外して、効果を発動できる！」

オレは“ブラックナイフ”をゲームから除外！

“SF ブラックマジシャン”は“ブラックマジシャン”として扱
うことができる！

“ブラックナイフ”の効果により、“The Rainbow C
omet”を破壊する！」

これで、“The Rainbow Comet”を破壊できる！

「畏発動！“ユナイティ”！墓地の“ドラグニティ”1体を、場の
モンスターに装備できる！」

“Comet”に“ドラグニティ ファランクス”を装備！
そして“Comet”の効果発動！“ドラグニティ ファランクス”を破壊して、破壊を無効！」

上手くかわされた。

マナの攻撃力じゃ攻撃はできない。

「オレはこれでターンエンド」

「私のターン！」

リヨウ SP 12

これでお互いのSPカウンターは最大の12。でも、舞はこのターン、仕掛けてくる！

「私は“スピードワールド2”の効果を発動！SPカウンターを10個取り除くことで、“SF ブラックマジシャン”を破壊する！」

舞 SP 2

やっぱり。だけど、その手はくわない！

「マハードの効果発動！カードを破壊する効果が発動した時、マハード以外のモンスター1体をリリースして、破壊効果を無効にする！マナをリリース！」

防いだ。さあ、ここからどうする？

「私は“Comet”の効果で墓地の“ドラグニティ ピルム”を

装備する！

このカードが装備されているモンスターは、与える戦闘ダメージを半分にしてダイレクトアタックができるわ！」

オレに攻撃を防ぐ術はない。相変わらず、“ドラグニティ”の効果は強烈だ。

「いくよ！“Comet”でダイレクトアタック！エターナル・ストーム！」

「くっつ！」

リヨウ LP 2050

流石だよ、舞。確実にダメージを与えてきた。

「私はカードを1枚伏せて、ターン終了よ」

「オレのターン！」

舞 SP 3

「このターンのスタンバイフェイズ、マハードの効果によってリリースされたマナを特殊召喚できる！戻って来い！マナ！」

ATK/2400

「凄い効果ね」

さて、ここからどうするか。

オレの手札はドロークカード1枚だけ。“スピードワールド2”の効果はできるだけ使いたくない。オレの“SP”は殆どが発動するのにSPカウンターをかなり必要とするから、あまり減らしたくないし。なら、

「オレはマナの効果を発動し、“SP エンジェルバトン”を除外して効果発動！
カードを2枚ドローク！」

オレが引いたカードは、

「手札を1枚墓地に送る！」

これでマナの効果はこのターンはもう使えない。かといって、勝負を長引かされれば直接攻撃を受ける。ここは攻める！

「手札から“SP 魔力の杯”発動！SPカウンターが5つ以上ある時、墓地の魔法使い族モンスター1体をゲームから除外し、場のモンスター1体の攻撃力を除外したモンスターの攻撃力分アップする！」

“魔導騎士 ディフェンダー”を除外し、マナの攻撃力をアップ！」

ATK/4000

「バトル！マナ！“The Rainbow Comet”を攻撃！スター・イリュージョン・バーニング！」

「畏カード“フローラル・シールド”発動！攻撃を無効にして、カードを1枚ドロークするわ！」

「マハード!“The Rainbow Comet”を攻撃！スター・イリユージョン・マジック！」

「きゃあっ！」

舞 LP 2200

「装備カードを破壊して、“Comet”の破壊を無効にするわ！攻めきれない。やっぱり、勝負は次のターン。」

「オレはカードを1枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン！」

舞 SP 4

「私は“Comet”の効果で“ドラグニティピルム”を装備！また直接攻撃がくる。」

「“Comet”でダイレクトアタック！エターナル・ストーム！」

「うあああっ！」

リヨウ LP 700

遂にオレのライフがセーフティラインを越えた。舞のSPカ

ウンターは4。

「スピードワールド2”の効果発動！SPカウンターを4つ取り除くことで、私の手札の“SP”1枚につき800ポイントのダメージを与える！」

私の手札に“SP”は1枚！800ポイントのダメージを与える！」

舞 SP 0

やっぱりきた。

けど、オレの絆はまだ終わらない！」

「マナ！頼む！」

『任せて！』

「マナの効果発動！“地獄の扉越し銃”をゲームから除外して効果発動！」

効果ダメージを無効にして、その数値分のダメージを与える！」

「きゃっ！」

舞 LP 1400

耐えた。どうくる？

「私は“ドラグニティ ミリトゥム”を守備表示で召喚して、ターンエンド」

DEF / 1200

護りを固めてきたか。

次のターンまで“ The Rainbow Comet ”が残れば、次のターンで直接攻撃ができる。

それでも、オレは負けない！負けられない！みんなが繋いだこの絆を、オレが完結させるんだ！

そして、再戦するまで負けないと約束したんだ！

「オレの、ターン！」

舞 SP 1

よし！オレはこのカードに賭ける！

「 SP 未来への扉 ”！SPカウンターが6以上ある時、デッキの一番上から5枚のカードをめくり、その中からモンスターカードを1枚選択する」

後ろには緊迫した顔でオレを見ている舞の姿がある。この5枚のカードが勝負を別ける！

「いくよ、1枚目！」

めくったカードは、

「罨カード“ 未来王の予言 ”！」

1枚目はモンスターですらない。次のカードは、

「2枚目！モンスターカード“バスター・ブレイダー”！」

モンスターカードを当てたけど、“SP 未来への扉”の効果には適さない。

「3枚目！モンスターカード“魔術の守護者”！」

4枚目！“SP ファイナルマジック”！」

めくった4枚のカードにはオレが待ち望む答えじゃない。次のカードが勝負。

「5枚目！モンスターカード“ブリザード・プリンセス”！」

きた！オレたちの絆は繋がった！

「めくった5枚の中からモンスターカード1枚を選択する！オレが選択するのは、“ブリザード・プリンセス”！」

オレの場に存在する“ブリザード・プリンセス”と同じ種族のモンスター1体の攻撃力を、“ブリザード・プリンセス”のレベル×100ポイントアップする！

“ブリザード・プリンセス”は魔法使い族！レベル8！オレはマナの攻撃力をアップさせる！」

ATK/3200

「そして5枚のカードを全て墓地に送る！」

これでオレの準備は整った。勝負に出る！

「マハードの効果！バトルフェイズ開始時にマハード以外の“SF”が場に存在する場合、相手モンスター全てに攻撃できる！」

「っ！」

「バトル！マハード！攻撃しろ！」

「まだよ！まだ私にはカードが1枚残ってる！」

罨カード“ゴッドバードアタック”！“ドラグニティ ミリトウム”をリリースして、“SF ブラックマジシャン”と“SF ブラックマジシャンガール”を破壊する！」

「カウンター罨発動！“白銀の閃光 シルバーマジック”！場に“SF”が存在する場合、罨の発動を無効にする！」

「っっっ！」

「バトル続行！“The Rainbow Comet”を攻撃！スター・イリュージョン・マジック！」

「きゃあっ！」

舞 LP 1200

「装備カードを破壊して、“Comet”の破壊を無効にするわ！」

「まだバトルは終わってない！マナで“The Rainbow Comet”を攻撃！スター・イリュージョン・バーニング！」

「きゃああっ！」

舞 LP 700

『あつと、遂に、遂に“ The Rainbow Comet”を破壊したー！』

よし！やつと倒した！

「まだ 、 、 まだ終わってない！」

そう。まだ終わってはいない。だけど、このデュエルはここで幕引きだ！

「マナの効果発動！墓地のカードを1枚ゲームから除外し、その効果を発動できる！

オレの墓地には、今墓地に送ったカードがある」

「墓地に送った カード つ！」

気付いたみたいだね。

「オレが墓地から除外するカードは、“未来王の予言”！

相手モンスターを破壊した時、そのモンスターはもう一度続けて攻撃できる！」

「あ
」

「マナ！このデュエルに幕を引け！スター・イリュージョン・バーニング！」

「きゃああああああっ！」

舞 LP 0

オレはスタジアムのコースを走り抜けた。

第二十八話：マジシャンVS彗星（後書き）

舞のデッキは“ドラグニティ”です。エースモンスターは彗星ですね。

学園対抗戦はほぼ終わりです。同時に第二期もほぼ終わりです。第二期は後数話の予定です。デュエルは後一回ある予定です。

それでは、グッチーでした。

第二十九話：再戦（前書き）

二週間ぶりの更新になってしまっていて申し訳ないです。

今回はデュエル無しです。
では、ごきげん。

第二十九話：再戦

『決まった〜！学園対抗戦ラストデュエル、最後まで走り続けたのは、ネオドミノ校、リヨウー！』

勝った！

スタジアムの声援を受けながらピットの前でソニックを停めた。

「リヨウ〜！」

アリス、啓斗、由里が走り寄って来た。

「流石だぜ、リヨウ！」

「凄いよ、リヨウ君！」

「やったね、リヨウ！」

「うん！みんなが繋いだ絆、完結させてきたよ！」

四人で勝利の喜びに浸る。すると、舞と咲が近付いて来た。

「負けたわ。やっぱり強いよ、リヨウ！」

「舞だって。楽しいデュエルだったよ！」

「うん。私も」

「今回は負けちゃったけど、次は負けないよ！」

「俺たちが勝ちを譲る訳ねえだろ」

「にやはは。またデュエルしようね」

「もう一度デュエルする時を楽しみにしてるよ」

みんなで讃え合い、共に笑う。

スタジアムの人たちは、そんなオレたちに拍手をしてくれていた。

「ほらね。全力を出し合ったデュエルなら、みんな認めてくれるんだよ」

「うん。そうね」

舞が感傷に浸る中、オレたちは拍手に応えながら、控室に戻った。

「あ、一つ気になることがあるんだけど」

「なに？咲」

「アリスはシンとかリップ、リヨウはマハードとかマナとか言ってたよね？」

そのことが。

「おい、どうすんだよ？」

「にやはは、どうしよう」

ま、別にこの二人なら問題ないと思うけどね。

「そのことはまたいずれ話すよ」

「何のことなの？」

「えっと」

「オレたちの大事な秘密つてところかな」

「ふうん。あ、秘密つていえば、アリス！」

「えっと、そのこともいつかね」

「エ〜！」

何かあるのかな？

『学園対抗戦は遂に終わりを迎えた。閉会式があるので、生徒諸君は整列してくれ』

「あつ、ほら！早く整列しないと！」

アリスが駆け出して行く。誤魔化したね。
オレたちはアリスの後を追って行った。

「アリス、どうしたの？」

「ううん。何でもないよ」

まあ、いいか。

オレたちはスタジアムに整列した。

『エブリワン！リッスン！閉会式を始めるぜ！』

全学園の代表選手が整列を終えて、代表としてネオドミノ校の校長が話をする。

『え〜、皆さん。ライディングデュエルによって行われた今回の学園対抗戦、実に見応えのある素晴らしいデュエルだったのじゃ。私は』

今日はやけに饒舌だなあ。話が異様に長い。普段の倍以上話してるんじゃないかな。

『それでは、今後の皆さんの活躍を期待しています』

やっと終わった。長かった。

『え〜、では、次は治安維持局イエーガー副長官から』

『イーヒッヒッヒッ』

相変わらず不気味な笑い声だなあ。

『皆さん、お疲れ様でした。この学園対抗戦は』

また長い話が始まったよ。

『これからも頑張ってください』

長いよね、お偉いさんの話って。

『では、次は授与式だ。優勝したネオドミノ校、代表は前へ』

校長先生が前に出て、イエーガー副長官に賞状をもらう。

「ん？誰か来るぞ」

『さあ、恒例のご褒美です』

啓斗の言う通り、誰か来るね。

『私の妻です』

妻が来て何を　　って。

校長先生の頬に軽くキスをした。

何してるの？

「あれ　何？」

校長先生は勝ち誇った顔で、他の校長先生は悔しそうな顔してるし。

「どうでもいいぜ、こんな茶番はよ」

同感だよ、啓斗。

『さあ、続いて優勝したネオドミノ校の代表選手には、Dホイーラーの証として、ライセンスが贈られるぞ！』

やっと次に進んだ。
でも、オレたちに控え選手はいないし、オレはライセンスを持っているし。

『さあ、ネオドミノ校の選手は授与してくれ!』

オレたち四人は前が出る。

イエーガー副長官からアリス、啓斗、由里はそれぞれライセンスを受け取る。オレは、

「オレは必要ありません。もう既に持っているので断った。二つ持ってたつて意味はないしね。」

『それでは、次は今回の学園対抗戦におけるMVPの発表だ!』

そんなのまであるんだ。

『さあ、イエーガー副長官に発表して頂きましょう!』

イエーガー副長官が再び姿を現す。

『どのDホイラーも、素晴らしいデュエルを見せて頂きました。その中でも、特に輝いていた者を紹介しましょう。そのDホイラーは』

スタジアムが静かになり、電気が全て消される。

『ネオドミノ校、リヨウであります!』

ん？

スポットライトがオレに当てられる。なんか妙な感覚なんだけど。

『リヨウは前に出て来てくれ』

MCの言に戸惑いながらも従い、前に出た。
イエーガー副長官が話し始める。

『今回、MVPに選ばれたリヨウには、目を見張る素晴らしいプレイング、最後まで諦めない心意気、MVPに相応しいのであります』
そんなに褒められても困るんだけどね。

『MVPに選ばれたリヨウには、私イエーガーの名において、貴方の願いを叶えましょう』

願いを叶える　ね。

「おい、リヨウ」

「牛尾さん？」

いつの間にかオレの隣に牛尾さんが立っていた。

「解ってると思うが、無茶な願いは言つなよ」

「解ってますよ」

そんなことは解ってるし、オレには叶えたい願いなんてないしね。

いや、あるか。
オレの願い。

「じゃあ、二ついいですか？」

『なんですか？』

「では、ライセンスは2つ残ってますよね？残りのライセンスをオレたち以外の素晴らしいDホイラーに渡して欲しいのです」

『ほう。そのDホイラーとは？』

「ノース校、美翔舞と立花咲の両名です」

『ええええええ！！？』

二人の声が聞こえる。やっぱり驚くよね。

けど、二人は強かった。このくらいのことはいいだろ。

『では、両名は前へ』

舞と咲が遠慮がちに前に出て来た。

二人がイエーガー副長官からライセンスを受け取った。

「えっと、いいの？」

「構わないよ。余ってたって無駄になるしね」

「ありがとう、リヨウ！」

舞と咲が後ろに下がる。

『さて、一つ目の願いは叶えました。もう一つの願いはなんですか？』

オレのもう一つの願い。この願いを言う前に、一つ確認することが必要だね。

(マハード、マナ。身体は大丈夫？)

(先のデュエルの傷はもう癒えたが)

(どうしたの？こんなこと聞いて)

(もう一回デュエルできる？)

(それは問題ないが)

(もう一回？)

(そう。もう一回だよ)

オレのもう一つの願いは、

「デュエルがしたいです」

『デュエル？』

そう。オレの願いは、

「このスタジアムにいるとあるDホイラーと再戦を約束しました。その人とデュエルがしたいです」

スタジアムが響めき出した。そして、スタジアムの照明が全て消される。

『いいでしょう。して、そのDホイラーとは？』

注目されてるね。無理もないけど。

オレはマイクを取り、その人がいるであろう方を向いた。

『やろうよ、遊星！オレたちの最高のデュエルを！』

オレが向いた方向に、スポットライトに当てられる。当てられているのはもちろん、オレが指名した不動遊星。

遊星は静かに立ち上がり、いつものようにクールに言う。

「いいだろう。リョウ、お前との再戦の約束、当然受けて立つ！」

流石だよ、遊星。

side 遊星

面白いことをしてくれるな、リョウ。

オレはスタジオアの控室に行き、デュエルの準備を始める。
リヨウも当然隣にいる。

「しかし、よかったのか？ 貴重な願いだろう？」

「オレには大した願いなんてなかったからね。どうせならいついっ場所デュエルしたいし」

「フツ。そうか」

「ねえねえ、リヨウがデュエルする人って誰なの？」

「リヨウの友達で、ライバル、かな」

「不動遊星さんは、フォーチュン・カップの決勝戦でデュエルした人よね？ リヨウが勝った筈だけど」

「あのデュエルは、いろいろあったから。リヨウはあのデュエルを勝ちとは思ってないみたいだし」

「いろいろって何？」

「アリスは知ってるの？」

「咲と舞の言う通りだな。あの時のことはオレも知らねえな」

「私もだよ」

「あの時は」

「そこまでだぜ、アリス」

「クロウさん！」

「よお、お疲れさん」

「席は空いてるよ。アリスお姉ちゃんたちも座りなよ」

「ありがと、龍亞。みんな一緒にいたんだね」

「ふん。騒がしくて敵わんがな」

「で？あのデュエルで何かあったのかよ？」

「あのデュエルのことを話すことはできないわ」

「アキちゃん、どうして？」

「あれは過去のことなの。私たちも、あんまり話したくないっていうか」

「そうなんだね。じゃあ、あんまり聞くのはよくないかな」

「そういうことだ。いいな？」

リョウとデュエルするのは二度目か。あのデュエルはいろいろあつ

たからな。

「リヨウ、今日は二回目のデュエルだが、大丈夫なのか？」

「もちろん。マハードとマナも問題ないよ」

「そうか。ならば、本気でいかせてもらおうぞ」

「当然！オレも本気でいくよ！」

リヨウとのデュエルは面白い。オレが心待ちにしていたことがこんな形で実現するとはな。

「リヨウ。何か賭けてみるか？」

「へえ。いいよ。何賭ける？」

笑うところを見ると、リヨウも乗り気だな。

「大したことじゃない。そうだな、例えば、今夜の飯、つてところか？」

「はは。もちろんいいよ。じゃあオレが負けたら」

「私が取って置きのご飯をご馳走してあげるよ」

マナがリヨウの隣に姿を現した。話を聞いていたようだな。

「マナの料理は一度食べさせてもらったが、確かに旨かったな」

「えっへん。でも、あの時は急いで作ったからそんなに味付けできなかつたんだよ?」

「あれでか?」

とんでもないな。

「はは。じゃあオレが負けたら、マナの豪勢料理ね」

「フツ、楽しみだな」

「遊星が負けたらどうする?」

「オレが負けたら　そうだな、今開発している新エンジンをソニックに組み込む、というのはどうだ?」

「いいの?」

「お前が構わないのならな」

「いやいや、ソニックが早くなるのは願ったり叶ったりだよ」

「決まりだな」

まだ新エンジンは開発途中だがな。

「さてと、遊星。オレたちのデュエルはお互いに恨みっこ無し、お互いに全力、だよな?」

「ああ。今回のデュエルは赤き龍も手出しはしないだろう。互いに

全力のデュエルだ」

リヨウは笑う。オレも静かに笑う。互いに笑い合い、拳をぶつけ合った。

side out

『エブリワン！リッスン！リヨウVS不動遊星！スペシャルマッチ、いよいよ始まるぜー！』

オレと遊星はお互いにスタート位置についている。デュエル開始の合図を待っている状態。

マハードとマナの調子に問題はないし、オレ自身も疲れはない。遊星とのデュエルは、万全を期して臨みたいからね。

side アリス

私たちはみんな一緒にスタジアムの観客席に座り、デュエルが始まるのを待っている。

「リヨウ、なんだか楽しそう」

「まだ始まってもねえだろ」

啓斗に軽く批判されたけど、リヨウの様子を見ると、楽しそうだと思える。

「アリスお姉ちゃんが言うこと、何となくだけど、解る気がするわ」

「龍可はリヨウ君が楽しそうに見えるの？」

「うん。何て言うか、ワクワクしてるのかな」

龍可が言ってることは私にも解る。

リヨウはそれ程自分の感情を表に出すことはない。笑ったり、楽し
いって言ったりすることはよくあるけど、心の奥底を隠してる。私
にもたまにしか話してくれないし。
それでも、一緒にいる時間が長いからなのかは解らないけど、今の
リヨウが楽しそうにしてるってことは解るよ。

「このデュエル、どっちが勝つか？」

「それは多分、終わってみねえと解らねえだろうぜ、龍亞」

「クロウの言う通りだ。遊星とリヨウの実力は、恐らく伯仲してい
る」

確かに、クロウさんとジャックさんの言う通りだと思つ。リヨウと
遊星さんの実力は互角。それでも、私は、

「リヨウが勝つよ」

呟いていた。これは私の願いかもしれない。

「遊星が勝つわ」

今のは、

「実力は互角でも、遊星が最後に勝つわ」

アキ。

「ううん。リヨウが必ず勝つよ。いくらアキの言うことでも、譲れない」

「」

私はアキと睨み合う。譲るつもりは一切ないよ。

「ふええ！お、落ち着いて！二人とも！」

「大丈夫よ。私は落ち着いているわ」

「私もだよ。アキが間違ってるから正してるだけだよ」

「あら。アリスが間違っているんじゃないかしら」

「二人とも喧嘩しないでよ〜！」

「ったく。こうなるから嫌なんだよ」

「何をしているのだ！あの二人は！」

「言うだけ無駄なんだよ」

「なんだ？ずいぶん勝手が解ってるみたいじゃねえか？」

「リヨウとアリスのやり取り見てたら嫌でも解るんだよ」

「アキもそうなるのか」

「覚えといた方がいいぜ。女が一度あんなったら放っておくのが一番だぜ」

「マジで覚えといた方が良さそうだな」

「ふん！下らん！」

side out

side 舞

私は咲と一緒にアリスたちについて行って、アリスたちの友達と一緒に観客席に座った。アリスと一人の娘が喧嘩を始めちゃったけど。

「何してるんですか？」

「あら？貴女は？」

「ネオドミノ校の娘だよね？」

「はい。龍可っていいいます」

アリスたちの友達の娘。小等部くらいだと思っけど。

「龍可ちゃんね。どうしたの？」

「いえ。何をしてるのかなと思って」

「ああ。舞は絵を描くのが好きだからね」

私の手元にはスケッチブックがあるから。

「だからスケッチブックがあるんですね」

「ええ。そうなの」

「何を描くんですか？」

「デュエル風景よ。モンスターとかDホイラーとかかしら」

「舞の絵は上手だからね」

「そうなんですか」

私としては、リヨウとのデュエルで初めて見た“SF ブラックマジシャン”と“SF ブラックマジシヤンガール”を描きたい。とつても、綺麗だったから。

s i d e o u t

もうすぐ始まる。

『どうかしたのか？』

『まだ始まってもないよ？』

マハードとマナはやっぱり気付くか。アリスも気付くかもしれないけど。

「そうだね。始まる前からこんなに落ち着かないのは初めてだよ」

『楽しそうだな』

「まあね。二人はどう？」

『楽しみだよ！』

マナは笑顔で答え、マハードは静かに笑ってる。二人も一緒か。

「さあ、そろそろ始まるね。いくよ、マハード、マナ」

二人はオレに笑いかけた後、姿を消した。姿を消したのを確認した後、静かに目を閉じて開始の合図を待つ。

『さあ、リヨウVS不動遊星！スペシャルマッチ、始まるぜー！』

オレは目を開き、遊星と共に叫んだ。

『ライディングデュエル！アクセラレーション！』

第二十九話：再戦（後書き）

次話は二度目となる遊星とのデュエルになります。
来週には更新したいと思います。

それから、アキのフラグが勝手に立ってます。この小説では何もなかったのに。
深くは気にしないで下さい。

では、グッチーでした。

第三十話：白銀VS星屑（前書き）

VS遊星、2戦目です。

はつきり言って、かなり長くなりました。それから、この話で新しく登場したオリカは以降、間違いなく再登場はありませんので暖かく見てください。

では、ごじゆ。

第三十話：白銀VS星屑

『ライディングデュエル！アクセラレーション！』

オレと遊星は全くの同時に飛び出した。

『おおっつと、初めからどちらも全く譲らない！激しいデッドヒートだ！』

横並びの状態から全く動かない。できることなら、先攻を取りたい。全くの同時で第一コーナーに入る。それでも尚横並びの状況は変わらない。

ここで退く訳にはいかない。ここで退けば、このデュエル、間違いなく負ける。

第一コーナーが 終わる。

『おおっつと！なんとということだ！全くの横並びで第一コーナーを終えてしまったぞー！』

いや、それは違う。

「やるな、リョウ」

横並びの状態から、遊星が退いた。

『これはどうしたことだ？不動遊星が退いてしまったぞー？』

「ほんの僅かだが、お前の方が速かったな」

「ほんのちよっとね。次はどちらが勝つか全く解らないよ」

「オレたちのエンジンはまだ開発途中だ。駄目だな、こんなスピードでは」

「大丈夫だよ。遊星ならきつと良いエンジンができるよ」

「凄い」

「初めからあれ程激しいのかよ」

「というより」

「うん。二人とも、速い」

「ふん！あのくらい当然だ！」

「遊星もリョウも、スピードならあれくらい出るだろうな」

「何言ってるやがる。遊星は知らねえが、リョウはあれ程のスピードは出してねえぜ」

「違うな。お前たちと共に走るリョウが本気のスピードではない」

「どづい意味？」

「お前らはまだDホイールに乗り始めてからまだ間がないんだよ。つまり、お前らはまだまだDホイーラーとしては未熟なんだよ」

「じゃありヨウは学園対抗戦では手を抜いていたということですか？」

「それはないな」

「ライディングデュエルではお互いのスピードに差が出過ぎねえようにスピードが制限されるからな。無意識の内にスピードは落ちてんのさ」

「私たちは、まだまだ未熟なんですな」

「そういうことだ」

「ま、精進するんだな」

オレは遊星の前でソニックを走らせる。

際どかったけど、なんとか先攻を取れた。さあ、これからだ。

「準備はいい？遊星」

「準備はできている。始めようか」

「楽しいデュエルをしよう！」

「ああ！いくぞ！」

『デュエル！』

「オレのターン、ドロー！」

手札を確認する。思わず笑みが零れる。みんなも解ってるみたいだね。

「オレは“見習い魔術師”を守備表示で召喚」

DEF / 800

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

「オレのターン！」

SP 1

「“トライクラー”を守備表示で召喚」

DEF / 300

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

遊星もほぼ同じ手。どうやら遊星も解ってるみたいだね。

「オレのターン」

SP 2

来てくれたね。

『楽しんでる?』

「楽しくなるのはまだまだこれからだよ。マナ」

『でも、ずっと笑ってるよ?』

「マナが来てくれたからね。

いくよ。力を貸してくれる?」

『もちろん!私もがんばるよ!』

マナの気合いも十分だね。

「いくよ、遊星!

オレは“見習い魔術師”をリリースして、マナをアドバンス召喚!」

ATK / 2000

「さらに畏発動!“賢者の秘石”!現れる!マハード!」

ATK / 2500

オレの場に魔術師が二人並んだ。

「フツ、来たか」

「お久しぶりです。遊星殿」

「 実体化しているようだが、大丈夫なのか? 」

「 まあ、大丈夫だよ。遊星以外は気が付かないだろうし 」

「 そうか 」

にしても、流石遊星。マハードとマナが現れても全く物怖じしない。いや、予想してたのかな。

「 リョウ。楽しんでいるか? 」

「 これからだよ 」

「 そうか。何よりだ 」

さあ、バトルといこうか!

「 マナ! “トライクラー” に攻撃! ブラック・バーニング! 」

「 “トライクラー” が破壊された時、デッキから“ヴィークラー”を特殊召喚できる 」

DEF / 200

「 マハード! “ヴィークラー” に攻撃! ブラック・マジック! 」

「 “ヴィークラー” が破壊された時、デッキから“アンサイクラー”を特殊召喚できる 」

DEF / 1000

マハードとマナの攻撃を受けて尚、モンスターが1体残ってる。流石だね。

「オレはカードを2枚伏せて、ターンエンド」

次は遊星のターン。多分遊星はこのターンで、あのモンスターを召喚してくる。楽しみだな。

side 遊星

リヨウは既にマハードとマナを召喚した。オレも負ける訳にはいかないな。

「オレのターン」

SP 3

リヨウが召喚したのなら、オレも召喚しなくてはならない。あいつを。

「オレはチューナーモンスター“デブリ・ドラゴン”を召喚！」

ATK / 1000

「このカードが召喚に成功した時、オレの墓地に存在する攻撃力500以下のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚できる！戻って来い！“トライクラー”！」

ATK / 300

リョウに笑みが零れる。恐らく、オレも笑っているだろう。

「来い！遊星！遠慮はいらない！」

「ああ！全力でいくぞ！」

オレに、力を貸してくれ！

「レベル1“アンサイクラー”とレベル3“トライクラー”に、レベル4“デブリ・ドラゴン”をチューニング！」

集いし願いが、新たに輝く星となる。光差す道と為れ！

シンクロ召喚！飛翔せよ！“スターダスト・ドラゴン”！」

ATK / 2500

オレの場に、星を散らしながら飛翔するドラゴンが現れた。

「来たね、“スターダスト”！」

「久しいな、リョウ」

なに？

今確かに。

「リョウ、“スターダスト”まで実体化させたのか！？」

「いや、そんなつもりは」

「私が勝手にリヨウの力を利用して実体化させて貰った。済まないな」

“スターダスト”が精霊だということは知っていたが、オレがこうして対話することになるとはな。

「スターダスト・ドラゴン」、お前はオレと共に闘ってくれるのか？」

「何を今更言っている。

敬愛なる我が主、不動遊星よ。私は汝の刃と為り、盾と為る。そう誓っている」

ありがとう、 “スターダスト”。

「リヨウ。お前のお陰で “スターダスト” と会話することができた。ありがとう」

「いやいや。オレがした訳じゃないしね」

それでも、お前がいなければ会話することはできなかった。感謝している。

「共にいくぞ！ “スターダスト”！」

「ピギヤアアアアア！」

力強い咆哮。そうか、お前も同じなんだな。

このデュエル、ただ純粹に勝ちたいと。

「スターダスト」！マナに攻撃だ！響け！シューティング・ソニック！」

「畏発動！“マジシャンズ・バリア”！このターン、マナは破壊されない！」

「だが、戦闘ダメージは受けて貰うぞ！」

「くっ！」

リヨウ LP 3500

この戦闘でマナを破壊することはできない。ならば、

「オレはカードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

さあ、リヨウはどつくる？

side out

まさか“スターダスト”まで実体化するとはね。それだけこのデュエルは勝ちたいのかな。

だけど、オレたちも勝ちたいのは同じ！

「オレのターン！」

SP 4

来た。このデュエル、みんなも勝ちたいんだね。

「チューナーモンスター“マジシャンズ・シンクロン”を召喚！」

ATK/0

この力は、“スターダスト”から与えられた力。その“スターダスト”と雌雄を決するのなら、これ程相応しいものはない！

「こつちもいかせてもらうよ！遊星！」

「ああ！臨むところだ！」

「レベル7のマハードに、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング！」

黒き魔術が集いし時、新たな光の力が目覚める。光差す希望と為れ！シンクロ召喚！舞い降りよ！“SF ブラックマジシャン”！」

ATK/2900

一気にいくよ！

「“マジシャンズ・シンクロン”は、自身の効果により、戻ってくる！」

ATK/0

「レベル6のmanaに、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング！」

黒き魔術が交わりし時、新たな絆の幕が開く。光差す希望と為れ！
シンクロ召喚！舞え！“SF ブラックマジシャンガール”！」

ATK/2400

オレの場に、白銀の翼を身に携えたマハードとマナが現れた。

『おおっ！とうとう両雄の激突だ！しかし、なんとという光景か』
『！』

MCがそう言うのも納得できる。

“スターダスト”は相変わらず幻想的な姿で威風堂々としている。
マハードとマナも凜とした純白の姿で立っている。
これ程の光景を見たことのある人はいないだろうね。

「これが、マハードとマナが進化した姿か。改めて見れば、やはり
凄いな」

「まあね。でも二人の力は“スターダスト”から与えられた力だよ」
「だが、リヨウは見事に二人の力を使い熟している」

「当然だ、“スターダスト”」

「リヨウは私たちの最高のマスターだよ」

「そうだな。失礼なことを言ったようだ」

話には聞いてたけど、マハードとマナは“スターダスト”と仲良い

んだね。

「さて、いくよ。遊星!“スターダスト”！」

「来い！リヨウ！」

「マハード!“スターダスト”に攻撃！スター・イリュージョン・マジック！」

「くっ！」

遊星 LP 3600

攻撃は通った。けど、これで倒せる筈がないよね。マハードが放った光が収まってきた。

「フッ」

影が見えてきた。もちろん二つの影が見える。

「それで？何したの？遊星」

影から遊星と“スターダスト”が姿を現した。

「オレは永続罫“星屑の輝き(スターダスト・ツインクル)”を發動した。オレの場に“スターダスト・ドラゴン”が存在する時、1ターンに一度だけオレのモンスターの戦闘での破壊を無効にできる！」

なるほど。それで防いだ訳だね。マナの攻撃力は“スターダスト”

に僅かに届かないし。

「オレはカードを1枚伏せて、ターンを終了するよ。遊星のターンだよ」

「ああ。オレのターンだ」

SP 5

「オレは場の伏せカードを墓地に送り、“カード・ブレイカー”を特殊召喚！」

ATK / 1000

「墓地に送ったカードは“リミッター・ブレイク”！このカードが墓地に送られた時、デッキから“スピード・ウォリアー”を特殊召喚する！」

DEF / 4000

「さらに、“ジャンク・シンクロン”を通常召喚！」

ATK / 13000

「“ジャンク・シンクロン”が召喚に成功した時、墓地のレベル2以下のモンスターを守備表示で特殊召喚できる！オレは“ヴィークラー”を特殊召喚！」

DEF / 2000

早い。
あっという間にモンスターゾーンが全部埋まっちゃったよ。

「いくぞ！レベル2“カード・ブレイカー”に、レベル3“ジャンク・シンクロン”をチューニング！

集いし星が、新たな力を呼び起こす。光差す道と為れ！

シンクロ召喚！出でよ！“ジャンク・ウォリアー”！」

ATK / 2300

「ジャンク・ウォリアー”がシンクロ召喚に成功した時、場のレベル2以下のモンスターの攻撃力を吸収する！パワー・オブ・フェローズ！」

ATK / 3400

マハードの攻撃力を上回った！？

「バトル！“ジャンク・ウォリアー”で攻撃！」

「畏発動！“立ちはだかる強敵”！遊星の攻撃表示モンスターは全てマハードに攻撃してもらおう！」

「いいだろう。“ジャンク・ウォリアー”！マハードに攻撃だ！スクラップ・フィスト！」

「うあっ！」

リョウ LP 3000

“ジャンク・ウォリアー”の攻撃で爆煙が巻き起こる。

「どうした？これで終わりではないだろう？」

「当然！オレもマハードもね！」

オレは爆煙から出た。

「永続罨“白銀の恩恵”シルバー・ゲレイス！オレの場に“SF”と名のつくモンスターが存在する時、1ターンに一度だけオレの場のモンスターの戦闘による破壊を無効にできる！」

「フツ、やはりな」

「笑ってる場合じゃないよ？まだ強制戦闘が残ってるからね」

「ああ。“スターダスト”！響け！シューティング・ソニック！」

「マハード！迎え撃て！スター・イリユージョン・マジック！」

“スターダスト”が放つ音波とマハードが放つ輝きが激しく交差する。弾け、爆煙が又しても巻き起こった。

そして二人で爆煙から抜け出た。

「マハードの方が攻撃力は上」

「ああ。今の攻撃でオレのライフは400ポイント削られている」

「だが、“星屑の輝き”の効果により、破壊を無効にする！」

確かにね。あのカードがある限り、戦闘で破壊することは難しい。でもそれはオレも同じこと。

「オレは2枚カードを伏せる。ターンエンドだ」

「オレのターン」

SP 6

遊星の場にはモンスターが4体。でもそれは、マハードには関係ない。

「マハードの効果！バトルフェイズ開始時にマハード以外の“SF”が場に存在する場合、相手場の全てのモンスターに攻撃できる！」

“ジャンク・ウォリアー”には攻撃できないけど、それ以外のモンスターになら！

「いけ！マハード！“スピード・ウォリアー”、“ヴィークラー”、そして“スターダスト”に攻撃！スター・イリュージョン・マジック！」

「ぐあっ！」

遊星 LP 2800

「だが！“星屑の輝き”により、“スターダスト”の破壊を無効に

する！」

それでも、“スターダスト”以外は破壊できた。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

これでオレと遊星の手札は共に0になった。どうくる？

「オレのターン！」

SP 7

「畏発動！“幸運な贈り物”！お互いのプレイヤーは手札を全て墓地に送り、新たにカードを3枚ドロウする」

手札補強カード。遊星は攻めてくるかな。

「オレは“シンクロン・エクスペローラー”を召喚！」

ATK / 0

「このカードが召喚に成功した時、墓地の“シンクロン”と名のつくモンスターを、モンスター効果を無効にして特殊召喚できる！オレは“ジャンク・シンクロン”を特殊召喚！」

ATK / 1300

「さらに、墓地の“ボルト・ヘッジホッグ”は、場にチューナーが存在する場合、墓地から特殊召喚できる！」

ATK / 800

また遊星のモンスターゾーンが全て埋まった。っていうか、

「ボルト・ヘッジホッグ”はいつ墓地に?”

「ついさっきだ」

“幸運な贈り物”の時か。

「レベル2 “シンクロン・エクスプローラー”とレベル2 “ボルト・ヘッジホッグ”に、レベル3 “ジャンク・シンクロン”をチューニング!

集いし叫びが、木霊の矢となり空を裂く。光差す道と為れ!

シンクロ召喚!出でよ!“ジャンク・アーチャー”!

ATK / 2300

遊星のシンクロモンスターが3体並び立つ。しかもあのモンスター効果は。

「ジャンク・アーチャー”の効果発動!1ターンに一度、相手モンスター1体をエンドフェイズまで除外できる!

マハードを除外!デイメンジョン・シュート!”

マハードが矢の次元の渦に巻き込まれ、姿を消した。

この状況はよろしくないね。

「わわっ!お師匠様がいなくなってピンチだよ!?”

「ん、まあ大丈夫だよ。マナがいてくれればね」

「！ うん！がんばる！」

ぐつと気合いを入れるマナ。

「バトル！ “ジャンク・ウォリアー” でマナに攻撃だ！」

「永続罫“幻想の呪縛”！ “ジャンク・ウォリアー”の装備カードとなり、攻撃力を500下げてモンスター効果を無効にする！
パワー・オブ・フェローズの効果は無効になる！」

ATK / 1800

「さあ、迎撃だ！マナ！」

「まだまだ！ “シンクロ・ストライカー・ユニット”！ “ジャンク・ウォリアー”の攻撃力を1000ポイントアップ！」

ATK / 2800

つ！ 流石遊星、抜かりないね。

「スクラップ・フィスト！」

「うくっ！」

リョウ LP 2600

「“白銀の恩恵”により、マナは破壊されない！」

「だが、これで終わりだ！ “スターダスト”！ 響け！ シューティン
グ・ソニック！」

「わわっ！ マズイよ！」

「慌てない。マナの効果発動！ 墓地のカードを除外して効果を発動
する！」

“マジシャンズ・バリア”を除外！ マナはこのターン、破壊されな
い！」

“スターダスト”が放つ音波が炸裂するも、マナはバリアに護られ
る。

リヨウ LP 2500

「そうか。マナの効果か」

「惜しかったね」

正直、少し焦ったよ。

「オレはカードを2枚伏せ、エンドフェイズに“シンクロ・ストラ
イカー・ユニット”の効果で“ジャンク・ウォリアー”の攻撃力は
800ポイントダウンする」

ATK/2000

「そして、マハードが場に戻ってくる！」

ATK / 2900

「オレのターン」

SP 8

「SP 未来への扉”発動！SPカウンターが6以上ある時、デツキの一番上から5枚カードをめくる！」

オレが確認したカードは“魔導騎士 デイフェンダー”、“魔導戦士 ブレイカー”、“魔術の守護者”、“超・魔・導・破”、そして“カオス・マジシャン”！

5枚の中から“カオス・マジシャン”を選択し、マナの攻撃力を“カオス・マジシャン”のレベル×100ポイントアップ！」

ATK / 3000

「5枚のカードは全て墓地へ」

「マナの攻撃力が“スターダスト”を上回ったか」

それに加えて“超・魔・導・破”が落ちたのは大きいかもしれない。マナの効果を発動すれば、遊星の魔法・罫は全て破壊できる。

でも、“スターダスト”の効果で無効にしてくる筈。マハードの効果で更に無効にすることはできるけど、その為にマナをリリースする必要がある。

オレの最良の選択はやはりバトル！“スターダスト”を倒してみせる！

「バトル！マハードで“ジャンク・ウォリアー”と“ジャンク・ア

「チャー」に攻撃！スター・イリュージョン・マジック！」

「ぐあああっ！」

遊星 LP 1300

よし！残るは“スターダスト”だけだ！

「いけ！マハード！“スターダスト”に攻撃！スター・イリュージョン・マジック！」

「そう簡単にやらせはしない！罨カード“シンクロ・ストライク”！シンクロ素材としたモンスターの数×500ポイント攻撃力がアップする！」

遊星が“スターダスト”の召喚に使用したモンスターは3体。

ATK/4000

「迎え撃て！シューティング・ソニック！」

「うあああっ！」

リョウ LP 1400

マハードは破壊されないとはいえ、ダメージを受けてマナは攻撃できなくなった。なら、

「罨発動！“ブラックナイフ”！マハードが場に存在することで、相手モンスター1体を破壊する！破壊対象は！」

「ならば、罨カード“シューティング・スター”を発動!“スターダスト”が場に存在することで、場上のカード1枚を破壊する!破壊対象は!”」

「“スターダスト・ドラゴン”!”」

「マハードだ!”」

オレと遊星の全く同じプレイング。
ナイフが“スターダスト”を襲い、星がマハードを襲う。

「“白銀の恩恵”の効果により!”」

「“星屑の輝き”の効果により!”」

『カード効果では破壊されない!』

二人の声が重なった。

「くっ、くっくっ」

「フッ」

『アハハハハハ!』

オレも遊星も声を上げて笑った。

「いいなあ」

「アリスちゃん？」

「私にはあんなにリヨウを楽しませてあげられないから」

「気にすることねえんじゃねえのか？オレとデュエルする時もあれ程楽しそうにすることなんてねえぜ」

「でも」

「遊星さんはリヨウ君にとって確かに大きな存在みたいだけど、アリスちゃんだってリヨウ君にとって大事な存在だと思うよ？」

「うん」

「だいたい、これは競い合うことじゃねえぜ。もっと自信持てよ」

「だって、心配なんだもん」

「はあ。こつこついう性格か」

「こつこつは」

「見てみて！舞！マジで凄いよ！」

「そつね。凄いわ」

「絵の方はどう?」

「うん。良い感じよ」

「わあ。ホントだね」

「今はデッサンだけだけどね。家に帰って色付けしないと」

「とにかく、今はデュエルだよ!」

笑いが込み上げてくる。我慢しきれない。楽しくて仕方ないよ。

「やるな、リョウ」

「こっちの台詞だよ、遊星」

またお互いに笑い合う。楽しいなあ、ホントに。

「オレのターンだね。カードを2枚伏せて、“ポット・マジシヤン”を召喚!」

ATK/700

「これでターン終了だよ」

「オレのターン」

SP 9

「スタンバイフェイズ、“ポット・マジシャン”の効果発動！このカードをリリースすることで、お互いのプレイヤーはカードを2枚ドロウする。ただし、オレのモンスターはこのターン、効果が無効になる」

これでオレは手札2枚、遊星はドロウカードを合わせて3枚か。

「スピードワールド2”の効果発動！SPカウンターを7つ取り除き、カードを1枚ドロウする」

遊星 SP 2

これで4枚。どうくる？

「SP エンジェルバトン”発動！SPカウンターが2つ以上ある時、デッキからカードを2枚ドロウし、1枚を墓地に送る。

さらにもう一度だ！”SP エンジェルバトン”発動！カードを2枚ドロウ、1枚を墓地に送る」

ここにきてダブル“SP”。やっぱり遊星とカードたちの絆は強い。

「いくぞ！“セカンド・ブースター”を召喚！」

ATK/1000

「このカードをリリースすることで、オレのモンスターの攻撃力を1500ポイントアップさせる！」

“セカンド・ブースター”をリリース！“スターダスト”の攻撃力アップ！」

ATK / 4000

あらら。

オレのライフは1400。マナの攻撃力は2400。

「この攻撃をまともに受けるのはマズいな」

「フツ。いかせてもらっぞ。

バトル!“スターダスト”でマナを攻撃する！響け！シューティン
グ・ソニック！”

「まだ終わる訳にはいかないな。そうだろう？リヨウ」

「だね、マハード。まだ終われない。

罠カード“魔術師集結”！魔法使い族モンスター1体につき、攻撃
力300ポイントアップ！”

ATK / 3500

ATK / 3000

「フツ。だが、“スターダスト”の攻撃力には届かない！いけ！」

「うあああっ！」

リヨウ LP 400

これでオレのライフはセーフティラインを切った。でも、遊星の
SPカウンターは2。つまり、まだ終わらない。

「リヨウ。まだ終わってないよ」

「そうだね、マナ。次のターンが勝負だよ」

そう。勝負は次のターンだ。

「オレはカードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

遊星の手札は1枚残ってる。あれは。

「遊星、その1枚の手札は“SP”かな？」

「お前の手札にはあるのか？」

そっか。オレのSPカウンターは次のオレのターンで10になる。遊星のライフは残り1300だから、“スピードワールド2”の効果で2回発動させれば勝てる。

オレから切り出したこの駆け引き、乗ったよ。

「オレの手札には、これがあるよ」

手札の1枚のカードを遊星に見せた。

「なるほどな。“SP ソウル・サークル”か」

以前はこのカードが勝負を分ける鍵になったからね。それに、このカードは見せたとしても大して問題じゃないし。

「オレの手札にあるカードは“SP”ではないな。モンスターカードだ」

そこまで教えてくれるんだね。なんにしても、このターンが勝負。

「いくよ、遊星」

「ああ」

「オレのターン！」

リヨウ SP 10

遊星 SP 3

ドローカードを確認する。

このターンで決着をつけない限り、オレは負ける可能性がある。遊星のライフを0にするには、“スターダスト”を倒して遊星に直接攻撃を決める。もう一つの手は“スピードワールド2”の効果を発動させる。

ただ、ドローカードなら無理をしなくてもオレは次のターン、“スピードワールド2”で負けることはない。ただし、“SP ソウル・サークル”を発動することはできなくなる。

止めた。

余計なことまで考えそうだし。

オレにできることは、マハードとマナを信じて闘っただけなんだ！

「マナの効果発動！“超・魔・導・破”をゲームから除外して効果発動！

マハードが場に存在する時、相手場の魔法・罫を全て破壊する！」

「来たか。 “スターダスト”！」

“スターダスト”の効果は自身をリリースすることで破壊効果を無効にして破壊すること。それは破壊効果として扱われる。つまり、マハードの効果で無効にできる！

「マハードの効果は　っ！？マハード!?」

マハードの効果が発動しない!?

「済まない、リヨウ。どうやら遊星殿の仕業のようだ」

一体何を!?

「オレは手札の“エフェクト・ヴェーラー”の効果を発動した。このカードを墓地に送ることで、エンドフェイズまで相手モンスター1体の効果を無効にする。

マハードの効果は封じさせてもらった!」

「っ!」

「さらに罨発動!“荒野の大竜巻”!場の表側表示で存在する魔法・罨カードを1枚破壊する。

“白銀の恩恵”を破壊!」

これでオレたちの盾が無くなった。

「“スターダスト”の効果は有効!いけ!ヴィクテム・サンクチュアリ!」

“スターダスト”がリリースされ、星となる。その星がマナを覆い尽くした。

「スターダスト”が無効にしたのはマナの効果だ。マナにはこれで退場してもらおうぞ！」

星が輝き、破裂した。

「きゃああっ！」

爆煙が巻き起こる。その衝撃にオレは一瞬体制を崩した。その隙に遊星はDホイールを寄せて来た。

「悪いが、マナは破壊させてもらったぞ」

「それはどうかな？」

「どういう意味だ？」

オレは巻き起こった爆煙の方を指差した。だんだん煙が晴れてくる。そこから、

「あゝ、ビックリしたよ」

マナが姿を現す。

「破壊した筈。いや、破壊できていないのか？」

「そつだよ。オレは墓地の“魔術の守護者”をゲームから除外して、破壊を無効にしたよ」

「　　そうか。“SP 未来への扉”で墓地に送られていたな」

これでマナは無事。

遊星の場にはモンスターはいない。“星屑の輝き”と伏せカードが1枚、手札は“エフェクト・ヴェーラー”だったから、手札もない。オレの場にはマハードとマナ、伏せカードが1枚。

気になるのは言うまでもなくあの伏せカードか。遊星のことだから何か仕掛けてある筈。

マナの効果は使ったからこのターンはもう使えない。マハードの効果は無効になってる。

この状況で一番嫌なのはモンスターを破壊する罠。遊星の伏せカードは　　。

でも、ここで臆す訳にはいかない！

「勝負だ！遊星！」

「来い！リヨウ！」

「マハードでダイレクトアタック！」

「罠発動！」

ここで伏せカードが発動。その効果は　　？

「スターダスト・フラッシュ星屑の残光”！“スターダスト・ドラゴン”が、自らの効果でリリースされたターン、墓地にある、“スターダスト・ドラゴン”を特殊召喚する！」

飛翔せよ！“スターダスト・ドラゴン”！」

ATK/2500

再び星屑を散らしながら場に現れる“スターダスト”。

「なるほど。流石、考えてあるね」

場から“スターダスト”がいなくなることさえ、考えてある訳か。

「さらに“星屑の輝き”があるから戦闘で破壊することはできない。だからこのターンは防げるって訳だね」

「ああ。そういうことだ」

「でも一つ読み違いしてるかもね」

「その伏せカードか？」

その通り！

「畏発動！“砂塵の大竜巻”！相手場の魔法・畏カードを1枚破壊する！

“星屑の輝き”を破壊！」

“星屑の輝き”が破壊される。このタイミングで“スターダスト”の効果を使うことはできないからね。場がから空きになるから。

「そうか。良いカードを伏せていたな」

さっきのバトルフェイス前に発動させてもよかったけど、チェーン効果って可能性もあったからね。このタイミングは間違ってたか。

「バトル続行！マハード！“スターダスト”に攻撃！スター・イリ
ユージョン・マジック！」

「響け！シューティング・ソニック！」

再びマハードの魔力光と“スターダスト”の音波が激しく交差する。そして爆発する。

「っ！」

「くっ！」

煙が晴れてきた。

どうなった？

「ふう。どうやら、私は無事なようだな」

「マハード！」

「お師匠様！」

よかった。マハードは大丈夫みたいだね。
じゃあ“スターダスト”は？

「悪いな。私も健在だ」

“スターダスト”。

「勝負はまだついていないぞ、リヨウ」

「そうみたいだね。何をしたの？」

「墓地の“シールド・ウォリアー”をゲームから除外し、“スターダスト”の戦闘での破壊を無効にした」

「でも戦闘ダメージはある訳だね」

「ああ」

遊星 LP 900

ただ、これでオレのバトルフェイズは終了。けど、遊星の伏せカードは全て無くなった。

これで勝負がつくかな？

「“スピードワールド2”の効果発動！」

手札には“SP ソウル・サークル”があるけど、多分使う前にこのデュエルは終わる。だったら、使うべきだろうね！

「SPカウンターを4つ取り除き、手札の“SP”1枚につき、800ポイントのダメージを与える！」

リヨウ SP 6

さあ、どうなる？

「悪いが、まだ終わらない！
墓地の“ダメージ・イーター”の効果発動！このカードをゲームから除外し、ダメージを与える効果を回復効果にする！
オレは800ポイントライフを回復する！」

遊星 LP 1700

「墓地に送った2枚のカードは“シールド・ウォリアー”と“ダメージ・イーター”だったんだね」

「ああ」

用意周到だね、ホント。
このターンは決めきれない。

「オレはもう一度“スピードワールド2”の効果発動！800ポイントのダメージ！」

リョウ SP 2

「くっ！」

遊星 LP 900

さて、次のターンはどうなるかな。

「オレはカードを2枚伏せる。ターンエンド！」

「オレのターン！」

「SPカウンターは悪いけど増えないよ。
永続罠“スピードオフ”！これから3ターン、お互いのSPカウン
ターは増えない！」

「そうか。これで“スピードワールド2”の効果で勝負がつく
ことはないな」

遊星の引いたカードが“SP”とは限らないんだけどね。

「このターン、どのみちオレは“スターダスト”で攻撃することは
できないな」

マナの効果を発動すれば返り討ちにできるからね。

「オレはこのカードに賭ける！
カードを1枚伏せる！ターン終了だ！」

遊星は仕掛けて来なかった、か。

「オレのターン！」

ドローカードは“SP 魔力の杯”。発動はできないか。

「そろそろ、大詰めだな」

「そうだね。楽しかったよ、遊星。これ以上ないくらいに」

「ああ。オレもだ」

「どっちが勝っても、またやろうね、遊星」

「ああ！臨むところだ！」

楽しかったなあ。

もうすぐ終わりだと思つと、どうしてももったいなく感じる。このまま、ずっと続けばいいのに。

ダメだね。こんなこと考えちゃいけない。

デュエルに妥協は許されない。遊星に失礼だし、何よりオレの絆を踏みにじることになる。

だからこのデュエル！最後まで全力で勝ちに行く！

「バトル！マハード！」

「ああ！」

「頼む！“スターダスト”！」

「ピギヤアアアア！」

三度、魔力光と音波がぶつかり合う。

『オオオオオオオオオオ！』

又しても爆煙が巻き起こる。

その中から、オレと遊星は同時に抜け出た。後ろからついて来るモンスターは、マハードとマナだけ！

遊星 LP 500

このデュエル、勝った！

「畏発動！“シンクロ・デストラクター”！シンクロモンスターが相手モンスターを破壊した時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

これで終わりだ！

side 遊星

オレはリヨウと同時に爆煙から抜け出た。

“スターダスト”が破壊されてしまった。
。 済まない、“スターダスト”。

だが！このデュエルは、もらったぞ！

「畏カード“コスミック・ブラスト”！オレの場のドラゴン族、シンクロモンスターが場を離れた時、そのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを与える！」

勝った！

side out

side アリス

「畏発動！ “シンクロ・デストラクター”！」

「畏カード “コズミック・ブラスト”！」

リヨウと遊星さんの最後の畏が発動した。でも、これって。

「まさか、相打ちかよ!？」

「おいおい、マジかよ!？」

お互いの受けるダメージは“スターダスト・ドラゴン”の攻撃力2500。ライフは共に0になる筈。リヨウの墓地には効果ダメージを無効にできそうなカードは無かったと思うし、遊星さんも同じ。

リヨウの場にはマハードとマナが協力して魔力を蓄えてる。遊星さんの場には“スターダスト・ドラゴン”が現れて口に音波が蓄えられてる。

蓄えられた波動が互いに放たれ、スタジアムを覆うほどの爆煙が引き起こされた。

二人は？

やがて、煙が晴れてくる。煙の中からリヨウと遊星さんが姿を現した。二人ともDホイールを停めている。ライフは？

リヨウ LP 0

遊星 LP 0

side out

オレと遊星は共にDホイールを止め、向かい合っている。

「引き分けかあ」

「ああ、そうだな」

勝ったと思ったんだけどなあ。

「まさか、“スターダスト”を破壊させて“コズミック・ブラスト”とは思わなかったよ」

「オレもいけると思ったんだがな。シンクロ・デストラクタ」か」

「でも、最高のデュエルだったよ、遊星」

「ああ。またやろう、リョウ」

お互いに手を出し、固く握手をした。そんなオレたちにスタジアムから盛大な拍手が贈られた。

オレと遊星のデュエルが終わり、学園対抗戦の日程が無事終了した。各自解散となり、みんなが帰っていく。

オレたちは舞と咲に別れを告げて、それぞれ家に帰っていく。

オレは、

「さ、入って。遊星」

「ああ」

遊星を家に招き入れている。

遊星とのデュエルはドロウだったから、賭けはお互いにする事になったんだよね。

「マナ、頼むよ」

「うん。とびきりの料理を作るから待っててね」

1時間後、

「リョウ。ここは何の高級レストランなんだ？」

「はは」

遊星がこう言うのも解る。

食卓に並んだ料理はステーキなんかの高級料理ばかり。どれだけの物を作ったの？

「今日はやけに気合い入ってたね、マナ」

「もっちらん！」

「今日のデュエルは私たちも楽しかったからな。私が食材を仕入れた」

「リヨウはいつもこれ程の物を食べているのか？」

「いやいや。豪華なのは特別な時だけだよ」

「ほら、早く食べて！冷めちゃうから！」

「ああ。いただきます」

みんなでマナが作ってくれた料理を美味しく頂いた。しっかし、今日はずいぶん手が込んでたなあ。

「精霊たちも食事を探るんだな」

「私たちも生きていますから」

「そうだな」

遊星は今日、家に泊まっていくって話になってる。特に話したいことがある訳じゃないけど、遊星とはいろんなことを語り合ってみたい。

気が付けば、オレは夜が更けるまで遊星と語り合っていた。

第三十話：白銀VS星屑（後書き）

もう一度言っておきますと、この話で出てきたオリカの再登場は間違いなくありません。ご了承ください。

この話で完全に学園対抗戦は終了です。よって、第二期は残り一話で終わりになります。

では、グッチーでした。

第二期最終話・時（前書き）

第二期最終話になりました。

では、ごきげん。

第二期最終話：時

カタンカタン

今日は珍しく徒歩でもソニックでもなく、電車に乗って遠出。

「電車に乗るのは久しぶりだね」

「そうだね」

アリスと二人である場所に誘われた。

という訳で、電車に乗って行くことになった。行き先は、

「対抗戦で友達になれた二人、舞と咲が是非遊びに来て欲しいってことなんだよね」

「うん。そうだよ」

つまりはそういうこと。

舞と咲から連絡をもらって、アリスを誘って遊びに行くことにした。ソニックで行ってもよかったけど、案外遠そうだったんだよね。

「でも、ここって何なんだろうね？えっと、パンパカパンだよね？」

確かに。今日の待ち合わせ場所になってるんだけど、北地区はよく解らないし。

「まあ、行ってみれば解るよ」

「そうだね」

電車に揺られながら、舞と咲について話していた。

オレたちは電車を降り、真っ直ぐパンパカパンに向かう。
比較的解りやすいつて言ってたけど。

「凄く解りやすかったね」

「うん」

そう。大きくパンパカパンと描いてあるお店に着いた。目印にはち
ようどいいのかもね。

カランカラン

二人で中に入る。すると、

『いらっしやいませ！』

元気な掛け声。

「えっと、何してるの？二人とも」

オレたちに声をかけてきたのは舞と咲。働いてるのかな？

「あはは。パンパカパンはね、私の家なんだ」

「なるほど。咲の」

だとすると、ここを待ち合わせ場所にしたのも納得だね。

「じゃあ、二人はお手伝いなのかな？」

「ええ。そんなところなの」

なるほどね。

「お母さん〜！友達が来てくれたから、抜けるね〜！」

家の手伝いなんて二人とも偉いね。

オレたちは咲に案内されて家の中へ。っていうか、今更ながらオレは女の子の家に入ってるんだね。いや、アリスと由里の家には入ってるけど。

部屋に招かれ、適当に寛いだ。

「これ、うちのパンなんだ。よければ食べてね」

「ありがとう」

「いろいろあるね。何がいいかな？」

「オススメはチョココロネ！パンパカパンの人気商品だよ！」

「そうなんだ」

「どうしたの？」

舞の問いに言葉が詰まる。いや、オレは。

「あゝ、リヨウは甘いものが嫌いなんだよ」

「そうなの？」

「まあ、ね。どうしても無理で」

「へへ、珍しいね。美味しいのに」

できればそう言わないで欲しいよ。由里からも散々言われたし。

「まあ、食べられるパンを食べてよ。美味しいから」

「ありがとう、咲」

適当にパンを取って食べてみた。確かに美味しいね。

「ねね、聞きたいことあるんだけど」

「なに？」

「リヨウとアリスの関係は？いつか答えてくれるって言ったよね？」

オレは言った覚えはない。まあ隣でアリスが苦い顔してるけどね。

「えっと、まあ、予想通りだと思うけど、一応恋人同士」

恥ずかしそうに言葉を繋ぐアリス。なんだかんだでアリスも恥ずかしいんだよね。

「へへ、やっぱりそうなんだ」

「う、うん。似合ってるかな？」

それはオレも気になるかも。

「バッチリだよ！ね、舞？」

「ええ、そうね。ベストカップルみたい」

二人が良い笑顔で笑いかけてくれる。それは嬉しいかもね。

「ありがとう、二人とも」

オレとアリスも、笑いかけた。

「えっと、私も聞きたいことあるの。いい？」

「構わないよ、なに？舞」

「マハードと違って何のことなの？」

そのことか。まあ、この二人なら話しても大丈夫でしょ。

「それは、まあ、あれだね。」

二人はカードの精霊っていると思う？」

『カードの精霊？』

当然だけど、二人とも知らないね。

「精霊っていうのは、えっと、何て言えば解るかな。カードに宿る生きてる魂、って言えばいいかな？」

『？』

アリスの説明に二人揃って首を傾げる舞と咲。

「実際に見てもらうのが一番早いね。

マハード、マナ、出て来てくれる？」

「はい」

マナが実体化して姿を現した。

「ああ、“ブラックマジシャンガール”」

「へ〜、凄いのね。って」

『ええええええええええ！』

二人の絶叫。まあ、仕方ないことだけど。

「そんなに驚かなくても」

マナは少し落ち込んでるね。

「まあまあ。マナ、マハードは？姿が見えないけど」

「お師匠様は、なんだかご用があるみたいで、今日は来れないって珍しいね。何かあったんだらうか？」

「あの、マハードって」

「もしかして」

「うん。“ブラックマジシャン”だよ」

二人が納得といった顔をする。

「じゃあ、アリスのシンとリップは」

「シンは“真紅眼の黒竜”、リップは、おいで」

「きゃう〜」

リップこと“ブルームドラゴン”がアリスの膝下に姿を現した。相変わらず、懐いてるみたいだね。

「えっと、確か“ブルームドラゴン”」

「この子も実体があるのね」

「そうだよ。シンは大きいからここでは実体化できないけど、リップは大丈夫だから」

シンはでかいからね。
オレはマナに視線を向け、

「マナ、着替えてきていいよ。寒くないようにね」

マナは笑顔で頷くと、精霊世界に戻っていった。生憎、舞たちは気付いてないみたいで、アリスとリップについて話してる。

少し眺めていると、マナが着替えて戻ってきた。

「戻ってきたよ〜」

『!?!?』

案の定、舞と咲はまた驚いてる。マナのいつもの魔術服姿とは違って、オレたちと変わらない服を着た姿を見れば当然だけどね。

因みに、マナの服は冬物。以前寒そうにしてたから、暇を見つけて買ってあげた。

「えっと」

「“ブラックマジシャンガール” だよな?」

「そっだよ。名前はマナ。よろしくね」

「服はリョウに買ってもらったんだよね。よく似合ってるよ」

「ありがとう、アリスちゃん」

それからはマナを加えてガールズトーク。オレはすっかりのけ者扱い。やれやれ。

『仕方がなかるう。女子とはそういうものだ』

「シン。まあ、そうかもね」

オレはシンと適当に近況を話しながら暇を潰した。

side アリス

私たちは着替えて戻って来たマナを加えて話してる。

「精霊つて凄いだね。まさか私たちが着てる普通の服を着て私たちと何の違和感もなく話してるんだもんね」

「そうよね。驚いたわ」

「エへへ。まあね」

「マナさん以外にも、精霊でこんなふうになら私たちと変わらなく生活してる娘はいるの？」

「マナ以外にはいないんじゃないかな？」

「いないよ。私は単に我が儘言っただけだから」

「そっなの？」

「そうだよ。自分のマスターに我が儘言って困らせてる精霊なんて私くらいだと思うよ。」

それを許すのがリヨウらしいんだけどね。

「じゃあ、リヨウだからってこと?」

「そうだよ。リヨウは私たちにとって最高のマスターだからね」

そうだね。リヨウとマハードとマナの三人でいつも楽しそうにしてる。どんな時でも、三人一緒で。。そう考えてみれば、マハードがいない今日はずいぶん珍しいな。

「リヨウは優しいわよね。いつもそうなの?」

「いつでも優しいよ。ね、アリスちゃん」

「そうだね」

「へー、何だか羨ましいな。私にも素敵な出会いがないかな?」

「もう、咲ったら」

いつか、きっとあると思うよ。

side out

しばらくすると、一通り話し終えたのか、アリスたちがオレに視線を向けてきた。

「もうすぐ二学期も終わりだよね？」

「そうだよ」

「三学期は何かイベントがあるのかな？」

「どうだろうね。とりあえず、三年になれば一つあるよ。大きいのがね」

「何かあったっけ？」

「WRGP」

「確かに！」

そう。WRGPは再来年4月から開催される。遊星たちも準備を進めてるだろうね。

「リヨウは出場するの？」

「まだ決めてない。ひよっとしたら出ないかもね」

「え〜！もったいないよ！リヨウなら優勝だって狙えると思うのに」
オレだって遊星たちと競ってみたいって想いはある。けど、まだどうするかは迷ってる。

「舞と咲はどうするの？」

「私たち？」

「そうだね。舞と咲も十分いけるんじゃないかな？」

「そうかなあ？」

「考えたこともなかったけど」

「まあ、まだ時間はあるんだし、もう少し考えてみたらいいんじゃないかな？」

「そうね」

「でもそれはリヨウも！」

オレもか。まあ、まだ時間はあるしね。

「それは置いておきましょう。実は、リヨウに渡したいものがあるの。マナにもかな」

舞からオレとマナに？

「これなんだけど」

一冊のスケッチブックを渡してくれた。これは、

「オレたちの 絵」

「うん。学園対抗戦、最後の不動さんとのデュエルの時、私が描いた絵なの」

オレはソニックに乗り、マハードとマナは純白の姿で描かれている。
綺麗に色付けまでしてある。

「スゴイ」

マナが感嘆してる。

舞の絵はシティのモニュメントを一度見たけど、これは出来が違う。
何て言うか、躍動してるみたいで。

スケッチブックをめくると、他の絵もあった。“スターダスト”や
遊星と対峙してる絵に、一緒に走る絵、他にも数枚ある。

「あの日から、少しずつ色付けしてたの。私のイメージで色付けし
たから、違う箇所があるかもしれないけど」

「いや、そんなことないよ。ね、マナ？」

「うん。とっても上手」

「ありがとう。そう言って貰えると嬉しいな」

ホントによく描かれてる。一つ一つ丁寧に。

「舞、厚かましいことかもしれないけど、これ、貰っていいか
な？」

こんなに丁寧に描いた絵を、手渡してはくれないかもしれないけど
。

「うん。いいよ」

「えッ!？」

いいの？

「もともと、貴方にあげるつもりだったから」

「ありがとう。大切にさせてもらっよ」

楽しかった遊星とのデュエルの思い出として、オレたちの絆の証として。

「家に飾ろっか？マナ」

「だね！お師匠様もきつと喜ぶよ」

「舞は絵を描くのが上手なんだね」

「そっだよ。舞の特技かな」

「リヨウにとって、あの絵は嬉しいだろうなあ」

「そんなに？」

「うん。リヨウはカードとの絆を、大切に思ってるから。特に、マハードとマナはね」

私に向けてくれる眼とは少し違う。だけど、リヨウが二人に向ける

眼は間違いなく特別。

「絆、かゝ。舞モリヨウとのデュエルの後に、そんなこと言ったなあ」

「どづしたの？」

「いやあ、カードの精霊って、私たちにも見えないかな、って
そういえば、精霊を見る為の条件ってあるのかな？」

『詳しいことは吾は知らん』

「シン？」

『リップが察してやれ、と言ってきたのでな。
この手の問いは、私より高名な魔術師殿の方が詳しいだろう。だが、
吾が知る伝承に因れば、条件が一つだけある』

やっぱりあるんだね。

「それは？」

『心だ。澄んだ清らかな心。吾が知る限りでは、それだけの筈だ』

心か。難しいな。

オレたちはその後もしばらく談笑して、まったりとした時間を過

す。

でも、時間は有限な訳で、

「今日は来てくれてありがとう」

「楽しかった」

「私たちも楽しかったよ」

適当に別れの言葉を言い合い、オレたちはパンパカパンの表に出た。

「また遊ぼうねー！」

「そのうちね」

「今度は、私たちのところに来てね」

「うん。そうね」

そうになると、由里の家が一番良いかな。まだ先の話か。

「またね、舞、咲」

「それじゃあね」

『バイバイ』

オレとアリスは駅に向かって歩き出した。

それからは電車に乗って、帰路につく。アリスと二人で談笑しながら

ら時間を潰し、アリスを家まで送ってからオレも家に帰る。

オレの家は相変わらず静か。誰もいないから仕方ないんだけど。家上がり、電気をつける頃には、タイミングを見計らってマナが実体化する。と、同時にマハードも姿を現した。

「マハード、今日はどこか行ってたみたいだけど」

「ああ」

その表情はどこか暗い。何かあったのかな？

「リヨウ、落ち着いて聞いて欲しい」

真剣な声色。オレも感化され、真剣になる。

「ファントムが、動き出した」

静かな家の中で、マハードの声が響き渡った。

第二期最終話：時（後書き）

ようやく第二期終了です。

すぐに第三期、といきたいところですが、まだいきません。しばらく番外編を挟みます。ご了承ください。かなり季節外れですが。

それでは、グッチーでした。

特別編：夏の思い出 前編（前書き）

予告通り番外編です。

舞台は海外？な感じですよ。とりあえず、シテイではありません。
新キャラも一応登場します。

前編、中編、後編の三分の予定ですよ。長くなり過ぎな感じですよ。

では、どうぞ。

特別編：夏の思い出 前編

いろいろなことがあった夏休み。

それでも、二人にとっては思い出深い夏休みだった。

これはそんな夏休みにあった、二人の思い出の1ページ。

夏休み、オレは溜まりに溜まった宿題に取り組んでいた。

「調子はどうだ？」

「ああ、マハード。変わり無しだよ。がんばればもうすぐ終わる筈だから」

プルルルル プルルルル

「あれ？電話だよ、リヨウ」

「あ、うん。ありがとう、マナ」

誰からだろ？

ピッ

『リヨウちゃん、久しぶり〜』

「母さん、どうしたの?」

『うふふ、実はリヨウちゃんに良いお知らせがあるの』

母さんから良いお知らせ?

『実はね、ネオドミノシティの南海馬ランドで夏祭りが開かれるの。お母さんのお仕事の知人からその夏祭りの招待券を頂いたんだけど、忙しくて行けないの。』

リヨウちゃん行かないかしら?夏の思い出にはちょうど良いと思うわよ』

「うーん」

宿題はもうすぐ終わるから問題ないけど。

「オレ一人?」

マハードとマナを実体化させる訳にはいかないしなあ。

『うふふ、大丈夫よ。リヨウちゃんには可愛い恋人がいるじゃない』

「いやいや、アリスは流石にマズインじゃ」

『大丈夫よ。招待の人数は二人だし、ホテルなら招待券で保証されてるわ』

「いや、年頃の男女だよ?」

『あら、そんなこと?アリスちゃんとなら大丈夫よ。私もお父さん』

もどつくに認めてるわ』

それでいいの？オレの母さんと父さんは。

『そ・れ・に、リヨウちゃんだって満更でもないでしょうっ？』

「まあ」

『つぶぶ、そうよねえ。こんな機会、滅多にないわよ？』

「とりあえず、アリスに話してみるよ」

『つぶぶ、そうしてみるといいわ。細かいことはまた連絡するわね』

「うん。ありがとう、母さん。それじゃあ」

通信を切った。

とにかく、アリスに話してみないと。

ピンポン

「リヨウ。アリスが来たようだ」

「グッドタイミングだね！」

マハードとマナも話を聞いてたみたいだね。

にしても、今日はアリスが来るって言ってたね

。

オレはアリスを家に招き入れ、そして、

「アリス、ちょっと話があるんだけど」

「？」

オレは母さんとの通信について話した。

「つまり、二人で旅行に行こうってことだよな／＼」

恥ずかしそうに顔を染めて聞き返してくる。オレも恥ずかしいけど／＼。

「まあ、うん。どうかな？」

「えっと、母さんに聞いてみないと」

「確かにね」

「でも、行きたいよ。うん」

アリスは乗り気だね。

それから、アリスの家に行き、事情を説明すると、

「うん。いいわよ。行ってらっしゃい」

こんなでいいの？オレたちの親。

「実は知ってたのよ。リョウ君の母から連絡があったの。ついさっ

きね

なるほど。母さんもそれくらいは普通に考えてるか。

「いいじゃない。二人で行って来なさい。ね？」

「うん！ありがとうございます、母さん」

「ありがとうございます、マリアさん」

こうして、オレたちの旅行が決定した。

「わあ！大きい！」

「ホントだね。それに盛り上がってる」

オレたちは無事に海馬ランドに到着し、入場しようとしている。

この旅行の期間は3泊4日。夏祭りは明日から。

今日は一応到着しただけで、来るのに時間がかかり、既に昼下がりに海馬ランド内にあるホテルに泊まる予定になっている。

「でもホントだね。夏祭りは明日からなのに、もうこんなに盛り上がってるよ」

アリスは楽しそうにしてくれてる。よかった。

『リヨウ』

『主アリス』

「マハード？」

「シン？」

二人でいる時は基本的に顔を出さないんだけど。

『ごめんね。二人きりなのに』

「いいよ。それよりどうしたの？」

『ああ。何者かに見られている』

「見られてる？」

『そうだ。二人の時は些細なことは見逃していたが、前例があるのでな』

「あゝ」

「確かに」

『一応伝えておいたんだよ』

気の所為かもしれないけど、用心するに越したことはないかな。

「マハードは周辺を満遍なく注意して」

『解った』

「マナはオレの周辺を、シンはアリスの周辺を頼むよ」

『うん』

『承知した』

これで大丈夫とは思っけどね。

「なんだろう？」

「大丈夫だよ、きつと。とりあえず、ホテルに行こう」

「うん。そうだね」

オレとアリスは歩き出した。

海馬ランドのホテルに着き、招待券を見せてチェックインした。二人でホテルの部屋に入る。

「けっこう広いね」

「うん。これなら、かなり余裕があるよ」

オレとアリスの二人だけなら広過ぎるくらいだよ。

荷物を置き、寛ごうとしたその矢先にノックされた。オレが対応すると、

「あの、フォーチュン・カップで優勝されたリョウさんですよ

「？」

声をかけてきたのは小さな女の子。多分、龍亞や龍可と同じくらいの子。

「そつだよ。どうしたの？」

「私は、海馬コーポレイション副社長をしている者です」

「その副社長がオレに何か？」

「えっと、実はお願いがあるのです」

「お願い？」

とりあえず、長くなりそうだったから部屋に招き入れた。

「えっと、申し遅れました。私は海馬コーポレイション副社長をやらせて頂いている者です」

隣でアリスが目丸くしてる。気持ちはオレも同じだよ。

「それで、オレに何か？」

「フォーチュン・カップで優勝したりリョウさんの力を借りたいんです」

話が見えないな。

「えっと、ちょっと落ち着いてね。貴女はどうしてリョウの力を借

りたいの?」

優しく説明を促すアリス。子供には優しいからね。

「すみません。えっとですね、サマーデュエル大会を知っていますか?」

オレとアリスは一緒に首を振る。

「この海馬ランドで行われる夏祭りのイベントの一つなんです」

そんなイベントがあるんだ。イベントなんかは夜調べるつもりだったからね。

「そのデュエル大会に是非出場して欲しいんです」

「オレに?」

「はい」

いまいち解らない。どうしてオレに出場を?

「理由を説明してくれるかな?」

確かに。繰り返しになってるからね。

コンコン

再びノック。

「ちょっと待つて。誰か来たみたいだから」

オレがまた対応する。

「失礼する」

今度は青年。ケースを持つてるけど。

「どちら様ですか？」

「オレは海馬コーポレイション社長の者だ」

副社長の次は社長か。

「君がリヨウだな？」

「そうですよ」

「ここに妹が来ている筈だが」

「来ていますよ。どうぞ」

社長も招き入れた。あの娘は妹だったんだね。

「兄さん！」

「話は進んでいるか？」

「オレにデュエル大会に出場して欲しいってことは聞きました。訳を話してくれますか？」

「理由も話さずに話を進めていたのか？」

「うっ、ごめんなさい」

「まあまあ。そんなに落ち込まないで」

あの娘のことはアリスに任せておけば大丈夫かな。

「済まん。あいつは副社長になって間もないんだ」

「いえ。大丈夫ですよ」

「だが、あいつが君に頼んだことは本気だ。訳を話す」

「と、いう訳だ」

「簡単に纏めると、この南海馬ランドが買収されかけてると」

「ああ。その通りだ」

「でも、どうして海馬ランドほどの施設が買収されかけてるんですか？」

「フォーチュン・カップが原因なんです」

フォーチュン・カップが原因？

「フォーチュン・カップの決勝とスペシャルマッチを覚えている筈だ」

決勝とスペシャルマッチ？

「あの時、ソリッドビジョンに支障が起き、デュエルが見えなくなつた。そのことに付け込む輩が多くてな」

「何度検証しても異常は無かつたんです」

だろうね。

「あのデュエルって、確か」

アリスが小声で話しかけてくる。

「うん。赤き龍がオレたちを違う世界に連れていった時だね。海馬コーポレイションの所為じゃない」

どうしようか。

海馬コーポレイションに責任はない。責任があるのはむしろオレたちシグナーだね。

「デュエル大会の内容はどうなっていますか？」

「はい。デュエル大会は二つに別れています。子供の部と大人の部です」

「オレに大人の部に出場して欲しいと？」

「は
」

「いや、待て。忘れてるぞ。大人の部はタッグデュエルだ」
オレ一人じゃどうしようもないね。

「それに、必ず優勝しなければならんだ」

「 どういうことですか？」

「 先程、買収されかけていると言ったな。このデュエル大会の大人の部に出場するある輩が優勝すれば、買収されてしまうことになっているのだ 」

何らかの交渉があつたんだろうね 。

「だからリョウさんに優勝して頂こうと思ひまして 。

偶然貴方方を見つけてから話を聞いて頂きたく 」

力になってあげたい けど、今はオレ一人じゃない。アリスがいる。

「 どうする？アリス 」

「 そう、だね 」

「 えっとですね、これがパンフレットです 」

アリスが受け取り、パンフレットを見る。

「大人の部は恋人同士のタッグなんですね」

「恋人で来る奴が多いからな。君たちのように」

オレとアリスは苦笑いになる。

「あ、優勝商品なんかもあるんですね。えっと、子供の部は、
スペシャルデュエル？」

「そうですね！兄さん、デュエルできるんですか！？」

「くっ、忙しくて手が回らんな」

あらら、ホントに大変みたいだね。

「大人の部の優勝商品は　　！」

なんかアリスの目が光ったような　　。

「済まない、リョウ！スペシャルデュエルもしてくれないか！？オレの代わりに！」

「オレがですか？」

「ああ。このデュエルはただ楽しんでくれればいい。
厚かましいが、大人の部も出場し、是非優勝して欲しい！」

「お願いします！」

オレは別に構わないけど　　。

「アリス、どうする?」

「いいよ!がんばって優勝しよう!」

なんだかさつきと違うような。

「本当ですか!?!」

「済まない!できる限りの報償は約束する!」

まあ、アリスが乗り気みたいだからいいか。

「解りました。優勝できるかは解りませんが、全力を尽くすことは約束します」

「頼む!」

「お願いします!」

やれやれ。大変なことになったな。

社長と副社長が帰り、オレとアリスはホテルの夕食を食べた。その後、二人でタッグデュエルのデッキ調整をするんだけど、

「私、先にお風呂に入ってくるね」

「うん。」「ゆっく〜」

と、アリスは部屋の中にあるお風呂へ。オレは自分のデッキとアリ

スのデッキを見ている。

『どうやら、感じた視線は海馬コーポレイションの者だったようだな』

「そうみたいだね」

『なんだか変なことに巻き込まれたね』

「まあ、アリスは優勝商品に欲しい物があつたみたいだし、良いんじゃないかな」

『デッキはどうだ？魔法使い族とドラゴン族だが』

「うん。多分あんまり変えないと思う。いつも通りの方がお互いによく解ってるしね。

ただ“ブラック・パラディン”は頻繁に使うかもね。頼りにしてるよ、マハード」

『私は？』

「マナはいつも通り展開の方を頼むよ」

『はあ〜い』

まあ、大丈夫かな。タッグデュエルはパートナーとの信頼関係が大事だろうけど、オレとアリスなら問題ない。

「それにしても、アリス長いな」

『女の子だから長くて当然だよ』

そういうことなんだ。マナが言うから間違いないんだろうけど。

「シンは何か意見ある？」

『いや、特にない。主アリスと貴公なら問題ないだろう』

「そっか。そういうえば、アリスについてなくていいの？」

『リップがついている』

なるほどね。

そうしているうちにアリスがお風呂から上がってきた。

「お待たせ。いいよ、リョウ」

お風呂上がりで良い匂いがする。アリスは自分の長い金髪の手入れを始める。

「どうしたの？じっと見てるけど、何かおかしいかな？」

「あ、いや、何でもないよ。オレも入ってくるね」

どうやらじっと見てたらしい。逃げるようにお風呂に入った。

のは、いいんだけど、

「アリスの匂い、かな？」

良い香が充満してるような気がする。
ダメだ。余計なこと考えそう。早く上がろう。

side アリス

私は鏡を前に髪をくしで解いている。

『きゃう〜』

リップは私の膝の上で気持ち良さそうにまどろんでいる。
そんなリップを微笑ましく見ながら、私は髪の手入れを続ける。折角みんなが綺麗だと褒めてくれる髪の毛だから、手入れは欠かしたくない。

私が入入れを終える頃、リョウがお風呂から上がってきた。

「リョウはお風呂速いんだね。烏の行水ってやつかな？」

「ま、まあ、そんなとこだよ」

「ふふ、座って」

「？」

私の前をポンポンと叩いて、座るように促す。

「どづしたの？」

少し戸惑いながら座ってくれた。私はリヨウの髪の毛を乾かし始めた。

「アリス？」

「うん。じつとしてね」

「いや、そういう意味じゃないんだけど」

「ふふ、いいでしょ？」

リヨウは髪の毛は黒髪で肩にかかるくらい長い。一度リヨウの髪の毛を手入れを試みたら、たんだよね。

「じゃあ、お願いするよ、アリス」

「うん。お願いされました」

それにしても、リヨウの髪の毛、男の子とは思えないくらい綺麗な。

「いつも手入れしてるの？」

「アリスほどじゃないよ。ちょっとだけね」

「そうなんだ。綺麗だね」

「そうかな？オレなんかアリスとは比べられないと思うよ」

「ふふ、ありがとう」

リョウの髪の毛も綺麗なんだけどね。

「髪の毛長いよね。伸ばしてるの?」

「ちょっとだけね」

何か訳があるのかな?

「はい。終わったよ」

「うん。ありがとう」

髪を結んでいないリョウを見るのは久しぶりかもしれないな。

私たちはその後、少しデッキのことを話してから眠りについた。

side out

翌日、目が覚めると、アリスは既に起きていて、髪の手入れをしていた。

どうやって寝たか?

想像にお任せ致します。聞かないで!

「うん、おはよう。アリス」

「あ、おはよう。リョウ」

「あゝ、朝早いね。ちょっと顔洗ってくるよ」

洗面所に向かい、顔を洗う。

『おはよう、リョウ』

「うん。おはよう、マナ」

オレは適当に髪を結び、いつもの格好になる。
再び部屋に戻ると、アリスが待っていた。

「準備できたかな？」

「うん。じゃあ、行こうか」

二人で海馬ランドを歩き回ることに。デュエル大会は昼からだし、それまでは二人で楽しく過ごしたいからね。

アトラクションに乗ったり、ショッピングモールをしたり。

「あれ、何かな？」

アリスが指差す方向を見ると、小さなドームがある。

「行ってみようか？」

「そうだね」

ドームの中を覗いてみると、それぞれデュエルディスクを展開してディスクをしていた。

「なるほど、デュエル会場だったんだ」

「そうみたいだね」

楽しそうにデュエルしているのを少し眺めていることにした。すると、

「あの、リヨウさんですか？」

後ろから声をかけられた。

振り返ってみると、男の子が一人で立っていた。

「そつだよ」

「どうかしたのかな？」

アリスが優しく声をかける。子供に関してはアリスに任せるのが一番だね。

「あの、フォーチュン・カップ見てました！凄かったです！憧れましたー！」

「ありがとう。嬉しいよ」

「あの、僕のデッキを見てみてくれませんか？」

そう言われ、デッキを差し出してくる。

オレはそのデッキを受け取り、アリスとデッキを見てみた。

「リヨウと同じ魔法使い族デッキだね」

「だね。ただちょっとタイプは違うかな」

この子は魔力カウンターを増やすことで場を制圧するタイプ。オレみたいなマハードとマナのような特定のカードを中心にするタイプじゃない。

デッキの構成はよくできてる。カードのバランスが良い。

「よくできてるよ。君は今日のデュエル大会に出るの？」

「はい！それで、是非見てもらおうと」

「君はこのカードたちのことが好きかな？」

「え、あっ、はい！」

「そっか。なら、このカードたちのことを信じてがんばってみて」

「は、はい！」

良い返事だね。

そう思うと、オレのカードの1枚から違和感を感じた。この感覚は、

「はい。このカードを君に。きっと役に立つ筈だよ」

「わあ！ありがとうございます！」

嬉しそうにお礼を言ってから戻っていった。

「リヨウが人にカードをあげるなんて珍しいね」

「あのカードが彼のところに行きたがってたみたいなんだよ」

「そうなんだ」

オレたちはドームを出た。次はどこに行こうかと尋ねようとした矢先にアリスが何かを見つけたようだった。

「ちょっと待って」

アリスが駆け寄る先を見ると、女の子が一人で困った顔をして立ち尽くしている。相変わらず、子供には敏感だね。

「どうしたの？」

優しく微笑んで声をかける。

「誰？」

子供と言っても、多分龍亞や龍可と同じくらいの年齢みただから少し警戒してる。

「私はアリス、この人はリヨウっていうの。貴女は？」

「えっと、レナ」

「レナか。良い名前だね。こんなところに一人でどうしたの？」

「うん。実は」

少しずつ警戒を解いてくれているようで、ポツポツと話してくれた。何でも、ご両親と一緒に来たが仕事が忙しく、退屈していたとのこと。双子の兄がいるらしいけど、逸れてしまったらしい。

「アリスお姉ちゃん、リョウお兄ちゃん、私と一緒に遊んでくれな
い？ね、いいでしょ？」

お兄ちゃんとお姉ちゃんと呼ばれ方には少し慌てたけど、警戒を完全
に解いてくれたと受け取った。
突然の遊ぼうとの誘いだけど、

「双子の子はいいの？」

「大丈夫。トレインならデュエルドームでも行ってる筈だから
心配ないとのこと。それを聞いたアリスは、

「そうなんだ。じゃあ、どこに行きたいの？」

遊んであげる気満々な様子。オレも満更じゃないけどね。

親と一緒にいられない辛さや寂しさはオレもアリスも知ってる。そ
んな気持ちをなんとか埋めてあげたいから。それに、困ってる人は
放っておけないしね。

「あそこに行きたい！」

レナが指差したのは、大規模なゲームセンター。

アリスは笑顔で頷き、レナと手を繋いで歩き出した。オレも後に続
いた。

しばらくはゲームセンターでレナと一緒に過ごした。レナは楽しそうに終始笑い、アリスも優しく微笑んでる。

そんな二人を少し離れて見ていると、不意に動きが止まった。

「これって、クレーンゲーム？」

UFOキャッチャーだけだね。

その一点をレナは凝視している。大きなフェレットのぬいぐるみ。

「欲しいの？」

「うん」

「じゃあ取ってあげるね」

パアツと顔が明るくなる。

実を言うと、オレはこういうのは得意。以前、こうしてアリスとゲームセンターに来たことがあり、アリスにも同じように懇願されたことがある。

その時になかなか取れずに苦戦していたところをマハードが助けてくれた。マハード曰く、『こういうものは計算の上に成り立っている。角度、力、位置を正確に計算し、実行すれば良い』とのこと。その時はマハードのアドバイス通りにしてみると、目的の品を見事にゲット。それから、マハードに計算方法を教えてもらったものだ。

それから、狙ったものを取れなかったことはない。

オレは角度、力、位置を計算し、アームをフェレットに向ける。そ

して、フェレットが上手く取れ、籠にポトリと落ちるのを確認する。

「わぁ！やったぁ！」

「ふふ、よかったね」

オレはフェレットを取り出し、レナにプレゼントした。

「ありがとう！リョウお兄ちゃん！」

両手一杯にフェレットのぬいぐるみを抱えて、嬉しそうにお礼を言うレナ。

「どういたしまして」

オレも笑顔で返事を返した。

ピンポンパンポン

海馬ランド全域にアナウンスが響き渡る。

『え、只今より、サマーデュエル大会を開始します。参加デュエリストは会場にお越し下さい』

なるほど。もう始まるんだね。

「あつ！私も出るんだった！」

「レナも出るんだね。一緒に行こうか？」

「うん！アリスお姉ちゃんはやっぱりリョウお兄ちゃんと付き合ってるんだね！」

「うん。そうだよ」

二人とも笑顔で会話する。

「美男美女ってやつだね！」

二人で赤くなつたのは言うまでもない。

会場に足を運び、子供の部に出場するレナとは、がんばって、と告げて別れた。

オレとアリスも大人の部に向かう。

先ずは予選か。さて、負ける訳にはいかないね。

『デュエル！』

バレンタイン特別編：想い方（前書き）

番外編の間に番外編を挟むというおかしなことになってしまいました。
た。

何故かシリーズっぽくなってしまいました。
と、とにかく、どうぞ。

バレンタイン特別編：想い方

side アリス

バレンタインまで後数日に迫ったある日、私は由里の家にお邪魔していた。

毎年のことだけど、バレンタインのチョコレートは、由里と一緒に作ってる。

「にやはは。今年は渡す人が多いから大変だね」

「そうだね。いつもなら家族とリヨウと啓斗の分くらいなんだけど
今年はそうもいかないよね。

遊星さんたちと知り合ってから、いろいろとお世話になってるし。

「まあ、みんなはチョコレートとして、リヨウ君はどうしようか？」

「いつも通りでいいと思うよ」

「はあ。リヨウ君はどうしても甘いものが嫌いなのかなあ。美味しい
の」

「誰でも嫌いなものくらいあるよ」

そう、リヨウは甘いものが苦手で食べない。だからバレンタインは
ちょっと困ったりする。

「私はいつものを作るけど、アリスちゃんは？」

「私も毎年のものを作るよ。ちょっと単純過ぎるかな？」

「そんなことないよ。リヨウ君はあれ好きなんだしね」

「そうだね」

リヨウ　喜んでくれるかな？

「それにしても、リヨウ君は今年もチョコレート、たくさん貰うのかな？」

リヨウは学園で大人気。中等部の頃からバレンタインはたくさん貰ってた。多分、今年も。

「貰うんじゃないかな」

「え、アリスちゃんとリヨウ君の関係はもう知れ渡ってるんだよ？」

「それでも、渡す娘はいると思う。リヨウが断る筈無いし」

「はあ。リヨウ君、こんなところでも優しいからね。嫌いとも言えずに貰って、がんばって食べるんだし」

「それがリヨウだから、仕方ないよ」

私も認めてるしね。無理を言ったら、またリヨウが悩むことになるだけだし。

「由里は啓斗に渡すの?」

「いつも通りだよ」

この二人は鈍いというか天然というか。

「そういえば、アキちゃんはどろしてるんだろ?」

「アキは龍可と一緒に作るって言ってたよ」

「そうなんだ。アキちゃんはその人に渡すのかな?」

「渡すんじゃないかな」

「みんな本命がいて大変だね」

由里にはいないって意味なのかな?それとも、自分で気付いてないだけかな?

「あつ、ノース校の二人は?」

「詳しくは聞かなかったけど、多分作ってるんじゃないかな?」

舞と咲も多分ね。

side out

side アキ

「ふう。こんなところかしら？」

「うん。そうね」

私は龍可と二人で龍亞を追い出し、ペイントハウスを占領した。バレンタインのチョコレートを作り終わり、一段落ついている。

「龍可は誰に渡すの？」

「みんなに渡すわ」

「本命はいたりするのかしら？」

「ええっ！？い、いないわ！まだ」

ふうん。龍可はいないのね。

「アキさんは？」

「わ、私は」

「遊星？」

「ええつと」

「ふふっ、そうなのね」

「え、ええ」

龍可にまで気付かれてるなんて。

「遊星ならきつと大丈夫よ」

そう　だといいわね。

s i d e　o u t

s i d e　舞

「舞〜！こんなんでどう？」

「うん。美味しいわ」

私は咲の家に行つて、一緒にバレンタインの準備をしていた。
学園対抗戦で知り合ったネオドミノ校のリヨウと啓斗君にあげると
言つてる。私たちの友達だし、せっかくのバレンタインだから。少
し恥ずかしいけど。

「リヨウが甘いもの嫌いって知つてて良かったね」

「そうね。聞いておいて良かったわ」

連絡をとつてみると、貰うのは嬉しいけど、甘いものは苦手だから
辞めてほしいって言われたからね。

「啓斗はただ素直にお礼を言つたしね」

「これで喜んでくれるかな？」

「大丈夫だよ。私と舞が協力して作ったんだからね」

「そうね」

バレンタインまで後少し。

side out

ふう。とうとうこの日がきた。

「朝から気が重そうだな」

「マハード」

「甘いものが苦手だと言えば良いだけだろうか？」

「まあ、そうなんだけど」

「それが言えればそれ程苦労はしないか」

確かに、といった感じでマハードは頷く。その通りではあるんだけど。

「マナは今年は渡せると言って喜んでいた」

「あ。思い当たる節はあるけど」

「心配するな。マナがリョウウの苦手なものを作る筈はない」

確かにそうか。なら、素直に楽しみにしてようかな。

「今日の予定はどうなっている？」

「朝のうちに舞と咲との待ち合わせがあるから、啓斗と一緒に会いに行くよ。」

昼からは遊星たちのガレージでみんなですべて話だよ」

「そうなんだね」

「マナ？」

いつの間にか、マハードとマナが入れ代わっていた。

「お師匠様はもう戻ったよ」

流石マハード。よく空気が読めてるね。

「リョウ、今日はバレンタインデーだよね？」

「そうだね」

「これ、受け取ってくれる？」

マナが可愛くラッピングされた箱を向けてくる。

「もちろん。ありがとう、マナ」

オレが箱を受け取ると、マナはパアツと顔を明るくして笑顔になった。

「えへへ、受け取って貰うと何だか嬉しいね」

「マナ、中身は何かな？」

「心配しなくても、リヨウが食べるものだよ」

箱を簡単に開けてみると、

「チーズ？」

「うん。チーズタルトだよ。リヨウはチーズを少し好んで食べてるからね。ちょうどいいかなって」

チーズを毎年くれる娘がいるけど、タルトのチョイスは初めてかな。

「そっか。ありがとね、マナ」

「うん。今から出かけるんだよね？私のチーズタルトは冷蔵庫に入れておいていいから」

マナはオレのことがよく解ってるね。毎年のこととはいえね。

「よし。それじゃ、出かけようか？」

「うん！」

「呼び出されるのは構わねえが、あいつらはよく俺たちにくれる気

「なったな」

「まあまあ。もう友達なんだからさ」

オレは啓斗と合流して、Dホールで舞と咲がいるだろう待ち合わせ場所に向かっていた。

「そうは言うけどよ、お前はまたチョコ貰う気か？」

「いや、舞と咲は俺が甘いもの嫌いだって知ってるから大丈夫だよ」

「じゃあ他の奴らはどうなんだよ？」

「まだ解らない」

「変わんねえな、お前は」

呆れたように呟く啓斗。これがオレの性なんだよ。

話してるうちに、待ち合わせ場所に着いた。時間より早く来たから、二人はまだ来てないね。

「お前と一緒にだと、いつもこうだな」

「何が？」

「待ち合わせで待たせたことが一度もねえんだよ」

「女の子を待たせる訳にはいかないでしょ？」

「アホか。誰でも一緒じゃねえか」

「待たせるよりずっといいよ」

「　　ったく。なんでお前はそうなんだよ」

だから、これがオレの性なんだよ。

「リョウ〜！啓斗〜！」

あつと。来たみたいだね。

「咲。舞。久しぶり」

「うん。久しぶり」

「変わりねえみたいだな」

「まあね。今日も絶好調ナリ〜！」

咲はいつも元気だね。

「今日は来てくれてありがとう」

「ううん。大丈夫だよ」

「じゃあ、これ　　」

舞が少しはにかんで小さな包みを手渡してくる。

「あつ、じゃあ私も。はい、啓斗」

咲は何でもないように啓斗に手渡す。

「ありがとう、舞」

「サンキューな、咲」

オレは舞から、啓斗は咲から受け取った。

「中身はシフォンケーキだよ。私と舞が二人で作ったの」

「リヨウは甘いものダメだっていうから、チョコレートは辞めたんだけど。良かったかな？」

「うん。ありがとう、舞」

「はは。流石のリヨウでも嫌いなものはできれば避けたいか？」

「しょうがないよ。でも、甘いものって美味しいよ？」

「オレにはどうしてもそう感じなくてね」

「まあいいや。味わって食べてね？」

「ああ。ありがたく頂くぜ」

「舞、咲。重ね重ねありがとね」

「うん！」

舞と咲は笑顔で帰っていく。オレと啓斗も遊星たちの待つガレージに向かうべく、Dホイールに乗った。

「しっかし、お前、舞に何かしたのか？」

「なんで？何もしてないと思うけど」

「あいつ、お前に気があるんじゃないのか？」

「まさか。ないよ、そんなこと」

「そうか。（まあ、リヨウとアリスの関係を知ってんだろっから心配はいらねえか）」

「？」

「早く行こうぜ」

啓斗がエンジンを起こして出発したのに、オレは慌ててついて行った。

場所は変わって遊星たちが住むガレージ。

「リヨウ、啓斗、よく来たな」

「遊星。どうやら、オレたちが最後みたいだね」

「ああ。みんな待っている」

オレと啓斗が入って行くと、遊星の言葉通り、みんなが待っていた。

「よお、遅かったじゃねえか」

「悪い」

「舞と咲から貰って来たの？」

「うん。そつだよ」

「二人はどうだった？元気かな？」

「ああ。変わりなさそうだったぜ」

ところで、ジイツと見つめてくるアリスが気になるんだけど。

「ど、どうしたの？」

「何を貰ったのかな、と思ってね」

「シフォンケーキだよ。まだ食べてないんだけどね」

「そつなんだ」

それから、少しだけ笑う。

そんなに心配しなくてもいいのに。

他に目を向けてみると、最初に目についたのがジャックさん。既にチョコを食べてるけど。

「誰からチョコを買ったんですか？」

「カーリー、ステファニー、狭霧だ」

あ、なんか想像つくかも。

でも、ジャックさんは誰が好きなんだろう？

「まったく、なんでこんなニートがモテるんだ？」

「クロウさん、それは関係ないんじゃない？」

「ねえけどよ、なんか釈然としねえんだよな」

まあ、気持ちは解らなくもないですけど。

「そう言わないで、クロウ。はい、これ」

「お、サンキューな、龍可」

話を聞いてたんだろう龍可が、クロウさんにチョコを渡した。

「リヨウにも。どうぞ」

「ありがとね、龍可」

オレも龍可から貰った。中身はなんだろう？

「リヨウは甘いものが嫌いなのよね。だから、普通のショートケーキ。アキさんと一緒に作ったのよ」

「そうなの。是非、受け取って」

アキも近づいて来て、そう言った。

「ありがとう、アキ、龍可。

お礼は何がいいかな？無理なことじゃなければ、大抵のことはするけど」

「そうね」

二人揃って少し考えてる。

「私はシヨツピングに行きたいな。龍亜と行くこともあるけど、龍亜の行きたい所ばっかりだから」

シヨツピングか、それなら、

「いいよ。一緒に行こうか？」

「うん！あ、アリスお姉ちゃんも一緒に」

オレは少し笑いかけて一言。

「アリスなら、誘えば来てくれると思うよ」

そう聞いて龍可はますます笑顔になった。さて、隣のアキは？

「私は　そうね」

どうしたんだろ？心なしか、顔が赤いんだけど。

「あ、私は向こうに行ってるね。リヨウ、ショッピング行こうね？」

「うん。約束ね」

龍可はオレたちから離れていった。さて、肝心のアキは？

「わ、笑わない？」

「笑うような内容なの？」

「ま、まあ、いいわ。実は」

「なるほど」

はつきり言うね。

笑わなかったけど、少し笑いそうになってしまった現実でした。

「ま、それとなく聞いてみるよ」

「え、ええ。お願いするわ」

オレはアキの願いを叶える為に、ある人の下に向かった。

「遊星」

「リヨウか。どうした？」

一人で手にチョコを持って、コーヒ一片手に座っていた。

「誰のチョコ？」

「これか？これは龍可から貰ったものだ。周りにはアリスと由里、それからマナに分だな」

ふうん。アキはまだあげてないのか。

因みに、マナはここに着いて直ぐに実体化して、みんなにチョコをあげてたよ。龍亜はさっさと食べてたけど。

「お前は甘いものが嫌いなんだろう？バレンタインは大変だな」

「アハハ。まあね」

つい乾いた笑みを浮かべてしまう。

「他には貰ってないの？」

「ああ」

「そうなんだ。遊星なら他にも貰ってそうだけどね」

「そうか？」

「うん。遊星はモテそうだけどね」

オレがつて意味じゃないからね？当たり前だけど。

「遊星は恋人いないの？」

「いないが？」

あ、やっぱりいないか。

「じゃあ、恋人は憧れたりする？」

「お前のようにか？」

「まあ、そうなるかな」

「そうだな、あまり考えたことはないが、オレには合わないんじゃないか？」

「そうかな？」

「ああ。少なくとも、オレが街中を恋人と歩いていることは想像できないな」

あ、その考えは解らなくもないけどね。

「そんなの当たり前だと思っけどね。初めからそんなこと想像してる人はあんまりいないよ。実際、オレはそうだったよ」

「そうなのか？今は違和感も全くないように感じるが」

「今はね。最初の頃はお互いどうしていいか解らなかつたし、戸惑

「いがちだったんだよ」

「そうか。だが今のオレには、付き合ってくれる女性などいないだろう」

今、ちょっと新しい遊星を知ったかも。ズバリ、鈍感！彼女の想いはけっこうわかりやすいと思うけどね。

「そうかな？いると思うけどね」

「いないだろう？」

うん。どうやら鈍感で間違いなさそうだね。この先苦勞するだろうなあ。

「ま、そのうち現れるかもしれないよ」

「そうかもしれないな。だがそうなれば、大変だな」

「大変？」

「ああ。リヨウを見ているとそう思う」

痛いところを突いてくるなあ。

「アリスは男から見れば、かなり魅力的だろう。お前も、女性から見ればかなり魅力的な筈だ。」

そんな二人が付き合っているんだ。苦勞もするだろう」

そんなふうに見られてるのか、オレたちは。

「オレたちは、まあ苦労はしてると思うよ。でもお互いに思い合ってるから、そんなのは関係ないよ」

「そうか。オレにはよく解らない」

「そっか。まあいいか。もう少し、考えてみてよ」

「ああ。そうだな」

遊星が手に持っていたチョコを食べ始めたのを見て、オレはその場を離れた。

さて、アリスたちと話してるアキの下に向かい、アキに今しがた遊星と話していた内容を話した。

「そう」

「とりあえず、遊星は恋愛感情には疎いみたいだね」

「アキちゃんも大変だね」

「由里はどうなの？好きな人は」

「いないよ？」

思わず、三人で溜息をつきそうになった。

「じゃ？どっしたの？」

「うっん。何でもないよ、由里」

まあ、由里のことはとりあえず置いてこう。

「まあ、遊星は経験ないみたいだし、仕方ないんじゃないかな。これからはアキのがんばり次第だよ」

「そうよね」

「とりあえず、遊星さんにチョコを渡してきたらどうかな？ちよつど一人みたいだよ」

「そうね。がんばるわ！」

ぐつと気合いを入れて、遊星のいる場所に歩き始めた。がんばれ、アキ。応援してるよ。

「アキちゃんの恋が実ればいいんだけどね。ところで、はい、リヨウ君」

由里にラッピングされた袋を渡された。

「私からのバレンタインだよ。中身は毎年同じものだから」

「ありがとう、由里」

「今年は何を返してくれるのか、楽しみにしてるね」

「ん。解ったよ」

にこやかに笑ってから、離れていった。

さて、残ったオレたちは、

「あの二人はどうなるのかな？」

「どうなるかな？」

天然なんだよね、あの二人。他人に関しては敏感なのに。

「えっと、それじゃあ」

他のことは放っておいて、オレはアリスと向き合った。

「はい、どうぞ。ハッピーバレンタイン、リョウ」

「うん。ありがとう、アリス」

オレはアリスから可愛らしくラッピングされたものを渡された。

「毎年同じものだけど」

「ううん。気にしなくていいよ。オレは好きなんだし」

中身は、

「クッキー」

そう、アリスが毎年くれるものはクッキー。アリスが丁寧に焼いてくれたもの。

「バレンタインは、これが一番楽しみだからね」

「いっぱい貰ってるの？」

「知ってるでしょ？貰ってるけど、アリスのクッキーを食べるまで貰ったものは食べてないんだよ？」

「うん、そっだね」

「食べていいかな？」

「うん。味わって食べてね」

ラッピングされた袋を開け、クッキーを一つ取り出して口に運んだ。サクッと良い音がして、口の中に香ばしい味が広がる。

「うん。やっぱり美味しいよ」

「ホント？」

「ホントだよ」

ちょっと悪戯してみようかな。

「ね、アリス」

「なあに？」

「あれって何かな？」

オレはアリスの後ろを指差した。アリスは釣られて後ろを向く。

「クス。相変わらず素直だね」

オレは後ろからアリスを抱きしめた。

「リ、リヨウ　？」

「ダメかな？」

「えっと、構わないけど　。どうしたの？」

「さっき遊星がね、お前たちは大変だな、って言った。アリスはどう思う？」

「大変？どついう意味なの？」

「オレたちが付き合ってて、苦労してるだろうなって」

アリスはどう思うかな？

「私は　そうだね、苦労　してるのかな」

「　そっか」

「だって　リヨウは優し過ぎるんだもん　」

「あゝ　」

「でも 私はそれでもいい。だって、リョウが好きだからね」

思わず緩めそうになった腕を、アリスに握られてできなかった。

「緩めないで。もう少し、このまま」

「ん」

「遊星さんの言う通り、なのかな。遊星さんは私たちのこともよく見てるから」

仲間想いの遊星だから、些細なことでもきちんとしてくれるから。そのかわり、自分のことが少し疎かになりがちだけど。

「リョウはどう？」

「オレは そうだね、アリスはちょっとだけヤキモチ妬きで、ちょっとだけ心配性、かな」

「む」

少しだけ聞こえたアリスの反抗する声。でも、本格的に抗議してこないからアリスも自覚があるんだろうね。表情は見えないけど、多分むくれてるだろうね。

「オレが悪いこともあるけど、ね」

「だって」

「いいよ、別に」

「
」

「オレも アリスのこと、好きだから 。 多少のことは気にならないし、あんまり気にしたくない」

「 私は、誰かからリヨウを盗られちゃうんじゃないかって、いつも心配になって 」

「大丈夫だから 心配しないで 。 オレはいつだって、アリスの傍にいるから 」

「うん 。 リヨウは嘘つかないもんね 」

背を向けていたアリスが向き直り、向かい合う。
と、同時に身体を預けてきた。

「 せっかくのバレンタインなのに、なんだかしんみりしちゃったね 」

「アハハ 。 ごめんね、余計なこと言ったみたいで 」

「ううん 。 信じてるから 」

ゆっくり、ニッコリと笑いかけてから、また優しく抱きしめた。

オレたちの二つの想い

その思いが、しっかりと重なっていることを確認して
バレンタインを終えた

オマケ

「ったく、何やってんだよ、あいつらは」

「ふん！放っておけ！」

「んだよ、ジャック。みんな見てんのに
「 いちゃつきやがって

「リヨウとアリスお姉ちゃん、熱いね」

「茶化さないの。でも、いいなあ」

「へえ、龍可は羨ましいなんて思うのか？」

「うっ。そりゃ、少しは」

「へっ？龍可がそんなこと思うの？」

「龍亜に乙女心は解らないわよ」

「あいつら 少しは人目を気にしろよ」

「にやはは。恥ずかしがってたとは思えないよね」

「全くだ。つたく」

「あっ、そだ。はい、啓斗君。私からのバレンタインだよ」

「ん？お、ありがとよ。今年もあれか？」

「そつだよ。一番自信があるんだもん」

「確かに美味いからな。由里のチーズケーキ」

「にやはは。ありがと。なんだか照れるけど」

「さてと、オレは何を返すかね」

「楽しみにしてるからね？」

「ま、今年の味次第だな」

「む。なにそれ」

「ハハ。心配いらねえだろ。喫茶店の娘が失敗したものをくれる訳

もねえからな」

「それって信頼？それともプレッシャー？」

「（女ってネガティブな奴多いのか？）
さあな。好きに選んでいいぜ」

「いじわる〜！」

「ハハ。ま、ありがたく頂くぜ。サンキューな」

「ばか」

因みに、リヨウとアリスがああの雰囲気で、啓斗と由里が仲良く(?)
話している中、遊星とアキは、

「あつ、あの！遊星！」

「どうかしたのか？」

「えっと、その」

「顔が赤いが？」

「うええっ!?!?!」

見兼ねたクロウが声をかけるまで、ずっとこの調子でした。

バレンタイン特別編：想い方（後書き）

何故シリアスっぽくなったのか　いえ、間違いなく遊星との会話がきっかけですけどね。

妙にラブラブでもありましたけどね。

それでは、グッチーでした。

特別編：夏の思い出 中編

サマーデュエル大会は無事予選が終了した。

オレとアリスは危なげなく勝ち進み、見事に明日の決勝まで進んだ。今は二人でホテルに戻ろうとしたところを、副社長から止められた。

「お二方、決勝進出おめでとございますー！」

「ありがとう」

「どうしたの？」

「お二方にささやかながら、お礼がしたいんです」

とのこと。社長もそんなこと言ってたね。何してくれるんだろ？

「お二方が招待でチェックインしたホテル施設を格上げしようと思
います」

格上げ？

疑問に思いながらも、二人でついていくことに。
着いた先には、

「ここはどこ？」

「ホントだね」

海馬ランド全域を見渡せる程の絶景、さらには露天風呂まであるらしい。

「ここ、海馬ランド自慢の宿泊施設です」

もはや娯楽施設にある宿泊施設じゃないね。

「でもいいの？ 私たちにこんなことして」

「いいんです。お二方に海馬ランドの命運が掛かっていますから、これくらいは当然です！」

なんか、かなり重たいんだけど。

「今日は明日に備えてここでゆっくりして下さい」

まあ、お言葉に甘えるということにした。

元のホテルから荷物を持って来てもらい、適当に寛ぐことにして部屋に入った。のはいいんだけど、

「何なの？この大きさ」

「あはは」

二人で湯いた笑みを浮かべる。

元のホテルの倍以上ある部屋、豪華に並ぶ食事の数々。何なの、これ？

「こんなにしてもらっていいのかな？」

「オレもそう思うよ」

かと言って、もうどうしようもない。ということでは、開き直すことに。

二人で食事を頂き、その後は適当に寛ぐ。

何もすることがないと判断して、お風呂へ。幸い、部屋にはお風呂が男女別々の脱衣所があるから浴室が二つあるんだろっしね。それくらいあっても不思議じゃないし。

そう思つて脱衣所へ。服を脱ぎ、浴室に、と思つたら露天風呂になつていた。

特に何も考えずに露天風呂に浸かる。

が、それが間違いだつた。

カラカラカラ

扉が開く音がした。

誰か来る人が　　つて!?

『ええええええええええ!?!』

二人の絶叫が木霊した。それはもう、海馬ランド全域に響き渡る程に。もう一人は、

「ア、アリス。何でここに？」

「わ、私の台詞だよ。ど、どうしてリョウウがここに？」

そしてオレは今初めて気付いた。空回りする頭をできるだけ冷静にして、フル回転させる。

露天風呂への入口が二つある。つまり、脱衣所が二つあるだけで、浴室は一つ。露天風呂は室じゃないけど。

余計なことまで考えてるけど、そうでもしないと落ち着けない。

アリスは現在進行形で固まったまま。バスタオル一枚しか身に纏ってない姿で。

どうしよう？

と、固まっているのはオレも同じ。先に動いたのはアリスの方だった。

「は、入っても、いいかな／＼？」

顔は真っ赤。オレの身体にも熱が宿ってる。間違いなく風呂の所為じゃない。

「ど、どうぞ／＼」

断れなかった。

アリスが足を入れる。オレは極力アリスを見ないようにしている。完全に目に毒だった。アリスの言い表しようのない抜群のスタイル

に、豊かな胸。無理です。 。
というより、がんばれ！オレの理性！

「えっと、リヨウもお風呂に入ってたんだね」

「う、うん。別にすることもなかったから」

『』

会話が続かない。無理もないけど。

「オ、オレ、先上がるね？アリスはゆっくりしてて」

立ち上がるうとした。が、立てなかった。アリスがオレの腕を掴んでいたから。 。

「ア、アリス？」

「もう少し、一緒にいようよ」

「え、えっと」

「それとも、リヨウは嫌かな？」

アリスの顔がしゅんとなる。こうなったらオレに為す術はない。オレは諦めて湯に浸かり直した。アリスの表情が少し明るくなる。

「ありがとう、リヨウ」

恥ずかしさの中に、嬉しさが混ざった笑みだった。

オレが息を吐き出すのと同時に、アリスが身体を寄せてきた。

「こんなふうにはリョウとお風呂に入るなんて思わなかったなあ」
「
全くもってその通りです。」

「綺麗だね」

アリスは夜景を見てる。海馬ランド全域が明かりを点している。

「そうだね」

会話が続かないなあ。何か話題をふらないと。

「アリスはデュエル大会の優勝商品に、欲しい物でもあったの？」

「うん。ちょっとね」

「何なの？」

「秘密だよ。明日のお楽しみ」

教えてくれそうにないね。明日まで待つしかないか。

「じゃあ、明日は優勝しなくちゃね」

「うん。がんばろうね」

オレに身体を寄せたままアリスは気持ち良さそうにしている。
アリスが満足するまで、ずっと湯に浸かっていた。

オレたちは露天風呂から上がり、髪の毛の手入れをしながら時間を潰す。そして、

「何でダブルベッドしかないんだろう」

眠りにつこうかと思って準備しようと思った矢先だった。用意されているものがダブルベッドしかない。
そりゃ、恋人同士が使う部屋なんだろうけどさ。

「一緒に寝よ／＼？」

アリスは開き直ってるのか、本音なのかよく解らない。

オレの選択肢は、

- 1・喜んで。
- 2・断る。
- 3・イタダキマス。

待て。待て！だから待て！

一つおかしい！明らかにおかしい！何なんだよ！イタダキマスって！

「それとも、嫌かな？」

はあ。もういいや。

オレはアリスが待つベッドの中に入った。

ぎゅっ！

「あつ」

アリスが声を上げる程、強く抱きしめた。

「い、痛いよ。リョウ」

「ア〜リ〜ス〜」

「な、何？」

「そう言えばオレが言うこと聞くと思ってるでしょ？」

「そ、そんなことないよ？」

顔が戸惑ってる。凶星だね。

「嘘は良くないよ、アリス？」

「むう。どうして解るの？」

顔に出るから、とは言えないか、アリスの数少ない欠点みたいなものだし。

「でも、いつでも言わないと私の言うこと聞いてくれないもん」

「そうだっけ？」

「そうだよ」

「アリスの言うことは聞いてると思っつよっ？」

「無理しないでっていうことは？」

「あゝ、それはほら、無理しなくちゃいけない時がさ
頬を膨らませてオレを少しだけ睨むアリス。」

「仕方ないというかさ」

「そうでなくても、他の女の子に甘いもん」

「いや、それはほら、ね？」

「ね、じゃないよ！」

今日はやけに突っ掛かってくるなあ。

「ごめんね。気をつけるから、ね？」

「じゃあこのままでいいよね？」

「はい」

嵌められた。正確には負けたのかな？
しかも少し抱きしめたままだし。

「いつか毎日こつすることになるのかな？」

「ぶはっ！」

吹き出しました。もう見事に。

「何言いだしてるの!?!」

「将来の話だよ／＼」

そこまで考えるかな　？

「いつか　ね／＼」

「うん／＼」

こうして戸惑いながら、オレは眠りについた。

翌日。旅行3日目。

目を覚ますと、間近にアリスの顔があった。目はバツチリ開いてるけど。

「　おはよう、アリス」

「うん。おはよう、リョウ」

「ご機嫌みたいだから、いいか。

「じゃあ、用意でもしようか」

「そっだね」

にっこり笑ってアリスはそう言った。

オレたちは準備を終え、ホテルを出た。

今日はデュエル大会決勝。子供の部優勝者とのスペシャルデュエルと大人の部決勝、か。スペシャルデュエルは楽しめるかもしれないけど、大人の部決勝は負けられないからなあ。

まあ、いいか。とりあえず、まずはスペシャルデュエルからだ。

デュエルドームで子供の部決勝が始まる。終わるのを待っていると見覚えのある二人が決勝のデュエルをしてるように見える。

「レナ　だよね？」

「多分　。しかも相手はオレがカードをあげた子だね」

面白い対決になってるなあ。

やがて、決着がつき、負けた方がこっちに来た。

「あゝ、トレインに負けるなんて」

「レナ〜！」

「あっ！アリスお姉ちゃん！リョウウお兄ちゃん！」

「惜しかったね」

「まあね〜。どうしてここにいるの？」

「今から解るよ」

まさか、あの子とデュエルすることになるとはね。それにしても、会話から考えて、レナの双子の兄はあの子だったんだ。

『見事、子供の部に優勝したトレイン君には、あるデュエリストとスペシャルデュエルする権利がある！さあ、どうする！？』

「やります！」

『では、トレイン君とデュエルするデュエリストに登場して頂こう』

オレは立ち上がった。

「にゃ！？リヨウウお兄ちゃん！？」

オレはレナを見て少し笑ってから、デュエルフィールドに足を運んだ。

『フォーチュン・カップ優勝者、リヨウだー！』

驚いてるね。

「トレイン、でよかったかな。まさか君とデュエルすることになるとはね」

「ぼ、僕もです！リヨウさんとデュエルできるなんて感激です！」

「そう言ってもらえると嬉しいよ」

さて、どんなデュエルになるかな。

「楽しいデュエルをしよう」

「はい！」

『デュエル！』

「先攻、後攻、好きな方でいいよ」

「では僕のターンから。ドロー！」

さて、トレインのデッキは知ってる。どう展開してくるかな？

「僕は“マジカル・コンダクター”を召喚！」

ATK/1700

「このカードは魔法カードが発動する度に、このカードに魔力カウンターを2つ置きます。」

フィールド魔法“魔法都市エンディミオン”発動！」

彼にとっての必須カードが2枚きたね。

「永続魔法“フィールドバリア”発動！このカードがある限り、フィールド魔法を発動できず、破壊することはできません。」

そして“マジカル・コンダクター”の効果が発動します。このカードに乗っている魔力カウンターを手札、又は墓地の魔法使い族モン

スターのレベル分取り除くことで、そのモンスターを特殊召喚できません。

“マジカル・コンダクター”に乗っている魔力カウンターを4つ取り除き、手札から“マジシャンズ・ヴァルキリア”を特殊召喚します”

ATK / 1600

「僕はこれでターン終了です」

“マジカル・コンダクター”を護る為に“マジシャンズ・ヴァルキリア”を召喚したってところかな。

「オレのターン。手札から“魔導戦士 ブレイカー”を召喚」

ATK / 1600

「このカードが召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを1つ置く。このカードの攻撃力はこのカードに乗っている魔力カウンター1つにつき300ポイントアップ」

ATK / 1900

「バトル!“マジシャンズ・ヴァルキリア”を攻撃！」

「うっ！」

トレイン LP 3700

「オレはカードを1枚伏せて、ターンエンド」

「僕のターン。魔法カード“壺の中の呪文書”を発動します。お互いのプレイヤーはカードを3枚ドロップします」

これでオレの手札は7枚、トレインの手札は5枚か。

「さらに魔法カード“魔力掌握”発動！魔力カウンターを1つ置くことができます。“魔法都市エンディミオン”に魔力カウンターを置きます。そしてデッキから“魔力掌握”を1枚手札に加えます」

魔法カードの発動で魔力カウンターが場に溜まっていく。これがトレインの展開か。

「マジカル・コンダクター”の効果発動！このカードの魔力カウンターを4つ取り除き、墓地から“マジシャンズ・ヴァルキリア”を特殊召喚！」

DEF / 1800

「手札から“マジシャンズ・ヴァルキリア”を通常召喚！」

DEF / 1800

なるほど。場に“マジシャンズ・ヴァルキリア”が2体。ロックの完成か。

「ターン終了です」

「オレのターン」

さて、先ずはあのロックをどうにかしないとね。幸い手札は十分だし。

「オレは“ホーリー・エルフ”を召喚」

ATK/800

「さらに、速攻魔法カード“デメンション・マジック”！場の“ホーリー・エルフ”をリリースして、“カオス・マジシャン”を特殊召喚！」

ATK/2400

「“デメンション・マジック”の効果！場のモンスター1体を破壊する！“マジシャンズ・ヴァルキリア”を破壊！」

「うっ！」

さて、これでロックが崩れたね。

「バトル！“魔導戦士 ブレイカー”で“マジシャンズ・ヴァルキリア”を、“カオス・マジシャン”で“マジカル・コンダクター”を攻撃！」

「うあっ！」

トレイン LP 3000

「ターンエンド」

とりあえずはオレが優勢かな。

「やっぱりリョウさんは凄いですね」

「ありがとう。トレインの力、もっと見せてみてよ」

「はい！いきます！僕のターン！」

今のところ、“魔法都市エンディミオン”に乗っている魔力カウンターは5つ。このターンで仕掛けてくるかな。

「僕は魔法カード“魔力掌握”を発動して、“魔法都市エンディミオン”に魔力カウンターを1つ乗せ、デッキから“魔力掌握”を手札に加えます」

これでカウンターは7か。

「いきます！“魔法都市エンディミオン”に乗っている魔力カウンターを6つ取り除き、“神聖魔導王 エンディミオン”を特殊召喚！」

ATK/2700

「このカードがこの方法で特殊召喚に成功した時、墓地の魔法カード1枚を手札に加えます。

“壺の中の呪文書”を手札に加えます。

“神聖魔導王 エンディミオン”の効果発動！手札の魔法カード1枚を墓地に送ることで、場のカード1枚を破壊します！

“魔力掌握”を墓地に送り、“魔導戦士 ブレイカー”を破壊！」

「っ！」

「魔力カウンターが乗っているモンスターが破壊されたことで、その魔力カウンターが“魔法都市エンディミオン”に乗ります。さらに“魔導獣 ケルベロス”を召喚！」

ATK / 1400

「バトル！ “神聖魔導王 エンディミオン”で“カオス・マジシャン”を攻撃！」

「くっ！」

リヨウ LP 3700

「“魔導獣 ケルベロス”でダイレクトアタック！」

「うあっ！」

リヨウ LP 2300

「よし！ターン終了です！」

やるね。一気に形勢逆転か。

「オレのターン」

さて、反撃といこうか！

「相手場のみモンスターが存在することにより、“特攻のマジシ

ヤン”を特殊召喚！」

ATK/1000

「このカードが特殊召喚されたことにより、場の魔法・罫カード1枚を破壊する！ “フィールドバリア”を破壊！」

「うっ！」

かと言って、“魔法都市エンディミオン”を破壊することはできないけどね。

よし、登場してもらおうか。

「特攻のマジシャン”をリリース、“ブラックマジシヤンガール”をアドバンス召喚！」

ATK/2000

オレの場にマナが姿を現した。

「わあ！本物の“ブラックマジシヤンガール”が見られるなんて感激です！やっぱり可愛いですね」

『わあ！あの子、可愛いなんて。嬉しいな』

「よかったね、マナ」

嬉しそうにクルクルと回って、トレインに投げキッス。トレインは若干顔が赤くなってるんだけど。ま、いっか。

「さあ、バトル！ “ブラックマジシャンガール” で “魔導獣 ケルベロス” を攻撃！ ブラック・バーニング！」

「うあっ！」

トレイン LP 2400

「やっぱり凄いですね〜」

ちょっと誉め過ぎな気がするよ。マナは嬉しそうだけど。

「カードを1枚伏せる。ターンエンド」

「僕のターン」

さて、トレインの場には “神聖魔導王 エンディミオン” がいる。このターンは耐え時だね。

「僕は魔法カード “壺の中の呪文書” 発動。お互いのプレイヤーはカードを3枚ドローします」

お互いにカードを引く。次のターンが勝負だね。

「来ましたよ。このカードが」

何のカードかな？

「僕は手札から “神聖魔導王姫 エンディミーネ” を召喚！」

ATK/2000

場に現れたのは“エンディミオン”の仮面を取り、綺麗な顔立ちをした女性。マナとは違い、ロングスカートを穿き、マントを羽織った黒の魔術服。

「なるほどね。使ってくれてるんだ」

「はい。僕にはピッタリのカードですし、リョウさんがくれたカードですから」

そう。“神聖魔導王姫 エンディミーネ”はオレがトレインにあげたカード。あの娘がトレインの下に行きたがってたみたいなんだけどね。

「このカードと一緒に、リョウさんに勝ちます！」

「受けて立つよ。来い！」

“エンディミーネ”は場に“魔法都市エンディミオン”がある時、リリース無しで召喚できる。そして効果はもう一つある。

「“エンディミーネ”の効果、場の魔力カウンター1つにつき、攻撃力が100ポイントアップします！」

ATK/2300

「さらに!“エンディミオン”の効果発動!手札の魔法カード“サイクロン”を墓地に送り、“ブラックマジシヤンガール”を破壊!」

「させないよ。畏カード“マジシヤンズ・バリア”!このターン、

オレの魔法使い族モンスター1体は破壊されない!」

これでマナの破壊は免れる。問題はこれからの攻撃か。

「バトルです!“エンディミオン”で“ブラックマジシャンガール”を攻撃!」

マナが破壊されることはないけど、戦闘ダメージは発生する。

「くっ」

リヨウ LP 1600

「さらに、“エンディミィネ”で攻撃!」

「うっ」

リヨウ LP 1300

それでも、オレのライフは残る。次のターンで勝負を賭ける!

「僕はカードを1枚伏せて、ターン終了です」

「オレのターン!」

よし、勝負!

「手札から装備魔法“魔術の呪文書”を発動!“ブラックマジシャンガール”の攻撃力を700ポイントアップ!」

ATK / 2700

「魔法カードの発動で、“魔法都市エンディミオン”に魔力カウンターが乗ります。“エンディミーネ”の攻撃力がアップします」

ATK / 2400

魔法カードを発動する度に“エンディミーネ”の攻撃力は上がる。構ってられないけどね。

「畏発動！“強化蘇生”！墓地のレベル4以下のモンスター1体のレベルを1つ上げて、効果を無効にして特殊召喚する！

墓地から“魔導戦士 ブレイカー”を特殊召喚！」

ATK / 1600

これで準備は整った！

「そして魔法カード“融合”！手札の“魔導騎士 デイフェンダー”、場の“魔導戦士 ブレイカー”、“ブラックマジシャンガール”を融合！

現れる！“超魔導剣士 ブラック・パラディン・ガール”！」

ATK / 2500

剣を持った魔導剣士がオレの場に現れた。

「す、凄い」

「終わりにしようか、トレイン。」

“ブラック・パラディン・ガール”の攻撃力はオレの墓地に存在する魔法使い族モンスター1体につき、300ポイントアップする！”
オレの墓地に眠る魔法使いは計6体。

ATK / 4300

「こ 攻撃力、4300」

「ただだよ。場で破壊された“魔術の呪文書”の効果で、オレは1000ポイントのライフを回復する」

リヨウ LP 2300

「これで終わりにするよ。」

魔法カード“拡散する波動”！1000のライフを払うことで、オレの場の“ブラック・パラディン・ガール”はこのターン、相手場の全てのモンスターに攻撃できる！」

リヨウ LP 1300

「うっ。でも、魔法カードが2枚発動されたことで、“魔導王姫 エンディミーン”の攻撃力がアップします」

ATK / 2600

なるほどね。驚いてはいる。でも、勝負を諦めた目じゃない。まだ何か策があるみたいだね？
それはやってみれば解ることか。勝負！

「バトル！ “ブラック・パラディン・ガール”で“魔導王 エンデイミオン”を攻撃！」

「来ましたね。罠発動！ “聖なるバリア ミラーフォース”！相手の攻撃表示モンスターを全て破壊する！」

なるほど。一発逆転のカードだったんだね。でも、

「残念ながら、そうはいかないよ。“ブラック・パラディン・ガール”の効果発動！手札を1枚墓地に送ることで、罠の発動を無効にする！」

手札の“魔術の守護者”を墓地に送る！」

これで“ミラーフォース”は無効。さらに墓地に魔法使い族モンスターが増えたことで、攻撃力も上がる。

ATK/4600

「うっ、そんな」

「バトル続行！ “ブラック・パラディン・ガール”の攻撃！」

「うああっ！」

トレイン LP 1500

よし。次の攻撃で終わりだね。

『流石ですわ。リヨウ様』

今の声は、やっぱり、

「精霊だったんだね、“エンディミーネ”」

『はい。申し訳ありませんでした。リヨウ様の傍を離れることになりました』

「いや、いいよ。“エンディミーネ”はトレインの下に行きたかったんだよね？」

オレは“エンディミーネ”の力をあんまり引き出してあげられないしね」

オレは魔力カウンターを主軸にして闘う訳じゃない。

「だから、これからトレインのこと、よろしくね」

『はいですわ。お任せ下さいませ』

最後になっこりと笑いかけた。“エンディミーネ”も笑いかけてくれる。

「これで終わりだよ。“ブラック・パラディン・ガール”で“魔導王姫 エンディミーネ”を攻撃！」

「うわあああっー！」

トレイン L P O

「負けちゃいましたか」

「良いデュエルだったよ。またやろうね、トレイン」

「はい！是非、お願いします！」

「それから、“エンディミーネ”のこと、大事にしてあげてね」

「はい！」

トレインには精霊を感じる力はないだろうけど、“エンディミーネ”のことは大事にして欲しいからね。

「トレイン！リョウお兄ちゃん！」

「レナ」

アリスとレナが近づいて来た。

「お疲れ様、リョウ」

「うん」

「でも、ビックリしたよ。まさか、フォーチュン・カップ優勝者のリョウってというのが、リョウお兄ちゃんだったなんてさ」

「知らなかったレナが悪いよ。リョウさんは有名なのに」

有名になるつもりは全くなかったんだけどね。

「うるさいな。いいでしょ、こつやって知り合えたんだから」

「まあまあ。二人とも、その辺でね？」

「あ、すみません」

「ごめんなさい、アリスお姉ちゃん」

うんうん。二人とも、素直で良い子だね。

『さあ、次は大人の部決勝だ！』

次はオレとアリスの番だね。

「さ、私とリヨウはこれから決勝だから、トレインとレナは席に座って見ててね」

「うん！がんばってね！」

さてと、このデュエルは負けられないし、言われた通り、がんばってこつか！

特別編：夏の思い出 後編

トレインとのデュエルを終え、次は大人の部決勝。
オレとアリスは既にステージに立っている。

決勝の相手の二人も来たみたいだね。

「あら、こんにちは」

「まさか、フォーチュン・カップで優勝したりヨウさんのタッグとデュエルできるなんて、光栄ですねえ」

「こちらこそ。よろしくお願いします」

この二人が海馬ランドを買収しようとしてるんだろうか？

「唐突ですがねえ、このデュエルは負けて頂けませんかねえ？」

なるほど。どうやら間違いなさそうだね。

「心配しなくても平気よ。優勝商品は譲ってあげるから」

この二人にも何か事情があるのかもしれない。だけど、既に社長と約束した上に、悲しむ人がいるかもしれないからね。

「お断りします。どんなデュエルでも手を抜くつもりはありません」

「やれやれ。解ってはいましたがねえ」

オレは静かにアリスの手を引き、その場から離れた。

「リヨウ？」

「ああ、気にしないで」

ただ、あんまり話していると、いろいろ考えそうだったからね。

『さあ、大人の部、いよいよ決勝スタートだ！』

『デュエル！』

このデュエルはタッグデュエル。相手の女性 アリス 男性 オレの順にターンが回る。通常のタッグフォーサークルで、ライフは共通で8000。

「私のターン、ドロ〜」

さて、どんな手でくるかな？

「うふふ〜、手札から魔法カード“終焉のカウントダウン”を發動
」

は？

「これって」

「うん。やばいかもね」

「ライフを2000払って〜、發動〜。20ターン後、私たちの勝

ちになるよ〜」

女性&男性 LP 6000

先攻1ターン目に発動されれば防ぎようがないし。

「うふふ〜、 “アステカの石像” を守備表示で召喚〜」

DEF / 2000

「カードを3枚伏せて、ターン終了〜。カウント1〜」

個人的には5ターンしか自分のターンが回ってこない。それまでに決めないといけないのか。

「私のターン」

この限られたターンで勝つ為に、アリスはどう展開する？

「私は “黒竜の雛” を召喚！」

ATK / 800

「 “黒竜の雛” を墓地に送ることで、 “真紅眼の黒竜” を特殊召喚
！」

ATK / 2400

いきなりシンの召喚。うん、良い展開だね。

「バトル！」

「残念、永続罾“グラヴィティ・バインド 超重力の網”を發動し。このカードがある限り、レベル4以上のモンスターは攻撃できないう」

「うっ」

やっぱりロックか。

「私はカードを1枚伏せて、ターンエンド」

「私のターンですねえ」

この人も多分、ロック中心に展開してくる筈。

「“薄幸の美少女”を守備表示で召喚ですねえ」

DEF / 100

「カードを2枚伏せて、ターン終了ですねえ」

「オレのターン」

どうするかな。

相手場には守備力の高い“アステカの石像”と、戦闘で破壊された時、バトルフェイズを強制終了させる“薄幸の美少女”、そして、バインドに伏せカードが4枚。

アリスの伏せカードは、“竜の逆鱗”。ドラゴン族モンスターが貫

通能力を持つ永續罾。

オレのデッキにはドラゴン族モンスターは入ってないから、オレが有効に使うことはできない。

ちらつとアリスを見てみると、少しだけ笑いかけてくる。

何か考えがあるみたいだね。もう少し考えてみようか。

手札は よし。

「魔法カード“大嵐”！場の魔法・罾カードを全て破壊する！」

「カウンター罾“魔宮の賄賂”発動ですねえ。相手の魔法・罾の発動を無効にします」

やっぱり、そうきたね。

「そして貴方はカードを1枚ドロシーします」

さて、あの伏せカードにはあと何枚カウンターがあるかな。

「魔法カード“古のルール”を発動！手札から通常モンスター1体を特殊召喚する！

現れる！“ブラックマジシャン”！」

ATK/2500

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

「私のターンね。カードを1枚伏せて、エンド」

やっぱり何もしないね。まあ、このまま終わらせるつもりはないんだけどね。

「エンドフェイズに、罠カード“超・魔・導・破”発動！場に“ブ
ラックマジシャン”が存在する時、相手場の魔法・罠カードを全て
破壊する！」

「え〜」

全て破壊した。カウンターはなかったみたいだね。もしくは新たに
伏せたカードがカウンターだったか、かな。伏せたカードはそのタ
ーンに発動できないしね。

「私のターンだね」

アリスはオレに軽く笑いかけてから自分のターンを始めた。

「手札から魔法カード“黒炎弾”発動！“真紅眼の黒竜”の攻撃力
分のダメージを与える！」

女性&男性 LP 3600

攻撃できる筈だけど攻撃しなかった。まだ何かあるのかもね。

「さらに“真紅眼の黒竜”をリリースして、“真紅眼の闇竜”を特
殊召喚！」

ATK / 2400

なるほど。この姿のシンを見るのは久しぶりだね。

「真紅眼の闇竜”の攻撃力は墓地のドラゴン1体につき、300ポイントアップするよ」

ATK/3000

「そして永続罫“竜の逆鱗”を発動！私のドラゴンは全て貫通能力を得るよ！

バトル！“ブラックマジシャン”で“アステカの石像”を攻撃！」

これで残るは“薄幸の美少女”だけ。

「真紅眼の闇竜”で“薄幸の美少女”を攻撃！」

女性&男性 LP 600

よし。これでほとんどのライフを削った。

「私はカードを1枚伏せて、ターンエンド」

「私のターンですねえ。」

魔法カード“治療の神 デイアン・ケト”を発動して、ライフを1000ポイント回復ですねえ」

女性&男性 LP 1600

「アクア・マドール”を守備表示で召喚ですねえ」

DEF/2000

「さらに“光の護封剣”を発動ですねえ。これで貴方たちは3ターン攻撃できませんねえ」

カウントダウンの中で攻撃できないのはキツイね。

「カードを1枚伏せ、ターン終了ですねえ」

「エンドフェイズに、畏カード発動!“真紅眼の息吹”!場に“レツドアイズ”と名のつくモンスターが存在する時、魔法・畏カード1枚を破壊する!“光の護封剣”を破壊!”」

女性&男性 LP 1100

「オレのターン」

あの伏せカードが気になるけど、

「バトル!」

「畏カード“威嚇する咆哮”を発動ですねえ。このターンは攻撃できませんねえ」

ダメか。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン」。 “ネクロ・ガードナー”を守備表示で召喚」

DEF / 1300

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン。バトル!“真紅眼の闇竜”で“アクア・マドール”を攻撃！」

「罨カード“ドレイン・シールド”発動。攻撃を無効にして、その攻撃力分のライフを回復」

女性&男性 LP 4100

あらら。参ったね。アリスも苦い顔してる。

「“ブラックマジシャン”で“アクア・マドール”を攻撃！」

マハードが“アクア・マドール”を破壊した。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「これで10ターンね」

なるほど。後10ターン以内に終わらせないとオレたちの負けか。

「私のターンですねえ。カードを1枚伏せて、ターンエンドですね」

「オレのターン」

さて、相手場には“ネクロ・ガードナー”と伏せカードが1枚。アリスの伏せたカードは、なるほどね。

このターンで決めようか。

「畏発動！ “トラップ・スタン”！このターン、畏の効果が無効にする！」

これでこのターン、畏は役に立たない。勝負！

「 “龍の破壊者” を召喚！」

ATK / 0

「効果発動！ “龍の破壊者” をリリースして、“バスター・ブレイダー” を特殊召喚！」

ATK / 2600

「バトル！ “バスター・ブレイダー” で “ネクロ・ガードナー” を攻撃！破壊剣一閃！」

“バスター・ブレイダー” が “ネクロ・ガードナー” を切り裂いた。

「 “真紅眼の闇竜” でダイレクトアタック！」

「墓地の “ネクロ・ガードナー” の効果発動ですねえ。攻撃を無効にしますねえ」

「 “ブラックマジシャン” でダイレクトアタック！ブラック・マジック！」

女性 & 男性 LP 1600

ここまででは予定通り、そして、このカードでデュエルは終幕を迎える。

「速効魔法発動！ “上級魔術士の呪文詠唱”！手札の魔法カードを速効魔法として発動できる！

手札から“融合”発動！場の“ブラックマジシャン”と“バスター・ブレイダー”を融合し、“超魔導剣士 ブラック・パラディン”を召喚！」

ATK/2900

「なっ!?!」

「“ブラック・パラディン”の攻撃力は、お互いの墓地と場に存在するドラゴン1体につき、500ポイントアップする！」

ATK/4400

「終幕だ！ “ブラック・パラディン”でダイレクトアタック！超魔導破！」

女性&男性 LP 0

よし、終わった。

さて、それから少し時間が経った。三日目の夜は花火大会。優勝商品？もちろん貰ったよ。何かっていうとね、

「はい。終わりましたよ」

「ありがとうございます」

「可愛い彼女も終わったんじゃないかしら」

オレは少しだけ待っていた。すると、

カランコロン

風流を掻き立てる音が聞こえてきた。

「お待たせ。リョウ」

「うん。似合ってるね、浴衣」

「そ、そうかな？」

似合ってるよ、ホントに。

アリスが欲しがってた優勝商品は浴衣。恋人同士のお揃い浴衣。

副社長の計らいで、夏祭り最後のイベントである花火大会に備えて着付けて貰った。オレのは白を基調として、百合の花が描かれている。アリスのは黒を基調として、やっぱり百合の花が。さらにアリスは珍しく髪を纏めあげておだんごにしている。

実を言うと、アリスが髪を下ろしていないのは本当に珍しい。子供の頃は結んでツインテールにしてただけど、高等部に入ってから下ろしてた。つまり、今のこの状況は本当に珍しい。

「行こう、リョウ」

「そっだね」

「あ、そっだ」

「どうしたの？」

「リョウの浴衣姿、似合ってるよ。とっってもカッコイイ」

「あ、ありがとう」

そう言ってくれるのは嬉しいけど、恥ずかしいな。

「やっぱりリョウは白が似合うね」

「アリスは黒が似合ってるよ」

服だけはいつも対象的なオレたちだからね。

オレたちは並んで海馬ランドを歩く。夏祭り最後の盛り上がりを見せる海馬ランドは見ていて飽きない。

「あゝ！アリスお姉ちゃんとリョウお兄ちゃん、浴衣だゝ！」

歩いていると、レナとトレインに出くわした。

「ホントに美男美女カップルだよね」

「レ、レナ／＼」

アリスは恥ずかしそうにしている。いや、オレもだけど。

「でも、本当に似合ってますね」

トレインにも言われた後、オレたちは一緒に行動することになった。何でも、花火大会が始まるまで両親は時間に余裕がないらしい。かといって、もう夕暮れ時だから子供二人は危ないからね。

side アリス

私たちは海馬ランドの夏祭り専用に出て来た出店を見て回っている。みんな的当てしたり、金魚すくいをしたりして過ごす。

レナとトレインも楽しそうにしてくれている。

あれ？レナの動きが止まったけど。。
レナはある一点を凝視してる。ふふ、なるほどね。

「林檎飴、食べたいの？」

「へ？ え〜っと」

「遠慮しないでいいよ。欲しいんだよね？」

「うん」

微笑みかけて、林檎飴を二つ買う。一つをレナにあげて、もう一つを自分で嘗める。

「アリスお姉ちゃん、ありがとう！」

美味しそうに林檎飴を嘗めている。

「甘くて美味しいね」

「うんっ！」

レナに笑顔が零れる。うん、良かった。

「トレインも何か食べる？」

隣で見ていたリョウがトレインに話しかけてる。なんだかんだでリョウも子供には優しい。いや、リョウが優しいのはいつものことかな。

「いえ、僕は別に」

「トレインも遠慮しなくていいよ。何が欲しい？」

「えっと、良いんですか？」

「良いよ」

「じゃあ、あれを」

何かを指指して、リョウが少し笑って頷き、その方に歩いて行った。

「アリスお姉ちゃん。ありがとね」

リョウとトレインが別の出店に足を運んだのを見て、急に改まったようにレナが言ってきた。

「どうしたの？」

「こんなに楽しかったの、久しぶりなんだ」

「そう」

やっぱり、いろいろあるんだよね。

「お姉ちゃんたち、この辺りに住んでる人じゃないよね？」

「うん」

「また、会えるかな？」

私は静かにしゃがんで、レナの目線に合わせた。

「会えるよ、きっと」

頭を撫でてあげる。

「また、一緒に遊ぼうね？」

「うん！約束だよ！」

涙ぐんで、でもはっきりと言った。

「うん。約束」

その時、ほんの少しだけカードホルダーに違和感を感じた。

レナを護ってくれるんだね。

私はカードを取り出し、レナに渡した。

「はい。レナ」

「これって」

「そのカードが、きっとレナの力になってくれるよ。私たちの絆のカード、かな」

すると、レナはカードを大事そうに抱きしめた。

「ありがとう、アリスお姉ちゃん。大事にするね」

「うん。そうしてくれると嬉しいな」

また会おうね、レナ。

side out

太陽は完全に沈み、辺りは暗くなっている。

オレとアリスはトレインとレナと別れ、ホテルのある高台に来了た。理由はもちろん、二人で花火を見る為だね。

「リヨウに言っておかなくちゃいけないことがあるんだ」

「なに？」

「レナがね、また遊ぼうね、って」

「そうだね。また今度」

あの二人にどんな事情があるのか、詳しくは知らないけど、また会えたら。

ドーン！

音に釣られて、空を見上げると、綺麗に花火が咲き誇った。

「綺麗だね」

「だね」

上がった花火が散っていく。それから次々と打ち上げられていく。

「わあ」

アリスが感嘆の声を漏らす。綺麗な花火だからね。

「ね、リョウ」

「ん？どうしたの？」

急に改まった感じがするけど。

「旅行に誘ってくれてありがとうね」

「いいよ。オレとしても、アリスと一緒に来てくれて嬉しかったから」

アリスとじゃないと、こんなふうにはならない。こんなに充実した時間は得られないから。

「楽しかった？」

「うん。とっても楽しかったよ」

「そっか。それなら、よかった」

「リヨウとずっと一緒にいられたから」

アリスがオレの前に身体を持ってきた。花火を背景に、アリスとの距離が近くなる。

チュ

数秒。時間が止まる。花火の音さえ聞こえなくなる。

いきなりで少し驚いたけど、そのまま優しく抱きしめた。

「ん」

やがて、少しだけ距離を置く。

「これは、私からの、お礼だよ」

「ありがとう、アリス」

素敵なお礼だったよ。

「じゃあ、オレからも」

距離を再びなくす。オレから近づいて。

チュ

また時間が止まる。二人だけの時間が流れる。

少しだけ時間をおいて、再び距離を置いた。

「これじゃ、私のお礼にならないよ」

「いいんじゃない？オレからは、一緒に来てくれてありがとうってことだから」

「うん」

コトンとオレの肩に頭を預けてきた。

「ごめんね、こんなに甘えちゃって」

「謝らなくてもいいのに。いいよ、甘えてくれて」

「それじゃあ、もう少し甘えても、いいかな？」

珍しいな。

キスしたのにね。

まあ、オレの答は決まってるんだけど。

「いいよ。もっと甘えてくれても」

「エへへ、ありがとう」

すりすりと擦り寄ってきた。

そんなアリスの甘えを受けながら、アリスにゆっくりと微笑みかけた。

こうして、オレたちの二人だけの時間が過ぎていく。

楽しかったオレとアリスの旅行が終わりを迎えた。

いろいろなことがあった二人の夏休み。

これはそんな二人の思い出のページ。

二人の距離が更に縮まった、旅行の思い出。

特別編：夏の思い出 後編（後書き）

番外編は以上で終了です。

次話にBの世界を挟んでから第三期開始の予定です。

それでは、グッチーでした。

第6回：Bの世界

ア「皆さん、こんにちは。アリス・ルシエです」

由「こんにちは。ゲストの武内由里です」

リ「」

啓「」

おや？どうしたんですか？

啓「この状況で何も思わねえ奴はいねえだろ」

リ「同感だよ」

ア「私たちは別に」

由「普通だよね？」

啓「お前らはいんだよ。普段のライディングスーツと大差ねえんだから」

リ「具体的にはスカートになってて、マントとジャケット羽織ってるくらいだからね」

ア「でも、どうしてこんな格好なの？」

今回は第二期終了を記念して、そんな服装です。

紹介しますと、アリスはモデルとなったフェオトのバリアジャケット、由里は同じくなのはバリアジャケット姿です。

ア「因みに言っておくと、リョウと啓斗が言っていたように、ライディングスーツは少し違うよ」

由「ジャケットは羽織ってないし、スカートでライディングデビューはできないからね」

もう一つ加えておくと、美庄舞と立花咲も同じです。

二人ともモデルのプリキオアのイーグレットとブルームの姿を酷似したライディングスーツです。スカートではありません。

リ「で？」

啓「オレたちのこれは何なんだよ？」

今の話でわかりませんか？今日は第二期終了記念ということ、モデルのキャラの服装をして頂いているんですよ。

リ「で、オレは紅の袴を着てる訳ね」

緋村「心ですからね。」

啓「オレは、死装束なんだよな」

黒「一護ですね。卍解バージョンです。」

ア「まあまあ。二人とも、似合ってるよ」

由「そうだよ。そんなに嫌がらなくてもいいのに」

『動きにくい!』

慣れてませんからね。

啓「今になってやっと遊星の気が解った気がするぜ。帰らせてえ」

「

リ「激しく同感」

ア「だ、ダメだよ!二人とも!」

由「にははは」

では、二人がこれ以上言い出す前に進んで下さい。

ア「そ、それじゃあ、第6回：Bの世界!スタートです!」

由「由里の小さな悪戯、許してね?」

『待て待て待て待て待てえ!』

何か?

啓「問題あり過ぎだろ!」

リ「何言ってるの!?!」

それでは、スタートです。

『無視！？』

リ「はい。始めました。メインパーソナリティのリョウです」

ア「えっと、同じくメインパーソナリティのアリスです」

啓「果てしなく帰りてえ。そう思うゲストの石井啓斗だ」

由「悪戯が過ぎてしまったゲストの武内由里です」

ア「由里はともかく、リョウと啓斗は元気出してね？」

啓「ああ。そうだな」

リ「啓斗。さっさと終わらせて帰ろっ」

啓「だな！よし、さっさと始めるぜ！」

由「由里の小さな」

啓「もういい！さっきから何やってんだ！？」

リ「じゃあいくよ」

『グッチーの部屋!』

とことんいくつもりですね。

ア「二人とも、落ち着いて!」

由「もつとゆっくりやるよ〜」

啓「少し落ち着くか」

リ「ま、いいよ。じゃあ、オリキャラから」

名前…美庄舞

年齢…16歳

身長…158cm

体重…?

好きな物…絵画、美術

嫌いな物…運動

風属性の“ドラグニティ”を中心としたデッキ。エースモンスターは“The Rainbow Comet”。

感性豊かで常に優しい性格。親友の咲に手をやくことは少ない。

外見はプリキ〇アの美翔舞。服装はブラウスにシャツ、ジーンズ。

名前…立花咲

身長…162

体重…?

好きな物… チョココロネ、ソフトボール
嫌いな物… 勉強

地属性の“ナチュラル”を中心としたデツキ。エースモンスターは“
The Protean Moon”と“The Protean
Bright Moon”。

明るく活発な性格。誰にでも遠慮なく話しかける。

外見はプ○キュアの日向咲。服装は黄色のシャツにスカート。

リ「以上、舞と咲の紹介でした！次は」

ア「わわっ！待って待って！」

落ち着いて下さい。それはあんまりです。

ア「ね、リヨウ？」

リ「ふう。解ったよ」

由「じゃあ、二人の紹介だね」

啓「けっこう対照的だよな。この二人」

リ「オレたちも人のことは言えないけどね」

ア「落ち着いた物腰の舞と、破天荒な咲って感じだね」

由「仲の良い二人なんだよね。二人とも、デュエルは強いし」

ア「確かに、強かったね」

リ「ギリギリだったからね。もう一回やったらどうなるか解らないね」

啓「オレはやってねえんだよな。やってみてえもんだ」

さて、続きといきましょう。

ア「本当はトレインとレナの紹介なんだけど、それはまたの機会に」
リ「二人の次の登場はいつになるの？」

第三期は厳しいですね。今後に登場する予定ですが。

ア「じゃあ、次はオリカかな」

“ジャンク・ブロッカー”

レベル 2

ATK / 300

DEF / 300

種族 / 戦士族

属性 / 地

効果モンスター

場上に存在する戦士族シンクロモンスターがカード効果によって破壊される時、手札のこのカードを墓地に送ることで破壊を無効にする。

また、戦士族シンクロモンスターが墓地に存在する場合、1000

以上の効果ダメージを受ける時、墓地にあるこのカードをゲームから除外することで、効果ダメージを無効にする。

“ 死翔の鎗 ”

通常罾カード

このカードは自分のターンにしか発動できない。

発動したターンに、自分場上に存在する“ 暗黒騎士ガイア ”とバトルした相手モンスターをダメージ計算を行わずに破壊する。更に、この効果で相手モンスターが破壊された時、相手プレイヤーに1000ポイントのダメージを与える。

“ 真紅眼の息吹 ”

レッドアイズ・ブレス

通常罾カード

自分場上に“ レッドアイズ ”と名のつくモンスターが存在する場合、相手場上に存在する魔法・罾カード1枚を破壊する。更に、相手プレイヤーに500ポイントのダメージを与える。

“ 魔力吸収波 ”

永続罾カード

自分が効果ダメージを受ける時、手札の魔法使い族モンスター1体を墓地に送ることで、効果ダメージを無効にすることができる。また、場上に表側表示で存在するこのカードを墓地に送ることで効果ダメージを無効にすることができる。

効果ダメージを無効にした時、デッキからカードを1枚ドロウする。

“ 幻想結界 ”

永続罨カード

発動した瞬間に場上に存在する全てのモンスター効果を無効にする。
発動後に召喚されたモンスターには適応されない。

このカードは自分のターンの3回目のエンドフェイズに破壊される。

“ スピードオフ ”

永続罨カード

お互いのSPカウンターを増加を無効にする。

このカードは3ターン後に破壊される。

リ「ウエスト校とのデュエルの時だね」

ア「あのデュエルは」

由「にははは」

リ「過ぎたことは気にしない。無事に勝ったんだから」

啓「ま、それもそうだな」

リ「オレとしてもマナにはキツイ思いさせちゃったんだしね」

ア「次にいくよ」

“ジャンク・アタック・モード”
SPスペル

SPカウンターが3個以上ある時発動できる。場上に存在するモンスター1体を選択する。選択したモンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地に送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える。

“ライトニング・アップ”
SPスペル

SPカウンターが3個以上ある時発動できる。自分場上に存在するレベル4のモンスター1体を選択する。選択したモンスターのレベルを1つ上げ、光属性として扱う。

“ドラゴンの呼び声”
通常罠カード

自分場上に存在するレベル4以下のドラゴン族モンスター1体を選択する。選択したモンスターと同名のモンスター1体を自分のデッキから特殊召喚する。

また、このカードが場上で破壊され、墓地へ送られた時、お互いのデッキからレベル4以下のドラゴン族モンスター1体を特殊召喚することができる。

“マジシャンズ・バリア”
通常罫カード

自分場上に存在する魔法使い族モンスター1体を選択する。選択したモンスターは戦闘では破壊されず、カード効果では破壊されない。

リ「さて、イースト校の時だね」

ア「初めてみんな最後まで繋いだ時だよね」

由「だね〜。展開しやすかったもんね」

啓「ったく。そう言うけどよ、ファーストはけっこう難いんだぞ？」

リ「解ってるよ。啓斗が繋いでくれるお陰でオレたちはやれてるんだから」

由「そうだよ」

啓「そうかい。ならいいけどよ」

ア「じゃあ、次に行くよ」

“スターライト・ブレイク”
通常罫カード

自分の墓地に存在する“デイバインプラスター”と“エクセリオンチャージ”をゲームから除外することで発動することができる。

自分場上に存在する“翼を織りなす者”の攻撃力を2倍にする。発動したターンに、“翼を織りなす者”が戦闘で相手モンスターを破壊した場合、もう一度続けて攻撃できる。

“The Protean Moon”

レベル 6

ATK/2000

DEF/2000

種族/岩石族

属性/地

効果モンスター

このカードは獣戦士族としても扱う。1ターンに一度、このカードを魔法・罫カードとして、魔法・罫ゾーンにセットできる。または魔法・罫ゾーンにセットされたこのカードを自分場上に特殊召喚できる。

この効果で魔法・罫ゾーンにセットされている場合、バトルフェイズ中に、自分場上に存在するモンスター1体を選択する。選択したモンスターはバトルフェイズ中のみ攻撃力・守備力を500ポイントアップする。

“The Bright Protean Moon”

レベル 8

ATK/2000

DEF/2000

種族/岩石族

属性/地

シンクロモンスター

地属性チューナー+“The Protean Moon”

このカードは獣戦士族としても扱う。このカードが場上に存在する限り、自分場上に存在する全てのモンスターの攻撃力は500ポイントアップする。

また、自分場上に存在するこのカード以外のモンスター1体を選択し、そのモンスターの効果を得る。

自分場上にこのカード以外のモンスターが存在する場合、このカードを攻撃できない。

“裁き”

通常罠カード

自分場上のカード1枚が破壊対象となった時、破壊対象を自分場上に存在するモンスター1体に変更できる。この効果でモンスターが破壊された時、そのモンスターのレベル×100ポイントのダメージをお互いのプレイヤーに与える。

“魂のリレー”

永続罠カード

1ターンに1度、自分または相手のエンドフェイズ時に、自分の手札からレベル4以下のモンスター1体を墓地に送ることができる。

このカードの効果によって墓地に送られたモンスターのレベルの合計、攻撃力の合計以下のモンスター1体を手札から特殊召喚できる。この効果を使用した時、このカードは破壊される。

“ The Rainbow Comet ”

レベル 8

ATK / 2700

DEF / 2300

種族 / 鳥獣族

属性 / 風

シンクロモンスター

風属性チューナー+チューナー以外の鳥獣族モンスター1体以上1ターンに一度、自分の墓地に存在するモンスター1体を装備カードとして装備することができる。また、このカードが破壊される時、代わりにこのカードに装備されたモンスター1体を破壊することができる。

このカードが場上に存在する場合、バトルフェイズ中に発動した魔法・罠カードを持ち主の手札に戻すことができる。

“ ユナイティ ”

通常罠カード

自分場上に存在する鳥獣族モンスター1体を選択する。選択したモンスターに、自分の墓地の“ドラグニティ”と名のつくドラゴン族チューナーモンスター1体を装備する。

“ 未来への扉 ”

SPスペル

SPカウンターが6個以上ある時発動できる。自分のデッキの一番上から5枚のカードをめくり、モンスターカード1枚を選択する。

自分場上に存在する選択したモンスターと同じ種族のモンスター1体を選択し、選択したモンスターのレベル×100ポイント攻撃力をアップする。確認した5枚のカードは全て墓地に送る。

リ「以上がノース校とのデュエルかな」

ア「舞と咲のエースモンスターの紹介だね」

由「私たち以外には全然使ってなかったもんね」

啓「しつつかし、月と彗星はプラネットじゃねえんだけどな」

細かいことは気にしないで下さい。

リ「咲の“Moon”はアドバイスを参考にしたカードだよ」

由「ありがとございました」

リ「舞は“ドラグニティ”、咲は“ナチュラル”だけど、何か理由があるの？」

舞はイーグレットの鳥、ウィンディの風でピンときたのが“ドラグニティ”です。

啓「ドラゴン入ってるじゃねえか」

気にしない気にしない。

咲はアドバイスとして頂いた“Moon”が月ということ、ブライトからですね。後は大地のブルームで適合したのが“ナチュラル”

でした。

由「ナチュル」は全部地属性だもんね」

リ「さて、次で最後だよ」

“星屑の輝き”

永続罫カード

自分場上に“スターダスト・ドラゴン”が存在する場合、1ターンに一度自分場上に存在するモンスターとの戦闘での破壊を無効にできる。

また、自分場上に存在する“スターダスト・ドラゴン”はカード効果では破壊されない。

“白銀の恩恵”

永続罫カード

自分場上に“SF”と名のつくモンスターが存在する場合、1ターンに一度自分場上に存在するモンスターの戦闘での破壊を無効にできる。

また、自分場上に存在する“SF”と名のつくモンスターはカード効果では破壊されない。

ア「リヨウと遊星さんのカードだね」

由「ホントに白熱したデュエルだったね。ビックリしたよ」

啓「リヨウ、お前あんなにスピード出るなんて思わなかったぜ」

リ「あゝ。手を抜いてた訳じゃないんだけどね」

ア「やっぱり経験からくるものなのかな？」

リ「それもあると思うよ。走り込まないとスピードはついて来ないから」

由「ふえ〜、難しいね」

啓「まだまだ走り込まなくちゃいけねえな」

リ「以上でオリカ紹介終了です」

ここで一つお詫びとお知らせです。

ア「えっと、第一期と第二期を通して、オリカが多過ぎるといって
とで」

『確かに』

リ「特にオレのカードは多過ぎるよね」

啓「まあ、多いだろうな」

由「という訳で、第三期からは改めようということになりまして」

本当に申し訳ありません。

リ「第三期からは極力減らす予定です」

ア「えっと、でも何枚かは登場しますので、ご了承くださいね」

啓「オレたちのカードが出てねえもんな」

由「だね」

リ「まあ、そういうことなんで今後もよろしくお願いします」

『お願いします』

ア「じゃあ、次にいくよ」

『賢者の部屋！』

さて、前述したことを除けば、申し上げることは特にありません。

リ「じゃあ、今回はここまで。お送りはリョウと」

啓「啓斗と」

『』

啓「どうかしたか？」

由「もう少し落ち着こうよ」

ア「もう少し楽しく、ね？」

では、男性陣に言ばしい話題にしましょう。

啓「何だよ？」

女性陣のスリーサイズ。

『はあ！？』

リ「それはマズイでしょ！？」

啓「しかも本人たちがいるじゃねえか！」

じゃあ、バストだけにします。それに、数値は出しませんし。これなら大丈夫ですよ。

『何がだよ！？』

では、いってみましょう。

『オイ！』

十六夜アキを基準にします。

アリスⅡアキ>マナ>由里Ⅱ舞>咲

こんな感じですよ。

ア「なんだか」

由「うん。恥ずかしいね」

リ「これ、言ってよかったのかな？」

啓「聞くな」

アキは立派過ぎますからね。アリスもですけど。

ア「そんなこと言っても」

リ「だいたい、あんたが設定してんだろっが！」

良いじゃないですか。たまに見惚れてる癖に。

リ「なっ!?!?!」

ア「そ、そうなの?!?!」

はい。ビキニの時やお風呂の時なんか。

リ「~~~~っ!?!?!」

啓「盛り上がっていると悪いんだが、ぶっちゃけ何言ってんだ?お前」

由「にゃはは。ちょっと落ち着いじつよ」

『/ / /』

由「アリスちゃん、顔真つ赤だよ？」

啓「リヨウもな」

ぶつちやけ、男性は基本的に胸は大きい方が良いでしょう。

啓「お前は少し黙ってる！話がややこしくなるだろうが！」

ア「リ、リヨウもやっぱり大きい方が良いのかな？」

リ「いや、それは」

啓「だから、話ややこしくしてんじゃねえ！」

由「心配しなくてもアリスちゃんは十分大きいんだから、落ち着いて」

話が拗れてきたところで次にいくので戻って来て下さい。

『誰の所為だ！』

由「まあまあ。それで？」

あ、すみません。質問がありました。

『遅い！』

ア「まあまあ。私が読むね。」

『マナさんの料理はプロも真つ青だそうで。肉を焼く時はアロゼす

る方ですか？それとも肉汁が流出するのを防ぐ方ですか？是非ご教授お願いします」

だそうだけど、これはマナに答えてもらわないといけないね」

啓「つか、質問の意味が解んねえ」

由「私もあんまり解らないかも」

リ「お肉の焼き方だね。そういえば、マナに聞かれたことがあったような気がするよ」

とりあえず、マナから答えを預かってますので、呼んで下さい。

リ「はいはい。」

「あゝ、難しい質問だね。とりあえず、私はアロゼする時もあるし、別の焼き方をする時もあるかな。気分次第だね。焼き加減一つで味が変わっちゃうしね。あ、でも、美味しいお肉が高いお肉って訳じゃないから気をつけてね？」

リヨウはいつも美味しくそうに食べてくれるし、お師匠様も文句一つ付けないから作ってて楽しいんだよ。やっぱり、食べてくれる人が喜んでくれる料理が一番だね！料理は愛情！ってよく言うよ。

それじゃ、マナでした」

だそうだよ。答えになってたかな？」

ア「マナは料理上手だからね」

由「ホントだよ。今度習ってみようかな」

ア「そうだね。二人で習ってみる？」

由「にゃはは。うん」

啓「んで、次は何だよ？」

では、第三期の予告をお願いします。

ア「えっと、第三期の予告だよね？」

そうです。では、お願いします。

リ「とうとう動き出してしまったファントム」

ア「私たちスピリットシグナーは精霊世界へ赴く」

由「そこで知らされる新たな真実と」

啓「オレたちが手にした新しい力」

ア「ファントムとの全面対決がいよいよ始まった」

由「そして目覚める恋!？」

リ「そんな折、オレたちの前に姿を現した謎の使者、時を超えた再会を果たすことになる」

啓「だが、再会はそれだけじゃなかった」

ア「全く予期しなかった憧れの人との再会」

由「でもそれは待ち望んでいた再会ではなかった」

ア「それでも、ファントムとの闘いは熾烈を極めていく」

由「辛く厳しい現実の中」

啓「オレたち仲間と共に」

リ「辿り着いた新境地、新たな進化の力でファントムに挑む第二期」

ア「精一杯がんばります」

リ「それでは、第三期に向かって」

『ライディングデュエル！アクセラレイション！』

ご苦労様でした。

リ「こんな小説だけど、今後もよろしくお願いします」

啓「オレたちも活躍する予定だからな」

由「よろしくね」

リ「それじゃ、今回は本当にここまで」

ア「そうだね」

由「また呼んでね〜」

啓「こんな格好じゃねえならな」

考えてみます。

リ「それでは、お送りはリョウと」

ア「アリスと」

啓「啓斗と」

由「由里でした」

『バイバイ』

第6回：Bの世界（後書き）

次話から第二期に進みます。

これからもよろしくお願いします。

第三期第一話：始動（前書き）

第三期スタートです。

時間はアカデミアに於ける冬休み、舞台は精霊世界。テーマはもちろんフロントムとの闘いです。

それでは、どうぞ。

第三期第一話：始動

オレたちはアカデミアの終業式を終え、遊星たちのいるガレージに全員集まっている。

「さて、全員揃ったね」

「行くのか？」

「うん。遊星、後のことは頼むよ」

そう。オレとアリス、啓斗、由里はこれから精霊世界に向かう。

ファントムが動き出してしまった。もうのんびりしている暇はない。

「済まない。何か力になれば良いんだが」

「遊星たちがオレたちを待っていてくれるし、みんなの相棒が力を貸してくれる筈だから。気にしないで」

「精霊世界を頼む」

「うん。それじゃ、みんな、行こう」

オレは静かに精霊世界への扉を開いた。

みんなそれぞれ、緊張した顔をしている。オレたちスピリットシグナーはこれからの為、遊星たちシグナーはオレたちの無事を祈って。

「気をつけるよ」

「大丈夫。オレたちは必ず全員揃って無事に帰って来る。ここに誓うよ」

「だな！オレたちならやれる筈だ！」

「行つてきます！」

「行つてきます」

「アリスお姉ちゃんも由里姉ちゃんも気をつけてね！」

「精霊世界をお願い」

「四人とも、気をつけて」

「しっかりな！」

「フン！精霊世界に何かあれば、承知せんからな！」

みんなが声をかけてくれる。オレたちは勇気を貰いながら、精霊世界に旅立った。

次に目を開けた時に確認した景色、それはもう三度目になる。そびえ立つ神秘的なオーラを醸し出す山。オレたちがこれから向かう場所。

「ふえ〜、どこどこ?」

「何だよ?あの異様な山」

三人も無事に着いたみたいだね。

「行ってみれば解るよ。シンはどこにいるのかな?」

「どこに」

シンが舞い降りてきた。続いてマハードたち精霊組が姿を現した。

「手筈は?」

「問題無い」

うん。マハードたちに頼んでよかったよ。

「よし。じゃ、行こうか」

全員シンの背中に乗せて貰い、目的の山に向かった。

いつもの場所に着くと、シグナーの龍が次々に姿を現した。“スターダスト”を中心に、“レッド・デーモンズ”、“ブラック・フェザー”、“ブラック・ローズ”、“エンシエント・フェアリー”。今日は全員集合か。5体並ぶと、流石に圧巻だね。

「スピリットシグナーたちよ、よく来てくれた」

やっぱり、最初に声をかけてくれたのは“スターダスト”。

「いや。それより、状況は？」

「焦るな、リヨウ。話すことはまだある」

「ファントムが攻めて来てんじゃねえのかよ？」

「確かにそうだ」

“レッド・デーモンズ”が口を開いた。

「今この瞬間にも、各地でファントムとの闘いは行われている」

「だったら、オレたちは直ぐにでもそこに行くべきじゃねえのか？」

「焦るな。そう言った筈だ」

「小事を見て大事を見ないのはダメよ。もっと大局を見なさい」

今度は“ブラック・ローズ”か。

「どづいう意味？」

「今の争いは所詮小競り合い程度よ。そんな争いに貴方たちがいちいち参加していたら、いざという時に疲れて本来の力を出せないわ」

「それでも、今頃精霊たちが闘って傷付いてるんだよね？」

「リヨウ。優しい貴方のことです。言いたいことは解ります」

“エンシェント・フェアリー”か。

「精霊が傷付くことを気にしてくれていることは解ります。ですが、今は耐えて頂けなければ。本当の意味で精霊を護る為に」

「解ったよ」

本当の意味で精霊たちを護る為に、か。

「これで一度落ち着くべきだな。それとも、まだ何かあるか？」

最後に“ブラックフェザー”が口を開いた。オレたちは全員首を振った。

「皆、まずは落ち着こう。特にリョウ、慌てることはない」

手痛いな、“スターダスト”は。気になってることがあるけど、“スターダスト”が気付いてない筈はないし。慌てることはない、か。

「そういえば、心躍るデュエルだった、リョウ」

遊星とのデュエルだね。

「オレもだよ。ドローっていうところが心残りっていえば心残りかな」

「確かにな。またやろう。私の主も楽しみにしている筈だ」

「こつちこそ。次は確実に勝たせて貰うよ」

「フツ。こちらの台詞だ」

遊星とのデュエルか。

次は決着をつけるよ。必ずね。

「落ち着いたようですね」

「オレはそんなに落ち着きがなかった？」

「常に冷静な貴方らしくありませんでした。私の封印を解いて下さった時のように、皆を先導してあげて下さい」

皆を、か。

「そうだね。こういう時だからこそ、落ち着かなくちゃね」

「他の者も、大丈夫だな？」

みんなが頷く。オレだけ慌て過ぎてたみたいだね。

「では、これからの方針を話す」

「お前たちは主にこの世界に駐屯していてくれ。本当の緊急時以外は動く必要などない」

「緊急時って？」

「中級兵が多数、もしくは上級兵が出てきた時よ」

それ以外は精霊たちががんばるってことになるのか。

「上級兵はスピリットシグナーにしか倒すことはできないだろう。
頼む」

「うん。解ってる」

オレたちにしか倒せない、上級兵か。

「さて、リヨウ、君が気にしていることは解っている。
五人目のスピリットシグナーのことだろう？」

「その通りだよ」

オレたちはさりげなかったけど、ずっと五人目を捜してた。それでも、見つけることはできなかった。

「そのことについては私から話そう」

「マハード？」

マハードがオレの隣に姿を現した。

「リヨウとアリスが美庄殿と立花殿の下を訪ねた際、私はいなかった筈。私はその日、“スターダスト”たちシグナーの龍の力を借り、ネオドミノシティの住民を隈無く調べた。

私だけの魔力では到底足りなかったのだが、力を借りることでなんとか調べることができた」

なるほど。それであの時いなかったんだ。

「でも、この様子だと」

「ああ。私は隅々まで捜したつもりだが、どこにもいなかった」

「つまり?」

「ネオドミノシティに、スピリットシグナーはもういない、ということだ」

シティにいない?

「リヨウ、マハード、回りくどいことは無しにしようぜ。訳解らなくなる。」

結局、どういうことなんだよ?」

せっかちだね、啓斗は。

「私たちはシティ以外にシグナーはいないと考えていた。だが、そのシティにいなかった。」

つまり、五人目はシティ以外にいる。もしくは」

もしくは?

大抵、マハードが途中で話を止める時、次に話すことは良くない内容なんだけど。

「五人目のスピリットシグナーは、存在しない」

「それって、どういうことなの?」

「私たちが考えていることは、既に五人目は死んでいる」

死んでいる？

「あくまで、五人目が存在しないと仮定しての話だ。そう仮定するならば、やはり既にこの世にはいないだろう」

この世にいない、か。

なら、もう一つの可能性は？

「これは仮定の話だ。もう一つの仮定、シティ以外にいたれば

」

「すれば何なんだよ？」

「シティ以外の海外にいる。もしそうなら、どこにいるか検討も付かない。力を借りるのは難しいだろう」

「なるほどね。じゃあ、シティ以外、海外以外にいたとしたらどこにいると思ってるの？」

「マハードはシティにいたって思った。ってことは海外にいる可能性はほぼ無い。だとしたら、まだ他のどこかにいる可能性がある。」

「思っている。その通りだ」

やっぱりか。でも、どこに？

「私たちは、今ここにいて、精霊世界にいるかもしれない、と思っ

ている」

「この世界に？」

「おいおい、そんなことがあんのか？オレたち以外にもこの世界に人間が来てるってことだろ？」

「可能性がない訳ではない。現に、啓斗殿と由里殿が初めて精霊世界に来たのは偶然だった」

「あ、ホントだ」

なるほど。マハードの言う通りか。

「何らかの拍子で来ているとすれば、だな」

「そう。じゃあ、一番聞くべきことを聞くよ。オレたちスピリットシグナーが全員揃うの？」

結局、全員揃わなければ意味はない。いくら憶測を立てようと、大事なのは全員揃うかってことだ。

「解らない。だが、全員揃う可能性は、はっきり言って低いだろ」

やっぱりね。

「でも、五人揃わないといけないんじゃない？」

「だが、現状はそれを許さない。そうである以上、今の状況でなん

とかするしかない」

「現実には厳しいものだ。その現実を乗り越えなければ、精霊の未来は無い」

つまるところ、オレたちだけでなんとかするしかないんだよね。

「解ったよ」

「なんだ？今度はやけに落ち着いているな？」

「まあね。予想はしてたし、むしろスッキリしたよ」

「そうか。皆はどうだ？」

みんなの志気が落ちてないと良いんだけど。

「ま、いねえ奴を頼っても仕方ねえしな」

「そうだね。私たちは四人でチームを組んだこともあるんだし」

「うん。私たちなら、きっと大丈夫だよ」

どうやら、大丈夫そうだね。

「フツ。それ程やわではないようだな」

「当然だ。そうでなければ、これからの闘いに勝つことなど、到底不可能なのだからな」

これからの闘い、か。

「貴方方の今後の為に、私たちから」

「力を与える」

そうだね。ファントムと闘う為には、新たな力が必要不可欠となる。

「武内由里」

「は、はい！」

「貴女は私たち精霊の為、闘って頂けますか？」

「うん。こんなに綺麗な世界、壊さたくないよ。カレンだっているし、私も力になりたい！」

「感謝致します。貴女には私から、力を授けます。どうか、加護が有らんことを」

由里が“エンシエント・フェアリー”から何かを貰う。なるほど、由里は龍可だったんだね。

「石井啓斗」

「応」

「貴公はどうだ？我等の為、闘う覚悟はあるか？」

「ないんならここには来てねえよ。護れるんなら護りてえし、俺の

力を必要としてんなら、力貸すに決まってんだろ。まして、俺の仲間だつてんなら尚更だ」

「なるほど、確かにどこか似ているな。
これは私からだ。貴公の力となるだろう」

啓斗は“ブラックフェザー”からか。

なんにしても、オレたちができることは全部終わった、かな。

「さて　どこで寝泊まりする？ここにいてくれても構わないが」

「いや、もう決めてるんだ。マハードとマナの家にいさせて貰うよ。荷物も全部置いてきて貰ったしね」

「そうか。それが妥当だな。何か要望があれば言ってくれ。できる限りのことはする」

「うん。ありがとう、“スターダスト”。ファントムのことは随時知らせて欲しいよ」

「解っている。そのつもりだ」

「じゃあ、オレたちはこれで　」

「緊急事態です！」

っ！

オレたちが家に向かおうとした時、この叫びが聞こえた。何かあったのか？

「どづした!?!」

「は、はい!ファントムです!ファントムが攻めて来ました!」

『!?!』

来たか。

みんなが驚愕する中、オレとマハードは落ち着いていた。

「落ち着け!」

流石だよ、“スターダスト”。よく落ち着いてる。

「シャオロン」、状況を伝える」

やっぱり“スターダスト・シャオロン”だったか。

「は、はっ!その数、およそ1000!中級兵も多数いると思われるます!」

「多いな」

「だろうね」

「流石だな。行けるな?」

オレはしっかりと頷いた。そして“スターダスト”の背に乗った。

「待ってよ!リョウ!」

アリスか。アリスは隣で動揺してる啓斗と由里よりは落ち着いてるけどね。

「啓斗と由里がまだ落ち着いてないからね。二人のことは任せるよ。オレは先に行って精霊たちと一緒に応戦するよ」

「ちょ、ちょっと待てよ！オレたちは別に」

「そ、そうだよ！私たちは」

「必死に繕ってるどころ悪いんだけど、少しもそう見えないからね。慌てた状態で勝てるほど、ファントムは甘くないよ」

しかも、闇のデュエルである以上、負けたらどうなるか解らない。

「悪いが、のんびりしている暇はない」

「中級兵を倒さない限り、兵の数は減らないわ。私たちとしては、早くリヨウだけでも応戦して欲しいところよ」

「解ってる。行こう、“スターダスト”！」

「待って！」

“スターダスト”が羽ばたこうとした時、アリスに呼び止められた。

「アリス？」

「言っても聞いてくれないだろうから、私は何も言わない。け

ど、 気をつけてね。無茶はダメだよ？」

心配そうな顔。それでも、ちゃんと送り出してくれる。

「うん。約束する。二人のことは頼むよ、アリス」

「うん。大丈夫」

その返事を聞いて、優しく微笑みかけた。

それを見た“スターダスト”が、翼を羽ばたかせた。

「啓斗！由里！」

オレは少し大きい声を出して二人に呼びかけた。

「オレは先に行ってる！待ってるから！」

離れてても、心は繋がってる！オレたちは仲間なんだから！」

それだけ言っつて、いつの間にか暗くなってしまうていた空に飛び出
した。

side 由里

「行っちゃった」

私は飛び立ったリヨウ君と“スターダスト”を見て眩いていた。

「リヨウなら大丈夫だよ」

「アリスちゃん」

そういうアリスちゃんも、ちょっと震えてる。やっぱり心配なんだよね。

「おい、さつさとリョウを追っぞー！」

「待て」

追おうとした啓斗君を“ブラックフェザー・ドラゴン”が止めた。

「なんだ！？あいつ一人じゃ流石に敵しいだろ！？」

「リョウ自らが表に出ることで囷となり、貴方たちが落ち着くだけの時間を作るうとしているのよ。リョウの想いを無駄にするつもり？」

「チッ！クソッ！」

啓斗君が悪態をつく。気持ちは解るけど、私たちに落ち着きがないのも事実。やっぱり、まずは落ち着かなくちゃいけない。

「そうです。まずは落ち着いてください」

「カレン」

「大丈夫です。リョウ様はそうそう負けるようなお方ではありません。貴女方が最もよく解っている筈ですよ」

「そういうことだ。お前らが慌てた状態じゃ、俺たちの力も発揮で

「きねえだろ」

「解ってんよ、カカシ」

「主アリス」

「うん。大丈夫だよ。解ってるから」

精霊たちもみんな心配してくれてる。
落ち着いて、落ち着いて。

side out

オレは“スターダスト”の背中から状況を眺めている。
オレが向かう先は前と同じように、中級兵の下。中級兵を倒せば、
あらかた消えてくれるからね。

「リョウ、いくつか聞きたいことがある」

「なに？ “スターダスト”」

「何故、この状況で落ち着けている？」

「予想してたから、かな」

「どついう意味だ？」

「オレが初めて来た時、ファントムが攻めて来たよね。アリスの時はなかったけど、啓斗と由里の時は攻めて来た。」

偶然だったかもしれないけど、出来過ぎてた。だからオレたちと同じように精霊世界の扉が開くのを感じる事がファントム側にもできるんじゃないかな？」

「なるほどな。それを、マハードたちと話していた訳だな？」

「その通りだ」

マハードとマナが姿を現した。

「次だ。何故、他のスピリットシグナーに言っておかなかった？」

「確証が全くなかったからだよ。不確かなことを伝えて、みんなを動揺させたくなかったからね。まあ、完全に裏目に出たけどね」

「そうか。最後だ。何故、私に知らせなかった？」

「」

言葉に詰まった。何て言えばいいか、すぐに浮かばなかった。

「私には知らせても良かった筈だ。例え確証がないとしても、私に知らせておけば、何らかの備えができたというものだ。そうすれば、ここまで慌てることはなかった。違うか？」

「いや、言う通りだね。返す言葉もないよ」

「良くも悪くも、やはり主に似ているな。全て自分でなんとかしようとする」

遊星にも、こんなことあるからね。

「マハード、マナ。主の想いを汲みたい気は私にも解る。が、主が倒れてはどうしようもないだろう?」

「ああ、そうだな」

「私は、無理をさせずに、頼れるものは頼るつもりだ。二人もそうではないのか?」

「その通りだ。私たちもそうすることにしよう」

ハア。これじゃオレの行動は全部筒抜けだよ。

「咎めるのはこのくらいにしておこう。そろそろだぞ」

「ん。解った」

切り替えよう。これから始まるデュエルは、いろんなものを背負うんだから。」

目で中級兵を見つけた。オレは“スターダスト”から飛び降り、その中級兵の眼前に立った。

「貴様　スピリットシグナー　だな?」

「そうだよ。さて、下級兵を退かせて、もう攻めて来ないというのなら、見逃すよ?」

「クックツ　。貴様　何を言っている?」

解ったことだけど、交渉は決裂か。なら、やるしかないね。
オレは静かにデュエルディスクを構えた。

「そつだ。交渉など 無意味だ」

中級兵もデュエルディスクを構える。

「いくよ、マハード、マナ」

『ああ』

『がんばろう！』

精霊世界は、必ず護ってみせる！

『デュエルー』

第三期第一話：始動（後書き）

次話はリョウ無双 ではなく、二人の新しい力お披露目です。

しかし、アニメがもうすぐ終わってしまいますね。毎週楽しみにしていたのですが。まあ、次が直ぐさま始まる訳ですがね。子供向けな印象を持っていますがどうなるのでしょうか？

では、グッチーでした。

ホワイトデー特別編・宝石（前書き）

ホワイトデーですね。

という訳で番外編です。

とは言え、この話は伏線だらけです。ホワイトデーの時期を考えれば解るか。

では、どうぞ。

ホワイトデー特別編：宝石

3月上旬、オレは休日を利用して精霊世界を訪れていた。

行き先は魔法使い族が多く住んでる“スターダスト”の世界の一角、魔法使い族の都市、エンディミオン。

「久しぶりだね、“エンディミーン”」

「はい。リヨウ様、御無沙汰しておりましたわ。マハード様とマナもよく来てくれましたわ」

“エンディミーン”との再会の挨拶。トレインたちは元気にしてるのかな？

「しかし、済まない。唐突な来訪になってしまった」

「いえ。問題ありませんわ。貴方様方なら、断る道理などある筈もありませんもの」

「そうなの？マハードとマナはともかく、オレは普通の人間だけど」

「心配しなくても、リヨウは魔法使い族じゃかなり有名だよ」

「マナの言う通りですわ。むしろ、魔法使い族でリヨウ様を知らない者はいないと思いますわ」

オレはそんなに有名なのか。

「それはいいだろう。頼んだものはあるか？」

「はい。ありますわ。どうぞ、お取り下さいますせ」

「ごめんね、ありがとう」

オレは“エンディミーン”からあるものを受け取り、そのまま帰宅した。

それから、数日後、

「男で集まったのはいいんだけどよお」

オレは遊星たちの住むガレージに来ていた。クロウさんの言う通り、男集合で。

「一つ聞きたいんだけど、みんなホワイトデーのお返しは考えてるの?」

「それを聞く為に集まったんじゃないか!」

やっぱりか。

「リョウ、お前はもう用意してんのか?」

「だいたいね。啓斗は?」

「オレも　ま、考えてはいるぜ」

毎年のことだからね。オレたちに抜かりはない。問題は、

「え〜っ!?!リヨウと啓斗はもう考えてんの!?!」

「なんだよ!集まった意味ねえじゃねえか!?!」

いや、ホワイトデーってもうすぐだよ?

「どんなものを返せばいいんだ?」

遊星は考えてるのかな?

「想いが籠ってればいいんじゃないかな」

「ふん!頼んでもいないのにくれたのだ。返す必要などなかるう」

『 『

ジャックさんの一言に、みんな啞然とした。

「そっか。それもそうじゃん」

訂正。龍亜以外。

「女の子から貰ったものだよ?」

「つつか、それは辞めといた方がいいぜ」

「だね。アリスはともかく」

「由里がキレるだろうな」

『
』

ジャックさんと龍亜が押し黙った。いや、先ず返さないって選択が酷いよ。

「はあ。とにかく、何かしらのものを返せばいいんだよな」

誠意があればね。

さて、それからさらに数日。今日はホワイトデー前日。

「楽しみだなあ〜」

「ふふ、ご機嫌だね」

「久しぶりの外出なんだ〜」

今の会話はアリスとマナ。オレを合わせて三人でもう一人を待ってる。もうすぐ来ると思うんだけど。

「お待たせ〜！」

あ、来たね。

「慌てなくても平気だよ、龍可。まだ時間じゃないから」

「みんな早いよ。私も余裕を持って来たつもりだったんだけど」

「気にしないでいいよ」

「リヨウとアリスちゃんは早過ぎるからね。龍可が悪い訳じゃないから」

「ハハ。ま、そういうことだよ。じゃあ、行こうか？」

「うん。今日はよろしくね」

今日はこのメンバーでショッピング。バレンタインのお返しに龍可がショッピングを所望、マナも久しぶりに外出したいということで、龍可の提案通りアリスを誘って今に至るんだよね。

四人で歩き出す。最初の目的は

「着いたね。ここだよ」

「アリスちゃん行き着けの店なんだよね」

「そうなの？」

「そうだよ。良い服がたくさんあるんだ」

キヤツキヤツと店に入っていく。もちろん、オレのことはそっこのけ。いいけどね、予想してたし。

三人であれこれ服を見て回ってる。龍可とマナも楽しそうにしてる。

『リヨウは暇そうだな』

「まあね。オレがすることは特にないし」

マハードが声をかけてきてくれた。

「ねえ、マハード」

『どうした？』

「あのお告げ、どう思っつ？」

『そうだな。妙、だとは思っつ。だが、あのお告げが外れたことを、私は聞いたことがない』

「そっか。だとすれば、問題は誰なのかってことだね」

『六人は確定だろっつ？』

「うん。そう思ってるよ」

問題は他の、

「お師匠様と何話してるの？」

「マナ？」

『なんでもない。』

しかし、またえらく持っているな』

「え、そうですか？二人はもっと持ってますよっ、」

アリスと龍可を見てみると、確かにたくさん持っていた。もう三月だから春物の服がたくさんあるんだろうね。二人はもちろん、マナにも笑みが零れてる。

「龍可、良い服はあったみたいだね」

「うん！　でも、こんなに買えなくて」

一人何着持つてるんだろ？　だいたい三着くらいかな？

「解ったよ。じゃあ、これはオレの奢りだね」

「えっ！？　そんな　ダメよ」

「いいよ。ここは比較的高くないし、マナの服も買ってあげるんだし。ついで、ついで」

「ついでで済む値段じゃないわ」

「いいからいいから。アリスは？　奢るっか？」

「いいよ。むしろ、私も一緒に払うよ」

「大丈夫だよ。お金はあるんだし」

「そついう問題じゃないよ」

「ん、まあいいか。じゃあ、会計に」

「待って」

「どうしたの？龍可」

「いいの？」

「龍可はまだ子供なんだから、もう少し我が儘言っていていいんだよ？」

「で、でも」

「リヨウがこう言ってくれてるんだから、ね？」

「アリスお姉ちゃん」

龍可に少し笑いかけてから、マナの服を受け取り、レジに向かった。

『やれやれ。金があるとはいえ』

「ハハ。まあ、使わないと減らないんだし」

『そうか。』

お告げのことは、まだ皆には』

「解ってる。まだ言うつもりはないよ」

このことをみんなに告げるのは、まだ先の話だからね。
オレは会計を済ませ、持ったままみんなと一緒に店を出た。

「買って貰ったものくらい私が持つわ」

「気にしないの。女の子の荷物は男が持つものだからね」

「でも、みんなの分を持つのは大変だよ？」

確かに、三人分はかなりあるからね。

「私は自分で持つから、気にしないで」

「アリスにだけ持たせるのはなあ」

やっぱり、あの手でいこうか。

「じゃあ、お願いします。クロウさん」

これがあの手。クロウさんに配達して貰おうと。代金は二割増しで。

「別にいいけどよ。龍可は何やってんだ？」

「一緒にショッピングよ」

「そうかい。ま、楽しんでな」

という訳で、クロウさんに運んで貰いました。

「なんだか、悪かったかな？」

「大丈夫じゃないかな。仕事だしね」

それから、適当に昼ご飯を食べて、シティの店をあれこれと見て回る。あの店この店と、入りたい店から片っ端に見ていった。

しばらくして、落ち着いてきたところで、最後にアイスを買って食べることに。

「龍可、今日は楽しかった？」

「うん！とっても楽しかった！」

「私も〜！」

マナは久しぶりだったからね。

「また行きたくなったら、遠慮しなくていいからね」

「それは流石にリヨウに迷惑がかかるから」

「龍可は今日楽しかったんだよね？だったら、また行きたいって思わない？」

「アリスお姉ちゃん　でも」

「龍可はずいぶん大人だね。気にしなくていいのに」

「そういう訳にはいかないと思うけど」

「龍可には龍亜がいる。もちろん、オレたちだっている。でも、日頃から気を張り詰めてたんじゃないかな？」

「そうだね。今日の龍可の表情は凄く自然だったよ」

「そんなこと、ないと思うけど」

気を張り詰める理由は何となく解る。オレもアリスも、傍に親がないのは経験してるし、その寂しさも理解してる。

「もう少し、ゆったりしていいんじゃないかな？子供なんだから、甘えたい時もあるだろうし、遊びたい時だってある筈だよ」

「そんな時はね、私やリヨウに言って欲しいな。私たちでよければ、いつでも遊んであげるから」

「でも いいの？」

「いいよ。私は、お姉ちゃんだからね」

アリスはそつと龍可の頭を撫でてあげてる。龍可は恥ずかしそうにしながらも、どこか嬉しそう。

「そうそう。少くらい我が儘言ったって、罰は当たらないよ」

『お前は言い過ぎだ』

マハードの咎めに、やや困り顔のmana。そんな師弟を見ながら、オレたちは笑っていた。

翌日、ホワイトデー当日。

オレは啓斗と一緒に舞と咲との待ち合わせ場所に向かっていた。

「まあ、返さねえ訳にはいかねえよな」

「そりゃあね」

「にしてもよ、遊星たち、今日は早く来いって言ったよな。何すんだ？」

「さあ？何も聞いてないけど」

「別にいいか。着いたぜ」

確かに。二人はまだ来てないみたいだね。

「確認するまでもねえだろ。来てたら逆に驚くぜ」

「そうかなあ？」

ま、まだ来てないなら、ちょうどいいかな。

「啓斗、先にこれを渡しておくよ」

「なんだよ、これ？」

啓斗に渡したのは青色の宝石。

「なんでオレなんだ？」

「気にしなくていいよ」

「　　また何か企んでやがるな？」

「別に。なんでもないよ」

「チツ。まあいい、何かあるんなら言えよ。力貸すぜ。ま、これは持つといてやる」

ありがとう、啓斗。頼りにしてるよ。

「オ〜イ！」

あ、来たみたいだね。

「よお。一月ぶりか？」

「そうね。久しぶり」

「元気だった？」

「うん。変わり無し、だね」

「待ち合わせた理由はもう解ってるんだろ？これはオレからだ」

啓斗が二人に何かを手渡した。

「啓斗、ありがとう」

「ありがとう」

さて、じゃあオレからも。

「これはオレからだよ」

オレも二人にホワイトデーのお返しを手渡した。

「リヨウもありがとう」

「ありがとう」

「ま、中身は普通の菓子だけだな」

「オレもそんなに大差はないと思うけど」

「ううん。やっぱり嬉しいからね」

「ええ。味わって食べるわ」

二人とも、やっぱり良い人だね。

「さてと、遊星たちを待たせる訳にはいかねえか。じゃあ、オレたちはもう行くぜ」

「うん。今日はありがとう」

「今度会う時は、学園関係になるかな？」

「そうかもね。じゃあ、二人とも、またね」

オレたちは舞と咲に別れを告げて、遊星たちのガレージに向かった。

「あつ、啓斗はやっぱりお菓子だよ」

「リヨウもお菓子 あれ？」

「舞、どうしたの？」

「中に何か入ってるわ。これって 宝石？」

「ええっ！？ 私もだ」

「あつ、メモ紙も一緒よ。えつと

『こんなもの入れててごめんね。特に深い意味はないんだけど、大事に持っていてくれると嬉しいかな。リヨウより』」

「私にも、同じのが入ってるよ。舞、どう思う？」

「リヨウのことだから、きっと深い意味があるんだろうけど
。言われた通り、大事に持っていますよ」

「そうだね。私はオレンジみただけど、舞は何色？」

「私のは紫よ」

「ふうん。どついう意味なんだろう？」

「さあ？全然解らないわ」

さて、二人はもう中を見たかな。大事に持っててくれるといいんだけどね。

あれ、用意するの大変なんだけどね。

オレたちは遊星たちのガレージに着いた。アリスたちはまだ来てない。なぜなら、

「なるほど。考えたね。みんなで纏めてお返しして訳か」

「ああ。良い考えが全く思い付かなかったからな」

オレたちは、只今あることの準備中。何かというと、

「いやあ、楽しみじゃん、バーベキュー」

「おい、龍亜。メインはオレたちじゃねえんだぞ」

遊星たち四人が考えたのはバーベキュー。今はその準備中。オレたちは準備を終え、アリスたちを待った。

「なんでオレたちが手伝ったのが疑問だな」

「済まない。こういうことには慣れてなくてな」

まあ、準備中に焼き始めそうになったり、食べそうになったりしてたからね。

「こんにちは〜！」

あっ、来たね。

「あ、もうみんないるのね」

揃って登場。みんな来たね。

「あれ？これって何の準備？」

「もしかしてバーベキュー！？わっ、楽しみ〜！」

由里にはけっこう好評だね。

「ああ。オレたちからだ」

「んじゃ、始めようぜ」

ジューっと良い音が聞こえてくる。用意してたのは二つのセットな
んだけど、

「貴様あ！それはオレが焼いていた肉だぞ！」

「へへっ、ジャックが遅いんだよ」

「おのれ〜 ふんっ！」

「あっ！テメー！ジャック！オレの肉だろうが！」

「お前ら、もう少し落ち着いて食べよ」

片方は予想通りというか、何と云うか。案の定、用意した筈の男性陣が占領して、争いながら食い散らしてる。オレと遊星はもう片方で女性陣と一緒に食事してる。譲り合いながら食べてる。平和だね。

「でも、よくこんなものあったわね」

「作ったからな」

流星遊星。

「あつちは既に何がメインか忘れちゃってるけど」

「済まない。あいつらも、準備はしたんだ」

「まあ、別にいいわ。こうして美味しく頂いてるんだし」

因みに、焼いてるのは専らオレと遊星。遊星だけはメインを忘れてない。

「いやあ、こんなお返しは初めてだね」

「そうだね。リョウと啓斗はお菓子とかだったから」

「しょうがねえだろ。二人でこんな大掛かりなことできるか」

「あつ、啓斗君」

「どうしたの？」

「あっちじゃ食べねえんだよ」

「だろうね。」

「まあ、いい。ほらよ、オレからだ」

「あつ、ありがとう！啓斗君！」

啓斗が由里に渡してる。そろそろオレも渡すかな。

「それから、つと。アキと龍可にアリスだな」

啓斗は次々に渡してるね。

「じゃあ、オレからも。はい、アキ、龍可」

「えっ？私も？」

ああ、龍可は昨日のショッピングがお返しって思ってたんだろうね。

「気にしなくていいから。受け取っというて」

「うん！ありがとう！」

よし。問題なしだね。

「次は、由里だね。はい、どうぞ」

「あは、ありがとう」

甘いもの好きな由里には嬉しいみたいだね。

「あれ？何これ？」

見つけたみたいだね。

「ねえ、リヨウ君。なんか宝石みたいのが入ってるよ？」

「うん、それも受け取って。大事に持ってたね」

「？」

不思議そうにしてるけど、今は説明できないから。オレは由里から離れ、アリスの下へ。

「はい、アリスにも」

「うん。ありがとう。味わって食べるね」

「そっか」

「私にも入ってるね、宝石」

まあね。

「うん。大事にしててね」

「」

さて、絶対感づかれてるけど　どうしようかな。

「やっぱ、アリスにもか。何か意味があんだろ？この宝石」

「あつ、啓斗君の宝石は青色なんだね」

「由里の宝石は緑色、私の宝石は赤色」

三人から一斉に睨まれる。怖いんだけど。

「深い意味はないよ」

「リヨウは嘘つかないよね？」

「嘘はついてないよ。本当に深い意味はないから。今はね」

「今、スツゴク気になる語尾がついたよ！」

「今はまだ話せない。マハードもそうした方がいって言うし」

やれやれといった表情の啓斗、呆れ顔の由里、ムスツとしてるアリス。

「これだけ聞かせる。何か厄介ごとか？」

「　　どうなんだろうね。魔法使い族の神様に聞いてみてよ」

あのお告げは魔法族の里にある祠で聞いたこと。オレも何が起ころかまでは知らないんだよね。

「リヨウ君も知らないんだね」

「どうしても話せない？」

「ごめんね。今話しても、きっと混乱するだけだから」

「そっか」

「必ず話す。絶対話すから。その時まで待っててね」

「ん。解った」

なんとかなった、かな？

「アリスがこう言うんならしょうがねえな」

「そうだね。おとなしく待ってるから、ちゃんと話してね」

「うん。約束するよ」

必ず、話すからね。

「話は終わったか？冷めるぞ」

そつえば、焼肉の途中だったね。

「食べようぜ。あっちじゃろくに食ってねえからな」

「メインを忘れるなよ」

そのあとは、またみんなで賑やかにバーベキューを再開した。

なんだか隠し事してるみたいで、いや、してるけど、心苦しいな。
でも、みんなオレを待っていてくれるから、時が来たら必ず。

ホワイトデー特別編：宝石（後書き）

いかがだったでしょうか？

伏線だらけですけどね。それは今後のお楽しみという事です。

本編ができれば近いうちに更新したいと思います。

それでは、グッチーでした。

第二話：鎗兵と妖精（前書き）

随分遅くなってしまいました。が第二話です。

啓斗と由里の初陣になりますね。

では、どうぞ。

第二話：鎗兵と妖精

「マハードの攻撃！スター・イリュージョン・マジック！」

「グオオオオオ！」

LP
O

ふう。これで三体目か。下級兵も大分減ったとは思っけど。

「リヨウ。大丈夫か？」

「大丈夫だよ。次に行こう」

「ちょっと休んだ方がいいよ。アリスちゃんも無茶はダメだって言ってたし、また心配かけるよ？」

「そうだね。少し休もう」

さつきから連続でデュエルしてたからね。マナの言う通り、休んだ方がいいかな。

オレは適当に腰を下ろし、少しの間休息を取った。

「しかし、リヨウは腕を上げたな」

「そうか？私にはそれほど変わらないように感じるが」

「マハードが常にリヨウの傍にいたからだろう。以前は苦戦していた中級兵を相手にしても、今はその影がほとんど見えない」

「言われてみればそうかもしれない。私は近過ぎるのかもしれないな」

「羨ましい限りだ。私はどうしても距離ができてしまつからな」

「だが、お互いが最も信頼しているのも確かだろう？」

「ああ。私はそう信じている」

「どちらが良いのか、一長一短だろうな」

「ああ。距離があれば上手く働く時があり、働かない時もある。逆も然り」

「そうだな」

side 啓斗

「さて 落ち着いたようだな」

「応。今の状況を教えてくれ」

あれからどんくらい経ったのか、それぞれ話したり思い思いリラックスしたりした。

お陰でずいぶん落ち着けた。何か糞だが、リヨウのお陰なんだろう

な。

「状況はずいぶん良いわ。兵の数はかなり減ってるもの。リョウが頑張ってるのでしょね」

「たく。やつぱあいつはスゲエな。伊達に一番経験がある訳じゃねえんだよな。」

「でも 無茶してないかな？」

アリスが一番気にしてるところだろうな。

「絶対にしていないと言い切れません」

「そう だよな」

「ですが、彼を信じましょう。マハードにマナ、“スターダスト”さえいます。そうそう無理はしないでしょ」

「そうだね。きっと大丈夫だよ。ね、アリスちゃん」

「由里 。 うん、そうだね」

アリスの心配性は治んねえな。

「とにかく、状況はかなり良くなった。アリスはともかく、啓斗と由里は初だ。初陣にしてはちょうど良いだろう」

「そうですね。ですが、状況は良くなったとはいえ、油断はできません。闇のデュエルであることに変わりはない、ということを決し

てお忘れなきよう」

「ああ。解ってるぜ」

負けたらどうなるか解らねえ、ぐらいはな。

「よし、行くか。“レッド・デーモンズ”、留守は任せる」

「ふん！行くがいい」

そういや、あいつだけパートナーみてえのがいねえのか。もう一人なんだろうけどな。

「行こうぜ」

「うん。リョウが待ってる」

「だね」

オレたちはそれぞれドラゴンの背に乗せて貰い、飛び立った。さてと、初陣といくか。

s i d e o u t

s i d e アリス

私たち三人は空に飛び出した。

『リョウなら大丈夫だろう。心配なのは解るが、今はこれからのこ

とに集中した方が良い』

「うん。大丈夫だよ」

シンにはお見通しなんだね。私は心配性だから、どうしても心配しちゃうけど、きつとりヨウなら大丈夫。それより、私も早く参加してこの闘いを終わらせないと。

“ブラック・ローズ”の背から状況が見える。精霊のみんなは必死に応戦してる。大丈夫かな。

「マズイわね」

「どうしたの？」

“ブラック・ローズ”が何か呟いてるけど。

“ブラックフェザー”！“エンシエント・フェアリー”！気付いてるでしょう？」

声が聞こえたのか、二体が寄って来た。

「この状況は些かよろしくありません」

「何かあったの？」

「恐らく、この辺りに中級兵がいる」

「何で解るんだよ？」

「周辺をよく見てみる。明らかに兵が多い。中級兵がいると考えるとまず間違いない」

なるほど。確かに、この辺りは多いかもしれない。誰かが行かないと。

『主アリス』

「うん。私たちが行こう」

『ドラゴンたちは口には出さないが、恐らく中級兵が複数いると気がついている筈だ。初陣の二人には荷が重いだろっ』

そうだね。うん、ここは私たちが。

「“ブラック・ローズ”、ここは私たちが行くよ」

「それが良いわね。お願いするわ」

「おい！アリス！」

「大丈夫！先に行つてて！必ず追いつくから！」

「アリスちゃん！」

「由里！気をつけて！」

「うん！アリスちゃんも気をつけてね！」

それだけ告げて“ブラック・ローズ”は別れた。

「 なかなか英断ね。助かるわ」

「ううん。あの二人がいきなり中級兵を連続で相手にするようになったら危険だからね」

「全て解ってるのね。いいわ、気をつけるのよ」

さて、中級兵は いた！

「気をつけなさい。貴女の無事を祈っているわ」

「うん、ありがとう。じゃあ、行ってくるー！」

私は“ブラック・ローズ”から降りて、中級兵の下に向かった。

リヨウもきつとがんばってるんだから、私もがんばろう！

side out

side 由里

アリスちゃんと別れてからも、私たちは飛行を続けてる。

「アリスちゃん 大丈夫かな？」

「恐らく大丈夫です。アリス様も経験があります。無理はなさらないでしょう」

「でもカレン 私、経験ないよ？」

「はい。だからこそ、ここで経験を積んで下さい。皆様もそれを望んでいるでしょう」

「にゃ？どういこと？」

「由里、それと啓斗にはこたびの闘いで経験を積み、今後の闘いに弾みをつけて貰いたいです」

今度は“エンシェント・フェアリー”が話してくれた。

「あんなガイコツ騎士を相手にしろ、と言われても不可能と言って良いでしょう。見たことがあるとはいえ、デュエルするのはまた違います。貴女方二人の為に、リヨウとアリスは体を張りました」

リヨウ君とアリスちゃんが？

「リヨウ様は落ち着かせる為にお一人で最前線に出て行かれました。アリス様は複数いると思われるところにお一人で向かいました」

「リヨウ君はともかく、アリスちゃんのはどういことなの？」

「アリスが一人で別れたところは、恐らく中級兵が複数いたと思われます。全ては貴女方のことを思って故の行動でしょう」

「リヨウ様とアリス様はファントムと闘った経験があります。だからこそ、その闘いは厳しいものだと理解しています。

対する由里と啓斗様はこたびが初、お二人の為にできるだけ良い状況にしようとして下さったのでしょ」

「そう　なんだ」

二人とも　私たちの為に　。

「気にすることはないでしょう。今後の為、経験を積むことが二人に報いることになります」

「うん、そうだね」

でも　私は大丈夫なのかな　？

「！　見つけました！どうやら二体纏めているようですね」

「啓斗様と一緒に行かれては？」

「うん、そうだね」

啓斗君と一緒にの方が安心かな。

“エンシエント・フェアリー”と“ブラックフェザー”と一緒に私
たちを降ろしてくれた。

「由里、状況解ってんな？」

「うん。あそこに、中級兵がいるんだよね」

「ああ。行こうぜ」

啓斗君と一緒に歩き出した。そして、

「貴様ら　スピリットシグナーだな　」

私たちはファントムの中級兵二体と向き合った。

「ああ」

「クツクツ　我等の前に現れたのだ　覚悟はできているな
？」

「お前らをぶっ倒す覚悟はして来たぜ」

「面白い　が、隣の小娘はどうだろうな　？」

「由里？」

「ふええ！？　う、うん、大丈夫だよ　」

「　　ったく。しょうがねえな」

ギョッ

「ふえええ！？　け、啓斗君！？」

な、なんで！？

なんで啓斗君に抱きしめられてるの！？

「大丈夫か？」

「ふえええ！？　ど、どうして！？」

「気付いてねえのか？お前、震えてるぜ？」

「えっ！？」

わ、私、震えてたの？

「心配すんな。恐くねえ奴なんていねえ、みんな恐いんだよ。オレも恐えし、リヨウやアリスだって恐え筈だ。

だが、オレたちは一人じゃねえ。いくら恐くても、頼れる奴がいるんだ。

あいつも言ってたろ？離れていようが、心が繋がってる。そうだから？」

「うん。そうだね」

「ま、なんて言ってみたりしてな」

「ふえ？」

冗談なの！？

「リヨウを真似てみたんだが、やっぱり上手くいかねえな。悪いな、こんなことして。忘れてくれ」

「ううん。ありがとう、啓斗君」

なんだか、ずいぶんスッキリした。私の為にしてくれたんだね。

「さてと、やれるか？」

「うん。大丈夫」

今なら、できる。

「クツクツ　始めるぞ」

啓斗君が私から離れた。

「ああ。構わねえぜ」

「四人のバトルロワイヤルルール　どうだ？」

「いいよ」

「一ターン目は攻撃不可能だ　。始めるぞ」

『デュエル！』

「我のターン」

ガイコツ騎士Aから始まって次に啓斗君、ガイコツ騎士B、最後に私の順だね。

「我は“終末の騎士”を召喚」

ATK/1400

「このカードが召喚に成功した時　デッキから闇属性のカードを墓地に送る　。我は“儀式魔人プレサイダー”を墓地へ」

「儀式か」

「カードを1枚伏せ ターン終了」

「俺のターン！俺は“ジェネクス・ニユートロン”を召喚！」

ATK/1800

「カードを1枚伏せる。エンドフェイズ、“ジェネクス・ニユートロン”の効果により、俺は“クイック・スパナイト”を手札に加える！」

「我がターン。“俊足のキラザウルス”を特殊召喚」

ATK/1400

「このカードを特殊召喚した場合 相手は墓地のモンスターを特殊召喚できる」

でも、私たちの墓地にモンスターはいない。だけど、

「“儀式魔人プレサイダー”を特殊召喚」

ATK/1800

Aの墓地にはモンスターがいる。

「さらに“セイバーザウルス”を召喚」

ATK / 1900

「ターンを終了」

「私のターン!“コーリング・ノヴァ”を守備表示で召喚」

DEF / 800

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

これで1ターン目が終わった。攻撃が始まる。

「私のターン。バトル！」

来る！

「儀式魔人プレサイダー”で “ジェネクス・ニュートロン”を攻撃！」

攻撃力は互角、相打ち。
啓斗君の場からモンスターがいなくなった。

「“終末の騎士”で ダイレクト」

「畏発動!“奇跡の残照”！このターン、破壊されたモンスターを特殊召喚する！

“ジェネクス・ニュートロン”を場に戻す！」

ATK / 1800

「ならば “コーリング・ノヴァ” を攻撃 ！」

「 “コーリング・ノヴァ” が破壊されたことにより、デッキから “コーリング・ノヴァ” を特殊召喚！」

DEF / 800

「ターンエンドだ ！」

「俺のターン！魔法カード“融合”！手札のカカシと“カース・オブ・ドラゴン”を融合し、来い！“竜騎士ガイア”！」

ATK / 2600

「さらに“クイック・スパナイト”を召喚！」

ATK / 1000

啓斗君のシンクロモンスターが来るね。

「レベル4の“ジェネクス・ニュートロン”に、レベル3の“クイック・スパナイト”をチューニング！

受け継がれし魂が、光となって駆け昇る！

シンクロ召喚！光来せよ！“ライトニング・ウォリアー”！」

ATK / 2400

「シンクロ素材となった“クイック・スパナイト”の効果発動！“終末の騎士”の攻撃力を500下げる！」

ATK / 900

「先ずはお前からだ！バトル！」

「残念だが 畏発動 ！ “威嚇する咆哮”！このターン 攻撃宣言できない」

これじゃ、啓斗君はバトルできない。

「チツ！俺はカードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

「我がターン。 “俊足のギラザウルス”をリリース “暗黒ドリケラトプス”をアドバンス召喚 ！」

ATK / 2400

「このカードは貫通能力持ちだ。バトル！」

“暗黒ドリケラトプス”で“コーリング・ノヴァ”を攻撃 ！」

「きゃあああつ！」

由里 LP 2400

くっつ！

やっぱり、痛いなあ。

「由里！大丈夫か！？」

「平気平気！だいじょーぶ！破壊された“コーリング・ノヴァ”の効果で“コーリング・ノヴァ”を特殊召喚」

DEF / 800

「セイバーザウルス”で “コーリング・ノヴァ”を攻撃
！」

「 “コーリング・ノヴァ”の効果で、 “ホーリーフレーム”を特殊
召喚」

DEF / 0

「ターン終了」

「私のターン！」

場に“ホーリーフレーム”がいるけど、手札にカレンはない。だっ
たら、

「 “ホーリーフレーム”をリリースして、 “天空騎士パーシアス”
をアドバンス召喚！」

ATK / 1900

「さらに“天空騎士パーシアス”をリリースして、 “天空勇士ネオ
パーシアス”を特殊召喚！」

ATK / 2300

「バトル！ “ネオパーシアス”で “セイバーザウルス”を攻撃！」

「又ツ
」

ガイコツ騎士B LP 3600

「ネオパーシアス」が戦闘でダメージを与えたことで、私はカードを1枚ドロ―。

私はターンエンド」

「私のターン。クツクツ 我は“マンジュ・ゴッド”を召喚
」

ATK/1400

「我は“マンジュ・ゴッド”の効果により “破滅の儀式”を手札に加える」

“破滅の儀式” ってことは！

「クツクツ 行くぞ
！」

儀式魔法“破滅の儀式”を発動！手札の“マジック・ホール・ゴレム”と墓地の“儀式魔人プレサイダー”をリリース “破滅の魔王ガ―ランドルフ”を儀式召喚」

ATK/2500

マズイ “ガ―ランドルフ”の効果は！

「“ガ―ランドルフ”が儀式召喚に成功した時 このカード以外のこのカードの攻撃力より守備力の低いモンスターを全て破壊する」

「きゃああっ！」

「くっ！」

これで 場に残ってるのは“ガーランドルフ”だけ。

「クックツ この効果で破壊したモンスター1体につき
ーランドルフ”は100ポイント攻撃力を上げる ！」 “ガ

ATK / 3100

「小娘 先ずは貴様からだ ！」

「っ！」

今の私に 攻撃は防げない。

「殺れ ！ “ガーランドルフ”の攻撃 ！」

「あ
」

私 ここで死ぬのかな？

リヨウ君 アリスちゃん 啓斗君 ！

ごめんね。

「そう簡単にやらせてたまるかよ！」

『！？』

啓斗 君？

「畏発動！“軍神の采配”！相手モンスターの攻撃対象を変更できる！」

“ガールンドルフ”の攻撃対象は由里じゃねえ！この俺だ！」

私に向けられた攻撃が折れ曲がり、啓斗君に直撃した。

「ぐあああつ！」

啓斗 LP 900

「がっ は ！」

「け、啓斗君！」

駆け寄ろうとした私を、啓斗君は手で制した。

「だ、大丈夫だ。このくらい、何でもねえよ」

「で、でも」

「それにな デュエルはまだ終わってねえ ! 氣い張っとけ、お前に回るまで 絶対え俺が護ってやっから !」

啓斗君 ！

今の攻撃で もうボロボロなのに 。

「畏発動！ “ ショック・ドロー ” ！ダメージ1000毎に1枚ドロ
ーできる！

俺が受けたダメージは3000以上！3枚ドロー！」

「ホオ ターン終了だ
」

「俺のターンだ！」

啓斗君 がんばって！

「魔法発動！ “ 黙する死者 ” ！墓地の通常モンスターを守備表示で
特殊召喚する！
来い！カカシ！」

DEF / 2100

「おい！大丈夫かよ！？」

「問題ねえ！いくぜ！」

「オオ！」

「チューナーモンスター “ チェンジ・シンクロン ” を召喚！」

ATK / 0

「俺たちの新しい力を見せてやる！」

レベル7のカカシに、レベル1の“チェンジ・シンクロン”をチュ
ーニング!

黒き鎗兵よ!天翔る駿馬と共に、光速を生み出せ!

シンクロ召喚!天空を翔ろ!“暗黒鎗騎兵ガイア”!

ATK / 2700

啓斗君の場に、黒いペガサスに跨がったカカシが現れた。

「へえ。お前、ペガサスまで乗れんのか?」

「つたりめえだ!俺は鎗騎兵だからな!」

ふふ、なんだか、カツコイイな。

「シンクロ素材となった“チェンジ・シンクロン”の効果により、
“ガーランドルフ”の表示形式を変更する!」

DEF / 1400

「バトル!やっちまえ!カカシ!」

「オオ!」

「チイツ
」

「悪いがそれだけじゃねえぜ!カカシは貫通能力持ちだ!
カカシの攻撃!クリスタル・セイバー!」

「又ウウ
」

ガイコツ騎士A LP 2700

「まだまだ！カカシは一度のバトルで二度攻撃できる！」

「なに！？」

凄い。

「いけ！ダイレクトアタック！」

「又アアアアッ！」

ガイコツ騎士A LP 0

やった！一体倒した！

「俺はカードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

そうだ！まだ終わってない！私の場にモンスターはいないんだし。

「チッ 我がターンだ」

でも、

「我は“エーリアン・ソルジャー”を召喚」

ATK/1900

「さらに“超進化薬”を発動。 “エーリアン・ソルジャー”をリリースし 手札から恐竜族モンスター1体を特殊召喚する ！
現れる “超伝導恐獣” ！」

ATK/3300

「死ぬ “超伝導恐獣”で ダイレクトアタック ！」

大丈夫。

啓斗君が、必ず護ってくれる！

「やらせねえって言ったろ？」

「畏カード“立ちはだかる強敵”！攻撃対象はカカシに変更される！」

「おいおい。これじゃオレがやられるじゃねえか」

「問題ねえよ！畏発動！“ジャンク・シールド”！戦闘の破壊を無効にし、オレが受ける戦闘ダメージを相手に与える！」

「又グッ」

ガイコツ騎士B LP 3000

「私のターンだね」

啓斗君のお陰で、私のターンまで無事に回ってきた。

ドローカードは、カレン。

「」無事で何よりです「」

「うん。啓斗君、このデュエル、私が決めるよ」

「応！決めちまえ！」

いくよ、カレン。

「魔法カード“古のルール”を発動！“翼を織りなす者”を特殊召喚！」

ATK / 2750

「さらに、チューナーモンスター“ハネワタ”を召喚！」

ATK / 2000

「いくよ、カレン」

「はい。私たちの新しい力も、見せてあげましょう！」

「レベル7の“翼を織りなす者”に、レベル1の“ハネワタ”をチューニング！」

聖なる純真の心、不屈の魂を持ちて、永久の光と為れ！

シンクロ召喚！目覚めよ！“熾天妖精カレン”！」

ATK / 3000

六枚の翼をためかせ、穏やかな印象だった普段の衣装はなりを潜め、今は白と黄の甲冑を着ている。

「これがカレンの」

「はい。私の新しい姿です」

「うん！」

これが、私たちの新しい力。

「それがどうした　！攻撃力は我が上だ　！」

それは関係ないんだよ。

「カレンの効果発動！墓地のモンスター1体を除外することで、そのモンスターと同じ属性のモンスター1体を墓地から特殊召喚できる！」

私は墓地の“天空騎士パーシアス”を除外して、墓地から“天空勇士ネオパーシアス”を特殊召喚！」

ATK / 2300

「さらに罠カード“エンジェル・リフト”発動！墓地の“ハネワタ”を特殊召喚！」

ATK / 2000

「レベル7の“天空勇士ネオパーシアス”に、レベル1の“ハネワタ”をチューニング！」

シンクロ召喚！“神聖騎士パーシアス”！」

ATK / 2600

「神聖騎士パーシアス”の効果発動！相手モンスター1体の表示形式を変更する！“超伝導恐獣”を準備表示に！」

DEF / 1400

「そして“神聖騎士パーシアス”は貫通能力持ちだよ！バトル！“神聖騎士パーシアス”で“超伝導恐獣”を攻撃！」

「又ウウツ　！」

ガイコツ騎士B　LP　1800

「これで、終わり！カレンでダイレクトアタック！ホーリー・バスター！」

「ハアッ！」

「又　又ウウウツ！」

ガイコツ騎士B　LP　0

勝ったよ　。

リヨウ君、アリスちゃん、啓斗君　。

第二話：鎗兵と妖精（後書き）

二人の新しい力でした。

詳しい効果は後ほどのBの世界にて紹介します。

では、できる限り早く更新したいと思います。

グッチーでした。

第三話・乙女の憂鬱（前書き）

誰かさんの何かが芽生える第三話です。

それから余り触れてはいませんが、今後重要になるかもしれないことが一つあります。

では、ごうごう。

第三話：乙女の憂鬱

side 啓斗

由里の最後の攻撃で、俺たちの勝ちでデュエルを終えた。なかなか危ねえところもあったが、なんとかあったな。

「由里、大丈夫か？」

「にゃ／＼！？」

「ん？どうかしたのかよ？」

「にゃ、にゃんでもないよ！」

「なんだよ？」

変に動揺してねえか？どっか痛むのか？

「由里ー！啓斗ー！」

おっ、この声は、

「アリスちゃん！」

「由里！よかった、大丈夫そうだね」

アリスも大丈夫そうだな。

「にははは。なんとかね」

さてと、もう一人はどうしやがった？まさか、無理してんじゃねえ
だろうな？

「問題ねえな。上、見てみるよ」

カカシの言葉に、視線を上に向ける。
そこには何度見ても見とれちまうドラゴンがいる。のと同時に、も
う一人が飛び降りて来た。

「みんな！」

「リョウ、お前も大丈夫みてえだな」

「こっちの台詞だよ。問題なさそう に見えるけど、大きいの貰
った？」

「 お見通しか。まあ、一発な」

「この世界なら傷はすぐ治るから、大したことはないように見える
けど」

「ま、大丈夫だろ。名誉の負傷って訳だ」

「カカシ、お前は余計なこと言わなくていんだよ。だいたい、何が
名誉の負傷だ？ちよつと助けただけじゃねえか」

仲間を護っただけじゃねえか。

「リョウ！」

「アリス」

「無理してない！？怪我とかは！？」

「平気だよ。無理もしてないから。ね？」

「そうだよ。ちゃんと休みながら闘ってたからね」

マナがそう言うんならそうなんだろうな。

「アリスも大丈夫そうだね」

「うん。平気だよ」

まあ、いいだろ。それより、俺たちはこれからどうすんだ？

「話は済んだか？」

「ああ、ごめんね、“スターダスト”。待たせたみたいで」

「いや。それより、初陣はこれで終わりだ。兵もほとんど残っていない」

みたいだな。後は精霊がちらほら見えるだけだ。

「マハード。私も持ち場に戻る。後は任せて良いか？」

「解った。連絡は随時」

「承知。スピリットシグナーたちよ、いつまたこうして皆の力を頼るか解らない。今宵は休み、今後に備えてくれ。では、私は行く。ではな」

言うだけ言っつて羽ばたいて行きやがった。他のドラゴンも姿が見えねえから、自分のところに戻ったんだろうな。

「そんで？これからどうすんだ？」

「予定通り、私の家に来てくれ。ゆっくりと身体を休めてくれ」
マハードのところに行く予定だったな。さてと、何すっかな。

そういや、由里の様子が変わったのは何でだ？

side out

俺たちはマハードとマナの家に来ている。
みんな、知っている家だからそれぞれに身体を休めてる。
それから、オレたちスピリットシグナーはあることをしてる。

「何が嬉しくてこんなことやってんだ？精霊世界まで来てよ」

「はは。経験上、宿題は早く終わらせておいた方がいいかと思っつてね」

「そうなの？」

「うん。夏休みにいろいろと」

まあ、ここにいる間の暇な時間にしていけばすぐに終わるだろうけどね。

さて、そうして時間を潰して、マナが作った夕食をみんなで美味しく食べた。

そのあと、

「マハード、マナ。ちょっといいかな？」

「どうしたの？」

「ちょっと聞きたいんだけど、この家に置いてる本はオレはほとんど読めないけど、精霊世界って言語はどうなってるの？」

オレの素朴な疑問。初めてここに来た時に本を見た時は何とも思わなかったんだけどね。

「これらの本は　　そうだな、精霊世界の書物だが、ほとんどが過去の遺物だ」

過去の遺物？

「えつとね、簡単に言うと、現在ではあんまり使われてない言語の記録かな」

「現在は人間とコミュニケーションを取る為に私たちは人間世界の

言語を使っている」

「オレたちみたいな精霊を感じることが出来る人の為だね？」

「そうだよ。まあ、喋れない精霊もいるんだけどね」

「だが、元々精霊世界にあった言語も存在している。それがこの書物に記されている」

「なるほどね。二人はその言語を絶やさない為に」

「そういうことになる」

流石、高名な魔術師だね。

「二人は話せるんだよね？」

「私は話せるが、マナはまだしばらく無理だな」

「私はまだ勉強中なんだよ」

なるほどね。だったら、

「マハード、オレにもその言語、教えてくれないかな？」

「はへ？」

マナが変な声出した。

「リヨウ、本気で言っているのか？」

「え、うん。けっこう真面目に言ってるつもりだけど」

「わあ！リヨウと一緒に修業できるんだ！」

学ぶだけだけどね。オレが魔術なんて使える筈ないし。

「しかしな 何故そんなことを？」

「興味があるから、かな。マハードが渋るなら辞めておくけど」

「いいじゃないですか！リヨウがこう言ってるんですから！」

マナは好意的、対するマハードは否定的、理由は、

「私はマナの集中に気をかけているのだがな」

「何ですか？」

「リヨウが隣にいれば、リヨウにはかり気がいくだろう？」

なるほど、マナのことを気にしてるんだ。

「そんなことないですよ！」

「どこかだ」

「はは。まあ、マハードが決めてくれていいよ」

「そうだな。解った。リヨウの意志を組もう」

「やったー！」

「ありがとう、マハード」

「いや。毎日夜に少しずつやろう。言語は毎日の習慣が大切だからな」

「うん。よろしくね」

「するとしたからには、妥協はしない。解ってはいるだろうがな」

「よっし！なんだかやる気出て来たよ！」

マナのやる気も出たみたいだし、オレもやるとなればがんばらないと。

「リヨウの参加がプラスに働けば良いんだが」

不安そうだね。

side アリス

「由里の様子が変？」

「ああ。怪我じゃねえとは思うが、何か知らねえか？」

「うん 解った。ちょっと聞いてみるよ」

「ああ。頼んだぜ」

どうしたんだろう？

私は啓斗と別れて由里の所に行こうとした。

「どうか致しましたか？」

「あ、カレン」

「？」

カレンに聞けば解るかな？

「啓斗が由里の様子が変だと言ってただけど、何か心当たりはないかな？」

「由里の様子　ですか。気にすることはないと思いますよ？」

何か知ってるみたいだけど　。

「大丈夫なの？」

「心配はないと思います。寧ろ心配なのは啓斗様の方ではないかと」

何のことなんだろう？

「どろどろ、部屋の中へ。由里はこちらにいます」

カレンが扉を開けてくれた。遠目に由里が見える。

「！　なんだ、アリスちゃんか」

「なんだとは随分なご挨拶だね」

「にやはは。ごめ〜ん」

私が入った時に凄く不自然に反応してたけど。

「はあ」

「どうしたの？溜息なんかついて。何か考えこと？」

「にやはは　ちよっとね」

「私でよければ、話を聞くよ？」

「にやはは、ありがとう。

えっとね　なんだかむずむずするの」

むずむずする　？

「もう少し解り易くお願いできるかな？」

「にやはは　私もよく解んない」

それもそっか　。

「突然だよね？だったら、今日何かあった？」

「え〜っと　初めてファントムとデュエルしたくらい？」

疑問形にしても私はよく解らないけど　。

「ふふ。一つ、大事なことを忘れていますよ？」

「にゃ？カレン、私何か忘れてるかな？」

「はい。忘れていますよ」

カレンはもう目星がついてるみたいだね。

「う〜ん　カレン〜、解らないよ〜」

「そうですね。では、ヒントを出しましょう。デュエル前に何かありませんでしたか？」

「デュエル前　？確かあの時は、やっぱり恐くて　それで
っ／／！」

何を思い出したのか、まるでボンツと音がしたみたいに顔が赤くな
った。

「ふふ。思い出したようですね。そうです、あの時啓斗様に　」

「にゃ〜っ／／！それ以上は言っちゃダメ〜／／！」

カレンが何か言おうとしたけど、由里が必死の形相で止めた。

「えっと、啓斗がどうかした？」

「な、何でもない！何でもないよ！アリスちゃん！」

「う、うん」

「そう隠すことはないでしょう。あの時」

「にゃ〜っ！カレン〜！」

あっちに行ったり、こっちに来たり、必死だね。

「良いではないですか。アリス様は由里の無二の親友ですよ？」

「そうだよ、由里。私たちに隠し事は無しだよ？」

「うっっ〜」

顔を真っ赤にして涙目になりながら、渋々認めてくれた。

「それで、啓斗がどうしたの？」

「えっと ファントムとデュエルする前に、私はやっぱり恐くて震えてたみたいなんだけど」

やっぱり、誰でも怖いよね。

「そ、その時 け、啓斗君に抱きしめられて / /」

「ぶっ〜！」

「あ〜っ！アリスちゃん今笑った〜っ！」

「ご、ごめん、由里。で、でも ふう」

「む〜っ！アリスちゃんのバカ〜っ！」

大声を出してプンスカと怒っちゃった。

「ふう。啓斗に抱きしめられて安心したんだね？」

「うん／＼」

「啓斗には大胆なことしたんだね」

「そ、それで、デュエルの時も啓斗君が護ってくれて / /」

「ふう。だからなんだね」

「ふう？なにが？」

「由里がむずむずしてる理由だよ」

簡単だったね。カレンが微笑ましくしてる訳だ。

「理由って、アリスちゃん解るの？」

本人はまだ無意識なんだね。

「ねえ、由里。啓斗のことどう思うっ？」

「ふえ？んぐ、優しい友達、かな」

「えっと、そついつことじゃなくて、由里は啓斗を異性としてつづ
思つっ。」

「ふえ？異性？うん」

悩むことじゃないと思っけど。

「好き？嫌い？」

「それはもちろん、好 きいい／＼！？」

「ふふ。由里は啓斗のこと好き？」

「ふえええっ／＼！？ア、アリスちゃん何言っ て / /」

「じゃあ、啓斗が由里とじゃなくて、他の女の子と仲良く手を繋い
でたらどう思っっ？」

「う それは ヤだ」

「それが証拠じゃないかな。啓斗のこと、やっぱり好きなんだよ」

「 うん／＼。そうかも／＼」

やっと自覚したみたいだね。

「ふふ。がんばってね」

「 解んないなあ」

どうしたのかな？

「何すればいいのかな？アドバイスアドバイス！」

「 なんだか随分あれだね。前向きというか何というか」

「 スツキリした所為かな？」

それは私にも解らないけど。

「 アドバイスは そうだね。想いを伝えることが一番なんだけど

「 いきなりは流石に無理だよ」

そうだよね。

「じゃあ、普段の行動から意識してみて。いろんなことを話して、啓斗のことを知るのが大切だよ」

「 うん。解ったよ」

ふふ。楽しみだなあ。

『どっつやら、完全に自覚したようですね』

『そのようだな』

『シン。貴方も見ていたのですか？』

『影からな。色恋はよく解らないが、カレンは詳しそうだな』

『そうですか？由里のことなら解りましたが、他の方は解りませんよ。』

『そうか。しかし、仲が良いことだな』

『そうですね。お二人は親友ですから。気兼ね無く話せるんですよ』

「やっぱり抱きしめられると安心するんだね。私もそうだからよく解るよ」

「にゃはは。抱きしめられると暖かいからかな？」

「ふふ。どうなんだろうね」

『あんな感じでしょう』

『そうだな。私は皆が笑っていればそれで良い』

『そうですね。その通りです』

side out

ある暗がりの中、一個の水晶が輝いていた。どうやら、何らかの映像が写し出されているようだ。

『マハードの攻撃！スター・イリュージョン・マジック！』

「なかなか、成長したものだ。やはり、〇〇の血を濃厚に引いているな」

「いかが致しますか？」

「予定通りだ。行ってくれ」

「はっ！」

ある騎士の気配が消えた。行ったようだ。

「彼は未来を変える逸材だ。だからこそ 彼はこのままではいけない。」

彼は自身の運命に向き合って貰わなければ

水晶の明かりが消えた。その一瞬に、キラリと光るものが見えた。

第三話：乙女の憂鬱（後書き）

精霊世界の言語はどうなってるんだ？と調べてのことです。
今後重要になるかもしれない。

由里ちゃん覚醒！

啓斗君は眠ってますが。いつ覚醒するかは完全に未定ですね。

では、次話もできるだけ早く。
グッチーでした。

第四話・使者（前書き）

今回はデュエルがあります。それから、1枚だけ禁止カードが出ます。

その点を踏まえて、どうぞ。

第四話：使者

精霊世界に来て、その翌日。

「ん、気持ちいい朝だね」

オレは軽くのびをした。

朝早くに目を覚ましたオレは、外に出て新鮮な空気を吸っていた。マハードだけはついて来ただけだね。

「朝早くに目が覚めるのは構わないが、一人で外に出るのは止めてくれ。いつ襲われるか解らない」

「解ってるよ。でも、こんなに綺麗な世界でも 争いは起こってるんだよね」

「どんな世界でも、その世を乱そうとする輩はいる。平穏な日々々に退屈し、スリルと快感を求めてな。 。 何故かは私には解らない。平穏な日々だとしても、学ぶことは数多くある。そう、思うのだがな」

「争いを無くすことはできないのかな」

「何とも言えない。だが、平穏があればある者が毀し、平和があれば争いを運んでくる者がいる。

そんな者と闘い、再び平穏な日々を取り戻す。そういった連鎖があるのかもしれないな」

「

」

「リヨウ？何か可笑しいことを言ったか？」

「いや、今日はやけに饒舌だね。何かあった？」

「少し、夢を見てな」

夢？

「気にしないでくれ。そろそろ戻ろう。皆も起き出す頃合いだろう」

そう言ったマハードが家に戻ろうと歩を進めた。こんなマハードは珍しい。ちよつと気になるな。

オレたちは家に戻り、朝食を採った。ファントムの情報は入って来ないし、各々の時間を過ごす。オレは庭に出て外を眺めてる。

「ねえ、マハード」

「どうした？」

「夢のこと、よければ聞かせて欲しい」

あんまり深入りするのは良くないかもしれないけど、どうしても気になった。

「昔の夢だ。遙か昔のな」

「あれ？お師匠様も見たんですか？」

「マナも昔の夢を見たの？」

「うん。懐かしい、昔の夢をね」

昔のことか。

尚更、詮索するのは気が引けるなあ。

ガシヤ　　ガシヤ

『っ！』

三人一斉に反応した。何か来る？

「何者だ！？姿を見せる！」

ガシヤ

歩みが止まった。

「我だ　マハードよ」

姿を見せたのは、金色の鎧を身に纏い、剣を携えている。

「開闢”」

まさか　“カオス・ソルジャー　開闢の使者”！？幻のモンスター。

「久しいな。何年振りだ？」

「解らん。もう覚えておらんからな」

「そうか。しかし、何故私の家に？」

「少し、大役を背負って来たのだ」

何だろうか？

「リヨウ！どうしたの！？」

みんながドタドタと駆け付けて来た。

「」

あれ？今何か喋ったけど、全く解らなかった。

「おい、今なんて言ったんだ？あいつ」

「今のは、精霊世界の言語だよ」

「マナ、今なんて言ったか解る？」

「えっと、流暢過ぎてよく解らなかった」

「」

マナが何かを言い返した。マナが解らない以上、何も解らないし。

「」

「？」

「」

「解った」

話が終わったみたいだね。何だったんだらう？

「リョウ。出掛ける準備をしてくれ」

「マハード？」

どういうこと？

「これから、彼の案内でどこかに行く。マナもだ」

「ちょ、ちょっと待って！どういうことなの！？」

アリスは納得できないみたいだね。いや、みんな表情は一緒か。

「アリス、心配はいらない。彼は私の友人だ」

「そうかもしれないけど、今は状況が！」

「数日空けることになるかもしれないが、リョウにとってこれは必要なことらしい」

「でも」

マハードがこう言ってる以上、オレは行くべきなんだろうね。しかも、来たのは幻のモンスター。相当重要なことなんだろうね。

「行こう、マハード」

「リョウ」

「大丈夫だよ、アリス。少し空けるだけだから」

「うん」

「必ず帰って来るから、約束する」

アリスに近づいて、そっと抱きしめた。

「あ」

微笑みかけて、またそっと離れた。

「啓斗、由里、ちよっとの間、頼むね」

「ったく！わあったよー！」

「その代わりに、ちゃんと帰って来てね？」

「うん。解ってるよ」

「リョウ　気をつけてね。無茶したらダメだよ？」

「うん。約束する」

オレは簡単に支度をして、みんなに見送られながらマハードの家を跡にした。

side マハード

“開闢”がリョウに用があるとは一体何だ？

“開闢”は私の旧い友、信頼もできる。だが、奴はリョウのことを知っている。

その上で用がある？訳が解らない。

「えっと、“開闢”でいいのかな？」

「何かな？」

「マハードとの会話を理解してないから、何なのかよく解らないんだけど、オレに必要なことって何？」

「君は単刀直入だな」

「状況が状況だけにね。ファントムのこともあるし」

「そうだな。スピリットシグナーである君が戦線を離れるのは、端から見れば下策だ」

端から見れば　やはり何かあるのか？

「だが、例え下策だろうと、成せば常道と成り得る」

「えっと、抽象的過ぎて何のことかよく解らないんだけど」

「リヨウの言う通りだ。事情が全く掴めない」

「そう急くな。と、言いたいところだが、時間が惜しいのはこちら
も同じ」

何だ？

「リヨウよ、今より私とデュエルして貰おう」

「待て!“開闢”、何を言っている！？その為にリヨウを連れ出したのか？」

「そんな筈なかつ」

「ならば」

「全てはデュエルが終わってから話してやるわ」

く　聞く気がないな。

「唐突な来訪、予測不能な行為、相変わらずだな」

「我は使命を帯びている。それ故の行為だ」

「お師匠様、いいんですか？」

「それはリヨウ次第だ」

「そうだ。全ては君次第。ここで決意するのは、他ならぬ君自身だ」
私が決めることではない。リヨウ自身が決めることだ。

「デュエルが終われば、話をしてくれると?」

「約束しよう。ただし、本気で来い。遠慮は無用だ」

「解ったよ。デュエルしよう」

決まったか。

“開闢”が何を考えているか解らないのはいつものことだが、今回は特に謎だな。

side out

オレが“開闢”とデュエルすることが決まった。

「これより、デュエルを始める」

「っ!?!?」

そう言い放つと同時に、とてつもない気が発せられてきた。
。 。
思わず後ずさりそうになる。

「臆したか?」

「 ちよつとね」

今までシテイで間違いなく五本の指に入る遊星やジャックさんとデュエルしてきたけど、これほどの威圧感は正直初めてだね。

「本当に正直だ。これからデュエルする相手に、気の迷いを知られて良いのか？」

「感づかれた以上、しょうがないと思うけど」

「良い戦士だ。マハードのマスターなだけはある」

褒めてくれたのかな？

「一つ、今後について助言をしておこう。

君は、大いなる運命に立ち向かうことになるだろう。だからこそ臆せ。眼前の敵に恐怖しろ。怯え、恐れ。そして、その恐怖を飼い馴らせ。それは君の大きな武器と成る。

君の行為は、全て自ら考え、己の意志で実行しろ。君ならば、この大いなる運命に打ち勝つことができる筈だ」

淡々と、でもどこか熱く語ってくれた。

「始める」

『デュエル！』

「私の先攻。我は儀式魔法“カオスの儀式”を発動！手札のレベル8モンスターをリリースし、“カオス・ソルジャー”を儀式召喚！」

ATK / 3000

いきなり攻撃力3000の最上級モンスター。

「カードを1枚伏せ、ターン終了だ。

来い！マハードのマスターたる君の力を見せてみる！」

オレを試してるんだ。何となくだけど、そんな気がする。

「オレのターン！」

オレも、初めから全開でいく！

「魔法カード“古のルール”を発動！マハードを特殊召喚！」

ATK / 2500

「さらに、魔法カード“師弟の絆”を発動！マハードが場に存在する
場合、マナを守備表示で特殊召喚する！

来い！マナ！」

DEF / 1700

「ふっ 1ターン目から師弟を召喚したか。そうでなくてはな。
だが、攻撃力は届かない。どうする？」

「私たちの絆を甘くみないで貰おうか」

「お師匠様のご友人みたいですが、痛い目に合いますよ？」

そういうことだね。

「魔法カード“黒・魔・導・双・弾”を発動！マナの攻撃力を、マハードに加える！」

ATK/4500

「バトル！マハード！マナ！」

「いくぞ！」

「はい！」

『ブラック・ツイン・バースト！』

「ぐっ！」

開闢の使者 LP 2500

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「今のターンの攻防は見事だった。君たちの絆は確かなものだ」
今度は確かに褒められたね。

「腕試しのつもりだったのだが、それではとても追い付かないようだ。本気でいかせて貰う！」

「っ！」

さらに威圧が強くなった。底無しだね。

「私のターン！魔法カード“壺の中の呪文書”！お互いにカードを3枚ドロウする」

来るか？

「私も“古のルール”を発動する！現れよ！白き龍！“青眼の白龍”！」

ATK/3000

場に現れた白き龍。何度か見たことはあったけど、こうして目の前に現れるのは初めてだね。

「まだだ。永続罫“正統なる血統”！」

「“正統なる血統” まさか！？」

「そのまさかだ。墓地より、“青眼の白龍”！」

ATK/3000

2体目！

「3体目、といきたいところだが、生憎手段が無い。少し物足りないが バトルだ！」

2体の“青眼の白龍”で攻撃！」

「ぐぐっ！」

「きゃあっ！」

「っあっ！」

リョウ LP 3500

っ。

全部巻き返してきた。それに、今の衝撃は。

「闇のデュエルほどではないにしても、それなりに衝撃はある筈だ」

そういうことが けど！

「畏発動！“奇跡の残照”！マハードを特殊召喚！」

もう一度頼むよ！

「成る程な。ならば、カードを1枚伏せ、ターン終了だ」

「オレのターン！」

まだまだ、まだ終わってない！

「畏発動！“賢者の導き”！墓地より、マナを特殊召喚！」

ATK/2000

「ごめんね、二人とも。このデュエル、かなり無理させるかも」

「気にするな」

「そうだよ。リヨウは私たちのマスターなんだから」

ありがとう、二人とも。

「いくよ。チューナーモンスター“マジシャンズ・シンクロン”を召喚！」

ATK/0

「レベル7のマハードに、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング！

黒き魔術が集いし時、新たな光の力が目覚める。光差す希望と為れ！シンクロ召喚！舞い降りよ！”SF ブラックマジシャン”！」

ATK/2900

「さらに、シンクロ召喚に成功した“マジシャンズ・シンクロン”は、自身の効果で場に戻る！」

ATK/0

「レベル6のmanaに、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング！

黒き魔術が交わりし時、新たな絆の幕が開く。光差す希望と為れ！シンクロ召喚！舞え！”SF ブラックマジシヤンガール”！」

ATK / 2400

「成る程　これが師弟の進化した姿か」

「装備魔法“団結の力”をマハードに装備！」

ATK / 4500

「いくよ、“開闢”！」

バトル！マハードで“青眼の白龍”を攻撃！」

「させん！カウンター罠“攻撃の無力化”！バトルフェイズを終了させる！」

流石、簡単に決めさせてはくれないか。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン！魔法カード“サイクロン”を発動し、“団結の力”を破壊する！」

ATK / 2900

っ！すかさず破壊してきたか。

「さらに、“融合”発動！」

“融合”　まさか！

「いくぞ！“青眼”3体融合！“青眼の究極龍”！」

ATK / 4500

初めて見る。これが3体融合した“青眼”。

「凄い」

「うわ 流石にこの姿は久しぶりに見るよ」

二人は見たことあるみたいだね。

「バトル!“青眼の究極龍”でマハードを攻撃！」

「ぐうっっ！」

「うああっ！」

リョウ LP 1900

うく。

流石は“究極龍”の攻撃。効くなあ。

「マナの効果発動!“奇跡の残照”を除外して、戦闘で破壊されたマハードを特殊召喚！」

ATK / 2900

「そうだ。そうこなくてはな。ターン終了だ」

「オレのターン！」

とは言ったものの、どうするかな。あの“究極龍”を倒さない限り、オレに勝ちはない。なら、倒すだけだ！

「マナの効果発動！墓地の“黒・魔・導・双・弾”を除外し、マナの攻撃力をマハードの攻撃力に加える！」

ATK/5300

このターン、オレはあの“究極龍”を倒す！

「バトル！さあ、もう一度頼むよ！」

『スター・イリュージョン・ツイン・マジック！』

「ぐあっ！」

開闢の使者 LP 1700

「倒してくるか。流石だな」

「なんとかね」

次は何をしてくるのか。
さっきから召喚してくるのは伝説級のモンスターばかりだしね。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「私のターンだ！魔法カード“天の落とし物”を発動！互いにカードを3枚ドロし、2枚を墓地へ送る」

手札交換　何かする気だね。

「墓地の“デーモンの召喚”と“青眼の白龍”を除外し、“カオス・ソーサラー”を特殊召喚！」

ATK / 2300

厄介なモンスターが出て来た。

「“カオス・ソーサラー”の効果発動！マハードを除外する！」

「その前に罠を発動する！“亜空間物質転送装置”！マハードをエンドフェイズまで除外する！」

結局除外することになるけど、“亜空間物質転送装置”の効果で除外したから、エンドフェイズに場に戻って来る！

「　上手く躲したようだな。だが、恐らくはこれで終わりになる。魔法カード“龍の鏡”を発動！墓地の“カオス・ソルジャー”と“青眼の究極龍”を融合する！現れよ！最強の騎士！“究極龍騎士”！」

ATK / 5000

場に現れた“究極龍騎士”。これが、伝説の“カオス・ソルジャー”と最強の龍“青眼の究極龍”を融合した最強の騎士！

「終わりだ。それとも、まだ粘ることができるか？」

まだ、終わってはいない。オレは諦めた訳じゃない！

「バトル!“究極龍騎士”でマナを攻撃！ギャラクシー・クラッシュヤー！」

「きゃあああっ！」

「うあああああっ！」

途方もない衝撃に襲われ、吹き飛ばされた。

side 開闢

我が“究極龍騎士”の攻撃により、リヨウは吹き飛んだ。これで終わりだ。

「無事か？」

問い掛けたは良いが、答えることができるかどうか。

「まだ デュエルは、終わって ない！」

「何 ！？」

リヨウ LP 500

ライフがまだ残っているだと ！

「どづいうことだ ？」

「オレはマナの効果を発動した。墓地の“ご隠居の猛毒薬”を除外して ライフを1200ポイント回復したよ」

それで堪えきつたのか。

「リョウウ！」

マナだと！？破壊した筈だ。

「オレは罨カード“マジシャンズ・バリア”を発動して、マナを破壊から護ったよ」

大したものだ。

しかし、最早立つことは叶うまい。ここまで　っ！

「何だと！？」

「ハアツ！ハアツ！」

この期に及んでまだ立つというのか　！

「これ以上はもう無理だよ！」

「だ、大丈夫。それに、まだデュエルは　終わってない
！」

まだ目が死んでいない。何たる闘志か　！

「カードを1枚伏せ、ターン終了だ」

「む、無茶だよ！もうボロボロなのに」

「止めるな、マナ」

マハードが場に戻って来たか。

「お師匠様！どうして!?!」

「リョウ自身がそう言っている」

やはりマハードは理解している。リョウのあの目、この闘志。まだ勝負を捨てていない！

「オレの、ターン!」

しかし、この状況が変わる訳ではない。如何にする？

「オレは チューナーモンスター“氷結界の風水師”を召喚
!」

ATK/800

「チューナーモンスターの召喚に成功したことで、墓地の“マジカル・ヘッジホッグ”を特殊召喚
!」

ATK/1000

「ハアッ!ハアッ!」

「 苦しいだろう？何故それ程まで ？」

「ハアツ！ さあ？ただ、ここは退いちゃいけない 。そんな
気がするだけだよ 」「

成る程。本能で悟っているということか 。

「オレは レベル3の “マジカル・ヘッジホッグ” に、レベル3
の “氷結界の風水師” を チューニング！
白き魔術が重なりし時、百戦錬磨の魔術師が現れる。光差す希望と
為れ！

シンクロ召喚！冴え渡れ！ “高尚なる魔術師トエルカウロ” ！」

ATK / 2300

新たなシンクロモンスターか 。

「いくよ！」

目が輝きを増した 。

勝負に来るか？

「トルンカの効果発動！ “究極龍騎士” の攻撃力をエンドフェイズ
まで半分にする！」

ATK / 2500

「マハードは、効果により全てのモンスターに攻撃できる！」

素晴らしい 。

最後まで諦めない不屈の精神、どんな困難だろうと勝利への道を切り開くカードとの絆。

「マハードの攻撃！スター・イリユージョン・マジック！」

「ぐあああつ！」

開闢の使者 LP 700

「マナでダイレクトアタック！」

「畏カード“ガードブロック”発動！戦闘ダメージを0にし、カードを1枚ドロウする！」

「終幕だ！トルンカでダイレクトアタック！」

光の閃光が我を襲った。

「ハアツ！ハアツ！」

「見事だ。まさか、本当にここまで強いとは全く予想していなかった」

「ハアツ！ハアツ 何で、ライフが減ってない？」

そつだ。まだデュエルは終幕を迎えていない。

「我が“ガードブロック”の効果で引いたカードは、“クリボー”！このカードを墓地に送ることで、ダメージを0にした」

「　っ！」

「私のターンだ」

正真正銘、これで終わりだな。

「私は墓地の“クリボー”と“青眼の白龍”を除外し、我自身“カオス・ソルジャー 開闢の使者”を特殊召喚する！」

「っ！」

最後まで、良い目をしている。決して絶望に染まることのない目だ。

「我自身で、“高尚なる魔術師トエルカウロ”を攻撃する！」

リョウ LP 0

「気を　失ったか。マハード、マナ、どうだ？」

「酷く消耗しているが、しばらく休めば問題ないだろう」

そうか。何よりだ。

「　」

「そう睨むな、マナ」

「やり過ぎだ。何も本気でやることはなかっただろう?。」

「だが、本気でやらなければ負けていた。我が本気を出してさえ最後の攻撃は危うかったのだ。」

これでまだ発展途上とは どれ程成長するのやら 「

「発展途上 ?」

「そうだ。二人とリヨウの力は未だ発展途上にある。ついて来い。本当の目的地に向かう」

そう 全てはこれから始まる。

第四話・使者（後書き）

リヨウ初の敗北ですね。この小説内での話ですが。

次話はデュエル無しですが、大事な話になります。伝説がまた一つ姿を現します。

それでは、グッチーでした。

第五話：隠された真実（前書き）

真実が明らかに！

伝説のあの男が登場します。

では、どうぞ。

第五話：隠された真実

「うっ　っ！」

ハッと目を覚ました。オレは　　気をうつ

「リョウウ！」

「わっ！マナ！？」

マナが抱き着いてきた。

「うっ、心配したんだよ」

「　ごめんね、マナ。もう大丈夫だから」

オレは“開闢”に負けて気を失ってたんだね　　。

「大丈夫か？」

「うん。大丈夫だよ、マハード」

それより、ここはどこだろ　　？いつの間にか暗がりの中にいるけど　　。

「聞きたいことはここがどこか、そんなところか？」

「　“開闢”　　。まあ、そんなところだね」

「その問には答えられないが、ついて来れば解る」

「どういふことだろ？」

「来るか？」

「行くよ」

「即断か。良かろう、行くぞ」

暗がりの中を“開闢”の先導で進んで行く。どこに行くんだらう？

「着いた。ここだ」

「えっと」

目の前には巨大な扉が翻ってる。

「ここって？」

「私たちも解んないけど」

「入れ。君の、いや、君たちの運命への第一歩になるだらう」

オレたちの、運命？

「行こう。マハード、マナ」

「ああ」

「うん」

オレたちはこの巨大な扉を開け、奥へと進んだ。

ここは 玉座の間？

「ここは 何だ？」

マハードたちも知らない。

「ここは玉座。本来、お前たちが入って良い場ではない」

誰かの声が聞こえた。どこから？

「じ、この声は まさか！？」

「い、いや、でもそんな筈はないんじゃない」

二人がやけに動揺してる。声の主に心当たりがあるみたいけど。

「お前たちは、特別にオレがここへ招いた」

声の主は いた！

奥の奥、玉座に座ってる！首に金のパズルをかけてるけど。

「なっ ！？」

「ええっ！？」

やっぱり二人はあの玉座の人を知ってるんだ。

「な、何故、貴方がここに

ファラオ」

ファラオ？

「王子 何故？」

「フツ、久しぶりだな。マハード、マナ」

どうやら、知り合いみたいだね。

「何故？」

二人は事態を飲み込めてないみたいだけど。

「お前たちと同じだ。オレは相棒との戦いの儀を終え、冥界へと還った」

「えっと、話の途中で申し訳ありませんが、この状況は一体？」

状況が全く理解できないのは間違いなくオレ一人だし。

「フツ 済まない。君は何も知らないんだっただな」

「私たちの過去の話だ」

今日夢に見たっという？

「済まないが、しばらくじっと聞いていてくれ。理解できないかもしれないが、少しはオレたちのことが解る筈だ。君の話は終わり次第する。それで良いか？」

「はい」

二人のことがもつと解るのなら。

「どこまで話したか 戦いの儀だったな。」

冥界へと還ったオレたちは、この精霊世界で新たな生を与えられた」

「はい。私は“ブラックマジシャン”の精霊として」

「私は“ブラックマジシヤンガール”の精霊として」

三人は元々人間だったってこと ？

「そうだ。そしてオレは、この精霊世界を影から治める王として、この精霊世界に生を与えられた」

この人が 王？

「表ではシグナーの五体の龍がそれぞれ統治しているが、オレはそれを影から支える者ということだ。」

だから、表に出ることはできない。今までオレの存在を知っていた

のは極少数、“開闢”はその一人だ」

「それ故に、“開闢”の行動はファラオの命で」

「そうだ。そして、今回の命は彼を、リヨウをここに連れて来ると
いうものだ」

オレをここに ？

「マハード、マナ。お前たちとの話はこれくらいで良いな？」

「はい。驚きましたが、納得が이었습니다」

「私もです」

「これからが本番だ。
リヨウ、待たせたな」

「いえ、大丈夫です」

少しは二人のこと解ったしね。

「改めて名乗ろう。オレは古代エジプトを治めていたファラオ、ア
テムだ」

古代エジプト王！？

「マハードとマナはオレに仕えていた神官だ。
これで少しは合点がいったか？」

「はい」

なるほどね　これで今までの話が繋がる。

「オレは記憶を無くし、ある男の魂と共有するようになった。その男はオレの相棒、武藤遊戯だ」

武藤遊戯　初代決闘王のことだ　。

「その後、オレは仲間たちの協力のお陰で記憶を思い出した。そして、今に至る」

「しかし　何故そのことをオレに？」

「このままでは、君は自身の運命に打ち勝つことができないからだ」

「それはどういう？」

「百歩譲って、ファントムを退けることはできるかもしれない。だが、この先はまず不可能だ」

「　意味が解りません」

「いずれ解る。だが、このままではファントムを退けることもできないかもしれない」

今のオレじゃダメってことか。

「では、オレはこれからどうすれば　」

「その為に、君に“開闢”とデュエルをさせ、ここに呼んだ」

やっぱり、“開闢”とのデュエルはオレを討る為に。

「君が強くなる為に、先ずは君自身のことをもっと知るべきだ」

オレ自身のこと？

「君は自分の本名を知っているか？」

「リヨウ、ですが」

「名字は？」

「ありません」

「そうだ。君は両親からそう教えられている」

「どういう意味ですか？」

オレが知らないことを何で？

「それはね、リヨウ」

「オレたちがアテム様と関係者だからだよ」

「っ!？」

はっきり覚えている声。

玉座の後ろから姿を現している人影。

「何で 何で !
父さんと母さんがここにいるんだ!？」

見えた人影は間違える筈もなく父さんと母さんそのもの。
何で、ここに父さんと母さんが !？

「君の両親は、オレの人間世界での協力者だ」

「それって」

「本当のことよ」

「仕事は ?」

「こなしている。頼む、悪い方に想像しないでくれ。お前から離れた理由は間違いなく仕事なんだ」

良かった。
でも、何を信じていいのか解らないよ。

「マハードとマナも見えてたってことだね ?」

「ああ。気付かない振りをしていた」

「じゃあ、何で黙ってたの ?」

「アテム様からお願いされてたの。アテム様の存在は隠さなきゃいけないから」

「じゃあ、オレに隠してるこつて何？」

「アテム様と、オレたちの名字だけだ」

「信じていいの？」

「リヨウ」

「だって！だってそうだろ！？ずっと一人で、何も知らされないで生きてきたようなものじゃないか！？」

自分の押し隠してた感情が溢れてくる。止めようにも、止められない。

「それがいきなり現れて！仕事大変だろうから、がんばってるだろうから、何も言わずに堪えてきたんじゃないか！

それでいきなり現れて、自分たちは隠してたことを話して信じろって言われても信じられる訳ない！」

「リヨウ！聞いて！これには理由が」

「聞きたくない！」

もう何を信じていいかも解らない。オレは、

「全ては、リヨウ次第だ」

「マハード」

「落ち着いて。リヨウ」

「マナ」

頬に冷たいものが流れていく。
そんなオレを二人が支えてくれた。

「リヨウがいつも淋しい想いをしてるのは解ってたよ」

「アリスにさえ隠していたようだが、常に一緒にいた私たちには解った」

「だけど、私たちじゃそんな淋しさを完全に埋めてあげられなかった。それが辛くて、もどかしかった」

「あ」

「でもね、実体化できるようになって、もっと触れ合えるようになって。。」

リヨウは言ってくれたよね？私たちは、家族だ、って」

「そうだ。そうだよ。」

オレにはいつも、傍にマハードとマナがいてくれたんだ。」

「あの時、本当に嬉しかった。リヨウの淋しさ、少しは埋めてあげられたかなって」

「それに、リヨウには頼もしい友がいる」

アリス、啓斗、由里。」

「一人ぼっちじゃないんだよ」

「離れていても、心は繋がっている」

そつだ。それなのに、オレは、

「泣いてもいいんじゃないかな。涙を見せられるのも、強さの一つだよ」

「うっ　　うっ　　うああああっ！」

オレはしばらく、咽び泣いた。

「落ち着いた？」

「うん　　。ありがとう、マナ　　」

「全てはリョウ次第、何を信じ、何を思うか、全てはリョウ次第だ」

全てはオレ次第　　。

オレが考えて、オレが決めればいいんだ　　。

「父さん、母さん　　。話して。オレは、信じるから　　」

信じなきゃ始まらない。相手は正真正銘オレの親なんだから　　。

「ありがとう　　リョウ」

「決心はついたようだな」

「はい」

「ならば話そう。君は、マハードとマナに出会い、デュエルを始めた」

「そうです」

「そして君は成長し、二人の力を完璧に引き出すことができるようになった。これは、並のデュエリストができることではない」

そうなんだ。

「その理由は、君の血筋にある」

は？

「オレでも、その二人の力を引き出すことはできなかった」

父さんでも？

でもそれなら血筋は関係ないんじゃない？

「関係あるんだ。最初に二人の力を完璧に引き出した者の血を、君はより濃く引いているから」

最初に、マハードとマナの力を　　っ！
じゃあ、オレの本名は！

「気付いたようだな　　。」

君の本名は、武藤亮！初代決闘王、武藤遊戯の血筋だ！」

オレが　武藤遊戯の血筋　。

「君はその中でも、相棒の血を濃く引いているんだ」

隣にいるマハードとマナも驚いてる。そりゃそうだよな　。

「武藤って名字は珍しいの　。これが知られたら、世間が騒ぐことは目に見えてるから　」

なるほど　。それで隠してたんだ。

「理解できたか？」

「はい。でも、それはオレたちの絆には関係ないんじゃないですか？血がどうであろうと、それ程関係があるとは思えません」

オレは両隣にいる二人を見て笑い合う。オレたちの過ごした時間に、血は関係ない。

「フツ　その通りだ。君は父親からマハードとマナのカードを譲り受けたが、それからは全て君たちの時間。その事実を覆すことは誰だろうと出来ない」

「じゃあ、血筋っていうのは　？」

「初めて出会った時、君は二人に声をかけられた筈。二人は無意識に感じ取っていたのだろう」

「確かに、今言われてみればそうかもしれない」

「お師匠様自ら声をかけるなんてなかったですからね」

そういうことがあるんだね。

「マハードとマナは代々受け継いでいたが、力を引き出せた者は皆無だったと聞くよ」

「でも、いざリヨウが、つてなったら、あらビックリってことになったの」

あれ？ちょっと待ってよ、

「このカードって」

「相棒が使っていたオリジナルそのものだ。世界でたった1枚しかないカードだ」

やっぱりそうなんだ。そんなカードを持つてるなんて光栄だな。

それにしても、オレが遊戯の血をね。実感が湧かないなあ。

「無駄に意識することはない。君は君だ」

「はい。そうですね」

「ただ あんまり人には言わないでね？本当に信用できる人にだけね」

「うん。解ったよ、母さん」

「アテム様のことは誰にも言わないでくれ」

「それって、アリスにも？」

アリスには隠し事したくないんだけどなあ。

「アリスさんと一生過ごすというのなら、構わないよ」

「了解です。父さん」

どうしよう。

言う＝プロポーズの式が成り立つことに。

「とにかく、オレのことはできる限り黙っておいてくれ」

「解りました」

「オレがコンタクトを取りたい時は“開闢”を君の下に向かわせる」

“開闢”は連絡役か。

あれ？ちよっと待って。当初の目的って。

「あの、当初の目的って今のままじゃダメって話じゃ？」

「大丈夫だ。しっかり順序を踏んでいる。証拠に、お互いのことを深く知っただろう？」

確かに。

オレは二人のことを、二人はオレのことを。

「君は、マハードとマナをシンクロさせ、更なる力へと進化を遂げた。だが、シンクロには更なる力への進化が無数にある」

「えつと？」

「限られた進化などない、ということだ。人間が様々な進化を遂げて今に至るように」

なるほど。マハードの言う通りか。

「君は、その進化の先にある新境地の一つに辿り着ける筈だ」

新 境地？

「いや、訂正する。君たちは、だな」

そうだね。オレたちはいつも一緒だから。

「その為に、君たちには少し修行をして貰う」

「待つて下さい、ファラオ！リヨウがファントムとの戦線から離れ過ぎる訳には」

「解っている。君は間違いなくスピリットシグナーの心の中核を為しているからな。」

だが、だからこそ、新境地へと辿り着いて欲しい。一刻も早く！ファントムを倒す為にだ！」

ファントムを倒す為に、オレたちは強くならなくちゃいけない！

「修行はどのくらい時間がかかりますか？」

「一日、君たちならそれで十分だろう」

一日か。

「みんなには、少し負担かけるかな？」

「ファントムの攻勢が強くならなければ良いが」

「なんにしても、速く修行を修めるしかないよ」

マナの言う通りか。

「時間が惜しいな。行くか？」

「はい！」

「リョウ。気をつけてね」

「がんばれよ！」

「うん！行って来るよ、母さん、父さん」

オレたちはアテム様の導きに従い、跡を追った。

ほぼ同刻、明朝。新たな運命の輪が動き出していた。

『ピー！ピー！』

「うん。なあに？こんな時間に」

安らかに眠っていた女の子を起こす声。どうやら相当慌てているようだ。

『ピー！』

「うん。何なの？」

ゆっくりと意識を覚醒させる。その瞳に映るものは、

「うん。えっ！？」

起きた直後、瞳に映ったものを見て慌てふためく。

「ぎゅ、ぎゅって」

『ピーッー』

「きゃあああっ！？」

まばゆい光に包まれた。

同じく同刻、ここでも運命の輪が動き出していた。

『キュー！キュー！』

「うゝ 何なの？」

女の子は時計を見る。

「まだこんな時間じゃないゝ。スゝスゝ」

再び眠りにつく。

『キューツ！』

少しだけ怒ったような声を張り上げる。

「何なのよゝ ええええええっ！？」

声の主を見た瞬間、腹の底から声を出した声が響き渡る。まだ朝なのに。

『キュー！キューツ！』

「なっ、何！？うわあああっ！？」

まばゆい光に包まれた。

「ここだ」

ランプが一つだけ灯っている。他には何も見えない。その先にあるのは光が一切ない真っ暗闇の洞窟。

「えっと、アテム様、修行って？」

リヨウは問い掛ける。

「この洞窟を抜けることだ。もちろん、明かりなどない」

「三人でこれを抜ける」

「簡単じゃないですか？」

「言うは易し、するは難し」

「簡単な修行をしても意味はない」

「はい」

「まあまあ。そんなにしょんぼりしないで、マナ」

リヨウはアテムとマハードに責められたマナを慰める。

「君たちなら、一日あれば抜けられる筈だ。先には“開闢”を待た

せておく」

「解りました。では、行きます」

「ああ」

三人がすたすたと真っ暗闇の洞窟に向かって歩き出した。

「無事に帰って来い」

誰知らず、ぼそりと呟いた。

第五話：隠された真実（後書き）

伝説の決闘王、武藤遊戯。そして魂を共有していたファラオ。この二人が登場しました。

中の人は当初、出さないつもりでしたが、この展開を考えたので結局出しました。

リョウがマハードとマナに出会った理由。それは今まで秘匿にしてきたフルネームにありました。

武藤亮。これがリョウのフルネーム。武藤遊戯の血をより濃く引き継いだのがリョウですね。

そして、三人で修行へ。新境地に辿り着く為に。クリア・マインドとバーニング・ソウルではありません。オリジナルです。

では、今回はこれまで。グッチーでした。

第六話：訪問者（前書き）

今回、この小説始まって以来のことが一つ。リョウが出て来ません。名前こそ登場しますが、それ以外はありません。

そのお陰か、非常に難産でした。

では、どうぞ。

第六話・訪問者

side アリス

リョウが行ってから一日が過ぎた。帰って来なかったなあ。

「ふう」

「そう溜息をつくな。リョウは必ず帰って来る。そうだろうっ。」

「うん」

そう信じてる。でも、いつ帰って来るのかな？

「主アリスの心配性はそうそう治るものではないな」

「きゃっきゃっしょー」

リップがいきなり飛び付いて来た。

「わっ！ちょっと待って、リップ！そんなに嘗めちゃダメだよ！」

「きゃっしょー」

「うん。心配してくれてるんだね。」

「ごめんね、リップにまで心配かけて」

「きゃっしょー」

気にしなくていい、そう言ってくれてるんだね。
うん。みんなには心配かけていけないよね。

リヨウは私たちに今の状況を任せて行った。私にできることは、リヨウを信じて待つことと、この状況を護ること。リヨウが戻って来るまで、必ず。

でも、やっぱり早く帰って来て欲しいなあ。

別れ際に抱きしめられたけど、暖かった。由里とあんな会話してたから余計に。
あ、考えてたら熱くなってきちゃった。

「どうやら大丈夫そうだな」

「アハハ」

シンにはお見通しか。

「だが、リヨウが帰って来た時に何かして貰っても良いだろう」

そうだよな。何して貰おうかな。

「アリスちゃん！」

「由里？どうしたの？」

「シグナーの龍が来たの！何だか緊急だった！」

緊急？

どうしたんだろう？

私は下に降りて、話を聞くことに。
下に行くと、“ブラック・ローズ”と“ブラック・フェザー”、
“エンシエント・フェアリー”がいた。

「何かあったの？」

「ええ。何かあったのよ。それなりに大変なことがね」

「明朝だったから気付かなかっただろうが、その時に精霊世界への扉が開いた」

「えッ!？」

「どういう意味だよ？」

「精霊世界への扉が開いた、つまり何者かがこの世界に来たということだ」

「じゃあ、その人は、」

「その人は五人目のスピリットシグナー!？」

「解らないのです。しかも、二カ所で扉が開いたようなのです」

「二カ所ってことは、」

「二人いるの？」

「恐らく、いるわね」

「ふえ？ちよつと待って。二人いるなんてことがあるの？」

「そうだぜ。スピリットシグナーはもう四人いるだろ？後二人ってことは六人もいることなのか？」

「そっだよな。」

「スピリットシグナーは五人って聞いてる。六人ってことはあるの？」

「何もかも解らないわ。だからこそ、とるべき行動は一つよ。」

「助けに行くんだね？」

「その通りよ。その為に私たちが来たわ。」

「スピリットシグナーであろうとなかろうと、今の精霊世界は危険だから放っておく訳にはいかないし。」

「二カ所ってことは二手に別れないと。」

「俺が一人で行く。由里とアリスはもう片方を頼むぜ。」

「待って、啓斗。私が一人で行くよ。」

「何言ってるんだ！リョウがいねえこの状況で一番辛いのは間違いない。お前だろ！？」

「確かにそうだ。でも、いろんな意味で啓斗は由里と一緒にいて欲しい。」

「大丈夫だよ。リヨウはすぐ帰って来る。私だけへこたれてる訳にはいかない」

「アリスちゃん」

「ホントにやれるんだろうな？」

「大丈夫だよ」

リヨウが帰って来るまで、この世界は護るんだから。

「話は決まったわね。行くわよ」

私は“ブラック・ローズ”に乗せて貰い、空に上がった。

「どこに行くの？」

「この世界にある溪谷よ」

溪谷　？

「すぐに着くわ。準備してなさい」

「うん」

今回は正真正銘私一人だけど、なんとかしないと。

「着いたわ。行くわよ」

「うん！」

私は溪谷に到着して、ここに来ているだろう人を捜す。

「捜すのは良いけど、どうすれば」

「簡単よ。騒ぎの大きい場所に行けばほぼ間違いないわ
あっちね」

確かに騒ぎが大きそうな場所がある。

「ファントムはもう来てるんだね」

「残念ながらね」

騒ぎの大きい場所に向かうと、ファントムの下級兵が道を塞いできた。

「ここは引き受けるわ。先に行つて」

「うん、ありがとう。シン！」

次はシンの背中に乗せて貰い、“ブラック・ローズ”を囿にして先に進んだ。

溪谷の奥まで来たね。

「えッ！？何でアリスがここに？」

私が視界に捉えたのは、見覚えのある七色の鳥と

「ま、舞！？」

どうして舞がここに　？舞に青き痣は無かった筈だけど　。

「とりあえず、先ずは状況を把握しなければな。その為にも、お互いに落ち着いて貰おう」

シンの言う通りだね。良し　。

「えっと、舞。朝ここに来たの？」

「う、うん。そうなんだけど　何が何だかよく解らなくて　」

舞自身、よく解ってないのかな？

「ここはどこなの？」

それから解ってないんだね。

「ここは前にちよつとだけ話した精霊たちが住んでる世界だよ。隣の“*The Rainbow Comet*”がいるよね？」

「え、ええ　」

「来た時のこと、覚えてる？」

「　この子に呼ばれたんだと思うわ。朝この子の鳴き声に起こされて、次に気が付いたらここに　」

「そうなの？」

「ピー」

喋れないみたいだね。

「シン、何言ってるか解る？」

「いや。リップのように同族なら解るが、異族となれば話は別だ」

「そう」

どうしようかな　っ！

「話はこちらまでのようだね」

「そうみたいだね」

「ピーッ！ピーッ！」

「ホオ　気付かれたか」

ここまで来たね。

「中級兵　全部で四体か」

舞に闘わせる訳にはいかないし、私一人でなんとかするしかない！

「ここはかなり奥地の筈だが、もう来たのか。どうやら元々か

なり攻められてたようだな」

「シンの言う通りだね」

「堪らず舞を呼んでしまったのだろう。舞が何故精霊を感じられるようになったかは解らないが」

それより、今を切り抜けないと。

「舞、ちよつと下がってて」

「え、えッ？」

舞は戸惑ってるけど、私は中級兵の下に歩を進めた。

「貴様だけで 我等の相手をするつもりか？」

「そつだよ」

「後悔するなよ」

お互いにデュエルディスクを構える。

『デュエル！』

side out

side 啓斗

俺たちは“ブラック・ローズ”の世界に来ている。来たのはとある森だ。

とは言え、来た瞬間ファントムに囲まれた。“ブラック・フェザー”と“エンシエント・フェアリー”が囷として俺たちを先に行かせてくれたけどな。

「しかし、何で世界の主が来なかったんだ？」

「“スターダスト”がリョウ君を迎えに行ってるみたいだから、一人で行ったアリスちゃんのところにも早く行く為だって言ってたよ。“ブラック・ローズ”はアリスちゃんのパートナーみたいなものなんだしね」

「なるほどな」

あのバカはいつまでほっつき歩いてんだか。
早く行ってやれよ。。

「啓斗君？どうかした？」

「いや、なんでもねえ」

とにかく、今は早くこっちを終わらせて戻らねえとな。

「おい。随分奥地まで来たが、まだ目的はいねえぞ」

「いえ。着いたようです。見て下さい」

カカシとカレンの話に吊られて前を見た。

「ええええええええっ!？」

「そりゃこっちの台詞だ」

「にははは。今ので驚き飛んじやったね」

ま、それは置いといてだ。

「何でここにいんだよ? 咲」

「いやいやいや!それこっちの台詞!だいたいここどこ!?!？」

そこから解ってねえのか。どうやら、人間世界から来たのは咲で間違いねえな。

「えっとね、ここは精霊世界で解るかな?」

「その前に精霊って解るか?」

普通はそこから解んねえよな。

「精霊なら、少し聞いたことあるよ。リョウとアリスにちょっと聞いたから」

それなら話は早えな。

「その精霊たちが住んでる世界だ。で、どうやってここに来たんだよ?」

「知らない！朝気付いたら、この子が近くに来て！何かあったと思
ったらここにいたの！」

この子 “The Protean Moon” かよ。

「朝気付いたらってことは、咲ちゃんは精霊を感じることできたの
？」

「できなかったよ！」

「どういづとは、感じる事ができるようになったといづいづです
ね」

そんなことがあんのか？ あるんだろうな。

「おい、啓斗」

「何だよ って！」

「そづいづった。思索に耽ってる場合じゃねえ」

何でこんな時に来るんだよ タイミング悪過ぎじゃねえか！

「由里！」

「うん！咲ちゃんは下がっててね！」

「えっ？何！？何なの！？」

「キューッ！」

「ここはあいつに任せておけるだろ。」

「ガシャ　　ガシャ　　」

「よう　　」

四体も来やがったな　　。

「クツクツクツ　　。始めるぞ　　」

チツ！仕方ねえな！

「啓斗君！二体ずつで良いよね？」

「応！気をつけるよ！」

俺と由里で二体ずつ受け持つ。これで咲にムダな負担をかけることはねえ。

「クツクツクツ　　覚悟しろ　　」

「悪いな。今はお前等に構ってやる時間がねえ！さっさと終わらせてやるぜ！」

「良いだろう　　」

『デュエル！』

「私のターン　　　我はフィールド魔法“アンデットワールド”を発

動　　！」

場が気味の悪い空間に変わっていく。せつかくの森が台なしじやねえか。

「“馬頭鬼”を召喚　　」

ATK/1700

「カードを1枚伏せ　　ターン終了　　」

「俺のターンだ」

ターンはガイコツ騎士A　俺　ガイコツ騎士B　俺　ガイコツ騎士A　の順だ。今回は俺一人だからこのターンから攻撃が許されてるがな。さあ、いくぜ！

「俺は“トライデント・ウォリアー”を召喚！」

ATK/1800

「このカードが召喚に成功した時、手札のレベル3モンスターを特殊召喚できる！“クイック・スパナイト”！」

ATK/1000

「レベル4の“トライデントウォリアー”に、レベル3の“クイック・スパナイト”をチューニング！

受け継がれし魂が、光となって駆け昇る！

シンク口召喚！光来せよ！“ライトニング・ウォリアー”！」

ATK / 2400

「クイック・スパナイト”の効果発動！シンクロ素材となった時、相手モンスター1体の攻撃力を500下げる！」

ATK / 1200

「バトルだ！“ライトニング・ウォリアー”で“馬頭鬼”を攻撃！
ライトニング・パニッシャー！」

「ヌツ
」

ガイコツ騎士A LP 2800

「さらに！“ライトニング・ウォリアー”が戦闘でモンスターを破壊した時、相手の手札1枚につき300ポイントのダメージを与える！」

「ヌグツ
」

ガイコツ騎士A LP 1900

「俺はカードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

さて、先手は打った。もう一体はどうくるか？

「我がターン 速攻魔法“手札断殺”を発動 ！お互いのプレイヤーは手札を2枚墓地に送り 2枚ドロウする ！」

いきなり手札交換か。

「“ゾンビ・マスター”を召喚」

ATK/1800

「効果発動 手札1枚を墓地に送り 墓地のレベル4以下のアンデットモンスターを特殊召喚する。
“ピラミッド・タートル”を特殊召喚」

ATK/1200

「墓地の“ゾンビキャリア”の効果発動 !手札1枚をデッキに戻し このカードを墓地より特殊召喚する !」

ATK/400

「レベル4の“ピラミッド・タートル”に レベル2の“ゾンビキャリア”をチューニング !
シンクロ召喚 !現れよ ! “デスカイザー・ドラゴン” !」

ATK/2400

「このカードが特殊召喚に成功した時 相手の墓地のアンデットモンスター1体を 我的場に特殊召喚する」

「 俺の墓地にアンデットなんていねえぜ?」

「 “アンデットワールド”の効果により 場と墓地のモンスター

は全てアンデットと化している」

チッ！そうだったな。

「トライデント・ウォリアー”を特殊召喚」

ATK/1800

あのフィールド魔法を先になんとかしねえとな。

「速攻魔法“終焉の地”を発動！相手が特殊召喚に成功した時、デッキからフィールド魔法を発動できる！

デッキから“シンクロ・モニュメント”を発動する！」

場が変わり、白いモニュメントがそびえ立っていく。

しかし、使うタイミングを間違えたな。まあ、悔やんでも仕方ねえな。

「バトル “デスカイザー・ドラゴン”で “ライトニング・ウォリアー”を攻撃！」

攻撃力は互角！相打ち狙いか！？

「速攻魔法“突進”発動！ “デスカイザー・ドラゴン”の攻撃力を 700アップさせる！」

ATK/3100

「ぐっ！」

啓斗 LP 3300

「トライデント・ウォリアー”で ダイレクトアタック ！」

「させねえよ！手札から“ジャンク・ディフェンダー”を特殊召喚
！」

DEF / 1800

「ダイレクトアタックを受ける時、このカードは特殊召喚できる！」

「チツ
」

「これでバトルフェイズは終了だが、畏発動！“受け継がれる魂”
！“ライトニング・ウォリアー”が破壊されたことで、デッキから
同じレベルの戦士族通常モンスターを特殊召喚する！
来い！カカシ！」

ATK / 2300

「さっさと終わらすぜ！」

「応よ！」

「俺のターン！“ライティ・ドライバー”を召喚！」

ATK / 1000

「このカードが召喚に成功した時、墓地の“レフティ・ドライバー”
を特殊召喚できる！」

ATK / 300

「レフティ・ドライバー」が特殊召喚に成功した時、レベルを3にできる！」

さあ、いくぜ！

「レベル3となった“レフティ・ドライバー”とレベル3の“ジャンク・ディフェンダー”に、レベル1の“ライティ・ドライバー”をチューニング！」

シンクロ召喚！光を切り裂け！“セブン・ソード・ウォリアー”！」

ATK / 2300

このカードはライティングデュエルじゃ余り使い所がねえが、スタンディングなら話は別だ！

「俺は墓地の“神剣 フェニックスブレード”の効果を発動！墓地の“ライトニング・ウォリアー”と“ジャンク・ディフェンダー”をゲームから除外し、このカードを手札に加える！」

“神剣 フェニックスブレード”を“セブン・ソード・ウォリアー”に装備！」

ATK / 2600

「“セブン・ソード・ウォリアー”の効果！カードを装備した時、800ポイントのダメージを与える！イクイップ・シヨット！」

「又ッ
」

ガイコツ騎士B LP 3200

「まだだ！ “セブン・ソード・ウォリアー” の効果により、装備された“神剣 フェニックスブレード” を墓地に送ることで、相手モンスター1体を破壊できる！ “デスカイザー・ドラゴン” を破壊！」

ATK/2300

「又ウツ ！」

これであいつの場の“トライデント・ウォリアー” も破壊される！

「バトル！ “セブン・ソード・ウォリアー” で“ゾンビ・マスター” を攻撃！セブン・ソード・スラッシュ！」

「又ウツ ！」

ガイコツ騎士B LP 2700

「フィールド魔法“シンクロ・モニュメント” の効果！俺がコントロールするシンクロモンスターが相手モンスターを戦闘で破壊した時、カードを1枚ドロウする！」

さらに、カカシでダイレクトアタック！スパイラルセイバー！」

「又ツ グ ！」

ガイコツ騎士B LP 400

後一歩つてところか。さっさと終わらす為にも、次のターンで決めてえな。

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「チツ　　私のターン　。永続罠“リビングゲットの呼び声”を
発動　　“馬頭鬼”を特殊召喚　」

ATK/1700

「“馬頭鬼”をリリース　　“ヴァンパイア・ロード”をアドバン
ス召喚　　！」

ATK/2000

「“ヴァンパイア・ロード”をリリース　　“ヴァンパイアジェネ
シス”を特殊召喚　　！」

ATK/3000

「このカードの効果を発動し　　手札の“闇より出でし絶望”を墓
地へ　　墓地より“ヴァンパイア・ロード”を特殊召喚　　」

ATK/2000

「墓地の“馬頭鬼”を除外し　　“闇より出でし絶望”を特殊召喚
　　！」

ATK/2800

一気に上級モンスターを3体も並べやがった　　。

「いくぞ　“ヴァンパイアジェネシス”で“セブン・ソード・ウオリアー”を攻撃　！」

「畏発動！“鎖つきブーメラン”！攻撃モンスターを守備表示にする！」

DEF / 2100

「さらに、“鎖つきブーメラン”は“セブン・ソード・ウオリアー”の装備カードとなり、攻撃力を500上げる！」

ATK / 2800

「“セブン・ソード・ウオリアー”の効果を受けてもらっぜ！イク
イップ・シヨット！」

「又ッ
」

ガイコツ騎士A　LP　1100

「　ならば　“闇より出でし絶望”で“セブン・ソード・ウオリアー”を攻撃　！」

攻撃力は同じ。相打ちか　。

「　ターン終了だ　」

カカシが残ったのはありがてえな。どちらにしろ、このターンで終わりだけだな！

「俺のターン!“アタック・ゲイナー”を召喚！」

ATK/0

「決めるぜ！カカシ！」

「任せろ！」

「レベル7のカカシに、レベル1の“アタック・ゲイナー”をチュ
ーニング！」

黒き鎗兵よ！天翔る駿馬と共に、光速を生み出せ！

シンクロ召喚！天空を翔る！“暗黒鎗騎兵ガイア”！」

ATK/2700

「シンクロ素材となった“アタック・ゲイナー”の効果発動！相手
モンスター1体の攻撃力を1000ダウンする！“ヴァンパイア・
ロード”の攻撃力をダウン！」

ATK/1000

「いくぜ！カカシで“ヴァンパイア・ロード”を攻撃！クリスタル・
セイバー！」

「又アアアアッ！」

ガイコツ騎士A LP 0

「さらに、カカシは1ターンに二度攻撃できる！
お前も終わりだ！カカシでダイレクトアタック！」

「又オオオッ！」

ガイコツ騎士B LP 0

「へエ、二体を相手に、やるじゃねえか」

「まあな」

さあ、こっちをさっさと片付けて戻らねえとな。

第六話：訪問者（後書き）

次話は由里のデュエルです。

新作、遊戯王ZEXAL始まりでしたね。5D・sは毎回楽しんでいました。ZEXALはどうなるでしょうか？

主人公がこれからどう成長するのか楽しみではあります。

では、グッチーでした。

第七話・窮地（前書き）

今回は由里のデュエルです。

それから、窮地ですね。

では、ごうき。

第七話：窮地

Side 由里

二体の中級兵と対峙してる緊迫の状況が続いてる。

「気負ってはいませんか？」

「にははは。大丈夫だよ」

カレンは優しげに微笑んでくれる。

「では、急かずにいきましょう」

「ふえ？でもアリスちゃんが」

「急いては事をし損じる。急がば回れ。ですよ」

「にははは。解ったよ」

「始めるぞ」

さあ、いくよ！

『デュエル！』

「私のターン フィールド魔法“バーニングブラッド”を発動
「！」

フィールドが大火山に変わっていく。
こんなフィールド魔法使ったら、森が焼け野原になっちゃっよ。

「きつね火”を守備表示で召喚」

DEF / 0

「カードを1枚伏せる」 ターン終了

「私のターン」

このフィールド魔法を早くなんとかしないと、この森が焼けちゃうね。

「私は、フィールド魔法“天空の聖域”を発動するよ！」

火山が消え、空に浮かぶ白城が出現した。

これで森は大丈夫だね。

「勝利の導き手フレイヤ”を召喚するよ！」

ATK / 1000

「このカードの効果で、私の天使は攻撃力が400ポイントアップするよ！」

ATK / 500

「さらに永続魔法“コート・オブ・ジャスティス”を発動！レベル1の“フレイヤ”が場にいることで、手札から天使を特殊召喚する

よ！

“ 天空騎士パーシアス ” を特殊召喚！

ATK / 2300

「バトルだよ！ “ 天空騎士パーシアス ” で “ きつね火 ” を攻撃！」

「 永続罠 “ バックファイア ” を発動 ! 炎族モンスターが破壊され墓地に行った時 500のダメージを与える ! 」

攻撃は止められない。でも、

「 “ 天空騎士パーシアス ” は貫通能力持ちだからね！」

「又ツ ! 」

ガイコツ騎士A LP 1900

「 “ バックファイア ” の効果 ! 」

「 きゃっ! 」

由里 LP 3500

「 “ 天空騎士パーシアス ” の効果で、カードを1枚ドロ！
まだだよ！ “ フレイヤ ” でダイレクトアタック！」

「又ツ ! 」

ガイコツ騎士A LP 1500

これで大きくダメージを与えたよ。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「エンドフェイズ 破壊された“きつね火”は場に戻る」

DEF / 200

「我がターン 魔法カード“手札抹殺”を発動。互いに手札を全て捨て 捨てた枚数だけカードをドローする」

私が墓地に送ったカードは2枚。

「我が墓地には “ラヴァル・ウォリアー”、“ラヴァル炎樹海の妖女”、“ラヴァルロード・ジャツジメント”の3体がいる。よって“ラヴァルバーナー”を特殊召喚！」

ATK / 2100

「“紅蓮地帯を飛ぶ鷹”を召喚」

ATK / 100

「レベル5の“ラヴァルバーナー”に レベル1の“紅蓮地帯を飛ぶ鷹”をチューニング。
シンクロ召喚 “ラヴァル・グレイター”！」

ATK / 2400

「このカードがシンクロ召喚に成功したことにより 手札1枚を墓地へ。」

さらにシンクロ素材の“紅蓮地帯を飛ぶ鷹”の効果発動！“ラヴアル”モンスターが墓地に3種類存在することにより このカードは場に戻る」

ATK/100

「魔法カード“黙する死者”を発動！墓地の“炎の剣豪”を守備表示で特殊召喚」

DEF/1100

「レベル4の“炎の剣豪”に レベル1の“紅蓮地帯を飛ぶ鷹”をチューニング！」

シンクロ召喚！“ラヴアル・ツインスレイヤー”！」

ATK/2400

1ターンに2体のシンクロモンスター。

「バトル！“ラヴアル・グレイター”で “天空騎士パーシアス”を攻撃！」

「フィールド魔法“天空の聖域”の効果により、天使がバトルしたダメージは受けない！」

戦闘ダメージは0だけど、“パーシアス”は破壊される。

「“ラヴアル・ツインスレイヤー”で “勝利の導き手フレイヤ

”を攻撃　　！”

「きゃっ！」

これで私の場にモンスターはいない。

「カードを1枚伏せ　ターン終了　」

「私のターン！“ハネワタ”を召喚！」

ATK / 200

「“コート・オブ・ジャスティス”の効果発動！お願い！カレン！」

ATK / 2750

「さあ、いきましよう」

うん。私に力を貸して。

「レベル7のカレンに、レベル1の“ハネワタ”をチューニング！
聖なる純真の心、不屈の魂を持ちて、永久の命と為れ！

シンクロ召喚！目覚めよ！“熾天妖精カレン”！」

ATK / 3000

「カレンの効果発動！墓地の“天空騎士パーシアス”を除外して、
墓地から“フレイヤ”を特殊召喚！」

ATK / 100

「フレイヤの効果！天使の攻撃力がアップする！」

ATK / 3400

ATK / 500

「バトル！カレンで“ラヴァル・グレイター”を攻撃！」

「永続罠“炎熱旋風壁”発動　！墓地の“ラヴァル”1体につき
場の“ラヴァル”は攻撃力が100アップする　！」

ATK / 2800

ATK / 2800

攻撃力がアップしたけど、カレンには届かない！

「攻撃続行だよ！ホーリー・バスター！」

「又ツ
」

ガイコツ騎士B　LP　3400

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「我のターン
」

“きつね火”と永続罠“バック・ファイア”があるけど　。

「魔法カード“テラ・フォーミング”を発動　“バーニングブラ
ッド”を手札に加え　発動」

やっぱり。警戒しておいて良かったね。

「速攻魔法“サイクロン”発動！発動前に“バーニングブラッド”を破壊！」

「！？」

「これ以上、この森には手を出させないよ！」

「チツ　　我は“フレムベル・マジカル”を召喚　」

ATK / 1400

「レベル2の“きつね火”に　　レベル4の“フレムベル・マジカル”をチューニング　　！」

シンクロ召喚　　！“フレムベル・ウルキサス”　　！」

ATK / 2100

シンクロ召喚には成功したけど、攻撃力はカレンの方が高い。これなら大丈夫な筈だね。

「カードを1枚伏せ　　ターン終了　　」

「私のターン！」

手札は2枚、大したことはできそうにないね。

「バトル！カレンで“フレムベル・ウルキサス”を攻撃！ホーリー・

バスター！」

「又グツ！」

ガイコツ騎士A LP 200

「罨カード“時の機械 タイム・マシーン”発動！フレムベル・ウルキサス”は復活する！」

ATK/2100

「永続罨“バックファイア”の効果！」

「きゃっ！」

由里 LP 3000

熱いなあ。

これ以上の攻撃はできないね。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「我がターン 装備魔法“サラマンドラ”を“ラヴァル・ツインスレイヤー”に装備！」

ATK/3600

「ラヴァル・ツインスレイヤー”で “熾天妖精カレン”を攻撃！」

「罨カード“攻撃の無力化”！バトルフェイズを終了させるよ！」

「チツ　！カードを2枚伏せ　ターンエンドだ　」

「私のターン！」

カレンより攻撃力は僅かに上。どうしようかな　。

「大丈夫ですよ」

「カレン？」

私にゆつくりと微笑みかけてくれる。この軟らかい物腰がいつも私を落ち着かせてくれる。

「私は由里を信じていますので」

「うん。私もだよ」

私にはいつもカレンがいる。だから闘えるのかも。

「コート・オブ・ジャスティス”の効果発動！“The splendid VENUS”を特殊召喚！」

ATK/3200

「このカードが場に存在する限り、場の天使以外の攻撃力は500ポイントダウンするよ！」

ATK/1600

ATK / 3100

「チイツ　！」

「バトル！」

「畏カード“威嚇する咆哮”　！」

私の攻撃はできないね。

「ターンエンドだよ」

「私のターン　“ガード・オブ・フレムベル”を召喚　」

ATK / 1000

「レベル6の“フレムベル・ウルキサス”に　レベル1の“ガード・オブ・フレムベル”をチューニング　！」

シンクロ召喚　　！“エンシエント・ゴッド・フレムベル”　！」

ATK / 2000

「さらに装備魔法“巨大化”　　！攻撃力を倍にする　！」

ATK / 4000

攻撃力がカレンを上回った！？

「バトル　　！“エンシエント・ゴッド・フレムベル”　　“熾天妖精カレン”を攻撃　　！」

「カレンはやらせないよ。手札から“オネスト”の効果発動！このカードを墓地に送って、カレンの攻撃力に“エンシエント・ゴッド・フレムベル”の攻撃力を加えるよ！」

ATK / 7400

「カレンの迎撃！」

「又グウウツ！」

ガイコツ騎士A LP 0

よし、まずは1体目だね。

「私のターン！バトル！“The splendid VENUS”で“ラヴァル・ツインスレイヤー”を攻撃！」

「チツ　！」

ガイコツ騎士B LP 3300

「終わりだよ！カレンでダイレクトアタック！」

「速攻魔法“紅蓮の炎壁”　！墓地の“ラヴァル”4体を除外し
“ラヴァルトークン”を4体特殊召喚　！」

DEF / 0

“トークン”が4体も召喚された。このターンじゃ決められないね。

「カレンと“フレイヤ”で“トークン”を攻撃するよ」

これで“トークン”は2体に減ったよ。

「我がターン 2体の“トークン”をリリース “ラヴァルロード・ジャツジメント”をアドバンス召喚！」

ATK/2400

「効果発動！墓地の“ラヴァル”1体を除外し 1000ポイントのダメージを与える！」

ATK/2300

「きゃあっ！」

由里 LP 2000

「ターン終了」

熱！

でも、今のターンは多分最後の攻撃。手札はないし、伏せカードもない。

「私のターン！」

このターンで決めるよー！

「バトル！“The splendid VENUS”で“ラヴァ

ルロード・ジャッジメント”を攻撃！」

「又ウツ
！」

ガイコツ騎士B LP 2800

「これで本当に終わりだよ！

カレンでダイレクトアタック！ホーリー・バスター！」

「又グウウツ！」

ガイコツ騎士B LP 0

「フウ
」

「お疲れ様です」

「にやはは。カレンもね」

「いえいえ。さ、次の行動ですね。急ぎましょう」

急ぐところは急ぐ。カレンはそういうことがはっきりしてる。
でも、カレンの言う通りだね。

「啓斗君は無事かな？」

「咲、何ともねえな？」

「うん。大丈夫！」

平気そうだね。私より咲ちゃんの心配してるし。今ならアリスちゃんの気持ち解るなあ。

「啓斗様も困ったものですね。」

啓斗様、こちらは終わりました。そちらも終わっているようで何よりです。立花様も御壮健なようですし、早く帰還しましょう。アリス様が心配です」

「応。そうだな。ケガしてねえか？」

「え、うん。大丈夫だよ」

「いや、何か火傷してねえか？」

「ふえ？そうかな？」

確かに、受けた攻撃は熱かったけど。

「私がヒーリングを施しています。すぐに治りますよ。それに、由里自身痛みは感じていない筈です」

「うん。平気だよ」

「そうか。ま、無理すんなよ」

何気ないんだけど、優しいなあ。

「オッシ！じゃあ、のんびりしてる場合じゃねえな。行こうぜ」

「待ってよ！どこ行くの！？」

「アリスちゃんのところだよ。一人でがんばってるだろうから、早く助けに行かないと!」

「アリスが」

「お前にも来て貰うぜ。ここにいたら危ねえし、一緒の方が俺たちもやり易いんだよ」

「それでいいな?」

「キュー」

相変わらず、何を言っているかは解らないけど。

「悪いが、お前の返答に関わらず来て貰うつもりだぜ。時間がねえんだ」

アリスちゃんを心配する思いはみんな一緒だね。

「皆!無事か!?!」

ドラゴン2体が飛び込んで来た。何ともなさそうだね。

「この森の事後処理は引き受けます。皆は“ブラック・フェザー”に乗って下さい!」

この森の主よ、それで良いですね?」

「キュー!」

肯定を示すように大きく返事をする。“The Protean Moon”がこの森の主だったんだね。

「では、ここは私に任せて行って下さい」

「乗れ」

私と咲ちゃんが“ブラック・フェザー”に乗る。

「啓斗はこっちに乗れ」

黒いペガサスに啓斗君が乗る。

「じゃあ、行くぜ！」

啓斗君の掛け声と共に、私たちは“スターダスト”の世界へと戻った。

side out

side アリス

「ハア ハア」

厳しい。

「アリス もう無理よ。逃げた方が」

「ダメだよ。今逃げたら、この渓谷が壊されるよ」

ガイコツ騎士A LP 4000
“氷帝メビウス”

ガイコツ騎士B LP 4000
“炎帝テストロス”

ガイコツ騎士C LP 1600

ガイコツ騎士Dは倒したけど、状況はキツイ。
私の残りライフは1000、場にはシンクロに成功してるシンがい
るだけ。

「シン
」

「粘るべきだろう。それしか手はない」

「うん」

由里と啓斗が戻って来てくれるかもしれないし、リョウが戻って来
ることだって。
希望は捨てちゃいけない。諦めちゃいけない。

「我がターン 魔法カード“デビルズ・サンクチュアリ”発動
!“メタルデビル・トークン”を特殊召喚する」

ATK/0

「“メタルデビル・トークン”をリリース “雷帝ザボルグ”を
アドバンス召喚」!

「雷帝ザボルグ」がアドバンス召喚に成功した時 相手モンス
ター1体を破壊する !

“真紅眼の華竜”を破壊 !」

「グツ！」

「シ、シン！」

「（今吾がやられては !主アリスが !
ツ！なんだ！？天が 漸く来たか 。あの者ならば主アリスを
）」

シンが破壊された 。
私の場には何も残ってない 。

「たった一人で我等に挑んだ愚かさを呪うが良い !
“雷帝ザボルグ”でダイレクトアタック !」

ダメ 。
私の負け 。

「ごめんね」

「何を謝ってるの？」

「え ?」

今の声は。

思わず俯いていた顔を上げる。思い浮かべた愛しい人の顔。

「その攻撃はこのカードで受けるよ。“速攻のかかし”！」

攻撃は私には届かなかった。

目の前には白いマントをはためかせてる一人の男の人。

「リ、リヨウ？」

クルリと振り返ったその人。ニコリと微笑む顔。

「うん。遅くなってごめんね、アリス。無事でよかった」

リヨウだった。私が望んで止まなかった人。

白いマントの中には黒一色のシャツを着てるリヨウには珍しい服装をしてる。

「ちょっと待つてね、アリス」

抱き着きたい衝動をとっさに抑えた。

そう、今はデュエルの最中。この状況を何とかしないと。

「さて、と。何で舞がここにいるのか聞きたいけど、それどころじゃないかな。舞、ケガとかない？」

「それは大丈夫だけど」

「そっか。じゃ、もう少しそこにいてね。」

ファントム、ここからはオレが相手をするよ。」

「ホオ」

「この状況で 乱入してくると言うのか？」

「無理よ！いくらリヨウでも」

「大丈夫だから。アリスもね」

「私も一緒に！」

「無理しないで。すぐ終わるから」

リヨウの雰囲気はいつもと変わらない。だけど、いつもよりずっと余裕がある。

「さあ、再開しようか」

デュエルが再開された。

第七話：窮地（後書き）

次話は帰って来たリヨウのデュエルです。三対一ですが、デュエル自体は速攻で終了する予定です。

本命はその後の予定です。

では、グッチーでした。

第八話：哀しき再会（前書き）

今回は短いです。しかし、今までの伏線が姿を現します。

デュエルも一応あります。

では、どうぞ。

第八話：哀しき再会

オレは3体の中級兵を前に、向かい合っている。

「さてと」

場の状況は、

ガイコツ騎士A LP 4000

“氷帝メビウス”

ガイコツ騎士B LP 4000

“炎帝テストロス”

ガイコツ騎士C LP 1600

“雷帝ザボルグ”

攻撃力は全て2400か。俺の手札は5枚だね。1枚は“速攻のかかし”だった。“開闢”に借りておいて良かったね。何せ、アリスを救えたんだから。厳しい状況だけど、みんなを護る為に、何とかしようか。

「オレのターン！」

「クツクツクツ 勇んで入って来たが 貴様一人でどうするつもりだ ?」

「訂正しとくよ。オレは一人じゃない。それからもう一つ、心配はいらないよ。このターンで終わりにする

から」

「何だと　！？」

「手札1枚を墓地に送り、“The トリッキー”を特殊召喚！」

ATK/2000

「手札から“マジシャンズ・シンクロン”を通常召喚！」

ATK/0

「カードを1枚伏せるよ」

「クツクツクツ　大口を叩いた割には　もう終わりか　？」

そくだといいな。

「俺は魔法カード“オーロラドロー”を発動！手札が1枚の時、カードを2枚ドローする！」

よし、来たね！

「伏せカード発動！“古のルール”！頼んだよ、マハード！」

ATK/2500

「状況が状況だ。早く終わらせよう」

「うん。そくだね。」

さらに、魔法カード“師弟の絆”！マハードが場に存在することにより、マナを特殊召喚！」

DEF / 1700

「チャツチャと決めよ！」

二人もその気。いや、その気しかないのかな。それは俺もだけどね。

「いくよ。レベル5の“The トリック”に、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング！」

白き魔術が重なりし時、百戦錬磨の魔術師が現れる。光差す希望と為れ！」

シンクロ召喚！冴え渡れ！“高尚なる魔術師トエル・カウロ”！」

ATK / 2300

「ほっほ。また遅くなったようじゃのう」

「そっかな？」

「うむうむ。アリスちゃんも惚れ直すかものう」

「はは。相変わらずだね、トルンカ。力を貸して」

「うむー！」

目に力が宿る。頼れる仲間だよ。

「シンクロ召喚に成功したトルンカの効果発動！墓地の“オーロラ

ドロー”を手札に戻す！

さらに、シンクロ素材となった“マジシャンズ・シンクロン”は魔法使い族モンスターとのシンクロにより、場に戻ってくる！”

ATK/0

「そしてオレは“オーロラドロー”を再び発動！カードを2枚ドロ―！」

まだまだ終わらない！

「いくよ！マナ！」

「いつでも良いよ！」

「レベル6のマナに、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング！

黒き魔術が交わりし時、新たな絆の幕が開く。光差す希望と為れ！シンクロ召喚！舞え！“SF ブラックマジシャンガール”！」

ATK/2400

純白の姿となったマナがオレの場を舞う。

「自分場に“SF”と名の付くモンスターが存在する場合、手札から“スター・イリュージョニスト”を特殊召喚できる！」

ATK/100

「マハード！」

「解った！任せろ！」

「レベル7のマハードに、レベル1の“スター・イリュージョニスト”をチューニング！」

黒き魔術が集いし時、新たな光の力が目覚める。光差す希望と為れ！シンクロ召喚！舞い上がれ！“SF ブラックマジシャン”！」

ATK / 2900

純白のマハードがオレの場に舞い上がる。

「マナの効果発動！墓地の“オーロラドロー”をゲームから除外し、効果を発動する！カードを2枚ドロー！」

引いたカードを確認する。

「まだだね。このカードの力はまだ借りない」

「そうだな。ここで力を借りるべきではないだろう」

「今は私たちの力でどうとでもなるよ」

オレたち三人の意見は一致。修行で得た力はまだ使わない。

「装備魔法“団結の力”をマハードに装備！」

ATK / 5300

「さらに、トルンカの効果発動！“雷帝ザボルグ”の攻撃力を半分

にする！」

ATK/1200

「バトルフェイズ、マハードは場に他の“SF”が存在することで、相手モンスター全てに攻撃できる！」

マハード！“氷帝メビウス”に攻撃！」

「又ウウウツ！」

ガイコツ騎士A LP 1100

「次！“炎帝テストロス”！」

「又グウウツ！」

ガイコツ騎士B LP 1100

「マハードの最後の攻撃！“雷帝ザボルグ”に攻撃！スター・イリ
ュージョン・マジック！」

「又ガアアツ！」

ガイコツ騎士C LP 0

よし、まず1体目！

「トルンカ！ガイコツ騎士Bにダイレクトアタック！シルバー・グ
ランス！」

「又グウウツ！」

これで2体目！

「マナ！終わりにするよ！」

ガイコツ騎士Aにダイレクトアタック！スター・イリュージョン・バーニング！」

「又ガアアアツ！」

ガイコツ騎士A LP 0

よし。これでとりあえずは大丈夫だね。

「す、凄い。1ターン3キル」

「」

アリスと舞がポカンとしてる。オレは二人に軽く微笑みかけた。

「舞、大丈夫？」

「え、ええ」

舞がなんでここにいるかは解らないけど、とりあえずは大丈夫みたいだね。

「アリスは？大丈夫？」

「うん」

「遅くなってごめんね。もう心配ないから」

「うん」

「トントンとオレに身体を預けてきた。優しくアリスを抱きしめる。」

「良いなあ」

「キューー！」

「どうしたの？　　そういえば、少し騒がしいような」

「うーん、多分、心配いらないよ」

「マナ？」

「あっ、来たよ」

「ここかあ！？」

「きゃっ！」

「そんなに大きい声出したらビックリするよ。啓斗」

「マナ！？つてことはリョウがいんのか！？」

「にゃはは。落ち着いて、啓斗君」

「舞！」

「咲！？」

「咲もいるということとは、どういうこと何でしょうっ。」

「解らない。今はこの状況をなんとかすることが問題だろう」

「マハードの言う通りだな。とりあえず、事後処理はドラゴンに任せて戻るうぜ。リヨウとアリスはどこだ？」

「ちょっと待ってあげよっか、啓斗君」

「あゝ、そうだな」

少しだけ時間をおいてアリスを優しく離れた。もう少しこうしていたいけど、状況が状況だからね。

「もう良いかよ？」

「啓斗。待たせちゃったみたいだね。それから、由里と　咲もかな」

「咲　？」

舞がいるから咲がいてもおかしくないとは思ってたけど。なんで二人がここにいるかは解らないし、この場は離脱した方が良さそうだ

ね。

「さっさと行くぜ。この二人を早く何とかしねえとな」

「うん。そうだね」

「ヒャーハツハツハツ！

なんだよ！もう帰んのか！？」

『！？』

突然の叫び声にみんなが動揺する。

目を向けると、峡谷の少し離れた高い所にどす黒い鎧を纏ったガイコツが立っていた。

「誰？」

「ああ！？お前だけやけに冷静じゃねえか！つまらねえ！

まあ良い！そんだけ冷静なんだ！もう察しがついてんだろ！？」

「上級兵だね？」

「ヒャーハツハツハツ！

そうだ！よく解ってんじゃねえか！？」

やっぱりか。あれだけ他と違う格好をしてればね。

「さあ！やろつぜ！デュエルをよオ！」

オレたちは全員揃ってる。だけど、

「いいよ。オレが受けて立つ！」

「リ、リヨウ!?」

「どのみち、いつか闘わなきゃいけない相手だしね。ここで会ったのなら、ここで倒しておいた方がいい」

「よく解ってんじゃねえか! てめえの命、このアプが貰う！」

一歩前に踏み出した。

「来い！」

「ヒャーハツハツハツ! 行くぜえ！」

「止さないか」

不意に静かな静止を促す声があった。それだけなら良いんだけど。聞こえた瞬間、走馬灯のようにある人のことを思い出した。オレの生きる目標になった人。

「ああ!? 止めんな! 奴はオレの獲物だ！」

「それは構わないが、今は止めなさい。機ではない」

「チツ！」

現れたのは仮面をした誰か。上級兵の隣に立ってる。それから、さらに数体が姿を現した。全部で6。多分、全て上級兵だね。

「君たちがスピリットシグナーだね？」

「そうだよ」

「なんだ？あいつ、敵だよな？」

「多分ね」

余計なことは頭から振り払え。今はこの状況のことを考えるんだ。

「全て上級兵で間違いない？」

「その通りだよ」

「単刀直入に聞くよ。この綺麗な世界で、どうして争いを起こす？」

「平穏な日々が退屈だから、で理由になるかい？」

「ならないよ。他人の自由を阻害する権利なんて誰にもないんだから」

「君の言う通りだよ。僕たちも、好きに争いを起こしている訳ではないんだよ？」

「なら、どうして争いを？意志の違いはあるかもしれない。だけど、それは聞いてみなくちゃ解らない。

もし、オレたちにできることがあるなら手伝うから。オレからドラゴンたちに話を通すことだってできる。争うだけじゃ何も変わらない」

「ふむ。嬉しい申し出だけど、きっと無理だろうね」

「どうして？」

「僕たちの目的だよ」

何かしらの目的があるだろうことは解ってるけど。

「目的って？」

「精霊世界の破壊と滅亡」

「なっ　！？」

やっぱり、そういう目的になるのか。

「てめえ！んなことして　」

「啓斗！落ち着いて！」

「止めんな、リョウ！ここは　」

「落ち着いて。焦っちゃダメだよ」

「　　ああ」

みんなも何か言いたそうだったけど、とりあえずの落ち着きはあるみたいだね。

「確かに、その目的なら聞き入れる訳にはいかないね。でも、破壊して何になるの?」

「それは僕の知ったことではないね」

「どづいつこと　?」

「さあ?そこまで話す訳にはいかないよ」

「　じゃあ、闘うしかない?」

「そうなるね」

解ってはいたことだけど、認めたくない事実ではあったね　。

「そろそろ小競り合いは辞める。僕たちも前線に出るからね」

とうとう、争いが熾烈を極め始める。お互いの手札を出し尽くす闘いになる。

「それは後日だ。これで退かせて貰うよ」

「逃がす訳ねえだろ!お前らはここで!」

「無理だよ、啓斗。1体だけならともかく、6体いる。退いてくれるなら、ここは追わない方がいいよ」

「　そうだな」

そう。事情がよく解ってない舞と咲がいる。この場で闘うのは危険

だね。

「一つ、いいかな？」

ただ、どうしても一つだけ気になった。

「何かな？」

「その仮面、外してくれないかな？」

あの裏に何かあるのかを。

「ふふ、なんだ。気付いていたのだね。僕の正体を」

仮面をゆつくりと外す。その顔は、

「ッー！」

「久しぶりだね、リョウ。僕のこと、覚えていてくれて嬉しいよ」

「なん　で　どうして貴方がここにいるんですか　？　清
四郎さん」

さっき突然思い出し、無理矢理押し込めた人。オレの目標である筈の
人がなんで　？

「リョウ　？まさか、知り合いの人なの　？」

アリスが何か言ってる。何を言ったかは理解できなかった。

「答えてください　清四郎さん」

「」

「答えてください！清四郎さん！」

「　　答えて欲しければ、僕のところまでおいで」

「ッ！」

「リヨウ！ダメだよ！」

「心を静める。取り乱すな」

掴み掛かるうとしたオレをマハードとマナが止めた。

「~~~~ッ！」

「リヨウ！」

マハードの一喝が、オレを少しだけ冷静にした。

「ッ　「めん、マハード」

「ふふ　リヨウ、君が僕のところまで来ることを、楽しみにしているよ」

「　　必ず、貴方に真意を話して貰います」

清四郎さんを筆頭に、次々と上級兵が姿を消していく。アプだけが残っていた。

「てめえがあいつんとこまで辿り着くことはねえぜ！てめえの命は必ず貰うからな！」

それだけ言い残し、アプも消えた。

オレたちに、いや、オレに残ったのは喪失感だけ。あの清四郎さんが、オレの目標だった筈の清四郎さんがフロントムの上級兵ふと、あることを思い出した。ミスティさんの占い。

『闘いの中で、貴方には信じ難いことが起こる』

『貴方には辛い真実になると思うわ』

よ。ミスティさんの占いは的中した。オレにはとても信じられない

「リョウ あの上級兵、人間だよね？」

「うん」

「知り合いの人？」

「アリス、今は止めておこう」

「あ うん」

質問の追求をマハードが止めてくれた。

今のオレは、冷静にしていようとしているだけで、心中は全く穏や

かじゃない。

「とにかく、今は家に戻ろう。
処理すべきことは多々ある筈だ」

「　　だな。マハードに従った方が良さそうだ。

おい、リヨウ。それで良いな？」

「　　うん。そうしよう」

後を任せ、オレたちは溪谷を去った。
やることはたくさんある。その筈なのに、オレの心は乱れたままだ
った。

第八話：哀しき再会（後書き）

信じ難い再会。

リョウの目標であり、リョウの中で大きな存在だった清四郎。

今回の重点はそこです。もう一つは、上級兵が遂に姿を現しました。いよいよファントムとの闘いが激化し始めます。

では、グッチーでした。

第九話：答（前書き）

一週間ぶりになってしまいました。

バイト大変なんです。大学も通学なのでそれなりに。

言い訳でした。週に一度は更新したいと思います。

では、ごうぞ。

第九話：答

side アリス

私たちは溪谷からマハードとマナの家に帰って来ていた。
みんなが待っているリビングに入った。

「アリスちゃん、リヨウ君、どうだった？」

静かに首を振った。

「放心状態だよ。何もかも上の空みたいで。
マハードもしばらくは一人にしてやってくれて」

「そう」

「あいつは何者なんだよ。なんで人間がファントムにいんだよ
」

「そのことも含めて、リヨウには聞くことがありそうだな」

「カカシ！」

思わず大きな声を出した。

「リヨウが今どんな思いをしてるか」

「何も解らねえだろ？解ってるのはあいつか、マハードとマナだ。
だが、二人の様子からしてそれはねえだろう。」

だったら、あいつに聞くしかねえじゃねえか」

「ダメだよ！リヨウがどんな思いをしてるか確かに解らないけど、少なくとも辛いつてことだけは解る！」

「だから何だよ！ファントムの目的がはっきりした以上、好き勝手させる訳にはいかねえだろうが！」

「落ち着け、カカシ！お前まで熱くなるな！」

「啓斗様の言う通りではありませんが、カカシの言うことも一理あります。」

リヨウ様には話して頂かなければ」

「カレンまで」

「由里、お気持ちは察しますが、情報がないことは事実です。鍵を握るのはやはりリヨウ様の話しか」

「リヨウの気持ちも考えてよ！」

「考えたいのは山々ですが、状況はまさに切迫しています。余裕はありません」

「でも」

「止める！」

互いに言い争う中、シンの制止が場を収めた。

「今、吾等が言い争うことに意味はあるか？ある訳がない。上級兵が現れ、予断を許さない状況だ。焦るのは解る。だが、こういった状況だからこそ落ち着くべきだ」

シンの言う通りだ。

シンは尚も語り続けた。

「カカシ、カレン。吾等は元々、皆に協力して貰う身だ。本来ならファントムとの闘いに巻き込んでいる吾等が意見を無理に通すことなど、おこがましいぞ」

「チッ」

「貴方の言う通りですね」

「心配せずとも、リョウが立ち直れば語るだろう。待つ必要もない。やるべきことはあるのだからな」

そこまで言つて息を吐いた。

「ありがとう、シン」

「気にすることはない。それより、話について来れていないこの二人をなんとかするべきだろう」

ポカンとしている舞と咲。話について来れる筈ないんだよね。

「とりあえず、今までのことで解つてることを説明するね」

私は二人にザッと今までのことを話した。

「　　」
「　　」
「　　」
「　　」

「みんなが　　スピリットシグナー　　」

「うん。この青き痣がその印なの」

私たちはそれぞれ自分の痣を見せた。私が眼、由里が羽根、啓斗が鎧、そしてリヨウが杖。多分、私たちの絆を象徴する痣。

「信じらんないなあ　　」

「それはこっちの台詞だぜ。いる筈もねえ二人がこの場にいるんだからな」

「えっと　　」

舞が言葉を詰まらせる。啓斗が言ったことはみんなが思っていることだけだ。

「私たちは、これからどうすれば良いのかな　　」

「私たちなら、すぐに人間世界に帰してあげられるよ。その子たちが納得すればだけだ」

私は舞と咲の隣にいる。“The Rainbow Comet”と“The Protean Moon”を見て言った。多分、この子たちが二人を連れて来た。自分たちの危機を救って欲しかったのかも知れない。

「プー」

「キコー」

「にゃはは。喋れないのは難点だね」

「そう言わないで下さい、由里。精霊は皆が皆話せる訳ではないのです」

由里の言うことはよく解るよ。リップが話せないからなおさらだね。

「同族の精霊なら解せる筈だ。“スターダスト”に話を通し、話せる精霊を連れてくるべきだろう」

「そうだね。同族なら話是可以るから。それで会話のやり取りをすれば」

お互いの意思疎通ができる。

「うう。それでいいっつぜ」

「じゃあ、このことは私と啓斗君の仕事だね」

「えっと」

「お前には言うまでもねえ。リョウのとこ行けよ」

「そつだよ。私たちに任せてくれて良いからさ」

「俺らが行ったところで追い返されんのがオチだ。お前しかいねえ

「んだよ。頼むぜ」

「うん。解った」

それ以上は何も言わずに、一人部屋にいるリヨウのもとに向かった。

side out

オレは一人で部屋にいた。みんなはリビングで今後のことを考える筈だけど、その場に行く気にはならない。

マハードとマナはオレが解らないところに控えてるんだと思う。気を使ってくれてるんだろう。

心が乱れてる。ひたすらそのことばかり考えてる。でも、いくら考えても何かが解る訳じゃない。むしろ謎が深まるばかり。

「フーツ」

大きく息を吐き出した。髪を乱暴にかきあげる。落ち着かない。

「マハード、マナ」

「どうした？」

二人はすぐに姿を見せた。呼ばれるのを待ってたんだね。

「はは ごめんね。こんな状態になっちゃって」

「大丈夫だよ。誰だってそうやって落ち込むことあるんだから」

「どうすれば良いのかな？」

「私たちでさえ、事情が理解できていない。あの者が何者が解っていない。」

私たちが理解できていることは、リヨウとあの者に何らかの関係が有り、リヨウが苦しんでいるということだ」

その通りではある。清四郎さんとの関係は、オレが覚えてるのが不思議なくらい年少の頃のこと。二人と出会う前の話だからね。」

「あの人が精霊世界にいること自体、不思議なことだけど、それを言ったら舞と咲だってそうだし」

呟く。少しでも言葉にすることで何か解るかもしれないし、気が紛れるかもしれない。

「ダメだ。こんなんじゃ」

オレたちが修行を終えて辿り着いた新境地。そこに辿り着く為には、清んだ心が必要。今のオレじゃ到底その域には達しない。

「クソッ」

「焦るな、リヨウ。焦りは心を乱す」

「そうだよ。リヨウならきつと乗り越えられるんだから」

「マハード マナ」

二人はいつもオレの傍にいる。

今だって、状況は切迫してるのにジツとオレを待ってくれてる。清四郎さんのことも何一つ聞かずに、ただオレを信じて待ってくれてるんだ。

「迷ってる時じゃないね」

「だが、迷い等誰もが抱く。リヨウだけではない」

「リヨウの決意が解決してくれるよ。私たちはどこまでも付いていくから」

「フーッ」

もう一度、大きく息を吐き出した。でもさつきとは意味合いがまるで違う。失望染みた感じではなく、普段の感じを取り戻す感覚だった。

「修行で手にしたこと 忘れちゃいけないこと。

オレの答は、いつも精霊たちと共にある。マハードやマナと一緒に導き出す。そうだよな？」

「ああ」

「うん！」

オレは常に精霊たちと共にいた。一緒にいることでいろんなことを見出だしてきた。オレの答は、精霊たちと共にある！

「見えてくる。必ず、オレの出す答が」

解り始めてきた。オレはどうしたいのか、オレなりの答が。

コンコン

扉をノックする音、誰か来た。誰かは想像はつくけどね。

「開いてるよ」

遠慮がちに扉が開かれる。そして遠慮がちにアリスが顔を見せた。

「やっぱり、来てくれたんだ」

「うん。放っておける訳がないから」

困り顔で笑顔を見せる。そんな笑顔でも、今のオレには十分過ぎた。

「良かった さつきより表情が柔らかいね」

「アリス」

少しずつ近づいて来たアリスの手を軽く握った。

「リヨウ？」

「温かいね。アリスの手」

解り始めていた答。それを形にするのが、今なんだ。

「オレには仲間がいる。オレの周りにはいつも支えてくれる人がい

る

「うん。リヨウはいつもみんなのことを考えてて、だからみんながリヨウを信じてる」

見つめ合う。真っ直ぐ、澄んだ目で。

「だから、オレは闘う。オレを支えてくれる仲間を護る為に。仲間たちが住むこの世界を護る為に」

「うん。みんな、同じ気持ちだよ」

「そして この感じる温かさを護る為に」

「リヨウ」

「オレが護りたいもの。何が起きたとしても、変わる筈のない真実。必ず護り通す」

「うん」

これがオレの答。清四郎さんがどうだろうと関係ない。オレはオレの道を歩む。

「 行こう。みんなが待ってるよ」

アリスは力強く頷いた。

リビングに向けて歩き出す。

「 もう、大丈夫なようだな」

「うん。大丈夫」

「えへへ、リヨウなら大丈夫だって信じてたよ」

空気を読んで姿を消していたマハードとマナが姿を見せた。

答を見付けられたのは、マハードとマナのお陰。決心を促したのは、アリスの優しさ。掛け替えのないオレの宝物。

そして、オレは別の宝物たちが待つリビングに足を踏み入れた。

「待たせてごめんね、みんな」

「 応。待ってたぜ、リヨウ」

視線が投げ掛けられてくる。全ての視線を受け止めなくちゃいけない。

「オレはもう大丈夫。迷惑かけたね」

「にやはは。いつものリヨウ君だ。良かった」

視線が微笑みに変わる。みんながオレを迎えてくれる。

「さ、今の状況は？」

遅れた分を取り戻さなくちゃね。

「お前、っていうかマハードだ」

「私か？」

「にゃはは。ほら、“The Rainbow Comet”と“The Protean Moon”は話せないから」

「“スターダスト”に話したんだけどよ、マハードに聞けば全部解
決するって言うってたぜ」

「なるほど。少し待ってくれ。すぐに戻る」

マハードが出て行った。が、大して待つこともなく戻って来た。何
かを持って。

「全員、これを服用してくれ」

渡されたのは小さな包み。これは、粉薬？

「私が調合した粉薬だ。この薬を服用すれば、話せない精霊の言葉
を理解することができる」

「翻訳こんにゃくかよ」

「啓斗君、その発言はちょっと」

「うえっ　これはちょっと」

「不味いの？」

「味はないんだけど　この材料がねっ」

「マハード、因みに何を調合したのですか？」

「聞くか？」

「いえ、遠慮します」

みんなの顔が少し青くなってる。

「この薬は無味だ。服用しなければ進展しない」

マハードの言うことが正しい。オレは一気に口に運んだ。みんなも口に運んでいく。

「味、無いね」

「そう言った」

「だからこそ、何を調合したか気になりますね」

「そこは追求しちゃダメっキュ」

「そっつっピ」

今の声は、

「改めてはじめましてっピ。フラッピっピ」

「はじめましてっキュ。キュートだっキュ」

確かに、理解できる。凄いな、マハードは。

「フラッピ。それが貴女の名前なのね？」

「そうっピ」

「キュートっていうんだ？」

「何度もそう言ってたっキュー！」

「そう言わないでよ、解んなかったんだから」

とにかく、フラッピとキュートっていうんだね。

「私が精霊を代表して聞こう。美庄殿と立花殿を連れて来たのはお前たちだな？」

「そうっピ」

「そうっキュ」

「何故だ？」

「舞に、龍の溪谷を救って欲しかったっピ」

「やはり、か。」

「キュートも同じだな？」

「そうっキュ。咲にナチュラルの森を救って欲しかったっキュ」

「どういふことなの？」

「恐らく、ファントムの攻撃に窮地に曝されていた渓谷と森を、救って欲しかった。そう、リヨウたちと同様に、人間の力を借りて」
オレたちと同様に　？

「人間の力は、信じられつつある。どんな危機でも救ってくれる救世主としてな」

「　何だそれ？」

そんなことになってるんだ。何でそんなふうに広まってるんだろ？

「リヨウたちスピリットシグナーの信憑性は強くなっている。この危機だからこそ、何かに縋りたくなるものだ」

「　そんなに危機なの？」

「　今、私たちがこうして話している間にも、ファントムとの抗争は続いている。龍の渓谷やナチュルの森のような場所は少なくともいかもしれない」

「それで、舞と咲の力を借りようとした　」

「で、でも　私たちにそんな力あるの　？」

「ない。リヨウたちにさえ、ありはしない」

「だよね。私たちは神様じゃないんだし」

「うん。そんな力があるなら、とっくにこの抗争は終わってるだろ
うし」

「そうだ。リヨウたちが救ってきたのは、単にスピリットシグナー
だからという訳ではない。皆が真剣に向き合い、救いたいという想
いで闘うから為せることだ」

オレたちは、それぞれ自分の意志でここにいる。誰かに強制された
訳じゃない。

「美庄殿と立花殿はほぼ強制だ。そのような状態でリヨウたちと肩
を並べられるとは思えない。早計だったな」

「ピー」

「キュー」

落ち込んだような声を出すフラッピとキュート。

「でも、結果的には溪谷と森は護れた。よかったね。
さて、舞。咲」

「うん？」

「なに？」

「今、ここで決めよう。精霊世界から人間世界に戻るかどうかを」

「ダメっピー！」

「せつかく逢えたのにつキュ！」

「いや、リヨウの言う通りだ。今の精霊世界は危険と隣り合わせだ。スピリットシグナーでもない美庄殿と立花殿がここにいるのは危険過ぎる」

二人が俯く。フラッピとキュートも。

「でも」

「せつかく逢えたのに」

「もう二度と逢えない訳ではない。この抗争が終息すれば、精霊世界にも来れる」

「勝てれば、よね？」

舞の一言に全員が黙った。その沈黙をオレが破る。

「そう、勝てればだよ。オレたちはその為にここにいる」

「そう、だよ。ね。舞」

「うん、咲」

二人が何かを確かめ合った。静かに次の言葉を待つ。

『私たちは、帰らない！この世界に残る！』

「よし、この話はこれで終わりだね」

「 やれやれ 」

「 大丈夫かよ？かなり危ないぜ？ 」

「 私たちにはできることは少ないかもしれないけど 」

「 何かやらせて欲しいの 」

「 覚悟有り、だね 」

「 にははは。よかったね、フラッピ、キュート 」

二人が笑う。さて、次の話だね。

「 さ、聞かせて貰おうか？ 」

カカシがそう切り出した。もちろん、オレに向けて。

「 うん。清四郎さんのことだね 」

誰も言葉を発しなくなった。オレの次の言葉を待ってる。

「 清四郎さんは、オレが幼い頃に出会った、オレの目標だった人だ
」
「 よ 」

静かに、はっきりと語り出した。

「 リョウウの目標？ 」

「うん。知ってるだろうけど、オレの両親は多忙でね。マハードとマナと会う前は、ずっと一人で過ごしてた。友達一人いなかったし、近所の子には毎日虐められてたよ」

「信じられねえな」

本当のことだけどね。この昔語りには嘘を入れる気はない。

「毎日塞ぎ込んでた。一人で泣いてたよ。」

そんな時に出会ったのが」

「清四郎さんなんだね」

由里の言葉に頷く。

「最初に聞かれたのは、どうして泣いているのか。答えないオレを、無言で背中をさすることで慰めてくれた。」

温かった。今まで感じたことのない温かさだった」

誰も発しない。オレは続けた。

「それから、たった三日だったけど、清四郎さんとずっと一緒にいた。」

当時のことは殆ど覚えてないよ。ずっと昔のことだからね。でも、オレの心に刻まれたことがある。

清四郎さんは旅をした。オレみたいな泣いてる子を助けてあげた。いから、笑顔にしてあげたいからって。凄いと思った。多分、心の底から。

オレは言ったよ。オレもそんなふうになりたい、って」

「リヨウの、目標」

「うん。そして、清四郎さんと約束した。

『いつか、笑って再会しよう。その時に、世界に笑顔がたくさん溢れているように』ってね。

それから、些細なことだったけど、オレにできることを始めた。

そして、マハードとマナと出会い、アリスに出会った」

ここで話を打ち切った。後は知っての通りだからね。

「お前の目標で、お前が何で今まで頑なにああいう行動ばっかだったのかは解った。

ならよ、何でそんな奴がこの世界でファントムの上級兵なんだよ！？」

「そう怒鳴りたいのはオレの方だよ、啓斗。信じたくない真実なんだから」

「何故、ファントム側にいるのかは解らないのですね」

「解らないね。それが解れば、悩んでないよ」

「じゃあ、リヨウ君はどうするの？ファントム側にそんな人がいるのに」

「うん。ずっと悩んでた。だけど、オレなりの答を、出したよ」

オレの答は、精霊たちと共にある。

「闘うよ。清四郎さんは関係ない。オレはオレが信じる道に行く。」

清四郎さんがどうしてあんなふうになったのか解らないけど、精霊世界を滅亡させると言つのなら、必ず止めてみせる」

「清四郎って奴と、敵対してもか？」

「うん。清四郎さんはオレが必ず倒す」

「解った。お前がそこまで決めてんなら、何も言わねえ」

話は決まった。みんな頷いてくれる。後はオレが行動に移すだけ。例え清四郎さんと闘つことになっても、オレたちの絆の力で必ず倒してみせる！

「まだ話は終わってねえぜ。どこに行つてやがったんだ？」

「何の話？」

「咲ちゃんがこっちに来る前のことかな。リョウ君はどこかに行つてみたいなの」

アテム様のところに行つてたことか。

「解った。ついだからね。そのことも話すよ。ただ、一つ約束して欲しい」

「約束？」

「うん。このことは誰にも言わない。そう約束して欲しい」

「解った。約束だね」

アリスの言葉にみんなが頷く。

「良いのか？」

「良いよ。一緒に闘うみんなに隠し事はしたくないし」

「リョウらしいね」

「だが、ファラオのことは」

「大丈夫。そのことは言わないよ」

アテム様のことは隠しておく約束だからね。

「オレは“開闢”に連れられてあるところに行って来たんだよ。オレも詳しくは知らないんだけど、そこでオレの本当の名前を知らされたんだ」

「本当の名前？」

「リョウ、じゃなくて？」

「って言うより、名字だね」

「で？俺たちに口止めまでする名字ってのは？」

勿体振っても仕方ないか。

「オレのフルネームは、武藤亮だよ」

「 武藤? 」

「 武藤って、まさか ? 」

「 オレは、伝説の決闘王、武藤遊戯の血筋の者だよ 」

『 『

みんなが固まった。まあ、唐突だからね。

「 ウソ? 」

「 本当だよ、由里。オレ自身知らなかったけど 」

「 なんて知らなかったんだ? 」

「 武藤って名字は珍しいから隠してたんだって。そんなこと知られたらシテイが騒ぐから 」

「 驚きの連発じゃん。一日で何回驚けば良いの ? 」

これで最後だと思っけどね。

「 でも、リョウはリョウだね? 」

アリスの言葉にクスリと笑う。

「 うん。オレはオレ。別に何も変わらないよ 」

「うん」

微笑み合った。名字が解ったからって、何かが変わる訳じゃない。

「話はこれで終わりだな？」

マハードが話を進めた。これ以上問い詰められるのを恐れた感じだね。

「今日はいろいろあった。皆、疲れただろう。もう休んだ方が良い」

「そうですね。明日から何が起きるか解りませんし」

「舞と咲の部屋は用意するね。好きに使ってくれて良いから」

「ありがとう」

話が終わり、それぞれの部屋に入っていく。

オレも今日はいろいろあった。あり過ぎた。今はマハードたちに任せて、静かに眠ることにした。

第九話：答（後書き）

次話は、いよいよ登場の予定です。

リヨウの新境地、そしてオリジナルシンクロ。

ファントムとの抗争が終盤に向かいます。第三期終盤ですね。

では、グッチーでした。

第十話：新境地 スピリチュアル・クロス（前書き）

やっと辿り着きました。

題名の通り、今回は新境地の話です。他にも大事なことがあります
が。

では、さようなら。

第十話：新境地 スピリチュアル・クロス

side アリス

朝、みんなで朝食を食べてるけど、リヨウはまだ起きてなかった。リヨウにしては寝坊なんて珍しいを遥かに越えてるけど、どうかしたのかな？

少し心配になって様子を見に行った。

コンコン

リヨウの返事は来ない。でも扉は開いた。

「アリスか」

扉を開けたのは、少し様子が変なマハード。

「リヨウならまだ寝かせていて欲しい。疲れている」

「そう」

「ここ数日はリヨウにとっっているいろいろあり過ぎた。もつしばらくは眠らせてあげて欲しい」

「うん。中にいても良いかな？」

「私から頼みたいくらいだ」

「マハードももうしばらく眠れ。吾が付いている」

「済まない」

マハードも疲れてるんだ。マナの姿も見えてないから、寝てるのかも。マハードが姿を消して、私は部屋に入った。リヨウは規則正しい寝息を立てながら眠ってる。近くの椅子に座った。

ミステイさんに言われたことを思い出した。リヨウは今、誰よりも辛くて、誰よりも苦しんでる。支えたい。少しでも良いから、リヨウの支えになりたい。

そつとリヨウの顔に触れた。優しげで、怒った顔は殆ど見たことがない。微笑むその顔に何度救われたか解らない。

「起きない、よね？」

答えてくれる人は誰もいない。シンは黙って見守ってるだろうけど。

「きやつ！」

不意に手を握られ、リヨウが眠るベットに引きずり込まれた。もちろんリヨウに。

「リ、リヨウ / / ?」

「スー スー」

寝てる？

呼び掛けには応えないし

寝てるよね？

間近で見るリヨウの寝顔。少しずつ顔を近付けていた。ちよつとした罰だよ？

チユツ

触れ合つた。私からリヨウに、唇を。

また不意に、今度は強く抱きしめられた。

「んっ / /」

「」

あれ？寝息が聞こえない？

「リヨウ？」

顔を覗き込むと、リヨウの目は開いていた。

「おはよう、アリス」

「お、おはよう」

「この状況は何なの？」

「べ、ベットに入ってるのは私の所為じゃないよ！？リヨウに無理矢理」

「オレ、寝ぼけてた？」

「 うん」

嘘はついてない。

「 あゝ ごめんね」

「 う、ううん。えっと、いつから起きてたの？」

「 優しい口づけ、だね」

多分、私の顔は赤くなったと思う／＼。
起こしちゃったかな？

「 ふああ」

けだるそうに欠伸するリヨウ。

「 もう少し眠った方が良いよ。疲れてるんだよね？」

「 そうかも」

身体を起こさずに、もう一度目を閉じた。

あれ？私はこのまま？

「 あの リヨウ？」

「 出る？」

狡いよ。そんな聞き方されたら出られない。

「一緒に寝よう?」

「うん」

結局肯定しちゃった。

既にリヨウの意識はない。また規則正しい寝息に戻ってる。こんなに早く眠るってことは、相当疲れてるんだ。

私に眠気はないけど、リヨウの傍にいられる。私にはそれが嬉しい。

数時間が過ぎた。

昼時、リヨウは今だに眠ったまま。

「主アリス」

「シン?」

「吾がここにいる。昼食を採って来てはどうか?」

「ありがとう。そうするよ」

リヨウを起こささないようにベッドから出た。シンに任せて、私は部屋を出ようとした。

突然襲ってきた悪寒。今のは一体?」

「主アリス」

「うん」

家の外を見てみると、ファントムの下級兵が周囲を囲んでる。この家を直接狙ってきたんだ。私は急いで外に出た。みんなも既にいる。

「来たかよ、アリス」

「　　なんか、大丈夫みたいだね」

「うん。マハードが結界を張ってたみたいなの」

「ファントムはこっちに入ってきて来れないんだって」

なるほど。流石だね、マハード。

「オイ！コリア！」

怒鳴り声が聞こえた。この声は聞き覚えがある。

「早く出てこい！リョウ！」

やっぱり、上級兵、アプ！

「コイツラはてめえらが逃げねえようにするただの壁だ！さっさとやり合おうぜ！」

昨日と同じようにリョウを指名してる。でも、リョウはまだ眠ってる。ここは私だ。

「いいよ。オレとデュエルだ、アプ！」

「えッ　？」

後ろを振り返ると、リヨウが悠然と立っていた。黒いマントに白いシャツを着て。

「リヨウ、大丈夫なの？」

「もちろん。オレを指名してる訳だし、オレがいかないとな」

「大丈夫かよ？」

「心配ないよ。もう十分休ませて貰ったからね。みんなはここで家を頼むよ」

リヨウは結界を出て行った。すぐ後ろにマハードとマナの姿が見えた。

s i d e o u t

オレは結界の外に出た。下級兵たちは向かって来ない。

「マハード、マナ。身体は大丈夫？」

「解っている筈だ」

「そっだよ」

ずっと寝てたからね。体力は回復してる。

「てめえの命はオレが頂く！覚悟しな！」

「オレは負けないよ。護るべきものを護る為だね」

「ヒヤハツ！良いじゃねえか！そうでなくちゃなあ！」

オレはアプの眼前に立つ。答は出た。迷いはない。勝負だ！

「てめえとはライディングデュエルじゃねえとな！準備しな！」

アプはガイコツの馬に飛び乗った。

「マハード、ソニックを」

マハードの術でソニックが現れる。乗って起動させる。

「ヒャーハツハツハツ！」

さあ！始めようぜ！」

『ライディングデュエル！アクセラレーション！』

一気に加速させる。馬に負ける訳にはいかない。先攻は貰う！
第一コーナーに差し掛かり、先にコーナーへ入った。

「オレの先攻！」

「ヒヤハツ！期待通りじゃねえか！来な！」

「オレのターン！」
「マジシャンズ・ヴァルキリア」を守備表示で召喚！」

DEF / 1800

「カードを2枚伏せる。ターンエンド」

「オレのターン！」

SP 1

さあ、アップはどんなカードを使ってくる？

「相手場のみモンスターが存在する場合、手札の“劫火の槍術士
ゴースト・ランサー”を特殊召喚できる！」

ATK / 2000

「コイツは貫通能力を持っている！バトルだあ！」

くる！

「“ゴースト・ランサー”で攻撃！」

「があっ！」

リョウ LP 3800

「ぐっ」

とてつもない衝撃が襲ってきた。流石は上級兵、衝撃の桁が違
う。

ソニックがスピニング。アップがオレを抜いて行った。

「ヒャーハツハツハツ！」

「あんだあ！？その程度じゃねえだろうな！？」

無理矢理体制を立て直した。

「さてね。デュエルはまだ始まったばかりだよ」

「くはっ！そうじゃねえとな！」

カードを1枚伏せ、ターン終了だ！」

「オレのターン！」

SP 2

「相手場にのみモンスターが存在することにより、“特攻のマジンヤン”を特殊召喚する！」

ATK / 100

「このカードが特殊召喚されたことにより、場に存在する伏せカード1枚を破壊する！」

アップの伏せカードを破壊した！

「ヒャハツ！」

破壊された伏せカードは“黄金の邪神像”だあ！このカードが破壊された時、“邪神トークン”を特殊召喚する！」

DEF / 0

上手いな。

まあいいかな。オレのデュエルをするだけ。

「マナ、頼んだよ。」

“特攻のマジシャン”をリリースして、マナをアドバンス召喚！」

ATK / 2000

「さあ、いくよー！」

お願いね、マナ。そして、師を呼ぶ！

「畏発動！“賢者の秘石”！マナが場に存在することにより、マハードをデッキから特殊召喚する！」

ATK / 2500

「ヒヤハッ！」

そいつらがてめえの精霊かあ！？

「そうだ！二人は、オレの絆の象徴！」

オレは勝つ！負けられない！この世界を護る為に！

「バトル！マハードで“劫火の槍術士ゴースト・ランサー”を攻撃！ブラック・マジック！」

「グオオッ！」

アップ LP 3500

「マナで“邪神トークン”を攻撃！ブラック・バーニング！」

これでアップの場にカードはない。

「ターンエンド」

「良い！良いぜえ！期待通りだ！
オレのターン！」

SP 3

「SP オーバー・ブースト”を発動！SPカウンターを4つ増
やす！」

アップ SP 7

「そこで“劫火の眠り姫ゴースト・スリーパー”を召喚！」

ATK / 1300

「そしてえ！“SP 幽合”発動！」

“幽合”！？

「SPカウンターが7つ以上ある時、発動できる！」

場のモンスターとデッキのモンスターをゲームから除外し、幽合召喚する！

場の“劫火の眠り姫ゴースト・スリーパー”と、デッキの“劫火の翼竜ゴースト・ワイバーン”を除外する！
幽合召喚！“冥界龍ドラゴネクロ”！」

ATK / 3000

「ヒャーハツハツハツ！」

死に曝せえ！“冥界龍ドラゴネクロ”で“ブラックマジシャン”を攻撃！ソウル・クランチ！」

「ぐああっ！」

「ぐううっ！」

リヨウ LP 3300

「“冥界龍ドラゴネクロ”とバトルしたモンスターは破壊されねえが、そいつの魂を奪う！魂を奪われたモンスターは、攻撃力が0になり、破壊されなくなる！さらに、そのモンスターと同じ攻撃力を持つ“ダーク・トークン”を特殊召喚する！」

ATK / 0

ATK / 2500

マハードが力無くうなだれる。

「マハード！」

「お師匠様！」

「くっ 全身に力が入らん」

意識はあるけど、辛そうだね。

「ヒヤハッ！」

“ダーク・トークン”で“ブラックマジシャン”を攻撃！ダーク・ブラック・マジック！”

「くっ！畏カード“ガード・ブロック”！戦闘ダメージを0にして、カードを1枚ドローする！」

オレへのダメージはない。ただ、マハードが。

「マハード！」

「大 丈夫だ。この程度の痛み リョウの苦悩に比べれば
「！」

マハードの痛みも半端じゃない筈なのに。

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ！エンドフェイズに、オレのSPカウンターは1になる！」

さあ、てめえのターンだ！もっとオレを愉しませな！」

アプ SP 1

「私たちのターンだよ！お師匠様は絶対に音をあげない！デュエルはこれからだよ！」

「 だね」

マナの言う通りだ。こんなところで、止まっていられない！

「オレのターン！」

リョウ SP 4

アプ SP 2

「SP エンジェル・バトン」を発動！カードを2枚ドロし、1枚を墓地へ送る！

オレは、チューナーモンスター“マジシャンズ・シンクロン”を召喚！

ATK/0

「レベル7のマハードに、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング！

黒き魔術が集いし時、新たな光の力が目覚める。光差す希望と為れ！シンクロ召喚！舞い降りよ！“SF ブラックマジシャン”！」

ATK/2900

「マハード、大丈夫？」

「ああ。私の心配なら無用だ。いくぞ、リョウ！」

「よし！“マジシャンズ・シンクロン”は、自身の効果で場に戻ってくる！」

ATK/0

「レベル6のマナに、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”を
チューニング!

黒き魔術が交わりし時、新たな絆の幕が開く。光差す希望と為れ!
シンクロ召喚!舞え!“SF ブラックマジシャンガール”!

ATK / 2000

純白の姿となった二人がオレの場に現れる。

「だが!“冥界龍ドラゴネクロ”の攻撃力には届かねえ!」

「マハード!“冥界龍ドラゴネクロ”に攻撃だ!」

「なんだと!?!」

「マナ!」

「オツケー!」

「効果発動!墓地のカード1枚をゲームから除外して、効果を発動
する!オレが除外するのは、“魔術師集結”!

オレの場の魔法使い族1体につき、魔法使い族モンスターの攻撃力
は300アップする!」

ATK / 3500

ATK / 3000

「先程の礼をさせて貰おう!」

「スター・イリュージョン・マジック！」

「グオツ！」

アップ LP 3000

「さらに、マハードはバトルフェイズ開始時に他の“SF”が場に存在する場合、相手モンスター全てに攻撃できる！
マハードで“ダーク・トークン”を攻撃！」

「グオオツ！」

アップ LP 2000

これでアップを守るモンスターはいない！

「マナでダイレクトアタック！スター・イリュージョン・バーニング！」

「そんな簡単に終わる訳がねえだろがぁ！」

畏カード“栄誉の贄”！ダイレクトアタックを無効にし、“贄の石碑トークン”を2体特殊召喚する！」

DEF / 0

「さらにい！手札に、“地縛神”と名の付くモンスターを手札に加える！」

「なっ！？」

手札に加えたカード。遊星たちシグナーが倒した筈の“地縛神”。

。そんなまさか、いや、でも、
「舞！咲！絶対にみんなから離れるな！アリス！」

「な、なに！？何なの！？」

「リヨウがあんなに行ってるけど」

「“地縛神”って何だよ？」

「アリスちゃんは何か知ってるの？」

「知ってるよ。でも、そんなことって。と、とにかく、舞と咲は絶対に離れないでね」

攻撃ができない以上、召喚を止めることはできない。もし本当に“地縛神”なら。

「備えろ、リヨウ！万が一ということもある！」

「もし本当に“地縛神”なら一気に持っていかれるよ！」

「解ってるよ！カードを1枚伏せ、ターンエンド」

「ヒャーハッハッハッ！」

オレの、ターン！」

リヨウ SP 4

アプ SP 3

「いくぜえ！“贄の石碑トークン”2体をリリース！」

“トークン”が宙に浮かび上がり、一つに混ざり合って消える。そして、心臓のようにドクン、ドクンと脈打つ黒い物が現れる。

これは 人間世界で見た“地縛神”の召喚と同じだ。
周囲を囲んでいた下級兵が吸い込まれていく。幸い、他の精霊たちは近くにいないみたいだね。舞と咲もみんなの傍にいるから心配はない。

そして、一度激しく脈を打った。

「降臨せよ！“地縛神 C c a p a c A p u”！」

ATK / 3000

場に現れたのは巨大な人の姿をしたモンスター いや、神。
間違いない これは遊星たちシグナーが闘っていた“地縛神”そのもの。

「ヒャーハツハツハツハツ！」

これが“地縛神”だあ！」

「くつ 何で“地縛神”が」

「アアッ！？そんな余裕がてめえにあんのかあ！？」

確かに。くる！

「“地縛神”はダイレクトアタックができる！
死ねえ！“地縛神 C c a p a c A p u”で、ダイレクトアタック！」

巨大な手が振り下ろされてくる。オレに防ぐ術はない。

「うあああああつっ！」

巨大な手の前に、為す術はなかった。

「リョウツ！」

「オイ！あいつ大丈夫だろうな！？」

「あんな大きいのに攻撃されたら」

「あんなのに、勝てるの？」

巻き起こった砂塵を不安に満ちた表情で見詰めていた。

「ヒャーハツハツハツ！」

それで終いかあ！？」

「まだだ！」

オレは砂塵からはい出た。
全身に鈍痛が残ってる。身体中を砂塵に刻まれた傷が痛む。それ
も、

「オレのライフはまだ残ってる！」

リヨウ LP 300

「痛っ　！」

鋭い頭痛。目に液が流れてくる。血か。
。視界がぼやけてくる。視線が定まらない。
。

「リヨウ！大丈夫か！？」

「リヨウ！しっかりして！」

頭に響く呼び声に、意識を取り戻した。

「マハード、マナ」

頭を振る。血が飛び散る。それでも、視界がはっきりしてきた。

「ヒヤハッ！」

よく持ちこたえたじゃねえか！」

「くっ　アップ！何故、“地縛神”がここにいる！？」

「ヒヤーハッハッハッ！」

「良いぜえ！話してやるよ！オレに勝てたらな！
その前に、これに耐えてみな！」

なに？

「SP ジェット・ブスター”を発動！お互いのSPカウンターを2つ増やし、カードを1枚ドローする！」

リヨウ SP 7

アプ SP 5

「スピード・ワールド2”の効果発動！SPカウンターを4つ取り除き、800のダメージを与える！
これで終わりだあ！」

アプ SP 1

くっ まだ、オレには伏せカードが1枚残ってる！

「永続罟“魔力吸収波”を発動！オレが効果ダメージを受ける時、手札の魔法使い族モンスター1体を墓地に送ることで、ダメージを無効にする！」

手札の“ナイトエンド・ソーサラー”を墓地に送り、ダメージを無効！そして、ダメージを無効にしたことでカードを1枚ドローする！」

よし、なんとか防いだ。

「ヒヤハッ！良いぜえ！」

だが、“地縛神”は攻撃対象にはならねえ！てめえが攻撃すること

「は不可能だあ！」

確かに、“地縛神”は元々実態がない。攻撃しても意味はないね。だっただらもうやるしかない！

「いくよ」

「ああ」

「修行の成果、見せる時だよ」

集中しろ。
無心に為れ。
そして感じる。

「オレのターン！」

リョウ SP 8

アップ SP 2

引いたカードは オレの新しい絆。

「オレは、墓地の光属性チューナー“マジシャンズ・シンクロン”と、闇属性チューナー“ナイトエンド・ソーサラー”をゲームから除外して、このカードを特殊召喚する！

光と闇が混濁する狭間より姿を現せ！ツインチューナー！“幻惑のカオス・マジシャン”！」

ATK/0

オレの場に、身体の右部分が黒く、左部分が白い魔術師が現れた。
静かに目を閉じた。集中するんだ。辿り着く為に。

「ツインチューナー　だと？」

「あんなチューナー初めて見たわ　」

「リョウ君　あんなカード使ってたっけ？」

「ううん　私の記憶にはないよ　」

「　何なんだろう？」

「　いける？」

「　ああ　」

「　良い感じだよ　」

感じる。
二人の呼吸　二人の肌。
全ての感覚が、幾多にも混ざり合い、一体になっていく。

【我等、三位一体と成る】

【生まれし秋は違えど、死するその秋まで、我等は一つ】

【願わくば、我等が志を遂げるその日まで】

【いこう。共に】

スピリチュアル・クロス

「レベル8、シンクロモンスターのマハードと、レベル7、シンクロモンスターのマナに、レベル4の“幻惑のカオス・マジシャン”を、ツインチューニング！」

“幻惑のカオス・マジシャン”が真っ二つに別れ、右側の黒い身体が黒い輪となっていく。対する左側の白い身体は白い輪となっていく。

黒い輪はマハードを包み、白い輪はマナを包む。

「集いし光と闇の結晶が、新たな次元への幕を開く。光差す希望と為れ！」

黒い闇を象徴する球体が右に、白い光を象徴する球体が左に、オレの場に出現した。

「クロスシンクロ！」

オレの声に、二つの球体が反応する。

「闇の結晶！」

闇の球体から、真っ黒の羽がはみ出してきた。

「SF ダークネス・マジシャン”！」

闇の球体が破裂し、魔術師が姿を現す。純白の姿はなく、真っ黒な魔術服に身を包み、黒く輝く闇の象徴、マハード。

ATK / 3500

「光の結晶！」

光の球体から、真っ白の羽がはみ出してきた。

「SF シャイニング・マジシャン・ガール”！」

ATK / 3000

光の球体が破裂し、魔術師が姿を現す。純白の魔術服が度を増し、白く輝く光の象徴、マナ。

「私たちが辿り着いた新境地、スピリチュアル・クロス」

「これが私たちの、新しい力」

二人の輝きは留まることを知らない。それどころか、輝きが溢れ出ている。目視できる程に。

「いくよ、マハード、マナ。オレたちの新たな力で、このデュエルは終幕だ！」

「クロスシンクロ？」

「何だ？今のシンクロ召喚は？」

「マハードとマナが 1体のチューナーモンスターでシンクロしたのよね？」

「だよな」

「リヨウは何をしたんだろ？」

「何しやがった!？」

「クロスシンクロ召喚!オレたちが手にした新たな力だ!」

「チツ!だが、“地縛神”に攻撃することはできねえ!」

「それはどうかな?」

「アアツ!？」

「マハードの効果!オレのターンのエンドフェイズまで、相手モンスター1体の効果を無効にできる!

これで、“地縛神”の効果は無効だ!攻撃できる!」

「なん だと？」

このターンで終わりだ!

「さらに、マハードの効果発動！ダークエンド・ドレイン！」

マナが輝く杖を掲げ、光が集中する。マハードがその光を吸収し、闇の輝きに変わる。

「マハードはオレの場に存在するモンスター1体の攻撃力の半分を、自身の攻撃力にすることができる！」

ATK / 5000

攻撃力は十分！これで、このデュエルは終幕を迎える！

「バトルフェイズ！マハード、“地縛神 C c a p a c A p u”攻撃！」

マハードが杖を掲げ、黒い闇の光が集中する。

「頼んだよ、マハード」

「お師匠様、お願いします！」

軽く頷いたマハードが、黒い輝きを強める。

「ダークエンド・イリュージョン・マジック！」

マハードが放った闇の波動が“地縛神 C c a p a c A p u”の巨漢を貫いた。

「グオオオオオッ！」

ア
プ
L
P
0

第十話：新境地 スピリチュアル・クロス（後書き）

どうだったでしょうか？

オリジナルのシンクロ召喚、クロスシンクロ。

ツインチューナー1体とシンクロモンスター2体で行うシンクロです。

レベルはマハードが10、マナが9です。ツインチューナーのレベルを半分足してます。

マハードの効果はほぼ紹介しましたが、マナの効果は次のデュエルで。

フロントム上級兵の正体は“地縛神”です。次回はこの話がメインと思われます。

因みに、【】は精霊の言語です。

では、グッチーでした。

第十一話：処置（前書き）

十日ぶりの投稿です。デュエルはありません。

では、さようなら。

第十一話：処置

マハードが放った闇の波動が“地縛神 C c a p a c A p u”を貫き、デュエルは終わりを迎えた。アプが衝撃で馬から放り出された。

「アプ！」

ソニックから飛び降りて、慌てて駆け寄った。みんなも結界から出て近寄って来た。

「ヒャハハハ。やるじゃねえか」

「大丈夫？」

「闇のデュエルだ。オレが生きる筈ねえだろ」

「大丈夫だよ。ね、マハード？」

「ああ。私の闇の力が、闇のデュエルの力ごと咽呑した。衝撃を殺すことは余りできなかったがな」

「アアッ!？」

「本当のことだよ。リョウが望んだことだからね」

「余計なことを！」

オレが望んだこと。こんな争いで無駄な犠牲を出すことはないんだ。味方はもちろん、敵だろうとね。

「アップ。貴方の正体は、“地縛神 C c a p a c A p u”の化身、そんなところだね？」

「えっ？ リョウ、それってどういうこと？」

ただ一人、“地縛神”をオレ同様に知ってるアリスだからこそその疑問だね。

「ケツ。言ったことは守ってやるよ。“地縛神”のことを聞きてえんだったな。

てめえの言う通りだ、リョウ。オレは“地縛神 C c a p a c A p u”そのままだ」

やっぱりか。

「えっと」

「オイ。俺たちにも解るように説明しろよ」

「めんどくせえ。てめえらは後で勝手に聞けや。一から説明する気にはならねえ」

まあ、仕方ないね。こういうのはマハードに任せるのが一番良いし。

「どういふこと？」

「元々、“地縛神”は実体がないよね？でも、自在に動かせる身体

が欲しかった。そんなところかな？」

「よく解ってんじゃねえか。オレたちは身体がねえようなもんだからな。」

そこで何を使うかとなれば、骨が一番手頃だったんだよ」

なるほどね。

「待って、アップ」

「あんだあ？女あ」

「アップはガイコツを寄代にしてる。じゃあ 清四郎さんは？」

「ケツ。そりゃ代弁したつもりか？リョウが聞きてえことだろ
うが」

確かに、オレが一番聞きたかったこと。アップとのデュエルで、“地縛神”が何かしら関わってる。遊星たちの時のように、清四郎さんが操られているのなら助けられるかもしれない。

「知らねえな。あいつは謎だらけなんだよ」

知らないか。
でも、可能性はある。

「ねえ、アップ。“地縛神”は確かに人間世界で遊星たちが倒したと思っただけど」

「ああ。倒した。だが、生かしたのもそいつらだぜ」

どういこと？

「オレたちは寄代として人間を使っていた。そいつらを助けたんだ。オレたちも助けるとは考えなかったか？」

「それで、次はこの世界を滅ぼすと？」

「勘違いすんな。つるんでただけだ。目的まで一緒じゃねえんだよ」

「じゃあ、アプの目的って？」

「満足できればそれで良い！強い奴がオレの敵！オレの目的だ！その点で言やあ、リヨウ！てめえは甘ちゃんだが、なかなか良かったぜ！」

「もう、力が戻ることはないよ。マハードが封印したからね」

「殺せ！オレの生涯に悔いはねえ！」

「断るね。誰であろうと、生きている者に手を出すつもりはないよ」

「チツ！なら」

「マハード」

「ああ」

ガチッ、っと身体を拘束するバインドが現れた。

「アアッ!？」

「自害なんてしちゃダメだよ。リヨウは貴方に生きて欲しいんだから」

「これから“スターダスト”と連絡を取る。どうなるかはそれからだ」

マハードとマナに任せておけば、悪いようにはしないだろうし。

「リヨウ、頭の傷は大丈夫？」

「うん。大丈夫だよ、アリス。マナがヒーリングしてくれてたし」

マナの光の力の一端だね。傷はもうほぼ癒えた。

「ふう」

「リヨウ　　?どこか痛むの　　?」

アリスが心配そうに覗き込んできた。

「あゝ　アリス」

「な、なに？」

「お腹すいた」

みんながずつこけた。

「はい。ご飯できたよ」

遅めの昼食が始まった。アリスと由里と舞、時々咲が作ってくれた。

『いただきます』

普段はマナがいつの間にか作ってて、みんなで食べてた。今日はオレと一緒に寝てたからね。今は“スターダスト”と連絡取ってるだろうしね。

「啓斗君、どうかな？」

由里の様子がほんの少し変わってることには気付いてた。悪い影響はなさそうだから放っておくけど。

「ん、良いんじゃないか。

それよりよ」

あゝあ。

由里が頬を膨らませて怒ってます、ってアピールしてるよ。

「“地縛神”のこと、リョウとアリスは知ってる？教えるよ」

まあ、そうだね。遊星たちがいないところでは、あんまり話したくなかったんだけど、そんなことは言ってもらえないし。

オレは啓斗たちに、ザッとシグナーとダークシグナーとの闘いについて話した。

「そんなことがあったんだね」

「だが、むしろ合点がいったぜ。シグナーがどうこう言わせてもピンと来なかったが、これで納得だ」

「私たちは何が何だか」

「ええ」

「とにかく、“地縛神”の影響はシグナーなら効かない。けど、舞と咲は効くから、“地縛神”が召喚される時は私たちの誰かの傍にいてね」

「うん」

「解ったわ」

「ここからは推測の話。

“地縛神”はアプを除いて残り5体。“Asllapiscu”
“Cusillu” “Ccarayhua” “Chacuchallhua”だよ」

多分、人間世界での闘いで生き残らなかったレクス兄弟の“地縛神”は生きてない。人間自身が生きてないからね。
問題は、

「リヨウ、後1体は？」

そう。それが問題。

「解らないんだよね。オレの記憶にはない」

ちらつと、アリスを見たけど、アリスは首を振った。オレの記憶が間違ってる訳じゃなさそうだね。

「二人が知らないということは、まだ他にいるということね」

「そうなるかな」

「解らねえこと言っても仕方ねえ。次にいくぜ。」

リヨウ、クロスシンクロってのは何だ？」

そのことか。

「吾も是非聞きたいな」

「シン。あれ？他の精霊の子たちは？」

「全員出払っている。アップをどうするか、だろう。吾は万が一の為に残っているが」

なるほどね。二人がいた方が説明は簡単なんだけど。

「クロスシンクロは、オレたちが辿り着いた新しい境地、スピリチュアル・クロスで手に入れた力だよ」

「新しい境地　？」

「進化にはいくつも種類があって、スピリチュアル・クロスはその一つ。シンクロの先にあるシンクロ、それが答だよ」

「そんなことがあるんだね」

「でも、どうしていきなりそんな力を？」

「オレが“開闢”に連れられた時、1日修行してきたんだよ。そのお陰かな」

「修行、私たちもできるのかな？」

「あんまり進めない、かな」

明かり一つない真つ暗闇の洞窟を歩く。一つ間違えたら、精神が崩壊する。五感が全く定まらないからね。

オレたちは五感のズレを、三人の感覚を一つにすることで克服した。文字通り、三位一体となる。それが、スピリチュアル・クロス。

「その姿は、その影響なの？」

オレの格好は、黒一色のシャツに白いマント。今までは白だったんだけどね。

「マハードが闇の力、マナが光の力だから、オレはその両方だったマナがね。それでこの格好だよ」

チヨイスはマナだけど。

「他に聞きたいことはあるか？」

「マハード？」

「今戻った」

「質問はもうないよ。これから私たちはどうするの？」

「明日、“スターダスト”たちの下に行くことになった。そこで全て決めるようだ」

「みんな同行だよ」

明日、か。

夜、オレは一人で部屋にいる。みんなはオレが疲れてるだろうから、早く休めとのこと。素直に従った。事実だからね。

「マハード、マナ。アプの処置はどうなるの？」

「明日、決める。かなり悩んでいるようだ」

「そっか」

「アプが精霊たちの命を奪ったことは、変わりようのない事実だから」

確かにそうではある。変えようがない。

「リヨウの意志を組んでくれている。私はあまり心配していない」

「こうして捕らえることができたのは、リヨウがデュエルに勝ったからだよ」

「オレたちが、だね」

「えへへ、優しいね」

「この考えを今更変えるつもりはないよ」

「だからこそ、辿り着いた境地だ」

「うん」

「眠ろう。休める時は休まなければ、身が持たない」

「そうだね。お休み、マハード、マナ」

「お休み」

オレたちは眠りについた。

そして、翌日。オレたちは“スターダスト”たちがいる山に向かった。

「知らない精霊もいるね」

「私たちが来たって訳じゃないんだね」

広間に行くと、“スターダスト”たちシグナーの龍はもちろん、他の精霊たちが多くいた。見た感じ、被ってる種族はない。種族につき1体来たってところかな。

「皆、昨日は大丈夫だったか？」

「大丈夫だよ、“スターダスト”」

「無事で何よりだ。リヨウ、よく上級兵を捕らえられたな。しかも、その正体が」

まあ、“スターダスト”はその先を言葉には出しにくいよね。

「その話はもう良いよ。」

「アプをどうするか、でしょ？」

「ああ。一同もそれが聞きたいだろう。その為に集まったのだからな」

“スターダスト”に視線が集まる。みんなが次の言葉を待った。

「本来なら、処断する。が、捕らえた張本人、スピリットシグナーであるリヨウの強い希望により、無期懲役で牢獄に入れることとする」

。淡々と語る。でも、その中に秘められてる想いは、どうなんだろう。アプは、精霊たちに被害を与えた。もう戻らない精霊もいるかもしれない。

それでも、処断はしなかった。きっと、精霊たちの最大の譲歩。これ以上無理を言う訳にはいかない。生きていれば、良いことはある筈だよな。

「待てや、“スターダスト”さんよお」

ある一人の精霊が発言する。

「控えろ、“ゴーズ”。これはもう決定したことだ」

“冥福の使者ゴーズ”か。

「“レッド・デーモンズ”さん、そうは言うがよ。いくら張本人が言ってるからって、こりゃ甘過ぎじゃねえかい？」

多分、反論があるんだろうね。

「えっと、“ゴーズ”っていったよね？」

「ああ、言ったぜ。てめえがリヨウだな？」

「そっだよ」

「てめえが勝ったのは解るが、精霊には精霊のルールがある。口出しすんなや」

郷に入りては郷に従え。理解はできる。けど、ここは退かない。

「今はオレが発言してるだけで、同じことを思ってる精霊はまだまだいるぜ。オレだけじゃねえ」

「解ってるよ。でも、意見を変えるつもりはないね」

「だから、口出しすんなって言うてんだろ？」

「貴方こそ解ってるの？リヨウがいないとこの世界が危ないんだよ？」

「マナ」

「リヨウ」

マナを見て、軽く下がらせる。

「そいつが言ってることが理解できねえ訳じゃねえ。確かに、てめえらはオレたちの為に命懸けで闘ってるんだろっよ。」

けどなあ、もう死んで戻って来ない奴だっていんだよ。この闘いで犠牲になった奴らが、それじゃ浮かばねえんじゃねえかい？」

「犠牲になった精霊たちってさ。何を思って闘ってたんだろっかね？」

「そりゃ、そいつらを殺した奴らに対する怨念ってところじゃねえのか？」

「少しはあるかもしれないね。オレたちは今こうして生きてるから解らない。」

でも、みんなこの世界を護る為に闘ってた筈。相手にいろんな感情を持ってただろうけど、一番大きいのはこの世界を護りたいって想いじゃないかな。違う、“ゴーズ”？」

「そりゃそうだが」

「だったら、今更アプの命を奪うことに意味はないよ。生きてる尊い命が一つ散ってしまうだけだ」

「だから生かせ、か？
てめえの言い分は解ったぜ。確かに、処断したからって犠牲になっ
た奴らが浮かばれる訳じゃねえかもしれねえ。
だが、オレたちの怨みはどうなる？オレたちは、友を失った奴だっ
て大勢いる。取り残される絶望と悲しみは、計り知れるものじゃね
えぞ」

知ってるつもりだった。初めて出会った時のアリスを知ってるから。
あの悲しみは、想像を絶する。

「怨みを晴らす。ただその為に命を一つ散らすの？」

「だったら、他にどうする？半殺しにでもするか？」

「暴力じゃ何も解決しないよ」

「じゃあ何か、オレたちは我慢しろってか？」

「そうして欲しい」

言った瞬間、とてつもないプレッシャーに襲われた。“ゴーズ”が
オレに突っ込んで来た。動く前に剣を喉元に突き付けられていた。

「調子に乗るなよ！人間風情が！」

「“ゴーズ”！貴様！」

「リヨウ！」

「来るな！」

みんながオレに近付こうとするのを、一喝した。

「“ゴーズ”！確かにオレはみんなに酷な頼みをしてる！でも、憎しみの連鎖は断ち切らなきゃいけないんだ！」

「いつてめえはそんな頼みをオレたちにできるようになった！？てめえら人間はいつもそうだ！てめえ勝手にオレたち精霊を利用しやがる！オレたち精霊はてめえらの思い通りに動く優秀な駒だろうよ！」

「否定はできないよ。確かにオレたちは、みんなに無茶をさせてる」

「それをてめえらは、勝手に自分の力だと勘違いしやがる！一人じや何もできねえ弱い人間が！」

「そうだ！オレたちは所詮弱い人間！一人じや何もできやしない！」

「っ！？」

“ゴーズ”に力の限り叫ぶ。オレの心からの叫び。

「だからオレたちはみんなの力を借りて闘ってる！オレが強いんじゃない！みんなが強いんだ！」

そんなことは解り切ってる。オレたちは弱いんだから。

「でも、精霊だって無敵じゃない！だからオレたちがいるんだ！微力だけど、精霊たちの力になることができる！人間と精霊、一つに

なることで初めて強い力が生まれるんだ！」

「確かにそうだろうよ！だがな、それとてめえの勝手な頼みに何の関係がある！？」

「アプを処断すれば、報復としてまた争いが起こるかもしれない！ファントムだけじゃない！他に起こす精霊がいるかもしれない！争いがまた争いを呼ぶ！憎しみは憎しみしか生まないんだ！その憎しみの連鎖を、誰かが止めなくちゃいけないんだ！」

「なんでオレたちが我慢しなくちゃならねえ！」

「なら、また別の争いで友を失うつもりか！？そしてまた争いを起こすのか！？また別の悲しみを生むつもりか！？」

「ぐっ」

「負の連鎖は止まらない！誰かが止めなくちゃいけないんだ！“ゴーズ”！」

「甘いものねえ」

互いに叫び合うただ中に、別の声が響いた。
全身に緊張が走る。背筋に冷たいものが流れた。

「マハード！マナ！」

二人が飛び出して来る。同じことを感じてる筈だった。

「どこだ！？」

誰じゃない。正体はだいたい見当が付いてる。

「ううよ、うう」

後ろ！

振り返ると、綺麗な黒のドレスを着たガイコツが立っていた。

「はじめましてね。私はファントム上級兵のライア、よろしく」

挨拶は穏やかだけど、漂う雰囲気は正反対。殺気立ってる。

「早速だけど、私とデュエルしましょう。もちろん、受けてくれるわよね？」

この場でデュエルするのはマズイ。“地縛神”を召喚されたら、ここにいる大勢の精霊たちが危ない。

「どうやってうう？」

「愚問ね。私が操っているのはたかがガイコツよ。ガイコツなら、気配もなく近付けるわ」

十分に近付いてガイコツを操ったってところだね。

「そうそう。ムダなことを話している隙に、精霊たちを逃がすつもりなんですよけど、ムダな足掻きよ。ここはもう私の下級兵が囲んでるわ」

読まれてる。動くこともできない。

「さあ。デュエルを始めましょう。生と死を掛けたライディングデュエルを」

既にライアはガイコツの馬に乗ってる。やるしかないのか？

「リヨウ！やるんだ！私たちのことは気にしなくて良い！」

「スターダスト」

「万が一召喚され、精霊が吸収されたとしても、勝てば問題ないことだ！」

確かに、オレが勝てば“地縛神”は力を失い、吸収されたとしても帰って来る。

「そうねえ　貴方がデュエルに勝てば、そうなるわ。負ける気なんてないんでしょう？だったら始めましょう。一時的に精霊を見捨てれば良いのよ」

見捨てる。

確かにそうだ。オレにはそんなことできない。

「とんだ甘ちゃんね。絆だの何だの言ってる奴には相応しいわ」

「ちょっと待って。今のは聞き捨てならないよ。私たちとリヨウの絆を馬鹿にしたの？」

「あら？か弱い魔女が何を言ってるのかしら？」

「ッ！」

「挑発だ！頭を冷やせ！マナ！」

飛び出そうとしたマナを、マハードが一喝した。

「早くやれよ、リヨウ」

「“ゴーズ”？」

「ここに上級兵が現れた。倒すべき敵が目の前にいんだよ。

ためえはいつも通り闘えば良いんだよ。いつも通り、オレたち精霊を捨て駒にしてな」

オレはそんなこと、微塵も思っていない。でも、少なからずそうやってカードを扱う人間がいて、そう考えてる人間がいる。“ゴーズ”も、何か辛いことがあったのかもしれない。

今ここに、スピリットシグナーはオレを除いて三人いる。三人ともできるだけ散らばって被害が出ないように動いてる。だけど、この数はとてもムリだ。

「“スピードワールド2”強制発動」

強制的に“スピードワールド2”が広がる。

「貴方がグズグズしてるなら、私が勝手に始めるわ。その際に“地縛神”が召喚されても、後悔しないことね」

ライアが一人で走って行く。やるしかない！

マハードが出しておいたソニックに飛び乗り、急いでライアを追っ

た。

第十一話：処置（後書き）

今回の話はどうだったでしょうか？

自分が連載するこの小説が後一月ほどで一周年を迎えます。特に一周年記念に何かするという予定は立てていませんが、何かご希望があれば、できるだけ実現したいと思います。何かご希望があれば教えてください。

では、グッチーでした。

第十二話：縛られし憎悪（前書き）

今回はデュエルです。

永続罫“毒蛇の怨念”は漫画版のカードを、オリジナル化したカードです。

禁止カードも1枚使っています。

では、どうぞ。

第十二話：縛られし憎悪

オレはソニックに乗ってライアを追っている。

「始めるわよ！」

このまま野放しにしているも、勝手に“地縛神”を召喚されるだけ
もう、やるしかない！

『ライディングデュエル！アクセラレーション！』

「私の先攻！ドロー！」

先にスタートして、第一コーナーを取ったのはライア。ライアのターンからデュエルが始まる。

「私は“ブラックマンバ”を召喚！」

ATK / 1300

「カードを1枚伏せ、ターン終了よ」

「オレのターン！」

SP 1

“地縛神”が召喚される前に、速攻で勝負を決める！

「魔導騎士 ディフェンダー”を召喚！」

ATK / 1600

「このカードが召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを一つ置く。」

バトル！ “ブラックマンバ” を攻撃！」

「永続罨“毒蛇の怨念”を発動！」

「攻撃続行！」

「ウツ！」

ライア LP 3700

攻撃は通った。問題はあの罨カード。

「永続罨“毒蛇の怨念”の効果！ “ブラックマンバ”が墓地に送られた時、デッキから“ブラックマンバ”を特殊召喚できる！」

ATK / 1300

「“ブラックマンバ”の効果発動！召喚された時、相手モンスター1体の表示形式を変更する！」

DEF / 2000

“魔導騎士 ディフェンダー”が守備表示になったか。

「オレはカードを2枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン！」

SP 2

「“ブラックマンバ”をリリースし、“スパウン・アリゲーター”をアドバンス召喚！」

ATK / 2200

「“ブラックマンバ”が墓地に送られたことにより、“毒蛇の怨念”の効果で3体目の“ブラックマンバ”を特殊召喚！」

ATK / 1300

「表示形式を変更！」

ATK / 1600

「いくわよ！“スパウン・アリゲーター”で“魔導騎士 ディフェンダー”を攻撃！」

「うああっ！」

リヨウ LP 3400

「くっ でも、“魔導騎士 ディフェンダー”の効果！魔力カウンターを取り除くことで、破壊を無効にする！」

「あら。残念。カードを1枚伏せるわ。エンドフェイズに、“スパ

ウン・アリゲーター”の効果が発動するわ。リリースした“ブラックマンバ”を特殊召喚する」

ATK / 1300

「そして、表示形式を変更ね」

DEF / 2000

「オレのターン！」

SP 3

「オレはチューナーモンスター“ナイトエンド・ソーサラー”を召喚！」

ATK / 1100

「レベル4の“魔導騎士 ディフェンダー”に、レベル2の“ナイトエンド・ソーサラー”をチューニング！
白き魔術が重なりし時、百戦錬磨の魔術師が現れる。光差す希望と為れ！」

シンクロ召喚！冴え渡れ！“高尚なる魔術師トエル・カウロ”！」

ATK / 2300

「トルンカの効果発動！“スパウン・アリゲーター”の攻撃力をエンドフェイズまで半分にする！」

ATK / 1100

「バトル！トルンカで“スパウン・アリゲーター”に攻撃！シルバ
ー・グランズ！」

「ムダよ！罫カード“攻撃の無力化”！バトルフェイズを終了させ
るわ」

「ターンエンド」

ATK/2200

「貴方の絆も、所詮そんなものね」

「どういう意味？」

「今、貴方は2体のモンスターを犠牲にしてその精霊を召喚した。
貴方にとって2体のモンスターは、所詮召喚の布石にしかない
ってことよ。」

「貴方、布石となるモンスターのことを考えてる？」

「」

「より強力なモンスターを召喚する為に、下級モンスターを犠牲にす
ること。」

「そんなことも考えないで、よく絆なんて言えたものね」

「なっ」

「私のターンよ」

SP 4

切り換えろ、惑わされるな！
ライアの場には3体のモンスター
手札に“地縛神”がないこと
を祈るしかない。

「ふふふ、私の手札に“地縛神”はないわ」

首の皮一枚で繋がった。

「でもね、こんなカードがあるのよ。

“SP 縛られし神への布石”！SPカウンターが4以上の時、このターンの召喚を禁じる代わりに、デッキから“地縛神”を手札に加える！」

「ッー！」

“地縛神”がライアの手札に。

「カードを1枚伏せ、ターン終了よ」

「くっ オレのターン！」

SP 5

「畏カード発動！“覇者の一喝”！このターン、貴方は攻撃できない！」

「ッー！」

このターンの攻撃を禁じられた。手札にモンスターを破壊するカードはない。“地縛神”を召喚される。そうになったら、精霊たちが。

「ライア！目的は何だ！？何がしたい！？」

「アプの目的は強者だったものね。私にも何かあると考えた訳ね。

私の目的はね、貴方のような偽善を語る人間を屠ることよ！」

オレのような、偽善者を？

「だったら、オレだけを狙えば良い！精霊たちは関係ない筈だ！」

「そうね。だけど、絆を語る貴方には、この上ない苦痛を与えられると思わない？」

「何を？」

「私はね、人間が精霊をこき使うのが許せないのよ。

かつて、私も人間と闘う精霊だった。私たち精霊をとても大切に扱う人間だった。ように見えただわ」

だった？

「ある日、大事な公式デュエルに負けたのよ。互角だった。相手も強かったのよ。でも、人間はそうは思わなかった。こともあるうか、腹いせに私たちのカードを破り捨てたのよ！」

「ッ!？」

なんてことを !

「私は人間を信じない! 所詮、偽善を語る生き物に過ぎないのよ! 先ずは、手始めに貴方たちスピリットシグナーを殺してやるわ! そして、人間世界を今度こそ滅ぼすのよ!」

「確かに、貴女にしたことはオレたち人間が悪い。でも、全ての人間がそういつ訳じゃない!」

「貴方は違つとでも言つての!?! そんなことを信じるとでも思つてるの!?!」

ダメだ。ライアが受けた心の傷は、そんな簡単に癒える傷じゃない。

「人間に怨みがあるのなら、人間だけ責めれば良い! 精霊たちには手を出すな!」

「そんなに精霊が可愛いなら、救う方法が一つだけあるわ」

何か方法がある ?

「サレンダーしなさい」

「ッ!」

「サレンダーすれば、この闇のデュエルで犠牲になるのは、貴方だ

「けよ。貴方の命を、今ここで投げ出しなさい」

「オレがサレンダーすれば、みんなは助かる。オレ一人の犠牲だけで済むんだ。」

「ダメだよ！」

「叫び。アリス。」

「リヨウが死ぬなんて、私は嫌だよ！死なないで！」

「そつだよ！リヨウ君は何も悪くないんだから！」

「お前が死んだところで、何も変わらねえ！」

「そつよ！貴方が犠牲になる必要なんてないわ！」

「だから闘って！リヨウ！」

「みんな」

「ふん。だったら、精霊が犠牲になるわね」

「闘え！そして勝て！勝てば皆戻って来る！犠牲にはならない！」

“スターダスト”の言う通り、オレが勝てば一度吸収されても、精霊たちは戻って来る。でも、一度でも犠牲にするなんて、オレにはできない。

でも、サレンダーすれば、精霊たちが助かっててもアリスたちが残される。アリスたちだけを置いて、オレだけが逝く訳には。

どうする　　！考える！何か手がある筈だ　　考える考える考える
考える考える考える！

「しつかりせんかい！」

ゴン！

「~~~~ツ！」

トルンカに杖で思い切り殴られた。

「　トルンカ？」

「落ち着くんじゃ。頭を冷やせ！」

「でも」

「でもないわい！精霊を犠牲にもできん！自分が犠牲にもなれ
ん！もう答は出とる！」

「えッ　？」

「二兎を追う者は、一兎を得ることもできん！」

「　どっちかを諦めると？」

「違うわい！一人じゃから一兎を得ることもできんのじゃ！今、お
主は一人か？考えてみい！」

「　オレは、一人じゃない！」

そうだ！オレにはトルンカがいる。マハードがいる。マナがいる。みんながいるんだ！オレ一人で闘ってる訳じゃない！

「目は覚めたか？」

「うん。ありがとう、トルンカ」

「礼などいらんわい。さあ、いくぞ」

「オレは“SP エンジェルバトン”を発動！」

「結局、自分が可愛いのね」

まだ、希望は失われてない！可能性はまだあるんだ！

みんな オレに、応えてくれ！

「カードを2枚ドロー！」

来た！希望は繋がった！

「1枚を墓地に送る！」

さらに“SP 陰の光”を発動！SPカウンターが5個以上ある時、このターンの攻撃を放棄する代わりに、オレの場に存在する光属性モンスターと同じレベルのモンスター1体を特殊召喚する！
トルンカのレベルは6！よって、マナを特殊召喚する！

ATK/2000

「遅くなってゴメン、リヨウ！私に任せて！」

全てはマナに任されたからね。

「畏カード“賢者の秘石”！マハードを特殊召喚！」

ATK / 2500

「いくぞ！これ以上、奴の好きにはさせん！」

「うん！“マジシャンズ・シンクロン”を通常召喚！」

ATK / 0

「レベル7のマハードに、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング！」

黒き魔術が集いし時、新たな光の力が目覚める。光差す希望と為れ！
シンクロ召喚！舞い降りよ！“SF ブラックマジシャン”！」

ATK / 2900

「そして、“マジシャンズ・シンクロン”は場に戻って来る！」

ATK / 0

「レベル6のマナに、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング！」

黒き魔術が交わりし時、新たな絆の幕が開く。光差す希望と為れ！
シンクロ召喚！舞え！“SF ブラックマジシヤンガール”！」

ATK / 2400

「いくらシンクロモンスターを召喚したとしても、“地縛神”を止めることはできない！」

「確かに、もう“地縛神”の召喚を止めることはできない！でも、“地縛神”を止めることはできる！」

「バカね！そんなことができる訳がない！」

「やってみなければ解らない！オレたちが必ず、“地縛神”を止めてみせる！」

オレは墓地の光属性チューナー“マジシャンズ・シンクロン”と、闇属性チューナー“ナイトエンド・ソーサラー”をゲームから除外して、光と闇が混濁する狭間より姿を現せ！ツインチューナー！“幻惑のカオス・マジシャン”！」

ATK/0

「ふざけるんじゃないわ！貴方はまた、除外してまでモンスターを召喚した！除外されたモンスターがどんな思いをしてるか解ってるの！？」

「解ってないのは、貴女の方だよ」

「なんですって！？」

「私たちは破壊されようと、除外されようと構わない。リヨウが勝てばそれで良いんだよ」

「それは裏切られた絶望を知らないからよ！」

「知ってるよ。私やお師匠様だって、信じてたマスターに裏切られたことがあるから」

えッ ?マハードとマナにも、そんな経験がある ?

「お前が経験したことは、計りようもない程辛く苦しいことだっただろう。だが、そこで歩みを止めてしまっただけじゃなかったのだ」

「裏切られることは辛いよ。でも、私たちが信じることを辞めたら、精霊としてそこで終わりだよ」

「黙れ！貴様等に何が解る!?!」

「解って貰う必要はない。事情などそれぞれだ。だが、これだけは言わせて貰おう。」

全てのカードに意義がある。破壊され、リリースされること、全てに意義がある。それが成せるのは、リヨウが私たちを全て信じているからだ!」

「だから私たちはがんばれる!リヨウが私たちを信じてくれるから、私たちはリヨウを信じられる!」

「お互いに信じているからこそ、破壊されようと、除外されようと構わない。リヨウを信じているから、次に繋がると信じられる」

「 綺麗事を!」

「そつだよね、リヨウ?」

「 うん！その通りだよ！」

あの日、初めて精霊世界に行った時、二人がオレに教えてくれたこと。

決めたんだ みんなと一緒に闘うんだ！

「いくよー！」

「ああ！」

「もちろん！」

オレたちの感覚を、今一つに ！

【我等、三位一体と成る】

【生まれし秋は違えど、死するその秋まで、我等は一つ】

【願わくば、我等が志を遂げるその日まで】

【いこう。共に】

スピリチュアル・クロス

「レベル8、シンクロモンスターのマハードと、レベル7、シンクロモンスターのマナに、レベル4、ツインチューナーの“幻惑のカオス・マジシャン”を、ツインチューニング！」

集いし光と闇の結晶が、新たな次元への幕を開く。光差す希望と為れ！

クロスシンクロ！闇の結晶！“SF ダークネス・マジシャン”！」

ATK / 3500

「光の結晶!“SF シャイニング・マジシャン・ガール”！」

ATK / 3000

「オレたちの絆は、今ここに繋がった！」

このターン、オレは攻撃できない。ターンエンド」

手札を全て使い切った。でも、クロスシンクロに成功した。これで良いんだ。

「結局、訳の解らないシンクロ召喚をただけよ！潔く認めなさい！貴方は精霊を見捨てたのよ！」

「ねえ。リヨウのターンは終わってるよ」

「生意気な魔女め！後悔するが良いわ！私のターン！」

SP 6

「2体の“ブラックマンバ”をリリース！」

くる！“地縛神”！

「マナ！力を合わせて、闇の力を弾き返すよ！」

「うん！いくよー！」

目を閉じて、マナの意識に集中する。光の幕が周囲を覆い始めた。

「何をしようとムダよ！」

現れよ！“地縛神 Ccaryhua”！」

ATK / 2800

宙に黒い心臓が浮かび上がる。でも、“地縛神”の闇の力を、マナが張った光の幕が遮断した。闇の力を押し返してるんだ。

「何故吸収されない!?!」

「私たちが遮ってるからだよ！みんなを護る為に、私たちは闘ってるんだから！」

「おのれえ！」

「これでオレたちを遮る物は何もない！勝負だ！ライア！」

でも、召喚されることに変わりはない。場に巨大なトカゲのような神が現れた。

「黙れ！ならば、直接貴様を葬るまでよ！」

バトル！“地縛神 Ccaryhua”で、ダイレクトアタック！」

巨体のトカゲのような姿から、巨大な舌が吐き出され、オレに迫る。止められない。

「うあああああつっ！」

リヨウ LP 600

かなり体制を崩しながらも、何とか制御して持ち直した。身体中に鈍痛が響き渡る。

「アハハハハハ！人のことを気にする前に、自分のことを気にするのね！」

“スピードワールド2”の効果発動！SPカウンターを4つ取り除き、800ポイントのダメージを与えるわ！これで終わりよ！」

ライア SP 1

「カウンター罠“ダメージ・ポラリライザー”発動！効果ダメージを無効にして、お互いにカードを1枚ドローする」

防いだ。負ける訳にはいかない！

「チッ！カードを2枚伏せ、ターン終了よ」

「オレのターン！」

リヨウ SP 6

ライア SP 2

「マナの効果を発動する！シャイニング・リバーズ！

1ターンに一度、オレの墓地が除外したカード1枚を、手札に戻すことができる。ただし、このターンは発動、伏せることはできない。墓地の“ダメージ・ポラリライザー”を手札に戻す」

ライアのSPカウンターがまた溜まれば危険だからね。

「さらにマハードの効果発動!“地縛神 Cc ar ay h u a”の効果は無効にする！」

「なんですって!?!」

これで攻撃が通る!

「そしてトルンカの効果で“地縛神 Cc ar ay h u a”の攻撃力を半分にする!’」

ATK / 1400

「最後にマハードのもう一つの効果発動!ダークエンド・ドレイン!マナの攻撃力の半分の、自身の攻撃力に加える!’」

ATK / 5000

「バトル!マハードで、“地縛神 Cc ar ay h u a”を攻撃!ダークエンド・イリユージョン・マジック!’」

「畏カード“和睦の使者”発動!私はこのターン、ダメージを受けず、モンスターは戦闘で破壊されないわ!’」

攻撃しても意味はない、か。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド!’」

決められなかった。次のターンに堪えなくちゃ、オレは勝てない。

「私のターン！」

リヨウ SP 7

ライア SP 3

「いくわよ！これでくたばりなさい！」

“地縛神 C c a r a y h u a”でダイレクトアタック！」

「オレは負けられない！罨カード“和睦の使者”！オレもこのターンはダメージを受けない！」

「戦闘ダメージに限った話じゃない！今度こそ、これで散りなさい！罨カード“破壊輪”！モンスター1体を破壊して、お互いに破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを受ける！」

私は、“地縛神”を破壊する！私のライフは残り3700、私は堪えられる！」

オレの場に伏せてあるカードはない。でも、まだ終わった訳じゃない！

「マナの第二の効果を使う！マナ！」

マナが天高く杖を掲げ、光の輝きが強まった。

「デッキの上からカードを3枚墓地に送り、その内の1枚の効果を実行可能であれば発動することができる！」

これは賭け。成功するかは全く解らない。

「そんなに都合よくいく訳がない！これで終わりよ！」

「オレは諦めない！みんなとの絆、必ず繋いでみせる！

いくよ！1枚目！“魔導戦士 ブレイカー”！」

ダメか。次！

「2枚目！“魔術師集結”！」

ダメ。残り、1枚。

「そうよ！所詮絆なんて存在しないのよ！」

「大丈夫だよ、リヨウ」

「マナ」

「私たちは、例え何があるつとリヨウを信じる。リヨウも、私たちを信じている筈だ」

「マハード」

そうだ。何があつたとしても、絶対に変わらない。オレたちが紡いだ、確かな絆。デッキに手を置く。信じる！みんなは、必ず応えてくれる！

「3枚目え！」

引いたカードは、ありがとう、みんな。

「“魔術吸収波”！オレはこのカードの効果を使う！

このカードを墓地に送ることで、効果ダメージを無効にする！その後、カードを1枚ドロウする！」

「バカなっ！？」

「これでダメージを受けるのはライアだけだ！」

「アアアアッ！」

ライア LP 900

よし、これでライフはほぼ互角！“地縛神”も消えた！

「ただで終わる筈ないでしょう！」地縛神 Cc ar a y h u a”
がカード効果で破壊された時、場に存在するカードを全て破壊するわ！全て消えて無くなりなさい！」

「そうはいかない！オレたちの絆は、まだ途絶えない！

マハードとマナは、相手ターンに一度、エンドフェイズまでゲームから除外することができる！」

マハードが闇に、マナが光に消えていった。

「だったら、そいつだけでも消えなさい！」

「悪いけど、トルンカも無事だよ。

墓地の“魔術の守護者”をゲームから除外することで、トルンカの

破壊を無効にする！」

トルンカは無事、マハードとマナもエンドフェイズには戻ってくる。

「まだよ！墓地の爬虫類族を全てゲームから除外し、“邪龍アナクタ”を特殊召喚！」

ATK/?

「このカードの攻撃力と守備力は、除外した爬虫類1体につき、600ポイントアップする！」

ATK/3000

でも、このターンのバトルフェイズは既に終わってる。トルンカが攻撃されることはない。

「エンドフェイズ、“邪龍アナクタ”の効果で、場のカード1枚を破壊！消え去りなさい！」

「ぬぐっ！」

「トルンカ！」

オレに防ぐ術はない。

「勝つんじゃないぞ」

そう言い残し、トルンカは破壊された。

「何故！？何故そこまで人間を信じられるの！？いつか裏切られるというのに！」

「勝つよ。オレは、必ず勝つから！」

エンドフェイズ、戻って来い！マハード！マナ！」

闇からマハードが、光からマナが姿を現した。

「裏切られる前提じゃ、何も信じられないよ」

「リヨウが私たちを信頼してくれている。私たちがリヨウを信じる理由など、それで十分だ」

みんながオレに力を貸してくれる。だから闘える。みんなと一緒に闘う、そう誓った！

「オレのターン！」

リヨウ SP 8

ライア SP 4

「マハードの効果！ダークエンド・ドレイン！」

ATK / 5000

この攻撃で、ライアとのデュエルは終幕を迎える。

「マハードで、“邪龍アナンタ”を攻撃！ダークエンド・イリュージョン・マジック！」

「アアアアアアアアアアアッ！」

ライア LP 0

第十三話：ロード

最後のマハードの攻撃で、オレはデュエルに勝った。

「 苦しいデュエルだったな」

「 そうだね」

オレは、闘い抜かなくちゃいけない。みんなと闘う、そう誓ったんだから。

「 ライア。大丈夫？」

ライアに近付いて声をかけた。マハードの放った魔術はかなりの威力だったろうけど、意識は繋いでる筈。

「 つ。私に、話し掛けるな」

「 ごめんなさい」

深々と頭を下げた。

「 聞いて貰えるとは思ってないけど、それでもオレは言わなくちゃいけない気がする。」

貴女の憎しみは、オレたち人間の所為だ。謝って済む問題じゃないかもしれないけど、今のオレにはこれくらいしかできないから。

「 ごめんなさい」

もう一度、深々と頭を下げた。

「そうだね。 。 私たちにはこれくらいしかできないけど」
「アリスたちも来て、みんなで頭を下げた。」

「バカなことしてるんじゃないわよ。今さらそんなことされて、許す訳ないでしょ」

「それでも、オレたちはできるするよ」

「偽善よ。そんな行為、所詮偽善なのよ」

確かに、偽善なのかもしれない。

「偽善でも良い。 。 こんなことで許してくれるとは思ってないよ」

「好きにきなさい。どうせ、私はもう表に出ることはないわ」

「ライアは、多分アプと同じように牢に入れられる。無期懲役で。」

「生きてね、ライア。生きてれば、必ず良いことがあるから」

「良いこと？」

「なら聞くけど、貴方は生きててあの清四郎に会ったんでしょう？良いことなのかしら？」

「それは、まだ解らないよ」

清四郎さんが何かに操られているとしたら、本当の清四郎さんに再会できる。でも、もしあれが本当の清四郎さんだったら、

「良いことじゃないかもしれない。でも、生きてれば悪いことだつてあるのは当然だよ。」

辛い現実を乗り越えてこそ、良いことがあつた時に嬉しいんだ」

例え、後者だつたとしても、オレは乗り越えていく。乗り越えていける。一人じゃないんだから。」

「リヨウ」

「スターダスト」

「ライアも、牢獄だ。良いな？」

「うん」

「皆も良いな？」

“スターダスト”がこの場にいるみんなに聞いた。

「今回は、完全にこいつに助けられたからな。素直に認めてやるよ」

“ゴーズ”も認めてくれた。反対する精霊はいない。

「最後に、一つ忠告しておくわ。」

人間を信頼することは、確かに精霊の意義かもしれないわ。けれど、裏切られた時の残酷さは、信頼に比例して大きくなる。よく覚えておくことね」

「それでも、私たちは信じ続けるよ」

「裏切られる前提で、何かを信じる者はいない」

オレたちは裏切らない。絶対に。

「では、ライアを」

「待つて、“スターダスト”」

「まだ何かあるのか？」

「ライアに聞きたいことがあるんだ」

アップに聞くか迷って、結局聞かなかったこと。でも今日のことです。決心が着いた。

「ライア。ファントムのアジトはどこにある？」

「何を聞くかと思えば。決まってるでしょ。私たちはガイコツ、死んだ者が行くところ。墓地よ」

やっぱりか。

「ありがとう、ライア」

“スターダスト”の手配で、ライアは連れて行かれた。

「リヨウ。何故、あのようなことを聞いた？容易に予想できた筈だが」

「まさかとは思っけど」

ドラゴンたちがあれこれと言ってる。

「オレが聞いたのは、確認だよ」

「何故、確認する？」

「こつちから攻め込む為」

「バカ言わないで！何故それをしないか、解る筈よ！」

解ってる。“ブラック・ローズ”が怒るのも、オレがかなり危険を侵そうとしていることも。

攻め込まない理由は、単純に墓地だから。ガイコツなんて無数にある。つまり、戦力が減ることはない。徐々に戦力を削り取っていくしかない。生みの親である上級兵を。

「でも、このまま手を拱いてる訳にもいかないよ。今回は何とかなつたけど、次はどうなるか解らない」

「それはそうだが」

「次にこういうことがあったら、かなり危険だよ？」

「ふむ」

次にこういう状況になった時、クロスシンクロを先に成功できたら良いけど、逆に“地縛神”を召喚されたら終わりだしね。

「オイ、リヨウ」

「啓斗？」

「「じゃ「じゃ言っで、はっきり言ったらどうなんだ？」

「そうだね。ここはリヨウ君らしく、ズバツと」

「うん。それで良いんじゃないかな？」

流石、付き合いの長い三人はもう気付いてる。オレが何をしたいのかを。

「うん。所詮、今は建前だね。もちろん、ここからはオレの私情だよ」

「なんだ？」

「清四郎さんのところに行きたい」

正直な気持ちだった。もう一度、ちゃんと会って確かめたい。

「リヨウの言ったことは確かだ。今回は助かったが、次は助からないかもしれない。だが、余りに危険だ」

「俺たちとしちゃ、こんな闘いさっさと終わらせてえんだ」

「正気か？敵のただ中に飛び込むことになる」

「だから、私たちはみんなに協力を求めてるんだよ」

「上級兵は後四体。私たちが一人ずつ闘えば大丈夫だよ」

「そこまでの道を、オレたちに作って欲しいって訳か」

「そうだね」

「墓地には塔がある。恐らく、上級兵はそこにいるだろう」

「“スターダスト”、貴方本気なの？」

「この闘い、いつかこちらから攻めなければならない。ならば、私はこの賭けに乗る。」

元々、鍵を握るのはスピリットシグナーだ。最も危険なものもスピリットシグナーだ。本来、精霊である私たちがすべきところにも関わらずだ。道を切り開く程度、私たちが責任を負わなければならないだろう」

“スターダスト”は腹を括ってる。この賭けに勝てば、争いは終わるんだから。

「“スターダスト”の言う通りですね。私は賛成です」

「本人たちがやる気だ。認めて良からう」

「マジかよ」

「しょうがないわねえ」

ドラゴンたちは認めてくれた。他の精霊たちも頷いてくれる。

「勝てよ。それが条件だ」

「うん。約束する」

“ゴーズ”も認めてくれた。

「じゃあ、決まったね」

「待って！」

「私たちは？」

舞と咲だった。

「二人は」

「私たちも行く！」

「待っているだけは嫌よ」

そうだね。その為に、ここに残ったんだから。

「舞と咲は、精霊たちと一緒に頼むよ。オレたちの、道を開いて欲

しい」

「ええ」

「オツケー！」

これで、本当に決定だね。

「決行は早い方が良いな」

「臨戦体勢は整っている」

「明日だね」

「良いだろう。ならば、解散して明日に備えよう」

それで解散になった。

オレたちは家に戻って、それぞれに休んだ。

side 由里

私たちは家に帰り、それぞれで明日に備えてる。

いよいよ、明日 明日でこの闘いが終わる。

「勝てるかな？」

私は、上級兵の一体と闘う。あの“地縛神”に。

「不安、ですか？」

「うん カレン」

「大丈夫です。私たちが貴女の傍にいます。それに、離れていても絆が切れることはありませんよ」

「そうだね よおし！」

「どうしました？」

「決心が付いたよ！」

私は勢いよく部屋を出た。ある人の部屋に向かって。

「なるほど。それは良いかもしれませんがね」

目的の部屋に着いた。軽くノックすると、いつもの返事が返ってきた。

「開いてるぜ」

扉を開けた。啓斗君がいる。

「由里か。どうかしたか？」

「ううん。いよいよ、明日だね」

「そうだな」

「あのね、啓斗君」

「ああ」

「全部終わったら、話したいことがあるんだ」

「今話せよ」

「にやはは。今はダメだよ」

「解った。何もかも終わったら、聞いてやる。だから、くたばんなよ」

「啓斗君もね」

これはおまじない。二人でこの闘いを無事に終われますように。

side out

side アリス

私は部屋にいる。

「恐いか？」

「きゃっ」

心配そうな表情をしてシンとリップが出て来た。

「確かに怖いけど」

私の恐怖は別のところからだった。

「私が清四郎さんと闘うことって、できないかな？」

「気持ちは解る」

リヨウと清四郎さんを闘わせるのが、怖い。
リヨウがどこか、私の手が届かないところに行ってしまう気がする。
。そうなるのが、凄く怖い。

「気持ちは解るが、リヨウが納得するのか？」

首を振った。

まず、ありえない。リヨウの心の奥底に、間違いなく大きな存在として生きてる清四郎さん。譲るとは思えない。

「きゃうー！」

「リップ？」

「きゃうきゃうー！」

何となく、言ってることが解った。

リヨウはどこにも行かない。私一人置いてきぼりにはしないって。

「大丈夫だ。リヨウは必ず勝つ」

「うん」

信じるしかない。私には、そのくらいしかできない。

「信じるよ。リョウを」

呟く。自分自身に言い聞かせるように。

「主アリス。できることはまだある」

「何かあるかな？」

「迎えてやるんだ。主アリスの、極上の笑顔で」

「うん。そうだね」

リョウが戻って来た時、私は笑顔で迎えてあげたい。

side out

目を閉じている。心を静めている。

清四郎さんと向き合う。向き合ってみせる。その時、どんな結果が待っていたとしても、心を乱しちゃいけない。常に自分を保つことが重要だから。

「良い集中力だ。よく心が澄んでいる」

「そうだね。大丈夫だよ、きっと」

「ああ」

「護るよ、必ず。オレたちがこの世界を」

「うん」

オレの、命に換えても。

「何を考えている？」

「私たちは、リヨウが考えてること解るんだよ？リヨウが死ぬのは、絶対にダメだよ」

「」

「死んではいけない。残される者のことを考えてくれ」

残される者のこと。

頭に浮かぶのは、みんなの笑顔。その笑顔を、オレが死んだら曇らせることになるんだね。

「何も失わずに勝てるなら、それに越したことはないんだけどね」

「珍しく弱気だね。心配することないよ」

「一人ではないからな」

頼もしいな。

「自分を崩しちゃいけないね。いつも通り、オレらしくいかないと」

「そうすれば、きっと勝てるよ」

「その通りだ。私たちは、どこまでも共に行く」

「ありがとう」

目を閉じたまま、静かに眠りについた。決意を新たにして。

集結している。精霊たちはもちろん、ファントムも同じように見える。

ファントムの兵が中央に見える大きな塔を中心に展開してる。

作戦はもう決めてある。後はもう、みんなを信じて突き進むだけ。

「いくぞ！」

“スターダスト”が羽ばたく。呼応して、雄叫びが上がった。激戦だった。各々に闘う精霊たちが見える。それでも、オレたちは進む。止まる訳にはいかない。

シグナーのドラゴンを中心に道を切り開いていく。次第に、中央の塔が近付いてきた。それにつれて、ファントムも増えてる。

「オレたちが道を切り開く！」

「しっかりやれ！任したぜ！」

「ありがとう！」

“レッド・デーモンズ”と“ブラック・フェザー”が抜け出し、行方を遮るファントムを蹴散らしていく。さらに近付いてきた。もうすぐ中に　！

「まだいますね」

「だが、ここからなら中まで一直線だ！行け！」

「道は私たちが切り開く！必ず無事に帰って来なさい」

“スターダスト”、“ブラック・ローズ”、“エンシエント・フェアリー”が羽ばたく。と、同時にオレたち六人がDホイールに乗って姿を現した。

「行こう！みんな！」

一気に加速する。みんなも遅れずについてくる。

作戦は、シグナーのドラゴンたちがオレたち六人を取り囲み、一直線に塔に進むこと。第一は、オレたちが塔に入ること。

“スターダスト”がこの作戦をオレたちに伝えた時、言ったのはこれだけだった。

『立ち止まるな。振り返るな。私たちが道を切り開く』

まさに、その通りだった。精霊たちが必死に作り上げた道を、オレたちはひたすら走ってる。

「見えたよ！塔の入口！」

「いや、待て！」

ファントムの兵が入口を遮断した。最後の壁って感じだね。

『シンクロ召喚！』

突然聞こえた背後からの声。

「お願い！フラッピ！」

「キュート！」

後ろから、突然舞い上がる七色の鳥と、飛び出して来た立派な武装を纏った兎。

「舞！咲！」

「行つて！」

「ここは私たちが！」

「解つた！また後で会おう！」

この場を舞と咲に任せて、とが切り開いてくれた道を突破した。いよいよ、オレたちは塔の中に入った。

「坂になってるよ。上に繋がってるんじゃないかな？」

塔に入ってすぐにアリスの言う坂が目に入った。多分、上級兵は上

にいる。

坂を駆け登る。しばらく駆けると、広い空間に出た。

「よく来たな」

低い、どすの利いた声が聞こえた。

黒い鎧を片手に、骨の馬に跨がってるガイコツ。上級兵だ！
こっちに向かって駆け出して来た。

「カカシ！」

啓斗の合図でカカシが飛び出した。上級兵と打ち合う。

「行け！」

「啓斗！？」

「ここは俺が引き受けた！さっさと行って、因縁にケリ着けて来い！」

「解った！」

啓斗を置いて、オレたちは次の坂を登る。次の広間が見えた。ここにも、多分上級兵がいる。

広間に出た。やっぱり、ガイコツの馬、武装したガイコツがいる。上級兵。

「ここは私だね」

「由里」

「大丈夫だよ。さ、何もして来ないうちに早く」

「解った」

由里に促されるまま、オレたちは次の坂に行った。もう、オレとアリスの二人だけ。

「次は、私が残るよ」

「」

何も言えない。アリスの目が、何も言わせなかった。

「この闘いが終わったら、いつもの生活に戻るんだよね？」

「うん。何もかも、今まで通りの筈だよ」

「無事に、帰って来てね」

「アリスもね」

オレは、みんなの笑顔を守る為に闘うと決めた。でも、その為に犠牲になったら、この笑顔は悲しみの涙に変わる。

「約束するよ。オレは、必ず戻って来る」

「私も、約束する。ちゃんと待ってるから」

お互いに笑い合った。
死ねない。この笑顔を、絶対に絶やさせない。

次の広間に出た。やっぱり、ガイコツの馬に乗った武装をしてるガイコツがいる。上級兵だ。

「じゃあ」

「うん」

会話はそれ以上必要なかった。お互い、約束を守るだけ。

「行かせん！」

黄色い巨大な猿がオレの道を遮った。手に持った矢を構えてる。停止はできない。突っ切るしかない。停

「通して貰おう」

シンだった。黄色い猿を押し退け、オレに道を開いてくれた。突っ切った。振り返ることもしない。ただ次の坂を登り始めた。

「よく、一人で残ったな」

啓斗に言う。

「てつきり、全員で一体ずつ倒してくると思ってたわ」

由里に言う。

「 例え一人だろうと、生かして帰さんぞ」

アリスに言う。

「ハッ！解っちゃいなえな！」

「私たちは、一人じゃないんだよ」

「離れていても、心は繋がってる」

「俺たちスピリットシグナーだけじゃねえぜ」

「今日この場所に集まったみんなが私たちに力を貸してくれる」

「だから私たちは、勝って帰るんだよ」

啓斗、由里、アリスが眼前の上級兵に向かって言う。

「それによ。俺たちはある意味ついでなんだよ」

「私たちは別の目的も兼ねてここに残ったんだからね」

「この闘い、リョウの道を切り開くことが目的だから！」

みんなが切り開いてくれた道を、ただ走り続ける。オレが清四郎さんのところに辿り着けるように。

オレだって、みんなが心配。だけど、それはみんなだって同じ筈。

離れていても、心は繋がってる。

信じよう。みんなが、誰一人欠けずに待っていることを。

空が見えた。頂上だ。

一人、悠然と立っている人がいる。

「 来ましたよ、清四郎さん」

「 やあ。よく来たね、リョウ」

最後の闘いが、幕を開ける。

第十三話：ロード（後書き）

次話からデュエルの連続です。

ファントムとの抗争がクライマックスに突入しました。
次話もできるだけ早く更新したいと思います。

それでは、グッチーでした。

第十四話：禁忌

side 啓斗

俺は、どこか荒んでいる。心のどこかが、荒れているんだろう。

昔からそうだったと思う。喧嘩三昧の日々だった。目付きが気に入らない、赤毛が気に入らない、何かと理由を付けて喧嘩を吹っ掛けた。来た。

全部返り討ちにした。何人いようが、最後まで立っていたのは俺だった。

俺から喧嘩を吹っ掛けたことは一度もない。それでも、俺には非難の目が向けられた。周りの奴らは、俺が怖いと近寄らなくなった。

そんな時だった。あいつらに会ったのは。

どういつきつかけだったのか、よく覚えていない。だが、気付くとあいつらの輪に入っていた。不思議と、嫌な気はしなかった。だが、俺と一緒にいれば、いつか必ずこいつらに被害が及ぶ。そうなるのが、唯一怖かった。

『なあ』

『どうかした？』

『あんま、俺に近寄るなよ』

『なんで？』

『俺と一緒にいれば、お前らに余計な迷惑かけんだよ』

『そうなんだ』

そうなんだ、じゃねえだろ。俺のことは知ってるだろうが。

『ああ。だからもう』

『ヤだ』

ヤだじゃねえだろ。。

『だって、啓斗君は悪いこと何もしてないんだよ？』

『由里の言う通りだよ。君は何も悪くないんだから』

『それに、嫌ならここにいないよ。オレたちは好きでここに居るんだから』

『勝手にしろ』

荒んでいたものが、こいつらと一緒にいれば洗い流されている感覚だった。初めての、感じたことのない感覚。。

喧嘩をしなくなった。避けるようになったのかもしれない。

笑うことが多くなった。あいつらとずっと、一緒にいたいと思っていた。

俺は、ファントムの上級兵と向かい合っている。

「お前、名は？」

「チャルアだ」

「一応聞いとくぜ。目的は何だ？」

「それはやってみれば解る。貴様も、話し合いに来た訳ではない筈だ」

確かにな。話し合いが通用するとは思っちゃいねえ。

「始めるぞ。長話に、意味はない」

「応」

互いに、乗ったままの状態。そこから、Dホイールを起動させる。

「いくぞ」

「来い！」

『ライディングデュエル！アクセラレーション！』

同時に走り出した。

「先攻は私が貰う」

「好きにしな」

「私のターン」

さあ、奴はどんなカードを使ってくる？

「私は、“インターセプト・デーモン”を守備表示で召喚！」

DEF / 1600

「カードを1枚伏せる。ターンを終了」

「俺のターン！」

SP 1

「“レベル・ウォリアー”を特殊召喚！」

ATK / 300

「このカードは、相手場にのみモンスターが存在する場合、レベルを4として特殊召喚できる！」

さらに、“共闘するランドスターの剣士”を召喚！」

ATK / 500

「いくぜ！レベル4の“レベル・ウォリアー”に、レベル3の“共闘するランドスターの剣士”をチューニング！」

受け継がれし魂が、光となって駆け昇る！

シンクロ召喚！光来せよ！“ライトニング・ウォリアー”！」

ATK / 2400

「バトルだ！“ライトニング・ウォリアー”で“インターセプト・デーモン”を攻撃！」

「“インターセプト・デーモン”が攻撃対象になった時、相手プレイヤーに500ポイントのダメージを与える」

「ぐああっ！」

啓斗 LP 3500

くっそ なんて衝撃だ。今までと段違いじゃねえか！

「だが、攻撃は続行だ！いけ！ライトニング・パニッシャー！」

「又ッ！」

「そして、“ライトニング・ウォリアー”の効果発動！戦闘でモンスターを破壊した時、相手の手札1枚につき、300ポイントのダメージを与える！

お前の手札は4枚！1200のダメージを受けろ！」

「又グッ！」

チャルア LP 2800

「やるな」

「まだ、デュエルは始まったばかりだぜ。下りるなら今の内だけだな」

「フフフ。笑わせる。ようやく骨のある奴が現れたのだ！」

「てめえ。さっきも聞いたが、目的は何だよ？」

「フハハハハ！良いだろう！教えてやる！」

私の目的は、全ての破壊だ！破壊して破壊して破壊し尽くす！それが私の目的だ！」

全ての破壊、か。

「そんなことして、何になるんだよ？」

「意味などない！嬉しいのだ！轟く破壊音！泣き叫ぶ悲鳴！愉悦なのだ！」

歪んでやがる。どっかが飛んでやがるな。だが、こいつは自分が愉しむ為に闘ってる。ライアみてえに、深い悲しみからきてる訳じゃねえ。それなら、遠慮なく闘うことができるぜ！

「その愉悦はここで俺が止める！諦めな！」

「やってみせるが良い！」

罌カード発動！“ダメージ・ブースト”！効果ダメージを受けた時私のSPカウンターを2つ増やす！」

チャルア SP 3

SPカウンターを増やした？

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「私のターン！」

チャルア SP 4

啓斗 SP 2

「SP スピード・フュージョン」を発動！」

この為にSPカウンターを増やしやがったのか！

「SPカウンターが4つ以上ある時、発動できる“SP”だ！

手札の“ロアー・バルカン”と“バン・ガード”を、手札融合する！
見せてやるう！我が破壊の力を！融合召喚！“起爆獣ヴァルカノン”！」

ATK/2300

「攻撃力は“ライトニング・ウォリアー”の方が上だ！」

「ならば、破壊を味わって貰おう。

“起爆獣ヴァルカノン”の効果発動！このカードと相手モンスターを破壊し、破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

チツ！だが、

「させねえ！手札から“ジャンク・ブロッカー”の効果発動！戦士族シンクロモンスターがカード効果で破壊される時、このカードを墓地に送ることで破壊を無効にする！
破壊されるのはお前のモンスターだけだ！」

「なんだと!？」

“起爆獣ヴァルカノン”が発発するが、“ライトニング・ウォリアー”は無事だ。

「よく防いだものだ」

「侮るなよ」

「良からう。私は“キャノン・ソルジャー”を守備表示で召喚」

DEF / 1300

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「俺のターン！」

チャルア SP 5

啓斗 SP 3

なんで、このタイミングでこのカードを引きやがった？このカードは、使いたくねえんだ。

「どうした？」

「なんでもねえよ」

気にするな。使わなけりゃ良いだけの話じゃねえか。

「バトル！ “キャノン・ソルジャー” に攻撃！ ライトニング・パニッシャー！」

「効果が発動するが、私に手札はない」

確かにな。

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「私のターン！」

チャルア SP 6

啓斗 SP 4

「“SP ジェット・ブースター” を発動！ 互いのSPカウンターを2つ増やし、カードを1枚ドロウ」

チャルア SP 8

啓斗 SP 6

またSPカウンターを増やしやがった。何か狙ってやがるのか？

「ゆくぞ！ “SP エクストラ・フュージョン”！ SPカウンターが8つ以上ある時、エクストラデッキでの融合召喚を行う！」

エクストラデッキでの融合だと!?

「融合モンスター“空爆翼ファイア・バード”と、融合モンスター“爆撃獣ファイア・ボンバー”を素材とし、融合モンスターを特殊召喚する!

燃え上がり飛翔せよ!“重爆撃禽ボム・フェネクス”!

ATK/2800

エクストラデッキからの融合とはな。

「ボム・フェネクス”の効果発動!場のカード1枚につき、30ポイントのダメージを与える!

私の場にはカードが2枚!貴様の場にはカードが3枚!合計1500のダメージを受けろ!”

5つの炎弾が飛ばされてきた。

「ぐあああああつ!”

啓斗 LP 2000

く 痛つてえ !

「まだ終わりではない!攻撃が残っている!

“ボム・フェネクス”で“ライトニング・ウォリアー”を攻撃!”

「ぐああああつ!”

啓斗 LP 1600

「くそ “ライトニング・ウォリアー”」

「フハハハハ！どうだ！？我が破壊の味は！？」

「大したことねえ！俺はてめえに勝たなくちゃいけないんだ！」

「ほう。面白い」

「それにな、まだデュエルはこれからなんだよ！

畏発動！“受け継がれる魂”！破壊された“ライトニング・ウォリアー”と同じレベルの通常モンスターを、デッキから特殊召喚する！
“ライトニング・ウォリアー”のレベルは7！来い！カカシ！」

ATK/2300

「それでどうするつもりだ？ターンを終了する」

「俺のターン！」

チャルア SP 9

啓斗 SP 7

「さつさとケリ着けるぜ！じゃねえと、“地縛神”が来る！」

「んなことは解ってたんだよ！」

俺はチューナーモンスター“アタック・ゲイナー”を召喚！」

ATK/0

「いくぜ！レベル7のカカシに、レベル1の“アタック・ゲイナー”をチューニング！

黒き鎗兵よ！天翔ける駿馬と共に、光速を生み出せ！

シンクロ召喚！天空を翔る！“暗黒鎗騎兵ガイア”！」

ATK / 2700

「シンクロ素材となった“アタック・ゲイナー”の効果発動！相手モンスターの攻撃力を1000ダウンさせる！」

ATK / 1800

「バトルだ！頼むぜ、カカシ！」

「任せな！」

「クリスタル・セイバー！」

「又オオツ！」

チャルア LP 1900

「さらに、カカシは一度のバトルフェイズで二回攻撃できる！ダイレクトアタックだ！クリスタル・セイバー！」

「甘いぞ！罨カード“荣誉の贄”！ダイレクトアタックを無効にし、“贄の石碑トークン”を2体特殊召喚する！」

DEF / 0

「そして、“地縛神”と名の付くカードを手札に加える」

しまった！

奴は次のターン、“地縛神”を召喚する。止めることはできねえ。攻撃を受けたら終わりだ。

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

「フハハハハ！私のターン！」

チャルア SP 10

啓斗 SP 8

「2体のトークンをリリース！現れよ！“地縛神 Chacuc hallhua”！」

ATK/2900

巨大な心臓が蠢き、大きく脈を打つ。

「来やがったか」

現れたのは巨大な鯨の“地縛神”。こいつを倒さねえ限り、俺に勝ちはねえ。

「“地縛神”はダイレクトアタックができる！これで終わりだ！快い悲鳴を上げるが良い！」

“地縛神 Chacuc hallhua”！奴に止めを刺せ！」

「そうはいかねえ！ここで負ける訳にはいかねえんだ！

永続罨“決闘鉄鎖”を力カシと“地縛神 Chacu Challhua”を対象に発動！表示形式を変更する！」

DEF / 2000

DEF / 2400

これでダイレクトアタックは防げる。だが、リヨウみてえに効果を無効にしなけりゃ攻撃できねえのが厄介だな。

「防いだつもりか？」

「なに？」

「見せてやろう！」

“地縛神 Chacu Challhua”の効果発動！守備表示の場合、守備力の半分のダメージを与える！」

なっ！？だが！

「墓地の“ジャンク・ブロッカー”の効果発動！このカードを除外することで、墓地に戦士族シンクロモンスターが存在する場合、1000以上の効果ダメージを無効にする！」

「チツッ！」

何とか防いだが、いつまで持つか解らねえ。

「“スピードワールド2”の効果発動！SPカウンターを10個取り除くことで、“暗黒鎗騎兵ガイア”を破壊する！」

チャルア SP 0

「ぐああっ!」

「カカシ!」

カカシが 破壊された。

「これで“決闘鉄鎖”は破壊された。私はターンを終了する」

「俺の ターン」

チャルア SP 1

啓斗 SP 9

「“スピードワールド2”の効果、SPカウンターを7つ取り除き、カードを1枚ドロウする」

啓斗 SP 2

ダメだ。俺の手札に、逆転の手はねえ。カカシもいねえ。

いや 一つだけ、ある。だが、このカードは。

「諦める。もう貴様に手はない」

確かに、奴の言う通りだ。俺に手は残されてねえ。たった一つ、この伏せカードだけだ。くそ!

『啓斗君』

なんでだ？なんで今由里のことを思い出すんだよ！

『全部終わったら、話したいことがあるんだ』

そっぴゃ、話したいことって何だ？

あいつら、無事だろうな？リヨウはケリ着けたか？アリスはリヨウのこと気にし過ぎてんじゃねえだろうな？

由里は あいつは大丈夫か。約束したからな。ちゃんとこの闘いを生き残るって。 。
生きなくちゃならねえ。約束した。何より、俺はまだあいつらと一緒にいてえ。 。

あいつらは、このカードを使う俺を認めてくれるか？いや、あいつらを疑っちゃいけないな。あいつらなら、俺を認めてくれる。

「負けられねえんだよな」

そつだ。俺は負けられねえ！

覚悟を決めろ！俺はこのカードを 使う！

「俺は、伏せられているこのカードを使う！これが、てめえを終わらせるカードだ！」

「ほう。この状況をひっくり返すというのか？」

「いくぜ。永続罫“無限の剣製 アンリミテッドブレイドワーカー” 発動」

俺たちのいる塔の景色が侵食されていく。荒涼とした景色、不規則な風が吹いている。見渡す限り剣や鎗、多様な武器の類が刺さっている。

そこを走る俺たち。浮かび上がっている“地縛神”。そして、立っているカカシ。

「何だ　？これは　？」

「これは、心象世界だ」

俺の、荒んでいる心のな。

「俺の場に存在するこのカード以外の全てのカードを破壊　手札も全て墓地に送ることで発動される　」

このカードを発動すれば、ほぼ全てを失う　。俺の、最後の切り札　。

「墓地に存在するカカシを、効果を無効にして特殊召喚する　」

ATK/2700

「良かったのか　？」

「良いんだ　。俺は、負けられねえんだ　」

「　解った」

カカシだけが知ってたんだ　な　　このカードのこと　　。

【I am the bone of my sword】

「体は剣で出来ている」

【Steel is my body, and fire is
my blood】

「血潮は鉄で、心は硝子」

【I have created over a thousand
blades】

「幾たびの戦場を越えて不敗」

【Unknown to Death】

「ただの一度も敗走はなく」

【Nor known to Life】

「ただの一度も理解されない」

【Have withstood pain to create
many weapons】

「彼の者は常に独り、剣の丘で勝利に酔う」

【Yet, those hands will hold any
thing】

「故に、生涯に意味はなく」

【S o a s I p r a y , u n l i m i t e d b l a d e
W o r k s】

「その体は、きっと剣で出来ていた」

俺とカカシが詠唱を終えた。

「永続罫“無限の剣製”の効果発動。ライフを半分にするこ
で、デッキから“剣製”と名の付くカードを1枚手札に加えるこ
ができる。」

俺はこの効果を4回使っぜ

啓斗 LP 800 400 200 100

「何をするかは知らんが、“地縛神 ChacucHallh
ua”は守備表示の時、相手のバトルフェイズをスキップする効果
がある」

「そうか。俺はカードを4枚伏せ ターンエンドだ」

「私のターンだ」

チャルア SP 2

啓斗 SP 3

「“地縛神 ChacucHallhua”を攻撃表示に変更！」

ATK/2900

「死ぬが良い！」地縛神 Chacu Chailhua”でダイレクトアタック！」

「畏発動 “ 剣製 熾天覆う七つの円環 ” 。俺のダメージを全て0にする」

俺の前に七つの花弁が現れ、“地縛神”の攻撃を止めた。

「攻撃を無効にする」

「チツ。カードを1枚伏せ、ターン終了だ」

「俺のターンだな」

チャルア SP 3

啓斗 SP 4

「決めるぜ」

「ああ。早く決めようぜ。お前自身の為にな」

これを発動しているだけで、俺は荒んでくる。この荒野が、俺を荒らしていく。

「畏発動 “ 剣製 約束された勝利の剣 ”」

カカシが刃こぼれ一つない美しい聖剣を手を取った。

「カカシの攻撃力を倍にする」

「なっ！？だが、“地縛神”は攻撃対象にならない！」

それが、どうした？

「 剣製 破戒すべき全ての符」

歪んだ短剣が“地縛神”に突き刺さる。

「その短剣は、全ての理を無に帰す。“地縛神”の効果は無効だ」

「ぐっ」

「これで 終わりだ」

カカシが持つ聖剣が、異様な輝きを放ち始めた。目が眩むほど、まばゆい光。

「クウ」

「恐いか？」

「な、なに？」

「攻撃を受ければ、てめえの負けだ。言っておくが、俺はリョウミ
てえに優しくはねえからな」

闇のデュエルだ。あいつは、消えちまうだろう。

「じゃあな。

カカシの攻撃。エクス」

輝きが強さを増す。“地縛神 Chacuc Chailhua”へと、剣を向けた。

「カリバー！」

輝きが、“地縛神”へと放たれようとした。

「ま、まだだあ！畏カード“万能地雷グレイモヤ”！貴様のモンスターを破壊する！」

そうか まだ一枚、伏せられてたな。

「畏カード発動。“剣製 銀の加護”」

カカシを薄い膜が覆った。

地雷が作動するも、カカシは膜に護られ、傷一つない。

「破壊を無効にする」

「バ、バカな」

「覚悟は、良いな？」

「ま、待ってくれ！もう破壊などしない！誓う！しないと誓うから！」

命ごいか。

「もう、遅い。俺は、攻撃宣言をした。カカシが光を放てば、
終わりなんだよ」

「ま、待て！話し合えば」

「同じように言った精霊が何体いただろうな？俺は、リョウみてえ
に優しくはねえ。そう言った筈だぜ」

「ま、待て」

「やれ。カカシ」

カカシが持つ聖剣が眩し過ぎる光を放った。“地縛神 Chacu
Chailhua”を、光が覆い尽くした。

「ガアアアアッ！」

チャルア LP 0

「終わったな」

侵食されていた世界が消えていく。荒涼とした、この世界が。

「チャルアは？」

「消えた。跡形もなく、吹っ飛んだ」

「そうか」

勝ったのは勝った。もう、それで良いだろう。

「どうする？」

「何がだよ？」

「少し休むか？」

「いや、良い。あいつらを追っ」

無事だろうな？

あいつらに、あいつらに会えば、この荒んだ心が癒される。俺はあいつらを頼ってんだよな。

「行くぜ。カカシ」

「ああ。解った」

Dホイールに乗り、坂を上り始めた。

s i d e o u t

第十四話：禁忌（後書き）

いかがでしたでしょうか？後悔はしていません。

誰もが気付くFateネタ。元々カカシはランサーっぽかったですけど。

啓斗にとっては禁忌のカード。使うことは殆どありません。使ったら間違いなくチートカードです。

次もデュエル。デュエル連投の予定です。

それでは、グッチーでした。

第十五話：黄泉の国で

side 由里

一人だった。

ずっと、一人だった。

私は喫茶店の一人娘として生まれた。お父さんとお母さんの三人家族だけど、幸福な日々だった。

ある日を堺に、崩れた。

お父さんが事故にあった。意識不明の重傷を負い、入院。お母さんは献身的にお父さんを看護して、店は一時的に閉業。

私は、何もできなかった。ただ、我が儘を言ってお母さんを困らせないようにしただけ。良い子でいようとしただけ。

一人だった。

いっぱい泣いた。一人の淋しさ。何にもできない悔しさ。入り混じってた。

『どうしたの？』

声をかけられた。

澄んだ声。綺麗な瞳。私と歳の変わらない女の子。

『何でもないよ』

『泣いてるよ?』

泣いてはいなかった。目から滴は落ちていない。

『うっん。心が泣いてる。そんな気がするんだ』

心まで、見通しちゃうんだ。

『私もね、そんな目をしてたから、解るんだ』

全部話してくれた。自分のこと、亡くなったお父さんのこと、荒れたこと、助けて貰ったこと。気が付くと、私も自分のことを話していた。

また泣いた。女の子の、アリスちゃんの胸を借りて、いっぱい泣いた。全部気持ちを打ち明けて、泣いた。

一人じゃなくなった。

アリスちゃんと、お友達のリヨウ君が一緒にいてくれた。お父さんのお見舞いにも、二人で来てくれた。

『由里と、友達でいてあげてね?』

お母さんの言葉。

『そんな心配はいりませんよ』

『もう、友達ですから』

アリスちゃんとリヨウ君の言葉が、嬉しかった。とっても嬉しかった。

た。

やがて、お父さんの容態が回復して退院。元通りの生活に戻った。うづん、違う。掛け替えのない友達が、二人もいた。

デュエルアカデミアに通い始めた。デュエルは好きだった。もちろん、二人も同じだった。

友達もたくさんできた。毎日が楽しくて、充実していた。

ある一人の男の子がいた。目が少しだけ怖くて、よく問題を起こしてた人。

みんな怖がって近付かなかったけど、私は引き込まれた。あの、悲しげな目に。似ていると思った。昔の私の目に。

自然と声をかけていた。戸惑い。私にはそう写った。きっと、そんなふうに声をかけられたのは初めてだったんだろう。大した反発はなく、一緒にいるようになった。

四人で毎日を過ごす。それが、私には楽しくて仕方なかった。

私は目の前にいる上級兵をジッと見ていた。

「何かしら？」

「よく何もせずに通してくれたな、と思って」

「ええ。貴女たちが来るのが早過ぎたのよ。そうならば、一人を囮にしたと考えるのが自然じゃない？だとすれば、ここにも一人残ると思っただけ」

頭が回るなあ。

「私は由里。貴女は？」

「ピスクよ。デュエルするかしら？」

「しなくちゃダメかな？」

「甘いことを言うのね。嫌いではないけれどね」

嫌いじゃないんだ。今までの上級兵とは違うのかな？

「あの、貴女の望みは何なの？」

みんなそれぞれ違うんだと思う。それぞれ目的を持って闘ってる。

「貴女は、私の望みを叶えてくれる？」

「にやはは。できるかは解らないけど」

「そう。貴女なら、私の望みを叶えてくれるかもしれないのね？」

「えっと できることはしたいって思ってるよ」

「 良いわ。デュエルしましょうか」

そう言つて、ガイコツの馬に乗った。ライディングデュエルの体制が整つてる。

「ま、待つて！まだ話は」

「もう終わったわ。貴女は全力でデュエルすれば良いのよ」

それはもちろんだけど。
は一人で“スピードワールド2”を展開して、スタートした。私も慌てて後を追う。

『ライディングデュエル！アクセラレイション！』

「私の先攻よ」

「うん」

結局、目的は何なんだろう？

「私は“終末の騎士”を召喚」

ATK/1400

「デッキから闇属性モンスター1体を墓地に送る」

自分からカードを墓地に？

「ターン終了よ」

「私のターン」

SP 1

「私は“デュナミス・ヴァルキリア”を召喚！」

ATK / 1800

「バトル！ “デュナミス・ヴァルキリア”で“終末の騎士”を攻撃
！」

「」

ピスク LP 3600

無言って。

「えっと 大丈夫？」

「心配してくれるのね。大丈夫よ」

なら良いんだけど。

「終わりかしら？」

「う、うん。ターンエンドだよ」

「私のターンね」

SP 2

「SP エンジェルバトン」を発動。カードを2枚ドロ、1枚を墓地に送るわ」

また墓地に？

「キラー・トマト」を守備表示で召喚」

DEF / 1100

「カードを1枚伏せて、ターン終了よ」

「私のターン」

SP 3

「ホーリー・フレイム」を召喚！」

ATK / 1500

「バトル！ “ホーリー・フレイム”で “キラー・トマト”を攻撃！」

「キラー・トマト」が戦闘で破壊された時、デッキから闇属性の攻撃力1500以下のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚できるわ。

デッキから “キラー・トマト”を特殊召喚」

ATK / 1400

「なら、 “デユナミス・ヴァルキリア”で “キラー・トマト”を攻撃！」

ピスク LP 3200

「キラー・トマト」が破壊されたことで、デッキから「キラー・トマト」を特殊召喚」

ATK/1400

「私は、カードを2枚伏せて、ターンエンドだよ」

「私のターン」

SP 4

「見習い魔術師」を守備表示で召喚」

DEF/800

さっきからリクルーターばかり。

「キラー・トマト」を守備表示に変更」

DEF/1100

「カードを1枚伏せて、ターン終了」

「私のターン」

SP 5

「私は、チューナーモンスター“ハネワタ”を召喚！」

ATK / 200

「さらに、“SP サンクチュアリ・フィールド”発動！SPカウンターが5個以上ある時、場にレベル1の天使がいる場合、手札からレベル5か6の天使を特殊召喚する！」

手札から、“天空騎士パーシアス”を特殊召喚！」

ATK / 1900

「モンスターを揃えてきたわね。次はシンクロ召喚かしら？」

その通りだよ！

「レベル4の“ホーリー・フレーム”に、レベル1の“ハネワタ”をチューニング！」

天空より来たる聖なる杖。全てを打ち抜く光を放て！

シンクロ召喚！天よりの力！“セイクリッド・ワンド”！」

ATK / 1500

「“セイクリッド・ワンド”の効果発動！天使の装備カードとなつて、攻撃力を1500ポイントアップ！」

“天空騎士パーシアス”に装備！」

ATK / 3400

「バトル！“天空騎士パーシアス”で“キラール・トマト”に攻撃！バスター・シュート！」

「それは流石にマズイわね。
畏カード“攻撃の無力化”を発動するわ。バトルフェイズを終了させる」

攻撃は通らなかったか。

「ターンエンドだよ」

「私のターンよ」

SP 6

「チューナーモンスター“マジカルフィシアリスト”を召喚」

ATK / 800

「こちらもいくわよ。
レベル2の“見習い魔術師”とレベル4の“キラー・トマト”に、
レベル2の“マジカルフィシアリスト”をチューニング。
シンクロ召喚。“カオス・ゴツデス 混沌の女神”」

ATK / 2500

“カオス・ゴツデス”

「効果を発動するわ。手札の光属性モンスター1体を墓地に、墓地から闇属性モンスター1体を特殊召喚する」

でも、墓地のモンスターはせいぜい“キラー・トマト”くらいしか

いや！最初に！

「そうよ。私は、“終末の騎士”の効果で闇属性のモンスターを墓地に送っているわ。それだけではないけれど」

“SP エンジェルバトン”！

「墓地から、“堕天使スペルビア”を特殊召喚！」

ATK/2900

堕天使！？

「このカードが墓地から特殊召喚された時、墓地から堕天使を復活させる。」

来なさい。“堕天使ゼラート”！」

ATK/2800

3体の天使が並んだ。どれも上級モンスター。

「“堕天使ゼラート”の効果よ。手札の闇属性モンスター1体を墓地へ、相手モンスター全てを破壊するわ！」

「きゃあっ！」

なんて効果！

「あら。1体残ってるわね」

「セイクリッド・ワンド”は、装備モンスターが破壊される時、代わりにこのカードが破壊されるんだよ」

でも、私の場に残ってるのは“天空騎士パーシアス”だけ。

「いくわね。」

“墮天使スペルビア”で“天空騎士パーシアス”を攻撃！」

「きゃあああつ！」

由里 LP 3000

「つ、あつ」

痛った。凄い衝撃。

「まだよ。 “墮天使ゼラート”で、ダイレクトアタック！」

「っ！畏カード“ガード・ブロック”！受けるダメージを0にして、カードを1枚ドロロー！」

でも、まだ次の攻撃が残ってる。

「カオス・ゴツデス”で、ダイレクトアタック！」

まだ、防げる！

「畏カード“エンジェル・ティア”！墓地の天使4体をゲームから除外して、墓地の天使を特殊召喚するよ！」

“ 天空騎士パーシアス” 以外の天使を除外して、“ 天空騎士パーシアス” を特殊召喚!”

DEF / 1400

「バトル続行」

ごめんね “パーシアス”。

「よく堪えきつたわね。」

エンドフェイズに、効果を発動した“ 墮天使ゼラート” は自壊する。
。ターン終了よ!”

とは言え、私の場にはカードがない。

「私のターン!”

SP 7

よし!

「私は、“ SP エンジェル・リターン” を発動! SPカウンターが3個以上ある時、ゲームから除外されたレベル4以下の天使を特殊召喚するよ!

“ ホーリー・フレーム” を特殊召喚!”

ATK / 1500

「 “ホーリー・フレーム” は光属性通常モンスターのリリース素材となる時、2体分になる!

“ホーリー・フレーム”を2体分のリリース素材として、カレンをアドバンス召喚！」

ATK/2750

「お願い！カレン！」

「はい。押し返しましょう！」

「バトル！カレン！“カオス・ゴッデス 混沌の女神”を攻撃！ホーリー・スター！」

「うっ！」

LP 2950

これで蘇生の方法はない筈。でも、“堕天使スペルビア”の攻撃力はカレンより上。

「スピードワールド2”の効果発動！SPカウンターを7個取り除いて、カードを1枚ドロ！」

由里 SP 0

「私はカードを2枚伏せて、ターンエンド」

「私のターンよ」

ピスク SP 8

由里 SP 1

「スピードワールド2”の効果を、私も同様に使うわ。カードを1枚ドロー!」

ピスク SP 1

「バトルよ。“墮天使スペルピア”で“翼を織りなす者”を攻撃!」

「畏カード“フローラル・シールド”発動!攻撃を無効にして、カードを1枚ドロー!」

よし、これでカレンは無事だね。

「カードを1枚伏せて、ターン終了よ!」

「私のターン!」

SP 2

「畏カード“異次元からの帰還”を発動!ライフを半分にして、ゲームから除外されたモンスターを可能な限り特殊召喚するよ!」

由里 LP 1500

「“ハネワタ”、“セイクリッド・ワンド”、“デュナミス・ヴァルキリア”を特殊召喚!」

ATK/200

ATK/1500

ATK/1800

「レベル7のカレンに、レベル1の“ハネワタ”をチューニング！
聖なる純真の心、不屈の魂を持ちて、永久の命と為れ！
シンクロ召喚！目覚めよ！“熾天妖精カレン”！」

ATK / 3000

「カレンの効果発動！墓地の“ハネワタ”をゲームから除外して、
“天空騎士パーシアス”を特殊召喚！」

ATK / 1900

「さらに“セイクリッド・ワンド”の効果発動！カレンに装備！」

ATK / 4500

「バトル！カレンで、“墮天使スペルビア”を攻撃！ホーリー・バ
スター・シユート！」

「永続罫“強制終了”を発動するわ。“墮天使スペルビア”を墓地
に送り、バトルフェイズを終了させるわ」

また、通らなかつた。

「カードを1枚伏せるよ。エンドフェイズに、“デュナミス・ヴァ
ルキリア”は再び除外されるよ」

「私のターンよ」

SP 3

「罨カード“墓地からの命綱”を発動。墓地のモンスター2体のレベル×100ポイントのライフを払うことで、その2体を特殊召喚できるわ。」

“マジカルフィシアリスト”と“見習い魔術師”を選択し、特殊召喚するわ」

ATK / 800

ATK / 400

ピスク LP 2550

2体のモンスターが揃った！

「さあ。おいでなさい。」

“マジカルフィシアリスト”と“見習い魔術師”をリリースし、来臨せよ！“地縛神 Asllia piscu”！」

ドクン、ドクン、と脈打つ巨大な物体が現れ、不気味な光を放つ。すると、場に巨大なコカトリが現れた。

「これが、“地縛神”」

「由里！来ますよ！」

「うん！」

「終わりがしらね “地縛神 Asllia piscu”で、ダイレクトアタック！」

巨大なコカトリが私に迫って来た。

「まだまだよ！畏カード“アイアン・リゾルブ”！ライフを半分にして、バトルフェイズを終了させる！」

由里 LP 750

「よく防いだわ。だけど、これで貴女はセーフティラインを越えた。次のターンで、終わりよ」

確かに、次のターンにはSPカウンターは4つ以上溜まる。防ぎきれない。
私の場には“セイクリッド・ワンド”を装備したカレンに、“天空騎士パーシアス”だけ。このターンで勝負を決めなくちゃ、私は負ける。

「大丈夫です。啓斗様との約束を思い出してください」

啓斗君との約束 一緒にこの闘いに勝って、大事な話をするんだ
ったね。

そういえば、啓斗君は無事かなあ。啓斗君の声が聞きたいなあ。

「啓斗君」

「なんだよ？」

「えっ？」

俯いていた顔を上げた。啓斗君がいる？

「苦戦してるみたいじゃねえか。約束守るんだろ？」

啓斗君が確かにいる。デュエルに勝って、ここまで登って来たんだ。

「さっさと勝つちまえ。早く上に行くぜ」

「だそつですよ」

「うん！」

啓斗君は約束を守った。次は私の番！

「私のターン！」

S P 4

「“S P スター・オーシャン”を発動！S Pカウンターが3個以上ある時、場に存在するモンスター1体につき、私のデッキからカードを1枚選択して墓地に送るよ！」

私の場には2体、貴女の場には1体、よって3枚のカードを墓地へ！」

これが、私の勝利への布石。私に力を貸して！

「カレンの効果発動！“ホーリー・フレーム”をゲームから除外して、“朱光の宣告者”を特殊召喚！」

A T K / 2 0 0

「レベル5の“天空騎士パーシアス”に、レベル2の“朱光の宣告者”をチューニング!

天空より来たる聖なる女神。全てを照らし、光へ導け!
シンクロ召喚!希望の女神!“聖女デアラクター”!

DEF / 2500

「“聖女デアラクター”の効果発動!場に存在するカード1枚を、エンドフェイズまでゲームから除外できる!

私は、“地縛神 Aslla piscu”を除外するよ!”

これでピスクの場にモンスターはいなくなる。そして、“強制終了”は場の他のカードを墓地に送ることで効果が発動するカード。今、ピスクに他のカードはない!

「これで、私の勝ちだよ!”

「“地縛神 Aslla piscu”の効果発動

「えっ!?”

「このカードが場から離れた時、相手場に存在するモンスターを全て破壊し、破壊したモンスター1体につき、800ポイントのダメージを与える。

惜しかったわね。貴女の、負けよ”

私の 負け?

「由里!”

大丈夫だよ、啓斗君。私は、約束守るから。

「カレンは、“セイクリッド・ワンド”が護ってくれるよ」

ATK / 3000

「ええ。でも、“聖女デアラクター”はどうかしらね？」

「大丈夫だよ。“聖女デアラクター”は、墓地に存在する天使3体をゲームから除外することで、破壊を無効にできるから」

「貴女の墓地にはシンクロ素材として墓地に送った2体以外に、天使がいるかしら？」

「いるよ。“SP スター・オーシャン”で墓地に送ったカードの内の1枚は、“天空勇士ネオパーシアス”だから」

「そう」

だから、私のモンスターは、破壊されない！

「“聖女デアラクター”の効果により、墓地の“天空騎士パーシアス”と“朱光の宣告者”と“天空勇士ネオパーシアス”をゲームから除外して、破壊を無効にするよ！」

これで、本当に私の勝ち。

「カレンで、ピスクにダイレクトアタック！ホーリー・バスター！」

「ピスク、大丈夫？」

「俺たちにリヨウみてえな力はねえ。こいつは、もう」

「ええ。消えるわ」

それが、闇のデュエルの宿命。

「由里、だったわね？」

「う、うん」

「良いデュエルだったわ。これで、悔いなく逝けるわ」

「あの 貴女の目的って？」

「貴女は、私の望みを叶えてくれたわ。私を、デュエルで倒してくれた」

「どういふこと？」

「疲れていたのよ。私はもう、十分生きたわ。十分過ぎる程に。でも、どうしてもデュエルが棄てられなくてね。誰かに、“地縛神”ごと、つまり私を倒して欲しかったのよ」

どのくらい生きてたんだろっ？不意に、そう思った。考えても解る筈なのに。。

「清んだ、綺麗な目をしているわ」

「えっ？」

「貴女も女ね。そういう目をしているわ」

「にははは。。そうかな？」

「ええ。幸福になれると良いわね」

「なるよ。貴女の方まで」

「ふふ。こんな身体になってまで生きて、何があるかと思っただけ、最期に良いことがあったようね」

「私の友達は、生きてれば必ず良いことがあるって言ってたよ」

「そうね。その通りなのかもしれないわ」

「ガイコツだけど、笑ったように見えた。」

「さようなら。黄泉の世界で、また逢いましょう」

静かに、消えていった。

「こんな奴も、いたんだな」

「 うん」

「 まあ良い。もう、遅いからな」

「 そうだね」

でも、闘う必要なんてなかったのかもしれない。
いきなりぐいっと、手を引っ張られた。

「 オラ、さっさと行くぜ。あいつらを追わねえとな」

「 うん。そうだね」

「 とりあえず、お前が無事で良かったぜ」

「 にゃはは。啓斗君もだよ」

やっぱり優しい。

そう思って、私たちは次の坂を上り始めた。

side out

第十六話：強者と弱者

side アリス

救われた。あの声に、あの抱擁に。

父さんが亡くなって、荒れた。たくさんの人を傷付けて、どんどん荒れた。そんな私を、リヨウが救ってくれた。

『友達になろう』

それからは、ずっと一緒にいた。楽しかった。

由里も加わって、アカデミアに通った。啓斗も加わった。

いつ頃からだったんだろう、リヨウを好きになったのは。

今思えば、初めて出会ったあの時から好きだったのかもしれない。でも、この想いは伝えにくかった。誰にでも優しいリヨウだから、私に好意を向けていないと思ってた。

でも、この想いを留めておくことはできなかった。思いを決して、リヨウに想いを伝えた。

『私は貴方が　リヨウが好き。大好きです。私と　付き合ってくれませんか？』

リヨウがあんなに慌てたのは初めてかもしれない。戸惑って、落ち着きなくあたふたしてた。

『えっと オレで良いの?』

『私は、リヨウが良い』

『あつ えっと オレで、良ければ 喜んで』

受け入れてくれた。やっぱりという思いも、意外という思いもあった。たよな気がする。

特に変わったことはなかったけど、二人で遊びに行くのは増えた。デートっていう意識が私にはあったけど、リヨウはいつも自然体だった。それでも、私に回してくれる気の使い方がリヨウらしく優しかった。

いろんなことがあった。それで、私は気付いた。

依存してる。私は、リヨウに依存してる。

どんな時でも、傍にはリヨウがいて、私を支えてくれる。その支えを失ったら、私はどうなるか解らない。

もちろん、私にはシンがいて、リップがいる。由里や啓斗だっている。だけど、リヨウがいないことは、絶対に考えたくない。

そんな、唯一無二の存在のリヨウが、命を懸けてこの闘いに臨んでる。リヨウが語ってくれた、大事な人との闘い。

力になりたい。あの時救われた恩は、まだ返してない。今度は私が、リヨウを助けるんだ。

黄色の猿とシンが睨み合う状況が続いてる。リヨウは先に行った。由里と啓斗も、後から必ず追って来る。

「よく邪魔をしてくれたな」

「リヨウの道を切り開く為、そう言った筈だ」

「フン。まあ良い。貴様を殺し、奴を追っただけだ」

「私がリヨウを追わせて貰う」

「ならば、デュエルだ」

「待って。貴方は何をしたいの？」

「そうか。まだ名乗りさえしていないな。

我が名はシクル。我が目的は、上にいるあのお方を補佐することだ」

「 どうして？」

「惹かれたのだ。理由など、それで十分だ」

「精霊たちに害を及ぼす理由には、なっていない」

「フン。奴らは弱い。弱い者が蠢く世界など、消えてしまえば良い」

「弱くても一生懸命生きてる。勝手な理由でその命を散らすなんて、絶対におかしい！」

「フン。問答を繰り返すつもりはない。どちらが正しいか、デュエルで決めようではないか」

勝った方が正しいなんていうのも、間違ってる気がする。でも、このデュエルは負けられない！

お互いに準備をして、私はDホイールに乗った。

「始めるぞ」

『ライディングデュエル！アクセラレーション！』

私は一足早く抜け出した。

「私の先攻」

「良かろう」

「私のターン！私は“仮面竜”を守備表示で召喚！」

DEF / 1100

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「我がターンだ」

SP 1

「“巨大ネズミ”を召喚」

ATK / 1400

「バトル。“巨大ネズミ”で“仮面竜”を攻撃！」

「うっ！破壊された“巨大ネズミ”の効果、デッキから攻撃力1500以下のドラゴンを特殊召喚できる！」

私は、デッキから“仮面竜”を守備表示で特殊召喚」

DEF / 1100

「我はカードを2枚伏せ、ターン終了だ」

「私のターン！」

SP 2

「“デルタフライ”を召喚！」

ATK / 1500

「“デルタフライ”の効果を発動！1ターンに一度、場のモンスター1体のレベルを1上げることができる！“仮面竜”のレベルを4に！」

これで、準備は整った。

「レベル4となった“仮面竜”に、レベル3の“デルタフライ”をチューニング！」

煌めきたる稲妻よ、轟く雷鳴と共に姿を現せ！

シンク口召喚！疾風迅雷！“ライトニング・ドラグーン！”」

ATK / 2500

「バトル！ “ライトニング・ドラグーン” で “巨大ネズミ” を攻撃
！」

「グッ！」

クシル LP 2900

「 “巨大ネズミ” が破壊された時、デッキから攻撃力1500以下の
地属性モンスター1体を攻撃表示で特殊召喚できる。
我は “巨大ネズミ” を特殊召喚」

ATK / 1400

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「エンドフェイズに、永続罫 “神の恵み” を発動する」

ドローする度にライフを回復する永続罫。

「我がターン」

SP 3

クシル LP 3400

「 “おとぼけオポッサム” を召喚」

ATK / 800

「おとぼけオポッサム」の効果発動。このカードより攻撃力の高いモンスターが相手場に存在する場合、このカードを破壊する」

この展開って ！

「獣族モンスターが破壊されたことにより、ライフを1000ポイント払うことで手札から“森の番人グリーン・バブーン”を特殊召喚！」

ATK / 2600

クシル LP 2400

「バトル！ “グリーン・バブーン”で“ライトニング・ドラゲーン”を攻撃！」

「うっ！」

アリス LP 3900

「さらに“巨大ネズミ”で、ダイレクトアタック！」

「きゃあああっ！」

アリス LP 2500

凄い衝撃 。 ホントに桁が違う 。

「ターン終了だ」

「くっ！私のターン！」

SP 4

「罨カード“シンクロ・スピリッツ”！墓地のシンクロモンスターをゲームから除外して、素材となったモンスターを特殊召喚する！墓地から“仮面竜”と“デルタフライ”を特殊召喚！」

ATK / 1400

ATK / 1500

「さらに“ランス・リンドブルム”を召喚！」

ATK / 1800

「レベル3の“仮面竜”とレベル4の“ランス・リンドブルム”に、レベル3の“デルタフライ”をチューニング！シンクロ召喚！“トライデント・ドラギオン”！」

ATK / 3000

「さらに罨カード“不死の竜”を発動！ゲームから除外された“ライトニング・ドラゴン”を特殊召喚！」

ATK / 2500

「バトル！まずは“トライデント・ドラギオン”で“森の番人グリイン・バブーン”を攻撃！」

「又ッ！」

クシル LP 2300

「さらに、“ライトニング・ドラグーン”で“巨大ネズミ”を攻撃！サンダー・ストリーム！」

「又グウツ！」

クシル LP 1200

「チツ！だが、獣族モンスターが戦闘で破壊されたことにより、手札から“森の狩人イエロー・バブーン”の効果を発動！墓地の獣族モンスター2体、“巨大ネズミ”2体をゲームから除外し、このカードを特殊召喚する！」

ATK/2600

「さらに“巨大ネズミ”が破壊されたことで、デッキから“巨大ネズミ”を特殊召喚する！」

ATK/1400

また上級モンスターが。

「私は、カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「我がターン！」

SP 5

クシル LP 1700

「スタンバイフェイズに、自壊した“おとぼけオポッサム”を特殊召喚する！」

DEF / 500

「さらに“コアラッコ”を守備表示で召喚！」

DEF / 1600

「“コアラッコ”の効果を発動する！このカード以外の獣族モンスターが場に存在する場合、相手モンスター1体の攻撃力を0にする！
“トライデント・ドラギオン”の攻撃力を0にする！」

ATK / 0

しまった　　！ “トライデント・ドラギオン”の攻撃力が　　！

「バトルだ！“巨大ネズミ”で“トライデント・ドラギオン”を攻撃！」

「畏カード“ガード・ブロック”を発動！戦闘ダメージを0にして、カードを1枚ドローする！」

「チッ！ならば、“イエロー・バブーン”で“ライトニング・ドラグーン”を攻撃！」

「きゃあっ！」

アリス LP 2400

「ッ！」

「どうした？かなり堪えているようではないか」

「まだ！畏カード“竜の巣窟”を発動！戦闘で破壊されたドラゴンと同じレベルのドラゴン族モンスターを手札から特殊召喚できる！破壊された“ライトニング・ドラゴン”のレベルは7！よって、レベル7のシンを特殊召喚！」

ATK/2400

「お願い、シン」

「ああ。早く切り抜ける為に、このデュエルに勝たなければ」

「うん！力を貸して」

「無論だ」

まずは“森の狩人イエロー・バブーン”を倒さないと。

「私のターンは終わりだ」

「私のターン！」

SP 6

「来て！リップ！」

ATK / 300

「きゃうー！」

「うん！リップもお願い！」

私は、カードを1枚伏せる！」

さあ、いくよ！

「レベル7のシンに、レベル1のリップをチューニング！」

黒い炎が世界の全てを照らし出す。その眼に宿りし意志よ、今こそ開け！

シンクロ召喚！咲き誇れ！“真紅眼の華竜”！」

ATK / 2800

「シンがシンクロ召喚に成功した時、相手場と自分場のカードを1枚ずつ破壊する！貴方の場の“巨大ネズミ”と私の場の伏せカードを破壊！」

リクルーターの破壊を優先させて貰ったよ。もう“地縛神”が召喚されても不思議じゃない。それに、残り1700のライフで“森の番人グリーン・バブーン”の特殊召喚はしない筈。

「さらに、私の破壊したカードは“ドラゴンの呼び声”！このカードが破壊された時、お互いのデッキからレベル4以下のドラゴンを1体特殊召喚できる！」

「私のデッキに、ドラゴンはおらん」

だろうね。獣族デッキの筈。

「私は、デッキから“ドラゴニック・フェーダー”を特殊召喚！」

ATK/0

「いくよ！シン！」

「承知した。いくぞ！」

この攻撃で決めたい！

「バトル！シンで、“森の狩人イエロー・バブーン”を攻撃！黒華炎弾！」

「グウウツ！」

クシル LP 1500

「そしてシンの効果！破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを、相手に与える！」

これが通れば、私の勝ち！

「まだ終わらん。カウンター罠“ダメージ・ポラリライザー”！効果ダメージを無効にし、互いにカードを1枚ドロウする！」

クシル LP 2000

決められなかった。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「我がターン！」

SP 7

クシル LP 2500

「我が力、存分に味わうが良い！」

くる！

「“コアラッコ”と“おとぼけオポッサム”をリリース！現れよ！

“地縛神 Cusillu”！」

いつまでも見慣れない、ドクンドクンと脈打つ巨大な心臓を思わせる物体。一度大きく脈打ち、破裂する。すると、場に巨大な猿の神が現れた。

ATK/2800

「“地縛神 Cusillu”」

「そつだ！貴様に止めを刺す！

バトルだ！“地縛神 Cusillu”よ！勝利の鉄槌を振り下ろすが良い！」

巨大な猿の手が、私に向けて振り下ろされる。この攻撃を受ければ、私は負ける。だけど、私も攻撃に対する準備はしてる！

「ドラゴニック・フェーダー」の効果を発動！場に存在するこのカードをリリースすることで、バトルフェイズを強制終了する！」
これが、私がしてた準備！

「私は、“ドラゴニック・フェーダー”をリリース！」

効果の影響で、巨大な猿の手が止まる。

「チツ！だが、“地縛神”は攻撃対象にはならん！
カードを1枚伏せ、ターン終了だ！」

「私のターン！」

SP 8

確かに、“地縛神”には実体がないから攻撃できない。でも、その効果を無効にすれば！

「永續罫“レッドアイズ・コクーン”を、シンに装備することで発動！シンの攻撃力を500ポイントアップ！」

ATK / 3300

「そして、場に存在する全てのモンスターの効果を無効にする！
これで、“地縛神”相手でも攻撃できる！」

「又ウツ！」

「バトル！シンで、“地縛神 C u s i l l u ”を攻撃！」

「又グウウッ！」

クシル LP 2000

“地縛神 C u s i l l u ”が攻撃を受けて、耐え切れずに消えていく。倒した！

「まだまだ！まだ終わらん！」

罠カード“時の機械 タイムマシン”を発動！戦闘によって破壊されたモンスター、“地縛神 C u s i l l u ”を場に呼び戻す！」

ATK / 2800

「くっ」

まだ、倒し切れてない。再び巨大な猿が現れる。

「落ち着け。主アリス」

「シン？」

「大丈夫だ。必ず勝てる」

シンは自信たっぷりに言い放つ。どこからそれ程の自信が湧いて来るんだろう？

「奴は、弱い者をただ弱いとしか見ていない。力が無ければ弱いと勘違いしているだけだ」

それは、確かにそう思う。みんなで力を合わせるから、強い力が生み出される。」

「そのような当たり前のことを解らない者に、吾等が負けるか？」

「ううん。絶対負けない。勝とうね、シン」

「由里と啓斗もじきに追って来るだろう。それまでに、この者を倒し」

「リョウのところだ」

私は負けない。リョウのところに、早く行かなくちゃいけないんだ。

「私は、カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「我がターン！」

SP 9

クシル LP 2500

「フハハハハ！ “SP スピード・エナジー” を発動！SPカウンターの数×200の攻撃力を、アップする！」

ATK/4600

「舐めるな！例え直接攻撃を防ごうと、“地縛神”は無敵だ！ゆけい！“地縛神Cussillu”！“真紅眼の華竜”を攻撃イ！」

「無敵なモンスターなんていない！どんなモンスターでも、みんな
で力を合わせるから強くなる！」

畏カード“バースト・ブレス”！シンをリリース！」

ごめんね、シン。
シンが消えていく。

「気にするな。吾等の望みは、主アリスの幸福と、勝利だ。吾等が
犠牲になることなど、大したことではない。それにな。」

うん。解ってる。最後まで、シンには私の傍にいて欲しい。

「バースト・ブレス”の効果！リリースしたドラゴンの攻撃力よ
り守備力が低いモンスターを、全て破壊する！」

消えかけていたシンが火を噴く。場にいる“地縛神 C u s i l l
u”を焼き尽くした。

「バ、バカな　！」

「そして、シンに装備されていた“レッドアイズ・コクーン”が破
壊されたことにより、墓地から“真紅眼の黒竜”を特殊召喚する！
再び私の下に！シンを、墓地から特殊召喚！」

ATK/2400

「ア、アア　」

「ラストターン！」

S P 1 0

「シン！」

「最後の攻撃だ。任せておけ」

「“S P スピード・エナジー”を、私も発動！S Pカウンターは10！」

A T K / 4 4 0 0

「バトルフェイズ！シンで、ダイレクトアタック！黒炎弾！」

「グワアアアアッ！」

クシル L P 0

シンの吐き出した炎弾が炸裂した。勝った。

「我が 何故 ？」

「貴方は、確かに個人では強いかもしれない。でも、一人の力なんて、悲しいだけだよ」

「クツ 世迷言を」

体が崩れていく。私にはリョウミみたいな特別な力なんてない。助けては、あげられない。やがて、ガクンと力を失って伏した。消えていく。

「主アリスが気に病むことではない」

「うん」

「先を急ぐか？それとも、二人を待つか？」

「どうしようかな。でも、迷う必要はなかった。後ろからDホイールの走る音が聞こえてきた。」

「アリスちゃん！」

「由里！啓斗！」

二人が私たちを追って来た。無事だったんだね。

「無事、みてえだな」

「うん。後は」

「リヨウ君だけだね」

「あいつが無事なら、全部今まで通りなんだけどな」

「大丈夫だよ。リヨウなら、きっと」

もう、信じるしか、私にはできない。無事でいて、リヨウ。

私たちは、最後の坂を上り始めた。

s
i
d
e

o
u
t

2003

第十六話：強者と弱者（後書き）

上級兵戦、第三戦でした。

次はいよいよヨウと清四郎のデュエルです。

そして、今日でこの小説は一周年を迎えました。これまでこの小説を読んで下さった皆様、本当にありがとうございます。これからもよろしくお願ひします。

では、グッチーでした。

第十七話：再臨

オレがずっと願っていたことが、一つ叶った。あの約束を果たすこと。ようやく、ようやくオレは清四郎さんの前に立つことができた。

「やあ　よく来たね、リョウ」

「　はい。約束通り、貴方に会いに来ました」

「　うん。君はちゃんと会いに来てくれた」

「ただ　会う約束は守られました。でも、笑顔はこの世界に溢れてますか？」

「そうか　。君はそこまで覚えていたんだね。あの小さかった君が　」

確かに、オレは小さかった。覚えているのが不思議なくらい。

「今の世の中に、笑顔が溢れてはいない。それは君も解っている筈だ」

「そうですね。その通りだと思います。今も泣いてる人がいるかも知れませんが」

「うん。悲しいことだね　」

「　それを、一人一人救っていたのが、貴方じゃないんですか？　かく言うオレも、その一人です」

「確かにそうだね。うん、そうだった」

そう だった？

「既に 過去形ですか？」

「そうだよ」

「何故ですか？オレは、貴方に憧れて貴方と同じ道を選んだんです。」

オレと同じ、泣いてる人を助けたい。力になりたい。一つでも多くの笑顔を、この世界に燈す為に」

「その想いを、変えた覚えはないよ」

どういうこと ？今の行動と何か関係してるってこと ？

「ねえ、リヨウ。君は、人間をどう思う？」

「」

「汚い。醜い。儂い。そうは思わないかい？」

「何が言いたいんですか？」

「人間は、この世界を汚す。木を伐採し、ビルを建てる。失敗を繰り返して、命を落とす。信じていたものを、簡単に裏切る。やっとな、そのことに気付いたんだ」

黙って聞いている。なおも、清四郎さんは語る。

「このことは君に初めて語っているんだよ。君には素直に驚いてるんだ。あんな口約束を、守ってくれたのだからね。

だからこそ、君を傷付けたくない。君は、僕と同じなんだ。僕と同じ思いをして欲しくない」

オレと、清四郎さんは同じ？

「僕と手を組もう。君となら、僕のことを理解してくれる」

「

「君も思っている筈だ。悲しむ人を少なくする為には、まずその元凶を排除しなければならない。

それは心だ。消し去ってしまったら、どうということはない。方法も簡単だ。僕たち二人が全ての頂点に立ち、全てを押さえ付けてしまえば良い」

「何故、この精霊世界を攻めるんですか？」

「人間世界を征圧する為には、シグナーである者たちを倒さなければならぬだろう。しかしその前に、この精霊世界を潰しておけば、抵抗する手段そのものが消える」

遊星たちとの戦闘を回避する為、か。

「さあ、リヨウ。僕と共に生きよう。この世界から、これ以上悲しみを生み出さない為に」

共に生きよう　か。

「オレの目標は　間違いない清四郎さんです。このことは、変えようがありません」

「そう言ってくれるのは、やはり君だけだ。見返りがあると、良いものだね」

見返り。オレは　、いや、考える必要はないんだ。

「　お誘いは本当に嬉しいです。　お断りします」

「　お断り？」

「弱くて、醜くて、儂い。だからこそ、人間は美しいんだ」

「　」

「木を伐採し過ぎる。失敗を繰り返す。でも、伐りすぎた木はまた植え直すことができる。失敗を繰り返しても、成功の糧にすることができる。」

人間は学ぶんだ。それは、心があるから。押さえ付けることに、意味なんてない。

どんなに現状が悲しくても、どんなに現状が辛くても、必ず終わりが来る。人生は辛いことばかりじゃない。楽しいことが必ずあるんだ。その悲しみを少しでも早く取り除いて、楽しいことを迎えさせる。それがオレたちの役目な筈です！」

オレが勝手に思ってることだ。確証なんてない。だけど、ずっとそう思ってたって来たんだ。

「それが、君の答か」

「その通りです。見返りなんてなくて良い。そんなの求めてない。ただ、放っておけないだけ」

「いつか、後悔することになる」

「それでも、構いません。オレはこの道を歩むと決めた」

「残念だよ。リョウ」

不意に、圧力を感じた。とてつもなく強い圧。

「君を、僕自らの手で屠ることになるとはね」

「受けて立ちます。オレは、貴方を止める為にここに来た」

「ふふふ。君とのデュエルは派手になりそうだ。特別ステージだよ。塔の頂上から、外に向かって青白いコースが広がった。空中での、ライディングデュエル。隣でオレもソニックに乗る。清四郎さんが自分のDホイールに乗った。隣でオレもソニックに乗る。」

「リョウ。このデュエル、絶対勝とうね」

マナ。マハードもいる。

「もしかして、心配した？」

「ま、まっさか」

「やれやれ。私は何とも思っていなかった」

二人の様子に少し笑ってしまう。どう見てもホツとしてるよ。

「約束したよ。この世界を必ず護るってね」

「うん。そうだね」

ただ　これが本当に清四郎さんなのか。その判断がイマイチ解らない。“地縛神”が巧妙に隠してるのか、清四郎さん本人の意志なのか。

「さあ　始めようか」

とにかく、デュエルは止められない。見極めよう。このデュエルで。

『ライディングデュエル！アクセラレーション！』

同時に駆け出した。全く互角のスピード、横並びの状態。

「なるほど。速いんだね、リョウは」

平然とついてくる。そのまま第一コーナーに入った。

「うん。先攻は僕が貰うよ」

清四郎さんが加速して前に出る。負けじと加速して追いかける。

「予想以上だ。君はやはり速いね。だけど、ここは譲らないよ」
宣言通り、離されはしないけど、追い付けもしない。第一コーナーを取られた。

「僕の先攻だね」

先攻を取られたか。

「気にするな、リョウ」

「大丈夫。先攻を取られたただだよ。オレたちはオレたちのデュエルをしよう」

「だね！勝とう！」

良し。始めよう。

『デュエル！』

「僕のターンだ。“シャインエンジェル”を守備表示で召喚」

DEF / 800

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだよ」

「オレのターン！」

SP 1

「魔導戦士 ブレイカー”を召喚！」

ATK / 1600

「このカードが召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを1つ置く。このカードの攻撃力は、魔力カウンター1つにつき、300ポイントアップする！」

ATK / 1900

「バトル!“魔導戦士 ブレイカー”で“シャインエンジェル”を攻撃！」

「うん。“シャインエンジェル”が戦闘で破壊された時、デッキから攻撃力1500以下の光属性モンスター1体を特殊召喚できる。僕は“クイーンズ・ナイト”を特殊召喚するよ」

ATK / 1500

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「僕のターン」

SP 2

「僕は“キングス・ナイト”を召喚」

ATK / 1600

「クイーンズ・ナイト」が場に存在する時に「キングス・ナイト」を召喚したことで、デッキから「ジャックス・ナイト」を特殊召喚」

ATK / 1900

「バトルだね。 “ジャックス・ナイト” で “魔導戦士 ブレイカー” を攻撃」

「攻撃力は互角、相打ち」

「そうだね。だが僕は、罨カード“奇跡の残照”を発動。破壊された“ジャックス・ナイト”を特殊召喚」

ATK / 1900

「さあ、ダイレクトアタックできるモンスターの合計攻撃力は4000を越えた。もう終わりかい？」

クスリと笑う。オレは勝つ。それなのに、こんなに早々と負けて良い筈がない。

「デュエルはこれからですよ。

罨カード“逆転の幕開け”！自分場にモンスターが存在せず、相手にモンスターが2体以上存在する場合、相手場のモンスターの合計攻撃力の半分以下のモンスターをデッキから特殊召喚できる！
攻撃力の合計は5000！よって、攻撃力2500以下のモンスターを特殊召喚する！来い！マハード！」

ATK / 2500

場に姿を現したマハードは、静かに杖を清四郎さんに向けた。

「君の精霊は好戦的だね。意外だよ」

「貴殿と話すことはリヨウが全て話した。私には何も無い」

「なるほどね。」

僕は攻撃できないから、カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「オレのターン！」

SP 3

「SP エンジェルバトン”を発動！SPカウンターが2つ以上ある時、デッキからカードを2枚ドロし、1枚を墓地に送る。バトル！マハードで“ジャックス・ナイト”を攻撃！ブラック・マジック！」

「くっ！」

清四郎 LP 3400

「オレはカードを2枚伏せて、ターンエンド」

「僕のターンだ」

SP 4

「クイーンズ・ナイト」と“キングス・ナイト”をリリース」

2体のモンスターをリリース　ということとは！

「まさか。こんな序盤で“地縛神”は出さないよ。

僕は“デビルゾア”をアドバンス召喚！」

ATK / 2600

マハードより攻撃力が高い！

「バトルだ。“デビルゾア”で“ブラックマジシャン”を攻撃！」

「ぐうっ！」

「うああっ！」

リョウ　LP　3900

マハードが破壊された　でも、思った程の衝撃は来なかった。ア
プヤライアの方が強かったくらいだけど。

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだよ」

「オレのターン！」

SP　5

「相手場にもみモンスターが存在することにより、手札から“特攻
のマジシャン”を特殊召喚！」

ATK / 0

「このカードの召喚により、場の魔法・罠カード1枚を破壊！清四郎さんのカード、真ん中！」

「じゃあ、真ん中のカードを発動させよう。罠カード“二者一両損”。このカードにより、お互いにデッキの上にあるカードを墓地に送る。

ふむ。僕のカードは“レベル・ステイラー”だ」

「オレのカードは“ナイトエンド・ソーサラー”です」

お互いにカードを墓地へ。オレのターンはまだ終わってない。

「特攻のマジシャン”をリリース！マナをアドバンス召喚！」

ATK / 2000

「さあ！いくよー！」

「さらに永續罠“正統なる血統”！墓地の通常モンスターを特殊召喚する！

再びオレの場へ！マハード！」

ATK / 2500

オレの場に、マハードとマナが揃った。

「なるほど。それが君の精霊たちか。この天空で行われているライディングデュエルにさえ、動揺は微塵も見えない」

「オレはこの二人の力を借りて、今まで闘ってきました。そして、これからです」

「うん。余程強い絆があるんだね。でも、攻撃力は僕の“デビルゾア”に劣る。どうするのかな？」

「マハード!!」

「解っている!任せろ!!」

「マハードで、“デビルゾア”を攻撃する!!」

「」

「備えはしてる!!」

「墓地より“スキル・サクセサー”の効果発動!このカードをゲムから除外して、マハードの攻撃力を800ポイントアップする!!」

ATK/3300

「チツチツチツ」

「いけ!ブラック・マジック!!」

「ぐああっ!!」

清四郎 LP 2700

良し。“デビルゾア”を倒し、

「グガアアアア！」

まるで人ではないような、そんな咆哮が響き渡った。

「せ、清四郎さん！どうしたんですか！？」

「ガアアアア！」

明らかに様子がおかしい。どうしたんだ？

「これは一体？」

「今、私たちのバトルフェイズだけど」

オレにはまだマナの攻撃が残ってる。でも、攻撃できる雰囲気じゃない。

「グ　フフ。フフフフフフ」

不気味な笑い声。清四郎さんの穏やかな声は姿そのものを消し、まるで悪魔を思わせる。

「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

「　狂ったか？」

「どっぴでしゅう　？」

不気味な高笑い。寒気がする。

「良からう。もとより気付かれるのは、至極当然のこと。答えてやるう、貴様の問に！」

清四郎さんではない誰か。間違いない。

「我は、紅蓮の悪魔・スカーレット・ノヴァ！この世界を滅ぼす“地縛神”！」

紅蓮の悪魔　スカーレット・ノヴァ　？

「馬鹿な　！スカーレット・ノヴァだと　！？」

マハードは何か知ってる　？

「遙か昔、シグナーと“地縛神”の闘いにおいて、最強の“地縛神”として君臨していた紅蓮の悪魔。だが、あるシグナーの手によって封印された筈だ」

「封印は解かれる。それだけのこと！」

「つまり、貴方は清四郎さんじゃないんだね？」

「この肉体は間違いなく清四郎そのものだがな」

十分だよ。これで、心置きなく倒すことができる！

「我のターン！」

SP 6

「永続罾“正統なる血統”！墓地の“ジャックス・ナイト”を特殊召喚！」

ATK / 1900

「墓地の“レベル・スティーラー”の効果発動！我が場に存在するレベル5以上のモンスターのレベルを1下げること、このカードを特殊召喚する！

“ジャックス・ナイト”のレベルを1下げ、“レベル・スティーラー”を特殊召喚する」

ATK / 600

「モンスターを2体」

「まだ終わらん！永続罾“アポピスの化身”を発動！モンスターとして場に特殊召喚する！」

ATK / 1600

3体目？

「ハハハハハハハハハハハハ！」

我は、“ジャックス・ナイト”、“レベル・スティーラー”、“アポピスの化身”をリリース！」

3体リリース!?

怖い。

その感情は確実にある。でも、オレにその感情を隠す気はない。恐れて良い。ただ、自分を見失わなければ良い。すぐ傍にマハードとマナがいる。オレにとっては、それで十分。

「倒すよ、この悪魔を。オレたちみんなの力で」

「解っている。リョウのその言葉で、私たちは奮い立つ」

「この世界を護る為、だね」

「うん。そして、この悪魔を倒して」

「それも、解っている。私情を挟むな、などと言う気もない」

「相手が恩人だし、何より見捨てるのはリョウらしくないよ」

「うん。この悪魔を倒して、精霊世界を護る。そして、清四郎さんを救い出す！」

覚悟は決まった。オレたちは、この悪魔を、必ず倒す！
オレたちは紅蓮の悪魔に向かって行った。

第十七話：再臨（後書き）

クライマックスです。

やはりこのデュエルは長くなってしまいました。

次話で決着です。第三期も終わりが近付いてきました。もうすぐ終わりです。

では、グッチーでした。

第十八話：終焉

泣いていた。

いつも一人ぼつちで、友達はいない。家族さえ、一緒にいる時間は少なかった。

オレは要らない子なんじゃないかって思ってた。信じられるものが、何もなかった。だから、泣いていた。

そんな時だった。清四郎さんに出会ったのは。

優しく包み込まれるような感覚を、初めて味わった。忘れることなんて、できる筈もない。オレの世界を、180度変えてくれた恩人。こんな人になろう。泣いてる人の力になれる人になろう。そう思える人だった。

オレを、闇の中にいたオレを、光が照らし出してくれた。

たった三日だったけど、オレにはその時間がとてつもなく大切だった。そして、再会の約束をして、別れた。

それから、オレにできることを少しずつ始めた。オレみたいに泣いてる人を救う為に。

些細なことでも良い。とにかく、泣いてるだけの自分が嫌で、自分の境遇を持つ人を作りたくなかった。

そして、マハードとマナに出会った。

デュエルの世界に引き込まれていった。オレは過去の決闘王、武藤遊戯の血を濃く引いてるみたいだけど、そんなことは関係ない。オレたちが紡いできた絆は、確かなものだった。

そんな時に、ドラゴン使いの女の子に出会った。見た瞬間に解った。綺麗な瞳が、苦しんでる。彼女の心が、助けを求めている。

デュエルした。ギリギリのところ、何とか勝てた。それから、話をして彼女はたくさん泣いた。でも、泣き止んだ時には、笑顔を見せてくれた。可愛くて、綺麗な笑顔。彼女の名は、アリス。

それからはずっと一緒にいた。毎日が充実してた。以前の生活が嘘のように。

友達も増えた。アリスの友達として紹介されて、一緒にいるようになった、由里。

アカデミアに通うようになってからも、生活はそんなに変わらなかった。充実してると感じるだけ。

そのアカデミアで、もう一人オレたちの輪に加わった。啓斗。

そして、驚くことがあった。アリスの告白。

ビックリした。オレにはもったいないと思ってた。優しく、綺麗で。

でも、その時に初めて気が付いた。喜び。その感情の方が大きいことに。知らない間に、アリスに惹かれていたことに。自分の感情を偽ることはできなかった。

それから、上手くいつてるのかは解らない。ちょっとした喧嘩くらいなら、いくらでもあったという気がする。でも、オレたち二人は互いを想い合っている。それで十分なのかもしれない。

高等部に上がった。遊星や、みんなに出会った。

辛く苦しい闘いが始まった。みんなそれぞれに、自分の意志で闘っている。オレたちの絆は、確かに繋がっている。オレたちは、離れていても繋がっている。そう思えば、何度でも立ち上げられる。空を見上げれば、みんなもきつと同じ空を見てる。繋がっている。

護りたい。

最初は、それだけだった。マハードやマナはもちろん、精霊たちが住む綺麗な世界を護りたい。だからオレは、ファントムとの抗争に赴いた。

再会。

何故、このタイミングで？何故、清四郎さんがファントム側に？

困惑。オレには、それしか残らなかった。

それでも、逃げ出すことはできなかった。オレにはオレの道がある。オレの答は、精霊たちと共にある。導き出した答を、貫き通すことに決めた。

そして、清四郎さんともう一度向き合った。何を言われても、答を曲げようとは思わなかった。

デュエル。異変が起きた。最強の“地縛神”、紅蓮の悪魔、スカールレッド・ノヴァが、姿を現した。

この悪魔を、倒す。倒してみせる。

清四郎さんは、きつと闇の中にいる。暗い暗い、闇の中。

恩を返せる時がきた。今度は、オレが清四郎さんを闇から光へ導く。そして、この精霊世界を護ってみせる。

一瞬、意識が飛んだ。オレは攻撃によって、天空のコースから外れた。

「リヨウ！」

落ちたら死ぬ。でも、オレにはどうしようもない。不意に、何かがぶつかった。支えられてる？

「無事か！？リヨウ！」

「スターダスト」

オレは“スターダスト”の背中にいた。

全身が痛む。所々に傷ができてる。今の攻撃で起きた風圧に切り刻まれたんだ。それでも、まだ闘える！

「ありがとう、“スターダスト”。助かったよ」

「離脱するぞ」

「何を言って まだデュエルは終わってない！」

「あの悪魔を一人で相手にするのは不可能だ！一度体制を立て直し」

「そうしてるうちに、あの悪魔が暴れる！取り返しのつかないことになる！」

「だが」

「オレは一人じゃない！」

「ぐっ」

「マハードがいる！マナがいる！精霊たちが力を貸してくれる！それだけじゃない！」

塔の頂上を指差した。アリス、啓斗、由里の三人がそれぞれに上級兵を倒して、オレを追って来たんだ。舞と咲もいる。二人も登って来たんだ。

「アリスがいる！啓斗がいる！由里がいる！舞も咲もいる！」

オレはいろんなものを背負ってここにいるんだ！ここで逃げ出す訳にはいかない！」

「 解った」

「降ろして。“スターダスト”」

「 死ぬなよ」

降ろして貰い、再びソニックが走り出す。

オレは死なない。約束は必ず守ってみせる！

「いくぞ！紅蓮の悪魔！」

「ククク 更なる苦痛を望むか」

「“レイ・オブ・ホープ”にはもう一つ効果がある！手札のレベル

1モンスターを特殊召喚するか、デッキからレベル1モンスターを手札に加える！

デッキから“エフェクト・ヴェーラー”を手札に加える！”

「良いだろう。ターン終了だ」

「オレのターン！」

SP 7

「エフェクト・ヴェーラー”を召喚！」

ATK / 0

「いくよ、マハード！」

レベル7のマハードに、レベル1の“エフェクト・ヴェーラー”をチューニング！

黒き魔術が集いし時、新たな光の力が目覚める。光差す希望と為れ！シンクロ召喚！舞い降りよ！”SF ブラックマジシャン”！”

ATK / 2900

「さらに、場に“SF”と名の付くモンスターが存在することにより、手札から“スター・イリュージョニスト”を特殊召喚！」

ATK / 100

「マナもいくよ！」

レベル6のマナに、レベル1の“スター・イリュージョニスト”をチューニング！

黒き魔術が交わりし時、新たな絆の幕が開く。光差す希望と為れ！
シンクロ召喚！舞え！“SF ブラックマジシャンガール”！」

ATK/2400

「マナの効果発動！“SP エンジェルバトン”を除外して、効果を発動する！カードを2枚ドロー、1枚を墓地へ！」

ただ、召喚したとしても“地縛神”に攻撃することはできない。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン！」

SP 8

「さらばだ、少年よ。これで散るが良い！」

“地縛神 スカーレット・ノヴァ”の攻撃！無論、貴様へのダイレクトアタックだ！」

「まだまだ！オレは、こんなところで終わる訳にはいかない！」

永続罠“幻想の呪縛”！相手モンスターの攻撃力を500ポイント下げ、モンスター効果を無効にする！

これでダイレクトアタックはできない！」

ATK/3500

「良かるう。ならば、精霊に攻撃するまで！」

“SF ブラックマジシャン”に攻撃対象を変更！」

オレに迫っていた悪魔の手が、マハードに向けられた。

「ぐあああっ！」

「うっうっうっ！」

リヨウ LP 1300

マハードにはもちろん、オレにも風圧が襲う。体中が切り裂かれていく。

「くっつ 耐えるよ、マハード！」

「くっつ 無論だ！」

「墓地の“魔術の守護者”をゲームから除外して、マハードの破壊を無効にする！」

これでマハードは破壊されない！

「チツ。カードを1枚伏せる。そしてエンドフェイズに、“地縛神 スカーレット・ノヴァ”に装備されたカードは破壊されるのだ！」

ATK/4000

くっつ、何て効果。

「最強の神の前では、何をしようとムダだ！」

怯むな！どんなモンスターだろうと、無敵なモンスターなんていな

いんだ！

「オレのターン！」

S P 9

「オレは、“スピードワールド2”の効果を発動！S Pカウンターを7つ取り除き、カードを1枚ドロウする！」

リヨウ S P 2

「いくぞ！」

「リヨウ」

「リヨウ君、大丈夫かな」

「信じるしかねえ。俺たちはここで見てることしかできねえんだからな」

「大丈夫 リヨウは絶対勝つよ」

「墓地の光属性チューナー“エフェクト・ヴェーラー”と、闇属性チューナー“ナイトエンド・ソーサラー”をゲームから除外！
光と闇が混濁する狭間より姿を現せ！ツインチューナー！“幻惑のカオス・マジシャン”！」

ATK/0

「マハード、マナ。オレと共にいこう」

「もちろんだよ。一緒に」

「いくぞ」

【我等、三位一体と成る】

【生まれし秋は違えど、死するその秋まで、我等は一つ】

【願わくば、我等が志を遂げるその日まで】

【いこう。共に】

スピリチュアル・クロス

「レベル8、シンクロモンスターのマハードと、レベル7、シンクロモンスターのマナに、レベル4の“幻惑のカオス・マジシャン”を、ツインチューニング！」

集いし光と闇の結晶が、新たな次元への幕を開く。光差す希望と為れ！

クロスシンクロ！闇の結晶！“SF ダークネス・マジシャン”！」

ATK / 3500

「光の結晶!“SF シャイニング・マジシャン・ガール”！」

ATK / 3000

「さあ！反撃するよ！」

「うん！」

「まずは、マハードの効果！ダークエンド・ドレイン！マナの攻撃力の半分を、マハードの攻撃力に加える！」

ATK / 5000

「そして、マハードのもう一つの効果により、“地縛神 スカールレツド・ノヴァ”の効果が無効にする！」

「どんなに強くても、無敵のモンスターなんていない！オレたちの絆で、必ず攻略してみせる！」

バトル！マハード！“地縛神 スカールレツド・ノヴァ”に攻撃！ダークエンド・イリユージョン・マジック！」

この攻撃が通れば！

「甘いわあ！畏カード“攻撃の無力化”！攻撃が無効にし、バトルフェイズを終了させる！」

「くっ」

ダメか。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「我のターン！」

スカーレット・ノヴァ SP 10

リヨウ SP 3

「いつまで持つかな」

「お前を倒すまでだ！」

「ムダなことを！今度こそ、屠ってやろう！

バトル！逝くが良い！“地縛神 スカーレット・ノヴァ”でダイレクトアタック！」

三度、紅蓮の悪魔の巨大な手がオレを襲おうとする。

「まだまだあ！罨カード“立ちはだかる強敵”！攻撃対象をマハードに変更させる！」

巨大な手が方向を変え、マハードに向かう。

「来い！何度だろうと、私は受けて立つ！」

「バカめ！紅蓮の悪魔に勝てるものか！」

マハードと“地縛神 スカーレット・ノヴァ”が激突した。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

風圧がまた襲ってくる。

「くっ！」

右頬を鋭く切り裂いた。血が赤く流れていくのが解る。

「リョウ！傷が」

「大丈夫！このくらい何でもないから！それより、押し返すよ！」

「うん！」

「オオツ！」

これで、紅蓮の悪魔を倒す！

「畏カード“魔術師集結”！場の魔法使い族1体につき、攻撃力が300ポイントアップする！」

ATK/4100

ATK/3600

「二人の力を合わせて！」

「うん！お師匠様！」

「いくぞ！押し返す！」

マハードとマナの連携で紅蓮の悪魔を押し返す。これで、“地縛神

スカーレット・ノヴァ”を破壊する！

「バカな　！」

「オオオオオオオオオオオオオオオオ！」

マハードとマナの魔術で“地縛神　スカーレット・ノヴァ”を、遂に破壊した！

「グオオオオオオオオオオオ！」

スカーレット・ノヴァ　LP　2600

「まさか、貴様ツ！」

「終わりだ！清四郎さんを解放して貰う！」

「　なんてな」

ツ！？

「地縛神　スカーレット・ノヴァ”が破壊された時、効果が発動する　！」

何がある！？

「互いの場、手札のカードを全て墓地に送る！」

破壊された“地縛神　スカーレット・ノヴァ”から、まがまがしい闇が出現した。

「くっ！マハードとマナは、相手ターンに除外することができる！」

「ムダだ。この効果により、チェーンを組むことはできん！」

「なっ！？」

じゃあ　　！マハードとマナは　　！

「ぐっっ！」

「きゃあっ！」

沸き上がった闇に巻き込まれた。場のカードと手札のカードが全て飲み込まれた。

「で、でも、全てのカードが消えてオレのターンに回る！」

オレの方が展開が早くなる筈。

「それも甘いわあ！“地縛神 スカーレット・ノヴァ”が破壊された場合、私の墓地に眠る“地縛神”以外のモンスターを、エンドフェイズに特殊召喚できるのだ！」

墓地より　　“デビルゾア”を特殊召喚！」

ATK/2600

「くっ　　うっ　　」

立ちはだかる“デビルゾア”。

オレには、何も残ってない。マハードとマナは墓地。手札さえ、ない。

『諦めるのかい？』

俯いていたけど、弾かれたように顔を上げた。今の声は！

そうだ！オレは、約束を守らなくちゃいけない！この精霊世界を護る！アリスと生きて帰る！

「諦めるな！最後の最後まで！」

自分に言い聞かせる。手をデッキの上に置いた。

「オレのターン！」

スカーレット・ノヴァ SP 11

リヨウ SP 4

「“SP 活路への希望”を発動！SPカウンターを4つ以上ある時、発動できる！ライフを1000ポイント払うことで、カードを2枚ドロウする！」

リヨウ LP 300

「さらに、“SP エンジェルバトン”発動！カードを2枚ドロウし、1枚を墓地へ送る！」

墓地へ送った“正統なる魔術師”の効果発動！このカードを除外して、墓地の通常モンスターの攻撃力を0にして、特殊召喚する！オレにもう一度力を貸してくれ！来い！マハード!!」

ATK / 0

「私は、リョウが諦めない限り、何度だろうと立ち上がってみせる！」

不屈の闘志。オレたちはまだ諦めてない！

「まだまだ！“SP 進化の過程”を発動！SPカウンターが4つ以上ある時、墓地のシンクロモンスターを全てデッキに戻すことで、シンクロ素材となったモンスターを1体特殊召喚できる！もう一度立ち上がってくれ！来い！マナ！」

ATK / 2000

「私だって、何度でも立ち上がるよ！」

再び、オレの場にマハードとマナが姿を現した。

「これが、オレの最後のカード！“マジシャンズ・シンクロン”を通常召喚！」

ATK / 0

「レベル7のマハードに、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング！」

シンクロ召喚！再び舞い降りよ！“SF ブラックマジシャン”！」

ATK / 2900

「シンクロ素材となった“マジシャンズ・シンクロン”は、自身の効果によって場に戻ってくる！」

ATK/0

「レベル6のmanaに、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング！

シンクロ召喚！再び舞え！“SF ブラックマジシャンガール”！」

ATK/2400

オレの場に、純白の姿をした魔術師の師弟が現れる。

「凄い！あの状況から！」

「よし！これでリヨウの勝ちだ！」

「いや 待って！リヨウの様子が変だよ！」

攻撃すれば、オレは勝つ。でも、

「ククク 小細工はするものだな。攻撃できまい？」

「何をしている！早く攻撃を宣言しろ！」

“スターダスト”が怒鳴る。でも、オレは、

「このまま攻撃すれば、清四郎さんは 死ぬ」

「なっ!?!」

あくまで、“地縛神”を無効化できるのはクロスシンクロだけ。
オレが攻撃することは できない。

「私たちは、リヨウの判断に従う」

ここで攻撃しなくても、デュエルは続く。でも、次のターンまで回
つて来ない可能性は十分にある。SPカウンターは溜まってるんだ
から。それでも、

「ターン」

『リヨウ』

ツ!?!また!?!この声は、確かに 清四郎さん!

『僕を攻撃するんだ。そうすれば、君の勝ちになる』

「ですが、そんなことをしたら、貴方が！」

『この機会を逃せば、次があるとは限らない。ここで決めなければ
ならないことは、君も十分解っている筈だ』

「しかし！オレが攻撃することは――！」

『するんだ。僕はもう十分に生きた。君にも会えた。後悔はないんだ』

「清四郎さん――」

『これ以上犠牲を増やしたくはない。僕の所為で何かを傷付けるのは、もう御免なんだ。』

君にしか頼めない。攻撃してくれ、リヨウ』

涙が溢れてくる。我慢なんてできない。強引に涙を拭い去った。

「泣いてる――」

「良いんだな　リヨウ？」

マハードとマナに力強く頷いて見せる。

「バトルフェイズ！」

「貴様――！」

「マハードの、攻撃！」

静かにマハードが杖を掲げる。

「“デビルゾア”に攻撃！スター・イリュージョン・マジック！」

『ありがとう。リョウ』

「ガアアアアアアアア！」

スカーレット・ノヴァ LP 2300

「マナの、最後の攻撃」

清四郎さんの声は、もう聞こえない。

「スター・イリュージョン・バーニング」

マナの攻撃が、清四郎さんを貫いた。

清四郎 LP 0

第十八話：終焉（後書き）

遂に決着です。どうだったでしょうか？

“活路への希望”は罫をSPに変えたものです。

第三期もとうとう終わりを迎えました。次話が最終話になる予定です。

それでは、グッチーでした。

第三期最終話：十字傷

誰かが、僕を呼んでいる。

「清四郎さん！」

僕は、どうなったんだろう？

「清四郎さん！目を覚ましてください！」

この声は　懐かしい響きだなあ。

「清四郎さん！」

そうか。君が、僕を救い出してくれたんだっただね。

「リョウ」

デュエルは終わった。清四郎さんを操っていたスカーレット・ノウアは、姿が見えなくなった。どこに消えたかは解らない。

清四郎さんが一人残されてる。ボロボロの姿で気を失っていた。そして　目を覚ました。

「リョウ」

「清四郎さん 良かった。良かった」

「ごめんね。ちゃんと助けてあげられたかったんだけど」

「何を言って」

「僕はもう、長くない」

「弱気にならないでください！」

「ううん。解るんだ。死の境地っていうのかな」

そんなことは解ってた筈だ。こうなるなんて、解ってた筈なんだ。

周りにはみんながいる。でも、顔を伏せてる。光の力でヒーリングができるマナでさえ、清四郎さんではなく、泣きながらオレの治療をしてる。

「大きくなったね リョウ。あの、小さかった君が。こうして、約束通り僕に会いに来てくれた。不本意な形で、ごめんね」

「そんなこと ないです」

何を言って良いのか解らない。言葉が見付からない。

「それに、こんなにかっこよくなって 恋人でもいるのかい？」

「はい。はい」

アリスが無理に笑顔を作って前に出た。

「綺麗な娘じゃないか。大事にするんだよ」

「はい。解ってます」

「リョウのこと、よろしくね」

「はい」

アリスも答えるのがやっとの様子だった。

「君には、伝えておこうかな」

何か大事なことがあるのかな？

「この抗争は ファントムについては 裏で糸を引いている組織がある」

「え？」

「その組織は イリアステル」

イリアステル？

「とても謎に包まれた組織だね。実に様々なことに手を出して
いて、世界各国の戦争なども手を引いているような気配だったんだ」

「調べたんですか？」

「僕は 入ってはいけないところまで入ったのかもしれない。その結果、イリアステルに上手く操られて、この様だよ」

「イリアステル」

「リョウ。良からぬことを考えちゃダメだよ。憎しみは、新たな憎しみを生むだけだからね」

言われてハツとした。オレは精霊たちに酷な頼みをしてたんだ。自分のことになって初めてよく解るなんて。

「人は、愛情を知ると同時に、憎しみを知る。でも、憎しみに染まっ
つてはいけない。解るね？」

「はい」

「うん。君なら、心配いらぬ筈だ」

ニコリと、清四郎さんが笑う。

「ああ 頬に傷を受けているんだね。綺麗な顔だったのに」

マナの治療はほぼ終わっていた。でも、どうしても頬にまっすぐ入った傷は治らないみたい。

「良いですよ。こんな傷」

「 頬の傷は消えることはない。そう聞いたことがあるよ。
特に、強い負の感情の籠った傷は。そして、深い憎しみを植え
付けていくという。 。 。 。
紅蓮の悪魔は 厄介なものを君に残したようだね 」
軽く頬に触れてみた。血は止まってるけど、鋭く傷が入ってる。

「 紅蓮の悪魔の呪いを取り除こう。僕には、それができる。 。 良
いかい? 」

「 お願いします 」

オレの頬に、清四郎さんの手が伸びてきた。スーッと触れていく。
頬に血が流れてきた。 。

「 僕は 君に優しさを籠めて傷を付けた。十字傷のように 交
錯するようにね。これで、紅蓮の悪魔の憎しみを打ち消すこと
ができる 」

マナの力を感じる。止血してるんだ。

「 その十字傷は 生涯消えることはない 」

「 貴方の 清四郎さんの優しさの籠った傷です。この十字傷を貴
方だと思って、生きていきます 」

「 ふふ 嬉しいことを言うなあ。 。 」

君になら、僕は任せて逝ける。この世界を、君に託したよ。 」

もう、長くない。 。

「 護ります。この精霊世界も、オレたちの故郷の人間世界も。オレ、いえ、オレたちが」

「 君の絆は、確かなものだ。どんな困難が君に訪れようと必ず乗り越えられる。頑張るんだよ 」

「はい」

「 楽しかったなあ 。今まで、僕の生涯に悔いはない 。僕のことを、引き継いでくれる者もいる。僕は 安らかに逝ける 」
涙がまた溢れ出ようとする。必死に抑え込んでる。

「 さよならは言わないよ 。僕は君の中で生きているんだ 」
オレの十字傷 。

「 任せたよ 」

清四郎さんが、静かに目を閉じ 黄泉の国へと旅立った 。

side アリス

闘いは終わった。

私たちスピリットシグナーがファントムの上級兵を倒したことで、精霊世界は元の姿へと変わっていくらしい。

私たちはマハードとマナの家に戻った。

清四郎さんが亡くなった後、1体の精霊が姿を見せた。“デビルゾア”だった。

“デビルゾア”は清四郎さんの精霊で、紅蓮の悪魔に囚われてからも、ずっと抵抗を続けていたらしい。だから、“デビルゾア”が鍵だった。

デュエル中、紅蓮の悪魔の支配が強くなったのは、“デビルゾア”を倒したから。弱くなったのも、“デビルゾア”が場に現れたから。それで、“デビルゾア”を通してリヨウに語りかけることができた。最後の攻防で、紅蓮の悪魔が“デビルゾア”を召喚するのを散々悩んだらしいけど、結局はそれが決め手になった。

清四郎さんは、家の近くに埋葬した。きっと、安らかに眠ってる筈。
。家の中で、誰も口を開かなかった。重たい沈黙が流れてる。

「ごめん オレ、部屋にいるから」

リヨウのことはみんなが気にしてる。がんばって繕ってはいるけど、やっぱり辛そうで。

「アリスちゃん。行ってあげて」

「だな。早く行ってやれ」

「うん。じゃあ、行ってくる」

由里と啓斗に促されて、舞と咲に頷いて貰って、私は腰を上げた。

リョウの後を追う。
軽く部屋をノックして、部屋に入った。

「アリス」

泣いてた訳じゃなさそう。だけど、リョウはまだ泣いてないと思う。

「何かあった？」

何もなさそうに聞いてくる。

「無理しないで、リョウ」

「」

「リョウの気持ち　少しは解るから」

父さんが亡くなって、自暴自棄になった。その時に、リョウが助けてくれた。

リョウに近寄って、手が触れられるところまで来た。

「今は辛いけど、辛いことばかりじゃない。そうだよね？」

「そう　だね」

「私は　リョウがとても大切な人を亡くしたんだって思ってる。
辛くて、苦しくて、どうして良いか解らない」

「　　うん」

ゆっくりと、優しくリヨウを抱きしめた。

「あ
」

「泣いても良いんだよ？うん、泣いて。我慢する必要なんてない。思いっきり、たくさん泣いて良いんだよ」

リヨウが私にそうしてくれたように。

「あ
く
」

「
」

「ごめん アリス。ちょっとだけ」

「うん
」

「う
あ
」

嗚咽。声を押し殺してる。

「うあああっ！うわあああっ！」

すぐに、慟哭に変わった。私は、ジッとリヨウを抱きしめていた。

side out

「う
」

目を覚ました。微かに、手に温もりを感じる。

「スー スー」

オレのベッドの隣に、アリスが寝てる。オレの手を掴んで。

「起きたか？」

「おはよう、リョウ」

朝だった。マハードとマナがいる。

「昨日、一晩中泣いてたんだよ。それから、泣き疲れて寝て、アリスちゃんはずっと傍にいてくれたの」

だから、アリスがオレの手を掴んでるんだ。

「リョウに渡す物がある」

「オレに？」

「“デビルゾア”から受け取った、清四郎殿の遺品だそうだ」

「そっか」

そう言われても、素直に受け入れることができた。一晩泣いたからかもしれない。

渡されたのはCDディスクだった。

「これは？」

「解らない。“デビルゾア”は、行き詰まるまで見るな。と、だけ言った」

「解った。じゃあ、これはまだ見ないよ」

「これは私の憶測に過ぎないが、ひよっとしたら、清四郎殿が五人目だったのかもしれないな」

今考えてみれば、確かにそうかもしれないね。もう、確かめる方法はないけど。

「うーん」

アリスが起きそうだね。二人に目配せすると、笑って姿を消した。

「おはよう、アリス」

それから、オレたちは帰り支度をする。いろんなことがあったこの闘いは、終わったのだから。

見送りにはたくさんさんの精霊たちが来てくれた。

「じゃあ、またね。“スターダスト”」

「ああ。世話になった」

「良いよ。オレたちは自分の意志で来たんだから」

「そうか。いつでも来ると良い。歓迎する」

「うん。ありがとう」

オレたちは、人間世界へと帰った。

舞と咲を家に送って、みんなもそれぞれ家に帰る。オレは遊星にこれまでのことを話しに行った。

「そうか そんなことがあったのか」

「うん。まあ、ね」

「大丈夫か？」

「大丈夫。昨日、一晩中泣いたからね」

「その傷、消えることはないのか？」

十字傷に軽く触れながら答えた。

「消えないよ。オレは、この十字傷と一緒に生きていくから。遊星たちのマーカーと同じだよ」

遊星とクロウさんはマーカーが残ってる。多分、生涯消えることはないんだろうね。

「じゃあ、オレはもう行くよ」

「どうした？もう少しゆっくりしていけば良い」

「はは。ちょっと呼び出されてるから」

「そうか。まあ、いつでも来てくれ」

オレはすぐにガレージを出た。行き先は決まってる。近くの公園まで、ソニックを走らせる。

「リョウ。こっちだよ」

アリスに呼ばれて近寄った。二人の影が見える。啓斗と由里。

「話し声は聞こえる?」

「聞こえるよ」

耳を潜めると、確かに少し聞こえてきた。

「にやはは。無事で良かったね」

「ああ。あいつのことが気になるが、まあ大丈夫だろ」

心配されてるんだね。もう、大丈夫だよ。

「それで、話って何だよ?」

この状況で気付かない啓斗は、流石としか言いようがないね。

「え、えっとね。その、思い切って言うよ?」

「ああ」

「私、武内由里は、啓斗君のことが好きです！」

「は？」

「私と、付き合ってくれませんか？」

「嬉しいけどよ。俺なんかで良いのかよ？」

「啓斗君が良いの」

「まあ、お前のことは嫌いじゃねえ。俺で良いなら、別に良いぜ」

「にはは。ありがとう」

はい。決定。誰もが予想した通りの展開だね。

「良かった良かった。二人がやっと結ばれて」

『！？』

声をかけると、二人がめっちゃくちや驚いて目を向けてきた。オレとアリスは必死に笑いを堪えてる。

「お、お前ら」

「み、見てたの？」

『うん』

「にゃーっ!？」

由里が絶叫して、アリスを追いかけ回す。オレは逆に啓斗に近寄った。

「もう少し素直に答えてあげても良かったんじゃない？」

「うるせー。ったく、何の心配もいらねえじゃねえか」

「もう大丈夫だよ」

「ったく」

そう言う啓斗の表情は緩んできた。

数日後、新学期が始まった。頬にできた十字傷はみんなに驚かれたけど、適当に誤魔化した。この傷は消えないんだから、気にしてはいられない。

新学期はただ一つの事件を除けば平穏だった。

オレは暇さえあれば、遊星とソニックで駆け回っていた。ほぼ一年後に迫ったWRGPに向けて調整してみたい。

WRGPに出場を決めていないオレに、散々チームへの誘いがあった。時には腕試しとしてデュエルもした。全部叩き返したけど。

他には、みんなで精霊世界に行くことが多々あった。ファントムとの抗争で傷付いた精霊世界を復活させる為にね。

それぞれで各地を見て回った。オレはもちろん、魔法使い族が中心都市や里にも行った。“エンディミーン”にも会った。里の祠でお

告げを受けた通りのこととした。ホワイトデーにね。オレたちの今後の為に。

そうして、新学期という名の三学期は早々と終わったように感じた。三年生は卒業し、新年度にはオレたちの学年は一つ上がる。

春休みも平穏だった。みんなが集まって精霊世界に行くことは相変わらずだったけど、遊星たちと一緒に走ったりすることは増えた。

アリスとは仲良くやれてる。アリスにだけは伝えている。今後のオレのこと。

何があっても、自分の道を曲げないことを。

アリスは笑って受け入れてくれた。それが堪らなく嬉しかった。

啓斗と由里もたまに会ってデートでもしてるみたい。オレのことを言っていられなくなったって、啓斗が言ってたね。

それと、精霊世界の言語を密かに学んだ。マハードに徐々に教えて貰いながら、やっとまともに話せるようになった。マナはもうスラスラ話せる。精霊世界の言語っていうのは面倒だから、精霊語と言うようになった。

精霊世界には知らないことがたくさんある。そういうことに詳しいマハードにいろいろと教えて貰いながら、三人で精霊世界を回った。新しい発見は本当にたくさんあって、楽しかった。

長期休暇が終わりを迎える。オレたちの新学期がまた始まる。

新たな闘いが始まるかもしれない。

オレの十字傷が疼くことがあった。オレは、新たな闘いが始まると

清四郎さんに教えられてると思ってる。既に、マハードとマナにだけは伝えてある。

この世界は必ず護り抜く。

その思いが強くなる。

でも、それは生きてだと思っ。死んだら、ただ悲しみを残していくだけなんだ。

生きよう。

どんなに辛くても、苦しくても。オレには、大切な人がいる。大切な仲間がいるんだから。

もうすぐ、新年度。新学期が始まる。

第三期最終話：十字傷（後書き）

漸くここまで来ました。第三期最終話です。終了しました。

5D・sは絆の物語だと思っっていますが、比較的年上向けのアニメだったと思っています。

自分の作品でも、死者が出てしまいました。殺すつもりはなかったのですが。

そして、リヨウの頬に刻まれた十字傷。アドバイスを参考に入れませんでした。十字傷に纏わる話もあるかもしれませぬ。

では、次回は恐らくBの世界かと。第三期は一度もしていないので。

それでは、グッチーでした。

特別編：相思

3学期のとある日、オレはいつも通りアカデミアに登校している。季節は冬、まだまだ厳しい寒さは続いている。歩いてるけど、凄く寒い。

オレは首に巻いたマフラーに顔を埋めながら、前に歩いてるアリスを見付けた。

「アリス、おはよう」

「あ　おはよう、リヨウ」

「どうかした？疲れてない？」

「えッ　ううん。平気だよ」

ニコリと笑うアリス、のように見えた。

最近はこのな感じだった。少し無理をして笑ってるように見える。気付くか、気付かないかの境だろうけど、オレには解る。

疲れてるのかと最初は思ってたけど、何かあるのかな？アリスは何も言ってこないから、あんまり詮索したくないんだけど。

「（マハード）」

「（どうした？）」

「（少し気になることがあってね。周囲に何かないかな？）」

「（ 解った。少し注意してみよう）」

マハードに後を任せ、オレとアリスは校門に差し掛かった。そこからはいつも通り。啓斗や由里、アキに会って教室に入っていない。何も変わらない筈。

オレたちは席に座って、先生が来るのを待っていた。

「（リヨウ）」

「（何か変わったことはなかった？）」

「（ 強いて言えば、一つだけあった）」

「（ 内容は？）」

そこまで聞いて、先生が教室に入って来た。授業が開始される。オレは授業を聞きながら、マハードに注意を向けていた。

「（ 何かしらの視線を感じた。恐らく、アリスに向けたものだった）」

視線？

「（何だか嫌らしい感じだったよ。女の子ならそう感じるような）」

マナも話に加わってきた。

アリスに向けた、女の子が嫌がる視線 ？

「 シンなら、何か知ってるかな? 」

「 (授業の後に聞いてみるか?) 」

「 (いや、今聞いた方がよいよ。休み時間だと、アリスに気付かれる) 」

「 (解った。授業は) 」

「 (ちゃんと聞いているよ) 」

オレの手は動いている。ノートはきちんと取ってるよ。それ程待たずに、シンは来た。

「 (マハードから話は聞いた) 」

「 (アリスの様子が、ここ最近ずっと変だよな?) 」

「 (やはり、気付いていたか) 」

やっぱりか。

「 (何かあった?) 」

「 (察している通りだ) 」

「 (視線が原因だね) 」

「 (ああ。ストーカーだ) 」

その視線、そういう意味だったんだね。

「（いつ頃から？）」

「（一月、程前か）」

「（気付いてたの？）」

「（当初は気にしていなかったが、続いてくるとな）」

精神的に辛いよね。

「（何でオレに言わなかったの？このこと、誰か知ってる？）」

「（いや、誰も知らない。吾はリョウに相談するべきだと忠言したのだが、主アリスがな）」

止めた訳か。

「（主アリスを責めないでくれ。リョウのことを思ってたことだ）」

オレはいろいろあったからね。負担を掛けたくないってアリスの心遣いだろうね。

「（解ったよ。でも、知った以上は動くからね）」

事実を知ったからには、黙っていられない。シンが言うことだから間違いないだろうし。これからどうするか、だね。

「（これからのことだけど、とりあえずオレに考えがあるから。シ

ン、マハード、マナ、三人にも協力して貰うよ」

さてと、どこにいるのか、まずは正体から暴かせて貰おうかな。いや、それは後かな。

side アリス

授業が終わって、放課後。私は部活に足を運んだ。でも、きっと楽しくないし、集中できない。

何度も誰かに、リヨウに相談しようと思った。けど、リヨウは辛い現実を受け止めてなお強く今まで通りに生きようとしている。今はリヨウに負担を掛けたくない。

部活が始まった。いつものように由里と合わせながら歌う。

コンコン

ノック。部活の最中に人が来るのは珍しいけど。

「こんにちは」

「リヨウ!？」

姿を見せたのは、何故かリヨウだった。

「あら。リヨウ君、どうしたの？」

「どうも。江藤先輩。特にどうということはないんですが、暇だっ

たもので」

リヨウはギターを持つてる。部活に来たってことなのかな？

「古賀先輩が引退して大変なの。あれから新入部員が二人入ってくれたんだけど、それでもね」

「ドラムとキーボードを担当して貰ってるんだけど、なかなか上手くないんだよ。リヨウ君、ギター担当だから、軽音部に入らない？」

「オレがギター担当するのは固定なの、由里？」

「モツチロン！」

「はあ」

私としても、リヨウが入ってくれるのは大歓迎だけど。

「まあ、せっかく来たんだし、ちょっとやってみて？」

「はい」

こうして、リヨウが加わって練習が再開された。

リヨウと一緒にいることは私にとって凄くプラスだった。リヨウがいるだけで、凄く落ち着く。

「リョウ君。よく来たね。また助っ人として誘わないと来てくれな
いと思つてたのに」

「ちょっと訳有りだね」

「アリスちゃんのことだね？」

「気付いてたんだね」

「薄々ね。アリスちゃんのこと、よろしくね」

「うん。何とかするよ」

部活が終わって、辺りはもう真っ暗になってた。

「アリスちゃん、お疲れ様」

「うん。お疲れ、由里」

「これから帰り？」

「うん。由里は？」

「私は、ちょっと啓斗君と」

「あ そっか」

「うん。気をつけてね。また明日」

「また明日」

今日は一人なんだね。

怖い。怖い怖い怖い怖い。

「アリス」

「えッ？」

誰？

「どうかした？」

「リヨウ」

「うん？」

「何でもないよ」

「そう？じゃあ帰ろ」

リヨウが私の手を取って歩き出した。少し遅れて、慌てて歩き出す。

「アリスの手、冷たいよ。寒くない？」

「大丈夫だよ」

私は手を握り返した。リヨウの手、暖かい。
不意に手が離され、リヨウが私の前に立った。首にフワッと巻かれ

る。マフラー。

「これで少しは寒さを防げるかな。女の子が体を冷やしちゃダメだよ」

「でも、リヨウが」

「オレなら平気だよ」

また私の手を取って歩き出す。暖かいマフラー、暖かい手。リヨウ次第に恐怖心が薄れているのが解る。この暖かさのお陰で。

でも、この温もりはそんなに長くは続かない。分かれ道、私とリヨウの帰り道は違う。

「こっちだね」

「えッ？」

リヨウは家の方向じゃなくて、私の家の方向に進路を向けた。

「リヨウ？」

「もう遅いし、送って行くよ。そんなに遠くもないしね」

今はこのさりげない優しさが凄く嬉しかった。

「ありがとう、リヨウ」

リョウがいてくれるお陰で、ずっと気になってた視線が今は気にならない。今日初めて自然な笑顔が出せた。

side out

アリスの家に着いた。マリアさんが迎えてくれた。

「こんばんは。マリアさん」

「あら。リョウ君。送ってくれたのかしら？」

「はい。もう暗くなってましたから」

「そう。上がって。夕飯くらい食べていくと良いわ」

断ろうかと思っただけど、隣にいたアリスの表情を見て辞めた。続けるような表情だったから。

マリアさんが作ってくれていた夕飯を頂いてから、マリアさんに呼ばれた。

「今日はありがとう、リョウ君」

「いえ」

「厚かましいかもしれないけど、暫くお願いして良いかしら？」

マリアさんは感じているのかもしれない。自分の娘のことだからね。

「解りました」

元々そのつもりだったしね。

「夕飯はリョウ君の分まで用意しておくわね」

「はは。ありがとうございます」

そして、部屋にいたアリスに告げて帰ろうとしたら、玄関まで見送りに来てくれた。

「じゃあ、また明日ね。アリス」

「うん。気をつけてね、リョウ」

オレはアリスに近付いて、そっと抱きしめた。

「えッ？」

「大丈夫。心配いらないよ。今日はゆっくり眠ってね」

そう囁き、離れた。振り返らずに玄関を出た。

「マハード。報告して」

「尾けていたのは田仲というアカデミア3年だ。正確に確認した」

アカデミアの先輩か。そんなことはどうでも良いけど。

「アリスの容態は？」

「かなり意識してる。それに怯えてるね」

「リヨウが傍にいてことで大分楽そうだったよ」

「それじゃ意味ないよ。オレが四六時中一緒にいられる訳じゃない」

「早く済ませるべきだな」

「長引かせるつもりはないよ。一週間もかけたくない」

オレは通信端末を取り出し、二人の知り合いに連絡を入れた。

side アリス

翌日。私はアカデミアに行く支度を済ませて、玄関にいた。

「行ってきます」

「ええ。気をつけてね」

外に出れば、また嫌な視線を感じるようになる。
。 。
重い足を引きずって玄関を開けた。やっぱり感じる視線。でもそれ
以上に気になることがあった。

「リヨウ!？」

「あ、おはよう。アリス」

リョウが家の前に立っていた。

「ど、どうしたの？」

「うん。アリスに早く会いたかったからここにいた、じゃダメかな？」

「ダメじゃないけど」

「良かった。じゃあ、行こう」

私の手を取って歩き出す。リョウの手は冷たい。

「ずっと待ってたの？」

リョウは気付いているのかもしれない。私のことに。

「平気だよ。だから、何も言わないで」

気付いてるんだ。それでいて、何も言わずに私を気にしてくれている。冷たい筈の手が、暖かく感じる。

「ありがとう」

「気にしないで。暫くは行き帰り一緒にいようよ」

「うん」

リョウと一緒にいてくれる。これで怖くない。何も言わないけど、

きつと部活にも来てくれる。

リヨウが私の手を引いて歩いてくれてるからか、久しぶりに気持ち良くアカデミアに入った。

放課後もリヨウは一緒にいてくれた。部活に来てくれたから。笑って同じ時間を過ごしてくれる。自然と楽しく歌えていた。

そして、帰り。やっぱりリヨウは一緒にいてくれた。手を繋いで歩いて帰ってる。

「あの、リヨウ」

「なあに？」

「あの 軽音部、入らない？」

「あゝ」

困ったように余った手で頬をかく。

「その、それならこうやって一緒に帰れるし、私もリヨウには部について欲しいし」

「助っ人だけじゃダメ？助っ人なら、頼まれればいつでもやるんだけど」

やっぱり渋ってる。ダメかな。

「あつ えっと、そんなにしゅんとしないで」

「我が儘言ってゴメンね」

「ま、前向きに考えてみるよ」

「ホント!？」

「さ、さっ、着いたよ。マリアさんが待ってるから」

リヨウは誤魔化すように家のインターホンを押した。

side out

オレはアリスの家を出て、昨日連絡した二人に会っていた。

「どうやら、間違いないようだな」

「ああ。かなり殺気立ってた気配みてえだしな。ホントに大丈夫か?」

「はい。むしろ出て来た方が証拠がはっきりしますし」

「無理はするなよ。手筈通りで良いな?」

「うん。頼むよ」

話を付けた翌日、オレは朝からアリスの家の前でアリスを待ってた。完全にオレに向けた視線を感じてる。殺気と言った方が良いかな。

「万が一ということがある。油断するなよ」

「大丈夫。マハードとマナがそんな失敗をするとは思ってないから」
「信頼されてるね」

「恐らく、狙われるとすれば帰りだろう。私たちは常に気を張っておくが、リヨウは余り気を使い過ぎるのも良くない。アリスに気取られないようにな」

「うん。気をつけるよ」

「あつ、アリスちゃん出て来たよ」

マハードとマナが姿を消してから、アリスに声をかけた。

「おはよう、アリス」

「あつ、おはよう、リヨウ」

手を繋いで歩き出した。

アカデミアでの一日を終え、部活に行つて、アリスと帰り。さあ、これからだね。

side アリス

今日も一日、ずっとリヨウと一緒にだった。行き、部活、そして今の帰り。リヨウといると、視線もそれ程気にならないし、凄く安心する。

「ね、アリス」

「なあに？」

辺りは真っ暗。しかも路地で、電灯もほとんどない。こんなところで何を？
スツと、裏に引き込まれた。

「えッ　？リヨウ　？」

「ごめんね。少し怖いかもしれないけど、オレを信じて」

耳元で囁かれた。それだけリヨウは身体を寄せてきてる。
ドキドキする。リヨウの呼吸すら聞こえる。

「取り乱さないでね」

「んっ　／＼」

口づけ。
リヨウからの、強引で優しさが余り感じられない、リヨウらしくない口づけ。

リヨウが静かに離れた。

その時、何かが光った。不気味な光。頭を過ぎった嫌な予感。まさか。
光が近付いてくる。誰かがその光を持って。

ナイフ！

「リヨウッ！」

ダメ！間に合わない！

誰かがリヨウに体当たりのように突っ込んだ。ナイフの切っ先を、リヨウに向けて。

「キヤアアアアッ！」

リヨウが 刺された！

「大丈夫だよ、アリス。だから落ち着いて」

真っ白になった頭に、優しい声が届いた。

「えッ？」

「ほ」

リヨウは何ともないように身体を見せる。血が流れてる訳じゃないんだ。

「ありがとね、マハード」

「危険な橋を渡るのには、これで終わりにして欲しいものだ」

マハードがリヨウを護ったんだ。

「マナもありがとう」

「私は出番なかったけどね」

マナもいたんだ。

「ったく、まさかマジでやるとはな」

「あ」

暗闇の中から姿を見せたのは、牛尾さんと遊星さん。これって？

「大丈夫だよ。もう、何も心配ないからね」

「リヨウ？」

「リヨウ。手筈通りで良いな？」

「うん。後はよろしくね、遊星」

「ああ。アリス、今日はオレが送る。行こう」

「えッ？えッ？」

不意にリヨウに視線を向けた。軽く微笑んでくれる。

「後で、オレも行くから。約束する。待ってて」

「」

頭が混乱してる。誰か説明して。

「大丈夫だ。オレが帰りながら説明する」

遊星さんが私の背を押した。

side out

アリスが遊星に連れられて先に帰って行く。オレは牛尾さんと話がある。

「フウ。面倒事を回しやがって」

「すみません」

「まあ、お前としちゃほっとける話じゃねえか。ましてルシエのこととなっちゃな」

「はい。この人、どうしますか？気絶させましたけど」

突っ込んできた時にマハードが気絶させた。この人は、アリスを付け回してたストーカー。

「こいつは、ストーカー行為、及び殺人未遂でとりあえず逮捕。だが、お前も危ねえことするな。自分を囿にするなんてよ」

殺気立ってるのには気付いてた。マハードの報告で、刃物を持っていることが解った。

だから今回の流れを考えた。ストーカーに出て来て貰う為に、アリスに無理に口づけまでした。多分、我慢できなくなって出て来るって思ったけど案の定だった。マハードがオレの、万が一に備えてアリスにマナが付いてた。シンも気付いてただろうけどね。

「大丈夫ですよ。もうしませんし」

「もうすんな。良いな？」

「了解です」

「じゃ、今部下呼んでるからよ。もう行って良いぜ。早く行ってやれ」

「はい。ありがとうございます」

もうアリスは家に着いたかな？遊星に任せたから心配はしてないけど。

急いでアリスの家に向かった。途中で遊星に会った。

「リョウ。お前はもう良いのか？」

「遊星。ごめんね、こんなこと頼んで」

「いや。だが、随分アリスは混乱していたようだった。いろいろと説明したが、納得してはいない」

まあ、仕方ないかな。後はオレが説明しないと。

「ありがとね、遊星。オレはアリスの家に行くから」

「ああ。夜は気をつけろよ」

「うん。じゃあね、遊星」

「ああ」

遊星と別れて、アリスの家に向かう。しばらくして、アリスの家に着いた。

インターホンを鳴らすと、マリアさんが迎えてくれた。

「アリスは？」

「部屋にいるわ。閉じこもってるみたいだけど」

「えっと、とりあえず事は解決しました。アリスの部屋に行っても？」

「ええ。お願いするわ」

家上がり、部屋に行った。コンコンとノックする。

「誰？」

「オレだよ。アリス」

「リヨウ。入って」

声が少し沈んでる。部屋に入ると、ベッドの上で布団に包まっていた。

「アリス」

声をかけづらい。

「怖かった」

「えっと、もう大丈夫。嫌な視線はもう」

「そんなことじゃない」

「じゃあ何が？」

「リヨウらしくなかった」

「オレらしくなかった？」

「あんな強引なの、優しくなかった」

「何のことが解った。あの時オレが強引にした、キスのことだ。」

「あれは」

「 解ってる。私のこと考えてしたってことは、遊星さんに聞いたから」

「

「それでも」

優しくなかった、か。 。
確かに、オレらしくはなかった。嫌われちゃったかな。 。

「 ごめん、アリス。とにかく、もう大丈夫な筈だから。今日はもう休んでね」

部屋から出る。そう決めた。でも、できなかった。後ろから掴まれる。振り返ると、いつの間にかアリスがいて、オレの服を掴んでいた。

「行っちゃダメ」

「でもオレは」

アリスは小さく首を振る。

「ちょっと 驚いただけだから」

多分、嘘だね。そんな様子じゃなかった。 。

「落ち着いて、また明日話そうよ。今日はもう」

帰る。その言葉が繋がらなかった。アリスはギュッと握り絞めてる。

と、思ったなら、不意にその力が弱まった。アリスが目の前にいた。

「んっ！」

体中に電流が駆け巡ったような感覚に襲われた。アリスがオレに体を預けて、キスをしたから。しばらく時間が過ぎたのか、すぐだったのかは解らない。ただ、気が付くとアリスは少しだけ離れてた。

「これで、おあいこだから」

そっと、体を預けてきた。

「許してくれる？」

「」

何も言わない。ジッとオレを見詰めてる。毎回のことだね。態度で示して欲しい、と。

そっと、想いを込めて、できるだけ優しく抱きしめる。アリスの綺麗な髪がくすぐりたい。

アリスが顔を上げた。微笑んで、唇を合わせた。

「ん」

唇だけ離れた。

「短い」

「今日は我が儘だね」

アリスが少し、ムツとした表情を見せた。また微笑んで、もう一度唇を合わせた。そしてまた離す。

「あつ」

キスを終え、軽く抱き寄せた。

「もう、終わりだよ」

「もう?」

これ以上すれば、オレは自分を止める自信がない。今のオレに、これ以上のことをする覚悟はない。

「疲れてるよね?最近、よく眠れてないでしょ? ゆっくり眠って、明日また元気な姿を見せて?」

腕の中にいるアリスを抱えてる。お姫様抱っこ。ベットの中に寝かせた。

「帰るの?」

目が、妙に切なげ。でも、ここで折れる訳にはいかない。

「また、明日ね」

「うん」

渋々、認めてくれたね。

「おやすみ、アリス」

アリスの唇に、再びキスを落とす。ほんの一瞬。
部屋の電気を消して、もう一度アリスに声をかけて部屋を出た。
家を出ようとしたところで、マリアさんに声をかけられた。

「あら？もう良いの？」

「マリアさん。オレはもう帰りますね」

「てっきりあの子を抱いてるのかと思ってたけど」

止めないんだ。オレたちの親は確かに公認だけど。

「では、失礼します」

「ええ。いろいろとありがとう。気をつけてね」

家を出た。帰ろうとすると、シンが姿を見せた。

「シン。アリスは？」

「眠った。安心したようにな」

そっか。良かった。

「感謝している。手を煩わせたな」

「うん。このくらい、何でもないよ」

「そうか。気をつけて帰れ」

「うん。じゃあ、アリスをよろしくね」

シンと別れて、家に戻った。

翌日、いつも通りアカデミアがある。アリスの家の前で、アリスを待ってる。玄関が開いた。

「あっ！リヨウ！」

元気な声。アリスの調子は戻ったみたいだね。

「おはよう。アリス」

「うん！おはよう」

手を繋いで、アカデミアに行く。これが、オレの日課になった。

オマケ ガールズトーク

「にゃはは。リヨウ君が軽音部に入ってくると良いんだけどね」

「うん。私ももう少し聞いてみるよ。マナはどう思っっ？」

「どうかなく。リョウはけっこう自由好きだしね」

「何となく解るわね」

「ところで、アキちゃん」

「なに？」

「遊星さんとはどんな感じ？」

「ええっ!?!?!」

「にはは。そんなに動揺しなくても」

「そっだよ。この際、ガツンと」

「む、無理よ!?!」

「まあまあ。落ち着いて、アキ。由里とマナもからかっちゃダメだ

」

「でもでも、私みたいに想いを伝えちゃえば案外」

「それは由里ちゃんが鈍感だったただだよ。啓斗もだけど」

「マナの言う通りだね」

「え〜!?!?!」

「遊星がどんな娘が好きかなんて解らないし」

「遊星さんの好みかあ。リヨウに聞いてみたら解るかな？」

「クロウさんとかは？確か、幼なじみだよな？」

「クロウもジャックも、そういうことには役に立たないわ」

「ふえ？そうなの？」

「立っと思っ？」

『思わない』

「でしよう」

「リヨウ君は解るのかな？」

「どうかしら？アリス、マナ」

「私は、よく解らないかな」

「うん。あんまり詳しくないと思うな。由里ちゃんと啓斗みた
いにあからさまなのはともかく」

「なんだか、ちょっとショック」

「そ、そんなに落ち込まないで、由里」

「どっしてそう思っの？」

「だって、リヨウはアリスちゃん以外はあんまり見えてないと思うよ」

「私以外　　？でも、あの時　　」

「あの時って？」

「えっ！？／＼え〜っと　　」

「にははは。なんだか恥ずかしいことみたいだね」

「き、気にしないで！」

「マナ。何があつたの？」

「ア、アキー！」

「良いんじゃない？もうみんなそういつ年頃だよ？
えっとね〜、リヨウとアリスちゃんが良い雰囲気になって〜、いろいろと」

「マ、マナ！／＼」

『いろいろと／＼』

「二人も！何想像してるの！」

「にゃ、にゃはは。でも良いな〜。私も啓斗君と　　／＼」

「遊星と　／＼」

「はいは〜い。現実に帰って来てね〜」

「　それで、リヨウのことだけど」

「うん。はっきり言うと、恋路はアリスちゃん以外目が向いてないからね」

「へっ？そっなの？」

「そっだよ。誰にでも優しいから解りにくいけど、アリスちゃん以外の女の子と付き合うリヨウは想像できないし。というか、リヨウがそう思ってるんじゃないかな。他の女の子が話題に出ることなんてないから」

「　解りにくいわね」

「もちろん、仲の良い友達なら話は変わってくるよ。由里ちゃんとか、アキちゃんとかならね」

「　そっなんだ」

「良かったね、アリスちゃん。愛されてるみたいだよ」

「　うん／＼」

「でも、遊星はリヨウと仲良いわよね？」

「遊星さんは表情が読みにくいからね。お師匠様でさえ、よく解ら

ないって言うくらいだから。リョウ自身、鋭い方じゃないし」

「 そう」

「 “スターダスト” に聞くのが一番かな」

「 なるほど」

「 啓斗君のことも、カカシに聞けば解るよね？」

「 解るとは思っけど、なんで？」

「 浮気なんてしてたら ふふふ」

「 まあ、浮気はね」

「 そうね」

「 ツー!？」

「 どうかした、啓斗？」

「 いや、何かすげえ悪寒がした」

「 ま、風邪引かないようにね」

番外編：初デート

春休み。精霊世界の修復を続けながら過ごしていた。

でも、オレたちだって学生。遊びたいと思う。思うんだけど、

「あゝ」

ベッドで寝ています。寝込んでます。

「コホッ、コホッ」

今で解るかな。風邪引いてるんだよね。

「大丈夫？」

「うん。ごめんね、アリス」

「ううん。今日はゆっくり休もうよ」

「うん」

今日は一応デートの予定だった。オレがこんな調子だから中止になったけど。それで、アリスが家に看病しに来てくれる。

マハードとマナは精霊世界にいる。多分、他の精霊たちも同じだと思っ。

「リョウと一緒にいることは変わらないから、気にしないで」

「ん。でも、行きたかったね。バイオパーク」

「アハハ。また行けば良いよ。見たいものは一つ見れないけど」

「それは そうだね」

今日は、あの二人の初デートだからね。

side 啓斗

オレは駅で由里を待っている。今日は一応、オレたちの初デートだ。まあ、由里とは一緒にいることが多い。あんま気にすることもねえがな。

一応はオレが待つてる形だ。女は待たせるもんじゃねえらしい。あくまで、リヨウ曰くだが。

「啓斗くん！」

「応。来たか、由里」

由里が来た。なんか、いつもの格好と違うな。

「待った？」

「いや。珍しく髪結んでねえんだな？」

普段はサイドアップ、Dホイールに乗ってる時はツインテールだが、今日は下ろしている。

「嫌だったかな？」

「別に」

「む。啓斗君、もう少し反応しない？」

「良いじゃねえか。似合ってたんだから」

「ホント？」

「ああ。早く行こうぜ」

「うん！」

電車に乗る。今日の行き先はバイオパーク。まあ、動物と触れ合う場所だ。直にな。

言い出しっぺは俺じゃねえ。由里だ。まあ、行きてえって言うから来た。動物好きなのは知ってたしな。

「今日はいないよね？」

「カカシたちのことか？精霊なら向こうの復興で今日はいねえ筈だろ？」

「違う違う。アリスちゃんたちのこと」

「ああ」

納得だ。あいつら、告るの見てやがったからな。

「今日はいねえと思っぜ。リョウが風邪引いたって言ってたからな」
俺たちを騙す為と考えられなくもねえが、そんな手の込んだやり方はしねえだろ。

「にやはは。それなら大丈夫だね。どうせアリスちゃんが看病してるんだろっし」

「ああ」

こんな会話をしながら、電車が着くまで適当に時間を潰す。んで、着いた。

「ここか」

「初めてなのか？」

「そっだよ。だから来てみたかったの」

なるほど。動物好きなら来たいと思うわな。

「で、どこから行く？」

「うっん。どこでも良いよ。全部回るっし」

全部かよ。

「んじゃ、適当に見て行くか」

「うん！」

ここでは、一応動物に好き勝手に触れることができる。まあ、ダメな動物もいるが。

「啓斗君！あそこ行こ！猫ハウス！」

言われるままに入ってみた。にゃーにゃー言ってる。

「そっくりじゃねえか」

「何が？」

「何でもねえよ」

「にゃはは。でも、可愛いよ」

そっくりじゃねえか、由里に。言えはしねえが。

猫一匹抱えている由里の周りに、他の猫が集まってきた。類は友を呼ぶ。まさにこのことだな。

「啓斗君？」

「何だ？」

「何か失礼なこと考えてるよね？」

「別に。普通だろ」

「じゃあ何でニヤついてるの?」

「お前んとこに猫が寄ってくるからだよ」

嘘は言つてねえ。

「にゃ?ホントだ。よしよし」

ホント、こういう勘だけは働くんだよな。気をつけねえと。

次はカバ。流石に触れねえから見るだけで次だ。

「次は何だ?」

「リスザルだよ。ほら」

「おわっ!」

肩に飛び乗ってきた。コイツがリスザルか。

「にやはは。啓斗君ビククしてる」

「そりゃするだろ」

「可愛いよ、リスザル」

「ああ。お前んとこにも来たぜ」

「にゃ!?!」

由里のにも飛び乗った。頭にな。

「痛い痛い! 髪の毛引つ張らないで!」

「はは。ほら」

リスザルを捕まえて取ってやる。

「うう 啓斗君。髪の毛乱れてない?」

「ん? 大丈夫だぜ。問題ねえよ」

「ホント?」

「ああ。ホントだ、ホント」

頭を抑える由里の頭を軽く叩いてやる。

「ほら。行こつぜ」

「うん」

次に向かう。

「あれ何だ?」

「あれは カンガルーかな」

「触れねえだろ？」

「そうかも。中の子に触ってみたいんだけどな」

「ああ。あれは無理だろ。ずっとポケットみてえなところにいるんじゃないのか？」

「そうなのかな？」

触って良いとはどこにも書かれていない。無理だろうな。

「行こうぜ」

次は犬。なんだが、

「デケエよ！」

「にやはは。啓斗君、人気者だね」

何故か寄って来る。それも立てばあんま背丈が変わらねえぐらいのが。重いんだよ！

「犬に好かれてるんだ。良かったね」

「この状況を喜べるか！」

由里は子犬とじゃれてるだけ。俺は必死なんだよ！

「早く出るぞ！」

「え〜！短いよ」

「潰されんだよ！」

由里が文句を言うが、押し切って外に出た。あのままじゃ洒落にならねえ。

「きゃっ〜」

「リップ。あんまりオレにくっつくとな風邪が移るよ」

「そうだね。おいで、リップ」

「きゃっ〜」

「ふふ。相変わらずだね」

「あゝ 風邪なんていつぶりだろ？」

「けっこう久しぶりだよ？私が覚えてる限りでは」

「だからこんなにキツイんだろうね」

「あんまり張り詰めないでね、リョウ」

「そう見える？」

「うん。でも、見えないだけだよ。上手く言えないけど、そう感じる」

「そっか」

「頼ってね。力になるから」

「ありがとう」

昼過ぎになった。俺達は昼飯にしている。

しかし、由里とこうして二人で飯か。初めてな訳じゃねえ。ただ、二人じゃなかった。いつもリヨウとアリスがいた。

由里に告られた時、正直答に迷った自分がいた。俺なんかで良いのか、あんな純粋な奴はもつたいないんじゃないか。俺なんかで良いのか。

リヨウに、もう少し素直に答えてあげれば良いのに、そう言われた。俺はお前みてえにはなれねえ。そう思うことが多い。

あいつらは、リヨウとアリスは、何だかんだありながら上手くやっている。俺達外の奴から見ていけば、笑えるくらいだ。良い意味でだ。問題は俺達がそうなるかだ。

「啓斗君」

「つと、悪い。何だ？」

「どうしたの？ボーツとしてたみたいだけど。疲れた？」

「あんだけ巨犬に絡まれたらな」

「にやはは。それはしょうがないよ」

考えないようにしている。なるようにしかならない。リョウには、
そう言われた。

だが、考える自分がいる。どうしたもんかな。

「行こ、啓斗君」

「ああ」

昼食を終え、まだ回っていないところを回る。由里のテンションは
相変わらず高い。よくそんなテンションで持つな。

「フェレットかわい〜」

由里の肩の辺りを動き回っている。

「相変わらず、なんだよな」

「にゃ？どうかした？」

「お前は変わらねえなと思ってな」

「そうかな？」

自覚はねえ。ないならない方が良いのかもしれねえな。

「啓斗君は変わった？」

「どっと思っ？」

「変わったよ」

由里にはそう見えんのか。

「私は昔の啓斗君をよく知らない。だから、変わったかどうがよく解らない」

「荒れてた。知ってんだろ？暴れ者だったんだよ」

「でも、その前の啓斗君を知らないよ」

その前の、俺？

「私、思うんだ。啓斗君は変わったように見えるけど、本当は元の啓斗君に戻ったんじゃないかって」

「昔の俺を知らねえのにか？」

「うん。根拠はないよ？なんとなく」

昔の俺か。

フェレットが俺の肩にも上ってきた。

「俺は、お前ら三人と一緒にいることですいぶん救われた」

「そうなの？」

「由里、リヨウ、アリス。三人と一緒にいたから、暴れることがなくなつた。俺の心の中の濁りをお前らが洗ってくれたんだろつな」

俺が何でこんなことを言ってるのか、よく解らねえ。ポツポツと口から出る言葉を抑えられねえ。抑えようともしてないのかもしれないねえが。

「昔の俺がどんなだったか、自分でも忘れちまつた。でもまあ、お前がそう言うんなら、そうなのかもしれねえな」

「ちょっと、話してくれたね」

「ん？」

「啓斗君、あんまり自分のこと話さないから。少し聞いてみたかったの」

「お前らみてえに気持ち良く生きてた自信はねえからな。話したくはないんだよ」

「気持ち良く生きてるって思ってる人なんていないと思うなあ」

まあ、そんなこと思ってる奴はいねえだろうな。人生なんて人それぞれ。俺があいつらのことを勝手に決め付けてるだけだ。

「言ったことあるかな？」

私ね、アリスちゃんに会うまでずっと泣いてたんだよ。一人ぼっちだったから、ずっと」

確か、少し聞いたことがある気がする。親が事故って一人で耐えてたんだっただな。

「アリスちゃんに会って、一人じゃなくなった。リヨウ君ともすぐに仲良くなれた。そして、啓斗君だね」

「俺はオマケだ。お前らに加えて貰ったんだよ」

「リヨウ君の親友なの？」

俺がリヨウの親友か。あいつと何であんな気が合うのか、自分でもよく解らねえ。似てるどころなんてねえと思うがな。

「ふふ。行く？」

「ん？ああ」

フレットが飛び降りたのを見たのか、由里が言う。素直に従った。後も適当に見て回った。全部回った頃には、日が暮れかけていた。最後に出店に入った。何か記念に買いたいものでもあるんだろうな。

「何が良いかな？」

「さあな。フレットのぬいぐるみとかか？好きだろ？」

「好きだよ。でもね」

値段か？いや、こついう時は、

「記念に買ってやるつか？」

「じゃはは。う」

「って、言えば良いのか？」

由里が笑って頷く前に言い返した。そんなくらいは付き合いで解る。

「こついう時は素直に言わせてよ」

「お前こそ、素直に買ってって言えば良いじゃねえか」

「女の子に言わせないの！」

これだから解んねえんだよな。リョウとアリスを見てきたから、いまさらな気もするけどよ。

「ほら。買ってやるから機嫌直せ。な？」

「じゃはは。別に怒ってないのに」

結局、俺が買ってやった。それで今日は終わりだ。電車で帰る。

「由里。一つ、全く関係ねえんだが」

「なあに？」

「ホワイトデーにリョウウから貰った宝石、持ってるか？」

「持つてるよ。啓斗君は？」

「俺も持つてる。まあ、いつ使うか解んねえからな」

「だよな。リヨウ君が何考えてるか解んないけど、何かあることだけは間違いないからな」

あいつの悪い癖だ。ギリギリまで大事なことを言わねえ。

気が解らねえ訳ではねえ。あいつは何とかしてえだけだ。誰も悲しむことがねえように。

「でもさ、リヨウ君がこの宝石を私たちに渡してくれてるんだから、頼りにしてくれてるんじゃないかな？」

「だと良いがな」

あいつの頼みには何でも応えるつもりだ。そうでもしねえと、デカすぎる借りを返せねえ。

「何かあるんだろうな」

「あるだろうな。まず間違いなく」

「力になってあげる？」

「ああ。何かあるつとな」

「うん。そうだね」

こうして、俺達の初デートは終わった。
また精霊世界の復興の手伝いが始まる。退屈する訳じゃねえから良いけどよ。

これから何が起こるのか、俺には解らねえ。何が起こっても、俺は退かねえ。あいつらの力になる為なら、あいつらを護る為なら、俺は禁忌の刃を抜く。それが、俺ができることだ。

side out

オマケ

「風邪は治ったのか？」

「うん。大丈夫だよ、遊星。とりあえずは治ったみたい」

「そうか。だが、済まないな。久しぶりに走り込みに行くつもりだったが、遊びに来ているんだ」

「風邪治って良かったね、リョウ」

「ありがと。龍可」

「さあ、デュエルだ！」

「解った解った。デュエル」

「龍亜は元気だね。今日はクロウさん、せっかく休みなのに」

「まあ、クロウは面倒見が良いからな」

「龍亜が悪いのよ。デュエルばかりなんだから」

「まあまあ。ところで、ジャックさんは？」

「就職先を探している」

「あらら」

「ねえ、遊星」

「どうした？」

「遊星の好きな女性のタイプってどんななの？」

「何を言い出すんだ、龍可？」

「ちょっと聞いてみたくなっちゃって」

「オレはそういうことは解らない」

「遊星らしい返答だね」

「でも、遊星にだって好みくらいあるでしょ？」

「余り考えたことはないな。オレには合わない」

「遊星らしいと言えば、遊星らしいんだけど」

「（アキは苦勞しそうだね）」

「龍可はどうだ？」

「私？」

「ああ。女としてどう思う？」

「そうだね。好きな人はいないの？」

「うーん　　いないわ」

「割と正直に答えたね」

「二人になら良いかなと思って」

「良い出会いはない？」

「リヨウや遊星みたいな同年代の人はいないわね」

「出会いなんていつあるか解らないけどね。もしかしたら、すぐ近くにいるかもしれないよ？」

「そうなのかな？」

「リヨウはアリスと出会ったことになるのか？」

「まあ、そうだろうね」

「良いなあ。なんだか羨ましい」

「何が何が？」

「龍亜」

「別に。何でもないわ」

「なんだよ。つれないな。そんなだから彼氏いないんだろ？」

「何よ！龍亜だって彼女いない癖に」

「オレは良いよ。デュエルが彼女だから」

「はあ。呆れた」

「龍亜にはまだ早い話だったみたいだね」

「よお。何の話なんだ？」

「俗に言う恋ばなですかね」

「なんだそりゃ。良いねえ、リア充は」

「リヨウは解る。何故オレを見るんだ、クロウ？」

「気付いてねえんだもんな。つたく」

「？」

「（この手の話は疎いなあ。遊星らしいのは解るんだけど）」

「どうしたの、アキ？」

「アリス。由里」

「遊星さんたちのガレージを覗いてるみたいだけど、入れば良いのに」

「む、ムリよ」

「？」

外にはこっそり話を聞いていたアキがいましたとき。チャンチャン。

第7回：Bの世界

リ「はい。久しぶりのBの世界です」

ア「第三期は全くなかったからね」

リ「それはそうと、一つおめでたいことが。
この小説、『遊戯王5D's Magic Illusion』が、
一周年を越えました」

ワ「ッ！パチパチパチパチ

リ「こんなに続くとは思ってなかったね」

ア「そうだね。そんな予定は全くなかった訳だし」

気晴らしのつもりが、ついついのめり込んでしまっ

リ「まあ、他に並行してもう一作書いてるからね」

ア「どっちもがんばってるんだよね？」

そのつもりです。

リ「さてと、今回は長くなりそうだからね。さっさと始めようか」

ア「そうだね」

『第7回：Bの世界、スタートです！』

リ「はい。では、改めて、こんにちは。メインパーソナリティのリヨウです」

ア「こんにちは。同じくメインパーソナリティのアリス・ルシエです」

リ「第三期はほぼデュエルだったよね。ファントムとの抗争だったから、仕方ないんだけど」

ア「そうだね。別にあったことといえば、由里と啓斗のことくらいで」

仕方ないということにして下さい。

リ「はいはい。じゃあ、さっそく今回のゲストを」

ア「今回のゲストは、ノース校の私たちの友達。美庄舞と、立花咲です」

舞「こんにちは」

咲「こんにちは〜！」

リ「二人共、よく来たね」

ア「いらっしやい」

リ「二人は第二期からの登場だね」

舞「そうね。学園対抗戦からね」

咲「第三期も登場したよ。デュエルは書かれなかったけど」

難しかったんです。

リ「今回はこの二人と一緒に進行していくよ」

ア「まずは最初のコーナー」

『グッチーの部屋!』

リ「オリキャラやオリカの紹介をするコーナーだね」

ア「今回は一周年記念で、今までのキャラ設定をもう少し追加してみただって」

咲「どういこと?」

リ「進めば解るよ」

舞「そうね。じゃあ、始めましょう」

ア「という訳で、オリキャラの紹介は後回し。オリカからだよ」

“ 暗黒鎗騎兵ガイア ”

レベル 8

ATK / 2700

DEF / 2000

種族 / 戦士族

属性 / 風

シンクロモンスター

チューナー + “ 暗黒騎士ガイア ”

このカードが場上に存在する限り、カード名を “ 暗黒騎士ガイア ”
として扱う。

このカードが守備表示モンスターに攻撃した時、その守備力を攻撃
力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与え
る。また、一度のバトルフェイズで二度攻撃できる。

“ 熾天妖精カレン ”

レベル 8

ATK / 3000

DEF / 2000

種族 / 天使族

属性 / 光

シンクロモンスター

チューナー + “ 翼を織りなす者 ”

このカードが場上に存在する限り、カード名を “ 翼を織りなす者 ”
として扱う。

1ターンに一度、自分の墓地に存在するモンスターを1体除外する

ことで、除外したモンスターと同じ属性のモンスターを1体墓地から特殊召喚する。

リ「啓斗と由里の新しい力、カカシとカレンの新しい姿だね」

咲「ハンパないよね、この効果」

舞「ええ。召喚されると、辛いわね」

リ「まあ、それだけ絆の力が強いつてことだね」

ア「そうだね。次にいくよ」

“スター・イリュージョニスト”

レベル 1

ATK / 100

DEF / 100

種族 / 魔法使い族

属性 / 光

効果モンスター

自分場上に“SF”と名の付くモンスターが存在する場合、特殊召喚することができる。

“幻惑のカオス・マジシャン”

レベル 4

ATK / 0

DEF / 0
種族 / 魔法使い族
属性 / 光

ツインチューナー

クロスシンクロ以外のシンクロ素材にはならない。

このカードは闇属性としても扱う。

このカードは通常召喚できない。自分の墓地に存在する光属性チューナーと、闇属性チューナーを除外することのみ特殊召喚できる。

“SF ダークネス・マジシャン”

レベル 10

ATK / 3500

DEF / 2500

種族 / 魔法使い族

属性 / 闇

シンクロモンスター

ツインチューナー+“SF”シンクロモンスター2体

以下の効果を1ターンに一度ずつ発動できる。

- ・相手モンスター1体の効果を無効にする。
- ・自分場上に存在する光属性モンスター1体の攻撃力の半分を、自身の攻撃力に加える。
- ・相手ターンに、エンドフェイズ時までゲームから除外できる。

“SF シャイニング・マジシャン・ガール”

レベル 9

ATK / 3000

DEF / 2400

種族 / 魔法使い族

属性 / 光

シンクロモンスター

ツインチューナー + “SF” シンクロモンスター 2体

以下の効果を1ターンに一度ずつ発動できる。

- ・自分のデッキの上からカードを3枚墓地に送る。その3枚のカードの1枚の効果を発動できる。
- ・自分の墓地、またはゲームから除外されたカード1枚を手札に戻す。この効果は相手ターンにも発動できる。
- ・相手ターンに、エンドフェイズ時までゲームから除外できる。

ア「リヨウの新しい力、クロスシンクロモンスターだね」

咲「ねえねえ、リヨウ」

リ「何？」

咲「難しくてよく解んない」

リ「そうだね。クロスシンクロはツインチューナー1体とシンクロモンスター2体でシンクロする、新しいシンクロ召喚だよ」

オリジナルです。

リ「そして、2体のシンクロモンスターが召喚されるんだね。オレたちが辿り着いた新境地、スピリチュアル・クロスで得たんだよ」

舞「シンクロ召喚が進化したのよね」

ア「それに、進化はそれだけじゃなくんだよね？」

リ「うん。進化には無限の可能性があるからね」

咲「私たちにも、可能性があるんだね」

リ「そういうこと。次にいくよ」

“SP 縛られし神への布石”

SPスペル

SPカウンターが4個以上ある時発動できる。デッキから“地縛神”と名の付くカード1枚を手札に加える。発動ターン、モンスターの召喚、特殊召喚はできない。

“SP 陰の光”

SPスペル

SPカウンターが5個以上ある時発動できる。自分場上に存在する光、または闇属性モンスター1体と同じレベルの間、または光属性モンスター1体を特殊召喚できる。発動ターン、攻撃できない。

リ「ライアとのデュエルで使われたカードだね」

ア「“SP 陰の光”は漫画版GXのカードを参考にしてるよ」

舞「次よ」

“無限の剣製 アンリミテッドブレイドワークス”
永続罨カード

自分場上に存在するこのカード以外のカードと、手札を全て墓地へ送ることで発動できる。

墓地に存在する“暗黒鎗騎兵ガイア”を効果を無効にして特殊召喚する。ライフを半分払うことで、デッキから“剣製”と名の付くカード1枚を手札に加えることができる。

“剣製 熾天覆う七つの循環”
通常罨カード

自分場上に“無限の剣製 アンリミテッドブレイドワークス”が存在する時のみ発動できる。

発動ターン、自分が受けるダメージを全て0にする。

“剣製 約束された勝利の剣”
通常罨カード

自分場上に“無限の剣製 アンリミテッドブレイドワークス”が存在する時のみ発動できる。

発動ターンのエンドフェイズまで、“暗黒鎗騎兵ガイア”の攻撃力を2倍にする。

“ 剣製 破戒すべき全ての符”
通常罨カード

自分場上に“ 無限の剣製 アンリミテッドブレイドワークス” が存在する時のみ発動できる。
発動ターンのエンドフェイズまで、相手モンスター1体の効果を無効にする。

“ 剣製 銀の加護”
通常罨カード

自分場上に“ 無限の剣製 アンリミテッドブレイドワークス” が存在する時のみ発動できる。
モンスターを破壊する効果を無効にし、破壊する。

はい。啓斗とチャルアのデュエルで使用したカードです。このカードらについてリョウたちは何も知らないので自分が。
啓斗とカカシのみ知っているカード。自ら封印した禁忌のカードです。通常のデュエルで使われることは、まずありません。他にも“ 剣製” のカードがあるかは未知数です。
では、次にいきましょう。

“ SP エンジェル・リターン”
SPスペル

SPカウンターが3個以上ある時発動できる。

ゲームから除外されたレベル4以下の天使族モンスター1体を特殊召喚する。

“SP スター・オーシャン”
SPスペル

SPカウンターが3個以上ある時発動できる。
場上に存在するモンスター1体につき、自分のデッキから1枚選択して墓地に送る。

“ 聖女デアラクター ”

レベル 7

ATK / 1000

DEF / 2500

種族 / 天使

属性 / 光

シンクロモンスター

チューナー+天使族モンスター1体以上

1ターンに一度、場に存在するカード1枚をエンドフェイズまでゲームから除外する。

墓地に存在する天使族モンスターを3体をゲームすることで、このカードのカード効果による破壊を無効にする。

リ「由里とピスクのデュエルだね」

咲「ピスクだけは、少し変わってたって聞いたけど」

ア「ずっと生きてて、疲れたって言ってたらしいよ」

舞「どのくらい生きてたのかしら？」

リ「マハードたちでさえ、オレたちでは考えられないくらい生きてるからね。予想もできないくらい生きてるんじゃないかな」

咲「よく解んないね。次」

“ドラゴニック・フェーダー”

レベル 1

ATK / 0

DEF / 0

種族 / ドラゴン族

属性 / 火

効果モンスター

相手モンスターの攻撃宣言時、自分場上に存在するこのカードをリリースすることで、相手のバトルフェイズを終了させる。

“レッドアイズ・コクーン”

永續罠カード

自分場上に存在する“レッドアイズ”と名の付くモンスターの装備カードとなる。場上に存在するモンスターの効果を全て無効にする。このカードが破壊された時、自分の墓地に存在する“真紅眼の黒竜”を特殊召喚できる。

ア「私とクシルのデュエルだね」

舞「2枚ともジャックさんのカードを参考にしてるのよね？」

その通りです。

咲「次？」

リ「そうだね。次が最後だよ」

“ 逆転の幕開け ”
通常罨カード

自分場上にモンスターが存在せず、相手場上にモンスターが2体以上存在する場合発動できる。
相手場上に存在するモンスターの攻撃力の合計の半分以下の攻撃力のモンスターを、デッキから特殊召喚する。

“ 地縛神 スカーレット・ノヴァ ”

レベル 12

ATK / 4000

DEF / 4000

種族 / 悪魔族

属性 / 闇

このカードは特殊召喚できない。3体をリリースした場合のみ通常

召喚できる。

このカードは魔法・罫・モンスター効果をエンドフェイズに無効にして破壊する。この効果は無効にならない。

“自縛神”と名の付くモンスターは場上に1体しか存在できない。場上にフィールド魔法が存在しない場合、このカードを破壊する。

相手はこのカードを攻撃対象にすることはできない。このカードは相手プレイヤーに直接攻撃できる。

このカードが破壊された時、お互いのプレイヤーの手札、及び場に存在するカードを全て墓地へ送る。この効果に対して、魔法・罫・モンスター効果を発動することはできない。このカードが破壊されたターンのエンドフェイズ、自分の墓地に存在するモンスター1体を特殊召喚できる。

“正統なる魔術師”

レベル 1

ATK / 0

DEF / 0

種族 / 魔法使い族

属性 / 光

効果モンスター

自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外する。自分の墓地に存在する魔法使い族通常モンスターを、攻撃力を0にして特殊召喚する。

“SP 進化の過程”

SPスペル

SPカウンターが4個以上ある時発動できる。自分の墓地に存在するシンクロモンスターを全てデッキに戻すことで、墓地からシンクロ素材となったモンスター1体を特殊召喚する。

リ「オレと清四郎さんのデュエルだね」

咲「正真正銘、ラストデュエルだった訳だけど」

舞「リヨウ 貴方は大丈夫？」

リ「大丈夫だよ。清四郎さんはオレの中で生きてる。この十字傷とともにね」

ア「その十字傷は、消えることはないんだよね？」

リ「そうだよ。清四郎さんの優しさと、スカーレット・ノヴァの憎しみが刻まれてるからね」

咲「ま、リヨウはリヨウだし」

舞「ええ」

リ「そう。オレは何も変わらないよ」

ア「うん！」

一段落したところで、キャラ紹介にいきましょう。

リ「はいはい。オレたちの設定を少し加えるよ」

ア「ほんの少しね」

舞「何を加えるの？」

イメージＣＶです。

リ「そういつ訳で、どうぞ」

名前…リヨウ

年齢…17歳

フロントムとの闘いで、頬に十字傷ができた。位置はモデルの緋村剣心と同じ。

イメージＣＶ

宮野真守さん（DOG DAYSのシンク・イズミ、鋼の錬金術士のリン・ヤオなど）

名前…アリス

年齢…17歳

イメージＣＶ

水樹奈々さん（魔法少女リリカルなのはのフェイト・T・ハラオウンなど）

名前…石井啓斗

年齢… 17歳

イメージCV

森田誠一さん（BLEACHの黒崎一護など）

名前… 武内由里

年齢… 17歳

イメージCV

田村ゆかりさん（魔法少女リリカルなのはの高町なのはなど）

名前… 美庄舞

年齢… 17歳

イメージCV

榎本温子さん（プリキュアSplashStarの美翔舞など）

名前… 立花咲

年齢… 17歳

イメージCV

樹元オリエさん（プリキュアSplashStarの日向咲など）

リ「とまあ、主要キャラのイメージCV紹介だね」

ア「そうは言っても、リョウ以外はモデルとなったキャラのCVだ

けどね」

舞「私たちも同じね」

咲「リヨウのモデルってるろくに剣心の緋村剣心だよね？」

リ「そうだよ」

緋村剣心のCVは涼風真世さんで有名です。

咲「リヨウだけ何で違うの？」

年齢が違い過ぎます。

ア「確かに、そうだね」

リ「因みに、DOG DAYS見ててシンクに惹かれたらしいよ」

舞「アハハ」

ア「それから、私たちの年齢が一つ上がってるよ」

咲「紹介は終わり？」

ア「そうだね。次のコーナーかな」

『賢者の部屋！』

リ「いくつか質問がきてたよ」

咲「ありがとう！」

ア「じゃあ、舞、お願いして良い？」

舞「ええ。えっと、

『結構どーでもいー質問ですが、リヨウ君の甘味嫌いは、どこまで許せるのかな？』と

だそうよ。リヨウ、貴方宛ての質問みたいよ」

咲「私もこの質問は聞いてみたい」

リ「え〜っと」

ア「実際は食べられない訳じゃないんだよ。ただ、食べたくはないみたいだね」

リ「絶対に食べられないってことはないよ。進んで食べようとは絶対に思わないけど」

舞「結論としては、極端に苦手だったことね」

咲「じゃあ、もう一つの質問は私が読むね。

『ホワイトデーのときの宝石のことなんですけどあれは結局どうなったんですか？それともこれからでてくるんですか？』

私も聞いてみたい。宝石貰っただけだよね？」

リ「今後に関わってくるよ。今はそれだけしか言えないけど」

ア「何があるの？」

リ「オレも知ってることじゃないんだよ」

舞「今後注目してみてね」

ア「これで質問は終わりだね」

リ「うん。第三期が終わったね」

咲「そうだね」

という訳で、第四期の予告いってみましょう。

リ「第三期、ファントム編が終了して、物語は新たなステージへ」

ア「新年度となり、私たちの学年が一つ上がるよ」

舞「WRGPまで後1年ね」

咲「いよいよ盛り上がってきたよ！」

リ「そんな第四期。そのテーマは、チーム」

ア「WRGPに向けて、チームの編成が忙しくなってくるよ」

舞「そんな中、様々な事件が私たちや遊星さんたちを巻き込んでいく」

咲「アカデミアでも動きがあるよ」

ア「今だに出場するか迷っているリョウはどうするのか」

リ「オレたちスピリットシグナーはどうするのか」

舞「私たち関係者はどうするのか」

咲「期待しててね」

リ「それでは、第四期に向かって」

『ライディングデュエル！アクセラレーション！』

ご苦労様でした。

リ「一周年を迎え、さらにがんばります」

ア「これからもよろしくね」

舞「私たちががんばるわ」

咲「私も〜！」

リ「では、今回はここまで。お送りは、リョウと」

ア「アリス・ルシエと」

舞「美庄舞と」

咲「立花咲でした！」

「バイバイ」

第7回：Bの世界（後書き）

次話から第四期に移ります。
予定通りです。

では、更新頑張ります。グッチーでした。

第四期第一話：転校生（前書き）

リ「はい。今回から始まります。第四期！」

マハ「今回から懐かしい二人が登場する」

マナ「転校生って形でね」

リ「そしてオレが感じる新たな闘いの予兆」

マハ「今後、どうなるのか、だな」

マナ「ということで、第四期第一話、いってみよー！」

第四期第一話：転校生

新年度、新学期が始まる朝。

オレは起きて、簡単にアカデミアに行く準備をしている。

「おはよう、リョウ。今日から新学期だね」

「そうだね」

頬の十字傷に軽く触れる。

「気になる？」

「ううん。ちょっとした癖だよ」

この十字傷の中に清四郎さんが生きてる。その想いは変わらない。

「疼く？」

「相変わらずかな」

オレはこの疼きを、新たな闘いの予兆だと思ってる。清四郎さんが教えてくれたる。

「でも、今日はちょっと違う気がする。何て言うか　良いことがありそうな気がする」

「ホント？良いことがあると良いね」

ただの予感だけだね。

「さ、行こうか。新学期だ」

家を出た。前学期から始まったアリスとの登校の為に、アリスの家に行く。それ程待たずにアリスが出て来た。

「おはよう、リヨウ」

「おはよう、アリス」

普段通りの登校。何も変わらない。
アカデミアの中に入ると、啓斗と由里、アキがいる。

「今日はどうする?」

「今日は始業式だけだろ?」

「そうよ。私は帰るだけだけど、みんなは?」

「オレは遊星と走る予定があるけど」

「うーん、リヨウ君。ちょっと待ってくれる?」

「何か予定あった?」

「えっとね、リヨウには言っていなかったんだけど、新入生が入学してくるよね?」

「そうだね」

それは解る。けど、それが何なんだろう？

「新入生の、歓迎会があるよね？」

「あゝ」

解った。解りたくなかったけど 解っちゃったよ。

「そ・れ・で」

「今日は遊星と」

「解ってるよね、リヨウ君？」

逃げたい。

「リヨウ 歓迎会で、ライブがあるんだけど」

はい。解ってますよ。そこまで申し訳なさそうに言わないでね、アリス。

「人数は揃ってるよね？」

「ギターはいないよ？」

いなかったね。わざと。

「ま、諦める。どうせ断れねえんだ」

「そうね」

啓斗とアキの言葉で顔を上げてアリスと由里を見る。アリスは申し訳なさそうだけど、期待を膨らませてる。由里は当然といった顔をしてる。

「解ったよ。ギターだね」

「そこなくっちゃ！」

結局そうなるんだよね。仕方ないか。

「でも、今日はダメだよ。遊星にはもう言ってるんだから」

「時間がないんだよ？」

「そう言われても」

約束を破る訳にはいかないし。

「そうだ！」

由里が通信端末を取り出した。誰かと連絡するみたいだけど。

「あっ、遊星さん」

「遊星？」

今の声はオレじゃなくてアキ。オレも声を出しそうになったけど。意地でも今日から参加させたいみたいだね。

『由里か。今はアカデミアにいる時間だろう？。どうかしたか？』

「実はですね、今日から新入生歓迎会ライブの練習が始まるんです。それにリヨウ君の力が必要で」

『そうか。今日は走り込みの予定だったが、仕方ないな』

遊星ならそう言うだろうね。

『また録らせて貰おうか。リヨウ、がんばれよ』

「うん。よろしくね、遊星」

「代わりに、アキちゃんが遊びに行くらしいので」

『そうか。解った』

「え　ええっ!?!」

悪乗りやっちゃったね。

『じゃあな』

「ま、待って、遊星!」

言葉虚しく、通信は途絶えた。

「良かったね、アキちゃん。遊星さん、待っててくれるみたいで」

「由里！」

アキが激しく言い募るけど、由里は適当にあしらっただけ。

「ああなったら、すぐに折れた方が身の為だぜ」

「苦勞してそうだね、啓斗」

啓斗の苦勞はオレより上かもしれないね。

「と、ところでね。今日は転校生が来るって知ってる？」

アリスが慌てた様子で別の話題に変える。

「いや、知らない。そうなんだ」

「高等部じゃないよ。母さんが言ったことだから、初等部じゃないかな」

「そっか。あ、そろそろ時間だよ。行こうか？」

「うん」

始業式が行われるホールに向かう。整列して待っていると、教頭先生のマイク音が聞こえてきた。

『これより、始業式を始めるのであります。』

が、その前に、今年度から我がデュエルアカデミアネオドミノ校に転入して来た、新しい学友を紹介するのであります。』

アリスの言うことは正しいみたいだね。誰なんだろう？
人影が校長先生と同時に見えてきた。二人の小さな人影。

「あっ！」

懐かしい影。オレとアリスはあの子たちを知ってる。

「リョウ」

「うん。まさか、こんな形で再会するとは思ってなかったね」

アリスも驚いてる。だけど、喜びが表情に滲み出てる。

『それでは、紹介するのじゃ。転入生の、トレイン君と、レナちゃんじゃ』

side 龍可

始業式が終わって、教室で先生を待ってる。今年も私たちの担任は、アリスお姉ちゃんのお母さん、マリア先生。

そして、私たちのクラスに今日転入生が来た。上手く話できるかな？

プルルルル

「龍可、通信鳴ってるよ」

「あっ、うん」

龍亜から指摘を受けて、通信端末を取り出す。アリスお姉ちゃんか
ら？

『あつ、龍可？』

「うん。どうしたの、アリスお姉ちゃん？」

『龍亜もいる？』

「いるよ、リヨウ」

通信してるのはアリスお姉ちゃんとリヨウみたいね。

『今日転入生が二人のクラスに来たよね？』

「うん」

『その二人、オレたちの知り合いなんだ。気にかけるまでもないか
もしれないけど、いろいろとお願いして良い？』

「うん。そんなことなら」

「ねえねえ！その二人ってデュエル強い？」

龍亜はデュエルばかりね。

『強いと思うよ』

「よっっし！早速デュエルだ！」

「もう」

『とりあえず、ホームルームが終わったなら、校門まで連れて来てくれないかな？ 私たち、待ってるから』

「うん。解ったわ」

『じゃあ、お願いね』

通信が途絶えた。

「アリスお姉ちゃんとリヨウの知り合いだったんだ」

「そうね」

少し時間が過ぎて、先生が入って来た。転入生も一緒にいる。男の子は金髪で、女の子はピンク。私たち程似てない。

「みんなも知ってるの通り、今日転入して来た双子の子です。じゃあ、自己紹介を」

「トレインです。皆さん、よろしくお願いします」

「レナです」

「この二人は、ご両親のお仕事の都合でネオドミノシティに引っ越して来ました。みんな、仲良くしてあげてね」

『ハ〜イ!』

二人が席に座る。マリア先生の簡単な話があつて、ホームルームが
終わる。

早速近寄ってみる。と、思ったんだけど。

「ねえねえ!」

龍亜。

「何ですか?」

「オレ、龍亜っていうんだ。よろしく!」

「うん。よろしく」

「じゃあ、早速デュエルを」

「待ってよ、龍亜」

「何だよ、龍可。良いじゃん、デュエルくらい」

「クラスは一緒なのよ。デュエルはいつでもできるから」

「チエツ」

「私は龍可。私たちが双子なの。よろしくね」

「うん。よろしく」

「どうしたの?話しかけてきて」

「慣れないことも多いんじゃないかと思って」

「わざわざゴメンね。でも私たち、転校に慣れてるから。あんまり気にしないで」

「そ、そう?」

リヨウとアリスお姉ちゃんの知り合いだから、どんな人かと思ってたけど　もう少し明るいのかと。

「レナ。そんな言い方しなくても」

「良いよ、別に」

「何か、イメージ違うなあ」

私も　。でも、

「あの、二人に会いたがってる人がいるの。校門まで連れて来て欲しいって言われたから、一緒に行かない?」

「解りました。ほら、レナ」

「解ったよ」

とりあえず、付いて来てくれそうね。

私たちは一緒に校門まで行く。校門にはいろいろ人がいる。リヨウとアリスお姉ちゃんは　いた。

「あの二人よ」

「誰が あっ！」

みるみるうちに表情が明るくなっていく。二人は笑ってる。

「アリスお姉ちゃん！リョウお兄ちゃん！」

レナさんが二人に飛び込んでいく。

「久しぶりだね、レナ」

「うん！アリスお姉ちゃん、久しぶり！」

「トレインも久しぶり」

「お久しぶりです、リョウさん」

本当に知り合いみたいね。ここにいると邪魔になるかな。

「私たちはもう行くね」

「わざわざありがとね、龍可、龍亜」

「ううん。また明日ね」

「はい。明日からよろしくお願いします」

「え〜！デュエルは！？」

「また今度よ！いつでもできるでしょー！」

「僕でよければ、お相手しますよ」

「じゃあ、明日ね！約束だぞ！」

「解りました。では、明日」

私と龍亜は四人を見送りながら帰った。

side out

オレとアリスは、夏休みに偶然出会ったトレインとレナに再会した。レナはアリスに抱き着いて離れようとしなない。

「リヨウさん。本当にお久しぶりです」

「うん。まさか、転校してくるとは思ってたよ」

「それはこっちの台詞よ」。アリスお姉ちゃんとリヨウお兄ちゃんがいるとは思ってなかった」

「ふふ。そうだね」

「アハハ。ねえねえ、アリスお姉ちゃんたちはこれから暇？」

「ごめんね。遊んであげたいんだけど、今日は部活なの」

「あ そうなんだ」

レナの嬉しそうな表情が一変する。そんなところでレナに近寄って、軽く頭を撫でた。

「見に来る?」

「えッ?良いの?」

「良いよ。楽しみは後に取っておいた方が良いかもしれないけど」

「何の部活ですか?」

「軽音部だよ。一緒に行く?」

「行く!」

「トレインはどうする?」

「レナが行くのなら、僕も行きます」

「決まりだね」

オレたちは二人を連れて部室に行った。部長の江藤先輩は笑って承諾してくれた。みんなも同じ。オレに対してもだけど。気を使ってか、歓迎会という言葉を使わずに練習が始まった。レナは座って足を振りながら笑顔で聞いている。トレインは笑って眺めている。楽しんでるようだった。

昼から日が暮れるまで練習した。オレはみんなに合わせてるので必死だったんだけどね。

「さて、帰ろうか？」

「そうだね」

「僕たちはこっちですので」

トレインとレナとは方向が違うみたいだね。因みに、由里は啓斗とどこかに行ったらしい。一つ気になるのは、レナの表情が暗いこと。多分またオレたちと別れるからだろうね。

「また明日ね、レナ」

アリスが気を使って声をかける。でも、レナの表情が一層暗くなり、俯いた。

「レナ？」

「また 明日 また明日なんて」

「あっ えっと、リョウさん、アリスさん、今日はありがとう」
「さいました。」

レナ、帰ろう

「待って、トレイン」

慌てて帰ろうとするレナを遮る。アリスは静かにレナと目線を合わせるようにしゃがんだ。

「どうしたの？何か、悪かったかな？」

「嫌い」

「私たちのこと、嫌い？」

ふるふると首を振る。

「じゃあ、何が嫌い？」

「また明日」

別れ際に言う言葉。きつと、そのまた明日って言葉が嫌いなんだろうね。

「話したいこと、まだたくさんあるの。もっとずっと、一緒にいたい」

「」

「それじゃ、また明日ねって、別れて。次の日、私たち転校するの。また会えるって思っても、もう会えない。何度も、何度も」

「

「そう　なんだ。ごめんね」

今にも泣き出しそうなレナをアリスが抱きしめる。それで、この悲しみが消える訳じゃない。むしろ、離れた時にさらにその想いが募る。

「レナ、トレイン。今日、オレの家においで。泊まっていくと良い

よ

「でも リヨウさんに迷惑が」

「オレは両親と離れて暮らしてる。だから一人だよ。迷惑なんてないから」

「あ その」

「ご両親が心配するかな？オレから話をしてみても良いよ」

「アリスお姉ちゃんは？」

「私も一緒だよ。今日はリヨウの家に泊まるのかな」

「行きたい」

よっぽど、アリスと離れたくないのかな。

「僕、連絡してみます」

トレインが通信端末を取り出しして連絡する。

『はい。執事でございます』

家の執事さんなんだろうね。かなりのお金持ちの家なんだろうね、この二人。それで、ご両親が忙しくて転校ばかり。気持ちはよく解るよ。

「僕たち、リヨウさんの家にお呼ばれして、今日は帰らないかもし

れないんだ。大丈夫かな？」

『そちらにリヨウ様はおられますか？』

「オレがりヨウです」

『なるほど、貴方が。お話はよく聞いております。』

今日は厄介になるとのことですが、よろしいのでっ。』

「はい。オレに何ができるか解りませんが、この二人の悲しみを、少しでも取り除いてあげたいんです」

『そうですか。そこまで解って頂けているんですね。では、お言葉に甘えてもよろしいですか？』

「はい」

多分、この執事さんは二人のことをよく理解してる。でも、きっと手の施しようがなかったんだね。

『では、お願いいたします』

通信が切れた。

「さ、オレの家に行こうか」

「うんー」

さっきとはまた打って変わって明るいレナ。オレたちは家に向かって歩き出した。

「アリス。マリアさんに連絡は？」

「うん。今からだよ」

アリスは問題ないんだけどね。

「二人は、ここにどのくらいいられるの？」

「よく解らないんです。仕事飛び飛びなもので」

なるほどね。だからまた明日って言葉が叶わなかったりするのかな。

「ネオドミノシティは長いかも、って言ってたけど、お父さん嘘つきだから解らないの」

「ダメだよ、レナ。お父さんのことを悪く言っちゃ」

「う　　ごめんなさい」

「うん」

アリスが軽くレナの頭を撫でる。

こういうことは本人たちじゃなくて、身近にいる人に聞くのが一番かな。という訳で、

「“エンディミーネ”」

『はい。リヨウ様』

「久しぶりだね。元気に」

そこで口を塞いだ。トレインとレナが驚きの表情でオレを見る。

「あゝ　これはね？」

「リョウさん」

どうやって弁解しようかな。

「ミーネが見えるんですか？」

「えッ？」

予想が外れた。まさか、

「二人とも、見えてるの？」

「はい。カードの精霊です」

「嘘　リョウお兄ちゃん見えてるんだ」

「私も見えるよ」

「アリスお姉ちゃんも!？」

二人して驚く。オレたちも二人が見えてることに驚いてるけど。

『まあ、落ち着いてくださいませ。見えるのなら見えるで良いではありませんか』

確かに、“エンディミーネ”の言う通りか。

「とにかく、家が見えてきたから、入ろうか」

「あつ、はい」

全員が入る。すると、待ち兼ねたようにマナが姿を見せた。

『見えてるなら、遠慮しなくて良いよね?』

「うん。実体化もして良いよ。二人に隠す必要はないから」

「ハイ」

マナが実体化して現れる。すぐにキッチンに行った。

「実体化って何?」

「そのままだよ。ミーネ」

トレインがそう呼んだのを真似して呼び、軽く触れる。

「実体化は初めてですわ。ありがとうございます、リョウ様」

「ううん。トレインたちに説明してあげて」

「はい」

ミーネがトレインに近寄り、軽く触れる。トレインの表情が驚愕に

変わる。

「ふ、触れられる　！どうして　」

「リヨウの力だ」

マハードが姿を見せた。

「リヨウには精霊を実体化する力がある。普段は余り使わないがな」

「　　凄いです」

「てゆうか、リヨウお兄ちゃんにも精霊がいるんだ。アリスお姉ちゃんにも？」

「うん。リップ」

「きゃうー！」

いつものようにリップがアリスに飛び付く。

「この子かわいー」

「きゃうー」

それから、マナが作った食事を運んで来た。みんなで食べる。

「マナ、だよな？このご飯、私たちのシェフより美味しいよ」

「えっへん」

「ミーネは料理できる?」

「恐れながら」

「できないよね?」

「黙っていなさい! マナ!」

「ミーネはお姫様だからね」

「リヨウ様。 姫だからできないというのは、少し抵抗があるので
が」

「事実だ」

「」

マハードにバツサリと斬られ、黙り込んだ。

『じちそうさまでした』

「私、片付けてくるね」

「あっ、手伝うよ、マナ」

「私も」

オレたちを取り残して、片付けに行った。

「今日はありがとうございました、リヨウさん」

「何が？」

「レナのことです。転校が続いてから、あんなふうになってしまっ
て」

「別れは、やっぱり辛いからね。少し、解る気がするよ。
それに、トレインも気丈にはしているけど、辛いのは辛い筈だよ」

「はい」

「龍亜や龍可たちと仲良くしてあげてね。デュエル好きだから、気
が合つと思つよ」

「いつまで、ここにいられるか解らないのですが」

「だからって、友達になるのを避けるの？それは間違いだよ。
別れなんて、誰だっていつ訪れるか解らない。大事な今は今。未来
のことは考えたって解らないんだから」

「そう、ですね。リヨウさんの言う通りだと思います」

オレ自身が経験してるから言えること。未来なんて、誰にも解らな
い。

ブルルルル

通信。オレのだ。誰からだろ？

「はい。リヨウです」

『狭霧です』

狭霧さん？何かあったのかな？

「どうかしました？」

『ええ。実は　牛尾君が倒れたの』

「えッ!？」

牛尾さんが　倒れた？

「何があつたんですか!？」

『ゴーストのことを、知っているかしら?』

「　知ってます」

ゴースト　。

最近、ハイウェイで事故が多発してるらしい。それは、デュエルによつて起きていて、怪我人が続出してる。そのデュエルしてるDホイラーの正体が解らないから、ゴーストと呼ばれてる。

『そのゴーストを捕まえる為に、牛尾君が罠を買って出たの　』

それで、振り返ちか　。

『今、アトラス様たちがゴーストの探索に出たわ』

「オレにも、協力を依頼してるんですね？」

『民間人で、しかも学生の貴方にこんなことを頼むのは心苦しいけど』

「いえ、大丈夫です。準備して、すぐに出ます」

通信を切った。

「リヨウさん 何か」

「あつたんだね？」

トレインだけでなく、アリスたちもいた。

「うん。すぐに出なくちゃいけなくなった」

「私も！」

「アリスは、二人をお願いね」

今は、トレインとレナがいる。二人を放っていく訳にはいかない。

「先に寝てて。大丈夫、遊星たちが一緒だよ」

「でも」

「お願い。オレは行かなくちゃ」

「

納得できないみたいだけど、納得して貰わないと。

「リョウお兄ちゃん、どこ行くの？」

そう。レナは、別れを極端に嫌ってる。オレたち二人が今いなくなる訳にはいかない。オレだけでも、レナには辛い筈。

「レナ」

しゃがんで、レナの目線に合わせた。

「ちょっと、出掛けてくるね」

「

大丈夫。ちゃんと戻ってくるよ」

「でも」

「また明日、じゃなくて、また会おう？」

「？」

「オレたちは、夏休みにした約束を、ちゃんと守ったよ。だから、この約束も、ちゃんと守れる」

「本当　？」

「嘘じゃないよ？ほら」

小指を二人で結んだ。軽く上下に振る。

「指切りだよ。嘘付いたら、針千本だね」

「ちゃんと守る？」

「もちろん。だから、良い子で待っていてくれる？」

「うん」

「よし」

くしゃくしゃと頭を撫でてあげる。

「じゃあ、行ってくるね」

「うん」

「気をつけてください」

「無理したらダメだよ？」

「うん。アリスとも、約束。じゃあ」

家を飛び出した。マハードとマナがソニックの傍で待ってる。

「行くよ、マハード、マナ」

ソニックに乗って、ハイウェイに飛び出した。

第四期第一話：転校生（後書き）

ア「懐かしい感じがしたね。夏休みからだから、半年ぶりくらいかな？」

シ「そうだな」

ア「でも、あの二人があんな不安を抱えてたなんて思わなかったな

」

リ「きゃう」

」

シ「人には人の事情がある。近くににいる者が支えれば良い」

ア「そうだね。リヨウが私を支えてくれたように」

リ「きゃう！」

ア「次話は、リヨウがハイウェイに飛び出したところから始まるよ」

シ「第二話：少女」

ア「よろしくね」

リ「きゃう！」

第二話・少女（前書き）

リ「さて、第二話だね」

マハ「今回もデュエルは無しだな」

マナ「そのかわり、新キャラが登場するよ」

リ「オレが出会った得体の知れない少女」

マナ「その女の子の容姿にビックリしちゃったね」

リ「じゃあ、第二話、始まるよ」

第二話：少女

ハイウェイに飛び出したオレは、早速遊星たちに連絡を入れた。

『リヨウか。こんな夜に、どうかしたか？』

「ゴーストの探索をしてるんでしょ？」

『おいおい、まさかお前も出て来たつてのか？』

「その通りですよ、クロウさん」

『止めておけ。お前は学生だ』

『そつだ。明日もアカデミアはあるだろう』

「授業はきちんと受けるよ。それより、ゴーストの件だよ」

『オレたちに任せておけ』

「オレの十字傷が疼くんですよ。何かある、そんな気がするんです」
遊星、ジャックさん、クロウさんの表情が一様に曇る。でも、オレは譲らない。

「足手まといになるつもりはないから。三人と互角に闘えるつもりだよ」

『言っじゃねえか』

『ふん。調子に乗るなよ』

『お前の気持ちは解るが』

「清四郎さんと約束した。世界を護るってね」

『解った。気をつけるよ』

「遊星たちもね」

通信を切り、ハイウェイを駆け回る。遊星たちもそうしてる筈。

時間だけが過ぎていった。駆け回っても、ゴーストは全く姿を見せない。夜明けが近付いていた。

『来た！ゴーストだ！』

遊星からの通信。すぐに“スピードワールド2”が展開され、デュエルが始まった。

「オレも行かないと」

『待ちなさい』

「ッ!？」

突然声が聞こえた。頭に鳴り響いたと言った方が適切かもしれない。

「誰だ!？」

『通信を切つて。私は、貴方に会いに来たのよ。他の奴には来て欲しくないわ』

確かに、今の通信を繋げたまま何者か現れてデュエルが始まれば、ジャックさんかクロウさんのどっちかが駆け付けてくれるだろうね。

『私は貴方とお話したいの。争う気はないわ』

どうするかな。得体の知れない相手なのは間違いない。遊星のことも気になるし。

『不動遊星なら勝つわ。心配いらないわね』

「どうして解る？」

『私と話したければ、まずは通信を切つて欲しいわね』

十字傷は確かに疼いてる。遊星のことが心配でもある。どうする？

『切つて。不動遊星は、貴方の友。そう簡単には負けないでしょう？』

「解つたよ」

通信を切つた。

遊星は、負けないと信じよう。今はこの声が気になって仕方ない。放っておいてはいけない気がする。

「切ったよ。出て来て」

「ここよ」

目の前に人が立っている。慌ててソニックを停めた。
青い髪の毛をツインテールに結んだ小さな女の子が立っている。綺麗な髪、そして、綺麗な瞳。見たことがある。この娘は。

「アリス？」

「それは貴方の恋人の名前じゃないかしら？」

「あつ、ゴメン。似てたからつい」

でも、似てるなんてものじゃない。瓜二つとしか思えない程、よく似てる。

「私に伝えてくれてありがとう」

「名前を聞いても？」

「私は、マリリン。貴方はリョウよね？」

「そうだよ。オレに話して？」

「整った顔なのに、その傷はもつたいないわね」

何の話なんだろ？

「この十字傷は、憧れの人が付けた傷。この傷と生きていくと決め

「だから、後悔はしてないよ」

「ふうん。よくは解らないわね。でも、後悔はしていないのね。それなら良いわ。」

「なら、貴方はどうして闘うの？」

「待って。マリンはなんでそんなことを聞く？」

「いけない？だって貴方は、闘う為にここに出て来たんでしょ？」

「闘う為じゃないよ。オレは争いが好きな訳じゃない」

「それなら、どうして？」

「護る為だよ。傷付く人がいる。そんな人たちを放っておけないんだ」

「やっぱり、理解できないわね」

不意に瞳が悲しみを帯びた。

「貴方に聞けば、何か解るかもしれないと思ったのだければ」

「えっとね、人が傷付くのを、黙って見ていられないんだ」

「どうして？」

「マリンは思わないかな？何も悪くない人が傷付くんだから」

「だって、どうでもいいじゃない。所詮、一人の人間よ。」

人は一人で生きるもの。例え手を取り合っているように見えても、結局は孤独なのよ。自分が一番大事じゃない」

「どうでも良くないよ。人は孤独じゃないから」

「どうして?」

「絆がある」

「絆?」

「一緒に泣いたり笑ったりする。嬉しさはそれだけでもっと嬉しくなるし、悲しさはそれだけで少なくなる」

「嬉しい? 悲しい? それって何なの?」

「解らない? 感情っていう」

「感情?」

感情が、ない?

「リヨウ、驚いているわ。やっぱり、私が普通じゃないから?」

「そんなことない!」

「えッ?」

「驚いたのは謝るよ、ゴメンね。」

「ただ、自分が普通じゃないとか、そういうことは言っちゃダメだ」

「よ」

「どごして？」

「だって、誰が普通だって判断できるの？オレが言いたいのは、そんなふうに自分を卑下しちゃいけないってことだよ」

「 そうなのね。ふうん 」

多分、感情がないって訳じゃない。知らないことが多いんだ。

「私、もっと貴方とお話したい」

「うん。良いよ。オレで良ければ」

「良かったわ。ありがとう。」

でも、今回はここまでのようね」

「何かあった？」

「不動遊星が勝ったみたい。そろそろ貴方のところに来るかもしれないわ」

姿を見られたくないのかな ？

「私、もう行くわ。また会いに来るわ。約束、きちんと守って」

「うん。必ず」

オレに微笑んでから、フツと姿を消した。

「まるで得体の解らない少女だったな」

マハードがいる。マナもいる。

「子供の頃のアリスちゃんにそっくりだったし」

それも気になることではある。髪の色や性格は全然違うけど、容姿は本当に瓜二つだった。

「あの少女、リヨウはどう見る？」

「多分、必要な知識みたいなものが足りないんだと思う。何かと聞いてくるみたいだったしね」

「敵か、味方か」

「それも、解らないよ。でも、放っておけない瞳だった。アリスと同じだね」

「あゝあ、リヨウの悪い癖が出ちゃった」

「それでいて、リヨウということだ」

「そうですね」

ブルルルル

通信。遊星からのだ。

「ゴメン、遊星。ちょっとトラブった」

『大丈夫なのか？』

「うん。大丈夫。遊星も大丈夫みたいだね。すぐ向かうよ」

『ああ』

ソニックを急いで走らせた。すぐに遊星たちのところに着いた。

「何のトラブルだったというのだ!？」

「せっかく出て来た意味がねえじゃねえか!」

出て来た意味はあったと思ってる。オレは出会ったあの少女、マリオンについて簡単に話した。

「不思議だな」

「不自然だろ。いきなり現れたり、消えたりするんだろ?」

「しかも、オレたちのことを知っていた。それはどういうことだ?」

「解らないことばかりなので、オレには何とも」

「考えても仕方ない。リョウ、オレのデュエルについても聞いてくれ」

遊星がデュエルについて話してくれた。

遊星がデュエルしたのは、ロボットだったらしい。しかも、そのロボットが使ったカードは、見たこともない巨大ロボットだったらしい。

その巨大ロボットは、“機皇帝ワイゼル”。“機皇帝”は5体のモンスターからなる合体ロボットで、恐ろしい能力が備わってる。

シンクロモンスターを吸収する。

言わば、シンクロキラーの力。それで、“スターダスト”を吸収された遊星は苦戦を強いられた。赤き龍の力を借りてなんとか勝てたらしい。

「シンクロキラー　か。厄介だね」

「ふん！なんであろうと関係ない！叩き潰すだけだ！」

確かに、ジャックさんの言う通りだ。自分の信頼する仲間たちなら、そんな力を恐れる必要はない。

「とにかく、ゴーストには気をつけるべきだ。いつまた現れるとも限らない」

「ゴーストなら、遊星が倒したじゃねえか」

「いや。ゴーストが使っていたカードが全てなかったんだ。まだ、“機皇帝”は死んでいない」

また襲ってくる可能性があるってことだね。

「とにかく、気をつけよう。それしかできない」

それで、解散になった。オレは家に急いで帰った。

「キャハハ。プラシドの奴、あんな奴に負けてやんの」

「黙れ、ルチアーノ」

「だから言ったのだ。まだシグナーには手を出すなと」

「ふん！」

「ただいま」

「あつ、マリんじゃない。何やってたんだよ？」

「別に。何でも良いでしょう」

「チエツ。つまんねえの」

「余り勝手な行動はするな。お前は欠陥しているものが多い」

「煩いわよ。勝手な行動なら私よりプラシドの方が多いんだから、気にしないで」

「マリリン、余計な世話だ」

「スピリットシグナーのリヨウに興味があるようだが、おかしなマネはするな」

「だから、私よりプラシドに言うのが先なのよ。プラシドは不動遊星にデュエルを仕掛けたのよ?」

「それで負けたんだよね」

「黙れ」

「でも、ホント興味あるよね、シグナーの連中」

「まだ早い。時が熟すのを待て。全ては未来を変える為に」

side アリス

私は、朝に目を覚ました。

昨日、リヨウが出て行った後、起きて待っているつもりだった。でもレナとトレインがいた。二人は私が寝るまで起きているつもりだった。リヨウに二人のことを任せられた以上、静かに眠った。

起き出すと、ベットで隣で寝ているとレナの姿がある。下には布団を敷いていたトレインも寝ている。さらに奥に、壁にもたれ掛かって寝ているリヨウの姿があった。

「帰って来てたんだ」

ホッとしたように声を出した気がする。
今日の朝ごはんは私が作る。もう少し寝させていたい。リョウにそっと毛布をかけて、キッチンに向かった。

暫くして、起きてきたトレインが声をかけてきた。

「おはようございます。アリスさん」

「おはよう、トレイン。今、朝ごはんができたんだ。リョウとレナを起こそうか？」

「はい。解りました」

トレインと二人で寝室に入った。リョウとレナはまだ寝てる。

「起きて、リョウ、レナ。朝だよ」

「うー あさあ ？」

レナはまだ寝ぼけてる。

「ふわあ おはよう、アリス、トレイン」

大きな欠伸をしてリョウが起きた。

「二人とも、朝ごはんできてるから顔洗ってきて」

「うん。ありがとう、アリス」

「はあ〜い」

二人が出て行つてから、トレインと朝ごはんの用意を終わらせる。二人が来てから、朝ごはんを食べた。

それからアカデミアに行く準備をして、四人でアカデミアに向かう。

「アカデミアか〜」

「楽しくない？」

「まだ解らないけど、あんまり長くいられないかもしれないし」

「だったら、楽しまないと損だよ、レナ。たくさん友達作つて、また会う日を楽しみにしてれば良いんだよ」

「リョウお兄ちゃん」

「そうだね。リョウの言う通りじゃないかな？ね、トレイン？」

「はい。そうですね」

「うん。解つた」

「そうと決まれば、友達作らないとね。龍亜や龍可と話してみると良いよ」

「うん〜！」

校門が見えたところで、二人と別れた。私とリョウは自分の教室へ向かう。

「昨日は、どうだったの？」

「遊星がゴーストを倒したよ。一応はね」

「一応？」

「ゴーストが使ってたカードが全部なかったんだって。まだ事件は終わってないっていうのが、オレたちの意見だよ」

「気をつけないといけないんだね」

「うん。ゴーストが使ったっていうカード、“機皇帝”には特に」

「特殊なカードなの？」

「うん。シンクロモンスターを吸収する力があるんだって。“スターダスト”も、一度吸収されたって聞いたよ」

「シンクロモンスターを」

私たちにとっては辛い効果。シンが吸収されるってことになる。

「それから」

「どうしたの？」

リョウは明らかに困った顔をしてる。きっと、私に言い辛いことがあるんだね。

「実は　アリスにとてもよく似た女の子に会ったんだ。髪が青いだけで、他は子供の頃のアリスにそっくりだったよ」

私によく似た女の子　。

「その子が、どうしたの？」

「多分、不思議な力を持つてる。上手く言えないけど、間違いなくそして、知らないことが多いみたいだった。そんな自分を、卑下してた」

リヨウが何を言いたいのか、だいたい解った。軽く微笑んだ。

「リヨウらしく、すれば良いんじゃないかな？」

「ありがとう、アリス」

リヨウも軽く笑う。二人で笑い合った。

s i d e o u t

第二話：少女（後書き）

ア「リヨウが出会った女の子は私にそっくりなんだね」

シ「解る者には解るだろう」

リ「きゃうっ？」

シ「解らんなら解らんで良い」

ア「リヨウに随分関心があるみたいだけど」

シ「今後に注目だな」

ア「次話はアカデミアでのお話だよ」

シ「第三話：歓迎」

ア「よろしくね」

リ「きゃうっ……」

第三話・歓迎（前書き）

ト「僕たちが転校して二日目のアカデミアの話です」

ミ「第四期最初のデュエルもありますわ」

ト「伝説のモンスターが光臨します」

ミ「さあ、第四期第三話に参りますわ」

ト「そうだね。では、よろしくお願いします」

第三話：歓迎

side レナ

アリスお姉ちゃんとリョウお兄ちゃんと別れてから、私たちは教室に入った。

「あ〜っ！トレイン！オレとデュエルしよ！」

確か、龍亜君だっけ？

「もう、少しは落ち着いてよ、龍亜」

こっちは、龍可ちゃんよね。

「おはようございます、龍亜君、龍可さん」

「おはよう」

「堅いなあ。龍亜で良いよ。同い年なんだしさ」

「私も、龍可で良いよ」

「あの」

「なに？」

「昨日は冷たくして、ごめんなさい」

許して くれるかな？

「良いよ、別に」

「そうよ。転校初日だから緊張しても仕方ないし」

「あ ありがとう」

緊張してた訳じゃないけど、許してくれたみたい。

「さ、デュエルデュエル！」

「待ちなさい。もうホームルームよ」

「そうね。龍可ちゃんの言う通りかしら」

「ゲッ！マリア先生！」

この人、アリスお姉ちゃんのお母さんだって言ってたね。

私たちはみんな席に座った。

「さあ、朝のホームルームを始めましょう」

「その必要はないのであります」

また誰が入って来た。おかしな口調が特徴の、教頭先生ね。

「それはどういう意味でしょうか、教頭先生？」

「ムツフツフ。我がデュエルアカデミアネオドミノ校において、最低の成績を誇るこのクラスを、退学させることに決めたのでありますよ！」

このクラス　最低の成績だったんだ　。　っていうか、私たち転校して二日目なんだけど　。

「そんなの認められません！校長先生の許可は　」

「取つてあるのでありますよ。あののんびり屋の校長も、やっと私の教育方針を理解したようですな」

「そんな　」

隣に座ってるトレインを見ると、ミーネが顔を出した。

『大丈夫だと思いますよ？』

ミーネが言うことに首を傾げると、教室の扉が開いた。

「失礼します」

リヨウお兄ちゃんが入って来た。アリスお姉ちゃんも、他にも数人いる。

「おや？高等部トップクラスのリヨウ君、ルシエさんに、武内さんに、十六夜さんではないですか。他一名もでありますね」

「俺のことはどうでもいいが、この処置はあんまりじゃねえのか、教頭？」

「口を慎むであります、石井君」

「我が儘勝手に退学処分しようなんて阿呆に、何で慎む必要があんだよ？」

「啓斗」

「止めんな、リョウ。この件は度を超してんだろ。遠慮なんかいらねえぜ」

「気持ちは解るけど、もう少し落ち着いて」

「おや？リョウ君、貴方のような優等生は、私の教育を理解してくれると思っていましたか？」

「理解できませんよ。このアカデミアに通ってる以上、みんな等しく学ぶ権利がある筈です。違いますか？」

「このネオドミノ校は、地方のアカデミアの模範にならない。貴方のような優秀な生徒を多く育成することが、我がネオドミノ校に課せられた義務なのでありますよ」

「その為に、生徒を切り捨てるなんて納得できません」

「君に納得して貰わなくても構いません。もう退学は決定しているのであります」

「なら、オレとデュエルしてください。その退学処分を賭けて」

「リヨウ君とのデュエルは非常に魅力的ではありますが、そんな危険な賭けはできませんね。何せ貴方は、このネオドミノシティ最強とも言えるのでありますから。」

「そうですねえ。このクラスの誰かが、というのなら、構わないでありますよ?」

「教頭先生ともあるうお方が、ただの一生徒に負けるのを恐れるんですか?」

「何と!君がそのような口を利くとは思わなかったのであります」

「見捨てることができないんですよ、オレは」

「リヨウお兄ちゃんはそういう人だってことは、何となく解ってた。私たちのこともそうだったから。」

「まあ、良いのであります。ただし、君ではなく、このクラスの誰かということにしましょう」

「なら、私がする」

私は手を挙げた。

別に、このアカデミアにそれ程関心がある訳じゃない。だって、いつまた転校するかも解らないし。

それでも、リヨウお兄ちゃんにアリスお姉ちゃんがこのアカデミアに通ってる。なら、私も通いたい。

「ほほう。転校生は良い度胸でありますねえ。」

「良いでしょう。貴女とのデュエルに私が勝てば、このクラスは解散。貴女が勝てば、この件はなかったことにしましょう」

「それと、もう私たちのクラスに口を出さないでね」

「良いでしょう。デュエルなおります！」

「ちよつ、ちよつと待って！大丈夫なの！？」

「めんどくさいから、トレイン、説得お願い」

「解ったよ。がんばって」

「うん！」

私はデュエルの準備を始めた。

「ホントに大丈夫なのかよ！」

「このデュエルに負けたら、私たち退学なのよ！？」

「レナは強いです。それに、ああなったら驚く程頑固なので、何を言っても聞いてくれないと思いますよ」

「ま、デュエルは始まっちゃっし、あいつを信じるしかないな」

「そうだね。レナを信じよう」

「うん。レナには、私があげたカードがあるし、大丈夫だよ」

デュエルステージで、私は教頭先生と対峙してる。

「ムッフッフ。転校生とはいえ、手加減はしないのであります！」

「はいはい。さっさと始めようよ。時間がもつたいないし」

「生意気なのであります！」

この先生のごときは、はっきり言ってどうでも良い。さっさと終わらせて、早くアリスお姉ちゃんやリョウお兄ちゃんと遊べないかな。

『デュエル！』

「私の先攻なのであります！ “古代の機械石像” を召喚なのであります！」

ATK / 500

「さらに、魔法カード “機械複製術” を発動！場の攻撃力500以下のモンスター1体をデッキから可能な限り特殊召喚するのであります！つまり2体の “古代の機械石像” を特殊召喚するのであります！」

ATK / 500

「ムッフッフ。我がデュエルアカデミアにおける伝統を、見せてあげるのです！」

アカデミアの伝統ね。

「3体の“古代の機械石像”の効果発動！この3体をリリース、手札から“古代の機械巨人”を、特殊召喚するのであります！」

ATK/3000

場に巨大な機械ロボットが現れた。しかも攻撃力3000。

「無理だよ。1ターン目から攻撃力3000のモンスターが3体なんて」

「もう諦めるの？」

「だって」

「それに、まだレナ自身が諦めてない」

「さあ、貴女のターンなのであります」

「私のターン！」

手札を確認する。この手札なら、

「教頭先生。次のターンがあると良いね」

「何を言っているのですか？むしろ、それは私の台詞なのであります！」

手札が良いもん。きつと、アリスお姉ちゃんに貰ったカードだし、早く会いたいのかな。

「私は、永続魔法“未来融合 フューチャー・フュージョン”を發動！融合素材モンスターをデッキから墓地に送って、融合モンスターを私の2回目のスタンバイフェイズに特殊召喚する！」

私は“F・G・D”を選択するよ！ドラゴン族モンスターを5体、私のデッキから墓地に。“ミンゲイドラゴン”2体と、“伝説の白石”3体を墓地に送るよ！」

さあ、私の手においで。

「“伝説の白石”の効果発動！墓地に送られた時、デッキから“青眼の白龍”を手札に加えるよ！」

墓地に送った“伝説の白石”は3体だから、手札に3体の“青眼の白龍”がくる。

「“青眼の白龍”！？何故貴女が持っているのですか！？」

「このカードはアリスお姉ちゃんに貰った絆のカード！このカードで、教頭先生を倒すよ！」

「とんでもないカードをあげてたんだね、アリス」

「ミーネと同じだよ。あの子達がレナのところに行きたがってたから」

「だが、“青眼の白龍”は長重モンスターだぜ。そんな簡単に召喚できるのか？」

「それは、レナのタクティクス次第じゃないかな。私は心配してないよ」

「アリスちゃんがそう言うなら、間違いないのかな」

さあ、アリスお姉ちゃんも見てる。いくよ！

「魔法カード“融合”！手札の“青眼の白龍”3体を融合！来て！究極の龍！“青眼の究極龍”！」

ATK / 4500

「青眼の究極龍」！？バカな！？そんなバカな　　！？」

「まだよ。永続魔法“一族の結束”を発動！墓地のモンスターが一つの種族しか存在しない場合、その種族のモンスターの攻撃力は800ポイントアップする！」

ATK / 5300

「バトルよ！“青眼の究極龍”で、“古代の機械巨人”を攻撃！アルティメット・バースト！」

「ぬわあああっ！」

ハイトマン LP 1700

「さてと。ごめんなさいね、アカデミアの伝説っていうのを消し飛ばしちゃって」

「ぬぐぐ」

でも、私の攻撃はまだ終わってない。

「先生、私が言ったこと覚えてる？」

「？」

「次のターンがあると良いね？」

「良い気になるのは早いのであります！まだ私のライフは残っているのであります！」

「その残ってるライフを、全部飛ばしてあげるよ。アカデミアの伝説と一緒にね」

「何を言ってる」

「速効魔法“融合解除”！“青眼の究極龍”を融合を解く！」

さあ、アリスお姉ちゃんとご対面だよ！

「3体の“青眼の白龍”を特殊召喚！」

ATK / 3800

力強く咆哮する3体の“青眼の白龍”。

「終わりよ。3体の“青眼の白龍”で攻撃！まずは、1体目！」

「ぬわあああっ！」

ハイトマン LP 900

「2体目！」

「ぬわあああっ！」

ハイトマン LP 100

「最後よ。3体目の攻撃！滅びのバースト・ストリーム！」

「ぬぎゃああああっ！」

ハイトマン L P O

「私の勝ちね」

「やったあ！凄いよ、レナ！」

龍亜が一番に飛び出して来た。アリスお姉ちゃんたちも後ろにいる。

「じゃ、教頭先生。約束守ってね」

「うぐぐ」

「やったね、レナ」

「うん！私、偉い？」

「うん。偉い偉い」

「えへへ」

アリスお姉ちゃんに頭を撫でて貰った。

side out

デュエルはレナが勝った。これで問題解決 っ て訳じゃない。

「ハイトマン教頭先生」

「ぬぐぐ」

「感じて貰えましたか？可能性を」

「可能性」

「可能性なんて、みんなが持っている筈です。その可能性を、先生が伸ばしているんじゃないんですか？」

「私は、とんでもない勘違いをしていたと？」

「勘違いは、きっと直せます。遅くはありません。あの子たちのごと、よろしくお願いしますね、ハイトマン教頭先生」

オレは教頭先生から離れ、笑いあってるみんなのところに行った。

「痛い痛い！頭突かないで！」

思わず言葉を失った。レナの周りを精霊が飛び回ってる。精霊は、小さな“青眼の白龍”。リップより小さい、燕くらいのサイズ。

「これは、どういう状況なの？」

「えっと、あの子たち突然現れたの」

『まだ子供だ』

シンが姿を見せてる。リップはアリスにくつついてる。

「子供ってことは、シンくらいの大きさまで成長するってこと？」

『そうなるな』

どうなるんだろ　　？あんまり想像したくもないけど。

「あつ！リヨウお兄ちゃん！何とかして〜！」

「精霊を仕付けるのも大事だよ、レナ」

「え〜っ!？」

それから暫くして、オレたちはまた集まった。みんながいるところで精霊の話はしにくいからね。オレにアリス、啓斗に由里、そしてトレインとレナがいる。

「んで？集まって何なんだ？まあ、そいつらのことだろうけどよ」

「まあまあ。落ち着いて、啓斗君。別に良いじゃない」

「この子たちは精霊が見えるし、精霊もいる。放っておけないだけだよ」

「ああ、解ってんだよ、そんなことは」

呆れた声を出す啓斗。はは、ごめんね。

「あの、リヨウさんから聞いたんですが、僕たちの精霊に話がある

「んですよね？」

「まあ、二人にもただけだね。ミーネ」

「はい」

実体化したミーネが現れる。ついでマハードが現れた。

「私は興味深い話を聞いた。二人とも、持っている特殊なカードを見せてくれないか？」

「このカードですか？僕は、ミーネが使うにはまだ早いと止められているのですが」

カードはシンクロのカード。

「なるほど。このカードはまだ使うには早いかな」

「ああ。残念ながら、まだ早い」

「解りました」

「ただし、どうしても勝たなくちゃいけなくなった時、そのカードを使って良いよ」

「？」

解らない、という顔をするトレインに、軽く笑って言葉を足した。

「トレインが護るべきものを護る為に使うのなら、構わないよ」

「はい」

オレはレナに顔を向けた。

「私のカードもだよ。けど、このカードが何なのか解らないんだけど」

レナが差し出したカードを見ると、みんなが一緒の反応を示した。

「何、このカード？」

まず、カードの枠の色が違う。今まで見たことがない。それと、もう一つ。

「テキストが読めない」

そう。ただし、オレとマハードは違う。このテキストは精霊語で書かれてるんだ。

「マハード」

「読んだことはまだ口にしないで欲しいだそう。この“青眼”がな」

気が付けば、“青眼”が3体飛んでる。

「そうだね。レナ、このカードもトレインと一緒に使つにはまだ早いよ」

「でも、どうせ私このカードの効果解んないよ？」

「大丈夫。それは心配ないそうだよ」

「どうして？」

「それは、この子たちに聞くと良いよ」

「うん」

レナが何かを考えて、3体の“青眼”にそれぞれリボンを付け始めた。それぞれ色が違う。

「赤がラン。青がミキ。緑がスウ。これでよし！」

「見分けを付けたんだね。そして名前も」

「うん。これからよろしくね」

これで、ひとまずは終わりにした。

それから数日後、入学式が行われた。新生が元気に入学してきて、歓迎セレモニーが行われる。そんな訳で、

「また、あのステージに立つことになるとはね」

「にはは。別に良いじゃない」

「良いよ。もう諦めてるんだから」

「えっと」

「アリス。気にしないで。次は」

「次もよろしくね、リヨウ君」

ガツクリと肩を落とした。

今はステージ裏。そう、今日は歓迎会ライブ。オレも準備してる。遊星たちも見に来てる。既に撮る準備を終えて待ってるんだろうね。初回程の緊張はなく、のんびりと構えてるのは良い。オレが出ることはもう諦めてる。

止めよう。何だかんだで、楽しいことに変わりはない。楽しまなきゃ損だ。

みんなでステージに出た。

『皆さん。歓迎会ライブにようこそ！』

部長の江藤先輩がマイク越しに話します。そして、1曲目が始まる。

『星が空へと変わる瞬間　鳥が羽ばたく意味を知った』

歓迎会ライブは、学園祭ライブ程大掛かりじゃない。単純に時間がそんなに取れないからね。

だから、MCなんかも入らない。ノンストップで最後まで一気にいく。

「最後の曲です！ LOVE ME NOW！」

『LOVE ME NOW 走り出すよ恋のジェットコースター』

~~~~~

『LOVE ME NOW HOLD ME TIGHT TOU  
CH ME HEART NON STOP LOVE』

ワアアアアア!

「せ〜の」

『ありがとうございます!』

会場の盛り上がりが納まらない中、江藤先輩が最後に話しだした。

「新入生の皆さん!これからの学園生活、どうかよろしくお願いします!」

これでオレたちは退場した。因みにライブの曲は、

1・UNCHAIN WORLD

2・プラチナLover's Day

3・POP MASTER

4・Tiny Rainbow

5・DRAGONIA

6・バンビーノ・バンビーナ

7・SCARLET KNIGHT

8・super special smiling shy girl

rl

9・天空のカナリア

10・LOVE ME NOW  
でした。

「あゝ、楽しかった」

「そうだね。リョウ、ありがとう」

「どういたしまして」

「次もよろしくね」

何を言っても無駄なんだろうね。 。 今年の学園祭も忙しいのかなあ。

### 第三話：歓迎（後書き）

レ「私のデュエル、どうだったかな？」

ア「良かったよ。1ターンキルだったし」

レ「手札が良かったからね」

ア「あのコンボ、誰でも一度はしてみたいよね」

レ「ライブ楽しかったよ、アリスお姉ちゃん！」

ア「ふふ。良かった」

レ「次のお話は何になるのかな？」

ア「第四期最初のライディングデュエルになる予定だよ」

レ「じゃ、第四話：憎悪！よろしくね」

#### 第四話：憎悪（前書き）

リ「今回は第四期初のライディングデュエルだよ」

マナ「しかも、タッグデュエル！」

マハ「今回からイリアステルが絡んでくる」

リ「でも、憎しみに捕われちゃいけない。どんな時でも、自分を見失っちゃいけないんだ」

マナ「憎しみは憎しみしか生み出さない。そうだよね？」

リ「うん」

マハ「皆が皆、リヨウのように生きられれば良いのだがな」

マナ「じゃ、第四話だよ！」



## 第四話：憎悪

不審な通信が、突然オレの通信端末に入った。

『不動遊星が拉致された。急ぎ、一人で助けに向かえ』

引っ掛かることはいくらでもある。遊星が拉致されたっていつもの本当か解らないし、そもそもどこに行けば良いか解らない。第一、一人でというのが怪しい。

それでも、聞いた瞬間は一人で行く気になった。瞬間はね。

聞いた時、隣にアリスがいた。デート中だったんだよ。

どうしようか迷う前に、アリスの顔が語っていた。自分も行くと。

ただ、オレはすぐにDホイールの準備ができる。マハードが常に準備してるから。でも、アリスには無理だ。

一人で行こうとした。でも、アリスが譲る筈もなく、結局

「しっかり捕まっててね、アリス」

「うん。大丈夫」

二人乗りしてるんだよね。別に交通違反じゃないし、ソニックには二人を乗せて走る馬力は十分ある。それでも、危険なことに変わりはない。にもかかわらず、ハイウェイに飛び出した。

『あの情報、眉唾物だと私は思うが』

「オレもだよ、マハード」

『それでも、リヨウは行くからリヨウらしいよね』

『畏には私たちが警戒する。二人は遊星殿を』

「うん。マハード、マナ、シンは周囲の警戒を頼むよ」

とりあえず、畏でもマハードたちが対応してくれる筈。オレたちは安心して遊星を捜せる。実際、遊星と連絡が付かないしね。

「アキたちにも同じような連絡があったみたいだよ。ジャックさんやクロウさんもハイウェイを回ってるって」

「うん。解った」

アリスにはみんなと連絡をとって貰ってた。とりあえず、遊星を捜してるのはみんな一緒らしい。

「でも、あの遊星が拉致されるっていうのがピンとこないんだよね」

「うん。油断なんかなさそうなのに」

それに、遊星は何もしなくてもかなり強い。昔暴れていたからだ、って言われたけど。

ピー

オレの通信端末にまた連絡が入った。知らない人から。迷わず、出た。

「誰ですか？」

『不動遊星は、ウエストバリー地区にいる』

ツ―

オレからの問には一切答えずに、用件だけ言ってすぐに切れた。

「どうする？」

「行こう」

アリスの問に即答して、ソニックを飛ばした。  
急いでその場所に向かうと、“ローズ・テンタクルス”がトラックに攻撃していた。

「あれは」

「アキ！」

アリスが声を出した時には、アキが車からトラックに跳び移ってる  
ところだった。車に素早く近寄ると、狭霧さんが運転していた。

「リヨウ！アリスさん！」

「美影さん。遊星とアキはオレたちが何とかしますので、後続車を  
止めてくれませんか？オレに考えがあります」

「解ったわ。任せて良いのね？」

「はい」

美影さんがすぐに後ろに下がっていった。これで後続車が来ることはない。

「リヨウ！アキが！」

見てみると、アキがトラックの縁に捕まって振り回されていた。危ないね。

「マハード！」

マハードが実体化して飛び出す。トラックの中にアキを連れて入っていった。

「大丈夫かな？」

「マハードに任せだから、まず安心だと思うよ。遊星も中にいる筈だし」

問題はここから。どうやって脱出するかだね。考えていると、マハードが戻って来た。既に実体化は解いている。

『Dホイールで飛び降りるそうだ。離れていて欲しいと』

聞いて、すぐに下がった。遊星がアキを乗せて飛び降りて来た。

「遊星！」

「リョウ、済まない。助かった」

「ううん。大丈夫そうだね」

「リョウ！後ろ！」

アリスに声をかけられ、後ろを注意した。Dホイールが2台、迫って来てる。

「美影さんが止めてくれてた筈だけど」

「強引に出て来たのかな？」

ギリギリまで迫って来ると、勝手に“スピードワールド2”が展開した。

「何で？」

「新手か？」

「デュエルだ。断ることは許されない」

「停まれば、貴様のDホイールが爆破する」

「何!?!」

遊星を指差して言った。遊星のDホイールに細工でもしたんだろうね。

「タッグデュエル」

2台が先に走っていった。

「どっするっ？」

「付き合ってくれるか？」

遊星はやる気だね。

「良いよ。付き合っ」

「ありがとう。アキ、しっかり捕まっている！」

「アリスもね！」

ソニックを飛ばして、前の2台に迫った。

「デュエル！」

「私のターン」

相手の先攻。ライディングデュエルでのタッグデュエルは初めてだが、気は抜けない。

「“聖騎士の槍持ち”を守備表示で召喚」

DEF/400

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

「リヨウ！オレからいかせてくれ！」

「うん。良いよ。任せる」

「いくぞ！オレのターン！」

SP 1

「“スピード・ウォリアー”を召喚！」

ATK/900

「“スピード・ウォリアー”は召喚ターン、攻撃力が2倍になる！」

ATK/1800

「いけ！“スピード・ウォリアー”！ソニック・エッジ！」

「罠カード発動。“フローラル・シールド”！相手モンスターの攻撃を無効にし、カードを1枚ドロウする」

「カードを3枚伏せ、ターンエンド」

このターンの攻防は一進一退。

「不気味だね」

「リヨウ？」

「遊星も何か感じてる。だから、カードを多めに伏せた」

ブラフかもしれないけど、牽制にはなる。

「私のターン」

S P 2

もう一人はどうくる？

「私は“不死武士”を召喚」

ATK / 1200

「バトル。“不死武士”で“スピード・ウォリアー”を攻撃」

「畏カード“くず鉄のかかし”を発動！相手モンスターの攻撃を無効にする！」

遊星も防いだ。

「私はカードを1枚伏せ、ターン終了」

「オレのターン！」

S P 3

「手札を1枚墓地に送り、“THE トリック”を特殊召喚！」

ATK / 2000



「バトル！ “THE トリック” で “不死武士” を攻撃！」

「畏カード “攻撃の無力化”。攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる」

防がれたか。

「 “スピード・ウォリアー” を守備表示に変更」

DEF / 400

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン」

SP 4

「 “SP スピード・フュージョン” を発動！SPカウンターが4つ以上あることにより、場の “聖騎士の槍持ち” と手札の “花騎士団の駿馬” を融合！

いでよ！ “ケンタウルミナ” ！」

ATK / 2200

「さらに、 “フルール・シンクロン” を召喚！」

ATK / 400

チューナーモンスター か。

「遊星、リヨウ！くるわ！」

「うん。遊星、気をつけて」

「ああ」

どんなモンスターかな。

「レベル6の“ケンタウルミナ”に、レベル2の“フルール・シンクロン”をチューニング！」

光速より生まれし肉体よ、革命の時は来たれり。勝利を我が手に！シンクロ召喚！煌めけ！“フルール・ド・シュヴァリエ”！」

ATK/2700

「フルール・シンクロン”がシンクロ召喚に成功した時、手札からレベル2以下のモンスターを特殊召喚できる。“見習い騎士”を召喚」

ATK/1000

くるか。

「バトル！“フルール・ド・シュヴァリエ”で“THE トリック”を攻撃！」

「畏発動！“くず鉄のかかし”！」

「それを待っていた！“フルール・ド・シュヴァリエ”の効果発動！1ターンに一度、畏カードの発動を無効にし、そのカードを破壊す

る！」

攻撃は無効にできない。通る。

「くっっ！」

遊星&リョウ LP 3300

「さらに、“不死武士”で“スピード・ウォリアー”を攻撃！」

「くっ」

これでオレたちの場にモンスターがいなくなった。

「だが、これで奴のエースモンスターの特性がよく解ったぞ！」

「まだモンスターが残っている」

「それは問題ないよ。

畏カード“奇跡の残照”！戦闘で破壊された“THE トリック”を特殊召喚する！」

ATK/2000

「ふふふ」

前を走る相手の一人が停まった。もう一人も停まる。遊星とオレもつられて停まった。

「爆発は!?!」

「ブラフか」

「だろうね。そうだと思ったよ。」

「気付いてたの？」

「まあね。デュエルすればだいたい解るよ。正直なデュエルだったから、解りやすかったよ」

「解らないのは、どうしてこんなことをするのかだね。」

「何者だ！？何故こんな悪党紛いのことをする！？」

二人がヘルメットを取った。一人は紳士的な執事のような人。もう一人は長い金髪の女性。

「女Dホイラー？」

「私はシェリー・ルブラン」

「ミゾグチと申します」

「こんなことをしてごめんなさい。でもね、私も貴方を奪いに来たの。不動遊星」

「奪う？」

「オレをデュエルチームに加える為だそうだ」

なるほど。遊星を加えれば、チームの実力は上がる。

「でも、私は貴方でも良いわ」

シエリーさんがオレを見て言う。

「オレ？」

「ええ。貴方はまだWRGPの出場を決めてないんでしょう？貴方の実力は不動遊星と互角。申し分ないわ」

「  
」  
どうも」

「勝手なこと言わないで！遊星にはもうチームメイトがいるし、リヨウはまだ出場も決めてないのよ！」

「今日は挨拶に来ただけよ。デュエルを楽しみましょう」

二人が先に走っていく。オレたちも追わないと。

「アキ。降りるんだ。これ以上は危険だ」

「アリスも。ここからは危ないよ」

スピードが出る。それも手加減無しの本気の勝負になると、オレも遊星も感じてるから。

「大丈夫よ。お願い、このまま一緒に乗せて。大事な何かがある気がするの」

アキは直感で何かを感じてる。だから、その直感を信じたいってことか。

「私も。大丈夫、私にはシンがついてるから、心配しないで」

『いざという時は、吾が実体化する。主アリスは必ず護る』

遊星と顔を見合わせると、確かに頷き合う。このままいくしかないみたいだね。

「いくぞ！しっかり捕まってる！」

「アリスもね！」

走り出す。後を追う。

「来たわね。カードを2枚伏せ、ターンエンドよ」

「オレのターン！」

S P 5

「リョウ！力を借りるぞ！」

「うん。良いよ、遊星！」

「“ターボ・シンクロン”を召喚！」

ATK / 100

「レベル5“THE トリック”に、レベル1“ターボ・シンクロン”をチューニング!

集いし絆が、更なる力を紡ぎ出す。光差す道と為れ!

シンクロ召喚! 轟け!“ターボ・ウォリアー”!

ATK/2500

「ターボ・ウォリアー”がレベル6以上のシンクロモンスターを攻撃する時、そのモンスターの攻撃力は半分になる!

“ターボ・ウォリアー”で“フルール・ド・シュヴァリエ”を攻撃! アクセル・スラッシュ!

ATK/1350

「くっ!」

シエリー&ミゾグチ LP 2850

攻撃は通った。でも、

「破壊できていない!?!」

「畏カード“理想のために”! 戦士族モンスター1体をリリースし、モンスター1体の戦闘での破壊を無効にする!」

シエリーさんの場の“見習い騎士”がリリースされた。これで“フルール・ド・シュヴァリエ”をこのターンに破壊することはできない。

「畏発動!“シンクロアウト”! シンクロモンスターをエクストラ

デッキに戻し、素材となったモンスターを特殊召喚する！  
来い！“ターボ・ウォリアー”！“THE トリック”！」

DEF / 500  
ATK / 2000

「まだまだ！“THE トリック”で“不死武士”攻撃！」

「くっ」

シエリー&ミゾグチ LP 2050

「ライフを大きく削られたわね。でも、私の場の“フルール・ド・シュヴァリエ”は残っているわ！」

「ああ。このターンに“フルール・ド・シュヴァリエ”を破壊することはできない。だが、オレの攻撃はまだ終わっていない！  
罠カード“緊急同調”！バトルフェイズ中にシンクロ召喚を行う！  
レベル5“THE トリック”に、レベル1“ターボ・シンクロン”をチューニング！  
轟け！“ターボ・ウォリアー”！」

ATK / 2500

「いけ！アクセル・スラッシュ！」

ATK / 1350

「ぐっっっ！」



シエリー&ミゾグチ LP 900

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

「大した攻撃ね。噂以上の実力だわ」

確かに。怒涛の攻撃だった。なかなか止められなかった筈。

「でもね、デュエルはこれからよ！」

「私のターン」

SP 6

「私は“摩頂の武士”を召喚」

ATK/1200

「このカードが召喚に成功した時、手札からレベル3以下の戦士族モンスターを特殊召喚できる。私が召喚するのは、“放鍾の武士”」

ATK/0

チューナー ミゾグチさんのエースモンスターかな。

「レベル4の“摩頂の武士”に、レベル3の“放鍾の武士”をチューニング！」

二つの刃交わりし時、ここに忠義の刃が現れん。我に仕えよ！  
シンクロナイズ！現れよ！“不退の荒武者”！」

ATK / 2400

「バトル!“フルール・ド・シュヴァリエ”で“ターボ・ウォリアー”を攻撃！」

「くっ！」

遊星&リョウ LP 3100

「“不退の荒武者”でダイレクトアタック！」

「手札から“速攻のかかし”の効果発動！ダイレクトアタックされる時、このカードを墓地に送ることで、バトルフェイズを終了させる！」

危なかった。畏カードは使えなかった訳だしね。

「カードを2枚伏せ、ターン終了」

「ふふふ。強いわね」

まだ余裕がありそうだね。残りライフ900。それ程の余裕があるとは思えない。

ただ、オレと遊星の場にモンスターはいない。対するシェリーさんとミゾグチさんの場には、エースモンスターであるシンクロモンスターが2体。

次はオレのターンか。

「不動遊星、リョウ。貴方たちはどうしてデュエルしてるの？」

「理由？」

何を言ってるんだろ？

「私にはあるわ。復讐という大きな目的が」

「復讐」

「何でそんなことを？」

「私は」

ポツポツと語り出したシエリーさんの過去。会社の仕事の関係上、両親を殺され、ミゾグチさんと二人で逃げた。世界中をずっと二人で。

「そして、その裏で、ある組織が関わっていることを知った。その組織は、イリアステル」

「！」

イリアステル　！

「かつて、その名を聞いたことがある」

遊星がオレを見る。オレは目で大丈夫だと伝えた。

「イリアステルは、善や悪を超越した組織。邪魔する者はどんな手を使っても排除する。私の両親を殺したように」

清四郎さんも、何らかのことで利用されたんだ。

「そのイリアステルが、このWRGPを裏で糸を引いている！」

裏で、ね。

「不動遊星！リョウ！貴方たちどちらでも良い！力を貸して欲しい！私はWRGPで優勝しなければならぬ！知らなければならぬのよ！何故私の両親は殺されなければならぬかつたのかを！」

「ちよつと待つて！さっきも言ったけど」

「貴女に聞いてない！」

「ちよつと！貴女に遊星たちの何が解るの？」

「解るわ！私たちは既に解り合えてる。この風の中で！」

確かに、オレたちはこのデュエルに全力を尽くすことで、通じ合えてる。風がオレたちに伝えてることがあるから。

「シエリーさん。貴女の想いはよく解りました」

「そう。貴女の方が不動遊星より決断が早かつようね」

それにも理由がある。だけど、

「お断りします」

「理由を聞いても良いかしら？貴方には、不動遊星のようにチームに入っている訳ではない筈よ」

「憎しみは新たな憎しみを生むだけです。オレはそのことに手を貸す気はありません」

「貴方に復讐を手伝って欲しいとは言っていないわ。WRGPで優勝する為に、貴方の力を貸して欲しいのよ」

「だとしても、手を貸す気はありません」

「そんなに気に入らないかしら？」

「いえ。貴女の気持ちは、オレには解り過ぎる程解りますよ」

「リョウ」

「大丈夫。心配しないで、アリス」

オレはもう清四郎さんのことを受け入れてる。それに、オレの十字傷には清四郎さんが生きてる。

「オレは、イリアステルに、大事な人を利用され命を失った。貴女と同じように」

「なんですって！？」

「貴女だけじゃないんですよ。大事な人を失った悲しみを抱えている人は。イリアステルが関わっていなくても、そういう人は少なからずいるんです」

心なしか、オレを掴むアリスの手の力が強くなった。そつと握り返す。

「だとしても、貴方も私の気持ち解るんじゃないの!? 私たちの大事な人が何故死ななければならなかったのか、知りたくないの!」

「解りません。だけど、そのことをあの人は望んでいない。オレが危険を犯すことを望んでいないんですよ」

「 どうして」

「憎しみは新たな憎しみを生むだけです。死ぬ間際、オレはその人と約束しました」

この約束は必ず守る。絶対に。

「 そう。今日は挨拶に来ただけよ。ゆっくり考えてみて」

「次はオレのターンです。このターンで、憎しみに意味のないことを示して見せます」

「なら、見せて貰おうじゃない。貴方の力を!」

「オレは常に、風と共にあった訳じゃない。オレが共にあったのは、自らの精霊たちだ!」

「精霊?」

「オレのターン！」

SP 7

「罨カード“シンクロ・スピリッツ”！墓地の“ターボ・ウォリアー”を除外し、素材となったモンスターを特殊召喚する！もう一度来い！“ターボ・シンクロン”！“THE トリックキー”

！」

DEF / 500

DEF / 800

ありがとう、遊星。お膳立ては十分だよ。さあ、勝負だ！」

「SP エンジェルバトン”発動！SPカウンターが2つ以上ある時、カードを2枚ドロし、手札を1枚墓地に送る！」

さらに、“SP オーバー・チューン”を発動！場のモンスター1体をリリースして、リリースしたモンスターと同じレベルのチューナーモンスターを特殊召喚する！」

“ターボ・シンクロン”をリリースして、手札から“マジシャンズ・シンクロン”を特殊召喚！」

ATK / 0

「いくよ！レベル5の“THE トリックキー”に、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング！」

白き魔術が重なりし時、百戦錬磨の魔術士が現れる。光差す希望と為れ！」

シンクロ召喚！冴え渡れ！“高尚なる魔術師トエル・カウロ”！」

ATK / 2300

「頼む！トルンカ！」

『任せておけい。この者にお主の想いを示してやるんじや』

「トルンカの効果発動！シンクロ召喚に成功した時、墓地の魔法カード1枚を手札に加える！」

“SP エンジェルバトン”を手札に加える！

そして、シンクロ素材となった“マジシャンズ・シンクロン”が自身の効果によって場に戻ってくる！」

ATK / 0

「再び発動！“SP エンジェルバトン”！カードを2枚ドロ、1枚を墓地へ！」

墓地へ送った“正統なる魔術師”の効果発動！このカードを除外することで、墓地の通常モンスターの攻撃力を0にして、特殊召喚する！

来い！マハード！」

ATK / 0

『待たせた。リヨウの想いを、彼女にぶつけよう』

マハードを場に召喚した。後は、

「まだだろう、リヨウ。お前の精霊はまだ残っている」

遊星には手札が1枚あるだけ。何かできるのかな？



「墓地からモンスターの特殊召喚に成功した時、手札から“ドッペル・ウォリアー”を特殊召喚できる！」

ATK / 800

「ありがとう、遊星。これで、召喚できるよ」

「ああ。お前の想いをしっかりと見せてやれ！」

「うん！レベル7のマハードに、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング！」

黒き魔術が集いし時、新たな光の力が目覚める。光差す希望と為れ！シンクロ召喚！舞い降りよ！“SF ブラックマジシャン”！」

ATK / 2900

「やるわね」

「まだだよ。遊星が言ったように、オレにはまだ大事な精霊が残ってる。」

“ドッペル・ウォリアー”をリリース！マナをアドバンス召喚！」

ATK / 2000

『ごめんね。私が最後の登場で』

「ううん。ちゃんと来てくれた。いくよ！」

『うん！』

「これが最後の手札！ “スター・イリユージョニスト” を特殊召喚！」

ATK / 0

「このカードは“SF”と名の付くモンスターが場に存在する場合、特殊召喚できる。

そして、レベル6のマナに、レベル1の“スター・イリユージョニスト”をチューニング！

黒き魔術が交わりし時、新たな絆の幕が開く。光差す希望と為れ！シンクロ召喚！舞え！“SF ブラックマジシャンガール”！」

ATK / 2400

オレの場に、精霊が揃った。

「これで、貴方の精霊ってというのが揃ったという訳かしら？」

「そうです。これが、オレの精霊たちです。いきます！」

このターンで、勝負を決める！

「トルンカの効果発動！1ターンに一度、相手モンスター1体の攻撃力を半分にできる！

オレは“不退の荒武者”の攻撃力を半分にする！」

ATK / 1200

「バトルフェイズ！マハードは“SF”と名の付くモンスターが場

に他に存在する場合、相手モンスター全てに攻撃できる！

いけ！マハード！一度目の攻撃！“不退の荒武者”を攻撃！スター・イリユージョン・マジック！”

「畏カード“ガード・ブロック”！ダメージを無効にし、カードを1枚ドローする」

ダメージは無し。通れば終わりだったんだけど。まだオレの攻撃は残ってる！

「“不退の荒武者”の効果発動！このカードより攻撃力の高いモンスターに攻撃された時、“不退の荒武者”は破壊されず、攻撃したモンスターを破壊する！」

エースモンスターの効果だけはある。でも、

「マハードにはもう一つの効果がある！カードを破壊する効果が発動した時、オレの場に存在するマハード以外のモンスター1体をリリースすることでその効果を無効にし、破壊する！  
オレはトルンカをリリース！」

「させん！永続畏“生贄封じの仮面”を発動！お互いのプレイヤーはリリースできない！」

でも、オレにはまだ手がある！

「マナの効果発動！1ターンに一度、墓地のカード1枚を除外してその効果を発動する！オレは“砂塵の大竜巻”を除外して、“生贄封じの仮面”を破壊する！」

「バカな！いつの間に!？」

「SP エンジェルバトン”で送った2枚は既に使った。でも、もう1枚墓地に送ってる。オレの最初のターンにね」

「くっ」

「これで、効果は有効！トルンカをリリース！」

『お役御免じゃな。大丈夫、皆がリヨウのことを信じておるよ』

ありがとう、トルンカ。

「マハード！二回目の攻撃！“フルール・ド・シュヴァリエ”に攻撃だ！スター・イリュージョン・マジック！」

「ぐっっ！」

シエリー&ミゾグチ LP 700

「まだよ！罨カード“自由解放”！戦士族モンスターが破壊された時、場のモンスター2体をデッキに戻す！」

「カウンター罨“白銀の閃光 シルバー・マジック”！場に“SF”と名の付くモンスターが存在する場合、罨カードの発動を無効にする！」

「なにっ!？」

これでマハードとマナは場に残る。そして、マナの攻撃がまだ残っ

てる！

「これが最後の攻撃！マナで」

「リヨウ！待つて！上！」

アリスから声をかけられた。上を見てみると、トレーラーが橋から落ちてきていた。

このままじゃみんなトレーラーの下敷きになる！

「マハード！マナ！」

二人が実体化して飛び出す。二人の魔法でトレーラーを止めた。

「実体化した！？サイコデュエリスト！？」

シェリーさんの間には答えず、走り抜けた。これでトレーラーに直撃することはない。

危機を脱して、みんなで停まった。

「リヨウ。貴方、何者なの？」

「オレはオレです。他の何者でもありません」

「今はそれで良いわ。いずれまた会いましょう」

シェリーさんとミゾグチさんは二人でまた走って行った。

#### 第四話：憎悪（後書き）

遊「オレたちのタッグデュエル、確か初めてか？」

リ「組んだのは初めてだね。でも、流石だったよ」

遊「いや。リヨウの力は心強かった」

リ「またやろうね、遊星」

遊「ああ。だが、あの二人は何者だったんだ？」

リ「さあ？気になるけど」

遊「また会うこともあるさ。特にお前はな」

リ「オレ？」

遊「オレよりお前が気に入ったようだった」

リ「関係ないよ。オレは協力する気はないしね。清四郎さんの約束だし」

遊「そうだな。次は、龍亜たちの話か」

リ「うん。それじゃあ、第五話：魔法都市の女神。よろしくね」

**第五話：魔法都市の女神（前書き）**

ト「第五話は僕のデュエルです」

ミ「私も頑張ります」

ト「僕の新しい力の初登場です。ミーネの力ですよ」

ミ「私が進化しますわ」

ト「リョウさんに禁じられてるんですけどね」

ミ「では、第五話。始まりますわ」

## 第五話：魔法都市の女神

タッグライディングをしたあの日から数日。変わったことと言えば、アキがあのだデュエルをきっかけにDホイールに乗り始めたことくらい。アキは必死に練習してる。

その数日の間に、WRGPの会が開催されていた。オレはまだ出場するかどうかも決めてないから行ってないんだけど。

問題はその日に起こったこと。またゴーストが現れたらしい。でも、今回は早々と逃げられた。

その時、追おうとした遊星があるDホイラーに止められたらしい。そして、そのDホイラーとライディングデュエルをした。結果的にデュエルは遊星が勝ったみたいだけど、全く得体が解らなかつたみたい。

何かが始まっている。裏で何かが動いている。それもWRGPの裏で。類の十字傷が時々痛む。何かが起こると思う。

side トレイン

アカデミアの授業を終えて、帰宅途中に隣にいた龍亜が言い出した。

「幽霊？」

「そう！気にならない！？行ってみようぜ！」



「私、そういうの苦手」

そういうえば、レナは霊とかが嫌いだったね。

「苦手だから私行かない。怖いもん」

「トレインはどうする？」

「私のことなら気にしなくて良いよ。リョウお兄ちゃんのところへ遊びに行くから」

「龍亜だけじゃ心配なの。一緒に行かない？」

「解りました。じゃあ、レナ。また後で」

僕はレナと別れて龍亜と龍可に付いて歩いた。

「ところでさ、トレインって言葉丁寧だよね？」

「僕はいつもこんな感じですが」

「もう少し砕いて欲しいな。レナと話す時みたいに」

「はあ」

「そんなに堅くなる必要ないよ。私たちクラスメートなんだし」

「そうそう」

「じゃあ、普通に」

「うん」

僕はいつも敬語で話していた。違うのは家族くらい。同年代の人と普通に話すのは久しぶりだった。

森に入った。この森で幽霊が出るらしい。薄暗くて湿っぽい。いかにもって感じになってる。

「雰囲気あるなあ」

「そうね」

「な、何なんだ？」

龍亜が怖がってるのかな。

「な、なあ。やっぱり引き返そうぜ」

「探険に行こうって言ったのは龍亜だけど」

「お、俺は龍可が怖いんじゃないかと思って」

「私は平気よ？」

やっぱり怖いんだ。強がってるけど。

僕は森の中を歩いていった。

「リョウウお兄ちゃん！」

「あ、よく来たね、レナ」

「アリスお姉ちゃんは軽音部だよね？」

「そうだよ。トレインは？」

「幽霊が出る森に探険に行くとかなんとかって。龍可ちゃんと龍亜君と一緒に」

「噂の森に？」

「そうみたいだけど？」

「あの森は危ない。放っておくのは危険だね」

「まさか？」

「オレは行くよ。どうする？」

「うー まあ、リョウウお兄ちゃんと一緒なら」

「よし。じゃあ急いで行こうか」

「あれ？龍可は？」

「えっ！？」

どこにもいない。まさか、迷った？

「ヤバイよ！こんな森の中で！」

「落ち着いて、龍可。とにかく捜さないで。ミーネ！」

『はい。強い思念を感じるところがありますわ』

「行ってみよう」

僕たちは歩き出した。行かないと。龍可が心配だ。すぐに嫌な感じがした。この気配は。

『気をつけてください。何者かがいますわ』

ミーネの声。確かに、誰か立ってる。

「デュエルだ」

低く呟いた。嫌な感じ。

『奥にお屋敷がありますわ。龍可様はあのお屋敷にいるようですわ』

「龍可。あの屋敷、見える？」

「あつ、ホントだ」

「僕がこの人の相手をやるから、龍亜は龍可を。あの屋敷にいるみたいだよ」

「ホント!? ようし! 待ってるよ! 龍可!」

龍亜が屋敷に走って行く。この人の相手は僕だ。

『デュエル!』

「私のターン “A・O・J ブラインド・サッカー” を召喚」

ATK / 1600

「カードを1枚伏せ、ターン終了」

「僕のターン!」

不気味なデュエルだ。早く終わらせよう。

「僕は“クルセイダー・オブ・エンディミオン” を召喚!」

ATK / 1900

「バトル! “クルセイダー・オブ・エンディミオン” で “A・O・J ブラインド・サッカー” を攻撃!」

?? LP 3700

「ブラインド・サッカー」と戦闘した光属性モンスターの効果は無効となる」

“クルセイダー・オブ・エンディミオン”は光属性。無効になるか。

「僕はカードを1枚伏せ、ターンエンド」

「私のターン。永続罫“DNA移植手術”を発動。全てのモンスターの属性は光になる」

厄介なカードだ。できれば破壊したいけど。

「A・O・J サイクロン・クリエイター”を守備表示で召喚」

DEF/1200

「ターンを終了」

「僕のターン！」

よし。僕の必要なカードを引けた。

「フィールド魔法“魔法都市エンディミオン”を発動！」

場に魔法都市が出現する。このカードが僕の必須カード！

「魔法カードが発動する度に、魔力カウンターを1つ置くことができる。」

手札から速攻魔法“サイクロン”を発動！“DNA移植手術”を破

壊！」

「」

無言で無表情。やっぱり不気味だ。

「マジシャンズ・ヴァルキリア”を召喚！」

ATK / 1600

「バトル！ “マジシャンズ・ヴァルキリア”で “A・O・J サイクロン・クリエーター” を攻撃！」

攻撃は通る。これで相手の場にカードはない。

「さらに、 “クルセイダー・エンディミオン” でダイレクトアタック！」

「」

?? LP 1800

「ターンエンドです」

「私のターン。相手場に光属性モンスターを含む2体のモンスターが存在する場合、手札から “A・O・J コズミック・クローザー” を特殊召喚できる」

ATK / 2400

攻撃力2400のモンスターをいきなり!?

「もう1体、“A・O・J コズミック・クローザー”を特殊召喚  
」

ATK/2400

「うっ  
」

「バトル 2体の“コズミック・クローザー”で相手モンスター  
を攻撃 ！」

「うああっ!」

トレイン LP 2700

今の衝撃は一体 ?今まで受けたことのない衝撃 。

「カードを1枚伏せ、ターン終了 ）」

「くっ、僕のターン!」

ドローカードは、よし!

「場に、フィールド魔法“魔法都市エンディミオン”が存在するこ  
とにより、リリース無しで“神聖魔導王姫エンディミーネ”を召喚  
」!

ATK/2000



「ミーネの攻撃力は、場の魔力カウンター1つにつき、100ポイントアップする！」

ATK / 2100

「永続罫“漆黒のパワーストーン”を発動！このカードに魔力カウンターを3つ置き、1ターンに一度だけこのカードの魔力カウンターを1つ移すことができる！」

ATK / 2400

「このカードの魔力カウンターを1つ、“魔法都市エンディミオン”に移す！」

そして装備魔法“魔法都市の盾”を発動！ミーネに装備！」

ATK / 2500

魔法カードの発動で“魔法都市エンディミオン”に魔力カウンターが溜まる。それでミーネの攻撃力がアップする。

「バトル！ミーネで“A・O・J コズミック・クローザー”を攻撃！マジック・ツイスト！」

?? LP 1700

「ターンエンドです」

「エンドフェイズ、速攻魔法“終焉の焰”を発動。 “黒焰トクン”を2体特殊召喚する」

DEF / 0

ATK / 2600

「私のターン。 “黒焰トークン” 2体をリリースし、 “A・O・J サンダー・アーマー” をアドバンス召喚！」

ATK / 2700

「バトル！ “A・O・J サンダーアーマー” で、“魔導王姫 エンディミーネ” を攻撃！」

『キヤアッ！』

「うっっ！」

トレイン LP 2600

ミーネは破壊させない！

「ミーネに装備された“魔法都市の盾”の効果発動！このカードを破壊して、装備モンスターの破壊を無効にする！」

さらに、“魔法都市の盾”が破壊された時、場に存在する魔力カウンターを置くことができるカードに全て1つ魔力カウンターを置く！」

僕の間には魔力カウンターを置くことができる“魔法都市エンディミオン”と“漆黒のパワーストーン”がある。だから2つ増える！  
ミーネの攻撃力がアップする！

ATK / 2800

「カードを1枚伏せ、ターン終了」

「僕のターン！魔法カード“魔力掌握”を発動！魔力カウンターを1つ置くことができる。“魔法都市エンディミオン”に1つ置く！」

ATK / 3000

「さらにデッキから“魔力掌握”を1枚手札に加える」

ミーネの攻撃力は相手モンスターを上回った！

「バトル！ミーネで“A・O・J サンダーアーマー”を攻撃！マジック・ツイスト！」

「永続罫“メタル化・魔法反射装甲”を発動！“A・O・J サンダーアーマー”の攻撃力を500ポイントアップする！」

ATK / 3200

「しまっ」

『キャアアアッ！』

「くっくっくっ」

トレイン LP 2400

ミーネが破壊された。

「くっ　僕は“王立魔法図書館”を守備表示で召喚」

DEF / 2000

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン。バトル　“A・O・J　サンダー・アーマー”で“王立魔法図書館”を攻撃　！貫通ダメージを受ける　！」

「うあああっ！」

トレイン　LP　1200

「終わりだ　“A・O・J　コズミック・クローザー”で止めだ  
「！」

「畏カード“ガード・ブロック”！ダメージを0にして、カードを1枚ドロウする！」

何とか防いだ。

「ターン終了だ」

「僕のターン」

このターンで何とかしないと。

キイイイン。

後ろから何か。

「トレイン！」

「リヨウさん！？レナも！？」

リヨウさんがレナをDホイールの後ろに乗せて走ってきた。もう一人Dホイールで走ってくる人がいるけど。

「遊星！ここはオレが！」

「解った！オレは屋敷に向かう！」

もう一人の人、遊星さんは龍可と龍亜がいる屋敷に向かった。

「リヨウさん」

「相手の人、何だか不気味だね。トレイン、大丈夫？」

「は、はい。何とか」

「ダメージが実体化してる。トレイン、このデュエルは危険だ。俺と代わろう」

「いえ。このデュエルは僕がやります。やらせてください」

「これ以上は危険だよ？」

「僕の友達を護りたいんです」

正直な想い。リョウさんに禁じられたあのカードを使っても、僕は勝つ！

「 解った。気をつけて」

「はい！永続罫“リビングゲデッドの呼び声”！墓地のモンスター1体を特殊召喚する！来て！ミーネ！」

ATK/2000

『あのカードを使うのですね？』

「うん！いくよ、ミーネ！」

『はい！』

「僕は、“マジカルフィシアリスト”を召喚！」

ATK/800

「レベル6のミーネに、レベル2の“マジカルフィシアリスト”をチューニング！」

魔術光り輝きし時、新たな閃光が迸る。魔法都市の女神よ、勝利を齎せ！

シンクロ召喚！光れ！“神聖魔導女神リオルミーネ”！」

ATK/2500

僕の場に現れた、白くて綺麗なイブニングドレスを着たミーネ。これが僕が手にした新しいミーネの姿。

「わ　　綺麗　　」

『ありがとうございますわ。レナ様』

「でもまあ、露出多いね、ミーネ」

リヨウさんの言う通り、確かに露出が多い。胸元は開いてるし、背中  
中は綺麗に見えてる。

『それは余り気にしないでください、リヨウ様。それよりも、デュ  
エルですわ、トレイン』

「そうだね。ミーネの効果発動！場の魔力カウンターを1つ取り除  
くことで、場のカード1枚を手札に戻す！

僕は魔力カウンターを2つ取り除いて、“A・O・J　ゴズミック・  
クローザー”と“A・O・J　サンダー・アーマー”を手札に戻す  
！」

「　　」

これで、相手の場にモンスターはいなくなった。

「これで終わりだ！ミーネでダイレクトアタック！マジック・ライ  
トニング・ツイスト！」

「　　」

?? LP 0

勝った。

side out

オレはトレインに近寄って、トレインを支えた。気絶してる。ダメージを受けて疲れたかな。

「リヨウお兄ちゃん！トレインは！？」

「大丈夫。気を失ってるだけだよ」

「は」

ホツとした様子で息を吐く。トレインのことは心配ない。それより、

『申し訳ありません、リヨウ様。私が付いていながら』

「あの力、使っちゃったね」

『責めは私が負いますわ。何なりと』

「良いよ。大事な友達の為に使った力。気にしてないよ」

問題はそこじゃない。問題は、トレインがデュエルした相手にある。

「この相手、ロボットだったんだ」

トレインの最後の攻撃で、相手の人も倒れた。と思ったら、これはロボットだった。



『どう考える?』

「解らない。マハードは?」

『私もだ。見当が付かない』

サツパリ解らない。何が狙いなのか。

『リヨウ。あつちも無事みたいだよ』

マナの声に屋敷を見てみると、確かに龍亜に龍可、遊星が出て来た。他の人たちもいる。

「リヨウ。そつちは無事か?」

「大丈夫だよ。それより、変わったことはなかった?」

「ある兄弟の霊がさ迷っていたが、成仏したようだ」

確かに変わったことではある。でも、このロボットに何か関わりがあるのか?

「それは　ロボットか!？」

「　うん。そうみたいだよ」

「何故　?」

「オレにも解らない。何が起こったんだろう」

ロボットは、以前に遊星が闘った、機皇帝というシンクロキラの巨大ロボットを使っていた。それとは違うロボットだけど、じゃあこのロボットは？

「とにかく、みんな無事で良かった。帰ろう」

「待って。トレインは？」

「気絶してるけど、大丈夫だよ、龍可」

「気絶してるの？」

「龍可を気にして、一人でがんばってた。大丈夫、すぐに目を覚ますよ」

「ごめんね　トレイン。ありがとう」

龍可が近寄ってトレインをそっと撫でた。

「うっ」

気を失っているトレインが無意識に龍可の手を掴んだ。

「ぶ　じ」

「　心配かけてごめんね、トレイン」

「それだけががんばったんだよ」

「オレもがんばったんだぞ！」

「ああ。龍亜もだ」

オレたちはそのまま森を抜けてそれぞれに帰った。

「ふうん。リヨウの近くにいたからどのくらい強いのかと思ってたけど、それなりに強いよね」

一人呟く少女の姿があった。

第五話：魔法都市の女神（後書き）

リ「トレインの新しい力、シンクロ召喚だね」

マナ「ミーネが進化したんだよ」

リ「マナより露出が多いのはどうなんだろうね？」

マハ「姫なのにな」

リ「問題だよな」

マナ「そうなの？私もあれくらい」

ゴン！

マナ「あいたっ！」

マハ「調子に乗るな、全く」

マナ「打たなくても良いじゃないですか〜！」

リ「ハア。じゃあ、次話はライディングデュエルだよ」

マハ「済まない、リヨウ。マナには後でよく言うておく。  
次話は私たちも活躍する予定だ」

マナ「う〜 リヨウ〜」

リ」「はいはい。じゃあ、第六話・進化。よろしくね

第六話：進化（前書き）

リ「今回はオレのデュエル。それもライディングデュエルでね」

マハ「相手は遊星殿でさえ苦戦したDホイラーだ」

マナ「でも、私たちだって負けないよ」

リ「絆を信じて闘う。それだけだよ」

マハ「ああ。私たちなら大丈夫だ」

リ「じゃあ、第六話。始まるよ」

## 第六話：進化

『ライディングデュエル！アクセラレイション！』

side 遊星

オレは思い悩んでいた。

あの日、あのDホイラーが見せたアクセルシンクロ召喚。限界を超えた先に、その進化がある。だが、その限界を超えるにはどうすれば良いのか？

マシンの開発も今一步上手くない。リョウのソニックでヒントは多く得たが、制御プログラムの造りが難しい。

このままでは、WRGPを勝ち抜くことは出来ない。何としても、限界を超えなければ。

ピンポーン

ガレージのインターホンが鳴った。誰か来たのか？オレは対応に出た。

「失礼する」

「お前は、あの時の」

今考えていた、アクセルシンクロをオレに見せたDホイラー。何故ここに？

「何の用だ？」

「思い悩んでいるようだな」

「」

「これから、私に付き合え。君にもう一度、アクセルシンクロを見せてやる」

「決着をつけるのか？」

「いや。君とのデュエルではない。君の仲間に出会に行く」

オレの仲間だと　　？

「リョウだ」

「何！？」

「彼には、君とは違う強い何かを感じる。私はそれを確かめたい」

「それで、リョウとデュエルするというのか？」

「そつだ。行くぞ、不動遊星。彼の下に」

「　　良いだろう。付き合ってやる」

オレはDホイールに乗り、奴と共にリョウの家に向かった。家に着き、インターホンを鳴らすと、すぐに誰か出て来た。



「は？い。どちらさまですか？」

実体化しているマナだ。オレたちを見て少し表情を変えた。険しくなっている。

「リヨウという者がいる筈だ」

「リヨウに何か用ですか？」

「彼とデュエルしたい」

マナがさりげなく視線をオレに向けてきた。

「大丈夫だ。得体の知れない奴だが、危険な奴ではない」

「リヨウを呼んできます」

少し迷った後、家の中に入っていった。すぐにリヨウが姿を見せた。

「どちらさまでしょうか？」

「名乗る程の者ではない。それより、私とデュエルして貰おう」

「遊星は何をしに？」

「オレは デュエルを見に来た」

一瞬、何と言うか迷ったが、正直に言った。その方がリヨウ相手には良い。

「そっか。解った。もう少し待ってて欲しい。良いかな？」

「いきなり押しかけたのは私だ。いくらでも待とう」

リヨウは頷き、家に入っていった。

「何故、リヨウとデュエルをする？」

「さつきも言った筈だ。彼には君とは違う強い何かを感じる。私はそれを確かめたい」

「リヨウは確かに持っているだろうが」

精霊の力。リヨウにはスピリットシグナーとして力がある。

「待たせたね」

リヨウが出て来た。私服から白と黒のライディングスーツに着替えている。

「準備は良さそうだな。行くぞ」

リヨウはソニックに乗り、オレたちも自分のDホイールに乗った。走り出し、ハイウェイに出た。

「いつでも良いよ」

「まずはテストといこう」

奴は“スピードワールド2”を展開せず、スピードを上げた。オレの時と同じだ。

リヨウは臆さずにスピードを上げた。オレと対応は同じだな。

奴はスピードを上げたままカーブに入った。高速ターンを難無く走り抜けた。

リヨウは。

「成る程。試されてるんだね。受けて立つよ」

「リヨウ？」

目を閉じている？

かと思えば、リヨウは目を開け、加速した。そのままカーブに入る。何の躊躇いもなく、カーブを走り抜けた。

あんな走り方はオレと走っている時はしていなかった。手を抜いていた様子はなかったが、どういうことだ？

「やるな。ならば、これはどうだ？」

奴はさらにスピードを上げ、カーブに入った。カーブが二つ、高速連続ターン。奴はスピードを落とさず、そのまま走り抜けた。

「やはり、オレの時と同じ」

リヨウもオレと同様、受けて立つ構え。スピードを上げ、高速連続ターンに入った。ぶらつきもせず、走り抜けた。

「やるな。見立て通りだ」

「オレ一人で走ってる訳じゃないからね。オレには絆が常にある」

オレも絆は信じている。が、リヨウの言うことはどういうことだ？

「君にはやはり、何か特別な力があるようだ。次はデュエルで見せて貰おう」

「良いよ。貴方はとんでもなく強いことは感じてる。オレとしても、楽しみだよ」

「良いだろう。ならば」

“スピードワールド2”が展開され、いよいよデュエルが始まる。

『ライディングデュエル！アクセラレーション！』

side out

デュエルが始まった。

この人が以前、遊星から聞いたDホイラーだということはずぐに解った。ただ者じゃないのは解ってる。だからこそ、デュエルは楽しくなる。

「来い！遠慮はいらない！全力で向かって来い！」

ならば、いかせて貰う！

「オレのターン！“見習い魔術師”を守備表示で召喚！」

DEF / 800

「カードを3枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン！」

SP 1

「相手場のみモンスターが存在することにより、手札から“TG ストライカー”を特殊召喚！」

ATK / 800

「レベル4以下のモンスターが特殊召喚に成功したことにより、“TG ワーウルフ”を特殊召喚できる！」

ATK / 1200

「レベル3の“TG ワーウルフ”に、レベル2の“TG ストライカー”をチューニング！」

シンクロフライトコントロール！リミッター解放、レベル5！ブースター注入120%！リカバリーネットワーク、レンジ修正！オールクリア！

GO！シンクロ召喚！カモン！“TG パワー・グラディエイター”！

ATK / 2300

いきなりシンクロ召喚。飛ばしてきてるね。

「さらに、“TG サイバー・マジシャン”を通常召喚！」

ATK/0

「このカードをシンクロ素材とする場合、手札のモンスターを代用できる！」

手札のレベル4の“TG ラッシュ・ライノ”に、レベル1の“TG サイバー・マジシャン”をチューニング！

シンクロフライトコントロール！リミッター解放、レベル5！ブースターランチ、OK！インクリネイション、OK！グランドサポーター、オールクリア！

GO！シンクロ召喚！カモン！“TG ワンダー・マジシャン”！」

ATK/1900

1ターンに2体のシンクロモンスターを召喚した。

「このカードがシンクロ召喚に成功した時、場の魔法・罫カード1枚を破壊する！君のカードを1枚破壊させて貰おう！」

「オレは、破壊される前にそのカードを発動する！“和睦の使者”を発動！このターン、オレのモンスターは破壊されず、ダメージを受けない！」

「私の攻撃は無意味か。私はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」

「オレのターン！」

SP 2

さあ、オレの絆を示すよ。

「見習い魔術師”をリリース！マナをアドバンス召喚！」

ATK / 2000

「それが君の言う、絆のカードか？」

「そうだよ。紹介が遅れたね。この娘はマナ。“ブラックマジシャンガール”の精霊だ」

「精霊」

「信じる信じないは自由だけど、精霊は確かに実在するよ」

「良いだろう。ならば、その精霊の力、見せてみる！」

「言われずとも！畏発動！“賢者の秘石”！マナが場に存在することにより、デッキからマハードを特殊召喚する！

オレの精霊はマナだけじゃない！来い！マハード！」

ATK / 2500

「君が使う、魔術師の師弟か」

「いくよ。バト　っ!？」

不敵に笑った。さらにスピードを上げた。何をするつもり　っ!？

「き　消えた？」

前を走っていた筈のDホイーラーが、急に消えた。一体どこに　？

「くっ！？」

次の瞬間、オレのすぐ後ろから何かとてつもない圧力を感じた。そこをDホイーラーが走り抜けた。

「一体何が　何だ！？あのモンスターは！？」

ATK / 3300

Dホイーラーの場にいた2体のシンクロモンスターが姿を消し、違うモンスター1体の姿があった。

『相手のターンにシンクロ召喚をしたというのか　？』

『とにかく、一度落ち着くべきだよ、リョウ。ターンが変わった訳じゃないんだし』

マナの言う通りか。オレは大きく息を吸い、吐き出した。

「それが、アクセルシンクロだね？」

「そう。シンクロモンスターとシンクロチューナーモンスターによるシンクロ召喚。これが、アクセルシンクロモンスター、“TGブレード・ガンナー”だ！」

遊星が模索する、シンクロ召喚の進化の一つか。



「どの道、オレはこのターンは攻撃できない。カードを1枚伏せ、  
ターンエンド」

「私のターン！」

SP 3

「いくぞ！」TG ブレード・ガンナー”で、“ブラックマジシヤ  
ン”を攻撃！シュート・ブレード！」

『ぐっぐっ！』

「うめっ！」

リヨウ LP 3200

「ふ。私はこれで、ターン」

「畏発動！“奇跡の残照”！このターン破壊されたマハードを、特  
殊召喚する！」

ATK / 2500

「面白い。君のターンだ」

「オレのターン！」

SP 4

「SP エンジェルバトン”発動！SPカウンターが2つ以上ある時、カードを2枚ドロ―し、1枚を墓地に送る。  
チューナーモンスター“マジシャンズ・シンクロン”を召喚！」

ATK/0

「シンクロ召喚か」

「いくよ！レベル7のマ―ドに、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング！」

黒き魔術が集いし時、新たな光の力が目覚める。光差す希望と為れ！  
シンクロ召喚！舞い降りよ！“SF ブラックマジシャン”！」

ATK/2900

「ほつ」

「まだだ！“マジシャンズ・シンクロン”が魔法使い族モンスターのシンクロ素材となった場合、ゲーム中に一度だけ場に戻ってくる！」

ATK/0

「レベル6のマ―に、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング！」

黒き魔術が交わりし時、新たな絆の幕が開く。光差す希望と為れ！  
シンクロ召喚！舞え！“SF ブラックマジシヤンガール”！」

ATK/2400

「君も2体目のシンクロ召喚か」

「貴方は2体のシンクロモンスターで、新たなシンクロ召喚を実現した。ならオレも、新たなシンクロ召喚を示す！」

「何！？リヨウモアクセルシンクロをするというのか！？」

「オレにアクセルシンクロはできないよ、遊星。でも、進化はアクセルシンクロだけじゃない！」

今、このデュエルに勝つ為に。そして、遊星に無限の可能性を示す為に。

「オレたちが辿り着いた新境地、スピリチュアル・クロス！」

「スピリチュアル・クロス！？」

「オレは、墓地の光属性チューナー“マジシャンズ・シンクロン”と、闇属性チューナー“ナイトエンド・ソーサラー”をゲームから除外し、手札からモンスターを特殊召喚する！  
光と闇が混濁する狭間より姿を現せ！ツインチューナー！“幻惑のカオス・マジシャン”！」

ATK/0

「ツインチューナー！？何だそのチューナーは！？」

「それが君の行き着いた進化なのか」

「いくよ」

目を閉じて、意識を集中させる。オレたちが辿り着いた境地へ。  
マハード、マナ、オレたちが一つになる為に。

【我等、三位一体と成る】

【生まれし秋は違えど、死するその秋まで、我等は一つ】

【願わくば、我等が志を遂げるその日まで】

【いこう。共に】

スピリチュアル・クロス

「レベル8、シンクロモンスターのマハードと、レベル7、シンクロモンスターのマナに、レベル4の“幻惑のカオス・マジシャン”をツインチューニング！」

集いし光と闇の結晶が、新たな次元の幕を開く。光差す希望と為れ！  
クロスシンクロ！闇の結晶！“SF ダークネス・マジシャン”！」

ATK / 3500

「光の結晶！“SF シャイニング・マジシャン・ガール”！」

ATK / 3000

場に現れた黒く輝くマハードと白く輝くマナ。

「これが、オレたちが辿り着いた新境地、スピリチュアル・クロスで得たクロスシンクロだ！」

「クロス シンクロ」

「面白い。君は私の想像を遙に越えている」

「マハードの効果発動！1ターンに一度、相手モンスター1体の効果を無効にする！」

「TG グレード・ガンナー」の効果発動！相手ターンに一度、ゲームから除外できる！」

マハードとマナと同じ効果を持つてるんだ。でも、これで場にモンスターはいなくなった！

「マハードの第二の効果発動！ダークエンド・ドレイン！マナの攻撃力の半分を吸収する！」

ATK/5000

「バトル！マハードでダイレクトアタック！ダークエンド・イリュージョン・マジック！」

ただ、彼の場には伏せカードが1枚ある。この攻撃は通らないと。

「ぐうっ！」

Dホイラー LP 0

通った？

「やるな、リヨウ」

「まだ伏せカードがあった筈。あの程度の想定をしていなかったとは思えない」

「私も、アクセルシンクロを全て明かす程、お人よしではないからな」

今回はあくまで腕試しということか。

「いずれまた再戦しよう」

「私もその日を楽しみにしている」

そのまま走り去っていった。あの人は何者なんだろう？

「リヨウ」

遊星が近寄ってきた。聞きたいことはいろいろありそうだね。

「答えてくれ。お前はいつそんな力を？」

頬の十字傷に触れた。

「精霊世界か？」

「うん。精霊世界でちょっと修行したんだ。マハードやマナと一緒に」

「スピリチュアル・クロス」

「うん。オレたちはその境地に辿り着いた。

スピリチュアル・クロスは、精霊と完全に一体となること。オレたちは三人が一体になれる。だから、あんなスピードでカーブも曲がれる」

「どういうことだ？」

「バランス感覚が三人分になるって考えてくれれば良いよ」

「そうか。そして、クロスシンクロ」

「うん。オレたちがスピリチュアル・クロスで手にしたシンクロの進化系だね」

「シンクロの、進化」

「オレは、この力で“機皇帝”に対抗する。それができると思っている。一番信頼する紡いだ絆で闘う」

「オレに」

「遊星にスピリチュアル・クロスは無理だよ。とても教えられないことじゃない」

「何故だ？」

「精霊と一体になる為の修行が酷過ぎる。スピリットシグナーのアリスたちにさえ教えてないんだよ」

「　　そうか」

遊星が肩を落とす。遊星は力を求めている。シンクロを越える力を。

「アクセルシンクロ。遊星にはその境地に辿り着けると思ったから、あの人は遊星に接触してくるんじゃないかな？」

「アクセルシンクロ　　」

「遊星の答は、いつもどこにある？」

「オレの答　　？」

「オレの答は、常に精霊たちと共にあると思ってる。マハードやマナと一緒にね」

「　　そうか」

「大丈夫。遊星ならできるよ」

遊星の表情は晴れない。でも、オレにはこれ以上言うことはない。遊星が乗り越えなきゃいけない壁なんだ。

オレたちは、そこで別れた。遊星の表情は暗いままだった。



第六話：進化（後書き）

遊「スピリチュアル・クロス、か」

リ「そんなに気にしないで、遊星。遊星なら大丈夫だよ」

遊「 機皇帝に対抗する為、WRGPの為、オレは力が欲しい」

リ「逸る気持ちも解るけど、焦って良いことはないよ。まずは落ちて、境地への扉を開かないと」

遊「 ああ」

リ「遊星なら大丈夫。期待してるよ」

遊「 そうか」

リ「じゃあ、第七話：神龍。よろしくね」

第七話：神龍（前書き）

レ「ヤッホー！今回は私のデュエルだよ！」

ア「ふふ。レナは元気だね」

レ「そうかな？」

ア「デュエルはレナの新しい力が登場するよ。最強のドラゴンが光臨するよ」

レ「リヨウお兄ちゃんに止められてるんだけどね」

ア「リヨウのことなら私がなんとかするよ」

レ「やた！」

ア「リヨウが怒ることなんてないと思っけどね」

レ「確かに〜」

ア「じゃあ、第七話。始まるよ」

## 第七話：神籠

「転校生？この時期に？」

アリスの話を聞いて問い返した。

「うん。母さんの話だから間違いないとは思っただけど」

確かに、マリアさんの言うことなら間違いないだろう。でも、何が気になる。

「デュエルも強いつて聞いたよ。何か気になる？」

「ちょっとね。十字傷が疼くんだ」

ズキズキと疼く。転校生の話を聞いた時からずっと。

「そっか」

「あんまり気にするのも良くないけどね。幸い、龍亜に龍可、トレインとレナがいるから心配ないかな」

「いざとなれば、私たちも動けるよ」

「そうだね」

何も起きなければ良いんだけどね。

「そういえば、隕石の話は聞いた？」

「うん。それも気になってるんだね？」

「まあね」

先日、隕石がまた落ちた。ゴーストが現れたのは隕石が落ちてから。本当に何もなければ良いんだけど。

side レナ

私たちのクラスに転校生が来た。

「ルチアーノです。よろしく」

澄ました人、っていうのが私の第一印象。自然そうに見えるけど、何だか作ってるような。リョウお兄ちゃんみたいな自然さが無い。ダメダメ。私の悪い癖。人を勝手に判断しちゃいけない。

授業が始まった。デュエルの実技。転校生のルチアーノ君は龍亜君とデュエルしてるけど、完全にルチアーノ君が優勢。

「うわああっ！」

龍亜君が負けた。まあ、ルチアーノ君は強いらしいし。次は龍可ちゃんのデュエルが始まった。

「ねえ。君は確か、レナちゃんだよな？」

「うん。何か用？ルチアーノ君」

「龍可ちゃんのデュエルはいつもあんな感じなのかい？」

龍可ちゃんはいつも通り普通にデュエルしてると思うけど。

「うん。いつも通りだと思うよ」

「そう」

何だか、この人やっぱり苦手。何の根拠もないけど、好きにはなれない。

その日の放課後、私はアリスお姉ちゃんとリヨウお兄ちゃんのところに行った。

「転校生が好きになれない？」

「うん。特にどこがってことはないんだけど」

「そっか」

あれ？

「リヨウお兄ちゃんならそんなこと言っちゃダメよ、って言うと思っただけだよ」

「あゝ えっとね」

「この時期の転校生なんて珍しいでしょ？だから私たちもちょっと気になってるんだ」

「確かに珍しいですね。でも、僕たちも似たようなものですし」

「まあ、似てはいるけど、その人にも事情があるのかな？」

「そういえば、詳しいことは聞いていませんね」

「詳しいことは聞いてない」

「リヨウお兄ちゃん？」

「うん？何でもないよ」

何か考えてるようなリヨウお兄ちゃんだけど、どうかしたのかな？

「そういえば、今はどこに行ってるんですか？」

「遊星たちのガレージだよ。ちょっと遊星に呼ばれててね」

「クロウさんは面白いんだけどね」

ジャックさんは何かちょっと厳しくって苦手。

てくてくと歩いて遊星さんのガレージに着いた。中に入ると、何かを造る機械音がしてた。

「ああ、リヨウ。来てくれたか」

「うん。相変わらず、何か開発中？」

「いや、龍亜に頼み込まれてな。ライディングデュエル用のスケー

トボードを造っているんだ」

遊星さんって何でも造れるんだ。デュエルもリョウお兄ちゃんと同じくらい強いっていうし、凄いな。

「龍亜はまたどうして突然そんなものを？」

「あんな奴に負けたくないんだ」

あんな奴？誰だろ？

「ハイウェイにでも走りに行こうと思っていたが、まただな」

「まあ、そうだね」

「隕石の話は聞いたか？」

「聞いたよ。何か引つ掛かってる？」

「ああ。ゴーストが現れたのは、隕石が落ちてからだろう？」

「確かにね」

「何もなければ良いが」

「ねえねえ、リョウ。ライディングデュエル用のデッキ作るの手伝ってよ」

「良いよ」

リョウお兄ちゃんと龍亜君が話し込み始めた。

「トレインも頼んでみたら？ やってみたいくない？」

「えっ？ い、いえ、僕は別に」

嘘なのバレバレだよ。アリスお姉ちゃんだってお見通しだって笑ってるし。

「遊星さん。まだ部品ありますか？」

「ああ。二人の分も作るか？」

「えっと」

「私はいいよ。何だか怖いし」

「そうか。トレインはどうする？」

「良いんでしょうか？」

「ああ。トレインの分もだな」

「ほら。トレインもリョウと龍亜のところだ」

「は、はい！」

なんだかんだで嬉しそう。トレインは普段から自分を抑え過ぎだよ。それからはアリスお姉ちゃんはずっと遊んでいた。



翌日、トレインと龍亜君がデュエルボードの練習に行った。

「ふわ〜」

暇だなあ。 。 することがない。 。

s i d e o u t

s i d e トレイン

僕と龍亜は遊星さんが作ってくれたデュエルボードの練習をしてる。  
途中で龍可も加わってる。

「良い調子じゃん!」

やっとこけないで走れるようになった。 上達したかな。

「あれ?」

僕たちの頭上の橋に誰がいる。 飛び降りてきた!?

「龍亜!危ない!」

龍亜の傍に着地してデュエルボードで走り出した。

「危ねえ!何なんだ!?」

「龍可!僕とデュエルして貰う!」

龍可とデュエルを!?

「待て!お前の相手は俺だ!」

龍亜が勇んで叫ぶ。その時だった。Dホイールの音が聞こえてきた。

「そのデュエル!オレが相手をする!」

「誰だ!?!」

誰が走って !

「リヨウさん!」

「トレイン!ここはオレに任せて、アリスたちに連絡を!」

「は、はい!」

僕はアリスさんに連絡を入れた。 あれ?出ない?

レナと一緒にいる?レナに連絡を レナも出ない?

おかしい 何かあったんじゃない ?

side out

side レナ

「 貴方、誰?」

アリスお姉ちゃんのところ遊びに行こうとして、家を出た。アリ

スお姉ちゃんも迎えに出てくれる。でも、私の前にこの人が現れた。

『ギャウギャウ』

ラン、ミキにスウ。何だか、警戒してるような　この人を？

でも、私も何となく警戒してる。だってこの人、雰囲気似てる。トレインがデュエルした、あのロボットに　。

「デュエル」

「っ!？」

私のデュエルディスクが勝手に作動した。どうなってるの？

『ギャウ!』

「う、うん。気をつける」

『デュエル!』

「私のターン　。 “A・O・J サイクルリーダー” を守備表示で召喚　」

DEF/1000

「カードを2枚伏せ　ターン終了」

「私のターン!」

こんなデュエル、やってらんない。さっさと終わらせるよ。

「魔法カード“古のルール”発動！レベル5以上の通常モンスターを特殊召喚する！

お願い！ラン！」

ATK/3000

赤いリボンを付けた“青眼”。

「バトル！ラン！“A・O・J サイクルリーダー”を攻撃して！」

ランが相手モンスターを吹き飛ばす。うん。流石だよ。

「カードを1枚伏せて、ターンエンドよ」

「私のターン。魔法カード“地砕き”を発動。相手モンスター1体を破壊する」

『ギャウ！』

「ラン！」

ランが破壊されちゃった。

「“ジエネクス・サーチャー”を召喚」

ATK/1600

「ダイレクトアタック！」

「きゃああああっ！」

レナ LP 2400

「うっ」

痛っ ……トレインは、こんなデュエルやってたの？

「レナ！」

「アリスお姉ちゃん？」

来てくれたんだ。

「ロボット！？どうして」

「いきなりデュエルになって」

「代わって！私がデュエルする！」

代わりたい。こんなデュエル、したくない。

「変更は認めない。代われば、貴様の双子のもう一人を襲う

」

「なっ！？」

モニターが映された。トレインが映されてる。何で一人なの？龍亜君が一緒じゃ？

「 捕捉している。いつでも襲える 」

アリスお姉ちゃん表情がさらに厳しくなった。でも、私は決めたよ。

「 罨カード“ダメージ・コンデンサー” 」

「 レナ！？ 」

「 やっぱり、私がする、アリスお姉ちゃん。だって、トレインのことだから 」

いつも私の傍にいて、見守ってくれてる。我が儘な私の傍にいてくれる。トレインは私にとって掛け替えのない双子。だから、トレインは襲わせない！

「 手札を1枚墓地に送って、私が受けたダメージ以下の攻撃力のモンスターをデッキから特殊召喚する！ 」

デッキから“ミンゲイドラゴン”を特殊召喚！

ATK/400

「 さらに、墓地に送った“伝説の白石”の効果！このカードが墓地に送られた時、デッキから“青眼の白龍”を手札に加わる！ 」

私の準備は良いよ！

「 ターン終了 」

「私のターン！“ミンゲイドラゴン”はドラゴン族のリリース素材となる時、2体分のリリース素材になる！」

“ミンゲイドラゴン”を2体分のリリース素材として、ミキをアドバンス召喚！」

ATK / 3000

今度は青いリボンを付けた“青眼”。

「バトル！ミキ！“ジェネクス・サーチャー”を攻撃！」

「

ロボット LP 2600

「“ジェネクス・サーチャー”が戦闘で破壊された時、デッキから攻撃力1500以下の“ジェネクス”を特殊召喚できる。

“ジェネクス・コントローラー”を特殊召喚」

ATK / 1300

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン。 “A・ジェネクス・チェンジャー”を召喚」

ATK / 1200

「レベル3の“A・ジェネクス・チェンジャー”に、レベル3のジェネクス・コントローラー”をチューニング！」

シンク口召喚 「A・ジェネクス・トライアーム」！」

ATK / 2400

「A・ジエネクス・トライアーム」が闇属性モンスターをシンクロ素材としてシンクロ召喚に成功した場合、光属性モンスター1体を破壊　！」

“青眼の白龍”を破壊　！」

「畏カード“龍神の加護”を発動！手札を1枚墓地に送ることで、このターンのエンドフェイズまでドラゴン族モンスターはカード効果では破壊されない！」

これでミキは無事。

「そして、墓地に送った“伝説の白石”の効果で、デッキから“青眼の白龍”を手札に加える！」

スウ。これで3体目。

「装備魔法“デーモンの斧”を“A・ジエネクス・トライアーム”に装備　。攻撃力1000アップ　！」

ATK / 3400

攻撃力3400!?

「バトル　！ “A・ジエネクス・トライアーム”で“青眼の白龍”を攻撃　！」

「きゃあああっ！」



レナ LP 2000

ミキまで破壊されるなんて。

「ターンエンド」

「私のターン」

どうしよう。私にはもう。

「レナ」

「アリスお姉ちゃん」

「大丈夫。絆を信じて」

絆。私には、まだ手札にスウがいる。でも、攻撃力は届かない。どうすれば。

『ギヤウ』

「えっ？」

『ギヤウギヤウ』

どうしてだろう。言ってることが解る。今までは全然解らなかつたのに。

「うん。やってみる。」

スタンバイフェイズ、私の場にモンスターが存在せず、墓地のモンスターが全てドラゴン族モンスターだから、“ミンゲイドラゴン”を墓地から特殊召喚できる！」

ATK / 400

「畏発動！ “バトルマニア”！このターン、相手モンスターの攻撃可能なモンスターは攻撃しなければならない」

関係ない。私はこの子たちを信じると決めた。

「 “ミンゲイドラゴン” を2体分のリリース素材として、スウをアドバンス召喚！」

ATK / 3000

これで3体目。緑のリボンを付けた“青眼”。

「永続罫“正統なる血統”！墓地の通常モンスターを特殊召喚する！来て！ラン！」

ATK / 3000

まだ！まだ終わらない！

「魔法カード“黙する死者”を発動！墓地の通常モンスターを、特殊召喚する！来て！ミキ！」

DEF / 2500

私は、あのカードを使う。リョウお兄ちゃんに禁じられたけど、このデュエルは私の大切な人を護る為のデュエル。きつと許してくれる。

「いくよ。ラン、ミキ、スウ」

あのテキストを読むことはできない。だけど、今なら解る。教えてくれたから。

「レベル8のラン、ミキ、スウをオーバーレイ！3体の“青眼の白龍”で、オーバーレイネットワークを構築！  
伝説の白龍よ！全ての光を統べ、栄光を齎せ！  
エクシーズ召喚！光臨せよ！“青眼の神龍”！」

ATK/5000

私の場にいたラン、ミキ、スウが交差して、新しく現れた金色に輝く青い眼をした白龍。

『ゴオオオオツッ！』

凄い咆哮。空気が震えてるような感覚になっちゃった。

「エクシーズ召喚　？聞いたことない召喚方法だけど　」

「私も今、初めて知ったんだよ、アリスお姉ちゃん。みんなが教えてくれたの」

「　そう」

勝てる。私たちが力を合わせれば。

「バトル！“青眼の神龍”で“A・ジェネクス・トライアーム”を攻撃！ゴッド・シャイニング・ストリーム！」

「！」

ロボット LP 1200

神々しい光り輝く息吹が“A・ジェネクス・トライアーム”を吹き飛ばした。

「私はこれでターンエンド！」

「私のターン。永続罫“リミット・リバース”発動。墓地の攻撃力1000以下のモンスターを特殊召喚する。

“A・O・J サイクル・リーダー”を特殊召喚」

ATK/1000

「“A・O・J アンリミッター”を召喚」

ATK/600

「レベル2の“A・O・J アンリミッター”に、レベル3の“A・O・J サイクル・リーダー”をチューニング！シンクロ召喚！“A・O・J カスタトル”！」

ATK/2200

「バトル　　！　A・O・J　カスタトル”で“青眼の神龍”を攻撃　　！  
“A・O・J　カスタトル”が闇属性以外のモンスターとバトルする時、ダメージ計算を行わずに、そのモンスターを破壊する　　！  
無駄よ。

「“青眼の神龍”の効果発動！オーバーレイユニットを1つ取り除くことで、魔法・罫・モンスター効果の発動を無効にして、破壊する！」

「　　ッ！」

これで破壊されるのは“A・O・J　カスタトル”だけよ。

「さらに、“青眼の神龍”の効果！オーバーレイユニットを1つ使った時、場に存在するカード1枚破壊する！その伏せカードを破壊！」

「　　ぐっ」

「私のターン！」

最後のターンよ！

これで、私の勝ち！

「“青眼の神龍”でダイレクトアタック！シャイニング・ストリーム！」

「  
」!

ロボット LP 0

勝った。

「フウ  
」

「レナ!  
」

ふらふらした私の体をアリスお姉ちゃんが支えてくれた。

「お疲れ様。よくがんばったね」

「疲れた」

くらくらするよ。

「眠い」

「眠って良いよ。私に家に連れて行くから」

「ありがとう」

アリスお姉ちゃんに抱えられて、少しずつ意識が薄れていった。

side out

オレは突然現れたデュエルボードに乗っている少年を追った。オレも突然現れたんだけどね。

「お前、どこから出やがった!？」

「君の知らないところだよ。デュエルがしたいなら、オレが相手をするよ」

「面白いじゃん!じゃあ、お前に相手して貰う!」

『デュエル!』

## 第七話：神龍（後書き）

リ「今回は転校生が登場。全く得体の知れない転校生なんだけどね」  
そうですね。

リ「今回はグッチーなんだね。  
まあ良いや。そして、レナの力のお披露目だね」

エクシーズ召喚。はっきり言って、召喚すれば勝つと思います。相  
手に何もさせませんし。

リ「オレはエクシーズ召喚については詳しく知らないんだけどね。  
そして、次回はオレのライディングデュエル。相手は謎の転校生」  
更新頑張ります。

リ「で、何で出てきたの？」

はい。よくぞ聞いてくれました。

リ「何かの連絡？」

その通りです。

この小説『遊戯王5D's Magic Illusion』  
の番外的な小説を書く計画を進めています。

リ「へえ」



内容は今後また詳しく！  
では、グッチーでした。

リ、「はいはい。第八話：機皇帝スキエル。よろしくね」

第八話：機皇帝スキエル（前書き）

リ「遂に始まる機皇帝との対決」

マナ「大丈夫。リョウと私たちの絆があれば、怖いもの無しだよ！」

マハ「気負わずにいこう。必ず勝てる」

リ「第八話、始まるよ」

## 第八話：機皇帝スキエル

遡ること1時間前、オレは家にいた。家のインターホンが鳴った。

「こんにちは。リョウ」

「マリリン。久しぶりだね」

何でオレの家を知ってるのか、ということは聞かないことにした。

「話しに来たの？」

「いいえ。大事なことを伝えに来たのよ」

大事なこと？

「龍亜と龍可ってシグナーの子達が襲われるわ」

「なっ!？」

「確かな情報よ。貴方が行くなら止めはしないわ。ただし、この情報をおの人に流さないのが条件よ」

「 解ったよ」

「知らせるのは そうね、トレインって子が良いかしら」

確か、トレインは龍亜と一緒にいる。つまり、それまでは誰にも知らせるなって言ってるんだ。

「ありがとう。知らせてくれて」

「何も聞かないのね」

「聞いてほしくないでしょ？」

「ええ」

「じゃあ、オレは行くよ」

「気をつけなさい。無事を祈っているわ」

オレはソニックに乗って外へ走り出した。

それから1時間。マリンの言う通り、龍亜と龍可が襲われた。そこに介入して、オレと襲った子のデュエルが始まった。

『デュエル！』

「僕のターン!“スカイコア”を守備表示で召喚！」

DEF / 0

「カードを3枚伏せ、ターンエンド。

さあ、お前のターンだ！」

「何で龍亜と龍可を襲った？」

「それを何で知ってた？」

「見守ってたら、君が現れたんだよ。転校生？」

「キヤハハ！何だよ！解ってるんじゃない！」

「この時期に、転校生っていうのはおかしいと思ってた。それ程遠くから来た訳でもない。何者なのか、聞かせて貰おうか？」

「お前が僕に勝てたら、答えてやるよ」

上等だった。このデュエル、負けるつもりなんてさらさらない！

「オレのターン！」

SP 1

「相手場にのみモンスターが存在する場合、“特攻のマジシャン”は手札から特殊召喚できる！」

ATK / 0

「このカードが特殊召喚に成功したことにより、場の伏せカード1枚を破壊する！右端のカード！」

「右端のカードを発動！“ツイン・ボルテックス”！自分場のモンスター1体と相手場のモンスター1体を破壊する！」

「くっ」

“特攻のマジシャン”と“スカイコア”が破壊された。多分、まだ

何かある。

「スカイコア”の効果発動！このカードがカード効果で破壊された時、自分場のモンスターを全て破壊し、デッキから“機皇帝スキエル”！“スキエルT”！“スキエルA”！“スキエルG”！“スキエルC”を特殊召喚する！」

一斉に5体のモンスターを召喚した！？それも、

「機皇帝だつて！？」

「そうさ！今さら謝つても無駄だ！合体せよ！“機皇帝スキエル”！」

ATK/2200

5体のモンスターが合体し、巨大な鳥型のロボットが現れた。

「これが、機皇帝」

「キャハハ！機皇帝は無敵だ！お前に勝ち目なんてないんだよ！」

そんなことはやってみなくちゃ解らない。

「“見習い魔術師”を守備表示で召喚」

DEF/800

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「僕のターン！」

SP 2

「いけ！ “機皇帝スキエル”！そのザコを吹き飛ばせ！」

「くっ！」

“見習い魔術師”が破壊された。けど、

「 “見習い魔術師” が戦闘で破壊された時、デッキからレベル2以下の魔法使い族モンスターを特殊召喚できる。

“見習い魔術師”を特殊召喚」

DEF / 800

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

「オレのターン！」

SP 3

「 “見習い魔術師” をリリースして、マナをアドバンス召喚！」

ATK / 2000

「さらに、罨カード“賢者の秘石”を発動！マナが場に存在することによって、デッキからマハードを特殊召喚！」

ATK / 2500

「キャハハ！精霊って奴か？」

精霊まで知ってる。一体この少年は何なんだ？

「油断するな、リョウ。この機皇帝というモンスター、邪悪な気配を感じる」

「解ってる。力を借りるよ、二人とも」

「任せて！」

“機皇帝スキエル”は、5体のモンスターが合体して1体のモンスターになってる。だったら、本体を破壊すれば、

「バトル！マハード！“機皇帝スキエル”を攻撃！ブラック・マジック！」

「甘いんだよ！“スキエルG”の効果発動！攻撃対象をこのカードに変更する！」

マハードの攻撃が“機皇帝スキエル”の尻尾に向かった。炸裂する。

「“スキエルG”は、1ターンに一度、戦闘では破壊されない！」

無効になったってことか。でも、パーツを破壊すれば良い！

「なら、マナで“スキエルG”を攻撃！ブラック・バーニング！」

「チッ！」



これで盾はなくなった。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「僕のターン！」

SP 4

「スキエルG”を召喚！」

DEF / 300

機皇帝のパーツが召喚され、“機皇帝スキエル”と合体した。こうして合体を繰り返して、強くなる訳か。

「バトル！ “機皇帝スキエル”で、“ブラックマジシャンガール”を攻撃！」

「きゃあああっ！」

「うああっ！」

リヨウ LP 3800

普通のデュエルにはない衝撃がオレを襲った。これは、闇のデュエル。

「キャハハ！痛いだろ！精々気をつけるんだね！」

「そっくりそのまま君に返すよ。」

畏発動!“奇跡の残照”！戦闘で破壊されたマナを特殊召喚する！

ATK/2000

「チッ！ターンエンドだ」

「オレのターン！」

SP 5

「大丈夫？マナ」

「うん。平気　　なんだけど」

「どうしたの？」

「何だか不気味。上手くは言えないんだけど」

「そっか。気をつけよう」

不気味な感覚は、多分マナだけが感じてる訳じゃない。マハードも  
そうだし、オレもそう。十字傷はずっと疼いている。

様子見なんてしない方が良く。一気にいく！

「チューナーモンスター“マジシャンズ・シンクロン”を召喚！」

ATK/0

「待て！リョウ！」

「遊星？」

オレと転校生が走ってる道路から橋を1つ挟んだ向こう側に遊星がいる。ジャックさんとクロウさんもいる。

「機皇帝を相手にシンクロで対抗するのは無理だ！吸収されるぞ！」

「だからって、このままやられるのを待つのは御免だよ、遊星。

オレは今まで絆を信じて闘ってきた。そして、その想いはこれからも変わらない！」

さあ、いくよ。

「レベル7のマハードに、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング！

黒き魔術が集いし時、新たな光の力が目覚める。光差す希望と為れ！シンクロ召喚！舞い降りよ！“SF ブラックマジシャン”！」

ATK / 2900

「キャハハハハ！結局シンクロかよ！だからお前らはダメなんだよ！」

「何のこと言ってるか知らないけど、デュエルを続けさせて貰うよ。魔法使い族シンクロモンスターのシンクロ素材となったことで、“マジシャンズ・シンクロン”は場に戻る」

ATK / 0

「さらに、レベル6のmanaに、レベル1の“マジシャンズ・シンクロン”をチューニング!

黒き魔術が交わりし時、新たな絆の幕が開く。光差す希望と為れ! シンクロ召喚! 舞え!“SF ブラックマジシャンガール”!“

ATK / 2400

「キャハハハハ! くだらないね!”

シンクロキラーならそう思うかもしれない。だけど、それは早計だね。

「マハードは、場に“SF”と名の付くモンスターが存在する場合、相手モンスター全てに攻撃することができる!

マハード!“スキエルG”に攻撃!”

「だから甘いんだよ! カウンター毘“攻撃の無力化”! バトルフェイズを終了させる!”

攻撃が通れば、機皇帝を瓦解させられたんだけど。

「ターンエンド!”

「僕のターン!”

SP 6

「シンクロモンスターを召喚したことを後悔させてやる!“機皇帝スキエル”の効果発動! 相手場のシンクロモンスター1体を吸収する!”

お前の精霊とか言う、「SF ブラックマジシャン」を頂く！」

マハードがオレを見詰める。オレはマハードに笑いかけた。

「畏発動！ “亜空間物質転送装置”！オレの場に存在するモンスター1体を、エンドフェイズまでゲームから除外する！」

マハードが機皇帝に囚われる前に、場から姿を消した。

「チツ！小癩なマネしやがって！」

「そつえば、口が悪いね、転校生。同じクラスのトレインを見習うべきだよ」

「バカにするな！畏発動！ “スカイA3”！場の“スキエルA”を墓地に送り、手札から“スキエルA3”を特殊召喚する！」

“機皇帝スキエル”と合体する。

ATK / 2400

攻撃力が上がった。

「さらに、“スキエルA3”をリリースして、“スキエルA5”を特殊召喚！」

ATK / 2600

さらに上がった！？

「スキエルA5”が合体した“機皇帝スキエル”は、ダイレクトアタックができる！くらえ！」

「うああああっ！」

リヨウ LP 1200

ダメージの衝撃がオレを襲う。体制を崩しかけた。

「くっ  
」

「リヨウ！大丈夫！？」

「大丈夫。このくらい何でもないよ」

体制を立て直して、前を見る。“機皇帝スキエル”を倒す。

「チッ！ターンエンドだ！」

「エンドフェイズ、マハードが場に戻ってくる！」

フッと、息を吐き出した。手をデッキの上に置く。

「オレのターン！」

SP 7

「“SP エンジェルバトン”発動！SPカウンターが2つ以上ある時、デッキからカードを2枚ドロし、1枚を墓地に送る！  
さらに、マナの効果発動！墓地の“SP エンジェルバトン”を除

外して、効果を発動する！カードを2枚ドロし、1枚を墓地に送る！」

これで、準備は整った！

「墓地の光属性チューナー“マジシャンズ・シンクロン”と、闇属性チューナー“ネクロ・マジシャン”をゲームから除外！  
光と闇が混濁する狭間より姿を現せ！ツインチューナー！“幻惑のカオス・マジシャン”！」

ATK/0

「“ネクロ・マジシャン”がゲームから除外された時、オレはカードを1枚ドロする。

さあ、いくよ」

「ああ」

「うん」

境地へ。

【我等、三位一体と成る】

【生まれし秋は違えど、死するその秋まで、我等は一つ】

【願わくば、我等が志を遂げるその日まで】

【いつ。共に】

スピリチュアル・クロス

「レベル8、シンクロモンスターのマハードと、レベル7、シンクロモンスターのマナに、レベル4の“幻惑のカオス・マジシャン”をツインチューニング!

集いし光と闇の結晶が、新たな次元への幕を開く。光差す希望と為れ!

クロスシンクロ!闇の結晶!“SF ダークネス・マジシャン”!

ATK / 3500

「光の結晶!“SF シャイニング・マジシャン・ガール”!

ATK / 3000

「クロスシンクロだと!?何だよ、それ!”

「オレたちが手に入れた力だ!この力で、オレたちは機皇帝を倒す!”

マハードとマナが、静かに杖を向けた。

「マハードの効果!1ターンに一度、相手モンスター1体の効果を無効にする!”

「残念だったな。“機皇帝スキエル”は効果の対象にはならない!”

「知ってるよ。だから、オレは“スキエルG”の効果を無効にする!”



「畏発動！ “ゴースト・コンバート”！墓地の機械族モンスター1体を除外することで、モンスター効果、魔法、畏の発動を無効にして破壊する！  
消える！精霊！」

「墓地の“魔術の守護者”をゲームから除外することで、魔法使い族モンスターの破壊を無効にする！」

マハードは破壊させない！

「チッ！くたばりぞこないが！」

でも、マハードの効果は無効。このまま攻撃しても、機皇帝の防御を突破できない。なら、

「マナの効果発動！デッキの上からカードを3枚墓地に送り、可能ならその3枚のうち1枚のカード効果を発動できる！」

オレが墓地に送ったカードは、“魔術師集結”、“メテオ・レイン”、“マジシャンズ・バリア”の3枚！“メテオ・レイン”の効果を使う！オレのモンスターは貫通効果を得る！」

これでダメージを与えられる！

「マハードの第二の効果！ダークエンド・ドレイン！マナの攻撃力の半分を得る！」

ATK / 5000

「バトル！マハード！ “スキエルG”を攻撃！ダークエンド・イリ

ユージョン・マジック!」

「させるか!畏カード“カードディフェンス”!手札1枚を墓地に送り、戦闘ダメージを0にする!」

防がれた。でも、まだ攻撃は終わってない!

「マナ!もう一度“スキエルG”に攻撃!シャイニング・イリュージョン・マジック!」

「チイツ!」

ルチアーノ LP 1300

ATK/2400

よし。やっとダメージを与えた。“スキエルG”も破壊して、盾もなくなった。ただ、

「ダメージはあんまり効いてなさそうだね?」

「ケツ!さあな」

まあ、別に良いか。

「マナの効果!シャイニング・リバーズ!墓地がゲームから除外されたカード1枚を手札に戻す!

墓地の“マジシャンズ・バリア”を手札に戻す!」

伏せることはできないけどね。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「僕のターン！」

SP 7

「スピードワールド2”の効果発動！SPカウンターを7つ取り除き、カードを1枚ドロウする！

“スキエルC3”を召喚！」

違うパーツが召喚され、さらに合体する。

ATK / 2800

「スキエルC3”をリリース！“スキエルC5”を特殊召喚！」

さらに合体する。

ATK / 3000

マナの攻撃力と同じまでパワーアップした。

「機皇帝スキエル”の効果発動！“SF ダークネス・マジシャン”を吸収する！」

「マハードは渡さない。そう言った筈だよ。  
マハードの効果発動！相手ターンに一度、エンドフェイズまでゲームから除外できる！」

再び、マハードを捕らえかけたけど、マハードは姿を消して躲した。

「クソツ！また避けやがった！」

「悪いね」

「まだ終わっちゃいねえ！“機皇帝スキエル”はダイレクトアタックできる！これで死んじまえ！」

「畏発動！“ガード・ブロック”！戦闘ダメージを0にして、カードを1枚ドローする！」

「甘いんだよ！畏発動！“ゴーストコンバート”！その畏は無効だ！」

「甘いのはそっちだよ。二度同じ手は通じない！カウンター畏“白銀の閃光 シルバー・マジック”！“ゴーストコンバート”の発動を無効にする！」

「何だと！？」

これで攻撃は通らない。そして、

「エンドフェイズ、マハードは再び場に戻ってくる！」

闇の次元からマハードが姿を見せた。

「さあ、ファイナルターンだ。転校生」

「くっ」

「オレの」

「そこまでだ」

不意にオレの前方に現れた大きな人。咄嗟にソニックを停めた。

「誰？」

「このデュエルは中断させて貰う」

「邪魔すんな、ホセ！」

「この者がこれ程の力を持っているとは想定外だ。今はまだ時期尚早。退くぞ」

「チエツ。解ったよ」

「ねえ。オレを無視して話が進んでるけど、貴方は？」

「ホセだ。悪いが、このデュエルは中断させて貰う」

「それは構わないけど、代わりに質問に答えて」

「何だ？」

「何者だ？」

得体の知れない相手。機皇帝を使ってるのはもちろんだけど、不可解な点が多過ぎる。

「お前」ごときに答える必要はないね！」

「デュエルから逃げる転校生は少し黙ってて」

「何だと!？」

「君が答えてくれるなら構わないよ？」

「静かにしている。今のデュエルはお前が負けていた」

「そんな訳あるか!まだ負けてなかった!」

「もう良い。その間にはいずれ答えよう。また会うことがある筈だ」

「  
解った」

二人が消えた。オレ一人残された。

『逃がして良かったのか?』

「うん。でも、あの二人は何か企んでるね」

『敵かな?』

「敵だろうね。シンクロを忌み嫌ってるみたいだけど」

『目的もはっきりしない。解らないことが多いな』

「いずれ、解るよ」

『さっきの言葉、信じてるの?』

「どうだろ? だけど、何かそう思う」

『そうだな』

十字傷の疼きは既に止まってる。  
遊星達が近付いて来た。

「リヨウ! 大丈夫か?」

「うん。大丈夫。大したことないよ」

「機皇帝を操っていた奴は?」

「逃げたよ。もういない」

「勝っていたな、今のデュエル」

「多分、勝てたでしょうね。だけど、デュエルは最後まで解りませ  
んよ」

「で、あのシンクロは何だ?」

クロウさんの質問を、オレは適当に流した。

「答えねえか?」

「話す必要があるとは思えません。聞きたければ、遊星にでも」

「リヨウ。アリスちゃんから連絡が入ってたみたいだよ」

「繋いで」

「リヨウ！連絡繋がらなかったみたいだけど」

「ちょっとね。どうかした？」

「うん。実は」

レナが襲われた。大事にはなっていない。今は疲れて眠ってるらしい。アリスが傍にいてくれる。

オレたちの周りで、何か起きてる。その何かは解らないけど、確実に何かがある。



## 第八話：機皇帝スキエル（後書き）

リ「結局、ホセって人の介入で勝負着かず、か」

遊「やはり機皇帝に対抗するには、シンクロを越えた力が必要か」

リ「大丈夫だよ。遊星なら必ず境地に辿り着ける。

さて、次話から物語はアカデミアへ。それも各校揃って」

遊「オレたちも参加する」

リ「WRGPに向けて動き出したんだね。アカデミアも参加するみたいだし、その為に合宿をすることになったんだよ」

番外編に向けても動き出していますよ。

遊「どこから出て来た？」

舞台は過去の世界。世界を破壊する為、動き出した謎の男。その動きを阻止すべく、タイムスリップ。出会ったのは。

リ「という内容だよ。オレと遊星は番外編でもがんばります」

遊「ああ」

リ「では、第九話：合宿。よろしくね」

## 第九話：合宿（前書き）

リ「さてさて、遅くなりましたが、漸く更新です」

マハ「そして、これからアカデミアでの合宿が始まる」

マナ「でも、リョウらしくなくてね」

マハ「合宿に参加すること自体、渋っていたからな」

リ「オレは WRGPに」

マハ「第九話、開始だ」

## 第九話：合宿

side トレイン

リヨウさんがルチアーノ君とデュエルした次の日から、ルチアーノ君は姿を消した。みんなは覚えてさえない。記憶が抜け落ちてた。リヨウさんや龍亜たちは解ってたけど。

もうすぐ1学期が終わり、夏休みになる。そんな日だった。僕とレナに、連絡が入った。

『久しぶりね。元気にしているかしら？』

「ローラ！久しぶり〜！」

『ふふ、元気そうね、レナ』

「お久しぶりです。ミステイさん。どうかしましたか？」

『貴方たち、ネオドミノシティにいるのよね？』

「そっだよ〜」

『私も行くことになったの。お休みなよ』

「遊ぼう！ローラ！」

『ええ。どこか行きたいかしら？』

「ん〜 アリスお姉ちゃんとリヨウお姉ちゃんたちってどこに行くんだっけ？」

「確か、シティ内最大の旅館だね。ライディングコース設備が最高って話だけど」

『あら？リヨウとアリスを知っているの？』

「あれ？ローラも？」

『そのようね。何かあるのかしら？』

「アカデミアでライディングデュエルのできる生徒を集めて合宿するそうです。WRGPのチームを編成する為とか」

『レナはそれを見たいのね？』

「それもあるけど、温泉に入りたい！」

『温泉？良いわね』

「でしょ！ローラ、一緒に行こ！」

『ええ。良いわよ』

「ですが、アカデミアの貸し切りになるんじゃない？」

『私が何とかするわ。そうね、私の友人にも連絡してみようかしら』

「ミスティさんは一度言い出すと止まらない。でも、リヨウさんたち

のライディングデュエルは見たいな。

side out

side 遊星

オレはガレージでアキのDホイールを整備している。アキもずいぶん乗れるようになった。

対するオレはスピードがまるで上がらない。マシンの開発も今ひとつだ。

このままでは、WRGPを優勝できない。機皇帝にも対抗できない。どうすれば、

「はい、十六夜です」

アキに誰かから連絡が入ったようだ。モニターに映し出される。

「お久しぶりね、アキ」

「ミスティ!？」

ミスティ。かつてダークシグナーとしてアキと争ったが、互いに誤解を解いたんだっただな。

『急な話だけど、ライディングデュエルはしているようね。アカデミアの合宿には参加するのかしら?』

アカデミアの合宿。アカデミアからWRGPに1チーム参加させる

らしい。その為の合宿だ。

「いえ。まだ始めたばかりなのよ。私は呼ばれていないわ」

『そう。なら、私と旅行に行きましょう。合宿の日』

「そんなことできるの？」

『ええ。既に予約済みよ？』

貸し切りという話だったが、ミスティが何とかしたのか？

これはチャンスかもしれない。

「ミスティ」

『あら。遊星』

「話に割り込んで済まない。その旅行、オレたちも参加できないか？」

『ふふ。貴方の場合、ライディングデュエルに興味があるのね？』

「ああ。参加できるかは解らないが」

『大丈夫よ。私が話を通してあげるわ。何人で予約すれば良いかしら？』

「三人追加してくれ」

『アキ。貴女は？』

「私も行くわ」

『決まりね。それなら、予約しておくわ。また連絡するわね』  
通信が切れた。

オレは行き詰まっている。そして、リヨウはオレの先を走っている。追い付いてみせる。その為に、オレは強くならなければならない。

side out

夏休み。オレたちはライディングコースを走ってる。

WRGPにアカデミアから代表1チームを参加させることになった。その為の選考会として、各学園からライディングデュエルができる生徒を集めて3泊4日の合宿をすることになった。

その初日、オレたちはアップがてらにコースを走ってる。

「リヨウ」

「何？舞」

当然、舞と咲も合宿に参加してる。オレたちもだけど。

「どうしたの？みんなは前の方にいるのに」

オレは一人で最後尾を走っていた。アリスたちは最前列を走ってる。

「ちょっとね。あんまり気が乗らないんだ。この合宿」

「貴方がそんなことを言うとは思わなかったわ」

「そう?」

「何か考えごと?」

「うん」

WRGPに参加するかどうか。問題はそこだった。

本当は合宿に参加する気もなかった。でも、教頭先生に押し切られて無理に参加した。

「オレを気にしないで、舞も自由に走った方がよいよ」

「私も気になることがあるのよ」

チラリと前を見た。前には少しふらふらしながら走るDホイール。

「友達?」

「ええ。私と同じノース校の。デュエルはそれなりに強いと思うんだけど」

「ちょっと足取り悪いね。初心者?」

「ううん。そういう訳じゃないけど、怖がりっていつか」

「そっか」



舞が何を気にしてるのか知らないけど、気にする必要はないかな。

「あっ、リヨウ」

アリスたちが後ろから追い掛けてきた。ていうか、オレたち周回遅れなんだね。

「どうしたの？周回遅れなんて絶対ならないと思うんだけど」

「よっぽどやる気ねえんだな。らしくもねえ」

「悪いね。ちよっと」

スピードは皆無だからね。抜かれても仕方ない。

止めの指示が出た。指導担当の先生のところ集合する。

「あれ？」

校長先生を筆頭に、集団が近付いて来た。集団の全員を知ってるのは何でなんだろう。遊星にジャックさん、クロウさん。アキにトレイン、レナ。そして1番謎なのがミステイさん。

「みんな、ちよっと良いかの？」

校長先生が話し始めた。

「不動遊星君、ジャック・アトラス君、クロウ・ホーガン君がこの合宿に参加してくれるようになったのじゃ。みんな、よろしく頼むのじゃ」

遊星たちが合宿に参加する？校長先生のことだから何か考えがあるんだろうけど。

「済まない。世話になる」

「遊星たちはレベル高いから物足りないかもよ？」

「大丈夫だ。お前がいる」

「オレ？」

「オレたちより一歩先を行っている。追いつきたいんだ」

ポリポリと頭をかいた。高め合うことはできると思う。だけど、

「リヨウ君」

「校長先生」

「遊星君たちは客人じゃ。WRGPのことは関与しないと約束するから、遊星君たちと走ってくれんか？」

「解りました」

関係ないのなら、全力で走っても良い。校長先生に頼まれた訳だし。

「久しぶりね、リヨウ」

「ミステイさん。こちらこそ、久しぶりです」

アリスたちと話してたミスティさんが近寄って来た。トレインとレナはミスティさんと知り合いみたいだね。

「綺麗な顔に、酷い傷ができたのね」

「大事なものを護りました。その代償は、余りにも大きかったです  
が」

「そう」

悲しそうに十字傷に触れるミスティさんをジッと見ている。

「何か悩んでいるのね」

「はい。今この合宿についてですが」

「貴方の選ぶ道を信じなさい。道は切り開かれるわ」

「ありがとうございます」

ミスティさんの占いは当たる。好きなようにしてみようかな。

次はタイムレースの指示だった。もちろん遊星たちも参加する。適当に横一列に並ぶ。そして、スタートの合図。一斉に走り出した。一気に加速した。トップに踊り出た。

「やるな、リョウ」

遊星たち三人がピッタリ後ろに付いていた。啓斗たちはもう少し後

ろかな。

「後ろ気にしてる余裕あんのか？」

クロウさんが詰め寄って来た。遊星とジャックさんもすぐ後ろにいる。

「ハハ」

楽しい。全力で走るのは、やっぱり楽しい。

『いつものリョウだね』

「ごめんね。窮屈な思いさせて」

『気にするな。それより、いくか？』

「うん。一緒に走ろう」

目を閉じた。その隙に三人に抜かれたけど、気にせずに集中した。

三人一緒に　。

スピリチュアル・クロス

目を開けた。加速する。

「来たか　」

加速したままカーブに突っ込んだ。勢いそのままジャックさんを抜く。

次のコーナーでクロウさんを抜いた。遊星はオレの隣を走ってる。そのままゴールまで走り抜けた。遊星と同着かな。

「ハッ　ハッ　」

「大丈夫？」

「　ああ。スピリチュアル・クロスで走ったのか？」

「そうして欲しそうだったからね。もうしないよ」

「付いて行くのがやっとか　」

オレたちは三人で走ってるのに、遊星一人で付いて来られるんだから。オレとしては驚きだよ。

「リョウ」

「ん？アリス？」

みんなも戻って来たみたいだね。

「ううん。いつものリョウだと思って」

「うん」

遊星たちが来たことがオレの良い刺激になったのかな。かと言って、WRGPに出場するのを迷ってるのが変わる訳じゃない。ミスティさんは好きにした方が良かったけど。

「オレはオレらしく」

「それが良いと思うよ」

「うん」

「リョウ君、アリスちゃん。次はくじ引きでデュエルだって」

「それって、適当に決めるってこと？由里」

「そうみたいだよ」

できれば、遊星たちとしたい。いや、誰とでも構わないから楽しいデュエルをしたい。

くじ引きが始まった。最初は、

「ネオドミノ校、リョウ！」

オレか。相手は？

「ノース校、千藤愛智！」

相手は　へえ。舞の友達の人だ。さっきオレの前を走ってた。

「よろしくね、千藤君。楽しいデュエルをしよう」

歩み寄って、手を出した。

「は、はい！よろしくお願いします！」

慌ててオレの手を取った。

「あちゃー。千藤君、よりによってリョウとなんて」

「そうかな？」

「舞？」

「千藤君にとっては良かったと思うな。リョウとデュエルすれば、千藤君の何かが変わるかもしれないよ？」

「舞はリョウとデュエルしたことがあるもんね。私もしてみたいな」

「咲もきつとできるわ。リョウならいつでもしてくれるだろうし」

「でも、何だか調子悪そうじゃない？」

「何か悩んでるみたいなの。でも、さっきの走りを見てたら大丈夫よ」

「何悩んでるんだろ？」

「なあ」

オレと千藤君は準備して走り出そうとしていた。

「うわー みんな見てますよ」

「大丈夫だよ。誰が見てようが関係ないから。気にしないで、楽しくデュエルしよう」

「は、はい」

千藤君に少し硬さが見える。オレたち以外にも他のコースでデュエルは始まるけど、ほとんどのデュエルを見てる。硬くなるのも仕方ないか。

『リヨウのデュエルはみんな見たいんだよ』

「そっ?」

『ほら。アリスちゃんたちは全員いるし、遊星さんたちも見てるよ』  
観客席を見ると、アリスと目が合った。手を振ってる。軽く振り返す。

『遊星殿はリヨウと走りたくて来たようなものだろう。そういった印象があつたな』

「遊星は進化を求めてるみたいだからね。でも、遊星なら必ず境地に辿り着く」



『そうだろうな』

「じゃ、そろそろだよ」

スタート位置に並んだ。お互いに合図を待つ。

「楽しいデュエルをしよう」

「は、はい！」

スタートの合図だ。

『ライディングデュエル！アクセラレーション！』

二人並んで飛び出した。並んだ。

『先程に比べれば、ずいぶん速いな』

「何でかは解らないけど、気合い入ってるみたいだよ」

少し硬いけどね。でも、スタートしてから硬さが大分なくなってる。第一コーナーに入る。少しスピードを上げた。第一コーナーを取った。

「オレの先攻だね」

「はい」

『デュエル！』

「オレのターン。“マジシャンズ・ヴァルキリア”を守備表示で召喚」

DEF / 1800

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「ほ、僕のターンです」

SP 1

「僕は“切り込み隊長”を召喚します！」

ATK / 1200

「“切り込み隊長”が召喚に成功した時、手札からレベル4以下のモンスターを特殊召喚できます。僕は“コマンド・ナイト”を特殊召喚します」

DEF / 1900

戦士デツキかな。

「“コマンド・ナイト”の効果で、僕の戦士たちの攻撃力は400ポイントアップします」

ATK / 1600

ATK / 1600

「カードを1枚伏せて、ターンを終了します」

「オレのターン」

SP 2

「魔導戦士 ブレイカー”を召喚」

ATK / 1600

「このカードが召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを1つ置く。そして、魔力カウンター1つにつき、攻撃力が300ポイントアップ」

ATK / 1900

「バトル!“魔導戦士 ブレイカー”で“切り込み隊長”を攻撃！」

「うっっ！」

千藤愛智 LP 3700

「ああ」

悲しそうな表情。少し目が泳いでる。

「ターンエンド。千藤君のターンだよ」

「あっ、は、はい。僕のターン」

SP 3

「僕は“翻弄するエルフの剣士”を守備表示で召喚します」

DEF / 1200

「ターンを終了します」

「オレのターン」

SP 4

さっきの反応 確かめてみようかな。

「魔導戦士 ブレイカー”の効果発動！魔力カウンターを1つ取り除くことで、場の伏せカードを1枚破壊する。君の伏せカードを破壊させて貰うよ」

「破壊されたカードは“リミッター・ブレイク”です！このカードが破壊された時、デッキから“スピード・ウォリアー”を特殊召喚します！」

DEF / 400

へえ。出し抜かれたな。

「魔導戦士 ブレイカー”をリリース、“カオス・マジシャン”をアドバンス召喚！」

ATK / 2400

「マジシャンズ・ヴァルキリア”を攻撃表示に変更」

ATK/1600

「バトル！ “マジシャンズ・ヴァルキリア”で“翻弄するエルフの剣士”を攻撃！」

「ああ！」

「さらに、“カオス・マジシャン”で“スピード・ウォリアー”を攻撃！」

「ああ」

やっぱり。しょんぼりした顔。この人は、

「ね、千藤君」

オレは少しスピードを抑えて、千藤君に近寄った。

「は、はい」

「君は、モンスターが破壊されるのが辛い？」

「えっ？」

「辛い？ 嫌い？」

「辛いし、嫌です。僕の為に闘ってくれてるモンスターが傷付

くのは」

やっぱり。舞は何となくかもしれないけど、気付いてたんだ。だから気にしてた。

「その気持ち、オレもよく解るよ」

「そうなんですか？みんなは僕のことをバカにするのに」

「オレもだよ。嘘じゃない。

ただね、千藤君。君はちよつとだけ間違ってる」

「えっ　？」

「モンスターの気持ちを考える君の気持ちは正しいよ。だけど、少しだけ独りよがりになってる」

「　　どういふことですか？」

「モンスターの気持ちを考えてるけど、ちゃんと解ってあげられてないんだ。君はモンスターが傷付くことを嫌ってるけど、モンスターは君のことをどう思ってるのかな？」

「　　そんなの、解りません」

「君はきつと、モンスターだけに闘わせてる。そう思ってるかい？」

「　　違つんですか？」

「うん。違つよ。オレたちは闘えないけど、モンスターだって一人

じゃ闘えない。オレたちの助けを必要とする」

「あっ」

「そう。モンスターたちが闘ってるように、オレたちも一緒に闘ってるんだ。オレたちとモンスターたちは一蓮托生なんだよ」

「はい」

「モンスターたちは、何よりも君が勝つことを望んでる。だから、傷付くことを厭わない。その先に勝利があると信じてるから」

「僕の勝利を」

「君にモンスターとの信頼関係があるのなら、きっとそう望んでると思うよ」

笑いかけた。少しスピードを上げて、また前に出た。

「さあ、デュエルを再開しよう。ここからが本当のデュエルだ。オレもモンスターたちの期待に応える為に、全力で勝利を目指す。君のターンだ」

「いきますー！」

目に力が宿った。良い目になった。ここからだね。

「僕のターン！」

「“ジユツテ・ナイト”を召喚します！」

ATK/700

チューナーモンスター。シンクロ召喚か。

「レベル4の“コマンド・ナイト”に、レベル2の“ジユツテ・ナイト”をチューニング！

立ち上がれ！僕の分身！

シンクロ召喚！“大地の騎士ガイアナイト”！」

ATK/2600

「なるほど。そのモンスターが、君のエースモンスターだね」

「いきます！“ガイアナイト”で、“マジシャンズ・ヴァルキリア”を攻撃します！」

「くっつ！」

リヨウ LP 3000

「カードを2枚伏せ、ターンを終了します」

「オレのターン！」

SP 6

「“SP スピード・エナジー”発動！SPカウンターが2つ以上



ある時、SPカウンター1つにつき攻撃力を200ポイントアップさせる！

オレのSPカウンターは6！」

ATK / 3600

「カオス・マジシャン」！ “大地の騎士ガイアナイト” に攻撃！

「うわああっ！」

千藤愛智 LP 2700

倒した。でも、千藤君の目はまだだと叫んでる。

「畏カード“奇跡の残照”！ “ガイアナイト”を復活させます！」

ATK / 2600

「オレは“見習い魔術師”を守備表示で召喚して、ターンエンド」

DEF / 800

「僕のターン！」

SP 7

「“スピードワールド2”の効果発動！SPカウンターを7つ取り除くことで、カードを1枚ドロウします！」

千藤愛智 SP 0

「僕は“融合呪印生物 地”を召喚します！」

ATK/1000

「このカードと融合素材モンスターをリリースすることで、地属性融合モンスターを特殊召喚します！」

“ガイアナイト”と“融合呪印生物 地”をリリース！  
降臨せよ！大地の主！“地天の騎士ガイアドレイク”！」

ATK/3500

場を駆ける進化した騎士。

「さあ、千藤君。勝負はこれからだ！」

第九話：合宿（後書き）

ア「リョウと千藤君のデュエルの途中だけど、今回はここまで」

由里「にやはは。これからは私たちもデュエルがあるよ」

ア「そうだね。啓斗とはどう？」

由里「あんまり変わってないよ。よく遊ぶようにはなったけど」

ア「そう。じゃあ、次話はリョウと千藤君のデュエルの続きからだ  
よ」

由里「次話はそれ以外のデュエルもある予定だよ」

ア「第十話：戦士と鳥。よろしくね」

## 第十話：戦士と鳥（前書き）

リ「約一月ぶりの更新です。遅くなって本当に申し訳ありません」

啓「悪いな。まあ、漸く更新だ」

リ「オレのデュエルの続きからだね」

啓「オレのデュエルもあるぜ」

リ「啓斗のデュエルは久しぶりだね」

啓「まあな。んじゃ、第十話、始まるぜ」

## 第十話：戦士と鳥

「リョウ、さっき何話してたんだろ？」

「きっと、何か大事なこと話してたんじゃないかな？」

「全く、アイツらしいっていつか何と言うか」

「でも、リョウの顔。いつもより明るい。楽しそうだよ」

「何か悩んでるようだったわ」

「うん。何かはよく解らないけど。アリスちゃん、解る？」

「多分、WRGPのことだと思うよ。出場するかどうかっていう」

「何で出ないんだよ？アイツの実力なら、この選考会の合宿なんて楽勝だろ」

「出たいとは思ってると思うんだけど」

「アリスちゃんでも解らないなら、誰も解らないね」

「でも、デュエルは楽しそうだね。千藤君も」

「ええ」

「さあ。デュエルはこれからだ！」

「いきます！ “ガイドレイク” で “カオス・マジシャン” を攻撃します！」

「畏発動！ “和睦の使者” ！このターン、オレのモンスターは破壊されず、戦闘ダメージを受けない！」

「 ターン終了です」

「オレのターン！」

リョウ SP 8

千藤愛智 SP 1

「 “魔導騎士 ディフェンダー” を守備表示で召喚！」

DEF / 2000

「このカードの召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを1つ置く。

“カオス・マジシャン” を守備表示にして、ターンエンド」

DEF / 1900

「僕のターン！」

リヨウ SP 9

千藤愛智 SP 2

「バトルです！ “ガイドレイク” で “カオス・マジシャン” を攻撃します！」

「 “魔導騎士 デイフェンダー” の効果！ 魔力カウンターを1つ取り除くことで、 “カオス・マジシャン” の破壊を無効にする！」

良し。破壊を防いだ。

「ターン終了です」

「オレのターン！」

リヨウ SP 10

千藤愛智 SP 3

引いたカードを確認する。思わず、微笑んだ。

「よく来たね。マナ」

『ごめんね、遅くなっちゃって。でも、楽しそうだね』

「楽しいよ。だからこそ、負けたくない。いける？」

『もちろん！』

「オレは “見習い魔術師” をリリースして、 “ブラックマジシャンガール” をアドバンス召喚！」

ATK / 2000

「さらに、永続罨“強化蘇生”を発動！墓地のレベル4以下のモンスター1体のレベルを1つ上げ、効果を無効にして特殊召喚する！  
“魔導戦士 ブレイカー”を特殊召喚！」

ATK / 1600

「そして、“SP スピード・フュージョン”を発動！」

「リヨウさんも融合を!?!」

「場の“ブラックマジシャンガール”と“魔導戦士 ブレイカー”  
と“魔導騎士 デイフェンダー”を融合！」

現れよ!“超魔導剣士 ブラック・パラディン・ガール”！」

ATK / 2500

「このカードの攻撃力は、墓地の魔法使い族モンスター1体につき、  
300ポイントアップ！」

オレの墓地にいるモンスターは5体！」

ATK / 4000

「“カオス・マジシャン”を攻撃表示に！」

ATK / 2400

「いけ!“ブラック・パラディン・ガール”で“地天の騎士ガイア



ドレイク”を攻撃！超魔導破弾！」

「うわああっ！」

千藤愛智 LP 2200

「これで終幕だ！“カオス・マジシャン”でダイレクトアタック！」

千藤愛智 LP 0

オレたちは観客席に戻った。

「リョウ。ナイスデュエル！」

「ありがとう。アリス」

「楽しかった？」

「うん。久しぶりに」

「愛智君。リョウとのデュエル、どうだった？」

「楽しかったです、舞さん。負けちゃいましたが」

「良かった」

「おい。次のデュエルのくじが始まってんぞ」

啓斗に促されて次の発表を待った。

「ネオドミノ校、石井啓斗！」

「なんだ、俺か」

「イースト校、セクト！」

確か、去年の対抗戦に出てた人だ。

「啓斗君、がんばって！」

「応」

啓斗が下に下りて行く。

「ジャック・アトラス！」

ジャックさんもか。

「遊星たちはジャックさんを見に行かないの？」

「あいつのデュエルは散々見てるからな。見る必要なんてねえんだ  
よ」

なるほど。そういうのはあるかも。啓斗のデュエルはオレもよく見てるけど、みんなが動きそうにないからね。

「今のデュエル、手強かったか？」

「うん。千藤君の場合、これから伸びると思うな」

「そうか。アカデミアにも良いDホイラーはいるな」

「答はまだまだ見つかってなさそうだね、遊星」

「ああ」

オレが何を言おうと、これは遊星の問題。解決できると信じて、ただ待つしかない。

『デュエル！』

始まった。第一コーナーを取ったのは啓斗。啓斗が先攻みたいだね。

side 啓斗

「俺のターン！」

こいつとは初めてのデュエルか。

「“ジャンク・ブリーダー”を召喚！」

ATK/1800

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「オレのターン！」

SP 1

「代打バッター”を守備表示で召喚するぜ！」

DEF / 1200

「カードを2枚伏せて、ターンエンドだ」

「俺のターン！」

SP 2

「“共闘するランドスターの剣士”を召喚！」

ATK / 500

「掛かったな！畏発動！“激流葬”！場にモンスターが召喚された時、場のモンスターを全て破壊する！」

チツ、面倒なことしやがって。俺のモンスターまで。

「破壊された“代打バッター”の効果発動！このカードが墓地に送られた時、手札から昆虫族モンスターを特殊召喚できる！  
来い！最強インクセト！“ポセイドン・オオカブト”！」

ATK / 2500

まあ、悔やんでも仕方ねえか。

「ターンエンドだ」

「オレのターン！」

SP 3

「甲虫装甲騎士”を召喚！」

これで俺のライフを越えたか。

「バトル!“ポセイドン・オオカブト”でダイレクトアタック！」

「ダイレクトアタックを受ける場合、手札から“ジャンク・ディフェンダー”を特殊召喚できる！」

DEF / 1800

「なら、そのまま攻撃する！」

「くっ」

「甲虫装甲騎士”でダイレクトアタック！」

「ぐっ！」

啓斗 LP 2100

「ターンエンドだ」

「俺のターン！」

SP 4

「畏発動！“ジャンク・コレクション”！俺の場にこのカードが存在しない場合、デッキから“ジャンク”モンスターを2体特殊召喚できる！

デッキから“ジャンク・アーマー”と“ジャンク・コレクター”を特殊召喚！」

ATK / 600

ATK / 1000

「さらに“SP エンジェルバトン”発動！SPカウンターが2つ以上ある時、カードを2枚ドローし、1枚墓地に送る。手札から“ジャンク・シンクロン”を召喚！」

ATK / 1300

「このカードが召喚に成功した時、墓地のレベル2以下のモンスター1体を守備表示で特殊召喚できる。

墓地から“ネジマキの見習い戦士”を特殊召喚！」

DEF / 800

「レベル2の“ジャンク・アーマー”に、レベル3の“ジャンク・シンクロン”をチューニング！

シンクロ召喚！来い！“スカー・ウォリアー”！」

ATK / 2100

「さらに、レベル5の“ジャンク・コレクター”に、レベル2の“ネジマキの見習い戦士”をチューニング！  
受け継がれし魂が、光となって駆け昇る！  
シンクロ召喚！光来せよ！“ライトニング・ウォリアー”！」

ATK / 2400

「2体もかよ!?」

受けたダメージは返してやらねえとな。

「SP シンクロ・クロス”を発動！SPカウンターが2つ以上ある時、場のシンクロモンスター1体につき、モンスター1体の攻撃力を300アップだ！

“ライトニング・ウォリアー”の攻撃力を上げる！」

ATK / 3000

「バトル！“ライトニング・ウォリアー”で“ポセイドン・オオカブト”を攻撃！ライトニング・パニッシャー！」

「うわああっ！」

セクト LP 3500

「“ライトニング・ウォリアー”が相手モンスターを破壊した時、俺の手札1枚につき300のダメージを与える！  
俺の手札は3枚！900のダメージを受けて貰う！」

「ぐわっ！」

セクト LP 2600

「ただだぜ。“スカー・ウォリアー”で“甲虫装甲騎士”を攻撃！」

「うわあああっ！」

セクト LP 2400

良し。これで状況が一変したな。

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「くそ！オレのターンだ！」

SP 5

「墓地の昆虫族モンスターを2体除外して、“デビルドージャー”特殊召喚！」

ATK/2800

「バトル!“デビルドージャー”で“ライトニング・ウォリアー”を攻撃！」

「畏カード“ジャンク・シールド”！戦闘での破壊を無効にし、受ける戦闘ダメージを相手に与える！」

「うわっ！」



セクト LP 2000

「くそ！ターンエンド！」

「俺のターン！」

SP 6

ラストターンだ！

「ガントレット・ウォリアー”を召喚！」

DEF / 1600

「ガントレット・ウォリアー”をリリースすることで、場の戦士族モンスターの攻撃力を500アップさせる！

俺は“ガントレット・ウォリアー”をリリース！」

ATK / 2900

ATK / 2600

「いけ！“ライトニング・ウォリアー”！ライトニング・パニッシャー！」

「うわっ！」

セクト LP 1900

「“ライトニング・ウォリアー”の効果！俺の手札は2枚だ！」

「うわっ！」

セクト LP 1300

「止めだ！ “スカー・ウォリアー” でダイレクトアタック！」

「ぐわあああっ！」

セクト LP 0

うっし。勝ったぜ。

side out

啓斗が勝って戻ってきた。

「お疲れ様、啓斗君」

「応」

次は誰かな？

『ノース校、美庄舞！』

次は舞か。

『サウス校、香！』

「じゃあ、行つて来るわ」

「舞！がんばって！」

『ノース校、立花咲！』

「ありや。私もだ」

『ネオドミノ校、芳光弥生！』

あの人か。

「じゃあ、私も行つて来るね」

「がんばってね、咲」

二人のデュエルを見るのは久しぶりかな。

「リョウさん」

「アリスお姉ちゃん！」

「あれ？トレインにレナ。どうしたの？」

「見に来たの。ちょっと遊んでただけど、デュエルが始まったみたいだから」

「オレのデュエルはもう終わっちゃったけどね」

「そうなんですか。残念です」

「明日からもまたあるから。それに、アリスのデュエルはまだだよ」

「ホント？やった！」

「ミスティさんとアキは？」

「まだ何か話してたよ」

「これからデュエルする人は知り合いですか？」

「そうだよ」

さ、舞と咲はどうなってるかな。舞の方が先に始まっている。先攻は舞みたいだね。

side 舞

私のターンからデュエルが始まる。

「私のターン！“ドラグニティ トリプル”を召喚！」

ATK/500

「このカードが召喚に成功した時、デッキからレベル3以下のドラゴン族モンスター1体を墓地へ送る。私は“ドラグニティ ファラックス”を墓地へ。」

そして、カードを2枚伏せて、ターン終了」

「私のターンよ！」

S P 1

「アマゾネスの聖戦士”を召喚！」

A T K / 1 7 0 0

「このカードの攻撃力は場の“アマゾネス”1体につき、100ポイントアップするわ！」

A T K / 1 8 0 0

「バトルよ！“アマゾネスの聖戦士”で“ドラゲニティ トリプル”を攻撃！」

「畏発動！“フローラル・シールド”！攻撃を無効にして、カードを1枚ドローする」

「ふうん。カードを1枚伏せて、ターンエンドよ」

「私のターン」

S P 2

「私は場の“ドラゲニティ トリプル”をリリースして、“ドラゲニティ プリムス・ピルム”をアドバンス召喚！」

A T K / 2 2 0 0

「このカードが召喚に成功した時、デッキからレベル3以下の“ドラグニティ”を装備できる。デッキから“ドラグニティ コルセスカ”を装備するわ」

これで、私は闘える。

「バトル！ “ドラグニティ プリムス・ピルム”で“アマゾネスの聖戦士”を攻撃！」

「くっ！」

香 LP 3600

「ドラグニティ コルセスカ”を装備したモンスターが相手モンスターを破壊した時、同種のモンスターをデッキから手札に加える。私は“ドラグニティ ドウクス”を手札に加えるわ」

「畏カード“奇跡の残照”を発動して、“アマゾネスの聖戦士”を場に戻す」

ATK/1800

「ターン終了よ」

「私のターン！」

SP 3

「“復讐の女戦士ローズ”を召喚！」

ATK / 1600

「レベル4の“アマゾネスの聖戦士”に、レベル4の“復讐の女戦士ローズ”をチューニング！  
シンクロ召喚！“ギガンテック・ファイター”！」

ATK / 2800

「このカードの攻撃力は墓地の戦士族モンスター1体につき、10ポイントアップするわ」

ATK / 3000

「いくわよ！“ギガンテック・ファイター”で“ドラグニティプリムス・ピルム”を攻撃！」

「きゃっ！」

舞 LP 3200

「ターン終了よ」

「私のターン」

SP 4

「私は“ドラグニティ ドウクス”を召喚！」

ATK / 1500

「このカードが召喚に成功した時、墓地の“ドラグニティ”を装備できる。」

墓地の“ドラグニティ ファランクス”を装備するわ。

そして、装備された“ドラグニティ ファランクス”は、装備カードとなっている場合、特殊召喚できる」

ATK/500

「さらに、場にモンスターが特殊召喚された時、手札の“速足のグリーンバード”を特殊召喚できる！」

ATK/200

準備は整ったわ。さあ、私の精霊、フラッピ。お願いね。

「レベル2の“速足のグリーンバード”とレベル4の“ドラグニティ ドウクス”に、レベル2の“ドラグニティ ファランクス”をチューニング！」

息吹け！天より降り注ぐ優雅な星よ、勇気を運べ！

シンクロ召喚！大地に薫る風！“The Rainbow Comet”！」

ATK/2700

フラッピと軽く顔を合わせて笑い合う。一緒にがんばろうって。

「1ターンに一度、墓地のモンスター1体を装備できる。私は墓地の“ドラグニティ コルセスカ”を装備！」

『ブイー…』



フラッピが強く声を上げる。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン！」

SP 5

「貴女のエースモンスター、粉碎してあげるわ！」

バトル！“ギガンテック・ファイター”で“The Rainbow Comet”を攻撃！」

「The Rainbow Comet”は装備カードを墓地へ送ることで、破壊を無効にするわ」

舞 LP 3000

「“荒野の女戦士”を守備表示で召喚して、ターンエンドよ」

「私のターン」

SP 6

「大丈夫？フラッピ」

『ピィ』

大丈夫みたいね。良かった。

「The Rainbow Comet”の効果発動！墓地の“ドラグニティ ファランクス”を装備！  
そして、装備された“ドラグニティ ファランクス”の効果で、特殊召喚！」

ATK/500

「そして、“ドラグニティ ファランクス”をリリースして、“風帝ライザー”をアドバンス召喚！」

ATK/2400

「このカードが召喚に成功した時、場のカード1枚をデッキに戻す！  
“ギガンテック・ファイター”をデッキに戻すわ！」

「ああっ！」

「さらに、罨発動！“ユナイティ”！墓地の“ドラグニティ”を1体装備できる！」

“The Rainbow Comet”に“ドラグニティ コルセスカ”を装備！」

これで状況は変わったわ！

「バトル！“風帝ライザー”で“効果の女戦士”を攻撃！」

「くっ！“荒野の女戦士”が破壊された時、デッキから攻撃力1500以下の地属性戦士族モンスター1体を攻撃表示で特殊召喚できる。」

“荒野の女戦士”を特殊召喚」

ATK / 1100

「The Rainbow Comet」で攻撃！エターナル・ストーム！」

「きゃああっ！」

香 LP 2000

「くっつ！“荒野の女戦士”が破壊されたことで、“荒野の女戦士”を特殊召喚」

「ドラグニティ コルセスカ”を装備したモンスターが相手モンスターを破壊したことで、デッキから“The Rainbow Comet”と同種のモンスターをデッキから手札に加える。

“ドラグニティ レギオン”を手札に加えるわ」

ATK / 1100

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「私のターンよ！」

SP 7

「“荒野の女戦士”をリリースして、“アマゾネス女王”をアドバンス召喚！」

ATK / 2400

「バトル!“アマゾネス女王”で“風帝ライザー”を攻撃！」

攻撃力は同じだけど、“アマゾネス女王”は戦闘では破壊されない。だから破壊されるのは“風帝ライザー”だけ。

「ターンエンドよ」

「私のターン」

SP 8

このターンで決めるわ。

「私は“ドラグニティ レギオン”を召喚！」

ATK/1200

「このカードが召喚に成功した時、墓地の“ドラグニティ”を装備できる。墓地の“ドラグニティ ファランクス”を装備！」

そして“ドラグニティ レギオン”の効果！魔法・罠ゾーンに置かれている“ドラグニティ”を墓地に送ることで、相手モンスター1体を破壊する！“アマゾネス女王”を破壊！」

「しまっ  
」！」

これで、場はがら空きね。

「終わりよ!“The Rainbow Comet”でダイレクトアタック！エターナル・ストーム！」

「きゃああああっ！」

香 LP 0

よし。勝ったわ。

side out

第十話：戦士と鳥（後書き）

舞「私のデュエルで第十話は終わりよ。次話は咲のデュエルからね」

咲「がんばるよー！」

舞「そして、一日は過ぎていって」

咲「温泉に入ろう！ここの旅館の温泉って凄く良いんだって！」

舞「ええ。みんなで一緒に」

咲「という訳で、第十一話：お告げ。よろしくね」

第十一話：お告げ（前書き）

咲「今回は私のデュエルだよ」

舞「がんばってね、咲。」

デュエルの後はみんなで汗を流そうってことになったわ」

咲「みんなでお風呂だよ！」

舞「男湯だと二人の想いが語られてるみたいよ」

咲「そんなこんなで第十一話、始まるよ！」

## 第十一話：お告げ

side 咲

私のデュエルが始まる。相手はネオドミノ校の知らない人か。

「私、立花咲！よろしくね」

「ええ。よろしく」

二人でスタートラインに並び、合図で一緒に飛び出した。第一コーナーは私が先に入った。私が先攻だね。

『デュエル！』

「私のターン！」 ナチュル・ホーストニードル”を召喚！」

ATK / 1800

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン」

SP 1

「私は“白魔導士ピケル”を召喚！」

ATK / 1200



「カードを3枚伏せて、ターン終了」

「私のターン！」

SP 2

伏せカードが多いな。なら、

「“ナチュル・トライアンフ”を召喚！」

ATK / 600

「レベル4の“ナチュル・ホーストニードル”に、レベル2の“ナチュル・トライアンフ”をチューニング！  
シンクロ召喚！“ナチュル・パルキオン”！」

ATK / 2500

「バトル！」

「バトルフェイズ前に、畏カード“和睦の使者”を発動するわ」

「残念！“ナチュル・パルキオン”は畏カードが発動した時、墓地のカードを2枚除外することで発動を無効にする！

バトル！“ナチュル・パルキオン”で“白魔導士ピケル”を攻撃！」

「永続罠“グラヴィティ・バインド 超重力の網”を発動！レベル4以上のモンスターは攻撃できない！」

墓地にカードはない。無効にできない。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

ロツクかな。やりにくい。

「私のターンよ」

S P 3

「スタンバイフェイズ、“白魔導士ピケル”の効果。私のモンスター1体につき、400ポイントライフを回復」

芳光弥生 LP 4400

「“ビツクバンガール”を召喚」

ATK / 1300

「カードを1枚伏せて、ターン終了」

「私のターン」

S P 4

さて 攻撃できないし。

「“ナチュラル・マロン”を召喚！」

ATK / 1200

「このカードが召喚に成功した時、“ナチュル”モンスター1体をデッキから墓地へ送る。デッキから“ナチュル・スパイダーファング”を墓地へ。」

バトル!“ナチュル・マロン”で“白魔導士ピケル”を攻撃!”

「相打ち狙い?」

まさか。

「畏発動!“ストライク・ショット”!攻撃宣言時に、攻撃力が700ポイントアップ!”

「きゃっ!」

芳光弥生 LP 3700

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン」

SP 5

「“スピードワールド2”の効果発動!SPカウンターを4つ取り除いて、手札の“SP”1枚につき800ポイントのダメージを与える!私の手札にある“SP”は1枚よ」

芳光弥生 SP 1

「きゃっ!」

咲 LP 3200

やっぱり、この展開はロックデッキのパターン。早く何とかしないと。

「白魔導士ピケル”をもつ一度召喚」

ATK/1200

「ターン終了」

「私のターン」

咲 SP 6

芳光弥生 SP 2

さあ、いくよ！

「ナチュル・マロン”をリリースして、“The Protean Moon”をアドバンス召喚！」

ATK/2000

『キユ！』

「うん。がんばろう！」

まだまだ！

「SP “未来への扉”を発動！SPカウンターが6個以上ある時、

自分のデッキの上から5枚カードを墓地に送る！

墓地に送ったのは“ナチュル・コスモビート”、“ナチュル・クリフ”、“棘の壁”、“エンジェル・リフト”、“ナチュル・ナーブ”の5枚！

“ナチュル・クリフ”と同じ種族の“The Protean Moon”の攻撃力を、“ナチュル・クリフ”のレベル×100ポイントアップ！

ATK/2400

「攻撃力を上げたところで、攻撃できなければ意味なんてないわ」

攻撃できなければ、ね。

「畏発動！“妖精の風”！場の表側表示の魔法・罠カードを全て破壊する！」

「さ、させない！永続罠“宮廷のしきたり”！このカード以外の永続罠を破壊できない！」

「こっちこそ、させないよ。“ナチュル・パルキオン”の効果で、墓地のカードを2枚除外して、“宮廷のしきたり”の発動を無効にする！」

これで攻撃できる！

「さらに、“妖精の風”で破壊したカード1枚につき、300ポイントのダメージをお互いに受ける！」

咲 LP 2900

芳光弥生 LP 3400

「バトル!“ナチュル・パルキオン”で“白魔導士ピケル”を攻撃  
！」

「きゃあああつ！」

芳光弥生 LP 2100

「さらに、“The Protean Moon”で“バーニング  
ガール”を攻撃！」

「きゃああああつ！」

芳光弥生 LP 1000

形勢大逆転！

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「わ、私のターン」

咲 SP 7

芳光弥生 SP 3

「“マシユマロン”を守備表示で召喚して、ターンエンド」

DEF / 500

「私のターン！」

咲 SP 8

芳光弥生 SP 4

「チューナーモンスター“ナチュラル・トライアンフ”を召喚！」

ATK / 600

「レベル6の“The Protean Moon”に、レベル2の“ナチュラル・トライアンフ”をチューニング！」

輝け！天に昇りし奇跡の星よ、未来を明るく照らせ！

シンクロ召喚！天空に満ちる月！“The Bright Protean Moon”！」

ATK / 2000

「The Bright Protean Moon”が場に存在する限り、私のモンスターの攻撃力は全て500ポイントアップ！」

ATK / 2500

ATK / 3000

「いくら攻撃力が上がったって、“マシユマロン”は破壊されない」

「効果が有効ならね。

永続罠“幻想の呪縛”発動！“マシユマロン”の効果を無効にする！」

「そ、そのカードはリョウ君の」

私にはとつてもおあつらえ向きのカードだからね。リョウにちょっと言ってみたら、笑って1枚譲ってくれたんだよね。

「これで戦闘で破壊できる！」

バトル!“ナチュル・パルキオン”で“マシユマロン”を攻撃!”

これで場はがら空き。

「The Bright Protean Moon”で、ダイレクトアタック!”

「きゃああああっ!」

芳光弥生 LP O

よっし!勝った!

side out

舞と咲が勝つて、合宿1日目の日程が終了した。その後の予定は特に決まってない。だから、これからどうなるかといつと。

「何する?」

そう。何をするにしても、自由時間だから何でもOK。

「温泉入ろう!」



「そうだね。汗かいてるし、流して来ようか」

レナの発言からアリスが賛同して、みんな温泉に行くことになった。

オレと啓斗とトレインは女性陣と別れて脱衣所に入った。服を脱いでお風呂に入った。

「明日はどうなってんだ？」

「明日の予定は適当にチームを組んでトーナメントって話だよ」

「それで代表が決まるんですか？」

「さあ？そこまでは解らないけど」

「で、お前はとうすんだ？」

「オレのこと？」

「出場するのか、しねえのか。迷ってたんだろ？」

見抜かれてる。でも、大して驚きはしない。多分気付かれてるって思ってたから。

「どうしたら良いと思う？」

「その前に、何で悩む必要がある？先にそれを聞かせるよ」

「前に話したよね？WRGPの裏の話」

こんな言い方をするのは、お風呂で誰に聞かれてるか解らないから。トレインもいるしね。

「ああ。それが引つ掛かってんのか？」

「まあね。原因はそれだよ」

「だから出場しねえのか？」

「何のトラブルが起きるか解らないしね」

「そのトラブルに関わりたくねえのか？」

「違うよ。トラブルに関わりたくない訳じゃない」

「むしろ関わるんだろ？」

今にも溜息をつきそうな啓斗に苦笑いを浮かべる。

「何かとんでもないことが起きる気がするんだよね」

「なるほど。お前が渋ってる理由が何となく解ったぜ。

つまり、そのとんでもないトラブルに関わるつもりだから、アカデミアのチームには入れないってことだな？」

「そうだよ」

啓斗の言う通りだ。アカデミアのチームに入ったままだと、トラブルに関わった時にアカデミアに迷惑をかける。それは多分、間違い

ない。

「あの、話はよく解らないんですが、何かとんでもないことが起こるんですか？」

「トレイン。あんまり関わらねえ方が身の為だぜ。お前も闇のデュエルを経験したんだろ？」

「下手すれば、命さえ危ないからね」

トレインとレナはまだ幼いし、オレたちみたいなことには巻き込みたくない。精霊は見えてるけどね。

「闇のデュエルは、確かに恐ろしいデュエルだと思いました。ですが、そのデュエルをリョウさんや啓斗さんは闇のデュエルをするんですよ？」

「俺たちはそういう宿命だからな」

啓斗は自分の腕の痣に触れる。気持ちはよく解るよ。オレは立ち上がり、静かに湯から出た。

「どこ行くんだよ？」

「露天風呂があるみたいだからね。少し浸かってくるよ」

少し一人になりたかった。考えたいことがある。

露天風呂への扉を開けて、湯に浸かった。息を吐く。

「マハード」

「誰もいないようだな」

「うん。ちょっと話そう」

「その為に一人になったか？」

「どうだろ？落ち着きたかったんだと思う」

「そうか。少しは落ち着いたか？」

もう落ち着いていた。マハードといると落ち着く。だから呼んだのかもしれない。

「マナは？」

「呼べば来るかもしれないが、呼ぶべきではないだろう」

まあ、オレは裸だからね。

「ねえ、マハード。オレはどうしたら良いかな？」

「私は既に解っている。答は出ている」

「どういうこと？」

「私たちは一心同体。だからこそ、私にはリヨウの考えが解る。リヨウが気付いていなくてもだ」

確かに、オレたちは一心同体。マハードにはもう答が出てるんだ。

つまり、オレにも答は出てる。

「今日のスピリチュアル・クロスで、確信した。出たいのだろうか？  
WRGPに」

「はは」

「楽しかったのだろうか？自らのライバルと競い走るのが」

「敵わないなあ、マハードには」

その通りだった。遊星と競い走ることが、堪らなく楽しかった。

「出るべきだ。自らの想いを隠すべきではない」

「うん」

「だが、アカデミアとして出る訳にはいかない。と、すればだ」

何か考えがあるのかな。オレにはあるよ。

「フツ。気付いているようだな」

「お告げだね。魔法族の里にある祠で聞いた」

「そつだ。覚えているだろうか？」

【八つの心が集いし時、光差す希望が未来を変える。輝く宝石、精  
霊と共に世界を導け】

マハードと一緒にお告げを復唱した。八つの心、そして宝石。

「忘れちゃいけないことを、忘れてた気がするよ」

「忘れてはいなかった筈だ。宝石は常に持っているのだからな」

オレの宝石は黄色。

「8人は、オレが考えてる8人で決まりかな？」

「恐らくな。精霊と共にある八つの心は、他に考えられない」

「だね」

決まりだ。決めた。オレが歩む道を。

「誰か来たようだ。私は席を外そう」

誰か来た？誰だろ？

「あれ？リヨウウお兄ちゃん？」

「レナ？」

バスタオル1枚を体に巻いたレナがいる。何でレナがここに？

「どうしてレナが男湯に？」

「あれ？ここって女湯じゃないの？」

「え？」

『どつやら、ここは混浴のようだな』

「マハード？」

「へ〜。そうなんだ」

レナに動揺はないんだ。

『え〜、なら私も入れれば良かった〜』

『諦める。また今度だ』

『ハイ』

マナが何か言ってるのは放っておいて、

「一人で来たの？」

「そうだよ〜。私が入りたくてね」

「そっか」

一度アリスと一緒に入ったことあるし、レナはまだ幼い。そんなに考えることもないね。レナも特に考えてもないみたいだけど。

「は〜」

「うん？どつしたの？」

「気持ち良いね」

笑ってくしゃくしゃとレナの頭を撫でた。

「な、なに〜?」

「はは。レナは可愛いね」

二人で笑って、オレはレナの頭から手を離れた。

「そういえば、お姉ちゃんたちがリヨウお兄ちゃんはWRGPに出場するのかって話してたよ?」

「出るよ」

笑ってレナの頭をまた撫でた。

「そうなんだ。アカデミアのチームなら、参加できないな」

「参加?」

「だって、龍亜君と龍可ちゃんは遊星さんのチームのサポーターとして参加するって言ってたよ」

なるほど。それなら参加できるかもね。

「オレはアカデミアのチームで参加するつもりはないよ?」

「へ?そうなの?」



「うん。オレは別のチームとして出場する」

「アハ！リヨウお兄ちゃん！ちょっと待ってて！」

ザバツと湯から上がって、レナがパタパタと走って行った。どうしたんだろ？

湯に浸かって待っていると、入口の戸が開いた。

「リヨウ」

声を聞いた瞬間、誰が来たか解った。振り返って俺も声をかけた。

「アリス」

バスタオルを巻いたアリスが湯に入ってきた。相変わらずのスタイル、直視するのは目に毒なただけだね。

「レナから聞いたよ。WRGPのこと」

「うん。オレはアカデミアのチームじゃなくて、別のチームで出場するよ」

「どのチーム？」

腕を出した。スピリットシグナーの痣を。

「ふふ。まだできてないチームなんだ」

「できると思ってるよ」

「うん。私はもちろん参加するよ」

「ありがとう」

アリスに近寄って、そっと抱きしめた。

「リ、リヨウ　？」

「　こんな状態じゃ、恥ずかしいかな？」

実際、アリスの柔らかい肌をじかに感じてる。オレはかなり恥ずかしいんだけどね。

「アカデミアのチームにいと、WRGPのトラブルに対応できない。でも、違うチームでなら対応できる」

「だから、チームを作るんだね？」

「うん。八つの心と精霊の意志を持つチームを」

「　八つの心？」

「オレがあげた宝石のこと、覚えてる？」

「　うん。私たちがホワイトデーの日に貰った宝石だよな？」

「そう。あの宝石が、八つの心の象徴」

だから、みんなの力を貸して貰わなくちゃならない。

「大丈夫。みんな、力を貸してくれる筈だよ」

アリスもキュツとオレを抱きしめた。見透かしてるんだね。

「アリスも　力を貸してね」

「うん」

お互いに見つめ合った。どちらからともなく、唇を重ねた。

「あっ！やっと上がって来たよ」

二人で露天風呂から上がって、それぞれロビーに戻った時の第一声だった。そんなに長い時間入ってたのかな？

「まだ飯食ってねえだろ？食いに行こうぜ」

「そうだね」

みんなで食堂に行った。オレたちの他にも、食事中の生徒がちらほらいる。

食事の準備をして、オレたちは食べ始めた。

「明日のチーム戦、チームはどうするの？」

「適当にバラけようぜ。その方が良いだろ」

「そうだね。じゃあ、私は舞と！」

「クス。ええ」

「それじゃ、私は啓斗君だね」

「応」

「オレはアリスとかな？」

「うん」

それぞれ後一人を誰にするか。  
オレには一つ考えがあった。その考えを形にしなくちゃね。

第十一話：お告げ（後書き）

リ「 恥ずかしかった？」

ア「 うん／＼」

由「ハ／＼イ。赤くなってる二人は置いて」

啓「次話から合宿のトーナメントが始まるぜ」

由「にやはは。私たち6人はテキトーに別れたしね。私たちは別れてないけど」

啓「うっせ。選択肢なかっただろっが」

由「にやはは。照れてる？」

啓「何か言ったか？」

由「にやつ！？いひゃい！いひゃい！頼っぺた引っ張らないで〜！」

啓「案外柔らかいんだな。まあ良いや。」

じゃあ、次話からまたデュエルだぜ。よろしくな」

由「啓斗君！何するの！？」

啓「悪かった悪かった。」

第十二話：騎士。よろしくな」

由「むじゅ」  
「

## 第十二話：騎士（前書き）

リ「今回からアカデミア合宿のチーム戦が始まるよ」

ア「私とリヨウのチームは後一人、そして今回はその人のデュエルだよ」

リ「カードを信じてデュエルしてる彼なら、もっと強くなれる。今から楽しみだよ」

ア「では、第十二話、始まるよ」

## 第十二話：騎士

合宿二日目。オレたちの今日の日程はチーム戦。それぞれで自由にチームを作り、オレたちで競い合っつて形だね。

「私は誰でも良いけど、もう一人は誰にするの？」

オレたちはそれぞれ別のチームに別れた。それぞれ後一人が決まっ  
てないんだよね。

「一人、誘ってみたい人がいるんだけど」

「誰？」

「昨日オレがデュエルした千藤君」

「ふふ。良いよ。じゃあ誘ってみよう」

旅館を適当に歩き回って千藤君を捜した。千藤君は一人でデッキを  
見ていた。

「千藤君」

「わっ！ リョウさん？」

「いきなりごめんね。今日のチーム戦、もうメンバーは決まってる  
かな？」

「いえ。まだ一人も」



「ちょうど良かった。オレたちは後一人を捜してたんだ。もし良かったら、オレたちとチームを組まない？」

「ええ！？」

そんなに驚くことかな？

「ぼ、僕は弱いですし、お二人の迷惑に」

「愛智」

「は、はい」

わざと名前で呼んだ。

「大丈夫。君は弱くない。オレが保証する。それに、君の力を見込んでの頼みだよ」

「でも」

「ダメかな？」

「私たちは、楽しくデュエルしたいんだよ？迷惑だとか、そういうことはあんまり考えたくないな」

「それなら」

「組んでくれる？」

「はい」

「じゃあ、よろしくね。愛智」

オレたちのチームはできた。

今日のチーム戦を始める為に、オレたちはライディングコースに集まった。参加チームは全部で8チーム。トーナメントが組まれた。

「リヨウ」

「あ、遊星。遊星たちも参加するんでしょ？」

「ああ。WRGPの為にな」

確かに、良い予行練習になるかもしれない。遊星、ジャックさん、クロウさんは一緒に出る訳だし。

「ところで、リヨウ」

「何？」

「アキとミスティが昨日からオレの周りをいろいろとするんだが」

「はい？」

事情がよく解らない。ミスティさんがアキに何か言ったのかな？

「何か気になってるの？」

「いや 何がしたいのかと思ってな」

「何だと思う?」

「?」

相変わらずかな。今は自分のことで頭が一杯だろうしね。

「気にしなくて良いんじゃないかな」

「そうか。このトーナメント、お前とぶつかりたいが」

トーナメントの組み合わせではオレたちが当たるには、お互いに決勝まで上がるしかない。別グループなんだよね。

「決勝までお互いが上がればね」

その為に、まずは一回戦。勝たなくちゃね。

「じゃあ遊星。お互いががんばろうね」

「ああ」

オレは遊星と別れてアリスと愛智に近寄った。

「リョウ。順番はどうする?」

「ん〜、愛智はいつが良い?」

「僕は、最初が良いです」

「じゃあ愛智が1番手かな。アリスは？」

「私が先かな。リヨウは最後で大丈夫？」

「うん。良いよ」

愛智が1番手、アリスが2番手、オレが最後か。

「じゃあ、がんばろうか」

一回戦が始まる。相手は、

「おっ。相手はお前らか」

知らない人たちだ。ネオドミノ校じゃないみたいだね。

「リヨウです。よろしくね」

「なあ。アリスって娘、お前の彼女ってホントか？」

「そうだけど？」

「」

ブルブルと震え出した。どうしたんだろう？

『このリア充がー！』

「うわっ!?!」

三人一斉に何か叫ばれたんだけど。

「何なの?」

「ふざけんな! あんな美人と一緒にいられるだ?!?」

「そっだ! ふざけんな!」

「あんな美人と一緒に!」

「リヨウ。どうしたの?」

アリスが近寄って来た。これだけ騒いでればね。

「な、何でもないよ。さ、もう始まるから」

『オレたちから遠ざけるな!』

「きゃっ!?!」

「ちよっ! アリス、行こう! もう始まるんだし」

何か叫んでる三人からアリスを遠ざけて、自分たちのピットに入った。既に愛智はピットにいる。

「何だったの?」

「さあ? アリス、大丈夫?」

「えっと、何だかちょっと怖いような」

「今回はオレが2番手に入ろうか？」

というより、オレがそうしたい。アリスまで回さない。

「じゃあ、そうしようかな。お願いね、リョウ」

「うん」

オレが2番手。とりあえず、1番手は愛智で変わってないんだし。

「愛智。1番手、がんばってね」

「は、はい…」

愛智が走って行った。さて、がんばろうか。

side 千藤愛智

僕はDホイールに乗ってスタートラインにいた。隣の人、何だか目が血走っているような。

「何で野郎なんだ？何でアリスちゃんじゃねえんだ？」

「アリスさんは今回は最後に回るそうですけど」

「はあ!?!」

な、何だかホントに殺気立ってるような。

「解ってねえ。まるで解っちゃいねえ」

「な、何がですか？」

「潤いが足りねえんだよおおおお！」

何のですか。

「まあ良い。最後までいけば良いだけのことだ。始めるぜ！」

「はい！」

僕のライディングデュエルが始まる。

リョウさんとアリスさんがどうして僕をチームに誘ったのか、正直解らない。だけど、二人の迷惑にはなりたくない。

『楽しくデュエルしたいんだ』

「あ」

二人が言ってたことだ。不意に思い出した。

リョウさんとアリスさんは、きっと迷惑なんて思わない。僕のことを見守ってくれてる。

勝ちたいな。カードの為に、見守ってくれてる二人の為に。

『ライディングデュエル！アクセラレーション！』

二人で一斉に走り出した。最初のコーナーを少し遅れて走り抜ける。

「オレのターン!“バード・フェイス”を召喚！」

ATK / 1600

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「僕のターン！」

SP 1

「僕は“切り込み隊長”を召喚！」

ATK / 1200

「このカードが召喚に成功した時、レベル4以下のモンスターを特殊召喚できる!“鉄の騎士 ギア・フリード”を特殊召喚！」

ATK / 1800

「バトル!“鉄の騎士ギア・フリード”で“バード・フェイス”を攻撃！」

「くっ！」

ALP 3800

「“バード・フェイス”が戦闘で破壊された時、“ハーピィ・レデ



イ”を手札に加える「

「そして“切り込み隊長”でダイレクトアタック！」

「ぐっ！」

A LP 2600

「カードを1枚伏せて、ターン終了です」

「オレのターン！」

SP 2

「“ハッピー・レディ・S B”を召喚！」

ATK/1800

「バトル!“ハッピー・レディ・S B”で“切り込み隊長”を攻撃  
！」

「うあっ！」

千藤愛智 LP 3400

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「僕のターン！」

SP 3

「エキセントリック・ボーイ」を召喚！」

ATK / 800

「エキセントリック・ボーイ」をシンクロ素材にする場合、手札のモンスターを代用できる！ただし、召喚されたシンクロモンスターの効果を無効になる」

僕のエースモンスターを！

「手札のレベル3の“切り込み隊長”に、レベル3の“エキセントリック・ボーイ”をチューニング！

立ち上がれ！僕の分身！

シンクロ召喚！“大地の騎士ガイアナイト”！」

ATK / 2600

「バトル！“ガイアナイト”で“ハーピィ・レディ・SB”を攻撃！」

「畏カード“攻撃の無力化”！バトルフェイズを終了させる！」

攻撃は通らないのか。

「カードを1枚伏せて、ターン終了です」

「オレのターン！」

SP 4

「SP エンジェルバトン」発動！SPカウンターが2個以上ある時、カードを2枚ドロウ、1枚を墓地に送る。

さらに、永続罫“リビングデッドの呼び声”！墓地のモンスターを1体、特殊召喚する！“ハーピイズペット竜”！」

ATK / 2000

「見たか！これがハーピイズのペット！

“ハーピイズペット竜”の攻撃力は場の“ハーピイ”1体につき、300ポイントアップする！」

ATK / 2300

「さらに“ハーピイ・レディ1”を召喚！」

ATK / 1300

「“ハーピイ・レディ”が召喚されたことで、“ハーピイズペット竜”の攻撃力がアップ！

さらに、“ハーピイ・レディ1”が場に存在する限り、風属性モンスターは300ポイントアップする！」

ATK / 2900

ATK / 2100

ATK / 1600

「バトル！“ハーピイズペット竜”で“大地の騎士ガイアナイト”を攻撃！」

「うわああっ！」

千藤愛智 LP 3100

“ガイアナイト”が ても、

「さらに“ハーピー・レディ・S B”で“鉄の騎士 ギア・フリード”を攻撃！」

「うつつっ！」

千藤愛智 LP 2800

「まだ終わってねえ！“ハーピー・レディ1”でダイレクトアタック！」

「畏カード“奇跡の残照”！このターン、破壊された“ガイアナイト”を特殊召喚！」

ATK / 2600

「チツ！ターンエンドだ」

「僕のターン！」

SP 5

「“トライデント・ウォリアー”を召喚！」

ATK / 1800

「このカードが召喚に成功した時、レベル3以下のモンスターを特殊召喚できる！」ガントレット・ウォリアー”を特殊召喚！」

ATK / 500

「ガントレット・ウォリアー”をリリースすることで、戦士族モンスターの攻撃力を500ポイントアップする！」ガントレット・ウォリアー”をリリース！」

ATK / 3100

ATK / 2300

「バトル！ “トライデント・ウォリアー”で “ハーピー・レディ1”を攻撃！」

「ぐおっ！」

A LP 1900

これで風属性モンスターの攻撃力は下がる！

ATK / 2300

ATK / 1800

「 “ガイアナイト”で “ハーピイズペット竜”を攻撃！」

「ぐぐっ！」

A LP 1100

「ターン終了です」

手札を全て使い切った。でも、僕の方が有利だ。

「チツ！オレのターンだ！」

S P 6

「ハーピー・レディ3”を守備表示で召喚」

DEF / 1400

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「僕のターン！」

S P 7

「スピードワールド2”の効果発動！SPカウンターを7個取り除き、カードを1枚ドロ！」

千藤愛智 S P 0

「バトル！“ガイアナイト”で“ハーピー・レディ・SB”を攻撃  
！」

「罠カード“立ちはだかる強敵”！攻撃対象を“ハーピー・レディ3”に変更する！」

“ハーピー・レディ3”と戦闘したモンスターは相手ターンで数え

て2ターン攻撃できない!」

“ガイアナイト”の動きを封じられた。

「カードを1枚伏せて、ターン終了です」

「オレのターン!」

A S P 8

千藤愛智 S P 1

「ハンター・アウル”を召喚!」

A T K / 1 0 0 0

「このカードの攻撃力は場の風属性モンスター1体につき、500ポイントアップする!」

A T K / 2 0 0 0

「バトル!“ハンター・アウル”で“トライデント・ウォリアー”を攻撃!」

「うつつ!」

千藤愛智 L P 2 6 0 0

「ターンエンドだ」

「僕のターン!」

A S P 9

千藤愛智 S P 2

「融合呪印生物 地”を召喚！」

A T K / 1 0 0 0

「このカードと融合素材モンスターをリリースして、融合モンスターを特殊召喚する！」

“ガイアナイト”と“融合呪印生物 地”をリリース！

降臨せよ！大地の主！“地天の騎士ガイアドレイク”！」

A T K / 3 5 0 0

「バトル！“ガイアドレイク”で“ハンター・アウル”を攻撃！」

「ぬおおおおっ！」

A L P 0

か、勝った。

「うん。良いよ、愛智」

「ふふ。そうだね」



「アリス。そろそろデュエルしたい？」

「昨日はデュエルしてないし、そろそろしたいかな」

「ごめんね。今回はまたお預けだから」

「私まで回らない？」

「多分ね」

「ふふ。なら次まで我慢する。だから勝ってね」

「もちろん」

勝ったのなんていつぶりだろう？  
リヨウさんとデュエルしてから僕の何かが変わった。僕とカードの  
関係なのかな？

「チツ！次はオレの番だ！」

「は、はい！」

『デュエル！』

「オレのターン！」

B S P 1 0  
千藤愛智 S P 3

「スピードワールド2”の効果発動！S Pカウンターを10個取り除き、“地天の騎士ガイアドレイク”を破壊！」

B S P 0

「うっ！」

しまった！

「“恍惚の人魚”を召喚！」

A T K / 1 2 0 0

「バトル！“ハーピィ・レディ・S B”でダイレクトアタック！」

「畏発動！“ロスト・スター・ディセント”！墓地のシンクロモンスターレベルを1つ下げて、守備力を0にして、守備表示で特殊召喚する！“大地の騎士ガイアナイト”を特殊召喚！」

D E F / 0

「チッ！攻撃続行だ！」

「うっ！」

ごめん。

「“恍惚の人魚”でダイレクトアタック！」

「うあっ！」

千藤愛智 LP 1400

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「くっ 僕のターン！」

B SP 1

千藤愛智 SP 4

厳しい。

『二人目を相手にするのはきつと辛い筈だよ。だから、次の仲間の為に自分のできることをしてあげて』

リヨウさんが言ったことだ。次の人が展開しやすいように。

「カードを2枚伏せて、ターン終了です！」

僕はもう持たない。だからこそ、リヨウさんの為に。

「オレのターン！」

B SP 2

千藤愛智 SP 5

「ハーピー・レディ・S B」と“恍惚の人魚”をリリースし、“スパイラルドラゴン”をアドバンス召喚！」

ATK / 2900

「いけ！ダイレクトアタック！」

「うわああっ！」

千藤愛智 LP 0

僕はこれで終わり。だけど、

「エンドフェイズに、永続罫“フュージョン・スピリッツ”を発動！墓地の融合モンスターをゲームから除外して、その融合素材モンスター1体を特殊召喚する！」

“地天の騎士ガイアドレイク”をゲームから除外して、“大地の騎士ガイアナイト”を特殊召喚！」

ATK / 2600

僕にできることはここまでだ。後は頼みます、リョウさん。

side out

愛智がピットに戻ってきた。

「お疲れ、愛智。ナイスデュエル」

「うん。お疲れ様」

「あ、ありがとうございます」

「じゃあ、次はオレだから。いつてくるよ」

オレはソニックに乗って走り出した。

「お疲れ様。良いデュエルだったよ」

「ありがとうございます。あの、準備しなくて良いんですか？」

「ああ、実はさっきリョウがね、私まで回らないって言ったんだ。多分、私の出番はないと思うよ」

「ええっ！？まだライフが8000も残ってるんですよ？」

「そうだね。でも、リョウが言ったことを破るとは思えないから」

「はあ」

オレはコースに出た。

「さあ、始めようか」

「お前をさっさと倒して、次はアリスちゃんだ！」

「心を少しは穏そうしよ。」

『デューエル…』

第十二話：騎士（後書き）

リ「オレたちのもう一人の仲間は愛智。どうだった？」

マハ「資質は申し分ない。どれだけ伸びるか、だな」

マナ「カードを信じる心を持つてるからね」

リ「そして、次話からオレのデュエル。アリスまでは回さないよ」

マハ「そう熱くなるな、リョウ。油断大敵だ」

リ「大丈夫だよ。オレはみんなを信じて闘うだけだから」

マナ「うん！がんばろう！」

リ「第十三話：プライド。よろしくね」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9757/>

---

遊戯王5 D's ~ magic illusion ~

2011年11月7日08時04分発行